昭和六年七月一日印刷
昭和六年七月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

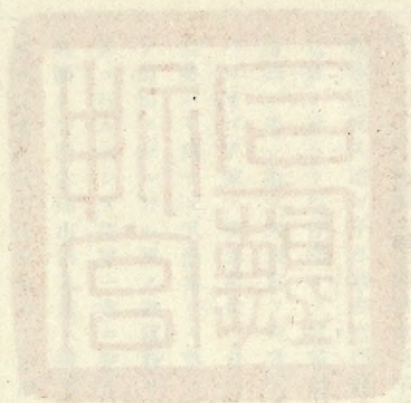
發行者　後藤亮一
發行者　川俣馨一
東京市芝區金杉新濱町十二番地
印刷者　和田助一

發行所　東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所　東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
電話小石川(85)　一〇五四番
　　　　　　　三二六九番

單式印刷株式會社印刷

（白石製本所　製本）

雜載

被免、至重科之族者不可然之由被定、次强盜并重科之輩、雖被禁獄、申出其身、可進關東之由可被仰六波羅者、次依逆地頭之咎、所召置之庄官百姓等事、自今以後不可誡、早可追出居住所云云、

〔吾妻鏡四十〕建長二年四月五日庚子、評定之次、式部兵衞太郎光政、去夜於御前依現無禮事、可被處罪科否、雖有其沙汰、所被相宥也、但可誡向後由、被仰付式部大夫入道光西云云、

〔太平記二〕長崎新左衞門尉意見事附阿新殿事

執事長崎入道ガ子息新左衞門尉高資、進出テ申ケルハ、〇中略古典ニモ、君視臣如土芥、則臣視君如寇讎ト云ヘリ、事停滯シテ武家追罰ノ宣旨ヲ下サレナバ、後悔ストモ益有ベカラズ、只速ニ君ヲ遠國ニ遷シ進セ、大塔宮ヲ硫黄ガ島ヘ流奉リ、隱謀ノ逆臣資朝俊基ヲ誅セラルヽヨリ外ノ事有ベカラズ、武家ノ安泰萬世ニ及ベシトコソ存候ヘト、居長高ニ成テ申ケル間、當座ノ頭人、評定衆、權勢ニヤ阿ケン、又愚案ニヤ落ケン、皆此義ニ同ジケレバ、道蘊〇二階堂再往ノ忠言ニ及バズ、眉ヲ顰テ退出ス、サル程ニ、君ノ御謀叛ヲ申勸ケルハ、源中納言具行、右少辨俊基、日野中納言資朝也、各死罪ニ行ルベシト、評定一途ニ定テ、先去年ヨリ佐渡國ヘ流サレテオハスル資朝卿ヲ斬奉ベシト、其國ノ守護本間山城入道ニ被下知、

〔庭訓往來〕侍所者、謀叛殺害、山海兩賊、强竊二盜、放火刃傷、打擲蹂躪、勾引、路次狼藉、鬪諍喧嘩等也、管領、執事、奉行人、撿斷、所司代、賦訴狀於右筆之時、以小舍人或下部等召出犯人於侍所、記錄申詞、依言色體嫌疑、糺明犯否之時、所犯已無所遁者、則召籠之、或及推問拷問拷訊等、蕁捜之、蕁究與同黨類等、可斷罪者被誅之、可誡者禁獄之、可流刑者被記流帳、此外火印追放以下、隨辜輕重其人是非、可被行之、〇中略恐々謹言

八月七日　　　　散位長谷部

謹上　大丞殿

擊折傷以上、若盜及强姧、雖傍人皆得捕繫以送官司、若餘犯不言請而輙捕繫者笞卅、殺傷人者、以故殺傷論、本犯應死而殺者遠流、名例律云、共犯罪以造意爲首、隨從者減一等、家人共犯、止坐尊長、賊盜律云、造意雖不行、仍爲首者、

據考斯等文、承春惡行之科責、不可廻踵、尤令告知隨近坊里、且可經次第沙汰歟、而稱爲刃傷人群黨無是非於社頭咫尺令殺害之條、亂吹之企背憲章、設科條歟、被尋決可被加所當之刑哉、

一同與黨人亂入承春住坊、科條可爲何樣哉云々、賊盜律云、謀殺人者徒二年、擅興律云、擅發兵廿人以上杖一百、五十人徒一年、五十人加一等、名例律云、共犯罪以造意爲首、隨從者減一等、若家人共犯、止坐尊長、又條云、二罪以上俱發、以重者論者、

就斯等之文法、原亂入之造意、祐春被刃傷之間、爲散彼阿黨、及此企歟、擅發人兵令發向者、可謂謀殺之結構哉、然者於造意輩者、不道二年之徒刑歟、隨從之族、減一等可有科坐歟、〇中略

以前條々、大概勘注如件、

貞治三年五月十三日　大判事兼明法博士左衞門大尉石見權介坂上大宿禰明宗

〔吾妻鏡十六〕正治二年二月二日戊午、今日出御御所侍、仰波多野三郎盛通、被生虜勝木七郎則宗、依爲景時餘黨也、是多年奉昵近羽林〇源賴家之侍也、相撲達者、筋力越人之壯士也、盛通進出則宗之後懷之、則宗振拔右手拔腰刀、欲突盛通之處、畠山次郎重忠折節在傍、雖不動座捧左手取加則宗之拳於刀膊、不放之、其腕早折畢、仍魂惘然而輙被虜也、即給則宗於義盛、義盛於御厩侍問子細、則宗申云、景時可管領鎭西之由有可賜宣旨事、早可來會于京都之旨觸遣九州之一族云云、契約之趣不等閑之間、送狀於九國輩畢、但不知其實之由申之、義盛披露此趣之處、暫可預置之由所被仰也、　六日壬戌、今日則宗罪名、幷盛通賞事、有其沙汰、廣元朝臣、善信、宣衡、行光等奉行之、

〔吾妻鏡三十三〕暦仁二年〇延應元年六月廿六日癸巳、今日評定犯科人事、於輕罪之輩者、被行赦之時雖

為之如何、次御膳落失之由、載宮寺解狀、此事專可勘申之處、都不勘之、棄毀大祀神御之物者、以盜論、依此律條者、非無犯八虐之科歟、而削而不載罪名、疑殆尤甚、若存不可有罪之由歟、可被尋問歟、次所載勘文之延曆格說稱、宜有犯、事須科決先解任決罰云々、雖引其文、不決解任之法、似無其詮歟、此等之相違、短慮易迷、重可被尋決歟、凡勘文之體、似有所寬宥、神慮難測、具被尋究兩博士可被決歟、其上仰法家之輩、可令進別勘文歟、凡當宮事異他、代々沙汰之趣、嚴肅非輕、殊極淵量可有沙汰、無偏無黨被行刑法者、定叶宗廟之照鑒歟、

〔師守記〕貞治三年五月十三日丙子、御問條々、

一北野社祠官承春、與問祐春、於夏堂（神殿南端造縱云々）成口論、祐春、於當座數箇所被疵、承春於東棟門外、為他人被殺害訖、且祐春被疵之刻、血散灑神殿之垂簾、大床以下、供花之神器云々、此條起自承春之所行之上者、其身雖令死亡、科條猶可及師匠親類哉云々、衞禁律云、闌入大社門者徒一年、越垣者徒二年、中社小社遞減三等、神部不覺減二等、監神又減一等、闌、謂不應入而入、古答云、大社者伊勢神宮也、大倭、住吉、紀伊、出雲、智形等之屬為中社、自餘為小社、鬪訟律云、鬪毆殺人者絞、以刃及故殺者斬、又條云、若亂毆傷不知先後輕重、以謀首及初鬪者為重罪、又條云、刃傷徒二年、名例律云、當條雖有罪名、所為重者、自從重者、

就斯等之文、訪科坐之法、刃傷之根源、起於鬪亂歟、非謀殺之企哉、但謂其所者、神殿也、顯彼輩者為祠官、忘肅敬之禮、插濫惡之情、忽於社壇成鬪亂、及刃傷、令犯穢神殿以下神器之條、希代之惡行也、當條雖有罪名、所為重者、自從重可科斷歟、而於承春者、依此所犯被殺戮之上者、其科難及師匠親類哉、是則謀反大逆之外、無緣坐法之故也、

一承春殺害下手人、雖未及露顯、尋沙汰之日、定不可有其隱歟、科條可為何樣哉云々、捕亡令云、有盜賊及被傷殺者、則告隨近官司坊里、聞告之處率隨近兵及夫、從發處尋蹤、登共追捕、捕亡律云、被人毆

〔平戸記〕寛元二年十一月一日戊戌、今日有八幡奉幣云々、是被謝申俗別當兼盛闘諍事也、　六日癸卯、今日八幡恒例御神事、依光資一黨之訴訟、藏人次官顯雅往反、是彼一黨、俗別當兼盛被停止其職、可從神事之由云々、不然者不可叶之由、言上之故也、而未被勘罪名之間、其罪科難被左右也、然而依彼訴、遂被仰其由、至所領等、皆以被收公之由、遂被下御教書了、如此沙汰之間、日景推移、及申剋有評定、吉田中納言、予（〇平經高）大藏卿等、候其座、件事財主顯惠法印、讓彼庄預所職於顯清、顯清弟子顯延得其讓、顯惠弟子定勝法印、一期之間無相違、而定勝入滅之後、其弟子定譽僧都改定也、仍顯延、先年依訴申、（顯惠讓狀云、弟子等改此事者、可處盜犯、又可訴申公家云々、仍訴申云々、）顯延訴訟、重々經沙汰、被裁斷之、而定譽入滅之後、其弟子定顯律師改之、仍又訴申之、定顯改之時、文暦比改以前之沙汰、被仰下、依此事訴申歟、大藏卿可付文暦後符之由申之、予、顯惠讓狀難被棄之、尤是龜鏡、不可依彼符、爲宗法意申之、吉田中納言、大旨同之、然而領家預所各別之儀、領家申狀難被棄之由申之、彼是不一定、然而大旨ハ、件讓狀顯延有道理之由、被定了、大藏卿書之、彼卿頗有引汲定顯之氣、仍右筆之所有加言之狀等、仍猶被書直、彌以遲引及秉燭云々、先是顯雅持參兼盛罪名勘文、大藏卿依仰讀申之、返給顯雅、可奏之由被仰了、仗議八日、十三日之間云々、　廿日丁巳、今夜八幡宮訴申、兼盛罪名事、可有仗議也、法家勘文、先日外記所持來也、

明法博士等勘申、石淸水八幡宮言上、兼盛罪名事、

右大臣（〇藤原兼平）定申云、法家勘申之趣、頗多不審、不勘御膳落失之事、偏擧殿內忿爭之罪、如何、若稱非大幣、不入八虐歟、瀆汙行潦之薦、豈敢爲輕哉、其上入宗廟無愼心、臨祭祀及鬪傷、其罪不詳歟、猶仰法家之輩、可被召別勘文、但至神社之訴者、非常之斷、又非無例、宜在時儀、（〇中略）中納言藤原朝臣定申云、勘文之旨、不審太多、不引可引之本條、不勘可引之重科、疑難之趣、大略如人人定申、就中宣下之旨、與勘奏狀先以參差、如宣下狀者、可勘申兼盛打傷光資面、流血之罪名歟、而所載勘文者、兼盛與光資鬪諍罪名云々、就之雖設毆人之罪條、曾不引流血之正條、輕重之間、可謂懸隔、

斷罪

鎌倉室町時代ノ斷罪ハ、一定ノ法ナク、時ニ臨ミ事ニ隨ヒ、其宜シキヲ權リテ、處置セシガ如シ

斷罪制度

〔新編追加 侍所〕一侍所政所勾引人人賣事
件族、任本條可處罪科也、而鎌倉中幷諸國市廛間、多有專此業之輩云々、至諸國者、仰守護地頭等、慥可斷罪、於鎌倉中者、可被捺火印於其面、

〔吾妻鏡 三十九〕寶治二年五月廿日丁卯、謀叛人出擧事、其一類所從者、不及沙汰、至百姓等分者、早可致辨之由、可有御成敗者、且所被仰遣六波羅也、

〔吾妻鏡 四十九〕正元二年六月四日庚子、就撿斷事、今日有被定之條、且被仰遣六波羅也、所謂、
一國々守護人召進犯科人事
右召進關東無謂、任被定置之旨、可被沙汰之由可令相觸守護人、但寄事於左右、守護人致非據沙汰之由訴申之時者、可令尋成敗矣、
一可召關東犯科人事
右於訴重科張本者、任先例可召進之、至輕罪者、於六波羅可有尋沙汰矣、

〔建武以來追加〕一寺社本所領事 文和元十一十五御沙汰
嚴密可遵行之子細、去七月以來、載兩度事書之上、就面々訴、雖被成御敎書、寄事於世上物忩、云守護云使節、尚緩怠之間、多以不事行云々、難逃其咎、但無勘錄者、定有未盡之後訴歟、所詮且取調先日散狀、召出守護代幷論人等、尋究遵行難澁之旨趣、陳謝無謂者、准先例可勘申罪名、亦有殊會尺者、隨事體加糺決、宜經評議之由、可仰五方之引付、

思キヤ我敷島ノ道ナラデ浮世ノ事ヲ問ルベシトハ、常葉駿河守此歌ヲ見テ、感歎肝ニ銘ジケレバ、泪ヲ流シテ理ニ伏ス、東使兩人モ是ヲ讀テ、諸共ニ袖ヲ浸シケレバ、爲明ハ水火ノ責ヲ通レテ、咎ナキ人ニ成ニケリ、

口供

〔結城戰場物語〕めのとの女房をも强問有べしとて、奉行がいでゝとふやうは、やゝいかに女房、今度の御むほんにくみの人數はたれ〳〵にてましますぞ、さてのこりのわか君はいづくにしのびましますぞ、有のまゝに申せ、すこしもいつはりの有ならば、水火のせめにあはすべし、いかにいかにとゝふ、

〔吾妻鏡六〕文治二年閏七月十日辛卯、左馬頭飛脚到來、狀云、搦前伊豫守(○源義經)小舍人童五郎丸、召問子細之處、至于去六月廿日之比、隱居山上、候之旨所申上候、如件白狀者、叡山惡僧俊章、承意、仲敎等、令同心與力者、仍相觸其由於座主弁殿法印訖、又所經奏聞也者、

雜載

〔增鏡十四春の別〕そのころなが月ばかり、(○正中元年)まだしのゝめのほどに、よの中いみじくさわぎのゝしる、なに事にかときけば、みのゝ國の兵にて、土岐の十郎(○賴貞)とかや、またたぢみの藏人などいふものども、しのびのぼりて、四條わたりに立やどりたる事有、人にかくれておりけるを、はやう又つげしらするものありければ、にはかにその所へ六はらよりをしよせてからめとるなりけり、あらはれぬとや思ひけん、かのものどもは、やがてはらきりつ、又別當資朝、藏人內記俊基、おなじやうに武家へとられて、きびしくたづねとひ、まもりさはぐ、ことのおこりは、御門(○後醍醐)世をみだり給はんとて、かの武士どもをめしたるなりとぞいひあつかふめる、さてその宣旨なしたる人人とて、此ふたりをもあづまへくだしていましむべしとぞきこゆる、

火責

今昔、銀ノ鍛冶ニ□□ノ延正ト云フ者有ケリ、延利ガ父惟明ガ祖父也、其ノ延正ヲ召シテ廳ニ被下ニケリ、尚妬ク思食ケレバ、吉ク誡ヨト仰セ給テ、廳ニ大キナル壺ノ有ケルニ、水ヲ一物入レテ、其レニ延正ヲ入レテ、頸許ヲ指出シテ被置タリケリ、十一月ノ事ナレバ、篩ヒ迷フ事无限シ、漸ク夜深更ル程ニ、延正ガ音ノ有ル限リ擧テ叫ブ、廳ハ院ノ御マス御所ニ糸近カリケレバ、此奴ガ叫ブ音、現ハニ聞ケリ、延正叫々テ云ナル樣、世ノ人努々穴賢、大汝法皇ノ御邊ニ不參入ナ、糸恐ク難堪キ事也ケリ、只下衆ニテ可有キ也ケリ、此事聞持テヤヲキス叫ビケルヲ院聞シ食テ、此奴痛ク申シタリ、物云ヒニコソ有ケレト被仰テ、忽ニ召出シテ、祿ヲ給テ被免ニケリ、然レバ延正本ヨリ物云ヒ也ケレバ、物云ヒノ德見タル者カナトゾ人云ケル、

〔中右記〕嘉保二年六月廿九日、予申殿下、〇關白師通 遷宮行事所召物、全不進濟、仰云、慥放苛法使可令勘濟、或閉門覆井、可致責者、

〇按ズルニ、此二條ハ共ニ刑ニハアラザレドモ、附載シテ參照トス、

〔太平記 二〕僧徒六波羅召捕事

二條中將爲明卿ハ、〇中略 指タル嫌疑ノ人ニテハ無リシカドモ、叡慮ノ趣ヲ尋テ問ン爲ニ召捕レテ、齋藤某ニ是ヲ預ラル、〇中略 先京都ニテ尋沙汰有テ、白狀有ラバ關東へ註進スベシトテ、檢斷ニ仰テ、已ニ嗷問ノ沙汰ニ及ントス、六波羅ノ北ノ坪ニ炭ヲオコス事、鑊湯爐壇ノ如ニシテ、其上ニ青竹ヲ破リテ敷雙ベ、少シ隙ヲアケケレバ、猛火炎ヲ吐テ烈々タリ、朝夕雜色左右ニ立雙テ、兩方ノ手ヲ引張テ、其上ヲ歩セ奉ント支度シタル有樣ハ、只四重五逆ノ罪人ノ、焦熱大焦熱ノ炎ニ身ヲ焦シ、牛頭馬頭ノ呵責ニ逢ランモ、角コソ有ラメト覺エテ、見ニモ肝ハ消ヌベシ、爲明卿是ヲ見給テ、硯ヤ有ト尋ラレケレバ、白狀ノ爲カトテ、硯ニ料紙ヲ取添テ奉リケレバ、白狀ニハアラデ、一首ノ歌ヲゾ書レケル、

拷訊

水責

にさせ給ふうへは、何の不足の御座有べきと、たゞさめ〲となきいたる、奉行人數是を見て、さあらばいそぎいためてとへ、承ると申て、きりにて、ひざをもませらる、其外七十餘度のがうもんは、目もあてられぬしだひなり、やゝありて女房は、物申さんと申、しばらくがうもんをとゞむ、あらむざむや、この女房、高聲に念佛十返ばかりとなへ、みづからしたをくひきりて、かしこへこそは捨にけれ、

〔保元物語二〕謀反人各召捕事

刑法かぎり有事なれば、七十五度のがうもんをいたすに、初はこゑをあげてさけびけれども、後にはいきたえてものいはず、日こそおほきに、七月十五日、今日しもかゝるつみに行るゝ、事こそむざんなれ、

〔運歩色葉集賀〕拷訊（ガウジン）

〔雜筆往來〕夜討强盜之倫、竊盜海賊之族、行左遷流罪、可及禁獄死罪、經拷訊者、暫可被相勞、贖咎之後、被赦免者、先規也、

○按ズルニ、庭訓往來ニモ拷訊ノ事アリ、斷罪篇ノ雜載條ニ引ケリ、

〔碧山日錄〕寛正二年三月廿二日癸亥、客曰、南禪寺近日有僧爲黨火結讐者所居、源相公〇足利義政聽之、欲捕囚其徒、而不知之、仍命大衆、於土地祠前、俾署爲惡者名、以其多爲驗也、名之爲無名之判也、遣大史監之、遂裹其署名、致於源相公、又司寺務之西堂三人、以菊磵爲首、同謁公、以啓署名、而二僧之名、多者之有也、乃召其僧、名曰鱗、曰琳、下獄譴罪、其夜有餘黨人大雲、殺西堂菊磵、而截其頭、聆者爲之悲嘆、廿八日己巳、獄官多賀某、決南禪二囚僧之罪、以數升水、其口噴之呑之、其苦萬端、然竟不言所作之咎云、

〔今昔物語二十八〕銀鍛冶延正蒙花山院勘當語第十三

〔二水記〕永正十四年九月十七日、伏見殿御所侍、有生島右京亮云者、强。問。之盗人、同類之由令白狀云云、仍闔閤搦取之、既及强問云々、伏見殿中有馳走、先不可有聊爾者之由被申、武家御返答之趣、當時堅御成敗之處、已同類之由白狀之上、不可及力之由被申了、不便至極也、今夜令强問無申旨、連日四ケ度令强問、申旨無之云々、虚名歴體也、不便次第、言語道斷也、

〔切支丹來朝實記〕切支丹宗門ハ、永祿十一年より天正十三年迄凡十八年の間繁昌しけるが、秀吉公天下と成り、終に此宗旨を破滅し給ふ、○中略因茲此時切支丹宗門と云は破滅せり、彼のはびゆんは肥前國へ逃下り、後天草にて宗門を弘め、かうすもうは遠江國へ下り、四年過て、泉州堺夷町中濱といふ所に市橋庄介と名を改め、外醫と成り居住す、扨しゆもんは越前へ逃隱れしが、是も四年過て、堺東濱と云所に島田清庵と改め、本道の醫師と成りて居住す、然るに天正十六年九月のころ、○中略先年切支丹破却せし時徒黨しける、はびゆん、ごうすもふ、しゆもん、三人の行方しれず、奴原是に極れりと、きびしく拷問なされければ、ごうすもふ、しゆもんなるよし白狀致しけり、○中略則兩人共に粟田口にて仕置に仰付られけり、

〔備前文明亂記〕檜村與三兵衞ガ下人、密ニ申シケルハ、夜前ノ火事ハ賴ミタル與三兵衞ガ籌ノ由、始ヨリノ巧ノ發リドモヲ、一々次第ニ告知ラセケル間、是非ナク檜村兄弟ヲ搦捕、拷問スル處ニ、白狀歴然タリ、是ニ依テ終ニ彼兄弟ヲ斬戮ス、

〔結城戰場物語〕かくて京都にもつきしかば、御實撿ありて後、めのとの女房をも强問有べしとて、奉行がいで、ゝ、とふやうは、や、いかに女房、今度の御むほんに、くみの人數はたれ〳〵にてましますぞ、さてのこりのわか君は、いづくにおのびましますぞ、有のまゝに申せ、すこしもいつはりの有ならば、水火のせめにあはすべし、いかに〳〵ととふ、めのとの女房うけ給はり、さん候、御むほんのくみ人數は、女の身にて候へば、さらにおらず候、さて若君とては、只二人御座有しを、かよう

云、是僧達濫行、魚食等不儀事共、爲被糺明也、人供下部被啾問、就白狀僧四五人又被召捕、寺家周章、不能是非云々、

〔東寺百合古文書十四〕廿一口評定引付 應永卅一 甲辰

六月三日 違署除之

一實相寺牛盜事

實相寺前御房築地之內、近年以外馬牛放、樹已下被煩間、別當已下□諸會實相寺前馬牛事有之者、三百文沙汰科怠分、可取馬牛之由、近年被定畢、然欵多彥太郞事、五月晦日彼御房前放畢、仍牛取留可沙汰科料之由被問答畢、種々申間、先牛御房中ニ被留畢、然六月一日夜、牛俄失畢、仍自或廳內々告示云、此牛彥太郞被下主密々盜取之由申間、仍寺家被訴間、及評議畢、實盜犯歟之由主方へ被尋之處、無其儀之由申畢、然實不煩被□間、六月六日、於御影堂可及剛文。之由衆議畢、然而六日公文所來申云、欵多老者共、別參申歎申ス其子細は、剛文事承畢、可致沙汰歟之處、自然起請文後、万一聊凶事出來者、彼等罪科可爲必定歟、然者兩三人逐電勿論事、思ば被興隆之至哉之由、剛文之儀被閣者、可畏入之由申之、然者涯分百多科料可進之由、員數一樣、然者可進之、以此分涯分可申沙汰之由、公文所媒介申間、此分披露之處、被閣請文之儀、以科料分一樣分被落居畢、

〔建內記〕永享十一年六月廿六日壬寅、傳聞自和州吉野歟四人法師井山臥等云々到來、爲飯尾肥前守爲種等奉行、於淨蓮華王院、先日兩日被拷問之、大覺寺殿御在所不知之云々、於墳墓之地拷問、難堪事也、尤可被優古賢者歟、奉行人就住持所緣、依便宜宜申行之條、太自由歟、

〔建內記〕嘉吉元年六月十八日癸未、傳聞先日鎌倉故持氏卿子息首京着之時、令供奉結城ノナニガシトテ、御乳父ト稱シテ奉付テ京着了、御首實否及拷問、申狀之趣不分明云々、又說爲實首無疑之由申之云々、其說不同也、去十四日於河原被切訖了云々、

此僧達ヲ嗷問セヨトテ、侍所ニ渡シテ、水火ノ責ヲゾ致ケル、文觀房、暫ガ程ハ、イカニ問レケレ共落給ハザリケルガ、水問重ケレバ、身モ疲レ、心モ弱クナリケルニヤ、勅定ニ依テ、調伏ノ法行タリシ條、子細ナシト白狀セラレケリ、其後忠圓房ヲ嗷問セントス、此僧正天性臆病人ニテ、未責先ニ、主上〇後醍醐山門ヲ御語アリシ事、大塔宮御振舞、俊基隱謀ナンド、有モアラヌ事マデモ、殘所ナク白狀一卷ニ載ラレタリ、此上ハ何ノ疑カ有ベキナレ共、同罪人ナレバ闕ベキニ非ズ、圓觀上人ヲモ明日問奉ベキト評定アリケル、其夜、相模入道〇北條高時ノ夢ニ、比叡山東坂本ヨリ、猿共二三千群來テ、此上人ヲ守護シ奉ル體ニテ並居タリト見給、夢ノ告、只事ナラズト思ハレケレバ、未明ニ預人ノ許ヘ使者ヲ遣シ、上人嗷問事、暫閣ベシト被下知處ニ、預人遮テ、相模入道方ニ來テ申ケルハ、上人嗷問事、此曉既ニ其沙汰ヲ致候ハン爲ニ、上人ノ御方ヘ參テ候ヘバ、燭ヲ挑テ觀法定坐セラレテ候、其御影、後ノ障子ニ移テ、不動明王貌ニ見サセ給候ツル間、驚存テ先事ノ子細ヲ申シ入ン爲ニ參テ候也トゾ申ケル、夢想ト云、示現ト云、只人ニアラズトテ、嗷問沙汰ヲ止メラレケリ、

〔太平記 十三〕北山殿謀叛事

竹林院中納言公重卿〇公宗弟馳參ジテ被申ケルハ、西園寺大納言公宗、隱謀ノ企有テ臨幸ヲ勸申由、只今或方ヨリ告示候、是ヨリ急ギ還幸成テ、橋本中將俊季、幷春衡、文衡入道ヲ被召テ、仔細ヲ御尋候ベシト被申ケレバ、〇中略則中院中將定平ニ、結城判官親光、伯耆守長年ヲ差副テ、西園寺大納言公宗卿、橋本中將俊季、幷文衡入道ヲ召取テ參レトゾ被仰下ケル、〇中略公宗卿ト文衡入道トヲ召捕奉リテ、夜中ニ京ヘゾ歸ケル、大納言殿ヲバ定平朝臣ノ宿所ニ、一間ナル所ヲ攻籠ノ如クニ拵テ押籠奉ル、文衡入道ヲバ、結城判官ニ被預、夜晝三日マデ、上ッ下ッ被拷問ケルニ、無所殘白狀シケレバ、則六條河原ヘ引出シテ首ヲ被刎ケリ、

〔看聞日記〕應永二十三年六月廿日、傳聞今日相國寺人供行者下部等百四五十人、侍所一色召捕云

仰下したりければ、腰居悦て、かしらにうちかつぎて、いざり出けるをみて、實犯なりけり、かたはの身なれ共、かくしてぬすみてけるとさとりて、科にをこなはれけり、ゆゝしかりけるはかりごとなり、

穿鑿

〔運歩色葉集 勢〕穿鑿

〔甲陽軍鑑 八〕山縣三郎兵衛同心北地と申、伊勢牢人、身上十六貫取者也、知行所惡所なりとて、山縣三郎兵衛に種々訴訟をいたすを、大場民部左衛門と申山縣將人、北地他國者なりとあなづり、山縣に申きかせず候、扨又北地、各中のよき傍輩共に申きかせ、置文をして腹をきる、○中略山縣三郎兵衛迷惑いたし、既に改易たるべきに、原隼人佐、三枝勘解由左衛門、曾禰與市助、三人の居所にて、熊野の牛王のうらに誓紙を仕る、北地五郎左衛門、訴訟之旨不存由申上る、其後信玄公聞召分られ、さらばとて、其頼まれたる山縣が内の者、大場民部左衛門をよべとありて、右二人、原、曾禰、三枝を以て御尋ある、則又長坂長閑、跡部大炊に、目付衆二人、横目衆二人さしそへられ、委尋給ひ、其上にても、うろんにおぼしめし、岩間大藏左衛門を召て、物かげでこれをきけと被仰付、御穿鑿なり、山縣申上るごとく、何の口も、大場無念にて、山縣に申きかせざるに付て、大場一類、盡御成敗也、山縣三郎兵衛御奉公申たるうち、是ほど迷惑なる事終に是なし、

拷問

〔運歩色葉集 賀〕拷問（ガウモン）

〔庭訓往來〕所犯已無所遁者、則召籠之、或及推問、拷問。拷訊等。

〔吾妻鏡脱漏〕嘉祿三年○安貞元年三月九日戊午、隱岐院○後鳥羽三宮稱有巧奸謀之輩、伴黨四五人也、前濱邊於民屋、波多野中務二郎經朝生虜進之、金窪左衛門尉、平三郎左衛門尉、奉仰拷問之處、伊豆前司所從爲百姓之由、進申狀云云、

〔太平記 二〕三人僧徒關東下向事

內問

出同篇分可申之由衆議治定畢、

同十四日〈連署除之〉

一所司代多賀豐後申〈云、〉於賊物屋內雜具者任寺家法不可綺申也、論人既罷出之上者、召給訴人可致糺明之間、是非共可被給之、若有御難澀者、進人可給之由申旨披露之處、依出論人、可給訴人由申條尤候間、相副兩雜掌可被出之由衆議治定畢、〇中略

同十九日〈連署除之〉

一所司代所爲禮令隨身貳百疋罷向之處、則令對面申、而今〈茂〉盜人之間事、撿斷賊物〈並〉屋內以下事全非綺申候、懸疑人罷出可令糺明之由申之間、可被給訴人之由申入許候也、然〈ニ〉不審雖尤候、差無所見之間、不能糺明、無爲〈ニ〉致成敗候畢、萬一後日〈ニ〉露顯之子細候者、承可致其沙汰云々、次吉田所へ百疋令隨身畢、

〔葉黃記〕寶治二年八月廿五日己亥、官人章宗、章種、章時、章澄、久茂等來、於門下有內問事、散禁之輩遣獄所、其中有七十餘之老翁、〈依人資科被召出之處、諸下部濃歸住宅、猶成其犯、〉預難給獄所歟、然而重犯也、暫宿置之、又殺害人嫌疑等召問之、於門前問之、子細乍立久茂注之、依無道者、章澄雖爲申次、子細予〈〇檢非違使別當藤原定輔〉直尋聞之畢、

〔古今著聞集〈十二偸盜〉〕中納言兼光卿、建久二年十二月廿八日に撿非違使別當に成て、廳務ことにおほく沙汰ありけるに、賤者の小屋に、ちいさき釜のうせたりけるを、隣なりける腰居がぬすみたりけると云つぎ有て、贓物をさがし出したりけるに、腰居申けるは、手をもちてこそゐざりありき候へ、手をはなれては、いかでか取侍るべき、他人ぞ盜をきて侍らんと陳じければ、まことに申所理也と沙汰有けれど、ぬすまれたる者の訴訟つよくて、大理の門前に召出して、內問有けり、相論事ゆかざりけるに、別當謀をめぐらして、此腰居申所不便なり、たゞ此釜を腰居にとらすべしと

云、或相語病人愈衆病、或非盲目者令開眼目、種々事、彼法師等所行之由露顯之間、被召捕被糺問之間、令白狀云々、

〔看聞日記〕永享三年十一月十日、抑聞今日院廳資行、侍所（赤松）召捕云々、是新御臺御方違御出路頭、資行參會、狼藉之體にて見物申、其外緩怠之事共達上聞之間、侍所ニ被仰搦取云々、　十二日、抑定直以使申、資行事罪科者、土岐一族、（號大鰍）伊勢國司、（○北畠満雅）同心謀反人也、國司被誅之後、爲僧形洛中隱居、資行宿所近邊隱居申通之由露顯、土岐一族ニ被仰、搦捕被誅了、資行も被召之間推量、風氣之由申不參、廣橋有可尋事之由申、度々喚之間參之處、侍所待儲、於路頭召捕、伊勢許へ渡之可被糺問云々、御臺參會ハ以前歟、依此題目被召捕云々、仙洞（○後小松）へ此由被申、思食儲之由被仰云々、　十五日、抑治部卿經時朝臣、依資行事、十二日逐電云々、資行糺問、彼朝臣同心之由白狀申、仍逐電云々、不便且不思議事也、

〔東寺百合古文書（百十五）〕廿一口評定引付（寛正四年癸未）

五月四日（連署除之）

一昨夜侍所へ入小盜、色々物取之、就其金阿之事、聊有不審子細、仍召取之可預御糺明之由申之間、差遣公人之處、不見之間則引退畢、（○中略）

同十二日（連署除之）

一就侍所盜人糺明金阿之、付公文於所司代之間、以公人彌九郎可召給訴人之由申之旨致披露之處、任自往古例爲寺家可致糺明也、其段可有預御心得之由以兩雜掌可被仰之由治定畢、

同十三日（連署除之科評定過分廿疋也）

一彼盜犯事、任先規於寺家可致糺明之由被仰于所司代方之處、於撿斷贓物等者可爲寺家御計、至糺明者任大法所司代可存知之間、急可被給訴人之由御返事申之、通兩雜掌披露之處、猶重年預罷

四郎大夫、伺御旨面縛之處、懷中帶一尺餘打刀、殆如寒氷、又覽其盲、魚鱗覆眼上、彌知有害心者之間、被推問之、名謁申言、上總五郎兵衛尉也、爲奉度幕下、數日經廻鎌倉中云云、卽下賜于義盛、(和田)○可召尋同意輩之旨被仰含之云云、　二月廿四日丁卯、於武藏國六連海邊、四人上總五郎兵衛尉忠光梟首、○中略推問之間申云、更無同類、但越中次郎兵衛尉盛繼、去年之比、隱居丹波國、彼同存會稽之志歟、於當時者難知在所、曾不定一所云云、

〔吾妻鏡二十九〕貞永二年(○天福元年)八月十八日、早旦、武州(○北條泰時)爲奉幣于江島明神出給之處、前濱有死人、是被殺害者也、○中略有犯科者否、可搜求其內家家由被仰下之間、諸人奔走、而名越邊、或男洗直垂袖、其濺血也、成恠岩平左衛門尉生虜之、相具參御所、推問之刻、所犯之條無所遁、是博弈人也、仍殊可停止其業之由下知云云、

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年八月十八日甲午、諏方刑部左衛門入道被召置之、雖被加推問、敢不承伏、所本執、仍召取所從男、(號高太郞)被推問之任法之處、氣不能言、結句相誘之、主人已令獻白狀畢、爭可論申哉之由、奉行人雖盡問答、件男云、主人者、兼而顧糺問之耻辱、仍申歟、於上﨟之身者、更不痛其耻、任實正所論申也、但主人白狀之上、不及重御問歟云云、

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年(○建保元年)二月十五日丙戌、千葉介成胤、生虜法師一人進相州、(○北條義時)是叛逆之輩中使也、○中略相州卽被上啓此子細、如前大膳大夫有評議、被渡山城判官行村之方、可糺問其實否之旨被仰出、○下略

〔新抄四〕文永四年二月六日甲子、殺害基範之犯人、左衛門尉某究問之、我傍輩左衛門尉重保(信基朝臣嘗侍)所爲云々、仍被召彼重保者也、

〔看聞日記〕應永廿三年十月十四日、聞桂地藏奉仕阿波法師、幷與黨七人、自公方被召捕、被禁獄云々、彼法師非阿波國住人、近鄕者也、與黨同心之者共數十人、種々回謀計、地藏幷ニ狐ヲ奉付、顯奇得云

古事類苑

法律部三十

中編

推鞫

鎌倉室町時代ニハ、推鞫拷訊ノ制、往古ノ如ク備ハラズ、其時ニ臨ミテ適宜ニ之ヲ行ヒシモノヽ如シ、而シテ水責、火責等ノ酷法ハ、益〻行ハレシニ似タリ、

〔庭訓往來〕召出犯人於侍所、〇中略或及推問、拷問、拷訊等、尋捜之、

〔庭訓往來抄〕〔下〕犯人ヲ宛行フ樣ノ事、先過人ヲ召籠置テ、一ニハ推問トハ先オシトフ也、子細ヲ不謂時、梯ニ載テ水ヲクルヽナリ、又小蛇ヲ口ヨリイルヽ也、二ニハガウ問トハ張付ニスル也、其後廿ノ爪ヲ起ス也、又錐ニテ脚ヲモム也、三ニハ拷訊トハ火頂ト云鐵ノ鉢ヲアカク燒テ犯人ノ頂ニ覆フ也、首ラ則チ燒ケ碎ル也、

〔吾妻鏡〕〔六〕文治二年正月廿九日戊申、豫州〇源義經在所、于今不聞、而猶有可被推問事、可進靜女之由被仰北條殿云云、

〔吾妻鏡〕〔九〕文治五年十二月廿八日癸丑、平泉内無量光院供僧一人、號助公爲囚人參着、是慕泰衡之跡、欲奉反關東之由依有風聞所被召禁也、今日以景時〇梶原被推問子細之處、件僧謝申云、師資相承之間、清衡已下四代歸依、續佛法惠命也、〇下略

〔吾妻鏡〕〔十二〕建久三年正月廿一日甲午、渡御于新造御堂地、犯土之間運土石匹夫等之中、有左眼盲之男、幕下覽恠之、彼者自何國誰人進哉之由被尋仰、仍景時〇梶原雖相尋之不分明、被召寄御前、佐貫

古事類苑

法律部三十

中編

推鞫

斷罪

同十一日、信長公東國法度仰置レントテ、羽林信忠卿、二位法印ニ評議有テ、條子書立給〇天正十年四月ヘリ、〇中略

一訴事出來之時、深ク可被盡淵底也、溺欲之輩ハ不聞理非之當否、而或計賄賂之多少、論親疏遠近、又ハ憚權威之所在、如此則誰カ可成安堵之思乎、是以彌初條之旨可有納得、廣芮ノ訴、聽訟者賢人ノ事、無訴者聖人ノ化、以可被其心得事、

〔義演准后日記〕慶長二年六月五日、護摩如常、天台と眞言相論之事、德善院へ訴訟、大覺寺宮ヨリ覺勝院、東寺ヨリ光明院、寶菩提院、當寺ヨリ演賀律師、是ハ則門跡ヨリ使者也、山上年預返事未一途、
十六日、德善院僧正へ、彼訴訟、東寺幷大覺寺當寺ヨリ今日使者書付遣之、返答云、於禁中可被糺明云々、先以珍重、　十一月廿五日、大佛千僧會、眞言導師大覺寺宮出仕云々、天台導師妙法院宮云云、當月ハ天台宗第一、自宗第二番也、于今訴訟不究、

從朝政勤仕內裏大番、總可致忠節也、朝政可沙汰事者謀叛殺害人事也、相交國務不可成敗人民訴訟、凡觸事不可煩國中住人之旨被仰含云云、

〔小槻季繼記〕太政大臣實基公（嘉祿元十二十補）撿非違使別當ノ時、八歲男子ヲ二人ノ女面々ニ我子ノ由ヲ稱シケル間、法曹輩計申云、任法意旨三人ガ血ヲ出テ流水ニ流トキ眞實ノ骨肉ノ血末ニテ一ニ成リ、他人ノ血氣ハ末ニテ別ナリ、如此可沙汰之由計申之處、大理云、八歲者可出血之條、尤不便事也、今度沙汰之時、彼三人幷諸官等可參之由被仰テ、其日遂不被決雌雄、後沙汰日、彼三人諸官等令參之時、數刻之後、大理出座、被仰云、件女性兩人シテ、此男子ヲ引テ引取タラムヲ母ト可用ヨシ被計ケル時、二人シテ此子ヲ引ケルニ、被引テ損ゼントスル時ハ、一人ノ女ハ放チ、今一人ハ只引勝ントス、如此スル事度々、其時大理云、放ツル女ハ實母也、イタハルニヨリテ如此放モノ也、今一人ハ無勞心、只勝タント思心計ニテ引也云々、無相違放ツル女ハ母也、當座被引ハ荒ニハ似タレドモ思慮ノ深トコロ也、實基公ハ法曹ニ達スル人也、

〔棠陰比事上〕黃霸叱姒

前漢潁川太守黃霸、本郡有富室、兄弟同居、弟婦懷妊、其長姒亦懷妊、胎傷匿之、弟婦生男、長姒輙奪取、以爲己子、論爭三年、訴於霸、霸使人抱兒於庭中、乃使娣（音弟、稚婦曰娣）姒競取之、既而俱至姒持之甚猛、弟婦恐有傷於手、而情甚悽慘、霸乃叱長姒曰、汝貪家財欲得此子、寧慮意頓有所傷乎、此事審矣、姒伏罪、（出風俗通）

〔建內記〕嘉吉元年十月十九日壬子、南都傳奏事、近年不被置之、仍寺社訴訟相積歟、可被定其仁之由及御沙汰、被仰中山宰相中將（定親卿、就雜事近日旁奏之間、假被仰云々、）之處、固辭所詮任先規予可存知由勅定之旨、關白給使者（木幡中將雅豐朝臣）承之、難治非一事、申子細了、

〔信長記十五上〕信長公東國御進發幷勝賴父子討死之事

事之成就、或寄付神社佛寺、或寄付權門勢家之輩者、永不可有勅許、剩可停止向後訴訟之趣、入道殿被仰也、至此條者、事已一定了、〇中略但到諸訴之決斷、如被仰下、眞實可有施行者、又是德政之最要也、

〔吾妻鏡三十三〕延應二年〇仁治元年十二月廿一日庚辰、今朝前武州〇北條泰時相具評定衆等、令參右大將家法華堂、被修佛事、莊嚴房僧都行勇爲導師、是依爲故隱岐次郎左衞門入道行阿初七日忌景也、凡向後於評定以下、携公事輩之沒後者、必可勵追善之由及衆談云云、

〔沙石集六〕爲母有忠孝人事

一鎌倉ノ故相州禪門ノ內ニ、祗候ノ女房有ケリ、腹アシクタテ〳〵シカリケルガ、或時成長ノ子息ノ同ジクツカフマツリケルヲ、イサヽカノ事ニヨリテ腹ヲ立テ、打タントシケルホドニ、物ニケツマヅキテ、タクタフレテ、イヨ〳〵ハラヲスヱカ子テ、禪門ニ子息ソレガシ、ワラハヲ打テ侍ト訴申ケレバ、不思議ノ事也トテ、彼俗ヲ召テ實ニ母ヲ打タルニヤ母シカ〳〵ト申也ト問ル、實ニ打テ侍ト申、禪門返々奇怪ナリ、不當也トシカリテ、所領ヲ召シ、流罪ニ定ニケリ、事ニガ〳〵シクナリケル上、腹モヤウヤクキテ淺猿ク覺エケレバ、母又禪門ニ申ケルハ、腹ノ立マヽニ、コノ俗ワレヲ打タリト申上テ侍リツレドモ、マコトハサル事ハ候ハズ、ヲトナゲナク、彼ヲ打タントシテタフレテ侍ツル子タサニコソ申候ツレ、マメヤカニ御勘當候ハン事ハアサマシク候、ユル、サセ給ヘトテケシカラズウチナキ申ケレバ、サラバメセトテ、召テ子細ヲタヅ子ラル、實ニハイカデカ母ヲウチ候べキト申ス、サテハナドハジメヨリアリノマヽニ申サヾリケルト、禪門申サレケレバ、母ガ打タリト申サン上ハ、我身コソトガニモシヅミ候ハメ、母ヲ虛誕ノ者ニハイカヾナシ候べキト申ケレバ、イミシキ至孝ノ志フカキ者也トテ、大ニ感ジテ、別ノ所領ヲソヘテ給ハリ、コトニ不便ノ者ニオモハレケリ、末代ノ人ノ心ニハアリガタクコソ、

〔吾妻鏡十六〕建久十年十二月廿九日丁亥、以小山左衞門尉朝政補播磨國守護職畢、件國家人等相

右就訴陳狀擬有其沙汰之處、兩方出和與狀畢、如有時去年(正安元)十二月十九日狀者、自弘安六年至于去年(永仁六)十箇年分稱令對捍、雖番訴陳、以和與之儀用途三十八貫文、明春二月十日以前可沙汰送實總方、且自當年當村有時知行分、大神田所當幷司名以下所務、於實總知行之時者不可致對捍云々、(取詮)如實綱同月廿日狀者、自弘安六年至去年分對捍由實綱雖致訴訟、用途三拾八貫文可沙汰渡、次自當年之濟物幷所務於實總知行者不可有違亂、有限所出物付作人、不可令致對捍之由有時出狀之間、令停止訴訟云々、此上者不及異儀、互守彼狀可致沙汰矣者、依鎌倉殿仰下知如件、

正安二年三月廿八日

陸奧守平朝臣(宣時○北條)華押

相模守平朝臣(貞時○北條)華押

〔朽木文書〕和與

佐々木四郎右衛門尉行綱女子尼心阿代淨圓與同出羽五郎義信代光圓相論近江國高島本庄案主職幷後一條地頭職事

右案主職、後一條地頭職者、心阿帶關東安堵御下文、御下知、幷六波羅御下知、次第手繼等相傳知行之處、建武四年正月廿日、義信欲彼所務之條、無謂之由訴申之處、義信又備關東安堵外題證文等、知行之由論之、既雖及三問三答訴陳、義信爲一族可有和與之由被申之間、以別儀、於後一條者、永代所□渡于義信也、至案主職伺名田者、心阿永代可令領掌者也、向後更不可有變改之儀、仍和與之狀如件、

曆應貳年九月十一日

沙彌淨圓 華押

沙彌光圓 華押

〔平戶記〕延應二年二月廿日乙卯、殿下(○藤原兼經)以勸解由次官兼親入道參、即依召參御前、被仰云、(○中略)朝務事、先取要可有沙汰、其條々可有宣下也、諸人訴訟早付職事可奏聞、任道理可有裁報、其中又爲

右重虎所帶西信讓狀等爲僞書之由、重俊訴申之間、被召決處、如去月廿四日和與狀者、西浦者可爲重虎處分、東浦者可爲重俊分、於後家並自餘兄弟等分者、知行不可有相違之由載之、本云々、此上不及子細、早任代々御下文、且兩方守和與狀、相互無違亂、可致沙汰之狀、依仰下知如件、

建長六年三月八日

相模守平朝臣花押○北條時賴

陸奥守平朝臣花押○北條重時

〔尺素往來〕神明寄進、佛陀施入、他人和與、庶子配分之地者、不可有悔還改動之儀、

〔式目抄三〕和與ハ、アマナイ與ル也、財寶ニテモアレ、田地ニテモアレ、眞箇發氣シテヤルヲ和與ト云、

〔東寺百合古文書エ一之九山城〕東寺領若狹國太良庄領家雜掌尙慶與地頭若狹次郎忠兼代良祐令和與條々事

一勸農事、帶實治御下知、雜掌年來致沙汰之、不及子細矣、

一百姓名爲六名事、和與上者不及改沙汰矣、

一助國名事、於下地者任先例令停止地頭綺畢、年々抑留物由事、和與之上者、於半分遂結解、不日不糺返之、向後更不可有違亂矣、○中略

右條々及上訴訟、雖番訴陳所令和與也、於向後者、相互固守此旨、不可違犯、若背此之狀致違亂者、且被悔返和與分、且可被處別罪科也、仍爲後日和與之狀如件、

永仁二年四月日

地頭代僧良祐在判

雜掌僧尙慶在判

〔香取文書十〕香取社領下總國加符村領主又四郎實總與一分地頭多田小四郎有時相論年貢以下事

バ、兩三人ヲ呼、心根見ントテ、提紘ヲ燒テ、手水カケテ進ラセヨト云シカバ、始ハ蒲冠者參テ、手ヲ燒、アト云テ退ヌ、二番ニ小野冠者來テ、是モ手アツシトテ除ヌ、三番ニ九郎冠者ノ白直垂ニ袖ノ露結肩ニ懸テ、彼燒タル提紘ヲ取テ、顏モ損セズ、聲モ出サズ、始ヨリ終マデ手水ヲ懸通シタル者也トアルハ、賴朝義經ガ度量ヲ試ミタルモノナレドモ、是亦鐵火ノ類ヒナラン、

〔甲陽軍鑑十八品第四十八〕信州岩村田法花宗の僧公事之事

假初ながら出家の儀は私さばきならずして、代官衆の人をそへ、甲府の四奉行へあぐる、奉行きき給ひ、出家の非におとさんとすれば、何にても證據なし、百姓無理と申さんには樣子あやふし、是程少分なる義に、鐵火をばみたけの鐘と申にもあらず、色々批判せらるれ共、奉行四人の分別に不叶して、無據上へ披露いたさる、

〔玉露叢三〕慶長十九年三月廿八日ニ、駿府熊野ノ森ニ於テ火起請ヲ取ル、右是ハ兄ヲ害スルノ由論アルニ付テ也、彥坂九兵衛光政奉ハル、

〔吾妻鏡十七〕建仁二年五月二日己巳、兄弟相論事、於向後者、付是非可被仰和平之由、今日被定之、

〔太平記三十五〕北野通夜物語事附青砥左衛門事

此太守〇北條泰時ノ前ニ訴訟ノ人來レバ、ツク〴〵ト兩人ノ顏ヲ守テ云ク、泰時天下ノ政ヲ司テ、人ノ心ニ無奸曲事ヲ存ズ、然バ廉直ノ中ニ無論、一方ハ定テ奸曲ナルベシ、何ノ日兩方證文ヲ持テ來ルベシ、奸謀ノ人ニ於テハ、忽ニ罪科ニ可申行、奸智ノ者一人國ニアレバ、萬人ノ禍ト成リ、天下ノ敵何事カ如之、疾々可歸給トテ被立ケリ、此體ヲ見ルニ、僻事アラバ聽而イカナル目ニモ可被合トテ、各歸テ後兩方談合シテ、或ハ和談シ、或ハ僻事ノ方ハ私ニ負テ論所ヲ去渡シケル、

〔忽那家古文書〕左衛門尉重俊與舍弟左衛門尉重虎相論亡父左馬允國重法師法名西信跡伊豫國忽那島付松吉名地頭職事、

鐵火

云々、

〔建武以來追加〕一江州田上杣庄與同國牧庄山堺相論湯起請文言事

兩方、載號根本堺牓示之名計、可被書之歟、

永享十一年五月廿日

右衞門尉貞政　右衞門尉爲秀　民部丞貞基　大和守貞連　肥前守爲種

〔建武以來追加〕一常在光寺、與朝倉六郎繁清、楢葉近江守滿清、相論近江國田上內堺、湯起請失事、

右湯起請失之淺深者、依牓示紆曲之多少者歟、爰牧庄者、及伍拾町捐之、至杣庄者、參拾町餘捐之云云、湯起請之失、亦隨是者哉、所詮兩方雖爲多少、有失上者、望申堺共以難有御許容上者、於彼在所者、爲闕所、可有他之御計歟、如明德之御判之御敎書者、論所之山在之歟、然者任彼御敎書之旨、可有御成敗歟、

永享十一年六月八日

滿親在判　爲種同　增悅同　之忠同　元尙同

〔甲陽軍鑑品第四十七十七〕長沼長助長八親敵討事附增城源八郎と同長助長八公事之事

增城源八其まゝ置給へ共、三年目河中島合戰に殊外にげて、おのれが事をば指置、剩傍輩のふるや總次郎と申者、臆病を仕たると支對決有て、終に實否究まらず、鐵火をとれとの事なれども、信玄公仰出しに、旗本の侍に直に鐵火をとらすれば、下輩なる仕置なれば、兩方代を出してとらせよと上意にて、雙方より被官をいたし、職衆と横目廿人衆、頭四人を指そへ、八幡宮の庭にて鐵火をとり、增城被官取まくる、

○按ズルニ、鐵火ノ法ハ詳ナラザレドモ、是モ亦上代探湯ノ遺法ナランカ、源平盛衰記四十六ニ、鎌倉殿仰ケルハ、九郎ガ心金ハ怖シキ者ナリ、西國討手ノ大將軍ニ誰ヲカ立ベキト思シカ

邊土飢饉、忽及餓死云々、是米商人所行也、露顯之間、張本六人、餘黨數十人被召捕、嚴密沙汰云々、
十日、抑去月以來、洛中邊土飢饉及餓死、是米商人所行之由、露顯之間、去五日米商人張本六人侍所召捕糺明、被書湯起請、皆有其失、糺間之間白狀、諸國米塞運送之通路、是所持之米爲沽却也、又飢渴祭三ヶ度行云々、與黨商人も皆被召捕、張本六人被籠舍、可被斬云々、所司代依此事失面目、職辭退云々、洛中飢饉以外也、自公方被定法、可米於沽却之由被觸云々、　十九日、米商人被召捕、張本六人之內、門次郎(元乞食也)唐紙師等三人、今日被刎首云々、京都米如元本復云々、珍重也、

追聞三人被討事、未無其儀、例之虛說也、

〔看聞日記〕永享八年三月廿二日、山前觀音寺山相論事、今朝奉行(飯尾肥前)伺申之處、兩方令書湯起請、依其失、可落居之由被仰出云々、　五月十九日、抑山前百姓、與觀音寺百姓今日被書湯起請、於成佛寺(近衞堀川三福寺末寺)書之、奉行飯尾肥前、同大和以下、四五人撿知、定直同撿知、兩方取孔子、當方百姓取之、願阿(山前古老百姓也)先書起請、燒灰呑之、次沸湯之中石を取上、やすやすと取之、更無違失、次觀音寺百姓男起請同前、次取石事之體臆したる風情也、然而石は取上、是も無爲也、兩人寺ニ召置、明後日撿知可落居云々、此五六年山相論、于今不落居之處、公方嚴密可書湯起請之由、依仰如此沙汰畢、當坐先無爲、始終如何、今夜庭田隣壁富長逐電、其跡へ奉行入替撿知云々、何事乎不知云々、　廿一日、起請書人、三ヶ日之間、奉行出合撿知之處、兩人手更不損、無子細云々、兩方有道理歟、不審事也、　廿四日、鄉秋參對面、定直參、山前湯起請事、兩方無異失之由、飯尾公方伺申之間、此上者可被如何候哉、ともかくも可爲御意之由、以飯尾奉被盡御沙汰之條爲悅、兩方無其失之上者、可被中分歟、ともかくも可爲上裁之由、御返事申了、　閏五月六日、山前山相論落居、被成御敎書、珍重也、

〔看聞日記〕永享十年三月十五日、抑聞流人與七丁、遠國へ今朝流遣云々、誰人不知、先日赤松家人類族と云物四人被書湯起請、三人忽手燒損、切腹云々、是あや御料(資任料)犯罪科云々、實犯雖不審切腹

湯起請

長祿二年五月十八日

左衞門尉三善爲衡、民部丞藤原親基、右衞門尉藤原種基、左衞門尉三善元連、散位三善貞有、和泉守清原貞秀、河內守藤原國通、散位三善之種、加賀守三善之淸、沙彌妙金、丹後前司平秀興、沙彌玄良、下野前司三善貞基、下總前司三善爲數、沙彌常忍、

〔今川記〕(五なか日錄)一新井溝、近年相論する事每度に及べり、所詮他人之知行を通す上は、或替地、或は井料勿論也、然ば奉行人をたて、速に井溝の分限をはからふべし、奉行人にいたりては、以罰文。私なき樣に可沙汰也、

〔薩戒記〕應永卅二年八月廿日丙戌、後聞今日侍男一人參內裏女房紀伊局、(主上(稱光)御寵人也)申云、內侍所刀子、(三條、年八十餘歲、)年來自南朝(後醍醐院御曾孫、常時御座嵯峨、故鹿苑院相國(足利義滿)自吉野被奉渡也、)得其語、於內侍所致祈禱、於當今者、已奉呪詛事勿論也、殊今御惱之間得理、此事我爲彼刀子之官女之夫之故所存知也、爲君存忠令披露也云々、紀伊局卽奏聞、主上太令驚御、被申院、(後小松)又被仰遣入道內府禪門、(足利義持)仰武家侍所令尋問事子細、卽被召取彼三條、又內府之諸大夫、前治部少輔經貞被搦之、件經貞者、彼三條之女刀子(アコ)ガ夫也、仍爲三條之聟之故云々、件侍男者、元右中將有定朝臣靑侍(號金河式部)也、或說彼式部爲經貞聟云々、仍召集彼等被糺問、件式部申狀非直言之由、三條陳也、仍式部爲證文自懷中取出折紙、是自南朝御祈禱事、被仰遣折紙云々、各披見之處、無實云々、但於件折紙者、雖無實自南朝相語三條、於內侍所祈禱事實事也、年來之儀、今已露顯、八十餘老女、存不忠、不可說之次第也、(中略)件式部猶吐虛言之由風聞之間、可行死刑之由、入道殿有命、而被存忠之故、三條之謀、又南朝競望露顯了、爲後人之誡、於式部者被行賞、於自餘者、可有糺明之由、自內院被仰云々、　廿三日己丑、參宿直之、內侍所刀子、奉呪詛哉否事、與式部相共可有湯起請之沙汰云々、

〔看聞日記〕永享三年七月六日、抑聞米商買之者六人侍所召捕糺問、被書湯起請云々、此事此間(去月以來)洛中

〔建武以來追加〕伺事條々 永正八十二六

一追評定云、嘉禎四八五、 齋藤兵衞入道奉行、

諸人相論事、證文顯然之時者、不及子細、證文不分明者、可被敍用證人申狀、又證文顯然之時者、證人申狀不能敍用歟、又證文與證人共以不分明者、可及起請文歟、證文證人顯然之時者、不及起請文也、

〔式目抄六〕起請

本朝誓言由來事、〇中略但白川、鳥羽、後白川三代、御起請在之、式目起請、尤宜於御沙汰書起請事、始自後嵯峨院於記錄所書之、於文殿書之、

〔滿濟准后日記〕永享四年三月廿九日、今日同被仰出山名事、駿河守護今河上總守相續仁體事、末子千代秋丸之由內々被聞食及間、此者事、母關東上杉治部少輔姊妹云々、幸ニ嫡子以下兄弟數輩在之閒、此等堅固幼少七八歲者ニ可申付條、併別心樣ニ可罷成歟、不可然候由、先度以山名狀上意趣具申下了、此御返事、昨日廿八日自山名方同今河方申、山名使者山口、今河使者三浦安藝云々、來申旨同今河罰狀等〈此門跡へ狀〉持參申趣、嫡子事、如仰可申付處、此者事以外無正體、始終奉公、且以不可叶條、見限了、

〔蜷川家記〕敬白起請文事

一御成敗ノ趣、萬一不叶理致、子細在之バ、不貽心底言上仕、縱於當坐雖不存寄、有思案仕出ノ旨バ、不謂違期可申上之、但至堅固不辨越度者非沙汰之限事、次就公事不可存無沙汰事、

一雖爲他人奉行、御裁許之篇目相違之由承及を可申披之旨、對申沙汰奉行人可申之事、〈付就御沙汰公事篇不可憚慮言事〉

右兩條令違犯ば、日本國中大小神祇八幡大菩薩山王二十一社天滿大自在天神御罰各可罷蒙候、仍起請文如件、

弟弟子の琳切、大方我宗の學問仕よせ、更級へ歸、兄弟子の善万坊と公事を申せ共、下にてすまざる子細は、弟子兄善万坊申儀、既に圓藏院末期に及び、我等に跡職讓とある手形給るとて、證人を僧俗ともに出す、其上師匠遠行の後、寺退轉の所を建立仕るうへは、いかに我等無智の僧なり共、此寺の儀はそれがしまゝに仕べし、琳切にせん〳〵約束なりといふ共、前判を破後判とあれば、旁もつて此寺は此僧が寺なりと、無智の善万坊が申分是なり、扨又琳切申は、師匠死去の後、寺退轉の建立は、尤なれ共、此琳切が近所に罷在、其方に跡を取おかせ、よき時分に寺をとらんと申さば、何と連々師匠の約束にても寺とらんとは申にくき儀なれ共、大和國へ參候へば、何をも存せす候、其上此琳切が遠國へ參るも、遊山にてはなし、一宗の立派をも少は存て、出家道をたて、此寺になをらんと思ふは、人間惑の塵埃なり、學問の眞似をも仕るは、ほんかうゑやうに爲る事、存命の間はいかに出家にても各如此、又前判を破後判とある、是は尤の事なれど、我等遠國へ參り、十ケ年に及び便宜なき故死したると師匠も思ひ給へばこそ、其方へ手形を渡され候へ、我等いきて有儀を知給はゞ、圓藏院をいかで其方へゆづり給ふべき、それは我等死したると思給ひての事也、いくよりも申ごとく、我等學問の儀仕候て、師匠の死目にあはぬ內の儀、一ッも役にたち申まじきと云儀にて、甲府へまいり、めやすをあげ、御藏のまへにて、弟子あに善万坊おとうと琳切兩僧の公事有、〇下略

〔吾妻鏡三十〕文曆二年〇嘉禎元年七月二日癸亥、所職、所帶、幷堺相論事、爲非據者、可被召所領、無所領者、可被處罪科旨、兩方召起請文之後、可糺明之由被定、且被仰六波羅云云、

〔吾妻鏡三十三〕延應二年〇仁治元年十二月十六日乙亥、就地頭所務以下事被定條々、〇中略

一諸社神官幷神人等、令書起請時於他社不可書由事、

於京都令書者、不嫌自他社、於北野可書也、

所詮於于今御披露令姓引之間、數度雖被相屆之爲同篇、然者文書出帶被成御奉書之由、預御狀、□
□□□然者爲御法條可被成、□□□□□□恐々

六月五日　　　親俊

諏訪若狹守殿御所

七月廿八日己亥、木島娘ャゝ女申事、高屋池上兩人以請文申之子細者、御雜色中島田地相論也、去
年三問三答番無披露之間、文書出帶雖被成御下知、不能出候間、對木島被成御下知了、奉行諏若狹
守、

〔蜷川親俊日記〕頭人御加判

綾小路正清者、竹山相論事、既雖及訴陳、隣町之衆以下、口入趣御兩所御禮之通、令披露候處、然者任
賣券狀候旨、可被令領知旨、對竹山可被成下御下知候由、頭人申立候、

十二月〇天文十九年廿八日

松田對馬守殿

飯尾中務大夫殿

〔甲陽軍鑑十八品第四十八〕信州更級出家公事之事

一天文廿三年甲寅五月三日の公事、信州更級に眞光寺と申律宗の寺に、圓藏院と云住持、兩人の
弟子を持、兄弟子を善万坊と云て、一文不知の坊主なり、弟弟子は珠切と云て、是は又師匠圓藏院
が跡をつがせんと、兼て約束故、學問に出す、しかも律宗の事なれば、大和國の奈良にて學問仕故、
八年あまり音信なし、其跡にて圓藏院遠行なり、かの院老耄故乎、無智の弟子なれ共、善万坊其時
四十七八なれば、尤年齢よしとて其寺を譲とある手形を遺、弟弟子は其比廿五六歳なれども、久
敷便宜なければ、死たるもしらずとある事にて、兼々約束のちがうたるも少は道理なり、さる間

中地口役之時、鴨社納所注進等分、仍載在所歟、此外證文曾以不載在所、以何支證乾艮兩所可致知行之由申哉、不足同日之論事候、元任文書可被申沙汰之狀如件、

應永卅二年十二月廿七日　常寂

清和泉守殿

追申

元應正中支證雖不出帶正文、兩局務書狀分明之上者何事候哉、

先日万里小路右中辨招引、被示云、仕人等申、先年故廣橋儀同三司御書書寫して可借給之由、頻申之、於訴狀可借預之由、被仰候間、雖相撰之、於此亭者、遂不見出候間、高大史許寫留歟之由、申遣之間、今日案文一通送之、仍書寫間、今日借進入頭右中辨畢、於被正文者、飯尾美濃許預置之由申之畢、

〔政所賦銘引付〕一臙屋修理亮範兼 中帶大 與奪 飯加 九廿七 文明十四三廿六 洛中商賣紙座事、先祖相傳無其隱、然件支證共、一條道場玉壽庵入置質物之處、彼庵ヨリ村上左京亮預置候、紛失之由、玉壽庵證狀有之、然下京橘屋與申者、令出帶件支證申、給御奉書之段、无是非次第也可預御糺明云々、

合奉行布野州同五月三日分　清式大與奪、又有座中望申子細、諏信與奪、

〔蜷川親俊日記〕天文七年三月廿三日丁酉、書狀云、田上永正與香山彥三郎、地子相論之事、具令披露之處、三問三答之趣注書多、香山帶沽劵狀、非正判之旨、憶指申之間、於無證判者、可被成御下知、□□口口恐々、

三月廿三日　親俊

松田豐前守殿

諏訪神左衛門殿 御所

〔蜷川親俊日記〕天文七年六月十一日癸丑、就木島與中島田地相論之儀、去年以來及三問三答之處、

隱居歟、以子息之小兒(號龜童丸)被恩補之、喝食男者、細川典厩(○勝元)加扶持、故細川爲烏帽子子之故也、民部少輔入道當管領扶持、元來舍兄代々扶持之故也、難入部不可渡地下之由風聞、於京都可有落居歟之由謳歌、夜々物忩事也、先日民部少輔舍弟兒、(元在三寶院也)爲大將已下向、不經本路廻閑路云々、當管領手少々爲兵士歟云々、此守護職事、志波民部少輔以父入道恩補之跡、(勝定院殿(足利義持)御時、如元被補富樫了、)當管領已後出訴訟之時、召出文書一見以後、不示是非、令安堵富樫龜童之間、志波民部少輔令鬱憤下向賀州、可押領之由支度之、然而面々止了云々、爰富樫兒事入部之時、就越前之近國、可加扶持之由、管領相觸志波、志波令鬱憤、及異儀不可出一人之軍勢之由返答云々、無爲入部不定歟、國中多屬喝食男歟云々、

〔康富記〕文安四年五月十七日戊申、或仁語云、加賀國守護職事、富樫次郎(童名龜幢丸)幷叔父安高兩人半國宛可知行之由、管領之沙汰落居云々、此間相論不止、度々合戰也、次郎者前管領畠山扶持也、安高者當管領細川京兆(○勝元)扶持也、

〔富樫記〕寬正ノ比ノ富樫介ヲ泰高ト號、此人中年ヨリ病身ニテ在京叶ハズ、隱居シテ中務大輔泰成家督ヲ繼ギ、文明長祿ノ比在京シテ公方(○足利義政)ノ近習ニ有ケルガ、早世有テ其子政親若輩ナレバ、家督相續ノ政道如何ト申ス人多カリケル、然ル處ニ泰高病氣本復シテ、再任アルベキ由、永享四年ノ比、京都ノ管領細川右京大夫勝元朝臣ヲ憑ミ申サレ、既ニ上意モ宜シカリシヲ、富樫家ノ老臣モ、畠山尾張守持國ヲ賴申、政親ヲ引立、守護ヲ望ミ訴訟申ケレバ、則又政親ニ被仰付ケリ、因茲祖父泰高ト嫡孫政親ト常ニ不快ニ過ケルナリ、

〔康富記〕文安六年(○寶德元年)四月八日戊午、六位外記史、與藏人所仕人、相論冷泉院町(堀川以西、一條以北、大宮以東、大炊御門以南、)之内、外記史知行者、乾艮(東堀河、西大宮、南冷泉、北大炊御門、)兩町也、元應正中支證分明歟、仕人知行者、巽坤(東堀河、西大宮、南二條、北冷泉、)兩町也、右少辨氏房所書出之綸旨、(正月廿八日、不付年號、)幷應永六年八月十二日、鴨社神用用脚、洛

上者、堀川大納言當知行、不可有相違、

〔吉續記〕乾元元年十一月一日庚寅、參院、今日評定也、〇中略若松御厨事、源氏如相傳證文、雖爲分明、祖母當時知行領也、雖告訴歟、祖母一瞬之後被付源氏、可爲折中儀歟之由、一同也、未斷之間、源氏如補任預所濫妨庄家、及刃傷狼藉之由、祖母訴申、爲事實者、罪科不輕、可被尋究也、可隨彼左右之由、同定申、條々不治定之間、不及日六、人々退出、

〔光明寺舊記〕二下　撿非違使定與信政

可早致沙汰、僧敎善與秦宗光相論、宇古田貳枚間事、

右如敎善訴狀者、任去元弘二年十二月十三日之宮石子處分狀、可全知行之處、宗光稱有丹後房慶圓之沽劵、令押領歟、彼慶圓全不得宮石子之讓、於所相副正中貳年十一月之處分狀者、案文云々、頗結構之由訴之、宗光者、相副手繼證文、可令放劵之由、慶圓申之間、所令買得知行也、而敎善於令出對之宮石子之處分狀者、年號之違目在之、疑殆不少、何不差申筆者哉之旨陳之、各訴陳之旨趣、大概如斯、抑敎善雖捧元弘二年十二月十三日之宮石子處分之狀、件二年改元以後、都鄙專正慶元年之條勿論也、就中不存知翟在之由、通申之條、旁不審多端哉、正慶者、中間之年號也、立歸兮不可依用、元弘三年之支證哉、旁以疑難非無其謂歟、次慶圓所相副之宮石子處分狀、爲案文之由雖差申、沽劵之時、用案文之條、古來之定法也、然早停止敎善之亂訴、宗光任買得相傳之證文、可全領知之狀、下知如件、

以下、

延元三年十月二日

祭主從三位行神祇權大副大中臣朝臣花押

〔嘉吉三年記〕所引諸記纂〕嘉吉三年正月、加賀國守護職事、富樫兄達普廣院殿〇足利義敎御意、以富樫舍弟鳴食男新介令還俗、被續彼跡、被恩補了、當御代〇足利義勝管領畠山三位入道〇持國以後令安堵舍兄、民部少輔入道云々但舍兄尤

左衞門尉致同心事、一切無其儀候、於當名田者、自領家御方拜領仕候之上者、爭存不忠、可令與力彼等候哉云々、(舊狀闕略之)如弘安二年二月永茂狀者、又九名田內、次郎入道跡(波)、就相論雖可成闕所、爲領家御恩、七郎(登)蒙中分御成敗候(叙留)上者、可致涯分奉公候、若不忠事(毛)候、又背御命候者、被召上此名候(登毛)、更不可及訴訟云々(以和字換漢字)者、當職爲御家人役勤仕所帶之由、氏澄雖申之、於建久寬喜注文者、爲案文之間、不足證文歟、至承久三年御下知者、武士朝守濫妨之時、就社家之訴訟、有其沙汰之間、可令安堵下司盛經身之由、雖被載之、無御家人所見之上、依爲案文難指南歟、如貞應元年相模國司下知者、大嘗會黑木屋材木人夫事、被催促國中莊公之間、爲荒凉之儀歟、如寬元元年九月廿五日六波羅狀者、波々伯部刑部太郞、鴨河防役可勤仕之由、雖被載之、就雜掌之鬱訴、先可止當時催促之由、同年十一月四日、被下知守護代畢、爲未斷之議歟、如五月二日越後入道狀者、造內裏材木採用人夫可雇給之由載之、不記年號之間、非無不審、如寬喜四年二月十九日眞々部左衞門尉狀者、官兵幷大番役事、可任先例之由、雖載之、云狀中、云判所、朽損之間難信用歟、此外所進之狀等者近年私狀歟、仁治以往、勤仕御家人役之條、無指支證、就中如嘉祿三年四月廿八日同十月五日六波羅下知者、於當保者、可停止守護入部之由、被載之畢、保內有御家人者、豈可然哉、加之氏澄一族盛利號之由、建治三年裁許之上、同一族盛親、寂蓮、永茂、對于社家出種々之怠狀畢、然則下司職、社家一向進止之條無異儀歟、於當職者、宜爲本所之進退、次刃傷狼藉事、雖載訴陳之一篇、無實證之間、非沙汰之限、次氏澄父盛澄任名國司事、非御家人之上、子細同前、仍下知如件、

正安元年十二月廿三日　　　　　右近將監平朝臣　判

前上野介平朝臣　判

〔吉續記〕正安三年十二月六日辛未、參院奏事、今日評定也、○中略平墓御厨事、良暑文書正文、先御代之時、常磐井殿炎上之時紛失、堀川大納言所帶正文、宿所回祿之時、燒失之由申之、兩方共不帶正文之

河堤事、先例百姓等不從下司之間、雜掌不可遂其節之由、依令鬱申、于今不事行、先止當時之催促、重可相觸云々、如建長、正嘉、正元、文永、弘安、正應關東御教書、六波羅狀、并守護催促狀等者、或相催御家人役、或可勤仕御公事之旨所見也、如寬喜四年百姓等申狀案者、自昔御家人役之時、百姓等不勤之云云、如寬元元年領家顯承陳狀案者、盛經保爲體非重代御家人、盛經始望申之、入御家人之刻、顯承顯最爲神人身、入身於御家人之條、無謂之間、加勘發之處、不可有保煩之由、歎申之間、令寬宥云々、如八月廿三日不記年號顯承狀者、前々毛御家人此役乃候仁、被宛百姓多留事哉候、後代仁毛例仁成候奈牟須登無物體候邊登毛左樣仁御家人地頭毛良須滿志幾由乃下知仁天候邊波、難及力候云々、以和字換漢字如雜掌所進元久二年三月二日院廳御下文者、院廳下、丹波國在廳官人等、可早任久壽宣旨并蒲生坂田兩保例、除公田八町六段外、自餘田畠、爲感神院日別御供保、令法橋顯玄門弟相傳領掌多紀郡波波伯部村事云々、如嘉祿三年八月廿八日六波羅下知者、感神院日御供料、丹波國波々伯部保、守護使亂入事、社解遣之如狀者、前々守護代之時、不申入之處、當守護代始令亂入保內、令煩土民之間、長日御供及闕如云々、事實者不便、任先例可停止新儀、若又有殊子細者、可參決云々、如同年十月五日同下知者、當保訴訟及度々之間、下知先畢、守去閏三月十七日關東御下知、謀叛殺害以下三箇條之外、可令停止自由沙汰云々、如建治二年七月十七日同下知者、丹波國波々伯部保雜掌申、當保民壟利、假御家人號、感神領煩由事、就請文重申狀具書如此、子細見狀、爲有尋沙汰、度々遣日限召符之處、不參之間、重加下知之刻、盛利可參上之由、乍載去四月十日請文、于今遲引之條、度々召符違背事、已令驚顯歟、然者假御家人號、感神院領煩事、停止之後、有鬱訴者、可參決之由可被相觸彼盛利云々、如九月十一日付文永十一年盛親狀者、飛會山乃田事、就御式條申儀仁天候波須、入出舉質天候波牟毛、久成候奴波、遺出舉仁波牟加波里候奴其牟登存候天、取返天候多留事仁天候邊登毛、何樣仁毛可爲領家御計候云々、如九月十七日不記年號寂蓮狀者、度々申入候、寂蓮名田御點定事歎入候、依賣買地沙汰事、與刑部

〔六波羅御下知〕感神院領、丹波國波々伯部保下司氏澄代良盛、與雜掌親圓相論下司職名田畠、幷刃傷狼藉等事、

右訴陳之趣、雖多子細、所詮如良盛申者、當保者爲氏澄開發私領之間、下司職則重代相傳也、所謂曩祖盛助、入建久三年本御家人注文之上、寛喜元年六波羅使者宇間刑部左衛門尉、晉左衛門尉等、注進御家人交名之時、祖父盛經、專入人數畢、隨又角戸三郎朝守、當保濫妨之時、盛經可安堵之由、所被載關東御下知也、其外守護人越後禪門狀、守護代眞々部左衛門尉施行、關東御敎書六波羅狀以下證文多之、而雜掌致濫妨狼藉之條無道也云々、如親圓申者、當保者承德二年本名主等、依寄附于權長吏行圓、即令寄進當社畢、仍元久二年被成院廳御下文畢、盛經者承久年中爲社恩始所令恩補也、何可稱開發之領主哉、建久寛喜注文者、爲案文之上、不足證文、越後禪門狀者、爲守護人私狀歟、眞々部左衛門尉狀者、無判形之上、子細同前、於承久三年御下知者、社家不存知、縱雖爲實事、無御家人之所見、其外狀者皆以近年狀也、非龜鏡云々、爰如氏澄所進建久三年注文者、丹波國波々伯部保監物守資云々、如寛喜元年注文者波々伯部保下司刑部丞盛經往古御家人也云々、如承久三年關東御下文者、祇園社所司等申、爲角戸三郎朝守、被濫妨社領丹波國波々伯部保由事、停止朝守濫妨、社家如元可令莊務、且又於下司盛經者、可安堵其身云々、如貞應元年十月五日相模國司下知者、黑木屋材木事、不漏丹波國莊公、可催其人夫云々、如二月十三日（不記年號）越後禪門狀者、丹波國波々伯部保下司盛經折紙如此、於官兵幷大番者、任先例可令勤仕云々、如寛喜四年二月十九日、守護代眞々部左衛門尉施行者、官兵幷大番役者、任先例勤仕之由、御敎書十五日所下給也云々、如寛元元年九月七日六波羅狀者、丹波國波々伯部保下司盛保鴨河防對捍事、何限盛保、寄事於領家方、可令難澀哉、不日請取役所、可終功也云々、如同月十五日同狀者、鴨河防事、於御家人役者、先例以百姓等勤來之旨申之、早催具彼對捍之百姓等、不日可令勤仕云々、如同年十二月四日同狀者、丹波國波々可部保鴨

一地頭代官有盛召取公文百姓令書起請文事

右如同解狀者、去承元元年企條々訴訟、蒙裁斷之間、雖不承引成後恐、去承元三年二月廿九日、召籠公文家長法師幷百姓等、令責書起請文云々者、不召決兩方之間、難糺眞僞、事若實者甚不穩便、早可返與件起請文矣、○中略

以前條々具守先御下知狀、且任先例可停止新儀非法之狀、所仰如件、以下、

建保四年八月十七日　案主菅野○以下人名略

〔平戸記〕寬元三年五月一日甲午、早旦、先日自殿下○藤原良實所下給之安守後家遺財相論文書相具、申狀返上之、其狀在左、

少監物兼俊與左兵衞尉行重相論安守後家遺財家地等事

右如問注記者、兩方申狀、都以水火也、分明之證據共不出來者、決斷之裁定可爲難治歟、然而法家勘申之旨、大概非無其謂、以勘據之趣可有量沙汰歟、但喪葬令云、身喪戶絕無親者、所有家人奴婢及宅資、四隣五保、共爲撿挍財物營盡功德、其家人奴婢者、放爲良人、若亡人存日處分、證驗分明者、不用此令云々、卽勘狀所引此令文之心同義解之釋也、案此文子孫之外不可有得分之親也、而兼俊雖爲子息之儀、如正淨法師申狀者、長大之後令向背云々、兼俊就此狀舉虛誕之儀、雖申子細、其證難決之上、讓得之狀不備進之間、亡人存日處分證驗分明之儀、猶貽疑義、可守此令者、頗可乖違哉、爲之如何、但問注之時、兼俊申云、以法家勘狀之趣、有御尋重村法師之時、兼俊申狀與重村法師之陳答無相違云云、然者重村法師申狀可謂前後相違歟、此趣不審、能可被尋決歟、若猶可依兼俊申狀者、件家地後家可領掌之所歟、而讓高橋氏女之狀雖載重村相傳之由、其以前讓狀手繼文書等不見、旁有疑殆、又可被尋召歟、隨其左右可被決斷哉、以此旨可令披露給之狀、所請如件、經高恐惶謹言、

四月廿九日　民部卿經高請文

書正文、所申無相違者、載于名字、可給安堵、此上若雖段歩、以不知行之地、寄事於安堵、令掠領者、隨支證出來、可被沒收本領、無所帶者、可斷罪其身、

〔建武以來追加〕伺事條々（永正八十二六）

一寺社領已下事（應安二十二）

於帶本文已下證文者、雖爲凡人被返下例、古今在之、然者任證文可有御成敗哉、

〔侍所沙汰篇追加〕一諸國闕所事（應永十五十一三、武衞御（斯波義敎）判在之、飯尾美濃入道常廉奉行、）

諸人就望申、雖被充行、或稱本主、或號新給、帶證文申之輩繁多也、因茲參差之沙汰出來之條不可然、所詮於向後者、闕所之段、土貢之員數、相尋守護、就左右可有其沙汰、若注進日數過廿ケ日者、以訴人差申在所、可充給御下文矣、〇又見建武以來追加、

〔建武以來追加〕御成敗條々（應永廿九七廿六、松田丹後入道常背奉行、）

一寺社本所領訴訟事

不可依文書年紀、但於不帶公驗者、非御沙汰之限焉、〇中略

一紛失安堵事

雖帶文書案文、於年紀馳過者、不可有御許容、至捧當知行并年紀未滿文書案文者、非制限焉、

〔建武以來追加〕管領壁書

一訴論人文書事（永享二八廿一）

共以載目錄、加判形可令備進矣、

〔建武以來追加〕被仰出條々（文明八八廿四）

一諸人訴訟事、雖日難被定歟、且隨證文之理非、且依年序遠近、可有御用捨事乎、

〔壬生家文書〕〔一〕將軍家政所下　若狹國國富庄〇中略

意ニハ判形ヲバ本トセズ、自筆ヲ以本トス、式目ニハ前判後判ト云、前狀後讓ハ公家ノ法、前判後判ハ武家ノ法也、判ハワカツトヨメリ、其事ヲ判斷シテ是非ヲ分テ後ニ判ヲスル也、判ヲバ草名ト云、名乘ヲ草ニカクモノナリ、眞字ハ他人似スル程ニ、似セヌ樣ニサウニカクニヨツテ、草名ト云、故ニ上古ハ名乘ノ下ニ判ヲカク事ナシ、名乘ニ判ヲスルハ、名字ヲ二ツカイタルモノ也、判ヲセバ名乘ヲ略シ、名乘ヲカヽバ判ヲ略スベシ、面向ノモノハ今モ如此カク也、武家ニハ名乘ト判トシ付タル事ナレバ、今更力ナシ、但古キ支證ナドニ、面ニ名乘ヲカキテ、裏ニ判ヲシタル物多シ、然レバ武家ニモ此心ヲ知テ、二ツヽケテカヽザル歟、後代ノ爲ナレバ裏判ヲスル物歟、

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年〇寬元元年七月十日己酉、諸人訴論事、兩方證文分明之時者、雖不遂對決、可有成敗之由被仰問注所云云、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年〇文應元年八月十二日丁未、今日有被仰遣于六波羅事、其御教書云、

問註以後追進狀事、不進證文之外、於難陳者、不及沙汰之由被定畢、而進覽問、問註記具書之時、每度被副進追狀之條、違傍例非無沙汰之煩、於自今以後者、證文之外、不可副進訴陳之狀、若令備進簡要證文者、遂覆問、可令副進彼證文之狀、依仰執達如件、

文應元年八月十二日　武藏守

相模守

陸奧左近大夫將監殿

〔建武以來追加〕東福寺條々應安五十十九御沙汰 執筆布施彈正大夫入道

一當知行地安堵事應安

以一同之法、被下宣旨之上者、重不及沙汰、但依諸人之妨、有愁申之輩者、尋究當知行之所見、被見文

〔師守記〕康永四年〇貞和元年八月二日癸丑、今日爲勸修寺前大納言經顯卿奉行、被尋下家君〇師右云、關東將軍幷相州子息有事之時、雜訴停否事、先例可被注進給之由被仰下候也云々、端書云、今日評定延否可治定、卽必可被注進之、而御請文云關東將軍幷相州子息有事之時、雜訴停否事、一通跪注申上候云々、關東將軍幷相州子息有事時、雜訴停否事、〇中略

延慶二年十月六日、今日御前評定延引、是關東相模入道息女滅亡之由、飛脚去夕著六波羅之故歟云々、十一日、文殿沙汰、於今者可申沙汰之由、被仰下開闔師顯朝臣、依相州禪門息女事、五ケ日被止奏事幷雜訴沙汰了、

康永元年十月三日被尋下師右朝臣、是征夷將軍息女六歲歟去夜他界間、雜訴停否事也、同十四日、今日雜訴庭中等事有其沙汰、今度雜訴七ケ日被停止之由被下御敎書、

大外記中原師茂

後聞、今日御前評定延引、依將軍子息事也、開闔師香以下一兩參仕、不及著文殿退出云々、

〔尺素往來〕本領事、〇中略遂三問三答之訴陳候之處、兩方證文、前後狀之篇、謀實書之段、可爲相論肝要之由、就令治定候、去十八日互出帶手繼正文、於御前對決仕候了、如當方相傳之讓狀者、送多年而後以自筆自判附屬之條、歷然露顯、仍則蒙御裁許、卽令安堵候、

〔御成敗式目〕一兩方證文理非顯然時擬遂對決事

右彼此證文理非懸隔之時、雖不遂對決、直可有御成敗歟、

〔御成敗式目追加〕一諸人相論事

右證文顯然之時者不及子細、若證文不分明者、可被敍用證人申狀也、〇下略

〔式目抄〕四一讓所領於子息、給安堵御下文之後、悔還其領、讓與他子息事、〇中略

判者判斷是非注置而已、法意ニハ前狀後狀ト立テ、親ノ讓リ後ノユヅリ付ク事式目ト同ジ、法。

前候哉云々、端書云、明日文殿始可ㇾ爲ㇾ知定候歟、若可ㇾ延ㇾ引候者可ㇾ相ㇾ觸衆等ㇾ候乎云々、〇中略
今日新大納言觸申云、明日文殿沙汰可ㇾ延引ㇾ可ㇾ被ㇾ存知ㇾ云々、可ㇾ存知ㇾ之由被ㇾ出ㇾ御請文、
今日藏人右衞門佐仲友觸申云、時禮任ㇾ例可ㇾ致ㇾ沙汰ㇾ云々、則取ㇾ出御請文ㇾ了、時禮政始事下ㇾ知文殿、
入道殿下有ㇾ事時雜訴間事
普光園院入道殿下
文永七年十一月廿九日薨給于ㇾ時入道關白
件度、雜訴沙汰停否無ㇾ所ㇾ見、
圓明寺入道殿下
弘安七年七月十九日薨給于ㇾ時入道關白
廿一日御前評定延引、依ㇾ入道殿下御事ㇾ也、
昭念院入道殿下
永仁二年八月八日薨給于ㇾ時入道關白
今日可ㇾ有ㇾ御前議定ㇾ而殿下無ㇾ御參ㇾ上、依ㇾ入道殿下御事ㇾ延引、
十一日於ㇾ記錄所ㇾ有ㇾ沙汰事ㇾ但今日雖ㇾ爲ㇾ議定ㇾ式日ㇾ不ㇾ被ㇾ行、
圓光院入道殿下
正和二年七月七日薨給于ㇾ時入道關白殿ト御□□
件度七ヶ日被ㇾ閣ㇾ雜訴ㇾ歟〇中略
中院入道殿下
建武六年八月廿五日薨給于ㇾ時入道關白
九月一日御前議定、又有ㇾ記錄所沙汰事ㇾ云々、

申之由、有勅定、〇中略生心申詞、

正應六年八月二日、於記錄所愁申、

沙彌生心申、大神宮領、上野國薗田御厨、幷伊勢國散在田畠等事、頭左大辨〇平經親、時記錄所寄人、爲奉行緩怠之間、去六月十日庭中之處、件日上卿自前藤宰相家、忩可被申沙汰之由、雖被申、本奉行職事、于今不及其沙汰と申、

件子細且被尋奉行職事、直被召出正應四年三問三答訴陳、可省其沙汰歟、

明法博士中原章保

〔花園院御記〕元亨三年七月十九日己酉、雜談、卽語云、定資卿訴申小林莊事、法皇〇後宇多政務之間、雖申入無御沙汰、非分被付宣房卿了、然而乍含愁訴經年序、當時遇善政之最中申入之處、兩三ヶ年延引、不及御沙汰、或仁私云、時宜宣房卿不諧之間、有難澀之御氣色、以一義可被付宣房之由內々評定歟、然而理非懸隔之間、難治之間、數度延引、而以非分之令文被成此事、欲有裁許之由風聞云々、此事如何、當時隨分停放、中興、誠以君臣皆被立中和之道、而如此有御引汲事、尤以不審、但非知之難、行之難也、知道之大體之故、雖多善政、未至體于道者、豈無非乎、堯舜之朝非無亂政務之法也、近日朝議大體可謂治世、莫加吹毛之難而已、

〔建內記〕永享十一年六月廿五日辛丑、傳聞、武家諸奉行、人々愁訴、雖經數年、不及披露、近日雖訴之、或稱管領命、越次第披露之、不可然、不依尊卑親疎、任次第可伺申由有仰云々、又聞、諸家被尋、有愁訴人云々、

〔師守記〕曆應四年正月十四日壬戌、是日新大納言經顯卿執權被尋申云、入道關白有事之時、雜訴停止有無幷日數事、隨所見可注賜之云々、端書云、前執柄例同可注賜候、御返事云、入道殿下有事之時、雜訴間事、隨所見一通跪注進候、每度雖不注置候、三ヶ日停止奏事外無異事歟、前執柄之時、子細同

〔雜筆往來〕勤連署解狀、粗所訴申也、訴訟既與盛也、裁許不可遲々、無嚴重刑罰者、彌乘勝歟、各勵微力可被回秘計也、

〔新編追加雜務〕一鎭西御家人訴訟事○目録云正應三急可有沙汰、且九、十、十一、十二、四箇月可被事切歟、

〔吾妻鏡十八〕建仁三年十二月十八日壬子、諸人訴論是非、進覽文書之後、至三箇日不加下知者、可被處奉行人於緩怠過之由、儲其法云云、

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年○寛元元年九月廿五日戊辰、諸人訴論事有評定、事書入見參、可施行之由被仰下之、御處成敗遲々、尤以不便、自今以後、付奉行人註事書、早々可成御下知、又御下知與事書於問注所、可令勘合事云、無相違者、可下之由依仰加賀民部大夫、

〔吾妻鏡五十〕文應二年○弘長元年三月五日丁卯、引付沙汰不事行之由、訴人等愁訴之趣、達上聞之間、今日有評議、向後無懈緩之儀、早速可申沙汰也、於徒拘持奉行人等者、頭人就注申、可被處重科之旨、被觸仰引付云云、

〔塵添壒嚢抄三〕齷齪事

訴訟ナンドノ落居ノ遲々スルヲチ、クルト云ハ何ゾ、文選ニ齷齪チ、ケタリトヨメリ、是ヲ注スルニ小節ト云、論ヘバ線ヲ以テ物ヲ縫ニ、フシニ至リ達カヌルガ如シ、

〔建武式目〕政道事

一可被定御沙汰式日時刻事

諸人之愁莫過緩怠、又寄事於早速、不究淵底者不可然、云彼云此、所詮無人愁之樣、可有御沙汰也、

〔勘仲記〕正應六年○永仁元年八月二日乙酉、依記錄所庭中番、早旦參內、○中略訴人沙彌生心、上野國園田御封、幷伊勢國散在田畠事申之、章保注進申詞付予、○藤原兼仲予付內侍、先所奏聞也、相尋前藤宰相可

一甲州府中穴山少路に、新立寺と申日蓮宗の寺あり、是にわき寺十四五有、此十四五の中に、林生坊、昌沈坊と云坊主女房をもつ、是を近所の町人ぬきな加兵衞、玉越木工左衞門、兩人にてよくとぢめ、女房にぐる事ならぬやうに、隣の坊主に手形をさせ、扨訴人岩間大藏左衞門方へつぐる、○中略御分國の大身小身の侍、或は僧侶一切の人の事、惡儀訴人申役を、此岩間大藏左衞門に仰付らるゝ、故、右林生坊、昌沈坊と申、新立寺の法花坊主、女房持候と有儀を、岩間大藏左衞門悅、二人の町人同道いたし、奉行所へ訴申、則四奉行穴山少路新立寺院主の御坊へ書狀を付、林生坊、昌沈坊二人の僧を御藏前へめしよせ、扨大藏左衞門と、ぬき名加兵衞、玉越木工左衞門二人をよび、引合て、對決沙汰ありて、法花坊主兩人ながら負て申やう、我々ばかりにて御座なしとて、法花寺の中をかぞへたて、いづれの寺にも五人六人候と申、

覆問

〔沙汰未練書〕一覆問事
問答之後、訴論人共有所存者、重遂問答、是覆問云、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年○文應元年八月十二日丁未、今日有被仰遣于六波羅事、其御教書云、
問註以後追進狀事、○中略於自今以後者、證文之外不可副進訴陳之狀、若令備進簡要證文者、遂覆問可令副進證文之狀、依仰執達如件、

文應元年八月十二日　武藏守
相模守
陸奧左近大夫將監殿

滯訟

〔庭訓往來〕御沙汰事、既嚴密所被執行也、更非停滯預儀之政道、訴訟若有悠々緩怠之儀者、御在洛之費也、可被用意活持之計略、先被進擧狀於代官者、公所之出仕諸亭經廻可申圖師也、奉行人賄賂、衆中屬託、上衆秘計、口入頭人內奏最負窺機嫌可申之、

大名對決

也、弟ガ申所道理ナリトテ、仍安堵ノ下文ヲ給テ下リヌ、〇下略

〔政所内評定記錄〕一四月〇寛正四年十五日、在盛勘之内談、〇中略

披露

一武田被官與一色左京兆被官相論、舟荷物事、

於舟者盗物沽却云々、召上彼訴論人可被遂對決、至荷物者、彼船頭負物在之間、押取云々所詮之荷船頭之計哉否、自餘之津湊例相尋之、可依左右、

一對決四月廿一日　如內談、兼日證人奉行事、以公人相觸、

回文書樣例式折紙

明日廿一午剋於政所武田大膳大夫被官與一色左京兆被官負物相論對決爲證人奉行可有參勤之由候、

齋藤四郎右衛門尉殿

齋藤五郎兵衛尉殿

〔蜷川親元日記〕文明五年八月廿五日甲申、政所對決、於執事代淸泉忠所有之、別ニ記之、

〔蜷川親俊日記〕天文七年十月廿五日乙丑、西梅津百姓等與中路被官人對決、又西京服部與古市藤左衛門對決、

〔蜷川親俊日記〕天文七年十一月廿日戊寅、住吉淨土寺之事、雖有對決、無落居之間、可被相□□之由候、兼々爲案內、茨木四郎右衛門野使同進來之獻酒、

〔今川記かな目錄追加五〕一田畠野山境問答對決の上、越度の方知行三ヶ一を可沒收之旨、先條雖有之、あまり事過たる歟のよし、各訴訟に任、問答之傍示境一はいを以、公事理運之方へ付置べき也、

〔甲陽軍鑑品第四十八十八〕甲府法花宗の僧公事之事

問注所對決

〔吾妻鏡 三〕壽永三年〇元暦元年十月廿日乙亥、諸人訴論對決事、相具俊兼盛時等召決之、且令注其詞、可申沙汰之由、被仰大夫入道善信云云、仍就御亭東面廂二箇間、爲其所、號問注所、打額云云、

政所對決

〔沙石集 三〕美言有感事

一下總國ノ或地頭、領家ノ代官ト相論ノ事アリテ、鎌倉ニテ對決ス、泰時ノ御代官ノ時ナリ、重々ノ訴詔ノ後、領家ノ方ニ肝心ノ道理ヲ申立タル時、地頭手ヲハタト打テ、泰時ノ方ヘ向テ、アラマケヤトイフ時、座席ノ人ドモ、ワツトワラヒケル時、泰時ウチウナヅキテ、イミシクマケ給ヒヌルモノカナ、泰時御代官トシテ年久成敗仕ニ、イマダカクノゴトクノ事ヲ承ハラズ、アハレマケヌルトキコユル人モ、カナハヌ物故ニ、一言ヲ陳ジ申習ナルニ、我トマケ給ヘル事、メヅラシク侍リ、前ノ重々ノ訴陳ハ、一往サモトキコユ、今領家ノ御代官ノ被申トコロ、肝心ト聞ユルニシタガヒテ、陳狀ナクマケ給ヘル事、返々イミシク聞エ侍リ、正直ノ人ニテ御坐ケリト、ウチナミダグミテ感ジ申サレケレバ、ワラヒツル人々、ミナニガリテゾ見エケル、サテ領家ノ代官モ、日來ハ事ノ子細キヽホドキ給ハザリケリ、コトサラノ僻事ハナカリケルニコソトテ、マケヤウヲ感ジテ、六年ノ未進ノ物、三年ハユルシテケリ、ワリナキナサケナリ、是コソマケタレバコソカチタレノ風情ニテ侍レ、

〔沙石集 三〕一同キ御代官〇北條泰時ノ時、鎭西ニ父ノ跡ヲ兄弟相論スル事有リ、父貧クシテ所領ヲウリケルヲ、嫡子カシコキモノニテ、マヅシカラヌマヽニ、コレヲ買テ還テ父ニシラセケリ、カヽリケルホドニ、イカナル子細カアリケン、弟ニ迹ヲサナガラ讓ケル、兄關東ニテ訴訟ス、弟ヲ召レテ對決ス、兄嫡子ナリ、奉公有リ、申所道理アレドモ、弟讓文ヲ手ニニギリテ申上レバ、共ニ其イハレアリ、成敗シガタシトテ、明法ノ家ヘタヅ子ラル、法家ニ勘ヘ申テイハク、嫡子也、奉公有トイヘドモ、父スデニ弟ニ讓ス、子細有ニコソ、奉公ハ他人ニトリテノ事也、子トシテ奉公ハ至孝ノツトメ

將軍座前對決

〔吾妻鏡四〕元暦二年〇文治元年八月廿一日辛未、鹿島社神主中臣親廣與下河邊四郎政義被召御前遂一決、是常陸國橘郷者被奉彼社領訖、而政義以當國南郡總地頭職稱在郡內、押領件郷、令譴責神主妻子等、剩可從所勸之由取祭文之旨親廣訴申之、政義雖伏、頗失陳謝、爲眼代等所爲歟之由稱之、仍停止向後濫妨、任先例可令勤行神事之趣神主蒙恩裁、退出之後政義猶候御前之間、仰云、政義向戰場殊施武勇、對親廣失度歟、尤咲之云云、政義申云、鹿島者守勇士之神也、爭無怖畏之思哉、仍雖有所存、故不能陳謝云云、

〔吾妻鏡八〕文治四年八月廿三日丙戌、波多野五郎義景、與岡崎四郎義實、於御前遂對決、是相模國波多野本庄北方者、義景累代相承所領也、而竊在京之隙、義實望申之、歸參之後、義景申云、當所者保延三年正月廿日、祖父筑後權守遠茂、讓與二男義通云云、

〔吾妻鏡十二〕建久三年十一月廿五日甲午、早旦熊谷次郎直實與久下權守直光、於御前遂一決、是武藏國熊谷久下境相論事也、直實於武勇者、雖施一人當千之名、至對決者、不足再往知十之才、頗依貽御不審、將軍家〇源賴朝度々有令尋問給事、于時直實申云、此事梶原平三景時引級直光之間、兼日申入道理之由歟、仍今直實頻預下問者也、御成敗之處、直光定可開眉、其上者理運文書無要、稱不能左右、縡未終、卷調度文書等、投入御壺中起座、猶不堪忿怒、於西侍自取刀除髻、吐詞云、殿乃御侍倍登利波天云云、則走出南門、不及歸宅逐電、將軍家殊令驚給、或說指西馳駕、若趣京都之方歟云云、則馳遣雜色等於相模伊豆所々并筥根走湯山等、遮直實前途、可止遁世之儀之由、被仰遣于御家人及衆徒等之中云云、

〔吾妻鏡十八〕建仁四年〇元久元年七月廿六日丙戌、安藝國壬生庄地頭職事、山形五郎爲忠與小代八郎等、相論之間、就守護人宗左衛門尉孝親注進狀、今日於御前被一決、遠州并廣元朝臣等被候御前、是將軍家直令聽斷政道給之始也、

百姓申云、六十貫餘之用途事、胸臆ニ不覺之由申之、仍追可注申上之由、被經沙汰畢、

申狀一段畢

辨房返送夫廿人、責取用途三貫文間事

百姓申詞、不違申狀、

預所申云、此事、曾不存知之上ハ、可被尋公文之由、就載申狀、被尋下公文之後、可存知之旨申之、

申狀一段畢

結句一段事

百姓申詞、不違申狀、

預所申云、此事、爲在京之身、實否不能治定由申之、仍被閣之畢、

已上、就十月百姓申狀條々、問答大概記錄如此、

〔勘仲記〕弘安七年六月廿八日甲戌、早旦參院、〈○後深草〉奏事、次參殿下、〈○藤原兼平〉內覽條々事、次歸參院、住吉神主國平與坐摩神主康重相論神事執行、於文殿遂對決、師顯奉行也、一決遂了、訴論人起座、文殿衆勘決是非、問注記幷勘決狀等、師顯付予宗親朝臣、內々奏聞、御所爲押小路大納言二品第、宗親馳參彼御所、勅答云、文殿衆師宗一人雖申子細、其外一同之上者、於神事者國平可施行之由可被仰下之由思食、參殿下、如何樣可候乎之由被申合、於御前讀申問注記勘決狀等、其後被仰下是非、其趣注折紙付藏部了、國平可施行之由被仰下之間、即下知社家了、終日奔走、窮屈無他者也、

〔建武年間記〕決斷所條々〈○建武二年二月日〉

一召整訴陳狀擬及對決事〈付散狀到來雖遲至極事〉

爲正訴人之口、留置文書、本奉行可令申沙汰、經一決是非之後、可付渡國奉行方、但於篇目者、先一圓分悉載目六、可注進子細、

而今又遣船召入常石、於當島籠置之間、雖可加治罰、依爲守護之下人、相觸守護之處、就被申行罪科、畢、而百姓等、若依之及逃散者、同意清左近之條勿論也、然者惡黨同意、其科不可遁申云々、

百姓申云、清左近男追捕事、於罪科之有無者不存知、只恐追捕、一向逃散之由申之、

申。状。一。段。畢。

辨房牛二十五疋責取間事

百姓申云、所存不違申状云々、但過怠事者、所載後段六十貫用途等、則此等之科料之內也云々、

預所申云、先度御下知之下者、今更不能申子細、過怠事、於後段可申所存云々、

申状一段畢

辨房若干百姓ヲ召仕事

百姓申詞、不違申状者也、

預所申云、地頭所務事者、任御下知旨、可召仕百姓等之條勿論也、仍人夫等事雖加下知、百姓等稱無先例曾不叙用者也、此上者、可爲上裁也云々、

申状一段畢

沙汰用途事

百姓申詞、不違申状、但地頭此等之非法、依御訴訟被改替上者、御一圓之後、可有御寛宥由所相存也、地頭所務之時、致其沙汰之條、本自勿論之次第也云々、

預所申云、此事、存撫民之儀、雖宛十貫文、尙依歎申、五貫文宛之上者、尤可致沙汰之處、敢不及沙汰、猶爭可及訴訟畢云々、

申状一段畢

辨房三ヶ年中責取非法之錢六拾貫五百五十文由事

明々日—日—剋於政所—— 與——算用對決、爲證人奉行可有參勤之由候、

兩人、但依事三人也、
以公人相觸之、兩人者、一人證人、一人爲右筆也、
致算用者、御倉兩所ヨリ算置二人召出之、置合算也、以公人召之、○中略
文明八年四月十九日
和泉、清
彈正、布施

〔東寺百合古文書 三十八〕寺領伊與國弓削島百姓等就訴訟遂問答條々事
訴人 百姓等 則古老百姓 遂士入道 平三 宗太郎
論人 預所 ○中略
常石八郎當島入申間事
百姓申云、云責取御年貢員數、云入部日限、云問答之次第、如載十月之申狀、無違目者也、
預所申云、常石八郎七月七日入部之時者、辨房之代官沙汰人、相共不可用之由、依遂問答、同十一日、退散庄家畢、重十九日入部之時者、曾辨房之代官等不在庄云々、仍如百姓申狀云、令參差之旨、捧所見之狀、地下公文之狀畢、此上者、於彼年貢者、可爲地下之沙汰之由申之、
百姓申云、辨房八月ニ下向之時、淸左近追捕事、牛十疋、人五人、キヌ小袖幷家內具足等、被追捕取畢、而牛ハ悉返給之、人ハ三人ハ被返之、二人ハ留之、已下ノ物共悉被召之由申之、
預所申云、於淸左近男者、得先年榮實之語、所々惡黨亂入之時、彼男之許ニ籠置之間、武家兩使者令入部沙汰、居雜掌之時、依彼心操露顯歟、於預所不可存不忠之由、御使召起請文、與預所畢、于今帶之、

〔吾妻鏡四十〕建長二年四月二日丁酉、諸人訴論事、於引付勘決文書理非之間、加了見之處、旨趣爲分明者、任先規不能對決、又引付事巳剋以前可始行之、云頭人云奉行人、莫及遲參、且可進覽時付著到之由被觸仰三方引付云云、秋田城介爲奉行云云、

〔古今著聞集十六興言利口〕松尾神主頼安がもとに、たつみの權守といふ翁有けり、わづかに田をもたりけるに、相論の事有て、六波羅にて問注すべきに定りにけり、其日に成て出ぬ、此ぬしはまうにをこがましき者成ければ、いか成事かしいでんずらんと、神主思ひゐたるに、晩頭に、この權守、神主が家のまへをとほりけり、神主よび入て、いかに問注はしなしたるぞ、おぼつかなくて待居たるに、などよそには過侍ぞといひければ、權守居なほりて、過失なげなるけしきにて、なじかは仕損じ候べき、是程に道理顯然の事なれば、一々つまびらかに申て候へば、敵口をとぢて申むねなく候、是程に心地よくつめふせたる事こそ候はね、あはれきかせ給て候はゞ、ぎよかんはかふり候なまし、人々もみゝをすましてこそ候つれと、あふぎひらきつかひてゆゝしげにいひければ、神主うちうなづきて、さてはこゝろやすく侍り、今は事は定まりぬれば、いかならん世までも、くだんの田は相違あるまじなどいへば、權守とりもあへず、いや田におきてははやくとられぬといひたりけるをかしさこそ、さてはさは何事をゆゝしくいひたりけるにか、ふしぎのをこのもの也、

〔光明寺舊記五〕權宮掌家助申、瀧並所在田地壹段事、就所進之散狀幷申狀、御下知如此、子細見于狀候上者、任其旨來十二日可被遂一決、被對問之由、持參各證文等、可令遂正決也、恐々謹言、

九月〇延元四年歟八日　　信政花押
　　　　　　　　　　　　春眞花押

〔政所賦銘引付〕一對決回文折紙

申之歟、自今以後、無隱容可言上之旨重可被仰遣、

〔新編追加 雜務〕一諸國守護人地頭或正員或代官、依領家預所之訴訟、自六波羅爲遂對決遣召文、爲停止非法、加下知之處、不承引之族有之云々、二ヶ度者可相觸、及三ヶ度者可注申關東之由、先日被仰下畢、而存優恕之儀、不被申之由有其聞、事實者、猥藉爭可相鎭哉、於自今以後者、無容隱可令言上給之状、依鎌倉殿仰、執達如件、

寛喜三年五月十三日　　武藏守 判

相模守 判

駿河守殿

掃部助殿

〔御成敗式目追加〕一對決難澀事

不依御沙汰延否、兩度難澀之時、第三箇度目不及出廻文、以一方可有沙汰之由、被治定之後貞治〇治恐永誤以來堅守其法、甲沙汰畢、但以一方沙汰日給人參候之時、雖不遂對決、訴人申所爲之後、依召被尋問不審篇目事、間有例、

〔吾妻鏡 三十五〕仁治四年〇寛元元年七月十日己酉、諸人訴論事、兩方證文分明之時者、雖不遂對決、可有成敗之由、被仰問注所云云、

〔新編追加 雜務〕一御家人輩依本所成敗致訴訟事、於本所遂對決被裁許之時、有非勘者、就御家人愁、尤可申子細、可被存其旨之條、依仰執達如件、

寶治二年七月廿九日　　左近將監 判

相模守 判

相模左近大夫將監殿

〔御成敗式目〕一兩方證文理非顯然時擬遂對決事

右彼此證文理非懸隔之時、雖不遂對決、直可有御成敗歟、

〔新編追加雜務〕一諸國庄々地頭中、致非法濫妨之由、訴訟出來之時、對決兩方爲是非、於京都而沙汰人預所可遂問注之旨、被下知之所、稱觸正員、地頭代面々對捍不令參決云々、事實者甚不當也、雖爲代官爭可令難澀哉、自今以後、猶遁事左右、於不隨催促之輩者、殊可有御沙汰也、定有後悔歟、兼以此旨可令觸知之狀、依仰執達如件、

嘉祿三年閏三月十七日　武藏守判

相模守判

掃部助殿

修理亮殿

〔新編追加雜務〕一西國莊公新補地頭幷本補輩之中、依領家預所訴訟、或遂一決被裁斷、或證文加下知事等、重時朝臣時盛雖令施行、正員及代官不承引之族有其數云々、且御成敗似不事行、且諸人之訴訟不落居之條、旁以不便也、於自今以後者、令下知之上、尚不叙用者、可被注申也、傍輩向後相鎮之樣、可有御計、定後悔出來歟之由、兼遍可觸仰之狀、依鎌倉殿仰、執達如件、

寬喜二年十一月七日　武藏守判

相模守判

駿河守殿

掃部助殿

〔吾妻鏡二十八〕寬喜三年五月十三日、今日有被定下條々、〇中略次同守護地頭有領家訴訟之時、不應六波羅召之由、依其聞、二箇度者可相觸、及三個度者可注申關東之由、先度被仰之處、成優恕之儀不

對決

〔吾妻鏡二十二〕建保四年四月九日壬辰、於常御所南面、終日聽斷諸人愁訴給、〇源實朝各候于藤御坪、言上子細、義村、善信、行光、仲業等奉行之、

〔吾妻鏡二十二〕建保四年十月五日甲寅、將軍家〇源實朝令聞諸人庭中言上事給、海野左衛門尉幸氏、申上上野國三原堺以下事云云、

〔建内記〕應永三十五年〇正長元年五月十四日乙丑、左馬頭殿〇足利義教御判事、於御判始者、已御沙汰天下雜訴、自來月以御判可有御成敗、其間一向管領下知也、管領下知雖承仰、正次御判御成敗事、大樹事宜下以前、爲御冥加可有難哉、執柄所存可爲大樹以後條可然云々、

〔秀吉事記〕柴田退治

洛中洛外所成敗者、半夢齋玄以〇前田也、〇中略若又法度之外、不決斷理非有之、則秀吉糺明者也、

〔下學集態藝下〕對論タイロン　對決タイケツ

〔尺素往來〕本領事、近年庶子等成敵人、構種々之奸濫曲折、依奉掠上聞、及違亂候之間、遂三問三答之訴陳候之處、兩方證文前後狀之篇、謀實書之段、可爲相論肝要之由、就令治定候、去十八日、互出帶手繼正文、於御前對決仕候了、

〔庭訓往來〕讓狀謀實越境相論未分、甲乙之次第、譜代相傳之武具重書等者、於引付方可被逢御沙汰、頭人上衆、開闔、右筆、奉行人等、爲終日之御評定、雖有窮屈、更無御休息之儀被勘判之、就問注所賦開闔重賦之、執筆書與問狀奉書於訴人之時、及兩度無音者、仰使節被下召符、就違背散狀者、直被下知于訴人、令召進之時者、被封下訴狀、番三問三答訴陳、於御前遂問答對決、決雌雄是非、奉行人令取捨事書、於引付、寛御評定之異見可令成敗也、

〔雜筆往來〕手繼相傳、全不令牢籠、被見劵契者、不及推量儀、理非分明也、更不能對問、文理顯然也、敢不可及覆勘、證據明鏡也、何無許容哉、理非懸隔也、不可及對決、

直裁

右件兩條引勘文簿之處、代々之間、任申請雖被裁許、守源朝臣長俊任申請之時、追可有左右之由、建久五年八月四日被下宣旨、又守中原朝臣師藤任申請之時、先注進子細宜待聖斷之由、正元二年四月十三日被下宣旨之後、詳無所見矣、仍勘申

康永四年十月十九日

右史生安倍久定
紀宣直
左史生中原職有
安倍泰度

〔言繼卿記〕天文十四年十月十一日辛丑
一從勸修寺綸旨到、宿紙拂底之由被申候間、大澤播部助持セ遣、文言如此、
粟津供御人魚物以下商賣之事、爲諸役免除無別儀之處、廳司前關白、爲永領可被進退之段及訴論條、可被捧支證之由、數度雖被仰出、終無出帶之上者、任先規構棚、万雜物令商賣、可專神役公役等之旨、可令下知給者、
天氣如此、仍言上如件、
天文十四年十月九日　右中辨判（表書ニハ右中辨晴光ト有之）
謹上　山科中納言殿

〔吾妻鏡二〕養和二年（○壽永元年）五月廿五日甲午、相模國金剛寺住侶等捧解狀、群參營中、是所訴申古庄近藤太非法也、彼狀被召出御前、相鹿大夫先生讀申之、
金剛寺住僧等解申請　鎌倉殿御裁定事
請被特蒙慈恩、停止古庄鄕司近藤太致非例濫行苛法難堪、子細狀副進所課注文一通、（○解狀略）
○按ズルニ、建久十年源頼家ノ時、直裁ヲ止メシコトハ、幕府吏員條ニ吾妻鏡ヲ引ケリ、

〔建武年間記〕一不遵行勅裁致濫妨事

或號本領、或稱新給、忽諸聖斷者、縱雖募勳功、望恩賞、帶證文之相傳、永被弃捐訴訟、召上其身、可被處罪科、

〔建武年間記〕決斷所條々 建武二年二月日

一蒙勅裁輩事

縱雖賜綸旨、未帶當所牒狀者、相觸子細於國奉行、可被書入彼目六、於向後者、勅裁日限過三十ヶ日、無左右不可成牒狀、宜經奏聞、又無牒者不可遵行之、不可沙汰付下地之旨、可仰國司守護哉、此條々不被施行之、訴人逡巡歟、不可說々々々、

〔太平記 一〕關所停止事

訴訟人出來ノ時、若下情上ニ達セザル事モヤアラントテ、記錄所ヘ出御〈〇後醍醐〉成テ直ニ訴ヲ聞召明メ、理非ヲ決斷セラレシカバ、虞芮ノ訴忽ニ停テ、刑鞭モ朽ハテ、諫鼓モ擊人無リケリ、

〔園太曆〕康永四年十月廿一日、亥剋著束帶、〈〇中略〉先參仙洞、兼可參之由、有召之故也、〈〇中略〉次退下參內、〈〇中略〉次召官人、仰云、內記、內記筥取之、官人示之歟、在顯來取筥退了、次予亦中院大納言相扶所勞參陣、始終奉行無術歟、吉書等事可被奉行給、大納言諸〈且此趣兼示之〉次予起座退出、于時寅剋、其後相尋大納言、可注置也、又藤長朝臣、實夏等難陳之趣、可記置之旨示實夏了、

文殿

勘攝津守從五位下藤原朝臣隆昌申請雜事捌箇條內貳箇條事

一請給官使不論有輸庄園皆悉撿注勘決本免加納、且免除且被停止事、

一請任先例被宛行在家役、神社佛寺權門勢家庄園寄人等居住要津不勤國役事、

神崎 濱崎 杭瀨 今福 久岐

勘讞

之儀、先式肴三獻荷用人六人(著直垂打)三獻之禮畢、種々組肴(雖湘點心已下)數獻、第二獻之時、執事起座採酌、而令列座衆勸之、此時大刀(金)一腰宛引之、是皆嘉例之儀式也、今日一獻要脚者、以政所方要脚内被下行之、

一式日內評事

先兼日爲政所廻折紙相觸之、其書樣如前、無著到孔子之役、執事代以下參著、則執事出座、寄人著座、上首次第披露公事、於意見者上首發言、以衆議被決斷之、次奉書事、或執事加判、或寄人兩判、隨于事體、聊有差異乎、

〔武政軌範(問注所沙汰篇)〕一內談儀式事

號內評定、其儀式與政所之沙汰相同、但近代中絶之間不詳、雖然至當所執事者、于今被定其仁乎、

〔勘仲記〕弘安九年十二月十三日乙巳、今日雜訴評定也、不出仕、(○兼仲時爲藏人治部少輔)　閏十二月四日丙寅、參院(直奏)其次被仰下云、神宮雜訴事繁多、先々沙汰事等、職事得替之間、訴人出事等多之、此事聖斷有煩、於記錄所委有沙汰、非據之方文書被加裏書、可被下之由思食、可申合關白之由有勅定、小時退出、先參內、大臣殿入見參、條々事有御談義、三ケ條篇目被注下、可注進所存、十一日可有御沙汰云々、

〔勘仲記〕弘安九年十二月廿四日丙辰

於令違犯者、可有其科、次第(○中略)

近日評定衆傳奏職事辨官文殿衆等被召起請、且被注下三ケ條篇目、一云、不論尊卑、觸耳訴訟、急速可奏聞事、二云、不依權勢不肖、不存偏頗矯飾、可申所存事、三云、不可耽獻芹賄賂事、已上三ケ條可書載之旨趣也、近日德政興行、無先規歟、一十一廿一日等德政沙汰、大臣大納言等評議、此外每月六ケ日雜訴沙汰、中納言參議等祗候、於件雜訴御沙汰日者、被召訴論人於文殿被尋子細、於裁許之院宜(○龜山)者、當座可被書下云々、嚴密之沙汰、衆庶之大慶乎、

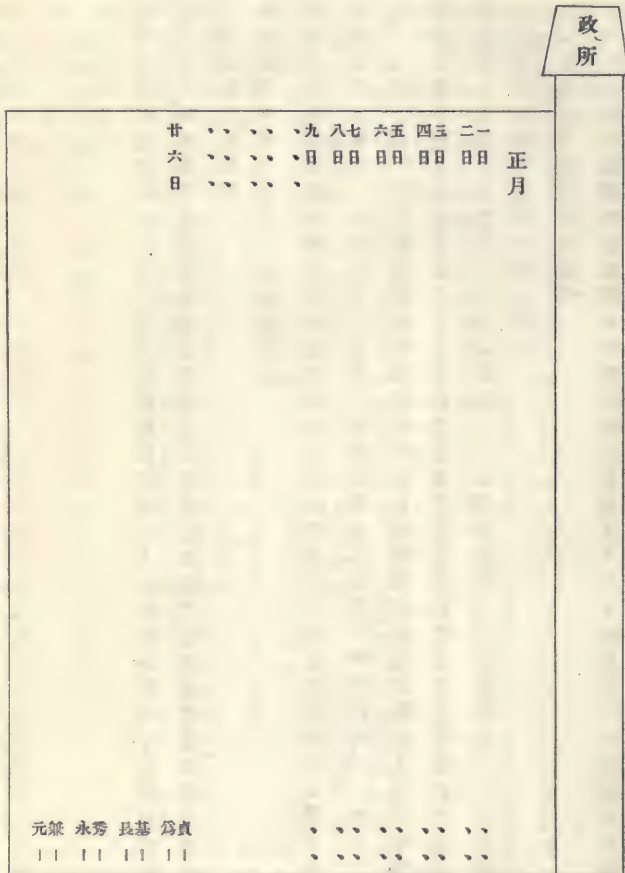
籤造樣、其軸頭者四方、而本者圓形也、其頭書銘一方政所、其左一方內評定、其次一方著到、其次一方年號、假令應永十一年、如此書之、以杉原傳於軸、自軸際注月日幷名字於軸頭銘幷自元日至廿五日之日付等者、著座以前籤役人書之、廿六日及執事名字者、當座書之、

籤圖

政所

正月

一日 二日 三日 四日 五日 六日 七日 八日 九日 、、、、、、、 廿六日

貞爲 基長 秀永 兼元

則書執事之實名、雜仕、持硯幷籤、自上首次第巡行、而各令載其名、列衆書畢、持籤與硯退、則有勸盃

某殿

漸及其剋限寄人參列、先執事代差定役者、鬮者、右筆之上首、奏事者、其次座人著到者、又其次圖者、右筆末座役也、役者既定之後、執事出座、寄人次第著座、

著座次第

執事
右筆　某　某　某　某
半疊
某　某　某　某　某

上座

先侍雜仕持硯蓋、置于圖役之前、役者則執蓋起座、而至于次座席、置孔子於硯蓋、進于第一座之前獻之、次座人爲禮執孔子披之、令衆人見之、孔子役則退而置硯蓋、還著本座、

圖寸法者、方二寸、數者二、一者書老字、一者書若字、以老獻一座、若圖者殘置於蓋中也、近年二圖共書老字、雖違舊規、亦有其謂乎、一座人雖執圖至發言、先第一年老人申之、如御前評定之儀式、

次侍雜仕捧持硯、置于執事前、次奏事役起座、至中座、以奏事詞與扇子、置于半疊上、持目錄進于執事、

目錄應永十一正廿六一折紙書之〇書式略

政所內評定著到應永十一年五月廿六日〇姓名略

書畢持之進于執事前獻之、還著本座、次雜仕取著到前硯料紙退、次持硯與鬮、置于鬮役者之下〇之恐前字脫

內評定

て被申談、一途候はゝ可爲御祝著候、急事候間如此被仰也、近衛殿執御申之云々、仍則申合之日行事豆州へも同御使被遣之、如此被仰云々、

十一日

一大內被申候羅漢寺十方王院住持相論事、御談合、仍豆州攝州來入、於佐方參會申也、大內書狀幷雜掌僧正法寺申狀幷證文等文左改名申所理運也、如此の通先度御下知掠給たる住持かたへ一端可被仰聞哉、然者正法寺申狀披露させらるべき歟由各申之、其段日行事佐手日記如常相調之、各稱名を相加之也、

十四日

一日行事佐より各へ折紙あり、羅漢寺十方寺住持儀につきて、正法寺大內雜掌也書狀一彈正方へ被披露之處、至于今御返事不申、曲事也、所詮三ヶ日中御返事可申旨以日限奉行へ可申哉、次德大寺殿より御申候本役事、治部兵衛大夫方へ御尋之處、これも御返事於于今日不申候間、以日限三ヶ日奉行へ可申歟、德大寺殿よりは切々被申條可爲如何哉由申事也、各其分可然由事書也、仍愚意も其分申也、

〔武政軌範政所沙汰篇〕一內評定儀式事

問注所政所沙汰者、被摸御前評定、是故號內評定、以往者元日以來、正月中日々被行之乎、仍籤著到者、自朔日每日記之、右者年始之執行式日不定、應永以後以廿六日被行之、先兼日爲政所廻折紙相觸之、至評定衆者不載之、以使者被觸遣之、

明後日廿六午剋、政所內評定被始行候、有參勤之由候也、

某殿

右筆以下悉一紙載之

付勘錄歟、

一內談儀達上聞事

於當所沙汰、若有可達上聞之子細者、奉行人令參上、於御前披露議定之趣、或直被成御下知、或於引付重被經御沙汰哉、爰其奉行人至爲御前御沙汰衆者、不能左右、於御前未參仕者、其手開闔令同道、被參殿中、代于本奉行人、令披露之、次諸家兼參之輩亦同之、〇中略

一訴訟落居、及解狀出訴人事、

訴訟事終者、奉行人封解狀裏、反渡于訴人、訴人又書寫解狀、封其裏、獻于奉行所、是規式也、

〔武政軌範 政所沙汰篇〕一訴訟次第事

就賦到來書與召文、相調訴陳狀、於內談之砌披露之、其糺明之次第、同于雜訴之規式、仍不及委記、

〔大館常興日記〕天文九年三月九日

一攝州來臨、大內太宰大貳申、豐前國羅漢寺住持事、去々年掠申御下知給候、僧は大內無許容候、然共御下知被成たる事候間、被成返候て當住(大內さして居置候)相定候はゞ可畏存候分、國之事にて、大內進退之寺之儀也、仍其段以松田丹後守申狀在之、又以勢州內儀は大內被申之、然間各御談合候由承之間、其樣體兩僧相論之趣、古庵方被訪意見候て可被仰出事可然哉之由申之也、攝州も其心へ也、仍手日記在之間、此分にて加稱名也、

廿三日

一攝州より各へ折紙在之、羅漢寺住持職相論事、兩方三問答相そろい候て已後、奉行可爲意見候由被仰出候、各爲心得申之云々、尤心へ存候由申之也、此事大內存知事也云々、

四月八日

一近衛殿より御使(進藤筑後守)在之、大內太宰大貳申、羅漢寺住持職事、今日雖非式日候、各參會候

一諸國御年貢事

已上　實名奏事之役人名也

還中座、向于上座、跪而披露奏事詞、

一石清水八幡宮御神樂料足事

任例可被仰付之焉

一北野宮寺御神寶料足事

可被仰付御倉焉

一諸國御年貢事

任例可被成御奉書焉

竪紙書之、但奏事詞等依時有相替事歟、

讀申初條而向畢發言人間意見詞、請左右之同々畢、向于頭人之時、則頭人發同詞、即合點於目錄

二箇條三箇條之義、式亦如是、三箇條畢、還著本座、雜仕進而執頭人前硯退、次持料紙與硯置于著

到役者之前、則書之、

一方內談著到 明德元年二月七日〇姓名略

書畢捧之、獻于頭人、還著本座、雜仕執料紙硯退、於茲頭人退座、而持參著到於御前、列衆悉退散之

後、頭人以使者各被送遣一腰一重、是恒規也、

一式。日。內。談事 付奉書草

凡大體與前儀式相同、每度兼日開闔以單冊相觸之、〇中略

一落居記錄事

內談一決事、於當座申沙汰人記議定之趣、是定法也、及後日有不審事之時、披記錄勘進之、是號引

次今日役者奏事某、著到某鬮某之由申之、還著本座、次侍雜仕持硯蓋、而置于鬮役之前、即執之、起座至于別座、盛鬮於硯蓋持之、進于頭人、自其次第進之、列座衆執畢、役者跪于末席、執己鬮入懷中、持蓋退于列座、置之而進出、候于中座、雜仕持紙與硯、置于中座之半疊、則鬮役任意見之次第、先書題給、與一番二番之字、見上座、此時頭人以下各披鬮而令見之、則一二之下、注其人名、座遠而難見鬮之時者、其人微音告一二之數、頭人評定衆者、載唐名、右筆以下者、注名字與官之片字、鬮役者注實名也、當參外之鬮者不注之、又末座之人、執當于一番二番鬮之時者、持之進于第一二座之人、與其人鬮替之、是則若輩之禮也、

意見次第（明德元、二十二）折紙書之

一番　因州　二番　三番　飯加　四番　中書禪　五番　六番　松丹州　七番　八番
九番　清左　十番　齋兵　十一番　十二番　布民大　十三番　十四番　矢縫　十五番
十六番　依新左　十七番　十八番　十九番　貞―　廿番　左兵衛

鬮作樣、其大者方二寸許、書一二字如常、其數者不依參不參、總寄人之數作之、假令寄人有廿人者、當參衆雖爲十人、可作廿人之鬮也、鬮之出樣、最末鬮者、可出于頭人、其前鬮者、鬮役可執之、頭人之鬮者、不混于自餘之鬮之樣置之、則頭人得其意執之、己鬮者插大拇下持之、故實也、見意見次第、而可意得之、

書注文畢、披之置于半疊之上、還著本座、次雜仕出而執中座之料紙硯退、次捧持硯、置于頭人之前、次奏事役起座、進出于中座、先以申詞與扇子、置于半疊之上、捧持目錄、獻頭人、

目錄（明德元、二十二）折紙書之

一石清水八幡宮御神樂料足事
一北野宮寺御神寶料足事

二月十日 實名判

某殿

至其刻限、衆中參看、先開闔申合頭人、差定奏事、著到、闔等之役者、奏事者、右筆之上首、著到者、其次座人、闔者末座人、其右筆之所作也、役者既定之時、頭人著座、次寄人、次第列座、御座席之中央一間者、徹疊而鋪刺筵、其上鋪半疊、

上座

人 頭

頭 寄 某 某 某

半疊

權 某 某 某 某

頭

座定之後、開闔起座而進於中座、披露規式、

一方內談規式

一式日

二日、七日、十二日、十七日、廿二日、廿七日、

一刻限

自巳刻至未刻、

一條數

一日廿箇條

以上 竪紙書之、式日者、依其方可相替、

內談

〔武政軌範侍所沙汰篇〕一式日事

每月上旬、中旬、下旬三ヶ度也、日限者依于時相替乎、或至急事者、雖非式日被執行之、

〔政所內評定記錄〕一後內談始、同(寬正三年)三月廿三日八過　頭人(○姓名略之)

披露

一清泉天龍寺殿申、香嚴院領佐味庄主職事、依被成五ヶ年之補任、度々過分立御用之處、不能御返辨、背補任之旨改易之條、不便也、可被遂算用之由申候、自管領(○細川勝元)就被仰候、公方(○足利義政)被披露候處、此分當所江可申之由、被仰出之、可有如何候由、披露之、仍不及賦之意見、被成召文、可被遂算用云々、

〔武政軌範引付內談篇〕一分諸國有沙汰事

三方內談之時者、分諸國於三、五方內談之時者、分諸國於五、令沙汰之國者、依其類分配之、東山、東海、山陽、山陰之類是也、至關東鎭西者、不入之、別奉行人在之、

一式日事

月之上旬、下旬、各兩度也、假令二日、七日、十二日、十七日、廿二日、廿七日、如此一方六箇度宛被執行之、五方之式日相替畢、

一會所事

御代始頭人沙汰始者、於殿上布障子間、或三間御厩等被行之、每月式日內談者、於頭人亭被執行之、(○中略)

一內談始行事

兼日開闔遣折紙相觸衆中、

明後日十二午剋於殿中一方內談被始行候、可令參勤給之由也、恐々謹言、

上者早被召決、就眞僞欲蒙御計云々者、云山務之非據、云閉籠之實否、梨下陳謝之趣、有子細歟、可被召張本之由、可被申院宣御返事之旨、先日雖有其沙汰、於今者不及張本之沙汰、只召決兩方、任正義、早速可有聖斷之由、可被申御返事、

次敎因事、隨使節參向之條、不可然之由可被仰含敎因并靑蓮院衆徒使禪淳顯譽也、

次信賀事、爲御家人子息、屬靑蓮院、令骨張惡事之由、負梨下訴之條、非穩便之儀、早可召下之旨、內々可被仰親父氏信歟、且信濃判官入道行一、康有、兩人問答兩方使之後、如此可有施行之由評了、

評定衆誓狀、申加新衆署判、可進入之由、以平金吾蒙仰了、

廿七日、評定延引、信判入相共、出御所評定所、問答靑蓮院使敎因禪淳顯譽、梨下使永海賴尋等了、

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年○寬元元年二月廿六日癸酉、諸人訴論事、爲無成敗懈緩、今日於左親衛○北條經時御亭有沙汰、且被點其日々、且被結人數、

定

御物沙汰日結番事

一番三日、九日、十三日、十七日、廿三日、

攝津前司　若狹前司　下野前司　對馬前司　太田民部大夫

二番四日、八日、廿四日、廿八日、

佐渡前司　太宰少貳　出羽前司　淸左衛門尉

三番六日、十四日、十九日、廿六日、廿九日、

信濃民部大夫入道　甲斐前司　秋田城介　加賀民部大夫

右守次第無懈怠、可被參勤之狀如件、

仁治四年二月日

以評定落居事書、奉行人書御下知案文、引付披露、（是御下知取捨云）案文治定之後、或當奉行、或清書奉行書上時、採題（採題者、關東者兩所、京都者六波羅殿云也、）兩御判被成、其手頭人封御下知裏、召一方得理訴論人、於引封御座直下給之、（以是事切御成敗云）

一覆勘事

如此被成御下知之後、訴論人中、先御沙汰參差由（參差者違目也）於頭人方申子細之時、所申有其謂者、於本引付以先御下知之下重有其沙汰、（是覆勘云）所申無子細非沙汰之限、

〔吾妻鏡脱漏〕嘉祿二年十月九日辛卯、有評議、駿河前司以下皆參候、諸人訴論事被決斷、爰尾張國御家人中、民部丞泰貞、與駿河前司郎從太屋中太家重、泰貞親昵、年來所領有相論、其事今日被經沙汰之處、泰貞竊廻謀評定所之後、竊評議之趣、駿河者家重得道理意見之由申訴、家重又參其砌、元自駿州之無扶持之旨陳之、辭已呶々也、兩人共被追出彼所畢、　十二日甲午、評定之時訴人近々伺候事、向後可被停止云云、猶有推參之輩者、任法可致沙汰之由、尾藤左近將監、平三左衞門尉盛綱、南條七郎、安東左衞門尉等被仰付、是併泰貞依狼藉也、彼於所帶理運之間、被付家重云云、

〔吾妻鏡三十八〕寬元五年〇寶治元年十二月八日丁亥、有評定、就諸國地頭等與雜掌相論、有被一決之事、所謂有限年貢進濟之外、於庄官百姓等名田畠者、可進止之由、地頭等申之、有限給田加徵地頭雜免等外、於名田畠下地者、自往古本所進止之由、雜掌申之、任先々度々御下知、可守率法之旨被仰出云云、

〔太田康有記〕建治三年七月廿五日評定。〇老

一梨下衆徒使、永海、賴尋申、堂舍閉籠無實由事、

座主非據過法、梨下奏聞難達之間、廢退行徒、切塞道路之條者、爲達訴訟山門之故實也、全非本堂靈場之閉籠、彼五佛實相淨行院等者、一門有訴訟之時、往古集會之場也、何可閉籠哉、所詮兩方參對之

日面々加名字了、酉刻中御門大納言宣明卿衣冠下紙、端座、左大辨宰相忠光卿衣冠下紙、奧座、等參著、无出御、庭中一ヶ條、岩藏姫宮雜掌申唐橋室町地事、爲仙洞御管領之間、難及聖斷之子細、先度被仰了、同篇庭中非沙汰限之趣、中御門亞相問答被返了、其後傳奏被起座見參書立紙、明宗付開闔、開闔內々付上卿進入之也、

四條三位隆右卿雜掌申、眞桑庄預所職事、去十一日對決之時、仁平廳下文不持參之間、不申之、被取具可被經御沙汰云々、不備進訴陳不具對決之時、構簡要執進之條可停止之由、貞和文殿之時被定法了、其上非對決砌、落居以後令申之條令參差歟、有所存者、可申越訴由面々加問答返了、此事傳奏不被起座以前也、□□合寄人等被問答、

沙汰事

一四座下部等申請年預得分事

宿老參入、中藹申子細、不參之間不及沙汰、重可出廻文云々、

一左女牛烏丸屋事

赤田總次郎直代參入、而訴人唐松丸代加押紙不參之間不及沙汰云々、

〔沙汰未練書〕一評定沙汰事

關東者兩所、京都者兩六波羅殿、五方引付頭人衆中皆參之時、於評定所有其沙汰、先以孔子定意見之次第、其後開闔一人、合奉行一人、文聞奉行云以文書參評定所向御前、各敷圓座引付勘錄事書讀上、是讀進云、非開闔者不讀之、讀進後守孔子次第、面々有御意見、引付勘錄有子細者云々、返本引付重可有其沙汰、勘錄無子細者無相違云々、

一同評議綺終後、事書之頭是非被書付、是頭書云執筆評定・衆中、以一人定之、是以爲評定沙汰落居、

一御下知被成事

御前評定

門中納言家成卿御領所職者、後重子孫可相傳之由成返契狀以來、代々無相違、且元亨正中記錄所勘狀分明歟、藤原氏女爲本主、後重後葉受領度々勅裁、幷次第又□□等所□□申難被棄捐歟之趣、

一同了、執筆明宗、

一大炊寮與一條大副兼前宿禰相論山城國市邊御稻田事

兼前宿禰下向播州之由、加押紙、不出對、仍開闔可伺申由令申之、

今日被行雜訴沙汰、四條前大納言隆蔭卿、（直衣、下絬、）中御門大納言宣明卿、（衣冠、下絬、拜賀未仁也、）左大辨宰相忠光

卿（衣冠、下絬、）等參仕、職事藏人右中辨行知、一身參仕、

今日開闔押番文、於記錄所奧辨官座末長押押之、

〔後深心院關白記〕永和二年閏七月廿八日、今日德政議定云々、

一雜訴事

准后關白前內大臣從一位藤原朝臣長顯等定申云任曆應應安法、可被遵行歟、議定雜訴沙汰守式

日、不可有闕怠奏事、

出御剋限、可爲午一點、且諸人訴訟不依親疏、不存私典、急速可申沙汰之由、可被召仰職事辨官等哉、

〔師守記〕貞和三年三月二日乙巳、今日家君（右○師）御參院（殿○光）宮殿、依御前評定也、評定衆久我前相國、

洞院前左府、日野前大納言資明卿、葉室前中納言、寄人大夫史匡遠、大外記師利、大博士師治、新大夫

史清澄、（今年始出仕）大外記家君、博士大夫判官章有、掃部頭師香、主稅大夫判官章世等參仕云々、

〔師守記〕貞治元年十一月十六日丁巳、參記錄所給、大夫史大判事自元祗候、家君（右○師）予著加之、寄人

四位大外記家君、（衣冠上絬、奧座、）大夫史量實、（開闔、端座、）主稅頭予、（衣冠上絬、端、量實次、）大博士宗季（衣冠上絬、奧、家君次、）大判事明宗（衣冠

端座、予次、）等著座、次明宗直著到日、其後面々書名字、雜仕依籠病不參之間、著到取傳、先去十一日著到書

之、先日開闔取落不持參之間、以別紙加著到而重加著到了、開闔令申之故也、次今日分著到、明宗直

無其謂上、如此下職、長官任道理可計成敗之由、向後若可被仰下歟、

一信壞得業與實壽、相論藤原香子山雨庄事、自御所被下文書

人數參仕之時、有御沙汰可被落居歟、

關白　前右大將　兼

目六付職事俊光朝臣奏聞、事畢退出、

〔東寺百合古文書山城三十二之四十九〕建武元年七月廿二日評定

東寺雜掌與小野氏女相論、梅小路室町敷地事、

件地事、雜掌捧正和二年十二月六日勅裁幷正中三年十二月十八日官符、文保元年十月日院廳下文、元弘三年五月七日綸旨等、爲勅施入之地、輙難成人領之由申之、氏女者備天福元年九月十五日安嘉門院廳御下文、同令旨等、彼敷地者、爲女院御祈禱御祭用途料足、被宛行陰陽師在友之以來、相傳領掌之旨爭之、兩方立申之趣非無由緒歟、然者有御奏聞可被一決哉、

章方〇中原　章香〇中原　明成〇坂上　章有〇正親町　秀清〇中原　章緒〇高倉　章興〇冷泉　章世〇四條　章顯〇高倉

〔園太曆〕康永三年二月十七日、今日雜訴沙汰、雖有其催、而去夜官奏、以外窮屈之上、近日雜訴有名無實也、仍强推參無由之間、申所勞之由了、

〔師守記〕貞治元年十一月十一日壬子、今朝家君〇師右以使者今日雜訴沙汰延否事、被尋問頭右大辨資定朝臣之處一定云々、〇中略

沙汰事

一藤原氏女與四條三位隆右卿相論美濃國眞桑庄預所職事

兩方雜掌出對、對決之後、退訴論人、面々自下臈申意見、明宗發言、所詮本主中原俊重、久安寄進中御

三月十一日甲子、參院、評定式日也、攝政前相國、內府、吉田納言、予等參仕、條々有沙汰、予書定詞、彼狀加評定文書了、子細見文書、仍重不記之、

〔勘仲記〕正應六年〇永仁元年六月四日己丑、參內、殿下、〇藤原家基前源大納言、前右大將、〇藤原公衡吉田中納言、下官〇藤原兼仲等祗候、有雜訴評定、一揆之趣予注之、

一宣尙申、殿村鄉內小田、非器甲乙人知行事、

祭主在京云、委猶被尋究、可有沙汰、

一相藤與相賢、相論松尾社領東鄉庄事、

相兼讓相藤之狀、雖悔返後日重讓相藤狀、父相俊法師加署判上者、難破父行事歟、於名田者、任母之讓、相藤可進退之由、可被仰下歟、

一忠源法印與眞助、相論城興寺寺用事、

忠源知行之時、年貢濟否、於記錄所可有沙汰、

一左衞門督局申、鷹坂庄內小田年貢事、

以前折中之聖斷、不可有相違歟、

八月四日丁亥、參內、雜訴評定、殿下、前右大將、下官參仕、頭辨俊光朝臣申出杭庄下司事、藏人大進定房申三寶寺事、兩條予發言、治定之後、又書目六、

正應六年八月四日

一稻荷社領、杭庄〇上文作出杭庄下司職事、

景實得理之由、先度被經其沙汰畢、於狼藉之段者、以前申旨、今更無相替之子細歟、

一典藥寮領乳牛牧公文職事

嚴貞以公領、私無左右寄附三寶寺之條不可然、齋嚴沽却之後、于今住侶無申旨之由、實家申之非

〔葉黄記〕寛元四年十一月三日戊午、今日於院甲乙訴訟以下事有評定、相國前内府參仕、吉田中納言奉行、毎月六ヶ度可有此事云々、其衆太相國(〇藤原實氏)前内府、(定通)右大將、(實基)吉田中納言、(爲經)予(〇藤原定嗣)云々、予依所勞、雖有催不參、(〇中略)評定人々被仰關東云々、

〔葉黄記〕寛元五年(〇寶治元年)正月廿六日庚辰、未剋參院、(〇後嵯峨)今日評定式日也、早被始也、予(〇藤原定嗣)參御前、太相國、(〇藤原實氏)前内府、(〇源定通)内府、(〇藤原實基)堀河大納言、(具通)(已上候長押上)吉田中納言、(候弘庇)本自候座、予參以前事、納言讀文書、或又予讀上之、定嗣予書了、總四ヶ條也、

一高野山領名平庄與粉河寺領丹生屋村相論堺事

於武家遂對決、以問注記送關東、而於堺事者、可爲公家御成敗、相論之間、狼藉出來了、於此事者、就被仰下、可致沙汰之由、時賴申上之、仍有評定、可被下記錄所之由、人々被定申之、予不甘心、如件問註記者、高野所進證文之中、嘉承宣旨案、背正文書入西岸兩字、已招詐僞之科歟、或又應保元年之證文、改元以前載新年號、同以僞書歟、

一大神宮禰宜長光與權禰宜範元相論父永元遺跡事

兄弟共帶文處分狀、一向可用後狀之由、内府被執申之、但有子細等、不違記盡、前狀後狀之用捨、猶可搜法道歟、無其科者、輙難棄前狀歟、可被下法家之由、人々被申之、猶可被下記錄所歟、

一八幡權別當敎清與右衞門尉盛範相論周防國得善保事、可被問國司之由、人々不同、

一賢算律師算明法橋申宿曜道事

宿曜秘法、慶算法印相承之、慶算傳二人之弟子、(良算、算明)良算傳聖算、聖算於旅館頓滅、今賢算(良算弟子)算明等致此相論、又良算實子幼童(陀羅尼丸)帶父讓、聖算實子幼童(有王丸)憑賢算之扶持、又望申之也、算明已傳受秘法了、(慶算註置其子細ナリ)然者爲器量之仁、可奉御祈歟、後傳陀羅尼丸歟之由、予發語、人々被同之、又可被召覽文書正文云々、條々大概如此、不見本文書者、後見難心得歟、然而篇目許也、早破也、

或以孔子被定之乎、

〔武政軌範 侍所沙汰篇〕一賦事

往古者訴人捧申狀之時、頭人加銘、直賦于奉行人之旨、見于古記、近代者開闔申沙汰之、加訴狀銘以折紙賦于寄人云々、

〔武政軌範 地方沙汰篇〕一賦事

訴狀加銘、頭人以折紙賦于當手寄人、

〔武政軌範 問注所沙汰篇〕一賦事

執事訴狀加銘、以折紙直賦于寄人、近代者內談之儀雖令斷絕、至紛失訴訟等者、當所執事書與吹擧狀哉、

〔武政軌範 政所沙汰篇〕一賦事

訴狀加銘、以執事之折紙賦于寄人之條、旣舊規也、而勢州貞國執事之時、至永享之末、依公儀不得寸暇、申子細於衆中、一旦以政所代(于時親當)折紙賦之、其以來任彼例用代之一行乎、近年止折紙、只加訴狀銘、旁以爲新儀者哉、

〔康富記〕嘉吉二年十月十三日庚子、管領畠山左衛門督入道(持國)雜訴之賦、自今日被出之、飯尾六郎左衛門尉、木澤左野等三人談合、書出目安之銘云々、每月六ヶ日(二七)可被出也、廿七日甲寅、管領畠山亭、諸人爲取雜訴賦群參、賦事一日不過廿通、於所望之仁者、及數百人之間、每日作鬮、廿、賦所望之訴人、兼令取之、充人書給賦云々、此四五日如此云々、此儀元來無事也、雖然爲訴人殊勝々々、

〔甲陽軍鑑 一品第一〕甲州法度之次第(○中略)

一公事出沙汰場(江)後、奉行人之外不可致披露、況於落著之儀哉、若又未出沙汰場(江)以前者、雖爲奉行人之外不及禁之歟、

一可被書同者署所事
一兩方所進證文等各可對緘目事
一同文書目錄巨細可被注進事
一庄園領家事
雖被載本寺社之名、不被注領家之間、聊涉不審、問注記端作雖不被出之、申詞之注ナンドニ可被書載之歟、
一可書正地頭交名事
其庄地頭某ト載天、不書正地頭之間、聊涉不審歟、地頭某代官某ト、正員代官共以可被書之矣、
一條々各別可立篇目事
一段内條々相交之間、御悤々之時、難得御心、一事一段仁天、兩方申狀詞、別々仁可被書加也、〇下略
〔建武以來追加〕御成敗條々（應永廿九七廿六　松田丹後入道常肯奉行）
一諸人訴訟事
於或年紀馳過、或不帶公驗者、不可有御裁許焉、
〔建武以來追加〕管領壁書
一諸人訴訟事（永享二九卅、正長二七廿二、被仰出之、）
以賦日限次第、奉行人可伺申之焉、
〔武政軌範（引付內談篇）〕一賦事
右者問注所執事、或政所執事奉行之條、見于古記、近代者爲管領之御沙汰哉、至賦式日令持參申狀具書於管領、渡于賦奉行、請取之、則伺申、無證文以下之相違者、加訴狀銘、相副吹擧之折紙、遣引付之開闔、則伺申頭人寄人賦之、奉行之仁體者、宜隨訴人之所望、不差申者、或爲頭人相計之、被定奉行人、

一諸司領幷僧座懸與行勅裁事、無左右不可被下之、
一屋地幷負物事、別當未補之時、於文殿可有其沙汰、
一勅問文書事、送年月之間、爲訴人有其愁歟、於向後者相○相恐違字誤廿ケ日可申所存、　已上
雜訴事堅可被守曆應法、可被存知由被仰下之狀如件、
十月三日　　權中納言忠光
四位大外記殿

〔吾妻鏡二十八〕寛喜四年○貞永元年五月十四日甲午、武州○北條泰時事政道給之餘、試御成敗之式條之由、日來內々有沙汰、今日已令始之給云云、偏所被仰合玄蕃允康連也、法橋圓全執筆、是關東諸人訴論事、兼日被定法、不幾之間、於時維亘兩段、儀不一揆、依之悶其法、爲斷濫訴之所起也、　八月十日、武州令造給御成敗式目被終篇、五十箇條也、今日以後、訴論是非固守此法、可被裁許之由被定云云、

〔御成敗式目追加〕御消息一通
雜務御成敗之間、同體なる事をも、つよきは申とをし、よはきはうづもるゝ樣に候を隨分精好せられ候へども、おのづから人にしたがうて輕重などの出來候はざらん爲に、かねて式目を作られ候、

〔吾妻鏡三十六〕寛元三年五月三日丙申、今日諸人訴訟事被定其法、所謂被仰下問注所之處、寄事於左右、當參之輩令難澀之條、奉行人催促、過五箇度者、慥隨被註進交名、可被處罪科也、亦奉行人訴人參對之時令不參記申詞者、可註申交名、同可被處其咎云云、

〔吾妻鏡四十一〕建長二年九月十日癸酉、諸人訴論御成敗事、專守式條、不可參差之由、今日被觸仰引付幷問注所政所云云、

〔吾妻鏡四十六〕建長八年○康元元年十二月廿日丁丑、就六波羅問注條々有被仰遣事、

日定ムル分者、

祖父　祖母　父母　子孫　兄弟　姉妹　聟　舅　伯叔父　甥　小舅　従母　兄弟　夫妻訴訟之時可退者也　烏帽子子等也、退座スル事モ最屓義アラセジ為、又自餘人意見憚アルガ故也、強退座、身ニアラチドモ人語ヒヲ得テ最屓スル事アリ、是政道ヲケガス基ヒ也、

〔吾妻鏡四十六〕建長八年〇康元元年十二月廿日丁丑、就六波羅問注條々有被仰遣事、〇中略

一以問注記下沙汰人、令勘理非之處、其數輩之中、於縁者者令起其座畢、而其外或號先論人、又稱前縁者、嫌申沙汰人之事、御評定之時、用捨何樣被定候覽、不審事候之間、內々尋申候、委可蒙仰候焉、

〔師守記〕貞治元年十一月廿九日庚午、越訴以前、中御門大納言著横敷、招明宗去廿□□三位雜掌申就眞桑庄預所職事、量實退座、□□被仰勅答被返下申狀、明宗賜申狀歸座、召仰雜掌了、勅答云、稱可退座仁一人相交、申亂當所注進之條不可然歟、量實退座事、尤兼日可申所存歟、沙汰落居之後、令申非御沙汰之限之趣也、此子細注付庭中目六後、□□

〔園太暦〕康永三年閏二月一日、今日仙洞評定也、依兼日催、相扶風咳參院、〇註略　美和庄金原法花堂以下、幷檟石島等事、可有沙汰云々、美和庄事、覺深法印領主也、仍予退座事也、

〔後愚昧記〕應安四年、雜訴條々一通、如此可被存知之由被仰下之狀如件、

四位大外記殿

一任官敍位雜訴等可被停止、近習內奏、女房口入事、

一近習男女於奏達者、雖恐時儀、以私會釋受取事、

一任官敍位等、以女房被傳仰傳奏職事條、一切可被停止事、

以上堅可被守延慶法

一諸人或號闕所、或稱無主、强賜他人知行地、可向後一切被停止、若不隨此制者、可被斷朝恩之望、

退座

凡奉行人は、天下の公事を執行ふ職たるによりて、政道の善惡、もこゝして是によるべし、いかにも心正直にして、私を不存、黒白をわきまへ、文筆に達し、理非にまかせて、贔屓をいたさゞらんを、よき奉行とは稱すべし、是によりてあやまりあらん奉行人をば、ながくめしつかはるべからざるよし、貞永の式目にのせられ侍り、兩方の支證をとり合せ、究決せられて、理有方へ付られたるを、もとの給人として、難澁をいたさんをば、別て罪科に處せらるべし、いはんや奉行人として存知ながら、とりあげ披露せんは、大なる越度なるべし、もし又奉行人として、贔屓をいたし、かたてうちになされたる公事たらば、越訴を立て申さん事、其咎有べからず、其方の奉行たる人、傍輩にかたらはされ、媚をなして理をまげんは、かへすがへす口惜かるべし、御法にも、奉行をさしをきて、別人に付て、訴訟をいたす事をば停止せらるといへども、時にしたがひ、事によるべし、いかにも內奏強縁をもてもなげき申べきことなるべし、又諸人の愁は緩怠に過たるはなし、むなしく廿ケ日を過ば、庭中を出すべき制法ありといへども、理運の訴訟にいたりては、いかにも不日にこれを申さたすべし、いはんや一所懸命の地、人にさまたげられん輩においては、明日を期せざる存念也、いかでか慈悲の心をもてあはれみをたれざらんや、所詮親疎を論せず、理非にまかせて、わたくしの賄賂にふけらず、公方の理運にならざる樣に正路に申さたせん、奉行人においては、別て臨時の勸賞もをこなはれて、後昆の忠勤をすゝめらるべきものをや、

〔吾妻鏡三十三〕延應二年(○仁治元年)四月廿五日己未、被評定之退座分限、所謂祖父母、養父母、養子孫、相舅、伯叔父、甥、從父兄弟、小舅夫妻、烏帽子子、聟等、

〔塵添壒囊抄三〕退座人數事(付定時代事不可有贔屓事)

沙汰ヲ行ニ付テ、タイザノ意見ト云ハ何事ゾ、 退座トハザヲシリゾク也、朝庭ノ舊儀イカヾアリケン、四條院御宇、鎌倉正二位權大納言賴經卿時、平泰時等評定トシテ延應二年四月廿五

當の奉行と、見證の奉行とをわかちて、おのづから其職掌はありしなるべし、

〔東寺百合古文書二ノ二十六至五十六〕今日對決事、證人。奉。行。歡樂候條、延引候、定日には可申上候、謹言、

五月○永正十四年十一日　英致　華押

東寺雜掌　基雄　華押

〔吾妻鏡十六〕建久十年○正治元年四月十二日癸酉、諸訴論事、羽林○源頼家直令決斷給之條、可令停止之、於向後大少事、北條殿○時政、同四郎主○義時、并兵庫頭廣元朝臣、大夫屬入道善信、掃部頭親能○在京、三浦介義澄、八田右衞門尉知家、和田左衞門尉義盛、比企右衞門尉能員、藤九郎入道蓮西、足立左衞門尉遠元、梶原平三景時、民部大夫行政等、加。談。合。、可令計。成。敗。、其外之輩、無左右不可執申訴訟事之旨被定之云云、

〔吾妻鏡二十九〕貞永二年○天福元年十一月十日、今日有評議、及晩事訖、武州○北條泰時令還御亭給之後、招大和守倫重、玄蕃允康連、民部丞業時等、賜盃酒、公事之間致勤厚、殊神妙之由褒美給云云、是近日雜訴事、相積之間、連々有評議、毎度武州早參給、人々面々欲倒衣奉先立之、仍此三人令談合曰、夜中參候于評定所、至翌朝奉待彼御參、事既及五六箇度之間、預此御感云云、

〔吾妻鏡四十〕建長二年九月十八日辛巳、今日雜人訴訟事、被糺決之時、爲僻事者、以十貫可被充橋用途之由、兼召置請文、可有沙汰之由被定云云、

〔建内記〕嘉吉三年三月十七日癸酉、管。領。自今日雜務沙汰可嚴重云々、正月十一日評定始、去月十七日沙汰始、如式目、其後依賀州守護物忩之儀、于今無雜訴、諸人嗟歎候處、政道再興、珍重々々、

〔樵談治要〕一訴訟の奉行人其仁を選ばるべき事

本奉行。諏信州
合奉行。治河

〔武家名目抄職名二十四〕本奉行　合奉行

按、本奉行、合奉行は、もと一事沙汰の上にてよべる稱呼なれば、全く定まりたる職名にはあらず、鎌倉殿武家中興の初、訴訟の事あるに臨みて、家司の內より、專當の奉行を定め、其沙汰を致さしむ、これいはゆる本奉行なり、又政所寄人の內より一人を以て其副たらしむ、これを合奉行といふ、さればいづれも常日の所職にてはなかりしを、引付衆を置れし後、其衆を以て本奉行に定むる事は、臨時の職掌にて、初の格に異ならざりけれど、合奉行に至ては寄人の內より常に定置る、例となりて、おのづから職名の如くなりしなり、(本奉行を常に設置ざりしは、誰にもあれ引付衆たる者は、公事を沙汰する職掌たればなり、)但訴訟沙汰の外に、事ありて定めらるゝ兩奉行は、如此例に准せず、事の大小に從て、人數の多少もあり、又門地階級にもかゝはらずして、命せらるればなり、

〔政所內評定記錄〕四月○寬正四年十五日在盛勘之內談○中略

披露

一對決四月廿一日如內談、兼日證人奉行事、以公人相觸、

〔武家名目抄職名二十四〕證人奉行

按、證人奉行は、鎌倉殿の時に所見なければ、きはめて室町家の世に設けたる職號と見ゆ、もとより臨時の所職にして、常日設置るゝものにあらず、何事にもあれ訴論人等對決すべき事あれば、本奉行、合行奉の外、更に他の奉行、二人もしくは三人をして沙汰の始末を見聞せしむ、證人奉行といふは即これなり、凡其職分、且は對決の是非曲直を見證し、且は專當の奉行に偏頗なき旨を證すべきつかさなれば、ひたすら證人を以て名とせしなり、(鎌倉の世に、其稱聞えざれど、列座の奉行人に、專

按○中略凡公事奉行人のつかさどる所、一事にとゞまらざるが故に、廣く公事を以て稱せるなり、然れども正しき職名ならざるに依て、常にはひとへに奉行人とのみいへり、後評定引付の兩衆を設け、政所問注所の兩寄人を置る、に及て、其輩ひとしく公事を奉行す、故に奉行の員倍増せり、其内より諸事の奉行に定めらる、時、或は恩澤奉行、又は安堵奉行、問注奉行等の稱あり、其以下の諸奉行皆是なり、○中略なべて公事執行の內に、訴訟裁判の事は、人庶の浮沈にかかり、天下の瞻望する所にして、政務の第一なれば、俗間に公事といへるは、必訴訟の事に限れる辭の如くなりゆきければ、足利殿の時には、奉行人の事を、公事奉行御物沙汰衆などいふ辭は絶たり、然れども公務を執行することは、皆鎌倉の例に倣へり、鎌倉の世に訴論人を問注する者をば問注奉行といふ、足利殿にいたりては、其さなへも絶たり、猶問注奉行條に注せり、かく公事といふことの訴訟に限れることゝなりしより、大名諸家にて、公事奉行、公事方など稱する職掌は、すべて訴訟裁判の職となれり、

〔甲陽軍鑑八品第十七〕公。事。奉。行。

一今福靜閑　一武藤三河守　一櫻井安藝守

右三奉行　用周公吐握

御陣留主には、御藏の前衆目安をうけとり、目安箱に入置也、

〔御成敗式目〕一闕本。奉。行。人。付別人企訴訟事

右闕本奉行人、更付別人、內々企訴訟之間、參差之沙汰不慮而出來歟、

〔蜷川親元記〕一六月○寛正四年廿六日　內談

一河道濱平三郎申間事

市座輩、自往古无商賣之政、勿論之由、小串次郎右衛門、南岸坊注進之上者、任舊例可致沙汰、被成奉書、

御評定日々奏事結番次第不同
一番三日　十三日　廿三日
尾張入道見西　越前前司時廣　宮內權大輔時秀　伊賀入道道圓　和泉入道行空
二番六日　十六日　廿六日
越後守實時　中務權大輔教時　出羽入道道空　信濃判官入道行一　對馬前司倫長
三番十日　廿日　晦日
秋田城介泰盛　縫殿頭師連　小卿入道心蓮　伊勢入道行願
一番衆一日　十五日　二番衆五日　廿一日　三番衆十一日　廿五日
政所問注所及執事、每日可ㇾ令ㇾ參也、且自ㇾ問注所ㇾ每日可ㇾ差ㇾ進文士二人ㇾ也、
〔吾妻鏡十一〕建久二年正月十五日甲子、被ㇾ行ㇾ政所吉書始、前々諸家人浴ㇾ恩澤ㇾ之時、或被ㇾ載ㇾ御判ㇾ、或被ㇾ用ㇾ奉書ㇾ、而今令ㇾ備ㇾ羽林上將〇源賴朝給之間、有ㇾ沙汰ㇾ召ㇾ返彼狀ㇾ可ㇾ被ㇾ成ㇾ改于家御下文ㇾ旨被ㇾ定云云、
政所
別。當。
前因播守平朝臣廣元〇中略
公。事。奉。行。人。
前掃部頭藤原朝臣親能　筑後權守同朝臣俊兼
前隼人佐三善朝臣康淸　文章生同朝臣宣衡
民部丞平朝臣盛時　左京進中原朝臣仲業
前豐前介淸原眞人實俊
〔武家名目抄職名二十三〕公事奉行人又稱ニ御物沙汰衆ー

〔沙汰未練書〕一所務沙汰者　所領之田畠下地相論事也、(中略)開闔執筆者奉行中之宿老、引付細々事記錄仁也、公文トモ云也、

〔武家名目抄(職名十一)〕引付衆

按、引付衆は、評定衆輔助の職にして、訴訟はさらなり、其餘の公事、なべてうけ給はり沙汰せる重職なれば、評定衆にさしつぎて、諸奉行の職を帶せるならひなり、これを公家の官職に比するに、參議もしくは左右辨官の職掌に當れり、もと引付といへるは、記錄の名よりいでし名目なり、すべて引付といふ記錄に、さまざまあり、政所にては訴訟の顚末を注記し、其訴を沙汰せる奉行人の姓名を傍書したる記錄をなづけて賦銘引付といふ、

〔吾妻鏡(四十)〕建長二年四月二日丁酉、諸人訴論事、於引付勘決文書理非之間、加了見之處、旨趣爲分明者、任先規不能對決、又引付事、巳剋以前可始行之、云頭人、云奉行人、莫及遲參、且可進覽時付著到之由、被觸仰三方引付云云、秋田城介爲奉行云云、

〔關東評定傳〕文永元年(甲子)

評定衆

前武藏守平朝直(一番引付頭、五月三日卒、)(中略)

前尾張守平時章法師(法名見西、二番引付頭、六月十六日爲一番頭、)(此間十二人略之)

引付衆

中務權大輔平敎時

縫殿頭中原師連(十一月加評定衆、)(以下七人略之)

〔吾妻鏡(五十二)〕文永三年三月六日己亥、今曉木工權頭親家、爲內々御使上洛、又諸人訴論事被止引付沙汰、問注所召整訴陳狀、可勘申是非也、前々被記申詞之間、爲被賦九人評定衆所被結番也、

〔吾妻鏡十九〕承元四年十二月廿一日乙亥、今日爲伊賀二郎宗光之奉、中民部大夫仲業可相兼問注所寄人之由被仰含云云、是掃部頭能親入道家人也、依右筆藝被召仕云云、

〔太田康有記〕建治三年八月廿九日、自山內殿（北條時宗）被召之間、馳參之處、召御前被仰云、武藏守（平義政）可爲一番引付頭、武藏前司（平宣時）可爲二番頭、越後守（平時業）可爲三番頭、早以此旨可觸仰彼人々、且問注所公人不足云々、先日所擧申之富來十郎光行、山名彌太郎行佐、藤田左衞門四郎行盛、淸式部四郎職定、皆吉四郎文盛、可召加寄人、次山名二郎太郎直康、飯泉兵衞二郎祐光、岩間左衞門太郎行重、可勤合奉行役之由、可召仰云々、退出之後、及秉燭之期、向武州前武州亭、觸申仰趣之處、各領狀了、
九月四日、依召參山內殿之處、以平金吾被召御前、任仰以安富民部三郎入道、島田七郎、齋藤七郎兵衞尉、長田新左衞門尉、（已上政所公人）富來十郎、（元合奉行）飽田三郎左衞門入道、注入引付衆了、次武州一番頭、前武州二番頭、領狀了言上之處、仰云武州者元三番頭也、相率三番衆可轉一番也、越州者元一番也、其衆相共可遷三番、可相觸其旨云々、

〔武政軌範（問注所沙汰篇）〕一執事仁體事
評定衆中被補之、先代以來、至當御代、多分町野大田族任之、是故善家右筆之輩、以當所稱本所乎、
他家人亦任此職之例在之、

〔沙汰未練書〕一賦奉行者
最初、本解狀上奉行所也、關東、六波羅在之、

〔關東評定傳〕建長元年十二月、始引付、諸人訴訟不事行故也、

〔沙汰未練書〕一引付沙汰事
頭人、衆中、皆參之時、於引付御座之當奉行人、召合訴論人、遂問答、其後兩方被立御座、衆中一同有評議、勘錄是非、以之爲引付沙汰落居、

幕府吏員

〔師守記〕貞治六年五月廿六日辛丑

記錄所

定寄人結番事

一番 一日十六日 六日廿一日 十一日廿六日
長宗朝臣奉　師茂朝臣奉　師香　光夏奉

二番 二日十七日 七日廿二日 十二日廿七日
宣方　時親朝臣　章世

三番 三日十八日 八日廿三日 十三日廿八日
資康　在胤朝臣　宗季

四番 四日十九日 九日廿四日 十四日廿九日
仲光　師連　明宗

五番 五日廿日 十日廿五日 十五日卅日
宗顯　師守奉　兼治奉

右守結番次第、毎日無懈怠可被祗候當所、於議定一日廿一日 十一日 庭中六日廿六日 十六日 越訴九日十九日 廿九日等日者、可有皆參之由所被仰下也、各存其旨可被參勤之狀所定如件、

貞治六年五月十九日

〔吾妻鏡十一〕建久二年正月十五日甲子、被行政所吉書始、〇中略
問注所執事　中宮大夫屬三善康信法師法名善信

〇按ズルニ、是ヨリ前元暦元年十月二十日、三善善信ヲシテ訴論ノ事ヲ問注セシムルコトアリ前條裁判所ノ下ニ吾妻鏡ヲ引ケリ、

九條民部卿光經卿　中御門前宰相經宣卿　吉田前宰相資房卿　光守朝臣高倉左少辨略○中

八番西海道筑前、筑後、豐前、豐後、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩、壹岐、對馬、

十日、十一日、十九日、庭中廿日、廿一日、廿九日、

侍從中納言公明卿　四條前中納言資○隆　堀河前宰相光繼卿　範國藏人右衞門佐略、下

〔建武年間記〕記錄所被ㇾ定下寄人結番事。

一番一日、二日、十一日、十二日、廿一日、廿二日、

右少辨正經朝臣　左大史冬直宿禰　新大外記師治　佐渡判官代秀清

六位史清原康基

二番三日、四日、十三日、十四日、廿三日、廿四日、

權右中辨實夏朝臣　清大外記賴元　大夫判官明成　時知

三番五日、六日、十五日、十六日、廿五日、廿六日、

宣明朝臣　匡遠　兵衞大夫判官職政　土佐守兼光

四番七日、八日、十七日、十八日、廿七日、廿八日、

光守朝臣　大外記師利　章香　正成

五番九日、十日、十九日、廿日、廿九日、卅日、

藏人右少辨藤長　大外記師右　大判事明清　伯耆守長年

右各守ㇾ結番、毎日無ㇾ懈怠ㇾ可ㇾ祗ㇾ候兩所、於ㇾ評定一日、七日、十一日、十七日、廿一日、廿六日、庭中三、十三、廿三、越訴八日、十八日、廿八日、對決九日、十九日、廿九日、等日ㇾ者、可ㇾ皆ㇾ參之由所ㇾ被ㇾ定也、各可ㇾ被ㇾ存ㇾ知之狀如ㇾ件、

建武二年三月十七日

記錄所庭中事、五畿七道被ㇾ置ㇾ式日ㇾ了、一□三ヶ日也

今出河前右大臣兼季公　別當藤房卿　前源宰相國實卿　頭宮內卿經季朝臣　五條大外記賴元　正親町大夫判官章有
佐渡大夫判官秀清　三條少外記清原康基　宇都宮兵部少輔公綱　土佐守兼光　宮部大舍人頭信連　河內大夫判官楠木正成　飯尾彥六左衞門入道覺民
三宮孫四郎入道道守

二番東海道伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、伊豆、甲斐、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、
一日庭中二日、三日、十二日、十三日、十六日、廿二日、廿三日、越訴隔月
久我前右大臣長通公　洞院左衞門督實世卿　右大辨宰相清忠卿　左中辨宣明朝臣〇中略
三番東山道近江、美濃、飛驒、信濃、上野、下野、陸奧、出羽、
三日、四日、八日、庭中十三日、十四日、廿三日、廿四日、廿五日、越訴隔月
洞院內大臣公賢公　堀河大納言具親卿　中御門前中納言冬定卿　右大辨宰相實治卿〇中略
四番北陸道若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡、
四日、五日、六日、庭中十四日、十五日、十六日、廿四日、廿五日、越訴隔月
吉田儀同三司定房卿　前藤中納言實任卿　日野前宰相資明卿　甘露寺右少辨藤長〇中略
五番山陰道丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、隱岐、石見、
六日、七日、十五日、庭中十二日、十七日、
萬里小路一位宣房卿　坊城大貳經顯卿　前宮內卿範高卿　葉室新宰相長光朝臣〇中略
六番山陽道播磨、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、
七日、八日、九日、庭中十七日、十八日、廿六日、廿七日、廿八日、越訴隔月
葉室前大納言長隆卿　押小路大藏卿惟繼卿　六條前平宰相宗經卿　式部權大輔在登〇中略
七番南海道紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊豫、土佐、
九日、十日、十一日、庭中十九日、廿日、廿八日、

禰量實　主稅頭中原朝臣師守　博士清原眞人宗季　大判事坂上大宿禰明宗

貞治元年十一月十一日

〔夕拜備急至要抄下〕神宮雜訴上卿第沙汰

文治二年

上卿　權大納言宗家

寄人　大外記清原賴業　大外記中原師尙　大炊頭中原師綱　左大史小槻廣房　明法博士中原章員〇員一本作貞

建久四年

上卿　內大臣中山

寄人　前隱岐守中原師尙　筭博士三善師衡　左大史小槻隆職　大外記中原師直　河內守小槻廣房　大外記清原良業　散位中原周業　明法博士中原明基

今度宣下寄人方宣下仰詞同前

筭博士三善朝臣康衡　修理東大寺大佛長官左大史兼備前權介小槻宿禰秀氏　助敎中原朝臣師種　掃部頭兼助敎中原師宗　造酒正兼直講中原師多　修理右宮城判官主殿頭兼左大史小槻宿禰顯泰　大判事兼明法博士左衛門大尉尾張介中原朝臣章澄　防鴨河判官明法博士兼左衛門少尉中原朝臣明盛　左衛門少尉中原章繼

左中辨源朝臣雅憲傳宣、右大臣宣、奉勅、件等人、宜爲伊勢二所大神宮雜訴評定寄人者、

弘安四年九月十九日　左大史小槻宿禰判

〔雜訴決斷所結番交名〕建武元八

一番五畿內山城、大和、河內、和泉、攝津、

一日、二日、五日、庭中十一日、十二日、十三日、廿二日、廿五日、越訴隔月

にたえたる器量をえらびて補せらるゝ事なり、

〔式目抄四〕記錄所ニハ、上卿、辨、開闔、寄人アリ、

〔師守記〕貞治四年六月五日壬辰、今日法皇寺長老來臨被語云、中御門大納言宣明卿者、三日俄薨之間、爲訪向彼第云々、此事更無才學、家君〇右師同前、仍今朝卜形被載之、以外之內痛也云々、彼亞相當時傳奏議定衆記錄所上卿也、大納言兩三年未申拜賀、然而如記錄所幷雜訴連々出仕、隨分重臣也、可哀、

〔師守記〕貞治元年十一月十一日壬子、今朝家君以使者今日雜訴沙汰延否事、被尋問頭右大辨資定朝臣之處一定云々、

午斜、家君著朝衣(玉帶、今季初度、)有同車、予衣冠上紙、參記錄所給、先之大判事明宗、大儒宗季未參仕、未敷座之間、居板雜談、小時大夫史量實參仕、令敷座、仍面々著座、寄人四位大外記家君、奥座、大夫史量實(端座)開闔主税頭予(衣冠、上紙、端座、量實次、)大博士宗季、(衣冠、上紙、奥座、家君次、)大判事明宗(衣冠、端座、予次、)等參仕、明宗直著到曰、面々自上首書名字、雜仕被傳之、(副筆)開闔取息、著到不持參之間、以美紙一枚書之、以外也、依無庭中訴人、傳奏不及著座、雜訴沙汰事了之後、左大辨宰相忠光卿參著、當所眞桑庄預所職事對決、其後面々評定、于時酉斜見參、明日可書賜之由開闔示明宗了、已及黃昏之故也、〇中略

眞桑庄預所職事對決之時、藏人右中辨行知不著座、

著到書樣

十一月

十一日

師茂　量實　師守　宗季　明宗

見參書樣、大辨宰相着座之間書ニ立紙ハ先例也、

見參

參議左大辨藤原朝臣忠光　右中辨平朝臣行知　大外記中原朝臣師茂　左大史小槻宿

朝廷吏員

或抄問注トハ、問注所ノ事也、トヒシルストヨム、訴人ト論人ノ申樣ヲトヒシルス所也、昔關東將軍ノ御時ハ、町家ガ問注所也、京都ニハ京極、在京時ハ多賀豊後守、久シク奉行處タリ、問注處モ、奉行處モ、異名マデ也、同意タリ、問注所ト云ニテハ、奉行人六人集テ、談合スル事ヲ問注所聞ト云、

〔吾妻鏡五十二〕文永三年三月六日己亥、諸人訴論事、被止引付沙汰、問注所召訴陳狀、可勘申是非也、○下略

〔關東評定傳〕文永三年三月六日、止三方引付、重事直聽斷、細事被付問注所、

〔庭訓往來〕問注所者、永代沽券安堵、年紀放券奴婢雜人券契和與狀負累證文等之謀實糺明之、管領寄人右筆奉行人等評判也、

〔庭訓往來〕抑洛陽靜謐、田舍無爲、貴邊御本望也、○中略引付問注所上裁勘判之體、異見議定之趣、評定衆以下可注給之、御沙汰之法、所務之規式、雜務之流例、下知成敗、傍例納法律令、武家相違、存知仕度候、

〔武政軌範問注所沙汰篇〕

一條目事

當所者爲武家之記錄所、仍古今之記錄、細麤之證劵等、被納置于此文庫云々、是故文書紕繆、謀實論、紛失證文等、於當所被評判之、先代始比者將軍家年中之家務以下、有其沙汰、中比以來爲政所之沙汰乎、古者諸方賦亦爲當所被奉行之云々、

○按ズルニ、此他金穀ノ貸借、田畠ノ賣買等ニ關スル事ハ、政所ニ於テ掌リ、强竊盜鬪傷等ニ關スル事ハ、侍所ニ於テ掌ル、官位部ニ各、其篇アリテ之ヲ具ス、

〔百寮訓要抄〕記錄所　禁中にて諸人の訴訟を判斷せらるゝ所なり、後三條院延久に殊に興行ありて、天下の政道をなほされし時、才人をえらびて寄人におかれしなり、上卿、辨、寄人など、皆世務

一訴論人參內事
記錄所、決斷所沙汰已被定其道々擧、諸國輩猥不可參禁中、於五畿內訴論人者、相觸于押小路京極役所、可參入、役人又記置面々名字、可進著到於記錄所決斷所、自餘道々訴論人事、子細同前、
〔薩藩舊記 前集十二 比志島氏文書〕薩摩國滿家院內比志島彥太郞義範謹言上
欲且達天聽任善政糺賜本物返地事
右壹所者、義範重代相傳之所領也、○中略 早任證例可知行之旨、下預御牒、爲備向後龜鏡、恐々言上□
如件、
建武元年五月日
撿非違使廳下　薩摩國衙
當國滿家院內比志島彥太郞義範申、山口田壹町幷竹中○中下恐脱量字 敷壹所本物返事、
右訴狀如此、早令尋成敗、有子細者可被注進者、
建武元年五月六日　左衞門權少尉□□花押
〔沙汰未練書〕一問注所者　問注諸方沙汰所也 關東有之 六波羅無之
〔吾妻鏡 三〕壽永三年○元暦元年 十月廿日乙亥、諸人訴論對決事、相具俊兼盛時等召決之、且令注其詞、可申沙汰之由被仰大夫入道善信云云、仍就御亭東面廂二箇間爲其所、號問注所、打額云云、
〔吾妻鏡 十六〕建久十年○正治元年 四月一日壬戌、被建問注所於郭外、以大夫屬入道善信爲執事、今日始有其沙汰、是故將軍御時、營中就一所被召決訴論人之間、諸人群集成鼓騷、現無禮之條、頗爲狼藉之基、於他所可行此儀歟之由內々有評議之處、熊谷與久下境相論事對決之日、直實於西侍除髮髻之後、永被停止御所中之儀、以善信家爲其所、今又被新造別郭云云、
〔式目抄 四〕一遂問注輩不相待御成敗執進權門書狀事

是は先代引付の沙汰の立つ所也、大議にをいては、記錄所にをいて裁許あり、〇中略古の興廢を改めて、今の例は昔の新儀なり、朕が新儀は未來の先例たるべしとて、新なる勅裁漸々きこえけり、

〔諸家文書纂十〕雜訴決斷所牒　豐後國衙

資親申當國野上村堤右田兩村地頭職事

牒、爲糺決、來十一月廿日以前可參洛之由令下知堤六郎入道道祐可申散狀、仍牒送如件、以牒、

建武元年九月廿九日　右衞門權少尉三善朝臣花押

前筑後守藤原朝臣花押

右衞門少尉中原朝臣花押

〔建武年間記〕於決斷所可有沙汰條々

一所務濫妨之事

一領家地頭所務相論、幷年貢難濟以下之事、

一下職以下開發餘流、幷帶代々上裁歎訴之事、自餘者可爲本所成敗、

一本領安堵事、當所幷記錄所可任訴人之心、

一諸國國司守護注進事

一關東十ヶ國成敗事

一所務相論、幷年貢以下沙汰、一向可有成敗事、

一所領幷遺跡相論、異重事者、執整訴陳可爲注進事、

一訴論人、或在京、或在國者、就訴人之在所可有沙汰事、

已上被押決斷所也

〔建武年間記〕陣中法條々

寳治二年十一月八日　明法博士兼右衛門少尉中原朝臣章行

已上公文職本所進止所見了

〔西大寺文書二〕文殿

秋篠寺越訴申山池等事

右彼寺越訴之趣雖多子細、件山池等、秋篠寺建立以前、爲西大寺領之條、國印流記帳分明也、宣旨等雖無正文、彼流記何不用證文哉、然者就大治宣旨、先度勅裁無相違矣、仍言上如件、

德治二年十一月八日

少判事中原章房　少判事中原朝臣章右　左衛門少尉中原朝臣明治　左衛門少尉中原朝臣章躬　左衛門少尉中原朝臣章任　明法博士中原朝臣章文　大判事中原朝臣明澄　散位清原眞人俊宣　主計權助中原朝臣師右

著座公卿

法性寺前中納言雅藤　別當定資　左大辨宰相宣房　一同被申云、文殿寄人申狀無相違、以前勅裁不依違矣、卽左大辨宰相奏聞之處、秋篠寺之越訴可寄置之旨被仰下之、其由被書付文殿畢、

〔師守記〕曆應三年二月廿四日丁未、今日家君〇師右令參文殿給、依庭中也、著座按察黃門經顯、大宮黃門隆蔭、大藏卿雅仲、前平宰相定經等卿云々、衆中、家君、中大外記師利、大夫史匡遠、助敎師治、大判事明成、博士大夫判官章有、佐渡大夫判官秀淸、高倉大夫判官章世等參仕云々、故光福寺內府遺跡事有沙汰云々、

〔梅松論上〕いつしか諸國に國司守護を定、卿相雲客各其位階に登りし體、實に目出度かりし善政なり、武家楠、伯耆守〇名和赤松以下、山陽山陰兩道の輩、朝恩に誇る事、傍若無人ともいつゝべし、御聖斷の趣、五畿七道八番にわけられ、卿相を以頭人として、斷決所〇斷決所恐決斷所誤と號て、新に造らる、

條々、執職事目錄、師中納言〇藤原經房被進之、今日所到來也、〇中略

一記。錄。所。事

先日被計申之時、被仰攝政〇藤原兼實訖、諸方訴訟尤可被決斷歟、重可有急沙汰之由被申訖、

〔玉海〕文治三年二月廿八日庚子、召定經仰來月一日直物事可申沙汰之由、本親經奉行也而依穢氣改仰之、此日始被置記。錄。所。、以閑院亭中門南內侍所南廊爲其所、執權辨定長也、親經依觸穢不出仕、寄人十二人參入、奉行職事定經也、仰詞二通先內覽之、

一通、諸司諸國幷諸人訴訟、及庄園券契於記錄所宜令勘決理非、

一通、年中式日、公事用途、宜令記錄所勘申式數、

〔東寺百合古文書七十二〕文。殿。勘狀寶治二公文式事、寺家進止得理、

寶治二年十一月八日文殿勘狀　明法博士章行自筆

東寺中綱與釆女播磨相論當寺領攝津國垂水庄公文職事

如釆女播磨申狀者、件公文職者友光相傳所帶也、有去壽永元年相副代々御下文、讓與僧憲扶、播磨舍弟憲扶又讓賜播磨、於代官者補任友光、致沙汰之處、今年被改易畢云々、

如中綱等申狀者、件職、全非重代相傳之職、代々爲預所之進止、被成替者先例也、前任之輩稱相傳、更不及訴訟、嘉祿三年、爲宰相法橋預所之時、成替數輩之間、依友光望申、改易信兼、令補其職云々、且建久以後、爲預所之進止、令改補之輩自久恒至沙彌阿乘十五人云、就之引見播磨所進證文之處、嘉祿三年六月廿日、友光始預補任之下文、其時無相傳之子細、又建久以後、十五人改補之條、友光頗不申子細歟、

中綱等申狀、似得其實、凡如此之職者、公廉之寄也、被擧用公平之者事、可爲寺家之成敗歟、仍勘注如件、

名稱　裁判所

聽訟

鎌倉室町時代ノ聽訟ハ、朝廷ニ於テハ記錄所、文殿アリテ之ヲ聽キ、幕府ニ於テハ問注所ヲ主トシテ引付、政所、侍所、地方等ニテモ之ヲ聽ケリ、建武中興ノ朝廷ハ、大業未ダ全ク擧ラザリシカドモ、首トシテ決斷所ヲ置キテ、又訴訟ヲ聽カシメ給フ、

當時法吏ニハ退座ノ法アリ、嫌疑ヲ避ケ情弊ヲ防グ所以ニシテ、祖父母、養父母ノ訴訟ニハ、之ガ子孫タル吏ハ、其評定ノ席ニ列シテ、之ヲ聽斷スルヲ得ザルナリ、

訴訟ニハ評定アリ、評定トハ衆議ヲ以テ決定スルコトニテ、朝廷ニテハ或ハ御前ニ於テスルアリ、幕府ニテハ將軍ノ前ニ於テスルアリ、又內談アリ、內評定アリ、內談ハ引付ニ於テスルノ稱ニシテ、內評定ハ問注所、政所ニ於テスルナリ、而シテ內ト云フハ將軍座前ノ評定ニ對シテ云フナリ、皆幕府ノ事ニシテ、並ニ定日アリテ之ヲ行フ、是ヲ式日ト云フ、

訴訟ノ曲直ハ原被兩造ヲ召シテ對決セシムルアリ、又勅裁及ビ將軍ノ親裁ヲ仰グアリ、而シテ對決ニモ將軍座前對決、問注所對決、及ビ政所對決等アリ、

訴訟ニハ文書物品ニ限ラズ、之ガ證憑ニ供スベキモノアリ、或ハ訴訟人ヨリ之ヲ法廷ニ出シ、或ハ法吏ヨリ之ヲ徵ス、而レドモ其證憑タル詐欺ヲ挾ムモノ每ニ多クシテ、決シ難キアリ、是ニ於テ誓ヲ立テヽ之ヲ證スルアリ、是ヲ起請ト云フ、起請ニハ起證文、湯起請等アリ、

當時息訟ヲ謂ヒテ、和平又ハ和談ト云フ、而シテ和與ト云フハ、領地田園ニ係レル息訟ヲ云フ、

〔易林本節用集 左言辭〕裁許(サイキョ)　裁斷(ダン)　裁判(ハン)

〔吾妻鏡 六〕文治二年六月九日乙卯、去四月之比、政道事殊可ㇾ致ㇾ興ㇾ行之趣、付ㇾ議卿ㇾ令ㇾ奏聞ㇾ給了、勅答之

られ候小殿と申强盜こそ思ふやう有て參て候へ、はやくうけとらせ給へといふ、章久まことしからず覺ながら、おろ〳〵子細をとへば、小殿いはく、御不審候事、尤其いはれ候へども、先思召候へ、たゞのしら人が、强盜とみづから名乘て、命をまかせ參らせて何のせんか候べきといへば、實も理にて、委く問答するに、小殿が云やう、年ごろ西國の方にて海賊をし、東國にては山だちをし、京都にては强盜をし、邊土にてはひきはぎをして過候つる也、かゝる重罪の身を受候ぬれば、此世にても安き心候はず、夜も安くねず、晝も心打くつろぐ事なし、世のおそろしく人のつゝましき事、かなしき苦患にて候也、扨も一期事なくて有べき身にても候はず、つゐには定てからめ出されて、はぢをさらし、かなしき目をこそ見候はんずれ、年來の罪をも報はんが爲に、頭をのべて參候といへば、章久あはれに覺て、左右なくも受取べけれ共、其儀なくして答けるは、今は使廳の廳務停止したる也、かつは聞も及らん、年來作置る棲もみな打破て、佛殿に作なほして、一向廳務をとゞめて、後世の事をいとなむなり、德大寺殿に祗候の源判官康仲こそ、當時ことに高名を立んとする人なれ、かしこに行て此子細をいはゞ、定て悦思はんずらんといへば、左候はゞ御文を給はり候へ、源判官殿へ參候はんといへば、それはやすき事なりとて、文書とらせければ、則持て康仲がもとへ行て、章久がもとにて、いひつるがごとくにいひて、若萬が一、命をいけて召もつかはれ候はゞ、別の奉公には、餘黨其數おほく候を、一々にからめさせ參らせんといへば、康仲與有事に思ひて、受取てつかひけり、給物三十石をとらせて、朝夕めしつかふに、事にをきてかひがひ敷、大切の事共多かりければ、大納言家に、此樣を内々申入たりけるに、いと興有事にこそ、左樣のものは、中々さるかたもあるなり、我にえさせよ、召つかはんと仰られければ、參らせてけり、

永祿七年甲子七月十四日の夜、太郎義信公、長坂源五郎御供にて、燈籠御見物にことよせて御城を御出あり、忍びて飯富兵部處へ御座なされ候故、亂鳥まで談合ありたる樣子を不審に存知、奉行御中間頭荻原豐前、信玄公へ申上る、それより不審をたてられ、太郎義信公、逆心の事あらはれて、翌年丑の年、飯富兵部、長坂源五郎、兩人御成敗也、太郎義信公を籠へ入まいらせられ、其上義信衆御成敗、或御改易也、御もりの曾禰周防を、則荻原豐前に仰付られ、はなし討に討也、如此御父子の間にて、不審立る事、少かくしなく、目付横目の言上いたすは、何の國にても有間敷事也、是たゞ一偏に信玄公の、人を能召仕給ひ、よく目利なされて、よくさいはいを取、よく仕置の法度、むるいなるゆへならん、

讒告

〔尺素往來〕本領事、近年庶子等成敵人、構種々之奸濫曲折、○中略如當方相傳之讓狀者、送多年而後、以自筆自判付屬之條、歷然露顯、仍則蒙御裁許、卽令安堵候、敵方猶不得休、雖及越訴庭中、每度停廢、剩可有反座科條之旨、法家之輩勘申之候、

〔建內記〕永享十一年二月一日己卯、近日訴人等、於文書之理非不申入之、只指敵方之紕繆令讒言、仍尋御沙汰之時、爲虛誕之時、結句及反座、先於紕繆沙汰送時日之間、自然延引、爲希代之事云々、每事政道嚴重之處、以惡名讒言之間、或被罪之、或反座者歟、人々邪路之所致歟、

親屬告訴

〔御成敗式目追加〕一敵對于祖父母幷父母致相論輩事延應二五十四、信州落合後家尼、與子息相論之間、被定之畢、

右告言之罪不輕之處、近日間有此事、敎令違犯之罪科是重、自今以後可停止之、若猶及敵對者、慥任本條可被行重科也、

○

自首

〔古今著聞集十二偸盜〕大殿小殿とて、きこへある强盜の棟梁ありけり、大殿は後鳥羽院の御時からめられけり、小殿は高倉判官章久が本へ行ていひけるは、日來年來からめかねて、あなぐりもとめ

殿へ被申之間、則彼輩被召捕畢、廣橋永藤卿、所司代等召問之間、刀自(金澤妻)申云、刀自三條、年來大覺寺殿爲御師御祈申き、其を金澤有訴訟事、爲蒙勸賞庭中申也、伏見殿御事とは、初より申たる事更更なし、摠而自伏見殿御祈事不奉之間、不存知申之由、明鏡ニ申披畢、仍三條ハ永被放、刀自、不可被召使云々、代官刀自ハ、可被追放云々、刀自夫民部少輔重季(洞院諸大夫)以下兩三人、侍所ニ召置、庭中申金澤をば被籠舍、可被斬歟之由在沙汰、自内裏ハ猶御不審相殘、彼等可被糺問歟、又湯起請可被書歟之由、有御沙汰云々、大覺寺殿御事ハ自室町殿以海門和尚被尋申之間、三條ハ年來御師也、便宜御祈などゞ申計也、更々今度、就御惱御祈事、不被仰付之由、種々被陳申云々、所詮是之事、忽及生涯處、彼刀自申披之條、併內侍所加護、祖神之冥助也、幸運至極、珍重無極、御惱ハ先御本腹之分也、

〔甲陽軍鑑品第十七八〕一訴人岩間大藏左衛門とて、御分國中、萬事の儀を申上る侍一人あり、

〔武家名目抄職名六十〕訴人又稱目明

按甲州にて訴人といひし所職は、今いふ目明の類なるよし見聞雜錄にみえたるが、いかにも其いへる所のごとく、常ならぬ事に眼をつけて、窺ひしれるまゝを密告すべききつかさなり、其なかに、他人の陣所、もしくは役所などへ差副られて、其勤惰を察するなどやうの人をも目明といへるは、まさしく目附の職掌に似たるなれど、この所役は、毎事見聞に從ひて、非常の事あれば告申べきいはれなれば、をのづから目明の意なしとすべからず、何事にもあれ、なべて分明ならぬことの驗證となるものをば、しかよびしとみゆ、

〔甲陽軍鑑品第十七八〕此横目衆

一荻原豐前守　一久保田助之丞　一原大隅　一志村又右衛門
一中村彌左衛門　一河野但馬　一石坂勘兵衛　一萩原五左衛門
一山本土佐　一久保田監物○中略

古事類苑 法律部二十九

中編

告訴 自首 併入

鎌倉室町時代ニハ、告訴ノ制度甚ダ備ハラズ、只上古ノ遺制ニ依リシモノヽ如シ、自首ノ制亦同ジ、

告訴制度

〔建武年間記〕雜訴決斷所

一反坐事

誣告之反坐、文法已稠重、宜任本條被加嚴禁、當所衆幷國司守護上使等挾私緯參差者、其科同前、

告訴例

〔看聞日記〕應永卅二年八月廿三日、源宰相以狀馳申云、廿日禁裏へ庭中申物あり、今度御惱(〇稱光)自伏見殿被呪咀申之由申、さもありぬべきよし被仰逆鱗、以永藤卿室町殿(〇足利義持)へ被仰之間、事樣不審也、何樣にも申口可召捕之由御返事被申、則所司代召捕尋之間、内侍所刀自三條と云物、彼官人也、彼刀自ガ夫、洞院諸大夫民部少輔重季、幷庭中申男、(六條中將侍、金澤ト云、)其外女尼兩三人召捕、被糺明之處、非伏見殿御事、大覺寺殿をこそ申て候へと申披之間、此御所之虛名ハ晴畢、御幸運珍重之由告申之間、迷惑仰天、先以無爲之條、併神慮之至、喜悦也、則三條永基ニ尋遣、返事云、大覺寺殿御事也、是之御事ハ、無爲落居之由申、安堵畢、 二十四日、行豐朝臣參、得度以後初見參、明盛も參、彼庭中事、委細申、刀自三條(八十計之老者也)其代官之刀自ガ夫ニ、金澤ト云物、庭中申、此間有訴訟申事、仍爲蒙勸賞、就今參局(〇主上御寵愛)庭中申、委細載目安、而今參伏見殿御事と披露申云々、以外有逆鱗、仙洞(〇後小松)室町

古事類苑

法律部二十九

中編

告訴 自首〔併入〕

聽訟

一神訴等雖爲無理、爲神事無爲、條々御裁許、於善法寺被成御判、（於社中被成御判事無其例、如何、但爲遂神事如此云々、）

〔諸家文書纂八〕駿遠兩國所々當知行分之事

右今度訴人依有申子細、既令裁許處、信綱申所無紛之條、任先例之旨、無相違如前々可令知行、縱於子孫親類被官百姓等爲訴人、雖有申子細、今度遂裁許落著之上者不可許容、然者兩國知行之內、不作成之地、新田見出、於有增分ては速申上、隨其分際相當之可令奉公、不可有自餘之競望者也、仍如件、

天文十三甲辰年閏十一月廿八日　治部大輔右ニ同判

與津彌四郎殿

或可返給之旨、有御氣色之由雖載之、非指本書、併爲私返事之間、輙難備證據歟是五者、早停止政俊非論、且守故大將家御寄進狀、并度々御下文旨、且任右大臣家元久二年下文及承久三年下知狀等、可令政親一向進退領掌、勤行神事之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

安貞二年五月十九日

武藏守平泰時（花押）
相模守平時房（花押）

〔朽木文書〕佐々木出羽守氏秀、與稱彌陀院雜掌相論、近江國高嶋本庄內案主名事、

右彼職者、氏秀曾祖母尼妙語相傳所帶也、而實子行綱依爲不孝之質、讓與甥佐々木出羽三郞左衞門尉賴信、賴信亦讓渡女子愛壽、彼是給關東安堵下文訖、爰氏秀如訴申者、尼心阿者、被義絕行綱女子也、爭可相傳妙語之所領乎、誤成和與、去曆應四年三月十七日雖被下御下知狀、可立還本理非之旨、寺家捧陳狀之間、有其沙汰之處、旣先々被裁許畢、尤可爲越訴歟、雖然未被定置之間、於仁政方礼決之、所詮氏秀所出帶、如永仁二年二月五日關東下文者、可令出左衞門尉源賴信領知、近江國高嶋本庄地內案主名、并後一條地頭職事、右任伯母妙語正應五年十月廿四日讓狀、可令領掌、如賴信讓狀者、讓渡女子愛壽、一所近江國高嶋本庄內案主名、一所後一條地頭職、如嘉元二年十一月十七日外題安堵者、任此狀可令領掌云々愛壽如讓與義信、至于氏秀相續之所見也、如雜掌□□弘安七年十二月廿三日關東下文者、將軍家政所下、可令早領知近江國高嶋郡內本新兩庄鄕々地頭職以下所職散在名田、（自餘略之）彼下文□□□□上不書載案主職號讓狀置文者、爲行綱狀云々、旁以叵足支證之旨、氏秀所申非無其謂歟者、一旦就和與、雖被成敗、今訴論之是非分明者哉、寺家知行、又心阿爲私寄進、未安堵之地也、然則當職任關東安堵下文等之旨、可令氏秀領掌、仍下知如件、

永和三年十二月廿一日

〔齋藤親基日記〕寬正六年八月十五日、依條々神訴、神幸遲々、自申剋俄大風大雨、山中鳴動、不遑注之、

哉、仍政俊申旨、聊似有矯飾歟、但政俊所進建仁四年二月廿八日下文云、可早任傍御神領等例、致有限地頭得分沙汰橘郷事、右當郷預所政親、與政景止種々相論、早任當國本神領等例、云預所得分、云地頭得分、相互可致沙汰云々、而又政親所進、右大臣家元久二年八月廿三日下文云、可令早停止國井八郎正景地頭職橘郷事、右當所者、去治承五年、爲故大將殿御沙汰、被寄進鹿嶋社之地也、其後停止地頭之妨、一向爲中臣親廣沙汰、可令勤仕神事之由、同以被成度々下文畢、就中爲神領之條非新儀、去安元年中、停止地頭廣幹、可爲鹿嶋社領之由、被成國司廳宣畢、而左衞門督家御時、正景横申補地頭職、妨神事用途云々者、爲神領之上、任證文之旨、停止正景地頭職、一向爲權禰宜政親沙汰、可令勤仕神事云々、又承久三年五月卄日下知狀云、橘郷事、給故右大將殿御下文之後、父祖幷政親已三代相傳、知行無相違云々、然者成安堵之思、可令勤行御祈禱云々者、謂故大將家御寄進之始者、自治承五年至于當年四十八年、謂地頭停止之事者、自元暦元年以降四十五年也、而左衞門督家御時、政景一旦雖補地頭職、不載指相傳由緖之上、右大臣家御時、元久二年被停止政景地頭職之後、廿四ヶ年也、前後下文重疊之上、忽難改本願御素意歟、然者依政俊申狀、今更不能子細焉、是一次政親依令刄傷大番舍人之罪科、改易大禰宜職、被補則長之由、政俊雖申之、如同所進建保四年關白家〇藤原家實政所下文者、不被決兩方、就則長解狀、被成下之由所見也、隨又政親無誤之由、鹿島郡地頭幷神官供僧連署狀、及守護人知重申狀顯然也、而政俊以神主則行幷當大禰宜則長書狀、雖備證文、依爲論人申狀、不足證據之由政親申之、守護申狀、幷地頭神官供僧等連署狀、與論人則行則長書狀、非無用捨之上、爲守護所沙汰、糺返則長追捕物於政親、令取進請文畢、其上不及異儀、是二次建保五年稱遂對決、政俊雖進問注記案、就彼狀不蒙裁許、空送四五ヶ年之處、承久三年政親重給下知狀畢、是三次政親失出來之時、可返給之由、蒙右大臣家仰之旨、政俊雖申之、不給指證文之由同申之、以胸臆之詞輙不足信用矣、是四次以前信濃守行光法師書狀等、政俊雖備證文、如此狀等者、或申入子細之由載之、

禰宜則親可令知行云々、又如安元元年國司廳宣者、可令停止廣幹妨、大禰宜則親訴申、鹿嶋神領橘郷并吉景郷事云々、同年十二月廳宣云、可令停止廣幹地頭沙汰、糺返鹿嶋社訴申、橘吉景兩郷損物事云々、如此等狀者、停止廣幹地頭職之由雖有所見、政俊先祖爲地頭職之旨、頗無證據歟、加之故大將家治承五年十月日御寄進狀云、奉寄鹿嶋社神領、在常陸國橘郷、右爲心願成就奉寄如件云々、又治承七年(壽永二年歟)三月十日同狀云、奉寄神領壹處事、常陸國立花郷、右件郷、限永代所奉寄鹿嶋御社也、爲大禰宜則親沙汰、殊可令祈申御息災之由云々、又元暦元年十二月廿五日同御下文云、可早爲中臣親廣(則親男、政親父、)沙汰令勤仕神事、橘郷事、右件郷、任先例、於所當者、一向爲神事用途、可令勤仕神事也、且又任先例可令停止地頭之妨云々、又元暦二年八月廿一日同御下文云、可早停止地頭妨、爲中臣親廣沙汰令勤仕神事、橘郷事、右件郷、任先例、停止地頭之妨、一向可令勤仕神事之由、先日成下文畢、而下河邊四郎政義(字有憚)依補南郡地頭號、郡内張行之間、無指由緒、追籠百姓妻子、可隨地頭進止之由、取起請畢云々、所行之旨、神慮有恐事也、早任先例停止地頭之妨、一向可令勤仕神事云々、如此等狀者、云則親之時、云親廣之時、停止地頭沙汰、一向領知可勤行神事之由具也、而左衛門督家(○源頼家)建仁二年五月卅日下文云、補任常陸國橘郷地頭職事、源政景、右人可爲彼職、但當郷者、鹿嶋社領也、有限所當以下神役、任先例可致其沙汰云々、右大臣家建仁三年十一月十七日下文云、補任立花郷地頭職事、源正景、右於地頭職者、正景先日給御下文畢、而預所正近、寄事於左右、押妨地頭之沙汰云々、事實者、自由猥藉也、正近者爲預所、不可相支地頭沙汰云々、政俊所進同日御下文案云、補任立花郷預所職事、中臣正近、右人爲預所職、可致御祈禱、相受地頭沙汰事、可令停止云々、爰政俊申云、故右大臣家御時、政親依訴申、重遂對決、政俊者、給地頭御下文、政親者、所給預所御下文也云々、如政親陳者、虚言也云々、政俊所進建仁三年二通御下文者、已以爲同日之處、如彼狀者、政親寄事於左右、押妨地頭沙汰之條、事實者、自由猥藉也云々、遂對決、於被成分御下文於兩方者、事實者之由、何可被載其狀

爲三男之流以胸臆令恩給由申之條、甚爲奸謀歟、就中遠重、初則不相綺之由稱之、後亦令恩給之旨號之、先後之詞、渉兩端之條、又以爲陰謀歟、然則於當職者、停止遠重濫妨、任西信通重讓狀等、幷安堵御下文、可令性蓮領知、次押領科事、遠重上取彼所職之條、承伏已畢、遠重背祖父讓狀幷御下文、非啻押領、剩以胸臆稱恩顧之地、濫妨他人所帶之條、顯招其科歟、然則被注所領可被分召、次押領以後得分事、可被糺返、次以不實爲恩給地之由、載訴狀之條、雖可有罪科、依押領之科被分召所領之上、不能二罪歟、仍不及沙汰焉、

一國宗名事

右就訴陳狀擬有其沙汰之處、止訴訟之由、實重出狀畢、此上不及異議矣、○中略

右可被尋成敗之由、所被仰六波羅也焉、

以前條々、依鎌倉殿仰下知如件、

正應元年六月二日

前武藏守平朝臣 花押○北條宣時

相模守平朝臣 花押○北條貞時

〔沙汰未練書〕一御下知者　就訴論人相論事、蒙御成敗下知狀也、又云裁許也

〔鹿嶋社文書〕六下　常陸國鹿嶋社御神領橘鄉住人等

可早停止國井八郎太郎政俊非論、且守故右大將家○源賴朝御寄進狀、幷元曆度々御下文旨、且任右大臣家○源實朝元久二年御下文、及承久三年下知狀等、令中臣政親一向進退領掌、勤行神事等事、

右彼此申詞、枝葉雖區々、所詮兩方互稱相傳由之處、如政俊申者、先祖證文者、源八政廣政俊父、蒙參河守○源範賴勘當之剋、追捕之庭令紛失畢、但國領之時、政廣屋敷國役免除外題如此云々、如政廣仁安二年、同三年請留守所裁之解狀者、可被免除橘鄉屋敷萬雜事之由雖載之、爲地頭職之旨、無指所見歟、而如政親所進承安四年國司廳宣者、可令早云々、鹿嶋社神領橘鄉事、右依宿願奉免日次御供、以大

之由存知候之處、去年九月上旬之比、貞安受病候之間、貞重（仁）不令告知、竊讓與後家候之由承及候（氏）罷向貞安之許候（氏）相尋實否候之日、其儀無實也（止）申候（氏）、內（仁波）讓候（氏）如此申候之間、無謂之由（於波）訴申候、縱雖讓與後家候、後家一期之後者可賜貞重之由（於毛）載其狀（氏）候（波）、强不及鬱申候、

右衛門少尉中原明方

承元二年四月三日　明法博士兼少尉中原明政

小尉中原

修理宮城辨明法博士左衛門少尉中原章親

裁許命令狀

〔忽那家古文書乾〕關東御下知幷施行

伊豫國忽那島左兵衛尉實重法師（法名性運、實名於龜）與同十郎左衛門尉重康（今者死亡）子息遠重相論條々、

一西浦總追捕使職事

一末重名事

右如訴狀者、於當職者、任亡父四郎左衛門尉通重訴狀、給安堵畢、而重康致違亂云々、如陳狀者、至實重所職者、重康無其綺、而押領之由申之條存外也云々、重訴狀云、承伏之上、欲給御下知云々、重陳狀云、於彼所職者、恩給通重畢、而死去之後、上取之處、實重依歎申之、又宛給畢云々、爰如性運所進、本主西信（實重遠重祖父）讓嫡子通重（性運亡父）建長三年四月廿八日狀者、讓與忽那島內處分事、一西浦總追捕使職、一末重名事、右任相傳之狀、于通重所令處分實也、不可有他妨云々（他事略之）如通重讓性運、建長五年二月廿九日狀者、一總追捕使職、一末重名事、於龜嫡子（仁）登羅須留、他人乃妨不可有云々、（他事略之、以和字摸漢字）如性運給同八年七月九日御下文者、將軍家政所下藤原於龜丸、可令早領知伊豫國忽那島內西浦總追捕使職幷名田畠（名字等載讓狀）事、右任親父左衛門尉通重、建長五年二月廿九日契狀、可令領掌云々者、於件所職者、通重爲本主西信嫡子、得西信讓畢、通重讓性運、性運任彼狀、建長給安堵狀畢、而遠重

其庄地頭(某 士)載(天)不書正地頭之間、聊涉不審歟、地頭(某)代官(某 士)正員代官共以可被書之矣、

一條々各別可立篇目事

一段內條々相交之間、御悤々之時難得御心、一事一段(仁 天)兩方申狀詞別々(仁)可被書起也、

一以問注記下沙汰人令勘理非之處、其數輩之中、於緣者者令起其座畢、而其外或號先論人、又稱前緣者、嫌申沙汰人之事、御評定之時、用捨何樣被定候覽、不審事候之間、內々尋申候、委可蒙仰候焉、

〔東寺百合古文書 百〕勘申左馬允源貞重與刀自洞院女相論六角油小路地壹所理非事

右被別當宣偁、件相論事、就問注記並兩方證文、宜令勘申理非者、承元二年二月廿日問注記云、問注左馬允源貞重、並洞院女等申詞記、洞院女(八條院 刀自)右問云、六角油小路並東山地者、貞重之母入置借物之質城外之間、經數年之處、貞重之伯父貞安稱致其沙汰、隱貞重讓妻洞院女(貞安妻)由所訴申也、件子細依實辨申如何、洞院女申云、件地者、貞安入道之父貞清之私領也、而貞安爲後白河院御使城外之間、父貞清天亡候畢、其間女子清原氏一人彼遺領不令知貞安取券契入置借物質之處、貞安上洛之時、悲歎親父之亡命候(氏)、不致其沙汰經年序候之處、貞安依父之遺領沙汰返彼地二箇所候畢、仍貞安領知候、今貞安存生之時、依爲多年之夫妻讓賜洞院女候畢、貞安入道之兄弟姉妹總四人候、弟二人(波)死候畢(止)申、貞重問云、就汝訴狀洞院女申狀如此、件子細依實辨申如何、貞重申云、件地貞清私領之條勿論候、貞清未處分(仁 氏)死去仕候畢、其間爲後家之沙汰以彼遺領處分四人子息候、嫡子貞直分、四條坊門油小路地、次男貞安分、久世、幷松崎大庭御牧等田畠、三女子分、六角油小路東山地候、四女子分、四條坊門油小路地、如此候、件處分文(仁)貞直貞安加署判候畢、件狀定洞院女之許候歟、可被召出候、三女子分六角油小路幷東山地入置借物之質候而、貞安申合貞重云、件地可沙汰返也、汝自幼少成父子之儀、汝之外(仁)可領知人無之、此事令和與者可沙汰返之由(於)申候(志加波)、其儀(仁)候者不及左右之由和與仕候畢、仍貞安沙汰取候畢、貞安存生之間(波)領知候(氏)、一期之後者可給貞重

〔鹿嶋社文書六〕雜訴決斷所牒　常陸國衙

當國鹿島大神宮大禰宜高親申、同國行方郡內加納十二ヶ鄉、幷內小牧村用重名以下社領、地頭等濫妨、彼下地抑留神用物由事、副申狀

右於神用物者、令致其辨、至下地事者、相鎮濫妨、爲尋問子細、來月廿日以前可參洛之由、相觸交名人等、可被申散狀者、以牒、

建武元年十月十八日　散位平朝臣花押

左大史小槻宿禰花押

參議右大辨藤原朝臣花押

問注記

〔吾妻鏡十四〕建久五年十月一日戊午、大舍人允三善行倫可記訴論人問注詞之由被仰出之、日來父大夫屬入道善信奉行職也、依他事計會、擧申行倫云云、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年正月廿五日庚戌、丑剋町大路東災火、大夫屬入道善信宅災、重書幷問注記以下燒失云云、

〔吾妻鏡四十六〕建長八年〇康元元年十二月廿日丁丑、就六波羅問注條々有被仰遣事、

一可被書同者署所事

一兩方所進證文等各可對繼目事

一同文書目錄巨細可被注進事

一庄園領家事

雖被載本寺社之名、不被注領家之間、聊涉不審、問注記端作雖不被出之、申詞之注ナンドニ可被書載之歟、

一可書正地頭交名事

右之趣にて、御之字を除て下々へも遣候也、尙口傳多し、又百姓等へ直書は如何、若有之ば、右之日限十ヶ日雖有之、國之遠近、宜有其沙汰候也、

〔東寺百合古文書百四十八〕補任若狹國太良庄助國名主職事

國安

右國安、與時守宗氏眞永三人、當名主職相論間、〇中略仍猶爲糺明子細、三人百姓可企上洛之由、度々雖遣日限之召文、不捧請文、又不參洛、〇中略違背日限之召文之時、被付論所於訴人之事者、都鄙之通例也、〇中略以前三箇條〇二條略之國安所立申、非無其謂歟、仍所宛行也、〇中略

弘安九年五月日　　預所御判

在御判

〔東寺百合古文書廿三十二〕八條大宮地事

訴人國光

論人姬鶴女

右來十五日可有對問、各帶文書等、可被參決狀如件、

延慶二年九月十日

〔市河文書二〕雜訴決斷所牒　一宗信濃國守護所

城興寺領當國倉科庄雜掌申、屋代下條一分地頭彥四郞以下輩押領下地、責取年貢由事、

解狀具書

牒、爲糺明、宜召進彼輩之狀、牒送如件、故牒、

建武元年六月十六日　　左大史小槻宿禰花押

右少辨藤原朝臣花押

有訴人申旨者、雖不伺申之、任法可遣召文、但依時宜可得上意矣、

〔武政軌範引付内談篇〕一訴訟次第事

訴訟人申請賦、而付渡于其手之開闔、則申沙汰之、賦與寄人之時、召訴人於內談之砌、相尋事由、當座披露之、至對論事者、遣召文、召出論人、遂糺明、調訴陳狀、令披露之、

〔武政軌範引付内談篇〕召文奉書

前大膳大夫代申、備前國某庄地頭職事、訴狀具書如此、不日可被參決之由候也、仍執達如件、

明德二
三月十一日　實名

備後前司殿

〔書札袖珍寶聞書六〕召文之事

古案

御手前就被官出入、從羽田但州目安到來候、繼紙二枚、條數都合七ヶ條候也、加裏判進之候、猶理有之者、來九日巳午以前、御口上可承候、

御法雙方當人、壹人宛可有御參出候、恐々謹言、

十月四日　御奉行所名

大崎與左衞門殿

又

手前不相届働之由、中根助左衞門尉、以目安致言上候、早々可被罷出候、必遲參有間敷候、若此奉書到來之後、遲出之日數十ヶ日、過此日限者、不謂理非、如御法度可被仰付者也、任御定法之旨、越度可申付所也、謹言、如件共、又也畢とも留る也、

七月九日　御奉行所名

書ノ意得ナリ、故ニ如件カ者也留ニテ、充所アルベシ、依充所而、謹言トモ恐々謹言ナドモ可有之、日ノ下ハ大方御奉行所各ナド可有之、依時宜各加名判事モ有之也、

〔吾妻鏡十八〕建仁三年十二月十八日壬子、諸人訴論是非、進覽文書之後、至三箇日不加下知者、可被處奉行人於緩怠過之由儲其法云云、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年六月十一日丁卯、雜人訴訟事、相分國々被付奉行人、而度々雖被相觸不事行之時、申御敎書之間、尫弱訴訟人、數反往還、經日月事不便、自今以後、不可申成御敎書、以奉行人奉書可加下知之旨被仰出、

○按ズルニ奉書ハ、上ノ仰ヲ奉リテ下ニ下知スル文書ナリ、本書建久二年十二月十九日、同三年三月四日ノ條ニ、盛時ガ書ヲ載スルニ、其書法ハ同ジ式ニテ、一ハ御敎書トイヒ、一ハ奉書トイヘリ、サレバ鎌倉幕府ノ初メハ、御敎書トモイヒシナルベシ、其後ハ執權管領ノ書出スヲ御敎書トイヒ、頭人奉行人ノ書出スヲ奉書トイフナリ、

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年(○寬元元年)九月廿五日戊辰、諸人訴論事有評定、事書入見參、可施行之由被仰下之御處、成敗遲々、尤以不便、自今以後、付奉行人、註事書、早々可成御下知、又御下知、與事書、於問注所可令勘合、事云無相違者可下之由、依仰加賀民部大夫、

〔吾妻鏡三十五〕寬元二年六月十七日戊戌、於遠國訴人者、酉收以前、不可被成召文御敎書之旨、被儲法云云、

〔吾妻鏡四十一〕建長三年七月廿日戊寅、諸國民間、訴訟於出來者、酉收以前、召符不可下之旨、今日政所問注所等被仰云云、

〔建武以來追加〕條々(永正六、五、九)

一召符事

召文

右就三問三答訴陳狀欲尋決之處、去年曆應九月十一日、兩方連署、和與狀畢、如彼狀者、和與佐々木四郎右衛門尉行綱女子心阿代淨圓與同五郎義信相論、近江國高島本庄內、案主名田畠、并後一條地間事、右地頭職者、心阿帶關東安堵御下文、同下知、六波羅下知以下、次第手繼□相傳知行之處、去建武四年正月廿日、義信打入當所致亂妨狼藉之由訴之、義信示□關東安堵外題證文等知行□□□□之、既雖及三問答訴陳、義信爲一族可和與之由令申之間、以別儀於後一條地頭職者永代所避渡于義信也、至案主名、心阿可令領掌云々、如同日義信狀者、子細同前、就之爲元弘收公地否尋問證人伯耆入道道本佐々木源三左衛門尉秀時之處、如同十月十日道本秀時請文者、案主名并後一條地頭職事、非元弘收公之地、將示相傳當知行無相違云々各起請詞載之者、和與之上者、不及異儀歟、然則守彼狀、相互可從其沙汰之狀、下知如件、

曆應四年三月十七日

源朝臣 花押○足利直義

〔親長卿記〕文明九年六月廿一日、賀茂供僧與別當隆算法師相論、正月三ケ日修正入用不下行事、御神祭神供闕怠事、三問三答狀奏聞、兩條現形之上者、可被改別當職云々、理運之輩可注申之由可仰云々、

〔親長卿記〕延德四年五月一日、午剋參內、奏鴨社祝職相論事、兩方三問申狀於御前讀進、出御二間、御對面何樣猶新被御覽申狀、追可被仰乎、又文書各所持之由申之、可召進、此申狀內、神前供物備樣相違之由、權祝秀盛訴申、祝秀富、以件手文備進之由申之故也、

〔庭訓往來〕執筆書與問狀奉書於訴人之時、及兩度無音者、仰使節被下召符、

〔簡禮記〕召狀ノ事、訟目安時、奉行對充狀路次ノ遠近ヲ勘ヘ、何月何日前可到著者也、若及遲參バ不論理非越度ニ可被仰付トモ、可申付トモ書出ス狀也、是ヲ召文トモ召符トモ云、問狀召狀等モ奉

一二問狀者　重訴狀也　又重申狀トモ云
一二答狀者　重陳狀也
一三問狀者　三ヶ度訴狀也
一三答狀者　三ヶ度陳狀也
以之謂三問三答訴陳狀也

〔道照愚草〕一訴論人の事、　本解狀とは、初の訴狀、此答をば初答と云、又初陳狀共、二問狀、重訴狀共申之、此答をば二答共、重陳狀共云、三問狀、三ヶ度の訴狀也、此答を三答と云、三ヶ度の陳狀共云、

〔簡禮記〕三問三答ノ事、初問初答文書、假令バ名字官途名乘、謹而言上、

〔花園院御記〕元應三年〇元亨元年六月廿一日癸亥、今日合田別府可知行之由仰女房左衞門督、長嗣息女也此莊長嗣祖母禪尼所領也、而公兼卿知行、禪尼逝去之剋、總領讓長嗣之處、此所問公兼、一期之後、可知行之由書與讓狀了、而長嗣先公兼逝去之時、公兼一期之後、可知行之由仰子息椨丸了、而公兼死去之時、讓實秀了、仍二所知行也、而椨丸訴申之間、三問三答番了、長嗣所領、皆悉申置口院、是朕幼少之間事也、仍朕此間執沙汰此訴陳也、依有理欲給椨丸之處、入道相國起執申云、廣可有沙汰云々、仍鷹司前關白〇冬平、二條前關白〇道平、左府、藤原實泰不申所存、內府〇藤原師信前大納言俊光等卿、令尋所存之處、幸訴椨丸有理、而公兼卿長嗣父也、長嗣雖爲長雅卿猶子、猶不可離、幸生告言之罪科可有沙汰也云々、內府可沒收云々、就此等子細長嗣息女椨丸同母女弟也給之、是長嗣、朕自幼少養育、其功不可忘、仍沙汰此所領皆悉讓與、朕是併爲子孫也、而忘源而不可給實秀、雖然告言又天下之大法也、然者折中所相計也、入道相國起雖執申、依不忘長嗣叢勞、如此治定了、

〔朽木文書〕佐々木四郎右衞門尉行綱女子尼〻〻〻、與同出羽五郎義信相論、近江國高島本庄內、案主名幷後一條地頭職事、

三問三答

有御沙汰歟之由申之、卽奏聞、然者重可尋長興之由有仰、取兩方申狀、一度可奏聞之由申之、二問之時無不審者可奏聞、若有不審可尋三問、一度可奏聞之由有仰、　四日、長興宿禰二問狀遣雅久了、他行之由命之、　五日、早旦雅久來、昨日他行、入夜歸宅云々、引見記六可進第二陳答之由申之、　十四日、二問狀到來、　十五日、依召參內、○註略又仰之、官務事可被補雅久之由自武家被執申、此間被經御沙汰之處如此、執奏如何、明日可持參二問可被仰談云々、　十六日、參內直衣、參御前、長興宿禰二問、雅久陳答、於御前予讀申、仰云、今度申狀各條目繁多也、雖然有無詮用事等、肝要閣上首二代相續事有例、長興宿禰有二代相續者、有子細之由申之、三代相續之由雅久申之、閣上首三代相續事無例、各無上首相續也、今度晴富宿禰依長照宿禰讓補、長興宿禰雖為上首、晴富宿禰被補了、前內大臣靜光執申了、理不盡之儀等有之云々、今度又雅久可相續之條雖無例、又御執奏、○註略於申狀者就無其理、以內奏申入武家歟、勅答云、無三代相續之例、閣上首可拜任之條如何、殊明年武家若公就御元服佳例可被仰付之由被申之上者、先被還補長興、來年可被補雅久、不背道理歟之由被思食也、但新大納言、廣橋大納言等召之、令見申狀、有被御覽、誤事者可依時宜之趣、又無子細者可被申武家、御文案可出進云々、兩卿參入、於臺盤所前令見兩方之文書各讀之、雖枝葉繁多仰之趣尤也、子細見被申狀、可被申勅定、勅定御文案出進之、猶被加御筆、有被直下事、

〔尺素往來〕本領事、近年庶子等成敵人、構種々之姧濫曲折、依奉掠上聞、及違亂候之間、遂三問三答之訴陳候之處、兩方證文、前後狀之篇、謀實書之段、可為相論肝要之由、就令治定候、去十八日、互出帶手繼正文、於御前對決仕候了、

〔沙汰未練書〕

一本解狀者　最初訴狀也　又申狀トモ云

一初答狀者　初陳狀也　又初陳トモ云

康永二
七月廿一日　　基能在判
　　　　　　　幸員在判

道後政所殿

〔東寺百合古文書〕山城は一之二十四 案書 行信重申狀

若狹國太良庄內時澤名主國廣代行信謹重言上

欲早實圓無極謀陳令露顯上者、嚴密被經御沙汰、蒙御成敗、全御年貢以下御公事當名主職間事、○中略

右○中略粗重言上如件

建武元年七月日

〔東寺百合古文書〕山城ゑ十下之十六上 案書 實圓重陳狀

若狹國太良庄內時澤名主法橋實圓謹重辨申

欲早被棄置國廣代行信無窮奸訴、任代々御下文等幷重代相傳知行例、不可相違、蒙御成敗時澤名間事、○中略

右○中略重披陳言上如件

建武元年八月日

〔親長卿記〕文明四年七月二十一日、長興宿禰來、官務職事可被還補之由可奏聞云々、有申狀、廿三日、參內、長興宿禰申狀奏聞、申狀於御前讀、何樣被廻御思案、重可被仰下云々、廿六日、自鞍馬寺歸畢、有召參內、長興宿禰申狀被下之、可尋雅久云々、退出之時召寄雅久仰了、八月三日、參內、○中略次雅久陳狀今朝到來、奏聞申狀讀進、仰云、先可被尋仰前內府歟、予申云、此申狀工分更以無人決之儀、一向被盡申狀、可被仰歟、然者此申狀可談合兩傳奏之由有仰、仍令見了、各談合、兩方申狀被召、二三問ヲ可

〔東寺百合古文書山城は一之二十四〕百姓等申狀

東寺御領若狹國太良庄百姓等謹言上（中略）

一十禪神祠宜藤二郎、當社之神田壹段、令沽却丹後入道法圓之、致謀書之相論、番訴陳以二問二答之狀御注進之間、訴論人令上洛跡、順生房論所之早田作稲被苅取條、非法何事過之哉、（中略）

以前條々大概如斯、（中略）百姓等一味神水仕、恐々言上如件、

建武元年八月

〔東寺百合古文書五〕攝津國垂水庄日下部氏法名證圓、今者死去、子息朝倉孫太郎左衞門尉重方謹重言上

欲早被經嚴密御沙汰、被停止東寺雜掌祐實押妨、任亡母尼證圓讓狀、依軍忠篇蒙御成敗、當庄下司公文職等事、

副進

一卷　本解具書等案

一通　讓狀案重方相傳所見

右當職等者、母堂尼證圓于時日下部氏相傳知行之條、所進證狀等分明也、而東寺雜掌致押妨之間、證圓就訴申之、爲安成新左衞門入道奉行、被經御沙汰、番一問一答訴陳之處、不請取二問狀之間、去曆應四年十二月、以違背之篇被逢御沙汰之、剰令出對于御引付、請取二問狀訖、爰被渡于當御奉行處、去年十二月二日、不達愁訴證圓他界畢、且相副相傳證文、讓與于重方之條、讓狀分明也、且令相續于亡母尼證圓愁訴、被召出二問狀、任相傳之明證等、爲御成敗、粗言上如件、

康永二年四月日

〔光明寺舊記一〕志摩國圓應寺雜掌申、山田吹上僧惠觀、致海賊之由事、爲請取二問狀、可出對之旨、可被相觸之由候也、仍執達如件、

二問二答

科之由、面々可被仰含之云云、太宰少貳爲佐、加賀民部大夫康持、爲奉行云云、

〔東寺百合古文書山城エ一之九〕表書。。。。初問狀案

若狹國太良庄內時澤名本名主國廣代行信謹言上

欲早任先御下文旨、如元可知行由蒙御成敗、至御年貢以下御公事間事、

副進

一通　御下文案

一通　預所施行案

右件名下作伊賀房、奉向寺家、現不調狠藉之間、被召放畢、爰國廣依有忠節之志、下賜彼名之條、正安四年四月日御下文分明也、雖然不遂一收納以前、當庄地頭職罷成關東領之刻、給主代以權威、件名以下無是非令押領之間、國廣成空手畢、仍如此子細等、寺家御雜掌、於關東雖及御訴訟、依權威不事行之間、空令送年序給之者也、隨國廣含愁訴、罷過之處、件伊賀房子息實圓等、元自插寺家不忠所存之間、屬寺家敵對地頭、誘取宛文、令知行之條、抑非寺家忽諸所存哉、寺家御鬱憤國廣遺恨無他事之處、關東滅亡畢、仍寺家御所務悉令複于本給之上者、國廣件名主職可令安堵候條勿論也、然早任先御下文之旨、於國廣之、重蒙御成敗、至于實圓等者、依寺家不忠重疊罪科、爲被處御科、粗謹言上如件、

建武元年六月日

○按ズルニ、右表書ニ、初問狀案トアルハ、最初ノ訴狀ニシテ、即チ初問狀ヲ發スル材料ナルガ故ナラン、

〔蜷川親俊日記〕天文八年七月廿三日戊午、東福寺春匯菴と、大同菴相論之儀ニ付而、對大同菴被成問狀奉書處、住持江州在周者、最前於寺家相果候云、○下略

〔沙汰未練書〕一二問狀者　重訴狀也　又重申狀トモ云　一二答狀者　重陳狀也

問狀

任定法被下安堵綸旨、於有限之寺用者、不可致懈怠候、寺家又元來非可爭相傳之澀滯候之際、強不可申所存候歟、得此等御意可有洩御奏達候乎、仍言上如件、

閏六月（應安元年）五日　　左大吏（花押）

進上　頭中將殿

〔御成敗式目〕一帶問狀御教書致狼藉事

右就訴狀被下問狀者定例也、而以問狀致狼藉事、奸濫之企、難遁罪科、所申爲顯然之僻事者、給問狀事、一切可被停止矣、

〔式目抄六〕一帶問狀御教書致狼藉事

訴狀トハ、訴人ノウタヘ申狀也、總ジテハ召文ヲ問狀ト云テモ害ナシ、サレドモ聊差別アリ、召文ハ、其事ヲ明シテ申セトバカリカク也、問狀ハ、子細ヲクハシクカキタテヽ、但子細アラバ明シテ申セトカク也、以問狀致狼藉トハ、問狀ヲ論人ノ方へ付テ、我訴訟ハ、上ニ聞食披キタリトテ所務ヲ妨ル也、

〔新編追加（政所）〕一人質事、人倫賣買之御制以前、致訴訟於給問狀者、任證文可流質人也、

〔沙汰未練書〕一安堵事

於關東有其沙汰、奉行人三方也、隨思々申之、先本御下文、并手繼讓狀、先祖相傳系圖等、如此具書調、本奉行所可上之、所申無子細者、其國守護、或一門親類等、以奉行奉書被尋問當知行有無也、（是問狀奉書云）無支申仁之由、請文無相違者被成安堵、（當進者、外題、安堵狀之補、兩所被成御判、）若亦有支申之仁者、被成引付、就理非有其沙汰也、又於沽却之地安堵、於問注所有其沙汰、

○按ズルニ、問狀奉書トハ、奉行ヨリ發スル問狀ヲ云フ、

〔吾妻鏡三十三〕延應二年（○仁治元年）閏十月五日甲子、問狀事、問咨訴人等、掠申之旨露顯之時者、可處罪

日令上洛、寺務之擧狀、今日付南曹辨〔宣秀朝臣〕畢、此子細者、彼有官職者、一條二條兩家門當職之時者、倫廣代々令參行之、曾祖父信廣、〔號周防守〕祖父、〔號加賀守〕父季廣〔右京亮〕此三人三代相續之處、近年執柄家僕難波常弘、自應仁亂中稱有官代令參行之間、劉後即雖訴訟、依爲家僕一條家門、自初度職至再任、以贔屓倫廣不許之間、今度就寺門企訴訟者也、申狀予計遣之畢、〇中略

寺。門。擧。狀。云

就維摩會遂行之儀、有官別當、近年其代參向之條、不可然候、隨而無案內之故候哉、勅祿已下不持參候、爲會式聊爾之至、殊以無勿體之由及其沙汰候、仍右京亮倫廣理運之由候、然者自當年者、必令直參、勅祿等如先規申沙汰候之樣被仰付候者可目出候、就會式申子細共候間、令啓候、可得御意候、恐恐謹言、

後十月十三日　　寺務喜多院狀歟　空覺

南曹辨殿

〔下學集〔態藝 下〕〕陳狀（チンシヤウ）

〔沙汰未練書〕一初答狀者　初陳狀也　又初陳トモ云

〔東寺百合古文書〔二ノ百八十八至二百一〕〕最勝光院領備中國新見庄事、去貞治四年閏九月廿四日、故匡遠宿禰所存之趣載狀、可被下安堵勅裁之由申入候之處、同卅日被尋下東寺雜掌、而其後不申是非候之間、重就申所存、同十一月廿八日、去々年〔〇貞治五年〕三月十八日任被定置之法、可有其沙汰之由、兩度猶雖被尋下之、遂不及是非披陳、送旬日候、剩故匡遠宿禰逝去、御沙汰又自然停滯之間、于今閣愁訴候訖、如曆應雜訴法者、陳。狀。過廿箇日者、可被止所務、被止所務之後、過十五箇日者、可被付敵方、但違背至極之後、云被止所務法、云被付知行之儀、任被定置之旨、可有沙汰之由重被相觸、又過十ヶ日者、不待訴人催促、任法可有其沙汰云々、三箇度綸旨、違背既至極之上者、御沙汰頗似無盡期候、

之由任憲依難申候、乍恐所言上候也、以此旨可令洩御披露給候、恐惶謹言、

八月七日　　　　　　　　　　　　　頼朝

〔吾妻鏡四十〕建長二年四月廿九日甲子、雜人訴訟事、諸國者可帶在所地頭擧狀、鎌倉中者就地主吹擧可申子細、無其儀者不可用直訴之由、今日被仰遣問注所政所、是爲被禁直訴之族也、

〔東寺百合古文書セノ自二一號至二十號〕上桂庄替吉身庄御擧狀間事、今年二月廿二日成尋狀、同八月十三日令旨謹下預候畢、彼成尋無故支申御擧狀之條、無道至極候、其故者、德治年中、依有事緣、爲御門徒故喜樂坊少輔法師圓堅口入、件門弟成尋之母儀平氏女許入置彼文書於質劵之處、成尋構無窮今案、成永領之思、致問答之間、就訴申使廳、去年(嘉暦貳)五月十三日同六月六日爲對馬判官重行之奉行、以廳下部雖被付下訴狀於成尋之母儀住宅、涉兩年、于今不及請文散狀、無理之至顯然候、仍重訴申之處、重行辭退使廳出仕之間、爲御沙汰被渡下總判官秀清畢、仍開使廳御沙汰、奉掠御門跡可支申本訴御擧狀哉、有所存者、就使廳催促尤可捧陳狀者歟、併所仰上察也、早任先度旨被申成御擧狀候之樣可有御披露候哉、恐々謹言、

八月十九日　　　　　　　　　　　淨顯請文

大夫阿闍梨御房

擧狀云

上桂取替吉身庄の御擧狀、成尋支申間事、雜掌淨顯請文、か樣に候、いろい申御さた候べく候、あなかしこ、

八月(〇嘉暦三年)廿二日　　　　　　王熊丸

宮皃法印御房

〔和長卿記〕明應七年閏十月十六日戊申、關右京亮倫廣就維摩會有官職事、寺門爲訴訟越南都畢、昨

擧狀

達如件、

永享十一年六月九日　右京大夫（花押）

千代德殿

〔簡禮記〕擧狀ノ事、是ハ權門ノ狀ヲ申請充所ヘ付テ、其權威ヲカリ、願書ヲ相違ナ狀也、亦頭人支配ノ狀ヲ取テ、上ヘ訟、其願相違スル狀ヲモ擧狀ト云、

〔御成敗式目〕一國司領家成敗不及關東御口入事

右國衙庄園神社佛寺爲本所之進止、於沙汰來者、今更不及御口入、若雖有申旨、聊（一作歟）不能敍用焉、次不帶本所擧狀、致越訴事、諸國庄園幷神社佛寺領、以本所擧狀可經訴訟之處、不帶其狀者、既背道理歟、自今以後不及成敗矣、

〔沙汰未練書〕擧狀書樣事

何國何所某申何々事、以代官某令言上候、以此旨可有申御沙汰候哉トモ、又可有御披露候哉トモ、恐々謹言、

何月日　某裏判

進上　御奉行所　擧狀ニハ年號不書之

〔吾妻鏡十二〕建久二年八月七日癸未、幕下（源頼朝）御外甥僧任憲、相傳熱田社領内御幣田之處、爲號勝寶之僧被妨之、勝寶已經奏聞之間、任憲勒解狀、又欲奏達、仍望申幕下。御擧狀。幕下頗有御猶豫之氣、爲報故祐範（任憲父）之功、縱廻他計略、於此執奏者難題云云、而是先人亡骨在所也、相構欲達之、他事皆無所採之由重言上之間、今日相副懇御書於彼解狀、被付高三位（泰經〇高階）云云、僧任憲解狀（副具書等）謹進上之、如此事不可被申之由存候て、大略成憚て不申上候、而少事には候へども、論人勝寶掠申候之間當時依一方申狀被下候歟、勝寶帶道理候者、何上西門院御時不蒙裁許候、更此條難申披子細

具書

上事、是就武藏國足立郡內鳩谷地頭職事、先日出懸物押書訖、綷已明之上、可執申之由、雖之懸望、奉行人不許容云云、有其沙汰可被下問狀云云、　八月廿六日己亥、今日武州(時經)被遣御書於問注所、是武州禪門時、有成敗事、訴人不進懸物押書者、縱可遂問答之由、雖爲御書下、不可被召決云云、執事加賀民部大夫獻請文云云、

〔沙汰未練書〕一具書者　訴陳狀兩方所進ノ證文等ノ事也

〔丹州書札式〕目安事、申狀共、具書共云、申狀ハ目安ノ子細ノ淺キ物也、

〔吾妻鏡(四十九)〕正元二年(○文應元年)八月十二日丁未、依御惱事、爲相模太郞殿御沙汰、一日中被造立藥師像、(將軍家御等身)供養導師尊家法印、又被始行藥師法、今日有被仰遣于六波羅事、其御敎書云、

問注以後追進狀事、不進證文之外、於訴陳者、不及沙汰之由被定畢、而進覽問注記具書之時、每度被糺、進追狀之條、違傍例、非無沙汰之煩、於自今以後者證文之外不可副進新陳之狀、若令備進簡要證文者、遂覆問、可令副進彼證文之狀、依仰執達如件

文應元年八月十二日　武藏守

相模守

陸奧左近大夫將監殿

〔東寺百合古文書(百三十二)〕東寺領播磨國矢野庄例名役夫工米事、定憲僧正狀、(副寺解具書)如此子細見狀候歟、可止其責之由、可被仰武家之旨、天氣所候也、仍言上如件、

(延文二)十二月十三日　右中辨時光(奉)

進上西園寺大納言殿

〔宗像文書〕本間太郞左衞門入道源厚、同三郞詮重等申、佐渡國羽茂郡內宿根木浦事、訴狀具書如此、本間對馬守押領云々、來月十日以前以參洛可明申之旨相觸之、可被申左右之由所被仰下也、仍執

處、和田左衛門尉、足立藤九郎入道等入來、義村對之、述此事之始中終、件兩人云、早勸同心連署狀可訴申之、○中略先伺御氣色、無裁許者、直可諍死生、

〔應仁略記下〕正月十八日御靈神前かせん附たり五月廿六日大亂等の事

御許容の事共、一圓貞親○伊勢私あるによつて、公方○足利義政御胡亂の次第に落居す、此分にては、かなふべからざるの趣、諸大名一同の連署數ヶ條、管領に達す、細川○勝元尤同心、餘義なく披露を致し、條目べちにありその體御所卷といはぬばかり也、○又見劫濁發心略記

〔和長卿記〕明應五年正月八日丁亥、早旦傳聞、在數朝臣○菅原氏、唐橋、昨日七日於九條家門被殺害云々、言語道斷之次第也、凡家禮之事者、內々儀也、任大學頭大內記等顯職、殊者加近臣之列、且幕咫尺龍顏、內外奉公勝于人歟、然如此之儀、古今不聞其例、當家皆依不肖、忝御沙汰、非沙汰限哉、云不便云無念、不能言說、准后○前關白九條政基與幕下○尚經御父子自身之御沙汰也云々、是又聊爾千萬歟、廿四日、癸卯伯卿未明送使者云、夜前之趣、申入之處、然者各所存之分、以一書并連署可申上子細、今日即可被仰出九條亭云々、○中略其狀云、○中略少納言菅原爲學○五條少納言菅原章長○高辻少納言菅原和長○東坊城權中納言菅原長直○章長父此狀付伯卿○忠富王申入之、示送云、今日即可被崇申九條殿之由被仰出、○中略後聞九條御返事之樣、尤無骨也、故猶以逆鱗云々、○又見親長卿記

〔御成敗式目追加〕一諸人訴訟對決時進懸物狀事仁治二八廿八

右甲乙之輩、訴訟之時、遂對問之處、或未預裁許之族、爲散鬱憤、稱懸物押書、或所申爲非據者、以論人之所領可宛給敵人之由、相互載其狀之間、各任貪欲之心、彌好喧嘩之論歟、自今以後、進懸物狀之時、於致濫訴者、早以所載懸物之所領、可宛給他人之旨可令書載也、○又見吾妻鏡

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年八月廿八日癸未、今日評議、諸人訴論對決之時、進懸物狀事、定其法云云、

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年○寛元元年三月十二日戊子、被行臨時評定、鳩谷兵衛尉重元參其砌、有庭中書

解狀

〔沙汰未練書〕本解狀トハ、最初ノ訴狀ナリ、又申狀トモ云、

本解狀書樣事

何國何所地頭某代某謹言上

欲早任傍例急速被經御沙汰同國トモ何所トモ某人令押領所領田畠等罪科難遁候子細事

副進一通證文等案

右所領田畠等者、某重代相傳之地也、而某人恣令押領條、無謂之次第也、早被召上某、被糺明眞僞、任相傳道理、爲蒙御成敗矣、仍粗言上如件、

縱令以是爲土代、理非分明可書之、

本解狀外二問三問狀者重言上ト可書之、謹ノ字不書之、

〔御成敗式目〕一代官罪過懸主人否事

右代官之輩〇中略若依本所之訴訟、若就訴人之解狀、自關東被召之、自六波羅被催之時、不遂參決、猶令張行者、同又可被召主人之所帶、

〔武政軌範引付內談篇〕一訴訟落居反解狀出訴人事

訴訟事終者、奉行人封解狀裏反渡于訴人、訴人又書寫解狀、封其裏、獻于奉行所、是規式也、

〔吾妻鏡二〕養和二年〇壽永元年五月廿五日甲午、相模國金剛寺住侶等、捧解狀群參營中、是所訴申古庄近藤太非法也、

〔簡禮記〕解狀ノ事、是ハ捧目安時、奉行對充所問狀ヲ付ラル、當人捧返答狀ノ事也、

〔吾妻鏡十六〕建久十年〇正治元年十月廿七日丙戌、女房阿波局告結城七郞朝光云、依景時〇梶原讒訴、汝已擬蒙誅戮、〇中略則向于義村〇三浦亭、有火急事之由示之、〇中略義村云、雖已及重事也、無殊計略者、曾難攘其災歟、凡文治以降、依景時讒、殞命、失滅之輩不可勝計、〇中略須談合于宿老等者、詞訖遣專使之

進書

〔白河結城文書〕結城彈正少弼顯朝謹言上

欲早被經御沙汰預重御吹擧於京都達愁訴給安堵御下文令知行顯朝幷親父親朝領等事

副進

一通　大將御感御敎書案（於伊達宇津峯致軍忠由事）

二通　同御一見狀案（子細同前）

右如顯朝父子所給、康永二年二月廿五日、京都御敎書者、參御方致軍忠者、建武二年以前知行地、各不可有相違云々、就之云先度軍忠之次第、云年紀以前之所領、令勘錄之、依捧申狀、去々年（貞和二）四月七日預御吹擧、於京都雖歎申、未達上聞之條、愁吟無窮者也、而去年靈山宇津峯御退治之剋、又依致軍忠、預御感御敎書幷御證判畢、案文謹備于右、親朝者所勞之間、差副手者等於顯朝所致戰功也、凡顯朝等依參御方、奥州及坂東凶徒靜謐之條、何事軍忠如之、其上於羽州立谷澤城手者松田太郎須命以來、至于今數ヶ度軍忠之上者、任御敎書旨可預安堵御下文之處、不及御沙汰、寔經數年之條、歎而有餘者也、御約束御敎書於令相違者、啻非顯朝不運之至、難成諸人安堵之思歟、然者急速被經御沙汰預重御吹擧、於京都申子細給安堵御下文、彌爲抽忠勤、恐々言上如件、

貞和四年二月　日

〔蜷川親俊日記〕一松任修理亮和運申狀（天文十九、九、十八）

右子細者、對大津安田次郎左衛門替錢事、任德政御法被成下幷破御下知候間、相付處投返之、剩去年月迫於大坂、和運被官人池田彥太郎ヲ留置、押令請乞之、今度於加州知行分責取條、言語道斷猥藉、無是非次第也、所詮如此爲猥藉人上者、可處罪科、若令重怠ば、隨見合可被加御成敗候旨、被成下御下知ば可忝畏存者也、仍粗謹言上如件、

天文十九年八月三日

物なきとて、其時十九歳に成下女を、法順取て候へば、總別甲州國習にて、地下も町人も質をとらる丶儀を、一向の不覺に存る事、昔より作法此通に候へば、彈左衛門が隣の町人共寄合て、彼法順何と申有共、女をとゞめん儀、やすきといへども、彼僧大きなる徒法師にて、たゞはとめらるまじ、とめられねば、打擲いたさずしては叶まじ、さありて、出家をたゝき候はゞ、何と理をもちても、大慈悲心の御屋形信玄公の國法に、坊主に、杖をあつる事、大方の穿鑿にてもましますまじと、少分なる商人共さへ遠慮して、下女を法順にとられける、かくありて、右の女を二年の間、寺にをく、其内に、女、父、もなきおのこを壹人もつ、町人共の事なれば、彼出家をにくみ、惡名を申事たゞよのつねならぬ批判也、縱訴人にてこれなくとも、此出家の樣子、何とやらんあしければ、侍衆の中にても、法順が惡名を、わらはぬ人はさのみなし、さて又右の彈左衛門、下女とらる丶四年目に、彈左衛門夫婦ながらあひはつる、しかも此者、むすめ一人ありて、別に子とてももたず、扨むすめの男は、八日市とて、やがて其つゞきたる町にゐる者にて、舅の彈左衛門が家屋敷諸道具とも、むこにくれて死する、聟は八日市、魚屋の甚九郎と云商人なり、此甚九郎、法順所へ右の女を返せと云て使をやり、隣の者を賴、佗言しても、法順女を返さゞる故、目安をしたゝめ、奉行所へ申て公事に成て、跡先の算用をきはむれば、出家金子の方に一度取たると申て女をかへさず、○中略信玄公雙方の目安をよませ、聞召、則仰出さる丶、○下略

申狀

〔貞丈雜記九〕一申狀と云は、訴訟の事有之、奉行所へ差出す狀の事也、訴狀とも、目安とも云也、相論の時などに出す也、

〔書札集〕申狀調事、杉原一枚ニ書之、秋田出羽守家次謹言上、右子細書之、被成下御下知者、忝可奉存者也、仍粗言上如件、延德二年八月日、奧ニ御奉行所共、又充所不書事も有之、是ヲ申狀共、訴狀共、目安共申之、

の例在之と云々、

〔太田康有記〕建治三年十二月廿七日、近年使者給事書進入之條、違物儀歟、今度給此目安、以詞可奏、

〔師守記〕貞治三年四月二日丙申

目安

書寫山東圓院院主僧都、與凶徒尊雅子息忠律師相論備後國有福庄內、郡戸階見兩郷事、

右當兩郷本訴陳、理非懸隔之上、謀書顯然之由、就中口訴道理至極之間、被經文殿一揆御沙汰、謀書治定了、〇中略

右少辨藤原朝臣判

〔蔭凉軒日錄〕寛正二年八月廿五日、同慶軒珠英首座訴訟之事有目安、建仁寺如是院領押妨之事伺之、命飯尾左衞門大夫也、

〔今川記五かな目錄追加〕一互遂裁許、公事落著之上、重而めやすを上、訴訟を企る事、證文たゞしき事あらば是非に不及、さもなくして、同口上の筋目申に付ては、罪之輕重を不論、成敗すべき也、

〔甲陽軍鑑十八品第四十八〕山縣同心廣瀨みしな辻彌兵衞武邊公事の事

此度廣瀨みしな兩人にも、小菅〇五郎兵衞並にざいをゆるし下さるゝは、六年後、酉年なり、辻彌兵衞是を聞て、目安をかき、廣瀨みしな兩人をあひ手にて、武邊公事を仕る、

〔甲陽軍鑑十八品第四十八〕甲府淨土宗の僧公事之事

一或年、俗と坊主の公事上、其元を糺て申せば、甲府に三日市場、八日市場とて、日市の立町あり、兩町の內、三日市場に鹽屋彈左衞門と云町人候て、淨土宗の尊體寺と云、わき坊主法順と申出家に、右の彈左衞門金子をかり、年月をへて彼借金澤山になる、使をやれども彈左衞門少もなす事なし、法順、殊外がうの強きあら僧なれば、自身三日市場へゆき、彈左衞門が所へをしこみ、とるべき

〔內宮禰宜荒木田守晨引付〕自愛洲殿可有大湊御發向由愁訴事
抑彼在所者、御鎭座近邊、而久住者、各專役人等也、並御膳料調進舟、出入之津也、然到□所者、必定御供可有懈怠歟、神難此事耳也、且者一天之凶事歟、以之早被成御嚴重御下知、令爲無爲者、御神忠何事如之、爰元體以內外御廳宣□御申御沙汰之條、不能述索、唯奉憑寛宥御助外無他、謹訴狀趣蓋如件、

永正六曆夷則日

〔常照愚草〕ある人訴狀を調しに、いかにも〱うす〱としたる杉原に認て、奉行所へ付て、披露候時、申上所の理非は被打置、餘り疎卑麤相なる料紙不可然之由にて、是非を被打置、不及御裁許候由之沙汰有し也、いかに其身は不肖なりとも、公儀をかろしめたるかたへ相似たる由其風聞也、

〔沙汰未練書〕一目安者　訴陳狀之內、肝要之段々目安云也、

〔簡禮記〕目安之事、料紙ハ訴訟人ノ位ニヨル也、竪紙ニテ可調之、發端ニ名字官途名乘マデ書續、其下ニ謹而言上ト書、次ノ行ヨリ其子細ヲ書出ス事モアリ、又發端ニ、謹而言上トバカリモ書也、書留ノ前ニ可預御披露候、仍言上如件トモ、仍目安之狀如件トモ書之ベシ、年號幾月日トバカリアツテ大方幾日トハ不可有之、發端ニ名字官途等アラバ、日ノ下名官ニ不可及、若發端ニ謹而言上トアラバ、日ノ下名字官途名乘判形等マデ書之事モアル也、但シ之ハ略法ト知ベシ、其時ハ自然奉行所江充所ヲ調ル事モ可有之、本式ニハ充所モ不可有之、總而目安ハ披露狀ノ意得ニテ品々用捨可有儀也、上卷上下ヲ押折、目安ト書之ベシ、尙モ口傳有之、

〔常照愚草〕一公方樣江訴狀の目安を捧事、武家は杉原也、公家門跡は引合を被用、然に常德院殿樣〇足利義尙御代、關東管領上杉四郎と仁木兵部大輔〇丹波仁木事相論之時、目安何も引合也、汲古〇伊勢常照父貞宗へ不審申處、古今引合にも被調云々、又杉原も被用也三職山名なども又一色なども引合に目安

一傍輩罪科未斷以前競望彼所帶事

右積勞效之輩、企所望者常習也、而有所犯之由、令風聞之時、罪狀未定之處、爲望件所領、欲申沈其人之條、所爲之旨敢非正義、就彼申狀有其沙汰者、虎口之讒言、蜂起不可絕歟、

〔建武以來追加〕一奉行人直請取訴狀披露事正長二八廿

論人出帶之時、參差之沙汰出來之條不可然、向後者、上裁幷賦別奉行之外、所被停止也、各可令存知矣、

〔新編追加雜務〕一未處分所領相論配分事

云相論之是非、云得分之多少、始終於引付可有其沙汰、其訴狀等者、安堵奉行人可賦之、

〔沙汰未練書〕一繼訴陳狀事

究三問三答訴陳狀之後、返進訴陳狀之正文於奉行所、訴論人共寄合奉行所、繼訴陳狀可封裏也、上判下判事、正員與代官者正判、代官與代官者、上下打違、領家雜掌與地頭、子細同前、封裏之後、正文者可進置奉行所、御下知者、後事切文書云、文倉遣之也、

〔東寺百合古文書六十八〕六波羅下知狀案文永六年七月五日大番役事

若狹國太良庄雜掌申、號大番用途、令譴責段別錢之由事、

准后御教書副訴狀如此、早可被明申、仍執達如件、

文永六年七月五日

散位在判

陸奥守在判

地頭職

訴。狀。裏。判。

南條左衞門尉

河井右衞門尉

高橋右衞門尉

深田兵衞五郎

訴訟文書

訴狀

鎌倉室町時代ニハ、原告ノ訴狀ヲ、一ニ申狀ト云ヒ、被告ノ答狀ヲ陳狀トモ云ヘリ、而シテ其訴陳兩狀ヲ、又目安トモ解狀トモ云フ、目安トハ訴狀ノ中ニ款目ヲ標シ、一見シテ瞭易カラシムルヲ云フ、而シテ衆人ニテ訴狀ニ署記スルヲ連署ト云フ、

懸物狀トハ、訴陳ノ間、訴人論人互ニ其說ヲ證センガ爲メ、自己ノ所領ヲ賭スルノ意ヲ記シテ、官ニ上ルモノヲ云フ、

具書トハ、訟庭ニ提出スル所ノ證書類ヲ云フナリ、

擧狀トハ、地頭若シクハ權門勢家ヨリ其訴狀ニ副フル所ニシテ、以テ訴訟ノ便ト爲スモノナリ、

官府ハ、訴人ノ訴狀ヲ受理スルトキハ、問狀ヲ論人ニ發シテ、其答辯ヲ求ム、斯クテ訴人論人互ニ狀ヲ以テ訴陳スルコト三回ニ及ビテ止ム、之ヲ三問三答ト云フ、或ハ初問初答、二問二答ニテ止ムモアリ、

官府ノ論人ヲ召喚スル書狀ヲ、召文、又ハ召符等ト云フ、召文ノ中ニテ御教書ト云フハ、執權又ハ管領ヨリ發スルモノニテ、奉書ト云フハ、頭人又ハ奉行人ヨリ發スルモノナリ、又裁判上訴人論人ノ言ヲ注スルモノヲ問注記ト云フ、

又裁判落著スルトキハ、裁許狀ヲ與フ、裁許狀ハ略〻一定ノ書式アリテ、訴訟ノ原因、原被兩造ノ關係ヲ始メ、其辯論ノ要ヲ記シ、證據ノ優劣ヲ揭ゲ、以テ判決ノ理由ヲ示スモノナリ、

〔御成敗式目〕一雖ㇾ給二度々召文一不二參上一科事

右就二訴狀一遣二召文一事、及二三箇度一不二參決一者、訴人有ㇾ理者、直可ㇾ被二裁許一、

石見國
邇摩郡七日、請文十九日、
肥前國
神崎郡八日、請文廿一日、
以上
右訴人の申狀によつて、召文をなさるゝといへども、やゝもすれば令運參、いたづらに日數をへるの間、まるしおかるゝ者也、但御用にまたがひ差遣飛脚等は、其時儀に臨て、早速に往來すべきの條、勿論也、又山口中、人々の事は、五ヶ日中に申あきらむべし、此壁書之次第、若違背せしむる輩においては、可被處罪科之由御評定畢、諸人可有存知之由所被仰出也、仍執達如件、
寬正二年六月廿九日
備中守奉秀明
左衞門大夫奉正安

〔大内家壁書〕従山口於御分國中行程日數事

周防國

大島郡四日(但島末に至りては五日、請文到來日限十五日、) 玖珂郡三日(但山代之庄に至て四日、請文十三日、) 熊毛郡三日、請文十一日、都濃郡二日、請文十一日、 佐波郡一日、請文七日、 吉敷郡一日、請文七日、

長門國

大津郡二日路半、請文十一日、 豐東郡二日、請文九日、 豐西郡二日(但高賀河棚ニ至テハ二日路半、請文十一日、) 原狭郡二日(但津布同坂生至二日路半、請文十一日、) 豐田郡二日(但神田阿川粟野至テハ二日路半、請文十一日、) 吉田郡二日、請文七日、 阿武郡(福田ニ至テハ二日、小川至テ二日路半、請文十一日、椿三見他福得作生勇一日、請文七日、) 厚東郡一日、請文七日、 美禰郡一日(但厚保一日路半、請文八日、)

豐前國

宇佐郡六日、請文十七日、 上毛郡五日、請文十五日、 下毛郡五日、請文十五日、 京都郡四日、請文十二日、 仲津郡四日、請文十三日、 築城郡四日、請文十三日、 田川郡四日、請文十三日、 規矩郡三日、請文十三日、

筑前國

怡土郡七日、請文十九日、 上座郡六日、請文十七日、 下座郡六日、請文十七日、 三笠郡五日、請文十五日、 糟屋郡五日、請文十五日、 那珂郡五日、請文十五日、 席田郡五日、請文十五日、 嘉摩郡四日、請文十三日、 穗波郡四日、請文十三日、 鞍手郡四日、請文十三日、 御牧郡三日、請文十一日、

安藝國

東西條七日、請文十九日、 日當島七日、請文十九日、 呉島五日、請文十五日、 蒲苅島六日、請文十七日、 能美島四日、請文十三日、

父中内左衛門入道定空、相傳知行之間、讓與子息壹岐三郎入道覺實畢、爰定空爲令遺跡雖分讓面面子孫、彼輩無實子之跡者、爲嫡子通房分可領知、又現不調令成他人所領之時者、通房申子細可知行、此兩條者、嫡々相續可致沙汰之旨、文永五年四月十日書置誡狀之處、覺實背彼狀沽却當名於異姓他人同國御家人桑原彌四郎入道道兼之上者、任誡狀可被付總領賴房之由、捧件置文就訴申、雖尋下道兼、背兩度召文。。。。不參之間、延慶元年十二月十七日、以當國御家人陶山小次郎、日奈古孫四郎爲廣等尋問難澀實否之處、如爲廣執進今年二月十九日道兼請文者、當名地頭職者、自本主覺實子息尊智等平道兼子息夜叉丸令相傳領掌之由承伏之上、背度々催促、終以不參對之條、云義理云難澀、無所遁歟、然則於彼地頭職者、任定空置文之旨、賴房可令領掌也者、依仰下知如件、

延慶二年六月十二日　　前上總介平朝臣華押

〔建武年間記〕雜訴決斷所

一出對難澀輩事

於在京輩者、及廻文三ヶ度不承決者、就奉行人之注進有評定、被副別奉行人、以召次幷兩奉行人之使者被尋問難澀實否、以後、以注進狀重經評議可有裁定、至于在國輩者可被下牒於國司守護、過有限之行程論人不參洛者、評定日召國司守護代官於當所、尋執達之實否、難澀之有無、則召置注進可有沙汰、

一訴陳日數事

不可及訴陳之由、先度雖被定其法、對問之時、或互帶證驗可審察事理之類、或事涉疑似、旁叵斷、後訴之輩、於雜務事者、召愁訴陳可有沙汰、尋下訴狀之後、十五ヶ日不辨申者、可被點置論所、其後難澀及十箇日者、可被裁許訴人之、又遁避重申狀過十ヶ日者、可被弃捐訴訟、至于糺斷事者、召置兩方、同時事書可被斷定矣、

於論人出對儀者、〈正長十十二〉壁書炳焉也、至訴人解狀日限者不分明、所詮一問一答之間、可爲七ヶ日、若又於被成答延引奉書者、彼此可爲四十二ヶ日、馳過此日限者、可伺申之矣、

〔室町家成敗寺社御教書〕一論人催促日限事

就訴人解狀、雖相觸當知行之仁、經廿一ヶ日不出帶者、以違背之篇可有御成敗矣、

〔吾妻鏡 三十八〕寬元五年〈○寶治元年〉十二月十二日辛卯、今日被定訴論人參候所、〈○中略〉

右差定奉行人、召問兩方之後、一方致難澁送日數、自對決之日過廿箇日者、不顧理非、任訴人申狀、可有御成敗者、

寶治元年十二月十二日

〔吾妻鏡 三十九〕寶治二年五月廿日丁卯、就雜務等事、有被定下之篇目、雜人訴訟事、雖下度々奉書、論人不敍用、自今以後、召文三箇度之後者、今度令違背者、可有後悔之由、差日數、以國雜色可被下遣召文也、此上或捧自由陳狀、令違期者、任訴狀可有成敗者、

〔吾妻鏡 四十〕建長二年十二月七日戊戌、召文違背罪科事、有其沙汰、三箇度不敍用者、以御使可催促之、猶於令難澁者、隨注申之、可有罪科左右之旨、所被觸三番引付以下方也、

〔吾妻鏡 四十八〕正嘉二年五月十日己未、鎌倉中幷國々雜人沙汰事、被定法、是可仰付主人幷在所地頭事也、其事書樣、

一鎌倉中幷國々雜人沙汰事

奉行人奉書、三箇度不敍用者、可被成御教書、又彼狀雖及三箇度不事行者、於引付尋明子細、事實者、可注申所領之由、可被成御教書、次難治事、同於引付可有其沙汰矣、

〔諸家文書纂 六〕大和前司賴房申、豐前國田河郡柿原名地頭職事、

右當職者、賴房高祖父大和前司入道道賢、右大將家〈○源賴朝〉御代、爲板井兵衛尉種遠之跡、令拜領迄、祖

右就訴狀遣召文事、及三箇度不參決者、訴人有理者、直可被裁許、訴人無理者、又可給他人也、但至所從馬牛幷雜物等者、任員數被糺返之上、可被付寺社修理也、

〔式目抄五〕一雖給度々召文不參上科事

一度ノ召文ハ、一七箇日ヲモテ限トス、三箇度ノ召文ハ、廿一日也、後悔ノ召文トテ、三度召文ノ外ニ、又一度コレヲ付ク、其マデハ廿八日也、後悔ノ召文ハ、飯尾肥前永昌申沙汰也、〇中略召文ノ日限、國ノ遠近ニ依ルベキ歟、

〔沙汰未練書〕一召符御敎書日數事

關東御敎書者、美濃尾張、日數三十日也、六法羅御敎書者、日數二十日也、國御使催促者、十日也、以上過此日數者、云違背也、但依國々遠近、日數遲速有之、

奉行書下日數事 關東六波羅同前

訴論人當參之時、注置宿所在所日數十ヶ日、以三ヶ度可極之、三ヶ度之書下者、以奉行使直付之、

〔建武以來追加〕御成敗條々 應永廿九七廿六　松田丹後入道常胄奉行

一論人催促日限事

就訴人解狀、雖相觸當知行之仁、經廿一ヶ日不出來者、以違背篇可有御成敗矣、

管領政所壁書

一論人出對事 正長元十十一

就訴狀觸遣之處、當知行之輩、令難澀之條、且無理歟、且造意歟、共以非正儀、早奉書到來之後、支狀出帶日數可爲十ヶ日、次論人、奉行請取陳狀證文、催促之時、十ヶ日間可出帶之、彼是不可過廿ヶ日、於其內者不及沙汰、若過此日限者、不謂理非、直可被裁許、訴人至在國族者、隨國遠近、宜有其沙汰焉、

〔蜷川親俊日記〕一訴論人日限事 永正七十二廿

終還御、相州禪室、〇北條時頼自御棧敷令還給之後、及秉燭之期、伊具四郎入道歸山內宅之處、於建長寺前被射殺訖、著簑笠令騎馬之人、相具下部一人、馳過伊具左方、自田舍參鎌倉之人歟之由、伊具所從等存之、落馬之後、知中矢之旨云云、塗毒於其鏃云云、十七日癸巳、依伊具殺害之嫌疑、虜諏方刑部左衞門入道、所被召預對馬前司氏信也、平內左衞門尉俊職、平判官康頼入道孫牧左衞門入道等、同意令露顯云云、是昨日、件兩人會合于諏方、終日傾數坏凝閑談、而諏方伺知伊具歸宅之期、自地起當座馳出路次、射殺之後、又如元及酒宴云云、今日被相尋之處、差昨日會衆爲證人、依論申子細、又被問兩人、各一旦承伏云云、此殺害事、人推察不可覃之處、以諏方舊領被付伊具之間、確執未止歟、其上云箭束、云射樣、已揭焉、頗越普通所爲、依之嫌疑御沙汰出來云云、

〔建武以來追加〕一文書紛失輩訴訟事貞和二閏九廿七評定

可爲內談方所務之由、先日雖有其沙汰、於建武三年已前分者、無事書之間、委細之旨趣、無據糺明歟、任先例尋問當知行之實否、於有證人等者、須成賜紛失安堵御下文、至同年已來分者、守舊規、於事書在所恩賞方、安堵方、問注所、可有其沙汰焉、次不知行地事、於內談方且相尋當時之領主、糺明證跡可是非子細同前、

一方內談武州方奉行人同門眞左衞門入道寂意

〔建武以來追加〕管領政所壁書

關所證人事長祿四九五

〔關所出來之時、就證人注進被恩補者、古今例也、然本主等、無咎旨依歎申之、糺明之處無其誤者、於知行分者、被返付本主、至證人者、可被處遠流、本主又自科乍令露顯、或致庭中、或爲權家及訴訟者、同可被處流刑矣、

〔御成敗式目〕一雖給度々召文不參上科事

參決日數

〔甲陽軍鑑品第四十七十七〕落合彥助と百姓と公事附雜言幷に三法印佗言之事

若敵方、口をとり候はゞ、そこにては其身も申やみ候はん物を、申出さゞる以前に、定て大事は有まじきぞ、

〔信玄家法上〕一於于出沙汰輩者、可待裁許之處、相論半、不決理非致狼藉之條、非無越度、然者不及善惡、可付論所敵人、

〔御成敗式目追加〕一諸人相論事

右證文顯然之時者、不及子細、若證文不分明者、可被叙用證人申狀也、又證文顯然之時者、證人申狀不能叙用歟、又證文與證人、共以不分明者、可及起請文歟、證文證人顯然之時者、不及起請文也、

〔新加制式〕一相論之時出證人事

右雙方共令領解、出證人、既糺明之處、无理之一方、重而可出別之證人旨、雖謝申之、不可有擧用、將又件證人、以贔屓掠申之段顯著者、隨其咎、或被沒收所領、或可被行死罪、

〔吾妻鏡七〕文治三年三月十日壬子、土佐國住人夜須七郎行宗與梶原平三景時、遂對問、二品〇源賴朝直令決斷之給、行宗壇浦合戰之時、生虜平氏家人周防國住人岩國二郎兼秀、同三郎兼末等、召進畢、募其功、可被行賞之由、日來言上之處、景時支申云、彼合戰之比、全無稱夜須之者、件兼秀等者、自然歸降之輩也、經年序後、行宗廻奸曲、申子細之由訴申之、而行宗彼時者、與春日部兵衞尉、令乘同船之由、令陳謝之間、召出春日部、被尋問之處、申勿論之旨、已爲分明證人、仍可被加賞之趣被仰含行宗、景時依讒訴之科、可作鎌倉中道路云云、俊兼奉行之、

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年五月十六日癸亥、兄弟相論之時、以父母立申證人事、天野和泉前司子息兄弟等相論之時、以母堂雖立申證人、自今以後、不可被許容之由、今日及評定云云、

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年八月十六日壬辰、將軍家〇宗尊親王御參鶴岡宮寺、馬場流鏑馬以下儀如例、事

正應四年二月三日　陸奥守　判

相模守　判

尾藤内左衛門入道殿

小野澤亮次郎入道殿

〔建武以來追加〕管領政所壁書

一押領不知行地後經訴訟事(永享元十二七)

有愁訴者企訴訟、可仰御成敗之處、猥先乍令押領致訴訟之條、造意至、難遁罪科、所詮雖寄事於親類被官人等、不可被敍用、縱又雖爲理運、處彼咎、可被付論所於敵人也焉、

〔鶴岡事書案〕應永二年閏七月廿五日

一白山神宮寺免田當作毛事、本主三位アザリ申、於身之無罪科之間、難被成公物ニ候、又御沙汰落居已前、上御使以當郷人夫カリオカレ候間、不可被付敵方候、(○下略)

〔建内記〕嘉吉三年七月廿日癸酉、今日於管領以須田右京亮示建聖院事、訴陳之趣、理非事舊了、去年冬被尋評定衆之意見、各以當方申理運之由云々、此上は可爲御計一段歟、若又猶有御不審之子細ば、所詮被任壁書之面(管領有壁書)先可有御成敗哉、如壁書は、不知行之地、不致訴訟令押領ば、可被處罪科、依其咎可被付論所於敵人由被載候、今此寺院事、不事問押領之條、不便也、尤可被任此大法歟、彼方更不可被恨申事歟、且公方御違例時分、被任道理者、可爲御祈禱之至、併以御祈禱之旨可有申御沙汰哉、且來廿四日、開山忌也、其以前被復憑存之由示了、返答云、此事兩奉行披露之趣、委存知候、來廿四日以前可申付之處、公方樣御違例之間、毎事先止沙汰候、御本復には最前申談、一途可成敗候、此事雖不承候、遂可申付之處、今時分候之間、無等閑之由返答也、且以安堵、一向憑入候由、委示候者也、

違、

管領政所壁書

一訴論人、望請權門吹擧事、正長元十十一

任先條之制法、堅所被停止也、

一奉行人直請取訴狀披露事正長二八卅

論人出帶之時、參差之沙汰、出來之條不可然、向後者、上裁幷賦別奉行之外、所被停止也、各可令存知矣、

一就諸人訴論借女付比丘尼口入事長享二五六、右筆飯尾大和入道宗勝、

如近日者、得訴論人之語、不謂尊卑、或執申之、或口入之條不可然、任先例、向後彌可被停止之、若背此旨於執申仁者、可被召所領、無所帶者、可被處流刑、至訴論人者、縱雖爲理運、永可被弃置之矣、

〔新加制式〕一改舊境致相論事

右如式目者、割分訴人領地之內、被付論人云々、

〔新加制式〕一固可有禁止賄貨事

若訴論人、密及貨之沙汰者、評定衆、互遂白狀、可有其計、

〔吾妻鏡四十〕建長二年十二月七日戊戌、召文違輩罪科事、有其沙汰、三箇度不敍用者、以御使可催促之、猶於令難澀者、隨注申之、可有罪科左右之旨、所被觸三番引付以下方也、

〔尺素往來〕本領事、近年庶子等成敵人、構種々之奸濫曲折、

〔新編追加雜務〕一鎭西輩訴訟事

或雖抽軍忠、奉行人、依有阿黨事令漏注進、或所務相論之處、令引汲敵人之間、不注申之由訴申輩有之、如此族訴訟事、尋究子細、可令注進之狀、依仰執達如件、

論人

親前之訴訟の筋目を存、いはれざる事をば相押、加異見により、前後ゑらざる者を頼み、我道理計を申により、無覺悟なる者共、取次事多也、但寄親道理たゞしき上を贔屓の沙汰をいたし押置歟、又敵方計策歟、又は國のため大事にいたりては、以密儀たよりよき樣に可申も不苦也、

〔運歩色葉集 路〕論人(ロンニン)

〔建武以來追加〕一近江國船木庄雜掌申一井太郎左衛門尉賴景道國以下濫妨狼藉事(暦應二十十五評)

凡就院宣、無左右被施行者、參差之沙汰可出來歟、任舊規、召上論人、可有其沙汰、

〔建武以來追加〕一諸國守護人以下使節緩怠事(康永三七四御沙汰)

或可沙汰付下地之旨被仰下、或可催上論人之由觸遣之處、遵行遲引之條、甚以不可然、向後於難澁使者者、須被收公所帶矣、

諸國守護人非法條々

一大犯三箇條(付苅田狼藉、使節遵行、)外相綺所務、以下成地頭御家人煩事

得論人當知行人語、下知遵行難澁事、或分取訴論人所領、或押領國中闕所、構表裏沙汰事、

一寺社本所領事(觀應三八廿一御沙汰)

先召出守護專使等代、幷當參論人兩奉行人、加問答、尋究遵行難澁之旨趣之後、尙可施行哉否、可有其沙汰矣、

一寺社本所領事(文和元十一十五御沙汰)

所詮且取調先日散狀、召出守護代幷論人等、尋究遵行難澁之旨趣、陳謝無謂者、准先例可勘申罪名、

寺社本所領條々(延文二九十御沙汰)

一非分亂妨輩事

今年七月已後、連々施行之處、多未事行云々、云論人、云守護、可處嚴科之旨、其沙汰先畢、今更不可相

道理乎、速可被付訴人、次又訴人乍申請召文、公事式日不參上者、百ヶ日可被押紀明、

〔吾妻鏡二〕治承五年（○養和元年）三月十四日庚寅、淺羽庄司相良三郎等事、就一方欝陶、難被處罪科之由、被仰含于武藤五之處、武藤申云、爲訴彼等奇恠、被進使者之由、披露國中畢、而不蒙裁許、而空令歸國者、其威勢如無欺、後日若聞食虛訴之旨者、可被行使於斬罪者、依之於彼領者、義定主、可領掌之旨有御消息、但宗信等後日陳謝、若有其謂者、還可被處訴人於罪科之趣、被載之云云、

〔吾妻鏡三十八〕寬元五年（○寶治元年）十二月十二日辛卯、今日被定訴論人參候所、其狀云、

一訴訟人座籍事

侍客人座（奉行人召外、不可參後座）

郎等廣庇（召外不可參、南廣庇、但陸奧沙汰之時者、隨召可參、郡鄕沙汰人者、依時儀可參小様）

雜人大庭（不應召外、相模武藏雜人等、不可參入南坪）

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年十月十二日甲午、評定之時、訴人近々伺候事、向後可被停止云云、猶有推參之輩者、任法可致沙汰之由、尾藤左近將監、平三左衞門尉盛綱、南條七郎、安東左衞門尉等被仰付、是併泰貞依狼藉也、彼於所帶、理運之間被付家重云云、

訴人代理

〔甲陽軍鑑十八品第四十八〕甲府淨土宗の僧公事之事

縱訴人にてこれなくとも、此出家の樣子何とやらんあしければ、侍衆の中にても、法順が惡名をわらはぬ人はさのみなし、

〔建武以來追加〕條々（永正六五九）

一付置訴人、申狀以下、屬別人致訴訟事、

任法可被仰裁許焉

〔今川記五かな目錄追加〕一各同心與力の者、他人をたのみ、內儀と號し訴訟を申事停止之、其謂は寄

仰甲乙之訴訟裁報、豈有私、而任理致雖有成敗、訴人於求奥竈之媚、或任賄賂之思、財有六态不憚枉法、金有四知不慙天地、古猶爾、今宜禁、訴人若致賄者、雖抱理訴先抑上裁、可誡後昆、其事爭及天聽哉、然而至嚴密之制者、誰敢費己財、背天命者乎、

〔御成敗式目〕起請

御評定間理非決斷事

御成敗事、切々條々、縱雖不違道理、一同之憲法也、設雖被行非據、一同之越度也、自今以後、相向訴人幷其緣者、自身者雖存道理、傍輩之中、以其人之說致聊違亂之由有其聞者、已非一味之義、殆貽諸人之嘲者歟、

〔建武以來追加〕被仰出條々　文明八八廿四

一就當知行申給安堵御判幷奉書等事

堅致糺明之、領知無相違之旨、召置訴人請文、可伺申之、

條々　文明九八廿七、于時公人奉行松田丹後守秀興奉行之、

一成懸御敎書幷奉書等事、不及伺申訓遣之段、先規勿論也、雖然於訴人掠申之儀者、可有御糺明、

〔建武以來追加〕一當參輩所領事

有訴人、雖及訴訟、任本法相觸當知行之仁、可經次第沙汰、

〔新加制式〕一中間狼藉咎事

右理非之趣、被遂淵底之處、其中間致狼藉之條、太以濫吹也、於論所者、可被付訴人、訴人無理者、可有別御計者乎、

一雖給三ヶ度召文不上科事

右式目之趣既顯著也、〇中略　將又論人召文、三ヶ度之終日、適雖令參決、不對合裁許、所行之企、尤非

古事類苑

法律部二十八

中編

訴訟人

鎌倉室町ノ時代ニハ、訴訟ヲ起スモノヲ訴人ト云ヒ、訴ヘラルヽモノヲ論人ト云ヒ、兩者互ニ相謂テ、敵人又ハ敵方ト云フ、訴人若シクハ論人ノ論辯ヲ證言スル人ヲ證人ト云フ、

貞永式目ノ制ハ、論人、召文ヲ受クル時ハ、七日內ニ參決スルノ制ナリ、參決トハ法庭ニ出デテ對決スルノ謂ナリ、而シテ三回ノ召文ヲ發シ、日數二十一日ヲ經テ、論人猶ホ參決セザルトキハ、更ニ一回ノ召喚狀ヲ發ス、之ヲ後悔召文ト云フ、而シテ猶ホ應ゼザルトキハ、原告人ノ申狀ニ任セテ裁決ス、但シ里程ノ遠近ニ由リテ、日數ニ差アリ、朝廷ノ制ノ如キハ、不明ノ處多キヲ以テ、僅ニ二三ノ例ヲ篇末ニ附記スルノミ、

〔運歩色葉集楚〕訴人

〔沙汰未練書〕沙汰者

一訴人者、人ヲ訴ルヲ云也、

一論人者、人ニ陳ルヲ云也、

以之謂訴論人也、

〔公家新制四十一箇條〕弘長三年八月十三日宣旨〇中略

一可停止上下訴人賄賂事

古事類苑

法律部二十八

中編

訴訟人

訴訟文書

る事に候へば、うへをかねても旁もつて曲淵は事故なく我家に歸る也、

〔見聞雜錄〕甲府奉行所へ、俗と坊主との公事上る、武藤三河守、櫻井安藝守、今福淨閑、此三人奉行故、捌筈なれども、信玄公御念を被レ入、寺社領之公事出入、內證にて不レ可レ捌、一國之支置と云內、寺領社領は末代迄殘て、何れの代、何れの國主之捌、是は非理と古今之評判する物也、然ば奉行の入念候ても、捌損じ有ては、信玄隨分と萬事正敷置ても、九善一惡之失有との被二仰付一故、三奉行より申上、御前公事ニ成、

〔甲陽軍鑑十七品第四十七〕長沼長助長八親敵討事附增城源八郎と同長助長八公事之事
是は只の事にあらず、侍道の事なれば、目安をもつて信玄公の御さばきに仕られ、それにてまけなば、それは兩人次第と、石田矢崎飯室三人、長沼兄弟に異見いたす故、目安あがり御前公事になる、

〔永祿記〕永祿八年五月十九日、淸水參詣と號し、早朝より人數を寄せ、其時に當て公方様〇足利義輝へ訴訟有よし申觸て、三好〇義次訴狀を捧て、條々御點を申請る、其間に御構へ人數を入者也、御母慶壽院殿、御女義たるによりて、訴訟叶へ給ふにおゐては、公方樣御恙有べからずと思召て、御點は如何樣にも加へ給ふべきよし、嗁くごき御意見樣々御申、さりともとの御心中の程察し奉りて、見る人聞もの、袖を濕す計なり、〇又見二久米田軍記、二川分流記、總見記等一、

上意爲レ然也、

〔多聞院日記〕文明十六年十一月廿日、山城幷當國兩國寺社領、諸院諸坊領之事、號二畠山右衛門佐下知一、彼被官衆等、或致二押妨一、或相二懸新儀非分課役ヲ一致二亂惡一事、近年追レ日而乞二增倍一之條、非レ削二神國稱號一、號二寺社滅亡一、法會懈怠之至極也、仍學侶評定、而可レ及二訴訟一云々、

〔甲陽軍鑑品第四十七〕曲淵少左衛門公事負、雜言仕義、櫻井殿訴訟之事、

一甲陽の武田信玄公御一家の板垣信形ざうりとりに、鳥若と申者を、後には曲淵少左衛門と申て、かくれなき武邊のほまれの者也、彼者只今四十歳にあまるまで、公事を仕る事七十四五度なり、其内一度勝、一度はあつかひに仕る、殘は皆負候、或時彼曲淵公事を仕負座敷を立ながら、此度の公事は私負まじき公事なれ共、奉行衆へ音信を仕らざる故負候なり、重て公事をいたし候はば、是非共栗柿を用意し持て參るべく候、ことに我等の在所は、さはし柿の上手にて候へば、重て持參申べく候と雜言仕る、四奉行腹立給ふ樣に候へ共、三人は遠慮して其挨拶もなし、其中に小身にて候へども、櫻井殿はちかき御親類の事なれば、いひ兼給ふ色もなく、腹をたて御申候は、曲淵殿は、近來勿體なき事を承候物哉、上義をかろしめ申にこそ、左樣のさたもあるべきに、是程御法度つよき文武二道のほまれ、誠に近國他國までゆかしくましまず御大將のさたにて、左樣のうしろぐらき事を仕べく候や、重て公事をなされ候はゞ、理究を持參候へ、無理なる事に候はゞ金銀米錢を、たとへば車につみ持來候とも、其方まけたるべしと御申候へば、曲淵少左衛門、座敷をたち、かたなをさし、又奉行所へゆき、奉行衆に向ひ、手をつき謹て申は、櫻井殿には、御位と御出頭はまけ申べく候、切あひぐらは勝申べく候間、これ口惜くおぼしめし候はゞ、只今御出候へ、場中にてすかうをきりくだき進ずべきよし申て、刀をねぢまはし座敷を立候、さすがに大剛の者なれば、當座に何事もならず、其うへ信玄公のあの樣なるおぼえの者を、淺からず御馳走なさる

江可返置、但依境遠、其理遲延之事、五七日迄者、不可苦歟、

〔沙石集 一〕淨土門之人經神明蒙罰事

鎭西ニ淨土宗ノ學匠ノ俗アリケリ、所領ノ中ノ神田ヲ撿注シテ餘田ヲトル間、社僧神官等イキドヲリ申、鎌倉ニテ訴訟シケレドモ、餘田ヲトル事、地頭ノ申トコロ一分道理トテ、無沙汰ナリケル間、地頭ニ猶々申トモ、大方ユルサズ、〇下略

〔吾妻鏡 七〕文治三年正月十九日辛酉、文治元年、所被寄附于希義主墳墓之、土佐國津崎在家等、爲甲乙人致濫妨狼藉之間、琳猷上人參訴右武衞、〇能保仍可停止濫吹之由被加下知訖、彼上人雖可參訴關東、行程隔遠路之條、武衞爲二品〇源頼朝御耳目在京之間、如此云云、

〔吾妻鏡 十八〕建仁四年〇元久元年五月八日庚午、就國司等之訴、有被經沙汰之事、所謂山海狩漁、可從國衙所役事、鹽屋所當、以三分一爲地頭分、可止抑留之儀事、節料燒米可爲國司德分事、以上三箇條、且隨國宜、且任先例可致沙汰之旨、被仰付地頭等、左衞門尉義村左京進仲業爲奉行云云、

〔康富記〕寶德三年八月十三日己卯、或語云、琉球島船、商人去月末、着兵庫津之處、守護細川京兆、〇時元早遣人被商物撰取、未渡料足之間、先々年々料足未進物、及四五千貫無返辨、又賣物抑留、爲島人難堪之由申之間、自公方被下遣奉行三人、〇布施下野守、飯尾與三左衞門、同六郎、被糺明之處被押取之物、自京兆未被返、依之奉行未上洛云々、京兆者、前管領也、希代之所行哉、如何々々、

〔蔭凉軒日錄〕長祿三年十月七日、赤松次郎法師、〇政則加賀國半分、以御奉書欲入部、及違亂云々、重可被成御奉書之由被仰出也、伊勢兵庫助、幷布施下野守致披露、可被成奉書之由被仰出也、　十一日、就賀州赤松次郎法師合戰事、依諸方訴申、以伊勢兵庫助殿、飯尾加賀守、同左衞門大夫、可止國中忩劇之由被仰出也、答謹白、自此方、雖不及違亂、自富樫被管岩室、率國中之大勢寄來于此方、故不能避之而合戰、雖然不在次郎法師結構、其支證奉公倉光若狹守兼存知之、稱告之間、可有御尋之由申之、

之煩、更無落居之儀歟者、云地頭所從、云百姓下人、前々事者、共以不及沙汰、至自今以後者、相互可令糺返、早守此旨、可被加下知之狀、依仰執達如件、

寛元二年七月七日　　左近將監　判

太田民部殿

〔新編追加雜務〕一奴婢相論事○目錄云、正應四三十六、

右無其沙汰過十箇年者、不論理非不及沙汰之旨、被載式目畢、而所領知行之間、召仕百姓子息所從之後、稱過十箇年、永令進退服仕、或令他行之時、號所從相懸煩云々、事實者無其謂、付田地召仕百姓子息所從等事、縱雖歷年序、宜任彼輩意矣、

一雜人事○目錄云、寛元三、

兩方御家人事者、如關東被定置、不論是非、限廿箇年可被成敗、一方京都、一方御家人事者、任道理可被裁許也、

〔新編追加政所〕一依不償負累、爲質物被押取子息所從等雜人事

如式目者、奴婢雜人事、無其沙汰過十箇年者、不論是非、不及改沙汰云々者、被押取質人之後、不經訴訟、不致其辨、空過十箇年者、件質人可爲物主之進退也、不過十箇年之負物者、致一倍之辨、可被糺返質人歟、

〔新編追加雜務〕一所從事十二月廿五日、遣六波羅狀也、

雖爲相傳、不知行方、無其沙汰、過十箇年者、稱不可沙汰、又無指由緖召仕輩、經十箇年之後、相傳號經沙汰之條、不可然之間、自今以後、不可及沙汰也、

武藏前司入道殿在判

〔信玄家法上〕一奴婢雜人之事者、無其沙汰過十ヶ年者、任式目不可改之、

一奴婢之逐電以後、自然於路頭見合次第、欲糺當主人、本主私宅江召連事、非法之至歟、先當主人方

坊田不動堂下地可被返付事、三位禪啓被處重科可被沸地下事等也、伊勢因幡守、以奉書被仰出之間、可成賜之由三方入道申云々、就其目安御書等賜之、廣橋常宗ニ可申之由三位申嗷訴、驚入者也、

〔親長卿記〕文明四年正月十六日、自廣橋大納言許有使、早水越中鴨社供僧事就補任料相論六口之内一口未補、仍明後日十八日修正可闕怠、御祈禱怠轉不可然、仍可致無爲之沙汰之由、可下知云々、得其意之由返答了、

盲人訴訟

〔續史愚抄光明〕曆應三年九月四日甲寅、有盲人相論事、於入道內大臣通顯第召決之、通冬卿記

奴婢訴訟

〔御成敗式目〕一奴婢雜人事

右任右大將家〇源賴朝御時之例、無其沙汰過十箇年者、不論理非不及改沙汰、次奴婢所生之男女事、如法意者、雖有子細、任同御時之例、男者付父、女者可付母也、

〔新編追加雜務〕一奴婢雜人年紀事、式目明鏡之上、不可子細候、件男子相論事、於先夫同家之子息等者、不謂年限、男者付父、女者被付母之條、勿論之次第候歟、恐々謹言、

延應〇延應一本作正嘉元年三月廿四日

行定判

重佐判

實成判

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年〇寬元元年四月廿日丙寅、奴婢等事及評定、越堺下人事、地頭等有不知之子細、年來於令留之輩者、不論年紀、今更非沙汰之限、百姓下人者爲十箇年內者可返與云云、十二月廿二日甲午、奴婢雜人男女子息之事、有其沙汰、十歲內可被付父母、十歲以後、就年紀可有御成敗、於京都族者、不及御口入云云、

〔新編追加雜務〕一越堺下人事、如去四月廿日御教書者、於地頭所從前々事者、不及改沙汰、自今以後、可令糺返之、至百姓下人者、爲十箇年內者可返與云々、而地頭所從與百姓下人令分別者還有沙汰

等被紀明之時、云船貨云船等、爲道妙遺物之條、不可有其隱者也、然早至豐後房等者、相觸在所之撿斷被令處罪科、於四艘之船、幷千餘貫之錢貨者、急速被紀渡于後室、欲訪道妙之後生菩提矣、仍粗言上如件、

建武四年六月日

伊勢國住尼法宗重申

爲定願幷豐後房〈不知實名〉等、御使春眞雖付渡御下知訴狀等、違背御成敗旨、不及是非陳狀上者、於所抑留四艘船、幷千餘貫錢者、急速被紀渡于法宗、至其身等者、相觸在所撿斷、欲被令紀行非分抑留科事、

副進

二通　政所殿御下知御使告狀案

右子細先度言上畢、所詮彼等非分抑留、無所于陳謝條勿論也、然早於四艘之船、幷千餘貫之錢等者、急速可沙汰于法宗之由、重被仰下之、至其身等者、相觸在所撿斷、爲申行罪科、重言上如件、

建武四年七月日

伊勢國住尼法宗申、抑留亡夫道妙令出立船四艘、入于船用途千餘貫、稱可令配分、不分御度於法宗由事、政所殿下知訴狀如此、子細見于狀歟、任其旨可被紀返抑留錢貨、若所存候者、可被辨申候、あなかしこ〳〵、

六月九日　春眞

阿久志島豐後公御房等中

〔看聞日記〕應永廿六年四月十五日、三位禪啓、三方許へ罷出、晚禪啓先歸參申之、三方對面、三木訴訟事也、所詮載目安、條々訟申之趣、無垢庵幷善理善康等宿所可被造返事、名田畠年貢可紀返事、兩僧

佛意、不憚人謗、適乍黷禪徒之名字、專是佛法之怨敵也、往昔未曾有之重犯者也、違多之造五逆、墮三途也、未盜佛經兮、好不僻沙汰、審多之滅佛法、破僧坊也、未盜內財兮、竊不致商賣、於惠觀者、壞除堂舍之合子、而中盜佛經、破取僧坊之四壁、而外沽內財畢、凡言語道斷之梟惡也、前代未聞之狼唳者哉、惠觀者、雖爲故平等長老之門弟、存生之間、終無被免勘當之也、分兮人滅之後、未聞會彼追善之由者也、邪見放逸、不當法師也、仍以委細欲記其行儀者、薄紙猶狹兮、短筆叵覃乎、彼上宮太子憲法云、懲惡勸善、古之良典、是以無匿人善、見惡必匡云々、又云、宜明賞罰云々、本地大慈大悲救世觀音之垂跡、往古之聖代、明時炳誡之記文、如此文今所訴申、更無私曲、速至惠觀者、可被斷罪者也、抑來廿八日、可參對由事、朝眞謝所勞難治之折節也、不存自由之儀、但惠觀犯科露顯之上者、雖不及被召合、不可有御不審歟、阿月房、又難參對之由、令言上云々、於佛具者、忩可被召出之、幸爲當卿撿斷之御使、如此事雖不申子細、尤可被進散狀者哉、若被成憚僧體可及罪科豫儀者、新古不依有驗高德、不論貴賤賢愚、有過之徒、被辜之例不可勝計者也、然則早被召籠惠觀已下之盜人等、(已下闕)

〔光明寺舊記　一〕伊勢國住尼法宗申

欲早總官御在洛上者、任先規傍例、蒙御成敗、爲駿河國江尻住人定願(亡夫阿久志左衞門入道道妙舍弟)幷阿久志島住豐後房(不知實名、道妙舍弟)等、抑留亡夫道妙令出立船四艘、入于船用途口余貫、稱可令配分、不沙汰渡于法宗(後家法名)條、猛惡奸謀、無比類上者、於拘留錢貨幷船等者、急速被糺渡可口室至其身者、相觸在所撿斷、欲被令處罪科子細事、

右於亡夫道妙者、無一子、法宗同雖無子、令剃髮守志、而口在室之間、夫妻同財之故、彼遺財之船、錢貨以下、法宗可令得分之條、尤法意之所推也、爰彼豐後房等、縱雖爲道妙之舍弟、閣後室爭可致非分支配之藝行哉、雅意之企、猛惡之至也、所詮件四艘船頭之中、至麻生浦住人刑部太郎者、雖令死去、於泊浦小里住兵衞太郎(道妙姬聟)阿久志住九郎三郎(豐後房聟)同住松法師三郎等者、令現存之上者、召寄彼船頭

狀、相折事、以三果只可被定宛歟、至雜物配分事者、如最前言上、付十町給田、定有其雜事歟、以其由被仰含、有何難哉、訴人恣言上、一々裁許、强不可然、只以道理被仰下之條、不可有物議、凡以前沙汰之分限不知之、而始至被作下其法之條者、暗以難計申、不知食彼時之子細、被定仰其員數事、總以不可然事歟、已皆政途法之故也、又相折分、可切給田代之由申請之條、實齊定貽鬱訴歟、但先以此旨被仰實齊、可被聞食左右歟、實齊難澀申者、自上猶儘可宛給之由、難被仰下歟、是公氏卿存生之間、沙汰置之趣、不可相違之故也、若實齊和尙申者、勿論歟、

人々申旨雖多其詞、所詮旨趣大略如此歟、（相折分可切給田代事、被仰實齊可聞食歟之條、其一篇經高申狀被同哉否事、分明不承之、）但帥中納言申狀、五字不審無指證、只疑殆許歟、不被糺決者、難被定于詐僞歟之由令申歟、其外事憖不覺悟、可被尋歟、吉田中納言申狀、五字不審勿論事歟、不被糺決者、向後世々、狼藉人々奇謀不可絕歟、被糺決之條可宜歟、而其條難叶者、難給歟之由令申歟、（此條者、經高已下、各存申此由歟、）其外事、憖又不覺悟、同可被尋歟、但以三果被定宛之條者、大旨一同申歟、抑配分間事、就被仰下之間、可分給事分之由、先可被仰下歟之由、賴尙爲景令計申之條者、人々一同不可然之儀歟之由令申歟、但帥卿存申之旨、憖不承也、

於當座令書事、人々意趣、猶有相貽事、何況經數日之後、隨案出注付之條、定有脫漏事歟、又憖不覺之由雖申、事只隨覺悟、猶可注進之由、被仰之間、隨案出愁注進之也、

〔光明寺舊記 五〕妙樂寺別當代朝眞謹言上

欲早被召籠盜人惠觀師弟所從已下輩等、云證人、云贓物、所犯露顯、當寺佛具四前、內三前者、阿月房買得由、對御使承伏勿論云々、於佛具者、先被返付于寺家、至其外物等者、嚴密被召問成願法師妻子等、可有御尋子細事、

右惠觀恣雖盜取妙樂寺三寶物、誇罪科之遲々、剩捧大犯身、自由參對申狀歟、奸謀之至極、比與之次第也、假雖爲無過之禪律、僧侶直參之訴訟者、當時殊公家武家之嚴制也、總經論聖敎之禁戒也、不恐

ましを忘るしをけり、代々の長老、このおもふきをあきらむべし、我すでに春秋ををくる事八十年にみてり、人間の無常いくばくか眼にさへぎる、おりにふるゝあはれことに身をかへりみるおもひふかし、みづから三寶を供養せん事いまいくほどかあらん、ねがはくは生々に佛を見、法をきゝ、僧を供する身とならん、三寶の威力によるがゆへに、あまねく衆生を利益せん、

文永九年八月日

〔平戸記〕寛元二年四月十八日戊子、今日關白殿、（〇藤原兼實、中略、）御參內、即還御云々、予（〇平經高）參以前、大藏卿獨參、言談之間、已及申剋、其後帥吉田中納言、新宰相等相談參入御禊了各依召參御出居方、先之被下文書、各見了、是敎譽僧都、與實齊僧都相論、周防國田布勢庄之間也、此事自先年有沙汰、評定已及度々了、然而已及度々了、今又無別子細、只被下彼時文書也、仍各强不懸披覽之淵源、此事議定已及度々了、然而猶有所申之旨、（相折事、今又五果之由申之、而本者爲三果之由、實齊僧都申之、敎譽以三字直五字、仍有疑殆之由、記錄所申之也、其事又各沙汰、此外雜物等、可被配分之由、敎譽猶申也、）仍重有議定也、記錄所寄人少々被召、爲景賴尙兩人參入、勘者宣業雖被召、申障不參云々、各以議定、五字事、旁有疑殆之由、人々申之、但帥卿不被糺決者、暗以難定謀事之由申之、吉田中納言尤可被糺決、如此事無沙汰者、向後人々猥藉、不可斷歟之由申之、大旨此外人々申狀如此、被糺問事、僧綱已上者、又不可叶之間、雖被決定歟之由又令申、彼是不落居、又被召寄人等申狀、五字之疑事勿論、就之只可給三果歟、五字之疑、至罪科之條歟、可在勅定、雜物配分事、當所更難左右之由申切了、

廿五日乙未、午斜參殿下、（〇二條殿、中略、）良久候御前、一日之召田布施議定事等、粗注進了、（〇中略）

田布施問事注進狀

田布施事

件事度々議定之時、所存之趣言上先訖、其外愚慮不及、但五字事、所進之狀不審誠胎、非無疑殆、記錄所申狀、頗有其謂、尤可被糺決歟、而如今日之議者、其條又難叶事歟云々、然于今如記錄所寄人等申

注進、可早被經次第上奏、被破却吉田之今神明、於兼倶卿者、一段預御糺明、彌專天下泰平、國家安全御祈禱間事、

右大神宮御神體、飛御坐吉田之由、就兼倶卿注進、則迎禁裏有叡覽、剩其儀爲勿論之由、被成下綸旨勅書等云々、爲事實者、言語道斷次第也、抑天照大神、自高天原於下界可有御鎭坐地視給、下賜五十鈴之靈寶、則相留當宮今之五十鈴河上、如是神代自天上定御坐、當宮淸淨之靈地也、何爲飛御坐下七社吉田矣、神不享非禮者也、併彼兼倶卿爲虛言、謾奉輕神慮叡慮之條、以外子細也、然預許容之條、神慮難測者也、所詮不日、被召返彼綸旨勅書等者、止神宮愁訴、彌可奉抽御祈禱之忠節者也、仍注進言上如件、以解、

延德元年十二月日　大內人正六位上荒木田神主定治上

禰宜從四位下荒木田神主守朝

禰宜正五位下荒木田神主守則○下略

〔大通寺文書〕本願禪尼自筆記錄

記錄　遍照心院

條々事○中略

一寺家に訴訟あらん時用意すべき事

世のくだるにしたがひて、人の心も正直ならず、事にふれてそのわづらひ有べし、もし我寺にうれへあらん時は、事のよしを注て、將軍家に申べし、初度のそ狀にその理非をつくすべし、かさねて訴陳すべからず、問注におよぶ事なかれ、そのゆへ、これをしるべし、又僧侶は道業に心をかけて、世事をいとふものなり、たとい雜掌なりといふとも、このよしを存知すべし、寺門の安穩ならん事、これを思とせり、このゆへにかねてゆくすゑのわづらひをかゞみて、そのあら

之間、日中奏聞不可叶、職事于今無改補之儀、今日神事、先可遂行歟之由仰了、及夜陰有召參御前、(御冠)未被召、只今自御湯殿令上給云々、鴨社社務職事、日野前內府(勝光)申云、祐尙無誤之處、可被取御鬮子之由、及御沙汰事、按察張行之故也、愚老(前內府)執申事、達予所存、如此申行歟、執奏後悔之由申之云々、此申狀言語道斷也、昨日可有淸濁、能々可被經御沙汰之由執申間、已此間及兩三問、猶不一決之間、被尋一社之處、申狀左右也、仍依難被決、可被取御鬮子之由被仰定了、此事勸修寺大納言、廣橋大納言、予等兩三人意見之處、何予一人張行之由申之哉、所詮每事御沙汰之事、如仰違背之所存之間、善惡無答事也、不可及是非之由有仰、祐尙申狀奏聞、有叡覽被留御前、其後無是非勅答、　七月二日、今度兩三卿就意見可被取御鬮子之分、叡慮治定之處、按察一身張行事、若有趣旨歟、可召進祐尙無誤之由誰人申哉、儻可申之由、被仰前內府云々、入夜所談、每事御政務事、無益之間、可有御隱遁之由、俄被思食云々、女中種々有被申旨、今夜先被略云々、　十三日、參內、源中納言(雅行)民部卿(源忠富)示云、鴨社事、疎骨申狀、可有勅免之由、頻前內府懇望之間、有勅免之由、可語予之由有勅定云々、誠可然之由申入了、其次社家事、被打捨之條、不可然之由申入了、　十六日、鴨社氏人宿老三人來、當社社務未定不可然、早々可被定仰云々、及晚參內、依召也、鴨社事、被打捨之條不可然、所詮宜之樣可計申、又被定社務職者、可被定年記之法歟、其謂者、每度依職之望及訴論、不可然、於此段各加談合可定申云々、廣橋大納言祗候、申云、誠被定年限、三ヶ年計者可然之由申之、　廿二日、鴨社事、今日奏聞、新式書改畢、

鴨社條々

一社務職任中、爲自由神事日供、及他日他月者、卽時可然社司氏人以連署可注進、(中略)

一訴論御糺明之砌、可停止內奏、若訴狀有不達叡聞之聞者可申事、

文明六年七月廿二日

〔神敵吉田兼俱謀計記〕皇大神宮神主

以連署可申之由被仰出了、各々所存無謂之由仰之間、少々加連署、但不一具云々、載罰文之處、兩方之是非兩端也、尤不審、了奏聞、一社申狀讀進、仰云、已載罰文令申之處、一事見兩樣、以何事可被決實否哉、爰前內府〇日野勝光申云、祐尙事、今度就社務相論及御沙汰云々、可有淸濁事也、能々可被經御沙汰、可畏入之由申之、已及三問三答有申狀、猶就御不審被尋一社之處、有兩樣如此、種々被盡事理之處、可然之樣可被經御沙汰之由申之、御不審事也、有御心得之由被仰御返事、次仰云、此事可爲如何哉、勸修寺大納言〇藤原敎秀廣橋大納言、予等可申所存云々、申云、就今度相論事被尋仰一社之處、兩樣申狀也、猶以難決、殊載罰文之上者、各雖不可有虛言、社司氏人等、兩樣之申狀、不審事也、所詮凡慮難計事、於神前以御鬮子可被決歟、殊舊院之御時、就御不審事被取御鬮子了、可爲如何哉云々、兩三卿所存同前、卽奏聞、仰云、叡慮ニハ兩人祐躬祐尙、科條兩端也、只權官之者可被新補云々、如何、猶可取鬮子歟、重可尋之、又仰兩人、殿上祗候之間仰之也重申云、此叡慮無餘儀事也、雖然當時各有引汲之方、今日以叡慮被定仰、尤有引汲之儀歟之由、可有疑申之輩、只無私御鬮子、可然歟之由申之、重奏聞、仰云、然者可被取御鬮子、社務祐躬、權禰宜等、可召尋寄云々、觸仰之處、祐尙所勞、祐言他行云々、重仰祐尙、被仰下子細可參之由申、不可仰子細由有仰、只助所勞、雖爲明日可參之由可仰、重仰了、祐躬祐言等參仕、於祐躬領狀、祐言御鬮子事、難義之由申之、入夜了、　卅日、朝間度々雖召、社務稱所勞之由、及晩頭、祐尙縣主來云、凡今度之儀、存無誤之由、然者可被取鬮子之條不便、枉而可被除御鬮子之人數云々、予尋云、凡今度兩人訴論事、已及數ヶ條、此內有祐躬誤、有祐尙誤、更以凡慮難計、一社又以罰文雖令言上兩端也、就此儀可被取鬮子之處、難儀之由申之、然者辭退職歟、返答云、更非職辭退之儀、某有誤者、可有御改替、無誤者、可被取鬮子之條、難儀之由申計也、予又云、背叡慮不可取鬮子之由、令申之上者、辭退歟之由存之趣仰之、辭退仕ニテ候ハ可辭云々、予云、更以不及覺悟事也、可爲所存之由仰之、存外之返答也、卽參內、欲令奏聞之處、出御御湯殿云々、祐尙又申云、早々可被下一途之勅答、予云、出御御湯殿

祐樹申云、自去七月廿日至卅日、日供闕怠、祐康過怠云々、祐康申、今度神人不隨社司氏人之命之間、任先例退神人等、以社家之雜色可備日供之由可訴申、然者定神人可及嗷訴、其時若神人等及違亂、可闕怠日供、（神人奉行日供云々）其時者、不可有社務一身過怠之由、各以連署定置了、依可有其過哉、今度又氏人等、并秀顯者、於祐樹令被補社務者、止神事可及違亂云々、

仰云、日供十ヶ日闕怠事、神人（與）自彙日有相論、如此强非社務咎、但神用及數日無沙汰之故、神人已及違亂了、依神用未到不叶者、可辭職之由乍捧請文、無其儀之條過怠也、今度支狀事被仰出之處、內内伺申入之處、於社務職者、不可有御改替之由、號被仰出候由、難澀虛言第一也、可被改職也、

〔親長卿記〕文明六年後五月廿七日、入夜祐尙縣主三間支狀到來、　廿八日、祐躬縣主三間支狀、又可一覽之由申之、於三間支狀者、不及拜見事也、無謂之由仰之、雖然頻所望之間遣之、又出書狀、有申子細、可尋祐尙也、　六月六日、參內、鴨社前社務祐躬縣主、與祐尙縣主相論當職事、（及三問三答）奏聞、於御前兩方申狀讀進、仰云、新大納言、廣橋大納言（○藤原綱光）等相尋所存、御沙汰之次第、可意見申云々、予同可申云々、　十六日、參內參御前、仰云、鴨社祐躬祐尙等相論事、可被尋社家、但已前如被仰、有條目者可然也、雖然各被遣文書者、可然之由申意見（新大納言、廣橋大納言、予等也、）上者、可被下文書、但各有引汲之輩云々、然者難申分明、如何之由有仰、予申云、誠條目雖可然、已及數ヶ條、更以難書盡、可被下文書之條可然也、次或引汲祐躬、或引汲祐尙之事在之、雖然被仰總社前官當官氏人等被仰者、更不可有私之由申之、仰云、氏人事、可被尋仰事如何、予申云、先規勿論候、被召宮中、舊院御代有御尋之由申之、仰云、被尋仰氏人之事、無斟之由被思食畢、然者早社司氏人等、以連署可申之由可仰、予申云、召寄祝權禰宜氏人宿老一老輩、可仰之由申了、　十八日、午剋許、祝代、（資名可尋、祝秀顯所勞、）權禰宜（祐言）氏人兩人來、祐躬祐尙相論文書下之、以詞子細條々仰之、遣奉書不可申虛言、若申虛言者、可有御罪科之由載奉書了、尋一社可申所存云々、　廿九日、鴨一社申狀到來、祐躬祐尙相論事也、先日尋仰一社了、各捧申狀、（廿四日）今日

可令早偏(○偏恐停字誤)止宇佐美平次實正地頭職勤仕神宮課役事

右件御厨者、謀反人家貧知行之所也、仍任前蹤、爲令致沙汰、以彼實正補任地頭職畢、然而依有神宮訴、所令停止實正之沙汰也、但今雖令改易其職、自神宮令還補本人者、甚以可爲不便之沙汰也、早爲神宮之沙汰、可致有限御上分已下雜事之沙汰歟、如件、以下、

文治二年六月廿九日

〔百練抄十四四條〕文暦二年(○嘉禎元年)六月三日甲子、武士多發向八幡方、是南都領大住庄與石清水領薪庄水相論、遣實撿使可被裁許之由、被仰下之處、南都惡徒等可燒拂八幡領之由風聞之間、爲防禦遣勇士也、官軍以前、衆徒燒拂八幡領薪園畢、

〔百練抄十六後深草〕建長二年八月十日癸卯、春日神人三百餘人蜂起、發向吉田中納言(爲經)亭、依和泉國三升米訴訟事也、

〔看聞日記〕應永廿五年八月十五日、放生會、(○石清水)神人訴訟之間無神幸、卅餘ヶ條訴訟、大略雖有裁許、猶大訴相殘之間、奉留御幸、無力延引、可爲來月云々、去々年、如此延引、又如此、神慮如何、併社務無沙汰云々、

〔親長卿記〕文明三年後八月十三日、及晩參內、(衣冠吉服)賀茂社社務職相論(勝久縣主、貞久縣主、)事奏聞、去月八日、公武御祈禱事、一社一同、可申懇祈之由被仰出之處、社務貞久、依重服不參、不進代云々、(兩方具訴狀了)被尋一社之處、不參云々、士解久者、魚御料備進不如法云々、是又如勝久申狀云々、仰云、例吉凶事者、可依時事也、兩條過怠不可然也、但不致當所務、不便之由內々付女中歎申、不可依女中祗候、可依道理也、依一ヶ度過怠、被改社務之先例在之歟、予云、雖一ヶ度、於有過者被改之條、勿論也、雖有數ヶ過條、被打捨事在之、可在叡慮之由申入了、此上者可有改替云々、御改易之趣、可仰管領(依執申也)十七日、及晩參內(衣冠)祐康(禰宜)縣主、與祐樹(前禰宜)縣主相論事奏聞、申狀在別、

主從訴訟

（精兵）勇士也、主を扶て一身腹切之條、忠功之至、不堪感嘆者歟、既落居之上は、諸軍勢引退、管領不能進發、無爲ニ落居、天下總別大慶也、

〔親長卿記〕文明七年九月廿一日、貞久縣主來、知行越中新保庄并河原八丁半分事、祖父益久父讓後家、（益久母）後家一期之後、可讓河原（内裏今參局小名）由有讓狀、雖然益久不存知之間、先年與後家令相論之時、有中作人、於河原八町者遣之、於新保庄者、不渡之處、任彼讓狀之旨、今參局可知行之由、今春被申之間、不可叶之由令申了、然今達叡聞被勅裁、被仰出廣橋、難儀之間可申入云々、給文書可奏聞、奏聞返答了、

〔吾妻鏡三十八〕寛元五年（○寶治元年）十一月廿七日丙子、主從敵對事、不論理非、自今以後、不可沙汰之由被定云云、

〔新編追加雜務〕一主從對論事（寶治二七廿九評定）
右去年冬、此有御沙汰歟、於自今以後者、不論是非、不可有御沙汰歟、

神官訴訟

〔侍所沙汰篇追加〕一諸社神人等訴申之喧嘩事（應安五十一十八、松田八郎左衛門尉貞秀奉行、）
或帶本所之理、或依不慮之儀、神人等被殺害刃傷者、尤可有裁許之、而近年就所務負物以下、動成奸謀之企、令罩鬪殺之時致訴訟云々、政道之違亂、諸人煩費也、不可不誡、於如然事者、一向非許容限之上、解却神職、須處其身於罪科、將又社務、於非據吹噓者、經奏聞改所職、可被補器用之仁矣、

〔建武以來追加〕一就諸社祭禮以下神事訴訟事（附法會等可准之）
於向後者、廿日以前令言上者、可致披露、若此日限之内、及訴訟者、雖爲理運、不可有其沙汰矣、

〔吾妻鏡六〕文治二年六月廿九日乙亥、伊勢國林崎御厨事、爲平家與黨人家資跡、雖加沒官領注文、就大神宮訴申之、不可有地頭之旨、被下院宣之間、今日有沙汰、所被停止字佐美平次實正知行也、（○中略）

下　伊勢國林崎御厨住人

一祖父母父母、就所領有謀書由、其子孫訴申時、依告言科、不及成敗、可有罪科否事、去五月十四日、重被定置御式目狀云、敵對于父母致相論之輩、告言之罪不輕之處、近日間有此事、敎令違犯、罪科是重、自今以後可停止之、若猶及敵對者、慥任本條、可被行重科也、可爲此儀候歟、

〔吾妻鏡 二十六〕承久四年(○貞應元年)四月廿七日、以鳥居禪尼所領紀伊國佐野庄地頭職、尼一期之後、子息長詮法橋可相傳之由被仰云云、彼禪尼者、六條廷尉禪門(○源爲義)妹、故右大將家(○源頼朝)姨母也、仍令避數箇所地頭職給訖、而子息法橋行忠(長詮兄)背母命、押領當庄、剩去年兵亂之時、候仙洞致合戰、零落之後、猶立還當庄之由、長詮就訴申如此、長詮者抽關東御祈禱之忠云云、

〔吾妻鏡 三十九〕寶治二年五月十六日癸亥、兄弟相論之時、以父母立申證人事、天野和泉前司子息兄弟等相論之時、以母堂雖立申證人、自今以後、不可被許容之由、今日及評定云云、

〔看聞日記〕嘉吉三年正月廿六日、抑富樫兄弟(加賀)分國相論、管領舍兄贔屓、今日國へ代官被下、管領取立扶持云々、舍弟ハ公方奉公無子細、於國可有弓箭歟、諸大名兩方贔屓、有物言云々、　二月廿七日、富樫事、明日必定云々、世之物忩、仰天無極、番衆共召集伏見、地下人濟々參、行藏菴即成院、具侍者男共皆祗候、聊有盃酌、暮四辻前中納言參、對面物言種々閑談、自大方殿富樫に有御問答子細云々、所詮山川一人切腹者、可爲無爲歟、今夜は先無爲也、　廿八日、篤忠朝臣參、物忩可祗候之由申、抑山川八郎(加賀守護代)腹切之由風聞、仍騷動、室町殿へ諸軍勢馳參、但管領は、致用意不出頭、禁裏へも公家人々馳參、門番衆等帶具足候、是にも番衆共皆祗候、上下騷動無云計、聞山河撿見を給て可腹切也、所詮富樫被助置、懸命之地被割分者、家も不可放火、一身可腹切之由訴訟申云々、仍奉行三人(波多野、二階堂、飯尾前入道、)被遣、被成御敎書云々、至夜山川八郎(八郎が父、若黨三人、)庭上にて五人切腹云々、八郎腹切之後、辭世之歌、以血書扇、(後聞、硯を召寄て書云々)

あづさ弓五十をこゆる年浪のまことの道に入にけるかな、(後聞八郎が父辭世云々、○後聞八郎以下頭書)八郎は大力

云、

〔吾妻鏡 四十一〕建長三年六月十日己亥、百姓與二地頭一相論之事、別差二奉行人一定、委細尋可レ被二聞食一之由云云、

〔東寺百合古文書 山城 は一之二十四〕百姓等申狀

東寺御領若狹國太良庄、百姓等謹言上、

欲下早被レ改二當地頭御代官一〈○脇袋彦太郎〉以二正直憲法御使一、可レ有二御年貢物御收納一由被二仰下一子細事、

右於二當庄御所務一者、以二往御下知分明之上者、爭百姓等違二先例一可レ構二申虛言一之哉、然而當地頭御代官者、爲二當庄末武名主職一之、往古御公事通、乍レ有二御存知一之、違二先規一被レ帳〈○帳恐張字誤〉行非法之間、百姓等侘傺之條、不便次第也、且當御領御一圓之上者、成二百姓等悅喜思一開二喜悅之眉一處、曾以御寬宥儀無レ之、凡於二御公事等一者、超二過往古御例、幷前代之時一、被レ責二仕百姓等一條、無レ術次第也、凡當時、望二西秋之期一、依レ不レ絕二愁吟一之、勒二子細一、恐々言上、〈○中略〉

以前、條々大概如レ斯、就レ中當地頭御代官脇袋殿、當庄御所務先例、幷寬元、寶治、永仁御下知狀等、及二御和與狀一、皆以乍レ有二御存知一之、令レ違二往古之御例一、將又背二前代關東御領之例一、悉以被レ帳二行非法橫法一之上者、早被レ改二當地頭御代官一之、以二御憲法之御使一、御年貢物可レ有二御收納一之旨、爲レ被レ仰二下之一、百姓等一味神水仕、恐々言上如レ件、

建武元年八月

〔新編追加 雜務〕一敵二對于祖父母幷父母一致二相論一輩事 〈延應二五十四評〉

右告言之罪不レ輕之處、近日間有二此事一、敎令違犯之罪是重、自今以後、可レ令二停止一也、若猶及二敵對一者、備任二本條一可レ被レ處二重科一、

信濃國落合後家尼、與二子息一相論之間被レ定之畢、

下　丹波國栗村庄
可停止武士狼藉、如元爲崇德院御領、備進年貢、隨領家進止事、
右件庄可爲崇德院御領之由、被下院宣也、而在京武士寄事於兵粮催、暗以押領、於今者、早如元爲彼御領、隨領家進止、可令備進年貢所當之狀如件、以下、
文治二年三月二日

訴國司

〔總見記十一〕岡崎三郎殿元服事附禁中御修理同被行善政事
或時堂上ノ人ト上北面ノ侍ト訴論ノ事有ケルニ、其理非奉行所ニテ決斷成ガタカリケル故、信長公、直ニ對決聞シメサレ、堂上ノ人、道理ナリト定ラル、北面ノ侍負トナル、北面ノ侍安カラズ思テ、信長公ノ御一族織田右馬助殿ヲ賴テ、色々ニ申カケ、密々又御訴訟申ス、信長公大ニ御立腹有テ、政道明白ニ決ス、何ゾ私計ヲ以テ沙汰ヲ可行哉トテ、其事執シ申サレケル右馬助殿ヲ却テ御勘氣アラレケレバ、其比皆人感心シケリ、

〔吾妻鏡十九〕承元四年七月廿日丙午、上總國在廳等有參訴事、是秀康、院北西面去月十七日任當國守、同下旬之比、其從者入部、國務之間、於事背先規、致非義、在廳等愁歎之剋、忽起喧嘩、刃傷數輩土民等云云、如相州廣元朝臣善信有沙汰、是非關東御計、早可奏達之由被仰下云云、

訴地頭

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年後十二月廿三日丙寅、今日雜人訴訟事、被定其法、其事書樣、
一雜人訴訟事
百姓等與地頭相論之事、時有其謂者、於妻子所從以下資財作毛等者、可被糺明也、田地齊令安堵其身事、可爲地頭進止歟、

〔吾妻鏡四十〕建長二年六月十日甲辰、有評定、雜人訴訟事、被定法儀、所謂百姓與地頭相論之時、無其誤者、於妻子所從以下資財雜具者、可被糺返也、田地幷住屋、令安堵其身否事、可爲地頭進退之由云

〔政所內評定記錄〕一內談四月廿六〇寬正四年、中略、

　披露〇中略

一武田被官與一色左京兆被官若州小濱住人等、買賣船相論事、

賣主有現在者、不日被召上、可有糺決云々、

　本奉行　清泉

　合―――　治河

一六月廿六日　內談〇中略

一武田被官與一色左京兆被官、申船荷物事、

十三丸大船事者、主各別之上者、於小濱立請人、先被返渡相論技舟事者、仰豐前守護、可被召上賣主、

　本奉行　清泉

　合―――　治河

〔蜷川親俊記〕天文八年六月廿三日己未、攝州富田庄新右衛門入道與平塚帶刀左衛門、麴賣買相論事、雖及二問、閉口候訖、既成就〇成就恐載彼說書狀之上者、任御法之分、對新右衛門入道可被成下御下知候、恐々謹言、

　卯月十四日

　　諏方若狹守殿御宿所

〔信玄家法〕上一定年期田畠限拾年、以敷錢可合請取、彼主依貧困、於于無資用者、尙加拾年可相待、過其期者、可任買人心、自餘年期之積者、可准右事、

〔吾妻鏡〕六文治二年三月二日庚辰、今日故前宰相光能卿後室比丘尼阿光、去月進使者於關東、相傳家領丹波國栗村庄、爲武士被成妨由訴申之、仍早可停止濫吹之趣被仰云云、

ケ月、

一米穀幷雜穀等利平同前、於約月者、可爲七ケ月、如此所定置如件、

長祿三年十一月十日

〔新編追加政所〕一永年買地事附買券所取流所領事、文永四十二廿六評、

於賜御下知及御下文所々者、不論年紀遠近、可停止本主濫妨、不帶御下文等所々者、廿ケ年以後辨本物直、可請取歟、

〔建武以來追加〕伺事條々永正八十二六

一質券賣買地事文永五七四

給御下文者不及子細、雖不給御下文、過廿ケ年者、不及沙汰、

〔新編追加政所〕一賣買地事永仁五六一評

可糺返作毛幷直錢之旨、被裁許之處、不被用之由、訴申輩有之云々、於作毛者、任先下知狀可糺返之、至直錢者、准負物不及沙汰、次一年作地事、被裁許之分者可被施行、次構置質券、賣買地之米穀錢貨以下事、買主可爲進退、

〔建武以來追加〕伺事條々永正八十二六

一質券賣買地事正安二

或成給御下文幷下知狀、或知行過廿ケ年者、不論公私領、今更不可有相違、

〔建武以來追加〕管領政所壁書

一以御恩地令沽却事文安元九廿六

此段先條之制禁炳焉也、雖然近代如此之類、於被成下安堵御判地者、今更不能改動沙汰、自今以後者、年紀質券等之外、被停止永地入流等、若猶背規矩令沽却者、云賣人云買人、共以可有其咎焉、

以彼在所之所當年々雖致其沙汰依不辨本錢及多年令佗傺之條不便之至極也然早勘度々收納到一倍者可返付所領於本主也

一諸土倉之事 文安二九廿九

依類火令燒失土倉或入止之或數年之間可被免除公役之由雖歎申族出來向後一切不可被許容德政已後土倉令減少之處猶以寄事於左右雖及訴訟不可有御免之令略本宅若以密々之儀可取高利幷日錢等之質物造意歟甚不可然於土倉者雖爲一所至減少者云公役失墜云諸人愁歎旁以就公私非無其費所詮於自今以後者堅所被停止之也若背制禁企訴訟者可被處重科

〔建武以來追加〕洛中洛外酒屋土倉條々

一質物利平事

絹布類繪衫物書籍厲樂器具足家具幷雜具以下可爲五文子盆香合茶椀物花瓶香爐金具等幷米穀類等可爲六文子

長祿三年十一月二日

一洛中洛外諸土倉利平事近年任雅意致其沙汰云々太不可然所詮於高利者爲衆中定置嚴密可被相觸之若有異儀在所者隨注進可被處罪科之由被仰出候也仍執達如件

長祿三年十一月二日

之種 飯尾肥前守 于時右衛門大夫
之清 飯尾加賀守
忠行 二階堂山城守 于時政所

定置洛中洛外諸土倉質物利平事

一絹布類繪衫物書籍厲樂器具足家具幷雜具以下五文子於約月者許置十二ヶ月

一盆香合茶椀物花瓶香爐以下金物武具等者可爲六文子於約月者廿ヶ月但至武具者可爲廿四

奉行保內之狀、依仰執達如件、

建長七年八月十二日　相模守 判

陸奥守 判

伊勢前司殿

〔建武以來追加〕洛中洛外酒屋土倉條々

一諸土倉沙汰事

所々土倉沙汰人等、犯用本主納物、令居住洛中邊土幷田舍云々、自由之至也、於如此之族者、追放在所、可被處盜犯罪、

一洛中洛外土倉質物事

於絹布類者、十二ヶ月、至武具者廿四ヶ月之由、所被定置也、若過彼數月不請出者、爲流物可致計沙汰之旨、可相觸諸土倉之由所被仰下也、仍執達如件、

永享三年十月十七日　大和守 飯尾貞連

備中守 伊勢貞國于時政所

一衆中

〔政所壁書〕一諸土倉盜人事 永享五十十三

取置質物之上者、自今以後、爲倉預辨、於利分上來質者、以一倍可致其沙汰、至利平巨多札者、假令諸布十二箇月、武具廿四箇月、本錢外以半分可償之、若無私力爲藏預者、召進其身可被處嚴科之、萬一號逐電令拘惜者、爲本所可致其辨矣、

〔建武以來追加〕洛中洛外酒屋土倉條々

一本物返質劵所領事 永享十二十廿六

散位藤原朝臣判

沙彌　判

〔政所賦銘引付〕一九山攝部助貞泰（清四左、文明六十二十八）

吉田六郎左衛門尉清秀、連々借錢卅八貫文事、以一倍可返辨之旨、堅可預御成敗候云々、

〔蜷川親俊日記〕天文七年七月廿二日癸巳

下津屋三郎左衛門信直被申、長生軒借錢付而、家相論之事、對普廣院春首座、既被成問狀奉書處、不具出、帶上意、任御法以無音之篇、可被成下御下知候由信直請文、幷御一行得其意候、―――自然日限馳走、不能出儀も在之者、爲不便者歟、猶以被盡淵底可被成御下知、―――

七月廿二日　　　　親俊

諏方神左衛門殿御宿所

〔今川記かな目錄五〕一借錢の事、一ばいになりて後、二ヶ年之間は錢主相待べし、及六ヶ年不返辨ば、當奉行、幷領主にことわり、可及譴責也、米錢共利分の事は、契約次第たるべし、

〔信玄家法上〕一親之負物、其子可相濟事勿論也、子之負物、親方へ不可懸之、但親借狀加筆者、可有其沙汰、若又就于早世、親至拘其遺跡者、雖爲逆義、子之負物可相濟事、〇中略

一負物人有死去者、正口入之者名判、其方江可催促之事、

一以連判就于致借錢者、若彼人衆之內、令逐電者、縱雖爲走人、可辨濟之、

〔新編追加政所〕一鎌倉中擧錢、近年號無盡錢、不入置質物之外、依不許借用、甲乙人等、以衣裳物具置其質、盜人亦令賣買賊物者、所犯忽可令露顯之間、竊以賊物入質物、令借用之處、被盜主見付質物之時、錢主等稱世間之通例、不知其仁幷在所之由申之云々、所存之旨、甚以不當、於自今以後者、入置質物之日、可令尋知負人交名在所、若沙汰出來之時、至不引手次者、可被處盜人也、以此旨面々可相觸

於本人私沈論者、爲請人可致其辨之段、勿論也、至預御罪科輩者、且以折中之儀、可及半分沙汰、但其身令安堵者、云借主、云請人、相共可致其償矣、

一諸人借物事 永享八五廿五

所用之時令借用之間、借與者芳志隨一也、爰雖致催促、不能返辨之是非、而經年月之條、云不知恩、云無理、旁以背正儀者也、所詮自被定置(永享八五廿五)已後雖及催促三ヶ度、(日限百五十日)於不能承引者、於政所可訴申之、若糺決之間不致其沙汰者、本利相當返辨之外、爲過怠分、相副彼拾分一可被責渡之、但錢主與借主相談之、以利平連々致其償者非制之限、錢主又相待過怠之御成敗、寄事於左右、不叙用少分辨償者、雖被定置不可依御法焉、

一負物年紀事 永享九十十三

就先度被定置、經數十ヶ年、以古借書等、令催促借主子孫之條、無盡期歟之上者、廿ヶ年未滿借書者、以前任被定置法、(假令十ヶ年者一倍、廿ヶ年者三倍、)嚴密可致沙汰、於其以後者非制之限矣、

一借物年紀事 永享十二十廿六

借主等相待十ヶ年、令無沙汰之間、爲其誡被年紀以後者、以三倍可返辨之旨、先度雖被仰出、於利平者、不過廿一ヶ年者、可爲一倍、但被如此定置者、借主等亦寄綺於左右、可令難澀歟、所詮至其類者、屬政所致訴訟、可究淵底、(○可以下四字、據式目新編追加補、)若猶有停滯之儀者、以庭中可言上焉、若不相待盡理、企直訴者、可被處罪科、(○若不以下十五字、據式目新編追加補、)

〔新編追加 政所〕一石原左衛門五郎高家與鎌倉住人慈心相論腹卷事

右訴陳之趣、枝葉雖多、所詮以件腹卷、令入置無盡錢質物之處、慈心抑留之由、高家雖申之、一倍已後、經訴訟之間、非沙汰之限矣者、依仰下知如件、

弘安二年十一月卅日　　平　判

就訴人之申狀、被懸負人在所之間、有難澀輩之時、不知子細之領主、致非分之辨歟、於自今以後者、或領主、或代官、非加署狀者不及尋沙汰、

一雜人利錢負物事 弘安七八十七

不經訴訟過十箇年者、任式目不及沙汰、

一諸人所領百姓等負物事 弘安八四十六

或領主、或代官、非加署狀者、不可及尋沙汰之由、去年雖被仰下之、自今以後者、可被止此儀也、

一利錢出擧事 永仁三

右甲乙之輩、要用之時、不顧煩費、依令負累、富有之仁、專其利潤、窮困之族、彌及佗傺歟、自今以後、不及成敗、縱雖帶下知狀、不辨償之由雖有訴申事、非沙汰之限矣、次入質物於庫倉事、不及禁制、

〔建武以來追加〕洛中洛外酒屋土倉條々

一借錢事

以巨多要脚令借用之輩、寄事於窮困、最少分令辨償之、可破借書之旨及強談云々、結構之趣、罪科惟重、堅所被制禁也、請人同前、將又稱有借書、或寄進寺社、或語人及譴責之輩、近年繁多也、於向後者、致訴訟、可仰御成敗、若背此旨者、可被處其科矣、〇將又以下四十七字、據政所壁書補、

一諸人借物事 永享二十一六

爲政所雜務之法、依被定置年紀、十箇年錢主等者、經年序、怖被弃置、難澀族者、〇經年序以下十一字、據政所壁書補、過十ヶ年欲不返辨、太以背仁政者哉、於自今以後者、雖及十箇年、任本法以一倍可令辨償之、於十箇年以後者、以本錢三分假令十貫文者、三貫〔三貫群書類從本作三十貫〕文也、可糺返之、但於年來利平等沙汰來輩、幷以前弃破證跡者不能左右焉、

一諸人借物請人事 永享八五廿二

貸借訴訟

一父の跡職、嫡子可相續事勿論也、雖然親不孝成事なきを、親、弟に相續すべき覺悟にて、非分の事共申かくる事、太曲事也、時宜により可加下知也、

一庶子割分之事、本知行五分一、十分一程の儀においては、大方相當すべき歟、半分、三ヶ一にいたりては、總領の奉公迷惑たるべき歟、自今以後、各可有分別也、

〔新編追加政所〕

一借物事、可有其沙汰、但可加利分之由書載證文者不及沙汰、

一可禁斷私出擧利過一倍、并擧錢利過半倍事、

右同狀偁、出擧之利、令格相存、而下民之輩、至于過期廻利爲本、過責爲先、未經幾歲、忽及數倍、殆煩王臣家、勸妨諸庄園、如斯之漸、責在朝家、且仰京畿諸國等、且任弘仁建久格、雖過四百八十日、不得過一倍、於擧錢者、宜限一年、以半倍利、縱雖積年紀、莫令加增、縱雖出於證文、莫令敍用、若猶有違犯者、令負人觸訴使廳、糺返文書、沒官其物者、以前條々事、宣旨到來之節、下知先畢、守狀跡可令禁斷焉、宣下旨、其篇雖多、於件三箇條者、嚴制殊重、若有違犯之輩者、不日可注進交名之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

嘉祿二年正月廿六日　　武藏守平　判

相模守平　判

〔新編追加政所〕一擧錢利分事、不及私了見、任宣旨之狀、可令成敗給之狀、依仰執達如件、

寬元二年六月廿五日　　武藏守　判

謹上　相模守殿

〔新編追加政所〕一私出擧擧錢利分者、不可過一倍之條、前々令沙汰畢、縱雖積年紀、不可加增、雖出文書、不可敍用、若猶有違犯之輩者、就訴訟、仰奉行人、可被糺返文書、縱雖出證文、勿令敍用矣、〇目録云、建長七、

一諸人所領百姓負物事弘安七五廿七評、

〔攝津親秀讓狀〕讓與

一總領能直分

美濃國脇田郷、一色、三井、大幡、簗瀨、大嶋、土佐國田村庄、伊與國矢野保内八幡濱、備中國船尾郷、伊賀國若林御薗（但下切尾公、一期之間讓之、）和泉國下條郷、上野國高山御厨領家職、武藏國重富名南北、加賀國倉月庄、但岩方村半分、比丘尼明丘、一期之程、可被知行之由、載別紙讓狀、松寺村田内廿町方、女子伊呂一期之後者、阿古丸可知行之由、載別紙讓狀之間除之、同村十六町方内三分一、大隅五郎親泰讓與之間除之、近江國柏木御厨内木郷、

右所々者、爲能直總領所讓與也、若無子而有早世事者、舍弟松王丸可知行之、委細文別紙注之、於訴訟未落居、幷讓滿地者、悉可爲總領分、狀如件、

暦應四年八月七日　　掃部頭親秀　判

〔今川記（五かな目錄追加）〕一奉公の者子孫の事、嫡子一人之事は、一跡相續之上、是非に不及、弟共に至ては、知行をさき分、扶持を加るの間、嫡子共に與力すべき勿論也、但割分之上に、給恩を請、内の合力にくはへ、總領につき奉公すべき事は、いはれざる也、速給分あけ置、兄一所に奉公すべきなり、兄弟の間、契約の筋目ありて割分に隨ひ、人數兄にくはへ、其身は各別之奉公も、隨意たるべき約諾あるにおいては、其儀にまかすべき歟、父祖讓與の所を、總領非分を以押領の上、公事に及、裁許を遂、兄の非義爲歴然者、弟各別之奉公、是非に不及ざる也、總別嫡子之外、扶助すべきたよりなき者共、子共おほきまゝ、何も取ならべ、幼少之間何となく出仕させ置、給恩を望事、甚曲事也、嫡子一人之外は、堅可停止之、但弟たると云共、別て忠節奉公せしむるにおいては各別として扶助すべき也、又父一代の勞功を以、給恩に預りたるもの、子共に割分、何樣に奉公さすべきのよし内議を得、兄弟共に同然に相ことわり扶助するにおいては、無是非歟、○中略

岡村庄證阿養子左衞門次郞ト辨公ト、御鬮二反半相論子細可下注之、付之法令ヲ問訪程ニ一紙在之、其ニ云、

大判事明政勘狀云

親子夫婦遺財事

妻有財、其妻亡後、其財可與亡妻之子、夫不可領事、戶令應分條末云、妻家所得不在分限、未知妻亡者、其財何、　答妻之子得耳、未知若夫得乎、　答無子者夫得耳、不還妻之祖家也、

案之、妻有財、其妻亡後、其財亡妻之子可領之、夫不可領之、若亡妻無所生之子幷養子者、夫可領之、

祖父母父母讓、可用後狀事、

鬪訟律云、子孫違犯敎令、徒二年、

又條云、告祖父母云々者絞、

說者云、死生同、

案之、祖父母父母敎命、死生不異、然則數度雖改易、以最後狀可受領、依無告言理許之道也、以之可依後狀之旨、先達所勘來也、凡子孫雖私蓄財物、可任祖父母之意、若得他人之讓有財者、隨狀行之、不令知行、父母雖有其科、得財之由緖、又不可失之故也、

父處分、母存日可進退事、

不可違犯父母命之由、本文載前、仍父處分、母存日進退之條、其子更不可違犯、又母處分、存日進退同前也、

〔建武以來追加〕一雅樂修理亮持忠所領文書、依爲甥可讓與小笠原備前守持長否事、

以叔父讓狀、持長可相續之條、不可有子細、亦不可依不知行者哉、

永享二年十一月九日

加賀守基貞〇以下八人名略之

〔玉勝間 十〕御子左二條家冷泉家の事

惺窩文集惺窩先生系譜略曰、先生系出于法性寺攝政道長公第六男長家卿、長家官至權大納言、號御子左、又號三條、長家生忠家、爲權大納言、號小野宮、忠家生俊忠、權中納言號二條院、俊忠生親家、初爲勇葉室權中納言顯隆子、改名顯廣、後歸本宗、又改名俊成、爲皇太后宮大夫、家居五條、世稱五條三位、別賜播州三木郡細川莊、江州坂田郡小野莊、是爲倭歌所奉邑、嫡子世々襲封、俊成生定家、號冷泉、後稱京極、爲民部卿權中納言、父子相繼善倭歌、永爲世範、定家生爲家、權大納言兼民部卿、住桒地嵯峨中院、爲家有子三人、長曰爲氏、權大納言號御子左、其後裔稱二條家、又號冷泉、次曰爲教、左兵衞督、號京極、季曰爲相、權中納言、號冷泉、三家鼎峙、各立門戸、正元年中、以書券付播州細河莊於爲氏、爾後爲氏有不孝數事、爲家悔之、文永十年癸酉七月二十四日、十一年甲戌六月二十四日、以文券兩通付爲相、建治元年乙亥五月一日爲家薨、葬嵯峨中院、爲相尚幼、故爲氏强奪細河莊、爲相母北林禪尼、阿○佛赴鎌倉訴將軍惟康親王、爲氏亦告其事、獄久不決、爲氏爲世父子、與爲相論爭不已、又訴將軍守邦親王、執權相模守平熙時判曲直、以正和二年癸丑七月二十日、賜公牒一通於爲相、復其本邑、其牒今存于吾家、後住鎌倉、號藤谷、薨葬藤谷岡、墳墓猶存、

〔新編追加 雜務〕一所領配分事

二宮尼依罪科被召所領畢、而尼死去之後、子息三郎入道申披無過之由、所返給也、爰二男左近入道可預配分由申之處、不相綺訴訟之旨、三郎入道雖支申之、預配分畢、

永仁二年四番引付（頭人越後入道、奉行越前右近大夫、）

一信濃國御家人赤栖三郎入道遺領事、子息孫太郎與孫三郎、兄弟相論之時、被成未分訖、爰松鶴已下女子等、可預御配分之由令申處、依不與訴訟被弃置、然而近年被破後悔法之間、預御配分者也、

〔細々要記 四〕觀應二年四月小十八日ノ條中

やうにもおよばず、廿一かでうの地とうのひほうを、みなとゞめられて候けり、そののち野中のしみづをすぐとて、

わすられぬもとの心のありがほに野中のしみづかげをだにみじ、とよまれたるも、そのこしべのしやうへくだられけるときのうたにて候、新勅撰に入て侍し、

永仁六年三月一日書之

此あぶつばうと申人は、定家の息爲家の室なり、きんだち五人まし〳〵候、はりまの國ほそ川のしやうを爲家よりゆづりおかれ候を、爲氏、たふくたるによりて、あふりやう候、そしようのためにかまくらへくだられ候時の道の日記にて候、爲氏も、ちんちやうのために、かまくらへ下向、兩人ともにかまくらにて死去せられし、そしようは、爲氏のかたへはつけられず候しとかや、あぶつは、安嘉門院の四條と申す人なり、爲相のはゝなり、

〔十六夜日記殘月抄〕例言

此日記かゝれし時代は、弘安三年にして、關東に下られしは、建治三年十月なり、其證は、この日記のうちに、年くれて春にもなりてとありて、夏のほどはあやしきまで音づれも絶て、おぼつかなさも一方ならず、都のかたは、志賀の浦浪たち、山三井寺のさわぎなどきこゆるも、いとおぼつかなしとあるをみれば、帝王編年記に、弘安元年五月十二日、巳時日吉神輿三基入洛、是依園城寺金堂供養也、十六日、日吉神輿各歸座とある時の事なるべければ、尼公の下られし年は、建治三年なる事あきらけし、それより下の條に、爲守の君、ことしは十六ぞかしとあるによりて考るに、爲守は嘉暦三年十一月八日逝去、終焉歌、ムトセアマリヨトセノ冬ノナガキヨニウキヨノ夢ヲミハテヌルカナ、と常樂記にみえて、その十六歳は弘安三年にあたれり、此日記の長歌に、よとせのはるになりにけりとあるをみれば、建治三年のくれより四年にあたれり、

自餘御厨口入米、所從等不注之、

右件遺財事、依嫡男彥倫次男實彥、女子夫常春、長章、惟忠、師彥神主等之訴、任次第御下知、於公文所經對決、勘錄各出對文等言上之處、給御外題併下使眞景等、件彥盛遺財事、如申狀者、云建保四年目錄、云同六年分法、不足證據歟者、雖無年號日月、任自筆處分文、彥倫等令知行、於未分物等者、任法令分行、言上、兼至于後家度會氏子者、不可充得分之由、彥盛遺言之旨、良儀宗慶等出誓狀歟、仍不能得財、又長章養子之由雖憤申、無指證據歟、同不可得財也者、任其狀致沙汰之間、所載于彥盛神主自筆處分之除所々御厨御園御上分御酒料饗料米荒廢所等之外、口入米、及宿館舍宅畠地所從等、無年號日月、付自筆處分之文、令分行彥倫實彥神主等之間、彥倫之分、廿玖斛五斗餘歟、而任法令、以其半分可爲次男分之處、次男之分、所相當於廿玖斛三斗餘歟、又以彼半分可爲女子分處、如夫米并上絹國絹准布染及自筆處分米等、定陸斛五斗餘歟、而除任職之外、女子一人之分、不及次男實彥之半分歟、然而隨有令分行女子等畢、仍以自筆處分口入米舍宅等、所分行實彥神主也、若有注漏者追令注進、可分行女子六人分之狀如件、以解、

承久三年二月廿八日

本宮使　權禰宜度會神主宗彙

權官使　撿非違使新家宿禰眞景

〔いざよひの日記〕のころよもぎとかこちけるといふ所のうらがきに、くわうたいこぐうの大夫しゆんせいの卿の御むすめ、ちゝのゆづりとて、はりまのくにこしべのしやうといふところをつたへしられけるを、地頭のさまたげおほくて、むかしむさしのせんじへ、ことなるそしようにはあらでまいらせられけるうた、しんちよくせんにも入て侍とやらん、心のまゝのよもぎのみしてといふうたをかこちて申されける歌、

君ひとり跡なきあさのみをしらば殘るよもぎがかずをことわれ、とよまれければ、ひやうぢ

遺跡并讓與地訴訟

主職者、相尋地下之子細、乘早速可申左右之由申返事了、仍長老被歸候、

〔御成敗式目〕一讓與所領於女子後、依有不和儀、其親悔返否事、

右男女之號雖異、父母之恩惟同、爰法家之倫、雖有申旨、女子則憑不悔返之文、不可憚不孝之罪業、父母亦察及敵對之論、不可讓所領於女子歟、親子義絕之起也、既教令違犯之基也、女子若有向背之儀者、父母宜任進退之意、依之女子者、爲全讓狀竭忠孝之節、父母者爲施撫育均慈愛之思者歟、

一得讓狀後、其子先于父母令死去跡事、

右其子雖令見存、至令悔返者、有何妨哉、況子孫死去之後者、只可任父祖之意也、

一妻妾得夫讓、被離別後、領知彼所領否事、

右其妻依有重科、於被弃捐者、縱雖有往日之契狀、難知行前夫之所領、若又彼妻有功無過、賞新弃舊者、所讓之所領不能悔還矣、

〔新編追加 雜務〕一遺跡相論時、非子息由稱申輩事、

雖被准惡口、自今以後者、不可有其咎歟、

〔新加制式〕一雖爲父祖之讓狀、依事可有用捨事、

右或及末期、或受重病、无本性之時、讓狀者更不足信用、但雖爲末期并重病、在手繼之證文者、可有擧用乎、

〔光明寺舊記 五〕下使眞景等、件遺財事、任分行之旨令知行之、　祭主在御判

使眞景等

分行言上、故外二禰宜彥盛神主遺財事、任次第御下知令分行間、次男實彥得分自筆處分之內、除御上分御酒料饗料外、御廚御園口入米、并舍宅倉所從等事、

一畠地壹段半、字曲鄉河邊村所在、貳斗代

開發之領地、而自領家御方被押領之間、任關東度々御教書旨、就御家人等訴申、自六波羅殿執御沙汰之間、故參河僧正御房御時、被經重々御沙汰、任相傳文之道理、被付氏仁畢、而去年春、無故被改中原氏、宛給預所下人幷乘蓮女子之條、存外之次第也、如度々之關東御教書者、可與立當國舊御家人領、罷給預所所從快深、幷非御家人乘蓮女子之條、不可然之次第也、且引入守護使之中、構出無實、以無咎御家人領、罷給非御家人等之條、旁以存外也、非御家人之上は、云快深、云乘蓮女子、當名爭可令知行哉、（是一）次守護代、幷重代御家人に引入守護使之旨、申付無實之上は、不日有糺御沙汰、欲被行其科、（是二）次依蒙古國事、可致用意之由、被下關東御教書之間、有其沙汰處、以御家人名田、罷給非御家人之條、無法之次第也、（是三）次舊御家人之跡、可與立之由、度々被下關東御教書之處、剩被顚倒當名之條、違背關東御教書之故歟、（是四）次當名爲往古御家人領、非百姓名之處、被罷百姓公事之條、無謂次第也、（是五）次被付去年九月十九日御教書幷御家人等申狀之處、于今不被申陳狀御返事之條、違背武家歟、（是六）早任兩度言上之旨、被返付于本主氏女、可令勤仕御家人役之由、爲被仰下、言上如件、建治二年六月日、

〔師守記〕貞和三年三月七日庚戌、是日若狹國田井保公文職事、圓慶（道尊子）與良成（當時公文）相論、兩方參入、不及召決、以訴陳有沙汰、圓慶爲道尊子、所申非無其謂之由、面々一同了、

〔師守記〕貞和五年五月十七日丁未、今日攝津國豐島北條下司職事有沙汰、若鶴丸與西均相論之、兩方代官被召合之、則不及對決、不審出來時、被相尋許也、若鶴丸訴、有其謂之由治定、

〔師守記〕貞治六年八月十七日辛酉、今日法皇寺長老來臨、鴻臚館下司職、幷名主職等事、今朝善覺爲家君（師右）〇使節、向大判事明宗宿所、被返事善覺語之、重爲使節向大判事許、所詮爲理訴歟之間、依相親口入申同候、任文書道理、可有成敗之趣也、返事云、於下司職者、以方々緣書令申之仁有之、又御口入異他之間、周障無極、然而此間、下司暫不可改易之子細有之、今年所務之後、可相計之由存云々、名

云云仍又不足于所申之證文歟、然者彼訴訟之詮、所申之證、雖在兩條、康和安貞宣旨、其趣如此、言上之儀、其以相違歟、抑件庄之論事、倩案兩方之訴狀、粹頗參差、先行人訴申者、下司職也、如祐繼申者、行人全無帶下職之例云々、就之行人可勘申帶下司之先例歟、而只進寛治定文、爲其證、爰祐繼申云、此定文者、皆定置預所職也、是謂上司職云々、行人所進之寛治定文者、誠皆預所職事也、仍又難備此證據、如祐繼申狀者、上司下司等兩職各別事也、隨寛治定文之趣、於今者多以相違、不可必依其狀之由存申歟、(其趣細具可申狀、仍略之、)日來論申下司事歟之由所思給也、又評定之時各存申此旨歟、然而件庄上下兩職、已以各別云々、以寛治定文之旨、行人可訴申者、是相當預所職歟、全非下司職也、然者所進之證文、非下司事、日來可訴申者、下司職事也、今被尋行人帶此職之例、進此證文、所申之趣有不審、可依寛治定文者、可申上司(是預所也)歟、如何之由可被召仰行人歟、其時定有申上之旨歟、就其狀重可有御計乎、但件上司職、當時誰人之所帶哉、猶付社務歟、又各別之人歟、可被尋祐繼歟、當時不付社務、爲他人之所帶者、寛治定文之趣、爲證文進覽之條、彌可有疑殆歟、就令辨申之儀日來所申之眞僞、定無隱密歟、此相論之肝心等、所詮不可過之歟、短慮之所及、大旨如此、得此御意、可被令申入給歟、經高頓首謹言上、

十一月六日　民部卿經高請文

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年五月廿三日庚戌、肥後國御家人大町次郎通信、與多々良次郎通定、相論當國大町庄地頭職事、以御恩地、不可賣買之由治定訖、然而爲別御計、所賜通信也、是其心操無私曲歟之由、前武州(○北條泰時)日來內々御覽置之上、於被召放當所者、可失活計之由依令愁歎、殊被申行之云云、

〔東寺文書〕若狹國御家人等、重言上、爲東寺供僧、申付無實、改易同國太良保內末武名主職、依罷給非御家人順良快深幷乘蓮女子、御家人役闕如間、就訴狀雖被下御教書、不及陳狀上は、如元欲被申付中原氏子細事、副進一通御教書案、件名者、如先度言上、當國言上、重代御家人丹生出羽房雲嚴、先祖

文明元年六月廿一日

左衛門尉貞頼　隼人佐任式　式部丞秀數　大和守元運
美濃守貞有　但馬守清基　和泉守貞秀　河内守國道
肥前守之種　丹後守秀興　信濃守忠郷　下野守貞基

鴨社禰宜祐繼與同社行人相論但馬國土野庄下司職間事

〔平戸記〕仁治元年十一月六日乙未、今日獻土野庄相論之請文、其狀云、

右兩方申狀理非之趣評議先了而取□□經□仕問、行人以件陳狀被召問祐繼之處、陳答水火、如行人申狀者、康和安貞兩度宣旨爲龜鏡、備申證文之旨非無其謂、證據之條無異儀歟之由思給之處、官注進之康和宣旨狀、以祐繼陳申□祝伊房訴訟、被問禰宜惟季之日、□□□□謂其役之輕重、忌子者、以七歲之者定補之、月障出來之後、停其職、可謂一旦之職、行人者限壽命勤仕之由、惟季辨申子細之詞也、全非宣旨仰詞歟、公家不被定補之職也、仍壽命之限、否狀非可被定仰事歟、件宣旨仰詞者、只違寬治五年定文莫致重訴云々、就之案、彼寬治宣旨狀依但馬國司訴、寄事於神威、動致國煩、如此輩對決眞僞、隨其狀迹、社司者解却見任、官使者可被處重科之由也、是則伊房背社務之沙汰、可自領之企所被誡仰歟、如此者、祐繼遠（〇遠一本作違）一可得所申之理、爲行人已不足于此相論之證文歟、行人今所申上者、康和宣旨云、於行人職者、永限壽命令勤仕之由存仰詞之旨歟、是不然事也、惟季辨申、彼役輕重之詞、曾載宣旨也、可謂勿論歟、但可謂改否之例者、社務以申狀也、用捨可在時議、至行人存申之儀者、非勅定之間、相違所申之證據歟、凡至改補事者、且祐繼度々有申旨歟、件左右可在勅定歟、又行人申云、安貞宣旨云、補行人職者、以一期爲限、輙無改易之例云々、如此申狀者、又宣旨仰詞歟之由思給之處、於官注進狀者、依氏子訴被問祐高之宣旨也、以一期爲限、無改易例之由、氏子訴申之詞也、全非宣下儀、件宣旨仰詞云、左中辨平朝臣時兼傳宣、權中納言源朝臣具實宣、奉勅宜問諸卿者歟、（權中納言問勅宜問祐高）

州之無扶持之旨陳之、粹已嗷々也、兩人共被追出彼所畢、

〔吾妻鏡四十一〕建長三年四月廿日庚戌、國司領家年貢事、殊可致精誠辨濟、若春三月已後就此事本所訴訟出來者、可被地頭於本所申分之由被仰出云云、

〔光明寺舊記二〕光明寺雜掌行眞重申

當寺領內犯科人筑前五郎茂仲跡沒收地、久志本屋敷畠等事

副進

二通　以前廳宣案

一通　前祭主家裁判御下知案（被弃捐白拍子鶴王子僞訴之條、分明也、）

件久志本屋敷畠等者、當寺傳得之條、以前言上事舊畢、而前總官御時、號筑前八郎之女子白拍子鶴王子、稱帶元德二年成阿處分文、雖經亂訴、義理不調、疑殆露顯之間、被弃捐畢、仍全寺家領掌之條、見于副進之裁判御下知也、爰百姓等寄事於左右、令對捍所當物等之間、就訴申子細、被下兩度廳宣之處、字次郎、對御使如問答者、筑前八郎之女子方者、給玉丸殿御敎書致其沙汰云々、御敎書事、曾未承及之、所詮付于彼次郎、被召出稱號御敎書、可被經嚴密御沙汰者哉、抑號筑前八郎女子者、何仁哉、若爲鶴王子者、爲前々御弃捐身之上者、沙汰外之次第也、但如百姓等申者、非鶴王子云々、然者依何可致亂妨哉、疑殆多端、然早被下重廳宣、且付次郎幷立幾太郎等、召出稱號之御敎書、且被尋糺亂妨之女子名字、爲被經御沙汰、言上如件、

興國三年五月日

〔建武以來追加〕意見

一近年申給神領御判地、依本主訴訟可被返付否事、就訴訟御糺明之處、於理運之儀者、雖爲神領被返下凡人之段、先蹤在之歟、然者任證文之旨、宜有御成敗乎、

掠給御下文知行、自今以後、雖有文證紕繆、守式目之趣、過廿箇年者、不顧理非、就知行之年紀、可有御成敗、

嘉禎四年九月九日評定

〔吾妻鏡三十三〕曆仁二年（○延應元年）二月卅日庚午、御家人所帶事、知行歷年序之後、猶稱本領有訴申輩之間、爲斷如此濫訴、兼造式條之上、今更不及子細之由、有御沙汰云云、

〔吾妻鏡二〕治承五年（○養和元年）九月七日庚辰、從五位下藤原俊綱（字足利太郎）者、武藏守秀鄕朝臣後胤、鎭守府將軍兼阿波守兼光六代孫、散位家綱男也、領掌數千町、爲郡內棟梁也、而去仁安年中、依或女姓之凶害、得替下野國足利庄領主職、仍平家小松內府（○平重盛）賜此所於新田冠者義重之間、俊綱令上洛愁申之時被返畢、

〔吾妻鏡三〕壽永三年（○元曆元年）二月三十日己丑、信濃國東條庄內狩田鄕領主職、避賜式部大夫繁雅訖、此所被沒收之處、爲繁雅本領之由、愁申故云云、

〔吾妻鏡六〕文治二年六月十七日癸亥、梶原刑部丞朝景自京都進使者、執申內大臣家（○藤原實定）訴事、是家領等爲武士被押妨事也、所謂越前國北條殿眼代越後介高成、妨國務、般若野庄藤內朝宗、瀨高庄藤內遠景、大島庄土肥次郎實平、三上庄佐々木三郎秀能、各或三年、或一兩年、煩所務、抑乃貢云云、二品（○源賴朝）殊令驚給、速可止妨之由、面々可被仰含之由云云、

〔吾妻鏡二十六〕貞應二年八月三日、今日評議、付所領致訴訟之輩、相語武士寄附事、又出擧利爲多々利、其沙汰出來事、不能武士口入之由被仰六波羅云云、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年十月九日辛卯、有評議、駿河前司以下皆參候、諸人訴論事被決斷、爰尾張國御家人中、民部丞泰貞與駿河前司郞從太屋中太家重、泰貞親昵、年來所領有相論、其事今日被經沙汰之處、泰貞竊廻謀評定所之後、竊評議之趣、駿河者家重得道理意見之由申訴、家重又參其砌、元自駿

本領訴訟

〔今川記五 かな目錄〕一田畠井山野を論ずる事あり、本跡糺明之上、剩新儀をかまふる輩、於無道理者、彼所領の中三分一を可被沒收、此義先年義定畢、（此條各任訴訟、以追加定さする所也、○中略）

一新井溝、近年相論する事、毎度に及べり、所詮他人之知行を通す上は、或替地、或は井料勿論也、然ば奉行人をたて、速に井溝の分限をはからふべし、奉行人にいたりては以罰文私なき樣に可沙汰也、但自往古井料の沙汰なき所においては、沙汰の限あらざる也、

〔御成敗式目〕一雖帶御下文不令知行經年序所領事

右當知行之後、過二十箇年者、任右大將家○源頼朝之例、不論理非、不能改替、而申知行之由、掠給御下文輩、雖帶彼狀、不及敍用矣、

〔式目抄二〕一雖帶御下文不令知行經年序所領事

寶治元十二廿八、御教書、諸國地頭所務事、押領之後、既過二十年者、不可依年紀、又神社佛寺領幷公家門跡之所領ノ事、年紀ノ法ナシ、ナン十年ノ不知行ヲモ訴訟申ス也、

〔吾妻鏡三十〕文暦二年○嘉禎元年十二月十一日己亥、宇佐宮神領事、十一箇所爲沒收地、其内四箇所者被返付之、於七箇所者依無其次、未及被返付、今日有沙汰、縱雖過廿箇年、自然便宜出來之時者、不拘式條、可有御裁定之由云云、

〔御成敗式目追加〕一嘉禎三年八月十七日評定云、或構謀書被押領之由訴之、或掠給御下文知行之條、不可依此式目之旨、欝申輩雖其數在、不論理非之詞、已相叶此儀歟、自今以後、雖有文書之紕繆、過廿ヶ年者、守式目之趣、不顧理非、就知行之年紀可有御成敗云々、

越後國吉田鯉毛淵沙汰之時被加之（八ヶ條目之追加）

〔御成敗式目追加〕一廿箇年以後訴訟事

右如式目者、當知行之後、過廿年者、任右大將家之例、不論理非不能改替、而或稱謀書押領由訴之、或

沙彌 同

尼子殿

三澤對馬守殿

神西三河守殿

生尾神五郎殿

生尾族中

〔蔭涼軒日錄〕寛正三年卯月廿日、東福寺領賀州熊坂莊關所、與伊勢備後入道訴論之事、以寺家連判之狀并目安伺之、仍兩奉行布施下野守、并備後方奉行飯尾美濃入道、以糺決可致披露之由被仰出、即於殿中命于兩奉行也、

〔蜷川親元日記〕寛正六年五月廿二日戊辰、岩堀申、奉書遣之、

岩堀伊賀入道方知行分尾州給國領事、就守護違亂、重而御成敗候、於自然之時、宜令任御奉書之旨、無疎略、可有合力彼代官之由候也、仍執――

五廿　　親元

蜷川出雲守――貞興

〔蔭涼軒日錄〕文正元年七月四日、建仁寺領之事、自吉良西條殿、以訴狀命于飯尾四郎左衛門尉、致披露可仰御成敗之由被望申、即以彼目安渡于四郎左衛門尉也、

〔大内家壁書〕堺目相論之時餘地并餘得之事

諸人知行分、堺目相論、自地内及御沙汰、以上使被撿地之時、各所給之地、過分限有分土餘地并餘得事者、此餘地餘得之事、以中途之儀、可為公用之由御定法也、諸人為存知壁書如件、

延德三年九月十三日

沙彌花押

沙彌花押

尼子殿

御代官

三澤對馬守殿

就杵築與御崎境相論事、兩度被成奉書之處、無參洛之間、言語道斷次第也、所詮今月中帶支證有參洛可被明申、万一令無沙汰者、可被沙汰付御崎、尙以不可有無沙汰之由、依仰執達如件、

康正二年九月六日　在國周防守

左衞門在判

沙彌在判

沙彌在判

杵築社　兩國造

按文

召使奉書三度目

雲州日御崎與杵築境相論事、御札明牢處候、杵築御崎可有發向之由有其聞、事實者、無謂次第也、不可然之由、兩國造可被申含、若其儀無承引、有企不思儀者、不廻時日打越彼在所、堅可被相支、若千万有合力人躰者、注交名、不日可有注進、然者同前可被處罪科、尙以不可有無沙汰之由、依仰執達如件、

康正二年十二月一日　周防守在判

御代印　豐後守同

沙彌同

郎左衛門尉、催諸勢寄來之旨、相防之處、百姓次郎九郎男令打死云々、以外之次第也、既至故戰之儀者、御法炳焉之上者於彼堤者、可被行死罪、次當寺承仕參河一類以下、令同意寄懸之條、有御法旨、一段堅可被加下知之由可被仰下也、仍執達如件、

永享十三年〇嘉吉元年六月廿六日

下野守判
美濃守判

東寺雜掌

〔日御崎社文書〕就雲州杵築御崎堺事、自御崎帶支證申之所詮今月中、兩國造代令參洛、可被明申由可被申付、猶以不可有此沙汰由、依仰執達如件、

康正二年七月二日

左衛門尉花押
周防守花押
沙彌花押
沙彌花押

就御崎領事、自兩國造種々緩怠之子細有之由、注進在之、言語道斷次第也、已前及御沙汰、被立置制札處、如此狼藉、以外所行也、所詮於以後者、自杵築可令停止候、去縮由堅可有成敗、猶以不可有此沙汰由、依仰執達如件、

康正二年七月二日

左衛門尉花押
周防守花押

三澤對馬守殿

御代官

尼子殿

然押領、任和與狀同目六、蒙御裁許、全寺家知行、爲令與行佛事勤行、重言上如件、

嘉暦元年十月日

〔太平記三十六〕仁木京兆參南方事附大神宮御託宣事

近年此人〇仁木義長伊勢國ヲ管領シテ在國シタリシニ、前々更ニ公家武家手ヲ不指神三郡ニ打入テ、大神宮ノ御領ヲ押領ス、依之祭主神官等、京都ニ上テ公家ニ奏聞シ、武家ニ觸訴フ、開闢以來、未斯ル不思議ヤアルトテ、嚴密ノ綸旨、御教書ヲ被成シカドモ、義長曾不承引剩我ヲ訴訟シツルガ惡キトテ、五十鈴川ヲセイテ魚ヲ捕リ、神路山ニ入テ鷹ヲ仕フ惡行日來ニ重疊セリ、

〔滿濟准后日記〕永享五年四月八日、炭山土民等出京處、於石田邊、伏見土民出逢、於五人打之了、手負兩三人在之云々、此間與伏見山堺相論事在之、伏見申狀無窮之間、究明最中也、然以此宿意伏見土民等、致嗷々儀歟、石田小栗栖者、共出逢、伏見者二人召取了、召取二人自小栗栖治部上座方進之間、遣撿斷所了、炭山下法師等三人、自烏羽罷歸處、於伏見又召籠之云々、此子細、今日以經祐法眼内々令申公方了、

〔看聞日記〕永享六年四月八日、抑定直馳申、去六日、於山前庄百姓等草苅之處、自觀音寺押寄、百姓三人忽打殺、其外有手負云々、驚入忩可有御成敗之由申公方、雖可被申清和院御參籠中也、機嫌惡之間、先守護佐々木定直罷向、嚴密可下知之由仰、去年當月、炭山喧嘩出來、當年又如此之儀、驚入者也、十七日、定直參山前、與觀音寺山相論事申、源宰相物詣之間、召寄目安事仰談、　十月廿三日、源宰相歸參三條被喚事、山前與觀音寺境相論事也、此間山前百姓等、觀音寺山木切取云々、仍守護公方へ訴申間、奉行飯尾ニ被仰、堺令撿知可付理運之由被仰出云々、此旨飯尾肥前申間、定直地下へ飛脚下畢、

〔東寺百合古文書六十九〕等持院雜掌申、今度東寺與朱雀用水相論事、於水口令打擲在所童、剩堤三

圓然無理間、松木住坊沙汰時、吹上畠字尒二橋田事、雖申子細、三問三答之間、終不及陳狀、閉口上、今又雖被下御下知、不進陳狀上者、欲預御成敗事、

副進

以前御下知案

件田畠事、子細前々言上事舊了、而任御下知之旨、御使雖致告知、不及是非請文、陳狀之上者、爲蒙御成敗、重言上如件、

嘉曆元年十月日

僧惠觀申

欲早任總官御下知旨、被差副神宮使、被沙汰付、吹上畠地二段事、

副進　總官御下知案

右惠觀可進退領掌之子細、見總官御下知也、然則被差副神宮使、爲被沙汰付言上如件、

嘉曆三年四月日

僧惠觀重申

欲早停止圓然押領、蒙御裁許、被全佛事勤行、法常住院領內、吹上畠地二段、字尒二橋田地一段間事、

副進

一通　惠觀和與狀案（圓然令和與于惠觀狀也）

一通　寺領目六案

右彼畠地二段、田地一段間事、自最前以降、每度言上之處、他所未盡之由、及御沙汰歟、圓然乍令和與法常住院、同寺領等、忽違犯其旨、令押領件田畠三段之條、猛惡之至、希代無口之次第也、然早停止圓

〔光明寺舊記 五〕内宮一禰宜總官ヘノ御返事
妙樂寺別當代朝眞、與僧惠觀所論、松木住坊敷地以下等事、相副使等散狀、仰給旨謹承候了、圓然不敍用御下知候云々、其上者、神宮成敗、更不可事行候、又如惠觀申狀者、以神人可被追出云々、發神人非神宮成敗候、只彼等依同心否事候也、無案內輩、依他事望申此儀事、雖出來候□及成敗候也、誠恐謹言、

嘉曆元年
十月廿九日　　　　內宮禰宜荒木田在判奉

禮紙云、使散狀具書返上候也、□恐々謹言、

僧惠觀重申

於圓然者、難參對由遁申、至阿月阿闍梨者、進請文由承及上、可被令御沙汰、就訴陳文書等、欲蒙御成敗、松木住坊敷地、幷田畠等事、

件久季、於圓然者、稱代官朝眞所勞之由、遁申參對云々、至阿月阿闍梨者、進請文云々、佛具之段、爲圓然之口入、買得之旨申之歟、於令盜賣妙樂寺佛具者、就圓然之口入、豈可成賣買哉、併所仰高察也、此上者惠觀一身參對、無其詮歟、就訴陳證文等、爲蒙御成敗、重言上如件、

嘉曆元年七〇七恐十字誤月日

松木住坊敷地等事、御下知案、儻給了、任其旨、來廿八日、帶文書等可參對候、恐々謹言、

〔光明寺舊記 二〕敵方告狀幷御下知案文

藏人所供御人、字松王丸代久季申、以字吹上畠地二段、稱法常住院領、可壞取在宅由、誓盟申事、御下知申狀具書如此、子細見狀候歟、此事承御所存、可申沙汰候、恐々謹言、

五月十七日　　　　定興花押

惠觀御房

僧惠觀重申

有御成敗、若於存未盡由之族者、不可致其相論之旨被仰下云云、

〔吾妻鏡二十〕建暦二年六月十五日己丑、常陸國吉田庄地下沙汰人等、濫妨本所所務、且任去文治二年閏七月廿五日、故右大將家（源頼朝）御下知、爲關東御沙汰、可被付彼下地於本所之旨訴申之間、爲廣元朝臣奉行、有評議、謂文治御下文者、可有計成敗之間、就被下院宣御沙汰訖、今度無其儀也、且非地頭輩事、以本所沙汰人等濫吹事、無左右難覃御裁許之由治定、仍今日載其趣、被出御返事云云、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜四年（貞永元年）九月一日、畿內近國、幷西國境相論事、共以爲公領者、尤可爲國司成敗、於庄園者、爲領家沙汰、經奏聞、可爲聖斷之由被定、且以此趣被仰六波羅云云、

〔平戶記〕寛元三年二月廿三日戊子、今日進狹川庄相論事之請文、其狀云、

狹川庄相論事、延實賢仲訴陳狀、雖多旨趣所詮具見于賢仲重申狀、其條々盡子細之中、案此相論之肝心、延實申狀云、覺胤母自京都取下坊舍資財等、依建立花林院、勝長成悅、件庄永讓與覺胤了、縱雖思返、於後證文者、不可爲證文云々、就之賢仲又陳申云、彼讓狀有僞事之疑、其趣辨申之旨、頗有其謂歟、但件狀眞僞不審候、被召正文、可被左右歟、誠爲僞事者、凡非沙汰之限歟、兼又延實申狀云、西北院幷領田等事載之、不載件庄之子細云々、如賢仲陳狀者、此條件院家領者、卽當庄事也、代代手繼、或載領田之由、或載當庄之號、依時有事樣之不同云々、且田地相承之法、爲先證文被比校兩方文書之時、不可及一口同日論之由申之、尤可被召覽候歟、相論之決斷、可在此等候歟、以此趣可令披露給、經高謹言、

二月廿三日　　民部卿經高請文

私申

文書任本數返上之、抑見參之時如申候、自去十五日齋籠事候、拘惜事候間、見漏事定候歟、恐存候可令計披露給候也、

土地訴訟

り、京都の御かためたるべきよし望て、無數の圭幣をついやし、丹精を盡しなげき申ければ、諸奉行人も尤と感じ、頻に吹擧申けるが、寶德元年正月御沙汰ありて、土岐左京大夫持益にあづけられし永壽王殿をゆるし、亡父持氏の跡をたまはり、公方御對面あり、

〔御成敗式目〕一改舊境致相論事

右或越往昔之境、構新儀案妨之、或掠近年之例、捧古文書論之、雖不預裁許、無指損之故、猛惡之輩、動企謀訴、成敗之處、非無其煩、自今以後、遣實撿使、糺明本跡、爲非據之訴訟者、相計越境成論之分限、割分訴人領地之內、可被付論人之方也、

〔新編追加雜務〕一本所訴訟事、雖蒙裁許、未充給替於當給人之間、不及知行之由、多有其聞、預裁許之輩、任先下知之旨、可令糺返之、但當給人所領一箇所之外、不知行者、有御許替於當給人之後、本主可知行之、爲二箇所者、速可令糺返也、

〔吾妻鏡十〕文治六年○建久元年四月四日丁亥、美濃國內地頭佐渡前司重隆、幷堀江禪尼、妨公領、爲令沙汰其事、召使則國、入部之處、菊松犬丸等、公文凌礫之由依有訴、被尋下之間、二品○源賴朝殊令驚申給、

〔吾妻鏡十六〕建久十年○正治元年十月廿四日癸未、參河國內、御寄附大神宮之庄園有六箇所、而守護人藤九郎入道蓮西代官善耀、被押妨之由自神宮依訴申之、爲廣元朝臣奉行被尋問蓮西之處、於六箇所者、御奉免之後、更以不交其沙汰之由、善耀內々申之旨、昨日進請文之間、副其狀於御敎書被遣本宮、奉免之後者、爭可成其妨哉之由被載之云云、

〔吾妻鏡十六〕正治二年五月廿八日壬午、陸奥國葛田郡新熊野社僧、論坊領境、兩方帶文書、望總地頭畠山次郎重忠成敗、重忠辭云、當社雖在領內、秀衡管領之時、令致公家御祈禱、今又奉祈武門繁榮之上、重忠難自處者、則付大夫屬入道善信擧申之、仍今日羽林召覽彼所進境繪圖、染御自筆、令曳墨於其繪圖中央給訖、所之廣狹可任其身運否、費使節之暇不能令實撿地下、向後於境相論事者、如此可

錯亂セバ、一向御成敗ノ相違ニ可成歟之間、可爲何樣哉云々、仍先可被仰付彌五郎由思食云々、此旨且可仰談畠山云々、(○中略)駿河事、畠山計ニ被尋仰了、管領ハ彌五郎事内々取申、山名ハ千代秋事申間、不及御尋歟、　廿七日、早旦出京、參室町殿、(○足利義教)駿河國ヨリ富士大宮司注進狀、幷葛山狀等一見了、國今度不慮物忩事申入了、隨而富士進退等事、可任上意旨、載罰狀申入也、　二十八日、今河上總介一跡事、(駿河國)可被仰付嫡子彥五郎由、大略御治定、其旨爲門跡可申遣今河遠江入道方之由、今朝被仰之間遣狀了、今河下野守方ヨリ下遣也、彥五郎使者、同相副罷下云々、　五月九日、早旦出京、參室町殿、自駿河國今度下向上使妙淳西堂注進以下一見申了、爲用意内々被下遣御判、依國時宜楚忽ニ不可渡遣、今河二男彌五郎之由被仰付處、今月三日、既渡遣之由注進之間、以外御腹立也、但國弓矢、若火急子細在之歟之處、曾無其儀、自關東彌五郎舍弟千代秋丸扶持之由、雜說分計注進申也、　十九日、早旦出京、以赤松播磨、自昨日出京事蒙仰了、(○中略)自駿河國注進狀等、今度上使妙淳西堂罷上、國人内者等申詞、大略載告文詞申入了、彌五郎(今河二男)方ヘ國御判、去三日渡之了、此事楚忽之儀云云、但西堂御判隨身上者、渡條又存内歟、奉行二人、飯尾肥前守、同大和守、兩人自駿河書狀告文等於御前讀進之、昨日悉備上覽云々、今日重讀進令聞予御用云々、　六月廿二日、駿州下向上使星巖和尚、周浩西堂、今晚參洛之由、自路次音信之間、明旦於京都可入見參之由返答了、　廿三日、早旦出京、星巖和尚、浩西堂對謁、今河彌五郎御請、幷國人内者以下、各載告文詞、捧請文了、每事如上意落居、既爲彥五郎迎、内者十餘人參洛云々、則召寄飯尾肥前、同大和守、松田對馬守、上使申詞具錄之披露、予先參室町殿、上使申詞大概申入了、今河彥五郎ニ駿河國守護職、並官途民部大輔等事、被仰付管領了、

〔鎌倉大草紙〕爰に越後の守護人上杉相模守房定、關東の諸士と評議して、九ヶ年が間、毎年上洛して捧訴狀を、基氏の雲孫永壽王丸(○足利成氏)を以、關東の主君として、等持院殿(○足利尊氏)の御遺命を守

事、只今ハ器非器難定樣思食也、是モ未來若器用モヤ、人力ニテコソ可申付旨ヲバ申ラメト思食也、然者大事國相續仁體、於不見定者、又難申付歟、然者就母方有緣、關東隣國之間、此者ニ申付儀ト諸人上下可意得條ハ御案內也、然者今河事、此小者母ユヘ歟、關東一體雜說之間、及種々沙汰了、且又山名執申入キ、如此處ニ、只今此小生ヲ執別相續ノ仁體ト定條、旁心中非無御不審也、次一色左京大夫子息五郎事、今河上總緣ニ可罷成之由、去年以來申間、不可有子細由被仰出キ、此時ノ申狀モ、以前關東所緣事ユヘ、及雜說了、雖然委細以聞食披儀、于今畏存間、彌無二御心安者ト被思食樣可致奉公條本意間、一色左京大夫所緣事申入云々、然者已關東有緣小者ニ國事可申付條、又關東ヘ口無二者ト可申哉、所詮旁今河尙々不被口御意也、於千代秋丸事者、是非不可叶口口自餘兄弟內、シカト申付趣ヲ重可申入由、能々山名可申付云々、此仰旨、召寄山口申付了、今日及夜陰間、明旦可參候云々、　六月廿九日、駿河守護今河上總介嫡子彥五郎遁世由內々申賜候也、　十一月十五日、今河上總守猶子息千代秋丸事、於取立可爲相續仁體之由、以狀又申上由被仰出、以外無正體事、定病狂仕申入歟由存候、先度堅被仰出候間、千代秋相續事、可略仕由申了、尙々無正體申狀之由存候、早々可申遣云々、　五年三月十五日、今河總州〈駿河守護〉嫡子彥五郎事、器用不便由、今河遠江入道申旨、內々達上聞了、　四月十四日、山名禪門來、〇中略駿河國錯亂事等、條々申旨在之、簡要今河上總守二男彌五郎、父上總守當時病床、及鶴林哉之處、父ヲ人質ニ取、任雅意讓與狀ヲサセ、舍弟千代秋丸方者ヲバ、大略打之了、言語道斷次第也、仍狩野富士大宮司兩人方ヘ、今度國次第、具被尋聞食、可有御成敗條、尤可然由申入也、〇中略就駿河國事、山名申入旨申處、此事彌五郎申旨、自管領申入也、其趣ト只今山名申入旨トハ相違也、彌五郎申入旨ハ、千代秋丸方者共、父ヲ押ノケ、可任雅意所行露顯之間、致其沙汰了、於今者、一迹事可申付彌五郎、早々御判可申沙汰旨、以狀令申管領〇細川持之也、次矢部阿佐伊奈者共十餘人以告文連署、彌五郎事執申入也、然ニ不被任父讓引違御沙汰有テ、萬一國

食ノ烟ノ心細サ、只推量リ給ヘト、委ク是ヲ語テ、涙ニノミゾ咽ビケル、斗藪ノ聖、熟々ト是ヲ聞テ、餘ニ哀ニ覺テ、笈ノ中ヨリ小硯取出シ、卓ノ上ニ立タリケル位牌ノ裏ニ、一首ノ歌ヲゾ被書ケル、

難波潟潮干ニ遠キ月影ノ又元ノ江ニスマザラメヤハ

禪門諸國斗藪畢テ、鎌倉ニ歸給フト均ク、此位牌ヲ召出シ、押領セシ地頭ガ所帶ヲ沒收シテ、尼公ガ本領ノ上ニ副テゾ是ヲ給タリケル、

〔建內記〕永享十一年六月廿五日辛丑、傳聞武家諸奉行、人々愁訴、雖經數年不及披露、近日雖付之、或稱管領命、越次第披露之、不可然、不依尊卑親疎、任次第可伺申由有仰云々、

又聞諸家被尋有愁訴人云々、政道無好惡被裁許者、尤可叶天心、珍重々々、

〔隨意錄 六〕北條泰時、懸一鐘於廳事門、而使民之欲有訴者不時撞之、斯乃倣古之登聞鼓與、抑由其慮與、

〔滿濟准后日記〕永享四年三月廿九日、今日聞被仰出山名事、駿河守護今河上總守〈〇範政〉相續仁體事、末子千代秋丸之由、內々被聞食及間、此者事、母關東上杉治部少輔姉妹云々、幸ニ嫡子以下兄弟數輩在之、閣此等、堅固幼少七八歲者ニ可申付條、併別心樣ニ可罷成歟、不可然由、先度以山名狀上意趣具申下了、此御返事、昨日〈廿八日〉自山名方同今河方申、山名使者山口、今河使者三浦安藝云々、來申旨同、今河罰狀等〈此門跡へ狀〉持參申趣、嫡子事、如仰可申付處、此者事、以外無正體、始終奉公、且以不可叶條見限了、內者共又同前儀候、仍去年所勞以外時節、內者共寄合、セメテハ幼少間、未來器用モヤト存間、千代秋ニト申了、已所勞本復、仕上者、相續仁體、先何トモ不被定下者可畏入云々、且非緩怠別心儀、以罰狀申入候也云々、此旨披露之處、重仰旨、誠於嫡子事者、器用トモ、又非器用トモ爲上ハ難仰出事也、隨遂父非器用之由、見限上ハ勿論歟、末子千代秋丸〈七歲〉云々、此器用又御不審也、七八歲小者

つりし、いまだ世にやおはすると消息たてまつらん、もてもうで、聞え給へなどいへば、なでうことなき修行者の、なにばかりかはとはおもひながら、いひあはせて、その文をもちて、あづまへ行て、むかし〳〵とをしへしまゝにいひて見れば、入道殿の御消息なりけり、あなかまあなかまとて、ながくうれへなきやうにはからひつ、佛神のあらはれ給へるかとて、みなぬかをつきてよろこびけり、かやうの事すべて數しらずありしほどに、國々も心づかひをのみしけり、最明寺の入道とぞいひける、

〔太平記三十五〕北野通夜物語事附青砥左衛門事

西明寺ノ時頼禪門、密ニ貌ヲ窶シテ、六十餘州ヲ修行シ給ニ、或時攝津國難波ノ浦ニ行到ヌ、鹽汲海士ノ業共ヲ見給ニ、身ヲ安シテハ一日モ叶マジキ理ヲ彌感ジテ、既ニ日昏ケレバ、荒レタル家ノ、垣間マバラニ軒傾テ、時雨モ月モサコソ漏ラメト見ヘタルニ立寄テ、宿ヲ借給ケルニ、内ヨリ年老タル尼公一人出テ、宿ヲ可奉借事ハ安ケレ共、藻鹽草ナラデハ敷物モナク、礒菜ヨリ外ハ可進物モ侍ラネバ、中々宿ヲ借奉テモ甲斐ナシト侘ケルヲ、サリトテハ日モハヤ暮ハテヌ、又可問里モ遠ケレバ、枉テ一夜ヲ明シ侍ント兎角云侘テ留リヌ、旅寢ノ床ニ秋深テ、浦風寒ク成儘ニ、折燒葦ノ通夜臥侘テコソ明シケレ、朝ニ成ヌレバ、主ノ尼公、手ヅカラ飯匙取昏シテ、椎ノ葉折敷タル上ニ、餉盛テ持出來タリ、甲斐々々敷ハ見ヘナガラ懸ル態ナンドニ馴タル人共見ヘネバ、不審ク覺テ、ナドヤ御内ニ被召仕人ハ候ハヌヤラント問給ヘバ、尼公泣々サ候ヘバコソ、我ハ親ノ讓ヲ得テ、此所ノ一分ノ領主ニテ候シガ、夫ニモ後レ、子ニモ別テ、便ナキ身ト成ハテ候シ後、總領某ト申者、關東奉公ノ權威ヲ以テ、重代相傳ノ所帶ヲ押取テ候ヘドモ、京鎌倉ニ參テ可訴訟申代官モ候ハネバ、此二十餘年、貧窮孤獨ノ身ト成テ、麻ノ衣ノ淺猿ク、垣面ノ柴ノシバ〳〵モ、ナガラウベキ心地侍ラネバ、袖ノミ濡ル露ノ身ノ、消ヌ程トテ世ヲ渡ル、朝

月日にも及ず、右大將殿自筆の御書下されば、子細にやをよぶ、もとのごとく、かの尼領知しけると也、其後右大臣家の時、件の尼が女、この扇の下文を捧て、沙汰に出て侍りけるに、年號月日なき由奉行いひけれ共、かの自筆そのかくれなきによりて安堵しにけり、

〔吾妻鏡十一〕建久二年十一月廿三日戊辰、以遠江國河村庄、本主三郎高政、奉寄附北條殿、有愁訴之故也、

〔吾妻鏡十七〕正治三年〇建仁元年五月六日乙卯、昨日佐々木中務入道經蓮、以子息高重、捧一通訴狀、去月廿一日狀今日遠州以善信令披露彼狀給、是於身雖無所犯、依傍人之讒、蒙御氣色之條、令愁訴云云、其旨趣初謝無科之旨、後載數度勳功、

〔吾妻鏡二十〕建暦二年十月廿二日甲午、下遣奉行人等於關東御分國々、於其國可成敗民庶愁訴之由有其沙汰、爲被止參行之煩也、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年〇建保元年四月廿七日戊寅、宮內兵衞尉公氏爲將軍家御使、向和田左衞門尉宅、是義盛有用意事之由依聞食、被尋仰其實否之故也、而公氏入彼家之侍、令案內、小時義盛爲相逢御使自寢殿來侍、飛越造會無橋、其際烏帽子拔落于公氏之前、彼體似斬人首、公氏以爲、此人若彰叛逆之志者、可伏誅戮之表示也、然後公氏述將命之趣、義盛申云、右大將家〇源賴朝御時、勵隨分微功、然者抽賞頗軼涯分、而薨御之後、未歷二十年、頻懷陸沈之恨、條々愁訴、泣雖出微音、鶴望不達、鴨退恥運訴也、更無謀叛之企云云、

〔增鏡九草枕〕時賴朝臣〇北條は、康元元年に、かしらおろしてのち、しのびて諸國を修行しありきけり、それも國々のありさま、人の愁などくはしくあなぐりみきかんのはかりごとにてありける、あやしのやどりにたちよりては、その家ぬしがありさまをとひきくことわりあるうれへなどの、うづもれたるをきゝ、ひらきては、我はあやしき身なれど、むかしよろしきしゆうをもちたてま

〔建武式目〕一可被聞召貧弱輩訴訟事

殊可被懸御意也、御憐愍須有、貧家之輩、被聞食入彼等愁訴事、爲御沙汰專一乎、

〔建武以來追加〕管領政所壁書

一押領不知行地後經訴訟事永享元十二七

有愁訴者、企訴訟可仰御成敗之處、猥先乍令押領致訴訟之條、造意至難遁罪科、所詮雖寄事於親類被官人等、不可被敍用、

〔吾妻鏡四〕元暦二年〇文治元年五月廿四日戊午、源廷尉義經如思平朝敵訖、剩相具前内府〇平宗盛參上、其賞兼不疑之處、日來依有不儀之聞、忽蒙御氣色、不被入鎌倉中、於腰越驛徒渉日之間、愁鬱之餘、付因幡前司廣元、捧一通歎狀、廣元雖披覽之、敢無分明仰、追可有左右之由云云、

〔古今著聞集五和歌〕鳥羽宮、天王寺別當にて、かの寺の五智光院に御座有ける時、鎌倉前右大將〇源頼朝參せられたりけり、三浦十郎左衞門義連梶原景時ぞ共には侍ける、御對面の後、退出の時、尫弱の尼壹人いで來り、右大將に向て、ふところより文書を一枚取出して云、和泉國に相傳の所領の候を、人におしとられて候を、御こし候へども、身の尫弱ふぐによりて事ゆかず候、適君御上洛候へば、申入候はんと仕候へ共、申つぐ人も候はねば、たゞ直に見參に入候はんとて參りて候とて、その文書を捧たりければ、大將みづからとりて見給ひけり、文書のごとく、一定相傳のぬしにて有かととはれければ、いかでか僞をば申上候べき、御尋候はんに更にかくれ有まじと申ければ、義連に硯たづねて參れと仰られて、尋出して參たりければ、墨おしすりて筆染てうちあんじて、わが持給ひける扇に、一首の歌を書給ひけり、

いづみなるゑのだの森のあまさぎはもとの古枝にたちかへるべし、かく書て、義連に、これに判くはへて、尼にとらせよとてなげつかはしたりければ、義連判くはへて尼にたびてけり、年號

年（暦應三）諸官評定文者、興福寺爲訴人、送兩年無音之條、不可然歟、但賴英既參訴之上者、被召出彼輩等、可被尋究矣云々、就之寺家重々雖申所存、同年五月廿九日、大判事明成注進狀云、爲無後訴、來月二日辰一點、召具彼平五郎男等、可參對之由可有御下知云々、仍爲斷後訴、件日當寺雜掌出對、賴英已下之輩、忽諸皇憲、不拘武命、亂入不知行之地、剰致自刃傷、（支證條々立申之畢）及謀訴之條、罪科尤不輕、就中兩年之間、違背及度々之上者、可被召誡其身之由、申披所存畢、云當寺當知行所見、云自刃傷、支證所申無子細之間、不及被召出平五郎男、則預使廳御注進畢、而如今月十二日院宣者、平五郎男所犯無子細上者、可禁獄其身云々、御沙汰參差迷惑失度者也、所犯無子細之支證何事乎、就一方掠申、被罪科之條、尤以不便次第也、早被召返所掠申院宣於賴英者、云濫妨猥藉之兩年違背、云自刃傷謀計、其科難遁之上者、欲被處相當之罪科矣、

再訴

〔御成敗式目〕一右大將家以後、代々將軍、幷二位殿御時、所充給所領等、依本主訴訟被改補否事、代々御成敗畢後、擬申亂事、依無其理被棄置之輩、經歲月之後、企訴訟之條、存知之旨、罪科甚不輕、自今以後、不顧代々御成敗、猥致面々之訴訟（訴訟一本作濫訴）者、須以不實之子細、被書載所帶之證文、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一裁許相濟後、申殘儀在之付、重而言上、堅停止之事、

愁訴

〔尺素往來〕諸庄苑年貢半濟事、本所愁訴、尤有其謂歟、

〔新編追加（雜務）〕一宣旨事

方今四海已定、萬方靡然、誰輕宗廟社稷之重事、誰掠五畿七道之濟物、然則一爲休莊公之愁訴、一爲優地頭之勤勞、旁從折中儀、須定向後法、〇中略

貞應二年六月十五日　　大史小槻宿禰

左中辨藤原朝臣

謀訴

言上

事由

右依定綱濫行、自叡山所遣使者所司二人義範、辨勝、去月卅日到著、告狀云、依罪科欲預賜定綱并子息三人於衆徒中云云、此外子細、盡使者之詞、仍去一日與返報、又相遇愚意所及、答云、定綱狼逆不能左右、爭通重科乎、隨風聞之說、卽以去月十六日可被行罪科之由、兩度達叡聞畢、任罪名被仰下歟、但存可召賜之儀者、不經言上、先令觸賴朝者、可進止之處、今付衆議召渡者、恐似輕聖斷、又非有私乎、交名輩召其身可進院廳也、宜令待勅定云云、然而衆徒有註申旨者、隨重狀可左右之由相存之處、以去月廿六日辰剋群參禁闕、奉振神輿、發聲濫訴奉驚主上、三條、不足言事也、不存此義者不可差下使、又遣使者可待返事歟、而待計下洛之條、心與事相違、更非本意、賴朝苟以忠貞奉公、繼家業守朝家、衆徒有何意趣、强廻奇謀令待計哉、鬱望之至、啓而有餘、配流定綱、禁獄下手之由、宜下已畢、誠是明時之彝範也、而衆徒欲背勅裁者、本自不可經奏達、○中略

建久二年五月三日　賴朝

進上　高三位殿

〔新加制式〕雖无道理、無指損之故、企謀訴之輩、可被懸贖銅事、

右式目之趣炳焉也、但或不致奉公、或无忠節之輩、割分件所領、可預新恩之段、非無其詮乎、自今以後、於企謀訴之輩者、可有贖銅、○註略則可被付寺社之修理、

〔東寺百合古文書三〕寺家支狀平五郎男事

興福寺雜掌賴英掠申刃傷狼藉事

右去々年暦應二九月十九日、爲右中辨顯藤朝臣奉行、可令尋沙汰給之由、被成院宣於別當殿畢、而賴英乍爲訴人送兩年、出對難澁、謀訴無疑之上者、任被定置之法、可被處罪科之由申子細之處、如去

濫訴

て、かれらが一味の者ども數輩、本領を沒倒せられ、其後和談寬免の間、本領返し可被下由、憲忠まきりに訴訟申されけれども、成氏御免なかりけり、これにより、皆々分國の一揆被官人等をめし集め、猶以致嗷訴といへども御許宥なし、近年は寺社舊附の庄園をさへて、家人どもに令恩補さる程に、國々所々より訟止事なく、騷動忩劇、關東の大亂と見えければ、成氏より憲忠に下知ありて、雖被加折檻更に是をもちひず、如何樣東國の大事、此時にありとやおもひけん、〇下略

〔御成敗式目〕一右大將家以後、代々將軍并二位殿御時、所充給所領等、依本主訴訟被改補否事、
右或募勳功之賞、或依官仕之勞、拜領之事、非無由緒、而稱先祖之本領、於蒙御裁許者、一人縱雖開喜悅之眉、傍輩定難成安堵之思歟、濫訴之輩可被停止、但當時給人有罪科之時、本主守其次、企訴訟事、不能禁制歟、次代々御成敗畢後、擬申亂事、依無其理被弃置之輩、歷歲月之後、企訴訟之條、存知之旨、罪科甚不輕、自今以後、不顧代々御成敗、猥致面々之訴訟〇訴訟一本作濫訴者、須以不實之子細被書載所帶之證文、

〔御成敗式目〕一依無道理不蒙御裁許之輩、爲奉行人偏頗之由訴申事、
右依無其理不關裁許之輩、爲奉行人偏頗之由、構申之條、太以濫吹也、自今以後、構不實企濫訴者、可被收公所領三分一、無所帶者、可被追却、若又奉行人有其誤者、永不可被召仕矣、

〔建武以來追加〕式目 庭中篇目
一本所寺社領事
方々施行停滯、頭人并奉行緩怠、空經廿ヶ日者、任本條宜經直訴、嚴密遵行之、可申左右之由差日限、可仰本引付方、但有限日數已前、諸方雜掌、亦猥及濫訴者、暫可被閣彼訴訟也、

〔吾妻鏡十一〕建久二年五月三日庚戌、被付奏書於高三位泰經卿善信草之、俊兼清書也、申剋雜色成重帶之上洛、其狀云、

强訴

〔吾妻鏡十一〕建久二年四月十六日癸巳、梶原平三景時、爲使節上洛、是延暦寺衆徒、可申請定重黨類之由、及强訴之旨、罪科无所遁者、早可被行其科之旨依被奏聞也、

〔百練抄十後鳥羽〕建久二年四月廿六日癸卯、天台衆徒、奉昇日吉祇園北野等神輿、參陣頭訴申、字佐々木太郎定綱、於江州去比殺害神人宮仕等、可被處罪科之由也、攝政已下參內、武士廷尉等、參陣邊加制止、各奉置神輿、神人等分散了、

〔後愚昧記〕永和三年九月廿七日、神木○春日渡御宇治云々、是依東北院門主西園寺子息與西南院相論維摩講師事、總衆徒者、西南院方也、可被退治東北院之由、訴武家之處、軍勢進發遲々故也、

〔看聞日記〕永享五年七月十八日、抑有山訴、條々以外及嗷訴、可奉振神輿○日吉云々、山上夜々燒篝、洛中物忩云々、十九日、山訴不被聞食入、只可振神輿之由被仰云々、閏七月廿六日、抑山訴事落居、昨夕管領○細川持之光照院猷秀坊へ押寄召捕、土佐國配流、今朝立洛中云々、飯尾肥前爲上意逐電畢、赤松大河內事、可被預宗領云々、

〔康富記〕嘉吉二年十一月十八日乙亥、就南都興福寺閉籠事、自管領畠山左衛門督入道德實被遣使節於南都、被尋嗷訴事云々、飯野大和入道、松田豐前守兩人、去十五日令下向、今日上洛云々、

〔康富記〕寶德三年七月廿四日庚申、依招引向飯尾肥前入道許、用朝飡、語云、山門衆徒、動猥令動座神輿○日吉閉籠堂舍致嗷訴、剩近日招寄賊徒於山上、於結界地致合戰企殺害、毎度御裁許、非無其煩、於向後者、以支證可經訴訟也、若不事問、動座神輿、閉籠堂舍者、尋究張本人、到衆徒者、追捕其身、沒收所帶、可被付寺社修理也、到地下人者、可被處嚴科也、使節令緩怠者、可有其咎之由、去十九日、於管領仰諸奉行有評定、被載事書一紙、被成遣御敎書於山門了、

〔鎌倉大草紙〕管領上杉右京亮憲忠名代として、長尾左衛門入道景仲威勢を振、八州彼名字の中三家あり、上州白井の長尾、總州佐貫の長尾、越後の長尾等也、先年江の島合戰のとき、成氏へ敵對し

執申人者、可有御禁制、奉行人、若令緩怠、空經廿箇日者、於庭中可申之、

〔御成敗式目〕一遂問注輩不相待御成敗執進權門書狀事

右預裁許之者、悅强緣之力、被弃置輩者、憖權門之威、爰得理之方人者、頻稱扶持之芳恩、無理之方人者、竊猜憲法之裁斷、頗政道、職而斯由、自今以後、慥可停止也、或付奉行人、或於庭中可令申也、

〔建武以來追加〕式目 庭中篇目

一本所寺社領事

方々施行停滯、頭人并奉行緩怠、空經廿ヶ日者、任本條宜經直訴、嚴密遵行之、可申左右之由、差日限可仰本引付方、但有限日數已前、諸方雜掌、亦猥及濫訴者、暫可被閣彼訴訟也、

〔建武以來追加〕管領政所壁書

一諸人庭中事 永享八六三

致訴訟之輩、各申請賦、可付奉行所處、無左右企庭中之條、自由之至也、但雖望賦、令遲々者、申次之族、或緩怠歟、或贔屓歟、屬別人申之、尙延引者、於庭中可言上之、非急事題目等、不經次第猥致庭中事、一切被停止訖焉、

〔吾妻鏡 三十五〕寬元二年三月廿八日戊辰、武州對面訴人等、數輩群集、先々依被棄捐訴訟、庭中言上之族也、再往聞其理非、少々與奪于攝津前司、佐渡前司、信濃民部大夫入道等方、可勵申定云云、自當座卽相副使者於訴人、被送進之、平左衛門四郎、萬年馬允、伊東左衛門五郎等爲御使云云、

〔後愚昧記〕貞治五年八月十九日、今日武家評定始也、引付庭中等、同始行之云々、大夫入道沒落以後、始有此事、

〔竹崎五郎繪詞〕十月〇建治元年三日、ときの御をんぶぎやう、あきたのゑやうのすけどのゝやすもりの御まへにて、ていちう申事、ひごの國の御けにん、たけさきの五郎ひやうゑすゑなが申あげ候、〇下略

庭中（六日、十六日、廿六日、）

〔式目抄四〕一闕本奉行人付別人企訴訟事

永和條々ノ內、延慶二年四月十六日、被下文殿〇〇條々ノ內、一可被置庭中幷越訴事、庭中、三日、十八日、二十三日（已上）一日ノ沙汰不可過三箇條、件日々雜訴沙汰、當番傳奏著文殿可問答事、越訴、八日、十三日、廿八日（已上）沙汰不可過二箇條、奉行人同可著文殿事、一庭〇〇中ノ日、四日、九日、十九日、廿四日、件ノ日、當番傳奏著文殿、可尋聞訴人所申、委被糺決申沙汰、私曲令露顯者、啻非被改奉行、宜被止出仕、將又訴人構不實矯飾、忝及庭中者、永被棄訴訟、至雜掌者、可被召出使廳、凡奏事不實、幷奸訴罪科、同此法、越〇訴〇ノ日、十四日、十九日、奉行人被定其仁、可著文殿、人數可爲二人、一訴論人、構不實矯飾及庭中者、可有罪科沙汰事、一獻芹賄賂輩、雖爲理訴可被訴訟事、

〔師守記〕曆應三年二月八日辛卯、是日自執權黃門有御敎事、來十四日庭中引上可爲十一日之由、尤寺用事、可有其沙汰也云々、則被出廻文了、　九日壬辰、今日家君（師右）〇依庭中御定、文殿衆、家君、中大外記師利、大夫史匡遠、大判事明成、明法博士景有、佐渡大夫判官秀清、高倉大夫判官景世等、參仕着座、別當資明卿、葉室宰相長光卿等也、

〔沙汰未練書〕一奏事事

引付評定、越訴庭中、以被弁置事、訴論人共歎申之、（是奏事、六波羅無之、）

〔沙汰未練書〕一庭中事（庭中者、諸事本奉行人不取申事、）

引付庭中、於引付御座申之、御前庭中〇〇〇者、於評定御座申之、京都者、定奉行人、以申狀申也、（關東ニハ庭中奉行無之、）以綱申之、

〔御成敗式目〕一闕本奉行人付別人企訴訟事

右闕本奉行人、更付別人、內々企訴訟之間、參差之沙汰、不慮而出來歟、仍於訴人者、暫可被抑裁許、至

沙汰、被成御奉書畢、

〔饅頭屋本節用集天〕庭中テイチウ直訴訟也

〔式目抄四〕一聞本奉行人付別人企訴訟事

庭中ハ、記錄所、文殿ニモアリ、庭中ノ日ヲ定メ置ルヽ也、當時路次ニ於テ申モコレニ擬スル也、

〔庭訓往來〕寺社訴訟者、〇中略奏事於庭中、

〔庭訓往來抄下〕庭中ト云事ハ、奏者ナシニ物ヲ云樣ナル事也、是尤似タリ、

〔尺素往來〕本領事、〇中略敵方猶不得休、雖及越訴庭中、每度停廢、

〔勘仲記〕正應六年〇永仁元年八月二日乙酉、依記錄所庭中番、早旦參內、左少辨爲行、大外記師顯不參、明法博士章保一人祗候、訴人沙彌生心、上野國園田御封、幷伊勢國散在田畠事申之、章保注進申詞付予、予付內侍、先所奏聞也、相尋前藤宰相可申之由有勅定、暫祗候、〇中略其後退出、生心申詞、

正應六年八月二日於記錄所愁申

沙彌生心申、大神宮領上野國園田御封、幷伊勢國散在田畠等事、頭左大辨奉行緩怠之間、去六月十日庭中之處、件日上卿自前藤宰相家、急可被申沙汰之由雖被申、本奉行職事于今不及其沙汰之由申、件子細、且被尋奉行職事、直被召出正應四年三問三答、訴陳可省其沙汰歟、

明法博士中原章保

〔建武年間記〕記錄所被定下寄人結番事〇中略

庭中三、十三、廿三、

〔師守記〕貞治六年五月廿六日辛丑

記錄所

定寄人結番事〇中略

時、誠先度沙汰、眼前有參差之儀者、被下御敎書、重所被經沙汰也、次第沙汰之體、引付同前、

〔簡禮記〕越訴ノ事、是ハ奉行頭人ヲ越而、上ヘ訟ヲ申上ル目安ノ事也、副樣二品ノ用捨有之、口傳、

〔北條九代記下〕永仁五年丁酉

宗方北方十 修理亮宗頼男、母大友兵庫頭頼泰女、正應五年十二月十八日任左兵衛尉、○中略 正安三年八月廿日任駿河守、同廿五日爲越訴頭、

〔北條九代記下〕乾元元年壬寅

越訴頭 宗秀 二月十八日引付頭

〔太田康有記〕建治三年十二月十九日、御寄合山内殿 相太守、城務康有、被召御前、奥州被申六波羅政務條々、○中略 越訴事、 下野前司、山城前司、可奉行、

〔北條九代記下〕嘉元三年乙巳

宗宣從四位下陸奥守 母越前守時廣女、正安五年二月廿八日任雅樂允、同三月十三日任式部少丞、同八月六日敍從五位下、同九年六月爲引付衆、同十年十月爲評定衆、正應元年十月七日任上野介、永仁元年五月爲越訴奉行、同七月爲小侍奉行、同十月止引付執奏諸人訴訟、

〔北條九代記下〕永仁五年丁酉三月六日評云、被止越訴、但本所事、一箇度被許之、質券賣買地可被返本主、凡下買地不依年紀、利錢出擧不及沙汰云々、

〔北條九代記下〕永仁六年戊戌二月廿八日評云、越訴被許之、但宗宣宗秀事切事者不及沙汰、質券賣買利錢出擧、向後被許之、

〔政所賦銘引付〕土師左衛門大夫秀綱文明十六五廿三 窪西七條院町田壹町三段事、譜代相傳私領也、然清水坂七觀音院江九拾貫文、入置本物返質劵之處、號永代買得地、申給奉書云々、殊被遂御糺明之由有之歟、秀綱不出帶支證之上者、非御糺明云々、越訴也、此事爲飯加淸房 去文明十年十一月廿五日申

參議左大辨藤原朝臣忠光　左大史小槻宿禰匡遠　大外記中原朝臣師茂
左大史小槻宿禰重實　主税頭中原朝臣師守　博士清原眞人宗季
大判事坂上大宿禰明宗
貞治元年十一月廿九日

記錄所
貞治元年十一月廿九日越訴庭中條々
一四條宰相雜掌申、美濃國河崎庄內兩個、幷忠助名事、被尋下越訴狀可有沙汰
一同雜掌申、二條町地事、今度越訴之時重可申
一御房丸申、今西宮神主職事、被召出本訴陳可有沙汰歟

着座
中御門大納言
左大辨宰相

次不帶本所擧狀致越訴事、諸國庄園幷神社佛寺領、以本所擧狀可經訴訟之處、不帶其狀者、既背道理歟、自今以後、不及成敗矣、

〔御成敗式目〕一國司領家成敗不及關東御口入事〇中略

〔沙汰未練書〕一奏事事
引付評定、越訴庭中、以被弃置事、訴論人共歎申之、是奏事六波羅無之

〔沙汰未練書〕一越訴沙汰事
被成御下知之後、不及覆勘沙汰者、屬越訴方、[illegible]沙汰參差之由、以委細申狀、越訴頭人申之、所申有其謂者、內談之時、先以入門有其沙汰、入門者、所要事也、先度御沙汰落居事書召渡後、越訴申狀、勘合內談之

外記家君、(衣冠上括、端座、)大夫史重實、(束帶、開闔、端座、家君次、)主稅頭予、(衣冠上括、奥座、匡遠宿禰次、)大博士宗季、(衣冠上括、奥座、予次、)大判事明宗、(衣冠、端座、重實次、)等參仕、申刻上卿權大納言□□(衣冠下括、被着靴、未拜賀仁也、)參着、(横座)左大辨宰相忠□同參着、(端座、東面、)越訴庭中三ヶ條內、四條宰相隆右卿雜掌申、美濃國河崎庄三名事、面々評定、被立越訴申狀、明宗書終渡開闔重實、酉刻中御門大納言被起座、寄人等乍座平伏、(如着座時、)次明宗直着到日自上首書名字、雜仕以筆着到、籤持還之次、(明宗□立紙書□□)付開闔、開闔以雜仕付左大辨相公奏聞、面々退出、○(中略)

越訴沙汰條々

一四條宰相隆右卿雜掌越訴申、美濃國河崎庄內兩佃幷忠助名事、

此事退雜掌、自下﨟申所存、明宗發言、　新加文書、兩三通備進之上、一期之後、此一門可讓賜之趣□尾一品讓狀、冷泉局非隆綱卿子孫歟、可被立越訴之趣一同、仍被召置申狀了、

一同雜掌越訴申、二條町地事、

此事退雜掌、自下﨟見意見、明宗發言、訴□曆應文殿注進、今度越訴日被召出之、可有□一同、仍申狀被返雜掌、來月九日可參申之由□□、貞和文殿注進可有持參之由、上卿被示家君了、

一御房丸代越訴申、今西宮神主職事、

此事退訴人有評定、敵方則助所帶、正應□□兩通狀、御房丸所進文書之由、先年被載記錄所□□、御沙汰未盡之由愁申之間、被召出記錄所沙汰之時、訴申□□□□趣面々一同、別不及申意見、上卿已下評定、開闔□□□□辨行知可召出之由可申之、本奉行藤中納言時□□□□□可及奏聞之由可載狀之由、上卿被示開闔重實、□□□□□返□御房丸代、今度可參申之由仰之了、

着到書樣
廿九日

匡遠(署)　師茂　重實(署)　師守　宗季　明宗(署)

見參書樣
見參

領主可管領之條本文無相違歟、

左衛門少尉中原朝臣章國

〔古簡雜纂 十一〕內々申

論人者故遊義門院〇後宇多后姈子上臈局云々、可被下彼局候也、可有御存知候哉、殿中奉行者、親方朝臣候、同可得御意候歟、

大和國山口庄間事、重申狀進上之、忩可令申沙汰給候、恐惶謹言、

六月廿一日　權少僧都俊覺

謹上　右中辨殿〇中略

一陳狀云、立越訴申披謀書段之條、證據何事哉、正安御裁許之後、越訴申狀、令不被下二尊院之上者、今案奸曲之申狀不可爲御沙汰哉云々、所詮此條、凡不得其意候、所申披之越訴狀者、非構今案之儀、早被尋申本所之日、不可有隱者哉、且又前殿御時、同備具書畢、不被尋下于敵方之條、御意爭知之哉、所詮申披之子細、相叶理致者可足者哉、一切非奸曲之所存、被陳之趣、過分之申狀也、〇中略

延慶二
六月廿一日　權少僧都俊覺

謹上　右中辨殿

〔建武年間記〕雜訴決斷所

一依訴陳難澁幷參決遁避被裁許事

本訴縱雖有其理、不可聽越訴、但其罰不可及歟、

〔師守記〕貞和三年九月十四日癸丑、今日越訴、式日、家君〇師右參文殿給、

〔師守記〕貞治元年十一月廿九日庚午、午斜、家君〇師右着衣冠上括有同車、予、衣冠上括參文殿給、可有越訴沙汰之故也、未敷座之間、寄人面々居板雜談、小時雜仕敷座、寄人四位大史匡遠宿禰、衣冠上括、奧座、四位大

越訴

〔下學集下態藝〕越訴

〔尺素往來〕本領事、○中略如當方相傳之讓狀者、送多年而後、以自筆自判付屬之條、歴然露顯、仍則蒙御裁許、卽令安堵候、敵方猶不得休、雖及越訴庭中、每度停廢、剩可有反座科條之旨、法家之輩勘申之候、

〔式目抄四〕聞本奉行人付別人企訴訟事

延慶二年四月十六日、被下文殿條々ノ內、一可被置庭中幷越訴事、○中略越訴八日、十三日、廿八日已上

沙汰不可過二箇條、○中略越訴ノ日、十四日、十九日、奉行人被定其仁、可著文殿、人數可爲二人、

〔建武年間記〕雜訴決斷所

一當所論人無左右不可直訴記錄所事

云記錄所、云當所、可有沙汰條々、已被定其法畢、若有參差事者、當所庭中、幷越訴之時可申所存、沙汰未斷之最中、於令直訴之輩者、注置訴人之名字、於當所雖爲理訴、三ヶ月不可及其沙汰乎、

〔建武年間記〕記錄所被定下寄人結番事○中略

越訴八日、十八日、廿八日、

〔師守記〕貞治六年五月廿六日辛丑

記錄所

定寄人結番事○中略

越訴九日、十九日、廿九日、

〔壬生家文書一〕口口勘答章國文永五年十二月十九日○中略

一越訴事

鬪訟律云、越訴者笞卌者、凡諸訴訟、皆從下始、而違令越訴者可招笞卌者也、

以前兩條、文法之所及、注進如此、自餘御問只同前、賣人違法之間、被行罪科之上不及彼直物沙汰、本

〔康富記〕文安四年六月一日辛酉、參鷹司殿、又參文第、令語給云、執柄事、一條殿(○兼良)可有御再任之由、武家被執奏申、細川右京大夫(○勝元)爲管領職可申入之者也、　十五日乙亥、今晩局務令立寄給、被示云、只今宣下事可在之由、被相觸兩人之間、可構參之由也、可爲關白宣下云々、近衞殿(○房嗣)曾無御上表之沙汰、雖然大相國、先度(永享四年)不及御拜賀、攝政令辭給之間、御再任事、强被申之、仍雖無御辭退、可有推任之由、就室町殿(○足利義政)大方殿内々被申候故、自大方殿(室町殿之御母堂)有御執奏、然間御上表歟否事、自禁裏被尋申近衞殿之所、未及御辭退、尙暫可爲御當職之由、御返事被申入云々、爲御執奏上者、不及是非歟、今及此宣下者也、承及分、自一上兼日連々被申入、其故者、陽明若御上表之儀候者、任次第理運可有御拜任之由、被出御所望云々、一條殿者、被最員申方々多之間如此歟、又鷹司殿一代御中絕候間、不可叶之由、於禁裏有申族云々、

〔寒川入道筆記〕一中むかしのことかとよ、都に公事聞の奉行あり、一段と正路に批判せられたと、乏かしながら女中方より耳に入ることは、皆理になるときに、かみさまの御前で公事がすむならば、まゝのやうなる批判なるべし、とかく女房にはたかきもいやしきも心がとらるゝと、

〔古文書類纂(上目錄)〕後柏原天皇永正十年大友義長條目(伯爵立花寬治所藏)

條々(○中略)

一内訴之儀、縱雖爲理運之子細、不可有許容之事、(○中略)

右此條々日夜無忘却、堅可被守其旨之事、可爲後孫者也、

永正十二年十二月廿三日　義長(大友花押)○

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一公事邊、女房衆取次、堅停止之事、

奉行人ガ公事ヲ請取テ、廿日無沙汰セバ、庭中ニ申ベシ、庭中ハ記錄所文殿ニモアリ、庭中ノ日ヲ定メ置ルヽ也、當時路次ニ於テ申モコレニ擬スル也、

〔式目抄四〕右預裁許者、悅強緣之力、被棄置者、愁權門之威、○中略強緣トハ、ヨキ緣也、裁許ヲ蒙者ハ、ヨキ緣以テ申ニ依テ、理ヲウルト悅ブ、棄置セラルヽ者ハ、權門ノ書狀故ニ理ヲ失ト愁也、誠ニ非ナル者モ、如此イヘバ政道ノキズ也、得理トハ理アリテ裁許セラルヽ者也、無理トハ理ナクシテ棄置セラルヽ者也、預裁許者ノ方人ハ權門ノ扶持故ト云、被棄置者ノ方人ハ、權門ノヒイキユヘト云、非ナル者モ如此云テ、憲法ニ御成敗アレドモ、猜ヲナス也、

〔平戶記〕延應二年○仁治元年二月廿日乙卯、依昨日之召、凌雨參殿下、○藤原兼經以勘解由次官兼親入道參召依召參御前、被仰云、昨日無出行事之間、心閑有可談世事之志、仍示遣了、今日雖物忌不可默止歟、朝務事、先取要可有沙汰、其條々可有宣下也、諸人訴訟、早付職事可奏聞、任道理可有裁報、其中又爲事之成就等、或寄付神社佛寺、或寄付權門勢家之輩者、永不可有勅許、剩可停向後訴訟之趣、入道殿被仰也、至此條者、事已一定了、其外事等未落居、記錄所事、大旨先日議定之旨不可有相違、仍今日可被宣下也、召集寄人等、今日可被召仰子細也、至宣下之條者、事一定之後、猶可示合也、○中略予○平經高申云、宣下之條々、未知其篇之間、雖申左右、臨其期可申子細歟、抑敍位除目仰事、漏此篇歟、未承其事如何、被行善政之本意、只在此要須也、於他事雖有沙汰、至此一事漏其篇者、自餘事更不可有詮也、但到諸訴之決斷、如被仰下、眞實可有施行者、又是德政之最要也、所詮其至要、可在任官加爵、雖訴已上三ケ條○雜訴、儉約、敍位、事也、其外事者、被加行者神妙、又雖不被行、至此三事有施行者、他事之行否不可及沙汰歟、事之大事、只可在此三ヶ條者、

〔豫章記〕此比細川賴春ハ、阿波讃岐土佐ノ事ハ給ル、伊與國ニ望ヲ掛ケ、內訴ヲ申サルレ共、更ニ公方樣御許容モ無リケレバ、下國ノ時ノ事ヲ左右ニ寄セテ被取懸、

ヲ別人ノ恩賞ニ被行、

〔親長卿記〕文明六年七月廿二日、鴨社事、今日奏聞、新式書改畢、

鴨社條々〇中略

一訴論御糺明之砌、可停止内奏、若訴状有不達叡聞之聞者可申事、

文明六年七月廿二日

〔沙汰未練書〕一内訴事

關東者兩所、京都者兩六波羅殿、内々申入之、或直被聞召之、或以奏者申之、

〇按ズルニ、右ノ文ニ、或直被聞召之、或以奏者申之トアルニ據レバ、内訴モ必シモ之ヲ禁ゼザルニ似タリ、

〔式目抄〕四一閣本奉行人付別人企訴訟事

奉行人ハ、公事申シ沙汰ノタメ也、而ヲ奉行ヲ閣テ、内縁ヲ以テ申ハ私曲也、一説ニ、本奉行トハ本ノ字ヲ以テミルニ、内奏ノ事ニハアラズ、其所々々定メヲク奉行アリ、寺奉行神宮奉行ノ類也、其定置本奉行ヲ閣テ、別ノ奉行シテ申事也ト云、此義本ノ字ニアタリテ見タリ、尤モ有所據、但次文ニ内々企訴訟ト云句アリ、内々ト云ハ内奏也、別人トハ近習ノ男女也、永和條々ノ内、一任官敍位雜訴等、可被停止近習内奏口入事、一近習ノ男女於奏達者、雖恐時議、以私會釋請取訴訟、一切可被停止事、以上堅可被守、延慶法、太子憲法云、棄欲明辨訴訟ト云、財アル者ノ訴訟ハ、石ヲ水ニ投ガ如シ、困窮ノ者ノ訴訟ハ、水ヲ石ニ投ガ如シ、此ヲ能辨テ、賢不肖ニヨラズ、理ヲ本トスベシ、殊ニ貧賤ノソセウヲ本ニキコシメスベキ也、

右閣本奉行人、更付別人内々企訴訟之間、參差之沙汰、不慮而出來歟、仍於訴人者暫可被抑裁許、至執申人者、可有御禁制、奉行人若令怠緩、空經廿箇日者、於庭中可申之、〇中略

內訴

大權現(家康)利家、秀家、輝元、隆景、德善院、淺野、石田、增田、長束也、十人衆召₂其甲乙₁而可₂敬聽₁之、若直訴者、此五人(此五人者、所₂加判₁之五人也、)評議之、而後可₂達₁于台聽₁也、

〔關八州古戰錄二十〕尾藤左衞門尉杉山主水正事
秀吉公ハ、八月十(天正十八年)十七日會津ヲ發馬シ玉ヒ、歸洛ニ趣カレケルガ、(中略)豆州三島ノ驛ヘ著坐有シニ、杉山主水正ト云、渡リ士、旅館ノ邊ニ推參シテ直訴ノ旨アルニ依リ、石尾又兵衞治一ヲ以、其所以ヲ尋ラレ、向後仕官ノ事、勝手ニ任ズベキ旨免許セラル、

〔梅松論〕爰に京都の聖斷を聞奉るに、記錄所、決斷所ををかるゝといへども、近臣臨時に內奏を經て、非儀を申斷間、綸言朝に變じ暮に改りしほどに、諸人の浮沈掌を返すが如し、或は先代滅亡のときに遁來る輩、又高時の一族に被官の外は、寬宥の儀を以、死罪の科を宥さる、又天下一統の掟を以、安堵の綸旨を下さるゝといへ共、所帶をめさるゝ輩、恨を含時分、公家に口すさみあり、尊氏なしといふ詞を好みつかひける、

〔太平記一〕立后事附三位殿御局事
安野中將公廉ノ女ニ、三位殿ノ局ト申ケル女房、(藤原廉子)中宮(藤原禧子)ノ御方ニ候ハレケルヲ、君(後醍醐)一度御覽ゼラレテ、他ニ異ナル御覺アリ、(中略)サレバ御前ノ評定、雜訴ノ御沙汰マデモ、准后ノ御口入トダニ云テケレバ、上卿モ忠ナキニ賞ヲ與ヘ、奉行モ理有ヲ非トセリ、

〔壒囊抄六〕怨深子推ガ恨ト云ハ何事ゾ
後醍醐院モ、准后ノ內奏ヨリ國亂レテ、天下ヲ失ヒ御座ストゾ、昨日決斷所ニテ得理セシ者、今日准后ノ內奏ニ依テ敵方ニ付ラレ、朝ニ裁許ヲ蒙ル所、暮ベニ棄置セラレケルト申メリ、

〔太平記十二〕公家一統政道事
或ハ自₂內奏₁訴人蒙₂勅許₁ヲ、決斷所ニテ論人ニ理ヲ被₂付、又決斷所ニテ本主給₂安堵₁、內奏ヨリ其地

付、御糺明候はん由、御返事候つるとて候、彼者からめ候子細は、自然無咎者をうつたへ申事もやとの事也、

〔朝倉敏景十七箇條〕一諸沙汰直奏之時、理非少も被曲間敷候、若役人等、私を致す之旨被聞及候はゞ、堅可被處同罪事、

〔信長記十二〕座頭直訴之事

爰ニ攝津國兵庫ノ町人ニ、常見トテ、アクマデ富タノシキ者有ケルガ、一期ノ間、無増減過行ベキヤウヲ計ルニ、撿挍ノ數ニ入テ、其配分ヲ取ナバ、何レノ商賣カ如之乎ト、急度案ジ出シテ、則能キニコシラヘ、撿挍中ヘ本錢千貫出シツヽ、其中ニ加テ、撿挍職ニ不異、配分ノヲリ物ヲ取ケレバ、小官ノ座頭、加樣ニ法度亂リニ成行ハ、果シテハ町人ヨリ過半撿挍職ヲ持行樣ニ可成ト、連々思ケレドモ、撿校一味シテ相計シカバ、力及バデ既ニ數年ニ及ケルガ、信長公正キ御制斷ニ逢テ、年來ノ愁眉ヲヒラキ、如先規アラント衆口一同ナリケレバ、擬議スベカラズトテ、既ニ直訴ヲ遂タリケルニ、信長公、暫御馬ヲ留ラレ、則右筆ニ仰テ、一々書記サセ、中條ノゴトクンバ、不便ノ次第ナリ、有ノマヽニ計フベキゾトテ、撿挍中ヘシカ〳〵ノ事キコエアリ、事實カト御尋有ケレバ、サヤウニ候ト答申ス、公曰、法式ヲミダス事、惡行何ゾ是ニ過ベキ、去ドモ盲目ナレバ斬刑迄ハナシ、撿挍何モ解官ニシテ、是ヨリ又昇進ノ功ヲツトメヨ、村井長門守被仰付ケリ、撿挍中非義極々シテ陳シ申ベキ樣モナケレバ、訴申所千悔スレドモ其甲斐ナシ、御憐ヲ垂ラレテ宥置カレ候樣ニト、五山ノ僧侶ヲ賴ミ歎申ニ依テ、サラバ科怠トシテ黃金二千兩出スベシトノ事也ケレバ、畏リ悅ンデ奉出之、然バ是ヲ以宇治橋ヲカケヨト、宮内卿法印山口甚介ニ仰テ掛サセラレシカバ、翌年六月ニ橋出來シテ、上下ノ往還安ラカニシテ、恩惠ヲタノシミアヘル聲、更ニ洋々タリ、

〔豐臣秀吉譜下〕秀吉又下九條法制于諸人、○中略其六曰、若有持訴書而來告者、則先可問十人衆、十人衆者、

者差符ト云、

〔建武以來追加〕式目庭中篇目

一本所寺社領事

方々施行停滯、頭人幷奉行緩怠、空經廿ヶ日者、任本條宜經直訴、

〔吾妻鏡四十〕建長二年四月廿九日甲子、雜人訴訟事、諸國者可帶在所地頭擧狀、鎌倉中者、就地主吹擧可申子細、無其儀者、不可用直訴之由、今日被仰遣問注所政所、是爲被禁直訴之族也、

〔沙汰未練書〕一地頭御家人之外、不可及直訴、名主庄官以下者、帶在所地頭擧狀及訴訟也、但於西國所務代官者、雖不帶擧狀及直訴也、仍所務代官之科者、正員雖不存知之、懸其科也、

〔建內記〕正長元年五月廿一日、一昨日（十九日）中納言入道豐房口御禮參室町殿、（○足利義敎）御對面之處、自懷中取出折紙、被入道不知行所領書付進入了、（言句不聞之）退出候處、以申次（伊勢加賀守）被返下折紙、被仰曰、如此之訴訟、直申入之條、且無先規歟、付誰人可被申歟、直訴爲傍例不可然之趣、以外有御定、中納言入道申云、近習之輩無其緣、外樣經年序之間、存餘申入之、直訴之條、一向可有御免、被仰下奉行人、可付其人也、重仰曰、經年序之由令申條、不得其意、勝定院殿（○足利義持）御時、付誰人何奉行人申入哉、於其時之延引者、不可有御存知、只今不慮如此御政道、併近日之儀也、而延引之由令申條、不可然者、（可付誰人之由、不爲分明之仰云々、）直訴出物、又招武人之嘲哢、公家之瑕瑾者畢、（○畢恐歟字誤）

〔走衆故實〕一自然直奏申時、走衆申次樣體申狀を御小者に渡す、御小者請取て、御輿きはの走衆に渡すを請取、則申入候、仁體をば繩をかけさせ、かいかう（○開闔）へ渡候由候、其故に必走衆手繩をもたせ候事故實候、惠林院殿樣（○足利義植）御代、飯川能登守（順職）親父の時、直奏候事あり、請取て披露可申樣體ありしかば、還御ありて可聞召由被仰間、其儘懷中して、彼者をば右に如申かいかうへ渡、還御ありて、以奉行可申入旨申上候處、最前之以筋目披露可申由被仰出被聞召て、かいかうに被仰

〔書言字考節用集〕八言辭公事(本朝俗、謂訴論爲公事)

〔師守記〕貞治元年十一月十一日壬子、今朝家君(○師右)以使者、今日雜訴沙汰延否事、被尋問頭右大辨資定朝臣之處、一定云々、(○中略)

沙汰事

一藤原氏女、與四條三位隆右卿相論、美濃國眞桑庄預所職事、兩方雜掌出對、對決之後、退訴論人、面々自下蔦申意見、　十六日丁巳、今日被行雜訴沙汰、庭中以前被行之、四條前大納言隆蔭卿(直衣下括)中御門大納言宣明卿、左大辨宰相忠光卿等參仕、職事藏人治部少輔仲光一身參仕、

〔沙汰未練書〕一所務沙汰者　所領之田畠下地相論事也

於關東六波羅ノ引付有其沙汰、所務相論事出來者、先調訴狀具書所務賦可上之、賦奉行請取之、賦雙紙沙汰篇目書付、訴狀加銘、追次第五方引付賦之、其手開闔請取之、於引付御座、以孔子定奉行人、奉行人治定後、御敎書成也、以之爲訴訟之初、又開闔執筆者、奉行中之宿老、引付細々事記錄仁也、公文トモ云也、

一雜務沙汰。

利錢　出擧　替錢　替米　年記　諸負物　諸借物　諸預物　放劵　沽却　田畠　奴婢

雜人　勾引　以下事也

以是等相論名雜務沙汰、關東御分國雜務事者、於問注所有其沙汰、又引付所務賦事、於問注所在之、鎌倉中雜務事者、於政所有其沙汰、亦將軍家諸色御公事支配之事等、問注所政所在之、

一六波羅雜務沙汰事

於五方引付定奉行人、令分充國々引付衆中、其有其沙汰、賦其手頭人訴狀書銘、直奉行方賦之、關東

名稱

土地ノ訴訟ハ、當時大ニ意ヲ此ニ用キシモノニテ、鎌倉幕府ノ制ハ、實檢使ヲ遣ハシテ之ヲ撿シ、若シ不實ノ訴ヲ爲ス者アレバ、其地ヲ割キテ被告人ニ附與セシメテ深ク之ヲ誡メタリキ、

本領ノ訴訟ハ、知行ノ年限ニ由リテ裁斷スル例ナリ、例ヘバ乙既ニ甲ノ本領ヲ知行スルコト二十年ヲ經レバ、甲ハ其地ヲ爭フヲ得ザルガ如シ、

讓與地ニ就キテハ、讓狀ヲ基トシテ裁決ス、而シテ其讓狀ハ、父祖ノ末期ニ及ビテ、失神セシ時ニ成リタルガ如キハ證トスルヲ聽サズ、又女子ノ讓狀幷ニ讓ラレタル男子ノ父母ニ先チテ死シ、妻妾ノ夫ヨリ讓ラレテ後ニ離別セラレタルガ如キ、各其制アリ、

貸借ノ利子ハ、年序ヲ經ト雖モ、一倍ヲ以テ制限トス、若シ訴訟ヲ爲サズシテ十年ヲ過グルトキハ、訴訟ヲ爲スコトヲ得ザリシガ、後ニハ此制ヲ改メ、十年ヲ過グルマデ償ハザルモノハ、三倍ノ利子ヲ附セシム、

質物ハ、米穀類ハ七箇月、絹布類ハ十二箇月、武具等ハ二十四箇月ヲ以テ限トス、若シ此月ヲ過グルマデ請ケ出サヾルモノハ流物トス、但シ絹布ノ利子ハ五文子、武具ノ利子ハ六文子ヲ附スル等ノ制アリテ、裁決一ニ此制ニ據ル、

土地賣買ノ訴訟ハ、二十年以內トシ、之ヲ過ギタル者ハ裁決セズ、搢紳及ビ神官僧侶ノ訴訟ハ、或ハ朝廷ニテ聽斷シ、或ハ幕府ニテ聽斷シタリ、是其時ニ隨ヘルモノニテ、必シモ一定セズ、守護地頭ト百姓トノ訴訟ニハ、別ニ奉行人ヲ定メテ、之ヲ聽斷ス、奴婢ノ訴訟ハ、多クハ、新舊主ノ爭ヨリ起ル、而シテ新主既ニ使役スルコト十年ヲ過グルトキハ、舊主ハ認メテ己ガ奴婢ト爲スコトヲ得ザル制ナリ、

〔下學集 下 態藝〕訴訟（ソシヨウ）

古事類苑

法律部二十七

中編

訴訟

訴訟ハ、鎌倉及ビ足利ノ頃ニハ、之ヲ公事、又ハ雑訴ナド、云ヒ、聽訟ニ在リテハ、或ハ之ヲ所務沙汰、雑務沙汰ノ二種ニ分テリ、所務沙汰トハ、領地等ノ訟ヲ云ヒ、雑務沙汰トハ、貸借等ノ訟ヲ云フ、而シテ法吏ニシテ久シク其訟ヲ斷ゼザル時ハ、直ニ之ヲ將軍ニ訴フルヲ得、是ヲ直訴ト云フ、豐臣氏ノ如キモ、亦一ニ此制ニ倣ヘリ、又朝廷武家共ニ女謁ニ附託シ、近習ニ夤緣シテ訴訟スルヲ內訴ト云フ、政治上、特ニ害アルモノト爲シテ、嚴ニ禁ズル所ナリ、又越訴ハ、古ヨリ之ヲ禁ゼシガ、當時ハ朝廷幕府共ニ、事實ニ由リテハ之ヲ許シ、式日ヲ定メテ之ヲ聽斷セリ、又庭中ニ越訴スルヲ許ス、庭中ハ、朝廷ニテハ記錄所及ビ文殿ヲ指シ、幕府ニハ御前庭中引付庭中ノ二種アリテ、並ニ之ヲ受理ス、

當時又寺社豪族ハ、往々多人數、群ヲ成シテ訴フルコトアリ、之ヲ強訴ト云フ、又濫訴アリ、訴フベカラザルコトヲ訴フルナリ、謀訴アリ、詐ヲ挾ミテ訴フルナリ、又愁訴アリ、後世ニ云ヘル歎願ナリ、

訴訟ハ、人事百般ノ事ニ關シテ起ルモノナリト雖モ、家督相續、土地、貸借賣買等ノ件ニ關シテハ、其例尤モ多シトス、本書ハ各、其項アリテ、之ヲ詳ニスト雖モ、本篇ニ於テモ特ニ當時ノ慣例ヲ知ラシメンガ爲ニ、各、少許ノ實例ヲ擧示セリ、

古事類苑

法律部二十七

中編

訴訟

簾中於後、自其内二品御一覧、不被仰是非、定任見此體頗赫面、景時對長茂云、彼所者、二品御坐間也云云、長茂稱不存知、起座即退出、其後定任不及執申云云、此長茂（本名資茂）者鎮守府將軍維茂（貞盛朝臣弟也）男、出羽城介繁茂七代裔孫也、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年六月廿四日丁丑、相州（○北條時房）武州（○北條泰時）等任申請之旨、合戰張本公卿等、被渡六波羅、（○中略）入道二位兵衛督有雅卿（小笠原次郎長清預之、）七月廿九日壬子、入道二位兵衛督（有雅、去月出家、年四十六、）爲小笠原次郎長清之預、下著甲斐國、而依有聊因緣、可被救露命之由、申二品禪尼（○政子）間、暫抑死罪、可相待彼左右之由、雖令懇望、長清不及許容、於當國稻積庄小瀨村令誅畢、須臾可宥刑罰之旨二品書狀到來云云、楚忽之爲體、定有亡魂恨者歟、

〔多聞院日記略〕天正四年三月十九日

一普廣院殿（○足利義教）之時分に、招月と云歌人ありし、定家の後身也と後申せし、實名は正徹と云、將軍御治世の盛に、

誰も皆見てればやがてかく月のいざよひの空や人の世の中、と云歌を讀けるをきこしめし、我身上をかくなんと御腹立にて、都の外へ追出せと、無力高野山にこもり居てあり、數年後に、將軍、招月はいまだ世にありやと御尋の時、高野山にありと承よし申に、如何なる歌かよみたると仰に、各申上て、此比あはれなる歌を仕りけるとて、京童部扇にも書、くちずさまぬものはなしと、

中々になき身なりせば此くれに歸らんものをけふの古里、とよみける、七月の末の御尋にかく申上しに、あはれに思召しけるが、さらばよび返せと、則返り御前にめし出され、御盃下さるゝに、やがて〳〵歌をとせめられければ、

ゑひぬればなほくりことぞ申さるゝ、君は千代ませ君は千代ませ、とよみしに、一段の御感にて、過分の御扶持なりしと、

不赦

雜載

謹上　右兵衛督殿

〔康富記〕應永二十七年十月十三日戊申、今朝公武僧家、突鼻之輩數十人御免、青蓮院殿執御申云々、公家萬里黄門豐房卿、九條三條公興少將二人御免、室町殿〇足利義持御違例御減之間、人々御方御所ェ御大刀進二入之一、其外諸人令二參賀一、天下大慶何事如レ之哉、

〔康富記〕應永廿九年正月廿九日丁亥、傳聞今日廣橋亞相兼宣卿出仕事、自二武家一御免也、

〔看聞日記〕永享十年十二月十一日、關東事、人々室町殿〇足利義教參賀、源中納言參、近年御突鼻人數御免參、有二御對面一云々、常磐井宮、九條前關白以下、濟々御免云々、　十二日、源三位參、公方御免事、就二德次一雖レ申、無二御免一云々、不便也、　十三日、菅三位長政卿參、公方御免之間參云々、　十四日、夜、薬室中納言參、是も御免人數也、

〔管見記〕永享十年十二月十二日、傳聞昨日前關白、並資廣、忠秀、宗豐、長政等卿、資宗朝臣、長淳、時兼等被レ免、有二對面一云々、珍重々々、

〔管見記〕嘉吉元年七月十日甲辰、傳聞此間爲二武家勘氣一輩、悉赦免、京極前黄門同出頭云々、

〔建內記〕永享十一年二月二日庚辰、相國寺長老下二向關東一、是猶可レ攻二申武衞〇足利持氏一之由、被レ仰二付上杉房州一〇憲實　赦云々、武衞事、已除二髮鬢一着二黒衣一之上者、有二恩免一、於二子息一者、可レ被レ聽二相續一之由房州頻執申、而時宜不レ許、

〔吾妻鏡〕八文治四年九月十四日丁未、尊南坊僧都定任、自二熊野一參向、是年來給二置御本尊〇愛染王像一幷御願書、御祈禱薫修也、二品〇源頼朝偏令レ恃二二世悉地一給、而城四郎長茂者、爲二平家一族一背二關東一之間、爲二囚人一所レ被レ預二置景時一也、是又以二定任一爲二師檀一、仍以二參上之便一、有二免許一可レ被レ召二加御家人一之由頻執申之間、二品被レ仰下可レ召二仕之一由上、今日定任參二御所一、被レ召二入簾中一、談二世上之雜事一給、御家人等著二座侍一、〇以レ東爲レ上南一座重忠、〇島山北一座景時也、爰長茂參入、諸人付レ目、長七尺男也、著二白水干立烏帽子一、融二二行著座中一、參二著横敷一宛二

ヲ蒙ル事三ケ度、赦免セラル、事三ケ度ニ及ブ、何ノ不義ナク、又何ノ忠モナシ、依之京童諺ニ、勘道ニ科ナク、赦面ニ忠ナシト笑ヒケル、

〔蜷川親俊記〕天文十一年三月六日丁亥、細川殿御被官人、眞壁左衛門事、當方被官人生害仕候間御成敗、然處種々眞壁御侘事條、御赦免之、

〔關八州古戰錄 二十〕北畠信雄配流事

信雄ヲバ烏山城エ押籠メ、剃髪有ベキ由ヲ命ゼラレシカバ、力及バズ入道シテ、徳源院常眞ト稱セラル、此後羽州仙北ノ領秋田エ遠流ニ處セラレ、翌年辛卯〇文祿二年八月秀吉公ノ若子棄君〇秀頼誕生アリシ大赦ニ遇フテ、勢州朝熊山ヘ來リ寓居セラレケル、

大名赦宥例

〔大内家壁書〕被行常赦事

法泉寺殿
御判

爲常徳院殿〇足利義熈御追善、於御分國中所被行常赦也、諸人可存知之由、爲令告知、依仰壁書如件、

長享三年四月廿六日　左衛門尉奉武明

前遠江守同正任

左衛門尉同武道

幕府赦宥請伸

〔吾妻鏡 七〕文治三年七月十九日戊午、右武衛消息到來、所副進院宣也、是前大藏卿泰經去年被處義顯與同之過訖、可被免歸洛之由、就令申給、被免之、而本自依爲近臣、於今者可被聽昵近之趣、被仰下之故也、

泰經卿事、席々被仰二位卿畢、而御返事趣、不分明之間、御猶豫候也、然而近日殊歎申、可然之樣可計仰遣之由、内々御氣色候也、仍執啓如件、

七月一日　左中辨

院殿〈○足利義滿〉廿五年御佛事、爲被修之云々、二日、今朝出京參鹿苑院、御點心料千疋持參了、御對面相國寺僧、去年僧喝食四十餘人被追出了、此事山名幷畠山修理大夫申間、今日申處、無相違御免、面面祝著云々、大外記業忠、治部越前守御賀法師〈梵阿〉三人、此間御突鼻也、御免事申處無子細、仍三人相副經祐法眼進了、立阿申次懸御目云々、三日、流罪以下御罪科人、爲今度御佛事御免、珍重由內內以立阿申處、流罪人ハ誰々哉ト御尋云々、四日、流罪人少々御免事、名字可注進之由被仰出間、飯尾肥前守、飯尾大和守、以下奉行ニ仰付可注進旨申、注進到來者、經祐法眼令持參鹿苑院、以立阿可備上覽旨申付了、山法師戒光事、畠山申間令披露處、委細罪科次第被尋聞食、可有御免云々、

〔建內記〕永享十二年二月廿九日壬寅、筑紫御敵〈小貳教賴〉御免事及御沙汰、大內〈○持世〉可和睦彼等之由被仰出之、

〔新撰長祿寬正記〕同年〈○寬正四年〉ノ夏ノ比ヨリ、公方〈○足利義政〉ノ御母君高倉殿御不例ノコト有リ、〈○中略〉同八月八日ノ曉、高倉ノ御所ニテ御他界有リ、〈○中略〉同月十八日非常ノ大赦ヲコナハレ、罪科人數多免許セラル、、其人數ハ齋藤民部少輔、御同朋壽阿彌、本阿彌、佐々木治部少輔、〈御書祕科〉觀世座彌三郞、笛吹又六、日親坊等也、

〔應仁記一〕亂前御晴之事

應仁丁亥ノ歲、〈○元年〉天下大ニ動亂シ、ソレヨリ永ク五畿七道悉ク亂ル、其起ヲ尋ルニ、尊氏將軍ノ七代目ノ將軍、義政公ノ天下ノ成敗ヲ有道ノ管領ニ不任、只御臺所、或ハ香樹院、或ハ春日局ナド云、理非ヲモ不辨、公事政道ヲモ不知給、靑女房比丘尼達計ヒトシテ、酒宴婬樂ノ紛レニ申沙汰セラレ、亦伊勢守貞親ヤ、鹿苑院ノ蔭凉軒ナンド、評定セラレケレバ、今迄贔屓ニ募テ、論人ニ申與ベキ所領ヲモ、又耽賄賂ニ、訴人ニ理ヲ付、又奉行所ヨリ本主安堵ヲ給レバ、御臺所ヨリ恩賞ニ被行、如此ノ錯亂セシ間、畠山ノ兩家〈義就政長〉モ、文安元年甲子ヨリ今年ニ至迄、廿四年ノ間ニ、互ニ勸進

人皆河權六太郎也云云、感其功忽蒙原免、是木曾典厩〇義仲專一者也、典厩被誅之後、爲囚人被召預梶原云云、

〔吾妻鏡 二十五〕承久三年正月廿七日壬子、今朝於法華堂、修故右大臣〇源實朝第三年追善二品〇平政子沙汰也、〇中略有施行、乞食千人、人別十疋、亦犯科者三十許輩原免之、

〔吾妻鏡 二十五〕承久三年六月廿五日戊寅、合戰張本重被渡六波羅、大納言忠信卿千葉介胤綱預八月一日壬子、坊門大納言忠信自遠江國舞澤歸京、是依爲今度合戰大將軍、千葉介胤綱預之下向、而妹西八條禪尼者、右府將軍後室也、彼舊好申二品禪尼〇政子之間、所宥也云云、

〔吾妻鏡 二十五〕承久三年八月二日癸丑、大監物光行者、清久五郎行盛相具之下向、今日巳刻著金洗澤、先以子息太郎、通案內前左京兆〇北條義時早於其所可誅戮旨、有其命、是乍洛關東數箇所恩、降參院中、注進東士交名書宣旨副本、罪科異他之故也、于時光行嫡男源民部大夫親行本自在關東積功也、漏聞此事、可被宥死罪之由、泣雖愁申無許容、重屬申伊豫中將〇藤原實雅羽林傳達之、仍不可誅之旨、與書狀、親行帶之、馳向金洗澤、救父命訖、自清久手召渡小山左衛門尉方、

〔吾妻鏡脫漏〕元仁二年〇嘉祿元年八月廿七日乙卯、今日二品〇平政子御葬家御佛事、竹御所〇源實朝妻御沙汰也、〇中略今日伊賀四郎左衛門尉朝行、同六郎右衛門尉光重、蒙原免自配所歸參、是二位家依御追福、所被恩赦也、

〔吾妻鏡 四十二〕建長四年六月十六日戊辰、將軍家〇宗尊親王聊御惱、亦炎旱涉日間、爲御祈被行赦、及數十人云云、

〔薩戒記 目錄〕應永三十四年十一月廿七日、赤松左京大夫〇滿祐恩免事、　十二月十七日、赤松前左京大夫上洛事、

〔滿濟准后日記〕永享四年五月一日、室町殿〇足利義教自今夕一七日之間可有御座鹿苑院云々、故鹿苑

云、仰曰、早所原免也、可令沙汰之者、資頼開愁眉調進之云云、

〔吾妻鏡九〕文治五年九月十三日庚午、由利八郎預恩免、是依有勇敢之譽也、但不被聽兵具云云、

〔吾妻鏡九〕文治五年十二月廿八日癸丑、平泉內無量光院供僧一人(號助公)爲囚人參著、是慕泰衡之跡、欲奉反關東之由、依有風聞、所被召禁也、今日以景時被推問子細之處、件僧謝申云、師資相承之間、清衡已下四代歸依、續佛法惠命也、爰去九月三日、泰衡蒙誅戮之後、同十三日夜、天陰、名月不明之間、

昔ニモ非成夜ノシルシニハ今夜ノ月シ曇ヌル哉、如此詠畢、此事更非奉蔑如當時、併只折節懷舊之所催也、無異心云云、景時頗褒美之、則達此由二品(○源頼朝)還有御感、原免其身、剩被加賞云云、

〔吾妻鏡十〕建久元年八月十六日戊戌、馬場之儀也、先々會日、雖有流鏑馬競馬、依事繁、今年始被分兩日也、二品(○源頼朝)御出如昨日、爰流鏑馬射手一兩人臨期有障、已及闕如、于時景能申云、去治承四年所與景親之河村三郎義秀爲囚人、景能預置之、達弓馬之藝也、且彼時與黨、大略預原免訖、義秀獨非可沈淪歟、斯時可被召出哉者、仰曰、件男可行斬罪由、下知畢、于今現存奇異事也、然而優神事、早可召進、但非指堪能者、重可處罪科者、則招義秀、召仰此旨之間、射之訖、二品召覽其箭之處、箭十三束、鏑八寸也、仰曰、義秀依達弓箭有驕心、與景親之條、案先非、今更奇怪也、然者猶可射三流作物、於有失禮者、忽可行其咎者、義秀文施其藝、始終敢無相違、是三尺手挾八的等也、觀者莫不感、二品變鬱陶、仕感荷給云云、　九月三日甲寅、大庭平太景能申云、河村三郎義秀於今者可被梟首歟者、仰曰、申狀太不得其意、早可處其刑之由、雖被仰付、景能潛扶之、歷多年也、依流鏑馬賞原免訖、今更何及罪科哉者、景能重申云、日來者爲囚人之間、以景能助成活命、愁以蒙免許之後已擬餓死、如當時者、被誅事還爲彼可爲喜歟者、于時二品頗令咲給、可還住于本領相模國河村鄉之旨、可下知者、

〔吾妻鏡十二〕建久三年六月十三日癸丑、幕下(○源頼朝)渡御新造御堂之地、畠山次郎、佐貫四郎大夫、城四郎、工藤小次郎、下河邊四郎等、引梁棟、(○中略)爰納土於夏毛行縢有運之者、被尋其名之處、景時申云、囚

ヲレテ今斯ル身トナレリ、此童ヲ免シ置テハ、定後惡カリナンズ、上人ガ奉公、其恩忘ガタケレ共、此事ハ難辭也トテ、ツヤ〱動給ハザリツルヲ、日比ノ忠共申續ケテ、上人ガ心ヲ破給テハ、鎌倉殿モ爭冥加オハスベキ、此ヲタビタラバ、聽テ法師ニナシテ佛法修行センズレバ、更ニ後惡事侍ルマジ、若不預給バ、文覺鎌倉ニテ飲食ヲ斷、思死ニシテ御子孫ノ怨靈トモ成ベシナド、一度ハ威ヅ、一度ハスカシツ、種々ニ申ツル程ニ、抑維盛卿息ヲバ、賴朝ヲ相シ給シ樣ニ、見給フ處アリテ角ハ申請給歟ト、問給ツル間、是ハ其儀ニ不思寄、免方ナキ程ノ不覺ノ人ニテ、聊モ心ニ籠タル事ハ侍ラズ、ワリナキ妻ノ不便サニ、慈悲ノ心ニ催サレテトマデ申タレバ免給ヌト、ユヽシク氣色シテゾ云ケル、北條ハ承シ日數モ過シカバ、御免ナキニコソト思給ツレバ罷下ツルニ、賢クゾ愽仕ザリケル、今一時モ遲カリセバ、本意ナキ事モ有ナマシト申ケレバ、上人、實ニ日數モ延ヌレバ、無心元ツルニ、今日マデ別事ナキハ、御邊ノ御恩トゾ悅ケル、

〔吾妻鏡 七〕文治三年十月四日辛未、千葉新介胤正參申云、重忠被召籠、已過七ヶ日也、此間寢食共絕畢、終又無發言語、今朝胤正、盡詞雖勸膳不許容、顏色漸變、世上事、終思切歟之由所見及也、早可有免許歟云云、二品頗傾動給、則以被原免、仍胤正奔歸、相具參上、重忠著于里見冠者義成座上、諸傍輩之浴恩之時者、先可求眼代之器量、無其仁者、不可請其地、重忠存清潔、太越傍人之由、插自慢意之處、依眞正男不義、逢恥辱畢云云其後起座直令下向武藏國云云、

〔吾妻鏡 八〕文治四年九月廿一日甲寅、岡崎四郎義實、依罪科可勤仕鶴岳南御堂等宿直之由含命、數日惱丹府、而義實郎從、於宮根山麓搦進山賊主（字王藤次）之間、今日所蒙免許也、

〔吾妻鏡 九〕文治五年正月十九日庚戌、若君（源賴家）御方、結構風流、摸大臣饗儀、藤判官邦通爲有識、營此事、而近衞司、相交平胡籙差樣、丸緒付樣、不分明之處、三浦介預囚人武藤小次郎資賴（平氏家人監物太郎賴方弟）彼箭事、得故實之由發言、義澄求之、伺御氣色、曰、內々雖可召仰之、若君御吉事也、爲囚人爭役之哉云

了、依武家執奏有此沙汰云々、

〔梅松論上〕爰に京都の聖斷を聞奉るに、記錄所決斷所をおかるゝといへども、近臣臨時に內奏を經て非義を申斷間、綸言朝に變じ、暮に改りしほどに、諸人の浮沈掌を返すがごとし、或は先代滅亡のときに遁來る輩、又高時の一族に被官の外は、寬宥の義を以、死罪の科を宥らる、

〔太平記十一〕金剛山寄手等被誅事

二階堂出羽入道道蘊ハ、朝敵ノ最一、武家ノ輔佐タリシカ共、賢才ノ譽、兼テヨリ叡聞ニ達セシカバ、召仕ルベシトテ死罪一等ヲ許サレ、懸命ノ地ニ安堵シテ居タリケルガ、○下略

〔吾妻鏡二〕養和二年○壽永元年二月二日癸卯、高場次郎郎從、生澤五郎、蒙御氣色、被召預小山小四郎朝政、是神馬進發之前、殊可勞飼之旨、被仰含之處、此男、有緩怠事之故也、但生倫神主、如此刑罰、不可叶神慮之由、頻依傾申、被原免云云、

○按ズルニ、本條ハ鎌倉幕府創立以前ノ事ニ係レドモ、姑ク此ニ收ム、

〔源平盛衰記四十七〕六代蒙免上洛附長谷觀音幷稽文佛師事

東ノ方ヨリ墨染ノ衣著タル僧ノ文袋頸ニ懸テ、鴾毛ナル馬ニ乘テ馳來、何者ナラント思ケル程ニ、上人○文覺ノ弟子ニ覺文ト云僧成ケリ、今一足モ急トテ先立テ馳ケルガ、馬ヨリ下ヤ遲キ、高聲ニ悞チシ給フナ北條殿トテ、文袋ヨリ二位殿ノ御免シ文取出タリ、北條披見ケレバ、自筆ニテゾ書レタリケル、其詞ニ云、小松三位中將息六代、高雄上人頻ニ申請間、所預給也ト書レタリ、北條高ラカニ讀上ル、戲呼嗜キ者哉トテ打置ケレバ、免シ給ケルニコソトテ、武士共聞テ悅アヘリ、齋藤五、齋藤六、是ヲ聞ケン心中幾計也ケント難測、サル程ニ上人モ聽馳來リタリ、馬ヨリ下ヤヽ北條殿、若公ハ申預ヌ、今一足モトテ免シ文ヲ先立テ奉ヌ、定メテ見給ヌラン、鎌倉殿宜ヒツルハ、此童ハ平家ノ嫡々ノ正統也、父ノ三位中將ハ、初度ノ討手ノ大將軍也、イカニモ難免、賴朝モ幼稚ヲ宥

勘文可奏聞之由被仰下、次參院奏聞、勘文有御爪點、已上九人、上卿中宮權大夫申領狀、即申入了、次參內奏覽勘文、入夜上卿參陣着端座、予(○藤原經長)參進膝突、進勘文、(有點紙、先例不同、然而免人次第者、有點紙之由注之、)上卿未參、已前、予於鬼間召主殿司、召硯書合事、引墨點、

〔日蓮聖人註畫讚四〕赦免狀第二十五

文永十一年甲戌二月八日、相模守(○北條時宗)夢赤衣童子來流人僧日蓮御房可赦免三呼矣、翌朝賴綱來曰、昨夜夢青衣童子來流人僧日蓮御房可赦免三呼矣、(○中略)此年二月十四日之赦免狀到來焉、副元帥之豪族等雖不甘免許、但以時宗一人之嚴命所寬宥也、其狀云、日蓮法師御勘氣事所被免許候也、文永十一年二月十四日、藤左衛門入道殿行兼(在判)、清長(在判)、行平(在判)、光綱(在判)、(○中略)同(○三月)十三日、出塚原著網羅津、(○中略)於越府兵士多隨從、故無事而同月二十六日入于鎌倉、

〔公卿補任後二條〕乾元二年(癸卯)

前權中納言正二位藤爲兼　閏四月日自關東蒙免除、自佐渡國被召返之、

〔太平記十二〕公家一統政道事

萬里小路中納言藤房卿ハ、預人小田民部大輔相具シテ、常陸國ヨリ被上洛、春宮大進季房ハ、配所ニテ身罷ニケレバ、父宣房卿悅ノ中ノ悲ミ老後ノ泪滿袖、法勝寺圓觀上人ヲバ、預人結城上野入道奉具足上洛シタリケレバ、君法體ノ無恙事ヲ悅ビ思召テ、軈テ結城ニ本領安堵ノ被成下綸旨、文觀上人ハ硫黃島ヨリ上洛シ、忠圓僧正ハ越後國ヨリ被歸洛、總ジテ此君(○後醍醐)笠置ヘ落サセ給シ刻、解官停任セラレシ人々、死罪流刑ニ逢シ其子孫、此彼ヨリ被召出、一時ニ蟄懷ヲ開ケリ、

〔後深心院關白記〕永和元年正月十七日、今夜流人歸京事宣下云々、上卿新藤中納言保光卿、職事俊任、仰詞、美濃國流人行知卿令召返ヨ、上卿召辨、(仰詞同前)仰可令作官符之由云々、流人(五人)交名、注折紙下上卿、仍最初人許仰之云々、相尋俊任所記也、兩僧正、赤松兩輩、彼是五人也、儀像ハ於配國令他界

たひ、滿寺なごりをおしみて、萬代の霞よりいで、、九重の雲にぞをくりたてまつりける、

〔百練抄十二順德〕建保五年三月廿二日、被行免者(廿五人)事、依中宮(○藤原立子)御產御祈也、　七月十七日、被行非常赦令、依上皇(○後鳥羽)御不豫御祈也、

〔百練抄十五後嵯峨〕寬元元年二月廿二日己巳、後鳥羽院御忌日、有免者云々、

〔葉黃記〕寬元四年六月十七日甲辰、依炎旱有免者、

〔葉黃記〕寶治二年七月二日丁未、鳥羽院御國忌、任例有免者、兼仰官人章高成勘文、可被免之輩廿人、予(○藤原定嗣)內々注進之、(且又仰官人全涯之)任計申有御點、近年四人不幾之間、纔被免四五人、當時多其數、仍爲攘災殊申行之、予參內、候小板敷、藏人佐宣下之、予給勘文、下官人章種、次第如例、參仕官人、左尉章種以下七人也、　十月十一日、土御門院御國忌也、(○中略)先爲行免者參內、(○註略)左尉章宗、以經、章職、章種、右尉章澄、右志明盛、少志範俊、章高等參陣、予候小板敷、藏人佐下勘文、原免四二十六人(獄四十三人散禁十三人)也、予下章宗、官人向獄門之間、有無四度計事等、子細後日勘發了、未剋事了、　十一月四日丁未、今日始聽事、(○中略)覽免者勘文、(經犯四二人載之、十郞男刃傷、庄司男竊盜、不注賊)尤輕犯也、仍予合點件四返給之、

〔新抄〕文永元年十月二日癸卯、小除目幷復任除目、侍從中納言爲氏、參議右中將伊賴、頭右大弁雅言以下參入之、次同上卿被行流人召返、(檢非違使中原章繼)

〔吉續記〕文永四年五月廿三日、今日御如法經十種供養日也、可有免者之由、兼日被仰下之間、着束帶(唐裝束)先參關白殿、內覽四人勘文、(自大理去夜送之)早可奏聞之由有仰、次參龜山殿、以權尙書申入之、原免之輩九人、有御爪點、

〔吉續記〕文永四年十月十日、自大理許、明日免者勘文(別輕犯輩注折紙)一通、(加懸紙)以官文送給之、明日免者上卿一條中納言、日來領狀、俄申所勞之由不參之間、初相催權中納言爲役夫工、奉行上卿、明日爲齋日、神事之日、尤可憚之由被示、然而爲別勅者可令參之由申、　十一日、先參關白殿(○藤原實經)內覽免者

〔法然上人行狀畫圖三十六〕月輪殿〇藤原兼實のおほせをかる〻趣をもて、光親卿たび〳〵申入らるといへども、叡慮なを心よからず、しかるに上皇御夢想の御事ありけるうへ、中山の相國、賴實公殿親の善知識たりし因緣をわすれず、上人流刑の事をなげきたまひて、念佛興行の事、さだめて佛意にそむかざらんか、門弟のあやまりをもちて、とがを師範にをよぼされ、罪科せらる〻事冥鑑はかりがたきよし、しきりにいさめ申給ければ、おりしも最勝四天王院供養に、大赦をおこなはれけるに、その御沙汰ありて、同年十月二十五日改元、承元元年なり、十二月八日、勅免の宣旨をくだされけり、かの狀云、

太政官符　土佐國司

流人藤井元彥

右正三位行權中納言兼右衞門督藤原朝臣隆衡宣奉勅、件の人は、二月廿八日事につみして、かの國に配流、しかるをおもふところあるによりて、ことにめしかへさしむ、但よろしく畿の內に居住して、洛中に往還する事なかるべし者、國よろしく承知して、宣によりてこれをおこなへ、符到奉行、

承元元年十二月八日　　左大史小槻宿禰

權右中辨藤原朝臣

勅免のよし都鄙にきこえしかば、京都の門弟は再會をよろこび、邊鄙の土民は餘波をおしむ、よろこびとなげきと、あひなかばにぞ侍りける、〇中略恩免ありといへども、なを洛中の往還をゆるされざりしかば、攝津國勝尾寺に、しばらくすみたまふ、〇中略勝尾寺の隱居もすでに四箇年になりぬ、花洛の往還なをゆるされざりしに、〇中略同〇建暦元年十一月十七日、彼卿の奉行として、花洛に還歸あるべきよし、烏頭變毛の宣下をかうぶり給ぬ、則同廿日、上人歸洛し給ければ、一山德をし

之仰之、

〔吾妻鏡九〕文治五年五月十七日丙子、可召返伊豆國流人前律師忠快之由、宣下狀到着、去月十五日、源中納言(通親)左大辨宰相(親實)少納言重繼朝臣、左少辨定經等參陣、奉行職事宮内大輔家實云云、同時被召返流人、前内藏頭信基朝臣(備後國)前中將時實朝臣(但不及上城外云云)前兵部少輔尹明入道(出雲國)藤原資定(淡路國)前僧都全眞(安藝國)前法眼能圓(法勝寺前上座、備中國)前法眼行命(熊野前別當、常陸國)等也、

〔玉海〕建久元年十月一日壬午、今日於日吉社、法皇(○後白河)被供養千僧、有赦令、(非常赦、關大神宮八幡宮等訴之外、皆赦除云々、)

〔百練抄十後鳥羽上〕建久元年十月一日壬午、法皇(○後白河)於日吉社被行千僧御讀經、權中納言通親卿、於仗座被仰赦令事、

〔吾妻鏡十三〕建久四年四月十一日丁未、住吉神主昌助、參鎌倉御留守、以女房申云、去月依舊院(○後白河)御周闋、可被召返之由被下官符、是去治承三年五月三日、所被配流伊豆國也、日來雖未爲赦身、潛仕將軍家云云、

〔吾妻鏡十三〕建久四年四月廿九日乙丑、去月十二日被召返流人等、佐々木左衞門尉定綱在其中之由、一條前黄門被申送之、又彼弟經高盛綱等、同言上其旨、將軍家太歡喜給、治承四年以來、專顯勳功之間、爲殊寵愛之處、依山門訴訟、去々年所被配流薩摩國也、　十月廿八日辛酉、佐々木左衞門尉定綱參着、此程薩摩國流人也、去三月十二日、依舊院御一廻御佛事、被免勅勘云云、將軍家日來殊歎息給之處、適逢赦參上之間甚歡喜給、則召御前云云、近江國守護職事、如元可執行之由云云、

〔百練抄十二順德〕建曆元年九月七日、山堂衆四百人許、爲院廳沙汰、被居北山妙見堂、是爲令勤行公家御祈也、年來蒙勅勘隱居所々、今蒙寬宥、

〔仲資王記〕承元五年(○建曆元年)十月卅日戊申、侍從自今日被召籠内裏、去夜除目役不仕、職事二人、殿上人五人如此云々、　十一月四日壬子侍從召籠、今夕被恩免、人々退出云々、

正月十六日節會於內裏北陣、撿非違使官人出獄舍者、含宣命追放之、是例年之儀也、又國忌幷武家御追善之時、有其沙汰、至大赦者召返流刑人、放免囚獄者、仍每度執行內談、召出流帳獄記、勘辨其輕重、被赦免之、流人者對頭人成奉書、禁獄者對所司代遣奉書、令下知之、是則爲開闔之所役乎、

〔甲子夜話 一〕予(○松浦清)ガ侍妾ノ中ニ、外山家ノ女アリキ、其父モト公家ナリシガ、年若キトキ身持コトナラズ、退身シテ隱遁セシ人ナリ、(名了圓)予其人ト問答セシ中ニ、奇ト覺ユルコト一二記ス、(○中略)其一ハ刑罰ハジメトカ云テ、(其名忘)每年正月某日、(月日忘)何ノ處ニカ(亦忘)罪人ヲ率出シテ、(此罪人ト云者ハ、此コトバカリニ勤トシテ、常ハ何カ家業ナシテ居者ナリ、例年此事行ハルヽ時ニハ、罪人ノ代トシテ刑場ニ出ルト云、眞ノ刑罰ハ、總テ武家ニテ行ハルヽユヱ、是ハ朝廷ノ儀式計ト聞ユ、)撿非違使正面ニ列シ、ソノ下ニカノ罪人ヲヒキ出ヅ、其外其事ニ與ル者、皆々官服ヲ着セリ、罪人モ亦烏帽子着服アリテ、敷皮ノ上ニ坐ス、時ニ側ヨリ罰文ヲ讀メバ、大刀執モ同ジク服色シテ其後ニ回リ、大刀ヲ揚テ首ヲ打ツ、其大刀ハ刃ニハアラデ、木ノ(其木忘)小杪ヲ執ナリ、罪人ハ大刀執ノ首ヲ打トキ、彼ノ冒シ烏帽子ヲ脫ギテ敷皮ノ上ニ置、其身ハ退去ル、時ニ側ノ人其烏帽子ヲ取リテ、撿非違使ニサヽゲテ事畢ト云、成ホド世ノ俳優ニ類シタレドモ、古政ノ遺レルナルベシ、

○按ズルニ、後世每年正月七日、使廳ニテ鞍馬ノ住民ヲ雇ヒ、之ヲ罪人ニ擬シテ處刑ノ狀ヲ爲スコトハ、上編著鈦政篇著鈦例條ニアリ、參看スベシ、

〔玉海〕文治三年四月三日甲戌、早旦親經來申、仍以赦令例、卽以親經可行非常赦之由奏聞、又可被物之輩事同奏之、觸神社訴之輩、幷強盜及義顯黨類等也、

〔玉海〕文治五年五月四日癸亥、此日太上法皇(○後白河)於四天王寺、供養千部法華十口持經者等、(○中略)今日相當結願、殊所被修此大善也、(○中略)余(○藤原兼實)召頭辨定長朝臣、(座中傳召)非常赦可被行之由奏事由、(進御座邊申之)仰聞食之由、卽以同人仰左大將、(當座第一人也、觸大神宮訴之輩非赦限、其外皆免云々、)實房卿起座於公卿座末召記(少臨身召)

上卿（大理上卿之時、於小板敷可入、下因勘文、辨官外記）辨（賜勘文料）撿非違使　官外記　因勘文（被仰大理進勘文、內覽奏聞、被下勅點、御爪點、職事）勅點傍加墨點、加合書、下上卿、副文細書之、令何人大書、一二三字不用、一二令上卿人、假令此體也、

仰詞（依其事罪犯、因令原免ヨ、或爲御著提如此仰之、今日當後嵯峨院聖忌、爲增進功德、輕犯囚令原免ヨ、）

〔夕拜備急至要抄 上 三月〕一長講堂御八講（中略）

結願免者　上卿（參議大理上卿之時、於小板敷奉之、）辨（裝束官人參時、直參獻奉之、仍辨不入、）官外記　因勘文（兼日仰大理、大理付之內覽奏聞、申御點書合書下上卿、合參人書勘文端、人數依時也、）仰詞（今日依後白河法皇聖忌、爲增進功德、任合點宜原免ヨ、或合點囚何人ト仰之、）

〔夕拜備急至要抄 上 七月〕一鳥羽院御國忌

免者（因長講堂御八講、）仰詞（今日依當鳥羽院聖忌、爲御著提、任合點令原免ヨ）

〔吾妻鏡 三十三〕曆仁二年（延應元年）七月廿六日癸巳、今日評定犯科人事、於輕罪之輩者、被行赦之時、雖被免、至重科之族者、不可然之由被定、

〔吾妻鏡 四十九〕正元二年（文應元年）六月四日庚子、就撿斷事、今日有被定之條、且被仰遣六波羅也、（中略）

一放免事

右於殺害人者、日來十箇年以後、隨所犯輕重、雖被免之、於今度者、諸國飢饉之人民、病死過法之間、以別御計、不謂年紀、無殊子細之輩者、至當年所犯者、被放免畢焉、

〔新編追加 侍所〕一勾引人事（乾元二）

爲賣買、專其業之輩、准盜賊可有其沙汰、向後守此法可被施行、先日罪名分輩惡黨、殺害、謀書以上重科之外、竊盜、刃傷、博弈、謀略以下輕罪、不謂年紀之遠近、悉可被原免歟、

〔新編追加 侍所〕一竊盜幷博弈人等事

於今日以前者、不謂年紀遠近、可被赦免、且依贓物、且隨事體、可被用捨、

〔武政軌範 侍所沙汰篇〕一赦沙汰事

實德元年十二月十四日

〔勘仲記〕弘安十年二月十七日戊寅、今日後嵯峨院御八講結願也、被行免者、(因勘文、予書合、出輕犯囚五人、藤原兼仲)大理參入、着小板敷、予進出自上戶方、懷中勘文、於小板敷取出勘文傳大理、大理置笏、取勘文披見結申、予仰云、今日後嵯峨院ノ聖忌ニ當ル、輕犯囚任合點令原免ヨ、大理稱唯、予參御所方、大理出無名門、立中門下(北腋下)、召隨身召官人、官人五位尉章保已下十四人、列居床子座立蔀前(西上北面)、蒙許之後、上首章保參進、下勘文、仰宣下詞、退、官人等左右相分、立四足門下、披勘文次第與奪、次向獄舍、宸儀(後宇多)於中門有叡覽、儼然次第、近代頗稀歟、大理參御所、有御對面、予歸局休息者也、官人五位尉章保、職隆、重友、六位十一人參仕、

〔夕拜備急至要抄(下臨時)〕一非常赦(天下重事之時被行之)

日次　上卿　大內記(詔書料)　中務輔　靫負佐(可參陣)　官外記　撿非違使(可參陣仰大理)　囚人(當日可問答大理、可拘留大理可計申之由可仰、)

詔書清書奏聞之時、可有御畫、流人召返事有之者、交名仰官可令注申、

結政請印料、宰相少納言可相催也、

職事仰詞(仁安三、入道前太政大臣(平清盛)病患延留、殊有思食趣、天下可大赦、但謂神社訴訟非赦限、調庸年限可免、以往五年內之由、宣作詔書、嘉應禪定仙院(後白河)被修作善、爲增徒惡業、宜行非常赦、任永久二年例、令作詔書、此次仰云、詔書施行已前、可免獄囚、寬喜依天變并諸國異損、可被行非常赦、依某年例、令作進詔書、常仰詞、依其事被行非常赦、詔書施行已前、且可免囚人等、)

(上卿)明日可被行非常赦、可令奉行給者、依天氣言上如件、

(廷尉佐)明日可被行非常赦、可令參陣給者、依天氣執達如件、

明日可被行非常赦、囚交名事、可令注進之由可令下知給者、依天氣上啓如件、

正應奉行之時、如此仰也、

〔夕拜備急至要抄(下臨時)〕一免者

重、已發覺未發覺、已結正未結正、咸皆赦除、但犯八虐、故殺謀殺、私鑄錢、強竊二盜、常赦所不免者、不在此限、又復天下今年半徭、老人及僧尼、年百歳以上給穀四斛、九十以上三斛、八十以上二斛、七十以上一斛、庶在璣衡、以耀三辰、永戢干戈、以理万國、普告中外、俾知朕意、主者施行、

〔康富記〕寶德元年十二月十四日、今夜朔旦冬至、恩詔宣下也、上卿權大納言隆夏卿參着仗奥座、職事頭右中辨冬房朝臣進仰勅語、次上卿移端座、令敷軾、次上卿以官人召大内記、大内記菅原在治朝臣參軾、上卿仰云、依朔旦冬至可被行赦、任永仁例詔書令作進、(奥、)大内記唯退、次令少内記中原康顯進詔書草、納筥、上卿披見之、令持少内記、進弓場、付右中辨奏聞之、即被返下、上卿歸着陣、内記置筥欲退之處、上卿可成清書之由仰之返給、内記給之退入、次上卿以官人召撿非違使(五位)左衞門大尉(大判事)坂上明世、(束帶帶劍、不帶弓箭、垂纓、)直參軾、上卿仰免者事、仰詞可尋之、此後撿非違使出左衞門陣外、於門外仰看督長令放免囚人二(〇二一本作三)人、(兼日奉行職事仰明世、明世傳仰勢多判官、判官仰武家侍所云々、)次少内記清書詔書令持參、上卿披見、了如先付弓場奏聞、即被加御畫被返下、上卿於弓場乍立披見御畫有無、歸着仗座、内記置筥退出、次上卿以官人召外記、少外記清原忠種參小庭、上卿仰云、中務輔候哉、外記申云、中務不參、次上卿目外記、外記趍進就軾、上卿賜詔書(納筥、)仰云、可傳給中務輔、外記稱唯、賜之退出、事終上下退出之期、中務輔卜部兼敏雖參陣、事終之間、空以退出了、

詔、龜策闢先符、則軒皇膺天正之期、鳳曆頒新朔、則漢主享日至之禮、咸每叡哲之威、必有受命之休、朕登紫極、雖忝齊巽之尊、臨赤縣、未施滋涼之化、爰有司奏云、十一月朔旦冬至、尺竿通測景、寸管記封陽、惠澤波喧、負冰之鱗、早洽春德、蒼穹風軟、盤雲之翅、先知南飛、時應紀而降佳辰、天不言而授延祚、聖筌古猶希値斯運、昧非今何成、自娛與衆庶同兆祥、爲群臣共相賀、自寶德元年十二月十四日昧爽以前、大辟以下無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繋囚見徒、皆以赦除、庶答章首珍貺之歡、呈乾心賁始之瑞、布告遐邇、俾知朕意、主者施行、

古事類苑

法律部二十六

中編

赦宥

赦宥ハ、刑名未ダ定マラザル前ニ於テスルモノト、既ニ定マレル後ニ於テスルモノトアリ、一兩人ヲ赦スト、數十百人ヲ同時ニ赦ストアリ、其數十百人ヲ同時ニ赦スモノハ、多クハ朝廷幕府ノ禳災追福ニ出デシモノニテ、朝廷ニテハ、詔書ヲ以テ之ヲ行ヘリ、又赦宥奉書アリ、幕府奉行ノ手ヨリ發スル赦令ナリ、

〔勘仲記〕正應六年(〇永仁元年)八月五日戊子、今日改元定也、(〇中略)大理爲奉赦令事猶祗候、上卿召内記被仰詔書事、大内記道名持參草、(入筥)上卿令取給有一見、大理、予(〇藤原兼仲)祗候之間可見之由有仰、予見畢次第返上大理、申云、此詔書、大赦之由載之如何、兼日申定常赦畢、而大赦之由被載之上者、官人守詔書可施行者也、赦之次第可相替、使廳無量大事之由、大理驚申之間、上卿召頭辨被奏聞子細、且令内覽執柄(〇藤原家基)仰云、大赦之由雖被載之、常赦之條勿論也、頭辨申上卿、此事猶大理有不審之氣、大夫史顯衡申云、大赦天下之詞、爲每度之詞、勿論之由申之、依此沙汰時剋押移畢、大理似不覺悟、詔書作例歟、爲之如何、(〇中略)上卿召中務輔、(爲少輔歟)被下詔書、次被仰赦事於大理、大理奉上宣、於中門下召官人仰之歟、此儀不見及、(〇中略)

〔迎陽記〕康應二年三月廿六日、(〇中略)

詔、(〇中略)改康應二年、爲明德元年、又仁解却祅禍、卽轉禍、大赦天下、今日昧爽以前、大辟以下罪無輕

古事類苑

法律部二十六

中編

赦宥

雜載

ふ、

〔伊達成實記 下〕政宗ヘ藥院玄意法印、寺西筑後守、岩井丹波四人ヲ以御タヅネニハ、今度關白、〇豐臣秀次謀叛ノ所一味仕、鹿狩ノ砌山ヘ參、談合ノヨシ被二聞召一候由御意候、政宗御目、被レ下候間、節々罷出候ヘドモ、左樣ノ儀無レ之候由被二仰分一候處、重而奧州ヘ下向ノ時分、秀次ヨリ餞ヲウケ候由被二聞召一候、コレハ何トテ不二申上一候由御諚ニ候、政宗行當迷惑仕申候、奧州下向ノ時、御イトマ乞ニ罷出候ヘバ鞍十口、帷子二十、栗ノ木工ヲ以下サレ候由、其時四人衆路次ニテ御談合候而、天道ツキ、此一儀不レ被二申上一候由落涙仕申由被レ達二上聞一ニ候ヘバ、子共兵五郎ヲ若君樣ヘ御披官始ニアゲマウサレ候間、兵五郎ニ國ヲ可二相渡一候、政宗ハ遠島ヘモ可レ被レ遣候、在所ニ居申候、家老共登セ可レ申候、其段仰付ラルベク候、誓紙ヲ仕候迄、屋敷ニ居可レ申由被二仰出一候、四人ノ御使者衆、藥院ノ内ヘモ御入ナク、庭ヨリ御前相濟候、心安可レ被レ存由、先仰ラレ候後、御諚之通被二仰渡一候付、聚樂御歸、御閉門ニテ御座候、

〇按ズルニ、是ハ閉門シテ謹愼セシナリ、

〔會津陣物語 二〕政宗自二白石城一引二退岩手澤一事

白石落城ノヨシ景勝〇上杉被レ聞、大ニ立腹シ甘糟ヲヨビ、汝武勇ノ撰ニ違テ、白石城ヲ預ル處ニ、〇中略妻女ノ死別ニヨリ、幼少ノ子共ニマヨヒ、途方ヲ失ヒタル上ナレバ、命ノ義ハ赦免候間、私宅ニ閉門イタシ可二罷在一ト、被二申渡一ケレバ、備後守モ籠居シテゾ居タリケル、

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年十二月卅日癸未、前武州、〇北條泰時參二右幕下〇源賴朝右京兆〇北條義時等法華堂一給、又獄囚及乞丐之輩、有二施行等一、三津藤二爲二奉行一、

閉門

〇按ズルニ、是ハ蟄居シテ罪ヲ待チシナリ、

〔家忠日記増補〕慶長四年十月八日、増田長盛、長束正家等ガ議ニ依テ、土方勘兵衛尉ヲ太田〇佐竹義宣ガ館ニ謫セラレ、今日配所ニ赴ク、〇中略淺野彈正少弼長政ハ、利長〇前田ガ縁者タルニ依テ、長束、増田等是ヲ讒シテ巷説止ズ、故ニ甲州ノ府ニ蟄居スベキノ由、台命アルニ依テ、大坂ヲ發ス、

〔葉黃記〕寛元五年〇寶治元年正月十九日癸酉、近衛前關白〇藤原兼經蒙攝政詔給、二位中納言〇數頁中略等參陣、〇中略上皇〇後嵯峨御治世六ケ年、執柄改補于今四ケ度、希代也、一條殿〇藤原實經門々被閉之、北小門許開之、庶幾弘景之牛、北叟之馬也、

〔吾妻鏡二十三〕建保五年五月十二日己丑、壽福寺長老莊嚴房律師行勇參御所、是所帶相論之輩事引汲申之故也、而此儀已及數度之間、將軍家〇源實朝有御氣色、以廣元朝臣被仰出云、三寶御歸依雖甚重、政道事頻以被執申之、曾非僧徒之行儀、早停止之、可被專修練云云、行勇心中恨之、泣歸本寺閉門云云、

〔愚耳舊聽記下〕尾崎三目内逆心附今小三郎忠義之事

扨其後小三郎申ケルハ、御敵取籠タル故ト申ナガラ、正敷御坐城ヲ責シ事、ソノ恐ナキニモアラズ、其上尾崎、三目内ノ御兩人ハ、正シキ御敵トハ申ナガラ、御家來ニテノ歷々タルニ、此若輩者ガ討シ事、御機嫌難計、重而御意ノ下ル迄トテ、小三郎ハ閉門シテコソ居タリケル、義嗣卿〇足利をめし捕奉リ、林光院へ押籠申、

〇按ズルニ、此ハ閉門シテ罪ヲ待チシナリ、

〔大友興廢記十二〕三位入道豐後國退散之事

此度丹波守、〇永福備中守〇野村が不審をかうぶり、閉門のとき、えひて理り申せしを宥免なかりしゆゑ、伊東の家、義久のためにやぶられて、天正四年丙子十二月廿八日に、豐後の國へひき越たま

散位前權中納言從二位藤實種　三月日辭、籠居、

〔吾妻鏡二十六〕元仁元年八月廿九日、前奥州〈○北條時政〉後室禪尼、依二位家〈○平政子〉仰、下向伊豆國北條郡、可籠居彼所云云、有其科故也、

〔應仁記一〕武衞家騷動之事附畠山之事

畠山政長之徒弟右衞門佐義就、久シク蒙御勘氣籠居シテ居タリシヲ、山名入道〈○宗全〉ノ計ヒニテ、赦免ヲ蒙リテ上洛ス、

〔松隣夜話中〕越後ノ科人ノ御仕置、一の重科ニハ、刀脇差ヲ召取ラレ、一代身ニ帶ズ、〈但侍以下ハ格別〉二番死罪、三番追出、四番所領沒收、五番與力同心ヲ放サル、六番籠居スル等也、

〔薩戒記〕永享六年六月十二日、抑左相府殿〈○足利義教〉政務之後、遣事之輩、已及數多、從一位資家卿〈被沒所領、蟄居、○中略〉入道大納言家俊卿〈被止經廻、蟄居、○中略〉左中辨資親朝臣〈依父事蟄居〉

〔吾妻鏡十八〕元久二年四月十一日戊戌、稻毛三郎重成入道、日來有蟄居武藏國、近曾依遠州〈○北條時政〉招請、引從類參上、怪之人旁有云云、

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年〈○建保元年〉四月十五日丙戌、和田新兵衞尉朝盛者、爲將軍家〈○源實朝〉御寵愛、等倫敢不諍之、而近日父祖一黨含恨、忘拜趨、朝盛同抛夙夜長番、令蟄居、〈○下略〉

○按ズルニ、是ハ憤怒ノ餘リ蟄居スルナリ、其語ノ刑名ニ同ジキヲ以テ、姑ク此ニ載ス、以下此類アリ、

〔家忠日記增補〕天正八年五月五日、三浦兵部少輔ハ、松平周防守康親ガ臣岡田竹右衞門尉元次、是ヲ擊捕ル、然ルニ一色ノ某、大神君〈○德川家康〉ノ御勘氣ヲ蒙テ、周防守康親ガ許ニ蟄居シテ、此陣ニ在リ、竹右衞門尉元次、三浦兵部少輔ガ首ヲ一色ニ讓リ與エテ、其戰功ヲ以テ、一色大神君御赦免ヲ蒙ラン事ヲ請フ、

られ候、慮外は大小共によらず、我家〇武田の法度に申定候間、其樣子さま〴〵あらため、少も依怙のなき樣に手をまはして、能々聞候へば、本鄕八郎左衞門道理なる故に、其まゝ置候、然れ共相手板垣なれば、仕付のために、彼本鄕を座敷籠にいれ置候所に、〇下略

〇按ズルニ、座敷籠ニ入置クトハ、次下ニ列擧スル放召人ノ如ク禁メ置クヲ云フナルベシ、囚禁ノ稍輕キモノナリ、

放召人

〔太平記一〕資朝俊基關東下向事附御告文事

東使兩人〇長崎泰光、南條宗直、資朝俊基ヲ具足シ奉テ、鎌倉へ下著ス、此人々ハ、殊更謀叛ノ張本ナレバ、嚴ヲ誅セラレヌト覺シカドモ、倶ニ朝廷ノ近臣トシテ才覺優長ノ人タリシカバ、世ノ譏リ、君ノ御憤ヲ憚テ、嗷問ノ沙汰ニモ不及、只尋常ノ放召人ノ如ニテ侍所ニゾ預置レケル、

〔太平記十七〕還幸供奉人々被禁殺事

宇都宮〇泰藤ハ放召人ノ如ニテ、逃ヌベキ隙モ多カリケレ共、出家ノ體ニ成テ、〇下略

〔甲陽軍鑑十四品第四十下〕一はなしめしうど家の内に居候はゞ、楚忽ニ其居家へ押込べからず、うちに科人いくたりありて、何道具を持たると聞定、其上もし此方にあわてもの候て、敵味方を見さかひず、切つつきつする物なれば、其遠慮尤に候、

籠居

〔易林本節用集言辭〕籠居ロウキヨ

〔吾妻鏡五〕文治元年十一月廿六日乙巳、大藏卿泰經朝臣籠居、是義經申下追討宣旨事、依爲彼朝臣傳奏、源二位卿殊鬱申之趣、達叡聞之間勅定如此云云、

〔增鏡十四春の別〕別當〇藤原資朝は佐渡の國へながされぬ、俊基はいかにしてのがれぬるにか、みやこへ歸りぬれど、ありしやうにはいでつかへず、こもりゐたるよしなり、

〔公卿補任後花園〕永享四年

社召

座敷籠

〔落穗集 前編 六〕同月〇文祿四年七月八日秀次卿は聚樂の屋形を出、十日の曉方高野山へ登山あり、青巖寺へ入て閑居あられ候付、古來より殺生禁斷の高野の儀に候得ば、身命におゐては異も有之間敷と諸人積の外、同十五日に至り秀吉公の命として、羽柴左衞門大夫、福原左馬助、池田伊豫守三人登山して興山上人に逢て其旨を述、秀次卿終に自殺有、于時二十八歳〇中略是より已後高野山遁科屋の法式は破れ候と也、

〔武德大成記 二十〕慶長五年九月二十四日、今日中納言織田秀信、池田輝政ガモトニ囚ハル、信長ノ嫡孫タルノ故ニ、神君是ヲ殺スニ忍ビズ、高野山ニ蟄居セシム、二十五日、神君增田長盛ガ死罪一等ヲ減ジ、高野山ニ蟄居セシメ、其子兵大夫守次ヲシテ武州岩槻ニ禁錮シ、高力攝津守忠房ヲシテ是ヲ護セシム、十二月十三日、眞田安房守昌幸降ヲ乞フ、神君許サズ、長男伊豆守信幸己レガ軍功ニ代テ、父ノ死罪ヲ贖ハレン事ヲ乞フ、神君是ヲ許ス、昌幸次男左衞門佐ヲ携テ、信州上田城ヲ避ケ高野山ニ入テ、剃髮蟄居、神君信幸ヲシテ舊代ノ地ヲ領セシム、

〔鶴岡事書案〕佐々目鄕當年應永二宛所務內々百姓等有强訴事云々、就之爲內談、御內外方於上宮土所會合、所詮先年辛未既有不熟之聞之時、衆中四人下向也、依之所務如形在之、口細不及異儀云々、當年如前々無下向者、不可有正體也、先張本百姓等社召之、應召而參上者、張本之百姓等入置了、社家之籠、若無參上者、衆中下向之時、仰了衆中召誡之、年貢請負之式、皆濟之時、可社免出籠舍也、若不然者如此間、所務不可有正體云々、仍政所方書下如左、〇中略

當年應永二就所務如此以召符佐々目百姓等社召之使節、宮下部粮物百文分、衆中二十五人、并脇堂十人、各出之、廿五人各參文宛、但上﨟二人者、各四文也、脇堂十人者、各貳文宛也、七月廿五日、

〔甲陽軍鑑 品第四十七 十七〕曲淵少左衞門公事負雜言仕義櫻井殿訴訟之事

一年板垣彌二郎が、本鄕八郎左衞門小身とてあなづり、慮外をいたし、本鄕八郎左衞門に板垣き

寺預

一前野但馬守　中村式部少輔　同妻子　同人
長子出雲守　同人
玄朔紹巴、安志は、後に御赦免有しなり、此外は皆切腹被仰付了、

〔新田由良家傳記〕御領之百姓給人所之百姓と公事
御領之百姓十分勝利有之者、奉行所へ公事代として百石に付永樂錢五百文差上べき事、付其所之庄屋三年寺入たるべき事、給所之百姓は庄屋五人組所をはらひ、乃至は所之曲事急度可申付事、
天文五年正月日○節略

〔甲陽軍鑑十二品第三十九〕信玄公國法背たる者をも、人によりて二度までは御免なされ候事、五ヶ條は、○中略
二ニ忠節忠功の武士の子孫ならば、御成敗あるべきをも、いのちをたすけ、坂をこさせ、改易の科をば寺入に仰つけられ候、

〔太閤記十二〕氏政氏照兄弟切腹之事
同○天正十八年七月氏直○北條高野山へ上可被申旨に因て、供し侍る人々、一門には北條美濃守○氏規同左衛門佐、○中略高野山において、扶持方五百人、其外諸事可入、其々之具不殘注文を以下行有しかば、○下略

〔太閤記十七〕前關白秀次公之事
秀次公伏見へ至らせ給へ共御城へ入給はず、木下大膳亮宿所へ入せ給ふ、將軍○秀吉より御使者を以、御對面にも及ばざる條、先高野山へ急登山可然之旨被仰出しに依て、剃髮染衣の御身とならせ給ひしかば、御供之侍百餘人、ひた〳〵とかみおろし致し奉りぬ、

〔毛利家記 一〕今ハ城ヲ抱事不成シテ、氏政〇北條幷弟ノ氏照切腹可仕、諸卒御助候樣ニト申セシニ依テ、其分ニ被成、御赦免、兩人切腹有テ、殘ル一門悉大名衆ヘ一人宛御預ケ、〇下略

〔太閤記 十四〕豐後守護大友御折檻之事

覺御使者福原右馬助、熊谷内藏允、

一先手之城々に有之者及難儀之折節可相救ため、つなきの城々拵置、人數を入置候義、其段何も存知之前也、然るを小西が急難百死一生なりと云共不及助成、剩平壤之樣子をも不聞合逃崩候事、前代未聞之仕立、不及是非候事、〇中略

一其身之事は安藝宰相所に預置候事〇中略

文祿二年五月朔日　秀吉在判

高麗陣衆各御中

〔家忠日記增補〕文祿四年七月晦日、關白秀次ニ與スルノ輩、一柳右近將監ハ大神君〇德川家康是ヲ預リ玉フ、服部釆女正ハ越後ノ宰相〇上杉景勝是ヲ預ル、

〔太閤記 十七〕秀次公御若君姫君幷御寵愛之女房達生害之事

秀次公謀叛に與せしとて遠流の人々には、延壽院玄朔、紹巴法眼、荒木安志、木下大膳亮等也、たとひ秀次公謀反を思召立給ふ事有共、かやうの人々を、其便におぼし寄給はんや、各御反逆之事、聊以不奉存旨申上度思ひ侍れ共、長盛三成が威に恐れて、取次人もなく、奉行人指圖に任せて、配所に赴にけり、又國々へ預られし人々は、

一一柳右近將監　江戶大納言殿へ　一同妻子　伊藤加賀守

一服部釆女正　越後宰相　一同妻子　吉田淸右衞門尉

一渡瀨左衞門佐　佐竹右京大夫　一明石右近　小早川左衞門佐

卽被召進之間、人々ニ被預之、　廿日、淸水又太郎入道父子三人幷若黨二人被召捕之、菊池落人籠置云々、若黨雖及拷訊、不及白狀、卽被預筑州方畢、　四月四日、長門ニハ敵百餘人打取之畢、自餘ハ逐電畢、昨日三日マデハ無別事云々、同日規矩殿自肥後御返、鞍岡山ニテ所取頸三十二、生取二人持參、此外比丘尼一人生取、肥後ニ被預置、此ハ大宮司若黨ノ妹也、規矩殿ヲチライマイラセントスル間召捕云々、

〔鎌倉大草紙〕一嘉慶元年丁卯五月十三日、古河住人野田右馬助○惠等四人一人搦進す、此男白狀申けるは、小田讚岐入道父子、小山若犬丸同意に野心ありて、若犬丸隱置の由申、此小田入道惠尊は、先年小山退治の先手に參り、忠功の人也、何のうらみありて敵と同意有やらむとうたがひながら、六月十三日、小田が子二人被召預、

〔賴印大僧正行狀繪詞〕至德四年五月ノ比、野田入道等忠、古河ヨリ召人一人搦進、子細ヲ尋ラルル處ニ、小山若犬丸、惠尊ガ館ニ居住シテ野心ヲサシハサムヨシ白狀、隨テ同六月十三日、惠尊幷子息二人召籠メラレテ、人々ニアヅケラルヽ處ナリ、

〔鎌倉大草紙〕同○永享十三年、中略、永壽王殿六歲にて、いまだ東西不覺の體なれば、一命を助、美濃の守護土岐左京大夫○持益にあづけらる、○中略、寶德元年正月、御沙汰ありて、土岐左京大夫持益にあづけられし永壽王殿をゆるし、亡父持氏○足利の跡をたまはり、公方御對面あり、御大刀御馬を被下、同二月十九日、關東へ下らる、○中略、此人五才のとき被召捕、十三にて關東の主となり、致下向事、君恩とは申ながら偏に鶴ヶ岡八幡宮、荏柄天神の御加護なりとて、○下略、

〔勢州四家記〕一元龜二年正月、信長公神戸藏人大夫友盛を隱居させられ、日野蒲生左兵衛大夫堅秀に預らる、則三七殿をつぎめに立られ、神戸三七信孝と號せり、

一元龜四年○天正元年春、龜山安藝守盛信は、信長公の勘當を蒙り、日野蒲生家に預られぬ、

〔太平記 二〕三人僧徒關東下向事

同〇元德二年七月十三日ニ、三人ノ僧達遠流ノ在所定テ、文觀僧正ヲバ硫黃ガ島、忠圓僧正ヲバ越後國ヘ流サル、圓觀上人計ヲバ遠流一等ヲ宥テ、結城上野入道〇道忠ニ預ラレケレバ、奧州ヘ具足シ奉、長途ノ旅ニサスラヒ給左遷遠流ト云ヌ計也、

〔太平記 三〕主上御沒落笠置事

同〇元弘元年十月八日兩撿斷高橋刑部左衞門、糟谷三郞宗秋、六波羅ニ參テ、今度被生虜給ヒシ人々ヲ一人ヅヽ大名ニ被預、一宮中務卿親王〇尊良ヲバ佐々木判官時信、妙法院二品親王〇尊澄ヲバ長井左近大夫將監高廣、源中納言具行ヲバ筑後前司貞知、東南院僧正〇聖尋ヲバ常陸前司時朝、萬里小路中納言藤房、六條少將忠顯二人ヲバ、主上〇後醍醐ニ近侍シ奉ルベシトテ、放召人ノ如ニテ、六波羅ニゾ留置レケル、

〔太平記 十一〕金剛山寄手等被誅事附佐介貞俊事

阿曾彈正少弼時治、大佛右馬助貞直、江馬遠江守、佐介安藝守ヲ始トシテ、宗トノ平氏十三人、幷長崎四郞左衞門尉、二階堂出羽入道道蘊已下、關東權勢ノ侍五十餘人、般若寺ニテ各入道出家シテ、律僧ノ形ニ成リ、三衣ヲ肩ニ懸、一鉢ヲ手ニ提テ、降人ニ成テゾ出タリケル、定平朝臣是ヲ請取テ、高手小手ニ誡メ、傳馬ノ鞍坪ニ縛屈メテ、數萬ノ官軍ノ前々ヲ追立サセ、白晝ニ京ヘゾ被歸ケル、〇中略四人京都ニ著ケレバ、皆黑衣ヲ脫セ、法名ヲ元ノ名ニ改テ、一人ヅヽ大名ニ預ラル、

〔太平記 十七〕還幸供奉人々被禁殺事

主上ヲバ花山院ヘ入進セテ、四門ヲ閉テ警固ヲ居ヘ、降參ノ武士ヲバ、大名共ノ方ヘ一人ヅヽ預テ、召人ノ體ニテゾ被置ケル、

〔正慶亂離志〕正慶二年三月十八日、菊池加江入道三十五騎、宰府ニ隱居タルガ、降人ニ江州方ニ參、

給、凡云犯土、云營作、江間殿以下、手自沙汰之、爰納土於夏毛行縢、有運之者、被尋其名之處、景時申云、囚人皆河權六太郎也云云、感其功、忽蒙原免、是木曾典厩（○義仲）專一者也、典厩被誅之後、爲囚人被召預梶原云云、

〔皇帝紀抄　七後鳥羽〕建久八年三月之比、藏人大夫橘兼仲、幷妻女依謀計事、被配流國々、又一心房上人歎心、依同意事、被召禁武士許、前齋院式子内親王（後白河院皇女）同意此事之間、不可坐洛中之由、雖有沙汰、有議被止了、

〔百練抄　十一土御門〕正治元年二月十四日、武士等相具左衞門尉中原政經、藤原基淸、小野義賢、參院御所、是件三人可亂世間之由、有其聞之故也、各預賜武士、

〔承久記　下〕去程ニ武藏守（○北條泰時）駿河守（○三浦義村）ハ院ノ御所ヘ參ラントテ、已ニ打立ンズル由一院（○後鳥羽）被聞召テ、下家司御前ヲ出、ナ參ソ、上品ニ於ハケウミヤウヲ註シ可被下ト被仰下ケリ、上ノ者ヲ以テ重テ此樣ヲ被仰ケレバ、御所ニ武士ヤアル、見テ參レトテ、力者ヲ一人進ラセケレバ、走歸テ、一人モ不候ト申ケレバ、サラバトテ、不參公卿六人ノ交名ヲシルシ被下、坊門大納言忠信卿、中御門中納言宗行、佐々木野前中納言有雅、按察前中納言光親、甲斐宰相中將範義、一條宰相中將信氏（○吾妻鏡作信能、爲是、）等也、何レモ六原（○六波羅）ヘ被渡ケレバ、坊門大納言ヲ千葉介胤綱ニ被預、中御門前中納言ハ小山新左衞門尉朝長ニ被預、按察前中納言ハ武田五郎信光ニ被預、佐々木野前中納言ハ小笠原次郎長淸ニ被預、甲斐守宰相中將、式部丞朝時ニ被預、一條次郎相中將（○次郎相中將、上文作宰相中將、）ハ遠山左衞門尉景村（○吾妻鏡作景朝、爲是、）ニ預ケリ、

〔吾妻鏡　三十六〕寛元三年八月二日甲子、漏刻博士泰繼、大膳權亮孝俊等、爲囚人、各被召預人、泰繼大藏權少輔景朝預之、孝俊馱三郎八郎入道則俊、臼井九郎等也、泰繼孝俊等者、季尙朝臣舍弟也、而於爲繼兄之家、去年正月廿日、殺害季尙嫡男右京亮業氏訖、依令露顯、及此御沙汰云云、

にも猶あしき事しいださんずる者にて候、はなちたてらるまじき也と申ければ、彌おもく成まさりにけり、され共番は少もいたまず、をのこの身は、いつかいかに成べしとても、人わろかるべき事はなしとて、物ともせざりけり、かゝる程に、大將康衡〇藤原泰衡を打とて、奥責を思ひ立て、兵をそろへらるべき事出來にけり、其時番を召ての給ひけるは、汝をとうにいとまとらすべかりしか共、此大事を思ひて、今日迄いけて置たる也、身の安否は此度の合戰によるべしとて、鎧馬鞍など給ければ、かしこまり悅て向ひけり、誠に身命ををしまずゆゝしかりければ、勘氣ゆるされて、本領かへし給りて、二度舊里に歸りき、

〇按ズルニ、義經西國へ奔リシハ、文治元年ノ事ナリ、賴朝泰衡ヲ伐チシハ同五年ノ事ナレバ、本書ニ番ガ十二年ガ間、禁囚セラレシトイヘルハ誤リナリ、

〔古今著聞集十馬藝〕武藏國住人つゞきの平太經家は、高名の馬乘馬飼なりけり、平家の郎等なりければ、鎌倉右大將〇源賴朝めし取て景時に預られにけり、其時陸奥より大きにしてたけき惡馬を奉りたりけるを、いかにものる物なかりけり、聞え有馬乘共に、面々にのせられけれ共、一人もたまるものなかりけり、幕下思ひわづらはれて、さるにても此馬にのるものなくてやまん事口惜き事なり、いかゞすべきと景時にいひあはせ給ひければ、東八ヶ國に今は心にくき者候はず、但召人經家ぞ候と申ければ、さらばめせとて、則召出されぬ、白水干に葛の袴をぞ著たりける、〇中略のどのごとあゆませて、幕下の前にむけてたてたりけり、見る者目をおどろかさずといふ事なし、よくのらせて、今はさやうにてこそあらめ、との給はせける時おりぬ、大きにかんじ給て、勘氣ゆるされて、厩別當になされにけり、

〔吾妻鏡十二〕建久三年六月十三日癸丑、幕下渡二御新造御堂之地一、畠山次郎、佐貫四郎大夫、城四郎、工藤小次郎、下河邊四郎等引二梁棟一、其力已如二力士一、數十人可レ盡二筋力一事等、各一時成レ功、觀者驚レ目、幕下感

〔吾妻鏡七〕文治三年九月廿七日乙丑、畠山二郎重忠爲₂囚人₁被₂召預千葉新介胤正₁、是依₂代官眞正之奸曲₁、大神宮神人長家綱訴申故也、○下略

〔古今著聞集九武勇〕九郎判官義經、右大將○源賴朝の勘氣の間、都をおちて西國のかたへ行ける時、わたなべの驗、源次馬允番もとによりて、事の由をいひければ、いたう哀みて、道おくりけり、後に其事聞えて、番關東へめされて、梶原にあづけられにけり、十二年迄おかれたりけるに、番毎日本鳥をとりて、今日やきられんずらんとぞまちける、去程に右大將高麗國○吾妻鏡作₂貴海島₁、是也、貴海郎鬼界、今呼曰₂貴賀島₁、を責し時の追討使に、あま野の式部大夫遠景むかひけり、大將家のきり物にて、次官藤内といはれし藤内は是也、西國九國を知行の間、そのいきほひいかめし、高麗國打しなへて上洛の時、わたなべにて番が妹にとつきにけり、相具して關東に下向しければ、番が親類郎等共悦をなして、さりとも今は馬殿の召籠はゆるされ給なんと悦あへりけり、遠景も宿縁あさからず、此上はかの御氣色におきては、いかにも申ゆるすべし、御承引なくば、遠景申預るべしといひければ、彌悦事限なし、扨關東に下り着て、いつしか使を番が本へつかはしていひけるは、思ひかけず、かゝるゆかりに成參らせて候、今におきてはひとへに親とも賴奉るべし、内外に付て踈略を存べからずといひやりたりけり、番多年の召人にて今日切らるべし／＼といひて、十餘年に及けれども、かたうど壹人もなければ、申なだむるものなし、たま／＼かゝる縁出來事は、いか計かはうれしかるべきに、番がいひけるは、弓箭とる身のかゝるめに相て、召籠に預る、耻にてあらず、さこそ無縁の者なれ共、あながちに其ぬしこひねがふべき聟にあらずとて、返事にいひけるは、よろこびて奉ぬ、誠に傍輩として申承らん事本意候、したしくならせ給のよしの事、存知がたく候、番はひとり身の物にて候へば、御ゆかりに成參らすべき事候はずとあらゝかにいひたりければ、遠景大きにいきどほり、やすからぬ事に思ひて、ともすれば大將に番はきはめたるしれものにて候、いか

武士預

辨俊基、幷文觀、圓觀等也、

〔太平記 二〕僧徒六波羅召捕事附爲明詠歌事
二條中將爲明卿ハ、（○中略）指タル嫌疑ノ人ニテハ無リシカドモ、叡慮ノ趣ヲ尋問ン爲ニ召捕レテ齋藤某ニ是ヲ預ラル、

〔參考太平記 四〕笠置囚人死罪流刑附藤房卿事
天正本云、具行、（○源）江州栢原ヘ着給ヒシカバ、道譽（○佐々木）ガ宿所ニ禁籠シ奉リテ、關東ノ左右ヲ相待程ニ、萬情ヲ懸奉リシカバ、今幾程ト思召御命ノ内ニハ有ガタシトゾ仰ケル、

〔太平記 四〕笠置囚人死罪流刑事附藤房卿事
法印（○殿法印良忠）ヲバ五條京極ノ篝、加賀前司ニ預ラレテ禁籠シ、重テ關東ヘゾ被註進ケル、

〔康富記〕應永二十七年十月廿三日戊午、後聞、今日廣橋大納言（兼宣卿）裏松前執權（豐光卿）日野執權（有光卿）勸修寺別當（經興朝臣）此等人々被參室町殿（○足利義持）之處、無故被召籠、

〔承久記 上〕同二十七日（○承久三年五月）三院宣御使推松（○吾妻鏡作押松）カラフ被戒テ人ニ被預シヲ、權大夫（○北條義時）ノ前ニ召出シテ、（○下略）

○按ズルニ、是北條義時陪臣ヲ以テ院宣ノ使ヲ拘繫スルナリ、今姑ラク此ニ附載ス、

〔玉海〕壽永三年（○元暦元年）二月九日戊辰、今日三位中將重衡入京、着褐直垂小袴云々、即禁固土肥二郎實平（爲賴朝郎從宗者也）許云々、

〔吾妻鏡 七〕文治三年三月八日庚戌、南都周防得業聖佛依召參向、爲豫州（○源義經）師檀之故也、日者小山七郎朝光預置之、今日二品（○源賴朝）有御對面、直及御問答、（○下略）

〔吾妻鏡 七〕文治三年三月廿一日癸亥、佐竹藏人、年來雖列二品門客、心操聊不調、度々現奇怪之間、今朝蒙御氣色、爲比企藤内朝宗沙汰、被遣駿河國所被召預岡邊權守泰綱也、

〔親長卿記〕明應二年閏四月廿五日、或仁云、去夜河州正覺寺（將軍陣）沒落云々、廿七日、今日或仁語云、正覺寺沒落之時、將軍（義材、宰相中將、○義稙）新大納言（光忠）妙法院僧正、（葉室一品入道弟）田名村刑部已下請降、御小袖（八幡殿御具足、號御小袖、）等被渡之云々、凡如召人、上原豐前守子上原左衞門大夫（丹波守護代○元秀）請取之、御進退不可說也、莫言、於城中（正覺寺）生涯之由風聞之輩、大將軍畠山左衞門督（政長）自害、子息尾張守（實名可尋）落失云々、七月一日、今日或仁云、去夜將軍（義材、當時人々號正覺寺御前、）俄御逐電、不知其行方、去四月自河州陣御落之後、奉押籠上原左衞門大夫許了、後聞落留越中給云々、

〔足利季世記三高國記〕公方（義稙）ト高國不和之事

カクテイツマデモ京都ハ目出度カルベキラ公方義稙公、イニシヘ政元（○細川）ニヲシコメラレ籠ノ中ニ御座アリシトキノ遁世者落シ奉リ、御運ノ開カセ給ヒシトキ、御ヤクソクアリテ、カノ遁世者ガ子息一人召出シテ畠山式部大夫ト名付、萬事ニ權威高カリケル、

〔關八州古戰錄二十〕北畠信雄配流附喜連川御所安堵事

北畠內大臣信雄ハ此度ノ一擧ニ指タル軍功モナク、韮山ノ一城ダモ攻落サレズ、剩小田原ノ城中ニ內通ノ子細アル旨殿下（○豐臣秀吉）ノ聽ニ達シケル故、（○中略）信雄ヲバ烏山城ヘ押籠メ、剃髮有ベキ由ヲ命ゼラレシカバ、力及バズ入道シテ、德源院常眞ト稱セラル、

〔大友興廢記三〕義鎭公御行儀老中褒貶之事

爰に老中曰杵鑑速、小原右波吉鑑直、吉岡宗歡、田北鑑重、此等の人々一所に在時、鑑速申さるゝは、昨日も小屋從二人、さしたる緩怠もなきに御氣色にちがひ、追込おかせらるゝ、かやうにあしき御心中、やゝもすればましまする事、笑止のいたり也と申されける、

〔北條九代記下〕元弘元年四月廿九日、京都飛脚下著、主上令亂世給、俊基朝臣張行之由、吉田一品定房內々被申云々、依之五月五日、長崎孫四郎左衞門尉、南條次郎左衞門尉、爲使節上洛、爲召禁右中

義景〇安達預之、其外人々多坐事、

〇按ズルニ、吾妻鏡ニハ、但馬前司定員右事出家、秋田城介義景預守護之トアリ、

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年八月十八日甲午、諏方刑部左衛門入道被召置之、雖被加推問、敢不承伏、所本執、〇下略

〔關東評定傳〕文永九年二月十一日、尾張入道見西、遠江守教時誅、中御門中將實隆朝臣被召禁、其外過使人多之、

〔東鑑末記〕文永九年二月十一日、北條遠江守教時、尾張入道見西等、鎌倉にて誅せられぬ、同月十五日、鎌倉より北條義宗に下知して、時輔も京都にて討れぬ、又中御門中將實隆も、時輔と同意によりて召籠られぬ、北條長時も吉野の奥へ蟄居せるとなん、

〔椿葉記〕同〇應永十五年五月六日、じゆこう薨じ給ふ、鹿苑院と申世中は火を消たるやうにて、御あとつぎも申をかるゝむねもなし、此若公〇義嗣にてやとさたありしほどに、管領勘解由小路左衛門督入道をしはからひ申て、嫡子大樹〇義持相續せらる、其後内大臣までなられて出家せられき、此若公は昇進だいなごんまでなられしに、野心のくはだてやありけん、露顯して遁世し給を、たつねいだされて林光院といふ寺にをしこめて、つゐにうたれ給にき、〇義嗣ノ殺サレシハ、應永二十五年正月ノ事ナリ、

〔薩戒記〕應永卅三年九月廿八日戊午、或人云、去年秋所被召籠之内侍所刀子被免除、但不可召仕云云、

〔嘉吉記〕角テ將軍〇足利義勝ノ御愼モユルクナリ、金吾〇山名宗全御退治ハヤンデ、但馬國ニ在國シテ、上洛スベカラズ、嫡子守教豐ヲ殘置テ、京都ノ警衛スベシト被仰出、金吾ハ但馬へ下リケリ、赤松彦次郎彦五郎ハ、金吾ガ追籠メラレシヲ悅ビ、播州へ下向シ國人ヲ語ラヒ、キッテトラントノ支度也、

越前守殿○又見新編追加

〔吾妻鏡七〕文治三年十月四日辛未、千葉新介胤正參申云、重忠○畠山被召籠、已過七箇日也、此間寢食共絕畢、終又無發言語、今朝胤正盡詞雖勸膳不許容、顏色漸變、世上事終思切歟之由所見及也、早可有免許歟云云、二品○源賴朝頗傾動給、則以被原免、　十一月十五日壬子、去夜梶原平三景時、內々申云、畠山次郎重忠、不犯重科之處、被召禁之條、稱似被棄捐大功、引籠武藏國菅谷館、欲發反逆之由風聞、而折節一族悉以在國、綷已符合、爭不被廻賢慮乎云云、

○按ズルニ、本書ノ文ニ據ルニ、召籠、召禁ハ、只名ヲ異ニスルノミニテ、其實皆同ジ、

〔吾妻鏡九〕文治五年十二月廿八日癸丑、平泉內無量光院供僧一人號助公爲囚人參著、是基衡○藤原之跡、欲奉反關東之由、依有風聞、所被召禁也、

〔新編追加侍所〕一放埒輩令安堵事

葦名遠江前司子息次郎左衞門入道、法名忍性御勘氣之時、同道干口揩諸國流浪之後、令入院壽福寺畢、子息宮鶴丸、同子喝食、號越一房、而敵仁舍弟三郎左衞門尉、彼忍性出放埒乞食之間、不可爲御家人領之由、訴申之處、爲四番御引付、雜賀彌四郎入道奉行、被沙汰之、依勘氣諸國流浪之間、放埒之條非沙汰之限、將亦壽福寺入寺事、彼寺者爲將軍家御領之間、被准御家人之條、被沙汰之上者、不及子細、仍忍姓父子共預御裁許畢、加之修行難遁之時、濫諸人之愛顧、助身命者通例也、而無左右稱乞食非人之條、惡口咎依難遁、三郎左衞門尉被召籠之、三郎左衞門尉子息企越訴、爲卽宮入道奉行、御沙汰最中也、

〔吾妻鏡三十三〕曆仁二年○延應元年六月廿六日癸巳、今日評定犯科人事、○中略次依違地頭之咎、所召置之庄官百姓等事、自今以後、不可誡、早可追出居住所云云、

〔關東評定傳〕寬元四年閏四月以後、鎌倉中騷動、越後守平光時有事出家、前但馬守藤原定員召禁之、

一、毆人咎事

右被打擲之輩、爲雪其耻、定露害心歟、毆人之科、甚以不輕、仍於侍者、可被沒收所領、無所帶者、可被處流罪、至于郎從以下者、可令召禁其身也、

一代官罪過懸主人否事

右代官之輩、有殺害以下重科之時、件主人召進其身者、主人不可懸科、但爲扶代官、無咎之由、主人陳申之處、實犯露顯者、主人難遁其罪科、仍可被沒收所領、至彼代官者可被召禁也、

一隱置盜賊惡黨於所領內事

右件輩雖有風聞、依不露顯、不能斷罪、不加炳誡、而國人等差申之處、召上之時者、其國無爲也、在國之時者、其國狼藉也云々、仍於緣邊之凶賊者、付證跡可召禁、又地頭等至隱置賊徒者、可爲同罪也、先就嫌疑之趣、召置地頭於鎌倉、彼國不落居之間者、不可給身暇、○下略

〔吾妻鏡四十二〕建長四年十月十四日乙丑、爲休民間愁訴、今日被定條々、倫長滿定奉行之、○中略

一殺害刃傷事

可召禁其身、至父母妻子親類所從等者不可懸咎、

〔侍所沙汰篇追加〕一近年四一半之徒、黨與興盛云々、偏是盜犯之基也、如然之輩、無左右擬召取者、狼藉訴出來歟、於京中者、申入別當、以保官人可被破却其家、邊土者、申本所、同有沙汰者、定被停止歟、或又於野山中打之云々、隨見及可搦之、凡隨被召禁申給其身、可令下關東也、兼又錢切事、同伺搦可被下進關東之狀、依仰執達如件、

延應元年四月十三日　前武藏守

修理大夫

相模守殿

如懸網之魚、或落冠云々、仍各訴申雲客兩三被召籠云々、

〔吉續記〕文永四年八月七日、次參內、有舞御覽、關白殿〇藤原實經令參給、吉田社怪異御卜形、猶於本社可祈禱之由、可宣下歟之由、被仰藏人淳範、自一日殿上被召籠、依御草鞋事也、今日被免頭中將承之、

〔梅松論上〕建武元年六月七日、兵部卿親王〇護良大將として、將軍〇足利尊氏の御前に押寄らるべき風聞しける程に、武將の御勢御所の四面を警固し奉り、餘の軍勢は二條大路に充滿しける程に、事の體大義に及によつて、當日無爲になりけれども、將軍よりいきどほり申されければ、全く叡慮にはあらず護良親王の張行の趣なりし程に、十月廿二日の夜、親王御參內の次を以て武者所に召籠奉りて、翌朝に常盤井殿へ遷し奉り、武家輩警固し奉る、宮の御內の輩をば、武者の番衆兼日勅命を蒙りて、南部工藤を初として、數十人召預けられける、

〔太平記十二〕兵部卿親王流刑事附驪姬事

君〇後醍醐大ニ逆鱗有テ、此宮〇護良ヲ可處流罪トテ、中殿ノ御會ニ寄事、兵部卿親王ヲゾ被召ケル、宮〇中略忍ヤカニ御參內有ケルヲ、結城判官〇宗廣伯耆守〇名和長年二人兼テヨリ承勅用意シタリケレバ、鈴ノ間ノ邊ニ待受テ奉捕之、則馬場殿ニ奉押籠、

〔神皇正統記後醍醐〕建武乙亥〇二年の秋のころほひに、高時が餘類謀叛をおこして鎌倉に入りぬ、〇中略都にもかねて陰謀の聞えありて、嫌疑せられける中に、權大納言公宗の卿めしおかれしも、このまぎれに誅せらる、

〔庭訓往來〕管領、執事、奉行人、撿斷所司代、賦訴狀於右筆之時、以小舍人或下部等召出犯人於侍所記錄申詞、依言色體嫌疑、糺明犯否之時所犯已無所遁者、則召籠之、

〔御成敗式目〕一惡口咎事

右鬪殺之基、起自惡口、其重者被處流罪、其輕者可被召籠也、

かに巧める事を語り聞せ、田丸中務少輔が兒小性に出して、奉公させられけり、田丸は氏郷と姻家の親しみあれば、來られん時便を伺ひて刺殺せとの事也、清十郎が父の方へ遣しける書を、關所にて改め見しより事起りて、其謀の泄たりしかば、清十郎を獄におし入、此事を秀吉に告るといへ共、秀吉遠く慮りて、強て伊達家と和平せさせられぬ、氏郷清十郎を呼出し、吾過て罪なき義士を獄に入辱を與へたるよ、其君の爲に命を捨て忠を致す事賞するに餘り有、とく〳〵伊達家に歸るべしと禮儀正しくもてなして歸されけり、記せし書に清十郎が姓名をもらしぬ、をしき事也、

破獄

〔百練抄後鳥羽十〕建久四年三月廿五日壬辰、今夜右獄四十四人切破獄逃出云々、

劫奪四人

〔吾妻鏡六〕文治二年九月十五日戊午、梶原刑部丞朝景、去夜自京都歸參、〇中略今日召御前、尋洛中事等給、〇中略申云、春三月之比、召群盜張本平庄司、丹波國住人被禁置左獄、餘人競來、切破彼獄、庄司已下犯人、悉遁出訖、仍別當家通仰廷尉等、雖搜尋諸方、不出來、而八月十一日、朝景搦獲也、同廿一日、將參大理門下、令請取廷尉云云、

召籠

〔百練抄後鳥羽十〕建久四年二月廿九日丙寅、藏人忠綱與外記清光兼業、於陣口有喧嘩事、依互無禮也、而藏人以吉上令撃外記、仍兩局五位以下參關白家訴申之、忠綱除籍、清光兼業被召籠畢、

〔百練抄後鳥羽十〕建久五年五月十五日乙亥、左大臣〇實房以下參入、被定申賀茂神人與鞍馬寺住僧鬪諍事、今夕史遲參之間、外記可勤掌燈之由、上卿仰之、而背上宣之間外記倫直被召籠了、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年五月十五日、京都飛脚下著、申云、昨日十四日幕下〇藤原公經幷黄門〇實氏仰二位法印尊長被召籠弓場殿、

〔承久記上〕巴ノ大將〇藤原公經忽チニ被失ベカリシヲ德大寺〇藤原公繼ノ被申候ニヨリテ思召ナダメラレテ、サラバ召籠ヨトテ、被召ケル、〇中略馬場殿ニ奉押籠、子息ノ新中納言〇實氏同被召籠ヌ、

〔百練抄後堀河十三〕安貞元年三月九日、臨時祭調樂之間、陪從參集之幄、近習雲客見物之剋、押倒帷幄、各

大名囚禁例

〔新撰長祿寛正記〕同年(〇寛正二年)十一月八日、千葉介ガ許ヨリ、法花ノ僧徒日親上人ト云法師ヲ召進ス、是ハ方々ニ横行シテ、法花經ヲ談シ、諸宗ノ佛法ヲ嘲リ及宗論、ソノコロ無雙ノ惡比丘也、殊ニ妙殿庵ノ雪庭ノ門徒爭論有之、徒黨ヲ結テ、亂ニ惡口ヲ基トシテ出家ノ法ニ背キ、人ヲス丶メ非法ヲ積リ、細川右馬頭ニ預ラレ、禁獄セラル、

〔碧山日錄〕寛正三年十一月十四日、小童周勤之伯父某、誤通德政之賊、下刑官之獄、其屬求余之赦之、乃說春公、公又說刑官豐州守某、彼暫緩其刑、以還之云、然而一二日際有之、則桒囚心動、且俟十數日云、　十二月二日壬戌、勤童叔父某以春公之赦、是日出刑官之獄、

〔甲陽軍鑑(十下)品第三十三〕永祿八年乙丑正月、飯富兵部少輔御成敗被成候子細は、(〇中略)義信(〇信玄子)若氣故恨なき信玄に逆心をくわだてさする談合相手の棟梁に、兵部成候事、此五ヶ條御書立を以て飯富兵部御成敗也、太郎義信公其年廿八歲に成給ふ、御成敗なさるべく候へ共、信玄公よりは御慈悲を加へられ、籠舍させ御申なさる丶、

〔勢州軍記下〕諸國退治
其後信雄(〇北畠)以下山(〇甲斐守)被預本田方禁獄之、又秋山家之侍、上津江之新坊者、彼下山之聟也、爲一味蒙疵、新坊同第三十郎共秋山承誅之、下山於獄中自止食事、廿八日而未死、本田憐而諫、甚進酒食、雖然不死、下山遂喰斷舌頭死去云々、

〔家忠日記增補〕天正十八年六月十四日、北條陸奥守氏輝、板部岡江雪齋ヲ以テ、憲秀(〇松田)ガ隱謀ヲ敵ヨリ告ル者ノアリ、其信否ヲ糺明スベシト云々、(〇中略)此ニ於テ憲秀陳スル處ナシ、是ニ依テ憲秀ヲ禁獄シ、彼ガ役所ニ軍士ヲ入替ヘ、堅ク是ヲ警衛ス、

〔常山紀談九〕伊達政宗、蒲生氏鄉の威に壓る丶事を、心中に深く憤りて、氏鄉を殺すべき事を思案して、數代家に仕へし者の子に、清十郎といへる十六歲に成ける者、容貌勝れて艶なりしに、ひそ

幕府囚禁例

仍武士等馳向、是去年七月、傳法院法華三昧之間、爲奥院惡黨被破損道場、件下手三人、或遣配所、或禁獄舍、

〔徒然草下〕遍昭寺の承仕法師、池の鳥を日ごろかひつけて、堂のうちまでゑをまきて、戸ひとつをあけたれば、數もしらず入こもりける後、をのれも入て、たてこめて、とらへつゝ、ころしけるよそほひ、おどろ〳〵しく聞えけるを、草かるわらは聞て人に告ければ、村のをのこどもおこりて入て見るに、大雁どもふためきあへる中に法師まじりて、打ふせねぢころしければ、此法師をとらへて、所より使廳へ出したりけり、ころす所の鳥を頸にかけさせて禁獄せられにけり、基俊大納言別當の時になん侍りける、

〔元弘日記裏書〕建武元年十一月十五日、兵部卿護良親王被禁囚、仰尊氏配鎌倉、

〔吾妻鏡五十二〕文永三年四月廿一日甲申、甲乙人等數十人、群集于比企谷山之麓、自未刻至酉刻、向飛礫、爾後帶武具、起鬪諍、夜廻等馳向其所、生虜張本一兩輩、被禁籠之所、殘悉以逃亡、關東未有此事、京都飛礫、猶以爲狼藉之基、固可加禁遏之由、前武州禪室〇北條泰時執權之時、有其沙汰、被仰六波羅畢、況於鎌倉中哉、可奇云云、

〔康富記〕應永廿七年九月十日丙子、今朝室町殿〇足利義持醫師高天被禁獄、父子弟等三人也云々、此間仕狐之沙汰風聞、然而昨日於御臺御方、仰驗者被加持之處、二疋自御所逃出、則被縛件狐之後被打殺、此事高天ガ狐ヲ奉詛付之條露顯云々、仍今朝被召取云々、

〔康富記〕嘉吉三年四月廿日乙巳、依招引參文亭、大學忠行、窪田等、自丹州氷所今曉上洛云々、彼木伐之張本、九郎五郎、八郎三郎等召捕之間、令召上京、可令禁獄之由、本所被存之處、九郎五郎者、領家方之供御人也、被縲紲、可被召上京之條、爲地下同隷、爲瑕瑾之由、地下一揆申請之間、被囚兩人者、被預置地下中云々、頗似嗷訴、

朝廷囚禁例

れける、かくありて右の女を二年の間寺にをく、其内に女父もなきおのこを壹人もつ、町人共の事なれば彼出家をにくみ、惡名を申事たゞよのつねならぬ批判也、○中略右の彈左衛門下女とらるゝ四年目に、彈左衛門夫婦ながらあひはつる、しかも此者むすめ一人ありて、別に子とてももたず、○中略聟は八日市魚屋の甚九郎と云商人なり、此甚九郎法順所へ右の女を返せと云て使をやり、隣の者を賴侘言しても法順女を返さゞる故、目安をしたゝめ、奉行所へ申て、公事に成て、跡先の算用をきはむれば、出家金子の方に一度取たると申て女をかへさず、○中略信玄公常々の御仕置なれば、奉行則屋形へ申上らるゝ故、御前さばきに罷成、諸人の批判に、彼出家子を持て、其上少つゞも物をば取、下女をば返さず、奉行之扱もきかず、旁以の事なれば、見こりの爲にあぶらるべしと申人多、○中略此公事此出家の理なりとて尊體寺法順おもふさま〳〵公事にかついはれは、彼町人出家を侮、理もなき公事を仕候間、科錢の上に三十日籠舍を仰付らるゝ、

〔百練抄十後鳥羽〕建久二年四月卅日丁未、權中納言泰通卿參入、被定流人、○中略定綱郎等三人被禁獄云々、

〔吾妻鏡十一〕建久二年五月八日乙卯、佐々木左衛門尉定綱等事、依山門訴所被下之、○中略院宣云、○中略遠流之罪不再歸、禁固之法滿徒年者、雖非死罪更無勝劣歟、仍以遠流比死罪、以禁固代斬刑、但遠流之條、裁報尙不足者、雖禁固隨申請可被行歟、

○案ズルニ、禁固之法滿徒年トハ、類聚三代格ナル罪人配役年限ノ官符ヲ指スナラン、官符ハ上編徒刑篇ニ收メタレバ、就テ看ルベシ、

〔百練抄十五後嵯峨〕仁治三年六月十四日乙丑、祇園御靈會也、藏人佐經俊馬長舍人男於祇園鬪諍、被刃傷之間、拜殿砌血氣散云々、下手人社家之下部也、被禁囚云々、

〔百練抄十五後嵯峨〕仁治三年七月十三日癸巳、今日申刻高野傳法院幷僧房等、爲奧院亞徒被燒拂云々、

たし、井のもとにて手水をつかひ、衣をとりてきんとする、女房は御房のはやく御越とて、いそぎおきて髮を取あげ、いまだ手水もつかはず、窓よりそとをのぞきながら、御僧さま早々ましますとことばをかくる所へ男もどりあたる、此僧おわてゝ衣のひぼを結ぶ、男大きにいかり、總別にくしと存ずるに、如㆑此の模樣共、更に聞えぬ事なりとて、樣々口說を申かけ、おさへて坊主を縛、ひとつの宗旨の僧達、近鄕よりあまたきて、重ての爲なりとて、めやすかきて、所の守護へあぐれば、假初ながら出家の儀は、私さばきならずして、代官衆の人をそへ、甲府の四奉行へあぐる、奉行きき給ひ、出家の非におとさんとすれば、何にても證據なし、百姓無理と申さんには、樣子あやうし、是程少分なる義に、鐵火をば、みたけの鐘と申にもあらず、色々批判せらるれ共、奉行四人の分別に不㆑叶して、無㆑據上へ披露いたさるゝ、信玄聞召、則時に被㆓仰出㆒、〇中略彼百姓狠藉なりとて頸を切なば相手出家なる故、其慈悲かくる間、此百姓百日籠舍なる、

〔甲陽軍鑑十八品第四十八〕甲府淨土宗の僧公事之事

甲府に三日市場、八日市場とて、日市の立町あり、兩町の內、三日市場に、鹽屋彈左衞門と云町人候て、淨土宗の尊體寺と云わき坊主法順と申出家に、右の彈左衞門金子をかり、年月をへて彼借金澤山になる、使をやれども彈左衞門少もなす事なし、法順殊外がうの強きあら僧なれば、自身三日市場へゆき、彈左衞門が所へをしこみ、とるべき物なきとて、其時十九歲に成下女を、法順取て候へば、總別甲州國習にて、地下も町人も、質をとらるゝ儀を一向の不覺に存る事、昔より作法此通に候へば、彈左衞門が隣の町人共寄合て、彼法順何と申有共、女をとゞめん儀やすきといへども、彼僧大きなる徒法師にて、たゞはとめらるまじ、とめられねば打擲いたさずしては叶まじ、さありて出家をたゝき候はゞ、何と理をもちても、大慈悲心の御屋形信玄公の國法に、坊主に杖をあつる事、大方の穿鑿にてもましますまじと、少分なる商人共さへ、遠慮して下女を法順にとら

〔新編追加侍所〕一重科輩被放免事

右於輕罪之輩者、被行赦免之時、縦雖被免之、至重犯之族者、可有御計歟、所以者何、傍輩無懲粛者、惡黨增人數歟、自今以後、族盗並重科之輩、雖被禁獄、申出其身、可被進關東之狀、任仰執達如件、

延應元年七月廿六日　前武藏守判

修理權大夫判

相模守殿

越後守殿

〔式目抄三〕一謀書罪科事

一謀書、其犯令露顯者、諸大夫以上者、准贖銅儀可被收公所領、於無知行地之輩者可被解却官職、至侍以下及諸雜掌者、可被禁獄其身、〇下略

〔新編追加侍所〕一殺害刃傷打擲事〇目録云、乾元二六十二、

被載式目之上者不及子細、至凡下之輩者、殺害者被處斬罪、刃傷者被遣伊豆大島、打擲者禁獄可爲六十日歟、

〔甲陽軍鑑十八品第四十八〕信州岩村田法花宗の僧公事之事

一信濃國岩村田に、いかにも少分なる百姓あり、此者男は淨土宗、女房は法花宗にて、男は女をわが宗になさんと云、女は男を法花に成給へと申、何もかたつかず、後は此儀に付て、夫婦の中あしくなる、然れば男父母の爲に一月に兩度づゝ、淨土の出家を申うくれば、女房かほさがをなす、女母のために、法花坊主をよびまいらすれば、男殊外腹たつる、夏の頃にてこそありつらめ、男馬の草をかりに曉罷出、折節女房母の日にあたる、出家も其日をばかならず存じ、いつもまいる、此坊主も温天にて日をいとひ、早朝に罷越、衣をぬぎて垣にかけ、せゝなぎの傍に立寄、小便の用所を

〔日蓮聖人註畫讃三〕龍口頸座難第十六

文永八年辛未九月十二日、遣平左衞門尉頼綱狀略云、○中略其日爲副元帥平時宗之使者、頼綱以下數百人武士等、來名越小庵、搦取聖人、○日蓮聖人曰、日者存知是也、自弘始此法門、命奉法華經、名可流十方世界諸佛淨土、幸哉爲法華經被刎臭頭、可沙易金、石貿玉焉、出草庵、而向南立時、伊和瀨大輔、惡口荒曳衣袖、諸人又集曳張身體、本間拼擲石打、是即罵詈之難、瓦石之難也、頼綱者瞋眼而睨、荒聲而叱、聖人咬齒而高聲諫曰、日蓮者、日本國之棟梁也、失予倒日本國柱也、只今百日之內、自界叛逆難共打可起、其後他國侵逼難、此國人々不被打殺、而巳多可被爲生取、燒拂建長寺、壽福寺、極樂寺等念佛者禪宗之寺塔、彼等之頸由井濱悉可切失、不然者日本國必可亡也矣、三諫國家是第二度也、草庵安釋迦置藏經、群輩亂入、毀室像經、蹈入糞泥、頼綱郎從小輔取出聖人懷中十卷法華經、以第五卷打顏三、是即面打擲之之難也、餘九卷武士雜人等蹈足纏身、緣下壘上二三間、無不散處、聖人又出大音聲念佛眞言禪律謗法、特良觀不雨事讒言樣具宣、或笑或瞋焉、日朗者雖望爲與師同罪不許之、脫肘入宿谷土樓、樓者都六人也、三位公日眞、與俗四人、俗四人皆奪取刀入樓、其餘檀越等各被預于人、抱弟子檀那三百餘人、處々同時來、出勇健志各値難、

○案ズルニ、土樓ハ、土牢ノ假音ナリ、

〔太平記十二〕兵部卿親王流刑事附驪姬事

五月○建武元年三日、宮○護良親王ヲ直義朝臣ノ方へ被渡ケレバ、以數百騎軍勢路次ヲ警固シ鎌倉へ下シ奉テ、二階堂ノ谷ニ土籠フチノロウヲ塗テゾ置進セケル、

〔愚管抄七〕百川の宰相、○中略桓武をばたておほせまいらせたれど、あまりに沙汰しすごして、井上內親王を穴をゑりて獄を作りて、こめまいらせなんどせしかば、現身に龍に成りて、つひに蹴殺させ給ふと云めり、

獄舍

〔尺素往來〕野心隱謀之族追伐事、官軍合戰依得其利張本之輩者悉令誅伐、至其餘黨者、一々搦捕、歸洛之間、首被懸獄門楝、至虜者先暫被禁獄候了、

〔雜筆往來〕謀叛猥藉爲宗、刃傷殺害爲業、鬪諍無間、若干人陵礫、打擲傍輩、蹂躙諸人、民家放火、勾引衆人、夜討强盜之倫、竊盜海賊之族、行左遷流罪、可及禁獄死罪、

〔吾妻鏡 六〕文治二年九月十五日戊午、梶原刑部丞朝景去夜自京都歸參、○中略申云、春三月之比、召群盜張本平庄司、丹波國住人被禁置左獄、

〔仲資王記〕建久五年五月十二日壬申、今日東西獄强盜人卅餘人、被下遣關東也、

〔吾妻鏡 十七〕建仁二年三月八日癸丑、入御于比企判官能員之宅、○中略爰有自京都下向舞女、微妙○中略申云、去建久年中、父右兵衞尉爲成依人讒爲宮人被禁獄、而以西獄囚人等、爲給奧州夷、被放遣之、

〔職原抄 上〕囚獄司○中略

近代不必任此司、若憚名號歟、

〔新編追加 雜務〕一獄舍事○中略

以上三箇條、爲守護役可致沙汰、

〔長興宿禰記〕文明十三年四月廿六日、賀茂氏人萬彥大夫被渡大路、於六條河原被切首、弟男不渡大路同被切首、去年十一月晦日、忍入將軍御所、御重寶二銘以下御劒等盜取露顯、自去年被置所司代浦上籠舍、今日被誅者也、

土牢

〔太平記 二〕長崎新左衞門尉意見事附阿新殿事

是コソ中納言藤原資朝ノオハシマス籠ノ中ヨトテ見ヤレバ、竹ノ一村茂リタル處ニ、堀ホリ廻シ、屛塗テ行通フ人モ稀也、

〔庭訓往來抄 下〕獄ハ、土ノ穴ヲ堀テ押入ル也、

名稱

囚禁

凡ソ死罪、流罪等ノ罪人ヲ、處刑ノ前ニ於テ禁獄スルハ、從來ノ制ニシテ、鎌倉室町ノ時代ニ在リテモ、亦異ナル所ナシ、但シ獄ニハ、一種土牢ト稱スル者アリ、山腹ヲ穿チ、罪人ヲ其内ニ拘禁スルモノニテ、牢獄ニ似タルヲ以テ亦牢ト名ヅク、

召禁トハ、一處ニ拘置スルヲ云フ、召籠、押籠、追籠ナド云フ皆同ジ、又武士預、寺預、社召等アリ、武士預トハ、其部下ノ士ノ家ニ附シテ禁錮スルコトニテ、許多ノ罪人ヲ數箇ノ大名ノ家ニ分置セシ事モアリ、亦其刑名ノ定マルマデ拘留スルコトハ常ニアリ、寺預ハ寺入トモ云ヘリ、卽チ高野山ニ放ツノ類ニシテ、社召ハ社家ニ召禁ズルヲ云フ、又座敷籠アリ、本人ノ家ニ、一所ヲ點ジテ之ヲ拘置シ、外出スルコトヲ得ザラシムルナリ、又放召人(ハナシメシウド)トハ、往昔ノ散禁ノ如シ、其禁ノ嚴ナラザルモノナリ、又召籠ト云フハ、其處ニ拘置スルコトナレド、頗ル寬ナルモノニテ、他鄕ノ人ヲ鎌倉ニ留メテ歸ラザラシムルノ類アリ、又殿上ニ召籠ムルガ如キハ、朝廷ニテ行ヒシ所ニシテ、官人ノ殿上ニ在ル者ヲ、一時拘留シテ家ニ歸ラザラシムルナリ、

又籠居アリ、蟄居モ同ジ、倶ニコモリキト云ヒシガ、後ニハ字音ヲ以テロウキヨ、チツキヨト云ヘリ、卽チ家居シテ外出セザル事ナリ、是ハ上ヨリ令シテ出仕ヲ停ムル事モアレド、自ラ家居シテ罪ヲ待ツコトモアリ、亦意ニ不平ヲ懷キ自ラ籠居スルモノモアリ、其語ノ刑名ニ同ジキヲ以テ此ニ併載セリ、サテ此籠居ハ朝廷ニモ幕府ニモアリ、閉門ト云フモ大カタ同ジ、

〔運歩色葉集 農〕禁獄

〔庭訓往來〕可断罪者被誅之、可誡者禁獄之、

等、　廿九日壬子、淡路守藤原秀康搦進東寺盗人字大夫房、　三月九日壬戌、佛舍利道具等自院（高陽院殿）被奉返納東寺寶藏、一長者以下僧綱參集寺家、藏人頭右大辨定高朝臣爲院司行事、今夜淡路守秀康兼右馬權助、（搦進東寺盜人賞）

〔源平盛衰記 四十七〕北條上洛尋平孫、附髑髏尼御前事

平家ハ一間廣カリシカバ、彼等ガ子孫定テ京中ニ多ク有ラン、尋捜テ可誅ト源二位（○頼朝）北條時政ニ被仰含ケレバ、時政上洛シテ平家ノ子孫尋得タラン者ハ、訴訟モ勸賞モ可依請ト披露シケレバ案内知タルモ不知モ賞ニ預カラントテ上下男女伺求ケレバ、多ク尋出シケルコソ人ノ心ウタテケレ、

〔吾妻鏡 三十七〕寬元四年三月廿日己酉、有臨時評定、市河次郎左衞門尉搦進强盜海賊等賞事、及度度高名畢、有御感之由、可賜御敎書、且御恩沙汰之時、載加注文可被申旨云云、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一走者之事、其身者不及是非、類親までも可成敗、可走者仕舞兼々可相知之間、其在所之者、又者傍輩聞立於言上仕者、一稜可褒美、若乍存不申上者、可爲同罪、付普請材木出等之時罷出、奉行へ不相届歸候者、知行可召放、直他國へ走候者、親類共可成敗、同被官共走候者、其主人三增倍之可懸科事、

一人を斬走科事、則はつつけにかけべし、其在所爲地頭庄屋近所之もの、卽時追懸搦捕可言上、搦捕儀不叶者、則可相果、若にげぬかし候者、在所可懸科、彼親類之儀、始末毛頭も於存者可爲同罪、不存所於分明者、可有其沙汰、幷同座在之者、不及其氣遣者、可處罪科事、付親類者、可寄遠近哉事、

捕嫌疑者

〔新編追加雜務〕一惡黨由有其聞輩事

所犯之條、雖無分明證據、有風聞之說者、相尋地頭御家人之處、聞及之由差申者、於御家人者、可令召進六波羅、至非御家人凡下輩者、同可令計沙汰、

追捕行賞

〔玉海〕文治二年六月六日壬子、光長參上、申數ヶ條事、其中可討義行之宣旨事、申院之處、早可宣下之由有仰言、其宣旨狀令見之、

文治二年六月六日　宣旨

謀反者前備前守源行家、前伊豫守同義行等、敗奔之後、不成歸降之思、詔有偶語之聞、廣仰都鄙尋捜之間、行家已伏誅、義行獨逃脫、雖歎戮口猶欲擒充、重仰五畿七道國々司等、慥令搦進義行身、若有殊功賞以不次、

藏人頭左中辨藤原光長奉

〔仁和寺日次記〕建保四年二月五日戊子、今夜竊盜入東寺寶藏、弘法大師請來之佛舍利以下、靈寶道具等悉盜取之、　九日壬辰、東寺盜人搦進之輩可行不次賞之由、被下宣旨五畿七道國々諸寺諸山

捕逃亡者

頭、三人職衆に指添、彦介をからめとり候へ、若又傍輩共など、其邊に見舞のために居とも、それをもおさへて搦捕申べく候、まして落合事は中に及ばずこの御意にて、足輕衆、職衆、廿人頭、各落合彦介宿をとりまき申され候、彦介はやく聞付、にげてきけん寺へ走籠本頬に付而、先命に大事はなし、然れ共七十にあまる母を籠舍に被仰付候、

〔新編追加 侍所〕一所預置召人令逃失罪科事嘉禎三七廿評

右預置謀叛人之處、其召人於令逃失者、依爲重事、可被召所領也、其已下者、不可處重科、隨輕重可被行過怠也、所謂寺社修理等是也、但逃脱之後爲令尋求三箇月者、可被延引、若三箇月之內不尋出者、隨事體可有其沙汰歟、

〔新編追加 雜務〕一令逃雜人咎分限事

右拘置人下人之所、本主人與雜人遂問注之日、地頭爲雜人方人、以代官雖遂對決、任相傳可召渡之由、蒙御成敗、本主人行向、欲請取之處、乍有其庭、自後園彼奴令逃失畢、仍差日限不尋出于其內者、可有咎之由、雖被仰含、于今不尋出之咎、分限傍例不審候、本主人有道理者、辨其代之外、不可有別科候、本主爲顯然之僻事者、不及沙汰候歟、

〔新編追加 侍所〕條々

一召人逃失預人咎事、隨罪科之輕重、於六波羅可有其沙汰、（中略）

弘長二年五月廿三日　　武藏守　判

相模守　判

陸奥左近大夫將監殿

〔今川記 五 かな目錄〕一被官人喧嘩、并盜賊の咎主人かゝらざる事は勿論也、雖然未分明ならず、子細を可尋など號し、物おくうち、彼者逃うせば、主人の所領一所を可沒收、無所帶は可處罪過、

〔東寺執行日記〕嘉吉三年十月二日、勸修寺宮御方、今度大内燒亡者、此宮御存知申間有之テ、當職參向申テ、召取奉テ、京都ヘ御出了、御坊人十六人召トル、二人ハ當座死亡、已上十八人申之、慈尊院報恩院ハ、先落ラレ畢、四日、僧類藏主流罪、相國寺宮僧山門ニテ召取奉云々、攝州太田ノ邊ニテ奉切之、切手ハ原林申者也、

〔太閤記〕一秀吉公賊人を捕給ふ事

信長公は、在々所々のこらず放火し、すでに歸陣し給ひけるが、藤吉郎〇豐臣秀吉四人を執て泪をながし、道の側に跪りしを見給ひて、此罪人は何ものぞ、何故ふかう歎ぞと御尋有し時、秀吉謹て、されば其事にて御座有ける、先夜巢俣にして福富平左衛門が面さし失ひ候しを、皆人某をうたがひ名をさゝぬ斗に見えしに因て、其翌朝御暇をも不申上、津島の富家に參り、金龍のかうがい質に置ものあらば告知せよ、褒美として黃金十兩出し候はんと、津島の富家どもにかたく約しつゝ、堀田孫右衛門尉所に宿をかり、件の盜人を待申所に、案のごとく彼かうがいを質に置候はんとて參けるを、難なくとらへ申候、諸人某をうたがひ申せしつらううちに、陣中を引めぐり、其後引張切にいたさんと存、是まで召連參て候なり、たゞかやうの疑にあひ申事も、偏に身の貧なる故と存候へば、覺ず涙もそゞろなりしよし申上しかば、信長公もあはれみ給ふて、日來之指出をもゆるしおぼさる、

〔甲陽軍鑑〕十七品第四十七落合彥助と百姓と公事、付雜言幷に三法印佗言之事、

抑曲淵〇少左衛門を赦免の事は、旗本家中によらず、我等分國中の諸侍へ禮義のために、成敗赦免せしめてあり、それになんぞ彼落合彥介、いつもかくの分に有べきと存、奉行共に雜言仕る事、たゞおほかたに申付候はゞ、明くれ藏前にて惡事有べく候、早々からめとり、かみの城戸にて、みごらしみのため、彥介をいりころしあるべく候とおほせいだされ、あしがる大將二かしらに、廿人衆

(之川)持へ被渡、被配流中云々、

〔看聞日記〕永享七年二月四日、今朝人々參賀之時分、山門使節四人被召捕、二人(金輪院、月輪院[illegible])於管領召捕、自兼管領出拔令參洛者、可被成安堵之由令申、猶恐怖猶豫之處、管領書告文遣之間、令參洛之處召捕則於悲田院(之上)、四人刎首、其間之式、言語道斷云々、

〔看聞日記〕永享八年十一月二日、抑聞金商人被召捕、二人被刎首云々、自公方金千五百兩被召之處、不所持之由申、其罪科云々、有德之者也、

〔看聞日記〕永享九年七月十四日、抑聞大覺寺門主(〇足利義昭、義教弟、)逐電云々、室町殿(〇足利義教)御連枝也、御意不快之間、野心之企歟、候人共被召捕、被糺明云々、朝日若君上臈も逐電、被尋云々、南方祗候人も逐電云々、爲世恐怖、但實說不審也、 十六日、聞大覺寺逐電、實說也、玉川護正院候人共、兩三人逐電、依之彼方樣女中共皆逐電云々、 廿日、抑大覺寺門主天王寺落下、僧坊一宿、彼坊主相伴被出、不知行方云々、仍彼僧坊追捕、法師一人召捕、管領預置被尋、更不存知之由申云々、南方宮同御逐電、叛逆之企露顯歟、

〔建内記〕永享十一年六月六日壬午、後聞北畠中將持康朝臣爲伊勢國司(〇註略)御退治、進發勢州云々、實否可尋記、後聞非其儀、大覺寺殿(〇足利義昭)御坐勢州、仍爲被退治申、被仰彼所了、顯雅朝臣自和州同向云々、長野同可向云々、 十八日甲午、周全侍者入來、自勢州去十三日還向云々、(〇中略)彼言談條々、

(〇中略)

一伊勢國中大覺寺前門主、可被奉搜索云々、和州吉野奧、先可有搜索、自其陣直可令發向伊勢國(守護)(國司勢州可在和州陣、以細川長野等并勢、可搜索國司分領之內由有其聞云々、)棚橋衆徒可屬長野手、可致忠節之由被仰出云々、

一北畠中將持康朝臣、是又爲搜索向伊勢、今月七日出京都、去十日着、侍者於路次見物、中將十德之體、着塗笠、一向旅姿也、其勢着小具足、五十騎許也、步兵及三百餘人云々、

る體にて、輿に被昇上洛、神人大勢相卒、公方へ訴申、室町殿〇足利義持因幡堂御參籠之間、彼へ參て庭〇中申、就飯尾加賀八幡奉行也ニ可申之由被仰、仍加賀宿所へ罷向、神人百人許、淨衣下ニ着腹卷、致其用意、以外及嗷訴、其間ニ室町殿可召捕神人之由、侍所幷問注所奉行加賀等ニ被仰付、今日費程ニ侍所京極問注所二頭大勢加賀宿所へ押寄、加賀於家中致用意待儲之處、侍所問注所勢共、門前より責入之間、神人等家內へ逃入之處、自內加賀勢責合、自內外取卷、欲搦捕間、神人自元存儲致用意之間、散々合戰、神人廿七人或說、卅七人云々、矢庭ニ被打殺、其中大將ハ腹切云々、生捕神人五十人許、悉手負、其中一人不負手云々、侍所問注所勢手負數多、死人少々有之、加賀勢も數多手負、加賀も蒙疵云々、神人死骸車七輛に積て、五條河原捨之、合戰之式驚目、言語道斷事云々、此夏神人嗷訴動天下之處、爲無爲了、今不慮事出來、神人數輩墮命了、彼等若違神慮滅亡歟、不審神慮難測者也、八幡にも騷動、神人與黨猶可致惡行歟之間、諸大名ニ被仰、勢共馳下社頭奉警固云々、權別當坊にも用心、勢共相語、東竹田向緣者之間、有善以下地下輩五六十人爲合力、自田向遣之、騷動不思議事也、　十五日、昨日合戰謳歌之說同前也、召捕神人大略可被斬云々、抑神人東竹坊へ欲押寄之時、放生川邊集會、評定之處、鹿三頭走出、神人馬武者懸出と心得て、右方左方へ逃散、兵具を捨云々、而鹿三頭馳通間、其々神人逃散不押寄云々、併神慮歟、生捕共手負四十人許死云々、張本輩於河原今朝被刎首了、昨日空死神人は輿より出て逃走侍所、於九條邊切殺云々、

〔看聞日記〕永享五年十二月廿日、抑聞相應院新宮南方上野宮御子自公方侍所ニ被仰付搦申、門主ハ御室へ被入申、其間ニ侍所門跡へ參取申懸繩云々、御形儀惡物之間、公方へきこえて被搦申云々、委細事未聞、希代不思議事也、　廿三日、大教院隆經法印參對面、相應院新宮事語有隱謀之企、仍被搦申云々、侍所日野家へ渡申、彼ニ御坐云々、　廿七日、行豐語世事、相應院新宮事、隱謀之企虛名也、更々無其支證云々、而自門跡密々被告申、隨而日野中納言事々執申之間被搦申、有御後悔、雖然管領〇細

守護人無緩怠可令沙汰、於御使者、明春可令歸國也、就白狀相觸子細於地頭之處、兼日逐電之由、依令申、不及其科歟、此日來經廻之惡黨令逃散云々、其所地頭致淸廉沙汰者、何可令退散哉、是又領主雖難遁其科、自今以後者、至如此所者、地頭可有罪科、

〔吾妻鏡 三十六〕寬元二年八月廿四日壬辰、伊勢國阿曾山、幷熊野山惡黨蜂起之間、今日有臨時評定、被經御沙汰、爲征伐可行向之由、被仰地頭御家人等訖、

〔東寺百合古文書〕山城國守護使不入所々盜賊事

或居住地下、或自他所落來者、可被進其身之旨、可被相觸當所代官名主、沙汰人等若令遁避者、任大法不謂寺社諸權門領、可被搦捕之、有異儀者、可被沒收所帶之旨候也、仍執達如件、

寶德二
六月廿一日

永祥

性通

〔葉黄記〕寶治二年七月一日、參院、南都榮圓、玄藝等、今日被召渡武家、前相國(○實氏)仰遣長持、進使者(佐治左衛門尉重家、眞木野左衛門尉茂綱、高橋左衛門尉時光等云々、各着白直垂小袴、賤等不及甲冑云々、)於御所門前可渡之由、相國被計申之、仍予(○藤原定嗣)仰官人畢、不辨可不武士等、候冷泉西門外、撿非違使左尉章種、右尉章澄(已上引立烏帽子、帶弓箭、着毛沓白紐歟、)等、相具彼兩人參上、(官人宿所爲高倉面、咫尺也、仍不及乘物、)不及付縄、但布衣長、(眞敎)放免等持參之、友景(相國後見、武家事問答之仁歟、)候門下、又有問答事等歟、武士於門外請取之、兩人令乘馬、向六波羅云々、於六波羅又預他武士歟、

〔後愚昧記〕永和三年七月十八日、今夜止宿侍所(山名奥州)勢寄佛覺寺(比叡山麓)搦取惡黨等(強盜等云々)或自殺、或打死、四五人云々、或又搦取了云々、

〔看聞日記〕應永三十一年十月十四日、抑八幡神人騷動不思議又出來、去十一日、權別當坊(號東竹)庭前木を栽、其前を神人無禮罷過之間、若黨共咎之、神人立歸惡口、結句腰刀拔て懸之間、若黨共神人打擲了、然間與黨神人等、彼坊へ欲押寄、社務中ニ入無爲之處、神人鬱憤猶不散歟、彼被打擲神人死す

修理權大夫判

相模守殿

越後守殿

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年正月十九日戊申、去年十一月一日、可相鎮洛中群盜間事、有評定、被仰相州、○北條重時相州就被申之公家、被仰付使廳等云云、彼狀等到來、

群盜可相鎮間事、任關東申狀、可致其沙汰之由、可被仰遣武家之旨、攝政殿御消息候也、仍上啓如件、

十二月十三日　右大辨經光

謹上　堀河中納言殿

群盜可被相鎮間事、綸旨如此、殊可致其沙汰之由、被仰使廳候畢、可令存其旨給之狀、所被仰下候也、仍執達如件、

十二月廿三日　權中納言親俊

相模守殿

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年十月十日丁巳、被行評定、六波羅撿斷等事、有其沙汰、令召出被祗候人佐治入道、爲使節參向於當座被仰云、强盜人事、無地頭權門領以下所々、自守護所隨相觸、可被召出之、不然者、可被追放彼所、無其儀者、可補地頭之由、兼可被申本所、次自地頭補任所々、不被召出强盜人者、可被改易彼地頭職之旨、相觸之後、可被註申之、

〔侍所沙汰篇追加〕一惡黨張本事

殊於乘人口之輩者、隨聞及、可召進其身於關東也、

〔侍所沙汰篇追加〕一遠江國佐渡兩國惡黨事

うけたる者共つゞきて入て、安くからめてけり、十郎あはれやすからぬもの哉、腹くろきむしにくらはれぬとぞいひける、則康仲が家べぐして行たれば、康仲悦思ふ事かぎりなし、康仲が第一の高名にて、ゆゝしくのゝしられけるは、併小殿が忠節也、

〔勘仲記〕弘安七年九月七日壬午、自院民部卿奉書到來、東大寺衆徒申、興福寺衆徒燒失手掻鄕張本深慶被召之處、不應其召、可被下衾宣旨、忩可宣下之由被仰下、即所書口宣也、

弘安七年九月七日宣旨

近曾興福寺衆徒等爲發凶器於多武峯、令宛兵粮於手掻鄕、稱對捍此儀、既燒失彼所、張本深慶、淨顯等、雖召其身於寺門、早晦其跡於帝都、梟惡之企狼戾尠彙、皇化陵夷職而由斯、宜仰五畿七道諸國等令搦進其身、

藏人治部少輔藤原兼―奉

〔勘仲記〕弘安十年九月廿一日己酉、章澄追捕賞事、去月頃歟、或僧號律師、中將顯成朝臣子、推參花園殿、依謀反事、可申請院宣之由、令披露歟、事之樣驚思食之間、被召章澄、被搦取之、其後被渡武家云々、件僧去十五日、於桂川令誅之由有其說、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年〇曆仁元年十月十二日癸丑、今日畿內西國中庄園鄕保住人、好以强竊博奕刃傷殺害爲業輩事、不嫌禪〇恐神社佛寺權門勢家領、不相觸、召取其身、且可注進在所之由、被仰含守護人等云云、

〔新編追加侍所〕一武士召所犯人住宅事

爲鎮狼藉、雖被召取其身、至住宅資財者、別當殿觸申、可爲保官人沙汰、於邊土者、相觸本所、可爲彼沙汰也、〇中略

延應元年四月十三日　前武藏守判

ならせおはしまし候て、御みづから御をきての候つる事、忝も可₂申上₁には候はね共、船のかいは、はしたなく重き物にて候を、扇などをもたせ候樣に、御片手にとらせおはしまして、やす〳〵ととかく御をきて候つるを少みまゐらせ候つるより、運つきはて候て、力よは〳〵と覺へ候て、いかにものがるべくも覺へ候はで、からめられ候へぬると申たりければ、御けしきあしくもなくて、をのれめしつかふべき事也とて、ゆるされて、御中間になされにけり、御幸の時は、烏帽子かけして、くゝりたかくあげてはしりければ、興ある事になんおぼしめされたりけり、

〔古今著聞集十二偸盗〕眞木島の十郎といふ强盜の張本有、年比使廳、武家うかゞへ共、いかにもからめえざりけるを、康仲源○此小殿に云やう、汝がはじめより約束僞所なくば、彼十郎からめさせよと云、小殿則承伏しにけり、小殿が云く、十郎はゆゝしきつは物也、たやすくからめらるべからず、すくやか成人を三十餘人給りて向侍べし、又何にても贓物を一給らんといへば、云がごとくにさたして鞦一かけをとらせてけり、件の鞦をふところに入て卅よ人の輩あひぐして、まきの嶋へむかひぬ、のがれ逃んずる道々を敎へて、みなそこぞこに分てたてつゞきていらんものなど、其器りやうをはからひて定つゝ、近邊にかくし置つゝ、扨をのが身ひとり入て、いだきてえい聲を出さん時續て早く入べしといひをしへて、日暮て行ぬ、則十郎が家の門をほと〳〵とたゝく、十郎内よりたぞと問ければ、平六が參りたるぞ、あけ給へといへば、十郎何心もなく小袖打かけ、烏帽子引入て、其用意もなくて出たり、小殿ふところより鞦を取出し是あづけ參らせん、只今外へ罷通にといふ、十郎鞦を取て、いづこなりける鞦ぞと問ば、夜部あそびをしてまうけたる也と答て、通りなんとしけるを、十郎さるにても入給へ、酒すゝめんといへば、よき事と思ひて内へ入ぬ、見れば又男もなし、女の獨有つるをば酒たづねにやりて、たゞはしりむかひ居たり、案じすましたる事なれば、むかひざまにおどりかゝりて、いだきてけり、則えたりや〳〵と大聲を出す時、ま

古事類苑

法律部二十五

中編

追捕

追捕ハ、王朝ノ制ニモアリテ、上編既ニ之ヲ言ヘリ、鎌倉幕府ノ中葉ニ及ビテハ、京中捕盜ノ事モ幕府ニ委任セリ、而シテ懸賞シテ犯罪者ヲ捕ヘシムルコトハ、朝廷幕府共ニ行ハレタリ、又預ケ置ク所ノ四人逃脫セシ時ニ、其預人ヲシテ日ヲ限リテ捕ヘシムルコトアリ、

〔仲資王記〕建久五年九月十七日甲辰、今日爲召廣田社神官能基惡僧四人、撿非違使章廣、看督長放免等下向云々、但相具本宮使一人、 廿三日庚戌、裏書云、廿三日、廣田社前禰宜能基、幷惡僧四人逃隱了之由、使廳使歸洛所申也、是可禁獄所之由、被宣下之間、見知件宣旨之故云々、 十月廿一日戊寅、廣田社前供僧官舜長寫小被召取使廳了云々、是依去春神輿事也、(奉行撿非違使章廣)

〔古今著聞集十二偸盜〕御鳥羽院御時、交野八郎と云强盜の張本ありけり、今津に宿したるよしきこしめして、西面の輩をつかはしてからめ召れける、やがて御幸成て、御船にめして御覽ぜられけり、彼奴は究竟のものにて、からめて四方をまきせむるに、とかくちがひて、いかにもからめられず、御船より上皇みづからかいをとらせ給ひて、御をきてありけり、そのとき則からめられにけり、水無瀨殿へ參たりけるに、めしすえて、いかに汝程のやつが、これほどやすくは搦られたるぞと御たづね有ければ、八郎申けるは、年來からめ手向ひ候事、其數をしらず候、山にこもり水に入て、すべて人をちかづけず候、此度も西面の人々向ひて候つる程は、物の數共覺へず候つるが、御幸

古事類苑

法律部二十五

中編

追捕

囚禁

却の爲體、あさましかりしふるまひなり、

打八十餘人同道して、諸國に分れゐて、天竺冠者がかく嚴重なるよしを人にかたり、或は人にもいはせてわゝくりたりけるが、あまりにこと過ぎて京まできこえて、かゝる目にあひにけり、

〔塵塚物語五〕軍中博弈之事

建武以後軍戰うちつゞき、武士立身の最中なれど、此砌武藝の達人、天下にさばしきいはれはいかにと了簡するに、博弈ゆへとぞきこえ侍る、群卒帷幕の中のなぐさみは、大將より下つかた、與力、足輕の者共にいたるまで、彼博弈をこのみて、あるひは一たてに五貫十貫、沙金五兩十兩をたてつゞけ侍る間、山をあざむくほどの金銀も、暫時のほどに負侍る者、後は博弈のたからも懸て、あるひは武具馬具の品こと〴〵くとられて、おもはぬ辛勞しけるもありといひつたふ、畠山某が手のもの、ある戰場へむかひけるに、甲ばかり着て直肌の武者もあり、よろひ着ながら大刀甲に拂底したるものもあり、中下の士卒の出立は大方不具にことやうなり、されどその時の高名、おほくは彼不具の者にありといへり、是博弈にうち入て困窮至極の仕合なれば、此度一定必死とこゝろへ、此所をすゝがんとの一心によりてなるべし、中昔德政といふ、その起り、おほくは彼たはぶれが本元なりといひ侍る、應仁文明の比の博弈には、人もさかしくなりけるにや、武具馬具に不具はなし、はじめのほどは金銀もたてつれど、次第に一錢の所持もなくなり侍れば、京の町人のそれがしが土藏を、いま博弈のたて物にする人も有、寺僧神主の藏などを立たる物もありけると也、勝たる時は、藏代いかほどゝつもりて金銀をうけとり、又負たる時は、いつ〳〵の夜、彼藏々のたからをうばひて遣す　しとさだめあひたるほどに、後は其座に錢といふものは一錢もなくて、唯こと葉のみにて勝負をかけるといひつたへたり、是則二六時中の慰みなり、末代といひながら、かゝるふるまひも有事にや、おかしといふも餘あり、かやうのたはぶれに心おくれて、第一の家業をわすれ、ほれ〳〵として人にあざむかれ、疲のうへのつかれとなりて、前後忘

文明十年六月廿日

〔長曾我部元親式目〕掟

博弈、かるた、諸勝負、令停止、附其外不作法令禁制事、

〔太閤記一〕秀吉卿輕一命、於敵國、成要害之主事

扨堀普請に悉く懸て、急がせ給ひける程に、是も程なく出來しければ、武具兵粮等入置れ、藤吉郎に番手の士共相添、すへ置給ふ、其制書に云、

定〇中略

一諸勝負堅く可令停止之事〇中略

右條々相守此旨、可勤寛容大成之功者也、

處刑例

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年四月廿五日癸未、以田地爲博弈賭事、於件所者可被召放之由被定、是大宮三郎盛員與豐島又太郎時光相論武藏國豐島庄犬食名、大宮有忠打四一半事起也、各相互雖訴申、遂被收公彼所領云云、對馬左衞門尉仲康爲奉行、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年五月廿九日丙辰、有評定、鶴岡職掌常陸國國井住人惡別當家重、依博弈之科被解神職、會合衆飯野兵衞尉忠久、幷五郎三郎、孫三郎等、可處罪科之旨、被仰含彼等主人國井五郎三郎政氏、那珂左衞門入道道願云云、

雜載

〔武政軌範侍所沙汰篇〕檢斷條目事

一博戲論事〇中略

如此之刑法、皆以爲當所所〇侍之沙汰者也、

〔古今著聞集博奕十二〕後鳥羽院御時、伊豫國おふてうの島といふ所に、天竺の冠者といふものありけり、〇中略この男、もと伊豫國の者なりけり、高名のふるばくちにて、打ちはうけて、すべて負け博弈

○按ズルニ、同前トハ、上文可計沙汰ノ言ヲ承ク、

〔新編追加 侍所〕一博奕事

於侍者可有斟酌歟、至凡下者、一二箇度者被切指、及三箇度者可被遣伊豆大島也、

〔侍所沙汰篇追加〕一博奕事

右任御禁制之旨、一向可停止之、若有違犯之輩者、可召進其身、計不可及妻子所從等煩、況不可抑留田畠資財雜物矣、

〔建武式目〕一可被制群飮佚遊事

如格條者嚴制殊重、剰耽好女之色、及博奕之業、此外又或號茶寄合、或稱連歌會、及莫太賭、其費難勝計者乎、

〔建武以來追加〕禁制○中略

一バクエキノ事○付スタ六中略

右條々カタク可被止也、若違犯ノ事アラバ可處罪科之狀、依仰下知如件、

應安二年二月廿七日　　左馬助源朝臣判

〔東寺百合古文書 七十四〕一寺中公人等雙六打事、不可就、於自今以後者、堅可被禁制、若猶無承引者、於其宿所者可被闕所、於其身者寺家可被追放由、寺家可被相觸由評定畢、

〔大内家壁書〕安藝國西條鏡城法式條々○中略

一博奕堅固可停止事

同○長祿四年十二月廿日　連署除之

以上

右於背此旨之輩者、可致御成敗之由所被仰出也、仍壁書如件、

觸之狀如件、

寛元二年十月十三日　武藏守

備後守殿（○又見吾妻鏡、新編追加、）

〔吾妻鏡三十七〕寛元四年十二月十七日壬寅、今日被下御教書於諸國守護地頭等云云、其狀云、

籠置惡黨幷四一半打、所領可被召事

右近日國々夜討强盜蜂起之由普風聞、是偏所々地頭等籠置惡黨幷四一半打等、致無沙汰之故歟、然者或籠置惡黨於所領内、或於四一半之所者、早可被注進交名、可被改易所職也、以此旨可令下知其國並知行所々給者、依仰執達如件、（○又見御成敗式目追加、）

〔吾妻鏡四十〕建長二年十一月廿八日己丑、放遊浮浪之士、寄事於雙六、好四一半、博奕爲事、就中、陸奧、常陸、下總、此三箇國之間殊此態盛也、隨有風聞之說、今日有糺御沙汰、於自今以後者、圍棊之外、至博奕者、一向可停止之由所仰出也、陸奧國留守所兵衛尉、常陸國宍戸壹岐前司、下總國千葉介等可加制禁之由、各含仰旨云云、

〔吾妻鏡五十〕文應二年（○弘長元年）二月廿九日辛酉、關東祗候諸人、家屋之營作、出仕之行粧以下事、可令停止過差之由被定之云云、此外嚴制數箇條也、後藤壹岐前司基政、小野澤左近大夫入道光蓮等爲奉行、（○中略）

一可停止博奕事（○下略）

〔新御式目〕弘安七五廿七評（○中略）

博奕事

爲守護人御使沙汰、可加禁遏、有違犯之輩者、於御家人者可被召所領也、非御家人凡下輩之事同前、侍所沙汰（○又見新編追加、）

横大路已下、固方々迯路、有犯科者否、可捜求其內家々由被仰下之間、諸人奔走、而名越邊或男洗直垂袖、其灑血也、成佐岩平左衞門尉生虜之、相具參御所、推問之剋、所犯之條無所遁、是博奕人也、仍殊可停止其業之由下知云云、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年(○暦仁元年)八月十九日辛酉、可止雙六之由被仰下云云、

〔侍所沙汰篇追加〕一近年四一半之徒黨、興盛云々、偏是盜犯之基也、如然之輩、無左右擬召取者狼藉訴出來歟、於京中者、申入別當以保官人可被破却其家、邊土者申本所、同有沙汰者、定被停止歟、或又於野山中打之云々、隨見及可搦之、凡隨被召禁、申給其身可令下關東也、兼又錢切事、同伺搦可被下進關東之狀、依仰執達如件、

延應元年四月十三日　前武藏守

修理大夫

相模守殿

越前守殿

〔侍所沙汰篇追加〕一雙六、四一半目錢(○新編追加目錄、目下有勝字、)以下博奕事、(延應二(仁治元年)三十八)堅可停止之、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年四月廿五日癸未、以田地爲博奕賭事、於件所者、可被召放之由被定、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年十一月三日丙戌、幾內西海惡徒蜂起之間、可禁遏事、諸國可停止博奕事、及評議云云、

〔侍所沙汰篇追加〕一博奕事

侍雙六者、自今以後可被許之、下臈者、永可被停止也、四一半錢目勝負以下品態、不論上下、一向可被禁制、於違犯輩者、任法有其沙汰、可被召所職所帶也、至下賤之族者、可被處遠流也、以此旨普可被相

禁博弈

右馬權頭、相模式部大夫、周防前司、長井左衞門大夫、毛利藏人、駿河大夫判官、同四郞左衞門尉、隱岐式部丞、佐原新左衞門尉等祗候、

〔看聞日記〕應永二十六年正月廿一日、前源宰相參賀、則有樂、〇中略樂了三觴祝着、三位以下候、夜於臺所博弈密會、侍臣張行云々、前宰相不交事也、祗候之折節、枝葉事歟、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年正月廿六日壬午、以田地領所雙六賭博戲事、并出擧利過一倍、及擧錢過米錢事、任宣旨之狀、一向可禁斷、有違犯輩者、可注進交名之旨被仰下云云、

〔新編追加侍所〕一可停止博戲輩事嘉祿二

右同狀〇嘉祿元年十月廿九日宣旨偁、近年遊蕩之輩、博戲之處、不限度數、唯以宅財、勝負之間、喧嘩殊甚、興宴之思、變及鬪殺、雜律之文、已准盜論、宜仰撿非違使、且搦進其身、且令處其科、抑意錢之好者、倫戲之內也、當時濫吹起從斯事、一切加禁遏、同令斷罪者、〇又見侍所沙汰篇追加

〔侍所沙汰篇追加〕一以田地所領爲雙六賭事

右博戲之科、禁制惟重、而近年非啻背制符、剩以田地爲賭之由、有其聞、自今以後、可被停止、若猶令違犯者、早可被處重科、可令沒收其賭矣、

寬喜三年六月六日　　武藏守
　　　　　　　　　　相模守

駿河守殿

掃部助殿〇又見御成敗式目追加

〇按ズルニ、新編追加ニハ年月文曆二ト註セリ、

〔吾妻鏡二十九〕貞永二年〇天福元年八月十八日、早旦、武州爲奉幣于江島明神出給之處、前濱有死人、是被殺害者也、不遂神拜直參御所給、卽召評定衆被經沙汰、先令御家人等、武藏大路、西濱、名越坂、大倉、

博弈

鎌倉幕府ノ時ニハ博弈ノ類ニ、雙六ノ外、四一半、目勝ナドノ名アリ、共ニ幕府ノ禁ズル所ニシテ、士タル者此罪ヲ犯シタル時ハ、所職ヲ召上ゲ、所帶アル者ハ之ヲ奪ヒ、下賤ノ者ハ、指ヲ截リ、家ヲ毀チ、流刑ニ處セリ、足利氏ニ至リテハ其制漸ク弛ミ、殆ド其禁ナキガ如シ、

種類　七半

〔古今著聞集 十二博弈〕花山院右のおとゞのとき、侍共七。半。といふ事を好て、ありとしある物ども夜る晝おびたゞしく打けり、

〔嬉遊笑覽 四雜伎〕著聞集に七半といふことあり、(中略)是今のちよぼいちなどいふものゝ類にや、是また雙六より出たる戲なり、

四一半　目勝

〔侍所沙汰篇追加〕一近年四。一。半。之徒黨興盛云々、偏是盜犯之基也、

〔玉勝間 四〕四一半

同書 〇吾妻鏡 に打四一半といへることあり、博弈の名と聞ゆ、

〔吾妻鏡 三十六〕寛元二年十月十三日庚辰、爲備後守奉行、博弈等事、被經沙汰、雙。六。者、於侍者可被許之、至下﨟者、永可令停止之、四。一。半。錢。目。勝。以下、種々品態不論上下、一向可被禁制之由、被仰出云云、

〇又見新編追加

〔嬉遊笑覽 四雜伎〕四一半錢、目勝は二色なり、是また今のちよぼ一、重半の類なるべし、今の事だに知らざれば、古へのさま考ふべき由なし、されども釆を戲とするは、みな雙六の變じたる物とは知らる、

行博弈

〔吾妻鏡 二十七〕安貞三年 〇寛喜元年 五月廿三日、今日評定以後、相州、武州、駿河前司、後藤判官、信濃民部大夫入道等被參御所、將軍家 〇藤原頼經 召出扇令置于彼人々中給、各以目。増。勝。負。賜之、當座興也、

〔吾妻鏡 三十一〕嘉禎三年正月六日戊午、垸飯以後出小御所、有目。勝。御。勝。負。以。女。被。出。賭。物。、二條侍從、

一他人女ぬすむ事、縦雖爲歷然、男女共同前不相果者、可行死罪、付親類令同心討事、非道之上可爲曲事事、若其男ふがひなく、又者留守之時外聞相洩、於猥族者、在所中として可相果候事、付一先處名之女、契約停止事、

〔皇帝紀抄（七土御門）〕承元元年二月十八日、源空上人（號法然房）配流土佐國、依專修念佛事也、近日件門弟等充滿世間、寄事於念佛、密通貴賤幷人妻、可然之人々女、不拘制法、日新之間、搦取上人等、或被切羅、或被禁其身、女人等又有沙汰、且專修念佛子細、諸宗殊欝申之故也、

〔建內記〕永享十二年三月十二日、傳聞六條宰相中將（有定卿）女、室町殿若君（朝日參君也）上﨟也、而於朝日宿所、與遁世者（十七歲云々）密通露顯之間、於上﨟者、被流刑、至遁世者、被切首了、近日事也云々、父卿心中察存者也、

阿、鎌田三郎入道西佛等、爲御使可加撿見之由云云、是市河掃部允高光法師(法名見西)訴申藤原氏云、密通泰宗之由云云、女論申之間及此儀云云、　八月三日辛未、市河女子藤原氏事、於在柄社不密通落合藏人泰宗之由、書起請文、令參籠之間、以御使寂阿西佛、被加撿見之處、七日七夜、無其失之由各申之、仍市河掃部助入道見西、所訴申之信濃國船山內、青沼村、伊勢國光吉名、甲斐國市河屋敷等者、可令氏女領掌之、至市河屋敷者、氏女一期之後、可賜見西子孫之由、今日被定之、氏女者見西舊妻也、令相嫁之始、若離別者、可知行件所々之旨成契約之間、任契狀可充賜之趣、有氏女訴訟之時、令密通泰宗之旨見西申之、依難被開之、及起請參籠等沙汰云云、

〔大內家壁書〕寄事於左右、猥殺害人之間、御定法之事、

飯田大炊助貞家郎從石川助五郎、爲長門國三隅庄平氏左衛門三郎男、去十七日夜、被殺害之事、

右意趣者、依助五郎密懷左衛門三郎妻(才松母也)云々、猥殺害人之條、其科難遁者乎、所詮當家分國中士民等事、或案內を領主にへ、或於庭中子細を申は、可加下知也、殊更家中等事、申旨あらば、其實否にまかせ可成敗之處、やゝもすれば宿意をさんずる間、還而失其身條、且は忠孝をおもはざるにあらざるや、且は傾城として身を損ずるたぐひ、嗚呼のものにあらざるや、自今已後は、此下知をまもり、敢て定法を違失する事なかれ、若違犯之輩あらば、たとひ雖爲異類の身、雖爲重代相傳之忠臣、永子孫をたやし、罪科に處すべき也、仍此趣諸人に告知せしめんために、左衛門三郎男、并才松母事においては、貞永式目之旨にまかせ、流刑に一定せしめ訖者、早件之兩人を長門國見嶋に可送遣之狀如件、

寬正三年八月晦日　築山殿御判

內藤下野守殿(盛世也)

〔長曾我部元親百箇條〕掟

犯過事、先度被定大法畢、而無御沙汰之條如何、先可被止出仕之由被申、自元(室町殿)御氣色不快之間、嚴密被申、聽被止出仕云々、實犯之條勿論也、以告文可諫申云々、不便不便、室町殿仕女少納言、(はせ川息女)有申次之誤、被打擲、忽切髮之間、被成尼衆、法花寺へ被追下云々、父はせ川、其所領則被召放云々、驚耳事共也、十日、四辻宰相中將生涯事、季俊朝臣訟申云々、湯起請など有沙汰、兩人安否未落居云々、

〔時慶卿記〕文祿二年十一月四日、太閤(○豐臣秀吉)ニ被召置候女房御暇不申出候、男持候、仍罪、三條ノ橋ノツメニシテ、子ト乳ハ煮殺候、親二人ハ土へ堀入、首ヲ出シテ、首ヲ七日ニ、竹ノコギリニテ被引ト也、

有夫姦

〔御成敗式目〕一密懷他人妻罪科事

右不論强奸和奸、懷抱人妻之輩、被召所領半分、可被罷出仕、無所帶者、可處遠流也、女所領同可被召之、無所領者、又可被配流之也、

〔吾妻鏡　四十二〕建長四年十月十四日乙丑、爲休民間愁訴、今日被定條々、倫長、滿定、奉行之、(○中略)

一密懷他人妻事

名主百姓等中、密懷他人妻事、訴人出來者、召決兩方、可尋明證據、名主過料三十貫文、百姓過料五貫文、女罪科事、以同前、

〔新編追加　雜務〕一密懷他人妻罪科事　正應四　三十六

右同所被載式目也、但名主百姓等中、密懷人妻事、風聞之時者、不糺明實否、無左右處罪科之條、甚不可然、若訴人出來者、召決兩方、尋明證據、無所遁者、名主輩者、過料錢拾貫文、百姓者、五貫文、可宛行之、女罪科以同前、

〔吾妻鏡　三十六〕寬元二年七月廿日戊午、今日落合藏人泰宗、幷市河女子藤原氏等、(見西蓮妻)七箇日參籠在柄社壇、可書進起請之由、爲對馬前司、河勾平右衞門尉等奉行、被仰付之、此上平右近入道寂

豈如何之間、可被流罪之由被申、猶只可被討之由、重被申之間、其上事可爲時宜之由被申云々、仍十七日、被刎首畢、公家御沙汰以外事云々、

〔看聞日記〕應永三十二年六月二日、抑聞醫師郷成朝臣子息保成、禁裏昵近、晝夜奉公、而此間蒙勅勘、逐電云々、主上(〇稱光)御寵愛女官、密通露顯之間、有逆鱗、失生涯、郷成ニ被懸罪科云々、

〔看聞日記〕永享二年五月十一日、仙洞(〇後小松)女房一條局(日野中納言盛光卿女)令懷姙云々、是三條中將實雅朝臣所犯也、自仙洞室町殿(〇足利義教)へ被訟仰之間、洞院中納言事有傍例、以准據之例、可有御免之由被申、御使四辻中納言也、時宜猶不許之間、以外腹立、有扶持之子細、執申入之處無御免、其以前洞院事同罪、一々可處罪科也、向後院參も可斟酌之由被申之間、無力御免、向後事、堅被置嚴法之由被仰云云、其大法以宸筆被遊、諸家公卿殿上人醫陰輩、不限老若、悉可相觸、面々可進請文之由、廣橋中納言爲奉行被仰出、仍自廣橋源宰相ニ此旨申送、可被進請文云々、折紙云、(宸筆)

於禁裏仙洞之間、若有女犯之輩者、不依上中下﨟之勝劣、可被處罪科事、

一遠流事

一被召放所帶、或被返付由緒之仁、或可被宛行便宜之輩事、

雖爲女公人、有犯過之儀者、同可及所帶之沙汰者也、

右條々嚴法、令申談室町殿所定置也、

永享二年五月七日

請文之旨、大略一同云々、於禁裏仙洞之間、女中不依上中下﨟、至女公人、有女犯之儀者、可被處罪科之由謹奉畢、其旨可存知之由也、

〔看聞日記〕永享四年八月六日、四辻宰相中將(〇藤原季保)有生涯事、仙洞(〇後小松)侍女大納言局(甘露寺故大納言息女)令密通之由、室町殿(〇足利義教)へ女房參、以落文申云々、依之萬里小路、廣橋、兩使にて仙洞へ被申、女中

犯姦

鎌倉幕府ノ法、所領アル者、有夫姦ヲ犯ストキハ、所領ノ半ヲ沒收シテ出仕ヲ止メ、所領ナキ者ハ遠流ニ處シ、女モ亦同罪トス、而シテ名主百姓ニ在リテハ、過料錢ヲ出サシムルコト等差アリ、又强姦スルトキハ、家人ハ出仕ヲ停メ、郎等以下ハ片鬢ヲ髡スルナリ、室町時代ニ至リテハ、其制極メテ詳ナラズ、僅ニ時ニ臨ミ宜シキヲ權リテ、處分スルコトアルノミ、

强姦

〔尺素往來〕夜討、强盜、放火、刃傷、打擲、蹂躪、捕女(ノトリ)〇中略等、此間聯蜂起事、於京都者侍所、於國郡者守護、可被致嚴密撿斷歟、

〔御成敗式目〕一密懷他人妻罪科事

右〇中略於道路辻捕女事、於御家人者、百箇日之間、可止出仕、至郎從以下者、任右大將家〇源賴朝御時之例、可剃除片方之鬢髮也、但於法師之罪科者、當于其時可被斟酌、

〔式目抄〕五小路大路ニテ、女ヲトラヘテ强奸スル事也、此法モ如此定メラレタルバカリニテ、カヤウニ行ハレタル事ハミヘズ、關東ノ記ニモ不見也、

〔武政軌範〕侍所沙汰篇撿斷條目事

一路邊捕女事〇中略

如此之刑法、皆以爲當所之沙汰者也、

和姦

〔看聞日記〕應永二十八年九月廿日、抑聞仙洞御所〇後小松侍、去十七日、於六條河原被刎首畢、此御所侍、院御氣色快然、傍若無人也、而女官密通懷姙畢、露顯之間、夫婦被追出了、一兩年事云々御所侍籠居之間、御免事就內外連々雖歎申、無勅許之處、去十六日、仙洞へ推參直奏申、只今無御免者、生涯可存定之由嗷々申之間、門番衆〇攝州被仰、被召捕畢、以廣橋、室町殿〇足利義持へ可被討之由被申、然而公家御沙汰、誅

シ、尤世ノ費ナリ、唯信長ガ手ニ懸リ、其後神變通力ヲ以テ再生シテ見セヨトテ引ハラセ、向ヨリ引刀ニテシヅカニ截ワラセ給ヘバ、神變通力ノ事ハイザ知ズ、弓手妻手ヘ分レタリ、此僧一人ヲ害シ給ヒシハ、吁億兆ノ惑ヲ解ニアラズヤ、

付搦捕申候、御奉行被レ下、樣子可レ被二聞召屆一候、關白樣〇豐臣秀次還御次第、得二御掟一可二相濟一候、爲二御屆一如
レ此候、恐惶謹言、

後九月廿四日　　駒井〇重勝

益菴

新庄駿河守殿

人々御中

一高島之内、於二池村小兵衞一此方兩人も下代と僞枡を郡中へ遣、禮を取申由候間、召籠有レ之事候、御
奉行被レ下而、樣子可レ被二聞召一候、關白樣還御次第、得二御掟一可二相究一候、先爲二御屆一如レ此候、恐々謹言、

後九月廿四日　　益庵

駒井

長尾殿御代官中

妖書妖言

〔信長記十三〕賣子僧無邊蒙二斬刑一事

其比無邊ト云、廻國ノ客僧有ケルガ、我ハ生所モ父母モナシ、一所不住ノ僧ナリ、我ニ不思議ナル秘法アリ、是傳受ノ人々ハ、於二現世一ニ無數ノ患難ヲ遁レ、於二來世一ハ、無量ノ罪障ヲ滅スト披露アリケレバ、在々所々ノ男女、甚以信仰セリ、丑ノ時ノ受法ト云ケレバ、夜中ニ群集スル事限ナシ、散錢散米被物祿物等、席上ニ充滿スレドモ、サヤウノ物ヲバ塊視シテ其儘捨置キ、一紙半錢モ曾以私欲トセズ、一鄕一村ニ二日三日宛滯留シ、夕ベニ來リ旦ニ過ギ、更ニ三宿ノ慕ナシ、或時安土ノ東石場寺鶺鴒坊ガ所ヘ廻リ來ル、三月廿日夜、御前ニシテ此沙汰アリケレバ、其客僧コソ聞及ビタル者ナレ、少見セヨト楠長庵ニ被レ仰ケレバ、承テ鶺鴒坊ニ同心シテ登城アレト使ヲ遣ケレバ、則具シテ參リタリ、〇中略カヤウノ賣子、恣徘徊サセバ、諸人ミダリニ佛神ヲ祈リ、筋ナキ福ヲ願フベ

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年六月廿三日丙午、去年令入奧州給〇源頼朝之時、稱姫宮女姓出來、令尋問給之處、答申云、母者九條殿官女也、吾彈箏之間、且就母之好、爲聞食其藝、暫在彼院中、後日有不慮之次、下向奧州云々、雖可疑之、肥後守資隆入道母、爲宮條勿論之由令申之上、奧州住人、一同存其儀、將又秀衡賞翫之餘、雖欲令出家不免云云、於爲一向狂人者、秀衡爭令賞哉之由、二品〇頼朝聊有御猶豫、仍爲王胤者、令居住田舍之條、稱可有其恐、被送進京都、付廷尉公朝、被申此子細訖、而無實之旨被下院宣、今日所到來也、則被奉御請文云云、

院宣云

稱宮人事無實也、全非王胤、如聞食者、不善人歟、在京不可然、早可返遣之由、内々御氣色候也、仍上啓如件、

六月九日　　參議

稱宮修狂惑事、子細謹以承候畢、本自難信受候、然而爲承實否、令召進候之處、猶以返預候事、可存其旨候、任御定召下關東、雖可誡候、今年不可犯殺罪候、然者いかにも御計候天、面顔に疵をも被付て、可被追放候歟、不然者經高居住阿波國候者に候、件男に可預給候歟、關東へ可召下之由の御定を中返候、依其恐候、如此言上子細候也、以此旨可令申上給候、頼朝恐惶謹言、

六月廿三日　　頼朝

〔水戸本北條五代記〕關東にて升に大小あり、〇中略武藏上總は大かたはい原升也、件の升、北條氏直時代まで、安藤豐前守と云者作り出す故に、安藤升共名付、伊北彌五右衛門と云者、安藤升の大小を作る、其科に依て、天正十二年十月、小田原蘆子河原に、はたものにかけられたり、

〔駒井日記〕文祿二年後九月廿三日

一高島之内、下北川藤右衛門入道、枡之儀かり言仕、郡中より禮を取、此方兩人之下代之由申觸候

詐欺取財

〔書言字考節用集 八言辭〕謀書(ボウシヨ)　謀判(ボウハン)

〔倭訓栞 前編二十八保〕ぼうはん　律の八虐に、謀反謂謀危國家と見えたり、今いふは謀判と書く、判は判形にて、印章を指り、甚其罪を重しとするは、僞に從ふのみならず、謀反より轉訛せるなるべし、

〔御成敗式目〕一謀書罪科事 付以論人所帶證文稱謀書事

右於侍者、可被沒收所領、若無所帶者、可被處遠流也、至凡下輩者、可被捺火印於其面也、執筆者、又與同罪、次以論人所帶之證文、爲謀書之由、多以稱之、披見之處、若爲謀書者、尤任先條可有其科、又無文書之紕謬者、仰謀略之輩、可被付神社佛寺之修理、但至無力之輩者、可被追放其身也、

〔吾妻鏡 四〕元暦二年〇文治元年三月三日丙戌、有左馬頭義仲朝臣妹公、是先日武衛〇源頼朝御臺所有御猶子之契、而自美濃(一村有御志間在國)上洛、募御息女之威、在京之間、奸曲之輩多以屬之、捧往日棄捐古文書、寄附不知行所々於件姫公之後、又稱其使節、押妨權門莊公等、此事當時人庶之所愁也、既達關東御遠聞之間、號之物狂女房、且停止彼濫吹、且可搦進相順族之由、今日被仰遣近藤七國平、幷京畿内御家人等之許、但於御一族之中、奸濫人相交之條、依耻世謗給、於御書之面雖被載物狂、潜有憐愍御志、可參向關東之趣、内々被諫仰云云、

〔建武年間記〕

一詐欺官私輩事

或以不知行之地稱當地行、或冒名當給人、號闕所掠賜之、皆是朝議之煩、諸國之奸、職而由斯、不可不誡乎、如此之族、有所領者、勘合所掠賜之分限、可被收公本知行之所領、於無所帶輩者、任本條可有科坐之沙汰乎、〇中略

建武元五十八治定畢

古事類苑

法律部二十四

中編

詐僞

鎌倉幕府ノ法、謀書ノ罪ヲ犯セルモノ、其家人ニアリテハ所領ヲ沒シ、所領ナキモノハ遠流ニ處シ、其郎從以下ニアリテハ、火印ヲ面部ニ捺シ、執筆者モ亦同罪トス、又詐欺取財ノ罪ヲ犯セルモノハ、所領アルモノハ、掠取スル所ノ多少ニ從ヒテ領地ヲ沒收シ、所領ナキモノハ本條ニ任セテ處分セリ、

詐僞詔書

〔諸家文書纂四三刀屋〕

雜訴決斷所牒、出雲國上使盛倫所三刀屋郷地頭諏方部三郎祐重申、當國牛藏寺住僧榮空朝豪、令謀作綸旨、濫妨三刀屋郷事、

右止彼輩濫妨沙汰、居祐重代於三刀屋郷、至謀書人榮空朝豪者、爲有尋沙汰、不日可令召進其身者、以牒、

建武元年五月十三日　主稅頭中原朝臣花押

左少辨藤原朝臣

〔建武年間記〕口遊去年八月、二條河原落書云々、元年歟

此比都ニハヤル物　夜討、強盜、謀綸旨、

謀書謀判

〔易林本節用集〕保言語　謀書ボウショ　謀判ハン

古事類苑

法律部二十四

中編

詐僞

犯姦

博弈

罪訖、

〔宣胤卿記〕長享三年（○延德元年）五月一日戊午、傳聞、其曉資敦（廿二歲歟）爲夜討被殺、青侍一人、雜色一人、（借屋之亭主也）以上三人被殺云々、言語道斷事也、與冬光知行相論、定其故歟云々、希代之沙汰、世間之謳歌、唯此事也、依一向無足、借不思儀之小屋（正親町烏丸、甘露寺中納言宿所之東、）堪忍不及出頭之處、逢此災、不便々々、此資敦ハ故益光卿實子也、依腰痛入釋門、（猪熊）益光卿薨去之後、入道儀同（資任）存生之間、以勝光公子爲養子、是冬光也、儀同薨之後經年、資敦依腰病本復出釋門、去年元服、（叙爵八、及廿年、）知行可割分之由、自東山殿、（○足利義政）有仰、冬光難澁云々、就此事沙汰無疑之由、世以所定也、勿論之莫言々々、

幼者犯罪

雜載

一喧嘩口論堅停止之事、善惡手初謹而可堪忍、背此旨、互及勝負者、不寄理非、雙方可成敗、若一方手出於仕者、雖爲如何樣之理、其者可行罪科事、○中略

一諸奉行儀者、不及言、上下共大酒禁制之事、付醉狂人之事、輕者科錢三貫、重者可成敗、人を害、打擲仕類者、可斬頸事、

〔今川記かな目錄五〕一わらはべいさかひの事、童の上は不及是非、但兩方の親制止をくはふべき所、あまつさへ鬱憤を致さば、父子共に可爲成敗也、

〔吾妻鏡十一〕文治六年○建久元年七月廿日壬申、營中有雙六御會、佐々木三郎盛綱候御合手、子息太郎信實年十五在父之傍、而工藤左衛門尉祐經追參加、依無座懷取信實、令居傍候、其跡、此間信實頗變顏色、退出、持來一礫、打祐經之額、其血流降水干之上、二品○源賴朝太有御氣色、仍信實逐電、父盛綱則起座雖追不知行方云云、廿一日癸酉、信實遂出家逃亡云云、可召進其身之旨、雖被仰盛綱、更無所于求之、依永令義絕訖、不可讓與立針地之由言上、

〔古今著聞集十五鬪諍〕天福元年祇園十列に、院の左將曹秦久治、母の服にて出仕せざりけるが、忍びて車に乘てろじをうかゞひ見けるに、大殿の雜色長府生秦兼友、おなじく車にのりて見ける程に、はからざるに久清にさん〴〵にかけられたりけるよしうれへ申ければ、久清を召て御尋有ければ、久清申けるは、思ひかけぬ物にのりて候て、かゝるふしぎを引出してさぶらふ、いかやうにも御かんだう候べしと申たりければ、おもひかけぬ物にのりての申やう興ありて、さたなくなりにけり、まことにずい人ののり物に、車はおもひかけぬ物也、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年七月十七日壬申、高信○佐々木幷欲奉防留神輿之勇士等者、就衆徒訴、即被處流刑訖、　九月九日癸亥、京都使者參著、是去年七月廿三日、日吉神輿下洛之時、欲奉防留之武士、右衛門尉遠政幷喧嘩本人、近江次郎左衛門尉高信等事、宣下之上、爲關東御計、爲慰山門鬱胸、被處流

大名行刑

中間罷越、足料申懸之、六十錢事爲御法間、一貫二百文可取之由云々、存外なる申事、不及覺悟、亭主雖申之、種々惡口、家具携罷出之間、其町人出合打擲仕之、其旨被入上意間、彼宿亭當方被官人堤三郎兵衛(申次)爲此方如御法可成敗之由御申、御代々御判被成下之、當方被官人、爲上意不可有御成敗之由、三管領同前也、右筆かたへ御尋之處、近年事不存知候申之、然者御判證文等被御覽度之由、細川伊豆守、本郷常陸介、兩人にて被仰出之、只今則可備上覽之處、此一亂已來□□預ヶ置候間、向後召寄可懸御目之、○下略

〔今川記(五かな目錄)〕一喧嘩に及輩、不論理非、兩方共に可行死罪也、將又あひて取かくるといふとも、令堪忍剩被疵においては、事は非儀たりといふとも、當座おんびんのはたらき理運たるべき也、兼又與力の輩、そのしばにおいて疵をかうぶり、又は死するとも不可及沙汰のよし、先年定了、次喧嘩人の成敗、當座その身一人所罪たる上、妻子家內等にかゝるべからず、但しばより落行跡においては、妻子其咎かゝるべき歟、雖然死罪迄はあるべからざるか、

一喧嘩あひての方人よりとり〳〵に申、本人分明ならざる事あり、所詮其しばにおいて喧嘩をとりもちはしりまはり、剩疵をかうぶる者、本人の成敗におよぶべき也、猶以後本人露顯せば、主人の覺悟に有べき也、

〔信玄家法上〕一喧嘩之事不及是非、可加成敗、但雖取懸、於令堪忍之輩者、不可處罪科、然以贔屓偏頗、令合力族者、不論理非可爲同罪、若不慮犯殺害刃傷者、妻子家內之事者、不可有相違、但犯科人令逐電者、縱雖爲不慮之儀、先召置妻子當府、可尋子細、

一被官人喧嘩幷盜賊等之科、不可懸主人之事者勿論也、雖然欲糺實否之處、件主無科之由荐陳申、相拘之半令逐電者、主人之所帶三ヶ一可沒收、無所帶者可處流罪者也、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

傍例
小林小次郎時重、與本庄四郎左衛門尉時家相論、所從藤平太男、妻女馬二疋(一疋乘馬一疋在寄)口付男(小次郎)於路頭被搦取事、
仁治二年五月六日評定(昨日依御神事延引之故)云、依狼藉之科可被召所領一所云々、(外記左衛門尉後藤平奉行)

(看聞日記)應永卅一年三月十四日、抑後聞今日前管領(細川)屋形有喧嘩事、爲節養赤松一黨招請有大飲、而安東□□(公方近習)醉臥之處、赤松左馬助安東を差殺了、令逐電云々、仍安東傍輩等赤松へ欲押寄、雖然自公方被制、左馬助可切腹之由被仰、然而已逐電之間、先無爲云々、

(常樂記)應永三十一年五月安藤被殺害、(於右京大夫入道亭酒宴席、敵人赤松入道息、自其座逐電云々、)裏壁切腹、(主人逐電了、代官被切腹、而親入道可切之由父子論之、親兄切之、其子又可切之由堅申也、仍二人不可然之間、親ヲバ留也、諸人流涙云々、此子未及弱冠、腹切樣又大强之者也、諸人哀情之云々、安藤近習者也、仍小番衆已下堅申胸、仍令切腹云々)

○案ズルニ、此事看聞日記ニハ三月十四日ノ條ニ載セ、常樂記ニハ五月ノ條ニ載セ、且ツ安東ヲ安藤ニ作ル、

(看聞日記)永享三年六月十九日、抑聞去五月十四日、相國寺沙彌頂(勝定院沙彌)被打擲、鹿苑院僧所行云云、依之沙喝蜂起、僧堂ニ閉籠、寺ヲ欲燒鳴鐘、寺中騷動之間、諸大名馳集云々、自公方被宥仰先退散、此間猶有御糺明、鹿苑勝定僧四十餘人被召捕、侍所(赤松)被預云々、後聞、張本僧三人被流罪、自餘被追放云々、

(看聞日記)嘉吉元年二月十八日、明日伯三位公方上様入申云々、　十九日、公方女中伯許へ入御、丁事御儲云々、後聞今夜右舞人忠右被討、借物大法事ニ伊勢と確執、忠右惡口之間、公方被聞食被召捕、則被刎首云々、胡飲酒舞曲相傳者也、被經御沙汰被討、天王寺有舞曲之間、不可斷絶云々、　廿二日、聞昨日忠右妻自害、家放火、然而家ハ打消無爲、妻ハ死云々、

(蜷川親俊日記)天文八年八月三日戊辰、去晦日室町土御門三福寺地子錢未進爲催促、大館兵庫殿

〔建武以來追加〕東福寺條々（暦應五十十九御沙汰　執筆布施彈正大夫入道）

一諸社神人等訴申喧嘩事（暦應五十一十八　松田左衞門尉貞秀奉行）

或帶本訴之理、或依不慮之儀、神人等被殺害刃傷者、尤可有裁許、而近年就所務負物以下、動成奸謀之企、令鬪殺之時、致訴訟云々、政道之違亂、諸人之煩費也、不可不誡、於如然事者、一向非許容之限之上、解却神職、須處其身於罪科、將又社務出非據吹嘘者、經奏聞、改所職、可被補器用之仁矣、

〔吾妻鏡十一〕建久二年九月廿一日丁卯、爲歷覽海濱、出稻村崎邊給、〇中略秉燭之程令歸給之間、雜色澤重與盛時所從有喧嘩、各被疵、義盛郎從等搦進之、殊有御勘發、則自此所被流遣伊豆國、而可被窮科輕重歟、爲楚忽御沙汰之由、盛時屬義盛〇和田頻愁申之、於所犯者相互難遁旨、直御覽訖、非他所正於御輿遊砌、忽現奇恠、糺斷之篇何期後日乎、汝乍接公事、欲申行非據、不當之由御氣色及再三、盛時閉口逐電云云、

〔吾妻鏡二十〕建曆二年六月七日辛巳、於御所侍所、宿直田舍侍起鬪亂、即時死者二人、刃傷者二人也、鎌倉中鼓騷、御家人等馳參、佐々木五郎搦進之、和田左衞門尉卒數輩子孫僕從等令參入、搜求與黨之輩、糺斷其罪違也、　八日壬午、其夜鬪亂者、宿直之間起於枕相論、刃傷二人者、伊達四郎、荻生右馬允等也、死者兩方郎從也、今日各配流、伊達佐渡國、荻生日向國云云、御所中狼藉、殊依有其咎、及急速沙汰云云、

〔吾妻鏡二十三〕建保六年九月十三日辛巳、鶴岳宮騷動、〇中略尋子細之處、宿直之輩候廻廊、而兒童若僧等徘徊明月、被宿直人見無禮之故、起鬪諍、爲少生被打擲云云、　十四日壬午、件宿直人者、右大將家御時、敬神之餘以恪勤（號小侍）等結番之、每夜所被警固宮中也、其儀于今不怠之處、逢耻辱之間、向後可停止此事之由被定下、

〔新編追加侍所〕一依狼藉科被召所領事〇目錄云、仁治二五六、

故戰之輩依刃傷殺悉被收公所帶者於防戰之族者任先例可分召所帶半分若又被行故戰之本人於死罪者至防戰者被闕所永不可被免許矣

〔侍所沙汰篇追加〕一合戰咎事觀應三九十八右筆飯尾大和守賴國

帶御下文施行輩尤可相待使節遵行處恣亂入所々之間本主依支申多及合戰之由有其聞甚不可然自今以後者不論理非至故戰之輩者悉可收所帶亦於防戰之仁者可分召所領半分但非領主者可準故戰也○又見建武以來追加

〔新編追加神社〕一西國住人等號神人構事於左右好寄物功物之沙汰致狼藉間守護所地頭代等及相論之時者忽及喧嘩云々不致沙汰者定彌乘勝歟甚不便也神人於致狼藉者可解却神職若非職之輩募神威令濫行者可被處罪科之由可被觸申別當貫首也○中略

天福二年三月一日　武藏守判

相模守判

駿河守殿

〔新編追加神社〕一諸社神人狼藉事就甲乙之訴訟糺明之後罪科難遁之時雖相觸本所不事行之間有煩于成敗云々尤不便也狼藉輩無遁方者解却其職隨召給其身可被進關東也凡三箇度相觸之後猶不叙用者可令注進給依他事雖訴訟出來永不可有御沙汰也者可被存其旨之狀依仰執達如件

延應元年四月十四日　前武藏守判

修理權大夫判

相模守殿

越後守殿

〔新編追加侍所〕一殺害刃傷打擲事○目録云、乾元二六十二、
被載式目之上者、不及子細、至凡下之輩者、○中略 打擲者禁獄可爲六十日歟、
共以雖有其科、殊故戰防戰之咎難遁歟、然者依輕重可被處罪科也、仍於防戰之科者、糺明子細、宜任
時儀可有其沙汰哉、

〔建武以來追加〕一故戰防戰事 貞和二二五齋藤四郎兵衞入道玄秀奉行
縱雖有確論之宿意、可仰上意之處、任雅意及鬪殺之條、罪科不輕、所詮於故戰者、雖有理運、不可有御
免者也、至防戰者、若有道理者、可被免許者哉、於無理之輩者、可被行故戰之同罪歟、

〔建武以來追加〕諸國狼藉條々 貞和二十二十三沙汰
一故戰防戰事
縱雖有確論之宿意、經上訴宜仰裁斷之處、任雅意及鬪殺之條、雖遁其科、所詮於故戰者、雖懷本訴之
道理、不可遁濫吹之罪責、何況於無理之仁哉、自今以後、堅可令停止之、若尙違犯者、准本條悉召上所
領、可處遠流焉、次與力人事、可召上所領、無所帶者、可處遠流也、子細同前、至防戰者、爲非領主者、可爲
故戰同罪、若爲理運之仁者、隨事體可有其沙汰矣、

〔建武以來追加〕同事條々 永正八十二六
一故戰防戰事 永正十一四十長秀
於故戰者、雖有確論之宿意、可經上訴之處、及鬪殺之條、被收公所帶之段、度々制炳焉也、然今度被定
置、故戰之儀、尙被停止畢、有不叙用之輩者、可被行本人於死罪、若令逐電者、尋搜同意之族、可處罪科、
次防戰事、被遂御糺明、隨事體可有其沙汰也、

〔侍所沙汰篇追加〕一故戰防戰咎事 永正十三

幕府行刑

ば、仰いだされ候はんずるもさぞと存候、但いまの准后と故内府と、いろ〳〵の相論の事ども候し故、在治卿准后の御使として、種々舊院へ御申の事ども、又御官位の事ども、數年蓮空〇親長申つかわし候しかども、なにとも在治卿申旨も候はざりし故關白のをきぶみにまかせて、前内府家門をはからはれ候し事、ちとなんじう候しほどに、准后の十五歳の御時、御つのり候て、故内府は隱居候しと存候、もし大やうなる事などにて、それにかゝりてとかく申され候はゞ、さいわうの御かんだうにおよび候はゞ、正たいなくなり候ては、曲も候まじき、當座の儀と申、後代のためと申、あまりおんびんならぬにつきて、一段叡慮として仰出されべきかと存候よし御心え候て、御ひろう候べく候、かしこ、

廿五日、自伯二位許有使、在數事、昨日被仰九條之處、被申子細、猶可被計申之由有仰云々、注折紙仰詞

菅氏之輩訴狀寫留之、在別

在數朝臣殺害事、以外之次第、不可然之由、條々被仰之處、准后申詞、彼朝臣事、依緩怠、自去年十月不可向顏之由、申含候之處、押而令經廻候之間、如此令沙汰候、於巨細者、追可申入之由被申候、此上事、可被如何候哉、又菅氏輩申狀如此、猶可被計申事、卽參長橋局、下姿招出伯二位、申云、此仰更以無覺悟候間、不載申詞、尋申候、其謂於道理非者大概無其隱候歟、於攝家准后、幷大將重職之人、乍云家禮之者、殺害之條、就不穩便、可有罪科歟否事御尋、事舊了、在數朝臣科條無極者、殺害事、爲沙汰之外事、不可及是非之叡慮事歟、其段被治定、爲有御罪科之分治定者、被定其科可爲分歟之由被仰下之、其時可申所存、爲私なにとやうに罪科あるべきなどは難申之由申了、

〔御成敗式目〕一毆人咎事

右被打擲之輩、爲雪其恥、定露害心歟、毆人之科、甚以不輕、仍於侍者可被沒收所領、無所領者可被處流罪、至于郎從以下者、可令召禁其身也、

散以後也、折節太無骨、然間十九日三寶院門徒又蜂起、切鐘本佛座主、金剛王院座主方衆徒又如元鈎之、忽猶欲及鬪亂、仍差遣武士、被守護之、實遍卽召進之、賜武士□三寶院張本三人被責催之間、面々難遁、今召僧綱等(憲深法印以下也)被仰含子細、遂隨勅定、可召進之由申之、但座主條々非法等註申之、於其條退可有沙汰、又座主方張本可注進之由申之、子細等猶多、然而不遑委記、

〔親長卿記〕明應五年正月十日、昨夕聞在數朝臣(○菅原)爲准后(○政基)九條前關白沙汰被打了、卽及死門云々、不便也、後聞准后幷左大將(尚經)等、自身令沙汰給云々、無骨事歟、准后幕下等御振舞希代事歟、末代之儀莫言之、　廿四日、自內裏有女房奉書、昨日仰在數朝臣事也、

昨日兩人して御だんかう候へる事、かずながのあそんにしよぞん御たづね候へば、かんけの物を御ざいくわ候れい候はぬとて、めんぜられ候れいどもゝ候事候、又こ前內ふありはるの卿にたちをぬきてむかはれ候つる、しかるべからぬ事とて、そののちはならへ御いんきよしけるなど申候ほどに、さやうの事よきれいにて候ほどに、一がきにし候て、れんしよしてまいり候へと、おほせられまいらせ候、それをつかはされてきと申され候はんずるとおぼしめし候、たゞなにへんのしさいにて、かやうにせられ候ぞとは申ばかりにては、しん所の事にて候に、さいわうしまいらせ候、たゞめしこめられなどきこえ候、御つかいの事、中御かどの大納言けらいにて候とて候ほどに、それにはくをそへられ候はんずるとおぼしめし候よし申候べく候、かしこ、

明應五正廿四　　　　　大納言入道どのへ

內裏への返事

たゞいま御文下され、ちと物詣仕候て、御返事申入候はでおそれおぼへさせをはしまし候、昨日兩人して仰合られ候儀につきて、故前內府所行の事、まことに其儀たしかなる事にて候は

左衞門尉源定綱（薩摩國）、左兵衞尉廣綱（隱岐國）、左兵衞尉定重（對馬國）、同小三郞定高（土佐國）、

禁獄五人

堀池八郞實員法師、井伊六郞眞綱、岸本十郞遠綱、源七眞延、源太三郞遠定、

〔吾妻鏡十六〕正治二年四月八日癸巳、佐々木左衞門尉廣綱飛脚、自京都參著、申云、去月廿九日、白晝、於六條萬里小路、若狹前司保季、犯掃部入道郞等吉田右馬允親淸之妻、親淸自六波羅歸之處、有此事、卽取大刀追之、入于六條南萬里小路西、九條面平門之內、斬伏之、　十日乙未、今日掃部頭廣元朝臣、申送江馬殿（北條義時）云、去月令殺害若狹前司保季之男、束手來、可爲何樣哉、隨御意見可披露云云、御返事云、付是非可被披露云云、江馬太郞主被仰云、爲郞從身殺害諸院宮昇殿者、於武士又非指本意、白晝所行罪科重哉、直召進使廳可被誅者歟云云、

〔皇帝紀抄八順德〕建保二年十二月卅日、中宮大進藤原兼高、被配流土佐國、是去比於殿上打藏人勘解由次官宗宣之科也、

〔皇帝紀抄八後堀河〕寬喜元年六月十九日、有流人宣下事、武士左衞門尉三善爲淸（流日向）、前左兵衞尉大江貞知（流大隅）、是四月日吉神人等鬪諍輩也、

〔葉黃記〕寶治元年七月廿四日乙亥、參院、醍醐寺僧綱等、列喧嘩事、有御問答、予申次之、僧綱候西中門廊、上皇密々於寢殿聞食之、予仰含之趣、返々神妙、定不耻累祖歟之由、再三有御感、存外之面目也、

喧嘩根元事

寺領越前國牛原庄預所（金剛王院寺務之時）依殺害地頭代、件庄大略被押領、課役省略經年、而當寺上座法橋藏嚴知行之間、僧前調論講不法之由、實賢僧正門徒、去十三日、伐藏嚴住房、衆徒（三寶院門徒等也）忽蜂起、正員三綱者十僧之中也、依少事忽不及與耻辱、可出件張本之由觸座主之處、藏嚴房人也、不可及衆徒之由令申返答之、憤此事衆徒寄向實遍（實賢門徒之上首云々）經坊之間、忽合戰、被下制止之院宣了、然而已事

鬪毆

鎌倉幕府以後ハ、鬪フコトヲ喧嘩ト云ヒ、毆ツコトヲ打擲ト云フ、打擲ハ所領ヲ沒收ス、但シ其罪ノ輕重ニ由リテ土地ヲ收ムルニ廣狹ノ差アリ、所領ナキ者ハ流ニ處シ、郎從以下ハ禁獄トス、而シテ其殺傷ニ關スル制度ハ、殺傷篇ヲ併セ看ルベシ、

足利幕府ニ至リ、故戰防戰ノ名アリ、故戰ハ所領ヲ沒シテ遠流ニ處シ、與力者ハ所領ヲ沒シ、所領ナキハ遠流ニ處ス、後ニハ故戰ヲ死罪トセリ、防戰ハ、其理由ニ由リテ罪ヲ免ルヽコトアレド、故戰ヲ死罪トスルトキハ、防戰ハ爲ニ領地ヲ收ムベシト云ヒテ、其制ヲ立テシコトモアリ、

〔吾妻鏡十一〕建久二年四月五日壬午、大理(能保卿)幷廣元朝臣等飛脚參著、各被獻書狀、去月比佐々木小太郎兵衛尉定重、於近江國彼庄(○佐々木庄)刃傷日吉社宮仕法師等、仍山徒蜂起、所司捧奏狀參洛、可賜定重身上之由申之、又可差進延暦寺所司等於關東之由風聞、朝家大事忽然出來之、　卅日丁未、延暦寺所司辨勝、義範等參著、先徘徊横大路(南都門前)申事由、仍點基淸之家、被招入彼二人、先賜酒肴、次遣後兼盛時等令問答給、獻上衆徒狀、可給定綱(○定重父)父子身之由所載之也、亦彼父子之外、稱下手人注進交名、是去三月、於佐々木庄凌礫山門使、其張本之所、岸本十郎遠綱、源七眞延、源太三郎遠定等也、而無召渡其身於敵讐例之由、仰及再三云云、　五月二日己酉、大夫尉廣元飛脚、自京都參著、大理被獻書狀、去月廿六日、山門衆徒、爲訴申左衛門尉定綱、頂戴八王子客人十禪師、祇園北野等神輿、參閑院皇居之間、則有群議罪名、減死罪一等可被處遠流云云、　八日乙卯、佐々木左衛門尉定綱等事、依山門訴所被下之去月廿六日口宣、同廿八日院宣案文等到著、又同廿九日、被定定綱等罪名訖、去一日神輿御歸座云云、流人、

〔康富記〕寶德二年七月十九日辛酉、或語云、和泉守護細川兵部大〈○大、下文作少、恐是、〉輔、去年被誅山臥之間、都鄙山臥栖籠新熊野社頭、呼集諸國山伏、率大勢、一昨日可押寄兵部少輔屋形、〈綾小路、萬里小路、〉且新熊野神輿可振入之由、令支度之事、可及大儀之間、自兵部少輔方、被出下手人、〈兩人〉又科貸料足百二十貫、田地十六町、神馬等出之、被懇望之間、昨日屬無爲云々、

〔康富記〕寶德三年七月廿八日甲子、後聞今夕山名被官人大田垣内者、殺害細川京兆被官人豐田出雲内者、〈侍〉云々、仍自細川被申送子細之處、差違而自山名方召具下手人、有使節、即屬無爲云々、　九月九日甲辰、傳聞分、此四五日之前、當管領畠山〈○持國〉被官人木澤、捕京極〈侍所○持清〉召仕目付、不及一往相尋誅了、仍自京極方、遣使者可有成敗之由、令申之處、無慥返事之間、京極自身可罷向管領亭之由、支度之間、細川右馬頭入道馳向制止之、猶不休之處、自管領被遣下手人了、此下手人如常免而可歸之處、兼依無返事、無一途京極令腹立、切棄件下手人云々、兩方共希代所行也、但不知實說、傳聞分如此、如何々々、

〔親長卿記〕文明十二年九月廿四日、詣右大將許、先日青侍男小寺〈赤松被官〉殺害、于今不休可寄之由、有其沙汰之間、驚入由令申、大略無爲、本人爲小寺中間男、可切之由申之云々、此間者侍之間、可切侍之由令申候、雖然本人〈殺害人〉中間之間可切云々、大略可爲其儀之由被命、　廿五日、右大將送使者、夜前小寺爲下手人來之間、事屬無爲、昨日來臨爲悅之間送使者了、

承引之條、以外之次第也、傍輩等可及生涯事、無覺悟事也、任法令申之處、致新儀之違亂者、無力次第也、此上者不及是非之由、可被返答也、及嗷々之儀者可爲其時沙汰之由申了、此上者可被如何哉之由、及御沙汰、源大納言申云、又或仁申者、以女房奉書被仰宥者、可爲無爲云々、但被出女房奉書事者、可爲陵遲歟、予申云、此段可然、其謂者、一昨夜已可及一段御成敗之由被仰了、被遣奉書於源大納言、申遣之趣者可然歟、仰云、然者早可被出女房奉書、可書其案云々、○中略

一昨日のぎにつきて、いかにもかの物たづねいだすべきよし、民部卿にかたく仰いだされ候へども、さう／＼落所たづねいだし候はぬよし申候ほどに、このうへは、下しゆ人をいだし候て、法のごとくにさたし候へと仰られ候も、それにてはかなゐ候まじきよし申候、とてもとてもかのもの丶事は、御所にてくわんたいをいたしたる事にて候ほどに、なきまでもたづねいだし、出しだいにさたし候べきうへは、ふゐに候やうに仰つけられ候て、めでたく候べく候、このよしつたへ仰られ候べきよし申候べく候、

源大納言どのへ

廿四日、及晩民部卿來、昨日事、依予意見、属無爲、祝着云々、

〔建内記〕永享二年二月廿三日、一乘院雜掌杣田大輔法眼信賀來、○中略信賀相語云、畠山左衞門督入道被管齋藤榎本、於南都轉害宿藤丸、先日被殺害了、是日來逗留藤丸宿之處、伊勢詣旅人可來此宿之由有其約、仍示子細之間、移宿他所畢、爰彼參詣人過期未來、仍依不受命、改宿由、齋藤榎本插鬱憤拔大刀來藤丸宿、亭主折節他行之間、下女馳出尋子細之處、令刃傷彼下女了、仍轉害大路主地人、押寄彼在所、同轉害大路烏帽子屋云々令誅彼榎本了、而畠山及訴訟之間、可搦進彼藤丸亭主、興福寺承仕法師也運渡彼宿、於大路可燒却之由、可被仰惣寺之由、信賀罷下、可申一乘院家之由、以松田對馬守、飯尾肥前守、於室町殿被召仰之間、去十六日、馳下申寺務相觸、同十七日滿寺致發向了、

被打畢、其後は一向無法、然而解死人ヲ切事之法にも不定、又きらざるにも不定候也、

〔新編追加侍所〕傍例一故大將家〇源頼朝御時、梶原之郎等、依令取澀谷次郎乘馬口之咎、賜彼下手人二人澀谷次郎、則斬首畢、

傍例一故修理亮殿〇北條時氏在京之御時、野本四郎右衛門尉之郎等、四方田左衛門尉、依自馬引落之咎、雖給下手人、猶貽欝訴、不請取之間、野本四郎左衛門尉、彼下手人行斬罪、然而四方田左衛門尉、猶依令憤申、野本四郎左衛門尉被召攝津國守護之上、被召預其身於肥田八郎左衛門尉畢、

傍例一當御代、澀谷小平太子息二人、相共罷行萩野之處、稱令乘被盗馬之由、本間左衛門尉後見一人、本間御母之郎等一人而小平太自馬令引落之間、依彼咎賜件下手人於小平太之間、即令斬首畢、

〔太田康有記〕建治三年十月十四日、遠江十郎左衛門尉與杉本六郎左衛門尉郎等、浮澤左衛門尉云々於建長寺前乘合之間、十郎左衛門尉下人殺害浮澤左衛門尉、仍十郎左衛門尉相具下手人、參山內門前之處、被召預于武藏守殿〇平宗政云々、

〔親長卿記〕文明十四年三月廿一日、今日於內裏有手猿樂、內藤七郎云々子剣許、俄有召參內、有喧嘩事、民部卿被官殺害手猿樂衆一人、被引出於門外死去云々、合手逐電、其儀可被如何哉之由有仰、予申云、合手逐電之時、其法爲何樣哉、可有其法事、可被申武家歟云々、可被申武家暫迫之儀也、先民部卿忠富被官人之上者、爲私可尋其法樣、於武邊依其是非、可爲公儀御沙汰歟、其身逐電之上者、對父可令生涯歟、是又子之罪可及父事、當座無覺悟、何樣可有法事也、以私之儀可被尋聞食之由申入、誠所予申有其謂之由有仰、即被召民部卿被仰了、　廿三日、依召參內、〇中略予在庭上仰云、一昨日事、自民部卿許可遣下手人之由、種々雖申遣無承引、一段可有御成敗之由、一昨夜已被仰下之由申之云々、若下手人事、不領狀者、傍輩等令生涯可出事歟、就是等之儀可爲何樣哉云々、勸大納言不申是非、暫思案歟、何樣之由、重有仰之間、予申云、本人逐電之上者、方々雖尋求、未尋出之間、可遣下手人之由申之處、不

付下手人於殺害者

一人　平七額母
所在疵
一所額左寄　長六分 打切目　口三分 喰寄定
右件所在疵、任見在實檢言上如件、
文永二年七月廿九日
道使小典上野爲末
實首源 押花
實首源
實首丹治
實首源 押花
執行代權少監惟宗朝臣 押花
御使
左兵衛尉藤原
右兵衛尉藤原 押花
沙彌 押花

〔異本式目〕一解死人ヲ引事、總而むかしより在之法也、然而上杉防州と甲斐武田と喧嘩之時、防州ヨリ解死人ヲ引處、武田ガ内之者此解死人をきり候處、上杉殿ヨリ武田方ヘ勢遣テ有ベシトテ諸勢を打寄、乍去防州之被仰事には、武田解死人をきる事子細有ベシ、暫勢遣を可相待之由被仰出之處に、彼武田烏帽子上下ニテ防州江走り入申事者、みれんの者共めしつかひ候之間、解死人を我々に不聞切リテ候、然間其主をからめとりおきて候、生涯させ候はんずるや、此事東八ヶ國の御法に定まるべきにて候と被申候處に、防州思案して、無餘儀候、東八ヶ國達上聞可定候とて

撿使

仰處、繪所土佐將監ガ甥也、車ニ乘タル人ノ、我ヲ具シテ、此所ニテ暫相待候ヘト被申間、如此候ト申キ、サテハトテ世間病ヲ大事ニ沙汰々々候テ下〇恐有誤脱サテハ以後ヨリ以外狂氣ニ罷成間、籠ヲ造テ入置處、何時ニテカ候ツ覽、此一兩日間籠ヲ押破罷出候間、方々相尋處、サテハ言語道斷候、無是非次第候由申入間、狂人之上ハ不及力トテ、此男ヲ土佐將監ニ被預遣也、誠以外不思儀、併天魔所行歟、自來廿六日五壇、併此御祈候歟ト、希代々々不思儀候、誠王位零落體也、驚入外無他、予兼テ此事、爲多分此狂人御帳ノ內ニテ、高聲ニ車寄候ヘト申テ、花頂ヨリ花山ヘ罷ベキ由申キト、其聲ヲ內裏樣聞食ツケラレテ、被遣人被見ケルト云々、聊相違如何、

〔深江文書〕實撿

言上肥前國高木東鄕深江村小地頭安富□□三郎入道心空□□□爲□□□□中□左衞門□□□□今月十一日□□□村內大□□□□□□□□等被打擲□□由事

被疵人

一人　大窪太郎吉行

所在疵

一所烏帽子結緖左寄（長九分打目）（口三分喰寄定）

一人四郞太郎近信

所在疵

一所項（長九分打目）（口二分喰寄定）　一所左耳（長八分打目）（口二分喰寄定）　一所烏帽子結緖（長八分打目）（口一分同）

一人瀰太郞貞兆

所在疵

一所左耳上（長五分打目）（口一分喰寄定）　一所同膊（長八分打目）（口四分同）

幼者犯罪

〔吾妻鏡四十三〕建長五年二月廿五日癸酉、先日評定間、有御不審事、被問法家云、小童部二人致諍論、令打合之處、十二三歲之童部、爲一方之方人、刃傷候也、可有罪科否事、（保惠打者、如庖丁刀物也、）大件刃傷人被定咎者、諍論根本之童部、可爲同罪否事、式條之趣可注給候、如此事、關東被定置事候ハヌ也、式目之外者、法意ヲ守（天）、又時儀ニヨリテ御計候也者、今日彼御返事披覽評定砌云云、法意ニ十六以下者收贖云云、彼刃傷童十二三歲云云、可被處科料、不可被收其身歟、根本關諍童、隨所犯之輕重、同可被處贖銅歟、同罪勿論者、

〔今川記（五かな目錄）〕一童部あやまちて友を殺害の事、無意趣の上は不可及成敗、但十五以後の輩は其とがまぬかれ難歟、

〔信玄家法上〕一童部誤而殺害朋友等者、不可及成敗、但於十三以後之輩者、難遁其咎、

狂人犯罪

〔親長卿記〕文明十五年五月一日、後聞、鴨前禰宜祐久縣主、依狂亂（近年物狂也）切走中間男、打害繼母云々、

十四日、忠久來、鴨前禰宜祐久縣主、近日物狂、太以不可然、切走中間男、打害繼母之由風聞、雜說云云、所詮令在國祐久、被下祐長安堵之樣可奏聞云々、彼忠久祐久弟也、諸住爲日野諸大夫、雖然爲眞實之間、令申云々、　廿日、祐長申、祐久縣主事、奏聞、進退驚思也、早令隱居祐久縣主、祐長可被下安堵云々、　廿一日、祐久事、仰祐長了、

〔滿濟准后日記〕應永卅四年正月廿二日、今日宰相中將季保參詣次、立寄雜談次相語云、サテモ去十七日、於內裏狂人不思儀振舞仕事、定聞食及候歟ト云々、予云、其事候、但不分明、何樣次第哉、具可相語由申處ニ、十七日如法晚陰頃、勾當內侍爲朝餉飯參候處、清涼殿之內ニ、人聲シテ或ハ高聲、或ハ密々ニ物ヲモ申聲スル間、不審ヲナシ、勾當開朝餉飯間障子見之處、更ニ人モナキ間、若ヤトテ御几帳之內ヲ被伺見處ニ、日御座ノ上ニ、髻放タル男ガ、駒犬ヲ打タフシ、枕ニシテ臥タリ、仰天無極シテ、此由奏スル間、主上（光○稱）出御アテ、內被御覽處、以外之體也、仍事子細以人被尋

大名行刑

郎從事、爲武州御領可被流津輕之由評了、

〔看聞日記〕應永廿九年三月八日、今夜兼英朝臣〇藤原逢横死云々、不思儀事也、　十日、抑聞兼英朝臣楊梅中將横死事、敵人不知、只夜討ニ差殺云々、子息兼興手負、死生未定也、若兼豐朝臣所行歟、兄弟不快如中違云々、世人推量、彼朝臣所爲云々、　六月卅日、抑聞今日楊梅兼豐朝臣被召捕云々、是兼英朝臣横死事、兼豐所行露顯之間、自公方被召捕、可被流罪云々、

〇按ズルニ、兼豐ハ兼邦ノ子ニシテ兼英ノ兄弟ナリ、系圖ニ其人ヲ載セザルハ、蓋シ流刑セラレシヲ以テ之ヲ除カレシナラン、

〔齋藤親基日記〕寛正七年〇文正元年四月十六日、日吉樹下修理大夫殺害事、於殿中異見有之、既殺害之段證人分明之上者、於張本人者、爲社家尋捜之加討罰、至社司給者、可被改之旨、各御返事申之、

〔大內家壁書〕御勘氣之仁不可有方人事

蒙御勘氣之族事、卽時可被追放御分國中也、然者古敵當敵當堪之評論、配狂已下、雖爲如何體之子細、分殺害彼御勘氣之仁時、其討手并與類等、不可行其咎之由、被仰出之上者、雖爲親子兄弟從類一家緣者、不可有鬱憤之沙汰也、若猶含意趣、爲御勘氣之仁方人、有及訴訟輩者、可爲御勘氣之仁同罪之由、所被仰下也、此旨爲諸人存知、壁書如件、

明應四年乙卯八月日　沙彌奉　正任

左衞門尉同　武明

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一刃傷之事、雖爲如何樣之子細、爲傍輩打擲於仕者、可成敗、但奉行人可爲各別事、

一無故人を害科事、猶糺明之上を以、則可行死罪、品可有輕重事、附類親成敗之儀者、時々以聞合、分明可沙汰事、

其神役、件神領自專事、不可勝計者哉、以之存之、殺害之咎、不可及其子孫者乎、

八月九日　　　　　　　　　　　　　　　　從二位兼倶（吉田）

〔吾妻鏡 三十一〕文曆二年（○嘉禎元年）七月廿三日甲申、被仰六波羅條々事、先京都刃傷殺害人事、爲武士輩於（○於下、新編追加有不字、）相交者、可爲使廳沙汰、（○下略）

〔御成敗式目追加〕一殺害人事

右雖爲使廳沙汰、至于重犯輩者申給之、可行所當罪科之由、御下知先畢、早任彼狀、可被申沙汰也、仍執達如件、

仁治二年六月十日　　　　　　　　　　　　前武藏守判

相模守殿

越後守殿

〔新編追加（侍所）〕一刃傷殺害人禁斷事

右先相觸所在之庄公、糺明犯否、任實令搦出之時、可請取之、無左右使者亂入事、可停止、兼又國司一所之中、撿非違所別當爲宗所職也、而守護人令管領之間、云盜犯放火、云勾引人、如此犯人、不及成敗云々、早停止守護人之妨、任先例、可爲撿非違所之沙汰、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年（○安貞元年）六月十八日乙丑、卯剋武藏二郎時實（武州當腹二男、年十六、）爲家人高橋二郎（高橋京住人也）被殺害給、傍輩兩三人、同被害畢、此間、明日依可爲丈六堂供養、成群御家人等競走、爰伊東左衞門尉祐時郎從、件虜進於高橋、即日於腰越邊被處斬刑、

〔太田康有記〕建治三年十月十四日、遠江十郎左衞門尉與杉本六郎左衞門尉郞等（浮澤左衞門尉云々）於建長寺前乘合之間、十郎左衞門尉下人殺害浮澤左衞門尉、仍十郎左衞門尉相具下手人、參山内門前之處、被召預于武藏守殿云々、　十二月廿五日、評定、（○中略）遠江十郎左衞門尉殺害杉本六郎左衞門尉

故鬪謀罪三罪、法意ニハ聊輕重アリ、式目ニハ差別ナケレドモ、死罪、流罪、所帶沒收ノ三截之ハ、殺害ノ輕重ヲ立タリ、然ラバ法意ノ故鬪謀ノ三ノ心、攝此中歟、〇中略刃傷モ殺害ト同罪トス、死罪、流罪、所帶沒收ノ三罪ニ處スベキ也、父子ノ咎モ、不相交者互不可懸之等也、法意ニハ、刃傷ハ徒罪也、殺害ヨリ輕シトス、而ヲ式目ハ同罪トス、但當時ノ處斷ニ輕重アル歟、

〔新編追加侍所〕一殺害刃傷打擲事〇目錄云、乾元二六十二、

被載式目之上者、不及子細、至凡下之輩者、殺害者被處斬罪、刃傷者、被遣伊豆大島、〇下略

〔新編追加侍所〕一殺害付刃傷人事

右如式目者、依口論犯殺害者、其父其子不可懸咎云々、而如風聞者、寄事於左右、至于親所從等、稱殺害被宜、令處罪科云々、所行之企、甚濫吹也、然者於刃傷殺害人者、可召禁其身許也、至父母妻子所從等者、不可懸咎、如本可令安堵也、

〔新加制式〕一號咎人不究事由而令殺害事

右於咎者、對其主令一決、而可誅戮、只令自專者、敢非正義、但咎人及其庭、致勇血之働、不及力而於令殺害者、聊可有差別乎、〇中略

一號咎人追來之時、自他方令出合殺害事、

右號咎人、以刀兵追來之時、近所之人民等令出向、不日令殺害云々、其公事者、追來人可爲所行、至出向之人者、不可有別子細、

〔侍所沙汰篇追加〕一神職輩自身殺害事永正七八九

制戒勿論也、但爲他有取懸之儀者、爲拂災、臨期及不慮之殺害事者、不可爲自科之由、先段事舊訖、神道者以道理爲正直之謂、將亦仰他人致其沙汰事、古今不及猶豫者也、就中父雖有自身殺害儀、其子補神職例連綿哉、奉公外樣、諸國御家人等、乍居大社神職、致合戰幷自身殺害事眼前哉、然以代官勤

古事類苑

法律部二十三

中編

殺傷

幕府行刑

鎌倉幕府ノ制ハ、殺害、刃傷、共ニ其罪ノ輕重ニ依リテ死又ハ流ニ處シ、所帶ヲ沒收シ、其罪ヲ親屬所從ニ及ボサズ、他人ノ職、又ハ他人ノ財ヲ奪ハントシテ殺害スル時モ、犯人ノ父之ヲ知ラザレバ縁坐ニ處セズ、但父祖ノ仇讐ヲ殺害スル時ハ、父祖ハ知ラズト雖モ、其事ノ己ニ由レルヲ以テ、罪ヲ免ルヽコトヲ得ズ、而シテ京都ニテノ犯罪ハ、武士ノ干預スルヲ除ク外ハ、撿非違使廳ノ沙汰ナリシガ、後ニハ然ラズシテ、重犯ハ六波羅ニテ之ヲ處斷セリ、足利氏ニ至リテハ、幕府專ラ之ヲ處置シ、其犯人ニ由リテハ、朝廷ニテ之ヲ行ヘリ、而シテ下手人ヲ被害者ニ付スルコトハ、鎌倉幕府ノ頃ヨリ行ハレテ、朝廷ニテモ之ヲ用キタリ、又幼者、狂者ニ向ヒテ其刑ヲ寛クスルコトハ、王朝ノ制ニ異ナラズ、

〔御成敗式目〕一殺害刃傷罪科事付父子咎相互被懸否事

右或依當座之諍論、或依遊宴之醉狂、不慮之外若犯殺害者、其身被行死罪、幷被處流刑、雖被沒收所帶、其父其子不相交者、互不可懸之、次刃傷科事、同可准之、次或子或孫、於殺害父祖之敵、父祖縱雖不相知、可被處其罪科、爲散父祖之憤、忽遂宿意之故也、次其子若欲奪人之所職、若爲取人之財寶、雖企殺害、其父不知之由在狀分明者、不可處緣坐、

〔貞永式目抄上〕一殺害刃傷罪科事附父子咎相互被懸否事

古事類苑

法律部二十三

中編

殺傷

鬪毆

闕遺物

一放火事

准強盜宜禁遏、

〔百練抄十一 土御門〕承元四年五月六日、強盜六十三人、放火者少々、被遣關東、於二條河原武士請取之、上皇〇後鳥羽有御覽、

〔新加制式〕一失物隨見出可返本主事

右件失物、爲本主至令取返者、有何妨乎、先可尋究出所、若其人或令死去、或令他出云々、縱雖爲不知身之過、聊盜類難遁之條、相計賣之員數、可出一倍贖銅、若於遠國他境土倉等買得之段分明者、可有差別乎、但雖及盜賊之沙汰、於其人體者、非制之限、

〔今川記五 かな目録〕一駿遠兩國浦々寄船之事、不及違亂、船主に返へし、若船主なくば、其時にあたりて、及大破寺社の修理によすべき也、

一河流の木の事、知行を不論、見合にとるべき也、

〔信玄家法上〕一河流之木幷橋之事、於于木者、如前々可取之、到于橋者、本所江可返置也、

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年六月五日辛巳、人勾引事、有其沙汰、兄弟者不可爲人勾引之儀、以他人可爲人勾引也、其科准盜犯云云、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年十月十四日乙丑、爲休民間愁訴、今日被定條々、偏長滿定奉行之、

一牛馬盜人人勾引事

此犯及三度者、妻子不可遁其科、

〔新編追加侍所〕一牛馬盜人勾引人事建長四十十四、偏長滿定奉行、

右罪科是重、雖可令處重科、就寛宥之儀、可召禁其身計也、○中略次勾引人事、於親子兄弟等者、非勾引之儀、不可懸其咎焉、

〔新編追加侍所〕一勾引人事乾元二

爲賣買專其業之輩、准盜賊可有其沙汰、向後守此法可被施行、○下略

〔新編追加侍所〕一侍所政所勾引人々賣事

件族任本條可處罪科也、而鎌倉中幷諸國市鄽間、多有專此業之輩云々、至諸國者、仰守護地頭等、慥可斷罪、於鎌倉中者、可被捺火印於其面、

〔總見記十九〕攝州伊丹城責事

廿八日九月、○天正七年中略、爰ニ下京馬場町門役仕候者ノ女房、アマタノ女ヲ迷ハセ、日來泉州堺津ニ至テ賣候由相聞エ、今度村井長門守ヨリ召捕、彼女房糺明ヲ遂候處ニ、只今マデ八十人餘賣タル由白狀ニ及ブ、卽今日彼女房誅セラレ候、

〔御成敗式目〕一强竊二盜罪科事付放火人事

右既有斷罪之先例、何及猶豫之新儀哉、次放火人事、准據盜賊、宜令禁遏矣、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年十月十四日乙丑、爲休民間愁訴、今日被定條々、偏長滿定奉行之、○中略

人勾引

阿波前司殿

〔新編追加 侍所〕一國々惡黨令蜂起、企夜討、强盜、山賊、海賊之由有其聞、狼戾之甚、不可不誡、不可見隱聞隱之旨、度々被仰下畢、早可加警固也、於實犯之族者、可令召進其身、且雖爲權門勢家之領、背守護人下知、於拘惜惡黨者、隨注申可被處其科也、以此趣觸廻淡路國中、可令致沙汰之狀、依仰執達如件、

正嘉二年九月廿一日　　武藏守　判

相模守　判

淡路四郎左衞門尉殿

○

〔運歩色葉集 寶〕勾引

〔庭訓往來〕侍所者、謀叛、殺害、〇中略勾引、路次狼藉、鬪諍、喧嘩等也、

〔庭訓往來抄 下〕勾引ハ、人カドイ也、

〔新編追加 侍所〕一可令搦禁勾引人幷賣買人輩事

右嘉祿元年十月廿九日宣下狀偁、略人之罪、和誘之科條、所差裕恰不輕、兩事之禁、相犯之輩、時俗積習、於今未懲改、慥仰京畿諸國所部官司等、令搦進彼輩、知而不糺、與同罪者、〇島津本吾妻鏡係暦仁二年四月十四日

〔吾妻鏡 三十三〕延應二年〇仁治元年十二月十六日乙亥、就地頭所務以下事、被定條々、〇中略

一人倫賣買事

勾引中等者、可被召下關東、被賣之類者、隨見及可被放其身、只可觸路次關々也、

〔新編追加 侍所〕一勾引人事

千代田判官代入道蓮性、與市村小次郞景家相論、以蓮性爲人勾引由事、平内左衞門尉鎌田三郞入道

寬元二年六月五日評定云、景家罪科難遁歟、仍可亘橋一所歟云々、

帶、以此旨可令下知信濃國中給者、依仰執達如件、

寛元四年十二月七日　　左近將監　判

〔新編追加 侍所〕一　奧大道夜討强盜事、近年殊蜂起之由有其聞、是偏地頭沙汰人等、無沙汰之所致也、早所領內宿々、居置宿直人可警固、且有如然之輩者、不嫌自領他領、不可見聞隱之由、召取住人等之起請文、可被致其沙汰、若猶背御下知之旨、令緩怠者、殊可有御沙汰之狀、依仰執達如件、

建長八年六月二日　　相模守　判

陸奧守　判

下野前司殿

小山出羽前司　阿波前司　周防五郎兵衛尉　氏家余三跡

壹岐六郎左衛門尉　同七郎左衛門尉　出羽四郎左衛門尉　陸奧留守兵衛尉

宮城右衛門尉　和賀三郎兵衛尉　同五郎左衛門尉　葦野地頭

福原小太郎　澀江太郎兵衛尉　伊呂宇又次郎　武藏平間鄉地頭

清久左衛門次郎　鳩井兵衛尉跡　那須肥前前司　宇都宮五郎左衛門尉

岩平左衛門太郎　岩平次郎　矢古宇左衛門次郎

已上廿四人被下之 同御教書

〔新編追加 侍所〕一　近日出羽陸奧國、夜討、强盜、蜂起之間、往還之輩、有其煩之由風聞、尤不便、是偏郡鄉地頭等、背先御下知、無沙汰之所致也、甚無其謂、早柴田郡內知行宿々、造宿直屋、令結番、殊可令警固也、且籠置惡黨之所々、不可見聞隱之旨、可被召沙汰人等起請文者、依仰執達如件、

正嘉二年八月廿日　　武藏守　判

相模守　判

計贓

盗犯者宥止

大職少輔

〔今川記五かな目録追加〕一少身の者、盗人にあひ取るゝ所の財寶、縱の事たりと云共、其身においては、進退さしかさる由を存、彼盗人尋出す所に、目代之手へわたるか、或は不入之地たる間、雜物出間敷由、先規より申と云共、無力の者においては、不便の儀たる間、贓物一色、惡黨に付置、其外はぬしに可還附也、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜三年五月十三日、今日有被定下條々○中略竊盗事、假令於錢百文已下之小犯者、以一倍令致辨償、可令安堵其身、○下略

〔侍所沙汰篇追加〕一盗賊贓物事○四月廿日評定嘉禎三年

右依贓物之多少、被定罪科之輕重訖、縱令錢三百文、若二百文以下之輕罪者、以一倍令辨償、可令安堵其身、三百文已上之重科者、假雖行一身咎、更莫及三族之罪者、於親類妻子并所從等者、如元可令居住也、次同宿所家主懸罪科否事、不知其意者、不及家主之科之由、度々經其沙汰之、

〔新編追加侍所〕一竊盗事○目録云乾元二

右錢三百文以下者、任御式目、以一倍致其辨、可令安堵、三百文以上、五百文以下者、可為科料錢貳貫文也、但於贓物者、可被返與被盗主、至六百文已上重科者、可為一身之咎、不可及親類妻子所從等之咎、背此儀致過分之沙汰者、頗非撫民之法、須改所職、但雖為少犯、及兩度者、可准一身之咎矣、○又見侍所沙汰篇

〔新編追加侍所〕一竊盗并博弈人等事

於今日以前者、不謂年紀遠近、可被赦免、且依贓物、且隨事體可被用捨、

〔新編追加侍所〕一近日國々、夜討强盗蜂起之由普風聞、是偏所々地頭等、籠置惡黨四一半打等、無沙汰之所致也、然者或籠置惡黨等於所領中、或於令打四一半之所者、早可被注進交名也、可被改易所

追落

〔尺素往來〕夜討、強盜、放火、刃傷、打擲、蹂躪、捕女、山賊、海賊、勾引、辻斬、追落等、此間聊蜂起事、於京都者侍所、於國郡者守護、可被致嚴密撿斷歟、

〔政所賦銘引付〕一伊勢清泉州七郎左衞門尉貞熙、文明六閏五廿三知行分備後國志摩利庄代官、備中國在原地下人守護被官平井安藝守、號有過上、去々年極月於路次押取荷物之間、度々被成召文畢、不日被召上彼者、可預御下知候云々、

贓物

〔下學集 態藝下〕贓物ザウモツ盜物也

〔新編追加 侍所〕一竊盜事○目錄云乾元二

右錢三百文以下者、任御式目、以一倍致其辨、可令安堵、○中略但於贓物者、可被返與被盜主、

〔大内家壁書〕盜物御定法之事

又盜物之事、雜賀飛騨入道妙全、當所在國之時、御尋被申分聞書、

一ぬす人の取物之事、とゞまる所よりいだすべし、

一罪科之事は、本々へたゞして、うり主をひきつけざる仁も、ぬす人の準據に罪科有べし、

一失物質物に置時、其盜人、くらへ持來ておく事は不能左右、若人をやとひておかば、其人體を倉へめし具して、申時質物をいだす請錢不可入也、

寛正二年七月八日

〔大内家壁書〕盜物御定法之事

右彼盜物之事、或持出市町、或於置店屋之時、號盜物押取、有及喧嘩事、剩賣主者、不知盜物間、買置而又賣之由申事、每度也、然者兩方於其場、理不盡之口論也、所詮彼盜物之事、預置其所之役人、可批判、若有背此旨族者、可被處嚴科也、仍執達如件、

長享三年五月日　左衞門尉

〔新編追加侍所〕一重犯(山賊海賊夜討強盜)輩事(○目錄云、建長五十一)
右彼輩者重科也、不可不禁、須處罪科、但重犯者、贓物令露顯、證據分明之族事也、以嫌疑无左右搦捕其身、及拷訊責取壓狀稱白狀令斷罪之條、甚不可然、若背此儀、致理不盡之沙汰者、云地頭代云沙汰人可令改易所職也、

〔建武以來追加〕一山賊海賊事
尋究出入之在所、若領主有同心之儀者、令改替地頭職、可被入守護使歟、

〔吾妻鏡二十二〕建保四年六月十四日丙申、去比佐々木左衛門尉廣綱使者相具、所參上之東寺凶賊已下、強盜海賊之類五十餘人事、今日有沙汰、可遣奧州之由被仰下云云、是爲放夷嶋、去四月廿八日、給廣綱云云、於一條河原自廷尉之手請取之云云、此東寺賊徒者、同月十八日、秀能相具之、自三條坊門東洞院家、向大理之正親町西洞院門前、(路次、自東洞院北行、至一條西折、至西洞院南行、)次禁獄舍、見物者如堵、上皇被立御車於大炊御門東洞院覽之云云、

〔百練抄十三後堀河〕安貞元年七月廿一日、於關白直廬有議定事、左大臣已下參入、去年對馬國惡徒等向高麗國全羅州、奪取人物、侵陵住民事、可報由緖之由牒送、太宰少貳資賴、不經上奏、於高麗國使前、捕惡徒九十人斬首、偸送返牒云々、我朝之耻也、牒狀無禮云々、

〔豐臣秀吉譜中〕天正十五年五月阿蘇山中者、地形險窄也、故群盜多保此山、而傷害人民、秀吉欲攻之、阿蘇群盜聞之、來謝曰、自今之後、不可爲濫惡、秀吉宥之、西州平、

〔長曾我部元親百箇條〕掟
一山賊海賊之事、如先例其所近き所へ相懸、本人糺可出、若於不糺付者、可懸在所科事、

〔建武式目〕一可被鎭狼藉事
晝打入、夜強盜、所々之屠殺、辻々之引剝、叫喚更無斷絕、尤可有警固之御沙汰乎、

〔光明寺舊記五〕志摩國悳止圓應寺領掌圓實申、伊勢國吹上光明寺僧惠觀、致海賊由事、相副守護代義重狀、令申給之旨披露之處、於守護方被番二問答訴陳、經其沙汰歟、此上口於本所始可致執沙汰哉由、口祭主三位殿仰所候也、恐々謹言、

康永四年七月十三日　　常陸介判

謹上　道後政所殿

〔新編追加雜務〕一鈴鹿山幷大江山惡賊事、爲近邊地頭之沙汰可令相鎭也、若難停止者、改補其仁可有靜謐計也、以此趣相觸便宜地頭等可被申散狀者、依仰執達如件、

延應元年七月廿六日

前武藏守泰時判

修理權大夫時房判

相模守殿

越後守殿〇又見侍所沙汰篇

〔御成敗式目追加〕一就犯人在所可斟酌事、於本所一圓之地者、可召渡犯人之由、可相觸彼所、若不叙用者、可注申事由云々、弘長新制云、可仰諸國守護地頭等、令禁斷海陸盜賊山賊海賊夜討强盜類事、諸國守護地頭等可致其沙汰之子細、被載式目訖、而無沙汰之由依有其聞、如此惡黨等不可見隱聞隱之旨、雖被召起請文於御家人等、猶以不斷絕云々、早仰國々守護所々地頭、殊可被加懲肅、此上猶惡黨蜂起之由、於有其聞所々者、云守護云地頭、可被改補其職矣、

〔新編追加侍所〕一夜討强盜山賊海賊等事乾元二六

彼輩可被斷罪之旨被定置歟、而大略被處流刑之間、或於配所致惡行、或歸本國犯重科、依之預人等重者被分召所領、輕者被行過怠、匪啻惡黨等倍增、剩御家人侘際歟、至無所遁之輩者、可處斬罪之旨可被仰下歟、但於御家人者、經評議可有斟酌歟、

はれ候はゞ、別の奉公には、餘黨其數おほく候を、一々にからめさせ參らせんといへば、康仲興有事に思ひて、受取てつかひけり、給物三十石をとらせて、朝夕めしつかふに、事におきてかひがひ敷、大切の事共多かりければ、大納言家に、此樣を內々申入たりけるに、いと興有事にこそ、左樣のものは、中々さるかたもあるなり、我にえさせよ、召つかはんと仰られければ參らせてけり、侍ゆるされてめし仕けり、康仲が恩の上に、五十石の給物をたまはせたりければ、小殿悅て、今はかくて一期身やすくてやみなんずれば、思ふ事候はず、祗候の間には、いかにも御所中、幷御近邊には狼藉の事あらすまじく候とて、一向に御とのゐして奉公をいたしければ、誠にかひがひ敷、其あたりには夜るの恐なかりけり、

共盜

〔親長卿記〕文明十六年十一月四日、下京邊、土一揆出現物忩、五日、土一揆蜂起、被仰細川九郎可罷事云々、已指遣軍勢畢、六日、土一揆東寺取陣、九郎勢、六角堂因幡堂等取陣、已及合戰、及晚土一揆大將金崎被打取、其外餘黨七八輩被打取畢、各殘黨退散、天氣大慶也、

〔宣胤卿記〕文龜二年四月六日戊申、早旦告來云、去夜神樂岡茅屋、盜人數十人亂入、衣服雜物等取之、宰相、盜人一人打留也、死而有山中云々、言語道斷次第也、

山賊海賊

〔下學集上人倫〕山賊(サンダウ)日本ノ世話ニ山盜人(ヤマヌスビト)云也　海賊(カイゾク)

〔運歩色葉集佐〕山賊異名白波　〔同賀〕海賊(ゾク)

〔尺素往來〕夜討、强盜、放火、刃傷、打擲、蹂躪、捕女、山賊、海賊、勾引、辻斬、追落等、〇下略

〔建武以來追加〕諸國狼藉條々貞和二十二十三沙汰

一山賊海賊事

札明出入之在所、有領主同意之儀者、於其所者、永可令改補地頭職、至本所寺社領者、靜謐之程、可被補地頭哉否、可經奏聞焉、

此趣雜人奉行等可令存知歟、〇又見吾妻鏡

〔新編追加侍所〕一竊盜事

或配流、或禁獄、爲御家人之煩條同前、仍於初度者可捺火印於其身面、及三箇度者可被誅歟、但至侍者、雖爲一箇度可被處遠流歟、

〔古今著聞集十二偸盜〕大殿小殿とて、きこえある強盜の棟梁ありけり、大殿は、後鳥羽院の御時からめられけり、小殿は、高倉判官章久が本へ行ていひけるは、日來年來、からめかねてあなぐりもとめられ候、小殿と申強盜こそ、思ふやう有て、參て候へ、はやくうけとらせ給へといふ、章久まことしからず覺ながら、おろ〱子細をとへば、小殿いはく、御不審候事、尤其いはれ候へども、先思召候へ、たゞのまら人が、強盜とみづから名乘て、命をまかせ參らせて何のせんか候べきといへば、實にも理にて委く問答するに、小殿が云やう、年ごろ西國の方にて海賊をし、東國にては山だちをし、京都にては強盜をし、邊土にてはひきはぎをして過候つる也、かゝる重罪の身を受候ぬれば、此世にても安き心候はず、夜も安くねず、晝も心打くつろぐ事なし、世のおそろしく、人のつゝましき事、かなしき苦患にて候也、拐も一期事なくて有べき身にても候はず、つゐには定てからめ出されてはぢをさらし、かなしき目をこそ見候はんずれ、年來の罪をも報はんが爲に、頭をのべて參候といへば、章久あはれに覺て、左右なくも受取べけれ共、其儀なくして答けるは、今は使廳の廳務停止したる也、かつは聞も及らん、年來作置る樓獄〇牢も、皆打破て佛殿に作なをして、一向廳務をとゞめて、後世の事をいとなむ也、德大寺殿に祗候の源判官康仲こそ、當時ことに高名を立んとする人なれ、かしこに行て、此子細をいはゞ、定て悅思はんずらんといへば、左候はゞ御文を給はり候へ、源判官殿へ參候はんといへば、これはやすき事也とて、文書とらせければ、則持て康仲がもとへ行て、章久がもとにていひつるがごとくにいひて、若萬が一、命をいけて召もつか

盜賊

新熊野午枕菴、而悉奪其儲、　廿五日、盜燒京城、四邊鳴鐘鼓吹筒角、大騷動、細川之兵、守城北門、山名一色土岐之兵、備南路之盜、京極赤松之兵、禦東道、而大退盜、盜寇掠邊境、不獲城也、　廿六日、官軍與盜攻戰、蒙瘢者多矣、盜漸沮云、　廿七日、盜欲破本寺、行力之徒急防之、盜乃退矣、　廿九日、官軍愈熾、群盜稍弱、其潜亡不過一二日云、　三十日、有號荷田者、群盜魁者也、聚凶徒保守於東寺、以官兵稍强、盜咸逃散、荷田乘淀河舟、而竄於紀南云、　十一月十〇十字恐衍　一日、群盜逃散、諸路已通、天下喜之、　三日、本寺之東班、以官命捕門前之行力、與盜同惡者、斬其首、而出之於官、又逃惡者、火其家者六七也、伏見里竹田村、其令咸出賊首也、　四日、官捕盜人之魁首號荷田者斬之、以其首梟六條河原也、

〔長興宿禰記〕文明十三年四月廿六日庚午、是日賀茂氏人高彥大夫被渡大路、於六條河原被切首、弟男不渡大路同被切首、去年十一月晦日、忍入將軍御所、〇足利義尙御重寶二銘以下御劒等盜取露顯、自去年被置所司代浦上籠舍、今日被誅者也、

〔今川記かな目錄五〕被官人喧嘩幷盜賊の咎、主人かゝらざる事は勿論也、雖然未分明ならず、子細を可尋など號し、拘おくうち、彼者逃うせば、主人の所領一所を可沒收、無所帶は可處罪過、

〔信玄家法上〕一被官人、喧嘩幷盜賊等之科、不可懸主人之事者勿論也、雖然欲糺實否之處、件主無科之由荐陳申、相拘之半令逐電者、主人之所帶三ヶ壹可沒收、無所帶者、可處流罪者也、

〔新田由良家傳記〕盜人は其品を以穿鑿をとげ可申付、子細により主人に御かゝり可有之事、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一盜賊之事、卽時搦捕、奉行方迄申屆、於歷然者、可斬頸事勿論也、若搦捕事、於難成者、則可相果、右此旨猥申付候者、在所庄屋可爲曲事事、

〔新編追加侍所〕一盜人罪科輕重事寶治二七十、事書內、明石左近將監奉行

先日被定置畢、而守彼狀稱爲小過、致一倍之辨後、猶以企小過之盜犯者、准重科可被行一身之咎、以

於在々所々書强盜ヲ致ス間、所誅也トゾ被書タリケル、〇下略

〔建內記〕嘉吉元年九月六日庚子、今夜時聲響河東、終夜物忩、言語道斷事也、土一揆楯籠洛中洛外堂舍佛閣、不被行德政者、可燒拂之由訴訟之、今所稱之德政者、其名尤珍重、其實者只無理可破借書、無謂可返質物、蓋此儀也、甚以背德政之稱者也、於利々倍々者可被破之條可爲德政、未及有限之利、悉本利可破之條、不仁之至哉、

〔管見記〕嘉吉三年二月九日、抑塔森船渡代官山本彌次郎、依爲德政張本人、號德政、取返永代沽却地云々、爲管領成敗、澤井新藏人搦捕之、昨日誅之云々、仍彼在所代官職事、片岡次郞三郞望申之間、今日與補任了、爲狗逸德政張本輩、皆以逐電云々、

〇案ズルニ、當時土一揆、或ハ德政ト稱スル者ハ、多クハ强竊盜ノ徒ナリ、故ニ此ニ收ム、

〔新撰長祿寬正記〕寬正三年九月十一日、都ニモ土一揆ヲコリ、所々寺社領、其外富タル人民ノ家ヘ亂入、放火シテ財寶ヲウバヒトル、大將ハ蓮田兵衞ト云、牢人ノ地下人也、〇中略 廿二日、七條禪佛寺ヘ土一揆蜂起シ、亂防スト注進シケレバ、畠山中務大輔ニ被仰付、猶大名ヘ觸ツカハシ、是ヲ退治セラルヽ、御請申人々ハ、京極衆、武田衆、赤松次郞法師ガ勢等也、則赤松出勢シテ、相國寺ヘンニテ、一揆ノ大將蓮田ト赤松衆ト合戰ヲハジメケル、蓮田大勢ナレバ、赤松勢進兼テミヘケル、同二十八日、赤松浦上ヲハジメ大勢引率シ、土一揆ト合戰ス、一揆打負テ、中加茂ノ林間ニ引退キケル、赤松方ヨリ追カケ、殘少ニ打トリケル、〇中略 同年十月朔日、土一揆ノ大將蓮田、終ニ遁ルヽ所ナクシテ、淀ニテ誅ラレケリ、殘黨ドモ丹波國須智村ニテ皆被誅、〇又見蔭涼軒日錄

〔碧山日錄〕寬正三年十月廿一日、德政之盜復起、自城外鼓譟而攻洛、官兵禦之、 廿二日、邊民鳴鐘伐鼓、而在木幡德政之盜、自宇治縣出者、攻木幡御堂修行某房、遂破之、以火之爲焦土也、爲德政之聚道路不通、商估咸止、天下爲之憂、 廿四日、余自間道歸靈隱、盜大聚攻洛、洛兵固禦之、盜死者無數、盜破

押紙云、武家不相交者、難事行歟、隨被仰下可有沙汰也、

〔侍所沙汰篇追加〕守護人幷御使可存知條々

一夜討、强盜、山賊、海賊、殺害罪科事、

於御家人者、召進其身於六波羅、可令注進所領、至非御家人凡下輩者、隨所犯輕重、可有罪科淺深也、

兩人相議、可令計沙汰之、〇又見御成敗式目追加

〔吾妻鏡八〕文治四年八月十七日庚辰、右兵衞督能保消息到來、路邊群盜蜂起事、至疑貽分者、相觸所々畢、就中叡山飯室谷竹林房住侶來光房永實同宿號千光房七郞僧、招卒惡徒浪人等、令夜討已下惡行之由風聞之間、經奏聞畢、仍仰法印圓良被召之處、去四日召進彼僧之由、所捧請文也云云、

〔都玉記〕建久二年十一月廿二日丁卯、今日京中强盜等、所被遣前大將許也、於六條河原官人渡武士云々、見在十人也、於死罪者停止畢、年來官人下部等有容隱之時、雖强盜頗加寬宥赦令特原免、如本又犯之、仍遣關東可遣夷島云々、永不可歸京、是又非死罪、將軍奏請云々、人以甘心、

〔仲資王記〕建久五年五月十二日壬申、今日東西獄强盜人卅餘人、被下遣關東也、於四條河原將軍家使請取云々、但撿非違使等着河西堂、以看督長放免等渡之云々、

〔百練抄十一土御門〕承元四年五月六日、强盜六十三人、放火者少々、被遣關東、於二條河原武士請取之、上皇〇後鳥羽有御覽、

〔太平記十二〕兵部卿親王流刑事附驪姬事

抑高氏卿〇足利今迄ハ隨分有忠仁ニテ、有過分ノ僻不聞依何事兵部卿親王〇護良ハ、是程ニ御憤ハ深カリケルゾト根元ヲタヅヌレバ、去年ノ五月〇元弘三年ニ、官軍六波羅ヲ攻落シタリシ刻、殿法印〇良忠ノ手ノ者ドモ、京中ノ土藏共ヲ打破テ、財寶共ヲ運ビ取ケル間、爲鎭狼藉足利殿ノ方ヨリ是ヲ召捕テ、二十餘人、六條河原ニ切テゾ被懸ケル、其高札ニ、大塔宮ノ候人、殿法印良忠ガ手ノ者共、

大にあさみて、則官人に仰て白晝に禁獄せられける、

〔御成敗式目〕一諸國守護人奉行事

右右大將家〈○源頼朝〉御時所被定置者、大番催促、謀叛、殺害人、〈付夜討、強盗、山賊、海賊、〉等事也、

〔新編追加〈侍所〉〕一強盗殺害人事、於張本者、被行斷罪、至餘黨者、付鎭西御家人在京之輩幷守護人、可下遣鎭西也、兼又盗犯人中、假令錢百文、若者二百文之程、罪科事、如此之小過者、以一倍可致其辨也、於重科之輩者、雖召取其身、至于不同意緣者親類者、不可及致煩費者、依仰執達如件、

寛喜三年四月廿一日　武藏守判

相模守判

駿河守殿

掃部助殿〈○又見吾妻鏡〉

〔新編追加〈侍所〉〕一犯人斷罪事

右爲夜討强盗之張本、所犯無遁方者、可行斬罪也、是則爲相鎭傍輩向後也、其外至枝葉之輩者、可召進關東、可被流遣夷島也、以前條々存此旨、可令致沙汰之狀、依仰執達如件、

文暦二年七月廿三日　武藏守判

相模守判

駿河守殿

掃部助殿

〔新編追加〈侍所〉〕一京都强盗殺害人事

右此條可爲使廳沙汰之由、去年被仰下候畢、而猶武士相供可致沙汰之由、自殿下被仰下候、何樣可候哉、

おほせん事かたく覺えければ、かくまじはりて、物わけん所に行て、強盜の顏をも見、又ちり〴〵にならん時に、家をも見入んと思ひて、かくはかまへけり、扨ともなひて朱雀門の邊に渡ぬ、そをの物わけて、此男にもあたへてけり、強盜の中に、いとなまやかにて、こゑけはひよりはじめて、よに尋常成男の、とし廿四五にもやあるらんと覺ゆる有、どう腹卷に左右ごてさして、長刀を持たりけり、ひをぐゝりの直垂はかまに、くゝりたかくあげたり、諸の強盜の主とおぼしくて、ことをきてければ、みな其下知にしたがひて、主のごとくになん侍りける、扨ちり〴〵に成ける時、このむねとの者のゆかん方を見んと思て、尻にさしさがりて見がくれ〴〵行に、朱雀を南へ四條迄行けり、四條を東へくしげ迄はまさしく目にかけたりけるを、四條大宮の大理の亭の西の門の程にて、いづちかうせにけん、かきけすがごとく見へず成にけり、さきにもそばにもすべて見へず、此築地を越て內へ入にけりと思ひてそこより歸りぬ、朝にとく行て跡を見れば、件の盜人、手を負て侍けるにや、道に血こぼれけり、門のもとにてとゞまりければ、うたがひもなく此內の人也けりと思ひて、立歸りて此やうを主に語りければ、大理の邊に參り通ふ者なりければ、則參てひそかに此樣を語り申ければ、大理聞おどろかれて、家の中をせんぎせられけれ共、更にあやしき事なかりけり、件の血、北の對の車宿迄こぼれたりければ、つぼね女房の中に盜人をこめ置たるしわざにこそとて、みな局共をさがされんずる儀に成て女房共をよばれけり、其中に大納言殿とかやとて、上臈女房の有けるが、此程風のおこりて、えなん參らぬよしをいひけり、重てただいかにもして、人に成共かゝりて參り給へとせめられければ、のがるゝ方なくてなまじゐに參りぬ、其跡をさがしければ、血付たる小袖有、あやしくていよ〳〵あなぐりて、坂板を上て見るに、さま〴〵の物共をかくし置たりけり、彼男が云つるにたがはず、ひをぐゝりの直垂袴なども有けり、面形一有けるは、其ふるき面をして顏をかくして、夜な〳〵強盜をしけるなりけり、大理

古事類苑

法律部二十二

中編

盜犯 人勾引 闌遺物 併入 放火

強盜
竊盜

強竊盜ノ罪モ亦王朝ノ制ニアリ、鎌倉幕府ノ法、強盜ノ主ハ斬ニ處シ、從ハ流ニ處ス、竊盜ハ、其贓物三百文以下ハ、一倍ヲ以テ辨償セシメ、三百文以上ハ、之ヲ緝捕スレドモ、其累妻子ニ及ボサズ、足利氏ノ時ニ至リ、三百文以上、五百文以下ハ、科料二貫文ヲ出サシメ、贓物ヲ被害者ニ返付シ、六百文以上ニ至リテハ、其刑ヲ科ス、但シ贓物ノ多寡ヲ論ゼズ、再犯者ハ總テ其罪ヲ重クス、

山賊海賊ハ、其住所ヲ以テ名トシ、引剝、追落ハ其所爲ヲ以テ名トス、皆強盜ナリ、

人勾引ハ、卽チ略人ナリ、是モ王朝ノ制ニアリ、鎌倉幕府ノ法ハ、此罪ヲ犯シタル者ハ、盜犯ニ准ジテ處刑シ、再ビ此罪ヲ犯シタル者ハ、其罪妻子ニ及ブ、

放火ハ、必ズシモ盜犯ナラザレドモ、鎌倉幕府ノ法、強盜ニ准ジテ處刑ス、

〔下學集上人倫〕強盜

〔庭訓往來〕山海兩賊、強竊二盜、徒黨令横行于所々、奪取諸人之財產、

〔庭訓往來抄下〕強盜トハアラキ盜人ナリ、竊盜トハホソル盜人ナリ、名ヅケテシノビト云也、

〔古今著聞集十二偸盜〕隆房大納言、檢非違使別當のとき、白川に強盜入にけり、其家にすぐやか成者有て、強盜とたゝかひけるが、なにとなくて強盜の中にまぎれまじはり來ける、うちあはんには、ま

古事類苑

法律部二十二

中編

盜犯人勾引 闌遺物 併入 放火

申云、二三尺許、等如圓坐、東西南北動搖云云、忠尙以下六人、全不動之旨申之、資俊頗有雌伏之氣、仍可被召忠狀之旨、各雖訴申之、於關東無例之上、申狀之趣、不能其沙汰之由、武州令申給云云、

去一日節會不着外辨怠狀

右左大臣宣、奉勅去一日節會無故不着外辨、宜令辨申子細者、依無所遁申進怠狀謹解、

承久二年正月五日　　　　右少辨正五位下藤原朝臣

八日己亥、申刻許、頭權亮信能朝臣來、於公卿座謁□□官怠狀等仰可返給之由、又云、來十一日可被行除目可候執筆者、申承由卽退出了、予書消息副怠狀遣大外記師季許畢、（須召寄下之也、而今日諸寺修正來行辨可出仕、遂之間可懈怠歟、仍遣之也、）

其書樣

宣旨

左中辨藤原朝臣家宣右中辨藤原朝臣資賴、右少辨藤原朝臣成長、去一日節會無外辨怠狀事

仰誡將來可返給

右可被下知之狀、依左大臣殿仰、執達如件、

正月八日　　　　前甲斐守兼敎奉

大外記殿

〔百練抄十三後堀河〕寛喜元年八月廿五日、御方違行幸也、還御之間於錦小路大宮邊御輿鳳落地、後日有沙汰、裝束司進怠狀云々、

〔宣胤卿記〕永正四年八月十三日、今日上邊猶物忩、六郎（○細川澄元）今日已可下西國之由申之、大樹（○足利義澄）御出御留云々、是被官三好（○之長）之任雅意、京中狼藉之間所詮可下本國之由申之、三好令怠狀、被官梶原令生涯云々、

〔吾妻鏡三十〕文曆二年（○嘉禎元年）十月二日辛卯、相州（○北條時房）武州（○北條泰時）參御所、令候小侍所給、去月廿三日五更、乾星動事、司天之所申、不一准之間、日來有其沙汰、今日召聚忠尙親職以下、被尋問之、實俊

怠狀之中、資經朝臣未進、仍遣使者畢云々、須之到來、以基邦覽之、入宮引禮紙、卷籠一禮紙中、不結之、申云、先例先可辨申子細之由仰候、其後陣申所存旨御覽畢返給之時、被仰可進怠狀之由也、而事急速也、直可進怠狀之由、頭權亮內々被觸之、仍如此云々、此間頭權亮信能朝臣送書狀云、怠狀之中、資經朝臣不可召者、仍則返給彼狀於外記畢、書消息相副怠狀等、三通卷一禮紙一結、中入消息禮紙中、便遣頭權亮許、須召寄付之、然而途遠之上、今日敍位奉行職事也、仍隨宜以書狀奏之也、其狀云、

獻上

去一日節會辨官等、無故不着外辨座事、

右可被奏聞之狀如件

正月六日　左大臣云

頭權亮殿

怠狀三通

修理右宮城使正四位下行左中辨藤原朝臣家宣解申進、去一日節會無故不着外殿怠狀、

右大外記中原朝臣師季傳宣、左大臣宣、奉勅去一日節會無故不着外辨、宜令進怠狀者、依無所通申、進怠狀謹解

承久二年正月五日　修理右宮城使正四位下行左中辨藤原朝臣家宣

從四位下行右辨兼春宮亮藤原朝臣資賴解申進怠狀事

去一日節會不着外辨怠狀

右左大臣宣、奉勅去一日節會不着外辨、宜進怠狀者、依無所通申、進怠狀謹解、

承久二年正月五日　從四位下行右中辨兼春宮亮藤原朝臣資賴

右少辨正五位下藤原朝臣成長解申進怠狀事

口宣一枚

權右中辨光繼朝臣愁狀事

右職事仰詞如此、早可被下知之狀如件、

文保二
十月四日　春宮大夫判奉

大外記局

獻上（付愁狀於職事）

權右中辨藤原光繼朝臣、去二日不從事、早出愁狀、

右進上如件

文保二
十月五日　春宮大夫判

頭修理大夫殿

（返給愁狀於外記狀、職事仰詞略之也、）

宣旨

權右中辨光繼朝臣進愁狀事、仰宜懲將來返給、

右宣旨、可被下知之狀如件、

文保二年十月六日　春宮大夫判

大外記局

（延慶二四廿七、大外記師宗、吉田祭奉行觸愁之時、愁狀宣旨被下、第二外記淸大外記貢枝了、）

〔玉海〕文治三年四月廿九日庚子、午剋親經來申條々事、○中略進軒廊御卜不參陰陽師等愁狀、（上卿通覽痛所取也）進其狀載不過之由、凡愁狀之習依過愁難遁申其愁之儀也、已顯無過失之狀、全非過狀之本意、已是陳狀也、仍仰書改可奏之由返給了、

〔玉蘂〕承久二年正月四日乙未、口口云、元日外辨無辨官一人、仍中少辨皆悉可令進愁狀、　六日丁酉

一依無道理不蒙御裁許之輩、爲奉行人偏頗之由訴申事

右依無其理不關裁許之輩、爲奉行人偏頗之由構申之條、太以濫吹也、自今以後、構出不實、企濫訴者、可被收公所領三分一、無所帶者可被追却、若又奉行人有其誤者、永不可被召仕矣、

幕府停搢紳出仕

〔薩戒記〕永享六年六月十三日、抑左相府殿(足利義教)政務之後、遭事之輩已及數多、(中略)

權中納言實種卿(被沒收所領、被止出仕、○中略)

左中將持和朝臣(被止出仕)

散位行康(被止出仕)

權中納言義資卿(被沒收所領、不出仕、遂爲夜討被得首、○中略)

右少將持季朝臣(不能出仕、○中略)

停經廻

〔薩戒記〕永享六年六月十三日、抑左相府殿(足利義教)政務之後、遭事之輩已及數多、(中略)

入道前關白(藤原忠嗣)(被止經廻)

前關白(藤原滿輔)(被止經廻)

故入道前右大將通宣卿(不被許經廻)

權大納言俊輔卿(被止經廻、但中免今出仕、○中略)

權中納言雅世卿(被沒收所領一ヶ所、被止經廻、然而中免出仕如元、○中略)

前參議經良卿(被止經廻、被止伏見奉行、○中略)

故入道前右大臣(藤原冬家)(被止經廻、削三分一所領、賜實種卿、遂以薨、)

入道前內大臣(藤原滿季)(被止經廻、仍所領一兩宛行、○中略)

入道大納言家俊卿(被止經廻、蟄居)

權中納言經成卿(被沒收所領、被止經廻、○中略)

少納言繼長(恐懼被止經廻、○下略)

〔庭訓往來〕先被進擧狀代者、公所之出仕諸亭經廻、可申圖師也、

〔後深心院關白記〕應安六年正月廿一日甲子、傳聞南都事書、又到來云々、旨趣者(中略)清水寺敷地替、早速以有沙汰事、可被停止京都之經廻、就中無南都之許可者、不可有勅免之由、可被下院宣於南都、

附　怠狀

怠狀

怠狀トハ謝罪輸誠ノ書ニシテ、譴責スベキ者ヲシテ、上ラシムルナリ、

〔傳宣草上〕怠狀事

永停出仕

路ノ家ヲ義敏ニ渡スベシトノ上使、頻ニ波ナリケリ、

〔親長卿記〕文明十七年十二月廿六日、傳聞布施下野守〈英基〉去五月廿三日亂逆之後、止出仕之處、今日已出仕、入東山殿〈○足利義政〉見參、次參室町殿〈○足利義尚〉之番奉公之輩、於御所中令沙汰、〈布施下野守、布施善十郎、飯尾新右衛門、同又三郎、〉四人止命、希代之亂逆也、飯尾新右衛門、同又三郎等、此間布施別而申通之由、今更難見放云々、仍同事死了、御所中不穢云々、不審事也、

〔江濃記〕佐々木兩家わかりの事

根本は兄弟にて、兩流ともに關東の賢佐、武備の大名なり、奉公他に異なり、されば元弘の亂にも、總領の六角方は、六波羅の催促にしたがひ、山門の合戰に手をくだき、其外戰功粉骨を盡し、馬場が峠の戰場より、京都の降人に參られしかば、其身は出仕を止められ、子息氏頼、幼稚より名代として京都へ指上られける、

〔大內家壁書〕蒙御勘氣之仁御定法之事

被放御家人之輩〈雖爲暫時、可止出仕歟、被仰出之族以同前、〉事、被殺害刃傷、或遇恥辱横難、縱又雖有如何體之子細、既蒙御勘氣之上者、可爲公界往來之準據之間、其敵不可有御罪科之由、被定御法畢、光孝寺殿〈畠山德本〉管領職之御時、御成敗如斯、御分國中之仁、可守此旨之由、所被仰出、壁書如件、

延德三年十一月十三日

〔吾妻鏡四十〕建長二年十二月廿七日戊午、近習結番事治定、自今已後、至不事輩者、削名字、永可止出仕之由、嚴密被觸廻之云云、

〔御成敗式目〕一構虛言致讒訴事

右和面巧言、掠君損人之屬、文籍所載、其罪甚重、爲世爲人、不可不誡、爲望所領止讒訴者、以讒者之所領、可宛給他人、無所帶者可處遠流、又爲塞官途構讒言者、永不可召仕彼讒人、

存之由申之、小番番頭事結改事、可相觸之由申了、

〔御成敗式目〕一密懷他人妻罪科事

右不論強奸和奸、懷抱人妻之輩、被召所領半分可被罷出仕、○中略次於道路辻捕女事、於御家人者、百箇日之間可止出仕、

〔吾妻鏡十八〕建永二年○承元元年八月十七日庚申、放生會御出之時、申障之輩事、相州、武州、廣元朝臣、善信、行光等參會、有其沙汰之處、或輕服、或病痾云云、而隨兵之中、吾妻四郎助光、無其故不參之間、以行光被仰云、助光雖非指大名、賞爲累家之勇士、被召加之訖、不存面目乎、臨其期不參、所存如何者、助光謝申云、依爲晴儀、所用意鎧爲鼠致損之間、失度申障云云、重仰云、依晴儀稱用意者、若新造鎧歟、太不可然、隨兵者、非可飾行粧、只爲警衞也、因玆右大將軍○源賴朝御時、譜代武士、可候件役之由所被定也、武勇之輩、兼爭不帶鎧一領焉、世上狼唳者、不圖而出來、何閣重代兵具可用輕色新物哉、且累祖之鎧等、似無相傳之詮、就中恒例神事也、每度於令新造者、背儉約儀者歟、向後諸人、可守此儀者、助光者所被止出仕也、

〔吾妻鏡三十三〕延應二年○仁治元年三月十二日丙子、當番無故不事輩五人、被止出仕、所謂宇都宮五郎左衞門尉、廣澤三郎兵衞尉、鹽谷四郎兵衞尉、結城上野十郎、海老名左衞門尉等也、陸奧掃部助奉行之、

〔吾妻鏡三十六〕寬元二年七月十六日甲寅、今日有評定、○中略日野六郎長用與平五郎季長法師法名妙蓮相論伯耆國日野新印鄕、同下村得分物事、六月廿日掠給御教書之條、難遁罪科之由、有其沙汰、長用所被止鎌倉出仕也、兩條共對馬前司爲奉行云云、

〔應仁記一〕武衞家騷動之事附畠山之事

文正元年ノ夏ノ比、頻リニ貞親○伊勢申ニヨリテ、義廉○斯波無罪而出仕ヲ可被停止、剰ヘ勘解由小

恐懼

停出仕

〔公卿補任正親町〕永祿十一戊辰年

關白從一位藤前久　被違武命出奔、十一月日止職、

〔公卿補任後堀河〕嘉祿二年丙戌

非參議從三位源雅行　八月日恐懼、被出雍州外、依害子息親行罪也、〇中略

藤長季　六月六日恐懼、以尊隆僞任權律師罪也、

〔公卿補任後二條〕嘉元四年丙午〇德治元年

參議從三位藤實香　右中將、三月卅日、備後權守、四月日恐懼、同月日恩免、

〔式目抄四〕一闕本奉行人付別人企訴訟事

永和條々ノ內、延慶二年四月十六日被下文殿條々ノ內、〇中略一庭中ノ日、四日、九日、十九日、廿四日、件ノ日當番傳奏着文殿、可尋聞訴人所申、委被糺決申沙汰、私曲令露顯者、啻非被改奉行、宜被止出仕、

〔勘仲記〕弘安十年三月十一日辛丑、今夕祇候、北面重兼下人、着腹卷罷向女房侍從局々、大番武士搦捕之、而彼局以藏人親雄問答門守護武士、然而一切不敍用女房召、當番小舍人秀任、稱御使差遣武士正員佐々木備中前司賴綱、可先進之由示遣、頗稱勅定之由歟、此事達叡聞歟之間、被召予有被仰下之子細等、所召仰大番武士也、召小舍人問答子細、驚思食之體也、可愼々々、　十二日壬寅、參院〇龜山奏事、以頭辨、去夜狼藉人間事被訴申院御所事之次第、尤驚思食、藏人親雄被止出仕、小舍人秀任被除月奏、北面重兼同被止出仕、所令頭辨也、奏事之後歸、

〔親長卿記〕文明十一年後九月廿二日、參內番也、仰云、小番事、冷泉大納言爲富卿可被除小番、忩可結改番頭、一條中納言〇冬良可成小番番頭云々、其故者、今度兩度在國如申暇、其上拾遺本可寫進之由被仰之處、爲秘本之間、難書進上之由申切、旁以緩怠無極之間、被止出仕可被解官、可被申武家云々、驚

し城普請等、夜を日につぎ成就のうへ、鍋島へ相わたし歸朝し、〇下略

〔清正記 二〕一御政所松之丸殿より、主計〇清正所へ御使あり、主計頭御勘氣の義、はや相濟候なり、さりながら主計程の者の御勘當を、御うちつたひにてめしなをさるゝ事は、世間の批判もいかゞに思召され、御表向にて、家康利家などとりなしを以て召なをされ候はんとの儀にて、〇中略家康利家より使として榊原式部大輔參申候は、唯今太閤御廣間へ出御なされ、主計事仰出さるゝにより、御取合申上候へば、夜前早速罷出候段、神妙におぼしめされ、御前を御免なされ、委は治部少輔〇石田三成右衛門尉〇増田長盛德善院〇前田玄以より申來るべしとの儀なり、案のごとく三人より三使きたり、口上に、主計頭數ヶ度不屆の儀これありといへ共、夜前早速登城、神妙におぼし召、御勘氣を御ゆるしなさるゝ條、早々登城いたすべしとの上意の旨也、

〔大内家壁書〕蒙二御勘氣一之仁御定法之事

被レ放二御家人一之輩雖レ爲二暫時一可レ止二出仕一歟、被二仰出一之族以同前事、被二殺害刃傷一、或遁二耻辱横難一、縱又雖レ有二如何體之子細一、既蒙二御勘氣一之上者、可レ爲二公界往來之準據一之間、其敵不レ可レ有二御罪科一之由被レ定二御法一畢、

〔天文記〕天文六年十二月、小弓上樣〇義明足利古河公方高基樣御連枝也、先年御父政氏樣御勘當、奥州御下向有レ之、

〔新田由良家傳記〕今井出雲守、一風流者にて、刀の柄を壹尺四五寸計仕候て指申候、〇中略成繁公の御不興被レ成、向後御前へ罷出申間敷と御勘當被二仰付一候、

〔大友興廢記 三〕數條の言上御承引の事

義鎭公、〇中略前方御勘氣かうふりたる侍をもことごとくめし出され、御慈の御ことばをくだし給ふにより、日比の不足をわすれ、みな忠節の心懸を含ざるはなし、

〔多聞院日記〕永祿十一年十一月廿二日、近衛殿〇前久關白は、上意御勘當、薩摩國へ御下、

〔新編追加 侍所傍例〕一放埒輩令安堵事

革名遠江前司子息次郎左衛門入道法名忍性御勘氣之時、同道于口摺、諸國流浪之後、令入院壽福寺畢、

〔應仁記 一〕武衛家騷動之事附畠山之事

政長〇畠山述懷シテ申シケルハ、申バ此四五年、八ケ度ノ大儀ノ御晴ヲ第一ト勤メ、奉公他ニ異ニ令存ノ間、別テ御感ニコソ預ザラメ、何事ノ蒙勘道ゾヤ、更ニ心得ガタシト宣ヒケル、

義就政長鬪亂之事

右衛門佐義就、〇畠山是ヲ聞テ大ニ悦テ、政長既ニ蒙御勘氣上ハ、一日片時モ在洛セラレジ、イザヤ彼館ハ元來我等ガ館ナレバ移ラン、假令今夕忍テ有トモ、御。勘。道。ノ身トシテ否トハヨモイハジ、義就馳向テ、政長ヲ追出シテコソ累年ノ鬱憤ヲ散ズル所ナレ、面々如何カ思ト云ケレバ、遊佐モ、譽田、隅屋、甲斐庄、尤々ト申シケル、

〔鎌倉大草紙〕關東の様體、嚴密の不及御沙汰、たゞ成氏〇足利が、私の宿意を以憲忠〇上杉を討、殊に不得上意して關東の大亂を起す條、不儀のいたりなりとて、終に御勘氣を蒙り、成氏退治可有由被仰出ける、

〔勢州四家記〕一元龜四年〇天正元年春、龜山安藝守盛信は、信長公の勘當を蒙り、日野蒲生家に預られぬ、

〔總見記 二十〕佐久間信盛御勘氣事

八月〇天正八年十二日、大臣家〇織田信長御動座宇治橋御覧有之、其後御船ニ召サレ、直ニ大坂ヘ御著有之、是ニ於テ佐久間右衛門尉信盛、同甚九郎御勘氣ヲ蒙ル、罪科ノ儀、御自筆ニ書付ラレ仰出サレ候畢ヌ、〇下略

〔清正記 二〕一主計頭清正は、太閤の御勘氣をかうぶり、日本へめさるゝをもくやみなく、仕かゝり

ト申シケレバ、江所モエトリ給ハズ、

〔沙石集六〕爲母有忠孝人事

一鎌倉ノ故相州禪門〇北條時頼ノ中ニ祗候ノ女房有ケリ、腹アシクタテヽシカリケルガ、或時成長ノ子息ノ同ジクツカマツリケルヲ、イサヽカノ事ニヨリテ腹ヲ立テ打タントシケルホドニ、物ニケツマヅキテ、イタクタフレテ、イヨ〳〵ハラヲスエカ子テ、禪門ニ、子息ソレガシ、ワラハヲ打テ侍ト訴申ケレバ、不思議ノ事也トテ、彼ノ俗ヲ召テ、實ニ母ヲ打タルニヤ、母シカ〳〵ト申也ト問ル、實ニ打テ侍ト申、禪門返々奇怪ナリ、不當也トシカリテ、所領ヲ召シ流罪ニ定ニケリ、事ニガニガシクナリケル上、腹モヤウヤク居テ淺猿ク覺エケレバ、母又禪門ニ申ケルハ、腹ノ立マヽニ、コノ俗ワレヲ打タリト申上テ侍リツレドモ、マコトハサル事候ハズ、ヲトナゲナク彼ヲ打タントシテ、タフレテ侍ツル子タサニコソ申候ツレ、マメヤカニ御勘當候ハン事ハアサマシク候、ユルサセ給ヘトテ、ケシカラズウチナキ申ケレバ、サラバメセトテ、召テ子細ヲタヅ子ラル、實ニハイカデカ母ヲ打候ベキト申ス、サラバナドハジメヨリアリノマヽニ申サヾリケルト禪門申サレケレバ、母ガ打タリト申サン上ハ、我身コソトガニモシヅミ候ハメ、母ヲ虚誕ノ者ニハイカヾナシ候ベキト申ケレバ、イミジキ至孝ノ志フカキ者也トテ、大ニ感ジテ、別ノ所領ヲソヘテ給ハリ、コトニ不便ノ者ニオモハレケリ、末代ノ人ノ心ニハ有難コソ、

〔後深心院關白記〕貞治元年七月廿九日、傳聞、去廿四日、相模守清氏朝臣、〇細川於讃岐國被誅伐云々、自去年九月之比、蒙武將〇足利義詮之勘氣逃下若狹國、官軍發向之間、不能防禦、逃隱山門云々、

〔明德記上〕山名ノ宮内少輔、〇時熈同右馬頭、條々歎申子細ハ、我等野心ヲ存申サヾル處ニ、一族等讒訴ニヨリテ御勘氣ヲ蒙リ、出家遁世ノ身ト成行條口惜キ由、重々歎申ベキ所存ニテ、兩人共ニ上洛シ、内々伺申シ、忍テ清水邊ニ宿居シテ居タリケリ、

各殊奇恠之由、被遣御下文於彼輩之中、件名字載一紙、面々被注加其不可云云、（○中略）

兵衛尉重經（御勘當ハ、祖被免ニキ、然者可令歸付本領之處、今ハ本領ニハ不被付申之、）

澁谷馬允（父在國也、而付平家令經廻之間、木曾以大勢攻入之時、付木曾留、又判官殿御入京之時又落參、度々合戰ニ心ハ甲ニテ有バ、免前々御勘當可被召仕之處、衞府シテ被斬頸ズ、ルハイカニ、能用意頸ニ語加治テ、頸玉ニ厚ク可卷金也、）

小河馬允（少々御勘當免テ、可有御糸惜之由思食之處、色樣不吉、何樣任官ヤラン、○中略）

馬允有經（少々叙、木曾殿有御勘當之處、令免給タラバ只可候ニ、五位ノ補馬允、未曾有事也、○中略）

兵衛尉季綱（御勘當スコシ免レテ有ベキ處、無由任官哉、）

五月廿四日戊午、源廷尉（義經）如思平朝敵訖、剩相具前内府（○平宗盛）參上、其賞兼不疑之處、日來依有不儀之聞、忽蒙御氣色、不被入鎌倉中、於腰越驛徒涉日之間、愁鬱之餘、付因幡前司廣元、奉一通款狀、廣元雖披覽之、敢無分明仰、追可有左右之由云云、彼書云、（○中略）

義經無犯而蒙咎、有功雖無誤、蒙御勘氣之間、空沈紅涙、（○下略）

〔吾妻鏡六〕文治二年三月九日丁亥、武田太郎信義卒去、（年五十九）元暦元年依子息忠頼叛逆、蒙御氣色、未散其事之處、如此云云、

〔沙石集六〕芳心有人之事

一故葛西ノ壹岐ノ前司（○清重）トイヒシハ、秩父ノスヱニテ、弓箭ノ道ユリタリシ人也、（○中略）故鎌倉ノ右大將家（○源頼朝）ノ御時、武藏ノ江所（エド）、子細アリテ、彼江所ヲメシテ、葛西ニタビケルヲ、葛西ノ兵衞申ケルハ、御恩ヲ蒙リ候ハ、親キ者共ヲモカヘリミンタメナリ、身一ツハトテモカクテモ候ヌベシ、江所ハシタシク候、僻事候ハヾ、メシテ佗人ニコソタビ候ハメト申スニ、イカデ給ハラザルベキ、モシ給ハラズバ、汝ガ所領モ召取ベシトシカリ給ヒケレドモ、御勘當カウブルホドノコトハ、運ノキハマリニテコソ候ハメ、力オヨバズ、サレバトテ給ハルマジキ所領ヲバ、爭カ給ハルベキ

除籍

〔公卿補任順德〕建保五年丁丑

權大納言正二位藤公經　十一月以後、依院勘籠居、

〔吾妻鏡十二〕建久三年九月五日甲戌、右馬權頭公佐朝臣獻書狀、去月廿日依令讒口被除籍、於身無其科、賜一行欲愁申云云、仰云、雖讒者以一向虛言不可達天聽、內々有懈緩事之條、無異儀歟、以親昵輙不能執申之由云云、

〔吉續記〕文永五年六月三日、參院、御靈會馬散狀幷雜事等、以二位前宰相奏聞、次參殿下、○藤原基平內大神宮奉行小舍人、奉行職事親朝申事由、可召加康次之由欲加下知之處、奉行六位親說申子細、仍自上憚可加之由嚴密被仰下、然而小舍人事、六位進退事、自上非可被定下、無術訴訟之由申之、仍以予○藤原經長勅定之上、不可及子細、度々申子細之條太狼藉、早可召加之由被仰下、猶不承伏、非言語之所覃之、此上職事、直可召付小舍人康次之由被仰下、卽此趣仰親朝五位職事、如此奉行小舍人、直召付事、且寬元帥中納言職事之時、召付之由承及之、早可仰出納之由申之、馬長事未改、六位無故申子細者、可被除籍之由可仰之由被仰下、下知極臈了、

勘當

〔運步色葉集〕勘當カンダウ　勘氣キ

〔新編追加侍所〕一自今以後、有蒙御勘當輩之時、追討使蒙仰相向之外、無左右於馳向之輩者、可被處重科之由、普可令相觸御家人等給之狀、依仰執達如件、

文永元年二月十二日　　左京權大夫判

謹上　相模守殿

〔吾妻鏡三〕壽永三年○元曆元年二月一日庚申、蒲冠者範賴主蒙御氣色、是去年冬爲征木曾○義仲上洛之時、於尾張國墨俣渡、依相爭先陣、與御家人等鬪亂之故也、

〔吾妻鏡四〕元曆二年○文治元年四月十五日戊辰、關東御家人不蒙內擧、無功令多以拜任衞府所司等官、

院勘

〔百練抄十二 順徳〕建暦元年九月七日、山堂衆四百人許爲院廳沙汰被居北山妙見堂、是爲令勤行公家御祈也、年來蒙勅勘隱居所々、今蒙寛宥、

〔關東評定傳〕建長三年十二月廿七日、使氏信景賴召捕了行法師、世間聊騷動、翌年光明峯寺禪定殿下〇藤原道家御一族、僧俗勅勘、

〔看聞日記〕應永卅二年四月七日、抑三條中將實雅朝臣、內裏蒙勅勘籠居云々、御懺法散花役人也、裝束用意之處被止出仕計會云々、其故者去廿九日、彼朝臣內裏へ被進一獻、而大納言典侍殿依醉氣、早出醉臥之處へ彼朝臣尋行云々、主上〇稱光猥藉之由被仰、逆鱗忽有勅勘、聽此由仙洞へ被申被追籠、更無咎之由父大納言〇公雅陳申之間、同罪之由被仰、然而室町殿〇足利義量被執申、亞相は御免、實雅朝臣は籠居云々、不便々々、

〔薩戒記〕應永卅二年十一月廿日乙丑、未剋許左中將隆夏朝臣來示曰、月次祭奉行藏人左中辨房長依勅勘被止職事、仍我〇藤原定親可奉行由被仰下、可賜符案者、

月次祭任例可被申沙汰之狀如件

十一月廿日　　左中將判

藏人中務殿

〔薩戒記〕應永卅三年二月一日丙寅、今夜右大辨宰相宣光朝臣奏慶、去年六月任之、大丞日來依勅勘籠居、然而母堂病氣危急之間、以別儀申請之、仍被免出仕、但不可昵近內裏之由被仰云々、有子細歟、履薄氷之世也、

〔皇帝紀抄七 土御門〕正治元年三月十九日、高雄文覺上人、依院〇後鳥羽勘配流佐渡國、二ヶ度被行流刑者也

〇按ズルニ、院勘トハ、院ヨリ譴責セラルヽヲ云フ、

〔皇帝紀抄七 土御門〕建永元年九月十八日、參議左大辨公定卿、依院〇後鳥羽勘配流佐渡國、

勅勘

責罪過　怠状附

罪過ヲ責ムルニ、勅勘、除籍、勘當、及ビ出仕ヲ停ムル等アリ、勘當ハ勘氣ヲ蒙ル、又御氣色ヲ蒙ルト云フモ同ジ、皆譴責ナリ、故ニ用キル所、極テ廣クシテ、其身ヲ追放スルニモ、所領ヲ召シ放ツニモ用キ、又父ノ其子ヲ義絶スルニモ言フ所ニシテ、公事ニ關セザル事ニモ云ヘリ、

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年四月廿一日己丑、自去夜殿中聊物忩、是志水冠者、雖爲武衞〇源頼朝御聟、亡父〇木曾義仲已蒙勅勘被戮之間、爲其子其意趣尤依難度、可被誅之由内々思食立、

〔吾妻鏡九〕文治五年二月廿二日甲午、被發御使雜色時澤於京師、伊豫守〇源義經逐電之後御沙汰次第、頗以寛宥之間、人猶可事凶惡、尤可及急速之御沙汰之趣、被申之云云、〇中略一條賴經卿同意義顯〇源義經之臣也、可被解官追放之由、先度言上畢、而雖有勅勘之號、于今在京、鬱訴相貽事、

〔吾妻鏡十九〕承元五年〇建暦元年九月十二日己酉、今曉内藤右馬允盛時御使上洛、是去月廿五日、坊門中納言忠信卿依遊放事勅勘之由、風聞之故也、中將信能朝臣依同事勅勘云云、　十一月四日壬子、申刻坊門黃門使者參著、是勅勘之時、態預專使事、即雖可賀申、行幸已下公事連綿之間遲々云云、〇中略此等趣、被載黃門書狀、善信讀申之、

〔梅松論上〕承久三年の夏、後鳥羽院御氣色として、關東を亡さむために、〇中略官軍關東へ發向すべきよし、五月十九日其聞え有間、〇中略同廿一日、十死一生の日なりけるに、泰時幷時房兩大將として鎌倉を立たまふ、然に泰時は父の義時に向て曰、〇中略今勅勘を蒙る事、なげきても猶餘り有て、たゞ天命のがれがたき事なれば、所詮合戰をやめ、降參すべきよしを主きりにいさめける處に、〇下略

〔朽木文書坤〕和與

近江國朽木庄領家方年貢內、四二寸榑、雜掌宥西與地頭佐々木出羽五郎左衛門尉義綱代官祐聖今地頭代豪遍員數相論事、

右訴陳趣、子細雖多、所詮地頭代祐聖者、四二寸榑爲二萬寸之由申之、雜掌宥西者、四萬寸之由申之、雖番訴陳、祐聖爲奸謀不調仁之間、令改易代官職、以豪遍所令補于地頭代也、○中略

正安元年十一月八日

雜掌宥西　在判

召放代官

處、爲敵欲被襲之由雖申之、更無實證、所行之企、奇怪非一、早可達關東之旨、及勅命云云、上皇〇(後鳥羽)頻逆鱗云云、　八月二日乙酉、佐々木中務丞經高蒙御氣色、淡路、阿波、土佐以上三箇國守護職以下所帶等被召放之、以其趣所被申京都也、是日來聊依罪科、雖被經沙汰、勳功異他之間、暫相宥之處、爲洛中警衛之士、令騷京師、背叡慮之條、難及私寛宥之旨、再往被經沙汰、如此云云、

〔吾妻鏡十七〕建仁三年九月四日己巳、島津左衛門尉忠久被收公大隅薩摩日向等國守護職、是又依能員縁坐也、

〔親長卿記〕傳奏奉書案

由良庄公用就無沙汰之儀、貴布禰神事可闕怠之由注進之趣、令奏聞申之趣、被驚思食候、于今如此闕怠事、實無先規候、猶有難澁者、可被改代官職之由、可被成御下知於社家之由其沙汰候、重儀可有注進之由候也、恐々謹言、

三月十(〇文明八年)廿七日　　　　親継

貴布禰兩官御中

〔御成敗式目〕一隱置盜賊惡黨於所領內事(〇中略)被停止守護所使入部所々事、同惡黨等出來之時者、不日可召渡守護所也、若於拘惜者、且令入部守護使、且可被改補地頭代也、若又不改代官者、被沒收地頭職、可被入守護使矣、(〇下略)

〔新編追加(雜務)〕一隱置惡黨於所領內輩事(弘安九二五)

自身者關東參住之間、在國事不聞及之由依申之、前々遁罪科歟、於自今以後者、令隱置惡黨於所領內之由令露顯者、自身雖不在國、可被召所領三分一也、但來住所領、百日計居住之族、雖爲惡黨不存知之間、鎌倉參住之仁、不可及罪科、至代官者、在國之間、依不可遁其咎、仍永不可召仕之、若猶召仕者、主人可有其科、正員又令在國者、雖爲百日居住之浪人可被改所帶、

駿河守殿
掃部助殿

〔御成敗式目〕一可修造寺塔勤行佛事等事

右寺社雖異、崇敬是同、仍修造之功、恒例之勤、宜准先條莫招後勘、但恣貪寺用、於不勤其役之輩者、早可令改易彼職矣、

〔新編追加佛寺〕一可爲諸寺務者以四ヶ年任限事〇目錄云、建長五七十二、

抑有封之寺、已有治爲〇爲字疑誤被置執務者、爲令莊嚴也、起擧日功稱條治力〇日以下六字疑有誤脫補任之後、更無其實、只犯用資財、徒破壞堂塔、因玆任貞觀符、以四ヶ年爲遷替期、若有殊功者可被延任、於致緩怠者、不〇不下疑脫待字秩滿、可被改其職、

〔建武以來追加〕一山賊海賊事

尋究出入之在所、若領主有同心之儀者、令改替地頭職、可被入守護使歟、

〔建武以來追加〕諸國狼藉條々貞和二十二十三沙汰

一山賊海賊事

糺明出入之在所、有領主同意之儀者、於其所者、永可令改補地頭職、至本所寺社領者、靜謐之程、可被補地頭哉否可經奏聞焉、

〔吾妻鏡十六〕建久十年〇正治元年三月五日丁酉、後藤左衛門尉基淸、依有罪科、被改讚岐守護職、被補近藤七國平、

〔吾妻鏡十六〕正治二年七月廿七日辛巳、六波羅書狀等到來、佐々木中務丞經高乍爲帝都警衛人數、奉輕朝威條々也、是於洛中稱生虜强盜人、以其次追捕近隣民居等、加之令守護淡路國之間、蔑如國司命、妨國務之上、去九日催聚淡路、阿波、土佐等國軍勢、各著甲冑令馳騷、依奉驚天聽、被尋問濫觴之

召放所職

神行及遲々、仍社司等有解官、秀賴、秀與、祐名、祐松、

〔運歩色葉集 免〕召放　〔同 貿〕改易　改補　改替

〔御成敗式目〕一擅地頭押妨所領內名主職事

右給擅領之人、稱所領內、掠領各別村事、所行之企、難遁罪科、爰給別御下文、雖爲名主職、擅地頭若伺尫弱之隙、有限沙汰之外、巧非法致濫妨者、可給別納御下文於名主也、名主又寄事於左右、不顧先例、輩、違背地頭者、可被改名主職也、

〔新編追加 雜務〕地頭等可存知條々〇中略

一未被補地頭沒收所々爲御使沙汰可注進事

如風聞者、去年兵亂之時、相從京方輩之所職所領、大略雖注進、猶爲守護代等隱籠庄公多之云々、而在廳官人等、恐守護代、詳不注進歟、憑任實正、可注申之、若又本下司雖無其咎、沒收之內仁注進之所所有之者、委尋明可注進也、

右條々守仰旨、可令下知、若猶背禁制之旨、自由張行自由非法之輩者、云守護人、云地頭職、可被改易也、可存此旨之狀、依仰下知如件、

貞應元年四月廿六日　陸奧守平　判

〔新編追加 雜務〕一諸國庄公預所地頭相論之時、糺定兩方之處、於地頭非法者、被處罪科、至預所定使者、雖有非據、不及別沙汰之間、依無所恐、國々所務嗷々之間、異論連々不絕歟、然者爲絕向後濫訴、預所定使等有非法之時者、可被改易彼職之旨、可被象仰下之由、可被言上二條中納言家之狀、依仰執達如件、

文曆二年七月廿三日　武藏守　判

相模守　判

時、有中作人、於河原八丁者遣之、於新保庄者不渡之處、任彼讓狀之旨、今參局可知行之由今春被申候間、不可叶之由分申了、然今達叡聞被勅裁被仰出廣橋、難儀之間可申入云々、給文書可奏聞云々、返答了、　十月六日、依召參內、貞久縣主與今參局相論新保庄事、於叡慮者、今參局理運之由被思食也、但貞久歎申間、於知行分者不被召放也、所詮每年二千疋分可加扶持云々、有所存予不申子細、只貞久侘言分奏聞許也、仍件子細仰貞久處、猶不可叶、只千疋可扶持之由重歎申、奏聞之處有逆鱗、於貞久御師職被召放也、於此事者、不可被知食之上、擔而賀茂下上事、向後不可被聞食云々、

〔親長卿記〕文明九年六月廿一日、賀茂供僧與別當隆算法師相論、正月三ヶ日修正入用不下行事、御神祭神供闕怠事、三問三答狀奏聞、兩條現形之上者、可被改別當職云々、理運之輩可注申之由可仰云々、　廿五日、供僧等來、可被改別當職之條畏存、但供僧職同可被改動之由申之、予云、就別當役兩條闕怠之間、不可及供僧之儀、書改申狀可給之由仰了、

〔親長卿記〕傳奏奉書案

當社領越中國倉垣庄、上使職事、申村氏人景定之處、百姓等令同意、有限去年月宛神事定等、號損免不致沙汰云々、爲事實者、太以不可然、就中同庄田四ヶ村之內、白石名事、氏人景盛本役事、年々一向不及其沙汰、抑留之條、言語道斷次第也、各放氏人職、可處罪科、若有子細、急度令參洛、可明申之由可被下知給之由被仰出之旨候也、恐々謹言、

十月六日〇年號缺　親繼判

鴨禰宜三位殿

〔親長卿記〕延德四年五月一日、午剋參內、奏鴨社祝職相論事、兩方三問、申狀於御前讀進、出御二間、御對面、何樣猶靜被御覽申狀、追可被仰、畢又文書各所持之由申之可召進、此申狀內、神前供物備樣相違之由、禰祝秀盛訴申、祝秀富、以件手文備進之由申之故也、　三日、參內、祝相論事、非殊儀不可有改動之由有仰、社司等依違亂、御蔭山

解却見任、撰人改補、兼又有殊功、宜加褒賞、但其領不幾、其勤難及者、注損色、經言上、課別功、令造營、

〔建武以來追加〕東福寺條々（應安五十十九、御沙汰、執筆布施彈正大夫入道）

一諸社神人等訴申喧嘩事（應安五十一十八、松田左衞門尉貞秀奉行）

或帶本訴之理、或依不慮之儀、神人等被殺害刃傷者、尤可有裁許、而近年就所務負物以下、動成奸謀之企、令覃鬪殺之時、致訴訟云々、政道之違亂、諸人之煩費也、不可不誡、於如然事者、一向非許容之限之上、解却神職、須處其身於罪科、將又社務出非據吹噓者、經奏聞改所職、可被補器用之仁矣、（○又見花營三代記）

〔百練抄（九安德）〕養和元年正月四日、東大興福兩寺門徒僧綱已下、可解却見任沒收所領之由宣下、

〔勘仲記〕弘安七年八月十四日己未、早旦參院、以吉田黄門奏聞條々事、兩社神人事、猶確執不落居、嗷嗷所訴申也、以修理大夫被仰下云、八幡神人申狀、久世庄非鴨社領、南北共爲元興寺領之由申之、此條先有御不審、予（○藤原兼仲）申云、社務弘繼狀、鴨社領久世庄神人之由、且申狀如此候、爲神領之間、神人之條、勿論候歟、又被仰下云、稱神人者、旡木寄人也、依違勅科、被解寄人職、可被罪科之由、去々年歟、及其沙汰之由八幡申之、此條者無相違候、重勅定云、久世庄事、非社領之由申之、可申所據、稱神人者、旡木寄人也、其身不相替之上者、斷罪不可有子細歟、早可解神人職之由、忩可仰鴨社、院宣之趣、可書進之由、被仰下之間、此趣書案文、經叡覽了、大概無相違之由、被仰下之間、即以飛脚仰遣鴨禰宜了、

〔增鏡（十五村時雨）〕十月（○元弘元年）十二日、令旨（○光嚴）下されて、前の御代（○後醍醐）の人々、大中納言宰相、すべて十人、宣房、公明、藤房、具行、隆資、實世、實隆、季房、隆重、忠顯、司やめらるゝよし聞ゆるも、昨日まで、時の花と見えし人々、つかのまの夢かとあはれなり、

〔親長卿記〕文明七年九月廿一日、貞久縣主來、知行越中新保庄幷河原八丁半分事、祖父益久父讓後家（益久母）□□一期之後、可讓河原（今參內爲小名）由有讓狀、雖然益久不存知之間、先年與後家令相論之

下權大納言了云々

〔足利季世記 三高國記〕公方(義稙)ト高國不和之事

大永元年辛巳三月七日、公方、細川、御中不和ニ成、京ヲ出サセ給ヒ、淡路ノ武島ヘ御渡海アリケレバ、京ニハ細川右京大夫(○高國)同名陸奥守以下評定シテ、故法住院殿(○足利義澄)御子、赤松アヅカリ申テ、今年七歳ニナリ給フヲ呼上奉リ、七月六日、播州ヨリ御上洛アリ、左馬頭ニ任ジ、御元服アリ、義晴ト名付奉ル、同八月ヨリ三條ノ御所ヲ上京ヘ引、今ノ柳ノ御所ヲ營立ラルヽ、頓テ征夷將軍ノ勅宣ヲ蒙リ給ヒケレバ、前將軍ハ解官アリテ、將軍職ヲトヾメラルヽ、

幕府停搢紳職

〔蔭戒記〕永享六年六月十三日、抑左相府殿(○足利義教)政務之後、遭事之輩已及數多、(○中略)

前左大史爲緒宿禰(被止職○中略)

前左大史內名宿禰(被止職)

前大外記師世朝臣(被止職)

停任

〔公卿補任 後堀河〕寬喜二年(庚寅)

參議從三位藤賴隆 近江權守、閏正月四日辭退、(停任、其替不被下、以辭退之由、被仰下)

〔公卿補任 龜山〕文永三年(丙寅)

參議從二位藤高定 左兵衛督、別當、伊與權守、十二月二日、停督別當等、依山門訴也、

解職 解任

〔玉蘂〕建曆二年三月廿二日 宣旨(左大臣 右大辨)(○中略)

一可令諸寺執務人修造本寺事

抑已上修造之勤、格條炳焉、而社司寺司等、徒貪社領寺領之利潤、不顧本社本寺之破壞、然間最叢祠離荒、而秋露空濁、蘭若檐頹兮、春雨不留、須隨小破且加修理、而及大損、始經奏聞、頻申請別功、剩爲己忠、僞稱致造畢、偏忘公平論之政途、殆指(○指疑背字誤)科條、慫令彼司等致連連修造、若背符旨尙有懈怠者、

朝臣隆經　少內記中原信康

左大臣宣、奉勅、件等人宜令解却見任者、

文治元年十二月十七日　大外記中原師尙奉

〔百練抄十後鳥羽〕建久七年四月十五日甲子、吉田祭也、今日本宮權大進藤原仲賴、被下左衞門弓場、是去比、於左兵衞督高能卿家陵辱筑後前司景良之故也、先被下解官宣旨、

〔皇帝紀抄八順德〕建保元年八月三日、延曆寺衆徒百餘人、集會長樂寺、爲燒拂淸水寺也、是去比淸閑寺領內淸水寺住僧、爲迎講結構娑婆屋、而自山門依令燒件屋、淸水寺令訴申之、被責召衆徒張本之處、依不拘勅制、遣武士幷西面輩、被追散之間、兩方及刃傷殺害云々、　九日、被解官左衞門尉中原尙綱、藤原景家、同久季、左兵衞尉藤原實員、平直宗、藤原忠村、佐伯正任等、是去三日、於長樂寺依致狼藉也、此外西面無官輩十餘人、被下使廳、

〔百練抄十四後深草〕延應元年正月七日戊寅、於北陣糺彈雜犯之間使廳下部搦捕油賣一人、稱左府厩飼口、被奪返之上、奉行官人大志景種、被解却見任了、

〔勘仲記〕弘安七年七月廿二日戊戌、參殿下、〇藤原兼平、官人行廣可解却見任之由、爲二條前中納言奉行被仰下、今日所內覽也、

〔薩戒記〕應永卅二年四月二日辛丑、頭左中辨宣光朝臣談曰、右中將實雅朝臣三條大納言息、與內女房權大納言典侍日野新一位入道息女、主上御寵也、有密通之儀、其氣色已於御前露顯、可有罪科之由、自內被申院、〇後小松上皇再往雖被宥申、無御承引之儀、仍解官事可宣下之由被仰下者、宣旨云、

應永卅二年四月一日　宣旨

正四位下行左近衞權中將兼尾張權介藤原朝臣實雅宜解却見任

藏人頭左中辨藤原宣光奉

古事類苑

法律部二十一

中編

解免官職

解官ハ、王朝ノ制ニシテ、上編既ニ之ヲ解セリ、所職ヲ召シ放ツトハ、解官ノ類ニテ、守護、地頭ナド毎ニ此刑ニ處セラル、亦所職ヲ收公ストモ、所職ヲ改易ストモ云フ、

代官ヲ召シ放ツトハ、幕府ヨリ地頭ナドヲシテ、代官ヲ黜ケテ用キザラシムル事ナリ、

〔吾妻鏡 五〕文治元年十二月六日乙卯、院奏折紙狀云、○中略

一解官事

參議親宗　大藏卿泰經　右大辨光雅　刑部卿頼經　右馬頭經仲　右馬權頭業忠　左大史隆職　右衞門少尉信盛　信實　時成　兵庫頭章綱

同意行家義經等、欲亂天下之凶臣也、早解官見任、可被追却也、兼又此外行家、義經家人、逆徒勸誘之客、相尋淺深、於官位之輩、一々可被解官停廢也、陰陽師之類、相交由有其聞、同可有追却也、

十二月六日　頼朝在判

廿九日戊寅、北條殿御使參著、去十七日、被下解官宣旨、大外記師尙送之、則奉獻其狀云云、○下略

〔玉海〕文治元年十二月十八日丁卯、大外記頼業注送云、昨日被行解官、左大臣○藤原經宗下知師尙云々、

大藏卿兼備後權守高階朝臣泰經　右馬頭高階朝臣經仲　侍從藤原朝臣能成　越前守高階

附怠狀

怠狀

古事類苑

法律部二十一

中編

解免官職

責罪過 怠状附

〔關八州古戰錄 二十〕小田小山成田等始末事

武州忍ノ城主成田下總守氏長ハ、小田原ノ城中ニ栖籠レル間ニ、上方一味ノ約有ト云共、秀吉公其罪ヲ宥メラレズ、一命ノ代リニ黃金千枚ヲツグノハルベキノ旨、過怠ヲ課セラレシ所ニ、成田ハ千騎ノ大將タレドモ、是ヲツグノフ事叶ヒ難ク、九百枚出シテ誅戮ヲ遁レ、野州ノ地ヘ牢浪シテ有シヲ、蒲生氏鄕會津ヲ賜リテ後、氏長ニ一萬石、舍弟左右衞門佐ニ三千石合力シテ先隊ノ部將トセラレタリ、

〔豐臣秀吉譜 中〕初秀吉定法曰、凡喧嘩口論、不決理非甲乙共當罪、是欲停喧嘩也、泉堺之富家在茶席、主客論諍、互推刃而同死、秀吉聞之、怒其背法曰、主客罪及三族、泉堺自古富豪多矣、皆大懼、到官叩頭謝之、不聽、於是贖以貨財、秀吉以絞斬有贖銅之法、故遂多取貨財、乃至輕服之親、其賄賂不知數也、自是泉堺衰弊、不能對捍于官吏、

〔吾妻鏡 十九〕承元二年七月十五日壬子、武藏國威光寺院主僧圓海參訴云、柏江入道增西、去月廿六日率五十餘人惡黨亂入寺領、及苅田狼藉云云、增西折節參候之間、被召決之處、圓海之所申無相違、仍可停止濫妨之由被仰出之上、令勤仕永福寺宿直百箇日可贖其過云云、圖書允淸定奉行之云云、

○按ズルニ、僧ハ法ニ於テ財產ヲ有スベキモノニアラザレバ、勞力ヲ以テ其過ヲ贖フ、是亦過怠ノ一法ニシテ、令ニ云フ所ノ苦使ナリ、

〔雜筆往來〕抑留年貢、奪取資財、以尫弱身、好過分僻事、嬌飾之至、無物取喩、○中略假雖不經案內、盍被存廢哉、須召出張本、被處過料者也、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜三年四月廿一日、被レ仰二遣六波羅一條々、○中略　盗犯人中假令錢百文、若二百文之程罪科事、如レ此小過者、以二一倍一可レ致二其辨一、○下略

〔新編追加侍所〕一盗人罪科輕重事寶治二年七月十日事書內、明石左近將監奉行、

先日被レ定二置罪一、而守二彼狀一、稱レ爲二少過一、致二一倍辨一之後、猶以企二少過之盗犯一者、準二重科一可レ被レ行二一身之咎一歟、以二此趣一雜人奉行人等可レ令二存知一也、

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年七月十日乙卯、雜務條々有二其沙汰一、敎經等勘申云、○中略　又盗人罪科輕重事、先日被レ定二置訖一、而守二彼狀一、稱レ爲二小過一、致二辨之後一、猶以企二小過之盗犯一者、准二重犯一可レ被レ行二一身之咎一歟、以二此趣一雜人奉行等、可レ存知之由、被二仰出一云云、

〔新編追加侍所〕一盗賊贓物事寬元三四廿評

右已依二贓物之多少一、被レ定二罪科之輕重一畢、假令錢百文、若二百文已下輕罪者、以二一倍一令レ辨二償之一、可レ令レ安二堵其身一、三百文以上之重科者、縱雖レ行二一身之科一、更莫レ及二三族之罪一者、○下略

〔侍所沙汰篇追加〕先例條々

一鎌田入道、苅二村岡武藤對馬入道田一段十歩一之咎、被レ付二鎌田入道田十町於對馬入道一畢、

一酒匂太郎入道依レ苅二田舍茅田小一之咎、被レ付二五町於敵人一畢、

〔政所壁書〕一諸人借物事永享八五廿五

所用之時、令二借用一之間、借與者芳志隨一也、爰雖レ致二催促一、不レ能二返辨之是非一、而經二年月一之條、云レ不レ知レ恩、云二無理一、旁以背二正儀一者也、所詮自レ被二定置一永享八五廿五已後雖二催促三箇度一日限百五十日、尚不二承引一之者、於二政所一可レ訴二申之一、若糺決之間、不レ致二其辨一者、本利相當、返辨之外、爲二過怠分一、相二副彼拾分一一、可レ被二責渡一也、但錢主與二借主一相二談之一、以二利平一連々致二其償一者、非二制限一、錢主亦相二待過怠御成敗一、寄二事於左右一、不レ叙二用少分之辨償一者、雖レ被二定置一、不レ可レ依二此法一焉、○又見二建武以來追加一

過怠料處分

ヲバ眼前ニ請トリ手ト、當知行ノ者ト大ナル訴論ニ及ベシ、濫訴ノ起ルベキ根源是アリ、依之堅御禁制也、請取人ヲバ罪科ニテハ深キホドニ、過料ヲ出シテ、寺社ノ修理ニ付ベシト也、法意ニハ不知行ノ所領ヲモ、他人ニ寄進シテ、文書ヲ寄附スル事禁制ナシ、道理ニヨル也、此狀ハ禁制也、法意ト式目ト相違多シ、賞罰モ淺深カハレドモ、底ハ一ツ也、

〔侍所沙汰篇追加〕就天福元年八月十五日六波羅御注進十七箇條被加關東押紙內、〇中略

一大番衆令逃失召人事

右召人出來之時、令預大番衆又在京輩處、令逃失畢、然而其科怠輕重依難定申候、于今不致沙汰候之間、或强盜或殺害人、大略十之七八、令逃失候也、爲自今以後、尤可被定下候歟、

押紙云、可令修造淸水寺橋也、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年四月廿五日癸未、若狹四郎忠淸依御下知違背之科、可造進安居院大宮篝屋幷膳所屋之旨、今日被仰付、是忠淸所領若狹國依生庄雜掌成安訴申之故也、

〔今川記かな目録追加〕一公事半年出、三年理非を不論、公事をあいてに落著すべしと云云、雖然非義をかまふるの輩、公事をのべ置、手出の咎をねらひ、先三年の所務をする事、大奸曲之至也、手出の越度あるにおいては、其年の年貢を淺間造營に寄附し、後年に至て、公事の是非を可裁許也、

〔島津家本吾妻鏡〕延應二年十一月廿八日丁巳、京都大番勤否事、被經沙汰、是有遲參不法輩之由、依有其聞也、假令一箇月令遲參者、被召過怠用途千疋、可被宛未作篝屋料云云、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年四月廿九日丁未、〇丁未恐丁亥誤四人逐電事、預人罪科不輕、召過怠料、可被寄進新大佛殿造營之由、爲淸左衛門尉滿定奉行、今日有議定、新田太郎政義分三千疋、毛呂五郎入道蓮光預召人紀伊國三上庄狼藉人政所二郎高氏分五千疋、各來八月中可令辨償云云、是爲孫子深利五郎爲經咎之由蓮光雖訴申、被尋下之、蓮光猶不遁之云云、

〔大內家壁書〕身暇日數之事

在山口衆之內、少分限之仁事、年中百箇日可給身暇由、被相定畢、但隨當用不時之儀可被任申請旨事常之篇也、然處不申上御暇以密々或歸宅、或他行、有達上聞事者、十箇日に壹貫文、爲過怠可被掠量也、百箇日者可爲拾貫文、若此御成敗至難澁之族者、可被沒收恩給地也、仍壁書如件、

文明十七年十二月廿六日

過怠隨地大小

〔新編追加（雜務）〕嘉禎四年九月九日、御評定事書中、（齋藤兵衛入道奉行）

一新補幷本地頭不叙用御下知事

右新補地頭者、云本司跡、云新補率法、不可混領兩樣之由、下知之處不叙用其狀、猶令違犯者、改易其所可被充行勳功未給之輩也、

次本地頭之輩或背先例、或違父祖例之由、訴訟之時、不從御下知者、召其所可被充行官仕忠勞輩幷所知之替也、

次御祈勤仕人之跡事、有如先條之子細者、召其所可充給御祈勤仕之仁也、但已上三ヶ條、就此式目、訴訟定多出來歟、委細糺明、可有御成敗、　仁治元十一廿三評云、被召所領者、就之所々訴訟無盡期歟、仍可被召篝屋用途也、但隨其所多少可被召之、假令爲五拾町所者、可被召錢五拾貫文也、但地頭得分也、寄事於左右、不可成土民之煩矣、

過怠課修造

〔御成敗式目〕一以不知行所領文書寄附他人事（附以名主職不稱本所寄進權門事）

右自今以後、於寄附之輩者、可被追却其身也、至請取之人者、可被付寺社修理、○（下略）

〔式目抄（六）〕不知行ノ所領ハ、其領主理ナキニヨテ、他人知行スル歟、イヅレニモ子細アルベシ、而ヲ他人ニ寄附スルハ私曲也、故ニ寄附ノ者ノ罪科ニハ、其身ヲ追失ルベシ、追却マデハ、アマリ深キ樣ナレドモ、此行末ヲ案ズルニ、寄附ヲ請取人、威勢モアリ公事ヲモスベキ人ナルベシ、而

れ、同罪に馬取上被成候也、此後は父子兄弟もたがひにわりごくる、事いたさゞる故、老若上下厭辨當を絶さず持候也、

過怠隨貧富有差

〔新編追加 雜務〕一西國御家人中、於所領知行之輩者、隨守護所催、可勤仕京都大番之處、致自由對捍、空渉日月之族有其聞、於自今以後者、就守護人注申、爲償其過怠、隨彼分限、可令召付清水寺橋修理給之狀、依仰執達如件、

文暦二年正月廿六日　武藏守 判

相模守 判

〔吾妻鏡 四十二〕建長四年十月十四日乙丑○中略

一密懷他人妻事

名主百姓等中、密懷他人妻事、訴人出來者、召決兩方、可尋明證據、名主過料三十貫文、百姓過料五貫文、女罪科事以同前、

〔新編追加 雜務〕一密懷他人妻罪科事 正應四三十六

右同所被載式目也、但名主百姓等中、密懷人妻事、風聞之時者、不糺明實否、證據不分明之處、無左右處罪科之條、甚不可、然者訴人出來者、召決兩方、尋明證據無所遁者、名主輩者過料錢拾貫文、百姓者過料五貫文、可充行之、女罪科以同前矣、○本文有脫字、以侍所沙汰篇追加補、

過怠隨日數有差

〔新編追加 雜務〕一京都大番衆事、適有限同私○同私、御成敗式目追加作之一字、恐當作之役、寄事於左右、懈怠之輩者、假令一ヶ月令遲參者、爲其過怠可被充未作等用途錢拾貫文、其已上日數者、以之可被仰充之狀、依仰執達如件、

仁治三年十一月廿八日　前武藏守 判

相模守殿

コハヾヤトハ思ナガラ、我ガ心ヲモテ思フニ、カレモ愛シ思ラン、爭ナサケナクコフベキト思返テ、日來スグルニ、或時彼ノ僧大ナルトガアリテ、マドフベキ事アリケルニ、藤兵衛尉ナニガシト云テ、撿斷シケル侍ニ仰付テ、此科料ニ七匹四丈ノ絹ヲヤマヰラスル、八重ツヽジヲヤ進スルト云テ、過ニオコナヘトゾ下知シケル、サテ藤兵衛尉行向テ、シカ〲トノ仰也トイヘバ、此僧七匹四丈ヲコソマヰラセ候ハメ、此ツヽジヲモテ心ヲモナグサメ候ヘバト申ケルヲ、主ノ心ヲ知テ、絹ヲマヰラセテハ、猶御不審ノコルコトアルベシ、タヾツヽジヲマヰラセ給ヘト云ケレバ、チカラナクテホリテ奉ル、サテ撿斷ノ職ハ半分ノ得分也、ソノ處ニツヽジヲオロシ枝一ツトルベシト云フニ、絹ヲ進スベシトテ惜之ケレドモ、オシテ取テケリ、共ニヤサシクコソ、彼ツヽジ今ニ有リ、今代ハカヽル人、有ガタクコソ聞ユレ、

〔康富記〕寶德二年七月十九日辛酉、或語云、和泉守護細川兵部大〈○大、下文作少、恐是、〉輔、去年被誅山臥之間、都部山臥楯籠新熊野社頭、〈○中略〉可及大儀之間、自兵部少輔方被出下手人、〈兩人〉又科貸料足百二十貫、田地十六町、神馬等出之、被懇望之間、昨日馬無爲云々、

〔續撰清正記〔二〕〕王子御兄弟を追奉り咸鏡道押行時之事

右同咸鏡道押行ける時に、ある野の原にて、人馬の息を休め、晝の破籠をとり出し喰けるに、十六七になりける小姓、わりごをもたず、故に諸人の喰ぬるを守ゐければ、其者の伯父が見かねて、我もちたる燒食を一ツくれけるを、清正御覽有て、小姓の伽車だても、時により所による事也、今此時に花奢風流は不都合なり、惣而老若によらず、其時其事に隨て、一ツ守る事を忘ざるが武士のたしなみと云物なりと仰られ、今日わりご持ざるはぶたしなみの志輕からず、過代として馬召上られたり、又燒食くれたる伯父も同罪也、甥が若輩なる故、軍の樣子しらずは、万指南して心がけあるやうにこそ致すべき事なるに、今清正が見る前にてわりごくるゝ事一入不屆なりと仰ら

贖銅

過料物

弓、鏃、諸道具ども、悉きらびやかに誘給へ共、皆町人百姓に借物の利錢、或諸侍の過怠錢などにし給ひ、〇下略

〔新加制式〕一雖无道理、無指損之故、企謀訴之輩、可被懸贖銅事、

右式目之趣炳焉也、但或不致奉公、或无忠節之輩、潤分件所領、可預新恩之段、非無其詮乎、自今以後、於企謀訴之輩者、可有贖銅、假令田畠一段、可爲錢一貫、但家財牛馬車船等、可爲件之直半分、若其主令逐電者、以其道具可致其價、則可被付寺社之修理、〇中略

一失物隨見出可返本主事

右件失物、爲本主至令取返者有何妨乎、先可尋究出所、若其人或令死去、或令他出云々、縱雖爲不知身之過、聊盜類難遁之條、相計賣之員數、可出一倍贖銅、若於遠國他境土倉等買得之段分明者、可有差別乎、但難及盜賊之沙汰、於其人體者、非制之限、

〔吾妻鏡四十〕建長二年十二月廿八日己未、下野國大介職者伊勢守藤成朝臣以來至小山出羽前司長村十六代相傳、敢無申儀絕〇中儀絕、恐中絕儀誤、之處、依大神宮雜掌訴所被改補也、於被訴訟事者、以來銅以下贖令解謝訖、被行二罪之條、殊含愁訴之由、長村連々言上之間、可被返之旨及評儀云云、

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年二月六日庚寅、辰剋奧州飛脚參著、申云、去月廿三日出彼國訖、其日未無下著之軍兵、爰兼任等逆賊群集如蜂云云、〇中略共有兼任同意之罪科、無左右雖可被誅、暫被預葛西三郎淸重、可召甲二百領之過料云云、

〔沙石集六〕芳心有人之事

一尾張州ニ山田次郎源重忠ト云シハ、承久ノ時、君ノ御方ニテ打レシ人也、弓箭ノ道、人ニユルサレ、心モタケク、器量モ人ニスグレタリケル者カラ、心モヤサシクシテ、民ノ煩ヒヲ思ヒ知リ、ヨロヅ優ナル人也ケリ、所領ノ内ニ山寺法師アリケリ、八重ツヽジヲモチタリケルヲホシク覺エテ、

一諸奉行儀者、不レ及レ言、上下共大酒禁制之事付醉狂人之事、輕者科錢三貫、重者可レ成敗、人を害打擲仕類者可レ斬レ頸事、○中略

一堺論之事、如何樣も撿地帳次第たるべし、雙方共ニ遂二言上一、沙汰分明上、非分者ニハ爲二過怠一五百貫文可レ出レ之、但雙方申分於レ不二聞分一者、論所之地可二召上一事、○中略

一本道六尺五寸間、可レ爲二二間一、同道事、在々山里浦々共、庄屋堅可二申付一、若道悪時者、其地頭百姓より科錢壹貫爲二庄屋取集奉行中へ可二相渡一事、○中略

一横道堅停止之事、押而通もの於レ有レ之者、科錢可レ爲二壹貫一事、○中略

一竹子折事堅停止、若於二相背一者、壹貫可レ爲二過怠一事、見付申上者、右壹貫爲二褒美一可レ遣事、

一惡口咎之事、依二題目輕重一可レ爲二成敗一、題目輕者、科錢三貫之事、○中略

一牛馬者、四季共放事可二停止一、此上猥在之者科錢百文、若立毛於二損者一、作主へも百文可レ出事、○中略

一火事、常々火用心專一也、類火於レ在レ之者火本者其身應じ科錢あるべし、火本迄之火事は可二逐電一事、幷つけ火は、つけて爲二歴然一者親類迄も堅可二成敗一事、

〔鶴岡事書案〕當郷百姓淨阿彌已下五人逃下候條、罪科難レ遁者也、所詮於二淨阿彌宗同一者、所レ被レ召二上氷河宮免田一也、至二祭禮等一者、先可レ被レ申二付宮大夫一也、於二性法妙吾三郎次郎一者、爲二科料分拾貫文、年内可レ被二取進一之狀如レ件、

應永五年十二月廿一日

〔妙法寺記下〕天文十八年己酉 此年霜月、武田殿、小山田殿談合被レ成候而、地下ニ悉過料錢ヲ御懸候、殊更寺々、禰宜、如何樣成者ニモ押並テ御懸候、去程ニ地下衆歎事無レ限、

〔甲陽軍鑑四品第十二〕利根過たる大將の事附北條家上杉家幷川中島合戰物語の事

一第二番には利根過たる大將也、○中略早合點なる儀は、ひだちうたれぬやうにと思召、武具、馬具、

神社佛寺之修理、若不出過錢者可被召放割分所領、

〔信玄家法上〕

一米錢借用之事、至一倍者、頻可加催促、此上猶令難澁者可有過怠、自然地下人等借錢之處、輕不輩負物、人令無沙汰者、可披露、是亦右同前、○中略

一百姓有隱田者、雖經數拾年、任地頭之見聞、可改之、然者百姓有申旨者、及對決、猶以不分明者、遣實撿使、可定之、若地頭有非分者、可有其過怠矣、

〔甲陽軍鑑十五品第四十三〕於陣所制札○中略

一牛馬取はなし候ば、夫馬は見出し候者とる、乘馬ハ過錢三百疋、上樣御厩衆とる事、○中略

一不淨これあらば繩を張、其陣の近き所より過錢五十文、是も新衆とる事、

〔甲陽軍鑑十九品第五十三〕過錢の事

一高坂彈正存生の時定置候、諸奉公人の科穿鑿なされ、御ゆるしの時、過錢其分領によつて出す事あり、法職へあがり、御中間、御小人、或は新衆などの給分になる、又御陣にての過錢をば、目付横目衆あらため取て、御武者奉行、御旗奉行へ上る、是も御中間、御小人、御道具衆も給る、さて又侍衆、我所領の百姓年貢諸役等に付て惡儀あるは、過錢をもつて地頭へ佗言可仕候、但御國法相背者ハ、大形の科にてゆるし、過錢出し候はゞ、是も御職へさしあぐべく候、かならずわたくしあるべからざるものなり、如件、

天正五丁丑年十二月吉日　高坂彈正書也

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一知行役乍勿論、不寄大小事、堅固可相勤、若材木出普請等、於遲參仕者、日數一倍可爲科役、幷賄已下無沙汰候者、是又一倍にて可有運上事、○中略

過錢

〔新編追加侍所〕一所預置召人令逃失罪科事嘉禎三七廿評
右預置謀叛人之處、其召人於令逃失者、依爲重事、可被召所領也、其已下者、不可處重科、隨輕重可被行過怠也、所謂寺社修理等是也、但逃脫之後、爲令尋求、三箇月者可被延引、若三箇月之內、不尋出者、隨事體可有其沙汰歟、

〔新編追加佛舍〕一勝長壽院僧房連々有鬪亂事、度々及殺害云々、武士之郎從、猶以不及如此之狼藉、何況僧徒之從類哉、則好而召仕武勇不調之輩、專不加禁遏之所致也、加之三昧僧等、偏好事酒宴、併疎其節之由、有風聞、非啻破戒行、剩背尋常之法、自今以後、僧徒之兒共侍、中間、童部、力者法師、構雄劔、差腰刀、一向可停止之、若猶不拘制止、及刃傷殺害者、宜被處主人於過怠、堅存此旨、更不可違犯之由、各可令相觸給之由所候也、仍執達如件、
仁治三年三月三日　　前武藏守泰時
謹上　大藏卿僧正御房

〔新編追加侍所〕一夜討强盜山賊海賊等事乾元二六
彼輩可被斷罪之旨被定置歟、而大略被處流刑之間、或於配所致惡行、或歸本國犯重科、依之預人等、重者被分召所領、輕者被行過怠、匪啻惡黨等倍增、剩御家人佗傺歟、至無所遁之輩者、可處斬罪之旨、可被仰下歟、但於御家人者、經評議可有斟酌歟、

〔新加制式〕一可崇神社敬寺塔事
右○中略有封社不致陵夷、而可加修造專祭祀、恒例神事之時、神役公人等依令懈怠下行物延引式日、神慮尤有恐、自今以後、其日勿闕怠、於彼公人者後日以此科可令出一倍過錢、○中略

一改舊境致相論事
右如式目者、割分訴人領地之內、被付論人云々、當時不合期、然則隨成論之分限、令出過錢、可被付

過怠

過怠トハ、原來過失ノ事ナリ、而シテ其過失ヲ罰スルガ爲ニ錢財ヲ收ムルヲモ亦過怠ト云フ、過怠錢、過料、過料錢、過錢、贖銅、贖財、辨償等ノ名アリ、贖銅ハ、律令ノ側ノ名ヲ取リタルモノナリ、凡テ過怠ハ錢貨ヲ收ムル外ニハ、兵器ヲ徵シ、布帛ヲ徵シ、又ハ馬匹ヲ徵スル等ノ事アリ、又其錢貨ヲ以テ篝屋ノ用途ニ充テ、神社、佛寺、橋梁、道路ノ修繕ノ用ニ充ツルアリ、此餘貧富ノ差ニ由リテ、錢數等ヲ異ニスルアリ、例ヘバ名主ヨリハ三十貫文ヲ收メ、百姓ヨリハ五貫文ヲ收メ、若シクハ其分限ニ隨ヒ、橋ヲ修セシムルガ如キ是ナリ、又日數ニ由リテ差ヲ立ツルアリ、大番ニ遲參シ、及ビ告ゲズシテ休假スルガ如キ是ナリ、又所領ヲ召シ放ツベキニ、之ニ代フルニ過怠ヲ以テシ、或ハ詐僞ヲ以テ人ノ田畠ヲ爭フ者ニ、贖銅ヲ科スルガ如キハ、其多寡並ニ地ノ大小ニ從フ、

過怠ニハ、又官ヨリ令シテ私人ニ納レシムルアリ、亦辨償トモ云フ、刈田ノ罪ニ由リ、多ク田地ヲ加ヘテ被害者ニ入レシメ、竊盜ノ僅ニ百文二百文ニ止マレル者ヲシテ、一倍ノ錢ヲ以テ被盜者ニ納レシメ、借貸返辨ノ期ヲ愆ツ者ヲシテ、過怠分ヲ加ヘテ還サシムルガ如キ是ナリ、

名稱

〔下學集 言辭 下〕過怠(クワタイ)

〔運步色葉集 久〕過怠(クワタイ) 科料(レウ) 過當(タウ) 過貸(クワタイ)(上ノクワタイニ同シ) 科怠(タイ)(上ニ同シ)

過過怠之罪

〔御成敗式目〕一所領得替時前司新司沙汰事

右於所當年貢者、可爲新司之成敗、至私物雜具并所從馬牛等者、新司不及抑留、況令與恥辱於前司者可被處(○處一本作行)別過怠也、但依重科被沒收者、非沙汰之限矣、

放與力同心

放家人號

禁帶刀

去程に右三人の者共〇矢部左近、刑部、遊八郎、を鐵炮にて殺したるを、公廣〇四國寺家の聞え口惜とて、其討手の者三人は切腹し、殘る者は扶持をはなされしよし聞ゆ、

〔松隣夜話〕中越後ノ科人ノ御仕置、一ノ重科ニハ、刀脇差ヲ召取ラレ一代身ニ帶ズ、〇中略五番與力同心ヲ放サル、〇中略長尾右衞門佐ト云侍大將、聊カ無沙汰ノ行跡アルニ依テ、謙信公大ニ咎メ給ヒ、與力同心ヲ召放サレ、所領ヲ取上、〇下略

〔甲陽軍鑑〕品第三十上 三十一一板垣彌二郎、御旗本前備四手の內にて候へ共、時田合戰にて手に合ざるゆゑ、信玄公御腹立ましまして、御書立を被成、板垣彌二郞方へ被指下候、〇中略一諸傍輩に緩怠仕る事と七ヶ條あそばされ、原隼人佐、〇胤長市川宮內助、兩人を以て被仰、同心召上られ候、

〔吾妻鏡十九〕承元四年六月三日己未、昨日於相模國丸子河、土肥小早河之輩、與松田河村一族有喧嘩事、兩方郞從被疵、其後相互籠城之由依令風聞、爲相鎭之、義盛義村奉命行向畢、今日入夜歸參、件輩納凉逍遙之間、頗及雜談、就論先祖武功之勝劣、雖有此鬪諍、應御使諷諫、早成和平、與力衆等退散云云、勇士者收其身、可奉護國家之處、近代諍私武威、動起鬪亂、不忠之至、不可不誡之由、如相州有其沙汰、向後於巧此義者召所帶、永可被放御家人之號旨、以今夜中被下御書於雜色、可付土肥松田等云云、

〔大內家壁書〕蒙御勘氣之仁御定法之事

被放御家人之輩雖為暫時可止出仕、被仰出之旗以同前、事被殺害刃傷、或遁恥辱横難、〇下略

〔松隣夜話〕中越後ノ科人ノ御仕置、一ノ重科ニハ、刀脇差ヲ召取ラレ一代身ニ帶ズ、仙侍以下各別二番死罪、三番追出、四番所領沒シユ、五番與力同心ヲ放サル、六番籠居スル等也、

放扶持

ニ屬シテ忠アリシカバ、義興モ定テ其舊好ヲ忘レジトゾ思ハルラン、サレバ此人ヲ僞テ討ンズル事ハ、御邊ニ過タル人不可有、何ナル謀ヲモ運シテ、義興ヲ討テ左馬頭殿〇足利基氏ノ見參ニ入給ヘ、恩賞ハ宜依請ニトゾ語レケル、〇中略竹澤翌日ヨリ宿々ノ傾城共ヲ數十人呼寄テ、遊ビ戲レ舞歌、是ノミナラズ相伴フ傍輩共、二三十人招集テ、博奕ヲ晝夜十餘日マデゾシタリケル、或人是ヲ畠山ニ告知セタリケレバ、畠山大ニ僞リ怒テ、制法ヲ破ル罪科非一、〇中略此時緩々ノ沙汰致サバ、向後ノ猥藉不可斷トテ、則竹澤ガ所帶ヲ沒收シテ、其身ヲ被追出ケリ、〇中略竹澤潜ニ新田兵衛佐殿〇義興ヘ人ヲ奉テ申ケルハ、〇中略世ノ轉變度々ニ及デ、御坐所ヲモ更ニ存知仕ラデ候ツル間、無力暫クノ命ヲ助テ御代ヲ待候ハン爲ニ、畠山禪門ニ屬シテ候ツルガ、心中ノ趣氣色ニ顯レ候ケルニ依テ、差タル罪科トモ覺エヌ事ニ、一所懸命ノ地ヲ沒收セラル、〇中略某ガ此間ノ不義ヲダニ、御免アルベキニテ候ハヾ、御內奉公ノ身ト罷成候テ、自然ノ御大事ニハ、御命ニ替リ進セ候ベシト、苦(ネンゴロ)ニゾ申入タリケル、〇中略兵衛佐殿モ竹澤ヲ異于他思ヲナサレ、傍輩共モ皆是ニ過タル御要人不可有ト悅バヌ者ハ無リケリ、〇中略竹澤我力ニテハ尙討得ジト思ヒケレバ、畠山殿ノ方ヘ使ヲ立テ、兵衛佐殿ノ隱レ居ラレテ候所ヲバ、委細ニ存知仕テ候ヘ共、小勢ニテハ打漏シヌト覺ヘ候、急一族ニテ候江戶遠江守ト、下野守トヲ被下候ヘ、彼等ニ能々評定シテ、討奉候ハントゾ申ケル、畠山大夫入道、大ニ悅テ、態テ江戶遠江守ト、其甥下野守ヲ被下ケルガ、討手ヲ下ス由兵衛佐〇新田義興傳聞カバ、在所ヲ替テ隱ルヽ事モ有トテ、江戶伯父甥ガ所領稻毛ノ莊十二鄕ヲ闕所ニナシテ則給人ヲゾ被付ケル、江戶伯父甥大ニ僞リ怒テ、態テ稻毛ノ庄ヘ馳下リ、給人ヲ追出、城郭ヲ構ヘ、一族以下ノ兵五百餘騎招集テ、只畠山殿ニ向ヒ一矢射テ討死セントゾ匂リケル、

〇

〔大友興廢記 十六〕矢那刑部丞御勘氣蒙事 附相撲仕并誅せらるゝ事

雜載

右宜任民意之由被載式目畢、而或稱逃毀、抑留妻子資財、或號有負累、以強緣沙汰、取其身代之後、如相傳令進退之由有其聞、事實者甚以無道也、若有負物者、遂結解無所遁者任員數致其辨、不可成其身以下妻子所從等煩焉、

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年二月三十日己丑、信濃國東條庄內狩田鄉領主職、避賜式部大夫繁雅訖、此所被沒收之處、爲繁雅本領之由愁申故云云、

〔玉海〕文治元年十月十七日丙寅、早旦大藏卿泰經、爲院〇後白河御使來門外云、〇註略去十一日義經奏聞云、行家已反頼朝了、雖加制止不可叶、爲之如何者、仰云、相構可加制止者、同十三日又申云、行家謀叛、雖加制止敢不承引、仍義經同意了、其故者、奉身命放君、成大功及再三、皆是頼朝代官也、殊可賞翫之由令存之處、適所浴恩之伊豫國、皆補地頭不能國務、又沒官所々廿餘ヶ所、先日頼朝分賜、而今度勳功之後、皆悉取返、充給郎從等了、於今者、生涯全以不可執思、何況遣郎等可誅義經之由憚得其告、雖欲遁不可叶、仍向墨俣邊、射一箭可決死生之由所存也云々、

〔吾妻鏡十八〕元久三年〇建永元年正月廿七日己酉、故將軍〇源頼朝御時拜領地者、不犯大罪者、不可召放之由被定之、行村爲奉行云云、

〔新編追加雜務〕一爲守獲人號犯科人跡沒收所領田畠事

右此條自右大將家〇源頼朝御時、至于當御式目、守護成敗條條〇仁雖不被載之、勸令沒收事、云本沒收、云新沒收、其訴訟連々出來候歟、謀叛人之跡、猶以不可有守護進退候歟、況於其以下犯科人跡哉、然者令沒收之後、何十箇年以前事者、非御沙汰トモ、又何樣可候トモ、尤可被定下歟、

押紙云、自關東下給者、可停止掠領也、

〔太平記三十三〕新田左兵衞佐義興自害事

畠山入道道誓〇中略或夜潜ニ竹澤右京亮ヲ近付テ、御邊ハ先年武藏野ノ合戰ノ時、彼ノ義興ノ手

闕所

〔家忠日記增補〕慶長四年八月十八日、今年ノ夏ヨリ朝鮮ノ目代評論アリ、甲方ハ竹中貞右衞門尉、毛利民部大輔、乙方ハ福原右馬介、太田飛驒守、垣見和泉守、熊谷内藏介、早川主馬助等也、各伏見ノ城ニ登テ是ヲ訴論ス、德善院玄以、淺野長政、增田長盛、長束正家等、大神君(○德川家康)ノ前ニ列座シテ是ヲ聞ク、五人ノ訴ヘ非義タルニ依テ、各改易セラル、

〔建武以來追加〕御成敗條々(應永廿九七廿六、松田丹後入道常督奉行、)
一役夫工米以下段錢京濟事
差日限、乍捧請文、於不致其沙汰在所者、可被闕所矣、

〔侍所沙汰篇追加〕一故戰防戰咎事(永正十三)
故戰之輩、(○中略)被行故戰之本人於死罪者、至防戰者、被闕所、永不可被免許矣、

〔甲陽軍鑑(十七品第四十七)〕長沼長助長八親敵討事附增城源八郎と同長助長八公事之事
去々年、(○永祿元年)長沼兄弟にも心のむさき事を申かけ、無理なる公事をいたす、又今度もかくの分なれば、諸侍へ見ごりのために、かり坂をこさせよと仰出され、右廿人衆頭笠井平兵衞、三津四郎兵衞、坂本武兵衞、相州甚五兵衞、甘利左衞門丞衆をめしつれ、右增城源八家を闕所仕り、其上源八にかり坂をこさするとなづけ、坂のきはにて搦捕、諸侍へのために逆機(さかはたもの)にあげよとある、

身代召放

〔新編追加(政所)〕一取流土民身代事(正應六五廿五、同卅日、以奉行人豐州被仰下畢、)
右對捍有限所當公事之時、爲令致其辨取身代之條定法也、而或依少分之未進、或以吹毛之咎、取流身代之條、尤不便也、縱雖經年月、償其負物、請出彼身代之時者、早可返與之、無力于辨償、可令流失之旨、其親其主令申之時、相計身代之分限、談傍例於近鄉之地頭代、給與彼直物、取放文之後、可令進退之矣、

〔新編追加(政所)〕一土民去留事

寛元二年八月三日　　武藏守判

謹上　相模守殿

弘安元年

〔御成敗式目追加〕一所領年貢事、遠國者、翌年七月以前、令究濟、可遂結解、近國者、同三月中、可遂結解、雖無未進、期日以前不遂其節者、別納之地者、可落政所、於例郷者、可令改易所帶也、

〔足利季世記四三好記〕畠山卜山ノ事

今年天文三甲午ノ三月ヨリ、紀伊國ノ住人野邊六郎左衞門ト云者有、是モト山〇畠山尙慶ノ命ニ背シカバ、卜山大ニ怒リ、北國エ改易スベキト議セラレケル間、野邊一揆ヲ語ラヒ、己ガ城ニ楯籠ル、

〔甲陽軍鑑九下品第二十五〕晴信公山本勘介問答幷信州戸石合戰之事

三月十〇天文十五年十一日に、御馬入、〇中略其後敎羅石民部を馬場民部に被成、馬乘五十騎預下され、工藤源左衞門を內藤修理になされ、馬乘五十騎預被下、淺利馬乘九十騎預下さる、秋山伯耆に馬乘五十騎、是は甘利備前組の衆、戸石合戰にて、樣子惡き人々御意に背き、改易して坂を越、侍大將衆の同心被官共也、

〔甲陽軍鑑十二品第三十九〕信玄公、國法背きたる者をも人によりて二度までは御免なされ候事、五ケ條は、〇中略

二忠節忠功の武士の子孫などは、御成敗あるべきをも、命をたすけ坂をこさせ、改易の科をば、寺入に仰付られ候、

〔甲陽軍鑑十七品第四十七〕金丸平三郎爲落合彦助被伐事幷長坂源五郎被誅事

此劍に日向大和と長閑〇長坂と對決ありて、長閑負たる故、久敷改易仕、典厩〇武田信豐の御かいはうにて、日向大和とも中を直候、

幕府沒收搢紳家財

改易

一於所々田を畠屋敷仕候事曲事也、然上ハ所務水田同前可召上事、

一あたり地家を作、罷退時者、其年年貢於相澄者、板屋萱屋共家主可付、但彼家主令成敗時者、財寶家共、其主人可取、貢物付而申事あらば、其被官之主人より、地頭へ年貢可相立間、人成敗之時者、其家財寶共可被召上、若年貢在之時者、貢物ハ上より領主へ可被下事、

〔甲陽軍鑑品第四十七〕落合彥助と百姓と公事附雜言并に三法印佗言之事

曲淵が公事のあくる日に、御舍弟逍遙軒被官落合彥助と申者、百姓と公事を仕負て、奉行を惡口申、○中略信玄公聞食、○中略其後奉行衆をめして、彥助仕る公事を委聞召に、非公事なり、○中略足輕衆職衆廿人頭、各落合彥介宿をとりまき申され候、彥介はやく聞付に、にげてきけん寺へ走籠、事類に付而、先命に大事はなし、○中略其後仙海法印、去つかく山の勝覺院、妙王寺の妙音院、三法印の御佗言にて候、信玄公御意には、仙海法印の事は、關東川越よりはる／＼よひこし奉る間、不及是非、國家の仕置の事をもかへりみず、三法印へ對し奉り、命をば助置申べしとて、五六十日有てたすかる、彼彥介罷出る、さりながら家屋敷知行共にこと／＼くめし上られ候、

〔薩戒記〕永享六年六月十三日、抑左相府殿○足利義教政務之後、遭事之輩、已及數多、○中略

前施藥院使季長朝臣被取家井屋敷地、逐電 散位雅長朝臣與季長同事

〔下學集下言辭〕改易カイエキ

〔運歩色葉集賀〕改易エキ

〔新編追加雜務〕一諸國御家人跡、爲領家進止之所々御家人役事、御家人相傳所帶等、雖爲本所進退、無指誤、於被改易者、任先度御教書之旨、可被申子細也、其上不事行者、可被注申關東候、若又當知行之輩、於其咎出來者、以御家人役勤仕之仁、可被改補之由可被執申候、至所者、任先例不可有懈怠之由可被催沙汰之由可令申沙汰給之狀、依仰執達如件、

右博戲之科、禁制惟重、而近年非啻背制符、剩以田地爲賭之由世間有其聞、自今以後、可被停止、若猶令違犯者、早被處重科、可令沒收其賭矣、

〔建武以來追加〕近追

定

一セイセンノギ、京錢ウチヒラメヲノゾク、其外ノトタウ(渡唐)錢、エイラク(永樂)、コウブ(洪武)、セントク(宣德)、ワレ錢但ワレトチラザル錢以下トリ合テ、百文ニ三十二錢ケリヤウ三分一可在之、於向後トリワタスベキ事、

一アク錢賣買儀、一切可停止事、

右條々堅被制止訖、若背此旨族アラバ、權門勢家ノヒクワン(被官)ヲイハズ、於其身者處嚴科、至私宅者闕所ニヲコナハルベキ由所被仰下也、仍下知如件、

永正五八七　　沙彌信祐

近江守三善朝臣貞運

〔看聞日記〕永享九年三月九日、抑開山法師戒淨、有罪科事被召捕、筑紫ヘ被流罪云々、八十餘老法師也、有德者也、家財寶悉被闕所、家ハ宗一撿校ニ被下、財寶ハ正實土藏ニ被預置云々、藏預持俊朝臣有所緣、彼家ニ同宿之間、家具等悉被點、散々式云々、

〔蔭凉軒日錄〕永享十二年九月廿一日、津州罪科人家財、御寄進于寺家之由被仰出矣、　十一月廿日、攝州多田闕所、平瀨入道家財貳千貫文、被寄進于當寺、爲東廊造營也、　廿一日、多田平瀨入道闕所文書、悉正實方贈之、揔門切石分二百貫文、御寄進于當寺、鎭守社遷宮來十二月廿七日、自八幡而可奉移其神之由被仰出、卽命于飯尾肥前守、平瀨跡當年貢、卽御寄進于寺家、

〔信玄家法上〕一藏主就于逐電者、以日記相調、至于錢不足者、其田地屋鋪可取上之、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

收領地付賛主

〔御成敗式目〕惡口咎事

右鬪殺之基、起自惡口、〇中略　問注之時吐惡口、則可被付論所於敵人、又論所事無其理者、可被沒收他所領、若無所帶者、可處流罪也、

一改舊境致相論事

右或越往昔之境、構新儀案妨之、或掠近年之例、捧古文書論之、雖不預裁許、無指損之故、猛惡之輩、動企謀訴、成敗之處非無其煩、自今以後遣實檢使、糺明本跡、爲非據之訴訟者、相計越境成論之分限、割分訴人領地之內、可被付論人之方也、

〔新編追加侍所〕傍例一武藏新羽郷地頭大見肥後三郎二郎定村遺領事

定村嫡子又次郎賴村、與後家平氏賴村繼母相論之時、賴村申云、定村之中陰、追出能僧、打留念佛之條逆罪也云々、平氏可被處惡口罪科之由、依令訴申、被付。。。。。。論所於氏女畢、

正應三　　三番引付　奉行島田民部大夫行衆

頭人遠江入道道四俗時章

沒收田宅資財

〔新編追加雜務〕一西國海賊事

右國々被下知之趣尤神妙、件兵士事者、有對捍之輩者、爲守護人之沙汰、可被注進交名也、於同船事者、依其咎令沒收、令搦進之輩可充給也、其子細被仰含淸實也、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年四月廿五日癸未、以田地爲博奕賭事、於件所者可被召放之由被定、

〔新編追加政所〕一可禁制絹布類短狹事弘長奉行政所

近年以來、絹布類、狹織短裁、猥充疋段之間、併以寸法不足、商人等猛惡也、不可不誡、自今以後短狹物等、不可賣買之、若猶背禁遏之法者、仰奉行人等、殊被加懲肅、可被沒收其物、

〔新編追加侍所〕一以田地所領爲雙六賭事文曆二

幕府沒收將軍領地

とて、新役望訴者無際限といへども許容せざる也、自今以後、ヶ樣之訴訟取次者においては、知行十分一を沒收すべき也、知行なくば給恩と雖可改易也、

一田畠野山境問答對決の上、越度の方知行三ヶ一を可沒收之旨、先條雖有之、あまり事過たる歟のよし、各訴訟に任間答之、牓示境、一はいを以、公事理運之方へ付置べき也、

〔信長記十五上〕信長公東國御進發并勝賴父子討死之事

其子勝賴〇武田亦、忠功ノ家臣モ祿重ケレバ其領地ヲ取上、近習公事ヲ取次事アレバ、理非混亂シ、政ヲスル者ト云ヘバ、欲深ク威ノタクマシカラン事ヲ强テ好シ也、

〔建武式目〕政道事

一京中空地可被返本主事

如當時者、京中過半爲空地、早被返本主、可被許造作哉、如巷說者、今度山上臨幸〇後醍醐扈從之人、不論上下、不謂虛實、大略被沒收云々、如律條者、謀反逆叛之人、協同與駈卒、罪名不同歟、尤被尋究、可差異哉、凡承久沒收之地有其數歟、今又悉被召放者、公家被官之仁、彌可牢籠乎、

〔看聞日記〕永享四年六月八日、抑裏辻大納言入道〇藤原實秀一兩日逝去云々、室町殿〇足利義教御意不快、家領等被召放、令牢籠、大略餓死歟、不便々々、

〔薩戒記〕永享六年六月十三日、抑左相府殿〇足利義教政務之後、遭事之輩、已及數多、從一位有光卿、所沒收所領、不知其行方、〇中略從一位實秀卿、被沒收所領、遂以逝去了、〇中略入道前內府、被止經廻、所領一兩所相違、〇中略前權中納言義資卿、所領悉以被沒收、被止官職、遂以爲夜討被得其首、前權中納言通淳卿、被沒收所領一所、被止經廻、權中納言經成卿、被沒收所領、被止經廻、飛鳥井中納言、被止經廻、被沒收所領一ヶ所、然而被免許、近日出仕無相違、〇中略四辻宰相中將季保卿、被沒收所領、但於出仕者無相違、

被付寺社修理也、到地下人者、可被處嚴科也、使節令緩怠者可有其咎之由、去十九日、於管被仰諸奉行有評定、被載事書一紙被成遣御敎書於山門了、件事書、奉行頭人所令評議也、

〔關八州古戰錄二十〕白河義親新國上總介等事

奥州盤瀨郡長沼ノ城主新國上總介ハ、蘆名盛氏以來、武名響シキ老武タル故、本領ヲモ與ヘラレ、眞田ニモ列セラルベキ內存ニテ召呼レ、會面シ給フ處ニ、新國嬉シサノ餘リニヤ、近習京家ノ輩ニ向テ、前後不合期ナル事共ヲ、田舍ノ訛タル詞ニテ周諄ニ申ケルヲ、殿下〇豐臣秀吉聞召シ不興有テ、聞シニ劣レル倥侗(ウツケ)者ナリトテ、是モ亦采地ヲ收公セラレ浪人ト成シガ、後ニ氏鄕家人トシ、二千石ノ食邑ヲ授ケラレケリ、

〔奥羽永慶軍記三十五〕和賀薩摩守滅亡附嫡子又二郎二男又四郎事

カクテ又四郎緣ヲ求メ、同國江刺ノ郡水澤ノ城主白石若狹守ヲ賴ミ、政宗ノ方ヘ訴ケルハ、某累代和賀ノ郡主タリトイヘドモ、先年父ニテ候薩摩守ガ代ニ、太閤秀吉公ノ命ニ背キ、所領沒收セラレ、夫ヲ南部信直ニ賜リケレバ、年久シク牢浪ノ身ト成テ、爰彼ニ蟄居致シ候、

〔松隣夜話中〕越後ノ科人ノ御仕置、一ノ重科ニハ刀脇差ヲ召取ラレ一代身ニ帶ズ、但侍以下ハ各別二番死罪、三番追出、四番所領沒收

〔今川記五かな目錄追加〕一出陣の上、人數他の手へくはゝり高名すと云共、有法度之間、不忠之至也、知行を沒收すべし、無知行は被官人を相放すべき也、軍法常の事ながら猶書載也、

一各困窮せしむるにより、德政の沙汰にあらずといへども、或年期をのべ、或以連々辨濟之事、誠に非分之至也、如增善寺殿〇今川氏親時かたく停止之、如此相定上、訴訟のよし取次申出る者においては、知行三分一を可沒收、訴訟人之事は、一跡を改易すべき也、

一分國中諸商賣の役之事、自先規沙汰し來る事は、乍不便了簡に不及也、今に至てのがれ來る事

〔關東評定傳〕建治二年丙子

評定衆　左衛門尉藤原時盛法師　建治二年九月遁世、偸入壽福寺、同十五日所帶悉收公、

〔太平記〕三十六頓宮心替事附畠山道誓事

去々年ノ冬、畠山入道〇道誓南方退治ノ大將トシテ上洛セシ時、東八箇國ノ大名小名、數ヲ盡シテゾ上リケル、此軍勢長途ニ疲レ、數月ノ在陣ニクタビレテ、馬物具ヲ賣位ニ成シカバ、怺兼テ畠山ニ暇ヲモ不乞、拔々ニ大略本國ヘ下リケル、遙ニ程經テ畠山關東ニ下向シテ、彼等ガ一所懸命ノ所領共ヲ沒收シテ、歎ケ共耳ニモ不聞入、適披露スル奉行アレバ、大ニ鼻ヲツカセ追込ケル間、訴人徒ニ群集シテ、愁ヲ不懐ト云者ナシ、

〔太平記〕三十九諸大名讒道朝事附道譽大原野花會事

此遊洛中ノ口遊(ズサミ)ト成テ、管領〇足利高經ノ方ヘ聞エケレバ、是ハ只我申沙汰スル將軍家ノ花下ノ會ヲ、カハユ氣ナル遊哉ト欺ケル者也ト安カラヌ事ニゾ被思ケル、乍去是ハ心中ノ憤ニテ、公儀ニ可出咎ニモアラズ、哀道譽〇佐々木何事ニテモ就公事犯法事アレカシ、辛ク沙汰ヲ致サント心ヲ付テ被待ケル處ニ、二十分一ノ武家役ヲ道譽兩年マデ不沙汰間、管領スハヤ究竟ノ罪科出來ヌト悅テ、道譽ガ近年給リタリケル攝州ノ守護職ヲ改メ、同國ノ舊領多田庄ヲ沒收シテ、政所料所ニゾ成タリケル、

〔建內記〕永享十二年三月十七日、赤松伊豫守義雅〇義則子、大膳大夫入道性具弟也所領悉所沒收、被宛行舍兄入道并細川右馬助小屋野拜領云々赤松伊豆入道等、

〔康富記〕寶德三年七月廿四日庚申、依招引向飯尾肥前入道許用朝飡、語云、山門衆徒、動猥令動坐神輿、閉籠堂舍、致嗷訴、剩近日招寄賊徒於山上、於結界地致合戰、企殺害、每度御裁許非無其煩、於向後者、以支證可經訴訟也、若不事問動坐神輿、閉籠堂舍者、尋究張本人、到衆徒者、追捕其身、沒收所帶、可

被召之處稱亂入領內、乃御使面縛云云、仍罪科重疊之間、被召放所帶等之上、早可進件雜色之由、今日被仰下云云、

〔吾妻鏡七〕文治三年九月廿七日乙丑、畠山二郎重忠爲囚人、被召預千葉新介胤正、是依代官眞正之奸曲、大神宮神人長家綱訴申故也、代官所行不知子細之由雖謝申之、可被收公所領四箇所云云、

〔吾妻鏡九〕文治五年十月廿八日甲寅、景時〇梶原申云、安藝國大名葉山介宗頼、依伊澤五郎催、爲奥州御下向御供、卒勇士參向之處、於駿河國藁科河邊、聞已御進發之由、自其所歸國訖、自由之至也、無誠御沙汰者、自今以後傍輩之所思如何云云、仍可被收公宗頼所領等之由被定云云、

〔吾妻鏡十三〕建久四年六月三日戊戌、御狩之間、常陸國久慈輩候御供之處、怖畏成〇曾我等夜討逐電畢、仍被收公所帶等云云、

〔吾妻鏡二十六〕貞應三年〇元仁元年閏七月廿九日、伊賀式部丞光宗坐事、改政所執事職、被召放所領五十二箇所、

〔關東評定傳〕正嘉元年丁巳

評定衆　式部大夫藤原光宗法師法名光西正月卒　伊賀守朝光男、任式部丞、元仁元年六月坐事、隱岐入道行西預之、止政所執事、所帶五十二ヶ所收公、嘉祿元年免許所帶八ヶ所被返之、

〔新編追加侍所傍例〕一紀伊七郎左衞門尉重經所領、丹後國之地頭得分物、以同所領夫令運上鎌倉之處、件夫丸下著鎌倉、於米町之邊見付彼持逃夫丸、擬召捕之處、夫丸逃走之間、重經下人追懸之刻、入將軍御所御臺所、重經下人猶以追懸之間、晝番已下人々群集、云重經下人、云夫丸、召取之申事由之間、御尋之處、子細無相違、但主人重經雖不知此子細、追入御所之條、緈已爲勝事之間、主人猶難遁其科之由有御沙汰、即被召重經丹後所領畢、

此事寛元中之比、武藏前司殿御時事歟、云所領主名字、云年月、委可尋記也、

於死罪者、至防戰者被闕所、永不可被免許矣、

〔新加制式〕一相論之時出證人事

右雙方共令領解、出證人、既糺明之處、元理之一方、重而可出別之證人旨、雖謝申之不可有擧用、將又件證人、以最員掠申之段顯著者、隨其咎、或被沒收所領、或可被行死罪、

一被官人罪科懸主人否事

右被官人重科之時、猶於拘惜者、主人可懸咎、仍三ヶ年可被沒收所領半分、但爲決實否、暫相拘其人者非主人之過、然者犯科治定之時、隨咎之輕重、爲主人可加成敗、若及其期、咎人逃脫之旨雖申之、主人可懸其咎也、

一以御恩地入質物事

右要用之時、以給地入質物事、雖爲制禁、无力之族、失途口之條、以憐愍之儀、限三ヶ年而可有宥恕哉、然者借用人錢主人、過此年紀而互於申合者、可被召放彼所領、次其主三ヶ年中、不慮令斷絶者、可爲錢主之費、但最前對其主人、遂案內者、可爲錢主之計、

一結黨類互令盟誓事

右令群集、結黨類者、違背上、强張下之謂也、不可不誡、若有結黨盟誓之儀、沒收面々之所領、可被追却分國、

一被官人及攻戰其咎懸主人否事

右件被官人、遂糺明、令成敗者、主人不可懸其科、但无咎之旨、主從同心陳申之處、犯科露顯者、主人可懸其科也、仍三ヶ年中、可被沒收所領半分、就中被官人之科、內々雖令糺明、依不一決、暫雖申其旨、主人无私曲之段分明者、難謂同科乎、然者主人、果而彼被官行重科、以一禮可散其憤、

〔吾妻鏡二〕治承五年(〇養和元年)三月廿七日癸卯、片岡次郎常春、依有謀叛之聞、遣雜色於彼領所下總國、

者不能改補、前後年貢、可避渡下地於本所之、子細同前焉、若背此法、於割分之地、領主等致違亂者、任先例可被取公彼所領矣、次依他罪科被召所領事、未進相積之由、雜掌經訴訟之剋、地頭等不慮被沒收件所領者、新給人治定之時、可分付下地之子細、相同初段焉、

〔建武以來追加〕諸國狼藉條々貞和二十二十三沙汰

一亂入他人所領、致非分押領輩事

不帶補任裁判公驗、不待使節之遵行、無左右致亂入狼藉之條、造意之企太以無道也、不可不誡、向後堅可停止此儀、若有違犯之族者、云本人、云與力人、可收公所領三分一、無所帶者可處流刑也、

一苅田狼藉事

任先例為檢斷之沙汰、加嚴制可注進子細、所犯治定者、可被分召所領五分一也、無所帶者可處流刑焉、次與力人事、子細同前矣、

一號一揆衆致濫妨事

近年或押領他人之所領、對專使妨遵行、或為散私宿意、率黨類及合戰云々、造意之企雖遁重科、所詮就守護幷使者注進、須處罪科、但隨事體可有輕重焉、次使節難澁咎事、可被分召所領五分一也矣、

〔建武以來追加〕一寺社本所領事觀應二六十三御沙汰

諸國地頭御家人以下輩、押領所々之條、濫惡之至不可不誡、所詮嚴密可停止其妨、若不被用者、可被收公所領半分、押領已後得分物、同可返進之、無所帶者可處遠流焉、次武家輩所領事、子細同前、次使節事、守御敎書日限、沙汰付下地、可執進請取狀、令遲怠者、於守護人者改補其職、至御家人者可被分召所領三分一矣、

〔侍所沙汰篇追加〕一故戰防戰咎事永正十三

故戰之輩、依刃鬪殺、悉被收公所帶者、於防戰之族者、任先例可分召所帶半分、若又被行故戰之本人

〔御成敗式目追加〕一關東御領知行後家幷女子事

右後家女子、令在京之條不可然之間、向後可停止、若於背制法者可被收公所領也、

〔新編追加雜務〕一隱置惡黨於所領内輩事弘安九二五

自身者、關東參仕之間、在國事不聞及之由依令申之、前々遁罪科歟、於自今以後者、令隱置惡黨於所領内之由令露顯者、自身雖不在國、可被召所領三分一也、但來住所領百日計居住之族、雖爲惡黨不存知之間、鎌倉參仕之仁不可及罪科、至代官者、爲在國之間、依不可遁其咎、仍永不可召仕之、若猶召仕者、主人可有其科也、正員又令在國者、雖爲百日居住之浪人可被改所帶、

〔式目抄三〕一謀書罪科事

一謀書其犯令露顯者、諸大夫以上者、准贖銅儀可被收公所領、於無知行地之輩者、可被解却官職、至侍以下及諸雜掌者、可被禁獄其身、

〔建武以來追加〕一諸國守護人以下使節緩怠事康永三七四御沙汰

或可沙汰付下地之旨被仰下、或可催上論人之由觸遣之處、遵行遲引之條、甚以不可然、向後於難澁使者者、須被收公所帶矣、

〔建武以來追加〕一苅田狼藉事

爲檢斷方沙汰可有糺明之、所犯令露顯者、可被召放所領三分一歟

〔建武以來追加〕一國司領家年貢對捍地事貞和二十二十三沙汰

就貞永式目有其沙汰、地頭以下領主不應裁許之日、雖改補所職、本所年貢失墜之條背理致歟、仍自今以後及下知違背之期者、收公彼職、補新司之時、可分付前司未濟五分一相應之地於本所也、次後年年貢事、無同時之裁斷者、相論亦不可休之間、勘合每年分限、彼是共限永代、分付下地於本所之後、一向止地頭之所役、相互可全知行、但於今年以前分者、近年擾亂、諸人窮困之間、以寬宥之儀至所職

一依無道理不蒙御裁許之輩爲奉行人偏頗之由訴申事

右依無其理不關裁許之輩、爲奉行人偏頗之由構申之條、太以濫吹也、自今以後、構出不實企濫訴者、可被收公所領三分一、無所帶者可被追却、

一密懷他人妻罪科事

右不論強奸和奸、懷抱人妻之輩、被召所領半分可被罷出仕、無所帶者可處遠流也、

一關東御家人申京都望補傍官所領上司事

右右大將家（賴朝○源）御時、一向被停止畢、而近年以降、企自由之望、非啻背禁制令罩喧嘩歟、自今以後、於致濫望之輩者、可被召所領一所也、

〔式目抄　五〕嘉禎元年七月二日癸亥、所職所帶幷境相論事、非據者可被召所領、無所領者可被處罪科之旨、兩方召取請文之後、可糺明之由被定、且被仰六波羅了、

〔新編追加　政所〕一凡下輩不可買領賣地事（延應二四四廿五同日　二五廿五）

右以私領令沽却事、爲定法之由先度雖被書載、自今以後者、縱雖爲私領、於賣渡凡下之輩幷借上等者、任近例可被收公彼所領也、又雖爲侍已上、非御家人者不及知行、

〔吾妻鏡　三十四〕仁治二年六月十六日壬申、諸人預置謀反人之時、令逃失者、依爲重科可召放所領、以其所持物等可被付寺社修理之由有議定、但逃脫之後、三箇月者可延引、過其期者、隨事體殊可有其沙汰之由仰侍所司、普可被相觸云云、

〔御成敗式目追加〕一依當知行仁罪科被召所領事（文永十一六一）

右一期知行之輩、依罪科被召所領之間、未來之領主、雖無其誤、永侘傺之條、爲不便歟、若繼母兄弟、幷他人等、爲一期之領主、有罪科被召彼所領之時者、可充給向後之領主、但祖父母父母之後、子孫可知行之所者、雖爲一期知行之仁罪科可被收公也、

廿八日、鴨前祐宜、禰宜信祐等、祐躬孫事、不可有相違云々、此趣可申室町殿云々、六月二日、未剋許參室町殿、祐躬孫事申、勅答之趣(申次大館少弼尚氏)無相違之條相畏申、御申之旨、被心得申候由有御返事、

申詞

祐躬縣主孫事申之上者、可被加社司、於知行分者被付造營候間、難被返下、已後不可成競望之由、可被召進請文云々、

〔御成敗式目〕一依夫罪科妻女所領被沒收否事

右於謀叛殺害并山賊海賊夜討强盜等重科者、可懸夫咎也、但依當坐之口論若及刃傷殺害者、不可懸之、

一代官罪過懸主人否事

右代官之輩、有殺害以下重科之時、件主人召進其身者主人不可懸科、但爲扶代官、無咎之由、主人陳申之處、實犯露顯者主人難遁其罪科、仍可被沒收所領、至彼代官者、可被召禁也、兼又代官或抑留本所之年貢、或違背先例之率法者、雖爲代官之所行、主人可懸其過也、加之代官若依本所之訴訟、若就訴人之解狀、自關東被召之、自六波羅被催之時、不遂參決猶令張行者、同又可被召主人之所帶、但隨事體可有輕重也、

一承久兵亂時沒收地事

右致京方合戰之由依聞食及、被沒收所帶之輩、無其過之旨、證據分明者、充給其替於當給人、可返給本主也、是則於當給人者、有勳功奉公之故也、次關東御恩輩之中、交京方合戰事、罪科殊重、仍即被誅其身、被沒收所帶畢、而依自然之運遁來之族、近年聞食及者縡已違期之上、尤就寬宥之儀、割分所領內、可被沒收五分一、但御家人之外、爲下司庄官之輩、交京方之咎縱雖露顯、今更不能改沙汰之由、去年被議定畢者、不及異議、

伊勢可申付奉行云々、

〔親長卿記〕文明十年八月廿二日、重則申祝職事、尋重俗縣主（重則父也、北小路殿被執申也、）難辭退之由申之、仰假殿用脚未進緩怠之間、以次可被改替歟、但父職被召放、可被補子之條如何、但彼用脚致其沙汰者、只今事者可被指置、不然者重則可致其沙汰歟、可相尋云々、鴨社前社務祐躬縣主、先度社務職競望之時、假殿用脚萬疋、可進上由申之不致其沙汰、殊三月三日神事闕怠之間、被改職了、競望之時、請文若致無沙汰者、私領等可被召放云々、其後度々雖及御沙汰、不便之間于今予無沙汰、今日又有仰、無力事也、可加下知之由申入了、　九月四日、及晚參內、北小路殿御申賀茂祝事、（可被任補重則事、）假殿用脚事、無所帶、去々年社司致約諾、社頭及回祿、依其科條可被召所帶之由被仰出之處、歎申之間、然者年々造營中、私領之內、依分限可進公用之由被定仰了、其內祝重俗于今一錢不及其沙汰、仍被改祝職也、（且重則事、）任祝、於重俗者、猶其用脚不致沙汰者、可被召所帶之由可仰云々、（北小路殿被執申之故也、）於重則者、非其人數雖任祝、於所帶者、非知行、只渡領許也云々、申所有其請、然者先可被（鴨社）祐躬縣主所帶事、去年競望禰宜職之時、造營用脚萬疋可進濟、（去年當年之內、）若有無沙汰者、可被召放私領之由進請文、去年當年一向不及沙汰、結句去二月晦日神事闕怠了、其時被改職了、任請文之旨、同可召放所帶之由、去三月被仰出了、予申令無沙汰、重去月被仰出之間、去二日申付禰宜祐香三位了、申畏存之由、

〔親長卿記〕文明十八年三月十六日、依召參內、仰云、昨日自室町殿（○足利義尚）被申、故祐躬遺跡事、先年祐躬就有不義事被處御罪科了、今度申狀、故祐躬就申之儀、故梨木祐香掠申之間可申披云々、其時已被經御沙汰、就有過被罪科之處、今可申披何事哉、御不審也、於知行分者、被付造營之間、被返遣之由可申云々、又可仰本人、有可申子細者、何不申此御所之御執奏哉、　五月廿五日、參內、（○中略）先仰云、昨日申、鴨祐躬跡事、可被加社司事不可有相違、分領事者、被付造營之間、難被返付、先可尋一社云々、

名稱

沒收領地

〔運歩色葉集 毛〕沒收

〔式目抄 二〕暦應三年符云、以不知行地稱當知行、掠給院宣輩ノ事、此罪條准贓銅、可被分召所領、

〔勘仲記〕建治二年十一月七日丁酉、後聞、雅憲朝臣自南都上洛之間、於小山邊衆徒讃岐房辨尹抑留權倘書、至東大寺手搔門上、歸於此所自馬引下、可召出院雜色由譴責云々、辨再三固辭之處、辨尹可與恥辱之由示之、其後雅憲朝臣遣使者、召出院雜色包弘、其後雅憲朝臣得身暇上洛、包弘爲辨尹被打擲蹂躪、大略及死門、此事之濫觴、宿院領松武名名主職一條、於殿御時、南曹辨定藤朝臣、成敗辨尹、而改彼、又成敗賴實、院雜色包弘者、彼名奉行者也、爲散此宿意及狼藉歟、不知子細也、雅憲朝臣逢不慮之殃、思違定藤朝臣之條、可謂不便歟、件之狼藉、先規頗希、朝威之輕忽、其恐不少者也、 十日庚子、參殿下、〇藤原兼平 辨尹狼藉事、院雜色等列訴捧申狀、所歎申也、被召定藤朝臣、此事有御問答、以雜色等申狀可奏聞由被仰下畢、辨退出、 十一日辛丑、參殿下、終日祗候、定藤朝臣參、申辨尹狼藉勘答、可有計御沙汰之趣也、可召進三人輩由可仰寺家云々、予〇藤原兼仲 書御敎書所給定藤也、件狀云、

辨尹幷舜長宗圓等、不日召進其身、於所領者、盡可沒收、由可被仰遣寺家者、依殿下御氣色、執啓如件、

十一月十一日　　治部少輔兼仲

謹上　右中辨殿

〔親長卿記〕文明八年八月廿三日、拂曉軍勢等徘徊、尋子細之處、發向賀茂、在京社司氏人等張行云々、午刻許社頭放火、氏人數十人被殺害、自去年度々雖及大變、社頭放火之條不可然之間、種々御下知等令猶豫之處、不及御下知、社司氏人等令發向社頭、成亡所之條存外事也、 廿四日、參內、召勸修寺大納言、廣橋大納言等談合賀茂事、依仰也、先被申武家、追可有御沙汰之由申之、子細被改社務職、於在京社司氏人者、各被召放所帶一所、可被付造營云々、此趣被進、今又勸修寺大納言御使此子細仰

古事類苑

法律部二十

中編

沒收

放扶持
禁帶刀〔併入〕　放與力同心　放家人號

沒收ニ、領地ヲ沒收スルト、田宅資財ヲ沒收スルトノ別アリ、領地ヲ沒收スルヲ、召放所領トモ、收公所帶トモ、改易所帶トモ、闕所トモ云フ、收公トハ、之ヲ朝廷ニ收ムルヨリ出デヽ、廣ク政府ニ收ムルヲ云フ、所帶トハ官職ヲモ云ヘド、多クハ領地ヲ云ヘリ、改易トハ甲ノ所有ヲ以テ、乙ニ與フル事ヨリ出デヽ、多ク沒收スル事ニ用ヰタリ、闕所トハ主ナキ地ヲ云フ、而シテ此頃ハ所領ヲ沒收セラルヽヲ、被闕所、被行闕所、可闕所ナドモ云ヘリ、サテ領地ヲ沒收スルニハ、一分、五分、全分、幾所ナドノ別アリ、又年限ヲ立テヽ、其間沒收スル事アリ、代官ノ罪過ニ由リ、其主ノ地ヲ沒收スル事アリ、而シテ領地ヲ沒收シテ遠流ニ處スルコトハ、流罪ニ管國ヲ追却シ、若シクハ所職ヲ奪フコトハ、追放篇解免官職篇等ニ載セタリ、參看スベシ、田地ヲ沒收スルモ、家財ヲ沒收スルモ、亦領地ヲ沒收スル類ナリ、身代召取ハ平人ニ科スル刑ナリ、

要スルニ、沒收ハ、其所有ヲ奪フニ外ナラズ、其所有ヲ奪フニハ、又扶持ヲ放ツアリ、俸祿ヲ與ヘザルナリ、與力同心ヲ放ツアリ、與力同心ヲ放ツトハ、武士タル者ヲ罰シテ、其部下ノ士卒ヲ奪フナリ、帶刀ヲ禁ズルアリ、帶刀ヲ禁ズトハ、武士ノ資格ヲ褫フモノニシテ、上杉氏ニ於テハ、之ヲ以テ武士ノ極刑ト爲シ、此ヲ死罪ノ上ニ置ケリ、今ハ此類ヲ沒收ノ下ニ收ム、

古事類苑

法律部二十

中編

沒收 放扶持 放與力同心 放家人號 禁帶刀 併入

過怠

加へられ、籠舍させ御申なさるゝ、其後長坂長閑子息長坂源五郎御成敗也、義信公御乳母曾根周防、横目の荻原豐前に被仰付、然も放し討に御成敗也、此外太郎義信公の衆八十騎餘あるを御成敗候て、其外は他國へ追はらひ給ふ、中に、雨宮十兵衞と云侍小田原へ走、三年罷在內七度大剛なる武篇仕、〇中略三年目卯の年の暮に召返さるゝ、

〔甲陽軍鑑十八品第四十八〕信州岩村田法花宗の僧公事之事

經文相違の出家を、其儘おかばいかゞなり、經に背ざる樣に心ざし、他國へまゐり出家を立べし、我分國をはらへとて、靑沼介兵衞、市川宮內助兩人に被仰付、其遠國をたゞし、能登國へぞ送られける、

〔最上義光物語二〕惡屋形光安滅亡事

加樣の惡行をなす事、前代未聞の曲者也、然共武田兵庫子備前去年象山にて討死しける、其忠義有之間命之段者免し置なりとて、國中を追放被成也、無是非庄內へ遁行惡屋形光安を賴けるに、光安も備前が〇武田右之樣子を委く聞くに山形へは二度歸る者にあらずとて、則近習に召仕給ふ、

〔甲陽軍鑑十二品第三十九〕國法軍法に背心むさく、善惡の辨もなく、後闇して諸傍輩善惡の儀、わるく證據もなきにそしり、能證據もなきにほめ、人の足本を守、輕薄なる奉公人の、役にたゝざる者をば戯者揃ひに被成候は、御道理至極なり、必主君の國法軍法そむく輩は、臆病なる人也、

ぞ流しける、

〔大內家壁書〕御勘氣之仁不ㇾ可ㇾ有ㇾ方人事

蒙₂御勘氣₁之族事、卽時可ㇾ被ㇾ追₂放御分國中₁也、○中略此旨爲₂諸人存知₁壁書如ㇾ件、

明應四年乙卯八月日

〔今川記五かな目錄〕一夜中に及、他人の門の中へ入、獨たゝずむ輩、或知音なく、或は兼約なくば、當坐搦捕、又ははからざる殺害に及ぶとも、亭主其あやまりあるべからざる也、兼又他人の下女に嫁す輩、かねて其主人に不ㇾ屆、又は傍輩に知さず夜中に入來ば、屋敷の者其咎かゝるべからず、但糺明之後、下女に嫁す儀於₂顯然₁之、分國中を追却すべき也、

〔松隣夜話中〕越後ノ科人ノ御仕置、一ノ重科ニハ刀脇差ヲ召取ラレ、一代身ニ帶ズ、但侍以下ハ格別二番死罪、三番追出、

○按ズルニ、是亦領國外ニ追放スルナラン、

〔甲陽軍鑑四品第十二〕利根過たる大將の事

永祿十一年辰の暮に、信玄公駿河へ發向ましますさて右申利根の過たる大將、大方義信公○武田にて御座候、子細は地下へも種々貪たる事を仰られ、古屋惣二郎と申者を惣算用聞になされ、さまざまの事有て、百姓町人のよめ子共まで、在々所々に隱置、無行義千萬の儀共有て、古屋惣二郎を始、義信公の衆廿八人首をきらる、其外は皆他國へはらはるゝ、是も永祿八年、飯富兵部少輔切腹の時如ㇾ此、

〔甲陽軍鑑十下品第三十二〕一永祿八年乙丑正月、飯富兵部少輔御成敗被ㇾ成候子細は、○中略義信○武田若氣故恨なき信玄に逆心をくはだてさする談合相手の棟梁に兵部成候事、此五ヶ條○御書略ス御書立を以て飯富兵部御成敗也、太郎義信公○中略御成敗なさるべく候へ共、信玄公よりは御慈悲を

○按ズルニ、信長記及ビ織田信長譜ニハ、遠流ニ處ストアリ、

追放無所帶者

〔御成敗式目〕一謀書罪科事
次以論人所帶之證文、爲謀書之由、多以稱之、披見之處、若爲謀書者、尤任先條可有其科、又無文書之紕繆者、仰謀略之輩、可被付神社佛寺之修理、但至無力之輩者、可被追放其身也、

一依無道理不蒙御裁許之輩、爲奉行人偏頗之由訴申事、
右依無其理不關裁許之輩、爲奉行人偏頗之由構申之條、太以濫吹也、自今以後、構出不實企濫訴者、可被收公所領三分一、無所帶者可被追却、

〔大內家壁書〕鷹餌鼈龜禁制事
爲鷹餌不可用鼈龜并蛇也、既爲氷上山仕者、儼然之處、不存其憚之族、忽神罰不可遁也、於自今以後堅固所加制止也、鳥屋飼以下之時、以禽獸計不飼得者、鷹不可所持也、若猶背此禁制、有求鼈龜之族者、至侍者可被收公恩給地、無所帶者、則可被追放也、至凡下之輩者、隨見出聞出、即時於其塲、或留置其身、或隨事之體可討戮之由、所被仰出也、仍壁書如件、
長享元年九月日

幕府追放措辭

〔親長卿記〕文明二年九月八日、右少辨資基朝臣(前內府光公男)有子細自武家有追出、可及生涯之由、前內府申之、死罪事有申宥人云々、無先規歟、朝家零落了、

大名城下追放

〔愚耳舊聽記〕尾崎三目內逆臣之事
逆心に組し打死仕たる者共の妻子、男子は十三以上を斬罪に被仰付、十二より七つ迄は、御領分御追放、七つより下は、男子たりといふ共、御城下計の御追拂、女子に至ては、御城下に罷在共不苦と被仰出たりければ、御敵をなしたる者共の子共なれば、乳ふさをはなれぬもの迄も死罪とこそ被仰出べきと、各々覺悟せし處、十三以下御追拂と被仰出し事、難有御芳情とていづれも涙を

見スルノ處、武田乘堅ク守ルヲ以テ、早々引取、其時靑沼新九郎ト云、謙信寵愛ノ小性、遠筒ニ當テ疵ヲ蒙リ、翌日前橋ニ於テ死ス、〇中略謙信公佐渡ヨリ御歸城坐シ、新九郎御暇ヲ申サズ、忍テ在所ヘ罷歸リ、剰ヘ多日逗留致シ、是非ニ及ヌ由、大ニ怒リ給ヒ、堀埋タル新九郎ガ屍ヲ引出サセ、首ヲ斬リ獄門ニ掛ケ、父子兄弟悉ク御追放アリ、

〔總見記二十〕佐久間信盛御勘氣事

八月〇天正八年十二日、大臣家〇織田信長御動座、宇治橋御覽有之、其後御船ニ召サレ、直ニ大坂ヘ御着有之、是ニ於テ佐久間右衞門尉信盛、同甚九郎御勘氣ヲ蒙ル、罪科ノ儀御自筆ニ書付ラレ仰出サレ候畢ヌ、〇箇條略ス御使楠長諳齋、宮內卿法印、中野又兵衞三人ヲ以テ佐久間右衞門父子方ヘ遣ハサレ、父子トモニ早々遠國ヘ退出仕ルベキ旨仰渡サレ、御知行已下悉ク召上ラレ候、

〔信長公記十三〕天正八年八月十七日信長公大坂より御出京、京都ニ而御家老林佐渡守、安藤伊賀父子、丹羽右近、遠國ヘ被追失、子細ハ先年信長公御迷惑の折節、含野心申之故也、

〔總見記二十〕林佐渡守追放幷自諸國注進事

同月〇天正八年八月十八日、大臣家〇織田信長大坂ヨリ御歸洛、京都ニ於テ御逗留中、御家老林佐渡守、西美濃ノ安東伊賀守父子御知行被召上、其身御追放仰付ラレ候、此ノ佐渡守、去ル弘治年中、未大臣家御若年ノ刻、弟ノ美作守一味シ、謀叛ヲ企、敵對申候譜代ノ老臣、似合ザル惡逆、雖然降參ノ上赦免セラレ、天下漸治ルマデ召仕ハレ候、今度此罪科ヲ以テ御糺明ノ上ハ、一命ヲ失ハルベキ儀、本意ニ候ヘドモ、先年謀叛ノ節、美作守宅ヘ大臣家御來臨ノ處ニ、美作守ハ是ヲ伐奉ルベキ由申ス、佐渡守其儀ニ不忍、諫爭シテ伐奉ラズ、終ニ以テ御安全ト云々、是ニ依テ今度御仕置ノ節、佐渡守一命相助ラルヽ者ナリ、安藤伊賀守ハ濃州西方三人衆ノ隨一トシテ、度々軍忠アリトイヘドモ、先年甲州武田信玄ニ內通シ、密々逆意ヲ挾ムノ儀、其紛ナキニ依テ、今以如斯追放セラレ候畢ヌ、

應永二年七月廿三日

○按ズルニ、本文及ビ次下二條ハ、足利氏ノ時、鎌倉ニテ處刑セシナリ、

〔鶴岡事書案〕野村頓學坊分百姓了道以無理强訴上於下地之間、任衆中一同之法可拂彼在所之由落居候、努々不可有緩怠之儀之狀如件、

應永四年十二月日　　法印

佐坪政所殿

〔喜連川判鑑〕應永二十二年四月、常陸越幡六郎在鎌倉病氣間出仕ヲ止ム、近臣ノ讒ニ依テ領知ヲ沒收シ、其身ヲ被追放、管領上杉氏憲入道禪秀諫レドモ無御許容、自是禪秀所勞ト稱シテ籠居ス、

〔大内家壁書〕諸人之被官公役被定御法事

就御動座（○足利義稙ノ近江ニ赴キ六角高瀨チ擊ツチ云フ、）依去年御上洛任先例、於赤間關御座船之事、被仰付之處以浦役錢可致進調之由地下仁申請之間、被任懇望畢、然間彼等以相談令支配當關地下中之處、或號寺僕、或號武家被官令難澁出錢候事、地下愁訴一同云云、所詮如此之族、於令違背公役者、可被相支當關住居之由被仰出、若及違亂者、云在所云交名、隨注進之左右、殊可有殊御成敗之、總別於所々先御代以來、此御定法歷然之處、動假其主之號令輕御下知、爲遁公役申亂子細之輩、自今以後可令追放其所也、右御定法事、不可限當關一所、可爲御分國中此準據之由、堅固所被仰下也、仍執達如件、

延德四年（○明應元年）五月二日　遠江守前司（判）正任

木工助（判）弘依

三河守前司（判）重行

杉信濃守殿

〔松隣夜話〕中同七月（○永祿七年）柿崎和泉、北條丹後、上州下分ニ働キ、毛作ヲコチテ、夫ヨリ和田ヘ取詰、邁

幕府管國追放

〔吾妻鏡三十八〕寛元五年六月廿五日丙午、若州以下亡卒後家等、可有活命御計之由、及御沙汰、且不可居住鎌倉中之旨可召仰彼輩云云、信濃民部大夫入道行然、平左衛門尉盛時等爲奉行、

〔吾妻鏡脱漏〕嘉祿三年（○安貞元年）三月十九日戊辰、去九日謀反人事、有評議、或是不足言事也、造意之企、還不能信用、且物狂之所致歟、關東御分郡郷可被追放之由、有意見、或民間野心、殊以難被宥刑法、爲向後懲惡、可被行斬罪之旨申之、遂罪名落居之間、二位家（○源頼朝）第三年之御佛事以後可有沙汰云云、

所住地追放

〔新編追加雜務〕一依違背地頭咎、所召置庄官百姓等事、

於自今以後者、不及召誡其身、所詮罪科無所遁者、不可居住其所、早可追出之由、可被下知之状、依仰執達如件、

延應元年七月廿六日　前武藏守判（○又見吾妻鏡）

〔政所壁書〕洛中洛外酒屋土倉（付地下人等）條々（永享二九廿）

一諸土倉沙汰人等事

所々土倉沙汰人、恣犯用本主納物、令居住洛中邊土幷田舍云云、頗自由之至也、於如此族者、追放有所（○建武式目追加、有所作在所）、可被處盜犯罪焉、

〔吾妻鏡十一〕文治六年（○建久元年）正月廿四日己卯、去年合戰以後、預恩赦安堵私宅許之族、金剛別當郎等以下、悉以可追放之由、可被仰遣于奥州居住御家人等中也、

〔鶴岡事書案〕佐坪郷一野村當年年貢事、百姓等有强訴之聞、仍上使可被下之由、同落居云々、態以飛脚申下候、抑就府中國廻近郷、惡黨等令居住於當郷之由其聞候、若然者無勿體次第也、有糺明可被拂於郷內候、及異儀之輩者、急々可有注進候、以府中使可執進之次、可被尋聞食子細候、當郷百姓十五人（交名在別紙）今月中可被召進候、於有難澁之族者、可有殊罪科沙汰候、努力不可有緩怠之儀之状如件、

訴申社司之條、爲曲事之由、有仰之旨趣了、　廿一日、早旦參內、出御(御學問所)、奏勸修寺前大納言意見之趣、(所詮爲一社訴申之上者、可被改補、爲氏人進退社司不可然候、張本人可有御罪科歟之由申之、大概先日談話也、)仰云、祝職事、一社一同訴申之上者、可被改補、所詮先年モ社司數輩切殺了、每度爲氏人進退社司不可然、爲向後氏人張本可注進、隨又自氏人直任祝事可注進例、今度祝方氏人四人可任祝之由注進之、此內モ自然有張本人歟、何樣注張本人之後、依例可被仰下、　五月十七日、賀茂社申張本人事更雖無其仁、隨仰一人追放云々、

追放御教書

〔細川勝元記〕一同年(〇文正元年)武衞義敏(〇斯波)走北國、伊勢守貞親賜追放御教一書、

〔應仁外記　一〕武衞家騷動之事

同九日(〇文正元年九月)惣大名連判ニテ、條々伊勢守貞親不儀之通リ訴申サル、生涯セサセラレズバ、各不可致出仕ノ由被申ノ條、貞親ヲ追放ノ御教書出ニケリ、

營中追放

〔吾妻鏡　二十七〕寬喜二年五月五日、子剋、盜人推參常御所、盜給御劔御衣等、不知行方、武州(〇北條泰時)依令聞此事給、則被參、　六日、武州未退出給、去夜盜人事、殊被驚憤之故也、於侍召、集自去夜參候之輩、被糺彈、其中恪勤一人、美女一人、有疑殆分、仍參籠于鶴岡八幡宮、可書進起請文之由、被仰含畢、　十四日、先日嫌疑恪勤美女、依有起請文之失、被糺明子細、追放御所中、件美女引級彼男令盜條令露顯云云、

幕府所在地追放

〔新編追加(侍所)〕一可禁斷勾引人幷人賣事

件輩任本條可被斷罪、且人商人、鎌倉中幷諸國市間、多以在之云々、自今以後、鎌倉者、仰保奉行人隨注申交名、可被追放、至諸國者、仰守護人、可令科斷、

〔新編追加(佛舍)〕一念佛者事

於道心堅固輩者、不及異儀、而或喰魚鳥、招寄女人、或結黨類、恣好酒宴之由、遍有聞、於件家者、仰保々奉行人、可令破却之、至其身者、可被追却鎌倉中也、

追放

追放トハ、其所ヨリ擯出スル事ニテ、幕府ニテハ營中ヲ追放シ、幕府ノ所在地、及ビ分國ヲ追放スルアリ、大名ニテハ、城下及ビ分國ヲ追放スルアリ、又其身ノ所在地ヲ追放スルコトモアリ、又罪狀ニ由リ、神社佛寺ノ修理ヲ命ジテ贖ハシムルコトアレドモ、無力者ニ至リテハ、此刑ニ處シテ之ニ代フルアリ、サテ當時ノ書籍中ニ、追却ト云ヒ、追出ト云ヒ、追拂ト云フ、皆追放ノ事ナリ、

名稱

〔伊呂波字類抄〕(部 畳字)追放

〔運歩色葉集〕(津)追放(ハウ)

〔倭訓栞〕(前編十六 部)つゐはう　追放の字を用う、制禁の世の事也といへど、神代より逐之をやらひきとよみたるは、今の追放の意成べし、

朝廷行刑

〔庭訓往來〕管領執事奉行人、撿斷所司代、賦訴狀於右筆之時、以小舍人或下部等召出犯人於侍所記錄申詞、依言色體嫌疑、糺明犯否之時、所犯已無所遁者、則召籠之、〇中略此外火印追放以下、隨事輕重其人是非可被行之、

〔雜筆往來〕抑留年貢奪取資財、以尫弱身、好過分僻事、矯飭之至、無物取喩、騷動嗷々、更無寛宥之恩、剰點定作稻、沒收所帶、募權門之威、以企押領、憍慢甚於先、暴惡盛于今、凡罪科之至、責而有餘、民烟衰微、人屋荒廢、土民侘傺、職而由斯、無禁制者、難落居者歟、搦取其身、追捕家内、召籠妻子、封納住宅、改定所職、可被追拂也、

〔親長卿記〕延德三年四月十六日、詣勸修寺前大納言許、談賀茂祝與氏人相論事、見申狀、尋叡慮之趣、爲衆中申之上者、可被改祝、但氏人直任祝例幷張本人一兩人可有罪科者、可有御沙汰、毎度爲氏人

ハ尙坐セルガ如シ、

〔吾妻鏡十七〕建仁二年三月八日癸丑、御所御鞠人數如例、此會連日儀也、其後入御于比企判官能員之宅、庭樹花盛之間兼啓案内之故也、爰有自京都下向舞女、(號微妙)盃酌之際被召出之、歌舞盡曲、金吾(○源頼家)頻感給之、廷尉申云、此舞女依有愁訴之旨、凌山河參向、早直可被尋聞食者、金吾令尋其旨給之處、彼女落涙數行、無左右不出詞、恩問及度々之間、申云、去建久年中、父右兵衛尉爲成、依人讒爲宮人被禁獄、而以西獄囚人等、爲給奧州夷被放遣之、將軍家雜色請取下向畢、爲成在其中、母不堪愁歎卒去、其時我七歲也、無兄弟親昵、多年沉孤獨之恨、漸長大之今、戀慕切之故、爲知彼存亡、始慣當道而赴東路云云、聞之輩悉催悲涙、速遣御使於奧州、可被尋仰之由、有其沙汰、盃酒及終夜、雞鳴以後令還給、

八月五日丙子、所被遣奧州之雜色男歸參、舞女父爲滅亡云云、彼女涕泣悶絶躃地云云、

〔太平記二〕長崎新左衛門尉意見事附阿新殿事

執事長崎入道ガ子息、新左衛門尉高資進出テ申ケルハ、(○中略)大塔宮(○護良)ヲ不。返。遠。流。ニ處シ奉、俊基資朝以下ノ亂臣ヲ、一々ニ誅セラルヽヨリ外ハ、別儀アルベシトモ存候ハズト、憚處ナク申ケルヲ、(○下略)

たりし也、さばしは人信ぜざりけれど、よしやすの中納言出家する程に、一定死なんずるにて有けるころすまじと云て生にけるに、あだに信じたりけるに、後のたび又さやうに云ければ、申やうに沙汰有べしなど、浄土寺の二位〈○後白河宮人高階榮子〉申などしけるを、七日呼取て置て、一定事がらの異そら事を見んとて、入道よびとれと云事にて七日おきたりけるに、むげに云事もなく、さるしだちたる事のなかりければ、正體なき事かなとて、やがて猶惑になりて流されにき、

〔碧山日錄〕長祿三年正月十八日壬寅、以事問春公、春公語余曰、大相公〈○足利義政〉之嬖妾某氏、管司室家之柄、其氣勢焰々不可近焉、其所爲殆如大臣之執事者、而貪戾而惱民、又多所妬忌、竟爲陰事、而殃其室家之夫人、其事遂發、相公大怒、命大夫持清〈○京極〉俾竄貶之海外之隱島也、曰彼若司家室之權、有累年積歳者、其禍可及天下也、而今有此貶、所天之罰也、予曰、古史曰、婦人預外事、非國家之福云々相公付此蒼生所欲、而天下安全之端也、可以喜矣、

〔太平記二〕長崎新左衞門尉意見事附阿新殿事

君御謀叛ヲ申勸ケルハ、源中納言具行、右少辨俊基、日野中納言資朝也、各死罪ニ行ルベシト、評定一途ニ定テ、先去年ヨリ佐渡國ヘ流サレテヲハスル、資朝卿ヲ斬奉ベシト、其國守護本間山城入道ニ被下知、〈○中略〉五月〈○元弘元年〉二十九日ノ暮程ニ、資朝卿ヲ籠ヨリ出シ奉テ、遙ニ御湯モ召レ候ハヌニ、御行水候ヘト申セバ、早斬ルベキ時ニ成ケリト思給テ、〈○中略〉今朝迄ハ氣色シホレテ、常ニハ泪ヲ押拭給ケルガ、人間事ニ於テハ、頭燃ヲ拂如ニ成ヌト覺テ、只綿密工夫外ハ、餘念有トモ見ヘ給ハズ、夜ニ入バ、輿サシ寄テ乘奉、爰ヨリ十町計アル河原ヘ出シ奉、輿昇居タレバ、少モ臆シタル氣色モナク、敷皮上ニ居直テ、辭世頌ヲ書給フ、

五蘊假成形　四大今歸空　將首當白刃　截斷一陣風

年號月日下ニ、名字ヲ書付テ、筆ヲ閣給ヘバ、切手後ヘ回ルトゾ見ヘシ、御首ハ敷皮ノ上ニ落テ、質(ムクロ)

婦人處刑

重可被罪科兩人緣者之由訴之、顛雖爲遇會次第、不遂行佛事、徒送年月之條、爲長者殊被欺思召間不及是非沙汰、又順弘、堯弘兩人早可被配流之由有其沙汰、且順弘卽被召度武家畢、於堯弘者依構所勞危急之由、暫被縛其體之處、爲寺之訴訟何可及子細哉之趣學侶重申之、仍付氏院雜色等被致嚴密之譴責、任申請、如此有其沙汰上、理不盡及閉門之條、頗以物忩爲學侶之身、似忘寺社事、所詮於宗兼事者被仰關東可有其沙汰、順弘已被遣配所畢、堯弘今日令上洛云々、若又猶有子細者、嚴密加其沙汰可令上洛之由被仰含御使畢、此上有何不足可貽訴訟、早速開寺社門戶可令遂行佛神事、如此趣殊可被仰含學侶、又可加敎訓之由可仰僧侶等、且見寺社同行可歸洛之旨被仰御使畢、

廿六日丁巳、着束帶參殿下、南都承遍法印參、申南都事、堯弘昨日已前參洛也、老體病體之間、昨今兩日所入洛也云々、御問答承遍之間、南都飛脚到來、昨今衆會、雖相催學侶逐電云々、重可被下委細長者宣之由申之、予仰遣別當法印并定藤許畢、其趣云、

學侶訴事、委細之趣、昨日以御使被仰下畢、堯弘已參洛之上、可被處流刑之條、不可及子細、而武家近日無便宜之口節也、其條定令披露歟、其間於堯弘者任學侶之由申請可有其沙汰、此上何可及子細哉、不日開門戶、可遂行佛神事之由、不廻踵可被下知之由、殿下御氣色如此、仍執達如件、

九月廿六日　　　　　　　　治部少輔兼仲

謹上興福寺別當法印御房

○按ズルニ、興福寺ノ僧徒ヲ、藤氏ノ長者宣ヲ以テ處刑セシナリ、

〔愚管抄〕六後白河院うせさせ給ひて後に、建久七年の比、兼中と云、公時二位入道がうしろみにつかひける男有き、それが妻に故院つきしませおはしまして、我いはへ、社作り國よせよなど云ことを云いだして、沙汰にのりて、兼中妻夫、妻は安房、夫は讃岐へ流罪せられなどしたる事の出き

應安五年正月廿二日〇中略

一乘院門主　後堀川關白經忠卿息

實玄僧都伊豆　路峯常

大乘院　九條前關白經敎公息

敎信禪師土佐　礒部濱行

安養院

顯乘僧正隱岐　池田浪滋　覺成僧都佐渡　岸田門里　善覺法師常陸　原坂遠　憲實法師安房

春野小道　懷實法師周防　高林永材

〔勘仲記〕建治二年八月三日己丑、參殿下、〇藤原兼平、中略、於御出居學侶訴訟事有御沙汰、大府卿祗候、宗叡不出來者、彼儀者、堯弘、順弘兩人、可被罪科、然者可遂行佛神事之由、載僉議狀申之、仍可被罪科云々、堯弘備中、順弘伊豫、如此被定、以此趣可被仰武家之由、付大理可奏聞之由、大府卿書本書、仰遣定藤朝臣許、　廿一日癸未、參殿下、興福寺僧侶數輩、列參祈年穀奉幣御神事、當日僧侶群參不可然、但爲急事者、於庭上可申之由、被仰下氏院幷參會、以予傳申之、僧侶等問答、予無問答、頗不分明之故歟、順弘、堯弘兩人事、雖片時忩可被處流刑、　九月十七日、參殿下、南都寺社幷七大寺閉門之由、尊淸僧都申之、宗叡緣者順弘、今日遣配所之由武家申之　廿四日乙卯、參殿下、依南都寺社閉門行事、勅使幷長者御使、明日可被下遣、左少辨忠世含勅語、南曹辨奉長者宣、忠世參奉其趣、予申次也、委細之趣、又仰遣定藤朝臣許也、其趣予注遣如此、

學侶訴訟間事、度々御問答之間、被懸御所存之淵底畢、然而于今不存靜謐、剩及寺社之閉門之上者、委細御問答暫被閣之、所詮訴訟之根元、起自宗叡之所行、雖訴申彼之罪科、其身已逐電之間、緣者三人可被處流刑之由申之、仍三人輩、卽被遣配所畢、其上早遂行佛事、可相待宗叡左右之處、猶

〔太平記　二〕三人僧徒關東下向事

同〇元德二年七月十三日ニ、三人ノ僧達遠流ノ在所定テ、文觀僧正ヲバ硫黃ガ島、忠圓僧正ヲバ越後國ヘ流サル、圓觀上人計ヲバ、遠流一等ヲ宥テ、結城上野入道〇廣宗ニ預ラレケレバ、奥州ヘ具足シ奉、長途ノ旅ニサスラヒ給、左遷遠流ト云ヌ計也、

〔園太曆〕康永四年四月廿六日、今日別當卿入來謂、南都形勢爲尋聞所招引也、〇中略好專流罪事、又勅勘之由、雖被仰下實無恐怖、宮彌誇張上者可被處遠流、不可叶可有勅勘之由、最前令申者未及神訴之上、爲有迷遠行、於今者遠可被處遠流之刑云々、　六月十二日、好專法眼事、勅勘之由、先度被仰了、而學侶猶申子細候之間、所被處流刑也、子息好淳山門跡給仕、可召放恩顧優神訴如此、其沙汰候由、可被仰一乘院僧正之旨、院御氣色所候也、以此旨可令申入給、仍執達如件、

六月十二日　　大藏卿雅仲

右少辨殿

〔後愚昧記〕應安五年正月廿二日、今夜流人宣下也、上卿土御門中納言定具卿、流人宣下次第事、藤中納言忠光卿尋送之間借遣了、彼上卿黃門忠光卿親類也、仍便宜事加扶持云々、

太政官符治部省

應令還俗前僧正法印大和尙賴乘、權大僧都法眼和尙位覺成、權少僧都法眼和尙位實玄、傳燈大法師位教信、善寬、憲實、懷實等事

右正三位行權中納言源朝臣定具宣、奉勅、件賴乘等坐事遠流、宜仰彼省、先令還俗者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

左大史小槻宿禰

權右中辨藤原朝臣

用御齒之僧侶二人、(淨戒遣備前國、見光遣周防國、)件輩可處遠流、而東大寺上人(四條)申請、配知行國、

〔仁和寺日次記〕建保二年二月廿九日乙丑、淸水寺住侶能臣(○還俗名上坂高里)謫土佐國、以堂寺可爲延曆寺末寺之由、令書寄文之科云々、(○又見皇帝紀抄、)

〔皇帝紀抄〕(八順德)建保四年五月九日、有流人宣下事、僧盛圓遣常陸國、長源同國、堪盛伊豆國、仙秀佐渡國、覺秀出羽國、仙幸越後國、延應隱岐國、禪定上總國、安意安房國、勝圓下野國、觀賢能登國、增秀越前國、幸秀遠江國、實幸下總國、義圓信濃國、是安樂寺惡徒十七人內也、　六月十八日、有流人宣下事、宇佐公妙被配佐渡國、本名公方也、

〔仁和寺日次記〕建保四年五月九日辛酉、鎭西原山惡僧十五人、處流刑、(遠流九人、近流六人、)刀禰官使之上、依安樂寺別當法眼定圓之訴訟也、

〔皇帝紀抄〕(八後堀河)安貞元年七月六日、有流人宣下事、立念佛別宗、以諸宗稱雜行之輩、依山門訴申、張本三人被處遠流、

〔百練抄〕(十三後堀河)安貞元年七月七日、專修念佛者配流官符請印、隆寬律師(還俗名山遠里)配陸奧、(後日被改他所云々、)空阿彌陀佛(改名原秋澤)薩摩、成覺(改名枝重)壹岐島、

〔日蓮聖人註畫讚〕(一)伊東左遷第七

以弘長元年辛酉五月十二日、四十歲謫于豆州伊東浦、諸餘弟子皆不相伴、唯日朗一人隨從、

〔日蓮聖人註畫讚〕(四)赴依智第十七

同日賴綱送重連狀云、日蓮房佐渡國江被遣候、兩三年毛候者可有御免候、(○中略)恐々謹言、九月(○文永八年)十四日、(○中略)

佐渡流刑第十九

爲知行佐渡島、武藏前司預、故爲其被官等沙汰、同十日(○十月)出依智趣彼島、

僧徒處刑

〔平家物語十二〕六代きられの事（四宮但馬、忠顯京合戰條、流第六宮但馬附後醍醐、今從神皇正統記所敍兄弟之次）

そのころ主上（○後鳥羽）は鳥羽院にてまし〳〵けるが、御ゆうをのみむねとせさせおはします、せいたうは、一かうきやうのつぼねのまゝなりければ、人のうれへなげきもやまず、（○中略）中にも二の宮（○後高倉院）と申は、せいたうをもつぱらとせさせ給ひて、御がくもんおこたらせ給はねば、もんがくはおそろしきひじりにて、いろふまじき事をのみいろひ給へり、いかにもして此君をくらゐにつけたてまつらばやとおもはれけれ共、賴朝の卿のおはしける程はおもひもたゝれず、かくて建久十年正月十三日、よりともの卿年五十三にてうせ給ひしかば、もんがくやがてむほんおこされけるが、たちまちにもれきこえて、もんがくばうのしゆく所、二條ゐのくまなる所に、くわん人どもあまたつけられて、八十にあまつて、からめとられて、つゐにおきの國へぞながされける、もんがく京を出るとて、是程においのなみに立て、けふあすをしらぬ身を、たとひちよつかんなればとて、都のほとりにもおかずして、はる〴〵おきの國までながされける、ぎつちやうくわんじやこそやすからね、いかさまにも我ながさるゝ國へむかへとらんずるものをと、おどりあがり〳〵ぞ申ける、此君はあまりにぎつちやうの玉をあいせさせ給ふ間、もんがくかやうにはあくこう申けるなり、

〔本願寺聖人親鸞傳繪下〕斯以興福寺學徒奏達太上天皇（諱尊成、號後鳥羽院）今上（諱爲仁、號土御門院）聖曆承元丁卯歲仲春上旬之候、主上臣下背法違義、成忿結怨、因玆眞宗興隆太祖源空法師、并門徒數輩、不考罪科、猥坐死罪、或改僧儀賜姓名處遠流、（○中略）空師并弟子等坐諸方邊州經五年之居諸云云、空聖人罪名藤井元彥、配所土佐國（幡多）鸞聖人罪名藤井善信、配所越後國（國府）此外門徒死罪流罪皆略之、

〔百練抄十一土御門〕建仁三年五月廿八日、權中納言定輔卿參入、被行流人事、是破上宮太子（○聖德）御墓犯

〔吾妻鏡二十六〕貞應三年元仁元年○十月廿九日、宰相中將實雅卿於京都解官、配越前國云云、

〔吾妻鏡二十七〕安貞二年五月十六日、後藤左衞門尉基綱申云、去月廿九日、前左宰相中將實雅卿於越前國薨、三十、是去元仁元年被配流彼國訖、基綱者守護人也、

〔北條九代記下〕元弘元年四月廿九日、京都飛脚下著、主上後醍醐○令亂世給、俊基朝臣張行之由、吉田一品定房內々被申云々、依之五月五日、長崎孫四郎左衞門尉、南條次郎左衞門尉爲使節上洛、爲召禁右中辨俊基、幷文觀圓觀等也、　六月此輩等被召下、及拷問、同月中圓觀僧正、知教、遊雅等被召下、　八月六日、典藥頭長朝朝臣、前宮內少輔忠時朝臣、長崎三郎左衞門尉高賴、工藤七郎右衞門入道等被召捕、各被配流、依有陰謀之企也、

〔太平記一〕資朝俊基關東下向事附御告文事

去程ニ俊基朝臣ハ、罪ノ疑シキヲ輕シテ赦免セラレ、資朝卿ハ、死罪一等ヲ宥メラレテ、佐渡國ヘゾ流サレケル、

〔太平記四〕笠置四人死罪流刑事附藤房卿事

笠置城被攻落、剋被召捕給シ人々ノ事、去年元弘元年○ハ歲末ノ計會ニ依テ、暫ク被閣ヌ、新玉ノ年立返レバ、公家ノ朝拜、武家ノ沙汰始リテ後、東使工藤次郎左衞門尉、二階堂信濃入道行珍、二人上洛シテ、可行死罪人々、可處流刑國々、關東評定ノ趣、六波羅ニシテ被定、中略○尹大納言師賢卿ヲバ下總國ヘ流シテ、千葉介ニ被預、中略○東宮大進季房ヲバ常陸國ヘ流シテ、長沼駿河守ニ預ラル、中納言藤房ヲバ同國ニ流シテ、小田民部大輔ニゾ被預ケル、中略○按察大納言公敏卿ハ上總國、東南院僧正聖尋ハ下總國、峯僧正俊雅ハ對馬國ト聞ヘシガ、俄ニ其議ヲ改テ、長門國ヘ流サレ給フ、第四ノ宮ハ但馬國ヘ流奉テ、其國ノ守護大田判官ニ預ラル、

〔大日本史九十九列傳〕皇太子恒良、中略○北條高時遷恒良于但馬、囚於守護太田守延家、本書〔太平記〕笠置囚人條、流ニ第

幕府配流擯斥

之春三月八日、復詔黃門定資放師、○中略應長元年辛亥三月七日、師承赦牒入于洛中、○中略正和二年癸丑之春、師北野之傍、說法七日、○中略由是洛中之化亦不爲少、頑雲妹月、讒諛隔明、元亨元年辛酉十月二十五日、官復黜洛中、同年十一月八日、元應上皇、詔日野亞相、特旨賜環焉、德治丁未之黜、延慶己酉之放、延慶庚戌之黜、應長辛亥之赦、元亨辛酉之黜、同年隔月之赦、謂之龍華三黜三赦、故日錄書曰、加之割地於御溝之傍、於神創之功、雖不容違、其迹者相似也、高祖者兩度配流、我師者、三度擯出矣、聖旨懇至也、

〔花園院御記〕元亨二年三月廿四日癸巳、今日爲基朝臣申上、大納言入道爲兼、法名靜覺、去廿一日薨之由傳聞、彼卿者、右兵衞督爲教卿息也、自幼日昵近祖父爲家卿、和歌口傳等悉受之上、天性得風骨、拔萃之堪能也、伏見院在坊之時、令好和歌給之、粗至政道之口入、仍有傍輩之讒、關東可被退旨申之、仍解却見任、籠居之後、重有讒口、頗巧陰謀事、依武家配流佐渡國、經數年歸京、又昵近如元、愛君之志軼等倫、是以有寵、正和朕加首服之時、爲上壽任權大納言、無幾舊院○伏見御出家之時、同遂素懷了、於上皇幷朕、爲乳父、妹大納言、又爲和歌之堪能、祗候永福門院、延慶褰帳典侍也、兄弟共頗有權威、而入道大相國○藤原實兼自幼年扶持之、大略如家僕、而近年以舊院之寵、與彼相敵互切齒、至正和口年、口遂依彼讒、關東重配土佐國、近年聊有優免之儀、移和泉國、

〔武家年代記〕永仁六年正月、權中納言爲兼卿被召置六原、三月被遷佐渡國、依隱謀也、

〔東寺王代記〕正和四年十二月廿八日、爲兼被召取土佐國遠流、

〔徒然草下〕爲兼大納言入道めしとられて、武士ども打圍て、六波羅へゐて行ければ、資朝卿一條わたりにてこれを見て、あなうら山し、世にあらん思出、かくこそあらまほしけれとぞいはれける、

〔百練抄十三後堀河〕元仁元年十月五日、參議左中將實雅卿被配越前國、但不及官符、武士沙汰也、一昨日被解官了、

屢遭流

一年板垣彌二郎が、本郷八郎左衛門小身にてあなづり慮外をいたし、本郷八郎左衛門に板垣きられ候處、外は大小共によらず、我家の法度に申定候間、其樣子さま〴〵あらため、少も依怙のなき樣に手をまはして、能々聞候へば、本郷八郎左衛門道理なる故に、其まゝ置候、然れ共相手板垣なれば、仕付のために彼本郷を座敷籠にいれ置候處に、本郷を御成敗なき事は、板垣をば信玄が殺候とて、曲淵それがしをねらひ候事共かくれなし、其刻流罪にもおこなふべき事なれども、義理を存知、如此の段、千萬にすぐれてやさしき覺悟を感じ、樣々申なだめ、〇下略

〔高祖遺書三〕妙法比丘尼御消息

今日本國已ニ大謗法ノ國トナリテ、他國ニ破ラルベシト見エタリ、此ヲ知ナガラ申サズハ、縱ヒ現在ハ安穩ナリトモ、後生ニハ無間大城ニ墮ベシ、恐テ後生ヲ申ナラバ、流罪死罪ハ一定也ト思定テ、去康元ノ比、故最明寺入道殿〇北條時賴ニ申上ヌ、サレドモ用事ナカリシカバ、念佛者等此由ヲ聞テ、上下ノ諸人ヲ語ヒ、打殺ントセシ程ニ、叶ハザリシカバ、長時武藏守殿ハ極樂寺殿〇北條重時ノ御子ナリシ故ニ、親ノ御心ヲ知テ、理不盡ニ流伊豆國給ヌ、サレバ極樂寺殿長時ト、彼一門皆亡ルヲ各御覽アルベシ、其後何ク程モ無シテ召返サレテ後、又如經文彌申ツヨル、又去文永八年九月十二日ニ、佐渡國ニ流サル、日蓮御勘氣ノ時申セシガ如ク、ドシ打始ル、其ヲ恐ルヽカノ故ニ又召返サレテ候、〇中略

弘安元年戊寅九月六日　　日蓮在御判

〔本化別頭佛祖統紀十〕勅賜四海唱導師華洛妙顯寺開山日像尊者世家

永仁五年丁酉四月二十八日、立城東門、向于朝日、高聲唱南無妙法蓮華經、迄夕不止、〇中略又都下し道各立石廟、大書首題、以供逆緣、信者亦多矣、其後諸宗之徒屢訴朝焉、德治二年丁未之夏五月二十日、詔亞相宣房逐師、師即答宣旨、其理甚盡焉、識者以爲爾、因茲延慶二年己酉、待赦而還矣、三年庚戌

大名行刑

倭經朝臣ハ於秋野道場出家云々、是等皆狐仕之輩也、

〔若聞日記〕永享六年六月十七日、庭田歸參、藤宰相事、裏松被討事、公方〇足利義敎御沙汰之由申、依其忽被罪科赤松、大河內ニ被仰、於四塚可處死刑之由被仰付、然而除不便之由、大河內申宥被遠流、大河內代官安富ニ被仰、油黃島〇磯黃島へ被流召捕事も大河內宿所へ喚て召捕、非指重科、公方御事依荒言申、如此被處重科、前世宿業無力事歟、

〔東下野守益之墳記〕先公諱益之、京人、姓平、其先千葉之族、〇中略永享十二年庚申、公年六十五、爲讒者所勠、相公〇足利義敎不辨問其誣、遂謫於周防州、

〔大內家壁書〕寄事於左右、猥殺害人之間御定法之事、

飯田大炊助貞家郎從、石川助五郎爲長門國三隅庄、平氏左衞門三郎男、去十七日夜、被殺害之事、右意趣者、依助五郎密懷左衞門三郎妻才松母也云々、猥殺害人之條、其科難遁者乎、所詮當家分國中、土民等事、或案內を領主にへ、或於庭中子細を申は、可加下知也、殊更家中等事、申旨あらば、其實否にまかせ、可成敗之處、やゝもすれば宿意をさんずる間、還而失其身條、且は忠孝をおもはざるにあらざる也、且は傾城として、身を損ずるたぐひ嗚呼のものにあらざる也、自今已後は、此下知をまもり、敢て定法を違失する事なかれ、若違犯之輩あらば、たとひ雖爲異類の身、雖爲重代相傳之忠臣、永子孫をたやし罪科に處すべき也、仍此趣諸人に告知せしめんために、左衞門三郎男、幷才松母事においては、貞永式目の旨にまかせ、流刑に一定せしめ訖者、早件之兩人を、長門國見島に可送遣之狀如件、

寬正三年八月晦日　築山殿御判

內藤下野守殿盛世也

〔甲陽軍鑑十七品第四十七〕曲淵少左衞門公事負雜言仕義、櫻井殿訴訟之事

三ヶ所、公田六十餘町、一族百四十餘人、舊領迄被收公訖○中略承久ヨリ奥州平泉ト云所ニ流サレ聽テ出家シテ觀光ト云シガ、貞應二年癸未五月十九日逝去畢、

〔吾妻鏡二十六〕貞應三年○元仁元年閏七月八日、於二品○源頼朝妻平政子御前、世上事、及御沙汰、相州○北條時房被參、又前大膳大夫入道覺阿○大江廣元扶老病應召、關左近將監實忠注記錄云云、光宗等令宰相中將實雅卿欲立關東將軍、其奸謀已顯露訖、但以卿相以上無左右巨處罪科、其身於京都可伺奏罪名事、至奥州後室○北條義時妻平光宗等者可為流刑、其外事縱雖有與同之疑不能罪科由云云、

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年九月二日戊申、平内左衞門尉、牧左衞門入道等流刑、就中後職為公人與此巨惡之條、殊背物義之間被配流硫黃島云云、治承比者祖父康頼流此島、正嘉今又孫子後職配同所、定是可謂一業所感歟、

〔沙石集六〕為母有忠孝人事

一鎌倉ノ故相州禪門○北條時賴ノ中ニ祗候ノ女房有ケリ、腹アシクタテ〳〵シカリケルガ、或時成長ノ子息ノ同ジクツカウマツリケルヲ、イサヽカノ事ニヨリテ腹ヲ立テ打タントシケルホドニ、物ニケツマヅキテイタクタフレテ、イヨ〳〵ハラヲスヱカネテ、禪門ニ、子息ソレガシ、ワラハヲ打テ侍ト訴申ケレバ、不思議ノ事也トテ、彼ノ俗ヲ召テ實ニ母ヲ打タルニヤ、母シカ〳〵ト申也ト問ル、實ニ打テ侍ト申、禪門返々奇恠ナリ、不當也トシカリテ、所領ヲ召シ流罪ニ定ニケリ、○下略

〔保暦間記下〕爰ニ元德二年秋ノ比、高資憍ノアマリニ、高時ガ命ニ不隨、乍亡氣奇怪ニ思ヒケルガ、長崎三郎左衞門尉高頼以下ノ者共ニ云付テ、高資ヲ討ントシケルホドニ、事顯テ高時ガ身モ危ケレバ、我ハ不知ト申ケレバ、高頼ガ不思議ノ企ナリトテ、奥州ヘ流罪ス、餘黨ハ國々ヘ遣レケリ、

〔康富記〕應永廿七年十月九日甲辰、後聞囚人高天昨日被流讃岐國、後經朝臣同國被流之云々、但先

〔吾妻鏡十四〕建久五年六月廿五日甲寅、獄囚數輩自京都被召下、其身可流遣奧州之由、被仰左近將監家景眼代之、是强盜之類云云、

〔愚管抄六〕其頃〇建久十年不可思議の風聞有き、能保入道高能卿などが跡のためにむげにあしかりければ、その郎等どもに基淸、政經、義成など云、三人の左衛門尉ありけり、賴家が世に成て、梶原が太郎左衛門尉にのぼりたりけるに、此源大將が事などをいかに云たりけるにか、それを又かく是等が申候也と告たりける程に、ひしと院の御所に參り籠りて、只今まかり出では殺され候なんずとて、なのめならぬ事出きて、賴家がり、又廣元は方人にて有けるして、やう〳〵に云て、この三人を三左衛門とぞ人は申し、是等を院の御前わたして、三人の武士給りて流罪してけり、さて賴朝が拜賀のとも志たりし公經、保家おひこめられにけり、能保こといとをしくして、左馬頭になしたりし高保と云し者など流されにけり、

〔吾妻鏡十七〕建仁三年九月三日戊辰、被搜求能員〇比企餘黨等、或流刑或死罪、多以被糺斷、妻妾幷二歲男子等者、依有好召預和田左衛門尉義盛、配安房國、

〔吾妻鏡十八〕建仁三年十一月七日辛未、入道左金吾〇源賴家近習之輩、中野五郞以下、可被處遠流之由、有其定云云、

〔吾妻鏡二十〕建曆二年六月八日壬午、其夜鬪亂者、宿直之間起於枕相論、刃傷二人者伊達四郞、萩生右馬允等也、死者兩方郞從也、今日各配流、伊達佐渡國、萩生日向國云云、御所中狼藉、殊依有其咎、及急速沙汰云云、

〔仁和寺日次記〕承久元年八月十六日己卯、前左兵衛尉紀宗光配流對馬島、依熊野山訴也、三山神輿參洛之由、積御參上之間、所被急行也、

〔豫章記〕承久兵亂事、弑君之儀ナレバ、不義ハ不及言者歟、通信モ君ノ御運被引、當國他國領所五十

幕府行刑

罪ニ可行由ヲ公家へ奏聞シ、武家ニ觸レ訴フ、此門主ト申モ、正キ仙院（光嚴、亮性法親王兄）ノ連枝ニテ御坐有レバ、道譽ガ翔無念ノ事ニ憤リ思召テ、アハレ斷罪流刑ニモ行セバヤト思召ケレ共、公家ノ御計トシテハ難叶時節ナレバ、無力武家へ被仰處ニ、將軍（足利尊氏）モ、左兵衛督（足利直義）モ、俺マデ道譽ヲ被贔負ケル間、山門ハ理訴モ疲テ欸狀徒ニ積リ、道譽ハ法禁ヲ輕メ奢侈彌恣ニス、依之嗷儀ノ若輩、大宮、八王子ノ神輿ヲ中堂へ上奉テ、鳳闕へ入レ奉ント僉議ス、則諸院諸堂ノ講筵ヲ打停メ、御願ヲ停廢シ、末寺末社ノ門戶ヲ閉テ、祭禮ヲ打止、山門ノ安否、天下ノ大事、此時ニアリトゾ見エタリケル、武家モサスガ山門ノ嗷訴難默止覺エケレバ、道譽ガ事、死罪一等ヲ減ジテ、遠流ニ可被處歟ト奏聞シケレバ、則院宣ヲ成レ、山門ヲ宥ラル、前々テラバ衆徒ノ嗷訴ハ是ニハ憖テ休ルマジカリシカ共、時節ニコソヨレ、五刑ノ其一ヲ以テ、山門ニ理ヲ付ラル、上ハ、神訴眉目ヲ開クルニ似タリト、宿老是ヲ宥テ、四月十二日（○延元三年）ニ三社ノ神輿ヲ御歸坐成シ奉テ、同二十五日、道譽秀綱ガ配所ノ事定テ、上總國山邊郡へ流サル、

〔後深心院關白記〕應安六年十一月十三日己卯、今夜流人宣下云々、性準（赤松入道）下野國、範顯（同兵庫助、播二磨）湘越後國云々、上卿平中納言親顯卿參陣宣下云々、

〔花營三代記〕應安七年五月廿六日、赤松兵庫助範顯（越後國）同遠江入道性準（上總國）爲流人出京、依南都訴訟也、　六月十二日、大乘院敎信禪師出京、（爲土佐國配流）依南都大衆訴訟云々、　十一月十日、光濟僧正（三寶院、俗名磯部、泯遁播磨國）宋錄僧正（覺王院、俗名原、備中國）平宰相行知（美濃國）元奇（儀俄入道、遠江國）配流事落居訖、

〔吾妻鏡十三〕建久四年八月十七日辛亥、參河守範賴朝臣被下向伊豆國、狩野介宗茂、宇佐美三郎祐茂等所預守護也、歸參不可有其期、偏如配流、當麻太郎被遣薩摩國、

〔吾妻鏡十三〕建久四年十一月廿三日丙戌、上總國小野田鄕住人本權太國廉、依刃傷姨母之罪科被召之、可遣伊豆大島之由、北條殿令奉給云云、

忠職直配流土佐、按察使資平、中院中納言具房流刑宣旨、

〔太平記二十一〕佐渡判官入道流刑事

此比殊ニ時ヲ得テ、榮耀人ノ目ヲ驚シケル佐々木佐渡判官入道道譽ガ一族若黨共、例ノバサラニ風流ヲ盡シテ、西郊東山ノ小鷹狩シテ歸リケルガ、妙法院ノ御前ヲ打過ルトテ、跡ニサガリタル下部共ニ、南庭ノ紅葉ノ枝ヲゾ折セケル、時節門主〔○亮性法親王〕御簾ノ内ヨリモ、暮ナントスル秋ノ氣色ヲ御覽ゼラレテ、霜葉紅於二月花ナリト風詠閑吟シテ、興ゼサセ給ケルガ、色殊ナル紅葉ノ下枝ヲ、不得心ナル下部共ガ、引折リケルヲ御覽ゼラレテ、人ヤアル、アレ制セヨト仰ラレケル間、坊官一人庭ニ立出テ、誰ナレバ御所中ノ紅葉ヲバサヤウニ折ゾト制シケレ共、敢テ不承引、結句御所トハ何ゾ、カタハライタノ言ヤナンド嘲哢シテ、彌尙大ナル枝ヲゾ引折リケル、折節御門徒ノ山法師アマタ宿直シテ候ケルガ、惡イ奴原ガ狼藉哉トテ、持タル紅葉ノ枝ヲ奪取、散々ニ打擲シテ、門ヨリ外ヘ追出ス、道譽聞之、何ナル門主ニテモオハセヨ、此比道譽ガ内ノ者ニ向テ、左樣ノ事翔ン者ハ覺ヌ物ヲト忿テ、自ラ三百餘騎ノ勢ヲ率シ、妙法院ノ御所ヘ押寄テ、則火ヲゾ懸タリケル、折節風烈ク吹テ、餘煙十方ニ覆ケレバ、建仁寺ノ輪藏、開山塔、幷塔頭瑞光庵、同時ニ皆燒上ル、門主ハ御行法ノ最中ニテ、持佛堂ニ御坐有ケルガ、御心早ク、後ノ小門ヨリ、徒跣ニテ光堂ノ中ヘ逃入セ給フ、御弟子ノ若宮ハ、常ノ御所ニ御坐有ケルガ、板敷ノ下ヘ逃入セ給ヒケルヲ、道譽ガ子息源三判官、走懸テ打擲シ奉ル、其外出世坊官兒侍法師共、方々ヘ逃散リヌ、夜中ノ事ナレバ、時ノ聲京白河ニ響キ渡リツヽ、兵火四方ニ吹覆、在京武士共コハ何事ゾト遽騷テ、上下ニ馳セ違フ、事ノ由ヲ聞定テ後ニ馳歸リケル、人每ニアナアサマシヤ、前代未聞ノ惡行哉、山門ノ嗷訴今ニ有ナント云ヌ人コソ無リケレ、山門ノ衆徒此事ヲ聞テ、古ヨリ今ニ至マデ、喧嘩不慮ニ出來ル事多トイヘドモ、未門主貫頂ノ御所ヲ燒拂ヒ、出世坊官ヲ面縛スル程ノ事ヲ聞ズ、早道譽秀綱ヲ給テ、死

山次官宗宣之科也、

〔吾妻鏡　二十二〕建保四年六月十四日丙申、去比佐々木左衛門尉廣綱使者相具所參上之東寺凶賊已下强盜海賊之親五十餘人事今日有沙汰、可遣奧州之由被仰下云云、是爲放夷島、去四月廿八日給廣綱云云、於一條河原自廷尉之手請取之云云、此東寺賊徒者、同月十八日秀能相具之、自三條坊門東洞院家向大理之正親町西洞院門前、（路次自東洞院北行、至一條西折、至西洞院南行、）次禁獄舍見物者如堵、上皇被立御車於大炊御門東洞院覽之云云、

〔皇帝紀抄　八後堀河〕寬喜元年六月十九日、有流人宣下事、武士左衛門尉三善爲清、（流日向。）前左兵衛尉大江貞知、（流隱岐。）是四月日吉神人等鬪諍張也、

〔吾妻鏡　四十八〕正嘉二年八月十七日癸巳、依伊具殺害之嫌疑、廣諏方刑部左衛門入道所被召預對馬前司氏信也、平内左衛門尉俊職、（平判官康賴入道孫）牧左衛門入道等同意令露顯云云、　九月二日戊申、平内左衛門尉、牧左衛門入道等流刑、就中俊職爲公人、與此巨惡之條、殊背物義之間、被配流硫黃島云云、治承比者、祖父康賴流此島、正嘉今、又孫子俊職配同所、寔是可謂一業所感歟、

〔新抄〕文永元年二月廿八日癸酉、山門訴訟猶興盛云々、仍訴訟内於越前國者、被付熊野造營事、已被停止之、（元日吉修造被寄也）而室町前大納言（○藤原實藤）被配流於社本庄、預所左衛門尉、有使者已被禁獄之處、奉行撿非違使章繼宥置他所之上者、章繼可被禁獄之由云々、

〔新抄〕文永元年三月十日乙酉、今日流人宣下、（撿非違使中原章繼遣伊豫國、依山門訴訟也、可被禁獄之由、雖有御沙汰、大理被申宥云々、）中宮權大夫隆顯卿參行之、

〔新抄〕文永四年八月十三日丁卯、今日流人（左衛門尉重之被配流安木國、是鴨社神供於作路切落間、依社家訴申也、）藤大納言爲氏口、宰相時繼卿已下參行之、

〔一代要記　後宇多〕弘安五年十二月十四日、依南都訴訟嗷嗷、因幡守賴重配流越後國、　廿六日、彈正

前内大臣實宗（本書爲與家誤）也、任大臣而現存逢此愁、憂喜同境此謂歟、官符史成弘注送之、

太政官符式部省

應除名造東大寺長官參議正三位行左大弁兼勘解由長官備前權守藤原朝臣公定事

右從二位行權中納言藤原朝臣資實宣、奉勅、件公定坐事配流佐渡國、仍除名如件者、省宜承知、依宜行之、符到奉行、

右少辨正五位下藤原朝臣修理東大寺大佛長官正五位下行兼主殿頭左大史但馬權介小槻宿禰

建永元年九月十八日

太政官符刑部省

應除名造東大寺長官參議正三位行左大弁兼勘解由長官備前權守藤原公定事

右從二位行權中納言藤原朝臣資實宣、奉勅、件公定坐事配流佐渡國、仍除名如件者、省宜承知、依宜行之、符到奉行、

右少辨　修理

同年同月同日

太政官符左京職

應除名正三位藤原朝臣公定位記事

右從二位行權中納言藤原朝臣資實宣、奉勅、件公定坐事配流佐渡國、宜仰彼職令追位記者、職宜承知、依宜行之、符到奉行、

同辨　同史

同年同月同日

〔皇帝紀抄八順德〕建保二年十二月卅日、中宮大進藤原兼高被配流土佐國、是去比於殿上打藏人勘解

原經房卽依被奏聞、翌日及此御沙汰、於兩國事者明春可有沙汰之由云云、

〔吾妻鏡 十〕文治六年八月十三日乙未、右武衞使自京都參著、去月卅日被下流人官符、重隆(前佐渡守、隆國、)兼信(坂垣三郎、隱岐國、)重家(高田四郎、土佐國、)等也、別當(通親)參陣、右少辨親經朝臣奉行之、藤宰相中將(公時)於結政請印云云、件輩違勅重疊之間、就被仰下其罪名、可在聖斷由二品(源賴朝)被申切訖、仍及此儀云云、

〔吾妻鏡 十一〕建久二年五月八日乙卯、佐々木左衞門尉定綱等事、依山門訴、所被下之去月廿六日口宣、同廿八日院宣案文等到著、又同廿九日被定定綱等罪名訖、(中略)院宣云、(中略)縱不行斬刑、於給其身之條者同死罪、仍都以不可裁許、凡於件刑法者、嵯峨天皇以來停止之後、多經年代、仍不致裁報之間、奉振神輿卽以歸山、違勅之上彌添驚天聽之科、滅法之餘、更招忘神鑒之咎、就中恭敬當社歸依當寺、超過餘社卓躒餘寺、雖背佛勅令蔑如王事、若仰聞子細爭不停自由、遠流之罪不再歸、禁固之法滿徒年者、雖非死罪更無勝劣歟、仍以遠流比死罪、以禁固代斬刑、但遠流之條、裁報尙不足者、雖禁固隨申請可被行歟、

〔都玉記〕建久二年十一月廿二日丁卯、今日京中强盜等所被遣前大將(源賴朝)許也、於六條河原官人渡武士云々、見在十人也、於死罪者停止、年來官人下部等有容隱之時、雖强盜頗加寬宥、赦令時原免如本、又犯之、仍遣關東可遣夷島云々、永不可歸京、是又非死罪、將軍奏請云々、人以甘心、

〔皇帝紀抄 七後鳥羽〕建久八年三月之比、藏人大夫橘兼仲幷妻女、依謀計事被配流國々、

〔帝王編年記 二十三土御門〕正治元年五月廿一日、前左馬頭源隆保、依謀反事配流土佐國、

〔三長記〕建永元年九月十八日丙申、造東大寺長官參議正三位兼行左大弁勘解由長官備前權守藤原朝臣公定坐事配流于佐渡國、入夜、上卿藤中納言參仗座、藏人頭親國朝臣宣下、召右少辨盛經被仰官符事等如例、官符請印宰相不參、藏人少納言宗行參行之云々、撿非違使中原景職宣下了、向其家卽下向、公定卿着淨衣乘車云々、罰科子細見于昨日記、但定說可尋記、嚴親前內大臣興家(公繼、補任、)

朝廷行刑

籠ヨリ出シ奉ニ、遙ニ御湯モ召レ候ハヌニ、御行水候ヘト申セバ、早斬ラルベキ時ニ成ケリト思給テ、嗚呼ウタテシキ事カナ、我最後ノ樣ヲ見ン爲ニ、遙々ト尋下タル少キ者ヲ、一目モ見ズシテ終ヌル事ヨト計リ宣テ、其後ハ曾テ諸事ニ付テ、言ヲモ出給ハズ、〇中略切手後ヘ回ルトゾ見ヘシ、御首ハ敷皮ノ上ニ落テ、質(ムクロ)ハ尙坐セルガ如シ、此程常ニ法談ナンドシ給ヒケル僧來テ、葬禮如形取營ミ、空キ骨ヲ拾テ、阿新ニ奉リケレバ、阿新是ヲ一目見テ、取手モ撓倒伏、今生ノ對面遂ニ叶ズシテ、替レル白骨ヲ見ル事ヨト、泣悲モ理也、

〔源平盛衰記四十六〕尋害平家小兒附關官恩賞人々事

同日〇文治元年十二月十七日任源二位〇賴朝申狀大藏卿泰經、右馬權頭經仲、越中守隆經、侍從能成、少內記信康被解官ケリ、上卿左大臣經宗、職事頭辨光雅朝臣成ケリ、大藏卿父子三人被解官ケル事ハ、義經以彼卿每事奏聞シケル故トゾ聞エシ、〇中略同晦日、解官幷流人被下宣旨ケリ、參議親宗、右大辨光雅、刑部卿賴經、右馬權頭業忠、大夫史隆職、兵庫頭範綱、左衞門尉知康、同尉信盛、同尉信貞、同尉時盛被解官ケリ、光雅朝臣隆職ハ、官符成下シケル故トゾ聞エシ、泰經卿ハ伊豆。賴經朝臣ハ安房。ヘ配流ノ由被宣下ケリ、

〔吾妻鏡六〕文治二年二月七日乙卯、北條殿〇時政使者到來關東、去月廿三日前中將時實朝臣、被下配流官符、改周防國可被配流上總國之由云云、

源二位〇賴朝書狀返獻之、時實被配上總國畢、可令得此御意給之狀如件、

正月廿五日　右中辨兼忠

〔吾妻鏡八〕文治四年八月十七日庚辰、藤原宗長依石淸水之訴、去五日被下配流官符、土佐云云、

〔吾妻鏡九〕文治五年十二月廿六日辛亥、奧州降人等被配流事、今日十八日所被宣下也、職事藏人大輔家實、上卿別當〇隆房辨權右中辨棟範朝臣云云、自是所被進之飛脚、去十七日辰剋入洛、帥中納言〇藤

母ニ御暇ヲゾ乞レケル、母御頻ニ諫テ、佐渡トヤランハ、人モ通ヌ怖シキ島トコソ聞ユレ、日數ヲ經道ナレバ、イカントシテカ下ベキ、其上汝ニサヘ離テハ、一日片時モ命存ベシトモ覺ヘズト、泣悲テ止ケレバヨシヤ伴ヒ行人ナクバ何ナル淵瀨ニモ身ヲ投テ死ナント申ケル間、母痛ク止バ、又目ノ前ニ憂別モ有ヌベシト思佗テ、力ナク今マデ只一人付副タル中間ヲ相ソヘラレテ、遙々ト佐渡國ヘゾ下ケル、路遠ケレドモ乘ベキ馬モナケレバ、ハキモ習ヌ草鞋ニ、菅小笠ヲ傾テ、露分ワクル越路ノ旅、思ヤルコソ哀ナレ、都ヲ出テ十日餘ト申ニ、越前敦賀津ニ著ニケリ、是ヨリ商人船ニ乘テ、程ナク佐渡國ヘゾ著ニケル、人シテ右ト云ベキ便モナケレバ、自本間ガ館ニ到テ、中門前ニゾ立タリケル、境節(ヲリフシ)僧有ケルガ立出テ、此内ヘノ御用ニテ、御立候カ、又何ナル用ニテ候ゾト問ケレバ、阿新殿、是ハ日野中納言ノ一子ニテ候ガ、近來切レサセ給ベシト承テ、其最後ノ樣ヲモ見候ハンタメニ、都ヨリ遙々ト尋下テ候ト云モアヘズ、泪ヲハラハラト流ケレバ、此僧心有ケル人也ケレバ、急此由ヲ本間ニ語ニ、本間モ岩木ナラネバ、サスガ哀ニヤ思ケン、軈テ此僧ヲ以テ、持佛堂ヘイザナヒ入テ、蹈皮(タビ)行纏(ハバキ)解セ、足洗テ、疎ナラヌ體ニテゾ置タリケル、阿新殿是ヲウレシト思ニ付テモ同ハ父卿ヲ疾見奉バヤト云ケレ共、今日明日斬ルベキ人ニ是ヲ見セテハ、中々ヨミ路ノ障トモ成ヌベシ、又關東聞モイカヾ有ランズラントテ、父子對面ヲ許サズ、四五町隔タル處ニ置タレバ、父卿ハ是ヲ聞テ、行末モ知ヌ都ニイカヾ有ラント、思ヤルヨリモ尙悲、子ハ其方ヲ見遣テ、浪路遙ニ隔タリシ鄙ズマキヲ想像テ、心苦ク思ツル、泪ハ更ニ數ナラズト、袂ノ乾ヒマモナシ、是コソ中納言ノヲハシマス、籠中ヨトテ見ヤレバ、竹一村茂タル處ニ、堀(ホリ)廻屏塗テ、行通人モ稀也、情ナノ本間ガ心ヤ、父禁籠セラレ、子ハ未稚シ、縱一所ニ置タリトモ何程怖畏カ有ベキニ、對面ヲダニ許サデ、マダ同世中ナガラ、生ヲ隔タル如ニテ、ナカラン後苦下、思寢ニ見ン夢ナラデハ、相見ン事モ有ガタシト、互ニ悲ム恩愛ノ、父子ノ道コソ哀ナレ、五月〇元弘元年二十九日ノ暮程ニ、資朝卿ヲ

市のごとし、或は邪見放逸の事業をあらため、或は自力難行の執情をすて、、念佛に歸し、往生を
とぐるものおほかり、

〔日蓮聖人註畫讃四〕佐渡流刑第十九

爲知行佐渡島、武藏前司預、故爲其被官等沙汰、同〔○文永八年十月〕十日出依智趣彼島、其夜宿武州來日河、〔○中略〕經十二日著越後州寺泊津、同二十二日、〔○中略〕彼津乘船、〔○中略〕風止波恬征帆如飛著眞崎浦、被預于本間重連、國人集而顰眉差指配處者、當國新穗鄉澤深草茂野中如洛陽蓮臺野捨死人之處名塚原、塚上有小堂、黃葉埋軒、青苔纏柱、無佛無僧小堂、十一月一日移此三昧堂、

流人不赴配所

〔吾妻鏡六〕文治二年正月五日甲申、前中將時實朝臣、爲流人不赴配所、剩同道豫州〔源義經〕之間、已有重疊之過、仍令生虜被召下、在美濃藤次安平西御門家、爰被問子細之處、無分明陳謝、承伏之故歟、然而於關東、依難被定刑、今日可被返進京都之由治定云云、亦帥中納言〔○藤原經房〕爲御使可有參向之由有其聞、非指子細者、可令留給歟、又去冬註折紙被申條々所詮可在聖斷之旨所被示遣也、　二月七日乙卯、北條殿使者到來關東、去月廿三日、前中將時實朝臣被下配流官符、改周防國可被配流上總國之由云云、

源二位書狀、返獻之、時實被配上總國畢、可令得此御意給之狀如件、

正月廿五日　右中辨兼忠

防流人

〔太平記二〕長崎新左衞門尉意見事附阿新殿事

評定一途ニ定テ、先去年ヨリ佐渡國ヘ流サレテヲハスル、資朝卿ヲ斬奉ベシト、其國守護本間山城入道ニ被下知、此事京都ニ聞ヘケレバ、此資朝子息國光中納言、其比ハ阿新(クマワカ)殿トテ、歲十三ニテヲハシケルガ、公卿召人ニ成給シヨリ、仁和寺邊ニ隱テ居ラレケルガ、父誅セラレ給ベキ由ヲ聞テ、今ハ何事ニカ命ヲ惜ベキ、父ト共ニ斬レテ、冥途旅伴ヲモシ、又最後御有樣ヲモ見奉ベシトテ、

應安五年正月廿二日
太政官符安房國司
流人春野小道
使左衞門府生藤井安友　從貳人
門部貳人　從各壹人
右爲領送流人小道、差件等人發遣如件、國宜承知、依例行之、路次之國且宜給食漆具馬參疋、符到奉行、
權右少辨藤原朝臣　左大史小槻宿禰
應安五年正月廿二日
太政官符常陸國司
流人原坂遠
使左衞門府生藤井安□　從貳人
右爲領送流人坂遠、差件等人發遣如件、國宜承知、依例行之、路次之國且宜給食漆具馬參疋、符到奉行、
權右少辨藤原朝臣　左大史小槻宿禰
應安五年正月廿二日

流人到配所

〔法然上人行狀畫圖三十四〕三月〇承元元年十六日に花洛をいでゝ夷境におもむき給に、〇下略

〔法然上人行狀畫圖三十五〕三月〇承元元年廿六日讃岐國鹽飽の地頭駿河權守高階保遠入道西忍が館につき給にけり、〇中略讃岐國子松庄におちつき給にけり、當庄の內生福寺といふ寺に住して、無常のことはりをとき、念佛の行をすゝめ給ければ、當國近國の男女貴賤、化導にしたがふもの

〔園太曆〕康永四年〇貞和元年六月廿五日、抑送官官符卽下知服代盛秀法師了、此事近來無異沙汰、依例宣下云々、近來被仰武家、爲彼沙汰歟云々、

太政官符安藝國司

流人儀部濱方

使左衞門少志藤井安長　從參人

門部貳人　從壹人

右爲領送流人濱方差件等人、發遣如件、國宜承知、依例行之、路次之國亦宜給食柒具、馬參疋、符到奉行、

修理東大寺大佛長官正五位上行左大史兼備前介小槻宿禰判

修理左宮城使正四位下左中辨兼春宮亮藤原朝臣判

康永四年六月廿四日

〔後愚昧記〕應安五年正月廿二日、今夜流人宣下也、上卿土御門中納言定具卿流人宣下次第事、藤中納言忠光卿尋送之間借遣了、彼上卿黄門忠光卿親類也、仍便宜事加扶持云々、〇中略

太政官符伊豆國司

流人路峯常

使左衞門府生安部時滿　從貳人

門部貳人　從各貳人

右爲領送流人峯常差件等人、發送如件、國宜承知、依例行之、路次之國且宜給食柒具馬參疋、符到奉行、

權右少辨藤原朝臣　左大史小槻宿禰

〔流人發遣圖　法然上人行狀畫圖所載〕

右流人元彥を領送のために、くだんらの人をさして發遣くだんのごとし、國よろしく承知して、例によりてこれをおこなへ、路次の國、またよろしく食漆具馬參疋をたまふべし、符到奉行、

建永二年二月廿八日　　右大史中原朝臣判

左少辨藤原朝臣

追捕の撿非違使は宗府生久經、領送使は左衞門の府生武次なり、○中略官人小松谷の御房にむかひて、いそぎ配所へうつり給べきよしを、責申ければ、つゐにみやこをいでたまふ、月輪殿(藤原兼實)御餘波をおしみて、法性寺の小御堂に、一夜とゞめたてまつられけり、

〔法然上人行狀畫圖三十四〕三月(○承元元年)十六日に、花洛をいで、夷境におもむき給に、信濃國の御家人、角張の成阿彌陀佛、力者の棟梁として、最後の御ともなりとて御輿をかく、おなじさまにしたがひたてまつる僧六十餘人なり、をよそ上人の一期の威儀は、馬車輿などにのり給はず、金剛草履にて歩行し給き、しかれども老邁のうへ、長途たやすからざるによりて乘輿ありけるにこそ、御なごりをおしみ、前後左右にはしりしたがふ人幾千萬といふ事をしらず、○中略鳥羽のみなみの門より、川船にのりてくだりたまふ、

〔太平記二十一〕佐渡判官入道流刑事

武家モサスガ山門ノ嗷訴難レ默止覺ヘケレバ、道譽ガ事、死罪一等ヲ減ジテ、遠流ニ可レ被レ處歟ト奏聞シケレバ、則院宣ヲ成レ、山門ヲ宥ラル、○中略同(○延元三年)四月二十五日、道譽、秀綱ガ配所ノ事定テ、上總國山邊郡ヘ流サル、道譽近江ノ國分寺迄、若黨三百餘騎打送ノ爲ニトテ、前後ニ相順フ、其輩悉猿皮ヲウツボニカケ猿皮ノ腰當ヲシテ手毎ニ鶯籠ヲ持セ、道々ニ酒肴ヲ設ケ、宿々ニ傾城ヲ弄ブ、事ノ體尋常ノ流人ニハ替リ、美々敷ゾ見ヘタリケル、是モ只公家ノ成敗ヲ輕忽シ、山門ノ鬱陶ヲ嘲哢シタル翔(フルマヒ)也、

云々、今日召集大夫史廣房、幷左衞門府領送使、奉行史等、問子細、件流罪、去七月晦日宣下、而領送使等、于今未出京云々、大略奉行職事、能不仰之、又官懈怠歟、是又近代之流例之旨、各申狀進院了、

〔三長記〕建永元年九月十八日丙申、造東大寺長官參議正三位兼行左大弁勘解由長官備前權守藤原朝臣公定、坐事配流于佐渡國、○中略

太政官符佐渡國司

流人藤原公定　從參人

使左衞門少志清原遠安

門部貳人　從各一人

右爲領送流人藤原公定、差件等人發遣如件、國宜承知依例行之、路次之間宜給食漆具馬三疋、符到奉行、

同弁　同史

建永元年九月十八日

〔法然上人行狀畫圖三十三〕罪惡生死のたぐひ、愚癡暗鈍のともがら、玄かしながら上人の化導によりて、ひとへに彌陀の本願をたのむところに、天魔やきをひけん、安樂死刑にをよびてのちも、逆鱗なをやまずして、かさねて、弟子のとがを師匠にをよぼされ、度緣をめし、俗名をくだされて、遠流の科にさだめらる、藤井の元彥云々、かの宣下狀云、

太政官符　土佐國司

流人藤井の元彥

使左衞門の府生淸原武次　從二人

門部二人　從各一人

流人發遣

〔建武以來追加〕同〇諸國守護人非法條々

一大犯三箇條（付苅田狼藉使節遵行）外、相綺所務以下、成地頭御家人煩事、

號公役對捍、稱凶徒與同、無左右令管領同所領、與恥辱及牢籠事、得論人當知行人語、下知遵行難澁事、或分取訴論人所領、或押領國中闕所、構表裏沙汰事、

一成緣者之契約、致無理方人事、

一號請所假名字於他人、令知行本所寺社領事、

一稱國司領家年貢譴納、號佛神用途催促、放入使者於所々、追捕民屋事、

一號兵粮米（〇米一本作并字）借用、責取土民財產事、

一誘取他人借書、令呵責負人事、

一以自身所課、令分配一國之地頭御家人事、

一構新關、號津料、取山手河手、成旅人煩事、

以前條々、非法張行之由、近年普風聞、雖爲一事、有違犯之儀者、忽可改易守護職、若正員不存知、爲代官結構之條、蹤跡分明者、則可召上彼所領、無所帶者可處遠流之刑矣、

〔侍所沙汰篇追加〕一闕所證人事（長祿四九五）

右闕所出來之時、就證人注進被恩補者古今之例也、然本主等無咎之旨依歎申、糺明之處、無其咎者、於知行分者、被返付本主、至證人者、被沒收所帶、可充給他人、無所帶者、可被處遠流、本主又自科乍令露顯、或致庭中、或屬權家、及訴訟者、同可被處流刑矣、

〔玉海〕建久元年九月廿七日戊寅、自院爲定長奉行被仰下云、流人三人、（兼信、重隆、重家、）未赴配所、二位卿（〇源賴朝）上洛以前、慥可追下之由可致沙汰者、仰官幷使廳了、使廳申云、未承被仰遠國犯人、使廳不致沙汰云云、　廿八日己卯、巳剋重院宣到來、流人事殊可致沙汰、件流人赴配所之後、可參洛之由賴朝卿令申

右被打擲之輩、爲雪其耻、定露害心歟、殴人之科、甚以不輕、仍於侍者、可被沒收所領、無所領〈○領一本作帶〉者可被處流罪、至于郎從以下者、可令召禁其身也、〈○中略〉

一構虛言致讒訴事〈○中略〉

爲望所領企讒訴者、以讒者之所領可宛給他人、無所帶者可處遠流、〈○中略〉

一密懷他人妻罪科事

右不論强奸和奸、懷抱人妻之輩被召所領半分、可被罷出仕、無所帶者、可處遠流也、女所領同可被召之、無所領者又可被配流之也、〈○中略〉

一稱當知行掠給他人所領貪取所出物事

右構無實掠領事、式條所推難脫罪科、仍於押領物者、早可令糺返、至所領者、可被沒收也、無所領者可被處遠流、

〔新編追加侍所〕一博弈輩事〈○中略〉

四一半、雙六、目勝以下、種々品態、不論上下、一向可被禁制、於違犯之輩者、任法有其沙汰、可被召所職所帶、至下賤之族者、可被處遠流也、以此旨可被相觸之狀、依仰執達如件、

寬元二年十月十二日〈○吾妻鏡係二十三日〉

武藏守判〈○又見侍所沙汰篇追加〉

〔建武以來追加〕諸國狼藉條々〈貞和二十二十三沙汰〉

一故戰防戰事

縱雖有確論之宿意、經上訴宜仰裁斷之處、任邪意及鬪殺之條、難遁其科、所詮於故戰者、雖懷本訴之道理、不可遁濫吹之罪責、何況於無理之仁哉、自今以後、堅可令停止之、若尙違犯者、準本條悉召上所領、可處遠流焉、次與力人事、可召上所領、無所帶者可處遠流也、子細同前、至防戰者、爲非領主者可爲故戰同罪、若爲理運之仁者、隨事體可有其沙汰矣、

流帳

○按ズルニ、八丈島ハ伊豆ノ屬島硫黄島ハ薩摩ノ屬島ナリ、

〔庭訓往來〕管領執事奉行人撿斷所司代賦訴狀於右筆之時、以小舍人或下部等、召出犯人於侍所、記錄申詞、依言色體嫌疑、糺明犯否之時、所犯已無所遁者、則召籠之、〇中略可流刑者、被注流帳、

〔武政軌範侍所沙汰篇〕一赦沙汰事

至大赦者、召返流刑人、放免囚獄者、仍毎度執行內談、召出流帳獄記、勘辨其輕重、被赦免之、

流罪制度

〔御成敗式目追加〕一犯人斷罪事

右爲夜討強盜之張本所犯無遁方者、可被行斬罪也、是則爲相鎭傍輩向後也、其外至枝葉之輩者、可召進關東、可被流遣夷島也、以前條々、存此旨、可令致沙汰之狀、依仰執達如件、

文曆二年三月廿三日　武藏守判

相模守判

駿河守殿

掃部助殿〇又見吾妻鏡、侍所沙汰篇追加、

〔御成敗式目追加〕一殺害刄傷打擲事〇新篇追加目錄云、乾元二六十二、

右被載式目之上者不及子細、至凡下之輩者、殺害者、被處斬罪、刄傷者、被遣伊豆大島、

〔新編追加侍所〕一博奕事〇目錄云、乾元二、

於侍者可有斟酌歟、至凡下者一二箇度者被切指、及三箇度者、可被遣伊豆大島也、

無所帶者處流罪

〔御成敗式目〕一惡口咎事

右闘殺之基起自惡口、其重者被處流罪、其輕者可被召籠也、問注之時、吐惡口則可被付論所於敵人、又論所事、無其理者、可被沒收他所領、若無所帶者、可被處流罪也、

一毆人咎事

〔園太曆〕貞和二年八月廿七日、今日進入奏事目六之便宜、有勅問事、請文等續之、○略註及此刑之上者、忩可爲近流候哉、且如此事准據如何候、明日流人宣下配國事、令伺定給、忩可被仰下候、兼爲成儲官符候也、國事先規不同候、遠流中流近流、可依事候歟、必不被守先規者、以此分可有御伺候、追立官人事、任例下知了、然而無日數候、散狀之後申沙汰可令達之候歟、先忩別可被仰使廳候哉、恐惶謹言、

八月廿七日　　匡遠

三流行程刑部式文

常陸去京一千五百七十五里　安房去京一千一百九十里　佐渡去京一千三百二十五里　土左去京一千二百二十五里　伊豆去京七百七十里　隱岐去京九百一十里

右六ケ國擬遠流

伊豫去京五百六十里　信乃諏方去京五百六十里　右二ケ國擬中流

越前去京三百十五里　安藝去京四百九十里　右二ケ國擬近流

被仰下之旨畏奉了、章有康賢配國事、匡遠狀加一見返上候、近流之條勿論候乎、罪科不分、被優神訴之時儀、好專沙汰足准據候歟之旨存思給候、以此趣可被計披露給候也、公賢誠恐頓首謹言、

八月廿七日　　公賢上

大宮宰相殿

〔新編追加侍所〕一遣○遣原作違、今據拾芥抄改流人國々

伊豆　安房　常陸　佐渡　隱岐　土佐以上遠流　信濃　伊與以上中流　越前　安藝以上近流

延喜式文

此外近代遣國々　上總　下總　陸奥　越後　出雲　周防　阿波

〔淸正記二〕ほいれくといふところハ、日本にては八丈島か硫黄か島などの樣なる、流罪人の居所也、朝鮮國の内なり、

古事類苑

法律部十九

中編

流罪

流罪ハ鎌倉幕府ノ時ニモ、朝旨ヲ奉ジテ行ヒシモノナレド、其間ニハ朝廷ニ關セズ、自由ニ之ヲ用キ、搢紳ヲサヘ流シヽ事アリ、足利幕府ニ至リテモ、太政官符ヲ以テ處置セシカド、其季世ニハ、天下ハ、啻ニ四分五裂ノミナラズ、群雄所在ニ割據シケレバ、遠、中、近ノ三流モ名アリテ地ナク、大名ニテモ此刑名ヲ立ツルニ至ル、而シテ流人ヲ其地ノ守護等ノ家ニ付シテ管守セシムル事アリ、

當時大ニ王朝ノ制ニ異ナルモノハ、所領ノ地アルモノハ之ヲ沒收スルニ、領地ナキモノハ之ヲ此刑ニ處シテ以テ沒收ニ代フル是ナリ、

配流地

〔拾芥抄 下本 赦令〕遣流人國々

伊豆　安房　常陸　佐渡　隱岐　土佐 已上遠流　信濃　伊豫 已上中流　越前　安藝 已上近流　件國々載延喜刑部式 神龜元年六月三日定云々

式外近國遣國々

上總　下總　陸奧　越後　出雲　周防　阿波

○按ズルニ、中世以降、上總下總等ノ七國ヲ以テ式外ニ數フレドモ、其實ハ此七國ノミニ止マラザルナリ、而シテ諸國ニ配置セシコトハ、次下ニ列擧スル實例ヲ看テ知ルベシ、

追放

古事類苑

法律部十九

中編

流罪

○按ズルニ、是ハ髠ノ類ニテ、織田信雄ナドノ事モ亦是ニ近シ、今姑ク此ニ附載ス、

〔式目抄五〕小路大路ニテ女ヲトラヘテ強姧スル事也、此法モ如此定メラレタルバカリニテ、カヤウニ行ハレタル事ハミヘズ、關東ノ記ニモ不見也、

〔吉野拾遺上〕辨の内侍、御かたちのいとめでたくさふらひしを、むさしのかみ高階のもろ直が、いかなりけん折にかみそめけむ、こゝろにかけておもひけるに、みかど○後醍醐かくれさせ給ひて後、ひそかに御ふみたてまつりて、しのび出させ玉へ、御むかへをまいらせてんと、たび／＼いひこしけれど、御返しもしたまはざりければ、ねたくおもひて、行氏卿へかよひける女のありけるをもとめ出て、北のかたへ、かゝることなん侍る、ともにはからはせたまひて、ほゐとげなんには、しらさせ玉はむところをも、あまたつけはべりならむ、三位どのゝ官位をもすゝめてなどいひおこすれば、さらぬだに世の中の人のおそれぬはなきに、いとたのもしくきこえければ、御ふみをとゝのへ玉ふて、内侍の君にもてつかうまつりし、梅がえといひし女をそへて、ともにはからはせたまへかしときこえけるに、いとよろこびて、いのちをかけてちぎりけるさふらひ二十人がほどえらびて、梅がえにそへて、よし野へつかはしける○中略たてはき正つらが、よしの殿へめされてまいるに行あふて、そのほど過しなんと、かたはらなる木陰にたちしのぶを、こゝろもとなくおもひて、立とまりて事のさまをとひけるに、つぼねがたの住吉にまうでさせたまひけるといふに、さてはとて過なむとするに、内侍のなき玉へるこゑをききて、おして御こしのほとりへ立よりてとへば、かう／＼のことになんとのたまはするに、いかさまあやしければ、そうしなんほどは、みなめしとれとて、のこらずからめにけり○中略吉野へまいりて、ことのよしをそうしたてまつれば、梅がえをすかしてとはせ玉へば、はかりつる事を申けるに、さふらひどもは、みなきられて、梅がえはあまになし玉ふて、かゝるありさまを北のかたへよく／＼けいせよとて、かへされにけり、

剃半鬢

其人是非可被行之、

〔吾妻鏡十一〕文治六年〇建久元年六月廿三日丙午、去年令入奥州給之時、稱姫宮女姓出來、令尋問給之處答申云、母者九條殿官女也、吾彈箏之間、且就母之好、爲聞食其藝、暫在彼院中、後日有不慮之次、下向奥州云云、雖可疑之、肥後守資隆入道母、爲宮條勿論之由令申之上、奥州住人一同存其儀、將又秀衡賞翫之餘、雖欲令出家不免云云、於爲一向狂人者、秀衡爭令賞翫之由一品〇源頼朝聊有御猶豫、仍爲王胤者、令居住田舍之條、稱可有其恐、被送進京都、付廷尉公朝被申此子細訖、而無實之旨被下院宣、今日所到來也、則被奉御請文云云、

院宣云

稱宮人事無實也、全非王胤、如聞食者不善人歟、在京不可然、早可返遣之由、內々御氣色候也、仍上啓如件、

六月九日　　參議

稱宮修枉惑事、子細謹以承候畢、本自難信受候、然而爲承實否、令召進候之處、猶以返預候事、可存其旨候、任御定召下關東、雖可誡候、今年不可犯殺罪候、然者いかにも御計候天、面顏に疵をも被付て、可被追放候歟、不然者經高居住阿波國候者に候、件男に可預給候歟、關東へ可召下之由の御定を申返候、依其恐候如此言上子細候也、以此旨可令申上給候、賴朝恐惶謹言、

六月廿三日　　賴朝

〇按ズルニ、顏面ニ疵ヲ付クトハ、何ナル方法ヲ以テスルヲ知ラズ、故ニ姑ク此ニ附載ス、

〔御成敗式目〕一密懷他人妻罪科事

於道路辻捕女事、於御家人者百箇日之間可被止出仕、至郎從以下者、任右大將家〇頼朝御時之例、可剃除片方之鬢髮也、但於法師罪科者、當其時可被斟酌、

〔御成敗式目〕一謀書罪科事附以論人所帯證文稱謀書事

右於侍者、可被没收所領、若無所帯者、可被處遠流也、至凡下輩者、可被捺火印於其面也、執筆者、又與同罪、

〔式目抄三〕火印ノ事、相當ス五刑ノ中ノ墨辟、墨辟トハ額ヲ刻デ入墨ヲシテ人ニ知ラスルヲ云、火印ノサシヤウ、或ハ字ノ燒付ケト云説アリ、假令バ盗ヲセバ、其者ノ額ニ盗ト云フ字ヲヤキ付ルト也、此義不足信用、只墨辟ノ心ナラバ、只ヤキ金ヲアツルマデ也、平家十二卷主上并ニ三種神器、都ヘ還シ入ラルベキ由、西國ヘ院宣ヲ被下ケルニ、院宣ノ御使、花形ガツラニ、浪形ト云ヤイジルシヲセラレケル、異朝ニモ燒金ヲアツル事アリ、北齊ノ宋欽道ガ婢ノ名ヲ輕霄ト云、本ノ妻コレヲ妬デ、宋ノ字ヲ面ニ燒金ヲアテタリ、如此文字ヲ燒付ル事モアレドモ、此式目ノ火印ハ、タヾ燒金ニテ、文字ニハアラザルナリ、

〔御成敗式目追加〕一竊盗事

或配流、或禁獄、爲御家人之煩條同前、仍於初度者、可捺火印於其身面、及三箇度者可被誅歟、至侍者、雖爲一箇度、可被處遠流歟、

〔新編追加侍所〕一侍所政所勾引人人賣事

件族、任本條可處罪科也、而鎌倉中、并諸國市廛間、多有專此業之輩云々、至諸國者、仰守護地頭等、慥可斷罪、於鎌倉中者、可被捺火印於其面、

〔侍所沙汰篇追加〕一可令禁制人賣事

右稱人商、專其業之輩、多以在之云々、可停止、違犯之輩者、可捺火印於其面矣、

〔庭訓往來〕管領、執事、奉行人、檢斷、所司代、賦訴狀於右筆之時、以小舍人或下部等、召出犯人於侍所、記錄申詞、依言色體嫌疑、糺明犯否之時、所犯已無所遁者、則召籠之、○中略此外火印追放以下、隨事輕重、

あまり、赤口關左衛門、寺川四郎右衛門などゝ、官途受領まで仕る侍が、いさかひなどあるは、他國の批判もいかゞ、きはめては信玄が家の瑕になる事なりとて、廿人衆小人衆に仰つけられ、兩人ながらめし取、耳鼻をかきて諸侍にみせ、かり坂をこさせよと有事にて、坂際にて、ふたりながら頸をきらるゝ也、其剋より五十七ヶ條の法度書相定也、

〔源平盛衰記三十八〕重國花方帶院宣西國下向同上洛奉返狀事

同〇元暦元年二月十五日ニ、重衡ノ使、平左衛門尉重國、院宣ヲ帶シテ西國ヘ下向、院〇後白河ヨリハ御壺召次ニ花方ト云者ヲ被副下ケリ、〇中略御壺ノ召次花方ハ、平左衛門尉重國ニ具シテ、院宣ノ副使ニ西國ヘ下タリケレバ、平大納言時忠卿、花方ヲ捕テ、以金燒頰ニ波方(ナミカタ)トゾ燒付タル、其後鬢ヲ切、鼻ヲ鎩テ、是ハ己ヲスルニハ非ズトテ追放ケリ、無益ノ院宣御使勤テ、身ノカタワヲゾ付ニケル、サテコソ花方ヲバ異名ニハ波方トモ呼ケレ、

〔織田信長譜〕天正十年二月、信忠進攻高遠城、先遣使僧、持書入城、以告曰、勝頼已去諏訪、赴甲府、將士皆有貳心、則授首在近日耳、汝等爲誰守城、可速降也、城主仁科五郎信盛、與軍將小山田備中議之、備中曰、是欺我之書也、何爲憚大島飯田之柔弱乎、可一戰而死耳、卽捕使僧、切其耳鼻、以逐之、

〔美濃國守護傳記〕道三〇齋藤モ、廿日〇弘治二年四月ノ暮方、城田寺ヲ指テ落行所ヲ小牧源太道家、長井忠左衛門道勝、林主水道政、追カケ攻伏ス、道三ガ首ヲ道政討取、後ノ證據トテ、忠左衛門道三ガ首ノ鼻ヲソイデケリ、小牧源太土中ニ葬テ、齋藤塚ト云ハ是ナリ、〇又見船田亂記、太田牛一雜記、

〔信長記七〕長島凶徒被攻干事

八月〇天正二年二日夜、雨風甚シウ降ケルニ、大鳥居ニ籠タル者ドモ、潛ニ忍出ントスル所ヲ追付、男女二千人計〇二千人、織田信長記作二千計切捨、其耳鼻ヲソイデ、城中ヘ船一艘ニ入テゾ送ラレケル、

〇按ズルニ、此四條ハ、罪人ヲ處刑セシモノニアラザレドモ、姑ク錄シテ參考ニ供ス、

奪ヒ私心ヲ快スルノ境ヲ出テズ、豈天罰ヲ蒙ラザラン、然レバ各モ赤心片々トシテ僉議ヲ加ヘ給フベシ、凡生アル者大患、死ヲ以テ之ヲ限リトス、今度佐渡庄盜人ノ事、此心ヲ以テ評定アルベシ、然シテ死セシ者ハ力及ザル所ナリ、若殺サズシテ事スマバ、人上ノ大幸ナラン、某ハ生得短才ニシテ、治政ノ仕オ〇(仕恐誤)無之ヲ以テ、國郡ノ事、大小トナク、耆老ノ面々ニ任セマイラセ候、委細ハ承ニオヨビ候ハズト仰アリケルヲ以テ、直江山城守、北城伊豆守、河田豊前守相議シテ、晝夜肺肝ヲ傾ケ、盜賊四人ノ内、三人ハ手指三ツ〇(三ツ一本作二ツ)充切テ、境ヲ越シメ、一人切殺ヲ加ヘテコレヲ梟首ス、

〔多聞院日記〕天正十六年十二月十九日、先日伊賀ヨリ來召人、於般若寺坂、竹ノ鋸ニテ左右手ヒキ切了、淺猿敷事也、

〔新撰字鏡 鼻〕劓(魚器反、劓波奈加久、)

〔類聚名義抄 二 鼻〕劓劓(魚既反、ハナキル、キル、ハナサク、ハナカク、)　〔同 八 刀〕劓劓(俗正、魚既反、ハナキラル、ハナハシラエル、)劓(ハナキル)

〔甲陽軍鑑 十七 品第四十七〕赤口關左衛門寺川四郎右衛門口論之事

一天文十六年丁未、信玄公廿歳にて、五十七ヶ條法度書立なさるゝ、其由來は關東牢人に赤口關左衛門、上方牢人寺川四郎右衛門と申仁、兩人の侍、口からかひいたし、既に彼雜言に付て、寺川四郎右衛門座を起て、赤口關左衛門がむなづくしをとりて、後のかべにをしつくる、赤口關左衛門をしたふされて、おきあがるといへ共、寺川四郎右衛門、其比四十餘の盛、赤口關は五十六七の者なれば、をしつけられておくる事ならず、仰に成て居ながら、赤口關左衛門が兩方の足を以て、寺川四郎右衛門が、ひばらをあらけなく踏ければ、寺川心に覺ず手をはなして、三間ばかり跡へしさりて、色をわろくして機を取失、子細は、いきぶくろをふまれての事也、〇(中略)抑男が四十五十に

一百文内口さしの分、ふるせに十文洪武二文宣德二文永樂六文以上廿文なり、
一地せにの内、よき永樂五文大觀嘉定、以上うらに文字のあるせに、よき錢の內たるべし、
一少分づゝもこれをおふて用べし
一日本せに、われせにをのぞく、但少かけたるはよき錢の內たるべし、
一口さしの程、うり物をかうちきになす事あらば、罪科同左、
右條々堅被定置訖、若有違犯之輩者、男は頸をきり、女はゆびをきるべき也、恣えり、又えらする輩あらば、町人として注進せしむべし、見かくさば同罪たるべし、私けんだん同爲町人可致注進之由所被仰下也、仍下知如件、
永正九年八月三十日
對馬守平朝臣
散位神宿禰
近江守三善朝臣
美濃守藤原朝臣

〔松隣夜話下〕或時謙信公、諸士ヲ率テ、鳥ノ巢ト云瀑流ニ臨給ヒ、魚ヲ狩セテ御見物坐マス、其折シモ河ノ洲崎ニ當テ、人多ク群集シテ見ユル、謙信公人ヲ召テ、何事ニヤト御尋アリ、梅津左京承テ、是ハ佐渡ノ星熊ニテ酒ヲ盜タル者、以上四人搦捕、政所ヨリ今日殺害申付候ト申上ル、謙信公聞召サレ、城州山城守〇直江ノ政務誠ニ當レリ、併今日ハ御心ニ在事候間、延引申サルベキニテ候、去ナガラ期ヲ引テハ叶ザル者ナラバ力ナキ次第ナリ、此旨梅津政所ニ至テ申ベシト仰ラレ、梅津先ヅ太刀取ヲ制シテ早打ヲ以テ城州ニ謁シ、上意ノ旨ヲ申ケル間、城州ソレハ何ニテモ苦カラズ候トテ、其日ノ生害ヲ止テケリ、斯テ謙信公御歸館ノ夜、諸老ヲ會シ仰ラレテ曰、吾國ヲ領セシヨリ以來、人ヲ殺ス事凡九十餘人、理ニ當リ政ニ違ザル者、尤是多カルベカラズ、然則頗ル他ノ一命ヲ

肉刑

肉刑ニハ、宮刑アリ、手若クハ指ヲ截ルアリ、劓アリ、刵アリ、宮刑ハ、當時ノ書ニ被切羅トアリ、近世ノ俗ニ羅切ト云フモノニテ、蓋シ男勢ヲ割去スルヲ云フナラン、手若クハ指ヲ截ルニ就キテハ、再犯三犯ノ者ニ、數度之ヲ施シヽ事アリ、劓ハ鼻ヲ殺グナリ、刵ハ耳ヲ殺グナリ、又半鬢ヲ剃去スルアリ、火印アリ、肉刑ノ類ナリ、半鬢ヲ剃去スルコトハ、御成敗式目ニ見エタレド、實際之ヲ用キシ事ノ有無ハ、未ダ詳ナラズ、

宮刑

〔皇帝紀抄 七土御門〕承元元年二月十八日、源空上人 號法然房 配流土佐國依專修念佛事也、近日件門弟等充滿世間寄事於念佛密通貴賤幷人妻可然之人々女不拘制法日新之間、搦取上人等或被切羅或被禁其身、女人等又有沙汰、且專修念佛子細、諸宗殊鬱申之故也、

斷手若指

〔新編追加 侍所〕一博弈事

於侍者可有斟酌歟、至凡下者一二箇度者被切指、及三箇度者、可被遣伊豆大島也、

〔吾妻鏡 三〕壽永三年 ○元曆元年 六月十七日甲戌、召鮫島四郎於御前令切右手指給、是昨夕騷動之間、有御方討罪科之故也、

〔吾妻鏡 九〕文治五年九月九日丙寅、今日二品 ○源賴朝 猶逗留蜂社、而其近邊有寺、曰高水寺、○中略 彼寺住侶禪修房已下十六人、參訴于此旅店事、其故者、御野宿之間、御家人等僮僕、多以亂入當寺、放取金堂壁板十三枚畢、冥慮尤難測、早可糺明者、二品殊歎給、則可相尋之旨召仰景時、景時尋糺之處、宇佐美平次僕從所爲也、仍召進之、於衆徒前加刑法、可令散彼鬱陶之由、重被仰之間、令切件犯人之左右手、於板面以釘令付其手訖、

〔東寺百合古文書 百六十九〕定 撰錢事

入さうなる女ばうあれば、このくにゝかぎらず、いづれの國にても、見立しだいにつれてまいれとの仰によつて來るなり、いつはりとおぼしめさば、人をつけて殿へうつたへさせ給へと申、柴田どのきゝ給ひて、しばらく思案し給ひて、これは姥がいふ所必定なるべし、されども信長公前代未聞の無道をおこなひ給ふのあひだ、つゐでながら仕付をせばやとおもひ給ひて、いかにうば、さてもなんぢは横恣のものかな、それ信長公の世の政法をたゞしくしたまひ、無道のともがらをば罰し給ふ事珍しからず、人の妻女を懐抱、人をかどへる、その科至極たる事、前代よりの定法なり、なんぞ信長公の賢君を無道のいたづら者にしなす事、其罪かるからずとて、十餘人舟にとりのせ、大海へこぎいだし、のみをぬいてぞしづめにける、そののち柴田殿は、信長公へ、かゝるうばの、かどへごとを申て御名をけがし、國々をまはり候あひだ、それがし曲事に申付候、そこもとにて御吟味あられ、御仕置等あへてしかるべからんよしを申上られければ、信長公あつたらきようをさまし給ひて、仰らるべきやうあらざれば、柴田に、忠節の仕置、神妙にこそ候へ、向後さやうの者あらば、此方へしらせ給へとの御返事にてぞありける、これよりしては信長公思ひとまり給ひける、しばたどのゝ分別たぐひなきよしを沙汰して、萬民よろこぶことかぎりなし、

きあたりより法しをたづね出し、かいをさづけ、かみをそりをとし奉り、さてかごをくみて、石をたゝみ入、そのうへにすへて、さうのひざをあみ付て、しづめ奉らんとしければ、いさゝかねんぶつをとゞめて、かくぞ詠じ給ける、

思ひきやこけの下水せきとめて月ならぬ身のやどるべしとは、と詠じてしづみたまひしが、水底にて、いまだねんぶつしたまふかとおぼしくて、おとのしければ、人々ながめゐる所に、うんといふて、ふんぞり給ふほどに、つきたるつゝみやぶれて、あさき所にいたり給へば、さうのあしにあみ付たるさしなはきれたり、さいしやう中將大いきつきて、えしなぬぞとのたまへば、又つつみをつきなをし、さしなは二すぢにてひざをゆひつけ、七八人してかしらををさへておはらせ奉るこそいたはしけれ、すべて、六人のくぎやうのなきあとのありさまこそかなしけれ、

〔義殘後覺六〕人の妻女を押て取事

柴田修理亮〇勝家越州を領し給ふとき、年のころ六十計なる姥の、其體美々敷が人あまためしつれ、町に宿をとりて、人の妻女を押て京へのぼせ、よくすべきよしを云ほどに、大きにおどろき、こはめづらしき事をの給ふものかなといへども、まゐらせずばなんぢら曲事におよばすべしと、何ともめいわくつかまつる者五六人あり、いや〱これは下にてすむまじきとて、修理殿へこのよしをうつたへければ、めづらしき事を申ものかな、いそぎそのものどもをつれてこよと仰付らるゝ、うけたまはりてかのうばがやどへ行て、殿よりの仰なり、はや〱いで給へといへば、うば申やう、修理殿は慮外なることをいふものかな、我にことといふは、をこがましけれども、ゆきてこそしるべけれとて、のり物にて來りたり、さて修理どのはいであひて、御身は予が町中へ入て、人の妻女をとりふじんにとつてゆかんといふは、いかなる子細ぞやと仰ければ、うば、申けるは、御身は事のやうをしり給ふまじ、我は信長公にめしおかるゝものなり、されば、とのゝ御意に

投木

て、二人ながらおもひ〳〵に意趣をこまか〳〵とかきおきて、さは川の中の瀬へゆき、きしちかくひつくんで河のなかへころびいりて、たつ白なみときえ行を、きせんおしなべて、あはれなりける義死とげぬるものかなとて、ほめぬ人こそなかりけれ、義隆はこの者どもが書おきし文をこまごまと見給ひて、千悔し給へども、かへらず、さゝへたる女ばうをめしいだして、このもの共が追善にせよとて、中瀬にてふしづけにしてすて給ふとぞきこえにける、

〔源平盛衰記 四〕京中燒失事

四月〇治承元年廿八日亥剋ニ、樋口富小路ヨリ燒亡アリ、是ハ神輿ヲ奉レ禦トテ、狼藉ニ及、武士七人禁獄之內、十禪師ノ御輿ニ矢ヲ射立進セケル、成田兵衞爲成ト云者ハ、小松殿ノ乳人子也、コトニ重科ノ者也、衆徒ノ手ニ給テ、唐崎ニ八付ニセン、罧ニセンナド訴申ケレバ、〇下略

〇按ズルニ、フシヅケノ名ハ、原ト罧ヨリ出タルナルベシ、新撰字鏡ニ、槮罧同、不志豆介乃木トアリ、又倭名類聚抄ニハ、罧、爾雅云、罧、謂二之涔一、郭璞曰、積二柴於水中一、魚寒入二其裏一、因以二薄圍一捕取也トアリ、柴ヲフシト訓ムハ神代紀ニ見エ、ツケハ漬ノ義ナルベシ、罪人ノ身ヲ簀卷ナドニシテ水中ニ投ズルサマノ罧ニ似タルヨリ、遂ニ此刑ノ名ニ負ハシメタルナラン、

〔承久軍物語 五〕承久三年六月十四日、はう〳〵へむけられけるくはんぐん、はいぼくせしかば、〇中略かいのさいしやう中將をば、しきぶのせうとも時あひぐしてくだりけり、しかるに、五たいふぐのものは、わうじやうにさわりありときけば、みづから水に入たきぞとのたまへば、とも時、いづれにても御はからひにこそしたがひ侍らめと申て、すなはちあしがらのやまをこえ、せきのもとの宿につく、かのうしろの山にほそき谷川ながれたり、さもあさき川なれば、ふかき所をもとむれども、なかりけり、ゐたけさへあらばよがりなんとて、いしをあつめて、つゝみをつき、ながるゝ水をせきかけければ、ほどなく淵となれり、そののち出家のしたきとのたまふほどに、ちか

臥遊

罪人ノ四肢ヲ一一切斷スルナリ、其狀恰モ鳥類ヲ剖割スルニ異ナラズ、

○按ズルニ、是罪人ヲ處刑スル法ニハアラザレドモ、今姑ク此ニ附ケテ參照トス、

〔義殘後覺〕一宮部久馬介義死の事

大内義隆のうちに宮部久馬介、淺茅鹿馬介とて、二人の小性ありけるが、よしたか、このものどもを別て大切におぼしめしてめしつかひ給ふ處に、あるとき女中がたよりのさゝへによりて、此鹿馬介をうつべきよし、義隆より宮部久馬介に仰付らるゝ、宮部うけたまはつて、わが宿にかへり、つら／＼あんずるに、さりとては難獸仰をかうふるものかな、えうせうよりかれと一所に奉公つかまつり、かたときもはなれず、まことに入魂あさからざりしに、かゝる事を一言もしらせずしてむなしく討果なば、草のかげにて、さはちぎらざりしといかにうらみなん、しらするほどならば、我ももろともにしなではおもしろからず、所詮死ぬるも主のためなれば、くるしからずとおもひ定て、淺茅が部屋へゆきて、さても情なき仰をかうふりてこそ來りたれ、御へんを義隆公よりそれがしにうつてまいらせよとの仰をかうふるなり、されば日ごろそのちなみ他にことなる中にて、一ごんも御身にしらせずして、むなしくうちはたしなば、めいどにても我をうらみん事必定なり、其うへ傍輩のおもはくいかんともわきまへがたし、所詮御へんとさしちがへて、しでの山ぢにおもむくべしと申ければ、鹿馬介是をきゝて、さても／＼日比なをざりの中なりしが、今こゝにあらはれたり、此心底はながく後の世までもわするまじきぞ、又あやまりなきとをりを君へ申ひらきてしせんと思へども、女をあひてにとつてろんじてなにかせん、それがしは、しがいをすべきの間、御へんかいしやくをたのむべしといひければ、宮部これをきゝて、あざわらひ、申出すよりしては、わが胸中さだめずしてはいかでしらすべき、佛神三ばふも御しやうらん候へ、もろともに相果べきといひければ、あさぢ聞て、このうへはちからなし、さあらばと

上野までも定あるは、今福淨閑工夫の故なり、

〔武野燭談十〕本多作左衞門人煎釜碎去事

一東照宮濱松御城に御座の時、御討入御歸陣之節、阿部川原に人を煎る釜あり、是を御覽あつて、此釜濱松へ可遣由奉行ニ被仰付けるゆゑに、彼人承り濱松へもたせ送る道にて本多作左衞門是を見て子細を問に、云か〱の由被仰付答ければ、則人足に申付て打碎捨にけり、扨奉行承たる人に申けるは、濱松へ參可申は、天下をも望可有人の、人を釜にて可殺罪を犯す樣に仕置するにて候や、作左衞門が申て、釜は打碎かせたりと具に申せ、一言にても殘したらば、後惡かるべしと下知しける程に、奉行しける人、ありの儘に申上ければ、東照宮、殊に御赤面、頓て作左衞門を召、御誤被遊、ゆるせよとの上意を承りて、作左衞門泪を流し、君臣合體を人も感じけるとぞ、

〔東遷基業五〕甲信二州粗定の事

初め神君、○德川家康甲州の府に入給ひし時、武田信玄、極罪のものを煮殺されたる釜也とて、甲州の上の木戸に大なる釜數多ありけるを御覽じて、駿遠參へ一ツづゝ遣し置べしと仰によつて、それぞれに運び遣しけるを、本多作左衞門重次、奉行職にてこれを聞、甚怒りて、屋形樣には天魔が付てくるわせ申にや、彼信玄が惡政を寫して、諸人に見懲にすべしとて、多の人民を費して、はるばる忌々しきものを越させ給ふこそ心得ねと罵て、其釜悉く打碎き淵に沈めける、此よし目付中、具に言上しければ、神君、打笑せ給ひ、さてこそ鬼作左なれと仰られけり、

〔日本西教史上〕關白○豐臣秀次ハ、○中略人ヲ殺スヲ嗜シム野蠻ノ醜行アリテ、之ヲ以テ無上ノ樂トナシ、若シ罪人ノ死ニ處セラルヽアレバ、自ラ劊手ノ事ヲ行フヲ常トセリ、關白ノ居館ヲ距ル一里許、一ノ高地ニ刑場ヲ設ケ、周圍ニ土塀ヲ築キ、中央ニ一脚ノ大案板ヲ置キ、罪人ヲ其上ニ臥サシメ、之ヲ剉切シテ興トナシ、或ル時ハ之ヲ立タシメ兩段ニ割下シ、其最モ快トスル所ハ、

おほかたに申付候はゞ、明くれ厩前にて惡事有べく候、早々からめとり、かみの城戸にて、みこらしみのため、彦介をいりころしあるべく候とおほせいだされ、〇下略

〔甲陽軍鑑十八品第四十八〕功刀小宮山兩人訴の事

猿馬牛の皮はぐ乞食が、騎鞍馬にのり、下人をつれ、れんぢやくこうち玉屋といふ酒やにて、代物を出して酒をのむとき、おりふし向山同心、功刀左大夫と申侍、又足輕大將の三枝善右衛門寄子小宮山八左衛門と申、信玄公御持弓の者と、兩人の侍、なにぞ用ありてこそ、これも右の酒やへまいる用所おはりて、さかづき出て、暫さしつさゝれつ盃をめぐらす所に、彼皮はぎも侍衆の中へまじり、酒すぎて後、座を立時刻に、功刀左大夫中間が、今の皮はぎを見しりて、兩人の侍衆へ、此者は是は皮はぎ也とつぐる、八左衛門、左大夫、大きに腹をたて、宿の玉屋權右衛門に取かゝる、權右衛門は件の皮はぎにかゝる、〇中略皮はぎ乞食侍の雜(まじはり)、富貴なるに任如此候へば、貴賤上下のわかりもなく、さながら侍の作法、何も悉皆いらざる事なりとて、小宮山八左衛門、功刀左大夫兩人、書付をもつて奉行衆へ申す、則御藏の前にて侍衆訴、町人の申分、非人の者の言事、公事の沙汰ありて、武藤三河守、櫻井安藝守、今福淨閑、此三奉行の中にても、今福淨閑は、物毎のよき功者なれば、此公事を沙汰いたさるゝ、〇中略町人にはいかに商賣代物際なりとて、歷々の侍たちに、非人を見そこなふたる科おとしに、兩人の侍衆に卷物一ツゝ持て、玉屋權右衛門禮に參べし、さなくば籠舍申つけんと定むる、ことに又彼非人の命は、三奉行が佗言をもつて、兩人の侍衆助給ふ程に、有難存て、おのれが家の皮草履をしたゝめ、功刀左大夫殿、小宮山八左衛門殿へ御禮に參、此已後皮剝の道服袖廣帷にも、牛と馬と兩方に、中には草履を付て、かならずきてありくべし、さなくばよき仕合にて、己等はた物にあがらん、さては釜にていらるゝと心得候へと申定らるゝに付、それより後は、皮はぎ何とよき馬に騎ても、右のごとくきたる道服帷のかたにてしるゝ樣に、甲州信濃

かなたこなたにして、辻伐追剝、夜ごとにし止事曾てなかりし也、

〔時慶卿記〕文祿二年十一月四日、太閤〇豐臣秀吉ニ被召置候女房、御暇不申出候、男持候、仍罪三條ノ橋ノツメニシテ、子ト乳ハ煑殺候、

〔豐臣秀吉譜〕下文祿之比、有石川五右衛門者、或穿窬、或强盗不止矣、秀吉命所司代〇前田玄以等遍搜之、遂捕石川、且縛其母幷同類二十人許、烹殺之三條河原、〇又見君臣言行錄

〔土津靈神言行錄〕下平生

一會津先太守蒲生氏之世、〇中略作大釜、其蓋穿穴、而置罪人於其中、出頭面及兩手、以木履着其脚、以慢火熬之、火氣透釜內、則以膏油灑入於穴、視者亦甚哀之、

〔太田牛一雜記〕山城〇齋藤秀龍ハ、小科ノ輩ヲモ或牛割ニシ、或ハ釜ヲ居置、親子兄弟ノ者ニ火ヲタカセ煎殺事、冷キ成敗也、

〔信長記〕十五上信長公東國御進發幷勝頼父子討死之事

加様ニ勝頼〇武田ガ一門從類、一時ニ亡果テ、哀ヲトヾメシ事ヲ按ズルニ、連々ノ積惡ニ依テ、因果歷然タル者也、彼祖父信虎、領地ヲ奪取ンガ爲兄弟ヲ殺シ、或祿多者ニハ虛名ノ罪ヲ云カケ、寺社領等ヲモオトシ取、猶落サレヌ所ヲバ、新義ノ課役ヲ當、凡テ不應ノ事ヲ以責ル間、法ヲ犯者多カリシ、疲馬鞭箠ヲ不恐シテ罪ヲ犯ヌ者多シトハ、加様ノ事ヲヤ申ベキ、厚ク己ヲ責テ、薄ク人ヲ責ル心非レバ、彌士民ノ科ト心得、輕罪ヲバ重クシ、重罪ヲバ釜ニテ煎ル事、毎日五人六人ニ及ベリ、〇下略

〔甲陽軍鑑〕十七品第四十七落合彥助と百姓と公事附雜言、幷に三法印佗言之事

抑曲淵〇少左衛門を赦免の事は、旗本家中によらず、我等分國中の諸侍へ禮義のために、成敗赦免せしめてあり、それになんぞ彼落合彥介、いつもかくの分に有べきと存、奉行共に雜言仕る事、たゞ

ナリ、合テ五百十二人ヲバ、矢部善七郎御撿使ニ仰付ラレ、家四ツニ取籠込草ヲ積マセ、悉燒殺サレ候、

〔織田信長譜〕天正十年三月、勝賴殺木曾人質、而後納諸所人質三百餘人於新府城中〇甲斐以焚殺之、而携己妻兒而首途、

〔總見記二十二〕甲州慧林寺炎滅事

同月同日〇天正十年四月三日甲府惠林寺炎上ス、是關山派ノ禪宗ナリ、今度御敵徒、甲州ニ隱レタル佐々木承禎、此比ハ名ヲ隱シテ佐々木次郎ト云、其外前公方義昭ノ上使上福院、大和淡路守、此三人惠林寺ニ隱シ置ニ付テ、三位中將殿〇織田信忠聞召シ及バレ此三人、先年公方ト武田信玄內通ノ使ヲ仕タル事、具ニ御尋ナサレ度事トモ有之候間、出シ候ヘトノ由、三ヶ度マデ御使ヲ被立候ヘドモ、タトヘ一寺滅亡ニ及ビ候トモ、三人ノ者ヲバ出シ申スマジキト申シ、潜ニ三人ヲ逐電イタサセ候、中將殿御立腹ニテ、御仕置ニハ替ガタク候間、寺中ヲ搜シ、其上ニテ破滅仕ルベキ由被仰付、御奉行津田九郎次郎、長谷川與次郎、關小十郎右衞門、赤座七郎右衞門、此四人ニ仰付ラレ、今日三日、惠林寺ヘ押寄セ、右三人ノ御敵尋搜シ候ヘドモ能アラズ候テ、僧徒老若等、皆山門ノ樓上ニ籠リ居タルヲ、其下ニ燒草ヲツミ、火ヲ掛候所ニ、惠林寺ノ住持快川大通智勝國師ヲ始メ、寶泉寺ノ雪峯、東光寺ノ藍田、長禪寺ノ高山等長老六人、單寮十二人、其外平僧、兒、小僧等、皆悉燒殺サレ畢ヌ、

〔小田原記〕快川國師、高山和尚、睦庵和尚、以下五十人、山門ヘ追上、火ヲ掛テ燒殺ス、

〇按ズルニ、是事マタ信長記、及ビ太田本信長記ニ見エ、太田本ニハ、四月三日、惠林寺破滅、老若已下百五十餘人被燒殺訖トアリ、又信長譜ニハ被焚殺者八十四人ト見エタリ、

〇

〔太閤記一或問〕或問、秀吉公之時は、都に三奉行有て、法を犯輩をば、或張付、或釜煎などせられしか共、

燒松炙

焚殺

諸人の批判には、際限なき法花坊、はた物にあがらむ、又は、あぶられんとの沙汰なり、

〔土津靈神言行錄下〕平生

一會津先太守蒲生氏之世、〇中略、作大壇、植一木、以首械繫罪人、令兩手抱竹輪、而束麻葦燃之、左右前後持之焚之、罪人踴躍而死、名之謂燒松炙、〇又見二稽德篇一

〔總見記十九〕荒木村重妻子一類已下刑罰事

十二月〇天正七年十二日ヨリ、荒木方ノ御仕置アリ、其趣先度荒木久左衞門等、人質ノ妻子ヲ伊丹城ニ指置キ、自身ハ尼崎ノ城ニ行、同苗攝津守、ニ諫言シテ、尼崎鼻熊ノ二城ヲ指上ベキ由ノ契約セシメ、久左衞門等出城シテ尼崎へ參著ス、然ル所ニ荒木攝津守、ハヤ此事ヲ悟リ、門ヲ閉テ久左衞門等ヲ入レズ候、是ニ依テ諫言モナラズ、又伊丹ニハ津田七兵衞殿人數入替リ候間、歸入ルベキ樣モ無シテ、直ニ欠落、久左衞門等忽ニ逐電候、大臣家〇織田信長聞召サレ、侍ノ妻子ヲ捨テ欠落ノ次第、比興ノ至、前代未聞ノ事ニ候、伊丹城中ノ者ドモ點撿セシメ、宗徒ノ者ドモノ人質男女三十餘人ハ、京都ニ於テ罪科ニ相行ハルベク候、相殘ル者ドモ、人ノ支配ヲモスル程ノ者ノ人質ハ、一人モ不殘、尼崎ノ近所、七本松ト云所ニ張付ニ掛殺スベキ由、山崎ニ於テ仰付ラレ候、是ニ依テ今十二日ノ晩景ヨリ、三十餘人ノ宗徒ノ人質終夜京都へ被引上、妙顯寺ニ於テ廣籠ヲ拵へ入置カレ、就中伯々下部、吹田、荒木久左衞門子、是三人ハ、村井長門守〇道家所ニテ籠舍仰付ラレ候、相殘ル者、諸事頭ヲモスル程ノ者ノ人質皆々取集メ、都合百二十二人撰出シ、瀧河左近將監、〇一益一惟住五郎左衞門〇長秀、蜂屋兵庫頭、三人方へ請取リ、明日張付ニ掛ベキト、〇中略、翌十三日、辰ノ剋ニ、件ノ女房百二十二人、各結構ニ出立、尼崎ノ城ノ近所、七本松ト云所へ一度ニ引出シ、幼少ナル子共ヲバ母ニ懷カセ、皆々殘サズ張付ニ掛ナラベ、警固ノ武士ドモ、鑓長刀大刀ヲ以テ一々刺殺ス、〇中略、此外女ノ分三百八十八人、是皆召仕ノ下女ナリ、男ノ分百二十四人、是侍ノ妻子ドモニ付置タル若黨

火焙 賫殺 投水 臥漬 併入

火焙(ヒアブリ)トハ、火ヲ以テ焙リ殺スコトニテ、此類ニハ燒松炙(タイマツアブリ)アリ、
賫殺トハ、罪人ヲ鑊中ニ投ジテ賫殺スルヲ云フ、或ハ熬殺トモ云フ、
臥漬ハ、罪人ノ身ヲ簀卷ナドニシテ、水中ニ投ズルモノニテ、其狀ノ漁具ノ罧ニ似タル故ニ此名アルナラン、又單ニ水ニ投ズルコトモアリキ、

〔勢州軍記〕下具教騷動

一生捕傷害事、御本所信雄朝臣(○北畠)以四人等被害之、先以峯乙、栗栖二人、火○焙○之、峯出惡口云、是害待之法乎、見果其因果云々、故倚掛水而又燒殺之、尤哀事也、(○中略)就中波多瀨三郎、生年十五歲、容顏無雙之美童也、信雄惜之、欲助其命也、波多瀨辭云、三人同罪也、各於被助者尤忝御恩賞也、但我一人於被助者無其面目、諸共蒙害云々、(○中略)終三人共被害、

〔續武家閑談〕六庄内の平賀と云者を頭分とし一揆起り、廿五日の夜、景勝(○上杉)衆島津淡路加勢として籠りし元來景勝領内大浦の城を圍むよし注進す、則景勝後詰、城兵をもみ合て、大に戰て、大將平賀をはじめ、五百七十三級の首を取、貳百計生捕て、宗徒の奴原十七人、大浦河原にて火○あ○ぶ○り○に○し○、殘者は人質を取、ゆるし給ふ處に、(○下略)

〔甲陽軍鑑〕十八品第四十八甲府淨土宗の僧公事之事

信玄公常々の御仕置なれば、奉行則屋形へ申上らるゝ、故、御前さばきに罷成、諸人の批判に、彼出家子を持て、其上少づゝも物をば取、下女をば返さず、奉行之扱もきかず、旁以の事なれば、見ごりの爲にあ○ぶ○ら○る○べ○し○と申人多、

〔甲陽軍鑑〕十八品第四十八甲府法花宗の僧公事之事

大辟ノ五ト云ハ、一輾裂、世ノ人兩車ノツミト云フ、車裂也、車二兩ニ片足ヅヽ結付テ、兩方ヘヤリノケテ裂クナリ、

〔立入左京亮入道隆佐記〕天正六年の秋の比より、津國有岡面に雜説申出、志きりに信長へ御敵に罷成由風聞候、さ樣には有間敷事哉と、れき／＼被差下調共依有之、荒木信濃守〇村重も雜説可申方由申、茨木城まで罷上、則安土へ罷越候處、中川瀬兵衞尉、茨木城守候處、是非共安づちへ御越不及覺悟候、安土にて腹を可仕より、津國表へ引請及合戰候共、手にためず切崩可申處を、安土にていぬ死、さたのかぎりと申留、既有岡へ荒木立歸、おもはず不計御敵を仕る、〇中略天正六年霜月より、七年之十二月までせめつめられ、其内に荒木者、尼崎へ九月比、有岡を忍出候、女子共をば有岡に置、其身忍出、荒木父子共は尼崎に籠城候、有岡には荒木久左衞門請取籠城仕候處、惟任日向守、〇光秀丹波國こと／＼く切志たがへ、荒木新五郎は惟任日向守むこにて候まゝ、則日向守扱入られ、種々調共にて、有岡を明て渡可申に相究、先日向守むすめをうけとられ候、其跡に久左衞門も、十一月廿八日九日を日限さし、尼崎表へ罷出、荒木攝津守と種々調隆仕、荒攝同心不申、久左衞門も尼崎をぬけて、あわ路のいはやへ舟にてのき申跡に、信長殿二條之御殿に御座候御息中將殿〇信忠は、有岡表に御陣をすゑられ、れき／＼の者共、男女共四百六十計、家を二間つゞり、二間之家へ追こみ、裏表よりやきくさをこみ、火懸やきころさるゝ、其剋尼崎表に、久左衞門女房をはじめ、九十七人はたものにあげられ候、〇中略かやうのおそろしき御せいばいは、佛之御代より此方のはじめ也、源平の合戰にも、五人三人のせいばい、腹をきり申などゝこそ承及候に、津國にてのせいばい、やきうち、はた物、京にての車ざき、上下卅六人、以上六百人計之御成敗候か、

とて、のこぎりを取かへ〳〵ひきけるほどに、一日の内に引ころす、

牛裂

〔勢州軍記下〕諸國退治

一松島立城事、天正八年庚辰月日、田丸御本所信雄之同朋玄智出頭而爲金奉行也、彼法師爲盜之放火於藥倉、燒田丸城、盜金銀而隱退也、後信雄捕之、埋木本、以鋸斬首遂被誅、

〔時慶卿記〕文祿二年十一月四日、大閤ニ被召置候女房、御暇不申出候、男持候、仍罪三條ノ橋ノツメニシテ、子ト乳ハ煮殺候、親二人ハ土ニ堀入、首ヲ出シテ、首ヲ七日ニ、竹ノコギリニテ被引ト也、

〔土津靈神言行錄下〕平生

一會津先太守蒲生氏○秀行之世、令罪人跨兩牛、以燒松入兩牛之間、則牛各驚怒而口左右開辟、謂之牛裂、○又見積德編

〔太田牛一雜記〕山城○齋藤秀龍ハ、小科ノ輩ヲモ或牛割ニシ、或ハ釜ヲ居置、親子兄弟ノ者ニ火ヲタカセ煎殺事、冷キ成敗也、

〔南海治亂記七〕阿波屋形長治鷹狩讃州記

元龜三年冬、三好長治讃州ニ鷹狩センガ爲ニ、十河ノ城ニ來リ、國中ノ諸將來集ス、山田郡木太鄕ハ、深江多クシテ、雁鴨多ク群ル所也、○中略長治ミヅカラ鷹ヲ肚ニシテ鴨ニ翁セ給フ、鷹スナハチ鴨ヲ抓テ、眞部ガ城内見勇利權之助ガ家ノ前ニ下落ツ、權之助ガ僕若松ト云小童、火燒棒ヲ以テ、出テ是非トナク鷹鴨トモニ打殺ス、長治怒テ牛割ニセヨトテ、少童ガ兩足ヲ牛二疋ニ結附テ、左右ヘ追分、兩足ヲ二方ニ牽割ク、國人是ヲ見テ慴震テ曰、此少童是非ヲ辨タル業ニ非ズ、其刑暴虐ニシテ無道也トテ、國人離心ス、

車裂

〔類聚名義抄九〕轘音患、車裂人也、クルマザキニス、

〔塵添壒囊抄十一〕五刑事

〔源平盛衰記二十六〕宇佐公通脚力附伊豫國飛脚事
伊豫國ヨリ飛脚アリテ六波羅ニ着ク、披狀云ク、〇中略爰ニ通清ガ子息ニ、四郎通信、高縄城ヲ遁出テ、安藝國ヘ渡テ、〇中略今月〇養和元年二月一日、室高砂ノ遊君集テ、船遊ビスル處ニ押寄テ、西寂ヲ生虜テ、高縄城ニ將テ行テ、八付ニシテ、父通清ガ亡魂ニ祭リタリトモ申ス、又鋸ニテ頸ヲ切タリトモ申ス、異說雖口多、死亡決定也、

〇按ズルニ、右ノ二書ニ據レバ、鋸引ノ刑、當時既ニ行ハレタリシモノヽ如シ、記シテ參考ニ供ス、

〔總見記十三〕淺井父子自殺事附鯰江城退去善住坊被誅事
同〇天正元年九月十日、磯野丹波守、高島郡〇近江ヲ搜シ求テ、杉谷善住坊ヲカラメ取テ進上申ス、信長公御感有テ、菅屋九右衞門、祝彌三郎ヲ以テ、先年千種越ニテ鐵炮ヲ打カケ申タル事、イカナル故ゾト御尋アリ、佐々木承禎ニ被賴、ネラヒ申ケルト申ス、ヨシ〳〵誰ニ賴マレタリトモ、此法師ヲバ立ナガラ地ニ埋テ、七日ガ間、竹鋸ニテ首引切レト仰付ラレ、ソノ如クニシテ殺シケリ、〇又見信長記

〔家忠日記增補〕天正三年四月五日、大神君〇德川家康ノ奴僕、大賀彌四郎ト云者アリ、卑賤ノ者タリト云ヘドモ、舊功譜代ノ者タルニ依テ、奥部二十餘鄕ノ代官職ニナサレ、家富ミ子孫繁榮シテ、君恩厚キノ處ニ、不儀ニシテ野心ヲ企、〇中略野心ノ本人大賀彌四郎ヲ召シテ是ヲ縛シテ、旗ヲサヽシメ、其罪ト彼レガ姓名ヲ是ニ書テ、遠參兩國ヲ引渡シテ、岡崎ノ町口ノ辻ニ生ナガラ土中ニ埋テ、竹鋸ヲ以テ是ヲ截シム、七日ニシテ遂ニ死ス、

〔三河物語三下〕然間、大賀彌四郎おば、岡崎之つぢにあなをほり、頭板をはめ、十のゆびをきり、目のさきにならべ、あゐの大すぢをきりてほりいけ、たけのこぎりと、かねのこぎりとを相そへておきければ、とおりゆきの者共が、さても〳〵御主樣の御ばちあたりかな、にくきやつばらめかな

〔鋸挽圖てこくま物語所載〕

鋸挽

害、又九歳之息女母子共兼捕之、本田方承之、其侍中西甚大夫、連行彼息女於木造近邊雲出川端、中間往彼宿謀出之、時此息女美麗如玉、殊利根而早悟此事、向母流涙暇乞曰、於來世可奉逢云々、見人無不落涙、中間負之、到彼處、中西寄後以縄懸頸呼聲共縊之、尖大木串指、而向木造城掛張付也、見聞之父母之心中、推量亦倘哀也、

〔勢州四家記〕栢植三郎左衛門、信長家老瀧川伊豫ト云侍ノ所へ立入、内通ノ故、三郎左衛門ガ子ヲ、伊勢ノクモヅ河ノ端ニテ、國司(○北畠具教)ヨリクシザシニナサルヽ、是ハ人質ヲステ、三郎左衛門立身ノ故ナリ、

〔甲陽軍鑑(八品第十七)〕伊勢の國司(○北畠)の家の破るは、國司の甥に木作といふ侍(○具政)則南伊勢の内、木作と云處に居城あり、此木作が内者に栢植三郎左衛門と申者あり、(○中略)瀧川伊與守(○一益)をもつて信長へ内通いたし、永祿十二年正月十日に、南伊せほうくみと云處まで信長發向して、悉放火せしむるなり、扨三郎左衛門が子を、伊勢のくもづ川のはたにて、國司よりくしざしになさるゝ、

〔言繼卿記〕天文十三年八月十一日戊寅、一武家之四人和田新五郎、(三好被官)爲京兆被申付藥師寺與一、於モドリ橋、頸ヲノコギリニテ引云々、先左右手、次頸引云々、前代未聞之御成敗也、

〔平治物語(三)〕忠宗尾州逃下事

去程ニ、永暦元年正月廿三日、除目被行テ、長田四郎忠宗ハ、壹岐守ニナリ、先生景宗ハ、兵衛尉ニ被成ケルヲ、父子トモニ嫌申ス、(○中略)セメテハ彼所帯ナレバ、播磨國ヲモ給リ、左馬頭ニモナサレンコソ面目ナラメ、不然バ本國ナレバ、美濃尾張ヲ給テコソ勸賞トモ存ゼメト申セバ、筑後守家貞、哀レキヤツヲ、廿ノ指ヲ廿日ニ切リ、首ヲバ鋸ニテ引切ニシ候バヤ、相傳ノ主ト、正シキムコヲ殺テ、過分ノ望申ス、餘リ惡ク覺候、後代ノ爲ニ承リ沙汰シ候ハント申ケレバ、(○下略)

母妻子共に七人、秀吉へ上奉り、謀反之樣子委しく木村申上しかば、見せしめのためなる條急ぎ張付に掛て、將監めに見せよと被仰ければ、隼人いさゞ腹あしき人にては有、卯月十六日、柴田陣取ちかう逆張付にかけて、山路これを見よ〳〵と高聲によばはり、噇と鯨波を擧、どよめきにけり、

雜載

〔氏鄕記下〕伊達左京大夫〈○政宗〉如何思ハレケン、私モ各ト相伴テ上洛可仕由、二本松ヘ被申遣ケレバ、兩人ノ人々、一段可然候トテ、淺埜彈正少弼〈○長政〉眞先ヘ打立タル、其次ニ政宗打立レシカバ、氏鄕〈○蒲生〉此上ハトテ、二本松ヨリ彼人質共ヲ被返ケリ、其時政宗ノ風情コソ聞モ恐シケレ、死裝束ニ出立テ、金箔ヲ押タルハタモノ杭ヲ馬ノ先キニ持セテ上洛有ントゾ聞エシ、〈○又見豐臣秀吉譜〉

○

串刺

〔家忠日記增補〕永祿五年三月十五日、吉田ノ城主小原肥前守、三州ノ諸士ヲ懲サンガ爲ニ、淸善ガ娘ヲ始、大竹兵右衞門尉、淺羽三大夫等ガ子、其外質ヲ棄テ、大神君〈○德川家康〉ニ忠ヲ盡ス輩ノ妻子十一人ヲ捕テ、吉田ノ城下龍念寺ニテ、各是ヲ串刺ニス、

〔松平記上〕一右家康駿河と御手切有し故、〈○永祿五年二月〉日比は駿河へ付たる岡崎の譜代衆、皆駿河と手切にて岡崎へ參り忠節仕る、然ども、三河遠州の人質は、大かた駿河方へ越置候、中にも松平備後守、人質に娘を駿河方へ越、吉田の城主大原肥前守もとに置たりしを捨て、岡崎へ出仕致し、妻子を岡崎の城へ人質に奉る間、大原是を聞、彼松平備後守娘を初として、大竹兵右衞門、淺羽三大夫等が子供、其外にも今度人質を捨て家康へ出仕致し忠を成たる、三河侍の證人を十一人、吉田の城外龍念寺口にて、串さしに致す也、

〔勢州軍記中〕勢南兵亂

一木造合戰事、木造家、既及義絕國司家憤之、欲攻木造也、先以彼長者柘植三郎左衞門尉之人質被

隼人佑へ茶を申さんと約し用意ゑきりなり、此企は木村を討て、柴田が勢を本山へ引入んとの隠謀とかや、然るを其夜之子剋計に、木村が門を扣く者有、誰ぞと番之者共問ければ、御本陣より急用之事にて有ぞ、先門を啓き候へと云しまゝ、隼人に其旨告し處に、大崎宇右衛門尉聞候へと有しかば卽出向ひ、何用之御事ぞ、承候べしと云し時、いや御本陣よりの御用には非ず候、伊賀守具臣野村勝次郎是まで參たる由申候へと有に因て、大崎立歸り其由申ければ、さらば內へ入よとて、近習十人計野村が左右に隨ひ屋裏へ入しかば、野村刀脇指を大崎に渡し、密かに申上候はんと、やはら立寄さゝやきけるは、山路將監心變して候、明朝御茶を申、數寄屋にて御邊を奉討、本山城へ柴田が勢を引入んとの事に相極たる由云ければ、木村實左もあらんと覺えたり、さらば只今逆寄によせ可討果と有しを、野村承り、先蒙氣之由被仰遣被相延、明朝御仕懸候はゞ、同類不殘被打果候はんやと指圖せしかば、尤なりとて、山路方へ頓に虫さし出痛候間、明朝は參まじき旨使者を遣しければ、扠は此事推量有し也、反忠を無心許思ひ、密談之者共誰かれと呼に、野村勝次郎ぞ居ざりける、反忠此やつなんめり、時剋移ればあしかりなんと、長濱之宿所に、母や妻子共有しをば、山路が甥と舊臣二人つかはし、船にて早々退候へ、財寶等に少も相かまはず、片時もはやく退候へとて出し、其身は密談之同類三人同道し、雞の聲初て聞えし折節落にけり、將監が陣所ひそ／＼とさわぎ出たる由、野村が宿より告知せける間、卽かくと隼人佑に申ければ、すは退たる物にこそとて、くる／＼と引卷尋ぬれば、如案見えざりけり、在長濱母などからめに馬上五六騎つかはしみれば、はや舟にて忍びたりとなん、番船之者も熟睡して有しを、山路將監が母の乘たる舟之櫓番舟の碇のつなにあたりしかば、十艘之番船一度にゆられ出、是はいか樣、舟がとほるにこそとて、聲々にのゝしり出ければ、案の如く不知船見えつるに因て、追掛舟をとめ見れば、山路が母妻子共なり、彼是七人番船へ取入こぎもどり、隼人佐使者共に渡し侍りけり、山路が

逆磔付

不ﾚ依ﾆ上下ﾆ成敗、重者懸ﾚ磔、輕者誅殺、人々掉ﾚ舌恐、

〔關八州古戰錄二十〕太田氏房二度目夜討事

關一政ノ手ノ者、川井辨之助若黨小塚某ト相俱ニ、氏房ノ被官三島文右衛門ト云、覺ノ者ヲ生捕テ本陣ヘマイラセケレバ、秀吉公有司ニ命ゼラレ、城内ノ樣子ヲ尋ラレシニ、日ヲ追テ士卒一和セズ、兵粮亦乏シク成行申トゾ答ヘケル、殿下則渠ニ茜ノ幟ヲ差セ、小田原ノ城邑ヲ引廻シテ、大手松原明神ノ宮ノ前邊ニ於テ、磔ニゾカケラレケル、

〔甲陽軍鑑品第四十七十七〕志村金助むかさ與一郎公事之事

彼むかさは、侍道の穿鑿もえらず、信玄が家におきても、いらざる者なり、さありて他所へはらふならば、結句手柄をして來るなど、口をきかん、口をきゝても左樣の者は、他所にて又越度おほかるべし、越度おほき時は、信玄が家に、あのやうなるものありやと他所の批判に乘ても詮なし、所詮見ごりのために、かみの城戸に逆機物(さかはたもの)にあげよとて、武かさ與一郎、武士道無穿鑿故、機にあがるなり、

〔甲陽軍鑑品第四十七十七〕長沼長助長八親敵討事附增城源八郎と同長助長八公事之事

去々年〇永祿元年長沼兄弟にも、心のむさき事を申かけ、無理なる公事をいたす、又今度もかくの分なれば、諸侍へ見こりのために、かり坂をこさせよと仰出され、右廿人衆頭笠井平兵衛、三津四郎兵衛、坂本武兵衛、相州甚五兵衛、甘利左衛門丞衆をめしつれ、右增城源八家を闕所仕り、其上源八にかり坂をこさするとなづけ、坂のきはにて搦捕、諸侍へのために、逆機(さかまたもの)にあげよとある、

〔太閤記五〕柴田伊賀守家來山路將監謀反露見之事

本山之要害に、心を變ずる者有由、誰共なしに云出しかば、木村小隼人佑を本丸へ入、大金藤八郎、木下半右衛門尉、山路將監を外輪へ出し、用心きびしく見えし處に、山路卯月十三日之朝、〇天正十一年小

籠城仕候處、惟任日向守〇光秀丹波國こと〴〵く切したがへ、荒木新五郎は惟任日向守むこにて候まゝ、則日向守扱入られ、種々調共にて、有岡を明て渡可申に相究、先日向守むすめをうけとられ候、其跡に久左衛門も、十一月廿八日九日を日限さし、尼崎表へ罷出、荒木攝津守と種々調隆仕、荒攝同心不申、久左衛門も尼崎をぬけて、あわ路のいはやへ舟にてのき申、跡に信長殿、二條之御殿に御座候、御息中將殿は有岡表に御陣をすゑられ、れき〳〵の者共、男女子共四百六十計、家を二間つくり、二間之家へ追こみ、裏表よりやきくさをこみ、火懸やきころさるゝ、其刻尼崎表に久左衛門女房をはじめ、九十七人、はたものにあげられ候、こと〴〵くうつくしきいしやうきせられ、めもあてられぬ事無申計候、又京都へは荒木つのかみが女房、城の大手のだしにおき申女房にて候故、名をばだし殿と申候、一段美人にて、いまやうきひと名づけ申候、一條より六條河原へ、車十二りやうにてわたされ候、其人數は出殿〇年廿四だし殿いもうと二人、つのかみ弟十九はうかへつのかみむすめ十六御局、荒木久左衛門子、十四一段の若衆、此外下々衆、妙顯寺へこしにてのぼり、自せいをよみ、十二月十六日、五ッ時分に車にてわたされ候、上下京の見物ぐんじゆ數しらず、涙をながし、めもあてられず、かやうのおそろしき御せいばいは、佛之御代より此方のはじめ也、源平の合戦にも、五人三人のせいばい、腹をきり申などゝこそ承及候に、津國にてのせいばい、やきうち、はた物、京にての車ざき、上下卅六人以上六百人計之御成敗候か〇中略

車に二人づゝ、八兩ずいぶん衆、其外は大勢也、

天正七年十二月十六日五ッ時、村井長門守〇道家奉行、けいごの衆、越前之大名衆也、

佐々藏助殿　金森五郎八殿　前田又左衛門殿　村井專次　村井長門守内衆、以上警固衆三千警固候、

〔播州征伐記〕秀吉近習之人々、分二六時一、三十人、番屋番屋書付名字付、城主人爲レ居二判形一遣、若油斷之輩、

シニ馳歸ル、十六日、鳥井長篠ニ至テ城ニ入ラントス、敵ノ圍甚嚴シテ入ル事ヲ得ズ、敵ニ紛レ竹束ヲ被テ間ヲ伺フ、甲州ノ士河原彌太郎怪テ執タリ、（此間ノ甲兵歴巾ヲ着ク、鳥井ガ歴巾色異也、故ニ執ヘラル）勝頼逍遙軒（武田）（信玄ノ弟信綱）ヲシテ諭ス、汝吾言ニ從ハヾ死ヲ免ルヽノミナラズ、厚ク恩賞ヲ與フベシ、汝城下ニ至テ、親者ヲ喚出シテ、信長來リ救フ事ヲ許サズ、早ク降テ城ヲ出ヨトイヘト云フ、鳥井詐テ許ス、勇士十餘人ヲ添テ城下ニ至ラシム、鳥井城兵ヲ呼出シテ大ニ呼ハリテ、信長、神君、大兵ヲ率テ來リ救給フ、此城ノ運ヲ開ク事、三日ヲ出ベカラズ、堅ク守リテ懼ルヽ事ナカレ、此永キ訣ノ言也ト云フ、言未ダ畢ザルニ、衆兵鎗ヲ揃テツキアゲテ、柵ノ前ニ磔ニス、

〔見聞雜錄〕信長御歸陣之路次、篠原にて武田方より掛置たる、鳥井強右衛門ハタ物を御覽被成て、委御聞届、是ハ無雙之忠義の士也、法事を申付よと被仰、（〇中略）信長聞給て、否々秋山が事は、當家之怨たり、機物に掛よとて、無念哉伯耆守（〇秋山）をば長良川端にて機物に掛るとて、伯母岩村殿と一つに同罪と被仰付、（〇中略）信忠卿（〇織田）聞給ひ、信長父なれ共信心なし、譜代之逆意には非、流石之勇士を磔に掛給し御無理也と宣、

〔勢州軍記〕下 具叛騷動

一玉井僞害事、天正六年、玉井新次郎、又背信雄謀叛之衆也、具親（〇北畠）沒落之後、父兵部少輔母儀諸共退落、而隱居神戸也、信雄爲小川久兵衛使告之、信孝命侍共、彼父子三人搦捕之、被遣信雄方也、（〇小川久兵衛捕之云々）信雄惡之、三人共於楠田川原被掛張付也、

〔立入左京亮入道隆佐記〕天正六年の秋の比より、津國有岡面に雜說申出、しきりに信長へ御敵に罷成由風聞候、さ樣には有間敷事哉とれき〳〵被差下、調共依有之、荒木信濃守も雜說可申旨由申、（〇中略）天正六年霜月より七年之十二月までせめつめられ、其內に荒木者尼崎へ九月比、有岡を忍出候、女子共をば有岡に置其身忍出、荒木父子共は尼崎に籠城候、有岡には荒木久左衛門請取、

シ時、今ハシヤツ親子ニ軍セサセソ、討センとテト宣ケルガ、軍果テ土肥ニ具シテ歸參ケレバ、今度ノ擧動神妙也ト聞、約束ノ勸賞取スルゾ、相構テ頭殿ノ御孝養能々申セ、成綱ニ仰含タルゾト有シカバ、喜テ罷出タルヲ、彌三小次郎押寄テ長田父子ヲ搦捕、八付ニコソセラレケレ、八付ニモ直ニハ非ズ、頭殿ノ御墓ノ前ニ、左右ノ手足ヲ以テ竿ヲ尋ガセ、土ニ板ヲ敷テ、土八付ト云物ニシテ、ナブリ殺ニゾセラレケル、平家ノ方ヘモ不落行ザラバ、城ニモ引籠、矢ノ一ヲモ不射シテ、身命ヲ捨テ軍シテ、ホシカラヌ恩賞哉、是モ只不義ノ致ス處、業報ノ果故也ドゾ人々申ケル、

〔源平盛衰記二十六〕宇佐公通脚力附伊豫國飛脚事

同〈○養和元年二月〉十七日伊豫國ヨリ飛脚アリテ六波羅ニ著ク、披狀云、當國ノ住人河野介通清、去年〈○治承四年〉ノ冬ノ比ヨリ謀叛ヲ發テ、道前道後ノ境、高繩ノ城ニ引籠ル、備後國住人額入道西寂、鞆ノ浦ヨリ數千艘ノ兵船ヲ調テ高繩城ニ押寄、通清ヲバ討取テ侍シカ共、四國猶不靜、西寂又伊豫讃岐阿波土佐四箇國ヲ鎭ガ爲ニ、正二月ハ、猶伊豫ニ逗留ス、爰ニ通清ガ子息ニ四郎通信、高繩城ヲ逃出テ、安藝國ヘ渡テ、奴田郷ヨリ三十艘ノ兵船ヲ調ヘ、獵船ノ體ニモテナシ、忍テ伊豫國ヘ押渡リ、偷ニ西寂ヲ伺ケルヲモ知ラズ、今月一日、室高砂ノ遊君集テ、船遊スル所ニ押寄テ、西寂ヲ生虜テ、高繩城ニ將行テ八付(ハツツケ)ニシテ、父通清ガ亡魂ニ祭タリ共申ス、

〔武德大成記九〕天正三年四月廿一日、〈一日、五月朔日、〉勝頼〈○武田〉騎兵二萬ヲ帥テ、長篠城ヲ圍ムデ日夜攻之、守將奧平九八郎信昌、〈○中略〉衆ヲ集テ告グ、粮食盡テ數日ヲ支ガタシ、誰カ能ク城ヲ出テ急ヲ我君ニ告ンと云、衆相見テ言ズ、鳥井强右衞門進出テ曰、我能君ガ爲ニ出ント、〈○中略〉五月十四日夜、潛ニ圍ヲ出テ、〈○中略〉十五日ノ曉間ニ、鳥井、神君ニ謁シ奉リテ、城中ノ形勢具ニ申上グ、神君曰、信長援兵ノ事ヲ許諾アリテ、去ル十三日、岐阜ヲ出馬アリ、近日長篠ニ着陣タルベシ、余モ亦今日出馬スベシ、汝從ヒ行ベシトノ玉フ、鳥井曰サク、援兵ノ事、早速歸テ信昌ニ知セ申タキトテ、十五日夜トホ

〔長曾我部元親百箇條〕掟
一人を斬走科事、則はつつけにかけべし、其在所爲地頭庄屋近所之もの、卽時追懸搦捕可言上、搦捕儀不叶者、則可相果、若にげぬがし候者、在所可懸科、彼親類之儀、始末毛頭も於存者、可爲同罪、不存所於分明者、可有其沙汰、幷同座ニ在之者、不及其氣遣者、可處罪科事、付親類者可寄遠近哉事、

磔死屍

〔總見記　二十三〕惟任光秀爲鄕民被害事（井光秀從類滅亡事）
同月同日（〇天正十年六月十四日）秀吉兵ヲ進テ、江州三井寺着陣ノ所ニ、小栗栖ノ里民、光秀（〇明智）ガ頸ヲ持參シ實驗ニ入ル、秀吉大ニ悅ビ、自身杖ヲ持テ、光秀ガ頸ヲ打敲テ、君ヲ弑セシ天罰、ハヤ斯ニ來ルト云罵ル、一說ニ曰ク、汝村井入道春長軒（〇道家）ガ家人、智恩院ヨリ光秀ガ頸ヲ拾ヒ來リ實驗ニ入レ、秀吉彼首ヲ打タヽクトモ云ヘリ、其後秀吉、光秀ガ屍ヲ求メ出シ、頸ヲツヾケ縫合サセテ、粟田口ノ日岡峠ニ張付ニカケリ、

〔惟任退治記〕授齋藤內藏介利三、惟任（〇光秀）被討事不知之、堅田邊賴知音蟄居之處、方便搦捕來、運之盡處也、（〇中略）其後乘車渡洛中、惟任首、亦續體、於粟田口兩人共擧機、

軍中及戰後行刑

〔平治物語　三〕賴朝擧義兵平家退治事
去程ニ、長田四郎忠宗ハ、平家ノ侍共ニモ惡マレシカバ、西國ヘモ不參、角テハ叶テ國人共ニ討レントヤ思ケン、父子十騎計リ、羽ヲ垂テ鎌倉殿ヘゾ參ケル、イシウ參タリトテ、土肥次郎ニ被預ケルガ、範賴義經ノ二人ノ舍弟ヲ被差上ケル時、長田父子ヲモ相添ヘ給トテ、身ヲ全シテ合戰ノ忠節ヲ致セ、毒藥變ジテ甘露ト成ト云事アレバ、勳功アラバ大キナル恩賞ヲ可行トゾ約束シ給ケル、然レバ木曾ヲ退治シ、平家ノ城攝州一ノ谷ヲ責落、註進ノ度ゴトニ、忠宗景宗ハ軍スルカト問給ニ、又ナキ剛者ニテ候、向敵ヲ討、當ル所ヲ不破ト云フ事ナシト申セバ、八島ノ城落タリト聞ヘ

ヲハタ物ニ可上之由被申ト云々、沈思ノ事也、無口少々及暮歸了ト、種々侘言ニテ、春三月迄拘、云々、付之家別ニハ八百文ヅヽ出云々、不便事也、

〔甲陽軍鑑十九品第五十一〕一小田原北條家は如此なれども、三河先方の中に、奥平父子、〇貞能信昌ふりあしき故、誓紙を仰付られ、其上九八郎内儀を人質に召おかれ候を聞、家康卿に九八郎を仕候へと、信長あつかひをもつて、奥平父子逆心仕られ候、それにより奥平九八郎女房衆を機物に、勝頼公〇武田より懸なされ候、則長篠城に奥平こもりゐるなり、

〔甲陽軍鑑十九品第五十三〕信長より岩村の城へ扱をいれ、秋山伯耆守伯母むこなれば、たすくべきとありてだしぬき、伯耆座光寺をからめ捕、機物にあげ、家康の味方に成たる奥平九八郎女房を、勝頼公機物にあげ給ふ、其返報なりと申され候、

〔新田由良家傳記〕籠城の内、或時新田へ北條家働、はりつけ木を押立、城を渡し不申候はゞ、國繁顯長をはりつけにあげ可申旨申候、

〔新田由良家傳記〕一給所之百姓、御領之百姓と公事、給所之百姓十分勝利有之バ、三年寺入たるべき事、御領の百姓ハ、其當人庄屋五人組ハ所之はり付に可申付、給所之百姓ハ、百石に付永樂錢壹貫文奉行へ可差上事、〇中略

天文五年正月日

〔家忠日記增補〕天正三年四月五日、野心ノ本人〇中略大賀〇彌四郎ガ妻其子四人ヲ捕リテ、三州念志原ニ磔ニス、

〔家忠日記〕文祿二年三月十六日辛未、先度馬盗人二人、三州ほそ川宇人、はり付にかけ候、

〔土佐國高知北村武兵衛所藏文書〇盛澤集所引〕文祿五年〇慶長元年十一月十五日長曾我部元親掟

一雜説之事申出者、即時はたものに可懸事、幷落書有無不可正儀、書手於露顯者、可行死罪事、

幕府行刑

見知タル人更ニ无クテナム止ニケルトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔宇治拾遺物語〕二件の事共をかたり奉れば別當（○撿非違使）おどろきて、はやく河原に出ゆいてとへといはれければ、撿非違使ども、かはらにゆいてよせはしほりたて、身をはたらかさぬやうにはりつけて、七十度のかうじをへければ、せなかは紅のねりひとへを水にぬらしてきせたるやうに、みさ〴〵となりてありけるを、かさねて獄に入たり、

〔高祖遺書〕四法蓮慈父十三年供養法華經文字成生身佛事

阿闍世王ハ、集十六大國惡人、語一四天下外道、提婆ヲ師トシテ放無量惡人、佛弟子ヲ、或ハ罵、或ハ打、或ハ害シ、或ハ殺セシノミナラズ、賢王ニテ無失父ノ大王ニ、一尺ノ釘ヲモテ七處マデ打付、ハツケ（○撜刑）ニシテ、生タル母ヲバ、玉ノカンザシヲツカミ、刀ヲ當頸重罪ノツモリ、惡瘡七處マデ出デ、（○下略）

○按ズルニ、本書ハ僧日蓮ノ著ナリ、

〔豐臣秀吉譜〕中是年（○天正十八年）奈良町人、借金銀償高利者有之、人競借與之、甲來求利、則以乙金銀加利而返之、乙來又乞利、則以丙丁等金銀倍蓰而附之、遂使金銀積于道路、其徒數十人、富而紛奢、然其畢竟不知爲如何、蓋其實者、得一旦之利、而有後日之害、是與穿窬不異、秀吉聞之磔奈良町人數十人、且命曰、多財故借盜金、亦與同罪也、宥之倍其借數、以使出金銀而入官、

〔豐臣秀吉譜〕下先是三十年前、南蠻耶蘇人貢、託于商胡、以弘邪法、文祿年中、秀吉怒其惑民、乃捕伴天連六人、伴類二十餘人、渡於京都大坂、送肥前長崎、皆磔之、（○又見長崎志）

〔多聞院日記〕天正十四年十月二日、

一ヤケアトノ地下人悉次郡山へ被召下ノ子細ハ、クロカチ堺ヨリ盜ミウリニ座ノアルヲ隱シテ、助四郎ト云者仕ヲ糺明之處、一類悉以逐電了、地下許容曲事トノ成敗探ニテ、地下人ヲハタ。。

磔屍、世ノ人ハ張付ト云、額左右ノ手足ヲ釘ニテ物ニ打付テ、後ウシロヨリ止矢ヲイル磔、ノ字ヲバ張ト讀也、

〔今昔物語二十九〕不被知人女盜人語第三

女、男ニ云フ樣思ヒ不掛ズ、徒ナル宿世ノ樣ナレドモ、可然クテコソハ此テモ御スラメ、然レバ生トモ死トモ我ガ云ハム事ハヨモ不辭ジナト、男、實ニ今ハ生ムトモ殺サムトモ、只ダ御心ナリト云ケレバ、女糸喜ク思タリケリト云テ、物食ヒ拈メナドシテ、晝ハ常ノコトナレバ、人モ无クテ有ケル程ニ、男ヲ去來ト云テ奥ニ別也ケル屋ニ將行テ此ノ男ノ髪ニ繩ヲ付テ、幡。物。ト云フ物ニ寄セテ、背ヲ出サセテ、足ヲ結曲メテ拈置テ、女ハ烏帽子ヲシ、水旱袴ヲ着テ引編テ、笞ヲ以テ男ノ背ヲ、慥ニ八十度打テケリ、○下略

〔今昔物語二十九〕伯耆國府藏入盜人被殺語第十

今昔、伯耆ノ守橘ノ經國ト云フ人有ケリ、其人ノ伯耆ノ守ニテ有ケル時、世ノ中極ク辛クテ、食物无キ年有ケリ、其レニ國府ノ傍ニ院ト云フ藏共有リ、藏ノ物共ハ皆下シ畢テ、物モ无カリケル時ニ、人ノ藏ノ邊ヲ過ケルニ藏ノ内ニ叩ク者有リ、何ノ叩クゾト聞ケレバ、藏ノ内ニシテ云ク、盜人ニ侍リ、此ノ由疾ク申上給へ、此ノ藏ノ餉ノ有シテ見テ少シ取テ命ヲ助ケムト思テ、藏ノ上ニ登テ屋上ヲ穿テ、餉ニ落掛ラムトシテ、手ヲ放テ落入タレハ、餉モ无クテ空ケレバ、此ノ四五日返リ可上キ方モ无クテ、既ニ餓死侍ナムトス、出テコソ死侍ラメト、人此レヲ聞テ、奇異ト思テ、守ニ此ノ由ヲ申ケレバ、忽ニ在廳ノ官人ヲ召テ藏ヲ開サセテ見レバ、年卅許ナル男ノ、糸鋼ラカナルガ、水旱裝束直クシタルガ、色モ无キヲ引出タリ、人々有テ此レヲ見テ云フ、甲斐无シ速ニ被追放ヨト云ケレドモ、何デカ後ノ聞エモ有リト云テ、藏ノ傍ニ幡。物。結テ張懸テケ。リ。然ルハ、痛ウ云タル奴ナレバ可免放キニ口惜キ態シタリトナム人云ヒ謗ケル、此ノ男ノ顏

礫　串刺　車裂〔併入〕　鋸挽　牛裂

礫ハ、機物(ハタモノ)トモ張付(ハリツケ)トモ云フ、機物ハ原ト織具ノ名ナレドモ、今昔物語ニ云フ所ノ幡物ハ、之ヲ治罰ニ用井タレバ、礫ヲ謂ヒテ、機物ニ懸クト云フハ、恐クハ此等ニ本ヅケルナラン、張付トハ、四肢ヲ開張シテ、之ヲ十字架ニ縛スルヨリ名ヅケタリ、又逆(サカ)機物アリ、逆張付トモ云フ、罪人ノ身ヲ十字架ニ倒懸シテ之ヲ刑ス、此刑ハ、王朝ノ盛ナル時ニハ絶エテ無キ所ニシテ、源頼朝ガ、長田忠致景宗ノ父子ヲ捕ヘ、之ヲ土礫ニ處セシヲ以テ、書籍ニ見エシ始トス、然レドモ復讐ヨリ出デタルモノニテ、且土礫ノ名ハ再ビ見エズ、礫ハ、實ニ足利幕府ノ末ヨリ大ニ行ハレシモノニシテ、身首處ヲ異ニセル屍體ヲ綴合シテ之ヲ行ヒシ事モアリ、又串刺ト云フモノアリ、礫ノ類ニテ、上世ニ梟ヲクシザシト云ヒシトハ別ナリ、礫ノ類ニハ、又鋸挽、牛裂車裂等ノ諸刑アリ、

鋸挽トハ、罪人ヲ土中ニ生埋シ、僅ニ其頭首ヲ露シ、數日ノ間、竹鋸ヲ以テ、漸次ニ之ヲ斷チテ死ニ至ラシムルモノナリ、

牛裂ハ、罪人ヲシテ、兩牛ニ跨ラシメ、火ヲ兩牛ノ間ニ加ヘ、之ヲシテ驚キ奔リテ罪人ノ兩股ノ間ヲ裂カシムルモノナリ、車裂モ亦之ニ相似タルモノナリ、

名稱

〔運歩色葉集葉〕機(ハタモノ)　礫(ハツツケ)　肆(ハツツケ)

〔倭玉篇下石〕礫(タク)　ハル　サイテ　ヒラク　ハツテ　サク

〔新撰字鏡石五十二〕礫　知格反、張也、開也、其死身乎保度巳須、

〔饅頭屋本節用集波〕磔(ハツツケ)　張付(ハリツケ)

〔塵添壒嚢抄十一〕五刑事

〔雲錦隨筆三〕洛北に獄門寺、獄門町といへるあり、則ち近衛通（出水通也）西洞院の西に入を獄門町といふ、往古斯所に獄舍あり、罪重き者は、之を斬て首を獄屋の門外に梟す、俗これより梟首を直に獄門と稱す、故に此町の號とす、近世に至るまで、大なる槐の木あり、罪重き者は、此樹下に於て斬り此所に梟首す、後世まで尙御卽位改元等、赦を行はるゝ時、五判官此所に來つて粗其式ありしと也、其獄舍ありし邊に西福寺といへるあり、本尊藥師佛は、聖德太子の御作也、此寺刑戮の場に近きを以て、結緣功德の爲に刑死の人を薦す、之に依て俗に獄門寺と稱す、曾て豐臣秀吉公、朝鮮征伐のとき、大佛殿の前に耳塚を築給ひ、西福寺の僧を請して耳塚の供養を遂しめんと欲す、然れども寺僧之を肯ず、秀吉公大に怒り、遂に寺產を沒收し、寺を洛北北野の社の邊に移す、今に獄門寺と號し、本尊を岩藥師といふ、獄舍の邊にありし時は、寺產百石ありしといふ、（山號西雲山といふ）

幕府梟搢紳首

〔甲陽軍鑑品第五十七二十〕一三月〇天正十年十一日に、勝頼公、信勝公の御證シルシを取、都へ上するとて、信長は道にて此御頸を實撿なされ、則勝頼公御證に向て御申候、其方親父信玄、我等嫡子城介を聟に約東あり、天下を望、縁者を變改し、其外度々の表裏いたされ候故、天罰を以て都へさつて上るとて、俄に煩つのり死給ふ、信玄の在世の時、頸にて成共都へ上り、參内を遂度とねがはれ候ひつるよしに候へば、勝頼父子、都へのぼり參内有て、其後獄門にて京童に見しられ給へ、信長もやがてあとより參るべしと仰られ、勝頼公御證、都へさしのぼせ給ふなり、

〔總見記二十二〕自越中注進事并武田信豐事

扨チ武田勝頼、同太郎信勝、典厩信豐、仁科五郎信盛、以上四人ノ頸、長谷川宗仁ニ仰付ラレ、京都へ上セテ獄門ニ掛クベキ由仰渡サレ、即上京セシメ畢ヌ、

〔家忠日記増補〕天正十年三月十四日、信長、陣ヲ信州飯田ニ移シ、勝頼〇武田父子ガ首ヲ此處ニ梟ス、其後勝頼ガ首ヲ京都ニ遣シ、獄門ニ掛ケ是ヲ梟ス、

〔柴田退治記〕玄番助、〇佐久間盛政今度矛楯張本人而罪多故、車渡洛中、於六條河原誅之、柴田權六首、同懸獄門者也、

〔根井家日記二〕粟田口合戰事

津田孫太郎ハ、同〇小野原彦大夫郎等金田兵四郎討取候、此孫太郎ハ箙ヲ負、中刺ニ短尺ヲ付候、

カゾイロノ取傳ヘタル梓弓引シボリテハアダ矢ナキ身ヲ、ト書テ葛原後胤津田貴信トシルシタルヲ見テ人々涙ヲ流シ、古ノ忠度ノ跡ヲ慕フ男ニヤト感心スル、小野原情アルモノニテ首ヲ獄門ヨリ申下シ、葬禮ヲイトナミ、佛事ヲ大事寺ニテ取行申候、弓取ノ嗜ムベキ道ト圖衆申候、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年七月十二日甲午、按察卿〇光親去日出家、法名西親者、爲武田五郎信光之預、下向、而鎌倉使相逢于駿河國車返邊、依可誅之由、於加古坂梟之訖、時年四十六、

軍中及戰後行刑

獄門ニ掛ケ、父子兄弟悉ク御追放アリ、

〔太平記 十五〕將軍都落事附藥師丸歸京事

楠判官〇正成山門ヘ歸テ翌ノ朝、律僧ヲ二三十人作リ立テ京ヘ下シ、此彼ノ戰場ニシテ尸骸ヲゾ求サセケル、京勢怪テ事ノ由ヲ問ケレバ、此僧共悲歎ノ泪ヲ押ヘテ、昨日ノ合戰ニ、新田左兵衞督殿〇義貞北畠源中納言殿〇顯家楠判官已下、宗トノ人々七人迄被討サセ給ヒ候程ニ、孝養ノ爲ニ其尸骸ヲ求候也トゾ答ヘケル、將軍〇足利尊氏ヲ始奉テ、高、上杉ノ人々是ヲ聞テ、アナ不思議ヤ、宗徒ノ敵共ガ皆一度ニ被討タリケル、サテハ勝軍ヲバシナガラ官軍京ヲバ引タリケル、何クニカ其首共ノ有ラン、取テ獄門ニ懸、大路ヲ渡セトテ、敵御方ノ尸骸共ノ中ヲ求サセケレ共、是コソトオボシキ首モ無リケリ、餘ニアラマホシサニ、此ニ面影ノ似タリケル首ヲ二ツ獄門ノ木ニ懸テ、新田左兵衞督義貞、楠河內判官正成ト書付ヲセラレタリケルヲ、如何ナル、ニクサウノ者カシタリケン、其札ノ側ニ、是ハニタ首也、マサシゲニモ書ケル虛事哉ト秀句ヲシテゾ書副テ見セタリケル、

〔東寺執行日記〕文安二年四月四日、赤松播州〇滿祐父子、若黨百廿四人頸高辻河原懸之、打手ハ赤松有馬也、近日稻荷祭之間、高辻懸之也、

〔嘉吉記〕搦手ノ山名〇持豐滿祐〇赤松ヲ討取、城ヲ屠リシカバ、大手軍兵ハ、播磨路ヘ一足モ踏入レズ、勿論敵ノ旗ヲモ不見歸陣シケリ、滿祐ガ首ハ獄門ニ被懸、

〔大乘院寺社雜事記〕延德三年十月朔日、室町殿〇足利義稙自去八月廿七日御出陣、御坐三井寺光淨院云々、光構院　十一月廿三日、宮內大輔〇六角政綱頸被懸六條河原了、〇又見親長卿記

〔多聞院日記〕天正五年十月六日、昨日五日申ノ刻、出京都、松永金吾ノ息、十二三才歟人質タリシヲ車ニテ京中ヲヒキテ令生害云々、

〔織田信長譜〕稻葉〇信長記、稻葉土佐爲獻義景〇朝倉首、信長使長谷川宗仁梟之於京都獄門、

路、被懸獄門之條、可有斟酌事也、只々被遣撿非違使於河原請取之、判官卽實撿頸者可足也、〇中略件宮去年十二月廿二日、於紀伊國隱謀露顯之間奉討之云々、

〔碧山日錄〕寬正三年十月三十日、有號荷田者、群盜魁者也、聚凶徒保守於東寺、以官兵稍强、盜咸逃散、荷田乘淀河舟、而竄於紀南云、　十一月三日、本寺之東班、以官命捕門前之行力、與盜同惡者斬其首、而出之於官、又逃惡者、火其家者、六七也、伏見里、竹田村、其令咸出賊首也、　四日、官捕盜人之魁首號荷田者、斬之、以其首梟六條河原也、

〔豐臣秀吉譜中〕千宗易利休、精于茶湯者也、秀吉酷嗜茶湯、故宗易受其恩眷厚矣、世人頗敬之、宗易撿定茶器之新舊可否、而決其價數、因是家得富贍、宗易與大德寺僧宗陳號古溪相議、彫己木像置之于寺內山門上、頃年宗易含私僻之意、其見茶器也、依與己親疎好惡之異同、而或以新爲舊、或以否爲可、以假爲眞、高下其售、壓多騙人、秀吉聞之怒曰、是國賊也、國賊不禁、則予之大過也、豈不釀將來嘲乎、卽收宗易而誅之、〇中略其後秀吉梟宗易首於一條反橋下、揭彼木像使蹈其首、以柱夾立之數日、視者如市、

〔時慶卿記〕天正十九年閏正月廿五日、宗益〇千利休曲事之由、先日披露候、逐電候處、又今日於一條橋、彼木像ヲハツ付ニ被懸候、不思儀ノ事也、

〔紀州御發向記〕一揆仰天伏地、頻成侘言旨、蜂須賀彥右衛門正勝言上、然者扶無過土民、撰出有罪惡黨、得可誅罰御諚、切惡人五十餘人首掛磔、召置殘百姓、專耕作者也、

梟死屍之首

〔松隣夜話中〕同〇永祿八年七月、柿崎和泉北條丹後、上州下分ニ働キ、毛作ヲコチ、夫ヨリ和田ヘ取詰、巡見スルノ處、武田衆堅ク守ルヲ以テ、早々引取、其時靑沼新九郎ト云、謙信寵愛ノ小姓、遠筒ニ當テ疵ヲ蒙リ、翌日前橋ニ於テ死ス、是ハ北條丹後與力靑沼勘兵衛三男、久敷越後ヘ相詰、休息スル爲、六月ヨリ父ガ在所ニ有リ、謙信公佐渡ヨリ御歸城マシ〳〵、新九郎御暇ヲ申サズ、忍テ在所ヘ罷歸リ、剩ヘ多日逗留致シ、是非ニ及ヌ由大ニ怒リ給ヒ、堀埋タル新九郎ガ屍ヲ引出サセ、首ヲ斬リ

者之間被推問之、名謁申言、上總五郎兵衛尉也、爲奉度幕下、數日經廻鎌倉中云云、卽下賜于義盛、○和田可召尋同意輩之旨被仰含之云云、　二月廿四日丁卯、於武藏國六連海邊、囚人上總五郎兵衛尉忠光梟首、義盛奉之、日來斷漿水云云、

〔百練抄〕十一土御門建仁元年正月廿三日、今夜越後國住人城四郎平長茂自關東馳上、申賜宣旨可征伐將軍賴家之由、上皇○後鳥羽偷御幸他所、無返答人、仍逃脫不知行方、　二月廿五日、城四郎長茂首、并郎從首、生虜五人給獄所、於生虜五人者、召出被梟首、

〔吾妻鏡〕四十八正嘉二年九月二日戊申、今日諏方刑部左衛門入道所被梟罪也、此主從失以遂不進分明白狀、爰相州禪室被廻賢慮、以無人之時、潛召入諏方一人於御所、直被仰含曰、被殺害事、被疑思食之上、所從高太郎承伏勿論之間、難遁斷刑之旨評議畢、然而忽以命不可終其身之條、殊以不便也、任實正可申之、就其詞加斟酌、欲相扶之云云、于時諏方且喜、抑淚果宿意之由申之、禪室御仁慧難相同于夏禹泣罪之志、所犯既究之間不被行之者、依難禁天下之非違令糺斷給云云、

〔看聞日記〕正長二年○永享元年九月廿四日、先日被召捕楠木、○光正今夕於六條河原被刎首、侍所赤松所司代六七百人取圍斬之、切ミス手魚其體尋常ニ被斬、○中略見物人河原充滿、自南都御使立、急可斬之由被仰、其形僧也、頌歌等天下美談也、楠木首、四塚ニ被懸云々、

〔建內記〕嘉吉元年五月九日乙巳、鎌倉殿持氏卿子息等首、近日可京着、於彼首等者、可被懸獄門○近衛之由風聞云々、當時雖無儀式、猶可被守舊儀哉、尤可然事也、彼邊民屋計會云々、

〔康富記〕文安五年正月十日、舊冬於紀伊國討南方宮部類、其頸京進、自畠山殿被執進之、相當年始御敵之頸到來、爲珍重、　二十三日、大判事明世立寄語云、南朝宮御頸、自畠山殿被執上之、爲公家可有御實撿之由被申間、可爲何樣哉之由、自禁裏以頭左大辨爲御使、被尋申殿下○關白藤原兼良之處、被渡大

○按ズルニ、二ノ木トハ、二段メノ頸臺ニ擬シタルモノヲイフ、是卽チ主從ヲ同時ニ梟スル時ノ法ナリ、カヽル事ヨリ三段ノ法起リシナランカ、

〔籾井家日記十〕八上秀治同秀尙送安土事附秀治最期事幷秀尙與信長公對面問答事秀尙最期事
御首〈〇秀尙〉ヲバ川原ニ獄門ニシテ候、公卿臺ニ載セテインギンニシテ候、首祭ヲモ結構シ候ト申シ候、

○按ズルニ、公卿臺ハ、下學集ニ、公卿〈臺器也〉トアリ、古寫本節用集ニハ公饗ニ作リ、易林本節用集ニハ供饗トアリ、公卿、供饗相同ジ、貞丈雜記ニ、三方ノ穴ナキモノヲ供饗トイフ由ミユ、サテ本書ノ意ハ、此臺ニ居エタルマヽ首板ニ置キシヲ云ヲナリ、頸實撿ノ時、此臺ニ居ウルハ上輩ノ首ノミナレバ、是亦貴賤ヲ分チシ一證ナリ、

以斬首徇道路

〔吾妻鏡十七〕正治三年〈〇建仁元年〉三月四日甲寅、京都飛脚參著、去月廿二日、城四郎長茂幷伴類新津四郎以下、於吉野奧被誅畢、長茂先立逐出家、同廿五日長茂幷伴黨四人首被渡大路云云、

惡黨行刑

〔吾妻鏡六〕文治二年二月一日己酉、今日北條殿〈〇時政〉於六條河原刎群黨十八人首、凡如此犯人者、不可渡使廳、直可處刎刑之由云云、　十三日辛酉、當番雜色自京都參著、進北條殿狀等、〈〇中略〉正月廿三日、同廿八日、洛中群盜蜂起、則搦獲之、去一日、十八人梟首畢、經數日者、似刑寬之間、不及召渡使廳、直致沙汰云云、

〔吾妻鏡十一〕建久二年五月廿日丁卯、於近江國辛崎邊、佐々木小二郎兵衛尉定重止流刑被梟首、此事日來可遁此難之樣、幕下〈〇源賴朝〉雖被廻賢慮、山徒鬱胸、遂以無所被宥仰云云、〈此事爲最時之本云云〉

〔吾妻鏡十二〕建久三年正月廿一日甲午、渡御于新造御堂地、犯土之間、運土石匹夫等之中、有左眼盲之男、幕下〈〇源賴朝〉覽恠之、彼者自何國誰人進哉之由被尋仰、仍景時〈〇梶原〉雖相尋之不分明、被召寄御前、佐貫四郎大夫同御旨、面縛之處、懷中帶一尺餘打刀、殆如寒水、又覽其盲、魚鱗覆眼上、彌知食有害心、

人、八幡彌四郎宗安頸云々、此ハ去廿日、御所陣內ニシテ、院宣ヲ大友殿ニ奉レ付之間、卽召二捕之一云々、
院宣六通帶二持之一、大友、筑州、菊池、平戶、日田、三窪、以上六通云々、

〔越後軍記　三〕景虎問二頸實撿之法式一事
斯テ景虎米山ノ初陣ニ討勝テ良勝ヲ召レ、〇中略未ダ頸實撿ヲ見聞セズ、宜ク執行フベシト宜ヘバ、良勝畏テ古代ヨリノ法式ヲ演說シタリケル、〇中略
一居頸居物、上輩ハ供饗、中輩ハ足付、下輩ハカンナゲ、或ハ山折敷ナリ、但シ切目ノ方、フチヲ放シ、首ノ面ヲ角ノ方ヘ向ベキ也、〇中略
一頸臺八寸四方ナリ、高サモ同前、是又三品ノ居モノナキ時ハ用ルナリ、是ヲ頸机トモ云フナリ、〇中略
一頸ヲ梟首スル事、俗ニ是ヲ獄門ニカクルト云、上輩、中輩、下輩ノ三段アリ、或ハ公家將軍、總テ上輩ノ頸ヲ懸ルトキ、柱ハ栗、橫木ハチブノ木、高サ地ヨリ九尺三重、中輩ハ、七尺二重、下輩ハ、六尺一重、頸臺ニ居ル時ハ、眞中ニ五寸ノ釘ヲ打テ首ヲ指ス、見前三尺バカリ、上輩ノ時ハ、上ノ一重ニ大將ノ頸ヲカケ、下二重ニハ相共ニ討死シタル士ノ首ヲ段々ニ掛ルナリ、
一中輩ノ頸ハ、梨ノ木、首臺五寸四方ナリ、下輩ノ頸ハ實撿ニ入ズ、竹柱、橫木ハ栴檀ナリ、臺ナシ、
〇按ズルニ、此ハ首實撿ノ法ナリ、首實撿ニハ梟首シテ實撿スルアリ、居頸ヲ實撿スルアリ、居頸云々以下ハ居頸ノ法ナリ、是亦貴賤ヲ分チシ參照トナレバ、姑ク此ニ收ム、

〔嘉吉物語〕さて頸實撿あつてのち、則五條河原にかけらるべしとありしかば、諸大名達のひやうぢやうには、すでに天下の御敵なるを、河原にかけられん事ゑかるべからずとて、三條の西の洞院に、栴檀の木をほりたて、獄門の形をつくり、一の木には赤松入道〇滿祐のくび、二の木には安積がくびをぞかけられけり、

〔正慶亂離志〕正慶二年三月十一日、肥後國菊池二郎入道寂阿、博多ニ付畢、同十二日、出仕之時遲參之間、不可付著到之由、侍所下廣田新左衛門尉問答之間、及口論畢、同十三日寅時、博多中所々ニ付火燒拂、寂阿ガ筑州江州ニ立使者申云、宣旨使ニ罷向候、忩可有御向之由觸廻ル、筑後入道殿ハ、堅構ニテ此使二人ガ頸ヲ切、十三日夕方被進匠作方、江州ハ可打止之由被仰之間、彼使逐電畢、サテ菊池捧錦旗、松原口辻堂ヨリ御所ニ押寄之處、辻堂ノ在家ニ火付タル間、不及押寄シテ、早良小路ヲ下リニヲメイテ懸、宣旨ノ御使七人、人參テ可付著到之由ノヽシリテ、櫛田濱口ニ打出、錦旗一流、菊池旗、幷一門等旗アマタ捧テヒカヘタリ、爰筑州祗候人、饗場兵庫允相向、尋申事子細之處、郎兵庫允、幷若黨一人被討畢、次武藏四郎殿、武田八郎以下、燒失ハ菊池所行トテ、相向息濱菊池宿之處、早ク菊池打出タル間、息濱ノスサキヨリ廻テ、横田濱口ニ菊池引ヘタル處ニ追懸タリ、即及合戰、武田八郎ハ負手、竹井、孫七、同舍弟孫八、幷安富左近將監等被討畢、サテ御所ニ押寄及合戰、菊池入道子息三郎二人ハ、犬射馬場ニテ被討、菊池舍弟二郎三郎入道覺勝以下、若黨等打入御所中、既ニ御壺ニ責入致合戰之間、敵七十餘人被打止畢、菊池嫡子二郎幷阿蘇大宮司ハ落畢、匠作御方モ或討死、或數輩負手畢、サテ合戰過テ、筑州江州以下、鎭西人々被參御所、即菊池入道子息三郎、寂阿舍弟覺勝頸以下若黨等頸、被懸犬射馬場、寂阿三郎覺勝三人ガ頸ハ、始四五日ハ不被懸、後ニ被懸之、寂阿幷子息三郎覺勝頸ハ、別ニ被懸之、夜ハ取テ被置御所、十ケ日計アテ以釘被打付、札銘ニ云、謀叛人等頸事、菊池二郎入道寂阿、子息三郎、寂阿舍弟二郎三郎入道覺勝云々、菊池方手負人等落行之處、國々ヨリ博多ニ馳上ル勢共、行向打取之、頸ヲ取進之間、犬射馬場ニ三重ニ被懸之、五所ニ木ヲユイワタシテ被懸、其後亦連々ニ自所々取進落人頸二百餘也、糸田殿、即御所ニ御入、參州殿、十三日御登アル處ニ、筑後國横隈ニテ、菊池孫子兒童幷若黨十人計行合奉ル間、即被討畢、頸ハ御持參アリ、　廿三日、院宣所持仁、八幡彌四郎宗安ト云物被切頸、即被懸畢、銘云、先帝〇後醍醐院宣所持

梟首

名稱

鎌倉幕府時代、梟首ヲ稱シテ獄門ト云フ、獄門トハ、首ヲ斬リテ後ニ囚獄ノ門ノ側ノ棟ノ木ニ懸クルヨリ起リテ、其事ノ既ニ絶エテ後ニモ、尙ホ獄門ニ懸クト云フナリ、足利幕府ノ時ニハ、柱ト横木トヲ以テ之ヲ構造シ、横木ノ上ニ方八寸ヨリ方五寸ニ至レル頸臺アリ、其中央ニ長サ五寸ノ釘ヲ打チテ、首ヲ刺スナリ、是ハ中等以上ノ人ノ事ニテ、下輩ニハ臺ナシ、サレドモ原ヨリ故ラニ其法ヲ設ケテ、此刑ヲ起シタルニアラザレバ、各地盡ク此ノ如クナルニアラズ、死シテ後ニ時ヲ經タルヲ、尙ホ其首ヲ斬リテ梟セシ事モアリ、要スルニ此刑ハ、多クハ交戰ニ關シタル事ニ用キタルモノヽ如シ、

梟首法

〔尺素往來〕野心隱謀之族追伐事、官軍合戰依得其利、張本之輩者、悉令誅候、至其餘黨者、一々搦捕、歸洛之間、首被懸獄門棟(アフチノキ)、至虜者、先暫致禁獄候畢、

〔書札袖珍寶〕獄門札書樣事

斬罪、河內國高安郡井田村三右衛門、去八月九日之晚、一條柳原に人を斬ころし、其跡道具等奪取訖、如御法度、數日たゞしくあきらめ、たうぞくげせんの上、令刎首者也、

永正拾年月日

〇按ズルニ、此書式ノミニモ限ラザルベシ、姑ク附シテ參考ニ供ス、

〔吾妻鏡九〕文治五年九月六日癸亥、河田次郎持主人泰衡之頸參陣岡、令景時奉之、以義盛重忠被加實撿上、〇中略被懸泰衡首、康平五年九月、入道將軍家賴義獲貞任頸之時、爲橫山野大夫經兼之奉、以門客貞兼請取件首、令郎從惟仲懸之、以長八寸鐵釘打付之云々、追件例、仰經兼曾孫小權守時廣、時廣以子息時兼、自景時手請取泰衡之首、召出郎從惟仲後胤七代廣綱令懸之、釘同彼時例云云

ハヾ、御爲ニ能可有之候ト申ケレドモ御承引ナシ、

ニ候ヘバ、タトヘ義景目ノ前ニテ、忠義ノ討死ヲコソ不仕候トモ、敵陣ニ請受テ一命ヲ助ル事思ヒモヨラズ候、貴命ノヲモキニシタガハヾ、累代ノ瑕瑾、當時ノ耻辱、是ニ過タル不覺アルマジ、兵盡矢窮テ生捕トナル事モ、戰場ノ習也、大將ニ先立テ士卒ノ死スルハ軍ノ道也、厚恩ニハ早々頸ヲハネラレテ給ルベシト云フ、前波吉繼イロ〳〵ニ異見申セバ、印牧眼ヲ怒ラカシテ、汝コソ主君朝倉殿ヲ捨、降人ト成テ、不義ノ擧動、人非人ノナスワザナリ、某ハ汝ガ樣ナル不義ノ者ニテハナシト云テ、曾テ以テ同心セヌ故、サラバキレ・トテ、頸ヲ刎ントシタリケレバ、印牧申ス樣、凡ソ侍タル者ノ、敵ニ逢テ生捕ラルヽ事、古今珍シカラズ、雜兵同前ニ頸切ラレン事思ヒモヨラズ、只切腹コソ本意ナレト云フ、信長公被聞召、敵ナガラモ志アル者也、繩ヲユルシテ腹切ラセヨト被仰下、檢使ヲ以テ切腹サセラル、卽印牧思フマヽニユヽシク腹ヲ切タリケリ、

〔古事談四勇士〕鎌倉ニテ庄司次郎〇畠山重忠稻毛入道〇重成ナド被打之時、稻氣之舍弟、由井ノ七郎ト云者、遠景入道〇天野之許ニ步來云、已被結惡緣、不可免其難、雖須自害、年來有往生極樂之望、自害不臨終正念、恨不如本意、吾傳聞被刎頸之者、不往生云々、依之御房ノミコソ令哀憐給ハメトテ所參向也、可然者、向西方合掌唱念佛之間、差殺可給云々、遠景隨喜悲泣中事由、濱ニ將行テ差之處、十二刀迄念佛聲不休、于時止念佛云、猶可死心地モセヌ也、心サキヲ可差トテ、又高聲念佛之間、如云心前(ムナサキ)ヲ被差之時、聲止氣絶畢ヌ、

〔總見記四〕木下藤吉郎出身由來事

同國〇美濃宇留馬ノ城主大澤次郎左衞門ヲ秀吉樣々ニタバカリ降參サセ、淸洲ヘ同道シ行テ信長公ヘ御目見ヘ申サセケリ、信長公ヒソカニ藤吉ヲ召テ仰ケルハ、此大澤ハ勇者ナレドモ、心ノ變ジヤスキ者ナリ、味方ニ賴ム事如何ナリ、今夜汝ガハカラヒニテ腹ヲ切セヨト被仰ケリ、藤吉申上ルハ、御諚尤ニ候ヘドモ、降參ノ者ニ腹ヲキラセ候バ、重テ降參申ス者有間敷候、只御赦免候

多シ、○是恐爲二永祿十年事一

〔大友興廢記　十二〕親成切腹の事

さるほどに、生捕の親成○持土は、豐後浦部の武士に預け置給ふ、浦部の侍彼是會合の砌の取沙汰に、敵を擒にして殺事なかれと云事あれば、親成も命ばかりはたすけ給はんと云人もあり、又兩葉を截ざれば斧柯を用ゆといふ事あり、御誅伐は多分なるべしなどまち／＼に沙汰しけり、終に切腹仰付らるゝこそあはれなれ、○是恐爲二天正六年五月事一

館中行刑

〔經覺日記〕享德三年四月三日、酉下剋、譽田彌六十九歲切腹畢、子細者、畠山德本禪門子息、伊與守義夏、非禪門實子一之由、內者共令二內談一之由、彼彌六令レ告二知伊與守一畢、仍譽田下總守、彌六父同遠江入道、彌六祖父令二折檻一之間、切腹了、如レ此之間、神保張本之條、伊與守令レ存二知神保嫡子二郎左衞門尉、召二屋形一令二切腹一了、至二神保一者、指二向軍勢、數刻防戰、終屋形懸レ火了、當座ニ神保子息三人、內者五六人被レ討了、於二本人一者、落之由有二其聞、於二近邊道場一令二逝去一云々、負レ手故也、

軍中行刑

〔總見記　十三〕印牧彌六左衞門被レ誅事

抑今度諸軍勢ノ討來ル頸ドモヲ、降人前波九郎兵衞吉繼富田彌六郎長秀兩人目アカシニ被レ仰付、一々ニ見セ玉ヘバ、兩人見テ、是ハ誰、是ハ何ト名字名乘ヲ申上ゲ、一々カクレハナカリケリ、就レ中不破河內守ガ郎黨、原加左衞門ト云者、敵方ノ奉行人、印牧彌六左衞門ヲ生捕來ル、信長公聞召シ、是ハキコユル勇士ナリ、引テマイレト御諚ニテ、スナハチ御前ニ引スエル、汝ハキコユル勇士也、何トシテ生捕ラレタリケルヤト御尋有ケレバ、印牧御請申ス樣、江北ノ軍急ニシテ、自身數廻敵ニアタリ、息キレ身ツカレ申スユヘ、角トラヘラレ候ト申上ル、信長公被レ聞召、勇者程アルゾ、正直ナル申シ分也、一命ヲ助ル間、味方ニ加ッテ、越前ノ案內仕候ヘト、前波ヲ以テ被レ仰下、印牧申シ上ルハ、御諚生々世々忝奉レ存候、併某苟モ朝倉譜代ノ家人ニテ、剰國中奉行ノ名ヲ汚セリ、身不肖

ければ、たばかつて小谷の城へ右三人をめされける、三人の者共、何心もなく登城仕ければ、總門の下馬より供の侍を押留め、三人が脇指を雨森彌兵衛、海北善右衛門尉請取、亮政の前へ召出し、一々吟味したまへば、肥前守臆する色なく、有のまゝに白狀す、亮政これを聞、流石名あるものなれば、少も己が罪をかくさず申條神妙なりとて、神勝寺と云寺へ右三人追込、二三日して切腹を被仰付、

〔大友興廢記〕二入田親眞切腹の事附御籠中を御離別の事

去程に入田親眞強いさめ申奉るを、却而御いこんに思召す言葉や有けん、彌御氣色よろしからずして、終に天文十九年に切腹仰付らるゝ、玖珠日田の人數、入田つかむれの城へ押寄るよし聞えければ、親眞を一門の老若いさめ申やうは、暫肥後の國へ落、國をへだて、年月を經るならば、思召わけらるゝ事もやあらん、今早速に切腹あれば、常の罪科人に似たるべしといさめけれども、親眞其儀に同せず、殷紂王の賢臣箕子は去ぬ、微子は奴と爲ぬ、比干は諫めて死すと云て、入田つかむれの城を去らず、然に日田、玖珠の人數をさしつかはし、切腹仰付らる、其時親眞の弟右衛門大夫を介。錯。人に定らるゝ、右衛門大夫愁歎に力もよわりたる故刀きれず、ふてぎわなるところに、內の侍甲斐彌四郎と云者、つゝとより介錯して、彌四郎も其儘腹切失ぬ、尤神妙なりと人みなかんじけり、

〔松隣夜話〕中越後ノ科人ノ御仕置、一ノ重科ニハ、刀脇差ヲ召取ラレ一代身ニ帶ズ、(但侍以下ハ格別)二番死罪、三番追出、四番所領沒收、五番與力同心ヲ放サル、六番籠居スル等也、長尾右衛門佐ト云侍大將、聊無沙汰ノ行跡アルニ依テ、謙信公大ニ咎メ給ヒ、與力同心ヲ召放サレ、所領ヲ取上、其上ニテ兩腰ヲ帶ザル樣ニト仰付ラルヽノ處ニ、親類ヨリ、右衛門親庵原之介、御家ニ對シ戰忠之レアリタル義ヲ申立テ、生害ノ侘言申上ルニ依テ、一等ヲ免許セラレ、兩腰ヲ給ハリ切腹ナリ、前後此類

ほどのさぶらひに、はらをきらせられ候事は、武田の家に、はじめたるべきとおほせ候、然間諸人のをしみ申およばず候、

〔奥羽永慶軍記三十七〕義光病死里見之徒黨等死罪之事

既ニ里見ノ者共、數度ノ忠勤ヲ抽テ候事、四方ニカクレ有ベカラズ、然ルニ御舍兄義安生害ノ時、權兵衞ヲ助ントテ最上ヲ引切、里見ガ一族牢人セシ其憤ヲ殘シ、御遺言ナシ給フニテヤアラン、其上ノ事ハ何カクルシカルベキトゾ支ヘケル、家親尤也トテ、其異見ニ隨ヒ奥ニ入給フガ、此義延引ニ及バヾアシカルベシト思ヒ案ジテ、同廿五日、小幡播磨守、長尾右衞門尉ヲ召レ、急ギ里見越後入道、同民部、同權兵衞ニ腹ヲキラセ、首ヲ刎テ參レト旗本澤山伊助宮野新左衞門ニ足輕百人ヲ差添ラル、小幡長尾ハ里見ニ緣類タリト云ヘドモ、日來中アシキヲ知給ヒテ、討手ニハ遣ハシケリ、ヤガテ此者ドモ里見ガ館ニ入テ里見父子三人ノ人々、咎ハ知ラズ候ヘドモ、腹切ベキノ由御撿使トシテ我々參リ候ト申ケレバ、里見ノ者共、聊異義ニ及バズ、家人共ハ如何ト問フ、小幡長尾聞テ、家來ハ皆々御免候間、トク〳〵除ラレ候ヘトイヘバ、右往左往ニ立除ケル、入道、民部、權兵衞尉、卽座ニ腹ヲ切ニケリ、尤日來剛ノ者トイハレシ程アリ、最期ノ體、切腹ノサマ、勇敷ゾ見エニケル、是ヲ聞彼等ガ女房、奥ニ在テ自害ヲゾ遂ニケル、里見ガ譜代ノ侍三人、同ジク腹ヲ切ケリ、アハレ上ノ山ニ在シ時ナラバ、手痛一合戰ハ有ベキニ、今ハカスカノ住居ナレバ、只一時ニ滅テケリ、

〔淺井三代記九〕今井肥前守同孫左衞門同十兵衞尉切腹の事

今度南北和睦して、亮政、江〇近江國北中の侍の忠不忠の輩を正しけるに、忠節の人に、感狀に所領を相添給はるも有、褒美計を給ふもあり、其品々を糺したもふ、爰に今井肥前守頼弘、同孫左衞門尉、同十兵衞三人は、番場表にて、敵江南定頼卿方へ內通して、亮政を可討計略したる旨、慥に證人出

木食興山上人　淺野彈正少弼

○按ズルニ、關原合戰誌ニ、昔ヨリ未ダ攝籙ノ人生害ノ例ヲ聞カズト見エ、又落穗集ニ、秀吉公ヨリ高野入ノ義被二相糾一、高野迄討手ヲ向ラレ候ニ付、秀次公自殺アラレ候、是ヨリ高野山遁科屋ノ法破レ候ト也ト見エタリ、

〔清正記 三〕清正家中江被二申出一七ヶ條

大小身によらず侍共可レ覺二悟一條々

一亂舞方一圓停止たり、大刀をとれば人をきらんとおもふ、然上者、萬事は一心の置所より生るものにて候間、武藝之外、亂舞けいこの輩可レ加二切腹一事、

〔妙法寺記〕天文十一年六月、信州諏方殿江取懸被レ食候、武田殿切腹被レ食候而、諏方殿ヲ生取ニ被レ成候而、府中ニテ腹ヲ兄弟御切候、

〔諏訪神長守矢氏舊記〕賴重は討死をとげべきとて、兄弟三人、うちものをとつて切ていでんと仰候所に、甲州がたより彼城を御ひらき候はゞ、和談なされ歸陣あるべきよし被二申候間、此方衆何も其いけんを被レ申候、賴重御納德候て、甲州へかうさんいたし、武田殿へ人數を申うけ、同名信濃殿に腹を切せべき段におぼしめし、無二相違一城をひらき、七月五日に、甲州へ御越、御うんのするに候つる哉、同廿日夜、坂垣のゑげにて御腹めされ候、彼時じせいの歌候、

おのづからかれはてにけり草のはの主あらばこそまたもむすばめ、此のごとくあそばし候て、さけさかなをこはせられ候、酒はもたせ候、肴は無レ之候と申、さては武田の家に、腹きる樣體は御存ぢなきや、さかなとはわきざしの事に候とて、わきざしをこひ、十もんじにきらせられ、三刀めに、右のちのもとへつきたて、てんもく程くりおとし、さてうしろへ御ころび候、此以前に、我等

近習少々同切腹云々、天下太平、幸甚々々、

〔太閤記十七〕秀次公御切腹之三使登山事

夫惟るに大かた讒者ハ智深く才足るものなり、秀次公在世し給はゞ、増田石田が身の上あしかりなんと遠慮し、彌讒言止期なし、將軍○豐臣秀吉もあり〳〵しく長盛三成申しかば、げに左も有べしとおぼされにけり、いたはしながら腹を切せ候へとて、福島左衞門大夫、福原右馬助、池田伊與守、撿使として遣されけり、此人々登山之沙汰有ければ、秀次公さては最期近つき侍るなり、此者共は、我に對し恨有者共なり、彼讒人等、よきにこしらへ侍るよなと隆西堂に對し笑はせ給ひぬ、西堂はいそぎ下山有て、毋瑞龍院殿之事、今後二世よきに計ひくれ候へと仰ければ、是へ御供仕候はんと粟野を以申上候時より萬事相究、東福寺小菴之儀など、よきに沙汰し罷出申候つる、被爲安御心候へ、下山之儀、中々思ひもよらず候と足踏實地言上有しかば、秀次公ふかう感じ給ひけり、彼三使木食上人を呼て云けるは、如此關白殿御切腹之儀、奉行人より爲御意書簡有之とてさし出しけり、其狀云、

爲御意申達候、依秀次公御謀叛之條々少も依無疑之、可被進御切腹之旨候、其地住山之罪業人、大師被垂御慈悲、助宥之法雖有之、對尊父秀吉公、逆臣極重之罪過、無所容於天地之間、然則大師何以得救之、有誓願之心乎、碩學之人々、行人方、一山へ其旨被相達之、早速可被及其沙汰候、猶三使可有演說之條、令省略畢、恐々謹言、

文祿四年七月十三日　　德善院玄以

長束大藏大輔

石田治部少輔

増田右衞門尉

切腹

切腹ハ、獄令ニ云フ所ノ自盡ヲ賜フナリ、唯獄令ハ其死スベキ方法ヲ問ハザルガ如クナレド、此ハ屠腹ニ限レルヲ以テ異トスルノミ、抑〻此刑ハ武門ノ刑ニシテ武士タル者ヲシテ斬首ノ詬辱ヲ免レシムルナリ、而レドモ多クハ介錯ト云フモノアリテ其首ヲ斷ツナリ、介錯トハ助手ト云ハンガ如シ、又戰亂ノ世ニ在リテハ、敗將ノ自ヲ切腹シテ、其部下ノ生命ヲ全クセンコトヲ乞フガ如キコト毎ニ多シ、亦其一斑ヲ此ニ載セタリ、尙ホ切腹ノ事ハ、上編死刑篇自盡條ニ散見セリ、宜シク參看スベシ、

〔建內記〕永享十一年二月二日、日野大納言(○廣貴)說、傳聞自關東前宮根別當瑞禪、先日上洛、彼自京都爲御勢下向之者也、(彼者依違關東之義、自先年在京者也、)而有讒者、稱可申披之由參洛之、或說、鎌倉武衞(○足利持氏)御和睦事、房州(○上杉憲實)執申趣、被申次、仍被召置伊勢守宿所、以外恐怖々々、一昨日、已下向之、已申披申候故歟云々、所詮無御進發者、鎌倉武衞被切腹候條、無左右難有之由申之歟云々、奇怪之申狀哉、爲實事者、無勿體事也、相國寺長老下向關東、是猶可攻申武家之由、被仰付房州歟云々、武衞事、已除綠髮、着黑衣之上者有恩免、於子息者、可被聽相續之由、房州頻執申、而時宜不許、依之不及合戰、御勢相支送日、其故者、於野心之軍士者、悉被誅了、其外者房州許也、房州多年、奉對京都無不忠之儀、今度之義、又爲御扶持房州、被遣軍勢了、而今武衞依隱遁、子息事被執申候、欲屬無爲之處、自京都無御許容、依之滯停也、若猶無御許容者、房州可切腹之由申候歟云々、然者可及合戰歟、大事出來難測事哉之由謳歌、早速靜謐、只奉(○奉下恐脫祈字)耳、或說、房州爲申請御和睦事、以無勢之所從、近日可上洛云々、爲被止彼事被遣相國寺長老云々、　十五日、關東事、已屬無爲、鎌倉左兵衞督持氏卿、切腹之由註進之故也、此事去十日事也、相國寺住持、先日爲御使下向、關東管領上杉房州、可隨上意之由申之、仍武衞切腹、

今度刎首事、永絶窺覦、不可攻之策也、其後警固事有沙汰、鎭西撰補守護人器用、發遣海邊國々、止京都大番役、被差置在京人、公家武家減省公事、行儉約、休民庶、皆是爲軍旅用意也、

〔關東評定傳〕弘安二年六月廿五日、大元將軍夏貴范文虎、使周福、欒忠、相具渡來、僧本曉房靈果、通事陳光等著岸、牒狀之旨等如前々、於博多斬首、

ナシ、扨ハ汝化生變化ノ物カ、イデ試ントテ、馬ノ灸ヲスル鐵ヲ赤ク焼立、面上ニ當ントシ給ヘバ、是ハ出羽ノ羽黒山ノ者ナリト、フルヒ〳〵ゾ申ケル、扨コソ生所ハ顯レケレ、誠此比弘法大師ノ再誕也トテ、奇特ヲ多見セタルト也、信長ニモ奇特ヲ見セヨト責ツメテ宣ヘバ、ワタ〳〵フルツテ物ヲモ已ニ申シ得ズ、カヤウノ賣子恣徘徊サセバ、諸人ミダリニ佛神ヲ祈リ、筋ナキ福ヲ願フベシ、尤世ノ費ナリ、唯信長ガ手ニ懸リ、其後神變通力ヲ以テ再生シテ見セヨトテ引ハラセ向ヨリ引刀ニテ、シヅカニ截ワラセ給ヘバ、神變通力ノ事ハイザ知ズ、弓手妻手ヘ分レタリ、此僧一人ヲ害シ給ヒシハ、吁億兆ノ惑ヲ解ニアラズヤ、

外國人處刑

〔北條九代記下〕今年〇建治元年四月十五日、大元使着長門國室津浦、八月、件牒使五人被召下關東、九月七日於龍口刎首、

一 中順大夫禮部侍郎杜世忠年卅四、大元人、

作詩云

出門妻子贈寒衣　問我西行幾日歸　來時儻佩黄金印　莫見蘇秦不下機

二 奉訓大夫兵部郎中何文著年卅八、唐人、

作頌云

四大元無主　五蘊悉皆空　兩國生靈苦　今日斬秋風

三 承仕郎回々都魯丁年三十二、回々國人、

四 書狀官薫畏國人果年三十二

五 高麗諱語郎將徐年三十三

作詩云

朝廷宰相五更寒　寒甲將軍夜過關　十六高僧由未起　算來名利不如閑

〔高祖遺書 八〕延暦寺別院雲居寺

可早禁斷一向專修惡行事

右頃年以來、愚蒙結黨奸宄會衆、名曰專修、〇中略此只爲佛法之怨魔、專可謂緇門之夭恠、是以邪師源〇空存生之昔、永沈罪條、滅後之今、亦刎屍骨、其徒住蓮、安樂、賜死於原野、成覺、薩生、蒙刑於遠流、以此現罸可察其後報、

〔信長記 十三〕賣子僧無邊蒙斬刑事

其比無邊ト云廻國ノ客僧有ケルガ、我ハ生所モ父母モナシ、一所不住ノ僧ナリ、我ニ不思議ナル秘法アリ、是傳授ノ人々ハ、於現世ニ無數ノ患難ヲ遁レ、於來世ハ無量ノ罪障ヲ滅スト披露アリケレバ、在々所々ノ男女甚以信仰セリ、丑ノ時ノ受法ト云ケレバ、夜中ニ群集スル事限ナシ、散錢散米被物祿物等席上ニ充滿スレドモ、サヤウノ物ヲバ塊視シテ其儘捨置キ、一紙半錢モ曾以私欲トセズ、一鄕一村ニ二日三日宛滯留シ、夕ベニ來リ旦ニ過ギ、更ニ三宿ノ慕ナシ、或時安土ノ東石場寺鷦鷯坊ガ所ヘ廻リ來ル、三月廿日夜御前ニシテ此沙汰アリケレバ、其客僧コソ聞及ビタル者ナレ、少見セヨト楠長庵ニ被仰ケレバ、承テ鷦鷯坊ニ同心シテ登城アレト使ヲ遣ケレバ、則具シテ參タリ、內々此僧思フ樣、何樣殿中カ或殿守ヘトモ被召上、佛法商量ノ上ヲモ御尋アラバ俱舍淨實法相三論ノ沙汰、顯密兩宗ノ事、淨土ノ厭離穢土、近求淨土或敎外別傳不立文字、或孔孟老莊ノ道ヲ以敎化シ奉リ、御崇敬ニモ預ラント笑ヲ含ミ居タル處ニ、長庵彼客僧具シテ參テ候ト申ケレバ、御厩ニ出給ヒテ、立ナガラ無邊トハ、キヤツガ事カト被仰、急度睛玉ヘバ、無邊案ニ相違シテゾ見エタリケル、客僧生國ハト問給ヘバ無邊ト答申、無邊ト云所ハ唐土ノ內カ天竺ノ內カト尋サセ給フニ、天ニモ非ズ地ニモ非ズ、又空ニモ非ズト答申セバ、天地ヲ離レテハ何レノ所ニカ安身立命スト仰ケレバ、擬議シテゾ見ヘタリケルニ、有情非情ニ至ルマデ、天地ヲ離ル事ハ

逍遙生死、四十二年　山河一革　天地洞然

六月二〇元弘二カ十九日某ト書テ、筆ヲ抛テ、手ヲ叉、座ヲナヲシ給トゾ見ヘシ、田兒六郎左衛門尉、後へ廻カト思ヘバ、御首ハ前ニゾ落ニケル、

〔長曾我部元親百箇條〕掟〇中略

一出家形儀之事、一ニハ不遂上聞、落墮於仕者、忽可行死罪、一ニハ不叶子細無之者、夜中出行停止、一ニハ亂行之輩、聞立於申上者、一稜可褒美、右條々於猥者、依其輕重、可爲流罪死罪事、

〔法然上人行狀畫圖三十三〕かくて南都北嶺の訴訟次第にとゞまり、專修念佛の興行振爲にすぐるところに、翌年建永元年十二月九日、後鳥羽院、熊野山の臨幸ありき、そのころ上人の門徒、住蓮、安樂等のともがら、東山鹿の谷にして別時念佛をはじめ、六時禮讃をつとむ、さだまれるふし拍子なく、おの〳〵哀歎悲喜の音曲をなすさま、めづらしくたうとかりければ、聽衆おほくあつまりて、發心する人もあまたきこえし中に、御所の御留主の女房出家の事ありける程に、還幸ののち、あしさまに讒し申人やありけん、おほきに逆鱗ありて、翌年建永二年二月九日、住蓮、安樂を庭上にめされて、罪科せらるゝとき、安樂、見有修行起瞋毒、方便破壞競生怨、如此生盲闡提輩、毀滅頓敎永沈淪、超過大地微塵劫、未可得離三途身の文を誦しけるに、逆鱗いよ〳〵さかりにして、官人秀能におほせて、六條川原にして安樂を死罪におこなはるゝ時、奉行の官人にいとまをこひ、ひとり日沒の禮讃を行するに、紫雲そらにみちければ、諸人あやしみをなすところに、安樂申けるは、念佛數百遍ののち、十念を唱へんをまちてきるべし、合掌みだれずして、右にふさば、本意をとげぬと知べしといひて、高聲念佛數百遍ののち、十念みちける時きられけるに、いひつるにたがはず、合掌みだれずして右にふしにけり、見聞の諸人隨喜の涙をながし、念佛に歸する人おほかりけり、

サヘ又楚ノ囚人ト成給ヘバ、只今マデ命存テ、カヽル憂事ヲノミ見聞事悲ケレバト、一方ナラヌ思ニ、一首ノ歌ヲゾ被詠ケル、

　長カレト何思ヒケン世中ノ憂ヲ見スルハ命ナリケリ

罪科有モ、アラザルモ、先朝拜趨月卿雲客、或ハ被停出仕尋桃源跡、或被解官職懷首陽愁、運通塞、時否泰、爲夢爲幻、時移事去テ、哀樂互相替、憂ヲ習世中ニ、樂ンデモ何カセン、歎テモ由無ベシ、源中納言具行卿ヲバ、佐々木佐渡判官入道道譽、路次ヲ警固仕テ、鎌倉ヘ下シ奉ル、道ニテ可被失由兼テ告申人ヤ有ケン、相坂ノ關ヲ越給フトテ、

　歸ルベキ時シナケレバ是ヤコノ行ヲ限リノ相坂ノ關

勢多ノ橋ヲ渡ルトテ、

　クフノミト思フ我身ノ夢ノ世ヲ渡ルモノカハセタノ長橋

此卿ヲバ道ニテ可奉失ト兼テ定シ事ナレバ、近江ノ柏原ニテ切奉ルベキ由、探使襲來シテイラデケレバ、道譽、中納言殿御前ニ參リ、何ナル先世ノ宿習ニヨリテカ、多ノ人中ニ、入道預進テ、今更加樣ニ申候ヘバ、且ハ情ヲ不知ニ相似テ候ヘ共、斯身ニハ無力次第ニテ候、今マデハ隨分天下赦ヲ待テ日數ヲ過シ候ツレ共、關東ヨリ可失進由堅被仰候ヘバ、何事モ先世ナス所ト思召慰マセ給候ヘト申モアヘズ、袖ヲ顏ニ押當シカバ、中納言殿モ不覺泪スヽミケルヲ、推拭ハセ給テ、誠ニ其事ニ候、此間儀ヲバ、後世マデモ難忘コソ候ヘ、命ノ際事ハ、萬乘君既ニ外土遠嶋ニ御遷幸由聞エ候上ハ、其以下事ドモハ、中々不及力、殊更此程情色、誠存命ストモ難謝コソ候ヘト計ニテ、其後ハ物ヲモ被仰ズ、硯ト紙トヲ取寄テ、御文細々トアソバシテ、便ニ付テ、相知レル方ヘ遣テ給ハレトゾ被仰ケル、角テ日已ニ暮ケレバ、御輿指寄テ乘奉、海道ヨリ西ナル山際ニ、松一村アル下ニ、御輿ヲ舁居タレバ、敷皮上ニ居直セ給テ、又硯ヲ取寄、閑々ト、辭世頌ヲゾ被書ケル、

さすがあはれに思ひまいらせけれども、かくなをらせ給へかしと申ければ、その時、ひざを立なをし、くびをのべ、念佛の聲おこたらず、しゆせうにきられ給ひけり、此卿は、こんどの御むほんに、いんせんをかき給ふ人なれば、そのつみすでにをもしとて、かくしざいにおこなはれけるが、後に一ゐんせんかうのゝち、此卿、君をいさめ奉りしかん狀す十つうのこりとゞまりて出たりしかば、さうしう、ぶしうもこうくわいせられけるとかや、○中略一條のさいしやう中將は、遠山さゑもんのせうかげともあひぐし奉り、みの、くにとを山へくだりて、きり奉らんとす、○中略しうんたな引、いきやうくんじ、をんがくこくうにそうすときこえし程に、終にきられ給ひけり、

〔増鏡十六くめのさら山〕元亨のみだれのはじめにながされし資朝の中納言をも、いまだ佐渡の嶋にしづみつるを、此程のついでにかしこにてうしなふべきよし、あづかりの武士に仰ければ、このよしをしらせけるに、思ひまうけたるよしいひて、宮古にとゞめける子のもとに、あはれなる文かきてあづけけり、すでにきられける時の頌とぞ聞侍し、

四大本無レ主、五蘊本來空、將レ頭傾二白刃一、但如レ鑽二夏風一、いとあはれにぞ侍りける、俊基もおなじやうにぞ聞えし、

〔太平記四〕笠置四人死罪流刑事附藤房卿事

笠置城被二攻落一刻、被二召捕一給シ人々事、去年ハ歳末ノ計會ニ依テ暫被レ閣ヌ、新玉年立返レバ、公家朝拜、武家沙汰始テ後、東使工藤次郎左衛門尉、二階堂信濃入道行珍二人上洛シテ、可レ行二死罪一人々、可レ處二流刑一國々、關東評定ノ趣、六波羅ニシテ被レ定、山門南都諸門跡、月卿雲客諸衛司等ニ至迄、依二罪輕重一禁獄流罪ニ處スレ共、足助次郎重範ヲバ、六條河原ニ引出、首ヲ可レ刎ト被レ定、萬里小路大納言宣房卿ハ、子息藤房、季房二人罪科ニ依テ武家ニ被二召捕一、是モ如二召人一ニテゾ坐シケル、齢已七旬ニ傾テ、萬乘聖主ハ遠嶋ニ被レ遷サセ給ベシト聞ユ、二人賢息ハ死罪ニゾ行ハレンズラント覺テ、我身

大納言殿に參りあひしかば、それよりたゞのぶ卿は都へかへりのぼられければ、あひともなふてくだり給ふ、あせちの中納言、このよしを御覽じて、かへる浪こそうら山しけれといはれければ、大納言、これもゆめにてや候らんと計にて、たがひにわかれたまひけり、中のみかどの中納言むね行卿は、をやまのさゑもんとも長ぐし奉りてくだりけるが、とをたうみのくにきく川の宿に付給ふ、こゝをばなにといふ所ぞとひ給へば、きく川と申とこたへければ、中納ごん、すゞりをこひよせ、やどのはしらにかきつけ給ふ、○中略御さいごの御事、けふの夕にはすぎさせ給ふまじと申ければ、中納言、うちうなづき給ひて、木せ川の宿に御てうずいの爲とて立より給ひ、かくぞかきつけ給ひける、

けふすぐる身を浮島が原にてぞつゆの命は捨さだめける、つゐにその日のくれかたに、あひづの原にてちうし奉る、とし四十七、あはれなりしありさま也、又あせちの卿は、たけだの五郞のぶみつあひぐし奉てくだりけるが、ふじのすそかこさかといふ所におろし奉る、のぶみつ申けるは、すでに御ごとをちうし奉るべきよし、かまくらよりの御つかひ參りて候へば、たゞ今この所にてちうし奉るべし、御さいごの御よういあそばし候へと申ければ、みつちか卿、かねてより思ひもうけられしかども、いまはの時にのぞんでは、さすがこんじやうのなごりたゞ今ばかりと心ぼそくや思ひ給ひけん、しばらくありて、しゆつけせばやとのたまへば、しさい候はじとて、あたりよりそう一人たづね出し、かひたもたせ出家せさせ奉る、○中略たちとりはたけ田の五郞がらうどう内藤七郞といふものなり、あせち卿のすはり給ふ所、山のそばにて、片さがりなれば、かくては御みやつかひあしうや候はんと申せば、あせち卿、ねん佛をとゞめ、うしろを見かへりて、なんぢよく聞け、われ年久しく君につかへ奉り、おほくのしざい類ざいのぶぎやうせしむくひに、いまかゝるめにもあふぞかし、あまり心にまかせて申物かなといはれければ、たちとりも、

幕府加刑擂辨

〔信長記　四〕延暦寺炎上同僧徒悉被燒殺事
辛未〇元亀二年九月十一日、信長卿瀬多ノ山岡玉林齋所ニ宿陣有テ、同十三日、比叡山堂舍佛閣悉令燒失、〇中略顯宗秘法聖敎、帝都累代記錄、一時ニ灰燼トゾ成ニケル、碩學宏才老僧容顏美麗兒童、或被刎首、或生虜レテ、〇下略

〔承久軍物語　五〕承久三年六月十四日、はう〳〵へむけられけるくはんぐん、はいぼくせしかば、〇中略廿日、一院〇後鳥羽四つぢ殿にうつらせ給ふ、すでに相州武州いんざんすべきよしきこしめしければ、さへぎつてちよくしを立られ、ちやうほんの人々におゐては、けうみやうをしるし出さるべし、しばらくぶしのさんかうをとゞめ申べきよし仰られければ、おの〳〵仰にしたがひ給ふほどに、くぎやう六人のきやうみやうをしるし、六はらに下さる、ばうもんの大納言たゞのぶ卿、中のみかどの中なごんむね行きやう、中納言ありまさ卿、あせちの中納言みつちか卿、かいのさいしやう中將のりよし卿、一でうのさいしやう中將のぶよし等也、〇中略これによつて、くまのゝ法いん、あまのゝ四郎ざゑもんをはじめとして、いけどりのともがら、こと〳〵く、六條河原に引出され、くびをはねられけることかなしけれ、〇中略中にも、後藤大夫はんぐはんもときよをば、しそくさゑもんもとつな申うけて、きつてけり、他人にきらせて、けうやうしたらんこそしかるべけれ、子の身として、まさしく大をんのちゝをちうしけるもとつなが心こそ、あさましけれ、その比、西八でうのにこうと申は、こうふしやうぐん〇源實朝の御こうしつ、ばうもんの大納言のいもうとにておはします、〇中略かの大納言は、一方の大將なれば、そのつみのがれがたくおもひまいらせ侍れども、させる弓やとる身にても候はず、故おほいどのゝしやうりやうになだめられ候て、このたびのいのちたすけさせ給ふべくや候と申されければ、二位どのあはれとおぼしめし、さらば大納言をばたすけ奉れとの御つかひをのぼせられしが、とをたうみのくにまひざかにて、

貞明元年六月庚寅朔、賀德倫帥將吏請晉王入府城慰勞、〇中略晉王下令、自今有朋黨流言、及暴掠百姓者、殺無赦、以沁州刺史李存進為天雄都巡按使、有訛言搖衆、及強取人一錢已上者、存進皆梟首、磔尸於市、旬日城中肅然、無敢喧譁者、

〔安齋隨筆前編八〕一　一錢切　右同書〇房總志料望陀郡眞里谷村に、天寧山眞如寺と云上總曹洞派據錄ノ寺あり、寺領三十石、門前に禁牓あり、條目ノ文ニ、門前百姓、於非法有之者、可為一錢切事と、按に一錢切詳ならず、清正記を考に、太閤、清正に賜りし高麗陣中ノ制札ニ、軍陣於味方地亂妨狼藉輩、可為一錢切とあり、戰國の頃、普キ詞と見ゆ、猶又可考、貞丈按、一錢切と云ハ、犯人に過料錢を出さしむる事ならん、切ノ字ハ限なるべし、其過料を責取ルに役人を差遣し、其犯人の貯へ持たる錢を、有り限り取上る、譬ば僅に一錢持たるとも、其一錢限り不殘取上るを一錢切と云なるべし、搜し取る事と見ゆ、

〔太平記十六〕小山田太郎高家刈青麥事

去年義貞、西國ノ打手ヲ承テ、播磨ニ下著シ給時、兵多シテ粮乏、若軍ニ法ヲ置ズバ、諸卒ノ狼藉不可絕トテ、一粒ヲモ刈採、民屋ノ一ヲモ追捕シタランズルモノヲバ、速可被誅之由ヲ大札ニ書テ、道ノ辻々ニゾ被立ケル、

〔百練抄十後鳥羽〕文治元年六月廿一日壬申、前內大臣、〇平宗盛并右衞門督清宗、於近江國勢多邊斬首云云、三位中將重衡於南都又斬首、於法華寺鳥居前合戰之時、此所下知也云々、

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年〇建保元年閏九月十九日丙戌、戌剋土肥先次郎左衞門尉維平被刎首、是依為義盛〇和田與力衆也、而為囚人送數日之間、貽其恃之處、終以如此云云、

〔喜連川判鑑〕應永二十六年五月六日、本一揆ノ大將榛谷小太郎重氏降參ス、木戸相伴テ鎌倉ヘ歸ル、榛谷ヲバ由比ノ濱ニテ誅セラル、

〔清正記 二〕定

一軍勢於味方地亂妨狼藉輩、可爲一錢切事、○中略

天正廿年○文祿元年正月　御朱印○豐臣秀吉

〔薩藩舊記後集十五〕掟

今度大明國御動座付、國々海道筋、其外軍勢陣取之在々地下人百姓等、家を明於逃散者、可爲曲事、宿々町なみ如有來商賣可仕、自然陣被往還諸人、或押買、或押賣、或亂妨狼藉之輩者、可爲一錢切、其外猥儀於有之者、如御法度可被加御誅罰者也、

天正廿年正月五日　御朱印○豐臣秀吉

〔讀史餘論十二〕秀吉天下の事

此人軍法に因て、一錢切といふ事を始めらる、たとへば一錢を盜めるにも、死刑にあつ、

〔隋書刑法志二十五〕開皇十六年、有司奏、合川倉粟、少七千石、命斛律孝卿鞫問其事、以爲主典所竊、復令孝卿馳驛斬之、沒其家爲奴婢、鬻粟以塡之、是後盜邊糧者、一升已上皆死、家口沒官、○中略是時帝○高祖意、每尙慘急、而姦回不止、京市白日、公行掣盜人間、强盜亦往往而有、帝患之、問群臣斷禁之法、楊素等未及言、帝曰、朕知之矣、詔有糾告者、沒賊家產業以賞糾人、時月之間、內外事息、其後無賴之徒、候富人子弟出路者、而故遺物於其前、偶拾取則擒以送官、而取其賞、大抵被陷者甚衆、帝知之、乃命盜一錢已上皆棄市、行旅皆晏起晚宿、天下懍懍焉、此後又定制、行署取一錢已上、聞見不告言者坐至死、自此四人共盜一榱桷、三人同竊一瓜、事發即時行決、有數人劫執事而謂之曰、吾豈求財者邪、但爲枉人來耳、而爲我奏至尊、自古以來、體國立法、未有盜一錢而死也、而不爲我以聞、吾更來、而屬無類矣、帝聞之、爲停盜取一錢棄市之法、

〔資治通鑑二百六十九後梁〕均王

〔言繼卿記〕天文十三年八月十一日戊寅、武家之囚人和田新五郎、三好被官、爲京兆〇細川晴元被申付樂師寺與一、於モドリ橋頭ヲノコギリニテ引云々、〇中略今一人若公乳人之官女、是ハ八時分、車之上張付、被渡京中、六條河原ニテ被殺云々、是モハダカニテ被渡儀、餘以不可說之儀也、

館中行刑

〔康富記〕享德三年九月十四日壬戌、是日管領細川右京兆勝元被官人、礒谷四郎兵衛尉兄弟、於管領屋形、閉之被誅、戮之、是畠山彌三郎沒落之時、寄宿之處許容、引起今度大儀之間、上意有御憤之故被仰付管領、爲後昆之懲被誅之由風聞矣、

軍中及戰後行刑

〔光明寺殘篇事書綸言案〕官軍可存知條々〇中略

一路次狼藉事、特可有沙汰、於侍者懸主人、嚴密致沙汰、至凡下輩者、不日可誅事、〇中略

元弘三年四月日

○按ズルニ、此一條ハ元弘三年四月、後醍醐天皇ヨリ千種忠顯ニ賜ヒタル軍令ナリ、

〔信長記一下〕芥川小淸水瀧山城開退事

信長卿ハ淸水寺ニ在々ケルガ、於洛中洛外上下ミダリガハシキ輩アラバ、一錢ギリト御定有ツテ、則柴田修理亮坂井右近將監、森三左衛門尉、蜂屋兵庫頭、彼等四人被仰付ケレバ、則制札ヲゾ出シケル、

禁制

一當手之軍勢、亂妨狼藉等之事、

一猥山林竹木伐採之事

一押買押賣、幷追立夫等之事、

右條々於違背之輩者、速可被處嚴科者也、仍如件、

永祿十一年十月十二日、

徇罪人道路

一無故人を害科事、猶糺明之上を以、則可行死罪、品可有軽重事、○中略

一狩山晋請場於其外、無體人を射科事、即時可成敗、若意趣遺恨於在之儀、其身行死罪、親類迄可懸科事、○中略

一他人女ぬすむ事、縦雖為歴然、男女共同前不相果者、可行死罪、○中略

一譜代者定事、男女共主従十ヶ年召遣、其中無理者可為譜代、同子者有儘可為譜代、男子者父方へ付、女子者母方へ可付、縦雖令折檻相放與云、證據無之者、他主不可取、若背此旨、主取於仕者、一往相屆、以憲法取戻、又可召遣歟、可行死罪歟、其段勿論本主次第也、若令逐電行方不知者、雖為何ヶ年、付屆之上を以可取歸事、○中略

一不寄給人百姓隠田仕者聞立、於遂言上者、一稜可褒美、其上を以、奉行中相談仕、撿地帳を以令沙汰、歴然地頭隠置候者、太以可処罪科、若百姓相隠候者、撿地以來之遂算用、以利倍取、皆濟上にて可追失、若令難澁者可斬頸事、○中略

一定飛脚事、其在所之庄屋、遠近可召遣、急用之時者、聊遲々仕候者、忽可斬頸事、

〔關八州古戰錄十一〕野州薄茶原合戰附千本秋蠅齋誅セラル、事

天文二十年ノ春、秋蠅齋、宇都宮家ニ語ハレ、那須高資ニ鴆毒ヲ與ヘ失シガ、久ク露顯ニ及ズ、連々ニ發覺シ、君臣ノ間睦カラズ、黒羽ノ大關高增烏山ヘ弓ヲ引、内輪崩ノ最中故、默シテ月日ヲ過シガ、資晴腹黒憎思テ、果テ誅シケリ、

〔皇帝紀抄七後鳥羽〕元暦元年正月廿六日、義仲等首、義經渡大路、同郎從樋口二郎兼光、為追討行家遣和泉國之間、廿日入洛、於七條朱雀合戰、逃籠鞍馬寺山、後日捕之、生虜渡大路之後斬首、

〔親長卿記〕文明十三年四月卅日、今日聞、去廿六日、盗人（加茂氏人、室町殿大納言殿重代御大刀、）乘雜役（○馬）被渡一條大路、至六條河原被誅云々、

大名行刑

八九人も害し、かばねをわか君の上に打かさねければ、不心〇不心齋丸毛が女房走りより、關白家之御子之上へ、かくあればとて、かさね侍る物か、奉行は何のためぞ、かほどの事をえも制し候はぬかと散々にのゝしり侍れば、其よりけしき物ふりて見えにけり、あはれなるかな、悲しいかな、かく痛ましくあらんと兼て思ひなば、見物に出まじき物をと千悔の聲々も多かりけり、廿餘人伐かさねければ、河水も色を變じたり、三奉行之人々は、強ていためるけしきもなく、おほどかに見え、彌識人とこそしられけれ、其夜洛之辻々に、何ものゝしわざやらむ、

天下は天下之天下なり、關白家之罪は、關白家之例を引可ㇾ被ㇾ行之事、尤理之正當なるべきに、平人の妻子などのやうに、今日之猥藉甚以自由なり、行末めでたかるべき政道に非ず、吁因果のほど御用心候へ〳〵と書て、其楮端に、

世中は不昧因果の小車やよしあしともにめぐりはてぬる

〔甲陽軍鑑十四品第四十下〕一關東の上杉管領花の制札に　此櫻花一枝も折取候はゞ、あたり八間流罪〇〇死罪に仰付らるべき者也、仍如ㇾ件と立られたるなり、

〔今川記五かな日録〕一喧嘩に及輩、不ㇾ論二理非一、兩方共に可ㇾ行二死罪一也、將又あひて取かくるといふとも令二堪忍一剩被ㇾ疵においては、事は非儀たりといふとも、當座おんびんのはたらき利運たるべき也、兼又與力の輩、そのしばにおいて疵をかうふり、又は死するとも、不ㇾ可ㇾ及二沙汰一のよし先年定了、次喧嘩人の成敗、當座その身一人所罪たる上、妻子家內等にかゝるべからず、但しばより落行跡においては、妻子其咎かゝるべき歟、雖ㇾ然死罪迄はあるべからざるか、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一盗賊之事、卽時搦捕、奉行方迄申届、於二歷然一者、可ㇾ斬ㇾ頸事勿論也、若搦捕事於ㇾ難ㇾ成者、則可二相果一、右此旨猥申付候者、在所庄屋可ㇾ爲二曲事一事、〇中略

右之奉行は前田德善院、〇玄以増田右衛門尉、〇長盛石田治部少輔〇三成にてぞある、其勢三千、何れも兵具を帶し、いかめしき出立なり、同〇文祿四年八月二日の事なるに三條河原に二十間四方に堀をほり、鹿垣をゆひまはし、橋の下南に三間に塚をつき、公〇秀次之御頸を西向に居置、寵愛二十餘人の女郎達に拜ませ可申旨、兼て被仰出しとなり、二日の朝、さもあらけなき河原之者共、具足甲を著し、大刀長刀を拔持、弓に矢をはげ、實凄じき出立にて、聚樂南捷門之西、尺地をあまさすなみゐたり、〇中略二日の朝も、どかうのゝしるうちに日もたけゝれば、追立之官人等、とく／＼と聲々に急きつるありさまあはれなり、とても叶ぬ道にせまりし事を各覺悟し給ふて、二十餘人の衆よろぼひ出給へば、物のわけをも知ぬ河原之者、小肘つかんで引立、車一兩に二三人づゝ引のせ奉るさへに、若君姬君の御事さま、授も／＼と云ぬ者もなく、其身の事は不及申、見物の貴賤も嗐さ鳴出、云ばしは物のわけも聞えざりけり、〇中略三條河原に著しかば、車よりいだきおろし奉りぬ、各秀次公の御首の前へ、我おとらじとはら／＼とより給ひふしをがみ候しさま、あさからず見えにけり、〇中略こはいかにと見る處に、五十許なる髭男の、其さまより心もあらけなく見えしが、さもうつくしき若君を狗をひつさぐるやうに物し、二刀さし候へば、御母儀〇藤原晴季女其外一同に鳴立給ひけり、見る人たちの袖も打しほれ、聲を添しもことはりなり、三歲になり給ひし姬君、母上お辰の御かたへいだきつき、我をも害し侍るかとおほせければ、南無阿彌陀ととなへ候へよ、父關白殿にやがてあひ侍るぞとて、念佛をすゝめ候へば、うゐことに十篇ばかり唱給ふ、うきことのかぎりなるべし、あらけなき河原の者共云けるは、左やうにあこがれ給ひても叶はぬ事なりとて、母上の御膝より奪取て、心もとを二刀さして投すてにけり、いまだひく／＼とし給ふに、母上心もくれまどひ給はん計なるに、左もゝゝしてまづ／＼我を害し侍れよとて、西にむかひ給へば、御首は前に在、見る目もくれて、中々肝たましゐも消はて、われからなくぞ覺えける、はや

〔吾妻鏡脱漏〕嘉祿三年〇安貞元年三月十九日戊辰、去九日謀反人事有評議、或是不足言事也、造意之企、還不能信用、且物狂之所致歟、關東御分郡鄕、可被追放之由有意見、或民間野心、殊以難被宥刑法、爲向後懲惡、可被行斬罪之旨申之、遂罪名落居之間、二位家〇源賴朝妻北條政子第三年之御佛事以後、可有沙汰云云、

〔吾妻鏡脱漏〕嘉祿三年六月十八日乙丑、卯剋武藏二郎時實武州當腹男年十六爲家人高橋二郎京高橋住人也被殺害給、傍輩兩三人同被害畢、此間明日依可爲丈六堂供養成群、御家人等競走、爰伊東左衞門尉祐時郞從、件虜進於高橋、卽日於腰越邊被處斬刑、綺最中甚雨如沃云云、

〔甲陽軍鑑八品第十七〕天正三年五月廿一日に、信長家康に、勝賴公、三州長篠にて負給ひてより、越前も信長手に入、兼て四年以前に、信玄公御在世の時、國司〇伊勢北畠氏使を差上申され候事顯れてあればこそ、織田掃部と云者を、信長よりお茶せむのおとなに申付られたるを、右のつげ三郎左衞門瀧川兵部兩人にて、信長へさゝへ、織田掃部を、當年四月廿五日に、伊勢田丸と申所にて、ひよき大膳と云伊勢先方の侍に申付きらする、此科は國司方の親類を、掃部養ひたると云科也、是は天正四年四月なり、其年の霜月廿五日に、三瀨にて、大御所に〇具敎腹をきらする、討手はかるの左京とて、國司譜代の衆なり、

〔信長記十二〕浄土宗與日連宗宗論之事

同〇天正七年五月中旬ノ事ナルニ、浄土宗與日連宗ノ宗論ニ及ブ事有、〇中略抑此起リハ、建部紹智、大脇傳介ガ所爲也シガ、剩無事ノ扱ヲモ承引不申、其罪不淺トテ、二人共ニ頸ヲ被刎、

〔多聞院日記〕文祿三年八月五日、千人切大逆ノ仁以上十六人、同女房衆召捕、方々引セテ可切トテ、郡山ヨリ今日奈良ヘ引來、京ヘ上云々、淺猿歟、

〔太閤記十七〕秀次公御若君姬君幷御寵愛之女房達生害之事

セルナリ、

〔御成敗式目〕一殺害刃傷罪科事 付父子咎相互被懸否事

右或依當座之諍論、或依遊宴之醉狂、不慮之外、若犯殺害者、其身被行死罪、幷被處流刑、〇刑一本作罪 雖被沒收所帶、其父其子、不相交者、互不可懸之、次刃傷科事、同可准之、

〔吾妻鏡九〕文治五年九月六日癸亥、河田次郎持主人泰衡〇藤原之頸參陣岡、〇中略以景時〇梶原被仰含河田云、汝之所爲、一旦雖似有功、獲泰衡之條、自元在掌中上者、非可假他武略、忽忘譜第恩、梟主人首、科已招八虐之間、依難抽賞、爲令懲後輩、所賜身暇也者、則預朝光、〇結城被行斬罪云云、

〔平家物語十二〕六代きられの事

去程に、六代御前〇平維盛子やう〳〵おひたち給ふ程に、十四五にも成給へば、いとゞみめかたちうつくしく、あたりもてりかゞやく計也、〇中略去程に、六代御前は、三位のせんじとて、たかをのおくにおこなひすましておはしけるを、かまくら殿、さる人の子なり、さるもの〇文覺のでしなり、たとひかしらをばそり給ふ共、心をばよもそり給はじとて、めし取て、うしなふべきよしかまくら殿より公家へそうもん申されたりければ、やがてあん判官すけかねに仰て、めし取て、くはんとうへぞくだられける、するがの國の住人、おかべのごんのかみやすつなに仰せて、さがみの國たこひ川のはたにて、つゐにきられにけり、十二のとしより三十にあまるまでたもちけるは、ひとへにはせのくわんおんのりしやうとぞ聞えし、三位のせんじきられて後、平家の子孫はながくたえにけり、

〔吾妻鏡十六〕建久十年〇正治元年十月廿七日丙戌、女房阿波局、告結城七郎朝光云、依景時〇梶原讒訴、汝已擬蒙誅戮、其故者、忠臣不事二君之由令述懐、謗申當時、是何非讎敵哉、爲懲肅傍輩、早可被斷罪之由具所申也、

朝廷行刑

文中、腰越邊トアルモノモ亦此ニ外ナラズ、

〔建内記〕嘉吉元年六月十八日癸未、傳聞先日鎌倉故持氏卿子息首京著之時、令供奉結城ノナニガシトテ、御乳父ト稱シテ奉付テ京著了、此首實否及拷問、〈申狀之趣不分明云々、又說爲實首無疑之由申之云々、其說不同也、〉去十四日、於河原被切首了云々、

〔碧山日錄〕長祿四年三月廿八日乙巳、南朝將軍之孫楠木某、與其儻竊謀反、既而事發、遂遭囚擒下於大理、是日於六條河上吏刎其頭、

〔相州兵亂記〕〔一〕持氏御出家幷憲直以下自害之事
若宮社務尊仲モ被生捕ケルヲ、是ハ亂世ノ張本ナレバ、尋仰ラル丶事モアルベシトテ、京都へ上セケルガ、六條川原ニテ被誅、

〔太平記〕〔十一〕金剛山寄手等被誅事附佐介貞俊事
二階堂出羽入道道蘊ハ、朝敵ノ最一、武家ノ輔佐タリシカ共、賢才ノ譽、兼テヨリ叡聞ニ達セシカバ、召仕ルベシトテ死罪一等ヲ許サレ、懸命ノ地ニ安堵シテ居タリケルガ、又隱謀ノ企有トテ、同年〈○建武元年〉ノ秋ノ季ニ、終ニ死刑ニ被行テケリ、

〔神皇正統記〕〈後醍醐〉建武乙亥〈○二年〉の秋のころほひにし、高時が餘類、謀叛をおこして鎌倉に入りぬ、〈○中略〉都にもかねて陰謀の聞えありて、嫌疑せられける中に、權大納言公宗卿めしおかれしも、このまぎれに誅せらる、承久より關東の方人にて七代になりぬるにや、高時も七代にて滅びぬれば、運の然らしむるかとは覺ゆれど、弘仁に死罪をとゞめられて後、信賴が時にこそ珍らかなることに申し侍りけれ、戚里の寄も久しくなり、大納言以上にいたりぬるに、同じ死罪なりとも、あらはならぬ法令もあるに、承り行ふ輩のあやまりとぞ聞えし、

○按ズルニ、あらはならぬ法令トハ、獄令ニ七位以上及婦人犯非斬者絞於隱處トアル文ヲ指

刑場

濃守申定るなり、

〔會津家世實紀　五〕正保二年六月十日、鈴木五郎兵衛儀、御法度を相背候ニ付、御普請方割役人吉田五兵衛を以、放討被仰付、

五郎兵衛儀、（役名不明候）屋敷裏土手ニむざと道を付候ニ付、（何れに罷在候哉不詳、吉田多久米譜には、今之野島ヶ原さ有之候得ば、米代二ノ下ノ下邊ニ可有之候、）夜廻り之者、斷候得共、承引不致、又御堀ニ而魚を取候間、無用之由斷候得者、案外成申樣、旁御法度を相背候を以、御成敗可被仰付と被仰出、五兵衛に放討被仰付候故、則頭御普請奉行堀田彈右衛門屋敷ニ而（本町桂林寺通南側東角）五兵衛ニ申付、五郎兵衛を致成敗、世忰長四郎（二十四歳）小傳（十四五歳）兩人をも直ニ五兵衛義五郎兵衛宅へ罷越致成敗候處、長四郎義拔合、五兵衛と相大刀ニ罷成、終に長四郎をば討留候得共、五郎兵衛儀（茂）此相大刀ニ而面々一ヶ所かすり手を負、所惡之故か、色々養生いたし候得共、不相叶、同廿六日相果候、依而幼少之世忰兩人有之候間、御情ニ一兩人扶持米被下度旨申上候得ば、尤ニハ思召候得共、五兵衛事、御普請割抔も致、其身利發者之由、旁以不便ニ被思召候、同日彼世忰御用ニ立候時分迄、代をもいたし、子供を不便ニ存候樣成、近き親類歟、緣者抔候ハヾ、五兵衛ニ被下之通ニ御扶持切米被下候牟と思召候、乍去左樣之近き者無之候ハヾ、一向之他人ハ成間敷と、面々存候ニおゐては、扶持方計兩人分可被下候條、兩樣之內相談之上可申付旨被仰下候處、陣代可致者も無之候間、迚も之御情御扶持旨計被下候樣親類共申ニ付、再言上之上、兩人之世忰彌馬之助（八歳）市十郎（六歳）御扶持方兩人分被下之、

〔喜連川判鑑〕應永二十四年五月二十九日、若松治部大輔、逆心ヲ起シ、禪秀與力ノ殘黨ト入間川ニ出張、舞木宮內丞、去年禪秀ニ與ミセシ事ヲ悔ミ、岩松ヲ討テ罪ヲ謝セン爲メ、入間川ニ出向ヒ合戰、舞木勝利ヲ得テ、岩松ヲ生捕リ鎌倉ニ參ル、閏五月十三日、於龍口誅ス、

○按ズルニ、鎌倉ノ刑塲ハ龍口ニシテ、卽チ後條ニ引ケル吾妻鏡脫漏、嘉祿三年六月十八日ノ

放打

〔甲陽軍鑑品第十四〕味方原合戰物語之事
信玄公立腹ましまし、○中略此たゝかひ○上田合戰五左衞門は、旗本において、我代に今迄幾度のせりあひ大合戰を責とる時、一度の手柄もなくて、諸傍輩の取沙汰仕、人に腹をたゝするは大惡黨人なりとあそばして廿人衆に仰付られ、則からめ取、あひ川のはたにて縛頸(しばりくび)をきられ申す、

〔甲陽軍鑑品第五十五〕落合市之丞と申侍は、度々の武功あり、○中略勝頼公御あてがひ惡故、他國仕たるに、市之丞母を人質に御取候へば、剛の武士なる故歸り申、こゝにてよくはなされずして、足輕大將の小幡又兵衞、遠山右馬助、兩人に仰付られ搦とらせて、見ごりのためにしばり頸をきれと、勝頼公仰られ、彼市之丞を御成敗なり、

〔古老物語〕むかしは、侍、徒士、中間を、其主人々々にて成敗するもの度々なり、凡その科人は、○中略一盧外したるもの、侍、中間ども、主人の手討多し、　またしばり首はねるもあり、
右は、誰さだむるとなく、江戸中一同の風儀なり、○下略

〔甲陽軍鑑品第四十下〕一右はなしうちの者、家の内或はそとにても、各懸ぬる所へ、誰にても最前にかゝつて切むすび、懸つ引つみだれて勝負をするに、脇からもうしろからも別人よりて、刀又は長道具弓などにて、そのとが人をころし候はゞ、定てころしたる人、是をしとめてありとあるは、大きに非儀なり、子細は、人のよりかぬるをぬき出かゝる心はすぐれたり、其上人のきりあふ所へ、よこからもうしろからもかゝりては、しよからむ、さるにつき、はじめまづ切あふ人の手柄一なり、二番目にころす人も、はじめ勝負いたす人につゞきての手柄なり、此わかりは、人のかゝらぬに一人勝負をはじむる意地は、人にすぐれてやさしゝ、此者合戰せりあひにも、かくのごとくの上は、定て一番鎗ならん、扨又人にたゝかはせて、仕よき所へ參るは、右の人よりはる〴〵閒のある心ばせなる故、是をばほそ心ばせと、むかしが今に至るまで、武士の作法にて候と、馬塲美

〔吾妻鏡七〕文治三年正月廿三日乙丑、前廷尉知康、同意于行家義顯叛逆事露顯之後、爲遁一旦之難、參向關東、訖斷罪之篇、二品〇源賴朝頗難被決賢慮之間、度々雖被伺奏、于今依無左右、言上事等不預分明勅裁之條、有恐鬱之由、所被仰遣黄門經房之許也、

〔吾妻鏡六〕文治二年二月一日己酉、今日北條殿於六條河原、刎群黨十八人首、凡如此犯人者、不可渡使廳、直可處刎刑之由云云、

〔吾妻鏡二十八〕寬喜三年四月廿一日、又被仰遣六波羅條々、〇中略次强盜殺害人事、於張本者、被行斷罪、至與黨者、付鎭西御家人、在京輩幷守護人可下遣、

〔太平記二十一〕佐渡判官入道流刑事

早ク道譽秀綱ヲ給テ、死罪ニ可行由ヲ公家ヘ奏聞シ、武家ニ觸レ訴フ、此門主ト申モ、正キ仙院ノ連枝ニテ御座有レバ、道譽ガ翔無念ノ事ニ憤リ思召テ、アハレ斷罪流刑ニモ行セバヤト思召ケレ共、公家ノ御計トシテハ難叶時節ナレバ、無力武家ヘ被仰處ニ、將軍〇足利尊氏モ、左兵衛督〇足利直義モ、飽マデ道譽ヲ被贔屓ケル間、山門ハ理訴モ疲テ、款狀徒ニ積リ、道譽ハ法禁ヲ輕ジテ奢侈彌恣ニス、〇中略武家モ、サスガ山門ノ嗷訴難默止覺エケレバ、道譽ガ事、死罪一等ヲ減ジテ、遠流ニ可被處歟ト奏聞シケレバ、則院宣ヲ成レ山門ヲ宥ラル、

〔松隣夜話上〕平井ニハ、則政公〇上杉氏出奔ノ後、長尾佐次右衛門忠勤ニ依テ、中々恙無リケルガ、龍若君〇則政子御乳持ノ一類、馬方九里ガ非道ノ仕配ニ依テ、佐次右衛門腹ヲ居兼、翌年〇天文十七年正月、在所ヘ引込、其後ハ通路絶ケルニ依テ、守護ノ地侍モ段々分散致シ、僅殘留者三十餘人、上下四五百人ニ過ズ、此時氏康島左近大道寺ナド云侍ヲ大將トシテ大勢ヲ差向、平井ニ於テ其聞ヘ夥シカリケレバ、乳母ノ一類馬方新介、九里采女等、其外相議シ、扨モヤ命ヲ助ルトテ、龍若殿ヲ取參セ、氏康ヘ降參ス、氏康義將タルニ依、以ノ外之ヲ惡ミ給フ、降參ノ輩彼是八人、縛リ首ヲ切、獄門ニ掛ラル、

近曾山僧神人等、寄事於面々沙汰、有振於所々風聞、其旨趣有由緒、經上奏可隨理非、而或稱寄附神領、押妨甲乙之庄園、或號供用物、煩遠近之屋舍、殆有施恥辱者、又有及佗傺輩、爲世爲人不可不禁、自今以後可令停止、若背風銜、猶致狠藉者、縱雖爲神人宮仕、爭遁皇憲朝章、令解其職、仰有司幷武家、速糺罪過則無禍、凡於在家亂責負累物者、處々緣林、於行路點定運上物者、准之白狀、早任其懲、可行其科者、斷罪本主及得語人、宜下知本社本寺、守此嚴制、莫失墮矣、

〔御成敗式目追加〕一犯人斷罪事

右爲夜討强盜之張本所犯無遁方者、可被行斬罪也、是則爲相鎭傍向後也、其外至枝葉之輩者、可召進關東、可被流遣夷島也、以前條々存此旨、可令致沙汰之狀、依仰執達如件、

文曆二年三月二十三日　武藏守判
相模守判

駿河守殿
掃部助殿

〔建武以來追加〕東福寺條々（應安五十十九御沙汰、執筆布施彈正大夫入道、）

一當知行地安堵事（應安）

以一同之法被下宣旨之上者、重不及沙汰、但依諸人之妨、有愁申之輩者、尋究當知行之所見、披見文書正文、所申無相違者、載于名字、可給安堵、此上若雖段步、以不知行之地、寄事於安堵、令掠領者、隨支證出來、可被沒收本領、無所帶者、可斷罪其身、

〔吾妻鏡五〕文治元年十二月廿六日乙亥、前中將時實朝臣、同意豫州（源義經）赴西海之間、於路次生虜之、今日武者所宗親相具所參向也、又左府御書到來、是故小松內府（平重盛）末子、前土佐守宗實者、自幼齡當初爲猶子、而依餘殃可有斷罪之由風聞、枉欲申請之云云、可存其旨之趣被報申云云、

古事類苑

法律部十八

中編

斬罪

死罪ノ正刑ハ、從來絞斬ノ二刑ナリシガ、鎌倉幕府ノ比ニハ、絞罪ハ久シク絶エテ、專ラ斬ノ一刑トナレリ、故ニ當時死罪ト云ヘバ斬罪ノ事ナリ、又斷罪ト云フハ、罪狀ヲ判決スル事ナルヲ、此時ニハ斬罪ヲ或ハ斷罪トモ云ヘリ、幕府ニテ斬罪ヲ行フニハ、之ヲ撿非違使ニ付スベキニ、鎌倉ノ初メ、京都ニ於テスラ必ズシモ然ラザル事アリ、其後ニ至リテハ、全ク朝廷ヲシテ關渉セシメズ、其刑場ハ、京都ニテハ多ク六條河原ニ於テシ、鎌倉ニテハ龍口ニ於テセリ、足利幕府ノ末ニ至リテハ、斬首ニ縛首(シバリクビ)ト云フ名アリ、罪人ヲ面縛シテ斬ルヲ云フナリ、鎌倉幕府ノ時ヨリ、罪人ヲ部下ノ士ニ付シテ管守セシメ、而シテ後ニ處刑スルアリ、又下手人ヲ被害者ニ付シテ甘心セシムルアリ、又罪人ヲ馬ニ乘ラシメテ、道路ヲ行リ、普ク衆人ニ示シテ、而シテ後ニ刑ヲ行フアリ、夫ノ管領ノ館中ニシテ斬ヲ行ヒシガ如キハ特例ナリ、軍中ニシテ敵ヲ捕ヘテ斬首シ、戰勝ノ後ニ敵ノ首ヲ斬ルガ如キハ、刑トハ云フベカラザレド、固ヨリ相離レザルモノニシテ、參考スベキ事モ多ケレバ、今此篇ニ載セタリ、幕府ニテ承久元弘ノ間ニ、搢紳ヲ斬リシガ如キ、蒙古ノ使ヲ斬リシガ如キ亦然リ、法律部ニハ此以下ニモ此類多シ、

〔新編追加 神社〕一宣旨事 寛喜三年六月九日

火焙

煮殺投水併入臥漬

肉刑

梟首

磔

串刺　車裂（併入）　鋸挽　牛裂

古事類苑

法律部十八

中編

斬罪

切腹

右之條々、若於相背者、辱蒙此靈社之上卷起請文御罰、深厚可蒙者也、仍如件、

慶長四年二月五日

長束大藏大輔正家
石田治部少輔三成
增田右衛門尉長盛
淺野彈正少弼長政
德善院僧正法印
安藝中納言輝元
會津中納言景勝
備前中納言秀家
加賀大納言利家

以上

〔豐臣秀吉譜〕下文祿四年八月、秀吉下六條法令于諸士、大權現、利家、秀家、輝元、隆景加判、○中略

秀吉又下九條法制于諸人、大權現、利家、秀家、輝元、隆景復加判、

〔翁草〕百八十七或本に白石先生曰、文祿二巳年天下に政令を敷れし時、徳川殿、前田利家、浮田秀家、毛利輝元、小早川隆景連署せらる、時に五人の大名衆と云し由、北川次郎兵衛秀頼公ノ近臣也、大坂御陣ノ節亡、山川帶刀ト同ク一隊ノ小將ナリ、が記に有、夫を五大老と稱せし事は、太閤薨じ給ひし後に、大坂の奉行等が云出せる事にて、徳川殿をも彼家の老と稱し家司也と云ん爲なり、

○按ズルニ、文祿二巳年トアルハ文祿四未年ノ誤ナラン、

〔翁草〕百八十八秀吉公薨去

同○慶長四年正月十一日、大名小名登城して秀頼公を拜し、其后大廣間に別坐、大老奉行出座して、天下之諸法度御先代之條目を讀聞せ、彌違背不可有旨を被示、

〔德川治世錄〕三慶長四年二月五日、諸將不和ノ事アルニ於テハ、中村、堀尾、生駒等、是ヲ和セシムベキノ旨秀吉遺言タルニ依テ、今度公○德川家康大坂奉行等ト御不快ノ事、堀尾吉晴是ヲ執シテ井伊直政ニ來會シ、和睦ヲ議ス、公是ヲ許シ玉フニ依テ交和成ル、依之加賀大納言利家○中略等連判誓詞ヲ以公ニ獻ズ、

敬白靈社上卷起請文前書之事○中略

一太閤御置目十人連判之誓紙之筋、彌不可有相違、若失念有之候而、誰々於身上蔑相違於有之者、十人之内聞付次第ニ、一人二人ニテモ互ニ異見可申候、其上同心於無之者、相殘衆中一同ニ異見可申事、

一今度雙方ヘ入魂之通申仁有之候迄、對其者遺恨ヲフクミ存分不被有之候、御法度御置目ヲ背申ニヲキテハ、十人トシテ遂穿鑿可被處罪科事、

誠哉、長於人者、晝夜寤寐一生工案可在此所哉之事、○中略

右十五箇條堅ク守リ、其所ニ心ヲ止可用トテ瀧河ニ被下ケリ、寔君臣合體之御擧動、理世安民ノ御心緒、有難カリシ事ドモ也、

〔織田信長譜〕天正十年四月信長信忠定關東制法十五箇條、以授瀧河一益、一益居上州厩橋城、以振威於關東、

〔武邊叢書 五〕豐太閤大坂城中壁書

御掟 ○中略

右條々於違犯之輩者、可被處嚴科者也

文祿四年八月三日

隆景
輝元
利家
秀家
家康

御掟追加 ○中略

右條々於違犯之輩者、可被處嚴科者也、

文祿四年八月三日

隆景
輝元
利家
秀家
家康

○按ズルニ、コノ式目ハ十五條ニシテ、元親百箇條及ビ長曾我部元親式目トハ別ナリ、

〔總見記十五〕越前國御仕置御凱陣事

越前加賀兩國ノ者ドモ或ハ御赦免、或ハ安堵、又ハ刑罰、ソレ〴〵ニ御裁許也、御法令ニ曰ク、

掟

一國中へ非分課役不可申掛、但著到子細有テ於可申者、我々ニ可相尋、隨其可申付事、○中略

天正三年九月日

○按ズルニ、コノ法令凡テ九箇條アリ、

〔總見記二十二〕諸將恩賞幷甲信二州御掟事

今日○天正十年三月二十九日甲信兩國ノ御法度書被仰出、御仕置有之、

國掟　甲信兩州

一關役所同駒共ニ不可取之事○中略

右定之外、於惡敷扱者、罷上訴訟可申上候也、

天正十年三月日

○按ズルニ、コノ法度凡テ十箇條アリ、

〔信長記十五上〕信長公東國御進發幷勝賴父子討死之事

同○天正十年四月十一日、信長公東國法度仰置レントテ、羽林信忠卿二位法印○武井夕菴ニ評議有テ、條子○子恐々誤書立給ヘリ、

一守國者可撰奉行樞要歟、擧其人則上下因之明也、若非其人則國內爲之暗矣、明者是治安永久之本、暗者是危亂速亡之兆也、豈其輕乎、撰人在己、己正則不招自至、己不正則雖招不來矣、君有其德必也、臣有其道、君雖未有其德得其臣擧用則亦能安、是其大公無我至虛所致而已、公生明之至言、

字信玄家秘書口傳有、

永祿元年戊午卯月吉日　　武田左馬助　信繁在判

長老江

長曾我部元親式目

〔長曾我部元親百箇條〕右條々於國中自今以往可爲龜鑑之條、貴賤共令信用、全可相守、若一言於相背者、忽可處嚴科者也、依所定如件、

慶長貳年三月廿四日　　盛親在判

元親在判

〔長曾我部元親式目〕右之條數、堅可相守、此外從先規相定數ヶ條、今以不可有相違者也、

慶長貳丁酉年三月朔日　　元親

〔土佐軍記五〕元親土佐國政事

或時元親、家老ノ面々ヲ呼集テ申シケルハ、我幸運ニ依リ國中ヲ掌ニ握トイヘドモ、多年ノ兵亂ニ由テ、國政廢レ法度猥ニシテ民百姓モ業ヲ失フ、今古法ニ新政ヲ相加エ、衆人ヲ保ンズルノ政道ニ改ント思ナリ、凡ソ古今ノ變化ヲ捜テ、倩國家ノ興亡ヲ考ルニ、上禮ナク下義ナキ時ハ忠賞不行、故ニ其國亡ブ、下義アリ上禮アル時ハ忠賞相行ル、故ニ其國興ル、下忠義ヲ存ズトイヘドモ、上禮ヲ知ザル時ハ其國變ジヤスシ、上能禮賞ヲ知トキハ下忠義ヲ存ゼズト云事ナク其國化シヤスシ、是ヲ以テ良將ノ士ヲ致ハ、能忠否ヲ察シ、能賞罰ヲ正ス、賞トハ至忠至義、罰トハ不義不忠ナリ、賢ヲ進メ佞ヲ退ルノ謂、法令ナクンバ不可有トテ、數箇條政道ノ式目ヲ出サレケル、

一神社佛閣於令破損者、彙而訴其所之代官或領主、可令加修理、并祭禮等不可濫於古法事、○中略

右條々可堅相守者也、仍如件、

天正二年五月日　　土佐守

〔武野燭談一東照宮〕一甲州御打入には、武田の家法を以甲信駿へ御掟なされ、○中略唯年貢を輕く仰付られし而已替たり、

〔甲陽軍鑑七品第十六〕侍大將より武者奉行大切の心持の事附喧嘩の沙汰之事

殊に喧嘩の事は、信玄公廿七歲天文十六年丁未の歲、五十七ヶ條の式目を定て御仕置をなさる、第十七ヶ條に書給ひ、とかく喧嘩不仕やうにと思召、長坂長閑、跡部大炊助、原隼人佐、駒井右京進右四人をめして仰出さるゝは、自今以後喧嘩の事、理非によらず雙方成敗なりと相觸候へと宣ふ、○中略人に慮外仕る者を、御成敗候歟改易と仰付られむかと、先內藤修理は存奉ると申せば、○中略是より別の沙汰有まじとて、紙面にあらはし、右四人に相渡す、長坂長閑、跡部大炊助、駒井右京、原隼人、此書面を請取て則これを披露す、尤此儀可然と有て、新式條十七ヶ條目に悉く喧嘩の御法度定おかる、是內藤修理正工夫の故なり、

〔甲陽軍鑑八品第十七〕武田法性院信玄公御代總人數之事

新式目三ヶ條目に相そむき、私にて他國の通を仕候へば、大剛の者共をもあらけなく御成敗なり、是又尤の御法度にて候、

〔甲陽軍鑑一目錄〕二品、信玄公舍弟典厩子息江異見九十九ヶ條之事、

〔信玄家法上〕天地之間有萬物、萬物之中有靈長、名此曰人倫、人倫有司業五常也、六藝也、不可不習、父能傳、子能記、尊武田信繁、有文有武、有禮有義、諱其世子而稱長老、敏而好學、如玉走盤、如錐脫囊、孜孜而不倦、誨以九十九件之品目矣、誠韋賢滿籯之訣、孟母斷機之戒、豈道學而潤身、與隆於國家、榮茯於子孫本也、本立而道生、則運乾坤於掌握、通古今於胸中、不亦道乎、吁不出巷而知天下、其唯此一篇矣、大矣哉、至矣哉、維時永祿元年戊午蕤賓中　龍山子謹誌、

〔信玄家法下〕以上九拾九ヶ條、多言漫喧他人之耳、事無不往生之書、二五十八廿　二五七八亦、此六之

〔太閤記二〕秀吉歳暮御禮之事

信長十六歳之冬、林佐渡守が館へ入まいらせ、各相議して諫となしに、あまた所の國守の行ひ、其中にて能を語り聞せまひらせける、○中略又武田信玄も、治國家唯法度の正しく理に合ふ事肝要なりとて此事に勢せり、夫治國家の法あしければ、士貧く民疲れぬる物とて制法あり、左の如し、

定

一萬事守儉約驕を去、士之氣味をたしなみ可申事、

一信仰於佛神事は、心を誠にし神慮にかなはんやうを専にすべし、費金銀建立堂塔事は無益の事、

一妻子之衣類、一萬石所持之士は京染等之小袖、五千石より下は薄板、五百石より下は紬、百石之內外はぬのこたるべき事、

一傍輩中、三人寄合雜談等之事くるしからず、其外を過さば爲科代木綿廿端出すべき事、

一親族之間、一とせの內振舞之儀、二度二汁三菜之外可停止之事、

一武具馬具は、其分限に順ひ嗜可申事、

一拙僧分國之內、不寄卑俗凡下之輩、得正士之器量、萬之司に成べき者あらば、密に可告知之事、

一百姓訴等にも限ず、萬事に付て贔屓偏頗有之まじき事、

一喧嘩ハ雙方可爲曲言事、付能間柄を云妨などいたす者あらば、密々に可告知之事、

一於戰場破法度候者、可及生害候、雖然十之物十可得勝利相極候はゞ、可隨其宜歟之事、

一賞罰執行候中に、拙僧加私意事於有之者、以書付可告知之、縦未究之儀たり共くるしからざる事、

右信玄制法ヶ條之內也、三郎殿これを見給ふて、御同心の體淺からず見えしとなり、

〔信玄家法上〕右五拾五ヶ條者、天文十六丁未六月定置畢、追而二ヶ條者、天文廿三甲寅五月定之畢、

〔甲陽軍鑑九下品第二十七〕一天文十六年丁未二月二日に、晴信公山本勘介をめして軍法備の立様を申せとあれば、○中略そこにて勘介申上る、軍法は御法度を能たてなされ候て常にあつかひ、御家くせの樣になく候ては軍兵の御掎なり兼て、御勝利あやうく候と勘介申上る、晴信公法度の樣子はいかんと仰らるゝ、よき御法度をもつて諸人大小上下の形儀作法をよく定なされ候はゞ、其後諸人よく上中下のさたを存、上から下々に至るまでよき軍法を願申處へ、○中略諸人の是をよく存ずる樣になさるべきと山本勘介申上る、其年天文十六年丁未六月吉日に晴信公御工夫あり、先御持國中諸法度のために新式目をのべられ、五十五箇條の法度あるは、ゆく〱軍法のため也、是晴信公廿七歳の御時、三河牢人山本勘介五十五歳の時申上て如此、右式目後二箇條入て五十七箇條也、晴信公仰らるゝ法度をたてゝと申はとをき儀なり、則時に軍法能事はあるまじきかとおほせらるゝ、能御法度は國持大將の慈悲をもつてなされ候、子細はよき法度にて諸人の行義作法能々罷成、人行義よければ實なり、作法よければ一切の善惡を分てよく合點いたす、よく合點いたせば義理を存る、義理を存ずればうしろぐらき事少もなくして、主君の御ためを大切に存る、主君のためを大切に存ずれば法度にそむかず、諸人如此なるときんば軍法よし、軍法よければ備よし、備よければ味方の諸人勝事疑なし、勝利疑なければみだるゝ國をきりとりて大將よくおさめ給ふ、國おさまれば諸人御恩を被下安堵いたす、さてこそ法度は慈悲よりおこると承て候、さりながら慈悲より出るよき法度は、寸善尺魔と申て、善には必邪魔出來して、調兼申物にて候間、せめては十年もならしをなされずして急に仰付られば、御法度きゝかね候て、結句あしき事になり申べく候と、山本勘介申上る故、晴信公の新式條なり、また御法度背輩これあらば見出し聞出し申上る、

一於朝倉之家宿老ヲ不可定、其身ノ器用忠節ニヨリ可申之事、〇中略
右ノ條々克々服膺シ、晝夜相勤メテ永ク子孫ニ貽厥セラルベク候、〇下略

早雲寺殿二十一箇條

〔北條五代記〕一伊豆早雲平氏茂由來之事
早雲とは、子細有て若年より名付といへり、明應の比ほひさがみをおさめて後も、伊豆のにら山に在城のゆへ、伊豆の早雲とあまねくいひ傳へり、仁義をもつはらとし、ひとへに民をあはれみ給ふゆへ、人の國までも思ひふくせずと云事なし、むかし關東にをいて、早雲寺殿をしへの狀と號し小札あり、心をろかなる者はこれをよみならひたりし、其文にいはく、
　早雲寺殿廿一ヶ條
一第一佛神信じ申べき事、〇中略
右の文を愚老見馴し事なれば、則是にしるし侍る者也者、〇下略
〔北條五代記〕一犬也入道弓馬に達者の事
早雲敎の二十一ヶ條の內に、馬は下地をば達者に乘ならひて、用の手綱をば稽古せよとしるせり、
〔北條五代記〕六上杉輝虎武田信玄小田原へ働事
早雲寺殿二十一ヶ條と號し、侍一生涯身の行の敎をしるしをかれたる文有、其內二十ヶ條に武道のさた一言なし、終の一ヶ條に、文武弓馬の道は常なり、しるすに及ばず、左文右武はいにしへの法、兼てそなへずんばあるべからずと書とめ給ひぬ、
〔武野燭談〕一東照宮關東御打入には、北條家の法度を御用ひ有り、唯年貢を輕く仰付られし而已替たり、

信玄家法

〔甲陽軍鑑〕目錄一一品信玄公分國中仕置五十七ヶ條之事

候はゞ、同罪に堅可被申付候、志よちうつろをぎんみ申候、沙汰致し候へば、他國之惡黨出ぬものなり、みだりがはしき所と志られ候へば、他家より手を入ものにて候、ある高僧の物語せられたるは、人の主人は不動愛染のごとくなるべし、其故は不動の劒を提、愛染の弓矢を被持たる事、全くつくにあらず、射るにあらず、ひとへに惡魔降伏の爲にして、内に慈悲深重なる人のあるじも、よきをばほめ、あしきをば退治し、理非善惡をたゞしくわくべきもの也、是をぞ慈悲の殺生と申候はんずれ、たとひ賢人聖人の語を學び、諸文を學したるとも、心へんくつにては不可然、論語などに、君子不重時は威なしなど、あるをみて、ひとつにおもきと計と心得てはあしかるべく候、おもかるべき、かろかるべきも、時宜時剋によつてふるまひ肝要也、この條々大かたにおもはれては益なく候、入道一箇半身にて不思議に國をとりしより以來、晝夜目をつながず工夫致し、ある時は諸人の名人をあつめ、そのかたるをみゝにはさみ、今にかくのごとくに候、あいかまへて子孫におゐて此條々書をまもられ、摩利支天八幡の御敎と被思候はゞ、かろくも朝倉の名字相つゞくべく候、末々におゐて我まゝにふるまはれ候はゞ、たしかに後悔可有之者也、

今川了俊歌

子をおもふ親の心のまことあらばいさむる道にまよはざらめや

〔朝倉始末記 一〕朝倉家由來之事

慈照院義政公ハ敏景ノ行跡幷ニ今度ノ始末ドモ一方ナラズ思召、卽文明三年五月廿一日越前一國始テ敏景ニ賜リツヽ、御朱印頂戴有ケレバ、同名被官下々ニ至迄、目出度御運ノ程ヤトテ、千秋萬歲祝ザルハ无リケリ、（中略）其ヨリ黑丸ノ館ヲ改テ、足羽南郡一乘ノ谷ニ始テ城郭ヲ築ツヽ、繁昌申モ愚ナリ、然レドモ金殿玉樓ノ飾リナク、朱甍綠瓦ノ費セズ、家中良卑ノ差別ナク、専奢侈ナカレトノミ政道アリ、依之御家督氏景ヘモ、萬端心持以下ノ條々ヲ被示置曰

建武式目以來追加

右之書物御尋ニ候間、各被レ遂二吟味一、今八ツ時迄之內、有無之返答書付可レ被二差出一候、御急候間少茂油

斷有間敷候、

正月

新加制式

〔新加制式〕一可レ崇二神社一、敬二寺搭一事

右神者、天先成地後定、然後化二生其中一、故曰二神國一、欽明御宇佛法東漸、上宮太子內敎弘道、自レ爾以來、寺社崇敬是同、就中有封社不レ致二陵夷一、而可レ加二修造一、專二祭祀一、恒例神事之時、神役公人等、依レ令レ懈二怠下行物一、延引式日、神慮尤有レ恐、自今以後、其日勿二闕怠一、於二彼公人一者、後日以二此科一、可レ令レ出二一倍過錢一、將又佛寺等事、先不退之勤行可レ專レ之、近代僧徒法衣之上帶二刀兵一、捨二經敎一而專二歌舞一、若爲二一寺住侶供僧一者、可レ被レ停二廢彼職一也、次寺社領私令二沽却一、太以零落之基乎、尋二究之一、速可レ被レ召二放件地一、又林木以二私曲一有二伐取之族一者、可レ糺二其趣一矣、

〔大日本史列傳二百十七〕僧玄慧

建武中、尊氏服二從諸國一、開二府于鎌倉一、因廣詢二政事一、是圓與二玄慧眞慧等八人一議レ之、參二酌古今條件其尤切二于事務一者十七事一、而進レ之、名曰二建武式目一、尋又作二新加制式二十一條一、尊氏大可レ之、皆施行焉、建武式目

新加制式

大內家壁書

〔大內家壁書〕端闕

中上下人々、可レ守二此旨一之由、壁書如レ件、

長祿三年五月廿二日

左衛門尉奉秀明

右衛門尉奉正安

朝倉敏景十七箇條

〔朝倉敏景十七箇條〕一諸沙汰在所之時、理非少も被レ曲まじく候、若役人わたくしも致候由被二聞及一

べきよしみえたるにや、

〔樵談治要〕一近習者をえらばるべき事

是は建武の十七ヶ條の中にものせられ侍る題目也、其器用をえらばるべきこと、尤然るべし、

〔宗五大艸紙〕人の召仕れ候仁心得らるべき事

一建武十七ヶ條にも、近習の人を可撰といへり、

〔大館常興日記〕天文九年九月十一日

一建武式目一卷、爲上意昨夕以佐拜見させられ候事在之、仍今朝以佐返上之仕也、忝存候旨申入之也、此儀御內書などに內談衆事を宿老衆と被遊候べき事、此式目に宿老衆と在之間無別儀由、內々被尋下間、無別儀旨言上仕也、何にもと〱の趣、宿老共と被遊て猶可然哉と存候由申入之也、

建武式目抄

〔駿府政事錄一〕慶長十六年九月十九日、今日建武式目令道春讀之、議論其得失給、

〔右文故事九〕御代々文事表一

守重〇近藤案ニ、此歲〇慶長十六年四月十六日、京師ニ於テ三條ノ御條目ヲ出サレ、天下ノ牧伯ニ盟書ヲ捧シム、〇中略爾來建武式目、及ビ延喜式、幷ニ群書治要、貞觀政要、續日本紀ノ類、常ニ御講究アリ、是二十年御法令ヲ頒布セラルヽガ爲ノ張本ナルベシ、

〔建武式目抄奥書〕右一册、三好日向守長緣於予〇淸原大外記良雄懇懃令索之、雖不敏染禿筆、句々文々以假名顯其意下其訓、當家秘傳載抄之、妄莫許電覽、冥慮推測者乎、

〇按ズルニ、コノ書天文二十三年ノ作ナリ、

建武以來追加

〔享保集成絲綸錄三十五〕享保七寅年正月十六日〇中略

式目追加三十三ヶ條

目ヲバ貞永ノ式目ト云、今ノ御成敗式目是也、コノ式目モ、建武年中ニ作ラレタル書ナレバ、建武式目トモ建武記トモ云也、作者ハ是圓也、評定衆ハ眞惠、玄惠法師以下七人也、與ニ詳ニミヘタリ、是圓ヲ入テ以上八人也、

〔梅松論下〕一或時兩御所〇足利尊氏、直義、御會合在て、師直幷故評定衆を餘多めして、御沙汰規式少々定められける時、將軍仰られけるは、昔を聞に、賴朝卿〇中略治承四年に義兵を發し、元暦元年に朝敵を平げし、其間の合戰五ケ年也、彼政道を傳聞に、御賞罰分明にして先賢の好する所なり、しかりといへども、尙以罰のからき方多かりき、是に依て氏族の輩以下疑心を殘しける程に、さしたる錯亂なしといへども誅罰しげかりし事いと不便也、當代は人の歎きなくして、天下おさまらん事本意たるあいだ、今度怨敵をもよくなだめて本領を安堵せしめ、功を致さん輩にをゐては殊更莫大の賞を行なはるべき也、此趣を以面々扶佐し奉るべきよし仰出されし間、下御所〇直義殊に喜悅有ければ、師直幷故評定衆、各忝將軍の御詞を感じ奉て、涙を拭はぬ輩はなかりし、

〔甲陽軍鑑品第十三五〕弱過たる大將之事附兩上杉幷北條家生起合戰物語事

尊氏公天下を取て靜謐に治め、就中源家專の世となる、しかも右大將より以後、公方家代々の式法を取立、まつりごとをよく行ひ給ふこと、中興に尊氏公よりあそばす、

〔新加制式〕一固可有禁止賄賂事

右憲法云、得利爲常、見賄聽訟云々、建武式目殊立于此一篇、古今制禁不可勝計、

〔樵談治要〕一諸國の守護たる人廉直を先とすべき事

建武の御法には、守護職は上古の吏務也、國中の治否只此職による、尤器用に補せられば、撫民の義にかなふべきかと云々、此式條のごとくならば、時にしたがひ人をえらびて、其職に補せらる

〔新編追加奥下書〕右追加、關東明鏡之式法、尤可謂至寶、連々以愚隙之透、遂書功者也、

于時慶長十一年丙午年十月廿一日　　梵舜花押

同年六廿一筆立　十廿一日書終

重而大形及校合　同年十一四

〔新編追加上奥書〕右追加上卷　筆立慶長十一、六廿一、同七廿三、書終、同校合朱點同年十月廿三日終、

梵舜花押

〔建武式目奥書〕以前十七箇條大概如斯、是圓雖受李曹之餘胤、已爲草野之庸愚、忝蒙政道治否之諮詢、所撫和漢古今之訓謨也、方今諸國干戈未止、尤可踟蹰歟、古人曰、居安猶思危、今居危盍思危哉、可恐者斯時也、可愼者近日也、遠延喜天暦兩聖之德化、近以義時泰時父子之行狀、爲近代之師、殊被施萬人歸仰之政道者、可爲四海安全之基乎、仍粗言上如件、

建武三年十一月七日　　眞惠
是圓

人衆

前民部卿　　是圓俗名道昭

眞惠　　玄惠法印

太宰小貳　　明石民部大夫

大田七郎左衛門尉　　布施彥三郎入道

以上八人

〔建武式目抄〕此式目ハ建武三年十一月七日ニ作ラレタリ、建武トハ後醍醐天皇ノ御時ノ年號也、此時ノ將軍ハ尊氏將軍也、後ニ等持院殿ト申也、執權ハ高師直也、貞永年中ニ作ラレタル式

自第十五至第十七、第廿、第廿四、第廿七、凡十七條與此本〇三十箇條ナ云フ符合、但第七條前低書追評定曰四字、第八條中仁治云ル七十七字、分在最後為第廿二條、起請文以下不載、而此本所無四條附于左トテ、海路往返船之事以下四條ヲ附載セリ、

〔御成敗式目抄〕蘆雪本面白沙汰追加ル故、四度之追加也、

〔建武式目抄〕近クハ將軍家トシテ天下ヲ治ラレシハ、北條四郎時政ノ子義時執權ノ時、又義時ノ子泰時ノ時代也、御成敗式目作ラレタリシ人也、其式目追加ノ法ヲ以テ近代ハ師範ニシテ政道ヲオコナハルヽ也、万人ノアフギ奉ルヤウニ善政ヲホドコサレバ、必天下泰平四海安全ノ基タルベキ也、

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年十月十二日丁亥、今日評議被仰出曰、自嘉祿元年至仁治三年御成敗事、准三代將軍并二位家御成敗、不可及改沙汰云云、

〇按ズルニ、北條泰時嘉祿元年ニ執權トナリ、仁治三年ニ卒ス、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年〇文應元年五月四日辛未、故武州禪門〇北條泰時御成敗事、不及改沙汰之間、被載式目畢、而同時重可有沙汰之由有所見之輩者、不拘此文可有其沙汰、仁治三年以後給御敎書遂問答之、疑者非沙汰之限、今日被定之、

〔御成敗式目追加〕一自寛元元年〇仁治四年至康元元年御成敗事文永八八十評

右於自今以後者准三代將軍并二位家御成敗、不及改沙汰矣、

〇按ズルニ、寛元元年ヨリ康元元年マデハ、北條經時、同時賴ノ執權時代ナリ、

〔御成敗式目追加〕一自康元元年至弘安七年御成敗事正應三九廿九

右於自今以後者、不及改沙汰歟、

〇按ズルニ、北條時宗、康元元年ニ執權トナリ、弘安七年ニ卒ス、

以寫感情云、

むかしこそみてしのばるれ世の爲に定て置し露の言の葉　　耕雲山人明魏拜書

〔式目抄一〕一弘。長。新。制。云(追加)、可仰諸國守護地頭等、令禁斷海陸盜賊山賊海賊夜討强盜類事、諸國守護地頭等可致其沙汰之子細被載式目訖、

〔式目抄一〕此ニ神社ヲ新シク造レトハ不云、修理セヨト云ハ、三代格式ヲ始トシテ皆如斯、弘。安。七。年。ノ。追。加。ニモ見タリ、弘安七年六月十二日關東ノ新。制。十。九。箇。條。ノ內、自今以後止新造寺社、可興行諸國國分寺一宮事云々、

〔式目抄四〕弘安九年七月廿五日(追加)、至內々之密儀者、雖有風聞之說非沙汰之限、由被載式目追加畢、依之普雖令現形稱密儀不及其沙汰、於自今以後者、不致所領之成敗、雖不行家中之雜事有不調之聞者、任本式目可有其科、

〔式目抄二〕地頭年貢抑留事、建長、永仁、貞應以下追加ニ見タリ、

〔御成敗式目抄(蘆雪本)〕追加は誰人の集め加とも不知、本條に無き沙汰を添、或は本條の沙汰を改めたる所もあり、三。十。ヶ。條。あ。り。○中略　又追加は文の大小不定、○中略　沙汰の面白をば追て式目に加る程に、追加と云也、此追加何代誰人が作と云事不知、佐々木殿は本條に編添て可通者にて無とて、追加を解去て被棄と云說もあり、追加は本は五十一ヶ條々の裏書と可得意、故ニ代替リ時異ルニ、人ノ心モ奸謀ニ成行ク間、沙汰ヲモ正道ヲ行ヒ、然モ道ハ不可背、代々沙汰出來時は加る間、追加は百ヶ條餘り大都爰のせ三十ヶ條分を沙汰可有、佐々木殿追加は其文繁多にて更に作者も不知、年號も無き首尾なれば、式條編制有間敷故に、別卷にして被成、但部と成事は何比と云に、正和元年の初夏上旬有抄寫給、正和は花園院の年號也、

○按ズルニ、群書類從本ノ識語ニ、舊藏中有略本一冊、都。廿。二。條。、自第一至第八、自第十至第十二、

右本書奥書以下尤備證本秋田城介藤原泰盛、其後盛忠行貞等以證文令校合、其後又行一阿彌行曉以證文令校合、又防鴨河判官正五位上行左衛門大尉藤原朝臣行種以自筆寫之訖、次二階堂中務大輔藤原有泰所持之本、令懇望寫書之訖、深重可秘可秘、

天文第二仲秋書之

永祿八初冬書之

這一冊、端奥十枚者實父常眞筆跡也、中十枚者、予若年之時令書寫候訖、尤可停止外覽者乎、

于時文祿二年十一月六日　四十八歲　如雲

○按ズルニ、此書ハ時宗ノ書キシモノニ非ズ、ソハ書中ニ不易法者、中略武藏前司入道、最明寺殿法光寺殿、三代以上御成敗事也トアルニテ明ナリ、又執權時代ヲ云ヘル所ニ、高時迄代々ノ執權ヲ列擧シタル本モアリ、因テ意フニ、此書ハ一人ノ手ニ成リシニハアラズシテ、弘安比ヨリ漸數人ノ手ヲ經シモノヽ如シ、

御成敗式目追加

〔御成敗式目追加〕御消息一通

雜務御成敗之間同體なる事をも、つよきは申とおしよはきはうづもるゝやうに候を、随分精好せられ候へども、おのづから人に flたがうて輕重などの出來候はざらんために、かねて式目をつくられ候、其狀一通まいらせ候、中略○これにもれたる事候はゞ追くはうべきにて候也、あなかしく、

貞永元
八月八日　武藏守判泰時

駿河守殿于時駿河守、號極樂寺入道六波羅陸奥守重時

〔式目抄五奥書〕右式制者准格條將相御政務之律令也、擧世用之行之、對追加謂之本條乎、○下略

〔御成敗式目追加一本跋〕此書爲救亂離之餘弊一旦定人心之覇術也、今依台命加朱墨點之次、詠一首和歌

〔式目聞書〕于時天文廿四年卯月三日、河州南方椿伯、暫住柴田池坊、好風被紮之畢、

〇按ズルニ、コノ書作者詳ナラズ、

〔御成敗式目抜書奥書〕此抜書、當家雖令秘之、依村上雲州懇懃之所望、撫拾律令格式之文幷追加等注之、聊莫脱漏而已、

正三位清原判

〔式目抄四〕沙汰未練書ニ當世ハ外道安堵トテ、ユヅリ状ノ初ニ御判成也、

〔式目抄五〕沙汰未練抄云、追加ノ申状トハ三問三答ノ外進訴状也、

〔式目抄三〕問注之事〇中略沙汰未練抄ニ云、問注所トハ關東諸方沙汰所也、

〔沙汰未練書奥書〕一以前條々、關東六波羅御沙汰之次第、就令見聞私記之、自取(取恐既誤)調練人者皆以所知也、一向未練若輩者、以是可心得歟、凡於法則者、以貞永御式目可明鏡、至故實者以古御下知幷訴陳狀等案可稽古也、能沙汰人者勘合根本之理非、可思惟始終之落居、或耽一旦之利潤、或依當時之確論、無左右不可出沙汰、不謂親疎、不論貴賤、就根本理非可仰憲法上裁、縱雖存理運至極之由、敵方有寬宥之儀者、閣是非可和談、何況於非據之沙汰哉、能々可思案也、恐權門扶貧賤負親類憚他人、就諸事不可好諍論、偏存穩便之儀可專正理、如此輩者預神明加護叶佛陀冥慮、就諸事不可好非道之沙汰、所詮故實沙汰人者以和與爲本、非據之沙汰人者以裁斷爲先、沙汰人才覺者、法則多知也、法者雖破御下知、御下知者不破法則、本文云爲一人不枉其法、其法是寔哉、沙汰者法則爲眼目、沙汰者守益之理也、不可致無益相論、以一人才學不可評大事、就多聞之儀可定是非也、沙汰者依人之運否有得失之儀、大小事沙汰落居時者、相構而可祈誓申佛神、努々不可有等閑之儀、仍條々以私愚案注之、不可有外見之儀之狀如件、

弘安元年閏十月日　　相模守平朝臣時宗(法光寺殿事也)

〔辨疑書目錄上〕兩名書目

式目諺解環翠軒作六册　一名式目抄

此ノ書ハ元ハ式目鈔ト云フナリ、植字本ニアリ、後人校正シテ諺解ト號ス、

〔倭板書籍考九儒家諸書〕貞永式目諺解　六卷アリ、正三位清原宣賢入道宗尤ノ作ナリ、宗尤ヲ環翠軒ト號ス、博識ノ人ナリ、

〔群書一覽二有職〕御成敗式目諺解　六卷四本　清三位入道宗尤

舟橋環翠軒自序に、此書の起原をくはしくしるされたり、○中略元祿十二年上木す、

○按ズルニ、元祿刊本ノ表題ニハ御成敗式目諺解大成トアレド、每紙ノ小口ニハ式目抄トノミアリ、サレバコノ書ハ式目抄ト云フガ原ノ名ニシテ、諺解ト題セシハ後人ノ所爲ナルコト、辨疑書目錄ニイヘルガ如クナラン、

〔式目抄六奧書〕以祖父常忠業忠○清原御說先年令抄出之處、局務外史業賢盜取之間、重令抄出之、以此本可爲證、一子之外不可許一覽而已、

天文三年閏正月廿八日終其功　清三位入道環翠軒宗尤宣賢○判

〔式目抄六奧書〕右式制者、准格條將相御政務之律令也、擧世用之行之、對追加謂之本條乎、吾祖環翠爲愚蒙以假名下注釋畢、一家不出之秘本也、然洛中錯亂之砌失却之于爰幽齋玄旨志道遊藝之餘、感得此抄索奧書、余不及固辭、加證明勿令窓下而已、

天正第十六曆夏五十又三　雪花道白判

〔御成敗式目註跋〕右一本、先考以足利講席之裏書筆之、不幾而失却、或人以其證本寫之、仍備用而重書寫之者也、問注所之一流秘中之秘也、豈容易之哉、天文廿三年甲寅八月中旬、

○按ズルニ、コノ書作者詳ナラズ、

保鶴岡八幡之別當ヨリ相傳シ玉フ、

〔御成敗式目註〕足利治部大夫高氏、同新田義貞、竊ニ宗鑑入道ヲ誅セヨトノ勅在、其時新田宰相中將義明ト云者、鎌倉由井濱ヨリ攻破テ宗鑑入道ヲ殺也、其時町野ノ家ニ有シガ佐々木ノ家ニ傳也、○中略其時先代ハ由井ノ濱ニテ大勢打レ、其中ニ奉行人一人此書ヲ以テ當代○足利エ相渡也、當代ニ此書用事モ、論語云、舊令尹ノ政ヲ以必以新告令尹ト云心ヲ用也、

〔辨疑書目錄下〕名數書目

公家十三部 庭訓往來、明衡往來、尺素往來、式目、和漢朗詠、新撰朗詠、伊勢物語、つれづれ艸、古今集、百人一首、大和物語、源氏物語、三十六人歌仙、以上

是圓抄

〔式目抄六〕法意ト式目ト相違多シ、賞罰モ淺深カハレドモ底ハ一ツ也、コヽヲ是圓ガヨクカキタリ、是圓俗名ハ道昭、中原章職ガ孫ナリ、此式目五十一箇條ニ、悉律令格式ノ正文引合テカケル物アリ、其奥書ニ云、格制者是雖破律令、皆爲律令之條流、式目者亦雖非法意、終歸法意之淵奥云々、言心ハ格ハ律令ノ法ヲ破テ、又別ニ法ヲ立タレドモ、皆律令ノ枝葉末流タリ、本源ハ律令ヨリ出タリ、式目ハ法意ニハチガヘドモ、遂ニ法意ノ奥義ニ皈スト云リ、

唯淨裏書

〔式目抄一〕此式目ハ、五十一箇條ニモセズシテ五十一箇條ニスル事、豈其故ナカランヤ、唯淨裏書ニモ此子細ヲシルサズシテ、武州禪門モ大賢ノ人也、筆者モ才學ノ者也、イカサマイハレアラントカイタリ、

〔式目抄一〕撰者事異義アリ、唯淨裏書ニ云、○中略以上六人也、此義出處ヲシラズ、定テ所據アル歟、○中略唯淨ハ六人ノ撰者ヲ記セドモ、東鏡ニハ又別也、

〔式目抄一〕唯淨裏書云、格條律條令條ト云ハ篇目也、總序ノ義ニアラザレバ式目尤宜云々、

式目抄

〔辨疑書目錄中〕本朝作者書目

清原宣賢書作號環翠軒式目鈔三卷

〔沙汰未練書〕一不易法者　就是非不及改御沙汰事也、武藏前司入道〇泰時故最明寺殿〇時頼法光寺殿〇時宗三代以上御成敗事也、

〔康富記〕寶德三年七月二日戊戌、向飯尾肥前入道許、清給事中〇少納言清原業忠官務等被座、少納言御式條被讀之、義理少々被談之、肥前頻所望之故也、問注所孫右衞門、與三左衞門等在座、自端至十五段、有一盞、晩各退歸、　三日己亥、早朝參大炊御門殿、若公有讀書、賜朝飡、次參清給事中文第、昨日聽聞御成敗式目之中、不審條々申承、委有庭訓、

〔式目抄一〕此書ヲ講ズル事ハ、舊ハナカリシヲ、寛正六年七月五日、依細川勝元所望、於彼亭祖父常忠〇清原業忠初御講說也、泰時狀ニモ、律令格式ハ眞名ヲ知レル人ノ爲、式目ハ假名ヲ知レル人ノタメト云リ、講釋ニ及バザルヨシ再三御斟酌ナレドモ、堅ク懇望ノ間始テ講ジ玉ヒヌ、是ヨリ以前此書ノ講ナシ、後ノ成恩寺殿〇一條兼良御講アリシモ、祖父御講ヨリ後也、

〔式目抄一〕凡制作書事、或奉勅ヲ撰之、或自ラ作後奏之、此式目未及奏覽、依事不可治定、可用捨哉、

〔御成敗式目注〕此書五十一ケ條、十三人ノ評定衆ニ下サル、其事請取出シテ六人シテ天子ノ御目ニカケ申也、町野ニ置ケト御意也、町野ノ家沙汰所成ニ依テ也、

〔式目抄五〕タマ〳〵硯蓋抄ナル上ハ、時ヲハナサズ、此書ヲ見ン人ハチットハ心アルベシ、左樣ノ仰ニ從ヒ、コマカニシルシ侍ベリ、

〔式目聞書〕此書を硯蓋の書と名付事は、古今共に沙汰所へ、此式條を硯箱の蓋に入て出給ふ也、

〔羅山文集六十三雜著〕東鑑考
禪僧義堂在鎌倉時、町野氏來、令義堂見吾妻鏡、此事在空華日工集、然則吾妻鏡者町野家之所讀習也、御成敗式目亦町野之所傳授云、

〔御成敗式目抄〕此書續雪本ハ、先代町野家ヨリ鶴岡八幡別當職ニ預置ルヽ也、當方ニ續傳スル事ハ、安

大永甲申年〇四冬十有二月良辰　　正五位上行左大史兼筭博士小槻宿禰伊治

〔式目抄〕撰者事異義アリ、唯淨裏書ニ云、淸ノ大外記敎隆眞人、于時三川ノ前司、越前法橋圓全、矢野ノ對馬ノ前司倫重、于時外記大夫、太田ノ民部大夫康連、玄蕃允、佐藤民部大夫業時、相模大丞、齋藤兵衛入道淨圓、俗名長定以上六人也、此義出處ヲシラズ、定テ所據アル歟、〇中略唯淨ハ六人ノ撰者ヲ記セドモ、東鏡ニハ又別也、古記云、淸ノ大外記敎隆眞人、以儒宗之故、武藏守平泰時貴重之、仍テ内々密談之間、酌法意之淵源、本制符之先例、作示之云々、或抄ニ此書ノ題目、十三人奉行之内、仁智ヲ兼タル人六人ニ文章ヲカヽルヽ事、是モ六地藏、六觀音ヲ表スル也、後世ノ斷罪ハ六地藏主リ玉ヘリ、現當一致ノ心歟、十三人ノ奉行ハ十三佛ヲ表スル也、〇或抄ニ以下原無、今據諺解補、

〔右文故事二〕御本日記附注中

左傳

按ニ、本朝通鑑ニ、敎隆者淸家庶流、久在鎌倉、候幕府、列評定衆、預北條氏之咨詢、越後守實時遇之以師禮ト云ヘリ、淸原系圖ニモ、關東評定衆、式目作者六人之内隨一也ト見ユ、環翠軒御成敗式目諺解ニモ、撰者ノコト唯淨裏書云、淸大外記敎隆眞人、于時三河前司云々、以上六人也、此義出處ヲ知ズ、定テ所據アルカト云ヘリ、守重今東鑑ヲ取テ撿討スルニ、貞永元年八月御成敗式目ヲ作ラレシニ敎隆ノ名ミエズ、且ソノ時ハ音博士ナリ、疑ハ未ダ關東ヘ來ラザルベシ、又評定衆ニ加ハリシコト、東鑑幷關東評定傳ニ見エズ、系圖及通鑑何ノ據ゾヤ、

〔御成敗式目〕享祿本跋此書迺万代不易之法也、故加淸家點、以重鋟諸梓矣、蓋爲夫愚蒙輩易讀也、苟易讀則通理、遠通理速則犯法者稍少、豈非師道少補乎、抑鄕有先生、村有夫子、而時習之學日新、予事爲之哉、博雅君子庶幾諒察焉、

享祿己丑秋八月日　　從四位下行左大史兼筭博士小槻宿禰伊治印

ナレバ此文ニ正和元年トアルニモ時代ヨク合ヘリ、サレド是圓ノ抄物今存セザレバ、委ク考フルニ由ナシ、

〔御成敗式目追加〕清〔一本〕大外記教隆眞人于時三河前司　越前法橋圓全　矢野對馬前司倫重于時外記大夫　太田民部大夫康連于時主簿允　佐藤民部大夫業時于時相模大掾　齋藤兵衞入道俗名長家

已上六人、武州禪門御時兼日下給條々之〇恐於之誤私宅注所綴之文章、後日各持參其草、用捨治定之後、被部類五十一箇條云々、被作之時代者、貞永元年八月也、後堀川院御諱茂仁御宇、公家者執柄攝政左大臣教實洞院殿、大理右衞門督藤原基氏、前別當右衞門督藤原實有、

武家者

征夷大將軍入道大納言賴經公于時鎌倉頭

執權者

修理大夫平時房于時相模守

入道前武藏守平泰時于時當任

六波羅奉行

入道陸奧守平重時于時駿河守　入道越後守平時盛于時掃部助

〔御成敗式目〕大永本跋制節則不愛私、謹度則不踰矩、蓋君子常也、昔貞永武將以平氏泰時爲良佐也、誠進賢賢哉、於是九重安鼎、四夷解辮、刷朝之羽儀、保天之性命、遂本律令以定式目、總五十一ヶ條、是豈非理國之紀綱耶、至矣盡矣、記之者姓名、其說多端、不遑毛擧、然而四位外史淸原教隆最爲長焉、既登明經科、剩得儒術譽、誰敢差肩、余因以此書始鏤于板、庶幾上下專祭祀之禮、左右抱勸懲之志、至尋偏傍推點畫頗施於新學而已、

○按ズルニ、宗五大草紙ニ此文ヲ古人の申ける事トシテ引ケリ、

〔宗五大艸紙〕古人の申ける事

近くは鎌倉右大將賴朝卿の北ノ方二位殿政子と申せしは、北條四郎時政の女にて、二代の將軍の母也、大將薨去の後は、一向鎌倉を管領し給ひ、いみじく成敗有し也、○中略かくて光明峯寺殿○藤原道家のすゑの御子を鎌倉へ申下、養子にし奉り、將軍の宣旨を申なし給へり、七條の將軍賴經と申せし是なり、此將軍の御代貞永元年に五十一ケ條の式目を定られ侍て、今に至迄武家の鏡となれるにや、されば男女によるべからず、心かるぐ\しからず、正直に道理たしかならん人肝要たるべしと抄物に侍り、

○按ズルニ、抄物トハ一條兼良ノ樵談治要ヲイヘルナラン、

〔信玄家法〕上奴婢雜人之事者、無其沙汰過十ケ年者、任式目不可改之、

〔泰平年表〕東照宮慶長十六年、是年四月十六日、京師に於て三條の御條目を出され、天下の牧伯に盟書を捧しむ、其第一條に、如右大將家其後代々公方之法式可奉仰之と載らる、是貞永式目の文に據れし處也、

〔御成敗式目追加〕格一本云、觀時革制、爲政之要樞、論代立規、濟民之本務、是以明王馭俗、術非一塗、哲后理邦、豈拘膠柱、貞永御成敗式目、蓋此義也、而彼式目者別立法制、不當律令云々、然案之、是雖破律令、皆爲律令之條流、式目者亦雖非法意、終歸法意淵奧、仍就五十一之篇目、悉引律令格式之正文、或因循而加補益、或相反而成文理、但庸淺之性、旁迷比附、銓詣之趣、定多訛謬歟、雖爲桑門之質、猶携李曹之文、嘲嗤之基、兼以忸怩、時也正和元年初夏上旬、粗終抄寫、聊加愚點而已、

○按ズルニ、此文御成敗式目追加一本ノ末ニ附シタレド、同書ノ跋ニハアラズ、今コレヲ式目抄ニ合セ考フルニ、中原入道是圓ノ書キタル抄物ノ奥書ナルガ如シ、是圓ハ建武式目ノ編者

〔神皇正統記後嵯峨〕かの泰時、あひつぎて德政をさきとし法式をかたくす、〇中略泰時がむかしをおもふには、よくまことあるところありけむかし、子孫はさほどのこゝろあらじなれど、かたくしける法のまゝにおこなひければ、およばずながら世をもかさねしにこそ、

〔梅松論上〕治承に右幕下〇源賴朝草創より以來、天にせくゝまり地にぬき足して、上を尊び下を惠み、政道の法度、騎射の日記を定置て、國を治めしかば、狼煙たつ事なく家々戸ざしを忘れて、樂榮て久しかりしに、時刻到來にや、元弘三年の夏、時政の子孫七百餘人、同時に滅亡すといへども、定置ける條々は今に殘り天下を治め、弓箭の道をたえず、法と成けるこそ目出度けれ、

〔樵談治要〕一諸國の守護たる人廉直を先とすべき事

貞永の式目には、或は國司領家のそせうにより、或は地頭土民の愁欝につきて、非法のいたり顯然ならば、所帶の職をあらためられ、穩便のともがらに補すべき也、〇中略此式條のごとくならば、時にしたがひ人をえらびて、其職に補せらるべきよしみえたるにや、

〔樵談治要〕一訴訟の奉行人其仁を選ばるべき事

凡奉行人は、天下の公事を執行ふ職たるによりて、政道の善惡もとゝして是によるべし、〇中略是によりて、あやまりあらん奉行人をば、ながくめしつかはるべからざるよし、貞永の式目にのせられ侍り、〇中略もし又奉行人として贔屓をいたしかたてうちになされたる公事たらば、越訴を立て申さん事、其咎有べからず、〇中略御法にも、奉行をさしをきて、別人に付て訴訟をいたす事をば停止せらるといへども、時にしたがひ事によるべし、

〔小夜のねざめ〕北條時政より九代たもちたることもすべて才學のすぐれたることはなかりしにや、わづかに貞觀政要御式條などいふ物ばかりを覺て、私なくをこなひ侍しほどは、すべて國も志づかに世もめでたくぞ侍し、

〔弘長記〕器量の人をえらびて諸國七道につかひを遣はし、諸方の非道をたづねさぐらる、探題目代、領主たるともがら、無道猛惡のもの二百餘人をゑるしてかまくらにかへる、時頼入道是を點撿し、科の輕重にゑたがひ、みなつみにおこなはる、かくて記錄所の門には鐘をつりて訴訟人につかしめ、上の十五日は、卯の刻より記錄所にいでられ、午の刻に退去あり、下十五日は、午の刻より出て、申の刻にかへられ、かねのこゑきこゆれば人を出して訴訟人をめしいれて、直にうつたへを聞て書ゑるし、月每の十日と二十日晦日と決斷の日をさだめ、頭人評定衆をあつめて理非を決せらる、其法は貞永の式目のごとくなり、

〔大日本史列傳二百一〕北條時頼

時頼見泰時卒後、綱紀廢弛、獄訟滋興、(太平記、增鏡)其在職所施行、一守貞永式目、遵頼朝父子三代將軍舊制、(東鑑)士庶歙然靡服、天下稱治矣、(增鏡)

〔吾妻鏡四十三〕建長五年二月廿五日癸酉、先日評定間有御不審事、被問法家云、小童部二人致諍論令打合之處、十二三歲之童部、爲一方之方人、刃傷候也、可有罪科否事、(○註略)件刃傷人被定咎者、諍論根本之童部可爲同罪否事、式條之趣可注給候、如此事關東被定置事候ハヌ也、式目之外者法意ヲ守天又時儀ニヨリテ御計候也者、今日彼御返事、披覽評定砌云云、

〔建武以來追加〕一諸國守護人事(建武五、後七廿九、御沙汰、奉行諏方大進房圓忠、○中略)固守貞永式目、大犯三箇條之外、不可相綺、(○下略)

〔建武以來追加〕一諸國守護幷武家御家人等望補吏務職知行本所領事(曆應二五十九評)右云右大將家御時、云貞永式目、一向被停止訖、(○下略)

〔建武以來追加〕一國司領家年貢對捍地事(貞和二十二二十三沙汰)就貞永式目有其沙汰、地頭以下領主不應裁許之日雖改補所職、本所年貢失墜之條背理致歟、(○下略)

ノ二字ヲ略ス、關東ノ二字ヲノスベシトテ巧ニ義ヲ作ル人アリ、コレヲ依用スベカラズ、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年三月廿五日癸丑、海野左衛門尉幸氏與武田伊豆入道光蓮相論上野國三原庄與信濃國長倉保境事、幸氏所申依有其謂、任式目加押領分限可沙汰之旨被仰含于伊豆前司賴定、布施左衛門尉康高等訖、此事確執之餘、光蓮含恨、相語一族幷朋友等、對前武州〇北條泰時欲遂宿意之由、巷說出來間、重聯及細碎沙汰、猶如先、前武州被談人々曰、顧人之恨不分其理非者、不可有政道本意、怖逆心不申行者、定又招存私之謗者歟、〇下略

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年〇寛元元年十一月一日癸卯、佐々木壹岐前司泰綱相傳近江國散在所領、被召放之賜人々、是佐々木太郎左衛門尉重綱法師訴申云、泰綱輝守護權威、濫掠領當國內散在之地等、又背式目之旨、引籠犯人跡闕所云云、仍此御沙汰之間、今日泰綱捧歎狀、載父祖幷兄弟等勳功、就中信綱被優承久三年軍忠等、又云嘉禎高野山參籠居之比、云仁治遁世之時、子孫之間事、不可有不審、不便可被思食之由賜御敎書、依之彌攘餘執令往生訖、而彼領者、信綱入道承久之比、或以由緒之地、彼本主讓狀、申賜各別御下文知行、或以本所一圓之地就彼和與狀令領掌、凡式目者貞永元年也、其以後號罪跡不申事由、於令領知者、尤可爲過怠、此散在領者多是承久之比事也、式條以前也、重綱法師只爲黨泰綱不忘孝、令敵對死骸致告言、可被處罪科之由云云、

〔吾妻鏡三十五〕寛元二年二月十六日丁亥、今日有評定、條々被定其法、〇中略

一西國守護奉行事

於鎮西者、任大將家例可致沙汰、必不可依式目、其外西國者、任被定置旨可致沙汰之由、可被仰遣六波羅、

〔吾妻鏡四十〕建長二年九月十日癸酉、諸人訴論御成敗事、專守式條、不可參差之由、今日被觸仰引付幷問註所政所云云、

武藏守殿

○按ズルニ、駿河守、武藏守殿トアルハ、主客顛倒セシモノナラン、

〔高祖遺書六〕下山御消息

設ヒ日蓮ハ大過有トモ、國ハ安穩ナルベカラズ、見御式目立五十一箇條終ニ起請文ヲ書載ラレタリ、第一第二ハ神事佛事、乃至第五十一等云々、〇下略

〔太平記三十五〕北野通夜物語事附青砥左衛門事

承久ヨリ已降、武家代々天下ヲ治ン事ハ、評定ノ末席ニ列テ承置シ事ナレバ、少々耳ニ留ル事モ侍ルヤラン、夫天下久武家ノ世ト成シカバ、尺地モ其有ニ非ト云事ナク、一家モ其民ニ非ト云所無リシカ共、武威ヲ專ニセザルニ依テ、地頭敢テ領家ヲ不侮、守護曾テ撿斷ノ外ニ不綺、斯リシカ共尙成敗ヲ正クセン爲ニ、貞應ニ武藏前司入道〇北條泰時日本國ノ大田文ヲ作テ庄鄉ヲ分テ、貞永ニ五十一箇條ノ式目ヲ定テ裁許ニ不滯サレバ上敢テ不破法、下又不犯禁ヲ、〇下略

〔保曆間記〕泰時モ義時ノ跡ヲ繼テ將軍家ノ執權ス、〇中略其時泰時天下ノ事ヲ行ニ、此人實人無雙ニシテ年久シ、武家ノ政道ニ五十一箇條ノ憲法ヲ、貞永元年七月始テ定メ行フ、

〔建武式目抄〕貞永年中ニ作ラレタル式目ヲバ貞永ノ式目ト云、今ノ御成敗式目是也、

〔如是院年代記〕壬辰第八十六代四條貞永元(中略)八月御成敗式條成

〔御成敗式目〕於先々成敗者、不論理非、不能改沙汰、至自今以後者、可守此狀也、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎三年六月廿五日甲辰、神社佛寺、幷國司領家訴事、不可依關東式目之旨被定云云、

〔式目抄一〕題號ニ關東御成敗ノ式目トカケル本アリ、家ノ本ニハ關東二字ナシ、武州ノ心ニ、面ニハ關東御家人タル輩ノ爲ニ作ルトイヘドモ、底ニハ廣ク天下ニ行ハント思ヘリ、故ニ關東

書、被送遣于六波羅、駿河原左衛門尉爲使者、

〔式目抄二〕御成敗候べき條々の事、註され候狀をば、目錄となづくべきにて候を、さすがに政の體をも註載られ候ゆへに、執筆の人々、さがしく式條と申字をつけあて候間、その名こと〴〵しきやうに覺候によりて、式目とかきかへて候也、其旨を御存知あるべく候歟、さてこの式目をつくられ候ことは、なにを本說として註し載られ候由、人々さだめて謗難を加事候歟、まことにさせる本文にすがりたる事は候はねども、たゞ道理のをすところを被記候者也、かやうに兼日にさだめ候はずして、或はことの理非をつぎにして、其人のつよきよはきにより、或は御裁許ふりたる事をわすらかして、おこしたて候、かくのごとく候ゆへに、かねて御成敗の體をさだめて、人の高下を論せず、偏頗なく裁定せられ候はむために、子細を記錄しをかれ候者也、この狀は、法令のをしへに違するところなど少々候へども、たとへば律令格式は、まなをしりて候ものゝために、やがて漢字を見候がごとし、かなばかりをしれるものゝためには、まなにむかひ候時は、人の目しいたるがごとくにて候へば、この式目は、たゞかなをしれるものゝ、世間におほく候がごとく、あまねく人に心えやすからんために、武家の人への御はからひのがるべきにあらず候也、凡法令のをしへめでたく候なれども、武家のならひ、民間の法、それをうかゞひしりたるものは、百千が中に一兩もありがたく候歟、仍諸人しらず候處に、俄に法意をもて理非を勘候時に、法令の官人心にまかせて、輕重の文どもをひきかんがへ候なる間、其勘錄一同ならず候ゆへに、人皆迷惑候云々、これによりて文盲の輩もかねて思惟し、御成敗も變々ならず候はむために、この式目を註置れ候者也、京都の人々の中に、傍難を加事候はゞ、此趣を御心得候て御問答あるべく候、恐々謹言、

貞永元
九月十一日　　駿河守在

〔式目抄 一〕貞永元年八月八日、武州泰時遣舍弟駿河守重時狀云々、同九月十一日、又狀云、〇下略

〔御成敗式目追加〕御消息一通

雜務御成敗之間、同體なる事をも、つよきは申とおし、よはきはうづもるゝやうに候を、隨分精好せられ候へども、おのづから人にしたがうて輕重などの出來候はざらんために、かねて式目をつくられ候、其狀一通まいらせ候、かやうの事は宗と法令の文に付てぞ沙汰あるべきにて候に、ゐ中には其道をうかゞい知たるもの、千人万人の中に一人だにもありがたく候、まさしくおしつむれば忽まづむ、盗人夜打體の事をだにもたくみ企て、身をそんずる輩おほくのみこそ候へ、まして子細をしらぬものゝ沙汰しをきて候はむ事を、時にのぞみて法令にひき入て勘候はむは、宍穴を堀たる山に入てしらずしておちいらんがごとくに候はん歟、このゆへにや候けん、大將殿〇源賴朝御時、法令をもとめて御成敗など候はず、代々將軍の御時も又其儀なく候へば、いまも彼例をまねばれ候也、所詮從者主に忠をいたし、子は親に孝あり、妻は夫にしたがはゞ、人の心のまがれるをばすて、直をば賞て、自土民安堵のはかりことにや候とて、かやうに沙汰候を京邊には、定て物もしらぬゑびすどもの書あつめたることゝて、わらはるゝ方も候はんずらん、はゞかり覺え候へども、兼てさだめられ候はでは、人にしたがふことのいできぬべく候故に、かく沙汰候也、關東の御家人、守護所地頭には、あまねくひろうして、此心をえさせられ候べく候也、且書うつして守護所へ面々くばりて、其國中の地頭御家人どもに、仰ふくめられ候べく候、これにもれたる事候はゞ、追くはうべきにて候也、あなかしく、

貞永元
八月八日　　武藏守泰時判

駿河守殿六波羅陸奥守重時 于時駿河守、號極樂寺入道

〔吾妻鏡 二十八〕寛喜四年〇貞永元年九月十一日、武州以五十箇條式條〇式目抄所引吾妻鏡作五十一箇條相副和字御

ヲ本尊ニカケタル心ハ、十三人各一尊宛タノミ申スト也、今生ノ愚癡ヲテラシタマハヾ、五十一箇條ノ篇目ニ付テ非道ヲ存ジヨラジトタノミ奉リ、サテ又沙汰ニヲイテ最負ヲ存ゼヾ諸ノシツナクバ、後生モヲナジ蓮臺トヲガミ申サレテカクル本尊也、拜殿ノウラニ座ヲコシラヘタルハ、諸沙汰ニウラヲモテナク取ヲコナウベシトノアテガイ也、物ゴトニ萬事表裏ヲエラブベキ事也、

〔慶長見聞集十〕湯島天神御繁昌の事

鎌倉殿御成敗の式目のをく書起請文に、諸神をのせらるゝ事、梵天は三界の主也、帝釋は欲界のしゆごたり、四大天王はしゆみの四州をつかさどる主也、總じて日本國中六十餘州大小の神祇と有は殘さゞる儀也、殊には伊豆箱根兩所權現、三島大明神、此三社は關東の總社、八幡大菩薩は關東武士の氏神、天滿大自在天神は鎌倉の鎭守なるが故也、總て起請文に、其所のちんしゆ氏神を入事定れる法也、

〔吾妻鏡二十八〕寬喜四年〇貞永元年八月十日、武州令造給御成敗式目被終篇、五十箇條也、〇式目抄所引吾妻鏡作五十一箇條今日以後、訴論是非固守此法可被裁許之由被定云云、是則可比淡海公律令歟、彼者海內龜鏡、是者關東鴻寶也、元正天皇御宇養老二年戊午、淡海公令撰律令給云云、

〔式目抄一〕凡書ヲ作スルニ、名目、卷軸ノ數等皆法象アリ、〇中略此式目ハ五十箇條ニモセズシテ、五十一箇條ニスル事、豈其故ナカランヤ、唯淨裏書ニモ此子細ヲシルサズシテ、武州禪門モ大賢ノ人也、筆者モ才學ノ者也、イカサマイハレアリトバカリカイタリ、此義一ノ口傳也、推古天皇御宇ニ、上宮太子初テ十七箇條憲法ヲ作リ玉ヘリ、是日本ニ於テ法令ヲ定ル書ノ初也、律令格式皆是ヨリ後ノ作也、〇中略コノ十七ヲ、天ニ十七、地ニ十七、人ニ十七アテヽ、五十一箇條トスル也、

大田玄蕃允三善康連
後藤左衞門少尉藤原朝臣基綱
二階堂民部大夫行盛沙彌行然
矢野對馬前司散位三善朝臣倫重
町野加賀守三善朝臣康俊
二階堂隱岐守行村沙彌行西
中條前出羽守藤原朝臣家長
三浦前駿河守平朝臣義村
大外記攝津守中原朝臣師員
北條武藏守平朝臣泰時
同相模守平朝臣時房

〔式目抄 六〕此式目制作始、貞永元年五月十四日也、或說曰、貞永元年七月十日己丑齋、爲表政道無私、召評定衆、連署起請文、其衆爲十一人、相州時房武州泰時加兩人十三人也、爲理非決斷職猶令加署判於此起請給云々、奧ノ官氏等ハ執筆書之、名字ハ其主自書之、

〔式目抄 六〕或抄、此式目ノ五十一箇條ノ諸沙汰ヲ始トシテ、モレタル沙汰マデモ、自今以後ヒイキヘムハ頗ヲ取行フマジキト云起請タリ、サル程ニ、七月貞永元年ニ起請書テ、八月ニ式目ヲアマレタリ、起請ノ座ニハ、鶴岡ノ八幡ノ拜殿ノウラノカタニ、アタラシキ座ヲカマヘテ、十三佛ヲ本尊ニカケタテマツリ、泰時時房ヲ始テ、アメウシノ血ヲスヽリ、壇ヲバ鳥居ノ外ニツキテ牛ヲウヅミタリ、カクノゴトクセラレタル子孫トシテ、今モ諸沙汰ニヒイキヲスベキハ神罰ヲソロシキ事也、先々諸侍トシテ、式目ノコトハリヲモ存ゼザルニモ相似タルベシ、○中略十三佛

故ハ公家ノ式條ヲ憚ニヨテ也、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜四年〇貞永元年七月十日、爲表政道無私召評定衆連署起請文、其衆爲十一人、

攝津守中原師員　前駿河守平義村　沙彌行西隱岐守

前出羽守藤原家長　加賀守三善康俊　沙彌行然民部大夫

左衛門少尉藤原基綱　大和守三善倫重　玄蕃允同康連

相模大掾藤原業時　沙彌淨圓左兵衛尉

相州時房〇北條　武州泰時〇北條　爲理非決斷職、猶令加署判於此起請給云云、

〔御成敗式目〕起請

御評定間理非決斷事

右愚暗之身、依了見之不及、若旨趣相違事、更非心之所曲、其外或爲人之方人、乍知道理之旨、稱申無理〇理一本作道之由、又爲非據事號有證跡、爲不顯人之短、乍知子細付善惡不申之者、事與意相違、後日之紕繆出來歟、凡御評定之間、於理非者不可有親疎、不可有好惡、只道理之所推、心中之存知、不憚傍輩、不恐權門可出詞也、御成敗事切之條々、縱雖不違道理一同之憲法也、設〇設一本作讓雖被行非據一同之越度也、自今以後、相向訴人引其緣者、自身者雖存道理、傍輩之中以其人之說、致聊違亂之由有其聞者、已非一味之義、殆貽諸人之嘲者歟、兼又依無道理評定之庭被弃置之輩、越訴之時、評定衆之中被書與一行者、自餘之計、皆無道之由、獨似被存之者歟、條々子細如此、若雖爲一事、存曲折令違犯者、梵天帝釋、四大天王、總日本國中、六十餘州大小神祇、別伊豆筥根兩所權現、三島大明神、八幡大菩薩、天滿大自在天神、部類眷屬神罰冥罰、各可罷蒙者也、仍起請狀如件、

貞永元年七月十日

齋藤左兵衛尉長定　沙彌淨圓

佐藤　相模大掾藤原業時

〔新抄〕文永二年正月十日庚辰、有撰格式沙汰、

〔弘安禮節〕弘安禮節撰者

一條前關白（内經） 花山院前右大臣入道（家定） 二條大納言入道資季

意見之人數

（二條）右大臣師忠 （花山院）入道前左府定雅 （九條）前右府忠教 （轉法輪）前内府公親

（近衞）内大臣家基 儀同三司基具 （二條）入道大納言資季 （甘露寺）帥大納言經任

（土御門）大納言定實 前大納言雅言 權中納言實多 （吉田）中納言經長

春宮大夫實兼 皇后宮大夫公孝 民部卿資宣 按察使賴親

大藏卿經業

上北面

（近衞殿）宗成朝臣 （一條殿）則任朝臣 （九條殿）以隆朝臣

弘安八年十二月廿二日定置給、非私用云々、評定之後、大藏卿經業清書之、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜四年（○貞永元年）五月十四日甲午、武州（○北條泰時）專政道給之餘、試御成敗之式條之由、日來内々有沙汰、今日已令始之給云云、偏所被仰合玄蕃允康連也、法橋圓全執事、是關東諸人訴論事、兼日被定法、不幾之間、於時縡亘兩段、儀不一揆、依之固其法、爲斷濫訴之所起也、

〔式目抄〕一此ニ御ノ字ヲ置心ハ、將軍ノ御成敗ニテ私ノ義ニアラザレバ也、實ハ泰時ガワザナレドモ、臣トシテ法ヲ定ムベキニアラザレバ、將軍ノ御成敗ト面ニアラハシテ見センタメニ、御ノ字ヲ置也、○中略成トハ善ヲナスヲ云、敗トハ惡ヲヤブルヲ云、善事ヲバ成、惡事ヲバ敗ルヲ成敗ト云也、○中略式目ノ式ハ法也、尙書ニ百官承式、孔曰式ハ法也、式目ハノリノ名トヨム、法式ノ名目也、目ハ節目條目也、五十一箇條ノ條目ヲ指也、最初ハ式條ト號ス、後ニ式目ト改タリ、其

編追加アリ、コハ御成敗式目追加ノ諸本ニ在ル所ノ法令、及ビ貞永式目前後ノモノヲ分類彙聚シタルモノナリ、以上ヲ鎌倉時代ノ政書トス、

建武式目ハ、建武三年ニ、僧是圓等、足利尊氏ノ諮問ニ答ヘテ制定セシ所ナリ、篇目凡テ十七條アリ、後世武家ノ法律トシテ、貞永式目ト駢稱セラル、註釋書ニハ、清原良雄ノ建武式目抄アリ、次ニ建武以來追加アリ、コハ御成敗式目追加ト同ジク、亦御成敗式目ノ追加ニシテ、建武以來ノ法令ヲ聚メタルモノニテ、建武式目ノ追加ニハアラズ、次ニ新加制式アリ、大日本史ニハ、建武式目ト同ジク僧是圓等ノ編スル所ト爲シ、尊氏コレヲ施行セリト記シタレドモ、此説未ダ遽ニ信ズベカラザルガ如シ、以上ヲ足利時代ノ政書トス、

早雲寺殿二十一箇條、信玄家法、長曾我部元親百箇條、朝倉敏景十七箇條ハ、皆足利季世ノ亂離ニ際シ、群雄各自ニ其家法ヲ定メタルモノニシテ、其範圍ハ元ヨリ分國ニ限レルモノナレドモ、幕府政令ノ行ハレザリシ時代ニ在リテハ、幕府ノ政令ト相並ベテ、當時ノ法律ト看做サザルベカラズ、

織田氏ノ關東法令十五箇條、又豐臣氏ノ六箇條、及ビ九箇條ノ法令ニ至リテハ、極メテ不完全ナリト雖モ、亦天下ノ法度ト爲サザルヲ得ズ、

〔玉蘂〕建暦二年三月廿二日、被下新制宣旨廿ケ條云々、追可尋入、有眞名假名新制、可書入、○宣旨井家中新制略、

〔續史愚抄龜山〕文應二年○弘長元年五月十一日壬申、新制廿一箇條或作二十箇條宣下、年曆類

〔公家新制四十一个條〕弘長三年八月十三日　宣旨

一可興行伊勢幣事○中略

藏人頭大藏卿藤原光國奉

古事類苑
法律部十七
中編
政書

鎌倉足利時代ノ政書ハ、朝家ニアリテハ、建暦宣旨、弘長新制、弘安禮節等アリ、武家ニアリテハ、御成敗式目ヲ以テ首トス、御成敗式目一ニ貞永式目トイヒ、貞永元年ニ武家成敗ノ憲法トシテ、北條泰時ノ制定セシ所ナリ、條目凡テ五十一箇條アリ、主トシテ武家ノ爲ニ設ケタルモノニテ、守護、地頭、御家人等ノ心得、財産相續ノ方法ヲ示シ、訴論裁斷ノ標準ヲ立テタルモノナリ、此式目ハ、啻ニ北條氏代々恪守セシ法タルニ止ラズ、降リテ足利氏ノ時ニ至リテモ、猶ホ前代ノ遺法ト稱シ、永ク政道ノ準的ト爲シタリ、特ニ吏曹ノ輩毎ニ之ヲ講ジ、其說ニハ往々秘授口傳ト稱スルモノアリ、德川氏ノ時代ニ及ビテハ、或ハ之ヲ以テ敎訓書ト爲シ、兒童ノ讀本ニ資シタル事アリ、以テ此書ノ當時ニ貴重セラレシヲ知ルベシ、此式目ヲ解釋セシモノニハ、淸原宣賢ノ式目抄最モ備レリ、又式目抄ト同名異書ナル、御成敗式目抄ト云フモアリ、其他御成敗式目註、式目聞書等、足利時代ニ成レルモノ甚ダ多ク、德川時代ニ至リテモ、頭註、拔書、繪抄ナドノ類頗ル夥シ、

御成敗式目ノ出デヽ後ニ、新式目アリ、弘安七年ノ式目三十八條ヲ載セ、附スルニ式目數十件ヲ以テセルモノナリ、又御成敗式目追加アリ、コハ幕府ガ時々發シタル法令ヲ聚メタルニテ、追加トハ貞永ノ式目ヲ本條トシテ名ヅケタルナリ、諸本アリテ條數同ジカラズ、又新

古事類苑

法律部十七

中編

政書

二罪俱發

養君爲大將軍、欲奉度相州云云、

〔關東評定傳〕「一」正嘉二年八月十六日、放生會畢、及昏於建長寺前、射殺伊具四郎入道、依嫌疑、諏方刑部左衞門入道被召預氏信、平左衞門尉俊基、康頼法師孫、牧左衞門入道等、同意露顯、九月二日、諏方斬罪、俊基、牧等遠流、俊基者、爲公人之間、殊遣硫黃島、相州禪門〇北條時賴故令糺詳給、科斷之法、世以爲美談、

〔看聞日記〕應永廿三年十一月廿五日、抑聞押小路亞相〇足利義嗣反逆之企露顯之間、敎高朝臣加賀國右佐入道持光以下三人被流罪、於途中可被誅云々、語阿被糺問之間、武衞管領赤松等與力之由白狀申、然而諸大名事、中々不及沙汰云々、　廿五年三月十二日、聞日野辨入道持光、去月十三日、於配所加賀國被誅、押小路亞相禪門叛反事、持光書回文、依重科被討云々、山科中將敎高朝臣、同卅日配所加賀被斬云々、

〔後愚昧記〕應安四年
八幡宮造替條々、前内大臣定申云、〇中略
梁清法印罪科事〇中略
神體奉安置之間、違例尤多、神寶無左右焚弃之云々、頗爲重事哉、恰給不及奏聞、太以自由者、訪之憲章、罪條不輕歟、二罪以上俱發、以重論云々、早課法家可被勘決哉、然者須令解却所職歟、此上宜在勅斷矣、

共犯

藏主ヲ既ニ成太上皇帝之位、引率凶徒、栖籠山中堂、同廿五日、山徒率官軍攻中堂、金藏主、日野殿討死矣、主上〇後花園移近衛殿、寶劒ハ清水堂後門ニ書銘捨之、卽禁裏ヘ召シテ被崇、

〔管見記〕嘉吉三年九月廿八日、右大辨宰相、〇資親今日於八條河原被切之、子息小冠八歳云々同被誅云々、其外召人四十餘人、今日引出六條河原被切之了、又聞右大辨息誅戮事虛說、令安宅云々、

〔看聞日記〕嘉吉三年十月二日、抑勸修寺門跡ヘ侍所所司代大勢向、門主坊人等召捕云々、此宮小倉殿南方息也、同意勿論也、四條中納言參對面、口口聞勸修寺ヘ所司代寄來之時、坊人等口口坊人數輩被斬、門主ハ可被流罪云々、

〔吾妻鏡九〕文治五年二月廿二日甲午、被發御使雜色時澤於京師、伊豫守〇源義經逐電之後、御沙汰次第頗以寬宥之間、人猶可事凶惡、尤可及急速之御沙汰之趣、被申之云々、〇中略一類經卿〇藤原同意義顯〇義經別名之臣也、可被解官追放之由、先度言上畢、而雖有勅勘之號、于今在京、鬱訴相貽事、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年〇建保元年二月十五日丙戌、千葉介成胤生虜法師一人進相州、〇北條義時是叛逆之輩中使也、信濃國住人青栗七郎弟、阿靜房安念云云、　十六日丁亥、依安念法師白狀、謀叛輩於所々被生虜之、所謂一村小次郎近村、信濃國住人、匠作被領之、籠山次郎、同國住人、高山小三郎重親領之、宿屋次郎、山上四郎時元領之上田原平三父子三人、豐田太郎幹重領之園田七郎成朝、北條三郎時綱領之狩野小太郎、結城左衛門尉朝光領之和田四郎左衛門尉義直、伊東六郎祐長領之和田六郎兵衛尉義重、伊東八郎祐廣領之澁河刑部六郎兼守、安達左衛門尉景盛領之和田平太胤長、金窪兵衛尉行親領之礒野小三郎、小山左衛門尉朝政領之此外白狀云、信濃國保科次郎、粟澤太郎父子、靑栗四郎、越後國木曾瀧口父子、下總國八田三郎、和田、奧田、太同四郎、伊勢國金太郎、上總介八郎甥、臼井十郎、狩野又太郎等云云、凡張本百三十餘人、伴類及二百人云云、可召進其身之旨、被仰國國守護人等、朝政、行村、朝光、行親、忠家奉行之云云、此事被尋濫觴者、信濃國住人泉小次郎親平、去々年以後企謀逆、相語上件輩、以故左衛門督殿尾張中務

くみし侍しぞあさましき、其子右大辨相公〔○有光子資親〕は曾存知せざるよしを陳じ申けれども、つゐにうしなはれぬ、山上には衆徒使節等、各馳向あひだ、宮〔○金藏主〕以下、或はうたれ、或は自害すとぞ、ふしぎなりし事也、

〔東寺長者補任〕嘉吉三年九月二十三日、子剋大内悉燒亡、東西棟門計殘、付火也、其夜近衞殿御幸、寶劒内侍所ハ三條殿取出被申進上之、神璽ハ此時ヨリ不見云々、〔○中略〕三百人計亂入、付火之間、其後糺明之時、五十三人頸切之、殘者共山中堂籠之間、山門又押寄、大將南方高秀也、頸取之、其後日野東洞院親子〔○有光〕搦捕切之、同意之人也、〔○又見東寺執行日記〕

〔看聞日記〕嘉吉三年九月廿三日、夜半許、猥雜燒亡云々、有俊朝臣告之、予平臥起出之處、禁裏云々、寢殿へ走出見之、已清涼殿炎上、仰天失心神、大事之本尊樂器等欲運出、御乳人走來申、惡黨三四十人許、清涼殿へ亂入、常御所へ入、御所樣〔○後花園〕ハ未成御寢、親長季春、御前祇候、晝御座御劒被召、儀仗所へ逃御、大納言典侍取劒璽逃出之處、凶徒奪取、無力被取て、女中右往左往へ逃出、御乳人も小袖はがれて逃出、御所樣御行衞も不知之由、泣々申、心神惘然失東西、有俊朝臣、忩他所へ可有御出之由申之間、乘輿東門より逃出、宮御方、女房之樣にて步行、若宮二條奉抱、御喝食兩所、南御方女中走出、男共御共、持經朝臣宿所へ行、留守之御所にも大勢馳參警固、騷動凡無言計、　廿四日、抑南方謀反大將、號源尊秀、其外日野一位入道〔○有光〕與力之惡黨數百人、山上へ登て奉成臨幸之由披露、中堂ニ閉籠、三千之衆徒ヲ相語之由、山門使節注進、此外、公家人諸大名〔○細川、山名〕同心、廻文ニ加判形云々、　廿六日、資親卿子息小冠も被召捕云々、　廿七日、日野家人其外朝敵共、於所々召捕、或籠舍、或則誅云云、世之物言、夜々物忩無言計、　廿八日、資親卿於六條河原被刎首、其外召人五十餘人被斬、〔○南方於山門召捕者、日野侍等也〕

〔天地根元歷代圖〕嘉吉三年九月廿三日、日野殿〔○有光〕謀反、禁裏へ夜討放火、南帝ノ一族取立テ、金

召取、於伊勢宿所及究問候、雖然同心輩不存知間、不及白狀候、京極加賀入道申沙汰云々、希代題目歟、若又自餘重罪在之歟、不審々々、

〔滿濟准后日記〕永享四年十一月七日、竹田千阿物語云、中條入道、去月歟參洛處、於尾張國被打云々、老體至極、春秋八十五歲云々、於道場自害云々、若黨三人同自害、中間一人同前云々、九歲孫同道參洛處、祖父自害ヲ見テ、我モ自害セント申間、祖父入道自害ノ刀ヲ與了、腹ヲ切ラントスル處、又守護代織田、是マデハ非上意之間、不可然由申止之了云々、見者共流涕云々、此老入道被切腹事、當御代不及參洛、子息判官計、在京奉公之間、緩怠心中故云々、自餘儀定在之歟、不分明、

○按ズルニ、是ハ幕府ニテ中條(名闕)父子ノ舊罪ヲ追咎シテ、其父ニ死ヲ賜ヒ、其子ヲ逐ハレシナリ、

〔看聞日記〕永享七年五月十六日、抑山門之罪科人、座禪院、伊勢國隱居、於やう田被召捕京上、昨日被誅云々、二十三日、聞座禪院事、伊勢國人長野搦取、侍所ニ渡、於相國寺延壽堂、一夜被糺問、悉白狀申、其後被刎首云々、同宿一人(圓明子)同被召捕被籠舍、依諸大名意見被斬云々、圓明ハ平泉寺隱居之由白狀申、仍甲斐ニ被仰、越前下向可退治云々、六月三日、抑座禪院子、平泉寺隱居之由、先日座禪院被誅之時白狀之間、被仰甲斐討手ニ罷下云々、而平泉寺長吏搦取參洛云々、圓明ハ熊野浦へ落下云々、又聞座禪院子平泉寺長吏不召捕、甲斐召捕上洛、聽於悲田院被斬云々、

〔續神皇正統記(後花園)〕嘉吉三年九月廿三日、今夜凶族等内裏に亂入て、一手は清涼殿にのぼり、一手は局町より攻入て放火せしむ、長刀を持たる者、玉體(○後花園)を危奉らむとせしが、目もくらみけるやらん、をどりのきてころびたりしひまのがれ出給ふとかや、密々近衞前殿下(○忠嗣)の第に行幸、劒璽は凶徒奪とりたてまつる、内侍所御辛櫃は、東門役人佐々木黑田とり出し奉る、これより凶徒は山門に取上て子細を牒送す、南方宮を取立申儀也云々、(此宮は万壽寺僧)東洞院一位入道(○日野有光)

來哉、未熟時斷命條、可宜之由治定、仍今日仰安達新三郎、令棄由比浦、先之新三郎御使、欲請取彼赤子、靜敢不出之、纏衣抱臥、叫喚及數剋之間、安達頻譴責磯禪師、(〇靜母)殊恐申押取赤子、與御使、此事御臺所御愁歎、雖被宥申之、不叶云云、

〔吾妻鏡 七〕文治三年十月五日壬申、河越太郎重頼、依伊豫前司義顯(〇義經)縁坐、雖被誅、令憐愍遺跡給之間、於武藏國河越庄者、賜後家尼之處、名主百姓等不隨所勘之由、就有風聞之說、向後云庄務、云雜務、一事以上、可從彼尼下知之由所被仰下也、

〔吾妻鏡 十三〕建久四年八月廿日甲寅、故曾我十郎祐成一腹兄弟、京小次郎被誅、參州(〇源範頼)縁坐云云、

〔吾妻鏡 十七〕建仁三年九月四日己巳、島津左衞門尉忠久、被收公大隅薩摩日向等國守護職、是又依能員(〇比企)縁坐也、

〔仲資王記〕元久三年九月十八日丙申、左大辨宰相(公定)被配流佐渡國之由有其聞、是彼卿息男、於嵯峨之邊女事之間、有濫行之聞之間、有與同之事歟云々、

〔西大寺文書 五〕定置

西大寺敷地四至内撿斷規式條々

一殺害事

永追出其身職所帶悉可收公、於住屋者、敗出可燒拂之、但當座口論者十ヶ年已後加許定可有沙汰也、親類者可懸六親也、(六親沙汰者當時也〇中略)

落書起請者、嘉元二年雖被制斷之、元亨三年亦被行之、開制可依時者也、

〔滿濟准后日記〕永享三年十一月十四日、院廳去十日被召取候、子細ハ去三日歟、於相國寺東被打土岐中務大輔、(大館入道息、號大館大輔、)當時遁世僧也、一向紙衣體云々、此間ハ馬方ニ歎申入最中云々、此罪科ハ、勝定院殿(〇足利義持)御代參關東云々、院廳、此大輔ト母方遠類云々、仍此間加扶持子細在之歟、依之被

所之年貢、或違背先例之率法者、雖為代官之所行、主人可懸其過也、加之代官若依本所之訴訟、若就訴人之解狀、自關東被召之、自六波羅被催之時、不遂參決、猶令張行者、同又可被召主人之所帶、但隨事體可有輕重也、

〔新加制式〕一被官人罪科懸主人否事

右被官人重科之時、猶於拘惜者、主人可懸咎、仍三ヶ年可被沒收所領半分、但為決實否、暫相拘其人者、非主人之過、然者犯科治定之時、隨咎之輕重、為主人可加成敗、若及其期、咎人逃脫之旨雖申之、主人可懸其咎也、〇中略

一被官人及攻戰其咎懸主人否事

右件被官人遂糺明令成敗者、主人不可懸其科、但无咎之旨、主從同心陳申之處、犯科露顯者、主人可懸其科也、仍三ヶ年中可被沒收所領半分、就中被官人之科、內々雖令糺明、依不一決暫雖申其旨、主人无私曲之段分明者、難謂同科乎、然者主人、果而彼被官行重科、以一禮可散其憤、

〔御成敗式目〕一依夫罪科妻女所領被沒收否事

右於謀叛、殺害幷山賊、海賊、夜討、强盜等重科者、可懸夫咎也、但依當座之口論、若及刃傷殺害者不可懸之、

〔侍所沙汰篇追加〕一親類被官人處同罪事

隨罪科輕重可懸其咎之處、悉沒收之條為不便歟、於自今以後者、有沙汰可被行之矣、

〔吾妻鏡五〕文治元年九月二日壬午、平家緣坐之輩、未赴配所事、若乍居蒙勅免者不及子細、遂又可被下遣者、早可有御沙汰歟之由被申之、

〔吾妻鏡六〕文治二年閏七月廿九日庚戌、靜產生男子、是豫州〇源義經息男也、依被待期、于今所被抑留歸洛也、而其父奉背關東、企謀逆逐電、其子若為女子者、早可給母、於為男子、今雖在襁褓內、爭不怖畏將

相模守平朝臣判

〔東大寺文書〕記錄　秦增法眼殺害造意體寬禪法橋罪科事

右件寬禪法橋者、秦增法眼殺害造意之根本之條、勝善法師白狀分明之間、爲滿寺一同之群議、解三綱職所帶之所職、悉可被改替之由申入政所上者、於住宅者、依爲東南院家御隔壁、爲院家御進止可被點召之由、先日治定事舊畢、而若椿若口重披露者、寬禪不憚寺勘、忝經廻寺邊、或稱可申開所存、或對遺息等貽欝結之由、有其聞之間、非無恐怖云々、此條如披露者、恩愛別離之歎未休之處、剰插阿黨報酬之所存之條、心勞之至、可足衆察、且童形之訴訟、難處等閑之上、寬禪法橋、爲寺官身輕忽寺命、於事不宜之間、此事披露以前加寺勘之處、重此沙汰出來之上者、罪責不輕之條、衆中僉皆存知之處、童形愁訴猶難散之由、見書狀之上者、爭無嚴密沙汰哉、所詮寬禪法橋幷子息等、於見懸于寺邊者、任法可加治罰、其時若有敵對狼藉之子細者、縱雖及殺害刃傷等事、更不可及罪科之沙汰、又云寺中云寺外、有容隱同心之輩者、可處同過之由、依滿寺衆議記錄如件、

元弘三年九月十日　年預五師代定算

〔御成敗式目〕一殺害刃傷罪科事 付父子咎相互被懸否事

右或依當座之諍論、或依遊宴之醉狂、不慮之外若犯殺害者、其身被行死罪、幷被處流刑、雖被沒收所帶、其父其子不相交者、互不可懸之、次刃傷科事同可准之、次或子或孫於殺害父祖之敵、父祖縱雖不相知、可被處其罪科、爲散父祖之憤、忽遂宿意之故也、次其子若欲奪人之所職、若爲取人之財寶、雖企殺害、其父不知之由在狀分明者、不可處緣坐、

〔御成敗式目〕一代官罪過懸主人否事

右代官之輩、有殺害以下重科之時、件主人召進其身者、主人不可懸科、但爲扶代官、無咎之由主人陳申之處、實犯露顯者、主人難遁其罪科、仍可被沒收所領、至彼代官者可被召禁也、兼又代官、或抑留本

敎書之由、弘武申請之旨、大乘院僧正被申入者也、

〔滿濟准后日記〕永享三年八月四日、以奉行飯尾肥前守被仰出、大和國平田莊(一乘院領)去年段錢事、爲總寺申處、萬歳高田以下四莊官及異議、于今不致其沙汰也、仍任寺家申請旨、兩度嚴密御敎書お被成遣了、雖然彼等曾以不應御敎書間、寺官令參洛申請樣、所詮於今者、御敎書計ニテハ、不可致沙汰條勿論也、速任先例被召下奉行人、相催國中軍勢、可令發向彼在所、若以國中勢計、退治不事行者、自京都速可被下御勢由可被仰付云々、

〔建內記〕嘉吉元年六月十八日癸未、富樫介(加賀守護也)逐電云々、日來違時宜被仰出事違背申之故云々、弟兒(三寶院兒也)可繼家歟云々、

〔新編追加(雜務)〕一所當公事對捍輩事

右支配寄子等之處、對捍之間、總領勤入之、訴申之時有其沙汰、或以一倍令辨償之、或依時儀雖被裁許、所詮於前々分者、以一倍可致辨、自今以後、其未濟之條無所遁者、以彼所領可被分付總領、但總領、寄事於左右致煩者、可被仰付穩便之輩也、依仰執達如件、

弘安七年十月廿二日

左馬權頭平朝臣

陸奥守平朝臣

〔新編追加(雜務)〕一所當公事對捍輩事

右公事等、庶子對捍之時、總領得入分、以五拾貫可分付田一町之由、先日雖被定下、爲總領無其詮之間、庶子依不憚難澁之科、急速公事及闕如歟、仍任舊例、可致一倍辨之由可被裁許、令違背者、可被分召所領也、且問狀一箇度之後、可被成一倍下知、其後令違期者、差日限可被糺返、猶令遲引者、可被收公所領之狀、依仰下知如件、

永仁二年七月五日

陸奥守平朝臣判

家歟、勅答云、無三代相續之例、閣上首可拜任之條如何、殊明年武家若公、就御元服佳例、可被仰付之由被申之上者、先被還補長興、來年可被補雅久、不背道理歟之由被思食也、但新大納言、廣橋大納言等召之、令見申狀、有被御覽誤事者、可□時宜之趣、又無子細者、可被申武家、御文案可書進云々、兩卿參入、於臺盤所前、令見兩方之文書各讀之、雖枝葉繁多、仰之趣尤也、（子細見被申狀）可被申勅定云々、 廿四日、日野前內府參內、官務事、猶可爲雅久之由被申云々、被違背勅定、可被補雅久之由、重武命事入々有不審、有莫言事、 廿五日、長興宿禰申、今度之子細、已任道理、雖可有勅許、雅久橫入事、武家御執奏之上者無力、所詮御沙汰之次第、可被下勅裁云々、

〔吾妻鏡七〕文治三年八月廿七日乙未、下河邊庄司行平爲使節上洛、又重被申京都條々、（○中略）

一所々地頭輩事

以前既面々令子細畢、若於不拘賴朝成敗輩事、隨被仰下可加治罰事、

〔吾妻鏡四十六〕建長八年（○康元元年）六月五日甲子、於御教書違背之咎者、爲令召可注進所領之由可下知之旨、所被相觸五方引付也、

〔建武以來追加〕一不應御教書輩事

背被仰下之旨之由、使節令注進者、准御定違背咎、可被召所帶三分一、（○下略）

〔建內記〕正長二年（○永享元年）七月十七日、興福寺衆徒、豐田中坊與井戶確執事、去十一日、被成制止之奉書於兩門跡了、而十日豐田中坊、已押寄井戶方及合戰、以十一日御教書、自兩門跡被加制止、更不承引之、

〔建內記〕永享三年三月十二日丙子、早旦參室町殿、（○足利義教）付大河內（赤松播磨守也）申入、多武峯與小川合戰事、大和國四鄉事、小川弘武知行之處、自多武峯勤致押領、結句去六日、率大軍寄來小川之在所、（宇多郡云云）及合戰、凡當國合戰、依御制止屬靜謐之處、違背上意候條不可然、所詮先可引退之由、可被成下御

謹上　天台座主御房

〔百練抄十二順德〕承久三年五月十五日戊戌、未刻、自一院(○後鳥羽)遣官兵、被討大夫尉光季、是陸奥守義時朝臣(○北條)背勅命、亂天下政、可被追討之由有議、依爲縁者、先被誅光季、

〔建武以來追加〕一仰詞

山門公人號負物譴責、成洛中所々之煩、剩不憚禁裏仙洞咫尺、亂入卿相雲客住宅、致種々惡行之間、被申座主宮、嚴密可有誡沙汰、曾不能叙用、彌以狼藉、違勅之坐、難遁歟、於向後者、爲武家召捕彼輩等、可被處罪科乎、

〔集古文書三十七提〕元弘三年軍制條目

入洛輩可有存知條々(○中略)

一梨本、靑蓮院兩門跡竹園可奉補之、於彼門跡方事者、諸事可相問大塔二品親王御下知、違勅之北嶺法師等者、任被仰下之交名、不廻時刻可追罰矣、

〔建武年間記〕雜訴決斷所(○中略)

一違背勅裁、拒捍國司守護上使等、構城郭及合戰輩事、

守先度御事書、固可有遵行之沙汰、

〔親長卿記〕文明四年八月十五日、依召參内、(○中略)仰(○後土御門)云、官務事、可被補雅久之由、自武家(○足利義政)被執申、此間被經御沙汰之處、如此執奏如何、明日可持參二問、可被仰談云々、　十六日、參内(直衣)參御前、長興宿禰二問、雅久陳答、於御前予讀申、仰云、今度申狀、各條目繁多也、雖然有無詮用事等、肝要閣上首二代相續事有例、(長興宿禰、於二代相續者、有子細之由申之、)三代相續之由雅久申之、(閣上首三代相續事無例、各無上首相續也、)今度晴富宿禰、依晨照宿禰讓補長興宿禰、雖爲上首、晴富宿禰被補了、前内大臣(勝光)執申了、理不盡之儀等有之云々、今度又雅久可相續之條雖無例又御執奏、(例和讒之故○中略)於申狀者、就無其理、以内奏申入武

古事類苑

法律部十六

中編

法律總載

鎌倉足利ノ時代ニ在リテハ、違勅ノ實例甚ダ乏シ、因テ僅ニ違勅ノ語アル若干ノ例ヲ此ニ收ム、又幕府ノ命令ニ背キタルモノハ、枚擧ニ遑アラザレド、僅ニ其二三ヲ擧ゲタリ、緣坐ハ、當時ノ法ハ情ヲ知ルト知ラザルトニ由リテ其罪ノ有無ヲ別ツ、卽チ情ヲ知ラザルモノハ、其妻子ト雖モ問ハザル例ナリ、

〔大夫尉義經畏申記〕追捕者、武士重代、幷諸家恪勤、○中略源平院ノ兵仗ヨリハジメ、院內、宮中守護シタテマツリ、御八講、季御讀經、第一最勝講等ノ時、警固ヲウケタマハル、三關固關、相坂、不破、鈴鹿、違勅追捕ノ者也、

〔吾妻鏡十二〕建久二年五月八日乙卯、院宣云、

被院宣偁、近江國住人源定綱、殺害日吉社宮主等之犯、罪科不輕、仍先勘罪名、雖可被行所當之罪科、勘錄可及遲怠之上、且爲增神明之威光、且依優衆徒之訴訟、於定綱者處遠流、至下手輩者可禁獄所之由、欲被宣下之間、尙任奏狀不申給其身者、不可散欝結之由、奉振神輿、濫訴帝闕、○中略仍不致裁報之間、奉振神輿、卽以歸山、違勅之上、彌添驚天聽之科、滅法之餘、更招忘神鑒之咎、○中略兼又梟惡之輩、狼戾不止者、各加同心制止之詞、宜廻衆議和平之計者、院宣如此、仍上啓如件、

四月廿八日　大藏卿宗賴奉

古事類苑

法律部十六

中編

法律總載

罪者不レ待レ時、以且斷申、其死罪者、悉待二年終一斷申、謹請二處分一者、右大臣宣、奉レ勅依レ請者、今被二右大臣宣一偁、奉レ勅於レ行二大辟一、秋冬無レ妨、而頃年有司者、至二年終一乃奏二刑書一、施行之後、計二其行程一、令レ入二春月一、以到二遠國一、宜自今以後十月初斷奏訖、但始レ自二十一月一日一、至二于十二月十日一、常行二祭事一、不レ得レ令下京官此限內決中戮刑上、

弘仁六年十一月廿日 ○又見二日本後紀、政事要略一、

行決

〔唐律疏議(三十斷獄)〕諸獄結竟、徒以上各呼囚及其家屬、具告罪名、仍取囚服辨、若不服者、聽其自理、更爲審詳、違者笞五十、死罪杖一百、

○

〔延喜式(二十九刑部)〕凡辨官所下罪人、到省付囚獄司、司卽易其徽纆、其有行決者、隨罪輕重於市若囚獄司決之、行決之日、丞錄各一人引囚獄官人幷物部丁赴向市司、便令本司喚集市人、列立司南門示衆決之、於囚獄司決者、於廳前決之、

〔延喜式(四十二東西市)〕凡決罰罪人者、官人與使相對樓前罰之、

〔延喜式(二十九刑部)〕凡流罪以下、隨發且斷、其死刑者、皆總斷十月四日申官、卽斷文令判事屬申送、

〔令義解(十獄)〕凡流移人、太政官量配、(謂量罪輕重、配其遠近、故云量配也、)符至、季別一遣、(謂太政官錄配流狀、下符刑部及國司也、)

〔令義解(十獄)〕凡決大辟罪、五位以上、在京者、刑部少輔以上監決、(謂雖是自盡之人、亦在其家監決也、)在外者次官以上監決、餘並少輔及次官以下監決、從立春至秋分、不得奏決死刑、(謂奏決者、猶云奏而決也、)若犯惡逆以上、及家人奴婢殺主者、不拘此令、其大祀及齋日、朔、望、晦上下弦、廿四氣、假日、並不得奏決死刑、在京決死囚、皆令彈正衞士府監決、若囚有冤枉灼然者停決奏聞、(謂彈正奏聞)

〔類聚國史(八十七刑法)〕延曆十四年八月甲戌、刑部省言、斷決囚徒、令有正文、順時肅殺、不合虧違、今撿前例、或過秋分節、延入立春、或輕罪之徒、禁經歲月、既乖法式、都無準的、伏請依令條、流罪者不待時且斷、其死刑者、亦待秋分年終斷奏、許之、

〔類聚三代格(十二)〕太政官符

應改申死罪期限事

右太政官去延曆十四年八月十四日下刑部省符偁、得省解偁、斷決囚徒、令有正文、順時肅殺不可虧違、今撿承前行事、或過秋分節延入立春、或輕罪之徒、禁經歲月、是既乖法式、都無準的、望請依令條、流

雲以一乘妙法奉授公家、以菩薩淨戒奉授法皇、（白河後）而忽令還俗、處流刑之條、可及豫議哉、宜在勅定、右大臣、中宮大夫藤原朝臣、定申云、大略同長方朝臣定申、爲菩薩戒和尙之者、處死罪之條爲皿宗如何、冥之照鑒、難量者歟、

勅斷

〔政事要略八十一〕非常之斷、人主專之、（名例律除名條疏文云、如特奉鴻恩、捴蒙原放、非常之斷、人主專之、獄令犯流以下條義解文引件疏文、）私問、罪輕重從勅斷乎、答考課令曰、官人犯罪勅斷有輕重者、皆依勅斷附殿、義解曰、謂官人犯罪、本罪成殿、而勅斷或輕或重者、皆依勅斷、計殿降考者、輕重任叡慮、

〔三代實錄淸和三〕貞觀元年十二月廿七日戊申、太政官論奏言、前越後守從五位上伴宿禰龍男、令從者公（〇公恐吉字誤）彌侯廣野等毆殺書生物部稻吉、前者稻吉、向太政宮、告訴守龍男犯用官物、故殺之狀、下刑部省令斷龍男罪、省稱會恩赦、直從放免、前豐後守從五位下石川朝臣宗繼、寃奪百姓財物、介外從五位下山口宿禰稻床等證之、下刑部省、省妄引赦書、擅從原免、前左馬權少允正六位上淸岑朝臣田繼少允從六位上紀朝臣令名、少屬正六位上安倍朝臣有之、從六位上麻績部淸道、史生從六位上田邊史宅主、騎士金廣主、恩智貞吉等、以私馬換官馬、省亦無所考訊、皆以赦免、刑部大丞正六位上藤原朝臣飽永少錄從七位下秦忌寸秋野、前少輔從五位上源朝臣穎、大錄從七位上布瑠宿禰道永等、從大丞丹墀眞總言、放出罪人、前日向守從五位下嗣岑王、謀殺詔使正五位下田口朝臣房富等、須詳加覆案者也、帝特降優詔曰、龍男宗繼、及左馬寮官人等所犯、年遷時變、人物改易、飽永等罪、成自眞總、情有可矜、宜申優典、並從原宥、但刑部大丞正六位上兼中判事丹墀眞人眞總、確執非法、故縱罪人、仍官當解任、嗣岑王依先斷、官當免爵、

宣告

〔令義解獄十〕凡斷罪行刑之日、（謂徒以上、結獄竟、具告罪名、是爲斷罪之日、已依律、結獄竟、徒以上、具告並罪名、違者笞卌、故杖罪以下、不入此條也、死罪行決、是爲刑行之日也、）宣告犯狀、

〔延喜式刑部二十九〕凡告囚罪名者、囚獄司引罪人就省版位、即判事屬讀示判狀、少判事以上覆問服不、

云、處以故廢祭事罪、身帶五位官當、收贖徵銅六斤、資清勘云、處違勅罪徒二年、官當、又徵銅六十斤、依格科中被任資清勘文科贖銅幷被兼命被清祉頭、上卿藤中納言、予宣下、大夫史盛仲、神祇官刑部省、本社本國等給宣旨事、依爲卒爾不成左弁官宣旨、只給書宣旨、神祇官又差進被使祐伊岐致元、大中臣公長等也、召致元被仰子細、明日早可遂被節、其後可奉幣社家也者、預信經、日來候本院、仍副院事永延雜色等所下遣也、依殿下仰、又差副馬允友宗、半夜出洛云々、

〔朝野群載十一廷尉〕勘申可着鈦左右獄囚事〇中略

不知姓王刀丸年廿一大和國人

贓物貳種

右一人盜取經典幷人物者也、勘問之處以伏已了、撿名例律云、類斷罪而無正條、說者之比附之義、亦每此彼、但除擧輕明重擧重明經之外、尙准量科題、賊盜律云、盜毀佛像者徒三年、又條云、盜不計贓而定罪名、及言減罪而輕於凡盜者、計贓重以凡盜論加一等、名例律又云、二罪以上俱發、狀以重者論、注云謂非應累者、唯具條其狀不累輕以加重者、件王刀丸已盜人物、准贓五端合徒一年、〇中略

永久三年十二月廿日〇署名略

〔清獬眼抄〕山座主明雲配流事

後清錄記云、安元三年五月廿日己未、今日前座主明雲、可被配流否事有陣定、公卿大相國、〇藤原師長右府〇藤原兼實大納言隆季中納言宗家、成範、忠親、實綱、參議朝方、實宗、實守、長方等可被流之由令定申了、

法家勘申前僧正明雲罪名之事

太政大臣、右衞門督藤原朝臣、右大辨長方朝臣定申云、法家勘所當罪狀畢、減一等配流不可及異議歟、但其罪涉謀反之由勘申之、雖理可然、事起自訴訟、爲蒙裁報催衆徒令參陣頭、其間狼藉事、若出不圖、偏難處謀反歟、雖然衆徒騷動被結構之由、既以有露顯者、豈遁霜〇霜下恐脫刑字哉、須任法被行之處、明

云、正輔致經等合戰事、不決眞僞、令勘問各證人申旨、不異正輔致經等詞、仍各罪科、暗難定申、但合戰之間兩人隨兵等共犯者、先以調度文書令下勘法家可被定行歟、左大弁、左兵衞督〇藤原公成左宰相中將等同余、右兵衞督〇源朝任申云、事旨同余詞、但前日伊勢國司召進證人等、不經勘問被返預國司了、重召問彼等隨申可被定行歟、右衞門督〇藤原經通春宮大夫〇藤原賴宗右大臣等被申云、兩人所爲共以不快、召問各身可被定行歟、權大納言〇藤原長家民部卿〇藤原齊信內大臣〇藤原敎通被申云、爲避自罪、還露人咎、其以不穩、但伊勢國司解狀云、合戰地、隔致經住宅十餘丁云々、以之知之、致經進戰歟、以調度文書令下勘法家可被定行歟、左大弁執筆、則上奏、依及深更不待裁報、右府以下退出、　十月七日辛巳、或者云、安房守正輔、左衞門尉致經等合戰罪名、令明法博士幷大外記文義朝臣勘申之由、前日被下宣旨了、而明法博士利業朝臣謗難宣旨文之由依有其聞、除利業可令勘申之由、重有宣旨云々、　閏十月廿七日辛未、參結政有政、〇中略次大臣以正輔政經等罪名勘文、加調度文書等授民部卿云、可定理非、公卿見了次第下見了、余申云、大外記文義明法博士道成等勘申、安房守正輔前左衞門尉平致經等合戰罪名事至于正輔、兩人可處絞刑者、任勘狀可被行歟、於正度致經者、所勘申各以不同也、先被問相違之由、隨各申可被定行歟、左大弁、左右兵衞督、權中納言、左右衞門督同之、春宮大夫被申云、正輔罪、兩人所勘申是同、須任結被行也、而年當朔旦、從輕可被行歟、但於致經者、文義申可處斬罪之由、道成自身不行、可處疑罪者、此事如何、已正輔襲來可損已部內之由觸國司、何偏謂疑罪哉、民部卿被申云、兩人勘申兩人罪科、須任法定申也、子朔旦競到、可被行喜慶之期若被尋行歟、右府被申云、正輔罪、任兩人勘申可被行歟、於正度致經事者、兩人所申共以不同也、理非暗難知、可從勅定之、左大弁書之、

〔永昌記〕天永元年三月十七日乙卯、早旦參殿下、〇藤原忠實爲承明日以後雜事也、其中春日預信經罪狀今日可決、本是於本院殿下政所被問注、又法家依殿下仰勘申罪名、然而公家可有奉幣、又可被宣下罪名、仍昨日所下給貫首也、隨被持參院、卽歸參、新藤中納言、又依召參會、予〇藤原爲隆讀申勘文、信貞勘

右時實、亭子院御厩舍人也、而今年三月十九日、主馬署舍人秦吉繼、爲彼院御厩舍人等、以他物被打損也者、使等撿吉繼疵、左頰二分、并唇三分、被打傷見血、又左腋下八分、皮傷見血、自餘處々有被打腫、而間同月廿日、自彼院被出件時實、仍使等勘問事由、時實圖以他物、打傷吉繼之由、進伏辨過狀已畢、

自丁縣犬養永基、年三十三、左京二條二坊戸主正六位下縣犬養宿禰房實男者、

右今年三月七日、左兵衞道吉常進愁狀云、吉常去年十月廿六日、被府使罷向伯耆國、而間件永基婚吉常妻國仁町者、仁町進申文云、已夫吉常、被差府使罷去伯耆國之間、今年正月三日夜半、件永基切破板垣、入來疑所强婚、實也者、使等勘問、永基强奸吉常妻仁町之由、進伏辨過狀已畢、

以前獄囚等罪狀勘申如件、

延喜十六年七月三日名〇略署

〔左經記〕長元四年三月十四日辛酉、相府〇藤原頼通被示云、安房守正輔、前左衞門尉平致經等合戰、證人各進之、而正輔所進者二人、是大神宮神戸郡司云々、仍前日有宣旨可拷哉不之由、令問法家官人之處、右衞門志濟通所勘申、若有犯過、解却郡司職可拷者、而別當右兵衞督源朝臣〇朝任令奏云、明法博士道成、内々令申云、雖神郡司、有犯過可拷也、而件二人者等來會合戰庭、依見其事、正輔隨證申所召也、專無身犯、有行罪過、解却所職及拷訊哉云々、此事可然歟、若不可拷訊、免件郡司等可召他證人歟、爲當且拷訊致經所進之者等、隨彼申狀可被定行歟、可定申者、相府并中宮權大夫〇藤原能信侍從中納言〇藤原資平左大弁〇藤原重尹弁余〇源經頼等議定申云、神郡司依無指犯、不可拷之由誠可然、早被恩免召他證人之後、相無可被拷訊歟、相府召頭弁〇藤原經任被奏此旨、仰云、免神郡司等、令正輔進他證人者、五月八日、甲寅參殿講論了、入夜退出別當被示云、昨日正輔致經等所進之證人、令拷問了、各所申不異内問詞并各主申詞、但且爲令奏其日記付頭弁了、經三度拷之後、可申一定歟、九月八日癸丑、參殿内等、暫右府〇藤原實資被參入、〇中略右府以安房守正輔、前左衞門尉平致經等合戰文書令見下了、余申

之狀已畢、而猶遲緩不肯行之、自今以後、宜依前件行、其政不可隔日、又須所行事條目錄、每日申之者、

寬平七年二月二十一日　民部權大輔兼右近衛少將在原弘景奉

〔政事要略八十一〕撿非違使

合犯罪人肆人

織部司物受滋生宿禰峯良、年參拾貳、（河內國澁河郡人從六位下同春山男）

中宮職舍人大初位下津守連梶取、年參拾參、（攝津國西成郡人從七位下春繼男）

酒井乙麻呂、年參拾一、（大隅國桑原郡人）

下村主白子、年參拾肆、（山城國綴喜郡人）

右目錄

一織部司物受滋生宿禰峯良犯狀事

犯用米陸拾斛參斗

充直長年錢捌拾肆貫肆佰貳拾文

准贓布壹佰參拾陸端貳丈（以五丈二尺爲端）

右織部司今年二月七日移書偁、件峯良詐稱司天安三年大粮米之內、度々受盜民部廩院米六十斛三斗、仍責過狀、副日記移送者、使等熟加覆問、峯良私受取犯用之過、承伏已畢、

一中宮職舍人大初位下津守連梶取犯狀事

鬪以他物打傷妃永峯狀

右酒部家子、今年八月十四日愁狀云、以今日酉刻許、東市油廛間、件梶取執永峯髮打伏、以他物打損者、使等熟加勘問、梶取與永峯相鬪、卽以他物打損永峯之怠、承伏已畢、

一酒井乙麻呂犯狀事（○此下有脫文）

利蔭官當除名、宗扶久吉岑二人、並近流、廣君處斬刑、武岡除名、近直徒三年、府司大監正六位上平朝臣高平、大典正七位上秦忌寸末吉、從七位下御船宿禰貞範、少典正八位下清科朝臣全棟等、追捕罪人、拷掠違法、放免自由、刑部省節級處罪、贖銅有差、是日太政官奏聞、詔曰、死罪宜減一等處之遠流、自餘依省斷焉、

〔三代實錄光孝四十九〕仁和二年五月十二日庚寅、先是石見國邇摩郡大領外正八位上伊福部直安道、那賀郡大領外正六位下久米岑雄等、發百姓二百十七人、帶兵仗圍守從五位下上毛野朝臣氏永館舍、取印匙驛鈴等授傍吏、詔遣式部大丞正六位上阪上大宿禰茂樹推問事由、刑部省斷云、安道應官當解任、當徒二年、贖銅十斤、岑雄應贖銅九斤、自餘人、節級處罪、延暦寺僧一道、右京人正六位上藤原朝臣豐基戸口俗名數直與安道同謀、還俗當徒一年、又守氏永爲安道等所圍之時、逃隱於介外從五位下忍海山下氏則館、夜聞外有數十人聲、氏永意以爲賊欲被害、介氏則卽同謀也、由是以劒毆傷氏則妻下毛野屎子、及從女大田部西子、卽奪取屎子所著之大衣一領自被逃去、刑部省斷云、依律所犯當近流、身帶從五位下、請減一等徒三年、以從五位下當徒二年、餘徒一年、以六位以下當徒一年、仍卽解見任職事、又氏永毆傷氏則妻之後、逃走隱山中、掾從七位下大野朝臣安雄、率郡司百姓三十七人捉獲氏永、打縛其身籠閉倉中、刑部省斷云、安雄應官當解任、當徒一年、所率郡司百姓、節級處斷、去年十月四日、刑部省斷文進太政官、十二月二十七日、外記覆勘、作論奏請公卿署、而正三位行中納言兼民部卿陸奧出羽按察使在原朝臣行平所執狀四條、參議右大辨從四位上兼行勘解由長官文章博士橘朝臣廣相所執狀七條、並別奏不肯連名、其所執狀事多不載、二卿別執遂不省、至是加署、卽日奏聞、詔曰、宜依省斷、

〔政事要略六十一〕別當中納言兼左衞門督源朝臣光宣偁、近者囚徒滿獄、科決猶遲、或所犯是輕、禁囚日久、或本罪既重、待斷終身、獄官之道、理不可然、因之去年十月五日、須定左右撿非違使廳、毎日行政

流、

〔三代實錄 陽成 三十六〕元慶三年十二月十五日庚子、太政官奏曰、右京人大初位下井上伊美吉直眞繼、以鉏刃毆殺井上伊美吉眞雄、紀伊國浪人當麻眞人岑吉、射殺建部今雄、刑部省覆案、並當斬刑、但馬國氣多郡人、彼國前醫師從八位上日置部是雄、無位日置部衣守、放火燒不動穀二千三(〇三、類聚國史作四字、)十八斛五斗、幷倉四、依格應格殺、佐渡國浪人高階眞人利風、鬪殺雜太團權校尉道公宗雄、及盜取高階眞人有岑財物、加茂郡人神人勳知雄、道古、今人、爲鬪殺之從、大田部志眞刀自女、服半志子女見殺不救、利風當絞刑、勳知雄、道古、今人徒三年、志眞刀自女、半志子女當杖一百、詔曰、死罪宜降一等處之遠流、徒以下罪、依去十一月二十五日詔旨免除、

〔三代實錄 光孝 四十八〕仁和元年十二月廿三日癸酉、先是右京人散位從七位下大石忌寸福麻呂、私雕官印、捺僞官符、賣官田地子穀一百五十斛、欺取其直、左兵衞阿刀澤雄、錢十二貫文、左衞門門部園部禰師麻呂、錢六貫文、刑部省斷云、福麻呂雕官印、捺僞官符、其罪當近流、欺取直錢、當遠流、相准輕重、雖有遠近、至減一等、俱是徒三年也、所犯在降前、又減一等、徒二年半、以從七位下當徒一年、又以正八位上當徒一年、餘半年徒、官當不盡其官、留官可收贖銅十斤、仍須一年之後、降先位一等、敍正八位上、又備前國上道郡人白丁山吉直、同郡人白丁秦春貞、鬪殺讃岐國鵜足郡人宗我部秀直、同郡人建部秋雄等、正五位下行權守源朝臣加斷罪以吉直爲首、處絞刑、春貞爲從、合徒三年、又謀首筑後掾從八位上藤原朝臣近成、從少目從七位上建部公貞道、左京人大宅朝臣宗永、蔭子无位在原朝臣連枝、蔭孫大初位下大秦公宿禰宗吉同謀、无加功、蔭子正六位上淸原眞人利蔭、无位藤原朝臣宗扶、前醫師少初位上日下部廣君、白丁八多朝臣久吉岑、同謀不行、前掾正六位上藤原朝臣武岡、左京人大宅朝臣近直等、率數十人、夜圍守從五位上都朝臣御酉館、射殺御酉、前遣彈正少弼從五位下安倍朝臣肱主等於太宰府、推問事由、刑部省處近成斬刑、貞道官當除名、宗永年七十、贖銅百斤、連枝宗吉二人、並近流、

越前國足羽郡人生江恒山、因幡國巨濃郡人占部田主等毆傷備中權史生大宅鷹取、幷毆殺鷹取女子、恒山等言、隨私主右衛門佐伴宿禰中庸教、毆殺鷹取女子、鬪訟律云、威力使人毆擊、而死傷者、雖不下手、猶以威力爲重罪、下手者減一等、又云、故殺人者斬、恒山田主等、隨中庸教、非因鬪爭殺鷹取女子、須以中庸爲首處斬刑、而身犯大逆、降配遠流、不更斷罪、恒山田主爲從減一等、並合遠流者、降恩詔斬刑減死一等、處之遠流、自餘並依省斷、

〔三代實錄 清和十五〕貞觀十年十月廿八日戊子、太政官論、讞奏曰、刑部省斷罪、文云、齋宮寮史生從八位上縣造富世、刃殺助正六位上藤原朝臣豐本、伊勢國司從五位上行權守藤原朝臣宜、從五位下行權介藤原朝臣(○宜以下十二字據類聚國史補)廣守、斷罪違律、前志摩守正六位上高橋朝臣繼善犯用官物、私營公田、過役雜傜、國掌秦貞雄、毆殺百姓日置福益、法官覆案、富世貞雄當斬、宜廣守贖刑、繼善遠流者、詔富世貞雄減死一等、處之遠流、自餘論之如法、

〔三代實錄 清和十六〕貞觀十一年十月廿六日庚戌、太政官論奏曰、刑部省斷罪文云、貞觀八年隱岐國浪人安曇福雄密告、前守正六位上越智宿禰貞厚與新羅人同謀反逆、遣使推之、福雄所告事是誣也、至是法官覆奏、福雄應反坐斬、但貞厚知部內有殺人者、不舉訊、仍應官當者、詔、斬罪宜減一等、處之遠流、自餘論之如法、

〔三代實錄 清和二十〕貞觀十三年十月廿三日乙丑、太政官論奏曰、越前國守從四位下弘宗王、爲百姓所訴增出擧之數、欲私其息利、左京人大初位下佐伯宿禰彌惠、僞造內印、刑部省斷曰、弘宗身卒、不更論罪、彌惠罪應絞刑、詔絞刑宜減一等、處之遠流、

〔三代實錄 清和二十六〕貞觀十六年十月十九日甲戌、太政官奏、沙彌教豐、俗々毛野豐麻呂、沙彌善福、俗名水取貞江、於丹波國船井郡、率濫僧四十餘人、殺勸學院使日奉全吉、支解其體、行火燒民屋二家、幷燒殺一女、下刑部省令覆案、並當斬刑、石見國人若杖部豐見、鬪毆殺人、當絞刑、勅宜減死一等並處遠

日、亦皇太子未即位、故延而行之、非緩也、

〔三代實錄 五 清和〕貞觀三年十月廿八日戊辰、太政官論奏曰、尾張國人敢臣繼吉、敢臣宗貞等、毆殺宗貞兄敢臣繼雄、信濃國人壬生稻主毆殺妻母刑部子刀自女、上野國人神人繼道故殺布師貞、淡路國浪人物部冬男、鬪殺錦織廣人、遣正六位上行治部少丞安倍朝臣興氏、從七位上行勘解由主典伴連貞宗等於上野國推之、自餘國司斷而言上、法官覆案、罪皆當斬、詔減死一等、處之遠流、

〔三代實錄 十三 清和〕貞觀八年十月廿五日丙申、太政官論奏曰、刑部省斷罪文云、讃岐國浪人江沼美都良麻呂、殺香河郡百姓縣春貞、春貞妻秦淨子申訴云、美都良麻呂、於春貞宅相共飲酒、言論相鬪、春貞叫曰、吾爲美都良麻呂被刺之、驚而見之、血出自左脇即死、同郡人秦成吉等與春貞美都良麻呂等同飲之人也、而相鬪之場、雖以言詞相諫、而遂不相救助、國司斷云、鬪訟律云、鬪毆殺人者絞、以刀及故殺人者斬、雖相鬪、而用兵刃殺者、與故殺同、准犯據律、合斬刑者、又捕亡律云、隣里被殺人、告而不助救者杖一百、成吉等在殺人處不助救、准律條各處杖一百、刑部省覆斷云、國斷有失、何者案律、鬪而用刃、即有害心、仍處斬刑、但不同於故殺、而引故殺及用兵刃殺等之文、此國司之謬斷也、又淨子詞云、成吉等與春貞美都良麻呂、相鬪之場、雖以言詞相諫、而遂不救、淨子聞春貞之叫、纔知被刺、然則成吉等、醉中不覺、美都良麻呂、害春貞之時、非聞告而不助、見刺而不救者也、仍改斷無罪、斷獄律云、官司斷罪、失於入者減三等、名例律云、五位及七位以上、犯流罪以下、各減一等、判斷之失、既由判官、仍正七位下行掾高階眞人全秀、正六位上行左近衞將監兼權掾藤原朝臣房雄爲首、全秀身帶七位、例減一等、合杖六十、贖銅六斤、房雄遙授、不預其事、合免其罪、從五位下行介藤原朝臣有年、爲第二從、減四等、合杖六十、身帶五位、請減一等、合笞五十、贖銅五斤、參議正四位下行右衞門督兼守藤原朝臣良繩、從四位上行皇太后宮大夫兼權守藤原朝臣良世、爲第三從、亦是遙授、合免其罪、正六位上行大目秦忌寸安統、正七位上行少目阿岐奈臣安繼、爲第四從、減六等、合笞四十、身帶七位以上、例減一等、合笞三十、贖銅三斤、

緣公事致罪、而無私曲者、疏云、私曲相須、公事與奪、情無私曲、雖違法式、是爲公坐云々、私罪條疏云、私
罪、謂不緣公事私自犯者、雖緣公事、意涉阿曲、亦同私罪者、由此案之、私者不緣公事、自犯之名、曲者雖
緣公事、意涉阿曲之謂也、相須則私與曲、二事相待之理、然則無私無曲、可爲公罪、一私一曲、不免私罪、
而永直等說云、私曲者、謂私之曲相須者、合私曲兩字爲一義、以連讀之意云々者、文義相錯、公私不分、
此說之迂、難可據信、望朝臣所執、誠爲允愜、

〔三代實錄六清和〕貞觀四年八月十七日癸丑、是日從五位下守大判事兼行明法博士讃岐朝臣永直卒、
○中略 承和十三年法隆寺僧善愷、向官告檀越少納言登美眞人直名有犯之狀、右少辨伴宿禰善男、與
參議右大辨正躬王等執論差跡、善男辨口便佞、蒙帝寵遇、遂誣正躬王等、許容善愷違法之訴、免其官
爵、先令明法博士等斷正躬等之罪、永直畏憚權勢、不肯正言、然執律私曲相須之義、大忤善男之旨、

〔三代實錄七清和〕貞觀五年五月癸亥朔、參議刑部卿正四位下兼行越前權守正躬王卒、○中略 承和十三
年法隆寺僧善愷、告少納言兼侍從從五位下登美眞人直名、爲寺檀越枉法狀、太政官加訊鞫讞之、而
時論縱橫云、正躬等爲善愷成私曲、于時從五位下守右少辨兼行讃岐權介伴宿禰善男、執律私曲相
須之義、不平、正躬等之論此事、分爭遞成矛盾、事下勘解由次官從五位下兼守大判事行明法博士讃
岐朝臣永直考之、永直考云、私曲兩字、混處一科、是相須之義也、善男確執以爲、私之與曲明是二也、當
時有識、式部少輔從五位下小野朝臣篁同善男之論、遂緣受推善愷違法訴狀、官當解任削爵一階、從
四位下行左中辨兼守大藏大輔伴宿禰成益、從五位上守右中辨藤原朝臣豐嗣、從五位下守左少辨
兼左衞門權佐藤原朝臣岳雄等、共坐此事、解官削爵、前史詳之、故不委載焉、

〔三代實錄一清和〕天安二年十二月八日乙未、太政官論奏曰、對馬島下縣郡擬大領外少初位下直氏成、
上縣郡擬少領無位直仁德等、率郡內百姓首從十七人、發兵射殺守正七位下立野連正岑、及從者榎
本成岑等、罪皆當斬、詔減死一等、處之遠流、須去十月十日以前、依式奏讞、而牽拘文德天皇、未滿三十

殊別、而松長前後殊言、公私變斷、遂云、受推一條、當稱誤失、自餘諸事、應爲阿曲、生節目於一事、分輕重於同意、欲辨公私、還增曲直、又同答云、正躬王等執論曰、善愷元進訴狀之日、副手實結解、就此等狀、年月實事既是明白者、仍撿諸辨問狀、善男問中、已有不注指年月實事之條、然則正躬王等、須當彼時、悔悟所受訴狀、已違法式、而其後明法博士等、申返訴狀之日、正躬王等、猶亦以手實結解、執爲明白之證、明是故犯、何得爲失、卽是松長自賊夫人之辭也、又以同問狀、付永直等、令決是非、其後永直等申云、諸辨問狀、彼此異執、有疑勾勘、因依訴狀勘申者、然則善男所問、固爲先覺、何稱勘發之興在永直等乎、謬妄如斯、準的何據、夫理有一途、法無二孔、今明法之家、公私異論、輕重殊執、各是自心、遞非人說、遂使視聽多疑、取捨無準、今之評議、實礙愚管、謹案名例律、私罪、謂不緣公事、私自犯者、雖緣公事、意涉阿曲、亦同私罪、準據此律、諸辨等自始受訴狀至于推問之日、其所違犯、已涉私曲、然則處私之斷、誠得其情、所見如此、不敢隱欺者、左(○左一本作右字)大臣宣、奉勅、依官議行之者、仍準所犯、以所帶一官、當徒二年、其餘如半年徒贖銅、如件、省宜承知依件徵納、

〔文德實錄 四〕仁壽二年十二月癸未、參議左大辨從三位小野朝臣篁薨、(○中略)承和九年夏六月爲陸奧大守、秋八月入拜東宮學士、其月兼式部少輔、十二年春正月授從四位下、于時法隆寺僧善愷、告少納言登美眞人直名、爲寺檀越枉法狀、訴之太政官、加訊鞫、漸將讞斷、而世論嗷々、爲善愷成私曲、由此朝廷、更論此事、延至分爭、名例律私曲相須之二義、或以爲一、或以爲二、辨官上下、還羅其網、遂令明法博士讃岐朝臣永直考之、考曰、私曲兩字、混處一科、是相須之義也、當今之事、只有一犯、不足結罪、事未斷畢、十三年五月、爲權右(○右一本作左字)中辨、新關其事、卽據律文、以爲私與曲明是二也、若私若曲、有一於此、未免其罪、而連涉日月、不肯決斷、仍上請議定私曲律義之表、並所執狀、以糺法處(○處恐家字誤)之不熟律義、明辨官之可處私罪、篁初恨此論之不平、作傷時詩卅韻、寄參議滋野朝臣貞主、後重令諸儒傍議、其文曰、被右大臣宣偁、奉勅、據參議小野篁朝臣上表、及所執律文義、定可考申、謹依宣旨、覆案律文、公罪、謂

猶不承者、自從私罪之法、而撿諸所執、既無此文、又永直等、勘僧善愷之訴狀、辨官應受推否之狀曰、正躬王等執論曰、善愷元進訴狀之日、副手實結解、就此等狀、年月實事、既是明白也、而永直等猶稱不明遂斷違法、以此觀之、勘發之興、唯在永直等、非是善男意、然則於此一事、善男幷諸辨、俱涉誤失、非緣故犯、據撿律條、可爲公罪、但自餘違法之事、雖緣公事、意涉阿曲、准法而論、皆是私罪者、官議云、今案、前答皆稱有私、加以、問僧善愷處笞卌之由、永直長道等申云、猶合處笞卌、何者、案所執辨官申上、不令俗形者、然則辨官許容、不令俗形、准律、官人百姓共犯罪、以官人爲首、仍許容之、辨官爲罪首、合處笞五十、僧減一等、合處笞卌者、既云許容、豈非挾私、然則有私之說、彼此一同、唯以未有所曲猶稱爲公罪、仍更詰難公私之律、上下失所、相須之文、僞注倒義之由、永直等覺悟、更無駮議、以此論之、既非公罪、何者、名例律云、公罪謂緣公事致罪、而無私曲者、注云、私曲相須、卽是欲顯公罪之理、更起私曲之文、私曲二字、其義猶隱、故承私曲之下、設相須之注、然則相待於私曲二事全無一者、乃名爲公罪、既云無私曲、若此之二事、互有一者不合入公坐、其文已顯明、且不公爲私、背私爲公、是公私之不雜、猶白黑之自異、然則公坐之中、何得有私、私罪之中、亦宜無公、而長道等云、有私無曲、或有曲無私、仍爲公坐者、文義俱亂、其誣已甚、其文云、私曲相須、乃成私罪者、仍案私罪之條、終無相須之句、何以無據之傳說、輙亂不疑之成文、上下失所、公私混義、是亦不通也、後經數日、永直等更進所答不盡之狀云、私曲者、謂私之曲也、相須之句者、合私曲二字爲一義、連讀之意也、今如此說者、私曲是一事、若是一事者、相須之律、終成空文、加以衛禁律云、弓箭相須、若云私之曲者、豈是弓之箭乎、擧此一謬、餘隨可知、凡相須與不相須、皆是法律之細例、且史書之中、多有此文、彼此同例、更無異義、忽出新意、强亂舊文、非但當時之惑、當貽後代之疑、加以長道等、初云私與曲二者相須乃成私罪、其後乃變爲私之曲、既云明法、豈有疑辭而前後殊論、向背異執、斯而不正者恐涉於弄法、又松長所答、理不可然、何者諸辨所受訴狀、多乖法式、而復推問之日頻致違犯、尋其意緒、皆不過資助於訴人以左右其事、然則資助之情、本來理須一同、受推之咎、故失復何

撿訴狀、直名强賣賊物、過取之屋直錢、准贓布廿二端二丈〇二丈、類聚國史作三丈、據職制律、准枉法論、合遠流、是所告之罪、鬪訟律云、告人罪皆須明注年月指陳實事、不得稱疑、官司受而爲理者、減所告罪一等、今撿諸辨所執、彼此異論、公私難辨、然尋犯由緒、此緣公事致罪、可無私曲、仍須從公坐法、自流上減一等徒三年、身帶五位已上、請減一等徒二年半、卽罪輕不盡其官、聽贖銅五十斤者、左大史伴良田連宗斷文云、諸辨須議善愷申訴者、依令、先令著俗衣、然後受訴狀、而正躬王等所執云、僧尼令雖設權俗之法、而元來未施行者、其庶務皆以法令爲本、今既設權俗之法、何更稱元來未施行、又同執云、爲備禁固處於閑奥、防其逃逸、理非資助者、凡禁人之體、庶人皆知、尊處於閑奥、可謂禁固乎、又同執云、直名於國爲奸賊之臣、於家爲貪戾之子者、又云、直名爲遁發覺、望下僧綱、自恃利口、求當訥舌、正躬等審其奸計、不許自牒者、凡設官分職、各有司存、理須任法付所司、何稱訥舌之有司破法、奪他人之職、其鞫獄之官、須置情平直、無有愛憎、而妄構異端、鍛錬成罪、斯所謂屈法申情者、又右少辨伴宿禰善男、出牒具示違法之由、而成益等所執云、於辨官推訴訟、是往古之舊貫、非昨今之新意、是以申上官蒙處分、所問者其稱舊貫事是實也、但元不識法意、從舊例有違失者、須隨赦喩之旨改正、不可承循違法之舊貫而確執不移、可謂知意故犯法、名例律云、私罪、謂不緣公事私自犯者、雖緣公事、意涉阿曲、亦同私罪者、理須依涉盜贓五十端已上從加役流上減一等處徒三年、身帶五位已上、請減一等處徒二年半、五位已上一官當徒二年、餘徒半年、贖銅十斤、令解官者、彈正大疏漢部松長斷文云、今撿成益岳雄等所執、事緣公論、情無私曲、雖所行違法、獨是公罪、但餘辨所執、尋其論緒、頗涉私曲、稽之律條、可謂私坐者、以前法家所斷如右、左大臣宣、奉勅、明法博士等斷辨官罪之公私、彼此異論、科斷不同、宜覆問執申者、仍覆問永直等、皆稱、撿諸辨所執、可謂有私、雖然未有所曲、仍處公坐、何者准律、私曲相須、乃成私罪之故者、又問松長曰、成益岳雄、同爲受推之官、而爲公坐如何、松長申云、今加覆勘、前斷有失錯之罪、更無所避、何者右少辨善男牒狀、雖論律令數條、不合受推之理、而無引明注年月指陳實事之律、若有引此律、謙彼諸辨、而

斷罪例

或書云、廿日以前、奏年終斷罪事、大臣參上、以斷罪文奏之、勅減死罪處遠流、自餘處有斷、(○處有斷、北山抄作依省)斷、大臣奉勅依例行之、

〔北山抄 十二月〕廿日以前奏年終斷罪文事

大臣參上奏之、是論奏也、(刑官以斷文付外記、外記造論奏、候之、令撿非違使可進勘奏也、)勅減死罪處遠流、自餘依省斷、大臣奉勅、依例行之、(往昔例一二度只依省斷者、第三度減死云々、死罪三度覆奏可行也、)

〔文德實錄 三〕仁壽元年十二月壬戌、太政官奏、刑部省斷罪文、舊例十一月奏之、去月有大嘗祭事、故延至今月、

〔政事要略 六十一〕別當宣偁、如聞、捕禁之徒、日而無絶、末類之者、隨亦不少、或待推鞠之問、空送居諸、或究斷決之程、難堪飢寒、遂令囚禁之輩終身命於夏臺、是則不定使局於一處、往反右(○右上恐脱左字)衛門府之所致也、況去寬平七年二月二十一日別當中納言兼左衛門督源朝臣光宣、定左右撿非違使廳不隔日可行政之由、已以明也、而年紀多積、自似解體、方今政貴簡要、還不失仍舊之蹤、事有弛張、亦盡知推斷之意、加以諸司行務、皆定其廳、至于使政、何在兩府、靜尋由緒、專非穩便、須於左右府停所行之政、以左政舍便爲使廳、毎日勤行、令無擁滯、然則涇渭之流自分、輕重之科早定、但官人相具、一如去寬平七年二月二十一日奉勅宣旨、

天暦元年六月二十九日　防鴨河使右衛門權佐齋院長官藤原朝臣成國奉

〔續日本後紀 十六 仁明〕承和十三年十一月壬子、太政官下符所司、令徵前參議左大辨正躬王、前參議右大辨和氣朝臣眞綱等贖銅、其符偁、太政官符刑部省、應徵贖銅事、從四位上正躬王應徵十斤、從四位上和氣朝臣眞綱身卒、不徵、從四位下伴宿禰成益應徵十斤、從五位上藤原朝臣豐嗣應徵十斤、從五位下藤原朝臣岳雄應徵十斤、右大判事讃岐朝臣永直、明法博士御輔朝臣長道、勘解由主典川枯勝成等斷文云、右辨官宣、法隆寺僧善愷、以違法訴狀、告少納言登美眞人直名、幷受推官人等罪勘申者、今

斷罪申覆

〔令義解獄十〕凡盗發謂、雖不獲盗人、而於被盗之家、有所損失者、亦同申送、故云盗發、其強盗不得財、既是徒以上、亦入申例、及徒以上囚、各依本犯、具錄發及斷日月、年別摠帳、附朝集使、申太政官、

〔令義解獄十〕凡國斷罪應申覆者、謂申覆重也、下條云、盗發、及徒以上、附朝集使申太政官、是皆遣使申覆也、太政官量差使人、取強明解法律者、分道巡覆見囚、謂徒以上囚、情盡未斷者也、下文云、徒罪國斷得伏辨、故杖罪以下不入此條也、事盡未斷者催斷、即覆、覆訖錄申、若國司枉斷、使人推覆無罪、國司欵伏灼然、謂欵誠也、服罪輸誠之書、是爲欵伏、即伏辨亦同也、合免者、任使判放、仍錄狀申、其使人與國執見有別者、各以狀申、若理狀已盡可斷決、而使人不斷、妄生節目、盤退者、國司以狀錄申官、附使人考、其徒罪、國斷得伏辨、謂若斷已訖、得囚服辨、及贓狀露驗者即役、不須待使、以外待使、其使人仍摠按覆、覆訖同國見者、仍附國配役、

〔令義解獄十〕凡犯罪、笞罪郡決之、謂決贖並同、其贖物留郡、錄數申國也、杖罪以上、郡斷定送國、謂斷文、并身俱送、其兵士若罪兩殺決之、若杖罪者送軍團也、在郡覆審訖、徒杖罪、及流應決杖、謂依律、犯徒應役、而家無兼丁者加杖、又累犯徒流加杖、又雜戶陵戶犯流決杖之類是也、若應贖者、謂有蔭、及老少之類也、即決配、謂決杖、及配徒也、徵贖、其刑部斷徒以上亦准此、謂依律、死罪應決杖及贖者、即准流徒之法、刑部亦得決贖、故云亦准此、其死眞決、及流眞配者、自依下文、不可准此也、刑部省及諸國、斷流以上、若除免官當者、皆連寫案、謂凡鞫獄官司、皆連鞫狀及伏辨、以成一案、更連寫之、與斷文共送官、是爲連寫案申太政官也、申太政官、按覆理盡、申奏、即按覆事有不盡、在外者遣使就覆、謂依國所斷、情理不盡、別遣專使就所在按覆、與下條覆囚使、義其不同、在京者、更就省覆、

奏斷罪文

〔儀式十〕奏年終斷罪儀

刑部省豫修解文、進太政官、外記勘定作奏、訖大臣持奏文、率參議以上、昇殿奏、刑部省乃年終、政青進止申、大臣奉勅語引退、即奏文并解文二通尾書勅語云々、一通給刑部、一通留辨官、其奏文收太政官、並捺外印、

〔延喜式十一太政官〕凡刑部省所申斷罪文者、造二通、十月四日進辨官、即日史讀申、外記覆勘造論奏、廿日以前奏聞、謂流罪以上及除免官當、若有依奏及恩降、並具狀錄、刑部解後印之、訖附辨官、一通留辨官、一通下刑部、

〔小野宮年中行事十月〕四日死刑斷文申官事

役年為剰、從笞杖入徒流、從徒流入死罪、亦以全罪論、其出罪者各如之、從輕入重、以所剰論、假有從笞十入卅、即剰入笞廿、從徒一年入一年半、即剰入半年徒、所入官司、各得笞廿及半年徒之類、刑名易者、從笞入杖、亦得所剰之罪、從徒入流者、注云、三流同比徒一年為剰、謂從徒三年入近流、或中流遠流、遠近雖異、俱曰流刑、至於配所役身、三流同有一年居作、故從徒入流、三流同比徒一年為剰、即從近流入至中流、或入至遠流者、同比徒半年為剰、若從三流入至加役流者、各計加役年為剰、但入加役流者、加常流役二年、轉加役二年以為剰罪從笞杖入徒流、從徒罪入死罪、假有從百杖入徒一年、即是全入一年徒坐、從徒流入死罪、謂從一年徒以上至遠流、而入死刑者、亦依全入死罪之法、故云、亦以全罪論、其出罪者、謂增減情狀、足以動事之類、或從重出輕、依所減之罪科斷、從死出至徒流、從徒流出至笞杖、各同出全罪之法、故云出罪者各加之、假有因犯一年徒坐、官司故入至加役流、即徒一年至三年、是剰入二年徒罪、從徒三年入至三流、即三流同比一年為剰、加役流復剰二年、即剰五年徒坐、官司從加役流、出至徒一年、亦准此、是即断罪失於入者、各減三等、失於出者、各減五等、若未決放及放而還獲、若囚自死、各聽減一等、即断罪失於入者、上文故入者、各以全罪論、失於入者、各減三等、假有從笞入百杖、於所剰罪上減三等、若入至徒一年、即同入全罪之法、於徒上減三等、合杖八十之類、失於出者、各減五等、假有失出死罪者、減五等、合徒一年半、失出加役流、亦准此、三流同為一減、減五等、合徒一年之類、若未決放、謂故入及失入死罪、及杖罪未決、其故出及失出死罪以下、未放及已放而更獲、若囚自死、但使囚死不同死由、各聽減一等、謂於故出入及失出入上、各聽減一等、即別使推事、通状失情者、各又減二等、所司已承誤断訖、即從失出入法、雖有出入、於決罰不異、勿論、言別使推事、謂充使別推覆者、通状失情、謂不得本情、或出或入、各又減二等、失入者、於失入減三等上、又減二等、若失出者、於失出減五等上、又各減二等、所司已承誤断訖、謂曹司承誤通之状、已依断訖、即從失出入法、謂若從在曹司出入法科之、並同減五等三等之例、若未決放及放而還獲、若囚自死、各聽減一等、其所司承誤已断訖者、曹司同餘官案省不覺法、雖有出入、於決罰不異、假有官戸家人、官私奴婢、本犯合徒三年、断入流罪、或從三流之法、科徒三年、各止加杖二百、刑名[illegible]有出入、加杖數即不殊者、無罪、故云、於決罰不異者勿論、若有人本犯加役流、出為一年徒坐、放而還獲減一等、合徒三年、全出加役流、官司合得全罪、放而還獲減一等、合得三年徒、今從加役流出為一年徒坐、計有五年剰罪、故而還獲減一等、若依徒法減一等、仍合四年半徒、既是剰罪、不可重於全出之坐、舉重明輕、止合三年徒罪、

〔令集解 一官位〕名例云、其本應徒已決杖笞者、則以杖笞贖直准減徒年、注云、若一年徒中、已決笞五十、即以五斤之銅減役九十日減外殘徒、各依式配役者、

〔令義解 十獄〕凡犯罪未發及已發未断決、逢格改者、謂依律、官當收贖、未断死、及笞杖未決是也、文云、未断決、若已断決者、自合依格前也、若格重聽依犯時、若格輕聽從輕法、

凡辨證已定、逢赦更翻者、悉以赦前辨證為定、謂假一夜盜大祀神御物、并於神宮側近殺人、官司意甲提推、甲款伏云、實盜神物、但不殺人、仍引丙為證、丙證分明、官司據此辨證訖、時有赦云、死罪以下皆悉赦除之、唯八虐不原、甲即更翻辭云、實是殺人、唯不盜物、亦引丁為證、丁證分明、官司猶依前信、不據後辨、如此之類、是名以赦前辨證為定、

〔令義解 十 獄〕凡諸司斷事、悉依律令正文、主典檢事、唯得檢出事狀、不得輙言與奪、

〔令義解 十 獄〕凡犯罪、皆於事發處官司推斷、(謂事發者、已被告言、其應三審者、初告亦是發訖也、官司者、受告處官司、即在京諸司、及國郡官司皆是、凡告人罪者、皆須於犯處、若不由此例者、不可受推、其路遠、及事礙者、即於隣近官司告之也、假有人紀伊國盜、還攝津國事發、即取紀伊國中估之贓、准紀伊國上布之估、於攝津國斷決之類、是爲於事發處官司推斷也、)在京諸司人、及諸國人、在京諸司事發者、犯徒以上、送刑部省、(謂先申辨官、官下刑部、凡在京諸司、除京職外、皆不得斷徒已上罪、故略准告狀、罪當徒以上者、直送刑部、不得斷勾、假有甲乙二人、共犯一年徒、乙是隨從、應減一等、決杖一百、是猶甲乙共送、既不推斷、首從未分故也、)杖罪以下、當司決、(謂若合收贖者、其官送贖司也、)(中略)其衞府糺捉罪人、非貫屬京者、(謂文云非貫屬京者、即知貫屬者京職、但犯夜之罪、衞府當日決放也、)皆送刑部省、

〔日本書紀 二十五 孝德〕大化元年八月庚子、拜東國等國司、仍詔國司等曰、(中略)又國司等在國、不得判罪、

〔令義解 十 獄〕凡犯罪事發、有贓狀露驗者、雖徒伴未盡、見獲者先依狀斷之、(謂依律共犯罪逃亡注斷也、)自外從後追究、(謂召徒伴爲追也、推事狀爲究、)

凡囚、當處長官十五日一檢行、無長官、次官檢行、其囚延引久禁、不被推問、若事狀雖可知、支證未盡、(謂支證者、支擧也、猶云擧證也、)或告一人數事、(謂假有甲云乙是殺人、強姧盜馬、即官司禁甲之類、其被告之人、亦同在禁、即次文云、被告人有數事者、是也、)乃被告人有數事者、重事得實、輕事未畢、如此之徒、檢行官司、並即斷決、

〔唐六典 十八 大理寺〕大理卿之職、(中略)若禁囚有推決未盡、留繫未結者、五日一慮、若淹延久繫、不被推詰、或其狀可知而推證未盡、或訟一人數事、及被訟人有數事、重事實而輕事未決者、咸慮而決之、

〔政事要略 八十 一〕斷獄律云、官司入人罪者、(謂故增減情狀、足以動事者、若聞知有恩赦、而故論決、及示導令失實辭之類、)若入全罪、以全罪論、(官司入人罪者、謂或虛立證據、或妄構異端、捨法用情、鍛鍊成罪、若知將有恩赦、故論決囚罪、及(及下唐律疏議有示導教令而五字)使詞狀乖異、稱之類者、或雖非恩赦、而有格式改動、或非示導、而恐喝改詞、情狀既多、(多下唐律疏議有故云之類四字)若入全罪、謂前人本無負犯、虛構成罪、還以虛構枉入全罪科、雖入罪、但本應收贖及加杖者、止從收贖加杖之法、假有入官蔭人及廢疾流罪、前人合贖入者、亦以贖論、或入官戶家人奴婢、并單丁之人、前人合加杖者、亦依加杖之法收贖、不用官當及配流役身之例、此是官司入人之罪、誣告之法不同、○之罪、依唐律當作罪與、)從輕入重、以所剩論、刑名易者、從笞入杖、從徒入流、亦以所剩論、(從徒入流者、三流同比徒一年爲剩、即從近流入遠流者、同比徒半年爲剩、若入加役流者、各計加

罪ニ就キテ申覆スベキトキハ、太政官ヨリ法律ヲ解セル使人ヲ差シ、徒以上ノ囚ノ情盡キテ、未ダ斷ゼラレザル見囚ヲ巡覆シ、催シ斷ゼシメテ即チ覆シ、覆シ訖リテ錄シテ申ス、但シ徒罪ハ國推斷シテ服辨ヲ得タルト、贓狀露驗ナルトハ、使ヲ待タズシテ即チ役ス、其外ハ皆使ヲ待ツナリ、服辨トハ即チ口供ノ事ニテ、後ニ過狀トモ云フ者是ナリ、笞罪ハ郡ニテ之ヲ決シ、杖罪以上ハ郡ニテ斷定シテ國ニ送リ、覆審シ訖ルトキハ、徒杖ノ罪、及ビ流罪中ニ配セズシテ加杖スベキ人、若シクハ有蔭老少ノ贖スベキハ、即チ決杖、配徒、徵贖ス、刑部省及ビ諸國ニテ、流以上、若シクハ除免官當ヲ斷ズルニハ、皆鞫狀ト服辨トヲ連子テ一案ト成シ、更ニ鞫狀服辨ヲ連寫シテ、斷文ト共ニ太政官ニ申ス、太政官ニテ按覆スルニ、其所斷理ニ當レバ、申奏ス、即チ事未ダ盡キザルコトアレバ、在外ハ別ニ專使ヲ遣シ、所在ニ就キテ按覆シ、在京ハ更ニ刑部省ニ就キテ覆ス、

結獄已ニ竟リテ其罪名ヲ告グルトキハ、囚獄司、罪人ヲ引キテ刑部省ノ版位ニ就キ、判事屬、其判狀ヲ讀ミ示シ、少判事以上、其服不ヲ覆問ス、行決ノ日ハ、刑部ノ丞錄各一人、囚獄司ノ官人、幷ニ物部丁ヲ引キテ市司ニ赴キ、本司ヲシテ市人ヲ喚ビ集メシメ、市司ノ樓前ニテ衆ニ示シテ之ヲ決ス、而シテ囚獄司ニテ決スル者ハ廳前ニテ決ス、年終ニ至リ、刑部省ニ斷罪ノ解文ヲ修メテ太政官ニ進リ、外記覆勘シテ奏上ス、

〔令義解職員一〕刑部省

卿一人、掌鞫獄、定刑名、謂覆審解部所鞫、與判事以上共斷定也、依獄令、在京諸司事發者、犯徒以上送刑部省、其衛府糺捉罪人、非貫屬京者、皆送刑部省、又云、刑部省斷流以上者、皆連寫案、申太政官、然則死以下笞以上、皆合推斷也、○中略○中事略大判事二人、掌案覆鞫狀、斷定刑名、判諸爭訟、中判事四人、掌同大判事、少判事四人、掌同中判事、

〔令集解官位一〕斷獄律云、凡斷罪、皆須具引律令格式正文、

斷罪

行決 [併入]

罪ヲ斷ズルニハ、具ニ律令格式ノ正文ヲ引クベキコトニテ、官司タル人、無罪ノ人ヲ判シテ有罪トシ、有罪ノ人ヲ無罪トシ、輕罪ヲ重罪トシ、重罪ヲ輕罪トスルトキハ、其故意ト過失トヲ分チテ罪ヲ科ス、是ヲ故入人罪、失入人罪、故出人罪、失出人罪ト云フ、犯罪未ダ發セズ、及ビ已ニ發シテ未ダ斷決セザルニ、朝廷ニテ格ヲ以テ舊法ヲ改ムルコトアレバ、其格重ケレバ犯シヽ時ノ法ニ依リ、格輕ケレバ其格ニ從テ處斷ス、又犯人辨證已ニ定リテ後、赦ニ遇ヒテ更ニ辭ヲ翻ストキハ、悉ク赦前ノ辨證ヲ以テ定トス、例ヘバ一夜ニ大祀神御物ヲ盜ミ、幷ニ神宮ノ側近ニ於テ人ヲ殺ス事アリテ、官司甲ノ所爲ナリト意ヒテ、捉ヘテ推問スルニ、甲款伏シテ云ク、實ニ神物ヲ盜メリ、サレドモ人ヲ殺サズトテ、乙ヲ引キテ證人トス、乙ノ證分明ナルニ因リテ、官司此辨證ニ據ル、已ニシテ赦アリテ云ク、死罪以下、皆悉ク赦除セン、唯八虐ハ原サズト、常人ヲ殺スモ多ク死罪ナレド、八虐ニハ入ラヌヲ、大祀神御物ヲ盜ムハ中流ナレド、八虐ナレバ甲更ニ辭ヲ翻シテ云ク、實ハ是レ人ヲ殺セリ、物ヲ盜マズト、亦丙ヲ引キテ證人トス、其丙ノ證ハ分明ナリトモ、官司猶前ノ款伏ニ依リテ、後ノ辨證ニ據ラザルナリ、又犯罪人、贓狀露驗ナルトキハ、徒伴ハ未ダ盡キズトモ、見ニ獲タル者ヨリ先ヅ狀ニ依リテ斷ズ、犯罪人ハ皆事發スル所ノ官司ニ於テ推斷ス、例ヘバ甲ノ國ニシテ鹽ヲ盜ミ、乙ノ國ニシテ事發スルトキハ、甲ノ國ノ中估ノ鹽ヲ以テ其上布ノ估ニ准ジ、乙ノ國ニシテ斷決スルナリ、當處ノ長次官ハ、十五日ニ一タビ囚ヲ撿行スルニ、其囚人久シク獄中ニ禁ゼラレテ、推問セラレザル等ノ事アレバ、撿行ノ官司並ニ卽チ斷決ス、盜發シタルト徒以上ノ囚トノ事ハ、國ヨリ其發セシ日月ト、斷ゼシ日月トヲ具ニ錄シテ、朝集使ニ附シテ太政官ニ申ス、國ノ斷

置テケリ、

里、三藏房、善行房、觀三房等ハ候ト比岐申
以守房申詞問成俊之處、申云、件豈守房難稱申、一人モ不候也ト申、

問注

右衛門府生清原季兼
少尉源朝臣近康
左衛門府生佐伯國忠
修理左宮城主典大志中原季盛
少尉橘賴重
藤原惟俊

〔源平盛衰記 五〕成親已下被召捕事
西光法師ヲ召取テ大庭ニ引居タリ、相國〇平清盛ハ素絹ノ衣ヲ著、尻切ハキ、長念珠後手ニ取テ、聖柄ノ刀サシ、中門ノ緣ニ立テ、西光法師ヲ一時睨テ、嗔聲ニテ、無云甲斐下臈ノ過分ニ成上、朝恩ニ誇ル餘、無誤天台座主奉流罪、剩入道ヲ亡サント申行ケル條ハイカニ、アラ希怪ヤ希怪ヤ、因也因也、スハハヤ山王之冥罰ハ蒙ヌルハト宣ケリ、〇中略入道、何如樣ニモ謀叛ノ次第委ク相尋テ後、シヤ口割テ誡ヨト宣ヒケレバ、松浦太郎高俊拷木ニ懸テ打セタメ、事ノ與ヲ尋ケリ、始ハ大ニ不知ト云ケレ共、惡口ハ吐ヌ、不落トテモ非可有、人ガ云タレバコソ、入道殿モ是程ハ知給タルラメ、去ラバイハント思ヒツヽ、休ヨ語ラント云ケレバ、拷木ヨリ下シテ、硯紙取寄テ聞之、西光有ノ儘ニゾ云ケル、執事別當新大納言殿〇藤原成親院宣トテ催レシカバ、院中ニ被召仕身トシテ、不叶ト申ベキニアラネバ、平家ノ一門打失テ、西光モ世ニアラント思テ與シテ侍キ、院宣ノ趣キ、誰カ可奉背トテ、始ヨリ終マデ白狀四五枚ニ記シテ、判形セサセテ後、高俊、西光法師ガ頭ヲ踏テ口ヲ割、重テ誡

恒正申云、召籠快順事、實仁候也、何箇日さハ慥不覺候、又妻毛一度召籠天候比岐、日數自不覺候也、

日來快順夫妻、共被搦籠天歎候ハ比志承候さ比岐申、

以恒正申詞問成俊之處、申云、快順不召籠之由、先條辨申畢、妻於パ三箇日召籠天候土比岐申、

守房

右問守房云、爲成俊被搦之由所訴申也、件子細依實辨申如何、

守房申云、搦快順之間、守房申云、快順妻於離別畢之上、法勝寺末寺內也、荒凉不可搦之由、爲加制止罷向之處、依其意趣、守房於搦取天、三日三夜凌轢仕候比志也、因之從者二人辨畢、又上牛廿頭、斤定稻三千束、大刀百腰腹卷廿領、水旱幷袴廿具、奈岐刀万柄被取畢、又庄民在家十四字か內財物搜取畢、此外前々被責取物等、注別紙進上先畢、彼在家廿四宇內、五宇被燒失畢土申、

以守房申詞問成俊之處申云、守房於パ更不搦候也、守房か成俊か從者於殺害志天候比志か、守房が舍弟僧五人が、殺害人也さ天搦天成俊仁給天候比志かパ請取天死人之代下人三人責取天、二人ハ返畢、一人ハ取天候也、庄民在家十四字の內、財物之事無實也、燒失二字が內、財物ハ守房が運取之後令燒失候也さ申、

以成俊申詞問守房之處、申云、守房が舍弟仁天、何可搦守房哉、被搦籠之剋舍弟等成恐逃去畢、必定仕天候さ比岐曾承候比志、只還迹可候也、濫行張本之輩、注進先畢、可被召問彼等也、燒失之在家二宇が宅主ハ名東御庄寄人也、依逃去、其內財物、爲自彼御庄沙汰運置他所之後、爲成被燒失候也さ申、

覆問守房云、注進之濫行張本之輩、任交名重辨申子細如何、

守房申云、成高ハ所從眷屬數多之者也、成俊ハ無勢之者也、若干勇堪之輩來集天候かパ比志、成高が眷屬さ思給候也、成高毛候さハ承候比岐、成高が男二人之內、字新二郎ハ候比岐、又大二郎紀太、藤大夫正時、六郎大夫藤榮、大夫宗追捕使、凡追捕使、三子追捕使、村二郎、草二郎、追捕使景□重包、正里、行

右問成俊云、法勝寺末寺延命院所司等、去二月十五日解狀云、請殊被裁許、爲一宮司河人成高舍弟成俊等以非道、今月十四日引率軍兵八十餘人、亂入御庄內、恣追捕供僧三昧住僧并下司住人等、令燒失庄民、令逃散子細狀、右謹撿案內、件成高等、不憚寺家之御威、私召籠三昧快順、致凌轢及數度、如此梟惡、積習而所致濫吹也、而始自供僧三昧住僧下司等迄于住人、追捕庄內之間、皆悉洲散畢、因茲爲宗院御祈、十二時法花三昧、毎日最勝講演香花燈明、十五日百味供養之勤、皆悉斷絕畢、爰成高等、不顧冥顯之恐、罪過不輕、責而有餘、若無御裁斷者、御祈禱斷絕、佛事廢亡、末寺永失歟者、件子細依實辨申如何、

成俊申云、搦取三昧快順之條、全不候事也、又搦下司守房事も、凡不候也と申す、

快順

右以成俊申詞、問快順之處、申云、大粟山住人安宗、依不慮之事、成俊とロ仕之間、安宗逃去畢、安宗ハ快順が妻乃兄弟也、因茲號彼所緣、快順之許に遣從者六人、搦快順妻之間、快順罷出天候於十三日召籠天、剝取衣裳天凌轢仕候かハ比志、爲存身命、安宗於可尋進之由出請文畢、其後安宗令遲進土天、快順が妻於遣下人六人、搦取天經九箇日免畢、其後安宗所出來也、仍成俊安宗が、牛并板等乃解文於自安宗之手責取天免畢、因之快順年來之妻於安宗仁相具天追出候畢、其故ハ此定ハ奈良如此濫吹不可絕と思給天、此女於離別畢、其後尙快順於安宗不見と天譴責仕候也、成俊が從者行里於可被召問候也、快順も妻も、共召籠候比志使ハ行里也と申、

成俊

右以快順申詞、問成俊之處、申云、快順於全一日も不召籠候也、又妻も不召籠候也と申、

秦恒正 重房從者、後與成俊爲濫汙證人、成俊召進之、

右問恒正云、成俊搦取快順身并妻等之事、依實辨申如何、必辨申セ

候度申、

慶智同寺住僧

右以朝順陳狀問慶智之處、申云、慶智ハ人乃語仁毛不候須、寺乃大衆乃驅立候比之かハ、罷登天候比之也、房一字仁ハ放火天候比岐、堂仁ハ字八口度申僧古曾唐笠仁火於付天自岸上之天堂口狐戸仁投入天候比之口度申、

復問云、汝爲大衆雖被驅立、結構之間、定有造意之首歟、件子細慥辨申如何、

慶智申云、造意之輩ハ小倉乃蓮藏房、幷石見君等仁候布、隨從之者ハ刑部君、光南房、圓禪房、常蓮房、禪門房、太郎房、正覺房、又太郎房、小口三郎度申男等候布、此外百餘人、新羅口度申所仁集會之天候比之か度毛暗夜仁候比之かハ分明仁面於不見候、僅見知天候者等於所差申候也度申、

復問朝順慶智等云、罷登之本意、若指中堂可放火之由、思企歟、件子細以實辨申如何、

朝順等申云、中堂於バ申出者毛不候、又不思寄候布、只房一字仁揚煙天、今生之意趣於散世乎度ハ上自僧正下至于小法師原皆申合天候比之也度申、

問注

右衛門府生清原季兼

少尉大江成重

藤原敦□

左衛門府生佐伯國忠

大志中原季盛

〔愚昧記〕久安二年七月十一日、問注河人成俊等申詞記、

成俊

參氏候比たま、可得名薄之由被申候比なま、本主候者波なれ暇□申曾氏古參候止波女申候比かま波、子共中仁一
人チ波可得之由被申候比かま波、於一人者可進止申氏、件剋仁見參仁波進旦候比狀其後波全不見參候
也、行眞か住所仁、四郎行正、三郎宗眞波候也、可召遣之由候波可遣召候但宇治入道殿乃舍人仁氏
候也、隨件住所波御領仁氏候也、
又字與定三郎止申者波、友員が郎等仁候、全行眞が從者仁波不候、佐佐木波仁氏見給候比叢友員死
之後仁波在所も不知給候、
又友員が被殺害候之夜、相具氏候ヶ留從者、字伊波乃源太ト申男、彼夜雖蒙疵于今存命□氏成勝
寺御領伊波庄內仁、字淸追捕使安貞之許仁候之由傳承候也、被召問件源太自申事候歟、彼安貞毛
友員が從者仁氏候也ト申、

永治二年四月三日

〔愚昧記〕康治元年五月八日問注、僧朝順等申詞記、

朝順 三井寺住僧

右問朝順云、去三月中旬、罷登天台山之由有其聞、定有由緒歟、件子細以實情辨申如何、
朝順申云、山仁罷登事、實仁候布房一字禮二万付火天、三ヶ度三井寺於被燒多流、年來之鬱於散度世年
滿寺乃僧徒乃申候比かまば、任愚意天罷登天候比ま也度申、
復問云、汝等所思企已希代之犯也、結構之輩、定有其數歟、依實可差申夾名、兼又汝爲放火之下手歟、
重辨申如何、
朝順申云、造意之首、字石見君、蓮敎房、伊勢君、金藏房等仁候布一人張本度申事ハ不知給候布、彼四
人ハ寺中仁人望候者共仁天、結構志天候也、於朝順者、雖爲寺僧非當住者、離寺□松崎仁十三年居
住志天候於、石見君が相語候比かまば當日仁曾可登山之由於ば承候比かま志ば、罷登天房一字仁ハ放火天

圓能之間、有其緣天受方理朝臣夫妻之語也さ昨辨申利世、若爲文毛知此事歟、一々慥辨申如何、圓能申云、方理宣旨、住所各異侍者禮所々天留シ受此語侍支利、相議也天所厭符事者乎令爲侍武介不知侍、亦圓能毛互不令知、又源心者本自不隔雜事之間、雖有親昵之語、非如此厭符之事、又爲文朝臣者留雖語雜事、件厭符事者不示、圓能依罷通彼宅天、方理朝臣者招取天、相語此厭符之事侍之也さ申、拷掠問妙延云、師僧圓能、依方理朝臣夫妻幷宣旨等語天奉呪詛中宮、若宮、幷左大臣之由、及厭符等乎埋置所々辨申如何、妙延申云、師弟子間留侍禮毛さ不知何事、去年冬、童子物部糸丸留絹一疋令持天來天侍者之見侍支、又圓能源心相語事者見侍支、不知何事さ申、拷掠問糸丸云、師僧圓能、作厭符天奉呪詛中宮、若宮幷左大臣之由汝爲彼童子天可知件事、依實辨申如何、糸丸申云、厭符事者又不知給、申祓祿天從宣旨宅絹一疋者持來侍支、又紅花染衣、女乃持來天侍者シ見侍支、不知何所之物、但去年十二月之間也さ申拷掠者、先是同四日內問日記、依事情同更不注載、○中略

寬弘六年二月八日　從五位上守大判事兼明法博士美麻那朝臣直節

從五位上行勘解由次官兼明法博士令宗朝臣允正

〔愚昧記〕散位源行眞申詞

右行眞申云、殺害字新六郎友員之事、全不知給候、但自本敵人仁天波、前陸奧判官郎等字源七郎道正□古曾候倍、其故波友員道正止波、共兄弟之子仁氏候仁、友員が道正が母幷弟道澄等を殺害仕畢、其後又道正波□□母幷兄友房、末高等を殺害仕候畢、如此之間、日來毛敵人仁氏候比支也、然者件道正が所爲仁哉候其本、道正毛友員毛行眞仁波甥仁氏候也、□□三郎家次波、道正が妹が夫仁氏同意者仁氏候□又行眞が子息波四人候比支也、太郎波先年死□畢、次郎守眞波、左大臣殿有○源仁御領佐佐木御庄乃下司仁氏彼殿仁候者也、三郎宗眞波、土佐國司乃許□候也、四郎行正波、去保延五年比仁陸奧判官下司佐佐木文刺、道澄波行眞が聟仁氏候比支、道澄が宅仁被到着氏候比支、爲見參仁

〔善庵隨筆〕水獄の事、（○中略）頃日落穗集追加を閲せしに、（○中略）近年の義は、（○中略）件の水牢、木馬等の義も沙汰なく罷り成り候とあるを以て見れば、亂世の頃、代官名主など、百姓の年貢未進を取り立つる私の刑具にして、公法にはあらず、

〔政事要略七十〕勘申散位源朝臣爲文、民部大輔同方理、伊豫守佐伯朝臣公行妻及方理朝臣妻、僧圓能等罪名事、

右主稅頭兼大外記播磨權介滋野朝臣善言仰偁、大納言兼皇太子傅藤原朝臣道綱宣、奉勅、散位源朝臣爲文、民部大輔源朝臣方理、伊豫守佐伯朝臣公行妻、及方理朝臣妻等、奉令僧圓能呪詛皇后、（○藤原彰子）幷厭魅敦成親王、左大臣、（○藤原道長）也、件等人所當罪名、宜令明法博士勘申者、今年二月五日勘問僧圓能等日記云、問圓能云、作厭式奉呪詛中宮若宮幷左大臣之由、依實辨申如何、圓能申云、依伊豫守公行朝臣妻、宣旨云人語（爲二位女中關白家宣旨也）奉呪詛之由、昨日被勘問之次、依實辨申先了云々、申、復問云、奉呪詛之趣、依實辨申如何、圓能申云、彼趣者、中宮若宮幷左大臣御坐之給間帥殿、（○藤原伊周）無德（爾）御坐之給（布）、世間（爾）此三箇所、不可御坐之由、可奉厭魅之趣也云々、申、復問云、此事相語之人、宣旨只一人歟、重辨申如何、圓能申云、先者民部大輔源朝臣方理（奈牟）相語侍之、去年十二月中旬比也、宣旨者、同月下旬許（奈牟）相語侍之、厭符（者）二枚也、一枚（者）度宣旨侍（支）、一枚（者）爲度方理朝臣持向彼宅、而方理朝臣他行、妻（奈牟）具依知其事（天）預侍（利）之、祿（者）紅花染褂一領（奈利）令得（天）侍之、宣旨祿（者）給（者）絹一疋也云々、申、復問云、圓能（加）外、相知此事之陰陽師幾侍之、又有驗之寺社、及可然之所々（爾）成此厭法乎、重辨申如何、圓能申云、寺社所々（爾）更不成件事、但宣旨宅（爾）侍、藤原吉道（奈牟）案内（者）知（天）侍（利）、彼宅出納春正（者）爲使雖來圓能許、案内（者）不知（也）侍（利牟）、元來僧道滿（奈牟）年來召仕彼宅之陰陽師（者）侍（止曾）己春正申侍（シ）、厭符之事（者）、相語（毛）侍（止）（志）申、復問云、方理朝臣、宣旨同比（爾）件事（を）相語云々、辨申、彼二人共相議件事（天）令爲歟、又僧源心（云々）圓能（云々）常相語件事之由、圓能（加）弟子妙延（加）所指申也、又前越後守源朝臣爲文親昵召仕

〔徒然草 下〕犯人をしもとにてうつ時は拷器によせてゆひつくるなり、拷器の様も、よする作法も、今はわきまへしれる人なしとぞ、

〔徒然草諸抄大成 十六〕此段モ〇中略皇道スヘニナリテ、惡人ヲホクシテ、古風ノ刑罰ノカロ〱トヤサシキテイスタレハテヽ、拷器ハ、今ノ木馬(キムマ)ノセメニカハリ、又ハリツケ柱(ハシラ)ハ、昔ノ笞(シモト)トイフモノナラント覺ヘテ、古風ノスタレハテタルヲ歎テカケルヨシナリ、全

〔十訓抄 九〕成方といふ笛吹有けり、御堂入道殿〇藤原道長より大丸と云笛を給て吹けり、めでたき物なれば、伏見修理大夫俊綱朝臣ほしがりて、千石にかはんと有けるに、うらざりければ、たばかりて使をやりて責べきよしいひけり、そらごとをいひつけて、成方を召て、笛えさせんといひける、本意也と悅て、あたひは乞によるべしとて、ひらにかはんといひければ、成方色を失ひて、さる事申さずといふ、此使を召むかへて尋らるゝに、まさしく申候といふほどに、俊綱大にいかりて、人をあざむきすかすは、其咎かろからぬ事也とて、雜色所へ下して、木馬にのせんとする間、成方云、身のいとまを給りて、此笛を持て參るべしといひければ、人を付てつかはす、歸來て腰より笛を抜出ていふやう、此故にこそかゝる目は見れ、情なき笛也とて、軒のもとにおりて石を取て炭のごとくに打摧つ、大夫笛をとらんと思ふ心の深さにこそ、さま〲かまへけれ、今はいふかひなければ、いましむるに及ばずして追放にけり、

〔落穗集追加 三〕秋先に至り收納の事

總て七十年あまり以前の義、諸國共に秋先に至りては、其村名主たる者の家にては、水籠、木馬、抔と申物を仕度いたし、百姓共の中に、私をかまへ、收納いたし兼る者共をば、件の水籠へ入れ、木馬にのせ、責めせたくるゆへ、收納致させ申す樣に有之處、近年の義は、在番の百姓までも正路になり、律義に收納をも致と相見へ、件の水籠、木馬等の義も、沙汰無之なるとなり、

〔源平盛衰記十六〕滿仲讒〓西宮殿〓〇源高明事

冷泉院御位ノ時、覺(ウツ)御心モナク、御物狂ハシクノミ御坐ケレバ、ナガラヘテ天下ヲ知召サン事モイカヾト思食ケルニ、御弟ノ染殿式部卿宮〇為平ハ、西宮ノ左大臣ノ御聟ニテヲハシケルヲ、能人ニテ渡ラセ給フト申ケレバ、中務丞橘敏延、僧蓮茂、多田ノ滿仲、千晴ナド寄合テ、式部卿宮ヲ取奉テ東國ヘ趣、軍兵ヲ起、即〓位進セント、右近ノ馬場ニテ夜々談議シケル程ニ、滿仲心替シテ此由ヲ奏聞シケルニ依テ、西宮殿ハ被〓流罪〓給ニケリ、敏延ハ播磨國ヲ賜ラン、蓮茂ハ一度ニ僧正ニナラントテ、斯ル事ヲ思立ケリ、〇中略僧蓮茂ヲバ撿非違使召捕テ、拷器ニ寄テ謀叛ノ意趣ヲ責問ケリ、餘ノ難堪サニ、蓮茂音ヲ上テ、南無歸命頂禮金剛瑜伽秘密教主胎金兩部諸會聖衆傳燈阿闍梨耶龍猛龍智、助給ヘ〳〵ト唱ヘケレバ、上乘密宗ノ力ニテ、拷器モ笞杖モ折碎テコソ失ニケレ、

〔源平盛衰記五〕成親已下被〓召捕〓事

西光ハ、口ハ少モ滅ズ、去テ其ハ左ハ無リシ事カ、彼ハ有シ事ゾカシ、哀足手ダニモ安穩ナラバ、報答申シテント云ケレバ、入道〇平清盛何如樣ニモ謀叛ノ次第委ク相尋テ後、シヤ口割テ誡メヨト宣ヒケレバ、松浦太郎高俊拷木ニ懸テ打セタメ、事ノ興リヲ尋ケリ、

〔宇治拾遺物語二〕今はむかし七條にはくうちありけり、みたけまうでしけり、參りてかなくづれをゆいてみれば、まことの金の樣にてありけり、うれしく思て、件の金を取て、そでにつゝみて家にかへりぬ、〇中略これをはくにうつに、七八千枚にうちつ、〇中略別當おどろきて、はやく河原に出ゆいてとへといはれければ、撿非違使どもかはらにゆいて、よせはしほりたてゝ、身をはたらかさぬやうにはりつけて、七十度のかうじをへければ、せなかは紅のねりひとへを水にぬらしてきせたるやうに、みさ〳〵となりてありけるを、かさねて獄に入たりければ、わづかに十日ばかりありて死にけり、

名例律云、稱衆者三人以上、○中略疏云、稱衆者、斷獄律云、七位以上犯罪不拷、據衆證定刑、必須三人以上、始爲衆證、但稱衆者准此文、

〔左經記〕寛仁四年五月廿六日丙子、上野前司定輔、上道之間、於粟津邊前々司維衡郎等之鬪亂、維衡郎等等六人之中、壹人被疵死去、二人被疵未死、一人全被搦、二人脫身逃去、定輔與維衡共有愁、定輔無故害維衡從者之由有仰云々、　六月四日甲申、參內、頭中將(源朝任)○被語云、右衛門尉平時通、上野守定輔之迎臨粟津、射前前司維衡郎等之由有愁、仍被尋實否之間、時通進無實之由申文、(證人右近府生公忠、左近府生時賴等也、)余結件申文、召右衛門尉紀宣明下給、可令問證人等之由仰了云々、及晚歸宅、

〔令義解獄十〕凡杖皆削去節目、(謂笞杖亦准此也、)長三尺五寸、訊囚及常行杖、大頭徑四分、(謂雖訊囚笞罪、猶用四分杖也、)小頭三分、○中略拷訊者、背臀分受、須數等、(謂假犯杖九十、應拷三度者、每拷臀背分決十五之類、)

〔明律一獄具圖〕訊　大頭徑四分五釐、小頭徑三分五釐、長三尺五寸、以荊杖爲之、其犯重罪贓證明白、不服招承、明立文案、依法拷訊、臀腿受、

〔和漢三才圖會二十二刑罰〕訊杖　以荊條爲之、拷訊臀腿受、用竹篦、重過二觔矣、其初制長三尺五寸、(大頭徑四分五釐、小頭徑三分五釐、)

訊杖

〔西宮記臨時十〕與奪事(附臨時着鈦例并放免役畢四人事)

或記云、寛和二年五月十七日、着鈦政、○中略着鈦十六人(左八人、右八人)之中、不計贓盜人、取領宇佐宮神馬之者也、又決杖原免之者一人、强盜者知主盜贓而藏者也、爲拷件人立拷器、其儀去版南一許丈立之、第一尉召看督長仰云、召其姓其丸、(世、)召犯人就版、尉召看督長仰云、犯人寄器、(與、)看督長申杖數、尉稱宥給之詞、如廳拷儀、看督長隨身長二行陣列如常、

ゾ被流ケリ、ソレハ昔ノ事也、近キ世ニハ無様、情ナシトゾ申ケル、

〔日本書紀十應神〕九年四月、遣武内宿禰於筑紫、以監察百姓、時武内宿禰弟甘美内宿禰、廢兄卽讒言于天皇、武内宿禰、常有望天下之情、今聞在筑紫、而密謀之曰、獨裂筑紫、招三韓令朝於己、遂將有天下、於是、天皇則遣使以令殺武内宿禰、時武内宿禰歎之曰、吾無貳心、以忠事君、今何禍矣、無罪而死耶、〇中略竊避筑紫浮海、以從南海廻之、泊於紀水門、僅得逮朝、乃辨無罪、天皇則推問武内宿禰與甘美内宿禰、於是二人各堅執而爭之、是非難決、天皇勅之令請神祇探湯、是以武内宿禰與甘美内宿禰、共出于磯城川濱、爲探湯、武内宿禰勝之、便執横刀、以毆仆甘美内宿禰、遂欲殺矣、天皇勅之令釋、仍賜紀伊直等之祖也、

〔中右記〕永久二年六月廿六日、行重資淸來、令問親賴從者近安申云、件强盜事、五月中旬、下向攝津之次、親賴申云、本主肥前守所爲歟ミ申由所承也、卅日、又差資淸、遣爲義、召公政事度々在伊豆國之由雖申上、遂不進、慥可申切之由仰遣之處、已上洛之由承候存、〇存恐衍字今七八日可相待者、仰云、然者可相待歟、親賴從者近安申詞、勘問記讀申之處、仰云、早與武忠三郎男可口對決、

〔法曹至要抄上罪科〕一不拷訊事

斷獄律云、應議請減、若年七十以上十六以下、及廢疾者、並不合拷訊、皆據衆證定罪、違者以故失論、又條云、婦人懷孕、犯罪應拷及決杖笞、若未產而拷決者、杖八十、傷重者依前人〇前人下、唐律有不合二字捶拷法、失者各減二等、〇失者各減二等、唐律在拷決者減一等下產後未滿百日而拷決者、減二〇二、唐律作一等、刑部式云、僧尼犯罪應訊者、皆據衆證定刑、不須捶拷者、

案之、應議請減以下、自云僧尼以上、共不可拷訊、宜據衆證定其刑矣、然而有官位之者、及僧侶、竝位

以上子孫、粗有其例歟、

〔法曹至要抄上罪科〕一衆證事

水責

仍奏其由、光保注進散禁囚注文覽之、次第取上、盛兼朝臣取之來予前、予取之披見、原忠遠、（○遠本作進）一去年十二月廿三日夜、二條烏丸邊引利（○利恐剝字誤）嫌疑者、予問之、季盛申云、一度經拷問了、不承伏、疑乘少ヘ拷不滿三者、予稱不可免之由、近康申云、女院捨物五人、以不過者也、予答云、自院給了、對問之後、今一度經院奏聞左右也、無可被免之物者、不免常事歟、

〔播磨風土記讃容郡〕中川里、彌加都岐原、難波高津宮天皇（○仁德）之世、伯耆加具漏、因幡邑由胡二人、大驕无節、以清酒洗手足、於是朝庭以爲過度、遣狹井連佐夜召此二人、爾時佐夜、仍悉禁二人之族、赴參之時、屢漬水中、酷拷之中、有女二人、玉纏手足、於是佐夜惟問之、答曰、吾此服部彌蘇連、娶因幡國造阿良佐加比賣生子、宇奈比賣、久波比賣、爾時佐夜驚云、此是執政大臣之女、卽還送之、所送之處、卽號見置山、所溺之處、卽號美加都岐原、

〔保元物語二〕謀叛人各召捕事

皇后宮權大夫師光入道、備後守俊通入道、能登守家長入道、式部大輔盛憲入道、弟ノ藏人大夫經憲入道ヲバ、東三條ニテ水問セラル、內裏ヨリ藏人右少辨資長、權右少辨惟方、大外記師業、三人承テ奉行セリ、中ニモ盛憲兄弟、前瀧口秦助安等ヲバ靫負廳ニテ拷訊セラレケリ、此等ハ左大臣（○藤原賴長）ノ外戚ニテ、事ノ起リヲ知タルラン、又近衞院、幷ニ美福門院ヲ呪咀シ奉リ、德大寺ヲ燒拂ヒタリシ故ヲ問ハルヽニ、下部先衣裳ヲハギ取テ頸ニ繩ヲ付ケレバ、下部ニ向テ手ヲ合セ、コハ何事ゾヤ、我ヲ助ヨト云ケレバ、座ニ列ナル官人共、目モ不被當覺ヘケリ、然レ共刑法限有事ナレバ、七十五度ノ拷訊ヲ致スニ、始ハ聲ヲ揚テ叫ケレ共、後ニハ息絕テ不言、日コソ多キニ七月十五日、今日シモ懸ル罪ニ被行事コソ無慙ナレ、其上五位以上ノ者、拷器ニ被寄事、先例希也、水尾天皇（○淸和）ノ御時、貞觀十八年閏三月十日ノ夜、應天門ノ燒タリケルヲ、大納言伴善男卿造意ノ嫌疑有ケレバ、使廳ニテ拷訊セラレケル例トゾ聞ユル、彼大納言ハ實犯ニテ、同キ九月廿二日、終ニ伊豆國ヘ

〔唐六典六刑部〕稽諸證信、有可徵焉、而不首實者、然後拷掠、二十日一訊之、訊未畢更移他司、仍須拷鞫、通計前訊、以充三度、即罪非重害、及疑似處少、不必滿三、若四因訊致死者、皆與長官及糺彈官對驗、其拷囚及行決罰、不得中易人、

〔令義解十獄〕凡訊囚、非親訊司、不得至囚所聽聞消息、謂其解部訊囚者、當司事得聽、自餘不合、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年六月甲辰、從四位上山背王復告、橘奈良麻呂〇橘諸兄男備兵器、謀圍田村宮、　七月庚戌、分遣諸衞、掩捕逆黨、更遣出雲守從三位百濟王敬福、太宰帥正四位下船王等五人、率諸衞人等、防衞獄囚、拷掠窮問、黄文、改名多夫禮道祖、改名麻度比大伴古麻呂、多治比犢養、小野東人、賀茂角足改姓乃呂志等並杖下死、

〔日本後紀十七平城〕大同四年閏二月甲辰、從四位下安部朝臣鷹野卒、鷹野者、從五位下猪名麻呂之子也、有仁慈之性、多所汲引、侍從中臣王連伊豫親王之事、經拷不服、變臣激帝令加大杖、王背崩爛而死、〇以下缺文

〔日本紀略四村上〕天德四年五月廿一日己未、今日令拷訊式部史生忠雅、依帶七位不可拷訊、然而依式部史生山邊履道之口可拷問、件履道、擢改試詩也、　九月廿日丁巳、式部史生忠雅拷問之間、使官人或陳可脱申之由、或申不可脱申之由、仍令法家勘申、

〔中右記〕永久二年七月二日、藏人弁雅兼、依御氣色來云、宗盛放火女乙牛承伏了、彼女美作不承伏、但放火已實事也、如何、予申云、早可被問明法博士也、仍召信貞被問之處、申云、任法可經三度拷也、然而已露驗也、勘問記ハ、依不承伏、女以難被下、只以詞被仰下、非無先例、

〔公教公記〕保延七年〇永治元年正月五日乙巳、今日廳始也、去五日仰季盛令陰陽師勘日時午時官人等參集、左尉盛康朝臣、滿遠、光保、志季盛、府生守利、右尉清房、周光、國近、通參、近保、府生平伏、兼着座、令盛經衣冠問見參、次第申之、次予着直衣冠着廳座、官人等平伏、予免物勘文等可覽之由、季盛云、可被免之物不候也、政所到來候御前、予披見件到來、無可然之物、

官、在京者與彈正對驗、

〔令集解（職員六）〕斷獄律、反覆參驗者、卽自鞫、亦云覆故也、

〔法曹至要抄（上罪科）〕一拷訊事

斷獄律云、應訊囚者、必先以情審察辭理、反覆參驗、猶未能決、事須訊問者、立案同判、然後拷訊、違者笞五十、若贓狀露驗、理不可疑、雖不承引、卽據狀斷之、又條云、拷囚不得過三度、杖數總不得過二百、杖罪以下、不得過所犯之數、拷滿不承、取保放之、（○放之下、唐律有若拷過三度、及杖外以他法拷掠者杖一百、杖數過者、反坐所剩、以故致死者、徒二年三十三字、）卽有創（○創、唐律作瘡字、）病、不待差而拷者杖六十、若依法拷決、而邂逅致死者勿論、刑部式云、犯罪之人、或尫或弱、決杖之時、且寒且熱、重加頓杖、恐致死亡、須量其貌、滿役之間、准折決畢、囚獄式云、司內所須笞杖、每年十一月役物部丁令採備之、注云、笞杖各一千枝、

案之官司、拷訊囚人之時、有不如法之事者、隨事得杖笞之罪、又有職有官之人、在（○在恐若字誤）事重、任罪名處贖銅、事輕處勘事、

〔唐律疏議（三十斷獄）〕諸監臨之官、因公事自以杖捶人致死、及恐迫人致死者、各從過失殺人法、若以大杖及手足毆擊折傷以上、減鬪殺傷罪二等、（○疏議略）雖是監臨主司、於法不合行罰、及前人不合捶拷、而捶拷者、以鬪殺傷論、至死者加役流、卽用刃者、各從鬪殺傷法、

〔西宮記（臨時十）〕勘申可着鈦左右獄囚事（○中略）

菅野並重（○中略）

紀重春（○中略）

右貳人、强盜之犯、雖不承伏、直贓之物、已以顯露也、撿斷獄律云、應訊囚者、必先以情審察詞理、反覆參驗、若贓狀露驗、理不可疑、雖不承引、卽據狀斷之者、計贓斷罪、具見上條、仍以所得之物、亦論所當之科、依格加罪徒役六年、

被流ニケリ、然レバ古モ今モ如此ク咎有ラバ、公家必ズ罪ヲ行ヒ給ハ、常ノ事也トナム語リ傳ヘタルト也、

〔春記〕長久元年九月廿四日丙子、日記一通、送別當許了、件日記勘問盜取東大寺勅御倉銀等之犯人文也、僧長久爲首、同類等有其員、件長久、去十八日所捕得也、十九日勘問、昨日藏人義綱奏聞也、仰云、同類幷贓物、慥可相尋之由可仰者、（昨日被申其由了云々）仍所遣仰也、　廿五日丁丑、右衛門尉季任朝臣令藏人義綱令奏云、東大寺取御倉物犯人同類菅野淸延捕得、卽出贓銀卅兩者、

〔古今著聞集三公事〕いづれの年にか、白馬節會に、進士判官藤原經仲參りたりけるに、雜犯たゞすべき物なかりければ、ちからおよばで、撿非違使ども退出せんとしけるに、なにがし僧正とかやの兒、沓をはきながら木のまたにのぼりて見物しけるを、經仲が下部をもてめしとりてたゞしける詞に、長大垂髮にて皮の沓をはき、たかき木にのぼりて宮闕をうかがふ、一身をもつて師のをかしをなせるゑかるべしや、いかんと勘問したりける、時にのぞみていみじかりけり、叡感ありて女房の衣をたまはせけりとなん、

〔寶物集一〕二月（治承二〇年）廿日中御門ノ門ヲ入テ、大膳職、陰陽寮ナドヲ打過テ、大場ノ椋ノ木ノ本ヲ見ニモ、白馬ノ節會思出サレテ、摺文ナセル衣袴キタル者勘禁ヘシ事思出サレテ、慚シクゾ侍リケル、坂上允亮ガ夢ニ、罪ノ深キ事ヲ見テ、遣非違使ニ成ラジトテ、五位ノ官給ハリケルモ理ニゾ侍ルベキ、

〔令義解十獄〕凡察獄之官、先備五聽、（謂、五聽者、一曰辭聽、觀其出言、不直則煩、二曰色聽、觀其顏色、不直則赧然、三曰氣聽、觀其氣息、不直則喘、四曰耳聽、觀其聽聆、不直則惑、五曰目聽、觀其眸子、不直則眊然也、）又驗諸證信、事狀疑似、猶不首實者、然後拷掠、每訊相去廿日、若訊未畢、移他司仍須拷鞫者、囚移他司者連寫本案、（謂問囚之文案、卽下條、問囚辭定訊司依口寫是也、）俱移、則通計前訊、以充三度、卽罪非重害、（謂依律被殺、被盜、被水火損敗等是也、）及疑似處少、（謂雖是重害、而疑似處少、亦不必滿三、隨狀量決、）不必皆須滿三、若囚因訊致死者、皆具申當處長

而死、死未經時、急災於殿、

〔日本書紀二十三 舒明〕八年三月、悉劾姦采女者皆罪之、是時三輪君小鷦鷯苦其推鞫、刺頸而死、

〔日本紀略五 冷泉〕安和元年八月廿三日甲戌、大納言在衡參入、可勘問前相模權介藤原千晴、前武藏權介平義盛之宣旨、仰辨史、 九月十四日甲午、被定相模權介藤原千晴、爲武藏權介平義盛被强奸之由勘問日記、

〔江談抄二 雜事〕善男坐事承伏事

善男坐事之日、大納言南淵年名、參議菅原是善卿等、奉勅於勘解由使局推問之、更不承伏、卽詐令人謂云、息男佐世已以承伏畢、何獨不然、善男聞之、口惜男カナト云天承伏、

〔今昔物語二十三〕平維衡同致頼合戰蒙咎語第十三

今昔前ノ一條院天皇ノ御代ニ、前下野守平ノ維衡ト云兵有リ、此ハ陸奥守貞盛ト云ケル兵ノ孫也、亦其時ニ平致頼ト云兵有ケル、共ニ道ヲ挑ム間、互ニ惡キ樣ニ聞カスル者共有テ敵ト成ヌ、其領各一國ニ有テ、致頼進テ維衡ヲ討罰ムトシテ合戰スル間、其多ノ子孫伴類、幷ニ郎等眷屬等、互ニ射殺ス者其員有リ、然ドモ勝負无シテ、維衡ヲバ左衞門ノ府ノ弓場ニ被下レ、致頼ヲバ右衞門ノ府ノ弓場ニ被下テ、共ニ被勘問ニ、皆進テ咎ニ落ニケリ、罪名ヲ被勘ルニ、明法ニ勘ヘ申テ云ク、歷ヒ討タントタル致頼ガ罪ミ尤重シ、速ニ遠キ處ニ可被流ル、請ケ戰タル維衡ガ罪輕シ、移鄕一年可壬シテ此〇可壬以下五字、一本作バカリシテユルサルベキカトイフ十五字ニ依テ、公家宣旨ヲ被下テ、致頼ヲ遠ク隱岐國ニ被流ヌ、維衡ヲバ淡路國ニ被移鄕ヌ、其後亦藤原致忠ト云者有テ、美濃國ノ途中ニシテ、前相模守橘輔政ト云人ノ子、幷ニ郎等ドモヲ射殺テケリ、此ニ依テ父輔政、公ニ訴申スニ、宣旨ヲ被下テ、撿非違使大夫ノ尉藤原忠親、幷ニ右衞門志縣犬養爲政等ヲ彼ノ國ニ下シ遣シテ、事ノ發ヲ勘ヘ被問ケルニ、致忠進ヲ咎ニ落ニケレバ罪名ヲ被勘テ、明法勘ヘ申スニ隨テ、致忠ヲ遠ク佐渡國ニ

賊逃散、夜暗冥、不獲追捕者、　十月九日壬寅、以從五位下守左衞門權佐藤原朝臣良積、爲推問筑後國殺害使、判官一人、主典一人、

〔三代實錄四十五光孝〕元慶八年四月廿六日丙辰、以彈正少弼從五位下安倍朝臣貞主、爲推問筑後國司殺害使、

〔三代實錄四十六光孝〕元慶八年六月廿日己酉、是日遣彈正少弼從五位下安倍朝臣貞主、判官巡察彈正正六位上菅原朝臣宗岳、主典左衞門少志大初位下櫻井田部連貞世等於太宰府、推問殺害筑後守都朝臣御酉事、太政官下符太宰府偁、依彼府去六月六日解狀、可早追捕射殺筑後守都朝臣御酉凶賊之狀、七月十九日下知已了、而紲望屢遷、寂无音驛、論之急務、何其可然、今得大貳從四位上安倍朝臣興行辭狀偁、八月一日捕獲賊類、須加覆鞫具以言上、而所有監典等或奉使未歸、或隨例多事、望請被遣朝使勘糺罪人者、凡凶黨爲害國家所憂、禍數發於匪圖、情何拘其常理、而寄事繁劇、淹留不斷、外朝之謂、豈容如此乎、夫有非常之變、當施一切之議、仍特遣件等人、發擿其事、府宜承知能使處分、　七月五日癸亥、推問筑後國殺害使彈正少弼從五位下安倍朝臣貞主奏言、獄令云、犯罪皆於事發處官司推斷、又條云、犯罪笞罪郡決之、杖罪以上郡斷定送國、覆審訖、徒杖罪及流應決杖、若應贖者、卽決配徵贖、諸國斷流以上、若除免官當者、皆連寫案申太政官、然則推斷之法、皆於犯處、而太宰府解偁、大監平高平等連繫罪人向府訖者、高平等不請處分、輙捕送府、府司不責其由、輙受拷問、今使等欲向事發處、罪人在府、就罪人居、可乖法意、欲率罪人向事發國、府司且經勘問、略知端緒、使等在彼、訊鞫之日、事有失誤、可喚府司、加之罪人數多、率將有煩、望請於府推問、使還之日、依法遣返抄、幷印署日記、一准諸國之例、右大臣宣、奉勅依請下知、

〔日本書紀十九欽明〕二十三年六月、是月或有譖馬飼首歌依曰、歌依之妻、逢臣讃岐、鞍韉有異、既而熟視、皇后御鞍也、卽收廷尉、鞫問極切、馬飼首歌依乃揚言誓曰、虛也非實、若是實者、必被天災、遂因苦問、伏地

民被捕獲、被搏打剃髮、爲着䭾、又安藝守、於京中被殺、如此事可謂非常之甚、聖代之昔、猶有此事、何況於末代哉、但代初天下先示甚惡、爲令返善也、仍能々可被行政化者也、以此旨內々可達博陸幷天聽者也、予即退出、

〔日本紀略 二朱雀〕天慶三年正月九日乙亥、解却右衞門權佐源俊、左衞門尉高階良臣、勘解由主典阿蘇廣遠等、已上三人、爲推問東國使、屢申障不發向之故也、

〔行親朝臣記〕長曆元年閏四月十四日、有推問使申請定云々、三ヶ條、一停帥釐務(不□停者)一推問日限府返抄(可依長保例也)一推問之日無所遁、府安樂寺□隨身可參歟□(勒之日無所遁者、任法可行之、斷決、終爲後楯者、可隨身者、)五月十五日、今日太宰推問使(左衞門權佐、右衞門尉成通、縫殿屬國順也、)下向、從高陽院殿西御倉町出立、有反閉(人々會合有少饗、但不達公所出之)如何、申剋進發、發隨身、(府生、番長、府門部、幷五人、着冠襖袴、壺胡籙、巾胡籙等、乘移鞍、)次主典(冠衣)次判官(冠、布衣、深沓、看督□□□着裝束在後、隨身調度懸拵取出如例、)次使、(冠、柏夾、直衣、深沓、鹿皮尻鞘、看督長四人着裝束、調度懸隨身如前、)次郎等、(胡籙十八人無注陣不□□□□□)路頭見物之者、不可勝計、

〔百練抄 四後朱雀〕長曆元年五月十五日、遣推問使左衞門權佐(○藤原隆佐)於太宰府、是去年三月曲水宴時安樂寺與帥實成卿鬪亂、依彼寺訴也、(○又見扶桑略記)

〔百練抄 四後朱雀〕寬德二年十月六日、遣右衞門權佐實綱於太宰府、爲推問權帥重尹非法也、　十二月廿六日、太宰權帥重尹罪名、下勘法家、不出拼推問使、似有罪科之故也、

〔政事要略 八十一〕斷獄律云、官司入人罪者、(○中略)若入全罪、以全罪論、(○中略)從輕入重、以所剩論、刑名易者、從笞入杖、從徒入流、亦以所剩論、(○中略)從笞杖入徒流、從徒流入死罪、亦以全罪論、其出罪者各如從輕入重、(○註略)即斷罪失於入者、各減三等、失於出者、各減五等、若未決放、及放而還獲、若囚自死、各聽減一等、(○註略)即別使推事、通狀失情者、各又減二等、(○下略)

〔三代實錄 四十四陽成〕元慶七年七月十九日癸未、先是太宰府六月六日解偁、筑後國解偁、今月三日夜、群盜百許人、圍守從五位上都朝臣御酉館、射殺御酉、掠奪財物、傍吏聞人叫聲、俄發兵仗、赴集之間、群

人望足服焉、流讃岐國、

〔日本後紀 十三桓武〕延暦廿四年十一月壬申、先是伊豆國掾正六位上山田宿禰豐濱奉使入京、至伊勢國榎撫朝明二驛之間、就村求湯、有人與之、更復煖酒相飲、其後嘔吐、至伊賀國堺、豐濱從者死、豐濱情知毒酒、勤加療治、至京遂死、遣使左兵衞少志從六位下紀朝臣濱公勘問無得、

〔三代實錄 四十六光孝〕元慶八年六月廿三日壬子、遣式部大丞正六位上坂上大宿禰茂樹、勘解由主典從七位下凡直康躬等於石見國、推訴訟事、下知彼國司、偁介外從五位下忍海山下連氏則等、去六月六日解偁、管邇摩郡大領外從八位上伊福部眞人安道率部內百姓、來圍權守從五位下上毛野朝臣氏永之宅、爲政乖法、仍奪取印匙、以授傍吏、守氏永以劒擊傷氏則妻下毛野屎子者、又守氏永同月十五日奏狀偁、傍吏發賊兵、擬殺氏永、卽令凶賊奪取印匙鈴等、以杖擊氏永、打杭地上、張著手足、鏁籠倉裏者、今如奏解狀、事緒各異、實情不同、非遣朝使何決涇渭、仍爲推問其由、差遣茂樹等、國宜承知聽使處分、

〔三代實錄 四十八光孝〕仁和元年七月十九日辛丑、近江國撿非違使權主典前犬上郡大領從七位上犬上春吉、向太政官愁訴權醫師犬上郡少初位下神人氏岳奸盜官物、於是遣判事從六位上藤原朝臣棟景少屬從七位上讃岐朝臣勝雄等、推問其事、

〔三代實錄 四十八光孝〕仁和元年十二月廿二日壬申、下從四位下行信濃守橘朝臣良基於刑部省、令推斷其罪、先是彼國百姓辛犬甘秋子向官愁訴、爲人被行火、燒亡居宅、幷燒殺家人男女八人、詔遣少監物正六位上布勢朝臣敏行推問其事、敏行還奏、守良基對捍、不聽勘事、故縱詔使所禁之罪人焉、

〔日本紀略 一醍醐〕延喜二年九月廿日癸亥、遣推問使於越後國、彼國守紀有世、爲藤原有度落髮着鉗之由、

〔春記〕長久元年五月一日乙卯、參右府、〇藤原實資、中略實命云、昔聖代有非常事、延喜二年越後守有世爲州

案之、稱衆稱謀者、此律除不證者之外、皆須三人二人可謂衆證、是三等以上親、幷可相容隱之人不得爲證之故也、

〔類聚三代格三〕太政官符

可勘定額寺資財幷任三綱事

右被右大臣宣偁、奉勅、諸國定額寺資財者、國司與三綱檀越共撿按處分、其任三綱者、依檀越衆僧請、國司覆勘充任、若寺家破壞、及有餘犯失者、推問所擧衆僧檀越等、依法科罪、自今以後、永爲恒例、

延暦十五年三月廿五日

〔唐律疏議二十五詐僞〕若別制下問案推、無罪名謂之問、未有告言謂之案、已有告言謂之推、

勘獄官

〔令義解一職員〕刑部省

卿一人、掌鞫獄、定刑名、謂覆審解部所鞫、與判事以上共斷定也、依獄令、在京諸司事發者、犯徒以上、送刑部省、其衛府糺捉罪人、非貫屬京者、皆送刑部省、又云、刑部省斷流以上者、皆連寫案申太政官、然則死以下管以上、皆合推斷也、決疑讞、謂讞、請也、正也、依同令、國有疑獄事、不決者、讞刑部省、是也、○中略 ○中略 大判事二人、掌案覆鞫狀、斷定刑名、判諸爭訟、中判事四人、掌同大判事、○中略 少判事四人、掌同中判事、○中略 大解部十人、掌問窮爭訟、中解部廿人、掌同大解部、少解部卅人、掌同中解部、

〔令義解一職員〕太宰府

大判事一人、掌案覆犯狀、謂案覆管國所中犯狀也、斷定刑名、判諸爭訟、少判事一人、掌同大判事、

〔令義解十獄〕凡鞫獄官司、與被鞫人、有五等內親、謂獄令云、五等以上親、及三等以上婚姻之家、謂依律、同籍爲一家、卽婚家姻家、各待同籍、乃聽相避也、幷受業師、謂文不得見受業師、卽不問官學私學、先經受業、顧有宿恩、皆是其師於弟子、及本主於賓人者非、及有讎嫌者、皆聽換推、經爲帳內資人、於本主亦同、

推問使

〔類聚國史八十七刑法〕延暦十四年四月戊戌朔、先是信濃國介正六位上石川朝臣清主、爲人被射、而不中、遣從五位下藤原朝臣都麻呂等勘捜射人、不得焉、更遣衛門佐大伴宿禰是成、推問小縣郡人久米舍

拷訊セズシテ衆證ニ據リテ罪ヲ定ムルコトアリ、卽チ應議請減者、若シクハ年七十以上、十六以下ノ人、及ビ廢疾者、若シクハ僧尼ノ如キ是ナリ、サレドモ同居若シクハ三等以上ノ親ノ如キ、律ニ於テ相容隱スルコトヲ聽サルヽ人、及ビ八十以上、十歳以下、若シクハ篤疾ノ人ヲ以テ證トスルコトヲ得ズ、又創病アル者ハ差ユルヲ待チ、孕婦ハ產後百日ヲ待チテ拷ス、

〔令義解 獄十〕凡問囚辭定、訊司依口寫、訖對囚讀示、

凡國有疑獄(謂獄有所疑、處斷難明者也、)不決者、讞刑部省、(謂此不論本罪輕重、但徒以上者皆是、卽與上條本罪應奏、其情稍異、)若刑部仍疑、申太政官、

〔令義解 獄十〕凡死罪雖已奏報、猶訴冤枉、事有可疑、可推覆者、以狀奏聞、遣使馳驛檢校、

〔政事要略 八十一〕斷獄律、須依所告狀鞫、條云、若於本狀之外、別求他罪者、以故入人罪論、

〔令義解 獄十〕凡犯罪須驗位記、若位記失落、或在遠者、皆驗案、

〔延喜式 二十九 刑部〕凡五位以上、犯罪應推者皆設床席、

〔延喜式 二十九 判事〕凡訊獄訟書者、具錄訴狀、其申官解文者、少除繁辭、宜判之日、必須委曲、

〔延喜式 二十九 刑部〕凡被告犯罪、推勘無罪、及徒人役滿者、依法合免、其爲人凶惡、衆庶共知者、不須放免、禁固獄中、理應放者、申官免之、

〔法曹至要抄 上 罪科〕一衆證事

斷獄律云、其於律得相容隱、卽八十以上、十歲以下、及篤疾、皆不得令其爲證、違者減罪人罪三等、疏云、其於律得相容隱、謂同居、若三等以上親、及外祖父每、外孫、若孫之婦、夫之兄弟、及兄弟妻、及家人奴婢、得爲主隱、其八十以上、十歲以下、及篤疾、以其不堪加刑故、並不許爲證、若違律遣證、減罪人罪三等、名例律云、稱衆者、三人以上、(中略)疏云、稱衆者、斷獄律云、七位以上犯罪、不拷據衆證定刑、必須三人以上、始成衆證、但稱衆者、准此文、○中略

推鞫

鞫獄ノ官司ハ、鞫セラルヽ人ノ五等以上ノ親屬、及ビ三等以上ノ婚姻ノ家、幷ニ受業師、及ビ讎嫌人ナルトキハ、皆換フルコトヲ聽ス、囚人ヲ鞫問シテ、其辭已ニ定レバ、訊司ハ其辭ニ依リテ筆記シ、之ヲ囚人ニ讀ミ示ス、國ノ訟獄ニ疑ハシキ處アリテ決セザルトキハ、本罪徒以上ハ刑部省ニテ讞ス、刑部省ニテモ仍ホ決セザルトキハ、太政官ニ申シテ、裁ヲ仰グ、死罪ハ特ニ其獄ヲ愼ムベキコトニテ、已ニ奏報アリトモ、猶ホ寃枉ヲ訴ヘ、其事疑フベキコトアリテ推覆スベクハ、狀ヲ以テ奏聞シ、朝廷ヨリ使ヲ遣シ、馳驛シテ撿按セシム、又官司本狀外ニ於テ他罪ヲ求ムルトキハ、故入人罪ヲ以テ論ズ、又察獄ノ官人訊鞫スルニハ、先ヅ情ヲ以テ辭理ヲ審察シ、案狀ヲ反覆シ、是非ヲ參驗スルニ、事狀疑似ニシテ、猶ホ未ダ實ヲ首セザルトキハ、案ヲ立テヽ長官ノ同判ヲ取リ、然シテ後ニ拷訊ス、拷訊トハ、其體ヲ拷器ニ懲ラシメ、杖ヲ以テ背ト臀トヲ迭ニ打チテ、其實ヲ吐カシムルヲ云フ、訊スルコトハ度ゴトニ二十日ヲ隔テヽ、都テ三度ニ過グルコトヲ得ズ、杖數ハ總テ二百ニ過グルコトヲ得ズ、本犯笞杖罪ノ人ハ、所犯ノ數ニ過グルコトヲ得ズ、卽チ本犯笞五十ノ人ハ訊杖五十ニ過グルコトヲ得ズ、杖百ノ人ハ、訊杖百ニ過グルコトヲ得ザルナリ、若シ拷數已ニ滿チテ承引セザルトキハ、保ヲ取リテ之ヲ放ツ、若シ其罪殺害賊盜、及ビ水火ノ損敗ヲ被フルガ如キ重害ノ事ニアラザルト、重害ナリトモ疑似ノ事ノ少キトハ必シモ三訊セズシテ、狀ニ隨テ量決ス、又贓狀露驗ナルハ、承引セズト雖モ直ニ狀ニ據リテ科斷ス、若シ囚人ヲ訊シテ死ニ致セバ、具ニ當處ノ長官ニ申シ、在京ハ彈正ト對驗ス、而シテ法ニ依リ拷シテ、邂逅ニ死ニ致ス者ハ其罪ヲ論ゼズ、囚人ヲ訊スル時ニハ、親ラ訊スル司ノ外ハ、囚人ノ所ニ至リテ消息ヲ聽クコトヲ得ズ、又

糺彈例

和銅五年五月十七日（○又見續日本紀）

〔延喜式 彈正 四十一〕凡彈正者、月別三度巡察諸司、糺正非違、若有廢闕者、乃具事狀移式部、考日勘問、

〔日本紀略 後一條 十四〕長元三年四月十五日丁酉賀茂祭、今日見物事出紅衣、撿非違使源清以下糺彈之、

〔左經記〕長元元年六月廿四日丁亥、傳聞去四月廿五日藤原時遠、王（○王恐平字誤）爲行等、於（○於恐與字誤）肥後守成章朝臣欲合戰之間、右衞門尉貞重向彼場、爰雖無合戰之實、各帶弓箭、卒隨兵之由、皆有其聞、貞重須搦其身言上事由、而不加糺斷、無勤追捕、請取爲行將去已了、因茲可召進件爲行之由、雖令仰下、已有容隱心、專無召進之勤、仍爲勘問其由、再三雖令召、稱有身病、遂不參、宜令明法博士勘申罪名之由、右大弁（○藤原重尹）有勅、仰右府（○藤原實資）云々、

糺彈官犯法

〔政事要略 八十四〕鬪訟律云、誣告人各反坐、（凡人有嫌、遂相誣告者、准誣告輕重、反坐告人、）即糺彈之官、挾私彈事不實者亦如之、反坐致罪、准前人入罪之法、至死而前人未決者、聽減一等、（謂有憎惡前人、或朋黨親戚、挾私飾詐、妄作糺彈者並同誣告之律、反坐其罪、准前人入罪之法、至死而前人雖斷訖、未決者、反坐之人、聽減一等、若誣人反逆、雖復未決、引虛不合減罪、）其本應加杖及贖者、止依杖贖法、即誣官人及有蔭者、依常律、

〔延喜式 彈正 四十一〕凡臺有所犯者、式部省加糺正、

糾彈官巡察

權右中辨源朝臣公忠傳宣、大納言藤原朝臣恒佐宣、奉勅爲令勘糺東大寺興福寺雜人等濫行、差遣右衞門志比部貞直、先了、而貞直依身病重、未能向、宜以府生若江善邦改遣者、

承平五年六月三日　　左大史尾張言鑒奉

〔年中行事秘抄正月〕大饗日主人不出客亭例見九條殿御記幷外記記

李部王記云、天慶二年正月四日、詣太政大臣〇藤原忠平饗所、主公稱病不出客亭、元日〇元日恐有誤遣巡察等於三位已上家、糺彈他司人集會其間事、今案撿非違使、向大饗所之始歟、

〔延喜式四十一彈正〕凡京中、弼以下每月巡察、勘彈非違、東西市、幷諸寺非違、及客館路橋破穢之類、

凡巡撿左右京之日、量狀決罰、

凡喚左右京職云、將遣忠以下撿京中非違道橋及諸寺、宜嚴仰條令預定便處、會集男女、亦告諸寺三綱等、令辨備、如上、即忠以下到彼會所、問云、有京職官人及坊令等、冤枉百姓、凌侮長幼耶、又有孝子、順孫、義夫、節婦以不、又有惡女擾亂閭巷以不、又到寺家、遣條令告三綱、即擊鐘會僧、訖條令申云、坐定、即忠以下入著座、問衆僧云、三綱供養衆僧、有所闕失耶、又有罵辱衆僧、幷將三寶物餉送官人耶、又有三寶燃燈所闕失耶、次問三綱云、有衆僧乖違法式、擾亂徒衆、及罵詈三綱、凌突長宿、好小道卜吉凶、懷巫術、救疾病者耶、又有飲酒醉亂、及與人鬭亂者耶、又有著禁色者耶、謂綾羅錦綺之類、

〔三代實錄二十六清和〕貞觀十六年十二月廿六日庚辰、撿非違使起請二條、其一、應糺彈近京之地非違事、謹案使等依舊宣旨、巡撿京中之非違、由是奸猾之輩、好城邊之地、避使等撿察、亦觸類應彈之事、多在山埼、與渡、大井等津頭、使等即事經過那邊、目有所見、口不能言、望請津頭及近京之地、在〇在恐有字誤非法、使等有所看即便糺彈、〇中略望請處分、將爲永例、

〔延喜式四十一彈正〕凡宮城內外非違及汚穢者、每日忠已下糺察、但禁中者不須、

〔類聚三代格十二〕詔、彈正者、月別三度巡察諸司、糺正非違、若有廢闕者、仍具事狀移送式部、考日勘問、

具官位姓名、謂上文云其司位、此云具官位者、假令一人兼帶數官、在上唯注其一官、於此皆盡其兼官之類、以此爲別、故立文不同也、貫屬、

右一人犯狀云々、

劾上件甲乙事狀如右、謹以上聞、謹奏、

年月日　　彈正尹位臣姓名謂若无尹者、判官以上亦得奏也、

聞御畫

右親王及五位以上、謂一位以下也、太政大臣、不在此限、有犯應須糺劾、而未審實者、並據狀勘問、不須推拷、謂據律應議請減者、並不合拷訊、皆據衆證定罪、其得減之色、尙不須推拷、何況議請之人、不言可知、凡彈正是糺劾之職、非科斷之官、即不限有位无位、皆不須得推拷也、委知事由、事大者奏彈、謂解官以上也、何者獄令云、雖犯死罪、獄成會赦者、解見任職事、此雖非官當、猶合解官也、若於无品親王者、徒罪以上、即爲事大也、訖留臺爲案、非應奏、謂无品親王犯杖罪以下、及五位以上不至解官也、及六位以下、並糺移所司推判、謂所司者、應斷罪之司也、依獄令、衞府糺捉罪人、非貫屬京者、皆送刑部、即明貫屬京者、送於京職、其彈正糺移罪人、亦須准此、故云糺移所司也、

〔令集解三十二公式〕古記云、奏彈式條、未知訓方、答、多多志麻宇須、

〔令義解一職員〕彈正臺

尹一人、掌肅淸風俗、略○註彈奏內外非違、謂內者左右兩京、外者五畿七道也、依公式令、告言官人害政、及有抑屈者、彈正受推、當理者奏聞、不當理者彈、如此之類、是爲彈奏也、事、弼一人、大忠一人、掌巡察內外、糺彈非違、少忠二人、掌同大忠、大疏一人、少疏一人、巡察彈正十人、掌巡察內外、糺彈非違、略○下

〔職原抄下〕檢非違使

朝家置此職以來、衞府追捕、彈正糺彈、刑部判斷、京職訴訟、併歸使廳、

〔政事要略六十一〕檢非違使式云、推事不論左右、雖無佐若尉一人猶得行事、

〔政事要略六十一〕檢非違使式云、使之所掌、准彈正彈事、幷依臨時宣旨行之、

〔朝野群載十一廷尉〕令檢非違使糺濫行宣旨

奏彈式

〔延喜式彈正四十一〕凡臺聞官司枉判及閭里犯法者、追所由人勘問其由、得實應奏者隨即奏聞、

〔延喜式彈正四十一〕凡臺奏彈事者、不經太政官而直奏聞、（將奏事者、忠詣閤門告大舍人、令伺奏事狀、有可召者、尹已下忠已上、共入上聞、若御太極殿者、忠就大舍人處伺奏事狀、舍人召臺、臺進前上聞、但臨時奏事者、忠以上一人、詣內侍所、令內侍奏聞之、）

凡記非違者不必封記、

〔延喜式彈正四十一〕凡臺彈人者、詞容端嚴、依理糺彈、其受彈者、敬愼容止、恭聲稱唯、乃陳所問、違者復彈、

凡臺糺彈不當者、即有得彈之官、其臺彈不論合不、愼須受彈、

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年十二月廿七日甲辰、制彈正臺、復天長九年十一月二十九日格、每月巡撿京中、幷勘記諸司諸院諸家、及內外主典已上犯狀、直移式部、兵部二省、貶奪考祿、

〔類聚三代格十二〕太政官符（○中略）

一應諸司三度以上不參臺喚幷不辨申勘事者停給季祿事

右同前（○彈正臺）奏狀偁、謹案公式令云、親王及五位以上、有犯應須糺劾、而未審實者、並據狀勘問、不須推考、委知事由、事大者奏彈者、然則奏聞之理、必在推問之後、非經糺劾何輙上奏、而今或一司、若公罪、若私罪、或爲臺所記錄、或爲人所告言、因玆爲彈其由、即召官人、而空設巧詐、不曾參到、今將錄罪狀以上奏、則全乖令文、亦欲對其身定罪名、則終無其期、又一司四等以上之官、罪狀各異、至于未經推彈、則首從難辨、如此之類、品目猥多、非張新制、何爲懲革、望請自今以後、諸司三度以上、不參臺喚幷不辨申勘事者、並移二省、以奪季祿、

以前事條如件、右大臣宣、奉勅依奏、

貞觀十八年七月廿三日（○又見三代實錄、政事要略、）

〔令義解七公式〕奏彈式

彈正臺謹奏、其司位姓名罪狀事、

凡爲彈參議已上、差忠一人、令度馳道、〈嚴敬徐步〉

凡親王、諸王、諸臣、威儀進退不合禮、若式部不糺者、喚省而彈之、

凡朝庭容儀、若有怠緩者、可彈彈之、可咨咨之、

凡朝庭儀式、衣冠形製、臺幷式部、據知糺正、

〔延喜式四十一彈正〕凡三位已上有可糺彈、而其身不在朝座者、臺喚家令勘問、若家令告於本主、猶不肯答、如此之類、遣忠已下就其家對彈、若事大者奏聞、

凡彈官人及雜色人者、具錄犯狀移刑部省、令斷罪狀、應附考殿、即移本司幷式兵部等省、

凡諸司人等、就臺版位、皆向正北、

凡有非違人、召其本司及管省而彈之、

〔令義解五宮衞〕凡隊仗內有非違、彈正不辨姓名、聽至仗頭就主司問、〈謂、隊仗者、衞士陣、謂之隊也、兵衞內舍人陣、謂之仗也、主司者、領兵官也、問者、問犯非違之人姓名也、〉

〔延喜式四十一彈正〕凡諸王諸臣衣服食物、不得盛案以行宮中、違者彈之、

凡辨官有犯、舉辨官名喚之、若有身犯、指其人喚之、

凡一世源氏有犯、遣疏就彈之、

〔令義解七公式〕凡有事陳意見、〈謂、意者、心所意也、見者、目所見也、皆是心在忠正、披陳國家之利害者也、凡意見書者、其製稍異、不可爲表、而直上太政官、不由中務省、故云少納言受得奏聞也、〉欲封進者、即任封上、少納言受得奏聞、不須開看、若告言官人害政、及有抑屈者、彈正受推、〈謂、於意見書、有所告言者、其意見書、皆先奏聞、而後隨事各下所司也、〉當理奏聞、〈謂、案奏彈式、非應奏、及六位以下、並糺移所司推判、但於此條者、元非應所彈奏、又既先經奏聞、故雖五位以上、不至解官及六位以下、而其所告言當理者、並皆奏聞也、〉不當理者彈之、〈謂、所告言无理、及事不實者、並皆彈正准狀推決、但徒以上者、可送刑部、〉

〔令集解五職員〕古記云、〈中略〉○凡聞官司枉判官〈○官字恐衍〉者、案覆得實、然後奏聞、官司及鄉閭蔽匿殺人若盜賊等事、而不顯申者亦追問、

省之中、或朝廷之中、其於過失發處、卽隨見隨聞、無隱蔽而糺彈、其有犯重者、應請則請、當捕則捉、若對捍以不見捕者、起當處兵而捕之、當杖色、乃杖一百以下、節級決之、亦犯狀灼然、欺言無罪、則不伏辨、以爭訴者、累加其本罪、

〔延喜式彈正四十一〕凡彈正不得彈太政大臣、太政大臣得彈彈正、其左右大臣與彈正、若有非違者、各得互彈、

〔令集解職員五〕釋云、〇中略凡彈親王諸王諸臣三位已上及參議者、就其前坐彈之、弼以上官在臺座、而遣忠若巡察等一人、就其前座而彈之、其坐臨事、預仰所司設焉、被彈人者、初下座稱唯、若不下者亦彈之、彈竟之後、亦下稱唯、其彈親王及左右大臣者、跪於殿上彈之、不得設座、若臺座無弼已上官者、待弼以上彈之、其四位以下不問王臣、皆喚於臺彈之、五位已上設座、其被彈人下座稱唯同上、若座無弼以上官者、不得輙彈五位已上、（自餘彈事具見彈例、）

〔令集解職員五〕古記云、〇中略親王及三位以上者、遣大忠以下巡察以上、就座昇廳糺彈、以下皆於臺追糺正彈、但五位以上聽（聽下恐脫設字）席、若彈問有爭者、三位以上、追家令等問定、事猶不明、遣大忠以下巡察以上問定、

〔令集解職員五〕古記云、〇中略凡有彈事者、大忠以下、不得輙追彈五位以上、必須弼以上判、然後彈之、

〔政事要略六十一〕彈例云、若座無弼已上官者、不得輙彈五位已上者、若座無佐、縱雖有尉、至于五位以上、猶以不可推勘也、（已稱無弼已上官也、以佐准弼之由、見看督使部也、雖大夫尉、待佐可行、）

〔延喜式彈正四十一〕凡彈親王及左右大臣者、弼以上在臺座、而遣忠一人於堂上彈之、諸王諸臣三位已上及參議者、就其前座彈之、（預仰所司令設座）四位已下不問王臣、皆喚其身於臺彈之、（五位已上設座）其被彈人者、起座稱唯、彈竟之後、亦起稱唯、若不起者亦彈之、

凡彈大納言以下者、就第二堂座彈之、太政官廳不得、

古事類苑

法律部十五

上編

糾彈

糾彈制度

糾彈ハ、彈正臺ノ職ニテ、左右兩京、五畿七道ノ非違ヲ彈奏ス、而シテ太政大臣ノ外、親王以下罪ヲ犯セルアリテ糾劾スベキニ、未ダ其實ヲ審ニセザルトキハ、並ニ推考セズシテ狀ニ據リテ勘問シ、委ニ事ノ由ヲ知リテ後ニ、官人ハ解官以上ニ當リ、無品親王ハ徒罪以上ニ當レバ奏彈ス、無品親王杖罪以下、及ビ五位以上解官ニ至ラザル犯罪、若シクハ六位以下一切ノ犯罪ハ、並ニ彈正臺ヨリ、斷罪スベキ所司ニ移シテ推判セシム、然レドモ彈正ハ太政大臣ヲ彈ズルコトヲ得ズ、太政大臣ハ彈正ヲ彈ズルコトヲ得、但シ左右大臣ト彈正トハ、互ニ彈ズルコトヲ得、又封事ヲ上リテ官人ノ政ヲ害スルコトヲ告ゲ、或ハ抑屈セラルヽコトヲ訴フルコトアレバ彈正之ヲ少納言ヨリ受ケテ推問シ、理ニ當レバ奏聞シ、否ラザレバ彈劾ス、又官司ノ枉判、閭里ノ不法ヲ聞クトキハ、彈正ハ所由ノ人ヲ追喚シ、案覆シテ實ヲ得レバ奏聞ス、凡テ彈正臺ノ奏彈ノ事ハ、太政官ヲ經ズシテ直ニ奏聞ス、彈正ハ又毎月左右京ヲ巡察シ、東西市幷ニ諸寺ノ非違、客館路橋ノ破穢ヲ勘彈シ、狀ヲ量リテ決罰シ、月別ニ三度、諸司ヲ巡察シテ非違ヲ糺正シ、又毎日禁中ヲ除クノ外、宮城内外ノ非違、及ビ汚穢ヲ糺察ス、サテ糺彈ノ事ハ後ニ檢非違使ニ歸セリ、因テ今使廳糺彈ノ事狀ノ顯レタル者二三ヲ附記セリ

〔日本書紀二十九天武〕十一年十一月乙巳、詔曰、親王、諸王及諸臣至于庶民、悉可聽之、凡糺彈犯法者、或禁

斷罪 行決 (併入)

古事類苑

法律部十五

上編

糺彈

推鞫

過三日、此等抄寫程、既云案成以後讀令成制勅案、不別給程、即是當日成了、違令八十二字）限日、皆是有稽、稽而自擧者、同官文書法、仍爲公坐、亦作四等科斷、各以所由爲首、若涉私曲故稽、亦同私坐之法、

〔法曹至要抄 上 罪科〕一覺擧事

名例律云、公事失錯自覺擧者、原其罪、應連坐者一人自覺擧、餘人亦原之、疏云、謂長官以下主典以上、在案同判署者、一人覺擧、餘並得原、上文疏云、謂緣公事、致罪而無私曲者、事未發露而自覺擧者、所錯之罪得原、覺擧之義、與自首有殊、自首者知人將告減二等、覺擧既無此文、但未發自言、皆免其罪、

按之、職制律云、被詔書有所施行、而違者徒二年、失錯者杖八十者、假令官人詔勅施行未曉勅意、失錯、無私曲之類、自覺擧免其罪、又假令刑部省斷罪失錯、同判人一人覺擧者、連判官皆可原之類也、

又云、斷罪失錯已行決者、不用此律、疏云、謂死罪及笞杖已行決訖、流罪者至配所役畢、徒罪役訖、此等並爲已行決者、官司雖自覺擧、不在免例、各依失入法科之、故云不用此律、

按之、假令官人依失錯斷已行決者、雖覺擧不原、若失而斷徒二年、已役一年畢、一年未役者、從擧免、既役一年者、減本罪三等可科之類、按斷獄律、官司入人罪條云、斷罪失於入者、減三等之故、

又云、其文書稽程、連坐者一人覺擧、餘並原之、主典不免、若主典自擧、並減二等、

按之、公式令云、公案、小事五日程、中事十日程、大事廿日程、徒罪以上、辦定後卅日程者、過此日限、是稽程也、假令長官以下判官以上、一人覺擧者、餘人可免、主典不免、何者、職員令神祇官條云、大史一人、掌受事上抄勘署文案、撿出稽失、緣主典之故、若主典自擧、並減二等可科、若長官以下、連署擧者、判官以上並得免罪、主典尙減二等科之、

按之、合不原之類也、

又云、自首不實及不盡者、以不實不盡之罪罪之、至死者聽減一等、

按之、假令强盜得財之人、首云竊盜得財若干也、雖財首盡、仍以强盜不得財科罪之類、是不實不盡之罪也、又假令强盜卅端、首十五端、餘有十五端、本尙合死刑、以有其悔心之故、減死一等、可遠流之類、

又云、知人欲告、及亡叛而自首者、減罪二等坐之、卽亡叛者、雖不自首、能還歸本所者亦同、又云、四等五等親爲首、罪減三等、

又云、受財枉法、不枉法、受所監臨、及坐贓之類、悔過還主者、減本罪三等坐之、

按之、首告之時、與減類也、

自首例

〔續日本紀 三十二 光仁〕寶龜三年三月癸未、皇后井上内親王、坐巫蠱廢、詔曰、〇中略 今裳咋足島謀反事、自首之申世利、勘問賜爾申事波度年經月爾計利、法勘賜流足島毛罪在倍之、然度年經月氏毛臣奈何自首之申乎賀久勸賜比、冠位上賜比治賜波久止宣天皇御命乎、衆聞食止宣、〇中略 授從七位上裳咋臣足島外從五位下、

〇

覺擧

〔政事要略 八十四〕自首覺擧事

名例律云、公事失錯、自覺擧者、原其罪、謂、緣公事致罪而無私曲者、事未發露而自覺擧者、所錯之罪得免、覺擧之義、與自首有殊、自首者知人將告、減二等、覺擧旣無此文、但未發自言、(言原作首、今據唐律疏議改、)皆得免其罪、 應連坐者、一人自覺擧、餘人亦原之、謂長官以下、主典以上在案、同判署者、一人覺擧、餘並得原、 其斷罪失錯、已行決者、不用此律、謂死罪及笞杖、已行決訖、流罪者至配所、(謂死罪以下十六字原闕、依法曹至要抄補、)役了、徒罪役訖、此等並爲已行決者、官司雖自覺擧、不在免例、各依失入法科之、故云不用此律、假有人枉被斷徒二年、已役一年、官司然始自覺擧者、一年未役者、(者下唐律疏議有自字、)從擧免、已役一年者、從失入減三等、科杖八十之類、 其文書稽程、謂公小事五日程、大事廿日程、徒罪以上辨定後卅日程、此外不擧、是名稽程、 應連坐者、一人自覺擧、餘人並原之、主典不免、若主典自覺擧、並減二等、判官以上自覺擧者、並得全原、唯主典不免、若主典自覺擧、並減二等者、以判官以上不擧、故長官以下並減二等、如判官以上、主典連署□□□□(□□□□□依唐律疏議恐當作擧者判官、)以上並得免罪、主典仍減二等科之、其詔勅案成以後、(以後唐律疏議作以下、)其下有頒下、各給抄寫程、二百紙以下、限二百程、過此以外、每二百紙以下、加一日程、所加多者、不得過五日、注云、其赦書計紙雖多、不得

陳首能悔過還主者、聽減本罪三等、既云坐之、自依下例、即財主應坐者、減罪亦准此、謂受財枉法不枉法、受所監臨及坐贓與財人、各亦得罪、若取人悔過還主、得減三等、財主亦減本坐三等科之、若有貿易官物、復以本物却還、得免計贓爲罪、仍依盜不得財科之、若其非官本物、更以新物替之、雖復私自塡備、貿易之罪仍在、

〔政事要略八十四〕自首覺擧事

鬪訟律云、犯罪欲自陳首者、皆經所在官司申牒、犯罪未發、皆詐自新、其有犯罪、欲自陳首者、皆經所在官司申牒、其謀叛以上、有須掩捕者、仍依前條承告之法、謂謀反逆叛、爲有支黨、事須掩捕、仍依前條承告之法、謂若滿半日不掩、還同知而不告之罪、謂謀反大逆不告合死、謀大逆謀叛不告合流、

〔法曹至要抄上 罪科〕一自首事

名例律云、犯罪未發而自首者、原其罪、

按之、過而不改、斯成過矣、今悔過來陳首、可原其罪、

又云、輕罪雖發、因首重罪者、免其重罪、

按之、假令盜牛事發、自首鑄錢、鑄錢罪得原、盜牛之犯、仍坐之類也、

又云、因問所劾之事、而別言餘罪者、亦如之、

按之、假令犯罪事發、被推鞫之時、更言餘罪、亦得免其餘罪之類、

又云、遣人代首、若於法得相容隱者爲首、及相告言、各聽如罪人身自首法、

按之、假令甲犯罪、遣乙代首、不限親疎、可原之、同律云、同居若三等以上親等、爲相隱之親、家人奴婢爲主隱者也、此等親爲首、幷告言亦可原、又謀反大逆、及謀叛之〇之恐未字誤上道大逆未行之類、二等親捕送官司亦同、

一不自首事

名例律自首條云、於人損傷、即事發逃亡、若私越度關、及姧、幷私習天文者、並不在自首之例、疏云、謂犯罪之人、聞有代首爲首、及得相容隱者告言、於法雖復合原、追身不赴、不得免罪、謂止坐不赴者身、首告之人及餘應緣坐者、仍依首法、

故云、本應過失、聽從本、於物不可備償、本物見在、首者聽同免法、稱物者、謂璽官符常(常恐官印誤)旛幟禁兵器、及禁書之類、私家既不合有、是不可備償之色、本物見在首者、謂不可備償之類、本物見在、聽同首法、即事發逃亡、盜罪事發逃走、經數日而復陳首、犯盜已發、雖首不原逃走之罪、聽減二等、若越度關及姦、度關有三等罪、越度、私度冒度、其私度、越度、自首不原、冒度、自首合免、姦良人者、自首不原、幷私習天文者、並不在自首之例、從於人損傷以下、私習天文以上、俱不在自首之例、

〔政事要略八十四〕自首覺擧事

名例律云、犯罪共亡、輕罪能捕重罪首、犯罪事發、已囚、未囚、及同犯、別犯、而共亡者、或流罪、能捕死囚、或徒囚、能捕流罪首、如此之類、是爲輕罪能捕重罪首、重者應死殺而首者亦同、律稱應死、未須斷訖、准犯合死、逃走、輕者殺而來首、亦同捕首法、其流罪以下逃亡、輕者能捕重罪首者、捕法自準捕亡律、若死罪之囚、不必拘格、方便殺得者亦是、及輕重等獲半以上首者、皆除其罪、假有五人俱犯百杖、相共逃走、有一人心悔、更獲二人而首、即是獲半以上、從共亡以下、本罪及亡罪、並得從原、故云皆除其罪、又有犯百杖者十人同共逃走、六人歸首、又捕得逃者二人者、律開相捕之法、本爲少能捕多、輕能捕重、輕重等者、猶須獲半、今六人共獲二人、便是以多捕少、依如律義、不合首原、亡罪首減二等、本犯仍依法斷、若輕能捕重、所獲雖少、合原、如輕重罪同、不可首原、多獲少、亦須首獲數等、然可得原、又甲乙二人、輕重罪等、俱共逃走、甲捕乙首者、律稱獲半以上首者皆除其罪、甲乙共亡者、甲能獲乙、逃罪已盡、更無亡人、獲半尙得免罪、況其逃亡全盡、甲合從原、假有十人合死、俱共逃亡、五人捕得五人、亦是首獲相半、既關首捕之路、此類皆合全免、其五等以上親、犯罪共亡、不得捕首、有罪不得告言、藏亡尙許減罪、此捕爲凡人發例、不與親戚生文、若有捕親屬首者、得減逃亡之坐、本犯之罪不原、仍依傷殺及告親屬法、(法下唐律疏議有具犯二字、)謀叛以上、得依捕首之律、常赦所不原者依常法、謂雖會大赦、猶處流及死、若除名、免所居官、及移鄕之類、此等既赦所不原、故雖捕首亦不、(不下唐律疏議有合字、)免、即因罪人以致罪、而罪人自死者、聽減本罪二等、謂藏匿罪人、或過致資給、及保證不實之類、今罪人非被刑戮、而自死者、又聽減罪二等、若罪人自首、及遇恩原減者、亦准罪人原減法、謂因罪人以得罪、罪人於後自首、及遇恩原減者(者下唐律疏議有或得全原四字、)或減一等二等之類、一依罪人全原減降之法、其應加杖及贖者、各依杖贖例、假有官戶奴婢、犯流而被(被唐律疏議作爲字、)過致資給、捉獲官戶奴婢等、流罪加杖二百、過致資給者、並依杖二百罪減之、不從流減、其罪人本合收贖、過致資給者、亦依贖法、不以官當加杖配役、若官戶等犯流加杖二百、過致者應減、在律殊無節文、犯徒應加杖者、一等加卅、加至二百、當徒三年、乃至流、刑杖亦二百、比附刑名、止依徒減一等、加杖一百八十、

〔政事要略八十四〕自首覺擧事

名例律云、盜詐取人財物、於財主首露者、與經官司自首同、謂强竊盜、詐、謂詐欺取人財物、而能悔過、於財主首露、與經官司首同、若知人將告、而於財主首者、亦得減罪二等、假有甲盜乙布五端、經乙自首、乙乃取甲十端之物者、依律首者、唯徵正贓、甲既經乙(甲既經乙、原本作乙既經甲、今據唐律疏議改、)自首、因乃剩取其物、既非監主、而乃因事受財、合科坐之贓罪○之贓罪三字唐律無、其於餘贓○餘贓下、唐律疏議有應坐之屬、悔過六字、有還主者、聽減本罪三等坐之、謂盜詐之外、應得罪者、皆是、雖不於官司

又覺擧ト云フコトアリ、官人自ラ其罪ヲ覺リテ擧劾スルヲ云フ、卽チ自首ノ類ナリ、公事ニ因リ失錯シテ、自ラ覺擧スルトキハ其罪ヲ免ズ、長官以下、主典以上ノ內、一人覺擧スルトキハ餘人モ其罪ヲ原サルヽコトヲ得、但シ斷罪失錯シテ已ニ行決スル者ハ、此律ヲ用キズシテ、失入ノ法ニ依リテ之ヲ科ス、凡テ所司事ヲ受ケテ文書ヲ勘フルニハ、大中小事ニ隨テ各〻日限アルヲ、其程マデニ畢ラザルヲ稽程ト云フ、文書稽程シテ連坐スベキニ、一人覺擧スレバ、餘人ハ原サルヽコトヲ得レドモ、主典ハ原サレズ、主典自ラ覺擧スルトキハ罪二等ヲ減ズ、

〔政事要略八十四〕自首覺擧事

名例律云、犯罪未發而自首者、原其罪、過而不改、則成過矣、今能改過、來首其罪、皆合得原、若有文牒言告、官司判令三審、牒雖未入曹司、即是其事已彰、雖欲自新、不得成首、正贓猶徵如法、稱正贓者、謂盜者自首、不徵倍贓、併如法者、同未首前法、徵還官主、(徵還官主下、唐律疏議有枉法之類四字、)彼此俱罪者、猶徵沒官、取與不和、及乞索之類、猶徵還主、其輕罪雖發、因首重罪者、免其重罪、即因問所劾之事、而別言餘罪者、亦如之、劾者推鞫之別名、即遣人代首、假有甲犯罪、遣乙代首、不限親疏、但遣代首、即是、若於法得相容隱者、為首、及相告言者、各聽如罪人身自首法、此謂緣得容隱者、縱經官司告言、皆同罪人身首之法、其四等五等親相隱、既減凡人三等、若其為首、得減三等、緣坐之罪、及謀叛以上、二等親、雖捕告、俱同自首例、緣坐之罪者、謂謀反大逆及謀叛已上道者、並合緣坐、及謀叛以上者、謂非緣坐、若叛未上道、大逆未行、其二等親、雖捕告以送官司、俱同罪人自首法、其聞首告、被追不赴者、不得原罪、謂止坐不赴者身、謂犯罪之人、聞有代首、為首、及得相容隱者告言、於法雖復合原、追身不赴、不得免罪、謂止坐不赴者身、首告之人、及餘應緣坐者、仍依首法、即自首不實、及不盡者、以不實不盡之罪罪之、至死者聽減一等、自首不實、謂雖強盜得贓、首云竊盜、贓雖首盡、仍以強盜不得財科罪之類、及不盡者、謂枉法取財一十五端、雖首十四端、餘一端是為不盡之罪、稱罪之者、不在除免倍贓加役流之例也、自首贓數不盡者、止計不盡之數科之、假有竊盜十端、止首五端、五端不首、仍徒一年、是名止計不盡之數科之、贓多至死者減一等、其知人欲告、及亡叛而自首者、減罪二等坐之、即亡叛者、雖不自首、能還歸本所者亦同、謂不經官司首陳、歸初逃叛之所、亦同自首之法、減罪二等坐之、若本所移改、還歸移改之所、亦同、其於人損傷、損體為損、見血為傷、雖家人奴婢傷損、亦同凡人例、因犯殺傷、而自首者、得免所因之罪、仍從故殺傷法、本應過失者、聽從本、假有因盜故殺傷人、或過失殺傷財主、而自首者、盜罪得免、故殺傷罪仍科、若過失殺傷、仍從過失本法、

自首 覺擧 併入

自首トハ、己ガ所犯ノ罪ヲ以テ自ラ官司ニ訴フルヲ云フ、犯罪未ダ發セザルトキ、過ヲ改メ自首スルトキハ其罪ヲ原シ、正贓アレバ之ヲ徴ス、若シ其罪ヲ告言スル者アリテ、官司已ニ判シテ三審スルトキハ、（三審ノ事ハ告訴篇ニアリ）其文牒ハ未ダ曹司ニ入ラズトモ、其事已ニ彰レタレバ、本人ハ首ヲ成スコトヲ得ズ、又輕罪ノ已ニ發スルニ因リテ、重罪ヲ首スル者ハ、其重罪ヲ免シ、推鞫セラルヽニ因リテ、自ラ餘罪ヲ訴フル者ハ其餘罪ヲ免ス、又人ヲ遣シ代リテ首セシメ、若シクハ三等以上ノ親屬ノ如キ、相容隱スルコトヲ得ル者之ガ爲メニ首シ、及ビ同類互ニ訐キテ告言スルトキハ、罪人自首ノ法ニ同ジ、若シ犯罪人、其黨類ノ首告スルヲ聞キナガラ、追喚セラルヽニ赴カザルトキハ、止、其赴カザル者ノ身ヲ坐ス、又自首スレドモ實ヲ吐カズシテ、強盜シテ贓ヲ得タルヲ竊盜シタリト云フガ如キハ、是不實ノ罪ナリ、卽チ強盜不得財ヲ以テ科斷ス、或ハ盡クハ自首セズシテ、枉法取財十五端ナルヲ、十四端ナリト云ヒテ、一端ヲ匿スガ如キハ、是不盡ノ罪ナリ、卽チ枉法取財一端ヲ以テ科斷ス、又人ノ告ゲント欲スルヲ知リテ自首シ、及ビ逃亡シ、若シクハ叛人已ニ上道シテ自首スルトキハ、本罪ニ二等ヲ減ズ、但シ人ノ身體ヲ損傷シ、私家ニ有スルコトヲ得ズシテ、備償スベカラザル禁兵器、禁書ノ類ヲ毀失シ、及ビ犯罪ノ事已ニ發シテ後ニ逃亡シ、若シクハ關ヲ私度シ、越度シ、及ビ良人ヲ姦シ、幷ニ天文ヲ私習スル者ハ、自首ノ例ニアラズ、又犯罪ノ人、已ニ逃亡シタル後ニ、輕罪ノ人能ク同伴重罪ノ人ヲ捕ヘテ首シ、及ビ同伴ノ罪、輕重相等シキニ、半以上ノ人ヲ獲テ首スルトキハ、其罪ヲ除ク、又強盜、竊盜シ、或ハ詐欺シテ人ノ財物ヲ取リタル者、財主ニ首露スルトキハ、官司ニ自首スルト同ジ、

〔令集解 五 職員〕闘訟律云、監臨主司條云、部同伍保內、在家有犯、知而不糺者、死罪徒一年、流罪杖一百、徒罪杖七十、注云、犯百杖以下、保人不糺無罪、

府男醍醐に任觀阿闍梨と申人候、件人は三宮御持僧也、件人申云、去九月比に世間事相待間已遲遲、此事無術、然者參內ま氏可奉犯と申候也、仍兩三度參內して候まかども、無便宜天罷歸了申、仍醍醐を固天、件阿闍梨任觀を師醍醐座主勝覺に仰天召問、先撿非違使重時、盛重、爲守護道々行向之間、件阿闍梨去房間行向天盛重搦取了、廿二日庚申、今日被行任觀罪科、上達部兩三人參陣有定被行之、任觀配流伊豆大島、千手丸佐渡國、皆暫候撿非違使許、

〔百練抄五鳥羽〕永久元年十一月廿二日、諸卿定申阿闍梨仁寬罪名、配流伊豆國、黨類同處流罪、是去四日、院御所有落書、仁寬相語勝覺僧都大童子千手丸、欲危國家、事依露顯、遣撿非違使盛重所搦取也、

推問密告使

〔玉海〕壽永二年九月四日丙寅、前源中納言雅頼卿來、余(○藤原兼實)依疾隔簾謁之、世上事等多以談說、其中爲余有無用事等、去比義仲之許有落書、卽義仲所行、不當非法等、悉以注載、其次余不被登用、尤不便、爲朝之重器之由、具以載之云々、此事余邊事、不快に存之輩所爲歟云々、誠此事甚無由事歟、

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年十一月十三日辛酉、筑後權史生正七位上佐伯宿禰直繼、奉進新羅國牒、卽告、太宰少貳從五位下藤原朝臣元利萬侶、與新羅國王通謀欲害國家、禁直繼身付撿非違使、十七日乙丑、勅太宰府追禁少貳藤原朝臣元利萬侶、前主工王家人、浪人淸原崇繼、中臣年麻呂、與世有年等五人、以從五位下行大內記安倍朝臣興行、爲遣太宰府推問密告使、判官一人、主典一人、

不擧劾

〔法曹至要抄上罪科〕一不擧劾事

鬪訟律云、監臨主司、知所部有犯法、不擧劾者(○者字原無、今據唐律疏議補、)減罪人三等、卽同伍保內、在家有犯、知而不糺者、死罪徒一年、流罪杖一百、徒罪杖七十、其一(○一本無一字)家唯有婦女及男年十六以下者、皆勿論、又○見法曹類林、令抄、

案之、里長以上、知所部之人、有違犯法令格式之事、不擧劾者、減罪人罪三等、假有人犯徒一年、不擧劾者、得杖八十之類也、

今日識人非墨客　去年補者半田翁　外論向背詞雖怨　內接心情契自通
買物來時層更咲　訴言到處耳初聾　招留潤屋甕簾出　厭却檻袍閉戶籠
棄耻形容常失理　顧私行操豈思忠　登高只是銅山勸　在下猶因金穴空
不信宣尼貧樂道　祇看後輩富成功　宛如宿禰裁縫女　其奈朝臣造作工
鷺眼群飛分母子　鷹牙并走決雌雄　菅藏不住名先改　櫻笠長居命可終
人與新研珠不耳　我將古弊瓦相同　還慙困倍於原憲　唯庶僥多自石崇
開霧昔期攀曉桂　戴霜今歎類秋蓬　三千人裏頭梳雪　數十年前淚拭紅
色冷蒼蒼登砌月　聲寒札々繞床虫　悲哉柳市老無價　早晚此身欲奉公

〔日本紀略〈四村上〉〕天德三年七月十八日辛酉、今夜仁壽殿前落書云、金鑠井寒近、時人爲奇、

〔小右記〕萬壽五年〈〇長元元年〉八月十八日庚辰、去五日落書關白〈〇藤原頼通〉出云々、有天下事、道俗事、上達部以下惡事皆注載云々、往古來今、未有如此之落書云々、

〔中右記〕康和四年十月十九日、未時許爲御使參院、〈〇白河〉令申給事、〈座主可勸當事、妙香院事、新御願庄々事、〉此次從院令申御事、〈明年主上(堀河)御愼、能々御用心可候事、又一日院中有落書事、〉其文云、佛法ハ以火可滅、王威ハ以軍可亡、其期十月十七、廿五十一月五日也、但伊勢大神宮、八幡等〈爾〉可被祈者、若被祈申者、主上御平安者、此事雖不可信受、落書之體、非凡人手跡、又不記世間人惡、甚不得心、〈件皆可奏聞者、〉

〔殿曆〕長治二年十二月廿七日庚寅、於鬼間頭弁〈〇源重資〉云、御事也、下侍戶披ニ有文、其字云、備後介丸惡也、件事藏人仲光所爲云々、可有沙汰也、余申云、能々可沙汰也、

〔殿曆〕永久元年十月五日癸丑、去三日、皇后宮御方有落書、件書云、主上を〈〇鳥羽〉奉犯と有構人、件事は或人乃醍醐座主勝覺許に、千手丸と云童アリ、ト童をスカシテ構事也と書也、件書を自皇后宮院に令奉給也、仍有沙汰、雖落書可被尋由有御定、件千手丸を被搦了、被問件童、申云、件事實事也、事は左

唐ノケサウ文谷傍有欠（欲日本返事）
木頭切、月中破、（不用）
一伏三仰、不來待、書暗、降雨、慕漏寢、（如此讀云々）（ツキヨニハコヌヒトマタル、カキクモリアメモフラナンコヒツヽモネン）
粟天八一沼（加坂部）
戒令爲市ニハ有砂々々
又左繩足出（志女岐與都）

〔政事要略八十四〕古老云、昭宣公（○藤原基經）於堀河院、被行大饗日、漸及昏黑、有東帶六位、以袖掩面、插書於書刺、直地走寄、突入主人御前、逐電逃去、公取其書、不搦其人、王卿以爲、可何爲哉、須之召爲之者、於庭中令燒、不開彼書、不知何事、匿名之書、可從燒却、憲法之旨存其意歟、先賢之行、爲後記之、

〔將門記〕以去承平八年春二月中、武藏守興世王、介源經基、與足立郡司判官代武藏武芝、共各爭不治之由、如聞國司者、无道爲宗、郡司者正理爲力、（○中略）仍國書生等、尋越後國之風、新造不治悔過一卷、落於廳前、事皆分明於此國郡也、

〔本朝文粹（十二落書）〕櫻島忠信落書（依此落書、拜任大隅守云々、）
今春詔勅多哀樂　半盡開眉半叩頭　官爵專非功課賞　公私寄致賄勞求
除書久待買書致　直物遲期獻物收　右大閤賢歸衆望　左丞相佞損皇猷
初逢魚水恩波濁　共見駿河感淚流　不勸和風櫻獨冷　被霑暖露橘先抽
內臣貪欲世間歎　外吏沈淪天下愁　招集金銀千萬兩　沽亡山海十二州
秋夜書懷呈諸文友兼南隣源處士　藤原衆海（貫居老生）
見說北堂商賈隆　東西交易甚忩忩　文章博士儒宣下　太上天皇葬禮中
一院事哀憂未盡　兩家沽職悅無窮　三致泗水忘恩澤　橘使槐林損舊風

疏議曰、匿名之書不合撿校、得者卽須焚之、以絕欺詭之路、得書不焚、以送官府者、合徒二年、官司旣不合理、受而爲理者加二等、處徒二年、被告者、假令事實、亦不合坐、若是首不原事、以後別有人、論告還合得罪、輒上聞者、合徒三年、若得告反逆之書、事或不測、理須聞奏、不合燒除、

問曰、投匿名書告人謀反大逆、或虛或實、捉獲所投之人、未知若爲科罪、

答曰、隱匿姓字、投書告罪、投書者旣合流坐、送官者法處徒刑、以塞誣告之源、以杜姦欺之路、但反逆之徒、釁深夷族、知而不告、卽合死刑、得書不可焚之、故許送官聞奏、狀旣是實、便須上請聽裁、告若是虛、理依誣告之法、

〔法曹至要抄〔上罪科〕〕一落書事

鬪訟律云、投匿名書告人罪者徒三年、〇〔中略〕

案之、匿名成落書立簡札之者、可處徒二年也、且見付之輩、早可燒弃之矣、

〔續日本紀〔十七聖武〕〕天平勝寶元年二月丙辰、以朝庭路頭屢投匿名書、下詔敎誡百官及大學生徒、以禁將來、

〔類聚國史〔八十七刑法〕〕延曆十二年三月己酉、正親大令史正六位上多治比眞人彌高、散位從六位上櫻島部石守、並除名、以彌高監主取官物、石守投匿名書也、

〔江談抄〔三雜事〕〕嵯峨天皇御時落書多々事

嵯峨天皇御時、無惡善ト云落書世間爾多々也、篁讀云、无惡サガナクバ善ヨカリナマシト讀云々、天皇聞之給天、篁所爲也ト被仰天、蒙罪トスルノ處、篁申云、更不可作事也、才學之道然者自今以後可絕申云々、天皇尤以道理也、然者此文可讀ト被仰テ令書給、

十廿卅五十海岸香〔有怨落書也〕

二冂口月ハ三中トホス〔市中用小斗〕

告赦前事

得告、老少及篤疾之類、犯法既得勿論、唯知謀反逆叛、子孫不孝闕供養、及同居之內、為人侵犯、如此等事、並聽告舉、自餘他事、不得告言、官司受而為理者、各減所理罪三等、謂從被囚禁以下、減所推罪三等、假有告人徒一年、官司受而為理、合杖八十之類、若有人被囚、(囚下唐律疏議有禁字)更首別事、其事與餘人連坐者、官司合受科斷、律云、被囚禁、不得告舉他事、此既首論身事、非關別告他人、縱連徒人、官司亦合為受、被首之者、仍依法推科、

〔政事要略八十四〕鬪訟律云、以赦前事相告言者、以其罪罪之、官司受而為理者、以故入人罪論、至死者各近流、以赦前事相告言者、謂事應會赦、始是赦前之事、不合告言、若赦所不免、仍得依舊言告、假有會赦監主自盜得免、有人輙告、以其所告之罪罪之、告杖八十贓罪者、監主自盜、即合除名、告者還依比徒之法科罪、官司違法、受而為理者、以故入人罪論、若告赦前死罪、前人雖復未決、告者免死處近流、官司受而為理、至死者、亦得此罪、故稱各近流、其人准誣告條、至死而前人未決、聽減一等、流罪以下前人未加拷掠、而告人引虛、得減一等、又准官司入人罪、若未決放、聽減一等、有誣告赦前死罪、官司受而為推、不得依此條減例、依律以赦前事相告言者、以其罪罪之、官司為理者、以故入人罪論、此是赦前之罪並不許言告、論實尚無減例、誣告豈得減之、不至死者、俱無減法、至死者處近流、○杖八十唐律疏議作徒一年、若事須追究者、不用此律、追究、謂婚姻良賤、赦限外蔽匿、應改正徵收、及追見贓之類、謂違律為婚、養奴為子之類、雖會赦須離之正之、赦限外蔽匿、謂會赦應首及改正徵收、過限不首、若經責簿帳不首、不改正徵收、及應徵見贓、謂盜詐之贓、雖赦前未發、赦後捉獲正贓、(贓下唐律疏議有者字)是為見贓之類、合為追徵之、

〔續日本紀十三聖武〕天平十一年二月壬辰、勅二月二十六日赦書云、敢以赦以前事告言者、以其罪罪之、宜暫可停、若百姓心懷私愁、欲披陳者、恣聽之、巡察使宜隨事問知、具狀錄奏、勿依赦書罪告人、

投匿名書

〔政事要略八十四〕鬪訟律云、投匿名書、告人罪者、徒二年、謂絕匿姓名、及假人姓名、以避己作者、(者字據唐律疏議補)棄置懸之俱是、得書者、○者下唐律疏議有皆字即焚之、若將送官司者、杖一百、官司受而為理者、加二等、被告者不坐、輒上聞者、徒二年半、若得告反逆之書、事或不測、理須聞奏、不合燒除、

〔唐律疏議二十四鬪訟〕疏議曰、有人隱匿己名、或假人姓字、潛投犯狀以告人罪、無問輕重、投告者即得流坐、故注云、謂絕匿姓名、及假人姓名、以避己作者、棄置懸之俱是、謂或棄之於街衢、或置之於衙府、或懸之於旌表之類、皆為投匿之坐、假人姓名、經官司判入、言告人罪、從違令科、非是投匿、所以科違令、投匿告祖父母、科絞、告期親卑幼、減凡人二等、大功減一等、小功以下以凡人論、匿名書告它人部曲奴、依凡人法、是大功相犯、不合減一等二等、佗皆倣之、告緦麻以上親部曲奴、即依減法、○律文略

告親屬

〔政事要略八十四〕闘訟律云、告祖父母父母者絞、父爲子天、有隱無犯、如有違失、理須諫諍、起敬起孝、無令陷罪、若有忘情棄禮而故告者、絞、謂非緣坐之罪、及謀叛以上而故告者、緣坐謂謀反大逆、及謀叛以上、皆爲不臣、故子孫告亦无罪、緣坐仍同、下首法、故雖父祖、聽捕告、若故告餘罪者、父祖得同首例、子孫處以被刑、條準此、謂下條告二等尊長、情在於惡、欲令入罪、而故告之、故云準此、若因推劾事不獲免、隨解注引、不當告坐、卽嫡母、繼母、殺其父母、及所養者殺其本生、並聽告、○本書有誤脫、據唐律疏議補正、

又云、告二等尊長、外祖父母、夫、夫之祖父母、雖得實徒一年、依名例律、並相容隱、被告之者、與自首同、告者各徒一年、其告事重者、減所告罪一等、假有告二等尊長盜布十五端、合徒二年、尊長同首免罪、卑幼減所告罪一等、合徒一年半之類、所犯雖不合論、告之者猶坐、謂二等尊長以下、卑幼年八十以上、十歲以下、若篤疾犯罪、雖不合論、而卑幼告之、依法猶坐、卽誣告重者、加所誣罪三等、告三等尊長各減一等、四等五等減二等、誣告重者、各加所誣罪一等、卽非相容隱、被告者論如律、若告謀反逆叛者不坐、謂二等尊長以下、犯謀反逆叛三事、以其不臣、故雖論告、不科其罪、其相侵犯、自理訴者聽、謂二等以下、五等以上、或侵奪財物、或毆打其身之類、得自理訴、非緣侵犯、不得別告餘事、下條準此、謂下條告五等以上卑幼、雖有罪名、相侵犯亦得自理、

又云、告五等四等卑幼、雖得實杖六十、相隱既得減罪、有過不合告言、故雖不虛、卽得此坐、三等以上遞減一等、誣告重者、二等親減所誣罪二等、三等親減一等、四等以下親、以凡人論、卽誣告子孫、外孫、子孫之婦者、各勿論、誣告子孫之婦者、曾支亦同、其有告得實者亦不坐、被告得相容隱者、同自首之法、

〔裁判至要抄〕一處分外孫財不悔還事

闘訟律云、告外祖父母徒二年、疏云、或侵奪財物、或毆打其身之類、得自理訴、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字四年五月戊戌、右大舍人大允正六位下大伴宿禰上足、坐記災事十條傳行人間、左遷多褹島掾、告人上足弟矢代、任但馬目、

囚人告訴

〔政事要略八十四〕闘訟律云、被囚禁、不得告舉他事、其爲獄官酷己者聽之、人有犯罪、身在囚禁、唯爲獄官酷己者、得告、自餘他罪並不得告發、卽流囚在道、徒囚在役、身嬰鈦枷、或有援人(援人元板事刻唐律疏議作採人)亦同被囚禁之色、不得告舉他事、又准獄令、囚告密者、禁身領送、卽明知(明知下、唐律疏議有謀叛以上聽告、餘準律不得告舉十三字)卽年八十以上、十歲以下、及篤疾者、聽告謀反逆叛、子孫不孝、及同居之內、爲人侵犯者、餘並不

誣告一等、若加增其狀、得罪重於管冊者、減誣告罪一等、假有前人合徒一年、爲人作辭牒、增狀至徒一年半、便是剩誣半年、減誣告一等、合杖九十之類、若因雇(雇下唐律疏議有倩字)受財、得贓重者、同非監臨主司、因事受財坐贓之罪、如贓重、從贓科、贓輕者、從減誣告一等之法、卽受雇誣告人罪者、與自誣告同、上文爲人作辭牒、雖復得物、不雇誣人(人唐律疏議作告字)因有加增、(增下唐律疏議有得字)減誣告一等、此文卽受雇誣告人罪者、謂彼是同謀、本共誣(誣原作謀、據唐律疏議改)構、情規陷害、故與自誣告人罪同、贓重者、坐贓論、加二等、雇者從敎令法、假有人得布十二端、受雇誣告人一年半徒、坐贓論、十二端、合徒一年、加二等、卽徒二年之類(此下唐律疏議、有雇者從敎令法、六字、)依下條敎令爲從、減受雇者一等、仍得一年徒、若告得實、坐贓論、謂受布十二端、告得實事、合徒一年之類、雇者不坐、以其得實、故得无罪、

敎人告

〔政事要略八十四〕鬪訟律云、敎令人告事、虛應反坐、得實應賞者、皆以告者爲首、敎令爲從、得實應賞者、謂告博戲盜賊之類、令有賞文、或告反逆、臨時有加賞者、皆以告者爲首、敎令者爲從、其應賞在令有文、分賞元無等級、既爲首從之法、須准律條論之、又不可徒杖別作節之約、從杖一百之例、假如敎人、告杖一百、罪虛卽告者爲首、合杖一百、敎令爲從、合杖九十、卽從者十分減一、應賞義亦准此、假有輕重不同、並准十分爲例、卽敎令人告五等以上親、及家人奴婢告主者、各減告者罪一等、其有敎令人、自告五等以上親、或敎人家人奴婢告主者、告實及誣、各減告者罪一等、其告五等以上親、卽尊者坐重、卑者坐輕、家人奴婢告主皆絞、故云、各減告者罪一等、若敎奴婢等、告主二等以下親、律無別文、科不應爲、二等親及外祖父母從重、三等以下親從輕、被敎者論如律、謂被敎告五等以上親、及告主、各得本罪、各減所告罪一等、雖是死罪、亦減死罪流之、○各得本罪下、唐律疏議有若敎人告子孫者告子孫本既無罪十四字、雖誣亦同、雖敎誣告、亦減(減下唐律疏議有罪字)一等、既(既原本作卽、今據唐律疏議改、下同)上條祖父母父母誣告子孫外孫子孫之婦、各勿論、此條但云敎人告子孫、各減所告罪一等、既外孫以下、亦准敎令告子孫法、減所告罪一等、

比徒比笞

〔律疏名例〕凡除名者、比徒三年、免官者比徒二年、免所居官者、比徒一年、初位不用此律、除名、免官、免所居官、罪有差降、故量輕重節級比徒、初位非職事者、品秩卑微、誣告反坐、與白丁無異、故不用比徒之律、謂以輕罪誣人、及入出之類、故制此比、假有人告五位以上、監主內盜布三端、若事實盜者、合杖八十、仍合除名、若虛誣告人、不可止得杖罪、故反坐比徒三年、免官者、誣告五位於監臨外盜布五端、徒一年、仍合免官、若虛反坐、不可止科徒一年、故比徒二年、免所居官者、謂告人父母服內別籍異財、合杖一百、仍合免所居官、若虛反坐、不可止得杖罪、故比徒一年、及入出之類、謂不盜監臨內物、官人枉判作盜所監臨、或實盜監臨、官人判作不盜、卽是官司出入除名、比徒三年、若出入免官免所居官、亦依比徒二年一年之法、其藏匿罪人、若過致資給、或爲保證、及故縱等、有除免者、皆准比徒之例、故云之類、若所枉重、自從重、謂誣告及出入之罪、重於比徒之法者、自從反坐等重法、科之、不復仍准比徒之法、若誣僧尼應還俗者、比徒一年、依令、僧尼飲酒醉亂、及與人鬪打者、各還俗、假有人誣告僧尼與人鬪打者、若實並須還俗、既虛反坐比徒一年、其應苦使者十日、比笞十、依令、僧尼綾羅錦綺不得服用、違者各十日苦使、假有人誣告服用錦羅、若實十日苦使、既虛反坐笞十、官司出入者、罪亦如之、謂應斷還俗及苦使、官司判放、或不應還俗及苦使、官司枉入、各依此反坐徒杖之法、故云亦如之、失者各從本法、

切害者、不在此例、其前人合禁、告人亦禁、辨定放之、注云、切害、謂殺人、賊盜、逃亡、若强姦良人、及有急速之類、義解云、若其已然之後、不須更復爲切害、雖即已行、而餘緒侵淫、猶應爲害者、亦爲急速也、又條云、告密人、皆經當處長官告、受告官司、准法示語、確言有實、即禁身、據狀撿校、義解云、密者謀叛以上、又云、准三審之法、示語虛得反坐之狀、但事意急切、〇急切、令義解作切急、不可延時日、故即立、〇即立、令義解作立即、示語、至三而止、是名、〇名、令義解作爲字、准法示語、其〇其下、令義解有三字、示既訖、事如誣妄、即反坐之科、當依恒法者據此文、告謀叛以上者、當經三示、科其反坐、至于切害、稱非三審之例者、即爲事依急速、不致延緩也、所謂告切害之輩、非必急速、或名是切害、非登時事、或雖犯急速、既經年月、而偏依切害之名、不行三審之法、事不穩便、亦乖令條、今須告切害之中、有可依法爲急速者、更不經三審、若不〇不恐有字誤、可爲切害者、必經三審、同科反坐、但先追前人、後禁告人、若或經〇經恐誣字誤、告者、聞前人既被追禁之由、有隱遁者、雖所告虛妄、而反坐誰人中、〇中恐乎字誤、然則追禁之旨、將據本法、又依臨時宣旨、追勘之中、若有可令三審之色、猶經三審、有誣告者、隨即反坐、是依三審之中、有更悔者、亦无罪法之文也、又被殺被盜之類、雖虛不反坐者、是被侵犯有實、告言之旨、相誤之謂也、若故誣告者、同處反坐、如此則法令之旨、不失其宜、推類之理、亦无所滯、仍錄事狀、謹請處分者、左大臣〇藤原忠平、宣、奉勅依奏、但記勘之法、欲得其中、先追前人、後禁告人、須任寬平七年十二月二十二日符旨行之者、使宜承知、依宜行之、符到奉行、

延長七年九月十九日

鬪訟律云、告小事虛、而獄官因其告、撿得重事及事等者、若類其事、則除其罪、雖其事則依本誣論、告小事虛、而獄官因其告、撿得重事、(事下唐律疏議有實字、)者、假有告人盜布、撿得盜絹、其價又貴、是爲得重事、及事等者、假如告盜甲家馬、撿乃盜乙家牛、其價相似、是爲事等、若類其事、謂紵布絹綿及馬牛等色目相類、所告雖虛、除其妄罪、若告人私有弩、獄官因告、乃撿得具裝者、不得爲類、稱類者、謂其形狀難辨、原情非誣、所以得除其罪、然弩之與具裝、雖同禁兵、論其形樣、色類全別、事非疑似、元狀是誣、如此之流、不得爲類、雖其事者、謂告人盜馬、撿得鎗鏁之屬、是雖其事、(此下唐律疏議、有則依本誣論五字、)仍得誣告盜馬之罪、此條爲依告狀撿贓立文、不同獄官狀外求罪之例、

〔政事要略八十四〕鬪訟律云、爲人作辭牒、加增其狀、不如所告者、笞卌、謂爲人雇倩作辭牒、加增告狀者、若加增罪重、減

常律、當禁拷反坐、不可習臺事、因斯言之、所掌相兼、執行亦多、是則爲早糺人犯、忽決其罪也、而今或使等論云、既云〇云下恐脫准字弾正事者、爰知不可反坐誣告之人、比年所行、亦復如之者、方今嫌惡之輩、爲報私怨、僞誣死犯、告使所、隨即追禁犯人、推鞫之間、久苦禁獄、遂不承伏之日、僅及問告人、于時所告之事、是既虛也、須依法反坐、而偏稱准弾正事、直從放免、无更反坐、因茲撿非違使之職、還正事〇正事二字恐衍爲招誣之府、非據行法令、何以絕此亂計、撿獄令云、告言人罪、非謀叛以上〇此下令有若字者、皆令三審、若事有切害者、不在此例、其前人合禁、告人亦禁、辨定放之、注云、切害、謂殺人、賊盜、逃亡、若强姧良人、及有急速之類、鬪訟律云、誣告人、各反坐、注云、反坐致罪、准前人入罪之法、又條云、被殺、被盜、及水火損敗者、雖虛皆不反坐、斷獄律云、拷囚限滿、而不首者〇者字據唐律疏議補反拷告人、其被殺、被盜、家口親屬告者不反拷、注云、被水火損敗者、亦同者、按此等文、告謀叛以上、及切害者、不令更三審、鎖禁告人前人、推勘之日、若誣告者、隨即科反坐、除此以外、必令三審、若誣告者、亦同處反坐、但被殺被盜之家口親屬、非故誣告、不可反坐、今使等多糺切害之事、非有宜旨、无理訴訟之輩、仍告切害之日、不令三審、即以禁推前人、若有誣告者、須依反坐、而專稱准臺之詞、道不坐誣告之人、准撿法意、理不可然、望請處分、自今以後、若有誣告者、將處反坐、然則妄愁自絕使務亦正、但无禁告人者、恐告實之輩有所憚、亦望、若有告切害者、依舊例、先追前人、後禁告人、又依臨時宣旨、追勘之中、若有可令三審之色、不更三審、速以禁推、若有誣告、隨即反坐、其不可反坐之類、雖有對問、不更禁告人者、大納言正三位兼行左近衞大將皇太子傅民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅依奏者、命〇命恐令字誤撿按內、年來誣告、依舊濫訴猶多、非行反坐、何絕虛妄、而件官符被下之後、未有遵行、今欲據用、頗乖法意、何者所司引法式之文、與申請之旨相違也、謹按獄令云、告言人罪、非謀叛以上者、皆令三審、應受辭牒官司、並具曉示虛得反坐之狀、每審皆別日、受辭官人、於審後署記〇記下令有審訖二字然後推斷、義解云、告言人罪、皆當依實、若其虛妄者、自得反坐、故令其反覆、前人合禁、告人亦禁、欲其自盡、從初至三、故謂之三審、其末至三、而有更悔者、亦无罪法、同條云、若事有

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年八月辛酉、毀外從五位下丹比宿禰乙女位記、初乙女、誣告忍坂女王、縣犬養姉女等厭魅乘輿、至是姉女罪雪、故毀乙女位記、

〔續日本紀三十八桓武〕延曆四年十一月庚子、能登守從五位下三國眞人廣見、坐誣告謀反、合斬、減死一等、配佐渡國、

〔三代實錄十六清和〕貞觀十一年十月廿六日庚戌、太政官論奏曰、刑部省斷罪文云、貞觀八年、隱岐國浪人安曇福雄密告、前守正六位上越智宿禰貞厚、與新羅人同謀反逆、遣使推之、福雄所告事是誣也、至是法官覆奏、福雄應反坐斬、但貞厚、知部内有殺人者不擧訊、仍應官當者、詔斬罪宜減一等處之遠流、自餘論之如法、

〔三代實錄三十八陽成〕元慶四年十月廿六日丙午、太政官論奏曰、安倍吉岡、誣告大逆、罪當斬刑、詔減死一等、處之遠流、配佐渡國、

〔政事要略八十四〕太政官符、撿非違使、應依法反坐誣告人事、

一右彼使別當中納言從三位兼行右衞門督藤原朝臣恒佐奏狀偁、太政官去寛平七年十二月廿二日、給使等符偁、撿非違使別當中納言兼行左衞門督源朝臣光奏狀偁、撿非違使式云、凡使之所掌、准彈正彈〔○彈字據本書六十一所引撿非違使式補〕事、並依臨時宣旨行之、又條、諸司諸衞、及諸家官人以下、雜色以上等、若有犯過者、禁其身經本司、又條云、盜人不論輕重、停移刑部、別當直着馱、配收所〔○收所恐役所誤〕令驅使、女〔○女恐如字誤〕官當爲〔○爲恐收字誤〕贖、各依本法、自餘犯、普〔○普恐並字誤〕從常律、臺式云、聞官司枉判、及閭里犯法者、追所由人、勘問其由、得實應奏者、隨即奏、公式令奏彈式云、親王及五位以上、有犯應須糺劾、而未審實者、並據狀勘問、不須推拷、事大者奏彈、非應奏及六位以下、並〔○並原作普、據令改〕糺移所司推判、義解云、凡彈正是糺劾之職、非科斷之官、即不限有位无位、皆不須得〔○得字據令補〕推拷者、按是等文、使等文〔○使等文三字恐衍〕使等所掌、非啻准彈正之事、兼行追禁推拷之法、然則至准彈正、須自見及風聞、即糺彈其犯、但不可禁拷反坐、於從

人入罪之法、至死而前人(前人原作能字、今據唐律改)雖斷訖、未決者、反坐之人聽減一等、若誣人反逆、雖復未決、引虚不合減罪、其本應加杖及贖者、止依杖贖法、即誣官人及有蔭者、依常律、若告二罪以上、重事實及數事等、但一事實除其罪、重事虚、反其所剩、即罪至所止者、所誣雖多不反坐、其告二人以上、雖實者多、猶以虚者反坐、(謂告二人以上、但一人不實、罪雖輕猶反其坐、)若上表告人、已經聞奏、事有不實、反坐罪輕者、從上書詐不實論、

〔法曹至要抄上罪科〕一反坐事

名例律云、稱反坐、及罪之、坐之、與同罪者、止坐其罪者、並不在除免、倍贓、加役流之例、案之、誣告人者以其罪可反坐、若前人拷滿不首、亦可反坐者、可依聽贖并加杖之法、若官人雖告白丁、於除免罪告者、還不可得除免、尙依常律可減贖、凡本條、稱反坐、罪之、坐之、與同罪之類、不在除免加役流之例、亦無倍贓、又假令彈正臺、斷人有私、不以實者、亦可反坐之類也、

〔唐律疏議六名例〕諸稱反坐、及罪之、坐之、與同罪者、止坐其罪、(死者止絞而已)

疏議曰、稱反坐者、鬪訟律云、誣告人者、各反坐、及罪之者、依例云、自首不實不盡、以不實不盡之罪罪之、坐之者依例、

〔政事要略八十四〕鬪訟律云、誣告人流罪以下、前人未加拷掠、而告人引虚者、減一等、(誣告死罪、未決、即合減科、流罪以下、經拷訖、雖聞杖數多少、全移反坐、文言拷掠、爲有損傷、若未經拷、雖斷訖、引虚亦依減例、(誣告死罪以下、原書爲本文、今據唐律改、)事經奏訖者、則不減、若已配、計與拷掠不殊、亦非減限、)即拷證人、亦是、(雖不拷被告之人、拷傍證之者、雖自引虚、亦同已拷、不減、其誣告二等尊長外祖父母、夫、夫之祖父母、及家人奴婢、誣告主之二等親外祖父母者、雖引虚、各不減、)

〔續日本紀九元正〕養老六年正月壬戌、正四位上多治比眞人三宅麻呂、坐誣告謀反、○中略處斬刑、而依皇太子奏、降死一等、配流三宅麻呂於伊豆島、

〔唐律疏議二十三鬪訟〕諸誣告謀反及大逆者斬、從者絞、若事容不審、原情非誣者上請、若告謀大逆謀叛不審者、亦如之、

誣告

宮御宇橘豐日天皇〈○用明〉皇子、久米王之後也、天平十八年、授從五位下、寶字八年、任少納言、授正五位下、于時高野天皇、遣山村王收中宮院鈴印、大師押勝〈○仲滿〉遣兵、邀而奪之、山村王、密告消息、遂果君命、天皇嘉之、授從三位、薨時年四十六、

〔續日本紀〈三十稱德〉〕寶龜元年八月壬子、是日授從四位上坂上大忌寸苅田麻呂正四位下、以告道鏡法師姦計也、

〔續日本紀〈三十三光仁〉〕寶龜六年五月己酉、從四位上陰陽頭兼安藝守大津連大浦卒、大浦者、世習陰陽、仲滿甚信之、問以事之吉凶、大浦知其指意涉於逆謀、恐禍及己、密告其事、居未幾、仲滿果反、其年授從四位上、賜姓宿禰、拜兵部大輔兼美作守、

〔續日本後紀〈十三仁明〉〕承和十年十二月丙子、散位從五位上文室朝臣宮田麻呂之從者、陽侯氏雄、告宮田麻呂將謀反、　戊寅、禁告者氏雄于左近衞府、　癸未、告者陽侯氏雄、特授大初位下、任筑前權少目、以所告有端也、

〔三代實錄〈十八淸和〉〕貞觀十二年十一月十三日辛酉、筑後權史生正七位上佐伯宿禰直繼、奉進新羅國牒、即告、太宰少貳從五位下藤原朝臣元利萬侶、與新羅國王通謀欲害國家、禁直繼身、付撿非違使、　十七日乙丑、勅太宰府、追禁少貳藤原朝臣元利萬侶、前主工王、〈○主工王一本作主土上〉家人、浪人淸原崇繼、中臣年麻呂、與世有年等五人、以從五位下行大內記安倍朝臣興行、爲遣太宰府推問密告使、判官一人、主典一人、

〔日本紀略〈十一後一條〉〕長德二年十一月十一日丁丑、今日依密告前帥〈○藤原伊周〉入京之由、有敍位、〈從五位上平孝義、從五位下平倫範、〉

〔政事要略〈八十四〉〕鬪訟律云、誣告人、各反坐、〈凡人有嫌、遂相誣告者、准誣告輕重、反坐告人、〉即糺彈之官、挾私彈事不實者亦如之、〈反坐致罪、准前人入罪之法、至死而前人未決者、聽減一等、謂有憎惡前人、或朋黨親戚、挾私飾詐、妄作糺彈者、並同誣告之律、反坐其罪、准前

其犯死罪囚、及配流人、告密者、並不在送限、〔謂依律、因告密者、禁身領送、即知謀叛以上得告、餘罪不聽告舉也、配流人者、上道以後、六載以前、而負流名者也、〕應須撿校、及奏聞者、准前例、〔謂撿狀撿校、及馳驛奏聞、井留身奏聞等類、皆准上文、故云准前例、〕

〔金玉掌抄〕一八虐罪事

一曰、謀反、○中略 緣坐人知反情、〔鬪訟律云、知謀反大逆、不告隨近官司絞、〕

〔唐律疏議鬪訟二十三〕諸知謀反及大逆者、密告隨近官司、不告者絞、知謀大逆謀叛不告者、流二千里、知指斥乘輿及妖言不告者、各減本罪五等、官司承告、不即掩捕、經半日者、各與不告罪同、若事須經略、而違時限者、不坐、

〔北山抄四拾遺雜抄〕貶退事

密告之人、進其告狀、先閉諸陣、〔左衛門陣、小閉用之、〕諸衛佐等、候殿上之者、服布衣、帶狩胡籙、若有禁固之人、左右大辨、就左衛門射場勘問、令進過狀之後、任法行之、除目例等、見記文也、告人追〔○追原作進、據一本改、〕賜賞、〔二階〕以撿非違使佐、令退出洛外、以左右衛門尉堪事者、令送配所、〔昌泰例、撿非違使尉送之、〕擇日告諸社、又告諸陵、

〔懷風藻〕河島皇子一首

皇子者、淡海帝〔○天智〕之第二子也、志懷溫裕、局量弘雅、始與大津皇子、爲莫逆之契、及津謀逆、島則告變、朝廷嘉其忠正、朋友薄其才情、議者未詳厚薄、然余以爲忘私好而奉公者、忠臣之雅事、背君親而厚交者、悖德之流耳、但未盡爭友之益、而陷其塗炭者、余亦疑之、位終于淨大參、時年卅五、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年七月辛亥、授從四位上山背王、巨勢朝臣堺麻呂、並從三位、從八位上上道臣斐太都從四位下、正七位下縣犬養宿禰佐美麻呂、從八位上佐味朝臣宮守、並從五位下、並是告密人也、又上道臣斐太都、賜姓朝臣、

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年七月丁巳、初近衛從八位下物部礒浪、寶字八年、仲滿奪鈴印時、疾走告急、至是授外從五位下、　十一月癸亥、參議從三位治部卿兼左兵衛督大和守山村王薨、池邊雙槻

告密

成、不憚朝制、擅養鷹鷂、遂令當郡少領尾張宿禰宮守、六齋之日獵於寺林、因奪鷹奏進、勘須有違犯先言其狀、而凌侮國吏、輙奪其鷹、宜特決杖解却其任、

〔政事要略八十四〕勘申甲告言乙、未定可召、廻告狀間、乙亦告申甲、收其告狀、同共召問否之由事、

右被別當宣偁、甲告言乙、使等未定可召之由、廻見告狀之間、乙又告申甲、依告狀先後亦召問乙乎、為當收乙告狀、同共可召問甲乙哉、宜勘申其由者、謹撿鬪訟律云、被囚禁、○囚禁二字、據唐律補、不得告舉他事、說者云、被囚禁者、斷罪之間也、不得告舉他事者、被禁日始至于役畢決畢、不得告舉、夫○夫字、本書下文所引鬪訟律集解、作天下二字、人民犯狀者、據撿此文、被囚禁不可告他事、然則未禁之間、可無其制、方今甲告言乙、使等未定可召之由、廻見告狀之間、乙告申甲、既是非被禁之乙、依律論之、收其告狀、同共召問、可無妨難、仍勘申、

延喜廿二年九月一日　　在宗家勘草

〔令義解十獄〕凡告密人、皆經當處長官告、謂密者、謀叛以上、依律、非謀反逆叛、應密之事、而妄言有密故、其案下文及律、指斥乘輿、及妖言惑衆、亦為密例也、當處者、有密之處也、長官有事、經次官告、謂若無次官、亦告比界也、若長官次官俱有密者、謂此皆據國司、故下文云、聽與餘國相知者、所在國司、准狀收掩也、任經比界論告、受告官司、准法示語、謂准三審之法、示語虛得反坐之狀、但事意切急、不可延時日、故立即示語、至三而止、是為准法示語、其三示已訖、事如謹妄、即反坐之科、當依恒法、若未至三而引虛者、亦自依非審而妄言密之律也、確言有實、即禁身據狀撿校、謂撿校驗勘問也、若須掩捕者即掩捕、謂若賊類衆多、須待人兵、如此經略不即掩捕、故文云、應掩捕者即掩捕、即依律、官司承告、不即掩捕、經一日者、各與不告罪同、若事須經略、而違時限者、不坐、是也、應與餘國相知者、所在國司、准狀收掩、謂捕亡令云、若力不能制者、即告比國比郡、是也、事當謀叛以上、雖撿校、仍馳驛奏聞、謂雖撿校未訖、仍且奏聞有密之事、及發兵之狀、其承告之處、依捕亡令、唯奏聞發兵之狀也、指斥乘輿、及妖言惑衆者、撿校訖總奏、謂依律、指斥乘輿、情理切害、即非有切害、不可入密例也、承告掩捕者、若無別狀、不須別奏、謂假承告追捕謀叛、而實是謀叛者、不可更別奏、若得謀大逆者、仍合別奏之類也、其有雖稱告密、示語確不肯導、謂直云是密、不吐事狀、即依律、口稱有密、下辨仍執、是也、仍云事須面奏者、受告官司、更分明示語、謂先已三示、後亦三示、為其確執不導事狀、故分明更語示、乃過恒例也、虛得無密反坐之罪、謂無密者、律云、非密而妄言有密、是也、反坐者、律云、誣告謀反及大逆等、是也、又不肯導事狀者禁身、馳驛奏聞、謂留身所在、錄狀奏聞也、若直稱是謀叛以上、不吐事狀者、謂雖稱是謀叛以上、而不吐罪人姓名及謀計事狀也、給驛差使部領送京、若勘問不吐事狀、因失事機者、與知而不告同、

右云々仍謹請官裁

以前云々謹請官裁謹解

承和元年十一月五日　左少史坂本臣鷹野

承和二年五月廿九日一審

右少辨藤原朝臣當道　左少史坂本鷹野

同年六月二日二審

右少辨藤原朝臣當道

同年六月四日三審

判右中辨藤原副宗　左少史坂本鷹野

已上三審例

辨官記云、訴人進訴狀者、先由國郡司本司本屬、不理之由、慥加勘問、若日記在別紙、從返却、判訴人申、第一審例、其國其郡百姓其姓名申久所愁申事、无所可悔申、辨命之云（○命之恐命誤、下同、）某丸、訴人稱唯、命之若遣使勘問（給牟脫、）一事有誤違者、任法勘給（牟）宣、訴人（尓○尓恐等字誤）稱唯退出、登時聽審之官判署曰、記申、第二第三審判之候之、凡在廳坐、非公事不言語、縱雖公事、不得高聲、先後咳唾、廳上有失禮、曳靴爲聲、

〔政事要略八十四〕鬪訟律云、告人罪、皆須明注年月、指陳實事、不得稱疑、○中略違者笞卌、（但違一事、即笞卌、謂限未入司、○即得此罪、）官司受而爲理者、減所告罪一等、（官司若受疑辭爲推、並准所告之狀、減罪一等、即以受辭者爲首、若告死罪、處遠流、告流罪、處徒三年之類、○減罪一等、即五字據唐律補、）即被殺被盜、及水火損敗者、亦不得稱疑、雖虛皆不反坐、（被殺被盜、爲害特甚、或被人決水縱火、漂焚財物、盜即不限強竊、漂焚不問多少、告者皆須明注年月、不得稱疑、推問雖虛、不反坐、若稱疑者、官司亦不合受理、即雖受理、官司並得免科、）

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年五月己巳、尾張國海部郡主政外從八位上刑部粳虫言、權掾阿保朝臣廣

弘仁十年十一月十一日

一審

讀申右少史猨女副雄

右中辨大伴宿禰國道

少辨藤原朝臣村田

弘仁十三年七月廿二日

二審

記右少史猨女副雄

右少辨藤原朝臣村田

同月廿五日

三審

記右少史猨女副雄

右中辨大伴宿禰國道

少辨藤原朝臣村田

同月廿六日

〔政事要略八十四〕佐渡國三郡佰姓等謹解申請官裁愚狀事

合若干條

一守嗣根〇下文作副根爲求餘利捨舊館而更造新館之狀

右云々仍謹請官裁

一守副根獨貪濱〇濱上恐脫海字山澤之利之狀

告訴處分

得ズ、又年八十以上、十歳以下、及ビ篤疾ノ者ハ、反逆等ノ外ハ亦告グルヲ得ザルナリ、又己ノ名ヲ隱匿シ、若シクハ人ノ姓字ヲ假リ、潛ニ之ヲ街衢ニ棄テ、或ハ之ヲ衙府ニ置クアリ、之ヲ匿名書ト云ヒ、又ハ落書ト云フ、法律上ニ禁ズル所ニシテ、其書ヲ得ル者ハ即チ之ヲ焚クヲ以テ法ト爲シ、之ヲ以テ官司ニ送リ、及ビ官司ノ受理スルトキハ、倶ニ罪アリ、人罪ニハ、擧劾セザルヲ得ザルモノアリ、監臨主司ニシテ、所部ニ犯法ノ人アルヲ知レルガ如キ、同伍部内ニ犯罪ノ人アルヲ知レルガ如キ是ナリ、

〔令義解獄十〕凡告言人罪、非謀叛以上者、皆令三審、（謂、凡告言人罪、皆當依實、若其虛妄者、自得反坐、故令其反覆、欲其自審、從初至三、故謂之三審、其未至三、而有更悔者、亦無罪法也、）應受辭牒官司、（謂判官以上是也、）並具曉示虛得反坐之狀、每審皆別日、（謂可以一文牒告言、不須每審有文牒、又初告之日、文牒已入曹司、其後二審、直以口告、受辭官人、同牒後、別日署記也、）受辭官人、於審後署記、審訖、然後推斷、若事有切害者、不在此例、（切害、謂殺人、賊盜、逃亡、（謂賊者、劫囚之類、其殺人者、不論先後、盜及逃亡者、不問輕重、皆是、若殺家人奴婢、准律、亦比竊盜也、）若強奸良人、及有急速之類、（謂假如盜決堤坊、及欲放水火、以燒漂人家之類、事情急速、應追捕者、皆是、凡此二事、欲其未行之前、以時防遏、故爲急速、若其已然之後、不須更復爲切害、雖即已行、而餘黨浸淫、猶應爲害者、亦爲急速也、））其前人合禁、告人亦禁、（謂告人禁法、亦准前人、若有不同者、各依本法、其同伍告者、無心陷人罪、唯告事實狀、故不在禁限、）辨定放之、

〔唐六典刑部六〕凡告言人罪、非謀叛以上、皆三審之、應受辭牒官司、並具曉示虛得反坐之狀、每審皆別日受辭、若有事切害者、不在此例、

〔政事要略八十四〕伊賀國百姓解申進雜愁文事（外題云、右大臣奏、左大史任吉氏繼、三月十三日、）

合若干條

一高年民賑給預（乎）給（氏）即折留（之）民到（○到恐致字誤）愁狀

右云々望請官裁

一官（○官下恐脫舍字）器仗修理料遣不給愁狀

右云々望請官裁

古事類苑

法律部十四

上編

告訴

人ノ罪ヲ告言スルニハ、明ニ年月ヲ注シ、所犯ノ實狀ヲ指陳スルコトニテ、疑辭ヲ用キルヲ得ズ、若シ其事ノ誣告ニ出ヅレバ、反坐セラル、反坐トハ被告ノ受クベキ刑ヲ、告人ニ加フルヲ云フ、故ニ辭牒ヲ受クベキ官司ハ、初ニ虚妄ナラバ反坐スベキ狀ヲ曉示シ、而シテ後ニ三審ス、若シ審スルコト未ダ三ニ至ラズシテ、訴人自ラ其非ヲ曉リ、悔イ改ムルトキハ、反逆ノ外ハ罪セズ、然レドモ被殺、被盜、逃亡、犯姦ノ如キ、已ニ切害ナルモノハ、其訴ノ過誤ニ出ヅルモ反坐セズ、而シテ被告人ノ囚禁セラルベキ時ハ、告人モ先ヅ囚禁セラル、ナリ、

誣告反坐ニハ、比徒、比笞ノ法アリ、平人ニシテ官人ノ除名、免官、免所居官ニ當ル罪、及ビ僧尼ノ還俗、苦使ニ當ル罪ヲ誣告スル時ハ、之ヲ用キル、卽チ此等ノ刑ハ平人ニハ加フルヲ得ザレバ、杖笞ノ刑ニ比シテ處斷スルナリ、

人罪ヲ告言スルニ、最モ重キモノヲ告密トス、密トハ謀叛以上ヲ云ヒテ、乘輿ヲ指斥シ、妖言ヲ以テ衆ヲ惑ハスモ、亦密ノ例トス、此告人モ亦其身ヲ禁固シテ、後ニ勘問シ、更ニ罪人ヲ掩捕スルナリ、

人罪ニハ、訴フベカラザルモノアリ、三等以上ノ親ノ罪ハ、容隱スルコトヲ得ル法ナレバ、祖父母、父母ノ罪ハ、訴フルコトヲ得ズ、又囚人ハ獄官ノ己ヲ虐スル時ノ外ハ、人罪ヲ告グルヲ

古事類苑

法律部十四

上編

告訴

自首 覺擧 併入

權右中辨藤原朝臣在判

勅裁

〔愚管抄四〕さて又當時〇後三條氏の長者にては、大二條殿〇藤原教通おはし召けるに、延久の比、氏寺領國司と相論の事有けるに、大事に及て、御前にて定めのありけるに、國司申かたに裁許あらんとせければ、長者の身、面目をうしなふ上に、神慮又はかりがたし、たゞ聖斷を仰べし、伏て神の告をまつとて、すなはち座を立れにけり、藤氏の公卿舌をまき口をとぢてけり、其後山科寺に、もとの如く裁許有ければ、衆徒さらに又長講初めて、國家の御祈しけりと、親經と申中納言、儒卿にてこそさいがくの者にて語りけれ、

滯訟

〔中右記〕永久六年〇元永元年正月十五日戊戌、參院〇白河候院北面間、依仰參御前、密々被仰云、大神宮神人等訴申遠江國司事、不裁決及數月、甚恐思之由可云關白也、如此事恐其咎及高、仍只任理可決斷者、申承之由退出、

不理訟

〔續日本紀十二聖武〕天平七年九月庚辰、先是美作守從五位下阿倍朝臣帶麻呂等故殺四人、其族人詣官申訴、而右大辨正四位下大伴宿禰道足、中辨正五位下高橋朝臣安麻呂、少辨從五位上縣犬養宿禰石次、大史正六位下葛井連諸會、從六位下板茂連安麻呂、少史正七位下志貴連廣田等、六人坐不理訴人事、於是下所司科斷、承伏既訖、有詔並宥之、

嫡不行(○行恐所字誤)分者、縱兼(○兼下恐脫政字)所分雖有其實、於兼俊領非歟(○歟恐取字誤)返限歟、能可被操(○操恐採字誤)尋也、左兵衞督、右衞門督、(○源雅定)民部卿、(○藤原忠教)同右宰相中將、新大納言同下官、內大臣(○源有仁)申云、大略同右宰相中將定申、但件盛範之所進兼政契狀、且諸卿可一覽也、兼政之所爲不落居上、(子所領、恐取返事也、)手跡已他筆草名也、又相違其旨、已顯然也者、盛範結構、已以顯然也、先於兼俊自領、兼長領知可不有其妨歟、此後遞證文等比校處、其名已相違、人々雖被稱其由、於下官不令申左右、明法定勘申歟、未書定文、先以左兵衞督、申所勞由於內府退出、

〔久志本常辰反故集記〕左辨官下伊勢大神宮

應任本領主散位源朝臣義國起請幷源義淸陳狀、以權禰宜荒木田神主範明、如元爲口入神主、二所大神宮御領下野國簗田御廚事

右得彼範明去平治元年十二月九日陳狀偁、今月七日宣旨、同九日到來偁、去月十一日義淸陳狀偁、今月三日宣旨同日到來偁、得範明去十月九日解狀偁、件御廚義國雖有領知之理、故利光神主同意家綱、不承引之間、義國致訴訟、經年序之間、以親父元定神主、永相傳于子孫、可爲口入人之由依令起請、以件起請上分口入料之由、元定又分與外宮一禰宜故彥忠神主之由起請畢、以義國之寄文、請廳判、元定今渡與義國、其後義國經院奏之剋、論人利光同以言上、聞食兩方之理非、義國得理畢、仍任起請、元定備進二宮御上分之間義國卒去、義康相傳御廚、元定又卒去、凡所預置于範明文書等舍兄氏定盜取之間、彼御廚沙汰文書掠取畢、以件文書可致橫妨由依令風聞、相觸子細於義康之處、且任義國之起請、御廚上分口入料敢無相違、範明所致沙汰也、(○中略)權中納言藤原朝臣雅敎宣、奉勅宜任本領主義國起請幷義淸陳狀、以範明如元爲口入神主者、宮宜承知、依宣行之、

永曆二年五月一日　大史小槻宿禰(在判)

外、已後爲法內、自茲已後、諸訴訟者、內決已事、不敢公庭、

〔中右記〕大治二年六月十六日、左少弁實親、右大史中原兼孝、於一本御書所、問注彌勒寺講師寛嚴、并散位國兼、是依宇佐大宮司、并鎭西受領訴也、

〔長秋記〕長承元年五月十五日甲戌、大臣仰官人召取文云、次第申之、秉燭大弁開文讀之、(○中略)

一進士盛範、與兼長相論所領三箇所、

兼長解云、件論地三ヶ所中、於二所親父兼俊、始所買得也、於今一所、祖兼政所讓父兼和(○和恐俊字誤)也、隨以件三ヶ所、兼俊所分兼長、次第公驗顯然也、而伯父盛範、兼俊兼政死去後、構謀書欲妨件領三ヶ所、其所進文書狀云、嫡子兼俊不慮外死去、須令嫡孫領知嫡子分也、然而孫兼長、心操不落居者、立二男盛範爲嫡子、可令行所分者、件文非兼政手跡、非兼政草名、何讓時書自筆、改時用他筆、又件改易又、(○又恐文字誤)兼政病期書自筆、更有何煩哉、又改所分而取返中、已有兼俊私領二所、於件所不叶返取文者、範口(○恐當作盛範)解狀云、兼政已以盛範立嫡、可行所分之由契狀顯然也、付彼契狀、盛範可行所分者、明法勘申云、付財主兼政契狀、盛範可行所分、但所被下勘證文遯案書也、給正文可勘見者、件文於御前御覽合處、其文無相違、仍重不可被下勘由頭弁(○源師俊)云上卿院宣云々、右宰相中將定申云、如法家勘申、被下正文、重勘狀後可被裁許歟、左大弁(○藤原實光)申云、被下正文事、同右宰相中將定申、但件所領中、兼俊之所儲相交由、前年所定申關白殿(○藤原忠通)也者、兼長所申有其實、慥尋問彼是、依實可被裁許歟、右兵衛督(○藤原顯賴)同右宰相中將、左宰相中將(○藤原宗能)申云、盛範所進證文、其疑尤多、一以嫡子私儲所領取返由載契狀、一改契狀時、於兼政無所勞、而借他筆令書條非無疑、一盛範之所進公驗二通中、其草名相違、如此疑殆端多者、被下正文可被勘也、改(○改恐所字誤)分事、證署灼然時議也、件證文多其疑、何忽一決哉、中宮權大夫(○藤原忠宗)申云、返取以(○以恐衍)兼俊私領分地子條、雖祖兼政所爲、尙爲孫訴也、其由慥可被相尋、於文書重可被下勘歟、下官(○源師時)申云、同中宮權大夫、父祖所行、於子孫雖不可違、兼政之契狀立

延喜十四年四月廿八日、從四位上行式部大輔臣三善朝臣淸行上封事、

〔令義解十獄〕凡察獄之官、先備五聽、謂五聽者、一曰辭聽、觀其出言、不直則煩、二曰色聽、觀其顏色、不直則赧然、三曰氣聽、觀其氣息、不直則喘、四曰耳聽、觀其聽聆、不直則惑、五曰目聽、觀其眸子、不直則眊然也、又驗諸證信、事狀疑似、猶不首實者、然後拷掠、

〔唐六典六刑部〕凡察獄之官、先備五聽、

一曰辭聽、二曰色聽、三曰氣聽、四曰耳聽、五曰目聽、

〔周禮註疏三十五〕小司寇之職、掌外朝之政、以致萬民而詢焉、○中略以五聲聽獄訟、求民情、疏、以五至民情、釋曰、案下五事、惟辭聽一是聲、而以五聲目之者、四事雖不是聲、亦以聲爲本故也、案呂刑云、惟貌有稽在獄定之後、則此五聽亦在要辭定訖、恐其濫失、更以五聽觀之、以求民情也、一曰、辭聽、註、觀其出言、不直則煩、疏、註、觀其至則煩、釋曰、直則言要理深、虛則辭煩義寡、故曰、不直則煩、二曰、色聽、註、觀其顏色、不直則赧然、赧女板反、疏、註、觀其至赧然、釋曰、理直則顏色有厲、理曲則顏色愧赧、小爾雅云、不直失節、謂之慙愧、面慙曰赧、心慙曰恧、體慙曰逡、三曰、氣聽、註、觀其氣息、不直則喘、喘昌兗反、疏、註、觀其至則喘、釋曰、虛本心知、氣從內發、理既不直、吐氣則喘、四曰、耳聽、註、觀其聽聆、不直則惑、聆音零、疏、註、觀其至則惑、釋曰、尚書云、作德心逸日休、作僞心勞日拙、觀其事直、聽物明、審其理、不直、聽物致疑、五曰、目聽、註、觀其眸子、視不直則眊然、眸目侔反、劉無不反、眊莫報反、本又作旄同、疏、註、觀其至眊然、釋曰、目爲心視、視由心起、理若直實、視眄分明、理若虛陳、視乃眊亂、

〔日本書紀十八安閑〕元年閏十二月、武藏國造笠原直使主、與同族小杵相爭國造、使主、小杵、皆名也、經年難決也、小杵性阻有逆、心高無順、密就求援於上毛野君小熊、而謀殺使主、使主覺之、走出詣京言狀、朝廷臨斷、以使主爲國造、而誅小杵、

〔日本書紀二十二推古〕十二年四月戊辰、皇太子親肇作憲法十七條、○中略五曰、絕餮棄欲、明辨訴訟、其百姓之訟、一日千事、一日尙爾、況乎累歲、須治訟者、得利爲常、見賄聽讞、便有財之訟、如石投水、乏者之訴、似水投石、是以貧民則不知所由、臣道亦於焉闕、

〔藤原家傳下武智麿〕大寶二年正月、遷中判事、公莅官聽事、公平无私、察言觀色、不失其實、決疑平獄、必加審愼、雖有大小判事、其官方无准式、文案錯亂、問辨不允、於是識事前後、奏定條式、大寶元年已前爲法

一請停止依諸國小吏幷百姓告言訴訟差遣朝使事

右臣伏以、牧宰者、分萬乘之憂、受一方之寄、守六條之紀綱、爲兆民之領袖、故漢宣帝云、與朕共理者、其唯良二千石乎、必須擇用其才、尊崇其職、重官威而厭民心、捨小瑕而責大成、而比年任用之吏、或結私怨以誣告官長、所部之民、或矯公事以怨訴國宰、或陳犯用官物之狀、或訴政理違法之由、此等條類、千緒萬端、於是朝家收其告狀、發遣使人、使人到國、未問事之虛實、不辨理之是非、偏依使或每事准擬、領其印鎰、嚴其禁錮、即以官長之貴、與小吏賤民、比肩連口、受其推鞠、若辭對之間、纖芥有違、則立加縲紲、便塡牢狴、若亦雖告訴之旨事皆不實、而威權已廢、政令不行、爰隣境百姓、轉相見聞、即各輕侮其官長、不肯服從其政教、傷化之源無甚於此、況亦理劇之任、庶務多端、曉夕僶俛、猶有不追、而今朝使推問之間、被停釐務、多歷旬月、空廢治政、縱雖免贓吏之名、而猶成任中之怠、秩滿之日、遂拘解由、如此則多致公損、徒滅良吏、助此訴人報彼私怨也、前年阿波守橘秘樹、肅清所部、底愼貢、勤王之誠當時第一、必須殊加奬擢以勵後良、而依小民之誣告、降朝使之廉問、雖事皆虛詐告人逃亡、已而秘樹之身、亦爲廢人、如此則知耻之士、誰冀爲吏乎、方今時代澆季、公事難濟、故國宰之治、不能事々拘牽正法、故或有枉尺而直尋者、或有失始而全終者、昔者龔遂爲渤海守、奏曰、請勅丞相御史、且勿拘臣以文法、令得便宜從事、又本朝格云、國宰反經制宜、動不爲己者、將從寬恕無拘文法者、伏望此等告言訴訟、除謀反大逆之外、一切停止朝使、專附新司、若實有犯過者、具載不與解由狀、勘判之後、即下刑官論其罪科、或難云、凡厥貪吏之盜官物、宜速加糺察也、若待其任終、恐倉庫無餘、答云、假令有人告申吏盜贓、爰太政官、即馳輕騎晝夜兼行、禁遏其姦者、事若可爾、而今訴人告狀、歷三審之程、得奏下之比、擇定使人之間、裝束行程之限、事自彌留、度歷年紀、其間若有心盜犯者、豈遑遺一粒乎、然則與彼附後司、有何分別、況此牧宰等、身出帝簡、志報朝恩、非唯求立績於明時、亦皆念垂名於後代者也、故比年陷此罪者、皆爲公謀功、未成之間、俄被告言而已、未曾有自犯入己之人焉、靜尋其意、誠是公罪也、伏望暫褰天旒、照其可否、○中略

推訴使

帥一人、掌〇中略糺訟、〇中略大判事一人、掌案覆犯狀、所謂案覆管國所申犯狀也、斷定刑名、判諸爭訟、少判事一人、掌同大判事、大令史一人、掌抄寫判文、少令史一人、掌同大令史、

〔令義解職員一〕大國

守一人、掌〇中略訴訟、

〔職原抄下〕撿非違使

此云使廳、本所乃靫負廳、淳和天皇御宇天長年中初置之、〇中略朝家置此職以來、衛府追捕、彈正糺彈、刑部判斷、京職訴訟、併歸使廳、仍爲國家之樞機、歷代以爲重職者也、

〔文德實錄七〕齊衡二年閏四月丙午、太宰府馳驛言、日向守從五位下卽峯王、發兵將殺推訴使正五位下田口朝臣房富、有司奏讞詔免官爵、〇刊本作討、據類聚國史改、

〔類聚三代格七〕太政官符

定詔使官使事

右頃年之間、爲推民訴、遣使四方、或國司等對捍使者、不承勘問、捍侮之辭、觸類多端、遂乃使旨不展、徒然引歸、冤屈之民、累年懷愁、路次之驛、空疲迎送、稍尋其由、緣無使威、詔使臨界、豈如此乎、左大臣宣、奉勅、度時立制、古今攸貴、宜定使色、以肅將來、其巡察覆問、〇問政事要略作因、撿稅交替、畿內校班田、問民苦并訴等使、並准詔使之例、賑給、撿損田、池溝、疫死等使、猶爲官使、但遣使之旨出於勅語、卽是等所謂詔使而已、不可更限事之輕重、

天長二年五月十日

〔三代實錄二清和〕貞觀元年三月四日庚申、遣左衛門少尉正六位下紀朝臣今影、右衛門大志從六位上櫻井田部連貞雄麻呂於河內和泉兩國、辨決陶山之爭、

〔本朝文粹二意見封事〕意見十二箇條

善相公淸行

聽訟官衙及吏員

聽訟

上古ノ訴訟ハ、刑部省、幷ニ左右京職、攝津職、及ビ國司等ニテ之ヲ聽ク例ナリ、後檢非違使廳ニテモ、亦之ヲ聽ケリ、而シテ當時聽訟ハ、最モ愼重ヲ尙ビ、五聽ノ法等アリキ、猶ホ訴訟ノ條ト參照スベシ、

〔倭名類聚抄五職官〕刑部省〈宇多倍多々須都加佐〉

〔令義解一職員〕刑部省〈管司二〉

卿一人、〈掌鞫獄、定刑名、〈謂、覆審解部所鞫、與判事以上共斷定也、依獄令、在京諸司事發者、犯徒以上、送刑部省、其衛府糺捉罪人、非貫屬京者、皆送刑部省、又云、刑部省斷流以上者、皆連寫案、申太政官、然則死以下、笞以上、皆合推斷也、〉決疑讞、〈謂、讞請也、正也、依同令、國有疑獄不決者、讞刑部省是也、〉良賤名籍、〈謂、良賤訴賤、賤訴良、判斷簿書、是爲名籍也、〉囚禁、債負、〈謂、徵財曰債也、受貸不償曰負也、卽六贓之類、〉及諸合沒官者、此省皆掌事、〉大輔一人、少輔一人、大丞二人、少丞二人、大錄一人、少錄二人、史生十人、大判事二人、〈掌案覆鞫狀、斷定刑名、判諸爭訟、〉中判事四人、〈掌同大判事、〉少判事四人、〈掌同中判事、〉大屬二人、〈掌抄寫疑判文、〈謂、唯爲抄寫、別注、其餘檢出稽失等者、一准神祇史、〉〉少屬二人、〈掌同大屬、〉大解部十人、〈掌問窮爭訟、〉中解部廿人、〈掌同大解部、〉少解部卅人、〈掌同中解部、〉省掌二人、使部八十人、直丁六人、

〔令義解一職員〕治部省

大解部四人、〈掌鞫問譜第爭訟、〈謂、窮問譜第之爭訟、定其族姓之序、其解部是爲別司、不在同員也、〉〉少解部六人、〈掌同大解部、〉

〔令義解一職員〕左京職〈右京職准此、管司一、〉

大夫一人、〈掌、〇中略、訴訟、〈謂、凡訴訟者、皆自下始、故先由京國、而後至官省也、〉〉

〔令義解一職員〕攝津職〈帶津國、〉

大夫一人、〈掌、〇中略、訴訟、〉

〔令義解一職員〕太宰府〈帶筑前國、〉

〔台記〕久安三年七月四日丙寅、頭弁持㆓來史注進感神院濫訴文㆒、仰曰、今日廢務、明日可㆑奏、弁曰、廢務日無㆑憚㆓奏文㆒、廢朝憚㆑之、余〇藤原頼長曰、廢務奏文未㆓曾聞㆒事也、猶明日可㆑奏、弁出、後日責㆓問廢務奏文之證㆒、弁無㆑所㆑陳、或人語云、史具㆓注感神院事㆒、持㆓向頭弁資信朝臣許㆒、頭弁曰、如㆑此注文者忠盛朝臣罪過尤重、卽令㆓書改㆒、遣㆓感神院所司等所㆒、所司等不㆑知㆓書改㆒、加㆑判返上云々、

〔源平盛衰記 四〕豪雲僉議事

抑豪雲ト云ハ、二品中務親王具平七代ノ孫、民部大輔憲政ガ子也ケリ、訴訟ノ事有テ後、白河法皇ノ御所ニ參ス、折節法皇南殿ニ出御有テ御坐ス、イカナル僧ゾト御尋アリ、山僧攝津竪者豪雲ト申者ニテ侍ト奏シタリ、法皇被仰下ケルハ、實ヤ和僧ハ山門僉議者ト聞召、己ガ山門講堂ノ庭ニテ僉議スルヲン樣ニ、只今申セ、訴訟アラバ直ニ可被裁許ト、豪雲蒙勅定、頭ヲ地ニ傾畏テ奏シケルハ、山門ノ僉議ト申事ハ異ナル樣ニ侍、歌詠スル音ニモアラズ、經論ヲ說音ニモ非、又指向言談スル體ヲモハナレタリ、先王ノ舞ヲ舞ナルニハ、面模ノ下ニテ鼻ヲニハムル事ニ侍也、三塔ノ僉議ト申事ハ、大講堂ノ庭ニ三千人ノ衆徒會合シテ、破タル袈裟ニテ頭ヲ裹、入堂杖トテ三尺許ナル杖ヲ面々ニ突、道芝ノ露打拂、小石一ツヽ持、其石ニ尻懸居並ルニ、弟子ニモ同宿ニモ聞シラレヌ樣ニモテナシ、鼻ヲ押ヘ、聲ヲ替テ、滿山ノ大衆立廻ラレヨヤト申テ、訴訟ノ趣ヲ僉議仕ニ、可然ヲバ尤々ト同ズ、不可然ヲバ、此條無謂ト申、假令勅定ナレバトテ、ヒタ頭直面ニテハ爭カ僉議仕ベキト申上ケレバ、法皇先輿ニ入セ給、早々罷歸テ、山門ニテ僉議スルラン樣ニ出立テ、急參テ僉議仕レト被仰下、豪雲宿坊ニ歸、同宿共ニハ袈裟ニテ裹頭、童部ニハ直垂ノ袖ニテ頭裹セテ、三十餘人引具シテ、御前ノ雨打ノ石ニ尻係テ並居タリ、豪雲己ガ鼻ヲ押テ、大衆立廻ラレヨヤト云テ、我訴訟ノ趣ヲ、事ノ始ヨリ終マデ、一時ガ程コソ申タレ、同宿共兼テ存知ノ事ナレバ、尤々ト訴訟其謂アリ、道理顯然也、早可被經奏聞、聖代明時之政化、爭カ無御裁許哉ト申タリケレバ、法皇御輿有テ、則被仰付タリケルトカヤ、

○按ズルニ、山門僧徒ノ訴訟ニハ、多クハ日吉祇園等ノ神輿ヲ奉ジテ、毎ニ朝旨ニ抗セリ、故ニ白河天皇モ、賀茂川ノ水、雙六ノ簺、山法師、是ゾ朕ガ心ニ隨ハヌ者ト御歎息アリシナリ、豪雲ノ訴訟ハ以テ其一斑ヲ知ルニ足ル、故ニ錄シテ參照トス、

公卿怖畏、右大臣、幷時光俊賢等退出之間、於櫛笥少道、鳩飛渡上達部首上、於宇佐神人宿所〈左近府南門〉間失、疑是大菩薩御變現歟、俊賢卿、獨定申不可遣推問使之由、人々尤爲奇、　十二月廿八日、太宰權帥平惟仲、勘罪名停任、依宇佐宮訴也、

〔日本紀略後十四一條〕長元元年十月十三日甲戌、金峯山僧百餘口、參陽明門院、〈〇院恐衍〉訴申大和守保昌苛法之由、

〔百練抄五堀河〕嘉保二年十月廿四日、天台衆徒爲訴申美濃守義綱殺害山僧事、相具神輿參陣之間、中務丞賴經相禦之、射殺神人大衆、件事依爲赦前犯、不被裁許、　十一月、山僧行五壇法、奉呪詛國家之輩、注進交名幷日吉神輿、可奉迎取本社之由宣下之、

〔源平盛衰記四〕加賀國溫河燒失事

同帝〈〇堀河〉御宇嘉保二年ニ、伊豫入道源賴義ガ子ニ美濃守義綱朝臣、當國ノ新立ノ庄ヲ倒シケル故ニ事出來テ、山門久住者圓應被殺害ケリ、此事訴申サン爲ニ、同十月廿四日、山門衆徒社司寺官等ヲ以、捧解狀、三十餘人下洛之由風聞アリ、武士ヲ川原ヘ被差向テ禦ケレ共、押破テ陣頭ヘ參ル、〈〇中略〉大衆ハ、神明モ力ヲ合給ニコソトテ、離山ヲ止テ、七社ノ神輿ヲ莊奉テ、根本中堂振上奉リ、關白殿ヲ呪詛シケルコソ恐ロシケレ、神輿ノ御動座是ゾ始也ケル、

〔百練抄五堀河〕寬治七年八月廿六日、興福寺大衆、擧春日神民集會勸學院、捧鋒神木隨身鏡鈴、神人所持之鏡於案上放光耀、自然鳴動、本宮御笠山上同時有光耀云々、是依訴申近江守爲家朝臣凌礫神民事也、是日左大臣〈〇源俊房〉內大臣〈〇藤原師通〉已下殿上人諸大夫等、多參關白殿下、〈〇藤原師實〉被申事之由於院、〈〇白河〉　廿七日、內大臣已下參著仗座、被定近江守高階爲家朝臣罪名事、依春日神民訴申事歟、廿八日、內大臣以下參入、被行爲家朝臣罪名事、除名配流土佐國、又緣座輩或解却見任、或贖銅、大衆等蒙裁許歸去、

內訴

直訴
濫訴

與神解小路邊宇佐宮下部（月來訴人也、件愁人被取申文已了、但未有裁許、愁无命者也、）一人著衣冠進寄御輿右方、舉音致訴訟之間、希有之事也、而右將等不追却、不覺者等也、予令追却了、須搦捕也、然而行幸新所之間、左右有憚之、故不令搦也、事尤非常也、先蒙罪歟、又右將等不追却事、重可被勘仰也、尤有其恐也、返々不便事也、關白今夜被問仰此由、予具申進子細、命云、非常々々、又非常也、右將等極愚者也、予高名無極云々、

〔春記〕長暦四年（○長久元年）十二月廿五日丙午、平野行幸日也、（○中略）今夕還御間、於東洞院二條邊、和泉國百姓、捧文舉音成愁訴、此日者有此愁也、自有陳、所參進也、行經不令追却、如何、此事及度々、猶可被召禁也、定爲孤㥅歟、可恐、

〔玉勝間六〕天皇の御前に直に訴を申せし事

いともかしこき御前に、たゞにうたへごと申せるは、いとめづらし、長暦は後朱雀天皇の御世也、春記は春宮大夫資房卿の日記也、

〔公教公記〕保延七年正月十九日己未、先是參鳥羽之間、於大宮七條坊門程、自院（○鳥羽）有御消息、（著白裝束之輩、有數十人、泉國、）披見了處、時信奉書云、和泉國召次申文遣之、列參御物詣道、雖令訴申、還御之時、可有御沙汰之由被仰候了、而昨日所參洛也、件召次等遣之召問子細、任法早可令沙汰給候歟、依御氣色上啓如件者、

〔唐律疏議二十四 鬪訟〕諸邀車駕、及撾登聞鼓、若上表以身事自理訴而不實者、杖八十、（卽故增減情狀、有所隱避詐妄者、從上書詐不實論、○疏議略、）自毀傷者、杖一百、雖得實而自毀傷者、笞五十、卽親屬相爲訴者、與自訴同、

〔日本書紀二十九 天武〕十年五月己卯、詔曰、凡百寮諸人、恭敬宮人、過之甚也、或詣其門、謁己之訟、或捧幣以媚於其家、自今以後、若有如此者、隨事共罪之、

〔百練抄四 一條〕寬弘元年三月廿四日、宇佐宮神人五百餘人、參陽明門外、訴太宰帥惟仲事、去年十一月離岸之後、六箇日著河尻、依神感也云々、　廿七日、諸卿定申宇佐宮訴事、僉議之間、陣座南方有雷電、

捕百姓、來左衛門陣放呼言云々、　廿一日丙午、丹波守賴任來云、依令搦立公門之百姓、入道殿〇藤原道長攝政殿〇藤原賴通勘當殊重、是慮外事也、所辯太多、到左衛門陣頭外記局等放呼言了者十餘人、仰撿非違使被召候云々者、但國司所辯似無所避、　九月廿四日丁丑、從去廿二日、丹波國百姓、立公門申善狀、去七月申惡狀、未得其情、今夜善狀、自宰相許傳送、

〔日本紀略後一條十三〕萬壽三年四月廿三日己巳、左中弁經賴、令問伊勢國在廳幷百姓等訴事、守親任、非道事也、

〔大神宮諸雜事記一〕長元四年五月日、伊賀守從五位下〇下字下恐有脫文朝臣光清被配流伊豆國、發〇發上恐脫事字彼國神戸御酒田一町苅取了、因之二所大神宮御神酒已以闕怠、仍神戸預注子細訴申於大神宮司、隨則且牒送國衙沙汰、且上奏於公家之程、訴神民之中仁偸爲國司被殺害之由具也、依被訴天國司所被配流也、

〔中右記〕永久六年〇元永元年正月十五日戊戌、與左大弁參院、〇白河候院北面間、依仰參御前、密々被仰云、大神宮神人等訴申遠江國司事、不裁決及數月、甚恐思之由可云關白也、如此事、恐其咎及高、仍只任理可決斷者、申承之由退出、

〔百練抄八高倉〕治承元年三月廿一日、天台大衆可參陣頭之由風聞之間、內大臣已下參內、可差遣武士之由被仰下、其根元加賀守師高目代、燒拂白山之間、彼山大衆相具神輿、向天台訴訟故也、　廿八日、院武者所藤原師經〇加賀國目代、國司緣者也、配流備後國、依天台訴也

越訴

〔類聚國史百九十俘囚〕弘仁七年八月甲午朔、勅、夷俘之性、異於平民、雖從皇化、野心尙存、是以先仰諸國令加敎喩、今因幡伯耆兩國俘囚等、任情入京、越訴小事、此則國吏等撫慰失方、判斷乖理之所致也、自今以後篤加訓導、有如此者、專當國司准狀科處、

直訴

〔春記〕長曆四年〇長久元年十月廿二日甲辰、今日初遷御內大臣二條第、〇中略今夕行幸間、於東院東大路

彼小路云々、宜仰撿非違使加勘制云々、天德元年十一月十日、問河內守從四位上藤原朝臣忠幹、新司從四位下同國風日記云、問左少史小槻茂助云々、問受領之時、辨以下著官東廳、辨問四位、史問五位以下、或於別所問之、隨時儀、或召膝突問、或召藏人所被問、隨時定、依事之輕重、

〔續日本紀桓武三十八〕延曆三年三月丙申、先是伊豫國守吉備朝臣泉、與同寮不協、頻被告訴、朝廷遣使勘問、辭不敬、不肯承伏、

〔日本後紀嵯峨二十四〕弘仁五年閏七月壬午、散位正四位上吉備朝臣泉卒、泉者、右大臣從二位眞備之子也、孔門童子、頻有所聞、性殊褊急、多忤於物、延曆初出爲伊豫守、被僚下告、遣詔使勘問、辭涉不敬、有司執法、請寘恒科、詔曰、其父故右大臣〇眞備往學盈歸、播風弘道、遂登端揆、或翼皇猷、宜宥泉辜令思後善、但解見任、以懲前惡、後復以讁貶佐渡權守、歸居本縣、鬱々不得志、大同之初、以賢臣之後徵爲觀察使、試于政事、處置無紀、剛戾之性老而不移、卒時年七十二、

〔日本紀略一條九〕永祚元年二月五日丙辰、定尾張國百姓愁申守藤原元命可被替他人之由、

〔尾張國解文〕尾張國郡司百姓等解、申請官裁事、請被裁斷當國守藤原朝臣元命三箇年內責取非法官物、并濫行橫法卅一箇條愁狀、〇中略以前條事、爲知憲法之貴、言上如件、〇中略今須郡司百姓、早錄守元命朝臣不治之由、蒙官裁者也、而郡司之職、不遑公事、百姓之身、被絆國役、爲劇外國四度之務、難待中華萬機之底、爰纔離己國、陪官底、猶若狙上之魚移於江海、刀下之鳥翻於林河、望請停止件元命朝臣、被改任良吏、以將令他國之牧宰知治國優民之褒賞、方今不勝馬風鳥枝之愁歎、宜銜龍門鳳闕之綸旨、仍具勒三十一箇條事狀、謹解、

〔日本紀略後一條十三〕寬仁三年六月十九日甲辰、今日丹波國氷上郡百姓、於陽明門愁申廿四ヶ條雜事、

廿日乙巳、丹波守藤原賴任取搦之、

〔小右記〕寬仁三年六月廿日乙巳、頭弁經通示送云、〇中略丹波國百姓立公門訴訟、而國司以騎馬兵追

靈臺之囿、而賢者進也、此故聖帝明王、所以有而勿失、得而勿亡也、所以懸鐘設匱拜收表人、使憂諫人納表于匱、詔收表人、每旦奏請、朕得奏請、仍又示羣卿、便使勘當、庶無留滯、如羣卿等、或懈怠不懃、或阿黨比周、朕復不肯聽諫、憂訴之人、當可撞鐘、詔已如此、既而有民明直、心懷國士之風、切諫陳疏、納於設匱、故今顯示集在黎民、其表稱、緣奉國政、到於京民、官官留使於雜役云々、朕猶以之傷惻、民豈復思至此、然遷都未久、還似于賓、由是不得不使、而强役之、每念於斯、未嘗安寢、朕觀此表、嘉歎難休、故隨所諫之言、罷處々之雜役、昔詔曰、諫者題名、而不隨詔命者、自非求利、而將助國、不言題不諫朕廢忘、又詔、集在國民、所訴多在、今將解理、諦聽所宜、其欲決疑、入京朝集者、且莫退散、聚待於朝、

〔續日本紀 稱德 二十七〕天平神護二年五月戊午、大納言正三位吉備朝臣眞備、奏樹二柱於中壬生門西、其一題曰、凡被官司抑屈者、宜至此下申訴、其一曰、百姓有冤枉者、宜至此下申訴、並令彈正臺受其訴狀、

〔三代實錄 清和 六〕貞觀四年三月十九日丁亥、從五位上行上總介伴宿禰龍男、到任交替、稱官物多欠禁固前司介從五位上和氣朝臣豐永訟冤、太政官處分、遏其禁、

〔類聚三代格 七〕太政官符

合裁下觀察使起請事十六條、○中略

一剖斷合理、獄訟無冤條、

右同前奏〇山陰道觀察使菅野眞道偁、今案條意、人無冤訴、卽令褒擢、若有冤枉一人、卽入違乖之科、仍案考課令、處斷乖理爲下上、降考下上、隨有犯科處不必解官、若今所冤事輕罪杖以下、猶解見任、恐涉刻薄、伏望定犯輕重、以擬褒貶者、今宜絕無冤訴卽令褒擢、如有違乖、准犯處罪、並依使奏、○中略

以前被右大臣宣偁、奉勅使所起請事條、宜依前件、諸道使等亦宜准此、

大同四年九月廿七日

〔西宮記 臨時 六〕一依訴人愁問人事 延喜十四年三月宣旨、訴人等可留勞(勞恐誤)者、左兵衞府西小路以東南方者、中御門大路以南之由上宣先了、而近代任意越渡

家、請諸院、諸宮、諸司、諸寺、諸王臣家使、其所遣之使、已非其人、專施威勢、恣行猛暴、不辨是非、濫論無道、國郡司官、不堪凌辱、又亂入部內、好行濫惡、以舊歲之中、(○中一本作本)實、勘多年之息利、百姓被寃、盡頭逃散、郡司恐威、呑舌不訴、吏民之煩、莫大於斯焉、伏案去寛平八年十一月廿日下當道諸國符旨、只停止爭田宅等、不被禁訟雜事、望請官裁依准彼符、同以禁制、然則國郡无騷擾之憂、吏民斷威劫之恐者、左大臣宣、依請、諸國准此、

延喜五年十一月三日

五世王辭訟

〔續日本紀(二文武)〕大寶二年五月辛未、勅若五世王、自有辭訟、須受理者、特給坐席、而與所(○所疑當作處)分、

僧尼訴訟

〔令義解(二僧尼)〕凡僧尼、有私事訴訟、來詣官司者、權依俗形參事、(謂依俗形者、既爲俗形、卽須稱俗姓名也、參事者、參對官司、申論事緒也、)其佐官(謂僧綱之錄事也)以上及三綱、爲衆事(謂衆僧之事也)若功德、須詣官司者、並設床席、

引證僧尼

〔令集解(七僧尼)〕刑部省例云、大寶三年三月九日、太政官處分、訴訟人等、引證僧尼者、解部就於當寺、定問虛實也、

訴冤枉

〔日本書紀(二十五孝德)〕大化元年八月庚子、是日設鐘匱於朝、詔曰、若憂訴之人、有伴造者、其伴造、先勘當而奏、有尊長者、其尊長、先勘當而奏、若其伴造尊長、不審所訴、收牒納匱、以其罪罪之、其收牒者、昧旦執牒奏於內裏、朕題年月便示羣卿、或懈怠不理、或阿黨有曲、訴者可以撞鐘、由是懸鐘置匱於朝、天下之民、咸知朕意、

〔日本書紀(二十五孝德)〕大化二年二月戊申、天皇幸宮東門、使蘇我右大臣詔曰、明神御宇日本倭根子天皇、詔於集侍卿等臣連國造伴造、及諸百姓、朕聞明哲之御民者、懸鐘於門、而觀百姓之憂、作屋於衢、而聽路行之謗、雖芻蕘之說、親問爲師、由是朕前下詔曰、古之治天下、朝有進善之旌、誹謗之木、所以通治道、而來諫者也、皆所以廣詢于下也、管子曰、黃帝立明堂之議者、上觀於賢也、堯有衢室之問者、下聽於民也、舜有告善之旌、而主不弊(○弊恐當作蔽)也、禹立建鼓於朝、而備訊望也、湯有總術之廷、以觀民非也、武王有

對者、卽須撿發判決、而不撿決、故聽其越次上陳也、聽越次上陳、卽爲推治、

〔令集解公式三十六〕釋云、追攝、引持曰攝、俗曰召和那賀須、

〔令義解雜十〕凡訴訟、謂財物良賤譜第之類、事非侵害、應待時申訴者也、起十月一日、至三月卅日撿按、以外不合、若交相侵奪者、謂交者非徐遲之詞也、侵者侵損於人也、奪者強取財物、不在此例、

○按ズルニ、雜令告密ノ條ノ義解ニ云ク、撿按猶勘問也ト、此ニ擧タル撿按モ亦同義ナルベシ、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁斷諸院諸宮王臣家相代百姓爭訟田宅資財事

右問山城國民苦使正五位下守左中辨平朝臣季長奏狀偁、得諸郡司解狀偁、諸院諸宮、及諸王臣家、或爭百姓戸田、或奪浮浪財物、不據國宰、無牒郡司、闌入部內、遞相壓略、專擅威權、不辨理非、田園因斯荒癈、財產爲之空竭、望請裁許被停止者、伏撿案內、訴訟皆從下始、若有越訴、法設科條、今愚昧百姓、不悟此理、告人囑請甲宮而乘威、前人媚託乙家以挾勢、國郡官司、無力禁止、望請自今以後、相爭財物田宅之輩、假勢王臣、不由國郡者、不限土浪、不論蔭贖、決杖一百、所爭之物、皆悉沒官、諸院諸宮王臣家許容者、別當幷家司、科違勅罪、如此則窮民再蘇、勢家弭害、謹勒申聞、伏請處分者、大納言正三位兼行左近衞大將皇太子傅民部卿陸奧出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅依請、諸國准此、

寛平八年四月二日

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁制諸院諸宮諸司諸寺王臣家依土浪人道俗等私遣使者辨定訴訟事

右得參河國解偁、謹撿令條云、訴訟皆從下始、又云、犯罪皆於事發覺官司推斷、然則土人浪人、及僧尼等、若有訴訟者、須先陳於事發覺官司、官司不斷、若所斷違理者、隨卽越訴於上官、而愚暗道俗、屬託勢

以次上陳、若經三日內不給、聽訴人錄不給官司姓名以訴、官司准其訴狀、卽下推不給所由、然後斷決、至太政官不理者、得上表者、當今官司不勞給不理狀、訴人無錄官司姓名、雖含冤越訴、而非合勘問、窮弊之民、徒疲往還、疑滯之獄、遂無取決、右大臣宣、一依令條、給不理狀、若習常不給、更致冤滯、及越訴之輩、妄告虛誣、並依法科罪者、今神郡百姓等、或告强盜竊盜、或陳强奸和奸、除此以外笞杖罪多、既不科決、安可肅淸、未辨眞僞之意、何勞不理之狀者、

以前得國解偁、〇中略仍請處分者、令神祇官卜食、依國解可行、被中納言兼左近衞大將從三位春宮大夫陸奧出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、奉勅、依卜、

弘仁八年十二月廿五日

〔令集解三十三公式〕鬪訟律越訴條云、可受抑不受、笞五十、三條加〇以下缺

〔唐律疏議二十四鬪訟〕諸越訴及受者、各笞四十、若應合爲受、推抑而不受者、笞五十、三條加一等、十條杖九十、

疏議曰、凡諸辭訴、皆從下始、從下至上、令有明文、謂應經縣、而越向州府省之類、其越訴及官司受者、各笞四十、若有司不受卽訴者亦無罪、若應合爲受、謂非越訴、依令聽理者、卽爲受、推抑而不受者、笞五十、三條加一等、謂不受四條、杖六十、十條罪止杖九十、若越過州訴、受詞官人判付縣、勘當者不坐、請狀上訴、不給狀科違令、笞五十、

〔令義解七公式〕凡受事一日受、二日付畢、〇中略其判召者限三日、若不至判待、待後廿日不至、主典撿發、量事判決、謂假令有甲注乙奪己財物、官司判召乙、三日不至、更判待廿日、遂亦不至者、主典撿發、而判官不待前人、量事判決之類、若後有前人申訴、應改判者、亦隨改判也、卽事有期限者、不在此例、謂假令有人以身事申訴、而卽此人要籍驅使、而其所驅使亦有期限、若有官司依常法待其前人上者、此人赴事必應後期、卽官司不依常法、量其濟事、更立程限之類、若前人有公事、限內不赴對者、亦同此法也、

〔令義解七公式〕凡訴訟須有追攝對問者、若其人延引逃避、兩限不赴對者、謂依上條、判召三日、判待廿日、是爲兩限也、言其人兩限不赴

財物、良賤、譜第等ノ爭ハ、十月一日ヨリ三月三十日マデノ間ノミ檢按シ、其餘ハ檢按セズ、孝德天皇ノ大化元年、鐘匱ヲ朝ニ設ケ、憂ヲ銜メル人ヲシテ、伴造及ビ尊長ニ由リテ牒ヲ匱ニ投ジテ直ニ訴ヘシム、而シテ所司、或ハ懈怠シテ理セザル、或ハ阿黨シテ曲アル、或ハ天皇肯テ諫ヲ納レタマハザルトキハ、訴者ヲシテ鐘ヲ撞カシム、二年又其身ニ私セズシテ、心專ラ國家ノ爲メニスル者ニ限リ、諫疏ニ題名セズシテ匱ニ投ゼシム、稱德天皇ノ天平神護二年、吉備眞備ノ奏ニ依リテ、二柱ヲ中壬生門ニ樹テ、官司ニ抑屈セラルヽ者ト、百姓ノ冤枉アル者トヲシテ、柱下ニ至リテ申訴セシム、

名稱

〔類聚名義抄 五言〕訟 アラソフ　ウツタフ

〔字鏡集 十四言〕訟 ウタヘ　アラソフ

〔萬葉集 十六有由緣雜歌〕頃者之吾戀力不給者京兆爾出而將訴、

訴訟法

〔令義解 七公式〕凡訴訟、皆從下始、（謂、告冤曰訴、爭財曰訟、從下始者、言從郡司始也、）各經前人本司本屬、（謂、官人經本司、白丁經本屬、若有使損、及急速之類者、自依獄令、經所在官司告訴、其上條判召者、亦依此條、經本司本屬、若有使損者、亦依獄令、告事發之官司也、）若路遠、及事礙者、（謂、路遠者、一日程以上也、何者、宮衞令下番兵衞、及斷獄律、移囚、皆以一日程可爲遠故也、事礙者、礙止也、不問公私、但有事礙者皆是也、）經隨近官司斷之、斷訖、訴人不服、欲上訴者、請不理狀、（謂、官司判斷、雖得其理、而訴人不服、以爲不理、即判文之外、更與不理狀、聽訴人之上陳也、）以次上陳、若經三日內不給、（謂、故作盤桓、不給與之類、其緣公事者、非也、雖則公事、故作盤桓者、亦是也、）聽訴人錄不給官司姓名、以訴官司、准其訴狀、即下推不給所由、然後斷決、至太政官、（謂、至辨官也、）不理者、得上表、

〔類聚三代格 一〕太政官符

應多氣度會兩郡雜務預大神宮司事（○中略）

一應決百姓訴訟事

右同前解（○伊勢國）偁、案太政官去大同元年八月十一日符偁、撿令條云、訴人不服、欲上訴者、請不理狀、

古事類苑

法律部十三

上編

訴訟

訴訟ハ皆下ヨリ始メ、次第ニ上ニ至ルコトニテ、官人ハ先ヅ被告人ノ本司ニ經、白丁ハ先ヅ被告人ノ本屬ニ經ル、本屬トハ、京ニテハ京職ヲ指シ、京外ニテハ郡司ヲ指ス、若シ其路一日程以上ナルト、事ノ礙アルトハ、隨近ノ官司ニ經ルヽコトヲ得ルナリ、而ルニ訴人其處斷ニ服セズシテ、上訴セントスルトキハ、官司ハ判文ノ外ニ更ニ不理狀ヲ與ヘ、訴人ノ上陳スルコトヲ聽ス、訴人ハ此不理狀ヲ齎シテ、次ヲ以テ上陳ス、卽チ郡司ヨリ與ヘタル不理狀ナラバ、之ヲ以テ國司ニ訴フ、而ルニ國司ノ處斷、郡司ト同ジケレバ、國司ノ不理狀ヲ請ヒ、刑部省ニ訴フ、訴人刑部省ノ處斷ヲ以テ、尙ホ不當トスルトキハ、其不理狀ヲ請ヒテ太政官ニ至リ辨官ニ訴フ、辨官ニ至リ、訴人其處斷ニ服セザルトキハ、又不理狀ヲ請ヒテ中務省ニ至リ上表ス、而シテ不理狀ヲ請フト雖モ、官司故ラニ延引シテ、三日ヲ經ルマデ給セザルトキハ、訴人ハ其官司ノ姓名ヲ錄シテ其上ニ在ル官司ニ訴フ、上ノ官司ハ其訴狀ニ准ジテ、給セザル所由ヲ前ノ官司ニ推問シテ然シテ後ニ斷決ス、サテ此秩序ニ循ハザルヲ越訴ト稱シテ、訴フル者モ受クル者モ罪アリ、又被告ノ人ヲ追攝シテ對問スベキ時ニ、其人延引逃避シテ三日マデ至ラズ、更ニ牒シテ待ツコト二十日ニシテ、尙ホ赴キ對セザルトキハ、次ヲ越エテ上陳スルコトヲ聽ス、凡テ訴訟ハ人ヨリ侵損ヲ被リタルト、財物ヲ强取セラレタルナドノ外、

古事類苑

法律部十三

上編

訴訟

聽訟

雖鬬殺至用刃者爲故殺、若然常赦不可免之、而稱聽例免之、其來尙矣、近年京師、往往有殺害之聞、是用輕典之所致歟、願任律文拘之、以懲將來、勅曰、所奏可然、但任年來例、從輕法赦之有何事乎、謹從詔命不復諫、

右得刑部省解偁、去正月廿七日詔書偁、不遣巡察使時世久矣、國郡司等怠緩、入罪者衆、泣辜之仁、特從矜免者、夫宜導之吏、猶被恩免、所獮之民、何不赦除、唯擧國郡司而成辭、此則擧重包輕之義、或論曰、既指云國郡司、不可及百姓、其疑一也、普天之下、共是皇民、孰愛孰憎、恩澤之覃、應一霑焉、然則詔前所犯國司勘發、亦可會赦、或論曰、詔旨別云巡察使、明是國司所勘不可關之、其疑二也、兩論有疑、不得一決、謹請官裁者、大納言正三位兼行右近衞大將良岑朝臣安世宣、奉勅、同從矜免、

天長五年八月九日

〔權記〕長保六年〇寬弘元年九月廿日辛丑、參衙有政、源中納言勘解由相公〇俊賢就廳南所物忌、左大臣〇藤原道長於陣被定申諸卿分配、亦被定申放免可着本貫之事、畿外者各尋附貫外國之輩、可追至于京戸者、可如何哉、諸卿定申云、不可追者、京戸者、新改居附貫外國、但此事可違法、放免之後、各還本貫爲平民勤役而逢恩原免者、改京戸貫外土、可入移鄕之例歟、但放免猶成事、仰使廳能可被誡歟云々、

〔百練抄〕四後冷泉康平三年六月十一日、諸卿定申伊勢守義孝燒亡大神宮御廚幷祭主永輔目代大中臣賴經殺害大神宮託宣者守時事、去五月廿一日、於使廳勘問、件賴經三ヶ年被召置射樣而四年東北院供養會赦、猶暫不被免、而遂恩免事、

〔中右記〕永長二年〇承德元年二月八日、早旦行向源中納言〇俊雅許、六車庄住人、爲神民雖成濫行、可會赦由法家所申也、仍可原免由所被仰下也、上宣云、重猶可被問法家、上總國雜掌申文、神民成非法由也、任傍例可停止非法由、可給上宣符者、

〔本朝世紀〕久安五年三月廿日壬寅、今日有御願延勝寺供養事、〇中略撿非違使等爲免囚向獄門、而西獄囚等、兼存可有赦之由、皆悉將出近邊之小屋、又去去年殺害左兵衞尉重俊之犯人、武士來迎取之、事々如忘朝憲、

〔台記〕久壽元年十月廿八日丁未、今日改元、〇中略光賴召殿上、仰赦事、先是余奏法皇〇鳥羽曰、如律文者、

徒、但於海賊黨類幷中原弘景者、非赦限者、佐徴稱、率他撿非違使等向獄所、

〔台記〕久壽元年九月九日己未、晩頭大內記遠明內覽詔書草、是去月九日詔書、被加入觸大神宮訴者、及日吉社訴申、光家不在赦限之由也、光家去月九日赦免、而延暦寺衆徒強訴申、故可還禁于獄云々、保延三年、依石清水訴、被改詔書之例也、此事不穩、

歿後會赦

〔日本紀略嵯峨〕弘仁十年三月己亥、詔、朕有所思、宜復故皇子伊豫、夫人藤吉子等本位號、

〔文德實錄一〕嘉祥三年五月壬辰、追贈流人橘朝臣逸勢正五位下、詔下遠江國、歸葬本鄕、○下略

〔扶桑略記二十三醍醐〕延喜三年四月廿日、前右大臣菅原朝臣、詔賜本職、兼增一階、○中略 一云、延長元年閏四月十一日、贈本大臣位、

○按ズルニ、歿後赦ニ會ヒテ、官位ヲ追贈セラルヽコトハ、官位部贈官位篇ニアリ、

雜載

〔日本書紀十三允恭〕二年二月己酉、立忍坂大中姬、爲皇后、○中略 初皇后隨母在家、獨遊苑中、時鬪鷄國造、從傍徑行之、乘馬而莅籬、謂皇后嘲之曰、能作園乎、汝者也、汝、此云那鼻苫也、且曰、壓乞戶母其蘭一莖焉、壓乞、此云異提、戶母、此云覩自、皇后則採一根蘭、與於乘馬者、因以問曰、何用求蘭耶、乘馬者對曰、行山撥蠛也、蠛、此云摩愚那岐、時皇后結之意裏乘馬者辭无禮、卽謂曰、首也、余不忘矣、是後皇后、登祚之年、覓乘馬乞蘭者、而數昔日之罪以欲殺、爰乞蘭者、顙搶地叩頭曰、臣之罪實當萬死、然當其日、不知貴者、於是皇后赦死刑、貶其姓謂稻置、

〔政事要略八十一〕鬪訟律云、以赦前事、相告言者、以其罪罪之、官司受而爲理者、以故入人罪論、

〔續日本紀十三聖武〕天平十一年二月壬辰、勅、二月二十六日赦書云、以赦以前事告言者、以其罪罪之、宜可停、若百姓心懷私愁、欲披陳者、恣聽之、巡察使宜隨事問知具狀錄奏、勿依赦書罪告人、

〔享祿本類聚三代格十七〕太政官符

應免國郡司勘發犯罪人之罪事

王日奉弟日女、石上乙麻呂、牟禮大野、中臣宅守、飽海古良比、不在赦限、

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年閏五月癸卯、詔、朕以寡薄、恭承寶祚、恒恐累二儀之覆載、虧兆庶之具瞻、徒積憂勞、政事如闕、神之貽咎、實由朕躬、比者時屬炎蒸、寢膳乖豫、百寮煌灼、左右勤劬、今欲克順天心、消除災氣、乃求改往之術、深謝在予之愆、則宜流渙汗之恩、施蕩滌之政、可大赦天下、自天平感寶元年閏五月十日昧爽已前、大辟已下咸赦除之、但殺其父母、及毀佛尊像者、不在此例、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜四年四月壬戌、勅曰、朕君臨四海、子育兆民、崇德忘飡、恤刑廢寢、而德化未洽、災異屢臻、興言念此、自顧慙愧、設法雖期無刑、觀辜猶有垂泣、宜因生長之時、式弘寬宥之澤、可大赦天下、自寶龜四年四月十七日昧爽以前、大辟罪已下罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繫囚見徒、常赦所不免者、咸赦除之、寶字元八兩度、逆黨遠近配流、亦宜放還、但高元度、及强竊二盜、不在赦例、普告遐邇、知朕意焉、

〔日本後紀十二桓武〕延暦廿四年三月丙申、詔曰、解網泣辜、哲王嘉訓、滌瑕蕩穢、列聖通規、朕君臨區宇、子育黔黎、念彼流移、久陷刑憲、情深惻隱、無忘寢興、思播凱澤、令彼改且、其延暦廿四年三月以前、犯謀反大逆、及自餘緣犯已配流、及移鄕者、不論道俗、悉赦除之、若身先亡、恩渙不逮者、原其妻子、但惡逆、造畜蠱毒、殺人、會赦猶合移鄕之色、及犯盜者、不在赦限、普告遐邇、知朕意焉、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕康平八年〇治暦元年十月十八日、供養法成寺金堂藥師堂觀音堂、未剋行幸彼寺、大赦天下、但繫神社之訴幷放火之輩、非赦限、

〔長秋記〕保延元年四月廿二日乙丑、天下大赦、軒廊御卜、霖雨事、參內着陣、以官人告藏人弁〇藤原資信聽參由、乃來着座下、仰云、天下不靜、上天變恠異頻、仍可被行天下大赦、但海賊黨類、幷中原弘景、刃傷母者、非赦限、以其由可令造詔者、下官重相尋、在民身調庸物、可被免何年歟、以何年可爲例哉、弁云、承德三年例相叶、可被免五ヶ年、〇中略以外記召右衞門權佐重隆、乃着軾、仰有天下大赦、不待詔書施行、直可免囚

不赦

〔續日本紀 淳仁 二十五〕天平寶字八年九月壬子、軍士石村村主石楯斬押勝、傳首京師、○中略押勝衆潰、獨與妻子三四人乘船浮江、石楯獲而斬之、及其妻子從黨三十四人、皆斬之於江頭、獨第六子刷雄、以少修禪行、免其死、而流隱岐國、

〔文德實錄 九〕天安元年十月辛卯、群臣奏曰、撿非違使奏言、犯死罪者二人、請誅之、詔減死一等、處之遠流、

〔三代實錄 淸和 四〕貞觀二年閏十月廿五日辛未、太政官論奏、美濃國惠奈郡人縣萬歲麻呂、殺百姓三人、法官斷罪當斬刑、詔減死一等、處之遠流、

〔日本書紀 持統 三十〕三年三月丙子、大赦天下、唯常赦所不免不在赦例、

〔日本書紀 持統 三十〕五年六月己未、大赦天下、但盜賊不在赦例、

〔日本書紀 持統 三十〕六年七月乙未、大赦天下、但十惡盜賊、不在赦例、

〔續日本紀 文武 一〕三年十月甲午、詔赦天下有罪者、但十惡、强竊二盜、不在赦限、爲欲營造越智山科二山陵也、

〔續日本紀 聖武 十一〕天平六年七月辛未、詔曰、朕撫育黎元、稍歷年歲、風化尙壅、囹圄未空、通旦忘寐、憂勞在茲、頃者天頻見異、地數震動、良由朕訓導不明、民多入罪、責在一人、非關兆庶、宜令存寬宥而登仁壽、蕩瑕穢而許自新、可大赦天下、其犯八虐、故殺人、謀殺殺訖、別勅長禁、劫賊傷人、官人史生枉法受財、盜所監臨、造僞至死、掠良人爲奴婢、强盜竊盜、及常赦所不免、並不在赦例、

〔續日本紀 聖武 十三〕天平十二年六月庚午、勅曰、○中略宜大赦天下、自天平十二年六月十五日戌時以前、大辟以下咸赦除之、○中略其監臨主守自盜、盜所監臨、故殺人、謀殺人殺訖、私鑄錢作具既備、强盜竊盜、姧他妻、及中衞舍人、左右兵衞、左右衞士、衞門府衞士、門部、主帥、使部等不在○在字原書脫、據一本補赦限、其流人穗積朝臣老、多治比眞人祖人、名負東人、久米連若女等五人、召令入京、大原釆女勝部鳥女還本鄕、小野

限、若入死罪者、同降一等、

〔續日本紀九聖武〕神龜二年十二月庚午、詔曰、死者不可生、刑者不可息、此先典之所重也、豈無恤刑之禁、今所奏在京及天下諸國見禁囚徒、死罪宜降從流、流罪宜從徒、徒以下並依刑部奏、

〔續日本紀九元正〕養老六年正月壬戌正四位上多治比眞人三宅麻呂、坐誣告謀反、正五位上穗積朝臣老、指斥乘輿、並處斬刑、而依皇太子奏、降死一等、配流三宅麻呂於伊豆島、老於佐渡島、

〔續日本紀十二聖武〕天平七年五月戊寅、勅、朕以寡德、臨馭萬姓、自暗治機、未剋寧濟、廼者災異頻興、咎徵仍見、戰戰兢兢、責在予矣、思緩死愍窮、以存寬恤、可大赦天下、自天平七年五月二十日〔○當作二十三日〕昧爽已前、大辟罪已下咸赦除之、其犯八虐、故殺人、謀殺殺訖、監臨主守自盜、盜所監臨、強盜、竊盜、及常赦所不免、並不在赦限、但私鑄錢人罪入死者降一等、其京及畿內二監、高年鰥寡惸獨篤疾等、不能自存者、量加賑恤、百歲已上穀一石、八十已上穀六斗、自餘穀四斗、諸國所貢力婦、自今以後、准仕丁例、免其房徭、幷給田二町、〔○町刊本作野、據類聚國史改、〕以充養物、

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年四月甲寅、詔、依巡察使上奏、原免天下諸國去年田租、又緣有所念、大赦天下、其自天平十七年四月二十七日昧爽以前、大辟罪已下、罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、咸悉赦除、但犯八虐入死者免死長禁、私鑄錢、及從者着鈦長役鑄錢司、強盜竊盜、常赦所不免、不在赦限、其流人到配所者、准此簡擇、特令會恩、

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶二年四月辛酉、勅、〔○中略〕可大赦天下、幷免今年四畿內調、其私鑄錢、及犯八虐故殺人、強盜竊盜常赦所不免者、不在赦限、但入死者降一等、又中臣占部紀奧平麻呂減配中流、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶六年正月辛丑、勅曰、初元啓曆、獻歲發春、天地行仁、動植霑惠、古昔明主、應此良辰、必布時和、廣施慈令、朕雖薄德、何不由茲、可大赦天下、其八虐、故殺人、私鑄錢、強盜、竊盜、常赦所不免原者、不在赦例、但入死者、皆減一等、

恩降

塡役畢、乃聽放還者、如件式者、無恩赦時、徵物之法、隨欠負多少、明立其程限、訖復經恩之後、准事給程、而今撿內外官不與解由狀幷交替實錄帳等、天長以往者、赦後在任之〇之下恐脫吏字赦前雜怠、皆令會赦、承和以降、寬平以往者、或赦免、或拘煩、勘判之旨、頗爲不定、自寬平末、至于近年、全以拘留、不令會赦、爰受領之官、赦前遷替、其不與解由狀、所注載之雜怠、會赦放勘免已了、其後任用之吏、赦後在任、或經三四月、或七八月、秩滿去任、仍寫彼不與同任長官解由狀之目錄言上、即倚赦後在任勘負件會赦免除之雜怠、上下國司、遞亦如此、凡恩詔之旨是一、拘放之間何異、遂使赦〇赦下恐脫後字在任吏更絆累代之怠、往古欠損、獨負一人之身、稽之法條、事無所據、方今欲勘免之、則近年之例、不令會赦、將因循之、則勘判之旨、既涉苛酷、望請赦前所言上、不與解由狀雜怠、更亦注載不與赦〇赦下恐脫後字在任吏解由狀者、准據前件法式、隨欠負多少、計辨濟日限、明以拘放、爲判例、但赦前之罪、首露有期、仍須同任之一官三百六十日內、若被勘發赦前怠者、後年秩滿、解任之輩、依件入原例、不得爲蔽匿、然則渙汗所潤、自無榮枯、勘判所決、必有准的、謹請處分者、從三位守大納言兼行右近衞大將春宮大夫藤原朝臣忠平宣、奉勅、奏狀之旨、雖守法式、勘判之吏、有煩拘放、何者少負債者、依日數近、未脫拘留、多欠失者、爲程期遠、自可放免、況限以昧爽、何責往過、恩詔所指、似有偏頗、今須赦後在任之吏、赦前雜怠、皆悉原免、立爲判例者使宜承知、依宣行之、符到奉行、

右大辨橘朝臣澄淸　　左大史酒井宿禰人眞

延喜十三年二月廿五日

〔日本書紀持統三十〕二年六月戊戌詔、令天下繫囚、極刑、減本罪一等、輕繫皆赦除之、其令天下皆半入今年調賦、

〔三代實錄陽成四十一〕元慶六年正月七日庚戌、天皇御紫宸殿、賜宴群臣、〇中略宣制曰、〇中略元慶六年正月七日午時以前、大辟罪已下罪无輕重、同降一等、但犯八虐、及私鑄錢、强竊二盜、常赦所不免者、不在赦

放囚賜物

〔日本書紀三十持統〕十一年七月辛丑、夜半赦常鏤（ヒタヌスビト）盗賊一百九人、仍賜布人四常、但外國者、稻人二十束、

〔續日本紀十一聖武〕天平三年十一月辛酉、先是車駕巡幸京中、道經獄邊、聞囚等悲吟叫呼之聲、天皇憐愍、遣使覆審犯狀輕重、於是降恩、咸免死罪已下、幷賜衣服、令其自新、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年七月辛亥、是日掃獄免前年罪人、又於東市樓前脫盗人鉗、各給粮放却、

〔小野宮年中行事〕臨時免者事

貞御記、延長元年閏四月十一日、改元詔書出、左右弁向衛門府廳、召囚人等各加教督、令得自新、各賜調布一端、可被免之狀仰了、如此事依希有記之、

〔扶桑略記二十五朱雀裏書〕延長八年十月二日、見徒罪人、皆悉放免、人別給錢云々、左右衛門尉監之、

赦後免前罪

〔政事要略五十九〕太政官符勘解由使

應原免赦後在任吏赦前雜怠事

右彼使去延喜十一年□□廿三日奏狀偁、撿雜律云、負債違契不償、一端以上、違廿日、笞廿、廿日加一等、罪止杖六十、卅端加二等、百端又加三等、各令備償、注云、負債者、謂非出擧之物、依令合理者、或欠負公私財物、乃違約乖期不償者、若延日、及經恩不償者、皆依判斷及恩後日科罪如初、又名例律云、會赦應改正徵收、經責簿帳、而不改正徵收者、論如本犯律、又云、有程期者、計赦後日爲坐、注云、赦出後日、仍違程期者、卽計赦後違日爲坐、赦後並須准事給程以爲期限者、此等更計赦後違日科罪、並赦後准事給程期之文也、又獄令云、欠負官物、經赦降合免、別勅遣推徵者、依赦降例執聞、義解云、欠負官物、已經赦降、應須赦免、若有別勅、遣推徵者、錄會赦狀奏聞者、是經赦降之也、〇也恐色字誤必可令會赦之文也、亦交替式云、前司犯用欠損官物、徵物之法、其程差役、今文云、五十端以上百日、既稱已上、無有其限、欠物雖多、其期百日、物則雖塡、罪則易科、仍加寬恕、隨物增日、五十端以上二百日、百端以上三百日、二百端以上四百日、三百端以上五百日、四百端以上六百日、五百端以上七百日、不滿五十端以下、自依常例、物

出入、隨事拘放、然而別有所念、直以放免、汝等重有所犯、後日曾不寬宥者、罪人等共稱唯、或伏地嗚咽、或仰天嗟歎、勅使府官、道路見聞、不勝感泣、拭淚而歸、臣某頓首頓首、死罪死罪、伏錄事狀謹奏、

寬平八年七月　　中納言

〔朝野群載十一廷尉〕勘申未斷左右獄囚事

合貳人

左一人

佐賀名昨丸　依鬪亂禁六月十五日左權少尉藤原賴信禁

右一人

伴支助　依竊盜禁六月十日右大尉藤原枝忠禁

以前獄囚、勘申如件、

寬仁三年七月十七日

左衞門少志尾張如春

右衞門少尉豐原

左衞門少尉縣犬養

被別當宣偁、佐賀名昨丸、有可令辨申之事所召禁也者、尋其由緒可謂小愆、宜從寬免、殊給身暇者、

寬仁三年七月十七日　　防鴨河使判官右衞門少尉豐原

新任別當時、注未斷囚可原免之輩、進勘文也、法師童女之類不注、別當相計被行免物、但件別當宣、有用意可書也、若注依病給假者、避其口口偏原免者、頗似無理、仍依鬪亂所召禁也、而其事辨決已了、宜從原免云々、

〔扶桑略記三十堀河〕寬治七年六月廿七日癸酉、抽出赦免左右獄徒各三人、又流人前加賀守藤原爲房、有勅召返赦免、

告遐邇、令知朕意、

〔日本後紀二十嵯峨〕弘仁元年九月戊申、正四位下藤原朝臣眞夏、從四位下文室朝臣綿麻呂等、被召自平城宮來、禁綿麻呂於左衞士府、○中略田村麻呂奏請、綿麻呂武藝之人、頻經邊戰、募將同行、卽授正四位上、拜參議、以遣之、歡喜踊躍、卽駕兵馬、

〔日本後紀二十四嵯峨〕弘仁五年八月甲子、免囚人日下部土方、補木工長上、土方者、攝津國武庫郡人、以私鑄錢著鉗、役於堀河、頗善工巧、棄瑕取才、

〔續日本後紀十九仁明〕嘉祥二年閏十二月己未、乘輿巡省京城、以錢米賑給窮者、比至囚獄司前、天皇問曰、是爲誰家、右大臣藤原良房朝臣奏言、囚獄司、於是殊降恩詔、皆免獄中罪人、群臣欣悅、俱呼萬歲、

〔續日本後紀二十仁明〕嘉祥三年三月甲午、左右非違獄中人、除盜之外、悉從放免、

〔帝王編年記十三文德〕仁壽元年十二月某日、天皇乘輿、巡幸京職、○中略兼赦免獄囚、

〔菅家文草九奏狀〕復奏囚人拘放狀

右臣某月十三日、謹奉口勅云、去十日令檢非違使別當從三位中納言兼行左衞門督源朝臣勘錄左右獄中繫囚之數、十一日錄奏既訖、須朕親到獄對放遣、而德不及古、事未宜今、汝者朕之近習也、大師也、列見罪人、依實拘放、令如朕之所念者、臣伏奉勅旨、十三日早朝、率從五位上守左少辨源朝臣唱、大外記正六位上多治有友、左大史正六位上大原史氏雄等、會集右衞門府、升殿、于時左右檢非違使佐以下召列罪人等、祗候南門外大路、臣召使等、先令辨申所犯輕重、使等勘會日記過狀、一一執申、其犯重其罪明者十六人、左十一人、右五人、二人先死、其遺十四人、卽加防援、各還本獄、其犯有疑、其罪未定者四十六人、左二十八人、右十八人、令使等計列南門之前、臣率辨以下及檢非違使等、著門中壇上胡床、卽口宣曰、奉勅、罪人汝等、或被疑殺人傷人強盜竊盜、或被告僞印強姦投石放火、如是等罪、科法有限、今如聞有司搜實情之間、空送二三年、獄官尋證驗之內、縱經五六月、須雖累年序、雖積旬月、愜定其犯、明立其罪、任理

特赦

事、同不覺、可尋先例、

〔本朝世紀〕康和元年十月廿四日壬戌、赦免左右獄囚四十餘人、依中宮〈○堀河篤子〉不豫也、

〔吉記〕壽永二年二月廿九日甲子、依御作善、有免者云々、

〔續日本紀 九元正〕養老六年四月辛卯、詔曰、朕遐想千載、旁覽九流、詳思布政之方、莫先仁恕之典、故振恤之惠、無隔遐方、撫育之仁、普覃寓內、今者有司奏言、諸國罪人、總四十一人、准法並當流已上者、每聞此奏、朕甚愍之、萬方有辜、在余一人、宜所奏罪人幷從坐者、咸皆放免、勿案撿焉、

〔續日本紀 三十一光仁〕寶龜元年十一月乙酉、勅、先後逆黨、一切皆從原宥、其情願留住配處者、宜恣聽之、如窮乏之徒、無資歸鄕者、路次諸國、量給食馬、

〔續日本紀 三十四光仁〕寶龜八年八月丁酉、大和守從三位大伴宿禰古慈斐薨、飛鳥朝常道頭贈大錦吹負之孫、平城朝越前按察使從四位下祖父麻呂之子也、〈○中略〉勝寶年中累遷從四位上衞門督、俄遷出雲守、自見疎外、意常鬱々、紫微內相藤原仲滿誣以誹謗、左降土佐守、促令之任、未幾、勝寶八歲之亂、便流土左、天皇宥罪入京、以其舊老、授從三位、

〔續日本紀 三十四光仁〕寶龜八年九月丙寅、內大臣從二位勳四等藤原朝臣良繼薨、平城朝參議正三位式部卿太宰帥馬養之第二子也、天平十二年坐兄廣嗣謀反、流于伊豆、十四年免罪補少判事、

〔續日本紀 三十六光仁〕寶龜十一年二月甲子、勅去天平寶字元年、伊刀王坐殺人配陸奧國、久在配處、未蒙恩免、宜宥其罪令得入京、

〔日本後紀 八桓武〕延曆十八年六月丙申、詔曰、朕祗纂丕業、撫臨黎元、剋己勤躬、不遑寧處、思欲緝熙四海、期之刑措、弘濟百姓、致之壽域、而近巡京中、過堀川處、鉗鏁囚徒、暴體苦作、興言於玆、愀然于懷、擘生民之愚、自招罪惡、而爲彼父母、寧不哀愍、其在役見徒、及天下見禁囚等、罪無輕重、並宜赦除、令得自新、但私鑄錢、謀殺、故殺、及被問民苦使推訪、諸國郡官吏百姓等、不在赦限、其謀殺故殺配役者、停役配流、普

囚、卽原免、(廿人、殺害強竊盜等、)非是赦令、臨時宣旨也、先例抽輕法者、依宣旨原免、而被免重犯者如何、宣旨趣依天變怪異、

〔法成寺攝政記〕寛弘三年八月廿六日丙申、右頭中將(藤原實成)來仰云、依大星事、申可有免者由、而未被行、今日可行者、申承由、召別當被成勘文、被免云々、着鈦者九人、(六年遣二年、三年者遣一年、)未斷者九人、

〔扶桑略記〕(後一條二十八)長元九年四月十六日、不論輕重、原免未着鈦四人、

〔中右記〕寛治七年十一月五日、今日伊勢公卿勅使、參宮之日也、(中略)入夜有臨時免者、(未斷輕犯者卅三人)聊依有所思食、有此恩赦也、是右相府(源顯房)之所惱、猶以無減氣、大概此恩赦依件事歟、抑如此大神宮公卿勅使參着之日、有免者之例、先被相尋、或被問外記、或被問民部卿幷別當、但慥先例未見歟、人々所被申不有一定、但依無日次、推今夜有此事歟、藏人兵部大輔沙汰件事、沙汰歟、

〔中右記〕嘉保三年(永長元年)三月七日丁酉、今夕有臨時免物、廿五人、別當依所勞不被出仕、左右佐以下

〔中右記〕元永元年閏九月六日、有臨時免者云々、九十餘人、是依上皇(白河)御熊野詣云々、先例雖無如此事、寛宥之思、何事之有哉、

〔殿暦〕元永元年閏九月六日乙卯、入夜參內、有免物、余(藤原忠實)合點、於鬼間別當(藤原忠敎)相共令沙汰、以爪合點、別當に返給、余合點事、密々儀也、及亥剋五位藏人實光參內、付件人奏、於朝干飯御覽、余主上(鳥羽)御代、以墨合點下給、其儀主令合點給、而如然事未練、仍余合點也、免物儀、(去廿八日、頭弁(藤原顯隆)來、今日可有免物、依院御熊野詣也、而大內穢明延引了、)別當着束帶、以免物勘文參內、候小板敷邊、實光依五節宇佐事、令參鳥羽殿間遲々、仍余密々召別當於鬼間、見勘文、可被免人に合點、八十餘人、(竊盜刃傷嫌疑等物也)返給勘文於別當了、而實光歸參、別當以勘文付件人奏聞、於朝干飯方、內侍取之奏聞、御覽了後返給、別當申云、可被合墨點、余於(於下恐脫朝字)干飯、以墨合點、了返給職事、實光勘文端に被免物數ヲ書付、其書樣不覺、可尋、又以墨合點

德、偏是垂法皇之慈悲也、然則恩澤露新、永措刑鞭於黃砂之外、禪林風靜、遙獻寶算於碧洞之中、仍件等之輩、宜從原免者、

久安四年五月廿五日　　右衞門少尉源朝臣近康奉

〔百練抄 高倉八〕安元元年五月廿七日、建春門院(○高倉母后平滋子)百箇日御懺法結願、被免輕犯者、

曲赦

〔續日本紀 文武一〕三年三月甲子、河內國獻白鳩、詔(○中略)赦畿內徒罪已下、

〔續日本紀 文武二〕大寶元年九月丁亥、太上天皇(○持統)幸紀伊國、　十月戊申、從官幷國郡司等進階、幷賜衣衾、及國內高年給稻各有差、勿收當年租調幷正稅利、唯武漏郡本利並免、曲赦罪人、

〔續日本紀 元明六〕和銅六年十二月乙巳、近江國言、慶雲見、丹波國獻白雉、仍曲赦二國、

〔續日本紀 聖武十一〕天平四年十一月丙寅、曲赦京及畿內二監、天平四年十一月二十七日昧爽已前徒罪已下、其八虐、劫賊、官人枉法受財、監臨主守自盜、盜所監臨、强盜、竊盜、故殺人、私鑄錢、常赦所不免者、不在此例、

〔續日本紀 聖武十一〕天平六年十月辛卯、曲赦京中死罪、

〔續日本紀 稱德二十五〕天平寶字八年十月甲申、勅曰、在京見禁囚徒、大辟已下、悉皆赦除、但逆賊仲麻呂、及淡路公(○淳仁)船王池田王等與黨、不在赦限、

臨時赦

〔貞信公記〕天慶元年四月廿四日、左右獄所囚□□者卅人、殊可免狀、仰檢非違使別當、緣地震也、

〔日本紀略 村上三〕天曆元年六月廿二日乙亥、今日免左右獄囚人十一人、是則日來霖雨不霽、損害多煩故也、

〔貞信公記〕天曆二年五月十一日乙未、祈雨宣命使奉遣五陵、中使公輔朝臣來、有賜未斷囚人勘文、强竊二盜嫌疑者、鬭亂等雜犯者□十七人可免事、

〔小右記〕寬弘二年四月廿六日癸卯、左衞門權佐允亮來云、忽依宣旨(右衞門督〈藤原齊信〉奉行、即別當、)令勘申左右獄

人被免之、先以勘文頭弁被申殿下、○藤原忠通次令予奏聞之後、書合點數於其緣、被下奉別當、別當召撿
非違志成國於和德門下給勘文、被仰云、太上天皇○鳥羽千體觀音造給、有所思食之由可爲仰詞者、

〔本朝世紀〕康治元年二月廿八日壬辰、是日依臨時御祈、被免未斷輕犯者、

〔本朝世紀〕久安四年五月廿五日壬午、權中納言藤重通卿參仕仗座、被免未斷輕犯之者七十二人、法皇○鳥羽依有所思食被免之、

原免未斷囚人事

合七十二人

左獄十四人

政所二人

右獄十二人

政所二人

便所四十二人

別當從二位行權中納言兼皇太后宮權大夫左兵衞督藤原朝臣重通宣、奉勅、夫政異弛張者、明時之化也、法分寬猛者、聖代之仁也、爰禪定仙院、○鳥羽殊有叡念之所存、欲解冤結之所告、卽主施君王之惠

印之中人等、不被免云々、

赦流以下

〔日本書紀 天武 二十九〕十三年十二月庚寅、除死刑以下罪人、皆咸赦焉、

赦徒以下

〔日本書紀 天武 二十九〕五年八月壬子、詔曰、死刑沒官三流、並除一等、徒罪以下、已發覺、未發覺、悉赦之、唯既配流、不在赦例、

〔日本書紀 天武 二十九〕十三年四月丙辰、徒罪以下、皆免之、

〔日本紀略 朱雀 二〕天慶八年十二月七日己巳、依天變赦徒罪已下、

赦輕犯

〔日本書紀 持統 三十〕六年二月乙卯、詔刑部省赦輕繫、　四月庚申、詔曰、凡繫囚見徒、一皆原散、

〔左經記〕寛仁四年十二月十九日乙未、賜六齋日可禁殺生官符於諸國、又可免輕犯者之旨、被仰別當〇藤原公信云々、

〔左經記〕長元四年九月六日辛亥、頭弁〇藤原經任御消息云、依天變霖雨等、被免輕犯者云々、

〔百練抄 四 後冷泉〕康平二年十月十二日、法成寺無量壽院供養、五大堂同有佛開眼、去年失火之後所造立也、被免輕犯之者、

〔本朝世紀〕康和元年三月廿七日庚子、今夜被原免輕犯囚左右九十人、依疾疫旱災也、

〔殿暦〕天永三年七月五日庚申、今日依旱魃有免物、未斷輕犯也、余〇藤原忠實可沙汰之由自院〇白河有仰、仍召別當、余着直衣冠等、於出居方合點、以墨合之、別當頭弁〇藤原實行着束帶、余合點了、以頭弁奏院、別當頭弁參內、於殿上小板敷邊給勘文、卅三人免了、但勘文端ニ以頭弁注數、卅三人也、抑今日余參內して、於宿所可致沙汰也、而依小所勞奏事由於院之處、於里亭可沙汰由有御定、仍如此行之也、

〔中右記〕永久二年十二月卅日辛未、輕犯者一人免了、是歲末齋日之故也、近代囚人不幾、仍不及數人也、

〔時信公記〕天承元年十月十日、入夜別當〇源雅定并頭弁〇藤原顯頼被參、有免物事、未斷輕犯者、左右五十一

已上、永萬元年八月十二日配流、與力僧正惠信、

最慶薩摩　玄榮壹岐　玄延大隅

已上、同年九月六日配流、延暦寺惡僧、

實勝隱岐　敎中周防　良運豐前　圓慶筑前

已上、同二年五月十七日配流、同寺惡僧、

宗賢薩摩　玄信壹岐　覺賢對馬

已上、仁安三年五月三日配流、高野僧、

長息下野　良惠周防　圓喜阿波

同年、六月廿六日配流、與福寺惡僧、

〔玉海〕承安五年〇安元元年七月廿八日丁未、此日有改元事、〇中略光雅歸來、仰左大臣云、〇中略改承安五年可爲安元元年、依嘉保元年之例、令作詔書者、今案彼年常赦也、觸神社訴之輩、悉被物(物恐免字誤)之、今度又同前、

〔玉海〕安元三年〇治承元年八月五日壬申、未剋大夫史隆職、注進改元詔書、其狀如此

詔、〇中略改安元三年爲治承元年、大赦天下、今日昧爽以前、大辟以下罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、及僧俗未得解由者、皆悉赦除、各加敎督、令得自新、但犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、强竊之二盜、常赦所不免者、不在此限、又承安二年以往、調庸未進在民身者、同以免除之、又天下老人、百歲以上賜穀三石、九十以上二石、八十以上一石、鰥寡孤獨、不能自存者、各量給物、庶先蒼蠅告市之聲、將來彩鳳巢閣之翅、布告遐邇、明俾聞知、主者施行、

治承元八月四日　　作者大内記業實

〔玉海〕元暦二年〇文治元年九月六日丙戌、明基參上、昨日被行赦、觸大神宮幷賀茂社訴輩、幷殺害實宴法

内言上、一如貞觀四年七月十五日格、

〔日本紀略 醍醐〕延喜五年六月十五日、詔行大赦令、依彗星之象也、

〔日本紀略 醍醐〕延長八年二月廿四日、詔大赦天下、依去年風水之災、今春疫癘之患也、

〔續古事談 臣節二〕此人〇中納言源經成別當ノ時、上東門院〇一條后彰子東北院ツクリテ供養シ給ケルニ公家大赦オコナヒ給ケリ、別當コノヨシヲ聞テ、人ヲツカハシテ獄ニアリケル海賊三人ガ手足ヲキリテケリ、時ノ人、赦オコナハレズハ三人シナザラマシ、大赦カヘリテ死罪ナリトゾナゲキケル、

〔日本紀略 後一條 十四〕長元五年三月五日丙子、詔大赦天下、大辟以下罪、常赦所不免赦除、又免調庸、老人僧尼給穀、依攘天下地震雷鳴之怪異也、

〔扶桑略記 白河 三十〕承暦四年十二月廿四日、天下大赦、依明年辛酉之御愼也、

〔兵範記〕嘉應元年六月廿三日戊申、詔、述父志者、孝子之道也、朕雖幼稚、仰慕之、崇佛教者、哲后之政也、朕雖庸昧、庶幾之、禪定仙院〇後白河宿福内催、明信外潔、機縁有時、新湛定水於汾陽、五十箇日、殊殖善根於茨油、推其歸法之叡慮、定有解寃之慈心、宜施肆眚之深仁、以添十力之加護、其大赦天下、今日昧爽以前、大辟以下罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、私鑄錢、犯八虐強竊二盜、常赦所不免者、咸皆赦除、抑陽光遍照于遠近、需澤豈別于薰蕕、仍須未得解由徒、不論僧俗、同以原免、庶依蒼生之歡忻、必彰白業之感應、布告中外、俾知朕意、主者施行、

嘉應元年六月廿三日　御畫三字 廿三日

左獄五十一人　右獄四十二人 無拘者

便所百三十四人 已上二百二十七人

流人中被召返僧侶十五人

僧辨禪 越後　辨鏡 阿波

〔續日本後紀(仁明十八)〕嘉祥元年六月庚子、改承和十五年爲嘉祥元年、下詔曰、(中略)自今日昧爽以前、大辟以下罪無輕重、未發覺、已發覺、未結正、已結正、繫囚見徒、咸皆赦除、但犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、強竊二盜、常赦所不免者、不在赦例、

〔三代實錄(清和二十一)〕貞觀十四年三月九日己卯、詔曰、酌訓皇源、陶風帝籙、未有不施厚恩以崇盛德、降殊貸以慰元功者、朕外祖父太政大臣藤原朝臣、(良房)(中略)其功蓋三代、位極上台、仁襟被九州而有餘、德水露(恐霑誤)千里而無盡、自朕在襁褓以至今時、言其顧復保佐之勤、豈以周旦漢光爲伍、(中略)而今寢瘵私第、日月彌留、珪幣相尋、祈禱未効、朕自鍾此患、寢食無安、心隨思焦、言與淚俱、深患救復之方、誠無所不到矣、聞諸內經、度人歸道之功、能救人之厄命、又先王德政、議獄緩刑、矜老養孤、若施斯仁貸、副朕篤情、縱雖病在膏肓、幸使鍼藥得其宜、賜度者八十人、又大赦天下、今日昧爽已前所犯、大辟已下罪无輕重、已結正、未結正、已發覺、未發覺、皆赦除、唯犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、及強竊二盜、常赦所不免者、不在赦限、

〔三代實錄(陽成三十八)〕元慶四年十二月四日癸未、詔曰、頃者太上天皇(清和)聖躬乖豫、德沼驚定水之波、仁山動愁雲之色、朕以菲虛恭承洪緒、潔禮敬於六宗、禱冥護於三寶、而精誠未達、感激猶遲、思憑肆眚之恩、更致延祚之慶、可大赦天下、自元慶四年十二月四日昧爽以前、大辟以下罪无輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、私鑄錢、八虐、強竊二盜、常赦所不免者、咸皆赦除之、且夫仁風一扇、焉有偏枯、惠澤普施、實宜滂沛、仍須未得解由之徒、不論僧俗、同皆放免、若赤心之不虛、庶皇天之可動、　七日丙戌、左右撿非違使、於左衞門府南門出詔獄繫囚、左百六人、(着鈦八十一人、未着鈦二十五人、)右九十四人、(着鈦七十九人、未着鈦十五人、)總二百人、一時放却、賜錢各三十文、是日太政官頒下詔書於文武百官及五畿內七道諸國符偁、今月四日詔書曰、可大赦天下、元慶四年十二月四日昧爽以前、大辟罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、私鑄錢、八虐、強竊二盜、常赦所不免者、咸皆赦除、且未得解由之徒、不論僧侶、同皆赦免者、今須准承和天安之例、已言上、未言上、原其身犯、不得拘責、但未言上者、後司造會赦帳、前後共署、限

丕構、詢以政塗、陰庇生靈、期於事濟、夫赦令者、本稱姦人之幸、亦有奔馬之喩、朕非不知之、但欲令其悔
惡自新、變舊遷善、加之特有所念、感事興懷、宜流肆眚之恩、式暢作解之典、可大赦天下、自天長十年六
月八日昧爽以前、大辟以下罪无輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、咸赦除之、唯犯八虐、故
殺、謀殺、私鑄錢、强竊二盜、常赦所不原者、不在赦限、又去弘仁元年、坐事配流者、雖自陷朝憲、而久憐淪
蹐、安倍朝臣清繼、百濟王愛筌、故藤原朝臣仲成男等、並量徙入近國、從五位下藤原朝臣貞本、殊放還
京、速告赤縣、莫後青衣、敢以赦前事告言者、以其罪罪之、　己巳、罪人安倍朝臣清繼、元配伯耆國、今移
美作國、百濟王愛筌、元安房國、今移參河國、　辛未、罪人藤原永主、同山主、藤主等、天長二年、從日向國
還配豐前國、今移備前國、永野淨津、元配越前國、伊勢安麻呂、元配能登國、今並移若狹國、　閏七月癸
未、勅、弘仁年中犯罪僧、藥師寺良勝被配多褹島、西大寺泰山隱岐國、興福寺康信石見國、元興寺永繼
信濃國、今並特放還入京都、

〔續日本後紀十 仁明〕承和八年十一月丁酉朔旦冬至也、公卿上表慶賀、　丙辰、詔曰、賦象不忒、九玄施仁、
輿物爲春、一人救世、故能功高振古、軒黄之化允諧、事美遐年、勛華之業逾岐、朕以寡昧、忝臨黎苗、撫事
思愆、每深懷抱、迺者有司奏言、今年十一月朔旦冬至、當天統之嘉數、發無賜之丕基、歷驗說而希聞、佇
上德而演貺、夫乾鑒玄遠、必感聖衷、顧朕菲虛、何入靈睠、故今思與天下共斯休祉、自承和八年十一月
廿日昧爽以前、徒罪以下、不論輕重、一從免除、但八虐、故殺人、謀殺人、强竊二盜、私鑄錢、常赦所不免、及
欠負官物之類、不在赦限、若以赦前事相告言者、以其罪罪之、

〔續日本後紀十二 仁明〕承和九年八月庚寅、太宰府言、豐後國言、前介正六位上中井王私宅、在日向郡、及私
營田在諸郡、任意打損郡司百姓、因茲吏民騷動、未遑安心、又本自浮宕筑後肥後等國、威陵百姓、妨農
奪業、爲蠹良深、中井倘欲入部徵舊年未進、兼徵私物、而調庸未進之代、便上私物、倍取其利、望請准據
延曆十六年四月廿九日格旨、令還本云、〇云恐者字誤 太政官處分、罪會去七月十七日恩赦、宜身還本鄕、

不免者、不在赦例、

〔續日本紀 三十七 桓武〕延暦元年七月丙午、詔曰、朕以不德臨馭寰區、憂萬姓之未康、憫一物之失所、況復去歲無稔、懸磬之室稍多、今年有疫、夭殀之徒不少、朕爲民父母、撫育乖術、靜言於此、還慙於懷、又顧彼有罪、責深在予、若非滌蕩、何令自新、宜可大赦天下、自天應二年七月二十五日昧爽已前、大辟已下罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、悉皆赦除、但犯八虐及故殺人、私鑄錢、强竊二盜、常赦所不免者不在赦限、若入死罪者、並減一等、鰥寡惸獨、貧窮老疾、不能自存者、量加賑恤、

〔續日本紀 四十 桓武〕延暦九年閏三月壬午、詔曰、朕以寡德臨馭寰區、國哀相尋、災變未息、轉禍爲福、德政居先、思布仁恩、用致安穩、宜可大赦天下、自延暦九年閏三月十六日昧爽以前、大辟已下、罪無輕重、已發露、未發露、已結正、未結正、繫囚見徒、私鑄錢、八虐、强竊二盜、常赦所不免者、咸皆赦除、其延暦三年以往、天下百姓所負、正税未納言上、及調庸未進者、咸免除之、縱未言上、無由徵納者、亦免之、神寺之稻、宜准此例焉、

〔日本後紀 十二 桓武〕延暦廿三年十二月丁卯、詔曰、朕有所思、欲施恩澤、宜赦天下、自延暦廿三年十二月廿六日昧爽以前、大辟已下、罪無輕重、皆咸赦除、但强竊二盜、及私鑄錢、常赦所不免者、不在赦限、敢以赦前事相告言者、以其罪罪之、普告天下、知朕意焉、

〔類聚國史 百六十五 祥瑞〕天長三年十二月壬戌、詔曰、朕〈淳和〉以昧德、忝纂君臨、乘奔軫懷、納隍銷志、分宵廢寢、憂萬方之未安、興晨忘飡、懼八政之或殊、近有非雲見、諸內外公卿表賀、辭不敢當、倘亦頻奏、推之不得、誠如來表、豈謂在己、此則七廟之靈、感恩如在、二儀之威、徵祥自臻、今欲報德蒼天、寄彼祖宗、播惠黎烝、共此嘉貺、可大赦天下、自天長三年十二月卅日昧爽以前、大辟以下罪無輕重、未發露、已發露、未結正、已結正、繫囚見徒、咸皆赦除、但犯八虐、故殺謀殺、私鑄錢、强竊二盜、常赦所不免者、不在赦例、

〔續日本後紀 二 仁明〕天長十年六月甲子、詔曰、雲行雨施、穹蒼所以宣慈、含垢匿瑕、元后於焉播澤、朕肅承

申、勅曰、在京見禁囚徒、大辟已下、悉皆赦除、但逆賊仲麻呂、及淡路公、〇淳仁、船王、池田王等與黨、不在赦限、

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年四月丁未、勅、比日之間、緣有所念、歸依三寶、行道懺悔、泣罪解網、先聖仁迹、冀施恩恕、盡洗瑕穢、宜可大赦天下、自天平神護二年四月二十八日〇恐當作二十二日昧爽已前、大辟已下罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、私鑄錢、及八虐、受財枉法、監臨自盜、盜所監臨、強盜、竊盜、常赦所不免者、咸悉赦除、但先後逆黨、不在赦原、普告天下、知朕意焉、

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年六月壬辰朔、勅曰、朕以菲薄、謬承重基、撫育乖方、黎首失所、顧念泣罪、情軫納隍、屬有所思、欲流渙汗、可大赦天下、自神護景雲四年六月一日昧爽以前、大辟罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、及強竊二盜、咸赦除之、其八虐、私鑄錢、常赦所不免者、不在赦限、但前後逆黨緣坐人等、所司量其輕重奏聞、普告天下、知朕意焉、　七月癸未、太政官奏、奉去六月一日勅、前後逆黨緣坐人等、所司量其輕重奏聞者、臣曹司且勘、天平勝寶九歲、逆黨橘奈良麻呂等并緣坐、總四百四十三人、數內二百六十二人、罪輕應免、具注名簿、伏聽天裁、奉勅依奏、但名簿雖編本貫、正身不得入京、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜四年正月辛未、勅曰、朕以寡薄、忝承洪基、風化未洽、恒深納隍之懷、災祥屢臻、彌軫臨潤〇潤恐淵誤之念、今者初陽啓曆、和風扇物、天地施仁、動植仰澤、思順時令、式覃寬宥、宜可大赦天下、自寶龜四年正月七日昧爽已前、大辟已下罪無輕重、已發覺、未發覺已結正、未結正、繫囚見徒、咸皆赦除、但八虐、強竊二盜、私鑄錢、常赦所不免者、不在赦限、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜四年十二月乙未、勅、增益福田、憑釋教之弘濟、光隆國祚、資大悲之神功、是以比日之間、依藥師經、屈請賢僧、設齋行道、經云、應放雜類衆生、朕以雜類之中、人最爲貴、至于放生、理必所急、加以陽氣始動、仁風將扇、順此時令、思施需澤、可大赦天下、自寶龜四年十二月廿五日昧爽以前、大辟已下罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、咸皆赦除、其犯八虐、故殺人、私鑄錢、常赦所

赦除之、但八虐故殺人、謀殺殺訖、私鑄錢、強竊二盜、常赦所不免者、不在赦限、

〔續日本紀聖武十七〕天平二十年三月戊寅、宣勅、朕以薄德、君臨四海、夙興夜寢、憂勞兆民、然猶風化未洽、犯禁者多、是訓導之不明、非黎首之愆咎、萬方有罪、在予一人、咸洗瑕穢、更令自新、宜大赦天下、自天平二十年三月八日昧爽已前、大辟已下、咸悉赦除、

〔續日本紀聖武十七〕天平勝寶元年四月乙未、大赦天下、自天平二十一年四月二十一日昧爽以前、大辟罪已下咸悉赦除、

〔續日本紀孝謙十九〕天平勝寶六年十一月戊辰、勅、朕以至款、奉爲二尊御體平安寶壽增長、一七之間、屈四十九僧、歸依藥師琉璃光佛、恭敬供養、其經云、懸續命幡、燃四十九燈、應放雜類衆生、竊以放生之中、莫若救人、宜依慈教、可大赦天下、但犯八虐、故殺人、私鑄錢、竊盜強盜、及常赦所不免者、不在赦限、若入死罪、並減一等、

〔續日本紀淳仁二十三〕天平寶字四年十一月壬辰、勅、先歲逆徒、家掛羅網、今年巡察、人畏憲章、古人有言、盜窺財主、有自來焉、撫躬自訟、責歸元首、靜言興念、憂心如灼、書不云乎、德惟善政、政在養民、今陽氣初萌、日南既至、地惟育物、天道更生、思承地施仁、順天降惠、俾茲黔庶與時競新、其自天平寶字四年十一月六日昧爽已前、天下罪無輕重、已發覺、未發覺、繫囚見徒、幷逋租調、官物未納、已言上者、悉赦除之、但犯八虐、故殺人、私鑄錢、叛徒隱不首者、不在免限、前年已赦、今歲亦除、竊恐人習寬容、終無懲改、冀合悉停前惡、皆從後善、

〔續日本紀稱德二十五〕天平寶字八年十月己卯、勅曰、朕忝臨萬邦、軫慮一物、昧旦思治、夕惕兢兢、而賊臣仲麻呂昏凶狂悖、作逆逋亡、天網高張、咸伏誅戮、朕念黎庶洗滌舊惡、遷善新美、宜大赦天下、自今月十六日昧爽已前、大辟已下罪無輕重、未發覺、已發覺、未結正、已結正、皆赦除之、但仲麻呂與黨、及常赦所不免者、不在赦限、亦頃年水旱荐失豐稔、民或飢乏、仍以軍興、宜免天下今年租、布告遐邇、知朕意焉、　甲

平九年五月十九日昧爽以前、死罪以下、咸從原免、其八虐劫賊、官人受財枉法、監臨守主自盜、盜所監臨、強盜、竊盜、故殺人、私鑄錢、常赦所不免者、不在赦例、

〔東大寺正倉院文書二十九〕但馬國天平九年正稅帳

依天平九年五月十九日恩勅、賑給高年及鰥寡惸獨之徒、合壹仟貳佰壹拾壹人、穀肆佰捌拾捌斛肆斗、九十歲十人、人別八斗、八十歲以下一千二百一人、人別四斗、○中略

賣免罪赦書來驛使、單壹拾伍日、使五日、將從十日、

丹後國史生正八位上檜前村主稻麻呂、將從二人、合三人、經二日、日別給米五升、酒一升、

送因播國當國大毅正八位上忍海部廣庭、將從二人、合三人、經三日、日別給米五升、酒一升、

賣免罪幷賑給赦書來驛使、單壹拾貳日、使五日、將從七日、

丹後國目正八位上葦屋寸國依、將從二人、合三人、經二日、日別給米五升、酒一升、

送因播國當國史生大初位上大石村主廣道、將從一人、合二人、經三日、日別給米三升五合、酒一升、

〔續日本紀十三聖武〕天平十年正月壬午、立阿倍内親王○孝謙爲皇太子、大赦天下、但謀殺殺訖、私鑄錢、強竊二盜、不在赦限、若罪至死降一等、

〔續日本紀十四聖武〕天平十三年九月乙卯、勅、以京都新遷、大赦天下、天平十三年九月八日午時以前、天下罪人大辟已下已發覺、未發覺、已結正、未結正、無問輕重、咸釋放却、其流人未達前所、已達前所、及年滿已編附爲百姓、亦咸釋放還、其在流所生子孫、父母已亡、無可隨還者、亦○原書作前、據一本改不限年之遠近、情願還皆錄名聞奏、但不願還者恣聽之、又緣逆人廣繼入罪者、咸從原免、

〔續日本紀十六聖武〕天平十八年三月丁卯、勅曰、興隆三寶、國家之福田、撫育萬民、先王之茂典、是以爲令皇基永固、寶胤長承、天下安寧、黎元利益、仍講仁王般若經、於是伏聞、其教以慈爲先、情感寛仁、事深隱惻、宜天平十八年三月十五日昧爽以前、大辟以下罪無輕重、未發覺、已發覺、未結正、已結正、繫囚見徒、咸

輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、沒爲奴婢、及犯八虐、常赦所不免者、咸赦除之、其私鑄錢、及竊盜强盜、並不在赦限、但鑄盜之徒、合死坐降罪一等、諸老人歲百以上、賜穀伍斛、九十已上參斛、八十已上壹石、孝子順孫、義夫節婦、表其門閭、終身勿事、鰥寡惸獨、篤疾重病之徒、不能自存者、宜令所司量加賑恤、

〔續日本紀七元正〕養老元年十一月癸丑、天皇臨軒、詔曰、朕以今年九月到美濃國不破行宮、留連數日、因覽當耆郡多度山美泉、○中略美泉即合大瑞、朕雖庸虛、何違天貺、可大赦天下、改靈龜三年、爲養老元年、○中略亡命山澤、藏禁兵器、百日不首、復罪如初、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年正月癸巳、詔曰、今年元日、皇太子○聖武始拜朝、瑞雲顯見、宜大赦天下、但犯八虐、私鑄錢、盜人、常赦所不原者、並不在赦限、

〔續日本紀七元正〕靈龜元年九月庚辰、受禪即位于大極殿、詔曰、○中略粤得左京職所貢瑞龜、○中略其改和銅八年、爲靈龜元年、大辟罪已下罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、咸從赦除、但謀殺殺訖、私鑄錢、强竊二盜、及常赦所不原者、並不在赦限、

〔續日本紀九元正〕養老六年六月丙子、詔曰、陰陽錯謬、災旱頻臻、由是奉幣名山、奠祭神祇、甘雨未降、黎元失業、朕之薄德、致于此歟、百姓何罪、燋萎甚矣、宜大赦天下、令國郡司審錄冤獄、掩骼埋胔、禁酒斷屠、高年之徒、勤加存撫、自養老六年七月七日昧爽已前、流罪以下、繫囚見徒、咸從原免、其八虐劫賊、官人枉法受財、監臨主守自盜、盜所監臨、强盜竊盜、故殺人、私鑄錢、常赦所不免者、不在此例、如以贓入死、並降一等、竊盜一度計贓、三端以下者、入赦限、

〔續日本紀十二聖武〕天平九年五月壬辰、詔曰、四月以來、疫旱並行、田苗燋萎、由是祈禱山川、奠祭神祇、未得効驗、至今猶苦、朕以不德、實致茲災、思布寬仁、以救民患、宜令國郡審錄冤獄、掩骼埋胔、禁酒斷屠、高年之徒、鰥寡惸獨、及京內僧尼、男女臥疾、不能自存者、量加賑給、又普賜文武職事以上物、大赦天下、自天

〔日本書紀二十九天武〕十二年正月庚寅、百寮拜朝廷、筑紫太宰丹比眞人島等、貢三足雀、〇中略因以大辟罪以下皆赦之、亦百姓課役並免焉、八月庚申、大赦天下、

〔日本書紀二十九天武〕朱鳥元年五月癸亥、天皇體不安、〇中略則大赦天下、囚獄已空、

〔續日本紀三文武〕慶雲二年八月戊午、詔曰、陰陽失度、炎旱彌旬、百姓飢荒、或陷罪網、宜大赦天下、與民更新、死罪已下罪無輕重、咸赦除之、老病鰥寡惸獨、不能自存者、量加賑恤、其八虐、常赦所不免者、不在赦限、又免諸國調之半、

〔續日本紀四元明〕慶雲四年七月壬子、天皇卽位於大極殿、詔曰、〇中略大赦天下、自慶雲四年七月十七日昧爽以前、大辟罪以下罪無輕重、已發覺、未發覺、咸赦除之、其八虐之內、已殺訖、及强盜、竊盜常赦不免者、並不在赦例、前後流人、非反逆、緣坐及移鄕者並宜放還、亡命山澤、挾藏軍器、百日不首、復罪如初、

〔文館詞林詔六百六十七〕貞觀年中爲山東雨水大赦詔一首

今歲惟暮春、時屬生長、宜順天布澤、與物更新、可大赦天下、自貞觀九年三月十六日昧爽以前、大辟罪以下、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、罪無輕重、皆赦除之、其常赦所不免、十惡、妖言惑衆、語及國家、情理切害、劫賊傷人、故殺人謀□□□□叛已上道、及降死從流、幷流配上道者、並不在赦例、

〔續日本紀四元明〕和銅元年正月乙巳、武藏國秩父郡獻和銅、詔曰、〇中略大赦天下、自和銅元年正月十一日昧爽以前、大辟罪已下罪无輕重、已發覺未發覺繫囚見徒、咸赦除之、其犯八虐故殺人謀殺人、已殺賊盜、常赦所不免者、不在赦限、亡命山澤、挾藏軍器、百日不首、復罪如初、

〔續日本紀五元明〕和銅五年九月己巳、詔曰、〇中略今茲大稔、〇中略況復伊賀國司阿直敬等所獻黑狐、卽合上瑞、〇中略宜大赦天下、其强竊二盜、常赦所不免者、並不在赦限、但私鑄錢者、降罪一等、

〔續日本紀六元明〕和銅七年六月癸未、大赦天下、自和銅七年六月二十八日午時已前、大辟罪以下罪無

之徒、不論僧侶、同以原免、若有天心之答丹誠、何無萬壽之増玉體、普告中外、俾知朕意、主者施行、

仁平三年九月廿三日　大内記遠明作之

〔百錬抄 七六條〕仁安三年二月十六日、依入道太政大臣病、(○平清盛)被行非常赦、

〔百錬抄 八高倉〕嘉應元年六月廿三日、依上皇(○後白河)御逆修初七日、被行非常赦、幷被召返流人十五人、但興福寺前別當惠信、長谷寺前別當宗覺等、不被召返、依本寺訴也、

〔吉記〕安元二年六月十八日辛卯、依同御惱、(○高倉母后平滋子)今日被行非常赦、觸大神宮訴者之外皆以赦、如輕犯之輩、定百五十餘人云々、頭弁奉院宣參內、仰上卿三條大納言不待詔書施行、且可令原免之由、召左衞門權佐光雅被仰之、率官人等向南門、(○中略)赦事昨日雖有沙汰、依公家御衰日延引、今日所被行也、詔書奉行中務權大輔經家云々、

〔吾妻鏡 五〕文治元年十月十六日乙丑、豐後國住人、臼杵二郎維隆、緖方三郎維榮等、去年合戰之間、破却宇佐宮寶殿、押取神寶、依之雖被下配流官符、去四日、逢非常赦云云、

〔百錬抄 十後鳥羽〕文治元年九月四日甲申、被行非常赦、依東大寺大佛開眼也、

〔古事談 二臣節〕非常ノ赦ハ、爲人極悅事ナレバ、九條殿(○藤原師輔)御流ハ詔書ノ草ヲ奏時、淸書以前召仰其由也、

〔日本書紀 十五顯宗〕元年正月、立皇后難波小野女王、赦天下、

〔日本書紀 二十五孝德〕白雉元年二月戊寅、穴戶國司草壁連醜經獻白雉、　甲申詔曰、四方諸國郡等、由天委付之故、朕總臨而御宇、今我親神祖之所知、穴戶國中、有此嘉瑞、所以大赦天下、改元白雉、

〔日本書紀 二十七天智〕十年正月甲辰、東宮太皇弟、奉宣(或本云、大友皇子宣也、)施行冠位法度之事、大赦天下、

〔日本書紀 二十九天武〕十一年八月己丑、勅爲日高皇女(更名新家皇女)之病、大辟罪以下男女幷一百九十人、皆赦之、

今夜還宮之後、左近衛大將源雅定卿、留仗座行詔書事、大內記長光持參詔書草、欲令內覽之處、攝政〇藤原忠通於〇於恐不誤坐禁中給、御座近衛殿、仍以藏人令奉往反之間、天明畢、晝日後、下中務省、抑如此之時、先例攝政候禁中給歟、座里第給之間、事及遲々、似無用意歟、

詔、懲惡勸善者、明王之彝範也、君道所以稱美、綏刑宥過者、賢哲之芳躅也、民心所以誇仁、隨時之義、長傳令典、朕謬以童稚之身、忝膺皇圖之運、馭俗化薄、未施南薰之風、歸佛志深、將弘東漸之敎、爰白河之名區者、赤縣之勝地也、四代賢主之仁祠矣、接簷連甍、諸宗名德之行業焉、積功累德、就此吉土、建以梵宮、當輪奐之甫就、安諸尊容定門々額之、新題號延勝寺、方今擇三月之良辰、設一日之齋會、廻鸞輿而助執儀、禮鳥瑟而抽懇篤、倩思黔首之勤勞、廻省金科之刑法、其大赦天下、今日昧爽以前、大辟以下、罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、私鑄錢、犯八虐、强竊二盜、常赦所不免者、咸皆赦除、但觸神社訴之輩、不在赦限、又陽輝所照、一天悉受其明、霈澤所覃、四海同得其潤、仍須未得解由者、不論僧俗、同以原免、庶依伽藍之護持、繼重華之聖德、普告遐邇、明俾聞知、主者施行、

此詔書文、後日有被改事、但觸神社訴之輩、不在赦限、被改云、石清水宮寺訴申、射損肥後國藤崎神馬神人、幷賀茂社訴申、土佐國在廳官人殺害神人黨類、日吉社訴申、於越中國殺害神人者等、不在赦限云々、此事不被仰上卿、只藏人權右中辨光賴、仰內記令改加之、密々有御晝日事云々、已背先例也、

〔本朝世紀〕仁平三年九月廿三日己酉、中納言公能卿著仗座、有非常赦詔書事、依一院〇鳥羽御惱也、

詔、禪定仙院、聖躬乖和、痊愈是遲、旬日漸過、德山之上、宿霧晴兮未晴、定水之間、汰風扇兮不靜、朕承龍圖、以降隔鴻化、仰蒼穹、以將延松竿、救瘵之懷至深、感應之道盍達、夫百行之本、無先於孝、肆眚之恩、既出于仁、宜解禁網於一面、專獻仙齡於萬年、可大赦天下、自仁平三年九月廿三日昧爽以前、大辟以下、罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正〇已結正下恐脫未結正三字、繫囚見徒、私鑄錢、犯八虐、故殺、謀殺、强竊二盜、常赦所不免者、咸皆赦除、但觸神社訴之者、不在赦限、抑大陽所照、何論窪隆、霈澤攸霑、無別蘭艾、仍未得解由

（實、先申錄參之由歟、○又見殿曆）

〔殿曆〕永久元年六月廿三日壬申、辰刻許、五位藏人雅兼來云、今日可被行非常赦者、予申云、謹承了、依詔書事可參內之由仰雅兼了、申刻許參內、依御物忌有宿所、上卿別當參陣、以雅兼赦之由（予觸云、依主上御愼有院又同、）仰下了、詔書內覽、雅兼清書持來、予書御畫日了、今夜侍宿、雅兼來仰云、非常赦事也、件事昨日以別當被仰也、事趣行非常赦之後、南京大衆猶可發歟、將不可發歟、予申云、被行赦事、誠可然候也、但大衆發否之條、極難量思給候也、其後又歸來云、先隆覲經覺兩人可歸寺中、其後於赦者、思量天可被仰、仍其由昨日仰下寺家了、

〔中右記〕大治四年六月七日、今夕有非常赦、上卿別當右衛門督實行卿、是依女院（○鳥羽后待賢門院璋子）御產御祈被行也、無被物者云々、大內記宗光作詔書也、

〔中右記〕大治四年七月十九日、頭弁（○源雅兼）來、膝突云、依禪定法王（○白河）崩給、被行非常赦、詔書令作與、予召大內記宗光仰件趣、（被召儲也）持來草、（入宮）以大內記令內覽返給令清書、（依幼主御時不奏也○中略）院（○鳥羽）仰云、去七日早旦、欲行此赦之處、法王崩給了、其後早々欲行、依日次（○次下恐脫不字）宜引及今日也、件赦已無先例、但三條院初、依冷泉院崩給被行云々、不似今度例、仍只有議、禪定法王ハ、朕曾祖父也ト被作也、近有非常赦、在民調庸未進欠不載歟、

〔中右記〕保延三年十月十五日、鳥羽御堂供養、非常赦被行之、（上卿伊通卿、大神宮、八幡、）日吉社訴者非免限、內記不候、仍大學頭時登草之、今年非常赦三ヶ度、希代之例也、

〔台記〕康治二年五月十四日庚午、不他行、依疱瘡幷公家御愼、有非常赦云々、

〔本朝世紀〕久安五年三月廿日壬寅、今日有御願延勝寺供養事、（○中略）藏人頭左近中將經宗朝臣自法皇（○鳥羽）御所方來、公卿座上頭、仰左大將雅定卿云、可有非常赦、但觸神社訴之輩等、不在赦限云々、雅定卿起座召大內記長光、仰詔書事、又召左衛門權佐光賴、被仰詔書施行以前可免囚人之由了、（○中略）

藏人弁顯隆奏聞、御畫日了(二字六日也)返給、歸着本座、召外記尋中務參否、外記申云、少輔弁丞、只今俄難催遣、或以故障、或又不申返事、已及夜半、但錄參陣頭者、(大略實雖不參氣色許歟)以外記傳給、(作入宮下之)依召參御直廬、被仰云、多武峯與福寺鬪亂之輩、已以逢恩赦、不可有沙汰、故御寺智尊律師以下勘當輩、早可免給也、其由召弁別當爲隆、相共議定、可下長者宣者、則於御前與爲隆共相議、下御教書於多武峯御寺了、及鷄鳴歸家、

〔中右記〕天永二年九月廿三日、早旦參一條殿、晩頭歸家之間、從內有召、着束帶入夜之後參仗座、頭弁(○藤原實行)來仰云、公家依有御愼、可被行非常赦、但觸伊勢大神宮八幡宮訴者、非赦限者、予(○藤原宗忠)尋申云、如此事、多可依其年例之由所被仰下也、然者如何、頭弁答云、取御氣色可仰者、則參御前之間、予移着端座、令官人敷膝突、頭弁來云、依天仁二年例可行者、件年依御愼被行非常赦也、次令官人召大內記敦光、(內々先大內記上官等被召歸也、又頭弁只今召集撿非違使等也、)敦光來、予仰件旨、早可作詔書之由仰下之處、敦光陳云、如此赦令之事雖被秘密、同先內々奉行職事被告送事也、今度全不然、只依召馳參也、草詔書之間、定遲々歟、所陳尤理也、如此大事、猶內々可被告上卿并內記許歟、大內記奉仰、於陣腋作詔書之間、予召外記、可催中務輔丞間一人之由仰含了、不經幾程大內記持來詔書草、(入宮)披見之處、無殊難歟、敦光早筆綜功、可謂文之事隨手人歟、仰可內覽之由返給、今間殿下御于直廬也、則歸來云、又不可內覽、及深更之故也、早仰可清書之由、(草清書共、可內覽奏聞也、)大內記歸入之後、令外記召右衞門權佐重隆、則來膝突、(東帶野劔、但不付平緒、可尋事也、)予仰云、公家依可有御愼、被行非常赦、詔書施行以前、且可原免囚人等、但觸伊勢大神宮并八幡宮訴者非免限、重隆奉仰、引率撿非違使等、行向左右獄門歟、左衞門權佐實光、依服假不參也、仰只仰右佐許也、(清書以前免囚人、是家之習也、)大內記持來清書、(黃紙入宮)見了令持大內記、渡南庭行東中門下、(擬弓場殿也、)付頭弁奏聞則返給、(殿下令書御畫日給也、)返給之間、先披見御畫有無、後給內記、歸着陣座、(內記置座前、)召外記尋中務輔丞等參否、申云、依事俄皆以他行或申障、但錄候陣頭者、仍以外記傳給、(作入宮下之)其後退出、(錄必不參陣頭、大略爲故)

（兩文章博士至江中納言(大江匡房)勘文者、今朝付藏人宗仲被奏、從御所下給左大臣〇源俊房）永長被撰上也、（是江中納言被勘中、後漢書文云々、〇中略）大内記俊信有障不參仕、奏事由、以左少弁有信令作詔書、詔書草付藏人弁時範被内覽并奏、（殿下御直廬也）清書又如此、（左大臣作在仗座、入外記筥被奏、）已發覺、未發覺、已結正、未結正、未得解由、并私鑄錢、八虐、未得解由、（〇未得解由重出、恐衍其一、）皆被原免、但謀殺、故殺、强竊二盜、不在免限者、又在民身調庸未進限某年以往、雖可被免、去八月已被行非常赦、故今夜無件事、只復今年半徭者、〇中略　今度有可被行非常赦云々、一年之内、兩度被行非常赦之例、被尋問大外記定俊眞人、憶不申、仍行常赦、（後聞、承暦元年之中、有四ヶ度赦云々、）之後、定俊眞人申有例由、（寛弘八年、頗不吉例也、承暦元年、依皰瘡被行、其冬依法勝寺供養又被行云々、）　十八日、參殿下（〇藤原師通）付惟輔以詞令申事、役夫工使間、爲神人成濫行者、可曾夜前赦哉否事、（上卿被申旨也）詔文觸神祇訴者、無左右詞、但故殺、謀殺、强竊二盜者不被免也、又至八虐者被免了、依件事數度往反江中納言宅、被仰云、今明日次不宜、來廿一日付時範可令申、以職事可被問法家之義歟、

〔本朝世紀〕康和元年七月廿五日丙寅、左大臣（〇源俊房）參入、被行非常赦令、天變地震疾疫等也、（觸伊勢太神宮住吉訴者、藤井範忠□□□不免、）

〔中右記〕天仁元年十月六日壬午、藏人弁（〇藤原顯隆）仰云、近日天變頻示、恠異屢侵、依如此事可被行非常赦、早可令作詔書、但觸伊勢大神宮并八幡宮訴者、非免限者、予（〇藤原宗忠）答云、依何年例可行哉、多依其年例行之由被仰、或又僧侶未得解由輩、可原免歟、但長元五年、承保四年、依如此事被行非常赦、重可取御氣色歟、藏人弁重來云、依承保四年例可行者、（藏人弁談云、今日赦令、依千僧御讀經被行也、然而不載詔文、只以天變被載也、）移着端座令敦膝突、以官人令召大内記、（兼皆被召儲也）大内記敦光參之、赦令之趣下知了、頃而草持來、付大内記令内覽、（殿下御于御直廬也）仰云、重又不可奏、早々可令清書、仰其旨了、又雖可奏攝政時（草清書二ヶ度御覽之）被省略常事歟、此間召右衞門權佐實光、仰赦令趣、詔書施行以前、且又可免囚人之由仰下了、（撿非違使五六人參陣頭、相分遣東西獄門了、）藏人弁（兼左衞門權佐）同可仰下也、而依沙汰職事留禁中也、清書持來、（黄紙）見了返給、暫立小庭、予進弓場殿、付

給湯藥、僧尼亦同、布告天下、知朕意焉、

〔百練抄 四條一〕長德三年四月五日、前帥〈〇藤原伊周〉出雲權守〈〇藤原隆家〉等可召返之由宣下、去月廿五日、依東三條院〈〇藤原詮子、一條母后〉御惱非常赦、可潤恩詔哉否、令諸卿定申、遂有恩免也、

〔法成寺金堂供養記〕治安二年七月十四日壬午、左大臣〈〇藤原賴通〉奉勅語、臨於堂東南檻、召大外記清原眞人賴隆被仰云、可召內記撿非違使者、賴隆稱唯退出、卽令參大內記菅原朝臣忠貞、左衞門權佐大江朝臣保資、各承宣旨退出、是依前大相國有被奏被行非常大赦也、大臣又召賴隆眞人被仰云、大赦詔早可下給、可令試候緣事諸司者、各召使部召仰了、其詔書曰、

詔朕以薄德謬承洪基、愧君臨而及七年、思子育而愼□□、爰外祖前大相國〈〇藤原道長〉營道場於城東之地形、設供養於珪白之秋禮、聽善根之至焉、廻翠華而臨矣、新見土木之壯麗、更知人民之勤功、靜慮所請、唯施仁之情而已、大赦天下、今日昧爽以前大辟以下罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繫囚見徒、私鑄錢、八虐、强竊二盜、常赦所不免者、咸皆赦、又薰風者應□扇、惠露者欲普霑、仍須未得解由之徒、不論僧俗、同以原免、庶因功德之衆二世、將顯感勵之在一天、布告中外、俾知朕意、主者施行、

〔小右記〕萬壽四年十一月十三日己酉、民部大外記賴隆來云、今日被行非常赦、依前太政大臣〈〇藤原道長〉病、按察大納言行成、〈大內記□作詔〉右衞門權佐爲善奉宣旨、先是別當經通卿來簾下、訪所勞、又陳可有赦令之由、

〔中右記〕寬治四年九月廿五日、有非常赦、是依主上〈〇堀河〉御厄年、幷今年近日疾疫發聞也云々、

〔中右記〕永長元年八月二日己未、今夜被行非常赦、上卿治部卿、是依女院郁芳門院媞子內親王御惱也、但於伊勢大神宮幷八幡宮訴者不被免也、藏人弁時範奉行、

〔中右記〕永長元年十二月十七日癸酉、秉燭之程、左大弁〈〇藤原季仲〉被參入、以藏人弁時範被下年號勘文、

會赦自首日限

流、及身死者亦同、○疏議略 餘皆徵之、○盜者倍備疏議略 若計庸賃爲贓者、亦勿徵、會赦及降者、盜詐枉法、猶徵正贓、○疏議略

餘贓非見在、及收贖之物、限內未送者、並從赦降原、○疏議略

〔令義解十獄〕凡犯罪、及欠損官物、經赦降合免、別勅遣推徵者、依赦降例執聞、（謂假令犯罪、及欠損官私物、已經赦降、應須赦免、若有別勅遣推徵者、錄會赦狀奏聞也、）

〔令集解七僧尼〕和銅元年正月廿二日、太政官處分、僧尼犯徒以上還俗、應從會赦免者、聽爲僧尼也、

〔類聚三代格十二〕太政官謹奏

赦書出三百六十日後不可原免事

右謹案名例律、凡略和誘人、若和同相賣、及略和誘家人奴婢、若嫁賣之、卽知情娶買等雜類、赦書到後、百日內首、○中略

弘仁四年三月廿日

〔續日本紀四元明〕慶雲四年七月壬子、天皇卽位於大極殿、詔曰、○中略 大赦天下、○中略 亡命山澤、挾藏軍器、百日不首、復罪如初、

非常赦

〔續日本紀七元正〕養老元年十一月癸丑、天皇臨軒、詔曰、朕以今年九月、到美濃國不破行宮、留連數日、因覽當耆郡多度山美泉、○中略 美泉卽合大瑞、朕雖庸虛、何違天貺、可大赦天下、改靈龜三年爲養老元年、○中略 亡命山澤、藏禁兵器、百日不首、復罪如初、

〔續日本紀八元正〕養老二年十二月丙寅、詔曰、朕虔承寶位、仰憑霄構、君臨天下、四年于茲、上則昊穹下字、黎庶、庸愚之民、自挂疎網、有司之法、寘于常憲、毎念於此、朕甚愍焉、思欲廣開至道、遐扇淳風、爲惡之徒、咸深仁以遷善、有犯之輩、遵令軌以廉風、但自昔及今、雖言大赦、唯該小罪、八虐不霑、朕恭奉爲太上天皇、○元明 思降非常之澤、可大赦天下、養老二年十二月七日子時已前、大辟罪以下罪无輕重、繫囚見徒、私鑄錢幷盜人及八虐、常赦所不原、咸赦除之、其廢疾之徒、不能自存、量加賑恤、仍令長官親自慰問、兼

詐復除、遁本業、増減年紀、侵隱園田、脱漏戶口之類、須改正、監臨主守之官、私自借貸、及借貸人財物畜產之類、須徵收、

〔政事要略五十九〕又云、○名例律、有程期者、計赦後日為坐、注云、赦出後日、仍違程期者、即計赦後違日為坐、

赦後並須准事給程以為期限、

〔唐律疏議名例四〕諸略和誘人、若和同相賣、○疏議略 及略和誘部曲奴婢、若嫁賣之、即知情娶買、○疏議略 及藏逃亡部曲奴婢、○疏議略 署置官過限、及不應置而置、○疏議略 詐假官、假與人官、及受假者、○疏議略 若詐死私有禁物、謂非私所應有者、及禁書之類、○疏議略 赦書到後百日、見在不首、故蔽匿者、復罪如初、媒保不坐、○疏議略 其限內事發、雖不自首、非蔽匿、雖限內、但經問不臣者、亦為蔽匿、○疏議略 即有程期者、計赦後日為坐、○疏議略 其因犯逃亡、經赦免罪、限外不首者、止坐其亡、不論本罪、謂赦書到後百日限外、計之、○疏議略

〔類聚三代格十二〕太政官謹奏

赦書出三百六十日後不可原免事

右謹案名例律、凡略和誘人、若和同相賣、及略和誘家人奴婢、若嫁賣之、即知情娶賣等雜類、赦書到後百日內首、又條云、凡會赦應改正徵收、經責簿帳、而不改正徵收者、各論如本犯律、由茲觀之、唯此二條別立限極、自餘雜犯、無有定程、雖經多歲、追從原免、夫宥過肆罪、渙汗惟深、改且自新、事涉年序、而或雖經恩蕩、未見首露、或赦後赦前犯、不必明尋其由緒、大概不得已而施恩、應立程而無限之所致也、姦之為端、觸途多類、伏望自今而後、雜犯會赦可免者、赦書出後三百六十日內言訖、若過此期不入原例、庶令偏祐有限、姦源是斷、伏聽天裁、謹以申聞謹奏聞、

弘仁四年三月廿日 ○又見政事要略、類聚國史、

〔令集解二十三〕名例律、會赦及降者、盜詐枉法、猶徵正贓、餘贓非見在、及收贖之物、限內未送者、並從赦降原故也、○又見政事要略、

〔唐律疏議名例四〕諸以贓入罪、正贓見在者還官主、轉易得他物、及生產蕃息、皆為見在、○疏議略 巳費用者、死及配流勿徵、別犯

承保四年五月四日　左衞門權佐藤原朝臣敦宗奉

〔柱史抄下帝王〕赦令事

當日隨職事告、即以參陣、上卿召內記仰云、依其事被行赦令、詔書可草進者、內記問可被用何年例哉、上卿被示者非其限、不然者相逢職事可尋者、尋問子細之後、內記成詔草入筥持參之、內覽奏下如恆、即淸書、淸書之後、覆奏如例、必有御畫返給、上卿乍居座召中務輔若丞給之、(輔丞若不參者召外記、外記於宣仁門外召錄給也、)次召撿非違使、可免囚人之由被仰之、但九條殿(○藤原師輔)流召內記仰詔草之後、不待詔書之施行可免之旨、召廷尉仰之、是即雖一時不可逗留可免赦給之故云々、抑常赦其例非一、改元、朔旦冬至、御即位、御元服等、多是常赦也、其詞云、今日昧爽以前、大辟以下罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繫囚見徒、皆以赦除、或依先例有高年者賑給事、大赦、大辟以下、八虐、故殺人等、咸皆赦除、但常赦所不免者、不在赦限者、大赦絕而不被行、常時所被行者、常赦、非常赦也、非常赦、臨時被勅定也、常赦之外、犯八虐、故殺謀殺、强竊二盜、常赦所不免者、悉皆赦除之字可加也、或依先例、調庸未進在民身者、同以免除、件調庸今年以往四箇年之外免之、故實也、或被免徭役半徭幷未得解由者也、

〔禁秘御抄下〕一赦令

世大事、殊御祈之時被行、恆免者、別當給勘文、下撿非違使、或別當則爲上卿、召撿非違使於軾下之、

〔類聚三代格十二〕太政官謹奏

赦書出三百六十日後不可原免事

右謹案名例律(○中略)又條云、凡會赦應改正徵收、經責簿帳而不改正徵收者、各論如本犯律、(○中略)

弘仁四年三月廿日

〔政事要略五十九〕名例律云、會赦應改正徵收、經責簿帳而不改正徵收者、各論如本犯律、

〔唐律疏議四名例〕諸會赦應改正徵收、經責簿帳而不改正徵收者、各論如本犯律、(謂以嫡爲庶、以庶爲嫡、違法養子、私入道、

〔北山抄六〕赦免事

仰辨、但非常大赦者、詔書未施行間、且可免事、召撿非違使佐若尉仰之、（雖聚有仰志例、召小庭仰歟、）自餘辨史傳宣、（常赦者別當奉）

〔江家次第十八臨時〕改元事

若有赦之時

非常赦者、大臣召撿非違使佐以下一人、仰詔書施行以前、可免見徒由、佐召撿非違使等、相分向左右獄、佐或帶胡籙乘馬、立於獄門、召出囚等、仰之看督長、作法、佐仰云、依其事（若其變）殊以免給、各罷還本貫、重犯不奉仕、爲公御財御調物備進（讀）、看督長曰乎吉、ゝ、囚等稱唯、佐仰曰、早鈦取（讀）、常赦者別當奉之、令道志勘申可會赦之輩、後免之、

〔左經記〕寬仁四年四月廿六日丁未、傳聞赦免詔出之後、未被仰可免囚人等之由、仍獄囚等之多愁歎、云々、關白殿（藤原賴通）聞食此由、令頭中將問中宮大夫、大夫（藤原齊信）被申云、大赦之時、召使官人仰可免四人之由、恩赦之時不可仰下、是詔書施行之後、諸司知此由、自可免也、雖然有仰須令奏其勘文也者、後日中宮權大夫（藤原能信）於里亭令頭中將奏可免除犯者勘文、入道殿（藤原道長）聞食此由被仰云、自一上之外、於里第專不可奏文者、甚違例事也云々、

〔朝野群載十一廷尉〕赦免宣旨仰

別當正二位行權中納言兼右衞門督藤原實季宣、奉勅近者乾坤屢呈變動之異、華夷間有疾疫之憂、消其災殄不如肆眚、仍可大赦天下、今日昧爽以前、大辟以下罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繫囚見徒、犯八虐故殺、謀殺、私鑄錢、强竊二盜、常赦所不免者、咸皆赦除者、蓋除刑法於三木之下、拂禍殃於萬柳之外也、而所司懈緩、領下稽留、强違明息（息恐恩字誤）之心、已非昧爽之義、宜不待施行之符、早以隨原免之例者、

座主僧正仁覺權僧正隆命、參朝于飯方、令祈申、又在陣外讀經、(法花經)參入渡殿、僧侶濟々參入、奉祈玉體、(○堀河)晩頭中宮大夫師忠卿、參仗座、行非常赦、依御藥也、付藏人少納言氏宗被奏詔書草、但伊勢大神宮訴者、并八幡宮訴者、非免限、又寬治五年以往調庸未進、悉以原免者、御晝日、玉體乖例之間、相替殿下(○藤原師通)令書給也、又詔書未施行前、且可免囚人之由、上卿或進被申請、或又從御所進所被仰下也者、今度無左右仰、又上卿不被申請、只上卿且可被仰左衞門權佐有信、有信向獄門原免囚人云々、

〔續日本紀(二文武)〕大寶元年十一月乙酉、太政官處分、承前有恩赦罪之日、例率罪人等集於朝庭、自今以後不得更然、赦令已降令所司放之、

〔三代實錄(六清和)〕貞觀四年七月十五日壬午、下知五畿七道諸國、進會赦帳程、准不與解由狀之期、

〔延喜式(二十九刑部)〕凡犯罪會赦及降合免者、並據赦降出日免罪、

〔延喜式(二十九刑部)〕凡罪人會赦合放者、省即免之、不可申官、

〔新儀式(五臨時)〕恩赦事

會赦原免者、見詔書條也、又臨時、或依旱雨、或有事故、寃獄之者、未斷囚人、間有原免之恩、其時先召仰撿非違使(謂佐已上)令進勘文、按其罪名、計其輕重、下宣旨於有司免之、或參議辨官等奉仰、各就左右衞門府廳免之、

〔小野宮年中行事〕免者事　非常赦詔書下給了、即詔書施行以前、可原免常赦所不免者之由、仰撿非違使、

常赦免者事　詔書出後、詔書施行以前、任詔文可免輕犯者之由被仰別當、有宣旨書、

臨時免者事　別當依宣旨上奏輕犯者勘文、依宣旨原免、有宣旨書、

○按ズルニ、此說常赦ヲ以テ輕犯ニ止マルト爲ス、金玉掌中抄、二中歷、拾芥抄、柱史抄等ノ諸書ト合ハズ、

日壬申、酉刻右大臣令奏、去五月十八日詔、草昧文削之、改爲薄德大外記宜義、奉仰削改之、下給之、

〔春記〕永承七年五月十六日庚申、督殿命云、頭弁經家含關白○藤原頼通命來云、非常赦詔文無故殺謀殺之文、若書落歟、將有先例歟、若落失者命書載如何者、令申云、先例詔書字落事是常也、後日更加入奏之、清愼公○藤原實賴被行○行恐書誤落施行行字、後日入之、又九條殿○藤原師輔被行之時、落二ケ字、後日注入之、是等例也、但此度詔文不載故殺謀殺之文、是尋先例所不載也、非落失、古昔之例多不載此文、或又載之、仰內記令勘先例令奉覽、其後可隨御定也者、頭弁云、經成卿以忠方說所申云々、奇恠事也、末代愚者難先賢之所爲太希有事也者、今以大內記廣經可令勘注也者、　十七日辛酉、督殿命云、大內記持來詔書等、自天應以來有非常赦卅餘度也、廿度不載故殺謀殺、就中延木臨時○時下恐格字脫載詔書、已不載此文、已是施行之詔也、淺學人不得法心加難、太以不足言事也者、　十八日壬戌、右府、及金吾拾遺納言信長二品納言俊家中宮權大夫經輔左兵衞督左大弁經長宰相中將能長右兵衞督經成等參入、督殿命云、詔書事、大略面申執柄已了、延木臨時格載詔施行已了、其詔文不載故殺謀殺、以之可爲規模、何況此外詔書非常赦自天應以來、卅餘度也、廿度不載故殺謀殺、今十一度載之、此由具申了、又明法博士成道云、以不入可爲吉也、又以載此文不可爲難者也、大辟死罪也、無輕重免之、故殺謀殺籠此中、又八虐中有故殺謀殺、仍不注載也、末代淺學之人、不得法心恣加謗難、太不足言事也、可彈指可彈指者、忠方所疑以之經成卿申關白云々、不覺者等也云々、　廿一日乙丑、督殿命云、頭弁書云、詔書勘文今明覽關白、命云、先例多不載故殺謀殺之文、又延喜臨時格已不載此文、全是明鏡也、仍不可載此文者、督殿命云、可載故殺謀殺等之事、別當經成卿以源大納言令申殿下云々、太不覺者等也、以不足言而已者、明法博士成道云、不知法心之者、致荒凉難、是忠方所爲云々、　七月廿五日、大赦詔書、女院御惱之赦今日持來加署名、可被施行之故也、件詔不載故殺謀殺之由、經成卿所難也、然而不被用也、

〔中右記〕嘉保二年九月廿一日、御物忌也、奉幣後○是日伊勢奉幣發遣齋僧侶參上之例有度々者、仍此曉天台

往雜交易等之未進、並皆停留、莫責輸貢、但其本物、隨色撿納、國司實錄、別自言上、朕問於舊事、訪之遺塵、恩雖無涯、赦亦有限、而今日之所行、先皇所不赦、既不依祖業、豈須貽孫謀、後代之論者、亦將知乎此、誠念欲令一蹶之驥、更展足於長途、再汚之婦、復無心於佳會、布告遐邇、俾知朕意、

承和九年八月廿七日（○又見類聚國史）

〔本朝世紀〕天慶八年十二月七日己巳、今日依天文變異、有赦宥詔書、（先是去二日、右大臣（藤原實賴）召大外記三統宿禰公忠仰云、日來天文家、頻奏變異、其中先例如此之時、有大赦天下詔書、歟、官勘申者、養老六年七月延喜五年六月等例已了、）大臣召小內記菅原文時仰云、依延喜五年六月例、成詔書草可奉者、

〔權記〕長保二年五月十八日甲午、酉剋右衞門督（○藤原公任）令奏未斷囚人勘文、依外書以詞奏之、合廿九人之中、左廿三人之中八人、依殺害強竊盜呪詛之者重、其外或嫌疑之輩輕、（矢田部有延擬殺害僧者云々、輕也、不承伏、）右六人殺害者二人重、（可然可免、丈部有光傷御垣丸可免、）其外強盜等嫌疑刃傷之輩輕、右大臣（○藤原顯光）被奏赦免例勘文、仰云、依長德二年例可作詔書、亦未斷囚人之中（右衞門督令申）依詔可赦免之者非幾、隨束定可免犯狀不分明者等歟、仰云、所申可然、相計可原免、（○中略）戌剋右大臣（○藤原顯光）於便所令奏詔草、詔云、母儀仙院（○一條母后藤原詮子）綺膳乖味、琲席不閑、惠露光危、下藥之方無驗、定水雖明、上池之術未施、朕以草昧忝承鴻基、欲痊之懷、雖凝於方寸、若祈之感、難達於彼蒼、思解般羅之斯設、以獻胡福而永全、可大赦天下、自長保二年五月十八日申時以前、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、強竊二盜、咸赦除之、但犯八虐、故殺、謀殺、強竊二盜、私鑄錢、常赦所不免者、不在赦限、布告中外、普俾聞知、主者施行、仰云依草、　廿三日己亥、右大臣參入被奏云、大辟以下之句、欲令書載詔書、其字已多、重承仰事、將以左右、又草昧事、匡衡朝臣有所申云々、若以其旨且問作者爲政、且問宣只今候座參議中儒者等如何、仰云、依天曆六年例可加入、不可改書、草昧事可問、暫之被奏云、草昧事、爲政申有例之由、所指已明之由、式部大輔菅原朝臣忠輔朝臣等申云、爲政申已有例者、有何難乎、　十二月十五日戊午、此日於陣有草昧定云々、　廿九

〔文獻通考刑考百七十三〕宋朝赦宥之制、其非常覃慶、則常赦不原者、咸除之、其次釋雜犯死罪以下、皆謂之大赦、或止謂之赦、雜犯死減等、而餘罪釋之、流以下減等、杖笞釋之、皆謂之德音、亦釋雜犯罪至死者、其恩霈之及、有止於京城兩路一路數州一州之地者、則謂之曲赦、

〔北山抄六〕詔書事改元、改錢、幷赦令等類也、臨時大事爲詔、尋常小事爲勅、○中略

免物詔、今日昧爽以前、或其時以前云々、天皇崩時、指其時、其外不然者、近例不定、可尋舊跡、舊例又不定、但有大赦時、必指其時、依御薬等忽被行時、又有指時之詔云々、檢例貞觀元慶御元服詔、指時、又雖凶事、有不指時之詔、今按、不論善惡、有指事被行事、可指其時歟、非常赦多指之云々、有非常赦者、下詔書後召左右撿非違使佐、仰施行以前可免獄囚之由、若佐不參仰尉、無弁史傳宣、希有例也、尉以上不參時、有仰志例、其時可用此例、延長元年閏四月十四日、左右大辨向左右獄、囚人各給布一端、加敎喩免之、至于常赦勘可會赦之者免之、仍別當可承也、免年租稅調庸等未進之時、其年限不定、或當年以往四箇年之外免之、或五年外免之、或去年以往、或三年以往、或前帝御宇以往免之、以除五年免之可爲善歟、今年任終國司不可濟之年也、或又免當年半徭、至于正稅非免、死逢赦之例、然免往年未納希有恩也、於改元詔、皆五年外免之、依瑞故時、或免當年調庸等、又告諸神、但代始无免物等、

〔享祿本類聚三代格十七〕詔、百城煙峙、振綱紀者歸乎牧、千里風行、班章條者存乎宰、是以懸衡御辨、握鏡臨圖、欲廣此巸熙之功、必資循良之吏、朕以虛寡、懋惟帝績、剖珪符以責成、分憂之望所焉、紆銅墨以推最、求瘼之寄斯在、而朝章難副、國憲易纏、躬不率正、私顧之累方滋、職乖恪居、公方之節已墜、罩父之民、未威絃歌、清河之吏、屢陷徽纆、劾狀盈閣、已溢斷文、藏車不勝、近緣大行天皇嵯峨○聖躬不豫、敷暢鴻恩、洗滌群穢、而有司執奏、不在赦限、朕悲、夫春枯之樹、雷蟄之蟲、或身歸農野、撫花髮而惕慮、或志在名節、望榮路而絕思、此之可愍、畜于素懷、宜承和九年八月廿七日以前、外吏秩滿、未得解由者、已言上、未言上、咸悉原免、其未言上輩、所有欠負、幷自借判署之類、後司據實、造會赦帳、前後官司、共署言上、及未請返抄者、亦同令辨申、且專宥前人、遐累後吏、論之治道、誠非平適、其承和二年以往雜米穀、及五年以

非常赦

大辟以下八虐、故殺人、私鑄錢、常赦所不免者、皆咸除、

〔二中歴 刑法 八〕三等赦書狀

常赦

大辟以下罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、咸皆赦除、但犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、強竊二盜、常赦所不免者、不在赦限、

大赦

大辟以下罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、強竊二盜、咸皆赦除、但常赦所不免者、不在赦限、又老人及僧尼、年百歳已上給穀、人別四石、九十已上二石、七十已上一石、

非常赦

大辟以下罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、私鑄錢、犯八虐、故殺、謀殺、強竊二盜、常赦所不免者、皆悉赦除、謂常赦者、勘可會赦之者免之、仍別當奉之、大赦者、犯八虐、故殺、謀殺等不在赦限、非常赦者、免調庸未進之、年限不定也、或當年以往、或去年以往、或三年以往、或先帝御宇以往、但免五年之外云々、

〔拾芥抄 下本 赦令〕赦書云、大辟以下罪、咸皆赦除、但八虐、故殺人、常赦所不免者、不在赦限者、此常赦也、又云、大辟以下八虐、故殺人等、咸皆赦除、常赦所不免者、不在赦限者也、是大赦也、又云、大辟、以下八虐、故殺人、私鑄錢、常赦所不免者、皆赦除、是非常赦、

凡赦書大旨者、人生〇生恐主字誤之所命、命有議云々、[illegible]人問答云、問赦書有幾種、答大理可有三種、以前三種三赦是也、但隨人主之命可有時宜者、四種以上、亦令有耳云々、

者ハ之ヲ原スナリ、又嫡ヲ以テ庶ト爲シ、庶ヲ以テ嫡ト爲ス類、會赦以後、簿帳ヲ責メラレテ改正セザルトキハ、本犯ノ罪ヲ科シ、人ヲ略シ和誘シ、若シクハ和同シテ相賣ルガ如キノ類、赦書到リテ後ニ、百日内ニ首セズシテ故ラニ藏匿スルトキハ、初犯ノ本法ニ從ヒテ論ズ、而ルニ此餘ノ雜犯ハ自首ノ日限ナキヲ以テ、嵯峨天皇ノ弘仁四年ニ、三百六十日後ハ原免スベカラザルノ制ヲ立テタリ、强盜竊盜詐欺取財、枉法贓ハ、赦降ニ會フトモ正贓ヲ徵シ、餘贓ノ見在ニアラザルト、收贖物ノ日限内ニ未ダ送ラザルトハ、並ニ赦降ニ從ヒテ免シ、赦後ニ至リ人ノ赦前ノ罪ヲ告言スル者アレバ、其罪ヲ以テ之ヲ罪シ、受理スル官司ハ故入人罪ヲ以テ論ズ、罪ヲ犯シ、及ビ官物ヲ欠損セシ人、赦宥降罪ニ會ヒテ免スベキニ、別勅ヲ以テ推徵セシムルトキハ、赦降ノ狀ヲ錄シテ奏聞ス、

名稱

〔伊呂波字類抄〕〔道疊字〕恩赦　〔同〕〔志疊字〕赦免

〔年中行事歌合〕四十八番　左持　恩赦　二位中將

みことのりくだしもあへずゆるすなり罪有をだに捨ぬめぐみに

恩赦といふは、囚人の獄舍にあるを取出して免せらるゝ也、ゆるし者とも是を申にや、然べき御所、又御佛事などに行るゝ事、常の事也、大赦とは、殊に天下の重事などにつきて俄にをこなはる、されば詔書の執行をまたずして、且免せらるゝ心を此歌にもいへるにや、

赦宥詔書

〔金玉掌中抄〕赦書狀

常赦

大辟以下咸皆赦除、但八虐、故殺人、常赦所不免者、不在赦限、

大赦

大辟以下八虐、故殺人等、咸皆赦除、但常赦所不免者、不在赦限、

古事類苑

法律部十二

上編

赦宥

赦ハ、又ハ免物トモ、免者トモ云ヒテ、常赦、大赦、非常赦ノ別ハアレドモ何レモ大赦トモ、赦トノミモ云ヘリ、常赦ハ大辟以下ヲ赦シテ、八虐、故殺等ハ原サズ、大赦ハ八虐、故殺等ヲモ赦シ、非常赦ハ有罪者ヲ悉ク赦スナリ、後ニハ非常赦ノミニテ大赦ハ行ハレズ、又臨時赦アリ、輕犯ノミヲ赦スヲ云フ、又曲赦アリ、一地方ノ罪人ヲ赦スヲ云フ、又囚人ノミヲ放ツコトアリ、流以下ヲ釋スコトアリ、徒以下ヲ釋スコトアリ、特ニ一二人ヲ赦スコトアリ、後ニハ大赦ト恩赦トヲ分チテ、恩赦ハ輕犯ヲ赦スヲ云ヘリ、又恩降アリ、赦ノ類ナリ、全國ノ死囚ヲ一等降スアリ、死流ヲ各〻一等降スアリ、特ニ一二人ノ死罪ヲ降スアリ、而シテ赦降ハ祥瑞ニ由レルアリ、慶賀ニ由レルアリ、疾病ニ由レルアリ、災異ニ由レルアリテ、其由ル所一ナラザルナリ、又赦ヲ行フニ就キテハ、或ハ重罪ノ人ヲ宥サズシテ其ノ罪ヲ降シ、高年ノ人ニ穀ヲ賜ヒ、孝子、順孫、義夫節婦ノ門閭ニ旌表シテ、終身ヲ復除シ、鰥寡惸獨廢疾ノ人、及ビ僧尼ヲ賑恤シ、租調ヲ蠲キ、欠負ヲ免ス事アリ、又赦降ニ會ヒテ罪ヲ免スベキハ、赦降ノ出ル日、太政官ニ申サズシテ、刑部省ニテ直チニ放免スル制ナリシガ、後ニハ撿非違使ニテ、詔勅ノ施行ヲ待タズシテ釋ス事ト爲レリ、流配人已ニ上道シテ、路ニ在リテ赦ニ會フトキハ、行程ヲ計ヘ、日限ニ過ギザル者ハ赦シ、過グル者ハ赦サヾレドモ、行程ノ日限未ダ滿タザル内ニ配所ニ至リシ

古事類苑

法律部十二

上編

赦宥

過一兩日優免何事之有哉、然者早明日可免給也者、官申狀頗無謂、然而先如此之時、或一兩日或兩三日不過此日數、然者自本明日明後日之間、存可免之由、今寄事於公事、依有其便所免行也、但今日被免者、頗可謂輕々、去夜召籠之者、翌日優免不可然之故也、仍明日仰可免之由者也、

〔古事談〕六亭宅諸道　伶人助元助種父歟依府役懈怠事、被召籠左近府下倉、此下倉ニハ蛇蠎ナル物ヲト、怖畏之間、夜半計大蛇出來、○中略大口ヲアキテ已欲成害、助元心神如無、雖然ワナヽクワナヽク笛ヲ拔出テ、吹還城樂破、爰大蛇來留テ、頸ヲ高クモチアゲテ、有聞笛之氣色、暫聞テ搔歸去畢云々、

雅事不可爲例、應和中少將四五人伺見除目、仍令召籠左右近陣、近代地下者召籠陣、殿上人者只候禁中也、藏人或召籠橫敷、仲資百日候橫敷、藏人頭私召籠恒事也、又瀧口所衆等或召籠御所中、或召籠于殿上口、片時不許、殊重時也、召籠人不從御膳、不參御前、

〔貫首秘抄〕不仕之瀧口召籠、本所ニハ不令著到、是第一之勘當也、相傳之事也、下馬寮幷陣事ハ奏事由所許也、於召籠者頭任意也、

〔中右記〕寛治八年（○嘉保元年）十二月二日、今日頭弁（○源師頼）幷一﨟式部丞定仲恐懼、是五節之間舞姫入之後、開帳代戸萬人見了、奇怪者、依件事從院（○白河）被仰被召問、彼兩人無所陳歟、仍以勘事、頭弁繼不知故實雖表奇怪、職爲貫首被恐懼事如何、爲藏人頭者勘事近代頗所不聞也、　六日癸酉、有賀茂臨時祭、（○中略）陪膳宗忠（頭弁被免勘事、有召不被參之替也、）

〔本朝世紀〕康治二年十一月廿四日丙子、今日內大臣（○藤原賴長）參入、不堪田申文、次有官奏事、右大史忠行被召籠陣、持參奏報於內大臣里第之間、聊有失錯之故云々、　十二月七日己丑、右大史忠行被免召籠了、

〔本朝世紀〕仁平二年四月八日壬申、平野祭也、分配上卿參議雅通朝臣遲參、仍左少辨範家爲上代行事、後日左府（○藤原賴長）勘責行事外記大江以隆、被召籠於腋陣、是入雅通朝臣於見參奏聞之故也、

〔山槐記〕應保二年三月廿九日、有名謁、（○中略）瀧口又名謁如去夜、召籠藏人、今夜不役、又不名謁候橫敷、

〔玉海〕安元二年五月十五日己未、此日軒廊御卜也、（○中略）行事史弁官掌等、暫可召籠陣之由仰了、今日事致懈怠之故也、　十六日庚申、申剋許、兼光送書於光經之許曰、當時六位史六人、或他事奉行、或所勞故障、仍祐重雖候陣、明日仁王會定事令倩勤如何、自官所申上也、諸司不具之責者兼光難遁、然而官申上事、依不可默止所申上也云々、仰云、早可令倩勤、但乍召籠奉行之條、何必可然哉、明日只可被仰免給之由也、凡者他史等之中何無可奉行仁王會事史哉、不可寄事於左右、然而祐重又非強重科、

召籠

之患、繁昌之故歟、廳公文辛櫃送市事、以囚人為擔夫恒例也、而依無禁獄之囚、積雜役車云々、

〔法成寺攝政記〕寛弘二年二月二日庚辰、初東三條修善、慶圓大僧都、　四日壬午、至東三條、召獄囚等、令移各賜布、

〔宇槐記抄〕仁平二年五月十二日丙午、酉刻、歸土御門、召左衛門志兼成、明法博士仰曰、可禁斷京中殺害之由、可示別當、其次加仰曰、近年獄囚不禁獄中、在下部家之由有其聞、兼成付封於獄門、不可令出之、

〔源平盛衰記二〕新帝御即位同崩御附郭公幷雨禁獄事

今年〇永萬元年ノ夏郭公、京中ニミチ〱テ、頻ニ群リ啼ケリ、此鳥ハ初音ユカシキ鳥ナリトテ、スキ人ハ深山ノ奥ヘモ尋入例多キ事ナルニ、今ハケシカラヌ事ナリトテ、人耳ヲ峙ル程ナリケルニ、二羽ノ郭公空ニテ食ヒ合、殿上ニ飛落タリケリ、野鳥入室、主人將去ト云本文アリ、此恠異ナリトテ、二羽ノ郭公ヲ捕テ、獄舍ニ被禁ニケリ、白川院御時、金泥ノ一切經ヲ被書寫、法勝寺ニテ御供養ト被定、其日時ニ及ンデ、甚雨有ケレバ延引ス、又日時ヲ被定タリケレバ、甚雨ニ依延引ス、又日時ヲ被定タリケレバ、甚雨ニ依延引ス、既ニ三箇度マデ延引アリ、第四箇度ニ適御供養有ケル日、空掻曇リ雨降テ、俗モ僧モシホ〱トシテ、法會ノ儀式最興醒タリケレバ、天氣逆鱗有テ、雨ヲ器ニ受入テ、獄舍ニ被入タリシヲコソ、珍キ事ニ申シヽニ、郭公ノ禁獄、先例ナシ、位ヲ去セ給フ事、今ニ不始事ナレ共、六月ニ御座ヲスベラセ給テ、何シカ七月ニ崩御、〇二條怪鳥殿上ニ入ケル故ニヤ、本文モオモヒシラレ哀ナリ、

〇

〔禁秘御抄下〕召籠事

侍臣已下有咎之時召籠、或令候殿上、藏人頭召籠非普通事歟、近公雅被召籠、師賴為頭之時、與藏人定仲伺見五節帳臺、于時出御無有沙汰、師賴恐懼卅日許籠居、為頭人勸事不聞事也、時人驚耳目云々、公

雜載

〔中右記〕永久二年五月十六日庚寅、巳時着束帶參院、未斷輕犯勘文、夜前送頭弁〇藤原實行許、以件勘文付頭弁奏聞、左右獄政所散禁合百廿餘人、除着釱囚外皆注入、大略可被免者六十九人之中、有被尋仰之事強盜殺害輩不被免、此外多被免也、法師女盜類所被免也、已御合點了、頭弁持參殿下、〇藤原忠實、但京極殿穢氣之間、於門外申入云々、

〔百練抄七近衛〕仁平元年七月十四日、左衛門督家成卿雜色九人禁獄、去十二日依搦取左大臣〇藤原賴長下部也、

〔百練抄八高倉〕嘉應元年十二月廿三日、延暦寺衆徒奉具日吉神輿參大內、是權中納言成親卿知行尾張國目代右衛門尉政友與神民不慮鬪亂事出來、爲訴申也、於院召公卿議定、政友可候獄所之由、雖被仰、衆徒猶不承引叫喚、廿四日、權中納言成親卿解官、配流備中國、政友賜獄所、衆徒成悅、奉迎神輿歸山、

〔百練抄八高倉〕治承元年四月廿日、加賀守師高配流尾張國、射神輿下手人六人禁獄、

〔源平盛衰記十三〕高倉宮信連戰事

大將〇平宗盛彌腹立シテ、兎角ノ陳答ニ及バズ、疾々川原ニ引出シテ、首ヲ刎ヨト宣ケリ、信連重テ申ケルハ、是ハ命ヲ惜答ヲ申ヒラカントニハ非ズ、〇中略唯有ノ儘ノ事ニ侍ト云ケレバ、平家ノ侍共ガコレヲ聞テ、ゲニモ道理ナリ、〇中略ナド、人々申合ケレバ、大將ゲニモトヤ覺シケン、死罪ヲバ宥テ、且ク左ノ獄ニ被入ケリ、

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年二月廿三日壬午、前右馬助季高、散位宗輔等、依同意于義仲朝臣、被召禁之、被下使廳云云、

〔西宮記臨時十〕與奪事 附臨時着釱例并放免役畢囚人事

宗金記云、長久五年五月廿五日、使廳政也、〇中略同日小日記云、今日見物車馬總以不來、是京中疾疫

濫、不張禁網、何遏鳥蠶、宜改決杖、從禁法、禁固之間、卅日之内、定其狀迹、然後原免者、兵仗之制、自古及今、其來尙矣、或設八十杖之科、或定三十日之禁、尋此弛張之意、皆是懲肅之法也、抑五刑之興、五行爲本、杖自六十止於一百、徒自一年止於三年、所乘有限、非可依違、彼決杖之文、比附所取、但彼禁身之戒、准的有疑、何則徒者半年爲一等、以三十日爲何等乎、已乖條章、不便遵行、停件禁固、所帶之仗、早從破却、所違之罪、處杖八十者、同宜奉勅依請者、

以前條事、所仰如件、使宜承知依宣行之、符到奉行、

從五位下行左大史小槻宿禰泰親

參議從三位行左大辨兼勘解由長官藤原朝臣忠輔

長保三年閏十二月八日

〔本朝世紀〕長和二年四月九日庚午、前大和守朝臣云、一夜、左府牛尾被切、以使官人被糺問之處、傍牛童相挑所切也、被禁囹圄、

〔百練抄四後朱雀〕長暦三年二月十九日、有司召取山僧出雲等院禁獄、依濫行也、

〔春記〕長久元年六月十一日甲午、藏人公基云、四衞府狩取等七八十人許、自昨日候北陣、有訴訟事、是件供御所下人與按察大納言〇藤原長家庄司鬪亂之間、供御所下人被打調也、卽捕狩取禁獄所云々、彼庄司所爲云々、仍所愁申云々、然而未有裁報者、

〔百練抄四後冷泉〕永承二年十一月、太宰府追捕大宋商客宿房放火者禁獄、

〔百練抄五堀河〕康和二年六月廿八日、甲斐守惟信、大膳亮仲範可贖銅、左近府生秦武忠可禁獄之由宣下、是去三月伊勢大神宮神人、於途中過前大相國〇藤原師實致無禮之間、武忠搦取神人、依神宮訴也、

〔中右記〕永久二年三月廿六日、說兼、明兼、經則等來、於法勝寺四至内鴨川邊取魚犯人、說兼召取將來、是今朝從法勝寺付資清訴申之犯人也、暫仰可令候散禁之由了、

撿按、有人持炭火插東十四間長殿東面長押、且揆火且出物、優婆塞三人、藏部一人、親入盜物、卽著紲優婆塞、一人先申云、己等所謀、騷動之間、雜糅取物、去十月廿日夜失火、亦己等所爲、至明朝、勅使左右近衞少將推問、或爭避、或吐實、依事未盡、優婆塞降非違禁固、藏部降囚獄着鈦、于時擢集大庭五位已上尤勇士人賜物、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年七月己酉、是日春宮坊帶刀伴健岑、但馬權守從五位下橘朝臣逸勢等謀反、事發覺、　乙卯、直曹前右兵衞陣下張幄一字、散禁坊司及侍者帶刀等於其中、自餘雜色諸人、散禁於左右衞門陣、

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年十二月丙子、散位從五位上文室朝臣宮田麻呂之從者陽侯氏雄、告宮田麻呂將謀反、遣內豎喚宮田麻呂、卽副使參於藏人所、卽禁宮田麻呂于左衞門府、　戊寅、禁告者氏雄于左近衞府、

〔文德實錄八〕天安元年正月乙卯、前讚岐守正五位下弘宗王、前日向守從五位下嗣岑王、散禁右京職、先此讚岐國百姓等訴弘宗王、仍遣詔使推問虛實、伏辨已了、使等爲囚付國禁固、而弘宗王脫禁逃亡入京、故今重禁、又嗣岑王先被告將殺詔使、而竊輙入京、故亦禁固、

〔文德實錄十〕天安二年閏二月甲寅、前越後守從五位上伴宿禰龍男、被告故殺下獄、

〔新抄格勅符抄十〕太政官符撿非違使

雜事伍箇條〇中略

一應非色輩帶兵仗罪停廿日禁固如舊處杖罪事

右同前〇撿非違使奏狀偁、寬和三年正月廿日宣旨云、別當正三位行中納言兼左衞督〇督上下恐有脫字源朝臣重光宣、奉勅、非色輩帶兵仗之制、前後重疊、去永觀二年、停禁其身、可決杖八十之由、依撿非違使申請、仰下先了、而今如聞者、不善之者、無畏禁揵、好著弓劍、街路之間、屢成其犯者、綱法之嚴、爲施奸

仰事、仍暫給其假、可加療治之由、遣季任朝臣許已了、

囚人死亡

〔延喜式 二十九 囚獄〕凡罪人死亡者、具注姓名年居幷入徒年月日申省、

〔令義解 獄十〕凡囚死无親戚者、(謂无有服之親者)皆於閑地權埋、立牓於上、記其姓名、仍下本屬、即流移人在路、及流徒在役死者准此、

〔唐書 五十六 刑法〕凡囚已刑、無親屬者、將作給棺、瘞于京城七里外、壙有甎銘、上揭以榜、家人得取以葬、

〔日本書紀 十五 仁賢〕四年五月、的臣蚊島穗瓮君(瓮此云倍)有罪、皆下獄死、

囚人自殺

〔日本書紀 二十九 天武〕十三年閏四月乙巳、坐飛鳥寺僧福揚以下獄、　庚戌、僧福揚自刺頸而死、

囚禁例

〔續日本紀 十 聖武〕天平元年二月辛未、左京人從七位下漆部造君足、无位中臣宮處連東人等告密、稱左大臣正二位長屋王、私學左道、欲傾國家、　癸酉、令王自盡、(中略)乃悉捉家內人等、禁著於左右衞士兵衞等府、

〔續日本紀 十九 孝謙〕天平勝寶八歲五月癸亥、出雲國守從四位上大伴宿禰古慈斐、內豎淡海眞人三船坐誹謗朝廷、无人臣之禮、禁於左右衞士府、　丙寅、詔並放免、

〔續日本紀 二十 孝謙〕天平寶字元年七月乙卯、遣中納言藤原朝臣永手、左衞士督坂上忌寸犬養等、就右大臣藤原朝臣豐成第、宣勅曰、汝男乙繩關兇逆之事、宜禁進者、即加肱禁、寄勅使進、

〔萬葉集 六 雜歌〕神龜四年丁卯春正月、勅諸王諸臣子等、散禁於授刀寮、時作歌、(歌略)

右神龜四年正月、數王子及諸臣子等、集於春日野、而作打毬之樂、其日忽天陰雨雷電、此時宮中無侍從及侍衞、勅行刑罰、皆散禁於授刀寮、而妄不得出道路、于時悒憤即作斯歌、　作者未詳

〔日本後紀 八 桓武〕延暦十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂薨、(中略)長子廣世起家補文章生、延暦四年坐事被禁錮、特降恩詔除少判事、

〔類聚國史 百七十三 災異〕弘仁十四年十一月壬申、亥剋巡大藏舍人等、呼失火於大藏省、左右大辨等奔波

〔左經記〕長元四年六月廿七日癸卯、左兵衞督〇藤原公成中云、賴信朝臣賞事、同下官〇源經頼申旨、但於常昌等事者、常安降伏、頗見男等降歸氣色之中、忠常於途中死去、獄禁者遭父母喪之時給其假云々、況未被禁者哉、被優免有何事哉、新中納言以上被申之趣、大略同余詞、

〔令義解十獄〕凡獄囚有疾病者、主守申牒、謂主守者、主當獄囚之物部也、判官以下、親驗知實、給醫藥救療、病重者、脫去枷杻、仍聽家內一人入禁看侍、其有死者、亦卽同檢、若有他故者、謂非法窮死、及令自死之類、隨狀推科、

〔唐律疏議二十九斷獄〕疏議曰、準獄官令、囚去家縣遠絕餉者、官給衣糧、家人至日依數徵納、囚有疾病、主司陳牒、請給醫藥救療、〇中略準令、病重聽家人入視、

〔唐書五十六刑法〕諸獄之長官、五日一慮囚、夏置漿飮、月一沐之、疾病給醫藥、重者釋械、其家一人入侍、

〔延喜式二十九囚獄〕凡緣看侍獄囚、及餉衣食家人入禁所者、搜監錐刀及他物以堪自害、幷文書筆墨等類、

〔朝野群載十一廷尉〕進物所

請膳部多治忠岑、

右忠岑以去正月廿五日、依雙六座居被禁固矣、而從今月二日本病發動煩苦、爲彼病所請如件、進勘問、

貞觀十八年二月七日　膳部大春日茂蔭

頭大膳亮藤原氏助

別當左近衞少將兼近江介藤原朝臣

內藏頭藤原朝臣安世

掌侍從五位上賀茂定子傳宣、奉勅件人治病之間、暫給假者、

貞觀十八年二月八日　左衞門權佐從五位下惟範奉

〔春記〕長久元年六月十三日丙申、觀壽丸母女從一日令召禁獄所政所、而日者煩臑物之由、從督殿有

絞罪、仍依首從科斷、殺人者皆斬、謂因劫囚、而有殺人者、罪無首從、但劫即坐、不須得囚、謂以威若力、強劫囚者、即合此坐、不須要在得囚、若竊囚而亡者、與囚同罪、謂竊死囚、還得死罪、竊流徒、還得流徒之類、竊他人親屬等囚、假使得相隱、亦不許竊、故云他人親屬等、竊而未得、減二等、謂竊計已行、未離禁處者、減所竊囚罪二等、謂未得死囚者、徒三年、未得流囚者、徒二年半之類、以故殺傷人者、從劫囚法、假有父祖子孫、見被囚禁、而欲劫取、乃誤傷殺祖孫、據律劫囚者流、傷人及劫死囚者絞、殺人者皆斬、據此律意、本爲殺傷傍人、若有誤殺傷被劫之囚、止得劫囚之坐、若其誤殺父祖、論罪重於劫囚、既是因誤而殺、須依過失之法、其因竊囚過失殺他人者、下條云、因盜而過失殺傷他人者、以闘殺傷論、至死者、加役流、竊囚之事、類因盜之罪、其有過失、彼此不殊、殺傷人者、亦依闘殺傷論、應至死者、從加役流坐、其有誤殺傷、本法輕於竊囚未得者、即從重科、又有竊囚而亡、被人追捕、并囚逃走、後始拒捍、因而殺傷者、依下條、竊盜發覺、棄財逃走、因相拒捍、如此之類、事有因緣者、非強盜、今者竊囚而亡、并囚逃走、理與竊盜發覺、棄財逃走義同、止得拒捕之科、不同劫囚之類、

〔日本紀略村上四〕天德二年四月十日辛酉、夜強盜打破右獄、奪取囚人、九人之中一人於獄門前打殺、十一日壬戌、召六衛府兵庫等官人、固道々可追捕之由被宣下、十四日乙丑、去十日逃脱右獄囚人八人、於攝津國追捕、籠本禁了、此中二人射殺了、

〔日本紀略後一條十三〕萬壽四年正月七日己酉、節會、檢非違使等取雜犯之間有鬪諍事、内大臣○藤原教通隨身口安武等可捕進之由下知了、彼隨身等奪取犯人之故也、八日庚戌、昨日犯人大友延國禁獄了、

〔本朝世紀〕久安三年十月八日戊戌、是日叡山所司等依院宣、欲搦捕切拂座主房之張本僧重雲、字周勛公、衆徒等大怒、凌礫所司等、重雲又逃脱了、所司□□所捕獲之犯人重雲從者云々、爲衆徒被奪取了、自八月之比、仙院仰檢非違使、令譴責法印相命、同最雲等、給件兩人弟子、爲張本切拂座主房之由風聞故矣、重雲是其一也、

〔本朝世紀〕仁平三年六月五日癸亥、今日左衛門尉賴方、於陣邊搦犯人、籠置近邊小屋、而檢非違使義康奪取之、可合戰之由有其聞、然而後朝且又自院有禁制之故也云々、

囚人遭喪

〔令義解十獄〕凡犯死罪在禁、非惡逆以上、遭父母喪、婦人夫喪、及祖父母喪承重者、謂依假寧令、養父母與祖父母同、即遭養父母喪者、亦依七日法也、皆給假七日發哀、流徒罪卅日、謂其在役在禁、輕重不同、故上條給五十日、此條唯給卅日、案上條流罪已下、産後卅日、即知杖罪亦在其中、若杖罪在禁遭喪者、亦准流徒法、其僧尼在禁遭喪者、亦與俗人制同、悉不給程、

劫奪囚人

〔西宮記臨時十裏書〕於市行事

勘申逃亡囚藤井忠茂捕得後、如本着鈦、兼可加亡罪哉否事、

右強盜藤井忠茂、去五月廿一日斷徒六年着鈦配役、而八月四日脫禁逃亡、十月廿六日適以捕得、如本着鈦、兼可加亡罪哉否者、捕亡律云、流徒囚役限內而亡者、一日笞卅、三日加一等、過杖一百五日加一等、名例律云、稱加者就重次、不得加至於死、疏云、雖無罪止之文、唯合加至遠流、不得加至於死、又條云、犯罪已配、而更爲罪者、各重其事、若更犯流徒罪者、准加杖例、累決笞杖者、不得過二百、其應加杖者亦加之、疏云、准犯三流亦只杖二百、今年九月八日詔書、大辟以下、罪無輕重、盡赦除、但八虐、故殺人、謀殺人、強竊二盜、常赦所不免者、不在赦限、弘仁刑部格云、雖犯會赦可免者、赦書出後三百六十日內首訖、名例律云、赦書到後限內事發、雖不首非藏匿者、計忠茂逃亡之日數、始自八月四日至于十月四日、總五十九日、罪合處遠流、累加本罪、理以無疑、何須如本着鈦令滿役限之內、唯亦逃亡之科、可決二百之杖、然而今遇恩詔、事發限內、偏從本犯之徒、可寬加杖之議、仍勘申、

長保四年十二月十日

右衛門大志縣犬養爲政

少尉伴忠信

右衛門少志豐原爲時

大志惟宗博愛

〔中右記〕永久二年七月六日、巳時許參院、殿下民部卿參給、付宗實奏事、○中略近日囚人多逃去、惡僧辨實逃去了、是獄直看督長、廳下部、諸撿非違使召仕之故也、於當番間者、令不召仕由欲下知事、仰云、尤可然、件旨先日ニモ被仰下之樣思食、(件事雖不可奏、近代作法雖小事必可出奏故也、○中略)重時行重明兼等來、獄直慥可令勸之由仰了、令逃去囚人下部等給獄了、

〔律疏賊盜〕凡劫囚者遠流、(謂犯罪之人、身被囚禁、凶徒黨與、(黨與唐律作惡黨共)來相劫奪者、)傷人及劫死囚者絞、(謂因劫輕囚傷人、及劫死囚而不傷人者、各得

卽須遣使速報、應減之處、有驛處、共發驛報之、若稽留使人令(○人令二字、唐律無、當刪、)不得減者、以入人罪故失論減一等、(○又見令集解、政事要略、)

按之、令逃囚之罪、隨囚罪之輕重、又有令逃人罪之輕重、又故縱者事重、失逃者事輕、隨形處流徒、或令候散禁、但杖罪以上、禁獄政所、笞罪以下、令候便所、爲使廳之例、但失囚給捕日限、

〔西宮記(臨時裏書)十〕於市行事

勘申逃亡囚藤井忠茂捕得後、如本着鈦、兼可加亡罪哉否事、(○中略)

捕亡律云、流徒囚役限內而亡者、一日笞卅、三日加一等、過杖一百、五日加一等、

〔唐律疏議(捕亡)二十八〕諸流徒囚役限內而亡者、(犯流徒應配、及移鄕人、未到配所、而亡者亦同、)一日笞四十、三日加一等、過杖一百、五日加一等、(○疏議略)主守不覺失囚、減囚罪三等、卽不滿半年徒者、一人笞三十、三人加一等、罪止杖一百、監當官司又減三等、故縱者各與同罪、

〔唐律疏議(捕亡)二十八〕諸被囚禁、拒捍官司而走者流二千里、傷人者加役流、殺人者斬、從者絞、若私竊逃亡、以徒亡論、(事發未囚、而亡者亦同、)

〔三代實錄(清和)七〕貞觀五年七月廿六日丙辰、囚獄司着鈦囚人、毆傷防援右兵衛百濟豐國、于時以左兵衛二人右兵衛二人、爲左右囚人防援、囚人等私發憤恚、遂成此亂、　廿九日己未、囚獄司着鈦囚三十人脫禁逃竄、　八月三日癸亥、下知五畿內七道諸國、追捕逃走着鈦囚三十人、

〔三代實錄(清和)十〕貞觀七年五月廿四日甲辰、遣諸衛府官人已下、大搜於東西京、先是左衛門獄中着鈦囚六人穿獄垣逃去、仍以搜索、　廿五日乙巳、大搜京邑、

〔三代實錄(光孝)五十〕仁和三年五月十九日壬辰、石見國司言上、犯罪人前掾正七位上大野朝臣安雄脫禁逃亡、元慶八年推訴使式部大丞正六位上坂上大宿禰茂樹、禁固安雄付國司訖、今依國司解狀、下符山陽道諸國搜索焉、

囚人逃亡
失囚處分

右撿案内、件峯良幷津守連梶取、酒井乙麿、下村主白子等犯狀、使局以去貞觀二年閏十月八日、勘奏已畢、卽其奏給辨官、下省亦畢、而有稱事不盡返上、遂依无失錯亦更返下、仍禁送峯良身如件、但白子以同三年正月廿七日其身死亡、梶取乙麿等、其犯會於彼同二年十一月十六日恩詔、仍從放免、不勞禁送、今錄事狀移送如件、移到准狀、故移、

貞觀四年二月廿三日　　正六位下行左衛門少志讃岐朝臣時人

正六位上行右衛門大尉藤原朝臣好行

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字七年十月乙亥、左兵衛佐正七位下板振鎌束至自渤海、以擲人於海勘當下獄、八年之亂（○惠美押勝亂）獄囚充滿、因其居住移於近江、

〔中右記〕永久六年（○元永元年）二月五日丁巳、今日申剋許、下總守源中正、搦常陸國住人將參院陣（郎等廿人）、撿非違使重時、盛通、康季依仰、於三條烏丸辻東御門南邊請取、給左右政所云々、件犯人、稱故義親法師雇置宅主云々、仲正去年越渡常陸國追捕之間械亡此國也、被問犯人之處、雇宿義親事、見無實之由申云々、事體非重犯歟、今日中宮初行啓日也、其前依仰將參院御所邊、被渡北御門前御覽、世人頗有不甘心氣歟、或人云、去年件仲正相具數百人兵士廿餘日越來常陸國、亂入百姓宅、萬物推取了、件國八ヶ郡、其後人家煙亡云々、此事如何、誠不可爲其功之人歟、

〔法曹至要抄上罪科〕一失囚故縱事

捕亡律云、主守不覺失囚者、減囚罪二等、若囚拒捍走者、又減二等、皆聽一百日追捕、限内自捕得（○捕得下、唐律有及他人捕得若囚已死及自首十二字）除其罪、卽（○卽下、唐律有限字）外捕得、及囚已死、若自首者、各又追減一等、監當之官、各減主守三等、故縱者不給捕限、卽以其罪罪之、未斷決間能自捕得、及他人捕得、若囚已死、及自首、各減一等、餘條監當官司、及主司各准此、謂此篇内、監當主司應坐當條、不立捕訪限、及不覺故縱者、並准此法、（○中略）斷獄律云、縱死罪囚、令其逃亡、後還捕得、及囚已身死、若自首、應減死罪者、其獲囚及死、自首之處、

國轉牒送囚之國、依法推勘者、

〔令集解三十二公式〕斷獄律云、鞫獄官停囚待對問者、雖職不相管、皆聽直牒追攝、追攝注云、雖職不相管、皆聽不緣所管上司、直牒所管追攝、

〔唐律疏議二十九斷獄〕諸鞫獄官、停囚待對問者、雖職不相管、皆聽直牒追攝、雖下司亦同牒至不即遣者、笞五十、三日以上杖一百、

〔延喜式二十九刑部〕凡彈正臺移送罪人、若有事不分明者、遣刑部錄判事屬就臺諮問、若明知臺之所枉、乃追就省勘問、其撿非違使所送罪人亦准此、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應錄犯罪人貫屬移送事

右得刑部省解偁、案公式令奏彈式云、親王及五位以上有犯應須糺劾、而未審實者、並據狀勘問、不須推拷、委知事由、事大者奏彈、訖留臺、爲案、非應奏、及六位以下、並糺移所司推判、義解曰、糺移所司推判、謂應判罪之司也、案獄令云、衞府糺捉罪人、非貫屬京者皆送刑部省、即明貫屬京者送於京職、其彈正糺移罪人亦准此、故云糺移所司者、今案之犯罪人須依彼本貫、京人送京職、外國人送刑部省、而彈正臺所移違犯人不明其貫屬、固稱有臺式、彼此執論、既致延引、望請蒙官裁以爲長例者、今案彈例云、彈官人及雜色人者具錄犯狀移刑部省令斷罪者、右大臣宣、京人之罪依法移京職可令斷、然而彈正臺元來移刑部省、行來年久、何輙改俊、仍須仰下彼省據舊令斷者、自今以後記貫屬移之、

嘉祥二年十二月十六日

〔政事要略八十一〕撿非違使移刑部省

禁送犯罪人事貫屬年紀具前奏狀

織部司物受滋生宿禰峯良

移送囚人

〔政事要略八十四〕斷獄律曰、囚在禁、妄引人爲徒侶者、以誣告罪論、卽本犯應死、仍准流徒加杖及贖法、（囚在禁引人爲徒侶者、謂盜發者妄引人爲同盜、殺人者妄引人爲同行之類、以誣告罪論、謂依誣告人者各反坐、卽本犯應死、不累加、故准徒流加杖法、其應贖者、卽准流徒贖之、）

〔令義解十獄〕凡囚、逮引人爲徒侶者、（謂假盜賊引人爲己同盜之類也、）皆審鞫由狀、然後追攝、若追而雪放、又更妄引、（謂初已虛誣告訖、後亦妄引、是既事發更犯、合重其罪、故錄狀申官、待使按覆也、）及囚在獄死者、年別具狀、附朝集使、申太政官按覆、（謂是別遣使按覆、或令覆囚使按覆、）

〔令義解十獄〕凡遞送死囚者、（謂依律、鞫獄官、囚徒伴在他所者、聽移送先繫處併論之類也、）皆令道次軍團大毅、親自部領、（謂專使之外、軍毅別自部領也、）及餘遞送囚徒、（謂非死囚者、）應禁固者、皆少毅部領、幷差防援、明相付領、

〔唐律疏議二十九斷獄〕諸鞫獄官、囚徒伴在他所者、聽移送先繫處併論之、（謂輕從重、若輕重等、少從多、多少等、後從先、若禁處相去百里外者、各從事發處斷之、）違者杖一百、

疏議曰、鞫獄官囚徒伴在他所者、假有諸縣相去各百里內、東縣先有繫囚、西縣囚復事發、其事相連、應須對鞫、聽移後發之囚、送先繫之處併論之、注云、謂輕從重、謂輕罪發雖在先、仍移輕以就重、若輕重等、少從多、謂兩縣之囚、罪名輕重等者、少處發雖在先、仍移就他處、若多少等、卽移後繫囚、從先繫處、若禁囚之所、相去百里外者、各從事發處斷之、既恐失脫囚徒、又慮漏泄情狀、故令當處斷之、違者各杖一百、

若違法移囚、卽令當處受而推之、申所管屬推劾、若囚至不受、及受而不申者、亦與移囚罪同、

疏議曰、違法移囚、謂移重就輕、或移多就少之類、卽令當處受而推之、謂囚至之處、卽合受推、仍申所管之州、推劾、謂兩縣囚申州、兩州囚申省、並依狀推劾、囚至不肯爲受、或受囚不申管屬、與擅移囚罪同、亦杖一百、卽擅移囚、縣各隸別州者、卽受囚之縣、申所管之州、轉牒送囚之州、依法推劾、此等移囚、並謂兩處事發、若是一處事發者、限遠近、皆須直牒追攝、如有違者自從上法、

〔令集解十一戶〕斷獄律、鞫獄官囚徒伴在地所者條疏云、卽擅移囚郡各附隸別國者、受囚之郡、申所屬之

〔延喜式二十九囚獄〕凡禁囚之處、當宿官人、恒將物部并物部丁等、毎夜巡撿、(從三月至七月別三度、從八月至二月別四度、)

〔令義解十獄〕凡囚、當處長官、十五日一撿行、無長官、次官撿行、其囚延引久禁、不被推問、若事狀難知、支證未盡、(謂支證者、支、擧也、猶云擧證也、)或告一人數事、(謂假有甲云乙是殺人、强姧盜馬、卽官司禁甲之類、其被告之人、亦同在禁、卽次文云、被告人有數事者、是也、)乃被告人有數事者、重事得實、輕事未畢、如此之徒、撿行官司、並卽斷決、

〔唐六典十八大理寺〕大理卿之職、掌邦國折獄詳刑之事、○中略若禁囚有推決未盡留繫未結者、五日一慮、若淹延久繫、不被推詰、或其狀可知而推證未盡、或訟一人數事、及被訟人有數事、重事實而輕事未決者、咸慮而決之、凡中外官吏有犯經斷奏訖、而猶稱冤者、則審詳其狀、

錄囚

〔日本書紀二十五淸寧〕四年八月癸丑、天皇親錄囚徒、

〔續日本紀六元明〕和銅七年二月壬寅、遣使于七道諸國錄囚徒焉、

〔續日本紀九元正〕養老六年七月丙子、詔曰、○中略宜大赦天下、令國郡司審錄冤獄、

〔類聚國史八十一百七災異〕天長五年七月壬子、詔曰、○中略其天下犴犴、有冤滯者、有司覆審情狀、令得申理、

〔正字通心卯集上〕慮　屋韻音錄、詳審獄囚而平反之、謂之慮囚、今作錄、古音同也、唐百官志、大理寺掌折獄詳刑、凡繫囚五日一慮、五代唐明宗天成二年、初令長吏毎旬慮囚、漢書雋不疑行縣錄囚徒、師古曰、省錄之、知其情狀有冤滯與不也、義與慮同、○中略書康誥、丕蔽要囚、蔽斷也、呂刑、其審克之、言當盡其心也、慮囚卽蔽審之義、師古所云省錄、猶蔽之審之也、

囚人告訴

〔政事要略八十四〕鬪訟律曰、被囚禁不得告擧他事、其爲獄官酷己者聽之、(人有犯罪、身在囚禁、唯爲獄官酷己者、得告、自餘他罪並不得告、謂流囚在道、徒囚在役、身口鈦枷或有援人、亦同被囚禁之色、不得告擧他事、又准獄令、囚告密者、禁身領送、卽明知、)

○按ズルニ、疏ノ卽明知ノ下、當ニ唐律疏議ニ據リ、謀叛以上聽告、餘準律不得告擧ノ數字ヲ補フベシ、獄令告密人ノ條ノ義解ニ、謂依律、囚告密者、禁身領送、卽知謀叛以上得告、餘罪不聽告擧也トアリ、謀叛以上云々ハ、律疏ニ據リテ文ヲ成セルナリ、

給物

給囚

固獄中、理應放者申官免之、

〔令義解獄十〕凡五位以上犯罪合禁、在京者、皆先奏、謂雖被人毆擊折傷以上、若盜及強姧、亦合先奏、不得私繫也、若犯死罪、及在外者、先禁後奏、並聽別所坐、婦女有位者亦同、謂婦女帶五位以上者、亦准上文男法也、

〔令義解獄十〕凡婦人在禁、皆與男夫別所、

〔唐書百官四十八〕獄丞二人、從九品下、掌率獄史、知囚徒貴賤、男女異獄、○下略

〔令義解獄十〕凡婦人在禁、臨產月者、謂家女及婢、亦准上條也、給假七日、責保聽出、謂聽出禁所也、死罪、產後滿廿日、流罪以下、謂文云並即追禁、即知杖罪以上也、問流移之人、當上道時、妻妾臨產月、如何、答案上條、流移囚在路有婦人產者、并家口、給假廿日、即有在路給假之法、而無停囚待產之文、雖是臨月、猶須配下也、產後滿卅日、並即追禁、不給程、

〔令集解二十考課〕斷獄律云、囚應請給衣食醫藥而不請給、及應聽家人入看而不聽、應脫去枷杻等而不脫者、笞五十、以故致死者杖一百、即減竊囚食、笞卅、以故致死者、加役流者、

〔令義解獄十〕凡獄皆給席薦、其紙筆、及兵刃杵棒之類、並不得入、

〔唐律疏議二十九斷獄〕諸以金刃及他物可以自殺及解脫而與囚者、杖一百、若囚以故逃亡、及自傷傷人者徒一年、自殺殺人者徒二年、若囚本犯流罪以上、因得逃亡、雖無傷殺亦準此、

〔令義解獄十〕凡獄囚應給衣粮薦席醫藥、及修理獄舍之類、皆以贓贖等物充、謂以贓贖物、履里中警、令逮也、官不給醫、闕遣之物、亦可充用、爲在物故也、無則用官物、

〔延喜式二十九刑部〕凡獄囚應給衣粮、薦席、醫藥、及修理獄舍之類、用贓贖物者、申官聽裁、然後給之、在外者先用後申、

〔貞信公記〕延長三年正月廿五日、戊午外記政始、米鹽魚類等令給左右獄所、

〔令義解獄十〕凡在京繫囚、及徒役之處、恒令彈正月別巡行、有安置役使不如法者、隨事糺彈、

〔延喜式四十一彈正〕凡臺官等撿校獄中非違、謂下杖笞大小、安置罪人、及給薦席藥、合法以不之類也、

禁法

〔源平盛衰記四十三〕二位禪尼入海幷平家亡虜人々附京都注進事
豐後國八代宮神主ニ、七郞兵衛尉某ト云者、父子ハ平家被催軍シケル程ニ、檀浦ノ軍敗レテ遁ベキ方ナシ、自害ヲセバヤト思テ子息ノ大夫ヲ招イテ、平家ハハヤ亡ヌ、我等囚レビトニ成ナバ、一定可被誅、舊里ニ歸今一度妻子ヲモ見バヤト思、又可自害歟ソレ計ヘト云、〇下略

〔令義解十獄〕凡禁囚、死罪枷杻、婦女及流罪以下去杻、其杖罪散禁、（謂不關木索、唯禁其出入也、案下條、別立不脫巾之文、故此條散禁以上、並皆脫巾、）年八十、十歲、及廢疾、懷孕、侏儒之類、雖犯死罪亦散禁、

〔唐律疏議二十九斷獄〕疏議曰、獄官令、禁囚死罪枷杻、婦人及流以下去杻、其杖罪散禁、

〔令義解十獄〕凡應議請減者、犯流以上、若除免官當者、並肱禁、（謂雖不得議請減之罪、亦猶依此禁法也、）公坐流、私罪徒、（謂此皆據本犯、不用減後法也、）並（謂非官當者、謂假五位犯徒一年準律、罪輕不盡其位之類也、）責保參對、（謂不禁其身、放令赴對也、）其初位以上、及无位應贖、（謂依律七位以上父母之類、其七十以上十六以下、可贖者亦同也、）犯徒以上及除免官當者、梏禁、公罪徒、並散禁、不脫巾、（謂應議請減以下、散禁以上、並皆總據、）

〔唐律疏議二十九斷獄〕疏議曰、獄官令、應議請減者、犯流以上、若除免官當、並鏁禁、即是犯笞者不合禁、杖罪以上、始合禁推、

〔法曹至要抄上罪科〕一禁法事
斷獄律云、囚應禁而不禁、應枷、杻、肱禁、梏禁、而不枷、杻、肱禁、梏禁、及脫巾（〇巾、唐律作去）者、杖罪笞卅、徒罪以上（〇唐律以上下有遞字）加一等、若不應禁而禁、及不應枷、杻、肱禁、梏禁、而枷、杻、肱禁、梏禁者、杖六十、

〔續日本紀十一聖武〕天平六年七月辛未、詔曰、〇中略可大赦天下、其犯八虐、故殺人、謀殺殺訖、別勅長禁、劫賊傷人、〇中略不在赦例、

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年四月甲寅、詔、〇中略緣有所念大赦天下、〇中略但犯八虐罪入死者、免死長禁、〇中略不在赦限、

〔延喜式二十九刑部〕凡被告犯罪推勘無罪、及徒人役滿者、依法合免、其爲人凶惡、衆庶共知者、不須放免、禁

〔三才圖會器用十二〕刑具說

鐐銅以鐵爲連環、共重三觔、犯徒罪者帶鐐工作、山海經曰、山有木名楓、蚩尤所棄桎梏也、桎足械、梏手械、蓋此械已出黃帝時矣、

脚

鐐

〔類聚名義抄六糸〕縲（力佳反）　縲紲（キツナ 下音薛）　紲（音薛、又與、ツナグ、ホダシ、ナハ、カケナハ、和節）　キツナ　絏緤繲（俗）　縲緤、同、ツナグ

掌獄司

〔令義解一職員〕囚獄司

正一人、掌禁囚罪人、（謂衛府糺捉罪人、及諸司送徒以上者、皆此司任禁囚、）徒役、功程、及配決事、佑一人、大令史一人、少令史一人、物部卌人、（謂此伴部之色、故式部補任、其衛門府門部亦同也、）掌主當罪人決罰事、物部丁廿人、（謂諸國仕丁、帶仗守獄者、即自民部省所充也、）

〔大內裏圖考證二十五囚獄司〕占地　都城諸圖、囚獄司、近衛南西洞院西一町、

囚人

〔延喜式四十六左右衛門〕凡捉人防援火長七人、（三人守獄所未彈人、四人領看欽囚、）

〔延喜式四十七左右兵衛〕凡捉人將領兵衛二人、每番移送京職、

〔倭名類聚抄二乞盜類〕囚人　東宮切韻云、囚（似由反、和名、比止夜比止、）繫禁罪人也、一云、人囚在獄也、

〔類聚名義抄七口〕囚（似由反、トラハル、コモル、トラフ、和シユ、）　囚人（トラヘビト）

〔日本書紀二十五孝德〕大化二年三月辛巳、獄中囚（ヒトヤノトラヘモノ）一皆放捨、

〔新撰字鏡金〕鎖鏁同蘇果反、加奈保太志、

〔倭名類聚抄十三刑罰具〕鋜 蔣魴切韻云、鋜土角反、和名加奈保太之、鏁足具也、

〔箋注倭名類聚抄五刑罰具〕按、加奈保太之、金絆也、謂鐵造之鎖足使不得走也、

〔倭名類聚抄十三刑罰具〕鏁 唐韻云、鏁蘇果反、鐵鏁也、日本紀私記云、賀奈都賀利、

〔箋注倭名類聚抄五刑罰具〕按、都賀利、連鎖之謂、○中略 鎖所謂鋃鐺、非以施於囚人具之專名也、

〔字鏡集金十六〕鏁鎖同クサリ正カナグサリカナツカリ鏁ナホダシ

〔日本書紀仁徳十一〕四十一年三月、百濟王懼之、以鐵鎖縛酒君、附襲津彥而進上、

〔倭名類聚抄十三刑罰具〕鉗 漢書注云、鉗奇炎反、和名加奈岐、以鐵束頸也、野王按、釱徒蓋反、和名同上、脛沓也、

〔箋注倭名類聚抄五刑罰具〕按、加奈岐、本小木枝之名、大祓詞所云、天津金木乎本打切末打斷者是也、文選答客難、筳字亦訓加奈岐、孝德紀御歌云、舸娜紀都該、阿我柯賦古麻、謂以小木枝絆馬足也、蓋古昔朴略、囚人桎械亦不過如是、故桎械謂之加奈岐也、雖其名義未詳、決非以鐵束頸者、大祓詞作金木者借字耳、至後有鉗釱之具、其名依舊也、○中略 今本玉篇金部作鉗也、按說文作釱鐵鉗也、今本玉篇蓋依之、而太平御覽引說文作脛鉗、則脛當脛字之訛、疑源君所見本誤作脰、故引在於此也、史記平準書釱左趾、集解引韋昭曰、釱以鐵爲之、著左趾以代刖也、索隱引三蒼云、釱踏脚鉗也、漢書食貨志注云、釱足鉗也、廣韻亦云、以鎖加足、皆可證釱在足不在脰也、又據三蒼則沓亦疑踏字、然則此似當作踏脛鉗、以野王案以下移之鋜條、

〔史記三十平準書〕大農上鹽鐵丞孔僅咸陽言、○中略 敢私鑄鐵器煮鹽者、釱左趾、史記音義曰、釱音徒計反、韋昭曰、釱以鐵爲之、著左趾、以代刖也、索隱曰、三蒼云、釱踏脚鉗也、字林音大計反、張斐漢晉律序云、狀如跟衣、著足下、重六斤、以代刖、至魏武改以滅代釱也、

〔類聚名義抄八金〕釱大矛二音鉗カナキ クヒカシ 鈦カナキ 釱耻械、直類二反、カナキ 鏨カナキ

〔明律一獄具圖〕鐐 連鐶共重三斤、以鐵爲之、犯徒罪者帶鐐工作、

可分杻械之杻、勅久反、杻櫓之杻、女久反、

〔箋注倭名類聚抄五刑罰具〕按、說文、杽械也、杻檍也、二字不同、而篆文杽作紐、杻作紂、其形相近、隸書遂混同、故玉篇以械訓杻、然其實非同字、不特其音異也、

〔倭漢三才圖會刑罰二十二〕梏音酷 杻音丑 拲音措 和名天加之、今云天加世、

按、今杻以鐵爲兩拳形、有樞機開閤之、別有小鎖、其罪未及籠獄者多用之、出於錠之制乎、

〔類聚名義抄木三〕梏古酷反、テカシ、アシカシ 桎音質、ホダシ、アシカシ 手杻、テカシ、足械、 杻音丑、テカシ、和チウ、 〔同金八〕鈕俗杻字、苦衛反、又加音、テカシ

〔明律獄具圖一〕杻 長一尺六寸、厚一寸、以乾木爲之、男子犯死罪者用杻、犯流罪以下、及婦人犯死罪者不用、

〔三才圖會器用十二〕刑具說

杻制長一尺六寸、厚一寸、以乾木爲之、男子犯死罪者用杻、

手杻

〔倭名類聚抄十三刑罰具〕械 四聲字苑云、械胡界反、阿之加之、穿木加足也、說文云、桎音質足械也、

〔箋注倭名類聚抄五刑罰具〕按、玄應音義引通俗文云、穿木加足曰械、四聲字苑蓋依之、廣雅、械謂之桎、亦以械爲在足之稱、又按、說文、械、桎梏也、是其所本、月令注亦云、桎梏、今械也、然械爲桎梏、則在手在足皆可稱械、而特歸之足、未知所據、

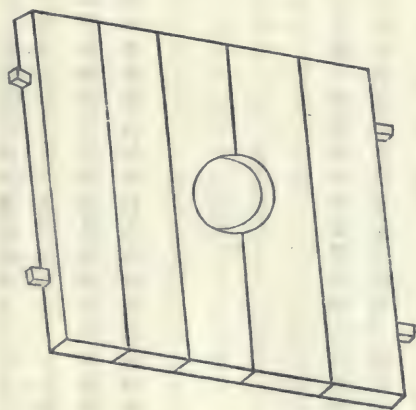
〔類聚名義抄木三〕械音戒、アシカシ、和カイ 械正

〔唐六典刑部六〕覆定使人至日、先撿行獄囚、枷鎖鋪席、及疾病糧餉之事、有不如法者、皆以狀申、

〔令義解獄十〕凡流徒罪居作者、皆着鈦若盤枷、(謂流徒通着鈦若盤枷、非云流着鈦徒着盤枷也、○下略)

〔明律獄具圖一〕枷　長五尺五寸、頭闊一尺五寸、以乾木爲之、死罪重二十五斤、徒流重二十斤、杖罪重一十五斤、長短輕重刻誌其上、

〔三才圖會器用十二〕刑具說

枷制長五尺五寸、頭濶一尺五寸、以乾木爲之、死罪重二十五觔、徒流重二十觔、杖罪重十五觔、蓋舊有長短而無輕重、其輕重自宋太宗始也、今從之、

〔新撰字鏡金〕鉫(手加志)

〔倭名類聚抄刑罰具十三〕杻　玉篇云、杻、械也、說文云、梏(音酷)手械也、漢語鈔云、杻(天加之)今按、杻又木名也、以音

西際燒亡了、予忽向獄門、令縮連自〇自恐四字疑誤人等、召付看督長國守等、獄中雜人等入亂、敵人自得隙有插逆心事歟、旁非無疑心、以國守等〔天〕雜人等令押出了、他官人一人不馳參、尤以不便事也、雖須參大理〇平時忠一人參、依見苦思留了、　六日甲午、參大理、昨夕炎上之間、申上子細退出之後有此仰、蹔可令候給之由被仰、而早出如何、但去夜獄邊炎上、諸官一人不向其所、一身令向給之條返々感思食候者也、禁獄之固者君重誡御者也、若燒死逃脫者以外事也、而一身令向其處、返々傾感不少、如此事欲被仰之處、早出無御本意之由、別當殿仰所候也、仍以執達如件、

四月六日　　盛頼奉

謹上　清志殿

謹請

獄舍近隣燒亡馳向事

右謹所請如件、抑向炎上所々救火者、是存知事候、就中獄舍近隣旁非無所思候、今如此被仰下候、專奉公可致忠勤候歟、以此趣可然之樣可令洩言上給候、某誠恐謹言、

四月六日　　左衞門少志清原某〇季光

〔倭名類聚抄〕十三刑罰具 盤枷 唐令云、若無鉗者著盤枷、音加日本紀私記云、久比加之

〔箋注倭名類聚抄〕五刑罰具 按、古蓋以木加囚人頸、故謂之加、後從木、會意也、與枷棒字自別、

〔類聚名義抄〕三木 枷 音加、クビカシ、　盤枷 クビカシ　大枷 ツヒツナ

〔日本書紀〕十七繼體 二十四年九月、百濟則捉奴須久利、杻械枷鎖、而共新羅圍城、

〔日本書紀〕二十五孝德 大化五年三月庚午、穗積臣噛、捉聚大臣〇蘇我倉山田麻呂伴黨田口臣筑紫等、著枷反縛、

〔令義解〕十獄 凡覆囚使人至日、先撿行獄囚枷杻、謂在頸曰枷、在足曰杻也、鋪席及疾病粮餉之事、〇註略有不如法者、亦以狀申附考、

獄舍遭火

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年十月癸未、禁從四位下鹽燒王幷女孺四人、下平城獄、

〔袋草紙三〕昔ハ獄前ニ栽菊云々、藤六輔相中納言長良孫也過獄前、于時獄囚一人走出テ抱之入獄門內云、朝ノ歌仙之由承之、爲題此菊可令詠一首云々、輔相卽詠云、

人やうゑしおのれやおひしきくのはなゑもとにうつるいろのいたさよ、獄囚感歎シテ免之云々、甚以無益歟、

〔十訓抄十二〕後冷泉院御時、源中納言經衡卿撿非違使別當にて、十五年まで使廳を行はれけり、或時左獄近く炎上ありて、火すでに獄舍にうつりなんとゑける時、撿非違使の犯人を可出の由申ければ、別當のたまひけるは、帝のあだたる犯なす間、其罪によりて禁獄る事、人のあたふるにあらず、天のゑらしむる所なり、いかでか其せめを遁れん、許し出すべからずといはれければ、火近づくにゑたがひて、犯人音をあげてをめきさけぶ、天にも聞え地にも動くばかり也けれども、終に出ずして、さながらやけ死けり、其後別當被失にける時、かの獄囚の音耳にあるがごとくに聞ゆるとて、臨終も心よからず有けり、其上重資師資とて中納言までなりたるおはせしかども、其末絶にけり、是又法の理といひながら、無下に慚愧なき心の程、罪ふかく覺ゆ、坂上允高○允高、實物集作允兗、蓋惟宗允兗也、が廷尉の職を辭してかうぶりを給けるは樣かはれりけり、又大理誰とかや、犯人のおのづから獄舍の下を堀て、にげ出る事あらせじがために、四面に土の底を板をほり入て立られたりけり、此奉公の忠なる事なれども、かやうまでの思はかりは、罪業の因にもやとよしなくおぼゆ、

〔山槐記〕治承三年四月五日癸巳、子剋東獄西方小屋燒亡、

〔清獬眼抄公事〕一獄舍近隣燒亡事

後淸錄記云、治承三年四月五日癸巳、亥時許自近衛南、自刀帶町東、近衛西中許燒亡起、東至獄政所

範守、善府生朝忠、清府生季道、此等ヲ始メテ、撿非違使八人行向テ、西洞院ヲ上リニ渡シ、左ノ獄門ノ樗ノ木ニゾ掛タリケル、

〔百練抄七二條〕永曆元年正月九日、前左馬頭義朝、幷郎從正清等首、廷尉請取懸東獄門前樹、

〔吾妻鏡二〕治承五年〇養和元年二月九日丙戌、去年冬、於河內國、爲平家所被殺害源氏、前武藏權守義基之首、今日渡大路、懸獄門之樹、〇中略義基弟、石河判官代義資、紺戶先生義廣、被生虜之間、相具兄之首、被遣左獄舍云云、

〔水左記〕康平六年二月十六日戊子、早朝參殿下、前鎭守府將軍源賴義朝臣、所進浮囚、貞任、重任、經清等首幷降人夾名解文右大弁令進覽之、〇中略從四條西行朱雀大路、至于西獄、樗樹梟之云々、

〔中右記〕康和四年三月廿九日、或人來談云、一昨日內大臣〇源雅實隨身番長近時、給西獄政所云々、是御賀後宴之日、彼大臣被參院之間、依拂人打破院廳官大膳屬重則面事云々、

〔百練抄七二條〕平治元年十二月十七日、少納言入道信西首、廷尉於川原請取、渡大路懸西獄門前樹、信西於志加良木山自害、前出雲守光保所尋出也、

〔菅家文草九奏狀〕復奏囚人拘放狀

右臣某月十三日謹奉口勅云、去十日、令撿非違使別當從三位中納言兼行左衞門督源朝臣勘錄左右獄中繫囚之數、

〔百練抄八高倉〕治承四年正月廿七日、今日左右獄囚人十五人、於山科斬首、

〔續日本後紀二十仁明〕嘉祥三年三月甲午、左右撿非違使獄中人除盜之外、悉從放免、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年五月廿四日甲辰、遣諸衞府官人已下、大搜於東西京、先是左衞門獄中著鈦囚六人、穿獄垣逃去、仍以搜索、

〔續日本紀十四聖武〕天平十三年三月己丑、禁外從五位下小野朝臣東人下平城獄、

被ㇾ談云、臣房仕ニ帝王ㇾ至ニ納言ㇾハ、始祖音人卿爲ニ撿非違使別當ㇾ之時、奉ニ爲國家ㇾ能致ㇾ忠之故、必仕ニ帝王ㇾ也云々、予問、其由緒如何、被ㇾ答云、音人卿爲ニ撿非違使別當ㇾ之以前、獄所在ニ長岡京ㇾ、件所ニテ獄所極以荒凉、囚人動逃去、仍音人卿改ニ立此獄門ㇾ之後無ㇾ逃、刑人還又重恩也、修ニ善根ㇾ之人與ニ饗膳ㇾ稱ニ施饗ㇾ、是彼時始也、仍音人卿最後被ㇾ談ケルハ、我子孫ハ依ニ國家致ㇾ忠、必仕ニ帝王ㇾ可ㇾ至ニ太位ㇾ也、但刑人其罪尤重之者、此依ニ囚獄門ㇾ無ニ輙逃之者ㇾ、又路次往行之者、動與ニ食物ㇾ、依ニ別法之目ㇾ、不ㇾ能ニ輙入ㇾ獄門ㇾ、依ニ其報ㇾ定子孫ニアラン云々、此事尤理也、〇下略

〔拾芥抄 中末宮城〕諸司厨町

左。獄。近衛南、西洞院西、

〔大内裏圖考證 二十五四獄司〕都城諸圖

近衛

左獄

西洞院大路

滋野井

鷹司小路

左兵衛町

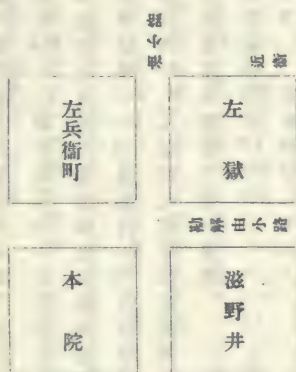
本院

〔平治物語 三〕長田義朝討六波羅馳參事附大路渡被ㇾ掛ニ獄門ㇾ事

翌日〇平治二年正月七日尾張國住人長田四郎忠宗、子息先生景宗上洛シ、前左馬頭義朝、幷鎌田兵衛政家ガ頸ヲ持參シテ、不次ノ賞ヲ可ㇾ蒙由望申ケリ、〇中略同九日、平大夫兼行、總判官信房、靑侍義守、忠目

繫二于牢一是也、人之在レ獄不レ能レ出、如二牛馬之在一レ牢、故又謂二之牢一、所レ謂轉注也、○中略 又按說文、囹、獄也、圉、守之也、又云囹圄、所三以拘二罪人一、知囹圄皆守禁之名、月令鄭注、囹圄所三以禁二守繫者一、若二今之獄一矣正義引二月令章句一云、囹、牢也、圄、止也、所三以守二出入一、釋名、囹領也、圄禦也、領二錄囚徒一禁二禦之一也、太平御覽引二風俗通一云、囹、令也、圄、與也、言令二人幽閉思一レ愆、改レ惡爲レ善、因原二之也、

〔釋名 五 釋宮室〕獄确也、實二确人之情僞一也、又謂二之牢一、言所在堅牢也、又謂二之圜土一、土築二其表牆一、其形圜也、又謂二之囹圄一、囹領也、圄御也、領二錄囚徒一禁二御之一也、

〔唐律疏議 二十九 斷獄〕疏議曰、○中略 咎繇造レ獄、夏曰二夏臺一、殷名二羑里一、周曰二圜土一、秦曰二囹圄一、漢以來名レ獄、

〔唐六典 六 刑部〕凡京都、大理寺、京兆、河南府、長安、萬年、河南、洛陽縣咸置レ獄、其餘臺省寺監衛府、皆不レ置レ獄、

〔類聚名義抄 三 大〕獄 音玉 ゴク ウタヘ ヒトヤ 〔同 六 石〕确 正 确 俗、アヒトコロ 〔同 七 口〕圄 圉 二正 牛呂反、ヒトヤ、コメカフ、囹 音零 ヒトヤ　囹圄 爾語二音、人ヤ、獄名、令語、下トラフ、

〔運步色葉集 路〕籠 ロウ 囚人入籠

〔拾遺和歌集 十九 雜戀〕人のめし侍けるをとこの、ひとやに侍て、めのとのもとにつかはしける、

よみ人しらず

しのびつゝよるこそきしか唐衣ひとや見んとはおもはざりしを

〔宇治拾遺物語 四〕東北院の菩提講はじめける聖は、もとはいみじきあく人にて、人屋に七度ぞ入たりける、

〔八雲御抄 三上 居所〕屋 ○中略 うなこ 日本紀、人をこむるなり、

〔日本書紀 九 神功〕五年二月己酉、襲津彥 ○中略 捉二新羅使者三人一、納二檻ウナヤ中一、以レ火焚而殺、

〔江談抄 二 雜事〕音人卿爲二別當一時長岡獄移二洛陽一事、

獄舍

論ズ、囚ノ徒伴他所ニ在ルトキハ、後ニ發スル囚ヲ移シ、先キニ繫ガレタル囚ノ處ニ送リ、併セテ論ズベキニ因リテ、死囚ヲ遞送スルニハ、專使ノ外ニ道次ノ軍團ノ大毅親ラ部領シ、死囚ニアラザルハ少領部領ス、並ニ防援ヲ差シテ付領ス、又彈正臺撿非違使ヨリ刑部省ヘ罪人ヲ移送スルニ、其事分明ナラザルアレバ、刑部錄判事屬ヲシテ臺使ニ就キテ諮問セシム、衞府罪人ヲ糺シ捉ヘタルトキハ、京ニ貫屬セル者ハ京職ニ送リ、其餘ハ刑部省ニ送ル制ナレバ、彈正臺ニテ罪人ヲ糺シ移ストキモ之ニ依ルベキニ、文德天皇ノ嘉祥ノ比ハ舊習ニ依リテ都テ刑部ニ送ルコトトセリ、又囚ヲ錄スルコトアリ、獄囚ヲ詳審シテ平反スルヲ云フ、又凶徒共ニ來リ劫シテ囚人ヲ奪ヒ、或ハ私ニ來リテ囚人ヲ竊ムアリ、囚ヲ竊ムニ因リテ人ヲ殺傷スルトキハ、囚ヲ劫スノ法ニ從ヒテ論ズ、而シテ監當ノ官人與獄ノ人囚ヲ失スルコトアレバ、百日內ニ追捕スルコトヲ聽シ、限內ニ捕フルトキハ失囚ノ罪ヲ除ク、而ルニ故ラニ囚ヲ縱シテ逃亡セシムルトキハ捕限ヲ給セズ、卽チ囚人ノ罪ヲ以テ罪シ、死囚ヲ縱セバ死刑ニ處シ、徒流ノ囚ヲ縱セバ徒流ニ處ス、又囚人死亡スルトキハ、囚獄司ニテ具ニ姓名年齡、幷ニ徒ニ入リシ年月日ヲ注シテ刑部省ニ申ス、但シ親戚ナケレバ皆權リニ閑地ニ埋ミ、牓ヲ其上ニ立テ、姓名ヲ記シ、仍ホ其本屬ニ下ス、又囚人、父母及ビ夫等ノ喪ニ遭フトキハ、假ヲ給シテ發哀セシム、又召篭アリ、囚禁ノ類ナリ、侍臣以下失錯アル時、殿上及ビ近衞陣等ニ禁ズルヲ云フ、猶ホ放囚ノ事ハ、赦宥篇ニ見エタリ、

〔伊呂波字類抄志疊字〕囚獄

〔倭名類聚抄十三刑罰具〕獄　四聲字苑云、獄語欲反、和名比度夜、牢罪人所也、唐韻云、囹圄靈語二音秦獄名也

〔箋注倭名類聚抄五刑罰具〕按、比度夜、人屋之義、○中略說文獄确也、从犾从言、二犬所以守也、釋名、獄确也、實确人之情僞也、又謂之牢、言所在堅牢也、按說文、牢、閑養牛馬之圈也、周禮充人、祀五帝之牲牷

囚禁 召籠併入

囚人ヲ邦語ニトラヘビトト云ヒ、獄ヲヒトヤト云ヘリ、囚人ヲ禁ズルニハ、罪ニ因リ人ニ因リテ其輕重ヲ異ニセリ、枷シテ且ツ杻スルアリ、杻セズシテ枷スルアリ、枷ハ卽チ盤枷ニテ邦語ニクビカシト云ヒ、杻ハ手械ニテ邦語ニテカシト云フ、梏禁アリ、梏ハ卽チ杻ナリ、肱禁アリ、索ヲ以テ兩肱ヲ繫グナリ、散禁アリ、刑具ヲ加ヘズシテ囚禁スルナリ、而シテ議、請、減、贖、及ビ初位以上ノ外ハ皆巾ヲ脫ス、刑具ニハ又桎、鋜、鏁、鉗、鈦アリ、桎ヲ邦語ニアシカシト云ヒ、鋜ヲカナホダシト云ヒ、鏁ヲカナツカリト云ヒ、鉗モ鈦モ倶ニカナキト云フ、又長禁アリ、終身獄ニ在ラシムルヲ云フ、後世ニハ禁獄ヲ以テ一ノ刑名トセリ、五位以上ノ人京ニ在リテ罪ヲ犯シテ禁ズベキトキハ、皆先ヅ奏シテ後ニ禁ズ、其京ニ在リテ死罪ヲ犯セルト、京外ニ在ルトハ、先ヅ禁ジテ後ニ奏ス、並ニ六位以下ノ者ト其居ル處ヲ異ニス、因リテ衞府ニ禁ジタルコトアリ、婦人禁ニ在ルトキモ、男夫ト所ヲ異ニシ、其產月ニ臨ムトキハ保ヲ責メテ出ヅルコトヲ聽シ、產後ニ至リテ復禁ズ、囚人ニハ官ヨリ席薦衣食ヲ給シ、疾病アルトキハ家人ノ禁ニ入リテ看侍スルコトヲ聽ス、而シテ紙筆兵刃杵棒ノ類ハ入ルヽコトヲ得ズ、又囚人ヲ巡撿シテ安置等ノ不法ヲ糾スコトアリ、在京ハ彈正月別ニ巡行シ、事ニ隨テ糺彈シ、囚獄司ノ當直ノ官人、恒ニ物部幷ニ物部丁ヲ將キテ每夜巡撿シ、在外ハ當處ノ長次官十五日ニ一タビ撿行ス、其囚久シク禁ゼラレテ推問セラレザルガ如キコトアレバ卽チ之ヲ斷決ス、捉人ニハ將領アリ、防援アリ、防援ハ未彈ノ人ヲ守リ、將領ハ著鈦ノ囚ヲ領ス、囚人ハ獄官ノ己ヲ虐待スルト、謀叛以上トノ外ハ、他事ヲ告グルコトヲ得ズ、若シ他人ヲ逮引シテ徒侶トスルトキハ審ニ由狀ヲ鞫シ、然シテ後ニ徒侶ヲ追攝ス、若シ妄引ニ係レバ誣告罪ヲ以テ

大膳職

少進正六位上平朝臣村連

天永三年三月二日

〔長秋記〕天永四年〈○永久元年〉三月十四日、今日依搦夏燒大夫、左衞門尉平忠盛敍從五位下、院武者所宗友任左兵衞尉、件夏燒大夫神仁與同心、穿蘭林坊御藏、取御物云々、仍一昨日左衞門志明兼、欲追捕之間、得其告逃去、明兼郎等、追得桂河邊合戰、隱入松尾山、郎等蒙疵空歸、其後件男出京都寄宿、聞此旨押寄追捕、其間郎等二人蒙疵及死門云々、

〔中右記〕保延元年八月十九日、備前守忠盛朝臣、搦進海賊廿六人、檢非違使等於河原受取云々、廿一日、備前守忠盛朝臣、追捕海賊賞被行、右兵衞少尉平惟綱、〈元爲允〉從四位下平清盛、〈元兵衞佐、如元云々、〉

〔玉海〕仁安三年二月十九日壬子、今日有御讓位事、〈六條、中略、〉今夜無尊號可有云々、只被捕院司藏人等云々、成賴沙汰也、頭信範朝臣〈○中略〉六位〈中略〉藤資綱、此人去年搦盜人賞被補之、

〔百練抄〕〈九安德〉壽永元年十月九日、群盜入勘解由次官惟基宅、惟基蒙疵、十一日死去、〈入道帷方二男〉十七日、殺害惟基犯人、廷尉盛綱搦取之、持參上皇門前渡之、有御覽、召取彼犯人之者、可有不次賞之由、先日被仰下之、八條院侍二勞〈不知實名〉所爲也、

〔百練抄〕〈十後鳥羽〉元暦元年五月十一日戊戌、權中納言家通卿參入、被行搦盜內印犯人之賞、以藤原孝久任左兵衞尉、敍位從五位下孝實〈孝久父也〉一階事追可申請、

賞也、並計所得正賍、(謂假如盗布十端、糺告之日、五端見在者、唯據見在、爲分之類、即全无正賍者、不可復與賞也、)准爲五分、以二分賞糺捉人、即官人非因撿挍而別糺捉、(謂官司於其所部、非因撿挍而別自糺捉者、若捕盗賊者、其事相因、不合與賞、其非所部官司者、一同凡人之例、不依官司之法、)並共盗及知情主人首告者、亦依賞例、

〔侍中群要七〕追捕官人等給祿事

可然之時、於殿上口給祿各疋絹、(不論尉志府生)但或尉二疋、志府生一疋、各可隨議、

撿非違使事

從追捕歸參、帶弓箭直以參入、若給祿者不拜舞、

天德四年、不論尉志府生等、各給祿一疋、

天祿四年、尉一疋、志府生各給一疋、(此例不詳)

〔日本書紀持統三十〕三年七月辛未、流僞兵衛河內國澁川郡人柏原廣山于土左國、以追廣參授捉僞兵衛廣山兵衛生部連虎、

〔日本紀略後一條十三〕寬仁元年正月廿三日癸亥、去夜竊盗入御所、而宿直瀧口二人經南殿庭東走射之、瀧口內舍人藤原長輔、攝政(○藤原道長)隨身同良孝等射取之、即有勅祿、禁偷兒於獄、外記云、今夜諸陣直官人、不祇候童、宜令進怠狀者、　廿四日甲子、今夜內舍人長輔、任大舍人允、良孝任修理進、依昨日賞也、

〔中右記〕天永三年三月二日、頭弁(○藤原實行)送書云、入夜程可參內、俄依有可被宣下事也者、秉燭之後參仗座、右大弁長忠同參着、頭弁來仰下云、以正六位上平村連、可任大膳少進也、是院武者所、去二月行幸院之日、於六條殿內、捕盗犯者賞者、予(○藤原宗忠)移着端座、令敷膝突、召外記候小庭、仰云、硯折堺紙可持參、此間右大弁移着端座、外記以硯筥置右大弁座前、予令書除目、

太政官謹奏

〔本朝世紀〕天慶五年六月卅日壬戌、今日左右撿非違使、自曉圍守故致仕大納言藤原扶幹卿家、是爲搜求駿河掾橘近保也、但季子內親王買領件家、自去年移住、又本主故大納言室家未移去、猶在同家、件近保之妻、與故大納言家元有因緣、近保逐便隱居彼家云々、仍所搜求也、于時季子內親王忽然畏縮與數兒共乘一車、馳移於左大臣(○藤原仲平)家、(依下內親王與大臣在中因緣上)爰撿非違使令奏云、是已內親王家也、被下宣旨、將以搜求云々、爰遣勅使藏人兵部大丞平時經、共令搜求彼內親王幷故大納言室家之居處、而遂不得其實、日晚解圍散去、(但近保嘗取駿河國進官調物、擬召勘其由間、已以逃去、而依有指申之人、所搜求也、)

〔日本紀略二朱雀〕天慶二年四月廿九日庚子、有盜搜事、

〔日本紀略三村上〕天曆二年六月十五日壬辰、定明日搜索事、　十六日癸巳、分諸衛官人於京中、令搜索姧犯之者、

〔日本紀略四村上〕天德元年二月廿八日丙戌、有大索事、

〔日本紀略四村上〕天德四年十月九日乙亥、有大索事、

〔日本紀略五冷泉〕康保四年九月十六日、有大索事、

〔日本紀略五冷泉〕安和元年九月十六日丙申、京邊東西山野、可索捕姧盜之由、被定行之、

〔日本紀略六圓融〕天延元年四月廿四日丁未、今夜前越前守源滿仲宅强盜繞圍放火、于時越後守宮道弘氏相闘之間、中盜人矢卒去、餘煙及三百餘家、今夜殊有宣旨、堪武藝之輩、可召候陣頭者、　廿六日己酉、有被搜盜人之事、

〔日本紀略一九條〕正曆五年三月六日戊午、召武勇人源滿正朝臣、平維時朝臣、源賴親、同賴信等、差遣山山、令搜盜人、

〔令義解九捕亡〕凡糺捉盜賊者、(謂糺告及捕捉、其糺告親屬律有科條、卽有糺告者、既是犯罪之人、不在賞限、凡告言得罪者、皆不可賞也、)所徵倍贓、(謂依獄令、應徵正贓、无財以備者、官役折庸、若所徵倍贓理无財以備者、理合放免、不可役身也、)皆賞糺捉之人、家貧無財可徵、及依法不合徵倍贓者、(謂會赦之類、依律免

夜盜穿大藏省東長殿壁、竊取絁布等、不知幾匹端、　辛亥、遣六衛府大索城中、

〔續日本後紀仁明九〕承和七年二月己未、殊令六衛府夜行京城、緣群盜遍起也、　庚午、勅、如聞姧宄之賊、寔蕃有徒、或晤夜放火、或白晝奪物、靜言流弊、情切納隍、宜下知左右京職五畿內七道諸國、嚴加督察、搜認閭里、隨獲且進、莫作留連、　三月壬午、分遣六衛府、搜捕京中盜竊、○又見類聚三代格

〔續日本後紀仁明二十〕嘉祥三年正月乙巳、勅、如聞頃來盜賊爲群、黎甿被害、或晤中放火、或白晝掠人、宜令左右京職、及五畿內諸國司、申明舊章、速搜捕、若致稽懦、準法科責、　二月壬子、分遣六衛府佐已下覘捕京中群盜、又令左右近衛各十人巡撿東西、

〔文德實錄七〕齊衡二年正月癸卯、時京師多盜、掠奪人物、有詔搜起、自宮中及於京中、

〔三代實錄清和十〕貞觀七年三月廿七日戊申、有勅、搜於宮中及諸司東西京、

〔三代實錄清和二十四〕貞觀十五年六月廿一日甲寅、武藏國司言、新羅人金連安長淸信等三人、逃隱不知在所、令京畿七道○七道下日本紀略有諸國二字搜捕金連等、貞觀十二年自太宰府所遷配也、

〔三代實錄光孝五十〕仁和三年二月乙巳朔、大藏省奏言、昨夜偷兒、穿正藏院庫壁、盜取官物、多少難記、遣撿非違使索焉、

〔本朝世紀〕天慶二年四月廿八日己亥、諸卿就日本紀講所、此間大納言伊望卿、依召參入、召外記仰云、京中搜求盜人例如何、申云、近則延長三年也、差文等在別紛失、仍召賑給定文被定之、其後召諸衛左右馬寮等、仰明日可搜求京中盜人之由、不依口口次第、任參入遲速仰之、　廿九日庚子、卯剋、諸卿參入、被定京中盜人可搜嫌疑索下手者之由、仍先召左右撿非違使等、密々仰可固會坂、龍花越、大枝山、山崎、淀等道之由、次召諸衛仰之、巳剋東西各分手率隨兵、隨差文罷出、搜索京中、又有勅藏人、仰小舍人左右近番長已下等、搜索宮中司々、申剋使々申返事、京條宮中無殊事、○中略　條々差文手々次第委見記、

召使、使仰可捜捕嫌疑者之由、(事旨可随仰事、但京中捜擧者、可臨其方山云々、五位以上者服尋常裝束、進膝著、六位著布衣帶弓箭、候小庭、同召膝著下仰之、隨參召仰、不必依次、一府有手々者、仰其上﨟、面々不仰、近例五位以上著布衣袴帶弓箭參入奉之、)或又藏人頭奉仰、差藏人所雜色以下(左右近番長以下、小舍人等相加之、)令捜撿宮中諸司所々、有院宮御領處者、召院司宮司等令仰可捜索之由、使等歸參各申返事、(五位著朝服布袴帶弓箭、)畢上卿令奏其由、退出、(此日厨家儲小饌、)

〔北山抄九〕大索(オホアサリ/ヌスヒトアサリ)(天暦二年例、奉仰之時、尋常裝束、申返事時、帶弓箭等、彼間左大臣上﨟、謙德公廉義公爲左右次將、)次將依召參入、候膝著、(著尋常裝束、而近例朝服布袴緌、革緌帶狩胡簶奉之、是返事時例也、)蒙上卿仰率僚下(有隨兵三四人、)捜撿當條、歸參進膝著申嫌疑者之有無、(先觸外記可參進歟、)

〔榮花物語五浦々の別〕内には陣に左衞門尉惟時、肥前前司賴光、周防前司賴親などいふ人々、みなこれ滿仲貞盛がむまごなり、おの〳〵つはものどもかずしらずおほくさぶらふ、春宮の帶刀や瀧口やなどいふものども、よるひるさぶらひ、關をかためなどして、いとうたてあり、世には。。。。。。おほあなぐりどいひつくるもいとゆゝし、

〔侍中群要七〕京中大索事

奉仰上卿仰外記、當日早旦書分條々手當、(大辨書之、)上卿一々召陣仰之、(五位帶衞府者、布袴表衣上帶弓箭、六位布衣、但著冠、應召武者五位六位、或著冠、或烏帽也、)藏人頭召仰藏人所雜色等、大索宮中、瀧口若不分諸條者、差副藏人所云々、(中略)諸衞等申返事、同於陣申之、但著狩衣、

〔類聚國史八十七刑法〕延暦十二年八月丁卯、是夜内舍人山邊眞人春日、春宮坊帶刀舍人紀朝臣國、共謀殺帶刀舍人佐伯宿禰成人、明日事覺、春日等即逃隱、帝大怒募求天下、後伊豫國捕之以聞、遣左衞士佐從五位上巨勢朝臣島人格殺、或曰、春日等承皇太子密旨、

〔續日本後紀六仁明〕承和四年十二月辛卯、是夜盜開春興殿、偸取絹五十餘匹、宿衞之人、不得見著、　甲午、夜分女盜二人、昇入清涼殿、天皇愕然、命藏人等告宿衞人、遂捕之、纔獲一人、其一人脱亡、　庚子、是

仰曉更可牽御馬之由、或仰東宮主馬署幷公卿家、令牽進家々私馬、但秘其事不令洩、當日曉更上卿召諸衛佐已下、分遣兩京條々、令搜求之、又藏人所雜色已下令帶弓箭、差分宮城中閑寂諸司、令搜求之、晩頭條々使還參後、上卿奏事由、又或撿非違使幷諸衛尉已下結番給御馬、毎夜令巡撿京中矣、或加遣瀧口武者、

〔西宮記 臨時 十〕搜盜事

卷纓著綏、帶猶胡籙、著布袴革韈等、皆有副兵、隨上卿之仰、向條々搜求嫌疑者、歸參申其由、舊例五位已上、申返事帶弓箭、

天德四年十一月十四日、仰左大臣〇藤原實頼云、近來京中盜起云々、須撿非違使之外、差副諸衛官人、勤夜巡事云々、申云、余撿非違使馬寮官人等之外、宜給寮馬巡行、仰依請、

應和元年十一月十五日、給右大將藤原〇師尹撿非違使、勤申相共可搜求京中盜諸衛馬寮兵庫等官人、又仰下宣旨、又仰左右馬寮、毎夜引夜巡料御馬各三疋、

應和三年九月廿二日、民部卿藤原朝臣〇在衡令申撿非違使可下知左右京職、令諸條保長刀禰勤行部內夜行事、依請仰令諸卿定申云、　十月九日、令仰云、依諸卿定五位以上及諸司主典已上、良家子姪不勤者、錄名奏聞、

〔北山抄 四〕大索事(オホアナグリ)

前一日、上卿奉勅仰外記、召賑給使差文、令參議書、近例不必差之、召六府馬寮等官人、幷今日不參諸卿家司各一人、令外記仰諸衛、以明日卯一點、佐以下官人率舍人等、帶弓箭可參候之由、天暦二年六月十五日、右大臣令仰觸云、明日俄可行賑給事、依倉卒當日可給料物、但如此之時、非无狼藉事、各帶弓箭可候云々、令仰馬寮、御馬各廿疋、置鞍、官人相具可牽建禮門前、可充給賑給使料云々、或所可有行幸、令誡仰諸衛幷馬寮等、諸卿家司馬隨身可牽進之由同令仰之、又密々仰撿非違使、差遣官人各二人於會坂、龍華、山崎、大枝、宇治、淀等道々、令固衛矣、當日卯時以前上卿參入、令改書盜索差文、少將以下預之、或加瀧口武者、又召加諸司官人堪武藝者、近例或外記依例差定覽之、又仰外記、令分給寮及諸家所進馬、依分配覽上卿、郎外記於春華門前充行、畢上卿

疑、而穎資有阿容之氣、若早不左右者、可處重科也、予以此由含穎資已了、

〔中右記〕永久二年四月十三日戊午、資清來云、於京極二條邊引剝疑者二人、(一人院御厩舎人、一人殿下細工、)一將參院、仰云、早可沙汰者、所指申者等、在法興院中、早觸別當法眼、可搦由仰了、　廿日、參院、○中略　次奏云、一夜二條朱雀邊、法勝寺小綱下女、被引剝疑者一昨日令勘問處、大略戲事歟、就中彼小綱、不爲愁由所申也、仰云聞食了、然者可免給之、

〔朝野群載十一廷尉〕左衞門權佐宣俻、近來强盜之徒、連夜成犯、侵害之訴、逐日無絶、斯乃有司懈緩、不加禁過之所致也、各仰當保、且令尋召嫌疑之者、且可令致夜行之勤焉、

天承三年五月十六日　　小志惟宗成國奉

〔吉記〕壽永元年二月九日庚戌、傳聞藏人强盜、爲撿非違使信盛沙汰、已被召出了、件男者土佐守俊兼曾孫、進士能兼(故□兼勅臣弟隱者)孫、高松院藏人大夫淸俊男、皇嘉門院非藏人俊長也、民部大輔兼定乳母子、仍付兼定被召出畢、件事去年十二月、故前加賀守師高後家之强盜也、先捕嫌疑人彼戸部雜色也、件男彼藏人爲張本之由指申、其同類同舍弟幷戸部侍等云々、於侍一人自害、實未曾有事也、件藏人、昨日廷尉持參院、有御覽云々、

犯人拒捍

〔法曹至要抄上罪科〕一追捕事

捕亡律云、捕罪人、而罪人持仗拒捍、其捕者格殺之、及走逐而殺、若迫窘而自殺者、皆勿論、卽空手拒捍、而殺者徒二年、已就拘執、及不拒捍而殺、或折傷之、各以鬪殺傷論、用刃者從故殺傷法、罪人本犯應死、而殺者遠流、卽拒毆捕者、加本罪一等、傷者加鬪傷二等、殺者斬、

〔延喜式四十一彈正〕凡犯重應捕、而拒捍者、發當處兵捕之、若犯狀灼然不肯伏、辨事爭訴者、累加本罪、

捜索犯人

〔新儀式五臨時〕捜盜事

若有京中强盜蜂起、仰下諸衞府、有令捜求、前一日上卿奉勅、先差遣可守要害諸關之使、(或仰國司令防守之、)又

捕逃亡者

〔延喜式刑部二十九〕凡罪人逃亡者、申官追捕、

〔延喜式彈正四十一〕凡犯人逃走、令撿非違使追捕、

〔令義解捕亡九〕凡囚、及征人、防人、衞士、仕丁、流移人逃亡、(謂、囚者、不限有罪無罪、但依狀應禁者、其散禁亦同也、流移人逃亡者、此據在道未到配所也、)及欲入寇賊者、(謂、依律、是爲叛人、其叛人捕法、已在獄令、更制此文者、獄令據事尙隱祕、謀狀未顯、此條爲已上道訖、事迹顯彰、情義不同、故立兩條也、)經隨近官司申牒、(謂、在路逃亡、故云隨近官司、其在囚獄司罪人、及已到配所流移人逃亡者、申囚獄司、及國司也、)卽告亡者之家居所屬、及亡處比國比郡追捕、承告之處、下其鄉里隣保、令加訪捉、捉得之日、送本司、依法科斷、(謂、征防及流移人、在路逃亡者、捉得之日、征防人、送行軍所、及防人司、流移人、送配處國司、並皆依法科罪、其防人逃亡、罪至徒以上者、不可更送、初向之時、犯徒以上者、差替故也、)其失處得處、並申太政官、

〔日本紀略十四後一條〕長元六年正月廿六日癸巳、今日撿非違使等、於廳勘問犯人之間、刑人一人、逃入宮城之間、於陣捕取了、

捕嫌疑者

〔日本紀略四村上〕天德四年四月十八日丁亥、式部大輔橘直幹朝臣、自省退出之間、於美福門前、爲雜人被毆損、公家令召捕嫌疑者彼省史生奈癸忠雅、　十九日戊子、捕獲直幹朝臣所指申下手人、省史生奈癸忠雅、

〔春記〕長久元年五月廿二日丙子、今夜戌時許、依召參御前、仰云、吾在夜大殿南戶外、女房等又在之、然間竊盜入夜大殿中、取御衣、(綿御衣三領、單御衣一領、)女房等相對見之處、驚而自東渡殿遣戶逃去、御衣等落失板敷下、其盜人下女體也、瀧口等候本陣、女房告此由、然而不得捕云々、少將(掌侍)下曹司之路也、彼從者非無其疑也、仰藏人賴資令追、而又不得也、此由等可示關白(○藤原賴通)也者、予(○藤原資房)卽參彼殿、進御所、面申此由、被奏云、太不便事也、驚申不少、早慥可尋捕嫌疑者之由、可仰賴資(撿非違使也)者、卽參內奏此旨了、賴資依仰、少將從女二人令捕禁了、今夜開左衞門陣云々、　廿三日丁丑、仰云、瀧口定清去夜不得盜人、太以別樣也、其罪如何、(○中略)參高陽院、一々申此旨、被奏云、定清事非有指過、只至愚之甚也、只可恐申也、(○中略)仰云、竊盜事、少將從者二人嫌疑、仍去夜所捕也、而今一人依無其疑優免了、今一人已有其

仁安二年五月十日　宣旨

如聞、近日東山驛路、綠林之景競起、西海洲渚、白波之聲不靜、或奪取運漕之租稅、或殺害往來之人民、論之朝章、如無皇化、宜仰權大納言平卿盛○重令追討東山東海山陽南海道等賊徒、

藏人頭權右中辨平信範奉

〔百練抄九安德〕壽永二年七月廿日、先日有議、京中追捕、自人家及公卿家、又及神社云々、

〔壬生家文書二〕太政官符　山陰道諸國司

雜事拾貳箇條○中略

一應慥搦進陸海盜賊放火輩事

右同宣、奉勅、近年盜賊之類、結黨成群、充滿都鄙、殺害人民、放火家宅、就中近日所犯、連夜不絕、宜下知諸國、隣里與力、搦進其身者、○中略

以前條事如件、諸國承知、依宣行之、符到奉行、

修理左宮城判官正五位下行左大史兼播磨介小槻宿禰

正四位下行左中辨兼紀伊權守藤原朝臣

治承二年七月十八日

傍人追捕

〔法曹至要抄上罪科〕一追捕事

又云、○捕亡律被人毆擊、折傷以上、若盜及強姧、雖傍人皆得捕繫以送官司、若餘犯不言請、而輒捕繫者笞卅、

挾詐捕人

〔法曹至要抄上罪科〕一詐稱官所遣搦人事

詐僞律云、詐爲官及稱官所遣、而捕人者徒二年、

案之、人詐或稱使廳使、或號所司、恣搦取人之時、所設之文也、

行來仰、横山黨廿餘人、常陸、相模、上野、下總、上總五ヶ國司、可追討進之由、可宣下者、直雖下同弁、彼弁猶示可下大弁之由、依事道理、召右大弁下之、如此凶事必所下右弁官也、　四月十二日、左府仰云、坂東横山黨可追討之由宣下、而追捕後不中上子細、別催撿非違使請取條、尤不似先例事也者、

〔中右記〕永久二年八月十六日、南海道海賊、近日亂發、盜取諸國運上物也、而熊野別當、俗別當等、給宣旨可尋進由申之旨風聞、如何、仰云、早給使廳下文可尋進由可仰、則下知明兼了、此間重時、忠盛、重方、資清、明兼所祗候也、午時退出了、

〔朝野群載十一延尉〕撿非違使移山陽南海兩道國衙、欲被令備前守忠盛朝臣搦進海賊事、

右院宣偁、如聞者、頃日海路之間、凶賊滋蔓、乘數十艘之船、浮百萬里之波、或殺略往返之旅客、或刧奪公私之勝載、積惡彌長、宿暴日成、寔惟諸國司等、各憚驍勇、無心捉搦之所致也、宜令忠盛朝臣搦進件輩者、欲被早任院宣令搦進彼賊徒之狀、依別當宣、移進如件、乞也衙察狀、故移、

大治四年三月日　正六位上行右衞門尉明法博士中原朝臣明兼

從五位下行左衞門少尉源朝臣輔遠

〔中右記〕長承四年（○保延元年）四月八日辛亥、殿下（○藤原忠實）被仰云、近日海賊競發、上下船不通、仍可追討之由、雖給宣旨於國司等、于今不叶、何樣可被行哉、人々相議可被申者、顯頼發語云、海賊首、所々庄々住人者、被仰本所、被召進由可被仰者、人々同之、予申云、備前守忠盛朝臣、撿非違使爲義等、可追討由被仰下、何事之在哉、以藏人弁資信被奏院、仰云、遣爲義者、路次國々自滅亡歟、忠盛朝臣、且爲備前國司、可有便宜也、早可追討由被仰下忠盛朝臣、可宜者、仍被下件旨宣旨了、本上卿大宮大夫可奉行者、及亥時、人々退出、　六月八日庚戌、海賊首、僧源智、備前守忠盛所搦取也、此旨只今所聞也、

〔兵範記〕仁安二年五月十日丁未、今日依院宣仰海賊追討事、先注仰詞、內覽殿下（○藤原基房）、次院奏、次詣左府（○藤原經宗）亭、奉下之、卽被返給下官、下官下知大夫史了、

〔日本紀略六圓融〕貞元元年三月廿八日乙未、西京邊土有搜盗事、　四月十一日丁未、去夜得強盗嫌疑人、有贓物幷承伏輩、

〔日本紀略八花山〕寛和元年四月五日己卯、依刃傷播磨介藤原季孝朝臣、彈正少弼大江匡衡、可追捕左兵衛尉藤原齊明等者、匡衡左手指切落也

〔扶桑略記二十九後三條〕治曆五年、○延久元年八月一日、令前駿河守平維盛、撿非違使左衛門少尉源家宗等、追捕大和國釜摩多山強盗、

〔水左記〕承曆三年八月廿一日、前下野守義家朝臣、爲追討兵衛尉重宗之使、下向美濃國云々、　廿九日未剋許、撿非違使季衡來語云、兵衛尉重宗已以逃隱云々、昨日義家朝臣進件旨解狀云々、

〔水左記〕承曆五年○永保元年九月廿四日丁未、或人云、爲令追捕籠牛尾山三井寺惡僧、遣前陸奧守源賴俊云々、　廿九日壬子、早旦向土御門、未時許招藏人弁伊家、付去十七日陣定文、伊家下近江國食馬宣旨、下同弁了、是撿非違使等、爲令追捕三井寺俗兵士、明日下向彼國之料云々、　十月四日丁巳、傳聞撿非違使等、燒拂近江國高島郡人宅云々、是與三井寺大衆合力、攀登台岳之輩、多在彼郡之由、已有風聞、被追捕云々、

〔中右記〕寛治八年○嘉保元年正月七日己卯、天皇○堀河出御、○中略觀族拜之間、撿非違使等於陣外、二條堀川之辻陣雜犯間、内府○藤原師通小大夫君、家政雜色等與廳下部等、有鬪亂事、雖不及巨害、又以拔刀、此中右衛門督車副男、濫行無極、撿非違使等、搦車副男、入自右衛門陣、欲觸案内於別當○源俊實處、今日不被參内、左佐有信在床子座、兼右少弁也先觸案内、引參關白殿○藤原師通御直廬、申事之由、但節會之間、不及奏聞者、

〔中右記〕嘉承二年十二月卅日、今夜晦御祓使非藏人實彙、具御衣、行向河原之間、於五條坊門富小路邊、○中略雜人打逢、已破御衣蓋了、是馬允繁時宅前云々、仍遣撿非違使被追捕云々、

〔長秋記〕天永四年○永久元年三月四日、橫山黨依殺害内記太郎、被下追罰宣旨、左府○源雅實仰云、頭弁○藤原實

崎村、海賊群居、掠奪尤切、公私海行、爲之隔絶、凡可捕件賊之狀、頻繁仰下、督促懇懃、其後播磨、備中、備後、阿波等國、相尋言上獲賊之狀、而今寇盜難休、流聞如此、實是國司等、欲消一境之咎、不慮天下之憂、无盡謀略、不精捜捕之所致也、夫海賊之徒、萍浮南北、唯殉其利、不恤其居、追捕則鳥散、寬縱則鳥合、仍須緣海諸國、勠力同謀、具記往來之船航、勤詳去就之人物、儻聞有奸謀、則彼我相移、差發人兵、招募俘囚、捜其屋穴、尋其風聲、窮討盡捕、令无遺類、

〔三代實錄（三十九陽成）〕元慶五年五月十一日戊午、太政官下符山陽南海二道諸國倂、如聞、近者海賊成群、殺略諸人、公私之物、多致掠奪、往歸之輩、頻被侵害、斯則國宰不勤督察之所致也、宜早追捉之、　十三日庚申、勅遣左衛門少志從六位下紀朝臣貞城、府生正七位上穴太日佐門繼、右衛門府生從七位上善友朝臣益友、從八位下阿刀連良繩、左右火長十人、向山城、攝津、播磨等國、追捕海賊、

〔貞信公記〕承平元年十二月二日乙卯、招左大弁（○藤原扶幹）仰淀山崎等五道仰山城守事、又結保道守等事、依群盜橫行也、　十二日、群盜籠故式部大輔菅根朝臣家、撿非違使并諸衛官人舍人等、終夜圍護、比明奉號矢請降、仍捕縛下獄、召左金吾於殿上、令行事、　十三日、請右軍、告昨夜圍護群盜、諸衛官人舍人等可賜祿狀、

〔貞信公記〕承平二年四月廿八日、仰追捕海賊使可定行事、

〔扶桑略記（二十六村上）〕天德五年（○應和元年）五月十日壬申、夜強盜入前武藏權守滿仲之宅、爰滿仲躬留類人倉橋弘重、弘重指申中務親王（○式明）第二男、及宮內丞中臣良材、土佐權守蕃基男等所爲也、撿非違使左衛門志錦文明參內奏聞、中務親王家人申云、件孫王今晚入親王家、其同類紀近輔、中臣良材等可有此家、仍以事由告親王、親王令申云、男親繁日來重煩痢病、在此家內不堪起居、待平復時可進者、依宣旨使官人等令捜求同類人、親王家內遂不捕獲、　戊子、同親王家捕獲紀近輔、申云、親繁爲首入滿仲家實也、贓物可有彼親繁孫王之許、勅云、依不進男、忽科親王家、猶伺親繁之出外、可召捕者、

遣六衛府舍人等於平城捕群盜、

〔文德實錄十〕天安二年二月乙酉、遣左近衛少將從五位下坂上大宿禰當道、右近衛少將從五位上藤原朝臣有貞等、率左右馬寮官人幷近衛、搜捕京中群盜、

〔三代實錄(六 清和)〕貞觀四年五月廿日丁亥、近者海賊、往々成群、殺害往還之諸人、掠奪公私之雜物、備前國言、進官米八十斛、載於一船、差綱丁進上、而遭海賊、悉被侵奪、所殺百姓十一人、是日下知播磨、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊豫、土佐等國、差發人夫、追捕海賊、

〔三代實錄(十二 清和)〕貞觀八年四月十一日乙酉、下知攝津、和泉、播磨、備前、備後、安藝、周防、長門、幷南海道諸國曰、去貞觀四年五月二十日、七年六月二十八日、宣告應追捕海賊之狀、而今有聞、賊黨群起、掠奪無息、是則國司不勤肅清也、若不追捕、猶致殘暴、科罪收宰、曾無任宥、其捕獲之數、具狀言上、

〔三代實錄(十四 清和)〕貞觀九年二月十三日癸未、是年內外儉乏、人庶阻飢、就中畿內特甚、盜賊群起、或遮道路、而脅人掠奪、或窺屋舍而行火入盜、仍下知國司、每鄉結保、督察奸盜、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應勤施方略早斷盜賊事

右被大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣氏宗宣偁、頃年搜捕海賊、督察奸盜之狀、數度下符、警告稠疊、而今如聞、凶徒不絕、竊盜尙繁、水浮陸行、皆憂賊害、實是國司、遮莫符旨、不勤肅清之所致也、夫五家相保、一人爲長、以相檢察、載在法條、又容止盜賊、科罪非輕、然則事須隣伍之內、必置保長、察以行來、詳以去就、亦其市津、及要路人衆、猥雜之處、多施方略、勤設偵邏、募以捕獲之賞、示以容舍之辜、使奸濫徒無所留跡、若不加愼行、重致解體者、必處重責、不曾寬宥、

貞觀九年三月廿七日(○又見三代實錄)

〔三代實錄(十四 清和)〕貞觀九年十一月十日乙巳、下知攝津、和泉、山陽、南海道等諸國曰、如聞、近來伊豫國宮

〔唐律疏議捕亡二十八〕諸罪人逃亡、將吏已受使追捕而不行、及逗留、(謂故方便之者)雖行與亡者相遇、人仗足敵、不鬪而退者、各減罪人罪一等、鬪而退者減二等、即人仗不敵、不鬪而退者減三等、鬪而退者不坐、(疏議略)即非將吏、臨時差遣者、各減將吏一等、三十日內、能自捕得罪人、獲半以上、雖不得半、但所獲者最重、皆除其罪、雖一人捕得、餘人亦同、若罪人已死、及自首各盡者、亦從免法、不盡者止以不盡人為坐、(○疏議略)限外若配贖以後、能自捕得者、各追減三等、即為人捕得、及罪人已死、若自首、各追減二等、(已經奏決者、不在追減之例、餘條追減準此、)

〔法曹至要抄上罪科〕一追捕事
又(捕亡律)云、追捕罪人、而力不能制、告道路行人、其行人力能助之、而不助者杖八十、勢不得助者勿論、

〔令義解十獄〕凡五位以上、犯罪合禁、在京者皆先奏、(略○)註　若犯死罪、及在外者、先禁後奏、並聽別所坐、婦女在位者亦同、(略○)註　若五衛府志以上、及兵衛、犯罪須追者、並聽勒獄官司、經本府追掩、本府即奏執遣、(謂准唐令、上番入宿衛者、其下番者准主帥、本府不奏直送、皆是贓狀露驗者、其事跡未明、獄官追攝對問者、本府不奏直送、待罪狀辨定、獄官更以狀牒報本府、即奏訖也、)其主帥及衛士者、本府即依執送、(謂准罪輕重、依法禁送、)

〔續日本紀一文武〕四年十一月乙未、天下盜賊往往而在、遣使追捕、

〔續日本紀三文武〕慶雲三年閏正月庚戌、是日令掃淨諸佛寺并神社、亦索捕盜賊、

〔續日本紀三文武〕慶雲三年二月庚子、京及畿內盜賊滋起、因差強幹人、悉令逐捕焉、

〔續日本紀十聖武〕天平二年九月庚辰、詔曰、京及諸國多有盜賊、或抵人家劫掠、或在海中侵奪、蠹害百姓、莫甚於此、宜令所在官司嚴加捉搦、必使擒獲、

〔日本紀略桓武〕延曆十五年五月甲午、遣吉備魚主於山陽道諸國、索捕賊、

〔續日本後紀七仁明〕承和五年二月庚子、勅旨曰、分遣左右衛門府生看督等於畿內諸國、追捕奸盜云々、

〔文德實錄九〕天安元年三月癸丑、遣左右近衛、左右兵衛、及撿非違使、左右馬於京南、捕群盜、　乙卯、亦

賊國郡軍團皆附考、謂不必降考、唯附考文也、

〔法曹至要抄中禁制〕一兵仗事

擅興律云、擅發兵二十人以上杖一百、五十人徒一年、五十人加一等、若有逃亡盜賊、權差人夫、足以追捕、及公私田獵者、不用此律、

〔唐律疏議十六擅興〕諸擅發兵十人以上、徒一年、百人徒一年半、百人加一等、千人絞、謂無警急、又不先言上、而輙發兵者、雖即言上、而不待報、猶為擅、文書施行、即坐、○疏議略 給與者、隨所給人數、減擅發一等、亦謂不先言上、不待報者、告令發遣、即坐、○疏議略 其寇賊卒來、欲有攻襲、即城屯反叛、若賊有內應、急須兵者、須便調發、雖非所屬、比部官司、亦須調發給與、並即言上、各謂急須兵、不容得先言上者、○疏議略 若不即調發、及不即給與者、準所須人數、並與擅發罪同、其不即言上者、亦準所發人數、減罪一等、若有逃亡盜賊、權差人夫、足以追捕者、不用此律、

〔令義解十獄〕凡告密人、皆經當處長官告、謂密者、謀叛以上、○中略 長官有事、經次官告、○註略 若長官次官俱有密者、○註略 任經比界論告、受告官司、准法示語、○註略 確言有實、即禁身據狀捡校、○註略 若須掩捕者、即掩捕、謂若賊類衆多、須待人兵、如此經略、不即掩捕、故文云應掩捕者即掩捕、即依律、官司承告、不即掩捕、經一日者、各與不告罪同、若事須經略、而違時限者、不坐是也、 應與餘國相知者、所在國司、准狀收掩、謂捕亡令云、若力不能制者、即告比國比郡、是也、 事當謀叛以上、雖捡校、仍馳驛奏聞、○註略 指斥乘輿、及妖言惑衆者、捡校訖總奏、○註略 承告掩捕者、若無別狀、不須別奏、謂假承告追捕謀叛、而實及謀大逆者、仍合別奏之類也、 其有雖稱告密、示語確不肯道、○註略 仍云事須面奏者、受告官司、更分明示語、○註略 虛得無密反坐之罪、○註略 又不肯道事狀者、禁身馳驛奏聞、○註略 若直稱是謀叛以上、不吐事狀者、○註略 給驛差使、部領送京、若勘問不道事狀、因失事機者、與知而不告同、 其犯死罪囚、及配流人、告密者並不在送限、○註略 應須捡校及奏聞者、准前例、

〔令義解十獄〕凡奉使有所掩攝、謂依律、將吏受使、追捕罪人、是也、 皆告本部本司、不得徑即收捕、若急速密者、且捕獲、取本司公文發遣、謂凡掩攝罪人、皆先經罪人本部本司、若急速密者不經本部本司、徑即追捕、然後始告、即取使人之本司公文、相知執遣、故云取本司公文發遣、其略本部者、准上文須知也、

〔朝野群載十一廷尉〕右辨官下　大和國

應勤行撿非違使供給事

左衛門權少尉藤原顯輔　從三人　火長二人

大志栗田豐道　從三人　火長一人

府生船保重　從二人　火長一人

右少志安倍守長　從一人　火長一人

左右看督長二人

右權中納言藤原朝臣長家宣、奉勅、爲令追捕犯人差件等人充使、發遣如件、國宜承知依宜行之、使者經彼之間、依例供給、官符追下、

年月日　左大史

右少辨藤原朝臣

〔令義解九捕亡〕凡有盜賊及被傷殺者、（謂、依律、盜賊者、獄云、盜、以其有所賊害、故曰盜賊、即強竊等也、傷殺者、獄云、殺、以其傷而殺、故曰傷殺、即故鬪謀等也、又依獄令、盜及殺人、不應三審、即明應三審者、不依此條、而三審之後、乃得追捕也、）即告隨近官司坊里、聞告之處、率隨近兵及夫、（謂、兵者、兵士也、夫者、人夫也、）從發處尋蹤、登共追捕、若轉入比界、須共比界追捕、若更入他界、與所部官司、對量蹤跡、付訖、然後聽比界者還、其本發之所使人、須待蹤窮、其縱緒盡處、（謂、賊跡窮盡、更無追尋也、）官司、精加推討、若賊在甲界、而傷盜乙界、及屍在兩界之上者、兩界官司、對共追捕、如不獲狀驗者、（謂、非賊狀露驗、）不得即加徵拷、

〔令義解九捕亡〕凡追捕罪人、所發人兵、（謂、人夫、及兵士也、）皆隨事斟酌、使多少堪濟、其當界有軍團、（謂、當郡之內、有軍團者也、）即與相知、隨即討撲、（謂、撲者、擊也、）若力不能制者、即告比國比郡、得告之處、審知事實、先須發兵相知除剪、仍馳驛申奏、（謂、得告之處、錄發兵狀申奏、即本發之處、依獄令申奏也、依律、寇賊卒來、欲有攻襲、即反叛、若賊有內應、急須兵者、得便調發、故知馳驛之色、據此爲限也、）若其遲緩逗留、（謂、承告之處、稽廢失機也、）不赴機急、致使賊得逃亡、及追討不獲、（謂、本發之處、終不獲賊也、）者、當處錄狀奏聞、（謂、依律馳驛奏聞也、）其得賊、不得

緊スル事ヲ得ルナリ、又追捕スル時ニ、罪人兵器等ヲ持シテ、拒捍スル時、捕人格殺シ、或ハ逃走セルヲ追ヒテ之ヲ殺シ、或ハ犯人ノ追窘シテ、自殺スル事アルモ、皆罪ヲ論ゼザレドモ、空手ニテ拒捍スル者ヲ殺シ、或ハ已ニ執ハレタルト、拒捍セザルトヲ殺傷スル等ハ、各、罪アリ、

名稱

〔伊呂波字類抄 都畳字〕追捕

〔運歩色葉集 津〕追捕

〔大鏡 八〕大炊御門よりにしざまに、人々のさゝとはしれば、(○中略)さはおほきなるつゐふくかなと、かたがたにこゝろもなきまで、まどひまかりしかば、

〔北山抄 六〕追捕使事

〔増鏡 二新島守〕頼朝、(○中略)この時ぞ諸國のそうついふくしといふ事うけたまはりて、地頭職に我家のつは物どもなしあつめける、

捕犯人

〔職原抄 下〕撿非違使

朝家置此職以來、衛府追捕、彈正糺彈、刑部判斷、京職訴訟、併歸使廳、

〔續日本後紀 八仁明〕承和六年六月乙卯、勅、彈正臺及撿非違使雖配置各異、而糺彈違犯、彼此並同、但至犯人逃走、姦盗隱遁、彈正之職不堪追捕、自今以後、縁糺違犯、有可追捕者、臺使相通、遣撿非違使長等隨事追捕、立爲永例、

〔侍中群要 七〕陣中非違事

陣中雜犯藏人召看督使令捕之、或以小舍人搦之、召撿非違使給之、若藏人尉候者出陣外勘糺之、

〔侍中群要 七〕撿非違使奏事

別當有闕之時、廳底可然人奏事由、(行于例事、依可下給也、)有名犯人、幷有宣旨追捕者得之時、參藏人所奏其由、
(或有輸贖之時、各疋絹也、佐若有此中、藏人所授於六位官人、出納有何事乎、藏人尉可有任心也、)

古事類苑

法律部十一

上編

追捕

追捕ハ衞府ノ掌ル所ナリシヲ、後ニ撿非違使ニ屬セリ、凡ソ盜賊ニ遇ヒ、或ハ傷殺ヲ被リタル人アル時ハ、隨近ノ官司坊里ニ告グ、其官司坊里ハ、直ニ兵士人夫ヲ率キテ、蹤ヲ尋ネテ追捕ス、若シ罪人轉ジテ比界ニ入ラバ、比界ノ人ト共ニ追捕シ、若シ更ニ他界ニ入ラバ、他界ノ官司ト追捕シ、比界ノ人ヲシテ還ラシム、賊ノ跡ノ窮リ盡キテ尋ヌルニ由ナキニ至リテ、本發ノ使人ハ、還ルコトヲ得ルナリ、若シ甲ノ界ノ賊、乙ノ界ニテ盜シ、或ハ人ヲ傷ケ、及ビ其屍甲乙兩界ノ間ニ在ル時ハ、兩界ノ官司共ニ追捕ス、而シテ賊ト狀ト露驗ナラザル時ハ、卽チ拷訊スルコトヲ得ズ、凡テ罪人ヲ追捕スルニ、其發スル所ノ兵士人夫ノ多少ハ、事ノ大小ニ從フ、當界ニ軍團アラバ、卽チ之ト共ニ追捕シ、其力制スルコト能ハザレバ、比國比郡ニ告グ、告ヲ得タル處ハ、審ニ事實ヲ知リ、兵ヲ發シテ剿除ス、而シテ擅ニ兵二十人以上ヲ發スルハ律ニ禁ズル所ナレドモ、若シ追捕ノ爲ニスル者ハ、此律ヲ用キズ、又使ヲ奉リテ追捕スルニハ、皆罪人ノ本部本司ニ告グベキ法ナレド、若シ事ノ急速ナル時ト、密ニスベキ時トハ、追捕シテ後ニ告グルコトアリ、罪人ヲ追捕セントシテ、其力制スル事能ハザル時ハ、道路ノ行人ニ告ゲテ助ケシム、他人ヲ毆擊シテ折傷セシメ、若シクハ盜シ、及ビ强姦ノ罪ヲ犯ス者アル時ハ、傍人ト雖モ捕繫シテ、官司ニ送ル事ヲ得レドモ、其餘ノ犯人ハ、傍人ハ言請シテ後ニ捕

古事類苑

法律部十一

上編

追捕

囚禁 召籠 併入

今世之人、多不務經術、好翫博弈、廢事棄業、忘寢與食、窮日盡明、繼以脂燭、當其臨局交爭、雌雄未決、專精銳意、神迷體倦、人事曠而不修、賓旅闕而不接、雖有太牢之饌、韶夏之樂、不暇存也、至或賭及衣物、徙棊易行、廉恥之意弛、而忿戾之色發、然其所志不出一枰之上、所務不過方罫之間、

了、廿一日、宗實來云、略○中又京中博戲輩、摺衣輩、重可禁制由、所被仰下也、

處刑例

〔續日本紀 淳仁 二十三〕天平寶字四年十二月戊寅、藥師寺僧華達、俗名山村臣伎婆都、與同寺僧範曜博戲爭道、遂殺範曜、還俗配陸奧國桃生柵戶、

〔類聚國史 刑法 八十七〕弘仁十一年三月乙巳、陰陽介外從五位下江沼臣小並免官、陰陽師從八位上道祖息麻呂決笞卌、生无位志斐人成、廣幡淨繼各杖八十、並以博戲也、

〔日本紀略 醍醐一〕延喜五年七月廿八日乙酉、捕博戲之輩、

〔中右記〕永久二年五月十七日、又付忠盛奏事、近日天下雙六摺衣滿盈事、仰云、縱雖院下部、慥可搦召者、仍下知了、略○中宗實行重搦召博戲輩、仰可候徹禁之由了、十九日、重時將來博戲者二人、略○中一日之博戲輩、可免之由、仰宗實許了、廿九日、又仰云、博戲輩爲院邊召次者可任申、又仰云、摺衣可制、一々承了、參殿下、忠實○藤原申院宣旨、略○下

雜載

〔本朝續文粹 雜詩 一〕初冬述懷百韻 頃者、文學之士、博弈之徒、各爭才藝、共論利害、予鬱懷之餘、聊叙其意、

敦光朝臣

憐爾博弈徒、狠戾復頑愚、種族出凡鄙、棲居接郭邪、桃紅皆醉貌、狐白悉肥膚、擧盞斟樽酒、轡刀截狙鱸、邪論兼晝夜、美膳備朝晡、淫樂遞鳴鼓、濫吹屢竊竽、歌狂乖郢曲、舞慢傲巴歈、鷄鬭狡童走、蛾嚬倡妓姝、飼家斯一犬、止屋幾群烏、挽耳猿頻叫、試蹄馬正驅、藝能嗤蹴鞠、禮數蔑投壺、輕薄行尤怯、喧譁語甚迂、園棊廻遠慮、方罫按深圖、起搦辱先受、忿悁氣已麤、繼跟旁往反、引步猥踟蹰、要利手談好、貪財口辨諛、祈天唯切齒、獲地豈容膚、枉法棄廉恥、和譏插諂諛、漏闌脂燭繼、眠罷意○○鏤愉、勉强雌雄決、等閑形勢覦、勵精彌最晨、瞋目各睢盱、格五加雙六、誰贏也誰輸、折衝嫌楚漢、却敵褐孫吳、遲速臨枰挑、四三擲籌呼、動拳驚角抵、傷指怒樗蒲、擎攫落紗帽、侵凌奪布襦、衣糧非俸祿、溫飽及妻孥、露驗宜徵贖、霜科應畏辜、銳鋒爭勝劣、分賭計錙銖、凡々遂其性、濫々得彼娛、略○下

〔文選 論十一〕博弈論

韋曜

賊害、自今以後、宜仰隣保撿察非違、一如令條、其遊食博戲之徒、不論蔭贖、決杖一百、放火劫略之類、不必拘法、懲以殺罰、勤加捉搦、遏絕奸宄、主者施行、

延曆三年十月廿日〇又見續日本紀

〔延喜式正親四十一〕凡雙六者、無論高下、一切禁斷、

〔法曹至要抄中〕一雙六事

案之、雙六者、律令格式共以嚴禁、六位以下成此犯者、可決杖一百、但五位以上可奏聞事由、有司若糺得者、先可申別當矣、

〔新抄格勅符抄〕太政官符　神祇官

雜事拾壹箇條〇中略

一應重禁制諸司諸衞官人饗宴恭手藝事

右饗宴之制、明在天平寶字二年勅書、貞觀八年、昌泰三年格、延喜六年、天曆元年、延長三年、永觀二年符、綸旨頻降、炯誡重疊、而年來典法設而不張、時俗習而不謹、有力者盡善盡美、自得衆望、無賴者若存亡、〇亡上恐脫若字獨苦一身、世之蠹害、尤在此事、同宜奉勅、自今以後、全以停止、若乖違有犯、見聞不糺之人、非可寬恕、罪同先格、〇中略

以前條事、下知如件、方今號令之道、內外雖分、遵行之旨、遠近何異、同宜奉勅、若乖新制無改舊弊、隨其狀迹、將加科斷者、官宜承知依宜行之、事出綸旨、不得違失、符到奉行、

長保元年七月廿五日

正五位下守右中辨源朝臣道方

正五位下行左大史多米朝臣國平

〔中右記〕永久二年二月十四日、仰云、近日京中著摺衣者、幷博戲輩滿道路、尤可禁制、則仰盛道定實等

得罪重於杖一百者、各依己分準盜論、謂賭得五匹之物、合徒一年、註云、輸者亦依己分爲從坐、謂輸五匹之物、爲徒一年從坐、合杖一百、贓多者各準盜法加罪、若贏衆人之物、亦須累而倍論、輸衆人物者、依己分倍爲從坐、若倍不重一人之贓、即各從一人重斷、

其停止主人及出玖、若和合者各如之、賭飲食者不坐、

疏議曰、停止主人、謂停止博戲賭物者、主人及出玖之人、亦擧玖爲例、不限取利多少、若和合人令戲者、不得財杖一百、若得利入己、並計贓準盜論、衆人上得者、亦準上例倍論、故云、各如之、賭飲食者不坐、謂即雖賭錢、盡用爲飲食者、亦不合罪、

〔類聚三代格十二〕太政官謹奏

禁斷雙六事

右頃聞、官人百姓不畏憲法、私聚徒衆、任意雙六、至於淫迷、子無順父、終亡家業、亦損孝道、望請遍仰京四畿内七道諸國、固令禁斷、其六位已下無論男女、決杖一百、不須蔭贖、但五位者則解却見任、及奪位祿位田、四位已上停廢封戸、職國郡司阿容不禁亦皆解見任、若有願申廿人已上者、無位叙位三階、有位賜物、絁十匹布十端、其所賭資財皆悉沒官、臣等商量如前、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、奉勅依奏、

天平勝寶六年十月十四日〇又見續日本紀

〔雲州消息下末〕近來側聞、被淫雙六之由、禁制綸旨先後重疊、六位以下決杖一百、五位者則解却見任、奪位田位祿、四位已上停給封戸、其由具見弘仁格、句合出九誰人所爲乎、早々可被停止也、又文選博弈論、無益之由已以分明也、於碁琴者、有何事乎、不貪爲寶、聖人炳誡也、穴賢々々、謹言、

月日　左京大夫

主殿頭殿

〔類聚三代格十二〕勅如聞、比來京中盜賊稍多、掠物街路、放火人家、良由職司不能肅淸、令彼凶徒生玆

宿上下船之者、謂之端縫、亦稱出遊、得少分之贈、爲一日之資愛、有寄依縊絹之名、觸取登指皆出九分之物、習俗之法也、

〔令義解二僧尼〕凡僧尼、作音樂及博戲者、（謂、雙六、樗蒲之類也、）百日苦使、碁琴不在制限、

〔令集解七下僧尼〕釋云、音樂謂不相須也、博戲者武習力競之類、亦不聽、與俗人異也、告博戲盜賊之類雖有報給之文、於僧尼告者止沒官耳、不許畜財故、古記云、音樂謂不相須、與律作樂少義異也、博戲謂武習力競之類、亦不聽、與俗人少異也、博戲者雖不賭亦苦使、雜戲皆是、在席所有之物、幷句合出九得物爲人糺告者、依實賞例幷沒官、輸物僧幷容止僧尼糺告者、亦沒官、爲不聽畜財物故、唯與俗人相戲者俗人糺告者依賞例、碁財賭過多亦同也、穴云習武爭力、又削弓作箭之類、亦不聽、今案、此等之類爲苦使、條制外所犯不至還俗、上條釋云、殺食者還俗無疑者、此等爲條制外、至還俗之罪（可正誤、）博戲者、停止主人、及出九、句合等亦同、

〔令抄〕僧尼令第七

碁琴　道俗格曰、作音樂及博戲者百日苦使、其相取財物者還俗、道士女官碁琴不在制限、梵網經云、佛子不得聽吹貝鼓角琴瑟、乃至伎樂之聲、不得（○得本經作）樗蒲圍碁、一々不得作、若故作者、犯輕垢罪、

〔金玉掌中抄〕一博戲罪事

捕亡令云、雙六樗蒲之類也、雜律云、博戲賭財物者杖一百、贓重者各依己分准盜論、注云、碁射雖賭亦無罪、

〔唐律疏議二十六雜律〕諸博戲賭財物者、各杖一百、（擧博爲例、餘戲皆是、）贓重者各依己分準盜論、（輸者亦依己分爲從坐、）

疏議曰、共爲博戲而賭財物、不滿五匹以下各杖一百、

注云、擧博爲例、餘戲皆是、謂擧博爲名、總爲雜戲之例、弓射既習武藝、雖賭物亦無罪名、餘戲計贓、

禁博弈

りければ、在地の者共たふとみて、かつは夢なども見たりけるにや、面々に歸依してけふの齋料をばわれさたせん〳〵とあらそひ結緣しければ、預けたりつる兩町の十貫錢もこと〴〵くもいらず、家のあるじの所得に成にけり、かくて往生の期ちかく成にければ、兼て其期を知て仁和寺の妻が家に行向ひて、いさなやむ事もなくして正念に住して高聲念佛おこたらず端座合掌して終りにけり、善知識大成因緣なれば此妻はゆゝしき善知識かな、これも阿彌陀如來の御方便にや、

〔愚味記〕仁安三年五月十一日壬申、傳聞、此間院中博弈之外無他事云々、下﨟皆參上、與上皇奉博弈云々、或奉負獻種々珍寶、或又奉勝預樣々給物云々、左衞門尉某、奉負獻腹卷而異體物云々、仍上下各爭給、以件物被投庭中、

〔日本書紀 三十 持統〕三年十二月丙辰、禁斷雙六、

〔續日本紀 一 文武〕二年七月乙丑、禁博戲遊手之徒、其居停主人亦與居(居○考證云、居字疑衍、)同罪、

〔續日本紀考證 一〕珠璣藪云、居停主人、以第宅假人也、案唐律疏議、停止主人、謂停止博戲賭物者主人、亦此、

〔令義解 九 捕亡〕凡博戲賭財、(謂博戲者、雙六樗蒲之屬、即雖未決輸贏、唯賭財者皆是也、)在席所有之物、(謂官物者非、其雖賭而在外者、亦不得爲在席之物、但馬牛、雖是非在席之色、而見在賭者、亦同在席之例也、)及句合、出九、(謂和合兩人、令相敵對、是爲句合也、擧九取利、是爲出九、即以九爲例、餘須准知也、)得物、爲人糺告、其物悉賞糺人、即輸物人、及出九句合、容止主人、能自首者、亦依賞例、官司捉獲者、減半賞之、(謂監臨官司、非因檢校而別自捉獲者也、)餘沒官、唯賭得財者、(謂賭人、其句合出九之人、不首已罪、唯告博人者、雖糺告之物已依例賞、而所犯之罪、亦准法坐、即其所得利物、亦不在沒限、)自首、不在賞限、其物悉沒官、

〔朝野群載 三 文筆〕遊女記

所得之物、謂之團手、及均分之時、廉耻之心去、忿勵之色興、大小諍論、不異鬪亂、(中略)其豪家之侍女

傍輩共女牛に腹つかれたる心地してありけれど、今かくかひ付て後をこそなど思ひゐたり、去程に此ぬし其夜やがて仁和寺の妻が本へ此錢をもたせて行にけり、次のあした家にて妻にいひあはせてゆゝしくことして長櫃のあたらしき爾三合たづねて、誠にきら〳〵しくしたてゝ、第二十日の朝とくかゝせて參たり、先起請文一紙を書て侍の柱におしてけり、其起請文に書樣、今日以後ながく博打仕べからず、過にしかたも仕らぬ事なれど、諸衆の御供して此度始て此事仕りぬ、自今以後もし又斯樣の事仕らば、現當むなしき身と成べしと書ておしたりけり、傍輩ども、かたへはやすからぬことにいひ、かたへは感ずるも有けり、事はてゝ妻が本へ行て云やう、今三十貫有、十貫をば汝にとらせん、かくまうけたる併汝が恩なればすべて皆とらすべけれ共、我既によはひたけて殘の年いくばくならず、年頃出家の志あれども一日の齋料のたくはへなし、是に思ひわづらひつるなり、此二十貫の錢を持て、齋料にして、念佛申て後生たすからんと思ふなり、とし頃の志わするべからず、いとひ給はん迄は時時は參りて見奉るべし、又やれ衣きよむることなどはとぶらひたまへかしといへば、妻返返目出たく思ひとりたまひたる、誠に此世はつねならねば左樣に思ひとりたまへる事、わがためもうれしき事なりとてゆるしてければ悅て則出家をとげて廿貫の錢を先十貫もちて、四條町にいたりぬ、ある小家に至りて云やう、是十貫の錢有、奉らん、我を一月に十五日此家に晝ばかり宿して、その程一日に二たびの齋料をこの錢にてしてたまへ、さて用途つきなんのちはとゞめたまへといへば、家のあるじよき事と思ひて事うけしてけり、かく商賣したまふ所なれば家せばくて所なし、屋のうへにゐたらんはいかにといへば、それは心にまかせたまへといへば、悅て家の上にのぼりて下見さげて、世の人のさはぎはしるさまを見て、世間の無常をさとりて念佛して、上十五日をすぐしけり、今十貫を持て又七條の町に行て此定にして、下十五日をすぐしけり、去程に念佛の功つもりて運心としをおく

いへば、同こゝろに思けるにこそ、女のならひは何事をいはず、博弈する事をば腹たつことなるに、ありがたくものたまふ物かな、去ながらもこゝろにくき事なし、何としてはげまんとてかくはの給ぞといへば、妻なにしに其事をばいふぞ、今あけんをまてといふ、さる程に夜明にければおのれが一つ著たりける衣をぬぎて、人の錢五百文かりてげり、男のもとへもて來ていふ樣、この錢にて心ゆるし給へ、人の十、廿貫にてうたんも、又此少分の物にてうたんと心をやる事はおなじ事なり、我こゝろに又おもしろし共思はぬ事なれば、あながちにおほくうち入てもせんなしといへば、男ありがたくうれしく覺て、其あしたやがて此錢ふところにひき入て殿へ持て參ぬ例の事なればあつまりてのゝしる中にまじりぬ、心中に思ふやう、すべてこの事いまだせぬ事なり、朝夕見きけ共、我と手をおろしてしたる事なければ、さいの目の勝まけもはか〴〵敷しらず、唯人にまかせんと思てかたへの者に其よしをいへば、さしもはやりたる事に唯獨まじり給はざりつれば、賢人だてかとおもひて侍けるに、いかにしてかくはなざいへば、其ことに候、今日よりくはゝり候べしとこたへて、此錢わづかに五百なれば、あまたたびに出さんも見苦、たゞ一度におし出して打とられなばさてこそあらめと思て、よき程つゞきてまはる所におし出してかきたりければ、はやくかきおほせて一貫になりぬ、我はいまだ一度もしり候はねば、どうをば人にゆづり申候はんとて、まはらん所をかきおとさんと思て、又よき程に一貫をおし出してかくに、又かきおほせて二貫に成ぬ、其時思ふやう、五百をばとりはなちて本をうしなはで妻に返しとらせんと思ひて、ふところにおさめてけり、今一貫五百をとてこれは思ひの外の物なり、おもふさまにせんと思て又おし出したるに、かきおほせて三貫に成てけり、其後は或は一貫二貫よき程程におし出すに、おほやうはかきおほせて、三十餘貫に成にけり、此上は今は手あらに振まはじと思ひて、よき程にしてしばしやすみ候はんとて三十餘貫の錢取てしりぞきにけり、

行博弈

者勝、少至十籌或七八籌、皆臨局計議、

〔水鏡 下光仁〕寶龜三年に、みかど井上の后と博弈したまふとて、たはぶれ給ひて、我負けなばさかりなる男を奉らむ、后負け給ひなば、色かたちならびなからむ女をえさせ給へとのたまひて、うちたまひしに、みかど負け給ひにき、后まめやかにみかどをせめ申給ふ、

〔日本紀略 十三後一條〕萬壽四年七月廿日戊午、從三位道雅卿、於帶刀長高階順業宅博弈之間、道雅卿取賭歸去之處、順業令郎從令剪車輿之縛繩、視者如堵、

〔古今著聞集 十二博弈〕花山院右のおとゞのとき、侍共七半といふ事を好て、ありとしある物ども夜晝おびたゞしく打けり、おとゞ制し給へ共用ず、其中にいとまづしき格勤者一人有、もちたる物なければ其人數にもれてうたざりけり、大納言定能卿の家の雜仕を妻にて、よな〳〵は仁和寺へかよひけり、或夜このぬし妻と合宿したりけるが、大息打つぎてねもいらずして夜もすがら物を思ひたるけしきなり、妻あやしみて其こゝろをとひけれ共、何事もなきぞ、只身の程の今更思ひしられてねもいらぬはなどばかりいひけれど、いかにもたゞごとにあらずと思てしひて問ければ、其時男の云樣、實は何事もなし、今更身の程のうきといふは、此程花山院殿の殿原わかきも老たるも七半を打て、毎日にことしてこゝろをゆかしあそびあひたるに、我其中に有ながら一文半錢だにも持ねば、其人數につらなる事なし、大かたそのゆくへしらぬ身なれば、此事のこのもしう打たきにては更になし、唯是程にもてなし興じあへるに、身のちからなくてそこばく多かる殿原の中に、我ひとりよそなるが思ひつゞくれば、是ならぬ、まして大事にもさぞかしと思ふに、今更身の程うたてくて、かくてはなにしに人に交るらんとおもふなりと打くどきいへば、妻打なきて、の給はすること尤そのいはれ有、誠にさる事なり、人に交るならひは、よき事にもあしき事にも、其事にもるゝは口をしきなり、明ん夜を待たまへ、わらはかまへて奔走せんと

宿、〇下略

〔古事記中應神〕故茲神〇天之日矛之女、名伊豆志袁登賣神坐也、故八十神雖欲得是伊豆志袁登賣、皆不得婚、於是有二神、兄號秋山之下氷壯夫、弟名春山之霞壯夫、故其兄謂其弟、吾雖乞伊豆志袁登賣、不得婚、汝得此孃子乎、答曰、易得也、爾其兄曰、若汝有得此孃子者、避上下衣服、量身高而釀甕酒、亦山河之物悉備設、爲宇禮豆玖云爾、

〔古事記傳三十四〕宇禮豆玖、〇中略豆。玖。は、今世に云賭豆玖なり、此を今京人は加氣呂久と云、呂久は賭の意か、其も聞えたれど、加氣豆久と云ぞ、古言に叶へる、うつほ物語初秋卷に、仲忠が帝と碁を打て負奉りたるところに、上與ありとおぼしめして、早う賭物豆玖の事はと仰せらるる云々、仲忠身に堪ぬべき事ならば仕奉り、堪ぬ事ならば其由をこそ奏し侍らめ、碁の負わざをせよと仰せられたるなり、遊仙窟に、賭酒また賭宿とあり、契冲、豆玖は都具能比の略語なりと云り、然もあるべし、即下文に不償其宇禮豆玖之物とあり、(中略)さて今世俗言に、カづく、錢金づくなど云もある、其らも皆豆久の意の轉れるなり、

〇按ズルニ、伊呂波字類抄ニスクトアルハ、ツクノ轉ニシテ、遊仙窟ノ傍訓ニ、サカツク、チツクトアル、ツクト同言ナルベシ、又古事記ニ、宇禮豆玖、空穗物語ニのりものづくナドモ見エタリ、サテツ。トス。ト相通ズルコトハ、次ヲスグトモツグトモ、消ヲケツトモ、ケストモイフガ如シ、

〔伊呂波字類抄須辭字〕賭ノリモノ 博弈

〔書言字考節用集七財〕賭カケモノ、与瑞、博弈取財也、

〔倭訓栞中編十八〕のりもの　賭物の義、かけ物も同じ、堵錢に棊の賭物は錢なり、すべて昔より、のり物、かけ物、皆錢也と院仰られしと見えたり、

〔譜雙五〕賭賽

北人以金銀奴婢羊馬爲博、以所獲男女、或買到人、謂之奴婢、貧者以杯酒勝負、不問局數、多者以十五籌爲率、先滿

論、七盗、八害、無ㇾ所ㇾ缺乎、

〔倭訓栞前編二十四波〕ばくち　新猿樂記に博打と書り、今ばくちうつといふは重言也、其人をばくちとのみいへることと、うつぼ物語に見えたり、

〔雅言集覽五波〕ばくち　ばくうち博打する者をいふ、博弈をいふ、

〔菅家後集〕慰二少男女一詩五言

往年見二窮子一、京中迷失ㇾ撲、裸身博弈者、道路呼二南助一、(中略)南大納言(南淵年名)子内藏助(眞臣)博徒今猶號二南助一、

〔宇治拾遺物語一〕今は昔丹後國に老尼ありけり、○中略博打のうちほうけてゐたるが見て、尼公は寒きに何わざえたまふぞといへば、○下略

〔宇治拾遺物語九〕昔ばくちの子の年若きが、目鼻一所に取り寄せたるやうにて、世の人にも似ぬありけり、

〔徒然草上〕博弈の負極りて、殘りなくうち入れんとせんにあひてはうつべからず、立ち返りつゞけて勝つべき時のいたれると知るべし、その時を知るをよき博弈といふなりと、或者まうしき、

〔東北院職人歌合〕九番　左　博打

おぼつかなたれにうちいれて月影の雲の衣をぬきてみゆらん

わがたてゝきほひはてたるいりかねのあはじとすまふ戀もするかな○中略

左わが身をつみて誰に打入てとよめる心ざしはかなくきこえてこれもひとつの姿なり、

〔倭訓栞前編十七底〕てだて　弈にいふは、史に博弈道と見えたり、

〔伊呂波字類抄天人事〕行博弈テダテ

〔伊呂波字類抄須雜物〕賭スヽ○博弈タ○

〔遊仙窟〕且取二雙六局一來、共二少府公一賭ㇾ酒、僕答曰、下官不ㇾ能ㇾ賭ㇾ酒、共二娘子一賭ㇾ宿、十娘問曰、若爲賭

戲、耽素有藝名、債者聞之而不相識、謂之曰、卿當不辨作袁彥道也、遂就局、十萬一擲、直上百萬、耽投馬絕叫、探布帽擲地曰、竟識袁彥道不、其通脫若此、

〔和漢三才圖會 十七 嬉戲〕樗蒲

按、樗蒲其製古今不同、今所用者、本出於南蠻矣、用厚紙作之、外黑內白、而有畫文、〇下略

〇按ズルニ、此ニ樗蒲トアルハ、カルタヲ云ヘルナリ、カルタノ事ハ、下編ノ博弈篇、及ビ遊戲部ノカルタ篇ヲ參看スベシ、

〔安齋隨筆 前編十四〕一チョボイチ　下賤の者の博弈をうつ事を、チョボイチと云は、樗蒲打の訛なり、雙六を打ッ事を樗蒲の戲といふ也、スゴ六は博弈の本也、故に古是を禁制せられし也、

〔倭名類聚抄 四 雜藝〕樗蒲采　陸詞云、樓音軒加利、樓子、樗蒲采名也、

〔伊呂波字類抄 加 雜物〕樗蒲采カリ

〔伊呂波字類抄 波 人倫〕博治ハクチ

〇按ズルニ、博治ハ博徒ノコトニシテ、卽チ博打ヲ云ヘルナルベシ、

〔空穗物語 藤原の君〕此みこよろづに思ほしさはぎて、おんみやうし、かむなぎ、はくち、京わらへ、おうな、おきな、めしあつめての給、

〔空穗物語 忠こそ〕世の中にかしこきばくちのせまりまどひたるをめして、〇下略

〔空穗物語 忠こそ〕こおとゞの御をひ、すけむねといひて、少將にて有ける、心よろしからず、ばくちふかうの物にて身のさうぞくなどはみなうちいれて、せんかたなくこもりゐたるを、〇下略

〔新猿樂記〕大君夫者、高名博打也、筒父擢傍、籌目任意、語條盡詞、謀計究術、五四衢利目、四三小切目、錐徹、一六難、呉流、叩子、平塞、鐵塞、要筒、金頭、定筒、八破、唐居、樋垂、品態、鑒論、猶勝宴丸道弘、卽四三一六、豐藤太、五四衢四、竹藤掾之子孫也、字尾藤太、名傳疑傳治、目細鼻扁、宛如物核、一心、二物、三手、四勢、五力、六

樗蒲

〔古今著聞集十二博弈〕天武天皇十四年、天皇御二大安殿一、喚二公卿等一有二博弈一、しかれども、そののり物をいましむるが故に、憲章その咎を設く、専ら禁ずべきことにこそ、

〔倭名類聚抄四雜藝〕樗蒲　兼名苑云、樗蒲一名九采、内典云、樗蒲、和名加利宇知、

〔箋注倭名類聚抄二雜藝〕按樗字、説文新附、玉篇廣韻、皆從レ手作レ摴、山田本蒲作レ蒱、注同、與二玉篇廣韻一合、然説文無二摴蒱字一、唐代國長公主碑、作二樗蒲一、蓋樗蒲本胡語、無二其字一、故古借二用樗蒲字一、後人從レ手、以別二樗櫟字、蒲蘭字一也、○中略皇國所レ爲摴蒲、雖レ不レ能レ得二其詳一、然其采蓋用二四木一、故萬葉集、折木四、切木四並訓二加利一、借二摴蒱一爲レ雁也、

〔伊呂波字類抄加人事〕摴蒲九采カリウチ

〔嬉遊笑覽四雜伎〕樗蒲といふものは和名抄にも出、令などにもあれど、こゝには盛りに行はれたるものとも見えず、されども萬葉集に、是を假名に用ひたる事見ゆれば、稀に此戯したる事なきにはあらず、

〔和漢三才圖會十七嬉戯〕摴蒱

五雜俎云、博戯自二三代一已有レ之、穆天子與二井公一博、三日而決、莊周曰、問二穀奚事一、則博塞以遊、今之摴蒱、是其遺法也、但所レ用之子、隨レ時不レ同、

〔樗蒲經略〕投二五木瓊梡玖骰一

博之流、爲二樗蒲一、爲二握槊一、爲二呼博一、爲二酒令一、體製雖レ不二全同一、而行レ塞勝負、取二決於投一則一理也、

〔関田耕筆四〕博弈○中略袁彦道が一擲號叫は樗蒲にて、博物志に老子入二胡作二五木一也、今人擲レ之爲レ戯といふもの也とぞ、こなたには傳はれりやいなや、いまだかうがへず、

〔晉書列傳八十三〕耽○袁氏字彦道、少有二才氣一、俶儻不レ羈、爲二士類所一レ稱、桓温少時游二于博徒一、資産俱盡、尚有レ負進、思二自振之方一、莫レ知レ所レ出、欲レ求レ濟二於耽一、而耽在レ艱、試以告焉、耽略無二難色一、遂變レ服懐二布幘一、隨レ温與二債主一

初見

〔箋注倭名類聚抄 雜藝 二〕按、大和物語所云波久衣宇、即簙弈之轉、即謂雙六也、故源君謂雙六爲簙弈是也、

○按ズルニ、大和物語ニハハクヤウトアリ、博弈ノ音便ナリ、此書ニ波久衣宇トアルハ一本ニ據レルモノニテ恐クハ誤ナラン、弈ハ羊益切ニシテ呉音ヤクナリ、ヤクヲヤウト轉ズルコトハヤクナシ益無ヲヤウナシト云フガ如シ、而シテエキヲエウト轉ズルコトハ未ダソノ例ヲ見ズ、

〔大鏡 六 内大臣道隆〕この御はくやうは、うちた丶せ給ひぬれば、ふたところながらはだかにこしからませ給ひて、夜半曉まであそばす、

〔雅言集覽 波 五〕ばくやう 博弈也、弈の呉音ヤクなるを音便にヤウといへり、

〔薩戒記 抄出〕一博弈二字事

二字ヲワケテ意得ル子細モアリ、但世俗ニハバクチト云、其外ニ別ニ訓之事不分明、ヨノツネ云ナラハス所、只博弈(ハクエキ)トノミ申來候歟、

〔隨意錄 七〕博弈之稱、博局戲、弈圍碁也、圍碁則古今無異焉、局戲則其術不一、古博以五木爲子、有梟盧雉犢塞、云、其法不傳、漢以來所謂博者、似今之雙陸、然其方亦不同焉歟、我方今之俗、賭錢投骰子以爭得失者、都稱博弈非也、斯所謂樗蒲者歟、今我國法禁此技也嚴矣、然奴隸役夫好而爲之、竟不可止也、

〔閑田耕筆 四〕博弈といふは、本朝も漢土もともにもろ〱の勝負の都名なるを、こなたにては殊に雙六をいへる歟、建保の職人盡歌合に、腹うちひろげて雙六うつさまを畫けり、

〔日本書紀 二十九 天武〕十四年九月辛酉、天皇御大安殿、喚王卿等於殿前、以令博戲、是日宮處王、難波王、竹田王、三國眞人友足、縣犬養宿禰大侶、大伴宿禰御行、境部宿禰石積、多朝臣品治、采女朝臣竹羅、藤原朝臣大島、凡十人、賜御衣袴、　壬戌、皇太子以下、及諸王卿幷四十八人、賜羆皮山羊皮、各有差、

兩はり、五兩負は十兩はる事也、三上とは上手に成事、四性とは思ひ入をつよく、氣性を丈夫にする事、五力とは餘り負たる時は無理をいひて力だてにて勝事、六論とは口論して言まくり向を騒せて競ひ取にする事、七盜とは人の目をくらまし盜む事、八害とは前の七ッを以てすれ共負たる時は、相手を切殺して取より外の仕方なしと書たり思ふに人を害せざれば己を害す、害なき事あたはず、非道のよくを貪ることの甚しき哉、

○按ズルニ、牛馬問ニ三上、四性トアルハ、三手四勢ノ誤ナルベシ、新猿樂記ニモ、三手四勢トアリテ伊呂波字類抄ニ同ジ、

〔下學集 態藝下〕博弈

〔運歩色葉集 葉〕博弈

〔節用集 波〕博弈

〔伊呂波字類抄 須 辭字〕賭スク ハクヤウノスク也

〔大和物語 上〕右京のかみむねゆきのきみ、三らうにあたりける人、はくやう○やう一本作えうをして、おやにもはらからにもにくまれければ、あしのむかんかたへゆかんとて、人の國へいきける、

〔倭訓栞 前編 二十四 波〕ばくち　大和物語に、はくやうをして○中略と見えたるも、はくえうにて、博弈にや、ばくちやうの義にや、

〔閑田耕筆 四〕季吟抄○大和物語抄に、人は供養をしてと佛事に見る註は非なるに論なし、一説博弈をしてと解して、博樣の字を充らる、博弈のことは實さかるべきを、本書やうと假名を誤るに心つかず、樣字を充られしは非歟、按るに、○中略弈字は入聲藥韻にして、えきともえふとも通はすべし、されば博弈の字のまゝ、はくえふの假名にて論なかるべし、

○按ズルニ、弈ハ入聲陌韻ナリ、藥韻ニアラズ、

博弈

博弈ハ局戲ナリ、古ハ錢財ヲ賭シ、輸贏ヲ爭フモノヲ概言セシガ如シ、而シテ此戲ノ國史ニ見エシハ、天武天皇ノ十四年、大安殿ニ御シ、王卿ヲシテ博戲セシメ、御衣、袴、獸皮ヲ賜ヒシヲ以テ始ト爲シ、之ヲ禁ゼシハ、持統天皇三年ニ、雙六ヲ禁斷セシヲ以テ始トス、大寶ノ初ニ、律令ヲ定ムルニ及ビ、嚴ニ之ガ制ヲ立テシヨリ以來、屢〻制禁アリシガ、其間自ラ弛緩ノ時ナキニアラズ、且ツ博弈ノ種類ニ由リ、賭物ノ品類ニ從ヒテ、必シモ之ヲ禁ゼズ、公卿モ公然之ヲ翫ビシ事アリ、而シテ博弈ノ種類ニハ雙六、意錢、攤等アリ、遊戲部ニ各〻其篇ヲ載セタリ、

名稱

〔釋日本紀 二十 祕訓〕令博戲〈ハクキ 音讀 私記〉

〔史記 三十 平準書〕富人或鬭鷄、走狗馬、弋獵、博戲、亂齊民、

〔史記 百二十九 列傳〕博戲惡業也、而桓發用之富、

〔倭名類聚抄 四 雜藝〕雙六　兼名苑云、雙六子一名六采〈今按、簙弈是也、簙音博、俗云須久呂久〉

〔箋注倭名類聚抄 二 雜藝〕按、簙、六簙、弈、圍棊、二物不同、〇中略 國俗併弈爲雙六名非、

〔段注說文解字 五篇上 竹〕簙局戲也、六箸十二棊也、〈古戲今不得其實、箸韓非所謂博箭、招魂注云、箟簬作箸、故其字从竹、〉从竹博聲、〈補各切、五部、經傳多假博字、〉古者烏曹作簙、

〔段注說文解字 三篇上 廾〕弈圍棊也、从廾亦聲、〈羊益切、古音在五部、〉論語曰、不有博弈者乎、〈陽貨篇文、博、說文作簙、〉

〔伊呂波字類抄 波 人事〕博弈〈ハクエキ 一心、二物、三手、四勢、五力、六論、七盜、八害、謂之博弈、ハクエキ〉

〔牛馬問 四〕いにしへ所謂博弈とは今卑俗のいふものに非ず、今下賤のなす所のものは甚變じて甚いやし、心あらん人の可愧可恐の事也、或草紙を見れば、曰博弈に一心、二物、三上、四性、五力、六論、七盜、八害といふ事有、一心とは心を押柄に持也、二物とは金錢を澤山に持て一兩負は貳

雜律、姦父祖妾者徒三年、注云、妾減一等、疏云、其奴及家人、姦主妾及主親妾、亦減一等、又條云、其家人及奴姦主者絞、

監守內姦

〔律疏名例〕凡應議者、○中略監守內姦他妻妾、○中略不用此律、

〔律疏名例〕凡犯八虐故殺人反逆緣坐、○中略監臨主守、於所監守犯姦盜略人、若受財而枉法者亦除名、姦謂犯良人妻妾、

〔唐律疏議雜二十六〕諸監臨主守於所監守內姦者、謂犯良人、加姦罪一等、

僧徒犯姦

〔令義解僧尼二〕凡僧尼、○中略殺人姦盜、謂若殺及姦家人奴婢、幷姦盜未得者、並依下條也、○中略並依法律付官司科罪、

〔令抄僧尼〕姦盜　名例律云、凡僧尼犯姦盜者、同凡人、義解云、僧尼犯姦盜於法最重、故雖犯當寺家人奴婢姦盜、即同凡人、謂三綱以下犯姦盜得罪、无別其奴婢姦盜、一准凡人得罪、○又見小野宮年中行事、法曹至要抄、

〔類聚國史八十七刑法〕弘仁十四年二月庚戌、流興福寺僧中源、康信、元興寺僧永繼等於遠江國、並緣婬犯也、

〔扶桑略記二十二宇多〕寬平八年九月廿二日、陽成太上天皇之母儀皇太后藤原高子、與東光寺善祐法師竊交通云々、仍廢后位、至于善祐法師、配流伊豆講師、

親屬相姦

〔律疏名例〕凡犯姧、（謂姧他妻妾、及與和者、○中略）免官

〔日本書紀孝徳二十五〕大化二年三月甲申、詔曰、○中略復有廢嫌己（○己下恐脱妻字）姧他、好向官司請決、假使得明三證、而俱顯陳、然後可諮、詎生浪訴、○中略如是等類、愚俗所染、今悉除斷、勿使復爲、

〔續日本紀十三聖武〕天平十一年三月庚申、石上朝臣乙麻呂、坐姧久米連若賣、配流土左國、若賣配下總國焉、十二年六月庚午、勅曰、○中略宜大赦天下、○中略姧他妻、○中略不在赦限、其流人穗積朝臣老、多治比眞人祖人、名負東人、久米連若女等五人、召令入京、○中略石上乙麻呂、○中略不在赦限、

〔日本書紀允恭十三〕二十四年六月、御膳羹汁、凝以作氷、天皇異之、卜其所由、卜者曰、有內亂、蓋親親相姧乎、時有人曰、木梨輕太子姧同母妹輕大娘皇女、因以推問焉、辭既實也、太子是爲儲君、不得罪、則流輕大娘皇女於伊豫、

姦父祖妾

〔律疏名例〕八虐

七曰、不孝、（謂○中略姧父祖妾、）

〔唐律疏議名例一〕十惡

十曰、內亂、（謂姦小功以上親、父祖妾、及與和者、）

疏議曰、父祖妾者、有子無子並同、

〔法曹至要抄上罪科〕一八虐事

七曰、不孝、○中略雜律云、姧父祖妻者徒三年、妾減一等、

〔唐律疏議雜二十六〕諸姦父祖妾、（謂曾經有父祖子者、○中略）絞、

姦婢

〔令集解七僧尼下〕雜律、姧官私婢者杖六十、姧他人（○據唐律、他人下恐脱家人妻三字）及官戶陵戶婦女者杖七十、

奴姦主

〔金玉掌中抄〕一八虐罪事

七曰、不孝、○中略

和姦

〔百練抄後冷泉四〕康平三年十二月十一日、宰相中將俊房、被免勅勘、依前齋院(娟子)强奸事、此一兩年籠居、

〔令集解僧尼下七〕雜律云、凡奸者、徒一年、有夫者徒二年、官戶、陵戶、家人奸良人者、各加一等、又條云、凡(〇下恐脫奴字)奸良人者、徒二年半、又條云、和奸本條、無婦女罪名者、與男子同、

〔日本書紀雄略十四〕二年七月、百濟池津媛、違天皇將幸、婬於石河楯、(舊本云、石河股合首祖楯、)天皇大怒、詔大伴室屋大連、使來目部張夫婦四支於木、置假庪上、以火燒死、(百濟新撰云、己巳年、蓋鹵王立、天皇遣阿禮奴跪來索女郞、百濟莊飾慕尼夫人女、曰適稽女郞、貢進於天皇、)

〔日本書紀雄略十四〕九年二月甲子朔、遣凡河內直香賜與采女、祠胸方神、香賜與采女既至壇所、(香賜此云鉏拕夫、)及將行事、奸其采女、天皇聞之曰、祠神祈福、可不愼歟、乃遣難波日鷹吉士將誅之時、香賜卽逃亡不在、天皇復遣弓削連豐穗、普求國內縣、遂於三島郡藍原執而斬焉、

〔日本書紀雄略十四〕十三年三月、狹穗彥玄孫齒田根命、竊奸采女山邊小島子、天皇聞以齒田根命、收付於物部目大連、而使責讓、齒田根命、以馬八匹大刀八口、祓除罪過、既而歌曰、耶麼能謎能(ヤマノベノコシマコユヱ)、故思麼古喩衞(ニヒトナラフウマノヤツゲハヲシケクモナシ)、比登涅羅賦、宇麼能耶都擬播、鳴思稽矩謀那斯、目大連聞而奏之、天皇使齒田根命資財露置於餌香市邊橘本之土、遂以餌香長野邑賜物部目大連、

〔日本書紀舒明二十三〕八年三月、悉劾奸采女者、皆罪之、

〔續日本紀光仁三十二〕寶龜三年十月壬子、中務大輔從五位上兼少納言信濃守菅生王、坐奸小家內親王、除名、內親王削屬籍、

有夫姦

〔法曹至要抄上罪科〕一强和姦事

雜律云、奸者徒一年、有夫者徒二年、

〔唐律疏議雜二十六〕諸姦者徒一年半、有夫者徒二年、

夜半、伴永基切破板垣、入來寢所、强婚實也者、使等勘問、永基强奸吉常妻仁町之由、進伏辨過狀已畢、
以前獄四等罪狀勘申如件
延喜十六年七月三日
右衛門府生竹田貞主
道守峯成
權少志錦春蔭
少尉藤原忠見
權佐橘朝臣公佐
左衛門府生國口恒世
高志常直
大志伴高成
權少尉源中正
東市正兼大尉常世基宗
權佐兼春宮大進平朝臣伊豆
別當參議右衛門督兼近江守源朝臣常時

〔左經記〕寬仁四年閏十二月廿六日壬申、故常陸守惟通朝臣妻、强奸彼國住人散位從五位下平朝臣爲幹、緣惟通母愁被召、日來候弓場、而今日於撿非違使廳爲問之令召、稱病由不出向云々、

〔左經記〕長元四年六月五日辛巳、右府〇藤原實資御消息云、彈正忠大江齊信、强奸齊院長官以康朝臣女子之事、於臺可令召問之由有宣旨、大臣、彈正式部官人於里第賜宣旨、是恒例也、然者召里第可仰下歟如何、令申云、臺官人於里第被仰、更不可有傍難者、

犯姦

姦ニハ、夫ナキ者ヲ姦スルアリ、夫アル者ヲ姦スルアリ、官戸、陵戸、家人、奴ノ良人ヲ姦スルアリ、良人ノ官戸、陵戸ノ婦女ヲ姦スルアリ、官吏ノ監守内ニ於テ姦スルアリ、親族相姦スル等ノ數種アリテ、罪ニ輕重アレドモ、強和ノ二姦ニ出デズ、和姦ハ彼此和同スルヲ云ヒテ、多クハ男女同罪ナリ、強姦ハ和セザルヲ姦スルヲ云ヒテ、男子ハ其罪和姦ヨリ重ク、婦女ハ罪ナシ、

強姦

〔法曹至要抄 上 罪科〕一強和姧事
雜律云、姧者徒一年、有夫者徒二年、強者各加一等、又云、和姧本條、無（○無、刊本作有、據集解改、）婦女罪名者、與男夫同、強者婦女不坐、
案之、強姧無夫之女、徒一年半、強姧有夫之女、徒二年半、若和姧者、女人同可得罪之、

〔唐律疏議 雜 二十六〕諸姦者、徒一年半、有夫者徒二年、部曲雜戸官戸姦良人者、各加一等、即姦官私婢者、杖九十、（奴姦婢亦同、○疏議略）姦他人部曲妻、雜戸官戸婦女者、杖一百、強者各加一等、折傷者各加鬪折傷罪一等、

〔日本後紀 八 桓武〕延暦十八年六月丁丑、遣左衞士志矢田部常陸麻呂於平城、捕内竪雀部廣道、決杖一百、以強姧法華寺尼也、

〔政事要略 八十一〕撿非違使
白丁縣犬養永基、年三十三、（左京二條二坊、戸主正六位下縣犬養宿禰房實男、）
右今年三月七日、左兵衞道吉常、進愁狀云、吉常去年十月廿六日、被（○被下恐脱差字）府使、罷向伯耆國、而間件永基、婚吉常妻國仁町者、仁町進申文云、巳夫吉常被差府使、罷去伯耆國之間、今年正月三日

〔續日本紀七元正〕靈龜二年五月丙申、勅、太宰府佰姓家、有藏白鑞、先加禁斷、然不遵奉、隱藏賣買、是以鑄錢惡黨、多肆姧詐、連及之徒、陷罪不少、宜嚴加禁制、無更使然、若有白鑞、搜求納於官司、

〔本朝文粹二意見封事〕意見十二箇條　善相公清行

一請禁諸國僧徒濫惡及宿衞舍人凶暴事○中略

諸國百姓、逃課役、逋租調者、私自落髮、猥著法服、如此之輩、積年漸多、天下人民、三分之二、皆是禿首者也、此皆家蓄妻子、口啖腥膻、形似沙門、心如屠兒、况其尤甚者、聚爲群盜、竊鑄錢貨、不畏天刑、不顧佛律、若國司依法勘糺、則霧合雲集、競爲暴逆、

坐降罪一等、

赦免

〔類聚國史八十六政理〕大同四年四月癸卯、詔曰、〇中略宜可大赦天下、〇中略私鑄錢、强竊二盜、及常赦所不免者、咸皆赦除、

〔日本後紀二十四嵯峨〕弘仁五年八月甲子、免囚人日下部土方、補木工長上、土方者、攝津國武庫郡人、以私鑄錢、著鏁役於堀河、頗善工巧、仍棄瑕取才、

不赦免

〔續日本紀六元明〕靈龜元年正月癸巳、詔曰、今年元日、皇太子始拜朝瑞雲顯見、宜大赦天下、但犯八虐、私鑄錢、盜人、常赦所不原者、並不在赦限、

〔續日本紀七元正〕靈龜元年九月庚辰、受禪卽位于大極殿、詔曰、〇中略大辟罪已下、〇中略咸從赦除、但謀殺殺訖、私鑄錢、〇中略並不在赦限、

〔續日本紀八元正〕養老二年十二月丙寅、詔曰、〇中略朕恭奉爲太上天皇、〇元明思降非常之澤、可大赦天下、〇中略私鑄錢并盜人及八虐、常赦所不原、咸赦除之、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年六月庚午、勅曰、〇中略宜大赦天下、〇中略私鑄錢作具既備、〇中略不在赦限、

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年四月甲寅、詔、〇中略大赦天下、〇中略私鑄錢、及從者著鈦、長役鑄錢司、强盜竊盜、常赦所不免、不在赦限、

〔類聚國史八十六政理〕延曆十八年六月丙申、詔曰、〇中略其在役見徒、及天下見禁囚等、罪無輕重、並宜赦除令得自新、但私鑄錢、謀殺故殺、〇中略不在赦限、

雜載

〔令義解九捕亡〕凡糺捉盜賊者、〇註略所徵倍贓、〇註略皆賞糺捉之人、〇中略卽官人非因撿按、而別糺捉、謂官司於其所部、非因撿按而別自糺捉者、若捜捕鑄錢、仍得盜贓者、其事相因、不合與賞、其非所部官司者、一同凡人之例、不依官司之法、幷共盜及知情主人首告者、亦依賞例、

〔律疏名例〕凡彼此俱罪之贓、謂計贓爲罪者、〇疏略及犯禁之物則沒官、〇疏略若盜人所盜之物、倍贓亦沒官、(中略)若有糺告之人、應賞者依令與賞、若私〇鑄〇錢〇事發、所獲作具及錢銅、或違法殺馬牛等肉、如此之類、律令無文者、其肉及錢、私家合有、准如律令、不合沒官、作具及錢不得仍用、毀訖付主、罪依法科、

減刑

〔類聚三代格八〕太政官符
應沒私鑄錢者田宅資財事
右撿非違使起請偁、謹案法條、無可沒入私鑄錢者財物、而使等或必沒其舍宅資財、雖非法意、行來成例、望請編之朝章、嚴遏其奸者、右大臣〈藤原基經〉宣、奉勅依請、
貞觀十六年十二月廿六日〈○又見三代實錄〉
〔西宮記臨時十〕成勘文事〈附四名權　役舉勘文〉
撿非違使式云、私〈○私下恐脫鑄字〉錢之輩、停送鑄錢司者、着鈦與盜人同、令沒入資財田宅、
〔延喜式刑部二十九〕凡私鑄錢、其作具、幷錢銅等物、皆沒官、
〔唐律疏議雜二十六〕諸私鑄錢者、流三千里、作具已備未鑄者、徒二年、作具未備者、杖一百、〈○疏議略〉若磨錯成錢、令薄小、取銅以求利者、徒一年、
〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年十一月丙寅、私鑄錢人王淸麻呂等四十人、賜姓鑄錢部、流出羽國、
〔三代實錄淸和二十九〕貞觀十八年六月廿七日壬申、元興寺僧德操、元右京人長背村主、與日奉春岑、同謀私鑄錢、推問事迹、德操不承伏、雖然衆證灼然、須依格著鈦役使、有勅曰、村主、本是緇徒、殊處中流、是故配流伊豫國、
〔續日本後紀仁明八〕承和六年四月癸丑、遣右近衞將監正六位上阪上大宿禰當宗、近衞及俘夷等於伊勢國、索捕名張郡山中私鑄錢群盜凡十七人、進鑄錢作具及錢等、
〔三代實錄淸和二十七〕貞觀十七年十二月庚戌朔、大和國私鑄錢者、往々而在、令國宰追捕、
〔續日本紀元明五〕和銅五年九月己巳、詔曰、〈○中略〉宜大赦天下、其强竊二盜、常赦所不免者、並不在赦限、但私鑄錢者、降罪一等、
〔續日本紀元明六〕和銅七年六月癸未、大赦天下、〈○中略〉其私鑄錢、及竊盜强盜、不在赦限、但鑄盜之徒、合死

又銅錢並行、比奸盜逐利、私作濫鑄、紛亂公錢、自今以後、私鑄銀〇銀字恐衍錢者、其身沒官、財入告人、行濫逐利者、加杖二百、加役常〇常恐當誤徒、知情不告者、各與同罪、

〔續日本紀五元明〕和銅四年十月甲子、勅曰、〇中略凡私鑄錢者斬、從者沒官、家口皆流、五保知而不告者、與同罪、不知情者減五等罪之、其錢雖用、悔過自首減罪一等、或未用自首免罪、雖容隱人、知之不告者、與同罪、或告者、同前首法、

〔類聚三代格八〕太政官符

定私鑄錢首從幷家口罪名事

首處遠流、從處徒三年、家口處徒二年半、

以前得明法曹司解偁、被右大辨官宣偁、刑部省解偁、和銅四年格云、私鑄錢者斬、從者沒官、家口皆流者、天平勝寶五年官符偁、奉勅、私鑄錢人、罪致斬刑、自今以後、降一等處遠流者、今首已會降、從幷家口猶居本坐、首從之法、罪各合減降、輕重相倒、理不可然、謹請官裁者、宜定罪法中上者、謹案賊盜律云、謀反者皆斬、父子沒官、祖孫兄弟遠流、名例律云、共犯罪者、以造意爲首、隨從減一等、又云、二死三流、各同爲一減者、今比校輕重、仍從者減首一等處徒三年、家口減徒一等處徒二年半、

寶龜十一年十一月二日〇又見續日本紀

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年、是年民私鑄錢者、先後相尋、配鑄錢司驅役、並皆著鈴於其鈦、以備逃走、聽鳴追捕焉、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應定罪人配役年限事〇中略

其私鑄錢、不論首從、令鑄錢使終身役之、

弘仁十三年二月七日

行人間、左遷多褹島掾、告人上足弟矢代、任但馬目、
〔日本紀略 桓武〕延暦十四年五月己巳、右京人上毛野兄國女、流土左國、以自稱諸天、妖言惑衆也、
〔日本後紀 桓武八〕延暦十八年二月乙未、流陸奥國新田郡百姓弓削部虎麻呂妻丈部小廣刀自女等於日向國、久住賊地、能習夷語、屢以謾語騒動夷俘心也、
〔中右記〕嘉承元年十二月七日、早旦撿非違使資清、爲別當使入來云、近隣可有追捕之事、可用意者、乍驚閉東門相待之處、富小路東小屋也、是年來居住老女、或稱祭蛇、或稱祭狐、好色諸女、深信此事、誠以成市、詐取人寶貨、聞已及高、今日已被追捕云々、

雜載

〔日本書紀 孝徳二十五〕大化二年三月甲申、詔曰、〇中略復有見言不見、不見言見、聞言不聞、不聞言聞、都無正語正見、巧詐者多、〇中略如是等類、愚俗所染、今悉除斷、勿使復爲、
〔日本書紀 天智二十七〕九年正月戊子、宣朝庭之禮儀與行路之相避、復禁斷誣妄妖僞、

附私鑄錢

錢ハ必ズ官ニテ鑄ル所ニシテ、私ニ鑄造スルコトヲ許サズ、故ニ之ヲ鑄ントシテ、作具未ダ全備セザルモ猶ホ罪アリトス、故ニ私鑄ノ者ハ、天下ニ大赦スル時モ多クハ原サレズ、サテ私鑄錢ノ罪ハ、唐ノ雜律ニ載セタレド、我邦ニテハ雜律ノ傳ハラザレバ、其輕重ヲ知ルニ由ナケレドモ、元明天皇ノ和銅二年ニ法ヲ立テヽ、私鑄錢ノ者ヲ沒官シ、四年ニ更ニ其禁ヲ嚴ニシ、首ハ斬シ從ハ沒官シ、家口ハ皆流スル制ヲ立テ、孝謙天皇ノ天平勝寶五年ニ、首ハ一等ヲ減ジテ遠流ニ處シ、從ト家口トヲ舊ノ如クシ、光仁天皇ノ寶龜十一年ニ、從ヲ徒二年半トセリ、而ルニ嵯峨天皇ノ弘仁十三年ニ、私鑄錢ノ者ヲバ首從ヲ論ゼズ著鈦シテ、鑄錢司ニ於テ長役スル事トセリ、

處刑

〔續日本紀 元明四〕和銅二年正月壬午、詔國家爲政、兼濟居、先去虚就實、其理然矣、向者頒銀錢、以代前錢、

（武勇者也）奉付之、但小鴨基康不從云々、又美作國小々打取了、昨日上使者於京都、爲入院見參云々、奉仰源氏相俱可伐平氏云々、事次第奇異也、仍爲後記之、

妄認奴婢及財物

〔法曹至要抄（中雜事）〕一妄認公私田幷良人家人奴婢及財物等事

戸婚律云、妄認公私田、若盜貿易賃租者、一段以下、笞五十、二段加一等、過杖一百、五段加一等、罪止徒二年半、疏云、謂妄認公私田、稱爲已地、詐僞律云、妄認良人爲奴婢家人妻妾子孫者、以略人論減一等、妄認家人、又減一等、妄認奴婢及財物者、准盜論減一等、

按之、妄認公私田並良人家人奴婢及財物等之類者、改正其贓、宜被行所當之科、

妖書妖言

〔律疏（賊盜）〕凡造妖書及妖言遠流、（造、謂自造休咎及鬼神之言、妄說吉凶、涉於不順者、謂傳妖書及妖言者、謂構成恠異之書、詐爲鬼神之語、休、謂妄說他人及己身有休徵、咎、謂妄言國家有咎惡、觀天畫地、詭說災祥、妄陳吉凶、並涉於不順者、）傳用以惑衆者亦如之、（謂非自造、傳用妖言妖書、以惑三人以上、）傳、謂傳言、用、謂用書、其不滿衆者、減一等、（謂被傳惑者、不滿三人、若是同居、不入衆人之限、此外一人以上、雖不滿衆、合徒三年、）言理無害者、杖六十、（謂雖說變異、無損於時、若預言水旱之類、）即私有妖書、雖不行用、杖八十、（謂前人舊作、衷私相傳、非己所制、雖不行用、仍得此坐、）言理無害者、笞四十、（謂妖書言理、無害於時者、）

〔續日本紀（聖武十）〕天平元年四月癸亥、勅、（中略）○妖訛書者、勅出以後、五十日内首訖、若有限内不首、後被糺告者、不問首從、皆咸配流、其糺告人、賞絹三十匹、便徵罪家、

〔續日本紀（聖武十）〕天平二年九月庚辰、詔曰、（中略）○安藝周芳國人等、妄說禍福、多集人衆、妖祠死魂、云有所祈、又近京左側山原、聚集多人、妖言惑衆、多則萬人、少乃數千、如此之徒、深違憲法、若更因循、爲害滋甚、自今以後、更勿使然、

〔續日本紀（孝謙二十）〕天平寶字元年七月甲寅、勅曰、比者頑奴、（謂黃文王等）○潛圖反逆、皇天不遠、羅令伏誅、民間或有假託亡魂、浮言紛紜、擾亂鄉邑者、不論輕重、皆與同罪、普告遐邇、宜絕妖源、

〔續日本紀（淳仁二十二）〕天平寶字四年五月戊戌、右大舍人大允正六位下大伴宿禰上足、坐記災事十條、傳

得此坐也、

〔唐律疏議 二十五 詐僞〕諸詐疾病有所避者、杖一百、若故自傷殘者、徒一年半、(有避無避等、雖不足爲疾殘、而臨時避事者皆是、○疏議略)其受雇倩爲人傷殘者、與同罪、以故致死者、減鬪殺罪一等、(略)

詐稱親屬死

〔法曹至要抄 上 罪科〕一八虐事

七曰、不孝、(○中略)

詐僞律云、詐稱祖父母父母死、以求假及有所避者、徒一年半、

〔唐律疏議 二十五 詐僞〕諸父母死應解官、詐言餘喪不解者、徒二年半、若詐稱祖父母父母及夫死、以求假及有所避者徒三年、伯叔父母姑兄姊徒一年、餘親減一等、若先死詐稱始死及患者、各減三等、

詐稱官名

〔日本書紀 三十 持統〕三年七月辛未、流僞兵衛河內國澁川郡人柏原廣山于土左國、

〔唐律疏議 二十五 詐僞〕諸詐假官假與人官、及受假者、流二千里、(謂僞奏擬及詐爲省司判補、或得他人告身施用之類、○疏議略)其於法不應爲官、(謂有罪譴未合仕之類)而詐求得官者、徒二年、(○疏議略)若詐增減功過年限、而預選擧、因之以得官者、徒一年、流外官各減一等、求而未得者、又各減二等、(下條準此)

詐稱人名

〔續日本紀 二十七 稱德〕天平神護二年四月甲寅、有一男子、自稱聖武皇帝之皇子石上朝臣志斐氐之所生也、勘問果是誣罔、詔配遠流、

〔續日本紀 三十五 光仁〕寶龜十年六月辛酉、周防國周防郡人外從五位上周防凡直葦原之賤易(○易一本作男)公、自稱他戶皇子、誑惑百姓、配伊豆國、

〔玉海〕壽永三年(○元曆元年)二月二日辛酉、傳聞伯耆國美德山有稱院(○後白河)御子之人、生年廿歲、未元服云云、件宮資隆入道外孫云々、幼稚之時、九條院(○近衞后藤原呈子)被奉養育、其後依無衆生在外祖父家、然間生年十五之年、無音逐電、人不知其意趣、卽向大和國、暫隨逐石川冠者、(其時既成親子云々)其後先到伯耆大山、次移住美德山、猶稱成親卿子、而平氏被追落之後、顯其實稱院御子、已伐取伯耆半國、海陸業成、(彼國有勢)

謀書

〔法曹至要抄上罪科〕一謀書事

詐僞律云、詐爲官私文書、増減以求財賞者、準盜論、案之、詐作諸司諸國幷私家返抄者、最可準盜論之、

〔唐律疏議詐僞二十五〕諸詐爲官私文書、及増減、文書、謂券抄及簿帳之類、求財賞及避沒入備償者、準盜論、贓輕者、從詐爲官文書法、若私文書止從所欺妄爲坐、

詐欺取財

〔政事要略六十〕詐僞律云、詐欺官私、以取財物者、準盜論、注云、詐欺百端皆是、若○詐僞以下七字、據本書五十四補、監主詐取、自依盜法、疏云○疏云二字、據本書五十九補、有官者除名、倍贓如法、未得者減二等、○又見類聚三代格、令集解、

〔唐律疏議詐僞二十五〕諸詐欺官私、以取財物者準盜論、詐欺百端皆是、若監主詐取者、自從盜法、未得者、減二等、下條準此、○疏議略知情而取者、坐贓論、知而買者、減一等、知而爲藏者、減二等、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十二月廿三日癸酉、先是右京人散位從七位下大石忌寸福麻呂、私雕官印、捺僞官符、賣官地子穀百五十斛、欺取其直、左兵衞阿刀澤雄、錢十二貫文、左衞門門部園部禪師麻呂、錢六貫文、刑部省斷云、福麻呂、雕官印捺僞官符、其罪當近流、欺取直錢、當遠流、相准輕重、雖有遠近、至減一等、俱是徒三年也、所犯在降前、又減一等、徒二年半、以從七位下當徒一年、又以正八位上當徒一年、餘半年徒、官當不盡其官、留官可收贖銅十斤、仍須一年之後、降先位二等敍正八位上、

詐爲瑞應

〔政事要略二十九〕詐僞律云、詐爲瑞應者、徒一年、瑞應條流者、大瑞及上中下瑞、今但云詐爲瑞應、即明不限大小、但詐爲者、即徒一年、若已奏聞者、自從上書詐不以實論、若災祥之類、而所司不以實對者、加三等、災、謂祲沴、祥、謂休徵、所司不以實對者、謂應凶言吉、應吉言凶、加三等、徒二年半、稱之類者、此外有善惡之事、勅問而所司不以實對者、亦加三等、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年七月辛丑、上總國獻馬前二蹄似牛、以爲祥瑞、覗之人功之所刻也、國司介從五位下巨勢朝臣馬主等以下五人、並坐解任、本主天羽郡人宗我部虫麻呂、決杖八十、

詐稱疾病

〔令集解八僧尼〕詐僞律、凡詐疾病有所避、杖一百、自身傷殘在安反徒一年、注云、有所避無所避等、但傷殘

捕、及詐追攝人者、徒一年、（未執禁者、各減三等、○疏議略）其應捕攝、無官及官卑詐稱高官者、杖八十、卽詐稱官、及冒官人姓字、權有所求爲者、罪亦如之、

〔文德實錄十〕天安二年四月癸巳、先是刑部大丞正六位上石川朝臣宗主、大錄正七位上難波連淸宗等、詐稱官宣作省符、放免罪人佐伯官人等、是日下兩人於刑官、鞠定其罪也、

奏事不實

〔法曹至要抄罪科上〕一奏事不實事

詐僞律云、奏事上書、詐不以實者、徒二年、

案之、奏事不實之科、徒二年者也、（○又見金玉掌中抄）

〔唐律疏議二十五詐僞〕諸對制及奏事上書、詐不以實者、徒二年、非密而妄言有密者、加一等、（對制、謂親見被問、奏事、謂面陳、若附奏亦是、上書、謂書奏特達、詐、謂知而隱欺、及有所求避之類、○疏議略）若別制下問案推（無罪名謂之問、未有告言謂之案、已有告言謂之推）、告上不以實者、徒一年、其事關由所司、以奏聞、而不實者、罪亦如之、未奏者各減一等、

〔文德實錄九〕天安元年七月甲辰、河內越中等國司、言上不堪佃田、依不據實、下秋官而斷罪也、　九月辛亥、大和國司等、言上不堪佃損田、據不實、下秋官而斷罪、

〔百練抄四後一條〕長元四年十月十七日、出雲國言上、去八月十六日子剋、杵築社無故顚倒之由、

或記云、閏十月三日有御卜、兵革疫疾者、寶殿中奉納御正體宮、出顚自寶殿御坐顚倒大殿上云々、五年九月廿日、出雲守橘俊孝勘罪名、配流佐渡國、是杵築社顚倒、幷有神託由奏聞、仍遣實檢使之處、皆無實之故也、

或記云、稱託宣授官位於人云々、

檢使不實

〔政事要略八十一〕詐僞律有詐病條云、若實病死及傷、不以實驗、以故入人罪論、

〔唐律疏議二十五詐僞〕諸有詐病及死傷受使檢驗不實者、各依所欺減一等、若實病死及傷、不以實驗者、以故入人罪論、

詐僞官文書

〔法曹至要抄　上罪科〕一作官文書事

詐僞律云、詐爲官文書者、杖一百、注云、符移解牒之類、

案之、詐作官文書之時、律設杖一百之科矣、

〔唐律疏議　二十五詐僞〕諸詐爲官文書、及增減者、杖一百、準所規避徒罪以上、各加本罪二等、未施行各減一等、（○疏議略）卽主司自有所避、違式造立及增減文案、杖罪以下、杖一百徒罪以上、各加所避罪一等、（造立卽坐）若增減以避稽者、杖八十、

〔續日本紀　三十九桓武〕延曆七年五月庚午、中務大錄正六位下中臣丸連淨兄詐作印書、請受庫物、前後非一、事已發露、欲加推勘、聞而自經矣、

〔三代實錄　三十九陽成〕元慶五年四月廿八日乙巳、先是去年四月八日、大膳史生矢田部氏永、姧私作諸司收文、偸取淡路國鹽代米五十斛餘、自此姧作備前讃岐等未收文之事發露、出納諸司、坐此事下獄者衆、而十二月四日大赦天下、皆得出獄、少監物從六位下藤原朝臣安養、今年二月十五日左遷備後權掾、民部大錄正六位上國瀨十一也、（○國以下五字恐有誤）同日左遷安藝權掾、主計大允正六位上水口宿禰康宗、三月八日左遷越中權掾、中務少錄從七位下大石林繼成、同日左遷豐前權大目、中務史生從八位下坂本臣勝守、爲下總史生、民部史生大初位下船連福雄、爲紀伊史生、大初位下珍努縣主三津雄、爲參河史生、主計史生從八位上置始連繩繼、爲隱岐史生、從六位下膳臣常道、爲伊豆史生、皆是同坐左降、大膳史生正八位下矢田部氏永、赦前死於獄中、彼月不書、故追記之、

詐稱官命捕兇人

〔法曹至要抄　上罪科〕一詐稱官所遣搦人事

詐僞律云、詐爲官、及稱官所遣、而捕人者、徒二年、

按之、人詐或稱使廳使、或號所司、恣搦取人之時、所設之文也、

〔唐律疏議　二十五詐僞〕諸詐爲官、及稱官所遣而捕人者、流二千里、爲人所犯害、（犯其身及家人親屬財物等）而詐稱官

僞造神璽內外印

〔續日本紀 二十 淳仁〕天平寶字三年七月庚辰、左京人中臣朝臣楫取、詐造勅書、註誤民庶、配出羽國柵戶、

〔律疏 名例〕八虐

六曰、大不敬、謂○中略 盜及僞造神璽內印、神璽者、謂依令踐祚之日、中臣奏天神之壽詞、忌部上神璽之鏡劒、

〔法曹至要抄 上 罪科〕一八虐事

六曰、大不敬、○中略 詐僞律云、僞造神璽者斬、造內印者絞、

○按ズルニ、此ニ謂フ所ノ神璽ノ事ハ、帝王部卽位篇ニ詳ニセリ、

〔唐律疏議 二十五 詐僞〕諸僞造皇帝八寶者斬、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子寶者絞、皇太子妃寶流三千里、僞造不錄所用、但造卽坐、

疏議曰、皇帝有傳國神寶、有受命寶、皇帝三寶、天子三寶、是名八寶、依公式令、神寶寶而不用、受命寶封禪則用之、皇帝行寶報王公以下書則用之、皇帝之寶慰勞王公以下書則用之、皇帝信寶徵召王公以下書則用之、天子行寶報蕃國書則用之、天子之寶慰勞蕃國書則用之、天子信寶徵召蕃國兵馬則用之、皆以白玉爲之、寶者印也、印又信也、以其供御、故不與印同名、八寶之中、有人僞造一者卽斬、其太皇太后、皇太后、皇后、皇太子寶、僞造者絞、皇太子妃寶僞造者、流三千里、太皇太后以下寶、皆以金爲之、並不行用、

注云、僞造不錄所用、謂寶既金玉爲之、僞造者不必皆須金玉爲之、亦不問用與不用、造者卽坐、

〔續日本紀 五 元明〕和銅四年十二月壬寅、大初位上丹波史千足等八人、僞造外印、假與人位、流信濃國、

〔續日本紀 三十二 光仁〕寶龜三年十月庚午、左大舍人從六位下石川朝臣長綱等、僞造外印行用、並依法配流、

〔三代實錄 二十 淸和〕貞觀十三年十月廿三日乙丑、太政官論奏曰、略○中 左京人大初位下佐伯宿禰彌惠僞造內印、刑部省斷曰、略○中 彌惠罪應絞刑、詔絞刑宜減一等處之遠流、

古事類苑

法律部十

上編

詐僞

神璽內印ヲ僞造スルハ、詐僞中ニ於テ殊ニ重罪トシテ、八虐ノ大不敬ニ屬ス、其餘詐リテ詔書ヲ爲リ、或ハ虛僞ヲ以テ自ラ官ヲ假リ、人ニ官ヲ假シ、及ビ詐假ノ官ヲ受ケ、又面リ事ヲ奏シ、及ビ上書スルニ、事ノ不實ナルヲ知リテ隱欺ヲ爲シ、或ハ妄リニ功賞ヲ求メ、罪戾ヲ廻避シ、官ノ文書ヲ詐爲シ、自ラ官人ナリト詐リ、及ビ官ヨリ遣ス所ナリト稱シテ人ヲ捕ヘ、官私ヲ詐欺シテ財物ヲ取リ、官私ノ劵抄ヲ詐爲シ、簿帳ヲ增減シ、妄リニ錢財賞物ヲ求メ、詐リテ瑞應ヲ爲リ、疾病ヲ詐リテ事ヲ避クル等ノ類、皆詐僞ノ罪トス、又妖書妖言アリ、亦詐僞ノ類ナリ、卽チ佐異ノ書ヲ構成シ、詐リテ鬼神ノ語ヲ成シ、妄リニ他人及ビ己ガ身ノ休徵、及ビ國家ノ咎惡ヲ說キ、或ハ其妖言ヲ傳ヘ、妖書ヲ用キテ衆ヲ惑ス等ニテ國ノ大禁タリ、猶ホ神祇部神託篇ヲ參考スベシ、

詐僞詔書位記

〔法曹至要抄上罪科〕一作詔書幷位記事

詐僞律云、詐爲詔書者遠流、說者云、太上天皇宣亦同、詐僞律又云、詐假與人官、及受假者、近流者、

案之、詐爲宣旨院宣之者、可處遠流、又作位記之人、幷受之人、共可配近流矣、

〔唐律疏議二十五詐僞〕諸詐爲制書、及增減者絞、口詐傳、及口增減亦是、未施行者減一等、施行、謂中書覆奏、及已入所司者、雖不關由所司、而詐傳增減、前人已承受者、亦爲施行、餘條施行準此、○疏議略其收捕謀叛以上、不容先聞而矯制、有功者奏裁、無功者流二千里、

古事類苑

法律部十

上編

詐僞

政請印、勤之（左大弁）、右兵衞尉光保解却見任、

〔百練抄七近衞〕久安六年四月十五日、賀茂祭、内大臣（○源雅定）棧敷、與家成卿棧敷鬪亂、

〔百練抄七近衞〕久壽二年二月一日、左大臣（○藤原賴長）於途中爲左衞門尉信兼被射危、咎無禮之間、及鬪亂也、

〔吉記〕安元二年六月七日庚辰、後聞、官史生等、於土御門萬里小路邊會合、飲酒之間、以礫數度打之、是民部大夫忠光所爲也、彼住宅對也、史生等爲陳不誤之由行向之間、各被陵礫、此中大夫史雑色久信父子被殺害了、官文殿久高被陵礫、希存命云々、其後彼忠光所從等追捕會合宅取雑物云々、久信依爲厨家氷沙汰人、殿下已下所々氷闕怠之、自官訴申、仍被仰使廳有沙汰、近代狼藉、雖其儀異、晝夜不絶歟、

ヅキヲ文行ニナゲカケタリケレバ、文行タチヲヌカントシケルヲ、河内前司重通ガ父大力ニテヌカセザリケリ、正輔ガ一族三人文行ヲトラヘントシケレバ、文行庭ヘヲドリオリタリケレバ、文行ガ郎等、君酔給ニケリトテ、矢ヲハゲテ向ヒケレバ、正輔ガ方人エトラヘズ、文行ヤナグヒオヒテ、法住寺ノ内ニテ馬ニノリテイデニケリ、別當マキリテ申ウケラレケレバ、タビテケリ、三日政所ニ候テユリニケリ、文行イヒケル、坂東ノマウザナリセバ、カクハイタサヾラマシ、京ハクチヲシキ所ナリト云テ、東國ニクダリケル、其時コノタスケタリシ郎等ヲコロシテケリ、彼日ノ事ヲ東國ノ人ニキカセジトナルベシ、コノ事ヲヨノ人ヨシアシハイマダサダメズトゾ、

〔中右記〕大治五年十一月十三日壬子、去夜夜半騎兵廿人許、歩兵四五十人許、亂入前對馬守源義親宿所鴨院南町也、殺害了、但死其庭者十三人、逃脱者廿人許云々、件義親去年九月從坂東國參洛、而依院○白河御氣色所祇候大殿○藤原忠實也、仍寄宿鴨院中也、於京中有如此事、誠可謂濫惡歟、不知誰人所爲、但件義親□生未有一定也、後朝見物者千萬、穢氣依件事爲有其定、依有召上達部參集院殿上、予□召有所勞不能馳參也、關白殿不令參給云々、　十五日　裏書

下人云、一夜殺害義親事、巳以發覺、是撿非違使大夫尉光信所爲云々、仍付撿非違使盛道被召下手人者、此事如何不知、内心凡本非敵人、又無相論事、是何故哉、但先日與大津義親合戰、件光信四條大宮宅門前也、若思件事企此濫惡歟、或人云、光信去年十一月十二日亂入山階寺中追捕上件僧房、今年十二月十二日亂入殿下御領鴨院中、殺害義親、倩思兩度之惡事、自及罪過之我身也、

十九日戊午、大夫史政重談云、昨日右大臣○藤原家忠被下宣旨也、傳宣頭辨也、宣旨詞云、左衞門尉源光信、於洛中稱義親者幷郎從殺害了、宜令明法博士等勘申其罪名者、光信身爲撿非違使、本又非敵人、是先日於光信四條大宮門前、義親與大津義親成鬪亂之故云々、依一旦之事及罪名之咎、爲我身誠無益、　廿三日、今夕有流罪事、中納言師賴行云々、源光信、從類三人、伊豆藤原通硫、安房不知姓實信、常陸清原近宗、則有結

出了、後聞被行流罪、源明國（佐渡）同從、不知姓永澄（土左）同從、紀實安（伊豆）

〔百練抄（五鳥羽）〕永久四年三月十三日大學助高行配流安藝國、於途中刃傷參議信通從者之故也、

〔百練抄（八高倉）〕嘉應二年七月三日、越前守資盛、於路頭遇攝政、（○藤原基房）及恥辱、攝政賜下手輩於撿非違使、　十月廿一日、依御元服定攝政參內之間、於路頭勇士有狼藉事、切前驅等本鳥、是先日資盛之會稽也、依此事定延引、（○又見玉海、源平盛衰記、平家物語、）

保辜

〔法曹至要抄（上罪科）〕一保辜事

鬪訟律云、保辜者、手足毆傷人限十日、以他物毆傷者廿日、以刃及湯火傷者卅日、折跌支體及破骨者五十日、限內死者、各依殺人論、其在限外、及雖在限內、以他故死者、依本毆傷法、註云、他故、謂別增餘患而死者、上文註云、毆傷不相須、餘條毆傷及殺傷各准此、

按之、毆傷殺傷之類、無問故鬪謀殺、皆囚之可禁、保辜若限內死者、各可依殺人之本法、其保辜之間可禁、（法上禁見）若限內平復者、以毆傷罪可論、

〔清律例會通新纂（二十六刑律）〕保辜限期（保養也、保辜謂毆傷人未至死、當官立限以保之、保人之傷正所以保己之罪也、（中略）凡毆人傷重或可醫治平復、或即因傷而死、及成殘廢篤疾、俱不可定、官司驗明受傷之處、或手足他物、或金刃湯火、覆問明白、將被傷時刻明立文案、勒限保辜、責令下手犯人延醫調治、俟限滿之日定罪發落、故曰保辜、）

雜載

〔貞信公記〕延長二年十一月四日、依仰定受領到任事、未有可許、春日祭中宮使師國朝臣、馬寮當季朝臣家走馬乘人等、到淀與津人有鬪亂事、事及太夫、往古所未聞也、令奏事由、遣撿非違使、

〔日本紀略（四村上）〕天德三年三月十三日戊午、同日感神院與清水寺鬪亂、遣撿非違使制止之、　十四日己未、賭弓之間、左右兵衞鬪亂、　廿二日丁卯、彈正巡撿京中之間、於修理職邊、與飛驒等鬪亂、

〔日本紀略（十一一條）〕寬弘三年六月十六日丙戌、帶刀正輔與左衞門尉文行有鬪爭事、仍令捕搦之間、正輔逃去、文行犯八虐之由法家所勘申也、

〔續古事談（五諸道）〕齊信民部卿別當ノ時、法住寺ニテ、文行正輔先祖ノ事ヲ云テイサカヒテ、正輔サカ

〔本朝世紀〕久安五年十二月廿二日庚午、今夜可遷御東三條也、○中略行幸以前、於四條內裏、被行軒廊御占、占形八通也、○中略此間於腋陣、少外記成重、與陰陽頭賀茂憲榮、有鬪亂事、憲榮書寫勘文之間、欲挑燭之處、誤以油器落懸成重之袖、成重大怒、以油器打懸憲榮、成重之所爲、尤非常也、　廿七日乙亥、今日少外記三善成重、被下解官宣旨、依去廿二日鬪亂事也、○中略

少外記大江成重

正二位行權大納言兼侍從藤原朝臣成通宣、奉勅、件成重、去廿二日於腋陣、爲陰陽頭憲榮朝臣、依致非常事、宜令解却見任者、

久安五年十二月廿七日　大炊頭兼大外記主稅權助助教加賀介中原朝臣師業

〔百練抄八高倉〕嘉應二年七月廿一日、於院中務權大輔經家、與周防守信章、鬪諍及拏攫、後日信章解官經家除籍、

〔中右記〕天永二年十一月四日、酉時許頭弁○藤原實行送書云、只今可馳參院、是依急事、卿有僉議事者、着直衣馳參也、及秉燭於北渡殿方、有被議定事、殿下○藤原忠實民部卿○源俊明予○藤原宗忠別當○源能俊修理權大夫爲房皆着直衣參仕、被仰下云、下野守明國爲成要事、密々下向美乃國之間、於途中、爲咎無禮者、與往反人成鬪亂、切三人者首了、是信乃守廣房郎等、幷左衞門尉爲義郎從、其後歸京、參所々畢、穢氣遍滿天下之由旁有其歎、仍召取明國郎從、令撿非違使勘問之處、每事實也　八日、晩頭依召參院、殿下○藤原忠實別當新宰相爲於殿上人々被定明國穢氣事、最前所召進之舍人男菊成、申穢之由、次侍男申無穢之由、未切之間、此夜半夜廻撿非違使盛重行一條邊之間、搦袋持下人、成奇見袋中、有綴牛皮一領、已直付也、問本主是下野守明國、一日所殺之男物者、仍自然穢氣之由顯然也、仍人々穢不可歎申　十九日、民部卿移着端座、以官人令下藤突、於次間、內府依被着一間、本有藤突也召大外記仰云、下野守源明國、可解却見任者、次召頭弁被下罪名勘文、遠流國々先可令注、則注一紙、頭弁奉上卿、又件國々之事被申院、予此間申上卿退

殿庭鬪毆

ハ不鳴ト云レタリケル時、人々笑之云々、仍頭中將成怒、以笏打頭辨、依之頭中將被除籍云々、宇治殿〔〇藤原賴通〕聞此事、御堂ノ〔〇藤原道長〕子孫未被除籍トテ、申サントテ令參內給タリケレドモ、被除之後ナリケレバ、不申出、令退出給云々、七日出御之比、經長卿少納言之時、主上〔〇後朱雀〕被仰云、件事非經輔之耻、吾耻也、吾運已盡也トテ令涕泣給云々、經輔卿只今候殿上之由經長奏シケレバ、天氣快云々、

〔法曹至要抄上罪科〕一禁中鬪亂事

鬪訟律云、於宮內忿爭者、笞五十、聲徹御在所及相毆者、杖一百、以刃相向者、徒二年、殿內〔〇內下、唐律有還字〕、加一等、傷重者各加鬪傷二等、疏云、謂大極等門爲殿門、忿爭杖六十、聲徹御在所及相毆者合徒一年、以刃相向、徒二年半、若閤內忿爭、杖七十、聲徹御在所及相毆者徒一年半、以刃相向者、徒三年、

按之禁裏之鬪亂者、自凡處是重之條、見于此律、

〔權記〕長保六年〔〇寬弘元年〕正月十四日己亥、此日內論義、〔〇中略〕瀧口藤原道紀、紀武忠、小論拏攫聲及御所、被下獄云々、〔〇又見日本紀略〕

〔日本紀略一條〕寬弘三年五月十日辛亥、右少辨藤原廣業、於內裏爲藏人式部丞藤原定佐、打〔〇打上恐脫被字〕損面了、十一日壬子、除定佐籍、近日天文道依變異頻奏近臣內亂之由、蓋其徵歟、六月十三日癸未、今日定佐被原免、復本職〔〇又見法成寺攝政記〕

〔本朝世紀〕康和元年三月十八日辛酉、是日陸奧守從五位上源朝臣國俊卒、〔〇中略〕白河天皇御宇、侍殿上有鬪亂事、卽被削殿上籍矣、

〔中右記〕保安元年七月廿一日、侍從宗成、籠內御物忌、令退出談云、少將實衡、與兵部大輔資信、於小板敷有鬪亂事、互以扇打合者、實衡年少者、資信餘卅之人也、資信之所爲、可謂至愚歟、件鬪亂從內被申院云々、後聞、實衡朝臣除籍、資信恐懼云々、〔〇又見百錬抄〕

可令中關白殿(藤原賴通)也者、良久之參右府(〇藤原實資)之間、於途中能季來云、示藏人雅樂助已了、但件下手男權弁被請了、卽令出見請文、卽彼弁從者加其名、予云、令請他人事不可然事也、藏人今日中關白殿、隨仰旨之間、如可搦得也、今先令請他人之事、極無由事也、至于今者何爲乎、有召之時、早可請度也、

〔百錬抄五鳥羽〕天永三年六月四日、攝政(〇忠實)過大納言經實門前之間鬪亂、大納言侍刃傷攝政雜色、上皇(〇白河)遣撿非違使、責召下手人、後日召進散位源家俊、被下左衞門府、

〔百錬抄八高倉〕承安四年正月七日、節會、撿非違使紏雜犯之間、中宮侍、與右少將隆房朝臣雜色鬪亂、件雜色刃傷宮侍政友、走入南庭、大夫尉盛國郎從搦取之、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年十二月廿七日、戊申、太政官論奏言、前越後守從五位上件宿禰龍男、令從者吉彌侯廣野等毆殺書生物部稻吉、前者稻吉、向太政官告訴守龍男犯用官物、故殺之、狀下刑部省、令斷龍男罪、省稱會恩赦、直從放免、〇中略須詳加覆案者也、帝特降優詔曰、〇中略宜申優曲並從原宥、

〔三代實錄二十清和〕貞觀十三年十月廿五日丁卯、太政官論奏曰、刑部省斷罪文云々、越前國足羽郡人生江恒山、因幡國巨濃郡人占部田主等、毆傷備中權史生大宅鷹取女子、恒山等言、隨私主右衞門佐伴宿禰中庸敎、毆殺鷹取女子、鬪訟律云、威力使人毆擊而死傷者、雖不下手、猶以威力爲重罪、下手者減一等、又云、故殺人者斬、恒山田主等、隨中庸敎、非因鬪爭殺鷹取女子、須以中庸爲首、處斬刑、而身犯大逆、降配遠流、不更斷罪、恒山田主爲從、減一等、並令遠流者、降恩詔斬刑減死一等、處之遠流、自餘並依省斷、

〔唐律疏議二十一鬪訟〕威力使人毆擊而致死傷者、雖不下手、猶以威力爲重罪、下手減一等、

〔百錬抄四後一條〕長元九年正月二日、二宮大饗間、頭中將俊家朝臣、令人打頭左中辨經輔、

〔古事談一王道后宮〕經輔卿被打事ハ、寬德二年正月三日、殿上淵醉間ノ事也、頭中將俊家(大宮右府)被放屁、人閉口、其後頭中將橘ヲトリテナラサントヲ被食ケルガ、ナラザリケレバ頭辨經輔微音ニ是

従者闘毆

〔古事談一王道后宮〕後朱雀院御誕生、五夜産養之時、左少將伊成（入道中納言義懷息也）被陵礫之間、不堪其責、以笏毆右兵衛佐能信之肩、仍藏人定輔伊成ヲ自緣突落、召集能信之家人、執髮蹈臥、以續松令毆陵云、依之伊成、後日出家云々、

〔台記〕康治二年正月十二日庚子、法皇（○鳥羽）幸鳥羽、行心經會之間、少將成雅朝臣、山城前司賴輔鬪諍、相共取本鳥、成雅自拔劒切破賴輔面、血流云々、于時申剋殿上人成群見物云々、古今未曾有云々、被切後賴輔尙取付、搔損成雅面云々、傳聞成雅先切賴輔二度、賴輔取付成雅、相共入渠中、良久不放、乍兩人本鳥亂如童云々、如此品秩人刄傷人、我朝未曾有事也、師安曰、日記等全不見事也、

〔古今著聞集十五闘諍〕保延六年夏の比、瀧口源の備、宮道惟則いさかひをして、備ころされにけり、帶刀先生源義賢惟則をからめて、後に義賢犯人と心をあはせたるよしさた出來て、義賢、帶刀の長をとられにけり、又犯人にとはれけれ共承伏せざりけるは、いか成ける事にか、別功にもよく〳〵はからふべき事也、

〔日本紀略五冷泉〕安和二年二月七日甲寅、是日右大臣師尹家人、與中納言兼家卿家人鬪亂、大臣家舍人一人被殺、大臣家人數百人出來、打破中納言家、此間中納言家爲（○爲上一本有人字）兵三人、亂髮取鉾者四五人出來、大臣家射留一人、（○又見百練抄）

〔日本紀略十一條〕長德二年二月十一日壬午、仰明法博士、令勘申內大臣（○藤原伊周）幷中納言隆家卿家人與華山院人鬪亂事、

〔春記〕長曆三年十一月十四日辛丑、巳時瀧口能季來云、昨日中務內侍爲使參大原野、能季在其共、於途中下人來向、與內侍從者鬪亂、下人一人拔刀走向車前、仍令搦之間、能季從者頗刄傷、雖然所搦得也、件下手權弁之從者也、彼弁消息云、可然者可優免者、予卽令答云、事已非私難自由、又彼內侍及奏聞歟、以件旨可傳權弁之由、示能季已了、小時能季來云、弁返事云、尤道理也者、予仰云、早觸行事藏人

一等、奴婢又減一等、相侵財物者、不用此律、

〔小野宮年中行事〕雜穢事

名例律云、〇中略寺家人奴婢於三綱、與主之二等親同、疏云、其當寺家人奴婢、於三綱有犯、與俗人二等親家人奴婢同、依鬪律(中略)其家人奴婢、毆三綱者絞、詈者徒三年、餘僧尼、與主之五等親等、疏云、鬪律、家人奴婢毆主之五等親徒一年、傷重各加凡人一等、又條、毆五等親家人奴婢折傷以上、各減殺傷凡人家人奴婢二等云、云、是卽寺家人毆當寺僧尼等、合徒一年、傷重各加凡人一等、若毆僧尼等折一歯、卽徒二年、奴婢毆又加一等、徒二年半、

〔明文抄三人倫〕凡家人奴婢詈舊主者、徒一年半、毆者徒三年、律

〔令集解二十八儀制〕撿鬪訟律、毆本部五位以上長官條、五位行六位長官者、猶可科毆五位長官罪故、但六位守五位長官者非也、或說、長官謂事發所長官、非罪人長官、

〔令集解十一戸〕案鬪律、所統屬官毆傷官長注云、若省管寮、國管郡之類、

〔令義解六儀制〕凡在廳座上、見親王及太政大臣下座、左右大臣家、當司長官、卽動坐、(中略)民部輔於主計、亦是當司(司原作時)、撿集解改、長官也、依律佐職及所統屬官、毆官長同罪故也、

〔令集解二十八儀制〕鬪訟律官位同自相毆條云、六位以下八位以上、或五位以上、或三位以上、並爲官位同、然則律令立文、隨事輕重、當條見義、不必一規也、

〔唐律疏議二十二鬪訟〕諸監臨官司、於所統屬官及所部之人有高官、而毆之、及官品同自相毆者、並同凡鬪法、

〔令集解一官位〕或云、此令非爲任用相當也、唯爲示官位同階相次耳、假令鬪訟律、官位同自相毆者、並同凡鬪法也、

〔扶桑略記二十六村上〕天德四年四月十九日、戊子撿非違使右衞門府生穂積良氏、石生秋鄕等、參內、令藏人雅材奏直幹朝臣申詞日記、又令申損所甚多、辛苦無極、且捕獲所指申下手人等、勅曰、未嘗聞毆傷四位以上、如此之事、早隨直幹申旨、可勘糺、又仰雅材、以醫藥下賜直幹朝臣、令加救療、

〔法曹至要抄上罪科〕一八虐事

五曰不道

鬪訟律云、○中略妻妾毆夫之父母者、徒三年、

〔政事要略八十二〕鬪訟律云、毆兄之妾及毆夫之弟妹、各加凡人一等、

〔令義解二戸〕凡毆妻之祖父母父母、○中略及妻毆詈夫之祖父母父母、謂須舅姑告、乃爲義絶也、(中略)及欲害夫者○註略雖會赦、皆爲義絶、

〔法曹至要抄上罪科〕一殺子孫幷家人奴婢事

鬪訟律云、子孫違犯敎令、而祖父母父母毆殺者、徒一年半、以刃殺者徒二年、故殺者各加一等、即養父母殺者、又加一等、過失殺者、各勿論者、

案之、祖父母父母有所敎令、而子孫違背之時、父祖毆殺之者、徒一年半、以刃殺者徒二年、又非違犯敎令故殺者徒二年半也、又養父母者、爲情疎易遺、故加一等可科罪也、

代親屬反毆

〔政事要略八十二〕鬪訟律云、子孫非違犯敎令而殺、徒二年、

〔令義解七僧尼〕鬪訟律云、祖父母父母、爲人所毆擊、子孫即毆擊之、非折傷者勿論、

師弟鬪毆

〔金玉掌中抄〕一八虐罪事

八曰不義

殺受業師鬪訟律云、毆見受業師者、加凡人二等、死者斬、

〔小野宮年中行事〕雜穢事

名例律云、凡僧尼○中略於其弟子、與兄弟之子同、(中略)依鬪律、毆殺兄弟之子、徒二年、賊律云、有所規求、故殺二等、以下卑幼者絞、兄弟之子是二等卑幼、若師主、因嗔競毆殺弟子、徒二年、如有規求而故殺者、當絞坐、

貴賤鬪毆

〔令集解七僧尼〕鬪訟律云、凡家人毆傷良人者、加凡人一等、奴婢又加一等、良人毆傷他人家人者、減凡人

人大宅朝臣宗永、蔭子无位在原朝臣連枝、蔭孫大初位下大秦公宿禰宗吉、同謀无加功、蔭子正六位上清原眞人利蔭、无位藤原朝臣宗扶、前醫師少初位上日下部廣君、白丁八多朝臣久吉岑、同謀不行、○中略詔遣彈正少弼從五位下安倍朝臣貞主等於太宰府、推問事由、刑部省處近成斬刑、貞道官當除名、宗永年七十、贖銅百斤、連枝宗吉二人並近流、利蔭官當除名、宗扶久吉岑二人並近流、廣君處斬刑、○中略是日太政官奏聞、詔曰、死罪宜減一等處之遠流、自餘依省斷焉、

〔金玉掌中抄〕一八虐罪事

四曰惡逆

謀毆祖父母父母鬪訟律云、毆祖父母父母者皆斬、

〔法曹至要抄上罪科〕一八虐事

五曰不道

鬪訟律云、毆兄姉者徒一年半、伯叔父姑外祖父母、各加一等、

〔令抄僧尼〕鬪訟律云、凡毆兄姉者、徒一年半、傷者徒二年、折傷者近流、刃傷及折支、若瞎一目者絞、死者皆斬、詈者杖八十、伯叔父加一等、即過失殺傷者、各減本殺傷罪二等、

〔令集解十一月〕鬪律、妻毆夫者徒一年、

○按ズルニ、唐律ニハ、諸妻毆夫徒一年、若毆傷重者、加凡鬪傷三等、須夫告乃坐死者斬トアリテ、令集解ニ同ジ、然ルニ法曹至要抄ニハ、鬪訟律云、○中略妻毆夫杖一百、妾犯加一等トアリテ、政事要略亦之ニ同ジ、

〔法曹至要抄上罪科〕一八虐事

五曰不道

鬪訟律又條云、毆傷妻死者、以凡人論、疏云、死者以凡人論合絞、以刃及故殺者斬、

曰、吾爲美都良麻呂被刺之、驚而見之、血出自左脇、卽死、同郡人秦成吉等、與春貞美都良麻呂等同飮之人也、而相鬪之場、雖以言詞相諫、而遂不相救助、國司斷云、鬪訟律云、鬪毆殺人者絞、以刃及故殺人者斬、雖相鬪而用兵刃殺者、與故殺同、准犯據律、合斬刑者、又捕亡律云、隣里被殺人、告而不助救者、杖一百、成吉等在殺人處不助救、准律條、各處杖一百、刑部省覆斷云、國斷有失、何者、案律、鬪而用刃、卽有害心、仍處斬刑、但不同於故殺、而引故殺及用兵刃殺等之文、此國司之謬斷也、又淨子詞云、成吉等、與春貞美都良麻呂相鬪之場、雖以言詞相諫、而遂不救、淨子聞春貞之叫、纔知被刺、然則成吉等、醉中不覺美都良麻呂害春貞之心、非聞告而不助、見刺而不救者也、仍改斷無罪、

〔三代實錄清和二十六〕貞觀十六年十月十九日甲戌、太政官奏、〇中略石見國人若杖部豐見、鬪毆殺人、當絞刑、勅宜減死一等並處遠流、

〔三代實錄清和二十九〕貞觀十八年十月廿二日乙丑、太政官奏、甲斐國都留郡人當麻部秋繼、鬪殺同郡百姓丈部鷹長、罪當絞刑、勅宜減一等處之遠流、

〔三代實錄陽成三十六〕元慶三年十二月十五日庚子、太政官奏曰、右京人大初位下井上伊美吉直繼、以鉏刃毆殺井上伊美吉眞雄、紀伊國浪人當麻眞人岑吉、射殺建部今雄、刑部省覆案、並當斬刑、〇中略佐渡國浪人高階眞人利風、鬪殺雜太團權校尉道公宗雄、及盜取高階眞人有岑財物、賀茂郡人神人勳知雄、道古、今人、爲鬪殺之從、大田部志眞刀自女、服半〇一本作伴字志子女、見殺不救、利風當絞刑、勳知雄、道古、今人、徒三年、志眞刀自女、半志子女、當杖一百、詔曰、死罪宜降一等處之遠流、徒以下罪、依去十一月二十五日詔旨免除、

〔三代實錄光孝四十八〕仁和元年十二月廿三日癸酉、備前國上道郡人白丁山吉直、同郡人白丁秦春貞、鬪殺讃岐國鵜足郡人宗我部秀直、同郡人建部秋雄等、正五位下行權守源朝臣加斷罪、以吉直爲首處絞刑、春貞爲從、合徒三年、又謀首筑後掾從八位上藤原朝臣近成、從少目從七位上建部公貞道、左京

鬪毆例

勘奏之後、徒罪以下於使廳可決、死罪以上可送刑部省也、然而此事近代皆以絕畢、至于及流徒罪之者禁獄舍、相重杖笞之者禁獄政所、或禁便所、是使廳積習之例也、非法條之所指、

〔貞永式目抄 三〕一毆人咎事

打擲ノ咎也、鬪訟律云、凡鬪毆人者笞四十、相爭爲鬪、相擊爲毆、謂以手足擊人者、擧手足爲例、以頭上擊之類、亦以他物毆人者杖六十、非手足者、其餘皆爲他物、卽兵不用刃亦是、

〔政事要略 八十一〕方寸

鬪訟律曰、拔髮方寸以上杖八十者、方寸之文、出於此律、俗人以傷損稱方寸者誤也、

〔貞永式目抄 二〕一殺害刃傷罪科事

鬪訟律云、鬪刃傷、及折人肋、眇其兩目、墮人胎徒二年、注云、刃トハ謂金鐵無大小之限、堪以殺人者、又墮胎者謂辜內子死乃坐、若辜外死者、從本毆傷論、

〔金玉掌中抄〕一刃傷罪事（鬪訟律云、以兵刃斫射人、不著者杖一百、）

〔唐律疏議 二十一 鬪訟〕諸鬪以兵刃斫射人、不著者杖一百、（兵刃謂弓箭刀矟矛攢之屬、卽毆罪重者從毆法、○疏議略）若刃傷、（刃謂金鐵無大小之限、堪以殺人者、）及折人肋、眇其兩目、墮人胎、徒二年、（墮胎者謂辜內子死、乃坐、若辜外死者、從本毆傷論、）

〔文德實錄 六〕齊衡元年十月甲戌、公卿奏讞、伊豆前守外從五位下百濟宿禰康保、毆殺部下百姓數人、康保罪當死、詔減死一等、處之遠流、

〔三代實錄 五 淸和〕貞觀三年十月廿八日戊辰、太政官論奏曰、尾張國人敢臣繼吉、敢臣宗貞等、毆殺宗貞兄敢臣繼雄、信濃國人壬生稻主、毆殺妻母刑部子刀自女、○中略　淡路國浪人物部多男、鬪殺錦織廣人、○中略　法官覆案、罪皆當斬、詔減死一等、處之遠流、

〔三代實錄 十三 淸和〕貞觀八年十月廿五日丙申、太政官論奏曰、刑部省斷罪文云、讃岐國浪人江沼美都良麻呂、殺香河郡百姓縣春貞、春貞妻秦淨子申訴云、美都良麻呂於春貞宅相共飮酒、言論相鬪、春貞叫

鬪毆

鬪毆ニ種々アリ、髮ヲ拔キ、齒ヲ折リ、耳鼻ヲ毀缺シ、眼ヲ眇瞎シ、或ハ支體ヲ折跌シ、內損吐血セシメ、孕婦ノ胎ヲ墮スル類是ナリ、而シテ之ヲ毆ツニ手足ヲ以テスルアリ、兵刃ヲ用キルアリ、其傷クルト然ラザルトニ由リテ、笞、杖、徒刑ノ別アリ、傷トハ血ヲ見ハスヲ云ヒテ、死ニ致ス時ハ、鬪殺トシテ絞刑ニ處ス、鬪殺トハ、元ヨリ殺ス心ナク、鬪爭スルニ因リテ死ニ至ラシムルヲ云フ、

鬪毆モ亦人ニ由リテ其罪ヲ殊ニス、卽チ祖父母、父母、師主等ヲ毆ツハ重ク、子弟奴婢等ヲ毆ツハ輕キガ如シ、皆倫理ヲ重クスル所以ニシテ、祖父母、父母ノ人ニ毆擊セラルヽ時、子孫タルモノ其人ヲ毆擊スルモ、折傷スルニアラザレバ、其罪ヲ問ハズ、又宮內殿庭ニ於テ忿爭スルハ、其刑凡鬪ヨリ重シ、又人ヲ毆傷シタルモノヽ爲ニ保辜ノ法アリ、被害者ヲ犯人ニ責付シテ、醫治セシムルヲ云フ、

〔法曹至要抄上罪科〕一鬪亂鬪殺事

鬪訟律云、鬪毆人者笞卅、謂以手足擊人者、傷及以他物毆人者杖六十、謂見血爲傷、非手足者、其餘皆爲他物、卽兵不用刃、亦是、傷及拔髮方寸以上、杖八十、若血從耳目出及內損吐血者、各加二等、又云、凡鬪毆人折齒、決○決唐律作毀缺耳鼻、眇一目、及折手足指、若破骨、及湯火傷人者徒一年、折二齒二指以上、及髡髮者徒一年半、又云、凡鬪毆折跌人支體、及瞎其一目者徒三年、折支者、折骨跌體者、骨節差跌失其常處、辜內平復者各減二等、餘條折跌、平復准之、卽損二事以上、及因舊患令至篤疾、若斷舌及毀敗人陰陽者、遠流、又曰、凡鬪毆殺人者絞、謂元無殺心、因相鬪毆而殺人者、

案之、成鬪亂犯、使應任意可掌、依載式條也、是以所當之罪、若爲笞杖者、須立決放、又若及徒流死者、

雜載

相殺被殺者、復是本親、一違律條、二乖親義、受財一疋以上、皆是枉法之贓、贓輕及不受財、各得私和之罪、其間有罪重者、各從重科、又有主被人殺、家人奴婢私和受財、不告官司者、家人奴婢身繫於主、主被人殺、侵害極深、其有受財私和、知殺不告、金科雖無節制、亦須比附論刑、豈為在律無條、遂使獨為僥倖、然家人奴婢法為主隱、其有私和不告、得罪並同子孫、

〔類聚國史百九十 風俗〕延暦十四年五月丙子、配俘囚大伴部阿氐良等妻子親族六十六人於日向國、以殺俘囚外從五位下吉彌侯部眞麻呂父子二人也、

〔類聚國史八十七 刑法〕天長五年閏三月壬子、大中臣朝臣春繼流伊豆國、因射殺荻原王也、

〔類聚國史八十七 刑法〕天長八年十二月庚辰、殺人從當麻旅子女於西市決杖六十、

〔三代實錄十六 清和〕貞觀十一年十月廿六日庚戌、太政官論奏曰、刑部省斷罪文云、貞觀八年、隱岐國浪人安曇福雄密告、前守正六位上越智宿禰貞厚、與新羅人同謀反逆、遣使推之、福雄所告事是誣也、○中略但貞厚、知部內有殺人者不舉訊、仍應官當者、

シケレバ、其レヲモ我レヲバ爲ル樣有ラムト思テ、昔ノ共達ニテ有ケル者ノ、淸水ノ邊ニ有ケルガ許ニ其レヲ打憑ムデ、車ニ乘テ行タリケルニ、憑テ行タル所ニモ思ヒ返シテ、此ニテハ否不殺ト云ケレバ、何カセムトテ鳥部野ニ行テ、淨ゲナル高麗端ノ疊ヲ敷テ、其レニ下居ケレバ、極ク和キ哀レ也ケル人ニテ、朧ノ影ニ隱レテ引疏テゾ疊ニ居タリケル、然テ疊ニ寄臥ケルヲ見テ、從者ニテ有ケル女ハ返ニケリ、哀ナル事ニナム、其比人云ケル、此ハ惚ナル人ナレドモ、糸惜ケレバ不書ズトゾ人云シ、彼ノ尾張ノ守ガ妻カ妹カ娘カ不知ズ、何テ有トモ極ク口惜ク不問ザリケル事トゾ、聞ク人謗リケルトナム語リ傳ヘタルトヤ、

多殺支解

〔律疏 賊盜〕凡殺一家非死罪三人、同籍及二等親外祖父母爲一家、即殺雖先後、事應同斷、或應合同斷、而發有先後、皆是、奴婢家人非、及支解人者、謂殺人而支解者、皆斬、子徒三年、殺人之法、事有多端、但據前人身死、不論所殺之狀、但殺一家非死罪、良口三人、即爲不道、若三人內、一人先犯死罪、而殺之者、即非不道、只依殺一人罪法、同籍及二等親爲一家、謂同籍不限親疏、二等親雖別籍亦是、即殺一家三人、雖有先後、發時應合同斷、或所殺之事應合同斷、事發乃有先後者、皆爲一時殺法、總入不道、殺一家三人之內、兼殺奴婢家人者非、及支解人者、謂殺人而支解者、或殺時即支解、或先支解而殺之、皆同支解、並入不道、若殺訖絶時後更支解者非、或故焚燒而殺、或殺時即焚燒者、文雖不載、罪與支解義同、皆合處斬、罪無首從、子徒三年、假有家人奴婢、殺別主家人奴婢、一家三人、或支解者、依例有犯、各準良人、合入八虐、

〔三代實錄 二十六 清和〕貞觀十六年十月十九日甲戌、太政官奏、沙彌敎豐、俗名上毛野豐麻呂、沙彌善福、俗名水取貞江、於丹波國船井郡、與濫僧四十餘人、殺勸學院使日奉全吉、支解其體、行火燒民屋二家、幷燒殺一女、下刑部省、令覆案、並當斬刑、○中略勅宜減死一等、並處遠流、

私和

〔律疏 賊盜〕凡祖父母、父母、外祖父母、及夫、爲人所殺、私和者徒三年、二等親徒二年、三等以下親、遞減一等、受財重者、各準盜論、謂受讎家之財、重於私和之罪、假如五等親私和、合杖一百、受財五端、準盜合徒一年之類、雖私和罪重、受財罪輕、其贓本合計限、爲數少、從重終合沒官、發後輸財私和、依法合重其事、如傍親爲出財私和者、自合行求之法、依雜律坐贓論減五等、其贓亦合沒官、雖不私和、知殺二等以上親、經卅日不告者、各減二等、其有五等內親自相殺者、疎殺親合告、親殺疎不合告、親疎等者、卑幼殺尊長得告、尊長殺卑幼不得告、其應相隱者、疎殺親、義服殺正服、卑幼殺尊長、亦得論告、其不告者亦無罪、若殺祖父母父母應償死者、雖會赦、仍移鄉避讎、以其與子孫爲讎、故合移配、若子孫知而不告、從私和及不告之法科、若監臨親屬、爲部下人所殺、因茲受財私和、依律、監臨之官、知所部有犯法、不舉劾者、減罪人罪三等、況監臨內

今昔□□國□□ノ郡ニ住ケル人有ケリ、其家ニ年十二三歳許有女ノ童ヲ仕ヒケリ、亦其隣ニ住ケル人ノ許ニ、白キ狗ヲ飼ケルガ、何ナルコトニカ有ケン、此女ノ童ダニ見ユレバ、此狗咋懸リテ敵ニシケリ、然レバ亦女ノ童モ、此狗ダニ見ユレバ打ントノミシケレバ、此ヲ見人モ極ジク怪ヒ思ケル程ニ、女ノ童身ニ病ヲ受テケリ、世ノ中心地ニテ有ケルニヤ、日來ヲ經ルマヽニ病重カリケレバ、主此女ノ童ヲ外ニ出サント爲ニ、女ノ童ノ云ク、己ヲ人離タル所ニ被出ナバ、必ズ此狗ノ爲ニ被咋殺ナントスル、病无クシテ人ノ見時スラ、己ダニ見ユレバ只咋懸ル、何況ヤ人モ无キ所ニ己重病ヲ受テ臥タラバ、必ズ被咋殺ナン、然レバ此狗ノ知マジカラン所ニ出シ給ヘト云ケレバ、主現ニ然ル事也ト思テ、遠キ所ニ食物ナド皆拈テ密ニ出シツ、毎日ニ一二度ハ必ズ人ヲ遣テ見セント云誘ヘテ出シツ、而ルニ其亦ノ日ハ此狗有リ、然レバ此狗知ラヌナメリト心安ク思テ有ニ、次ノ日此狗失ヌ、此ヲ怪ヒ思テ、此女童出シタル所ヲ見セニ人ヲ遣タリケレバ、人行テ見ニ、狗女ノ童ノ所ニ行テ、女ノ童ニ咋付ニケリ、然レバ女ノ童狗ト互ニ齒ヲ咋違ナム死テ有ケル、

〔今昔物語三十一〕尾張守□□於鳥部野出人語第三十

今昔尾張ノ守□□ノ□□ト云フ人有ケリ、其ノ□□ニテ有ケル女有ケリ、歌讀ノ內ニテ、心バヘナドモ糸可咲クテ、男ナドモ不爲テナム有ケル、尾張ノ守此ヲ哀テ、國ニ郡ナド預ケテ有ケレバ、便リ有テナム有ケル、子二三人有ケルハ、母ニモ不似ズ、極タル不覺ノ者ニテ有ケレバ、皆外ノ國ヘ迷ヒ失ニケリ、其ノ母ハ年老テ衰ケレバ、尼ニ成テケルニ、後ニハ尾張ノ守モ不問ズ成ニケリ、畢ニハ兄也ケル者ニ懸リテ過ケル間ニ、難堪キ事多カリケレドモ、本ヨリ有職ナル者ニテ、弊キ事ヲバ不爲ズシテ、尚身ヲ持上テ、心憾ヲ造テ過シケル程ニ、身ニ病付ニケリ、日來ヲ經ルマヽニ、病ノ莚ニ沈ムデ氣色不覺ニ見ニケレバ、兄有テ家ニテハ不殺ジト思テ、家ヲ出

〔政事要略七十〕出棄病人及小兒事

貞觀九年三月七日、右少史大春日安永仰云、右少辨藤原朝臣千乘傳宣、右大臣宣、京中諸人、捨男兒於道路頭、遂爲犬烏見害喫、是卽職吏之不治、人民之不仁、宜撿非違使每見此事、召當條領幷町長等、重加勘當、俾送居施藥院、唯其狀必申官者、

〔類聚三代格七〕太政官符

應令左右看督近衞等每旬巡撿施藥院幷東西悲田病者孤子多少有無安否等事〇中略

須看督近衞等巡撿京中之日、有見路邊病人孤子者、隨便令取送院幷東西悲田、又大藏宮內兩省所充綿及古幣帖疊等、施藥院司請納之後、與彼院司共相知、頒給三所病者孤子等、莫致疎略、

寬平八年閏正月十七日

〔延喜式四十二左右京〕凡京中路邊病者孤子、仰九箇條令、其所見所遇、隨便必令取送施藥院及東西悲田院、

〔政事要略七十〕出棄病人及小兒事

應收養路頭爲病者事

右左大臣宣、奉勅、如聞頃者京中病者、多臥路頭、無人收養、誰救其命、宜仰左右京職官人、分預口坊令等、每條巡撿、取置便所、及隨撿非違使看督等、取送同共收養者、兩職承知、依宣行之、其食法、大男大女日各米一升、鹽一夕、滓醬一合、小男小女日各米六合、鹽五最、滓醬五夕、但米用以義倉科、鹽滓醬請大膳職、鋪設自掃部寮、衣服古幭請自大藏省、事緣濟民、不得疎略、

左中辨紀朝臣　左大史錦部宿禰

延長八年二月十三日

〔今昔物語二十六〕東小女與狗咋合互死語第二十

（已知委、夜入而殺者、亦得勿論、律開格殺之文、本防侵犯之輩、設令昏知姧穢、終是法所不容、但夜入人家、理或難辨、縱令知犯、亦爲罪人、若其殺即加罪、便恐長其侵暴、賊同格殺、理用無疑、況文稱知并侵犯而殺傷、即明知是侵犯而殺、自然依律勿論、）其已就拘執而殺傷者、各以鬪殺傷論、（謂夜入人家、已被擒獲、拘留執縛、無能相拒、本罪雖重、不合殺傷、主人若有殺傷、各依鬪法科罪、）至死者遠流、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁斷京畿百姓出弃病人事

右右大臣奏偁、念舊酬勞、賢哲遺訓、重生愛命、貴賤爲殊、今天下之人、各有僕隷、平生之日、既役其身、病患之時、即出路邊、無人看養、遂致餓死、此之爲弊、不可勝言、伏望仰告京畿、早從停止、庶令路傍無夭枉之鬼、天下多終命之人者、被中納言從三位藤原朝臣繩主宣偁、奉勅宜早下知令加禁制、如不遵改、猶致違犯者、五位以上注名申送、六位已下、不論蔭贖、決杖一百、臺及職國、知而不糺、及條令坊長、郡司隣保、相隱不告、並與同罪、自今以後永加禁斷、仍牓示要路、分明告知、

弘仁四年六月一日（〇又見類聚國史）

〔延喜式四十一彈正〕凡部内百姓、出弃病人者、五位以上取名奏聞、六位以下不論蔭贖、決杖一百、其職司知而不糺、及條令坊長隣保相隱不告、並與同罪、

〔類聚三代格七〕太政官符

續命院一處（在太宰府郭〇中略）

右參議刑部卿從四位上小野朝臣岑守解偁、府管九國二島之民、或公或私、往來相續、其求輕者、皆經時月、其事重者、竟歲始還、客宿於府倉之下、僦寄於閭閻之間、若至疾病纏身、手足不隨、官司督察、非養病之處、主家爭趁、皆忌死之人、遂使露臥道路、暴死風霜、縱有時得痊癒、亦以飢寒死者、十而七八矣、見其如此、心深救恤、聊建斯處、以擬飢病、〇中略右大臣宣、〇中略宜連令所司俾充所請者、〇中略

承和二年十二月三日

三狩之男、以宿怨殺父妾婢一人、

〔類聚國史（八十七刑法）〕天長六年十一月丁亥、藤原朝臣全雄降死罪一等處之遠流、殺妾飛鳥戸造福刀自賣故也、

殺傷主人

〔律疏（賊盜）〕凡家人奴婢謀殺主者、皆斬、（謂謀而未行、但同籍良口合有財分者、並皆爲主、謀殺者、罪無首從、）謀殺主之二等親、及外祖父母者、絞、已傷者皆斬、（謂主之二等親、別戸籍者、）

〔律疏（賊盜）〕凡妻妾、謀殺故夫之祖父母父母者、徒三年、已傷者遠流、已殺者皆斬、○略　註家人奴婢、謀殺舊主者、罪亦同、○中略（舊主、謂主放爲良者（中略）其家人奴婢自贖免賤者、亦同主放、若轉賣、及自理訴得脫、即同凡人、）

〔金玉掌中抄〕一家人奴婢過失殺主罪事

同律（○賊盜律）云、家人奴婢、過失殺主者絞、傷及詈者流、

殺家人奴婢

〔法曹至要抄（上罪科）〕一殺子孫幷家人奴婢事

同律（○鬪訟律）云、奴婢有罪、其主不請官司而殺者、杖八十、無罪而殺者、杖一百、家人者各加一等、過失殺者、各勿論、

案之、奴婢賤隷、雖各有主、至於殺戮、宜有承稟、而不請官司而輙殺者、杖八十、無罪殺者杖一百、家人有罪、不請官司殺者、奴婢加一等、杖九十、無罪殺者、同加一等、合徒一年、過失殺者各不可有其罪矣、

殺百姓

〔三代實錄（四清和）〕貞觀二年閏十月廿五日辛未、太政官論奏、美濃國惠奈郡人縣萬歲麻呂、殺百姓三人、法官斷罪、當斬刑、詔減死一等、處之遠流、

〔扶桑略記（三十白河）〕承保二年八月十一日庚子、除名少內記藤原爲定配流常陸國、依打開播磨國官倉、幷炮殺百姓之罪狀也、

殺傷家宅侵入人

〔律疏（賊盜）〕凡夜無故入人家者、笞卅、（晝漏盡爲夜、夜漏盡爲晝、謂夜無事故、輙入人家院內者、）主人登時格殺者勿論、若知非侵犯、而殺傷者、減鬪殺傷二等、（謂知其迷誤、或因醉亂、及老小疾患、并婦人、不能侵犯、而殺傷者、若殺他人奴、合徒三年、得減二等、徒二年之類、假有外人來姧、主人舊

〔三代實錄三清和〕貞觀元年十二月廿七日戊申、太政官論奏言、〇中略前日向守從五位下嗣岑王、謀殺詔使正五位下田口朝臣房富等、須詳加覆案者也、帝特降優詔曰、〇中略嗣岑王依先斷、官當免爵、

〔文德實錄九〕天安元年六月庚寅、太宰府飛驛言上、對馬島上縣郡擬主張卜部川知麻呂下縣郡擬大領直浦主等、率黨類三百許人、圍守正七位下立野正岑館、行火、射殺正岑幷從者十人、防人六人、七月辛亥、下制太宰府、免對馬島賊類被劫入賊黨及獄中死亡實無罪者妻子、

〔文德實錄十〕天安二年閏二月庚申、對馬島百姓、殺守正七位下立野連正岑、幷燒官舍民宅者下刑官、而鞫識其罪也、

〔律疏賊盜〕凡謀殺祖父母、父母、外祖父母、夫、夫之祖父母、父母者、皆斬、嫡母、繼母、伯叔父姑、兄姉者、遠流、已傷者絞、五等以上尊長者、徒三年、已傷者中流、已殺者皆斬、卽尊長謀殺卑幼者、各依故殺罪減四等、已傷者減二等、已殺者依故殺法、（上文尊長謀殺卑幼、當條無罪名、各依故殺罪、減四等、已傷者減二等、已殺者依假如有所規求、謀殺二等卑幼、合徒二年、已傷者合徒三年、已殺者依故殺法、合絞之類、言依故殺法者、謂罪依故殺法、其首各依本謀論、造意雖不行、仍爲首、從者不行、減行者一等、假有伯叔數人、謀殺猶子訖、卽首合近流、從而加功、合徒三年、從者不加功、徒二年半、從者不行、減行者一等、徒二年之類、略擧殺二等卑幼、餘者不復備文、其應減者、各依本罪上減、）

〔令義解二戶〕凡〇中略殺妻外祖父母、伯叔父姑、兄弟姉妹、若夫妻祖父母、父母、外祖父母、伯叔父姑、兄弟姉妹、自相殺、及〇中略殺傷夫外祖父母、伯叔父姑、兄弟姉妹、（謂或殺或傷、皆是也、）及欲害夫者、（謂若欲陷罪及害身並是、但毆夫者輕於陷罪、故不入殺絶、凡諸稱妻者、繼妻亦同、但妾者非、其夫死之後、妻妾犯此七出義絶者、亦猶依出例也、）雖會赦、皆爲義絶、

〔律疏賊盜〕凡妻妾、謀殺故夫之祖父母、父母者、徒三年、已傷者、遠流、已殺者皆斬、（謂一家之内、妻妾寡者數人、夫亡之後、並已故嫁後、共謀殺故夫之祖父母、父母、俱得斬刑、若被他人同謀、他人依首從之法、不入皆斬之限、〇中略故夫謂夫亡改嫁、（中略）妻妾若被出、及和離、卽同凡人、不入故夫之限、）

〔百練抄八高倉〕治承三年五月三日、左衞門尉源忠清配流佐渡國、依所領相論事、殺害舍弟左近將監滿實之故也、

〔類聚國史八十七刑法〕延曆十三年十一月乙未、左京人海上眞人眞直下獄死、眞直故太宰少貳從五位上

疏議曰、過失之事、注文論之備矣、殺傷人者、各準殺傷本狀、依收贖之法、注云、謂耳目所不及、假有投甎瓦及彈射、耳不聞人聲、目不見人出、而致殺傷、其思慮所不到者、謂本是幽僻之所、其處不應有人、投瓦及石、誤有殺傷、或共舉重物、而力所不制、或共升高險而足蹉跌、或因擊禽獸、而誤殺傷人者、如此之類、皆爲過失、稱之類者、謂若共捕盜賊、誤殺傷傍人之類皆是、

毒殺

〔律疏賊盜〕凡以毒藥藥人、及賣者絞、卽賣買而未用者、近流、謂以鴆毒冶葛烏頭附子之類、堪以殺人者、將用藥人、及賣者知情、並合科絞、卽賣買未用者、謂買毒藥、擬將殺人、賣者知其本意、而未用者、近流、雖毒藥可以療病、買者將毒人、賣者不知情不坐、謂雖毒藥可以療病、買者將以毒人、賣者不知毒人之情者、賣者不坐、若犯尊長者、各依謀殺及已殺法、如其施於卑幼、亦准謀殺已殺論、如其藥而不死者、並同謀殺已傷之法、脯肉有毒、曾經病人、餘者速焚之、違者杖九十、謂曾經人食爲脯肉所病者、餘卽速焚之、恐人更食、須絕根本、故與人食、幷出賣、令人病者、徒一年、謂知前人食已得病、故將更與人食、或將出賣、以故令人病者、以故致死者絞、卽人自食致死者、從過失殺人法、謂脯肉有餘、不速焚之、雖不與人、其人自食、盜而食者、因卽致死者、從過失殺人法、徵銅入死家、不坐、謂人盜竊而食、以致死傷者、脯肉主不坐、仍科不速焚之罪、其有害心、故與尊長食、欲令死者、亦准謀殺論、施於卑賤至死、依故殺法、

以種々法殺傷人

〔律疏賊盜〕凡以物置人耳鼻及孔竅中、有所妨者、杖六十、謂耳鼻孔竅、皆爲要所、輙以他物置中、有所妨者、若本條毆罪重者、依毆法、其故屏去人服用飮食之物、以故殺傷人者、各以鬪殺傷論、謂寒月屏去人衣服、或登高乘馬、私去梯轡、或飢渴之人、屏去飮食之類、以屏去之故、及置物於人孔竅之中、而殺傷人者、若殺凡人、或傷尊長、應死、或於卑幼及賤人、雖殺不合償死、及傷尊卑貴賤、各有等差、須依鬪律、從本犯科斷、故云、各以鬪殺傷論之、若恐迫人、使畏懼致死傷者、各隨其狀、以故鬪戲殺傷論、謂恐動逼迫、使人畏懼、而有死傷者、若履危險、臨水岸、故相恐迫、使人墜陷、而致死傷者、依故殺傷法、或因鬪恐迫而致死傷者、依鬪殺傷法、或因戲恐迫、使人畏懼、致死傷者、以戲殺傷論、若有如此之類、各隨其狀、依故鬪戲殺傷法科罪、

〔金玉掌中抄〕一射投瓦石罪事

雜律云、向官私宅若道徑射者、笞五十、投瓦石者、笞卅、因殺傷人、各減鬪殺傷一等、至死者、加役流、

〔明文抄一地儀〕凡向官私宅若道徑射者、笞五十、放彈及投瓦石者、笞卅、律

殺傷詔使本主官長

〔律疏賊盜〕凡謀殺詔使若本主本國守、及吏卒謀殺本部五位以上官長者、徒三年、官戸奴婢與吏卒同、餘條准此、謂官戸奴婢等、謀害本司五位以上官長、當條無罪名、並與吏卒同、已傷者遠流、殺者皆斬、

郡人眞髮部成道、故殺大市貞繼、撿非違使覆案奏、有常等罪、當斬刑、詔降死一等、處之遠流、

〔台記〕久壽元年十月廿八日丁未、今日改元、○中略光賴召殿上、仰赦事、先是余〔○藤原賴長〕奏法皇〔○鳥羽〕曰、如律文者、雖鬪殺、至用刃者爲故殺、若然常赦不可免之、而稱鹿例免之、其來尙矣、近年京師往々有殺害之聞、是用輕典之所致歟、願任律文拘之、以懲將來、勅曰、所奏可、然但任年來例、從輕法赦之、有何事乎、謹從詔命、不復諫、

戲殺

〔政事要略〕八十二 鬪訟律云、戲殺傷人者、減鬪殺傷二等、卽无官應贖、而犯者依過失法收贖、〔○又見令集解〕

〔法曹至要抄〕上罪科 一戲殺人事

鬪訟律云、戲殺傷人者、減鬪殺傷二等、

按之、鬪殺人者絞刑也、而戲殺之減二等徒三年、亦鬪刃傷人者徒二年也、而戲刃傷之減二等、宜徒一年矣、

過失殺

〔政事要略〕八十二 又○鬪訟律云、過失殺傷人者、各依其狀以贖論、

〔律疏〕名例 凡應議請減、及八位勳十二等以上、若官位勳位得減者之父母妻子、犯流罪以下、聽贖、○中略子孫犯過失流〔謂耳目所不及、思慮所不到之類、而殺祖父母、父母者、〕○中略不得減贖、除名配流如法、○中略其於二等以上尊長及外祖父母、夫、夫之父母、犯過失殺傷、應徒、

〔法曹至要抄〕上罪科 一過失疑罪事

案之、謂過失者、耳目所不及、假令投塼瓦彈射、耳不聞人聲、目不見人出、而致殺傷、其思慮所不到者、謂本是幽僻之所、其處不可有人、投瓦及石、誤有傷殺、或共擧重物、而力所不制、或共昇險、而足差跌、或因擊禽獸、而誤殺傷人者、如此類、皆爲過失之罪、不同正犯、徵贖銅可入被殺被傷之家也、

〔唐律疏議〕二十三鬪訟 諸過失殺傷人者、各依法以贖論、〔謂耳目所不及、思慮所不到、共擧重物、力所不制、若乘高履危足跌、及因擊禽獸、以致殺傷之類、皆是、〕

スル殺傷ノ事ハ、別ニ其篇アレバ、就キテ看ルベシ、

謀殺

〔律疏賊盗〕凡謀殺人者徒二年、已傷者近流、已殺者斬、謂二人以上、若事已彰顯、欲殺不虛、雖獨一人、亦同二人謀法、從而加功者、加役流、謂同謀共殺、殺時加功、雖不下手殺人、當時共相擁迫、由其遮遏、逃竄無所、既相因籍、始得殺之、如此經營、皆是加功之類、不加功者近流、謂同謀從人、不加功力者、造意者、雖不行、仍爲首、謂元謀屠殺、其計已成、身雖不行、仍爲首罪、合斬、餘加功者加役流、雇人殺者亦同、謂造意爲首、受雇加功者爲從、即從者不行、減行者一等、謂劫囚傷人、及謀殺五等以上尊長、已傷之類、從者不行、亦減一等、其有發心謀殺、餘條不行准此、即皆斬者、同謀不行、不在減例、謂謀殺祖父母外祖父母夫、同謀不行、亦得斬罪、

〔法曹至要抄上罪科〕一謀殺事

案之、雖謀殺未害、終其身、然而罪法所指事重、須令著鈦居作也、雖然依非使廳之所掌、只任例下獄舍畢、是臨時行來例也、

〔百練抄八高倉〕安元二年正月十三日、雅寶僧都、被付使廳使、後見僧延濟、爲綱殺害、嫌機人之故也、延濟爲綱愛妾乳母夫也、密通云々、　二月廿日、殺害爲綱者僧宴濟、○上文作延濟召出使廳拷問、承伏已畢、同類上西門院前藏人平盛方也、左中將知盛朝臣召進之、依爲一族也、各承伏畢、爲綱密通女房、故顯能女也、件女宴濟養君也、而密通盛方者、件女、女弟夫同密通、同意殺害、盛方下手、配流佐渡國、　三月十九日、平盛方配流佐渡國、殺害爲綱下手人也、

故殺

〔法曹至要抄上罪科〕一故殺事

鬪訟律云、故殺人者斬、疏云、非因鬪爭、無事而殺、是名故殺、

按之、罪重、近代之例、依無刑部省斷、於使廳禁獄、依爲死罪、不定徒年限、又此間絕無勘奏、甚以不當、仍雖不令著鈦、直依別當宣、遣獄舍而已、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年十月廿八日戊辰、太政官論奏曰、○中略上野國人神人繼道、故殺布師貞、○中略法官覆案、罪皆當斬、詔減死一等、處之遠流、

〔三代實錄四十陽成〕元慶五年十月十六日辛卯、太政官奏、右京人宮門有常、故殺有道今出麿、備中國窪屋

古事類苑

法律部九

上編

殺傷

殺傷ニハ、謀殺傷、故殺傷、誤殺傷、戯殺傷、過失殺傷アリ、謀殺傷ハ、二人以上相謀リテ殺傷スルヲ云ヒ、造意者、加功者ノ別アリ、一人ニテモ、事既ニ露顯シテ、殺傷セント欲シタル證跡アレバ、亦謀殺ニ屬ス、故殺傷ハ、闘爭シテ刃ヲ用ヰ、或ハ闘爭ニ因ラズシテ故ラニ殺スヲ云フ、人ノ兵刃ヲ用ヰテ己ニ逼ルガ爲メニ、兵刃ニテ拒ギテ殺傷スルトキハ、闘法ニ依リテ論ズ、過失殺傷ハ、耳目思慮ノ及バザル所ニシテ、過チテ人ヲ殺傷スルヲ云フ、此中ニテ謀殺ヲ最重シトシテ、故殺ト倶ニ死刑ニ處ス、戯殺ハ徒三年ニテ之ニ次ギ、過失殺ハ、最輕キヲ以テ收贖ヲ聽ルス、其他毒藥ヲ以テ人ヲ殺傷スルアリ、人ノ衣服飲食ヲ屛去シ、若シクハ人ヲ恐迫シテ死ニ致スアリ、城内街巷ニテ車馬ヲ馳セ、或ハ家宅道徑ニ向ヒテ彈射シ、瓦石ヲ投ズルニ因リテ、人ヲ殺傷スルアリ、人ヲ殺シテ後ニ、其體軀ヲ支解スルアリ、何レモ其罪ノ輕重ニ從ヒテ刑ニ處ス、又其殺傷スル所ノ人ニ因リテ、其罪ヲ殊ニスルコトアリ、卽チ詔使官長ヲ殺傷シ、親屬ヲ殺傷シ、家人奴婢ノ其主ヲ殺傷シ、及ビ主人ノ家人奴婢ヲ殺傷スル類是ナリ、而シテ夜ニ至リ故ナク人家ニ侵入スル者アル時、主人ノ之ヲ搭殺スルハ罪ナシ、又其親屬ノ他人ニ殺サレテ私和スルハ罪アリ、私和トハ、讐家ト私ニ和同シテ、其殺サレタルコトヲ隱匿スルヲ云フ、私和セズト雖モ數日ヲ經ルマデ訴ヘザレバ、亦罪ニ處セラル、其他闘毆ニ關

鬪毆

古事類苑

法律部九

上編

殺傷

闌入例

〔政事要略二十九〕衞禁律云、闌入山陵兆域門者、笞五十、(謂周兆故爲塋域者)越垣者、杖一百、陵戶不覺減二等、謂專當者、公卿(○公卿恐主帥誤)又減一等、謂親監當者、故縱者、各與同罪、

〔日本書紀十八安閑〕元年四月癸丑朔、內膳卿膳臣大麻呂奉勅遣使求珠伊甚、伊甚國造等、詣京遲晚、踰時不進、膳臣大麻呂大怒收縛國造等推問所由、國造稚子直等、恐懼逃匿後宮內寢、春日皇后不知直入、驚駭而顚、慚愧無已、稚子直等、兼坐闌入罪、當科重罪、專爲皇后獻伊甚屯倉、請贖闌入之罪、因定伊甚屯倉、今分爲郡、屬上總國、

〔文德實錄八〕齊衡三年八月己丑、狂者藤原朝臣雄、犯入禁中、近衞陣頭射殺、左衞門左兵衞官人、見在陣者、坐令狂者入宮、

〔日本紀略一條十〕長德二年十一月十二日戊寅、今夜左近府生輕部公友、入瀧口上御廬、仍給獄所、

〔日本紀略一條十〕長德四年十月十五日庚子、左衞門陣引渡車、仍牛童給左獄、牛給左馬寮車立御書所西門前、

〔日本紀略後一條十三〕治安元年六月廿一日乙丑、上卿仰外記云、昨日亂髮男一人、入自北陣渡南殿出左衞門陣、狂人云々、

闌入處分

闌入

闌入トハ、唐衞禁律ノ註ニ、闌謂不應入而入者トアリテ、故ナクシテ入ルベカラザル處ニ擅ニ入ルヲ云フ、宮門、殿門、閤門、御在所、大中小社、山陵兆域門等ニ由リテ罪ニ輕重アリ、弓箭、刀猾、杵棒ノ類ヲ持シテ入ル者ハ、罪更ニ重シ、迷誤スル者ハ上請ス、凡テ闌入スル者ハ、閾ヲ踰ルヲ以テ限トス、而レドモ宮門、殿門等ハ、閾ニ至リテ未ダ踰エザルモ罪アリ、又垣ヲ越ル者ハ、其罪闌入ヨリ重シ、

〔法曹至要抄上罪科〕一闌入事

衞禁律云、闌入宮門、徒一年、殿門、徒一年半、閤門、徒三年、持杖者各加二等、至御在所者、絞、持杖者、斬、迷誤者上請、卽闌入御膳所者、徒二年、又云、闌入者、以踰閾爲限、至閾未踰者、宮門、杖六十、殿門以內遞〇刊本脱遷字、據一本補加一等、其越閤垣者、絞、殿垣、遠流、宮垣、近流、宮城垣、徒三年、京城垣、徒一年、

案之、禁獄舍之類也、雖不令著鈦、最可禁固、但醉亂迷惑之類、能糺問其情、事有實、暫禁便所追放、亦使廳之例也、凡件犯非一例、事情有至重、又有至輕、彼此之旨、有司能可愼搜之、

〔金玉掌中抄〕一闌入罪事

衞禁律疏云、以不可入之身、入公門幷大社門者也、御在所者、絞、持杖者、斬、迷誤者不坐、太上天皇門亦同、

〔法曹至要抄上罪科〕一闌入神社事

衞禁律云、闌入大社門者、徒一年、中社小社、各減三等、

案之、稱大社者、伊勢大神宮八幡宮也、中社者、賀茂住吉社之類也、自餘小社也、而闌入之時、皆得其罪、但中小社有所減而已、

宿藏物

康保三年閏八月廿七日　　　　　　　　左衞門權佐大江朝臣澄景奉

○

〔令義解雜十〕凡於官地得宿藏物者、謂昔人以鈍銅金銀等器、於地藏埋、及喪亂遺落、爲塁(塁恐坐字誤、坐地古文)埋沒、時代久遠、不知財主、若於官地得者、即當入其得人、其雖有識券分明、而不得子孫仍復認之也、皆入得人、於他人私地得、與地主中分之、謂若父祖自藏、而子孫見佃住者、不在中分之限、其口分職分、皆爲私地也、得古器形製異者、謂古時鐘鼎之類、形製異於常者也、悉送官酬直、謂依律、借得官田宅者、以見住及見佃人爲主、若作人及耕墾人得者、合與佃住之主中分、其私田宅各有本主、借者不施功力、而作人得者、合與本主中分、借得之人、既非本主、又不施功、不合得分也、

〔唐律疏議雜二十七〕諸於他人地內得宿藏物、隱而不送者、計合還主之分、坐贓論減三等、若得古器形製異、而不送官者罪亦如之、

〔續日本紀六元明〕和銅六年七月丁卯、大倭國宇太郡波阪鄉人、大初位上村君東人、得銅鐸於長岡野地而獻之、高三尺、口徑一尺、其制異常、音協律呂、勅所司藏之、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁十二年五月丙午、播磨國、有人掘地獲一銅鐸、高三尺八寸、口徑一尺二寸、道人云、阿育王塔鐸、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年八月十四日辛卯、參河國獻銅鐸一、高三尺四寸、徑一尺四寸、於渥美郡村松山中獲之、或曰、是阿育王之寶鐸也、

〔日本紀略九一條〕永延元年三月十六日戊寅、右大臣○藤原爲光以下參仗座、定申賀茂上社禰宜賀茂在實、於社頭鳥居側、掘往古錢七百八十二文、獻公家、其文有三、和同開珍、萬年通寶、神功開寶、召神祇官陰陽寮、令占卜之可通用否事、又令下諸道勘申之、

〔扶桑略記二十八後朱雀〕長元十年○長曆元年三月一日、攝津國獻銅金師子、掘出也、

疏議曰、得闌遺之物者、謂得寳印符節及雜物之類、即須送官、滿五日不送者、各得亡失之罪、贓重者、謂計贓重於亡失者、坐贓論罪止徒三年、私物坐贓論減二等、罪止徒二年、其物各還官主、

〔政事要略七十〕撿非違使式云、闌入宮中及北野馬牛、總送馬寮、令充公用、但彼主申者、決笞、其圍牧者五十、然後給了、

〔政事要略七十〕齊衡三年六月二日宣旨云、典侍當麻眞人浦虫宣、北野闌遺馬牛犯一度、其收人決笞五十、犯二度加一等、經十日不來、其主又犯三度者、作小印燒額、以爲官馬牛、若返給其主、及斃死者、度別錄年月日奏聞、但且行且奏、立爲恒例者、

〔政事要略七十〕寛平三年十二月十日宣旨云、典侍春澄朝臣給子宣、奉勅、宮中闌遺牛馬、隨撿非違使取送於寮撿納、若有其主請申者、一度者決笞五十免之、犯二度者准北野闌遺馬牛作小印燒額爲官馬牛、充用雜役、立爲恒例者、

〔政事要略七十〕典侍從三位藤原朝臣灌子宣、奉勅、神泉苑築垣破損、放飼馬牛、准宮中闌遺、取送左右馬寮、立爲恒例者、藏人實仰、藤原時清、

康保三年八月廿八日　左看督使津守忠連奉

〔政事要略七十〕典侍從三位藤原朝臣灌子宣、奉勅、撿非違使今日奏云、宮中闌畜、時而不絕、放牧之輩、已以數多、使等任式文決罰收人、免行其畜、至無收人、取送馬寮、須守式文、慥以勤行、而畜至○至恐主字誤、下文同、屬託之日、不辨度數之重疊、妄以免行、徒有取之名、曾無懲肅之實、又七十以上、十六以下、收人須免行、其當依法徵贖、而只從教諭、立以勘免、故實時反不能改行、于時追取闘畜之日、畜至存似、申出幼稚之兒、稱放牧之豎、不加見決、忽以原免、闘畜難絕、莫不由斯、非蒙勅裁、何行將來者、所申可然、自今以後、七十以上、十六以下收人、依法徵贖、至無收人、令焉寮差申其主、但以同畜免行者、慥銘其驗、若及三度、奏聞其由、藏人左近將監藤原信輔、實仰、

掌闌遺物

〔令義解職員一〕贓贖司
正一人、掌贓贖、○中略闌遺雜物事、謂、依捕亡令、得闌遺物、无主識認、沒官、是也、
〔令集解職員四〕伴云、妄出入爲闌也、言馬牛自逸也、忘落財物爲遺也、

闌遺物處分

〔令義解捕亡九〕凡得闌遺物者、皆送隨近官司、在市得者、送市司、謂、凡闌遺之物、皆送隨近官司、恐在市得者、納於京職、故云送市司也、其衞府巡行得者、各送本衞、所得之物、皆懸於門外、有主識認者、驗記責保、謂、記者、案記也、保者、保證也、驗記責保、不必相須也、還之、雖未有記案、謂、已失之狀、未申官司者也、但證據灼然可驗者亦准此、其經卅日無主認者收掌、仍錄物色牓門、經一周無人認者、沒官錄帳申官聽處分、沒入之後、物猶見在、謂、雖賣貿在他處、其物見在者亦是、即與律正贓義同、在主來認、證據分明者還之、
〔令義解廐牧八〕凡國郡所得闌畜、謂、闌與闌同、闌、妄也、言無主繫養、妄以放逸也、皆仰當界內訪主、若經二季無主識認者、先充傳馬、若有餘者出賣、得價入官、謂、國郡所得闌畜、各經二季無主識認、皆出賣、得價充當所徒衣粮、即餘財物亦准此法、其在京、經二季無主識認者、出賣、得價送贓贖司、後有主識認者、謂、物實見在而識認者、其馬牛已死、及餘物無實者、不得仍復認訪之、勘當知實、還其本價、
〔令義解廐牧八〕凡闌遺之物、五日內申所司、謂、此條闌遺之物者、擬畜及財物等、皆是五日之內送所司、即六日以外者、既過送限、違令及坐贓、從重科之也、其贓畜事未分決、謂、六贓馬牛等、應入之人、未分決者、即付京職養、充雜徭、若應入之人分明者、令其養之、在京者、付京職、斷定之日、若合沒官出賣、謂、出賣得價、納贓贖司也、在外者准前條、謂、先充傳馬之類、
〔政事要略七十〕雜律云、得闌遺物、滿五日不送官者、各以亡失罪論、謂、計贓重於亡失之罪、即從坐贓科之、私物坐贓論減二等、其物各還官主、
○按ズルニ、政事要略ニ雜律ヲ引キテ、各以亡失罪論ノ下缺文アリ、今左ニ唐律疏議ヲ引キテ其全文ヲ知ラシム、
〔唐律疏議雜二十七〕諸得闌遺物、滿五日不送官者、各以亡失罪論、贓重者、坐贓論、私物坐贓減二等、

闌遺物 宿藏物 併入

闌トハ、牛馬等、其主ノ繫養ヲ脫シ、妄ニ放逸スルヲ云フ、遺トハ、財物ヲ遺失スルヲ云フ、闌遺物ヲ得タルトキハ、皆五日內ニ隨近ノ官司ニ送リ、市ニテ得タル物ハ市司ニ送ル、日限マデニ官司ニ送ラザルトキハ、贓ノ多少、物ノ官私ニ由リテ、罪ニ輕重アリ、而シテ官司ニテハ其得タル物ヲ門外ニ懸ク、主ノ識認シテ求ムルコトアレバ、或ハ亡失ヲ告ゲタル案記ヲ驗シ、或ハ保證ヲ立テサセテ之ヲ還ス、前ニ未ダ亡失ノ狀ヲ官司ニ申サズトモ、證據灼然タル者ハ、此ニ准ジテ還スナリ、但シ三十日ヲ經ルマデ主ノ來リ求ムルコトナクバ、官司ニテ收掌シ、仍ホ物色ヲ錄シテ門ニ牓シ、一周年マデ人ノ認ムルコトナケレバ沒官ス、沒官ノ後ト雖モ、物猶見在シテ、主ノ來リ認メ、其證據分明ナルトキハ返ス、國郡ニテ闌畜ヲ得タルトキハ、皆當界ノ內ニ仰セテ主ヲ訪子シメ、若シ二季ヲ經ルマデ其主ノ識認スルコトナケレバ、先ヅ傳馬ニ充ツ、傳馬ニ充テヽ、倘餘レルコトアレバ出シテ賣リ、其價ハ官ニ入レ、當所ノ囚徒ノ衣粮ニ充ツ、在京ハ二季ヲ經ルマデ、主ノ識認スル、コトナケレバ、出シ賣リテ其價ヲ贓贖司ニ送ル、後ニ主ノ識認スルコトアリテ、勘當スルニ確實ナレバ、其本價ヲ還ス、

宿藏物トハ、昔人鏡劍金銀等ノ器ヲ以テ地中ニ藏埋シ、及ビ喪亂ノ爲メニ遺失シテ土中ニ埋沒シ、時代久遠ニシテ、財主ノ知ラレザルヲ云フ、官地ニ於テ得タル物ハ、皆得タル人ニ入ル、假ヒ埋ミタル人ノ子孫アリテ、鐵劵分明ナリトモ、子孫之ヲ認ムルコトヲ得ズ、他人ノ私地ニ於テ得タルハ地主ト中分ス、而レドモ父祖自ラ藏メテ、其子孫見ニ其地ニ佃シ、若シクハ其地ニ住メル者ハ中分スルコトヲ得ズシテ、其子孫ノ所有トスルナリ、又鐘鼎ノ如キ形製異常ナル古器ヲ得タルトキハ、悉ク官ニ送リ、官ヨリ其直ヲ酬ユ、

〔法曹至要抄中賣買〕一渡直半分財物燒亡事

又條○雜律云、水火有所損敗、故犯者徵償、誤失者不償、

〔唐律疏議二十七雜〕疏議曰、若故燒官府廨舍、及私家舍宅財物、有所損敗之類、各徵償、

〔續日本後紀十四仁明〕承和十一年五月辛丑、淡路國言、他國漁人等三千餘人、賁王臣家牒、群集海浦、寃凌土民、伐損山林、雲集霧散、濫惡不休、又官舍驛家、皆在海邊、而接居彼間、譬猶魚鱗、縱有火災、可難撲滅、勤加禁斷、國力不足、望請官符、皆悉禁制、官宜宜嚴加禁止、勿令更然、如不遵制旨、尚致濫猾、立加決罰、以懲將來、但所犯之罪、杖罪已上者、勘錄所犯及姓名、早速言上、

失火

かくはするぞといへば、出納いふやう、おれは何事いふぞ、とねりだつるおればかりのおほやけ人をわがうちたらんに、なにごとのあるべきぞ、わが君大納言殿のおはしませば、いみじきあやまちをしたりとも、なにごとのいでくべきぞ、しれ事いふかたゐかなといふに、舎人おほきにはら立て、おれはなにごといふぞ、わがしうの大納言をかうけにおもふか、おのがしうは、我口によりて人にてもおはするはしらぬか、わが口あけてば、おのがしうは人にてはありなんやといひければ、出納はゞらだちさして家にはひ入にけり、このいさかひを見るとて、里ぞなりの人、市をなしてきゝければ、いかにいふことにかあらんと思て、あるは妻子にかたり、あるはつき〴〵かたりちらしていひさわぎければ、世にひろごりておほやけまできこしめして、舎人をめしてとはれければ、はじめはあらかひけれども、われも罪かうふりぬべくさいひければ、ありのくだりのことを申てけり、そののち大納言もとはれなどして、ことあらはれての後なん流されける、應天門を焼て、まこと信○の大臣におほせて、かのおとゞをつみせさせて、一の大納言なれば、大臣にならんとかまへけることの、かへりてわがみつみせられけん、いかにくやしかりけん、

○

〔政事要略七十〕雜律云、失火、及非時燒田野者笞五十、注云、非時、謂三月一日以後十月卅日以前、

〔唐律疏議雜律二十七〕諸失火、及非時燒田野者笞五十、非時、謂二月一日以後、十月三十日以前、若鄕土異宜者依鄕法、延燒人舍宅及財物者杖八十、贓重者坐贓論減三等、殺傷人者減鬪殺傷二等、○疏議略其行道燃火不滅而致延燒者、各減一等、

〔法曹至要抄上罪科〕一毀燒神社事

雜律云、於官府廨院及倉庫內失火者、徒二年、在宮內加二等、延燒閣內宮闕及大社者、遠流、說者云、故燒大社者、遠流、若贓滿十端處絞刑、

中將、〇藤原常行馬にのりながらはせまうでければ、いそぎ罪せらるゝ使ぞと心えて、ひと家なきのゝしるに、ゆるし給よしおほせかけてかへりぬれば、又よろこびなきおびたゞしかりけり、ゆるされ給にけれど、大やけにつかうまつりては、よこさまの罪いできぬべかりけりといひて、ことにもとのやうに宮づかへもし給はざりけり、この事は過にし秋の比、右兵衛の舍人なるもの、東の七條に住けるが、つかさにまゐりて夜深て家に歸さて、應天門のまへをとほりけるに、人のけはひしてさゝめく、廊の腋にかくれたちて見れば、柱よりかゝぐりおるゝものありあやしくてみれば伴大納言なり、次に子なる人おる、また次に雜色とよ清といふものおる、なにわざしておるゝにかあらんとつゆ心もえで見るに、この三人おりはつるまゝに、はしることかぎりなし、南の朱雀門ざまに走ていぬれば、この舍人も家ざまにゆくほどに、二條堀川のほど行に、大内のかたに火ありとて大路のゝしる、見かへりてみれば、內裏の方とみゆ、走かへりたれば應天門のなからばかりもえたるなりけり、このありつる人どもは、この火つくるとてのぼりたりけるなりと心えてあれども、人のきはめたる大事なれば、あへて口よりほかにいださず、そののち左のおとゞのし給へることゝて、罪かうぶり給べしといひのゝしる、あはれしたる人のある物を、いみじきことかなとおもへど、いひいだすべきことならねば、いとほしと思ひありくに、おとゞゆるされぬときけば、つみなきことはつひにのがるゝものなりけりとなんおもひける、かくて九月ばかりになりぬ、かゝるほどに、伴大納言の出納の家のをさなき子と、舍人が小童といさかひをして、出納のゝしれば、いでゝとりさへむとするに、この出納おなじくいでゝ見るによりて、ひきはなちてわが子をば家に入て、この舍人が子の髮を取てうちふせて、しぬばかりふむ、舍人おもふやう、わが子も人の子もともに童部いさかひなり、たゞさてはあらで、我子をしもかくなさけなくふむは、いとあしき事なりとはらだゝしうて、まうとは、いかでなさけなく、をさなきものを

幷左右樓等、不慮之外留忽然燒盡多利、因茲日夜無間久憂禮比念保之熱加比御坐須、然間留、備中權史生大宅鷹取告言世久、其大納言伴宿禰乃所爲奈利、爰或諸人等、又並口天無疑留久倍告言巳止在、然止毛件事波世留毛不在止思保之食天毛、那日月乎延引都々、早留罪那倍不賜御坐都留、而今勅使等鞫問志天奏須久、其初問伴宿禰留、毎事固爭天不承伏、從者生江恒山、伴清繩等乎拷訊留留、伴宿禰身自波不爲志天、息子右衞門佐中庸等加爲奈利介利、雖然清繩恒山等加所申口狀乎以天、中庸加申辭留參驗須留、留伴宿禰乃初所爭言乃殺人留事、既知巧詐、卽中庸波父之教命乎受天所爲止云事無疑、仍與明法博士等勘定留、大逆之罪、其雖可避、須同久斬刑留當處止奏聞世利、然禮毛止別留依有所思奈毛斯罪乎一等減天、遠流罪留治賜布、又同謀從者豐城等三人、幷其兄弟子孫等從遠流倍賜波止久宜、天皇我大命乎衆聞食止宣、廿五日丁卯、中庸男元孫年八歲、叔孫年五歲、並隨父遣配所、詔愍其幼稚、自道召還焉、廿九日晦辛未、大祓於朱雀門前、以配流罪人也、

〔宇治拾遺物語十〕今はむかし、水の尾の御門〇清和の御ときに、應天門やけぬ、人のつけたるになんありける、それを伴善男といふ大納言、これは信の大臣のしわざなりと大やけに申ければ、そのおとゞをつみせんとせさせ給ふけるに、忠仁公〇藤原良房世の政は御おとうとの西三條の右大臣〇藤原良相にゆづりて、白川にこもりゐ給へる時にて、この事をきゝおどろき給て、御烏帽子直垂ながら移の馬にのり給て、のりながら北の陣までおはして、御前にまゐり給て、この事申人の讒言にも侍らん、大事になさせ給こと、いとことやうの事なり、かゝることは返々よくたゞして、まことゝ空ごとゝ、あらはしておこなはせ給べきなりとそうし給ければ、まことにもとおぼしめしてたださせ給に、一定もなき事なれば、ゆるし給よし仰よとある宣旨うけ給てぞおとゞはかへり給ける、左のおとゞ〇源信はすぐしたる事もなきに、かゝるよこさまの罪にあたるをおぼしなげきて、白の装束して、庭にあらごもをしきて、いでゝ天道にうたへ申給けるに、ゆるし給ふ御使に頭

有所爲而放火

〔續日本紀 三十二 光仁〕寶龜四年八月庚午、諸國郡司燒官物者、主帳已上、皆解見任、其從政入京、及獲放火之賊、功効可稱者、量事處分、又譜第之徒、情挾覬覦、事涉故燒者、一切勿得銓擬、乃簡郡中明廉清直、堪時務者、恣令任用、當國軍毅、不救火者、亦准郡司解却、〇又見類聚三代格

〔類聚三代格 十二〕太政官符

應加禁斷事

右被內大臣藤原魚名〇 宣偁、奉勅、水旱不時、神火屢發、寔緣國郡司等、不修職務、是以寶字七年九月一日、頒下却拙〇拙原作狀、據一本改用良之格、今聞奸枉之輩、謀奪郡位、〇位恐當作任寄言神火、多損官物、自今以後、若有此類、不論首從、一皆打殺、雖逢恩降、勿預赦例、苗裔之現、永絕譜第、其空納還燒、加刑亦同、

寶龜十年十月十六日

〔三代實錄 十三 清和〕貞觀八年八月三日乙亥、左京人備中權史生大初位下大宅首鷹取、告大納言伴宿禰善男、右衞門佐伴宿禰中庸等、同謀行火、燒應天門、　四日丙子、禁鷹取身、下左撿非違使、　七日己卯、勅參議正四位下行左大辨兼勘解由長官南淵朝臣年名、參議正四位下行右衞門督兼讚岐守藤原朝臣良繩、於勘解由使局、鞫問大納言正三位兼行民部卿太皇太后宮大夫伴宿禰善男、　廿九日辛丑、禁右衞門佐從五位上伴宿禰中庸於右衞門府、是日拷訊殺大宅鷹取女子者生江恒山、　卅日壬寅、拷訊與恒山同謀者伴清繩、並是大納言伴宿禰善男之僕從也、　九月廿二日甲子、大納言伴宿禰善男、右衞門佐伴宿禰中庸、同謀者紀豐城、伴秋實、伴清繩等五人、坐燒應天門、當斬、詔降死一等、並處之遠流、善男配伊豆國、中庸隱岐國、豐城安房國、秋實壹岐島、淨繩佐渡國、相坐配流者八人、從五位上行肥後守紀朝臣夏井配土佐國、從五位上行下野守伴宿禰阿男〇阿男一本作河男能登國、上總權少掾正八位上伴宿禰夏影越後國、伴多滿常陸國、紀春道上總國、伴高吉下總國、紀武城日向國、伴春範薩摩國、公卿就太政官曹司廳、會文武百官宣制、其詞曰、天皇我大命良萬止宣久、去閏三月十日之夕爾、應天門

失火者、只奪其年料塡之、

弘仁三年八月十六日〇又見日本後紀

（類聚國史八十四政理）弘仁七年八月丙辰、公卿奏言、上總國夷灊郡官物所燒、准頴五十七萬九百束、正倉六十宇、刑部省斷罪言、撿燒損使散位正六位上大中臣朝臣井作等申、稅長久米部當人、臨失火時、逃亡自殺、推量意況、豈無所犯、忽自引乎、可謂當人侵盜官物、謀而放火者、省按律、當人所犯、罪當絞刑、而其身自殺、仍更不論、但新任守小野朝臣眞野、介茨田宿禰文足等就政日淺、此火之起、不緣不肅、仍按延暦五年八月七日格、不問神災人火、令當時國司郡司、及稅長等已上、依數塡備、然則雖實神災、猶令當時公廨塡納、蓋以公廨之設、本爲欠員故也、須在任國司郡司、及稅長等、共塡備之者、省斷如此、臣等尋撿法意、外從五位下守大判事物部中原宿禰敏久曰、法家者、如此事類、禁得其身、則自備償、若貲財之盡、役身相折、然而不得過五歲、年限既滿、贓物未塡、即從原免、斯則公家、有損無益、是以延暦五年格、令不論神災人火、以當時公廨塡之、良□□負之設、在後人也、前人去職、不更追咎者、官議商事不穩便、所以者、同格云、正倉被燒、未必由神、何者譜第之徒、害傍人而相燒、監主之司、避虛納以放火因茲觀之、格之大體、責歸虛納也、又選用郡司、前人之所行、□司乍到、雜務未分、雖領印鎰、交替未畢、在於□□間、會逢失火、前司則寄言去職、專避其咎、新任則□□當時獨以勞塡、夫虛納者舊時之怠也、公廨者後□之料也、有怠則默然免罪責、無怠即每年奪料物、以無怠之料、備有怠之損、事之爲緒、不近物情、今臣等商量、事有大小、政有閑忙、是以分付受領、既立程期、今前司全成、雖去職、是收納之當時也、後任眞野、雖領印鎰、而見災之當時也、驗格意、則疑涉虛納、何者行火自殺、責以塡備、則不緣不肅、何者到任日淺、凡交替之事、限內未畢、則宜言其由、縱令無故過百廿日、然後火起、則後任官司、更無所辭、而就任以降、十有餘日、歷任不幾、至于獨塡、誰甘心前怠後責、伏聞天裁者、奏可、　九月丁亥、勅、上總國夷灊郡官物五十七萬餘束、既被燒失、今緣有所念、醫師已上、咸從免除、郡領已下、依例令塡、

失官物、其郡司者、不在會赦之限、　八月甲子、勅曰、正倉被燒、未必由神、何者譜第之徒、害傍人而相燒、監主之司、避虛納以放火、自今以後、不問神災人火、宜令當時國郡司塡備之、仍勿解見任絕譜第矣、

〔新定內外官交替式〕應早作○作字據目錄補土屋及被燒損官○官下目錄有物字稻塡納事

右延曆二年九月十九日下符偁、頃年諸國、每有人火、詐稱神災、損耗官物、宜仰諸國、每郡先作土屋一間、以且收所有穀、如有遺者、隨其多少、每年加作者、今被右大臣宣偁、奉勅、土屋之設、本防火災、如能作了、變了自可無損官物、而今諸國火災、其數寔繁、誠由國司怠慢以致此也、宜重作下所遺土屋、限來年內、並令作訖、仍至限日遣使巡撿、如有習常緩怠未作了者、專當國郡司、必解見任、又屋上塗遭雨即剝、仍權塗土、蓋草、以蔽風雨、而諸國不練此意、牢固修葺、此則抱薪救火、返招損害、宜先後土屋之上、一皆葺板、儻遭火災、令易壞撤、又正倉被燒、未必由神、何者諸譜第之徒、害傍人而相燒、監主之司、避虛納以失火、自今以後、不問神災人火、宜令當時國司郡司、及稅長等、一物已上、依數塡納、訖即具狀申上、仍勿解見任絕譜第、其被差宛雜使、不遭火災者、不在塡限、

延曆五年八月七日

〔類聚三代格八〕太政官符

應塡納燒亡官物事

右撿案內、太政官去延曆十二年四月廿三日、下五畿內七道諸國符偁、被右大臣○藤原繼繩宣偁、奉勅、撿去延曆五年六月一日、亦同年八月七日、兩度官符、如有燒亡官物、以國司公廨塡之者、事乖弘恕、宜並停止、但自今以後、有如此類、必據法推決、以懲將來、俾監臨之官、勤肅所部、守掌之人、塡其防衞者、今右大臣○藤原內麻呂宣、奉勅、頃者諸國司等、不勤肅淸、屢致失火、爲避其責、恒稱神火、官物之損不可勝計、救弊之道、事資改張、自今以後、宜依延曆五年八月七日格、不問神火人火、令當時國司郡司、及稅長等、一物已上、依數塡備、其被差雜使、出國境外、不遭火災者、不在塡限、但國司者、以任中公廨塡之、若遷替年有

以前、奉勅如件、

寳龜四年八月廿九日

〔類聚三代格十二〕勅、如聞比來京中、盜賊稍多、掠物街路、放火人家、良由職司不能肅淸、令彼凶徒生茲賊害、自今以後、宜仰隣保、撿察非違、一如令條、其遊食博戲之徒、不論蔭贖、決杖一百、放火劫略之類、不必拘法、懲以殺罰、勤加捉搦、遏絕奸宄、主者施行、

延曆三年十月廿日〇又見續日本紀

〔類聚三代格十二〕太政官符

應搜捕盜賊事

右撿案內、延曆三年十月卅日勅書偁、如聞比來京中、盜賊稍多、掠物街路、放火人家、良由職司不能肅淸、令彼凶徒生茲賊害、自今以後、宜仰隣保、撿察非違、一如令條、其放火劫略之類、不必拘法、懲以殺罰者、又太政官去寳龜四年八月廿九日符偁、奉勅、如有捕獲行火盜賊、勘當得實者、宜示衆搭殺以懲後惡者、被右大臣〇藤原三守宣偁、奉勅、如聞奸宄之賊、寔繁有徒、或闇夜放火、或白晝奪物、所由不勤糺捕、百姓苦彼凶毒、靜言流弊、情切納隍、宜仰有司、嚴加督察、搜認閭里、隨獲且進、莫作留連、縱令村邑之中、有結黨遊食及贓狀不露景迹可疑者、捕身問訊、詳盡情理、得實之日、具狀申送、事緣切害、不得疎略、

承和七年二月廿五日〇又見續日本後紀

〔續日本紀三十二光仁〕寳龜四年二月辛亥、下野國災、燒正倉十四宇、穀糒二萬三千四百餘斛、　六月壬子、上野國綠野郡災、燒正倉八間、穀穎卅三萬四千餘束、

〔續日本紀三十三光仁〕寳龜五年七月丁巳、陸奧國行方郡災、燒穀穎二萬五千四百餘斛、

〔續日本紀三十九桓武〕延曆五年六月己未朔、勅、……育百姓、糺察部內、國郡官司、同職掌也、然則國郡功過、共所預知、而頃年有燒正倉、獨罪郡司、不坐國守、事稍乖理、豈合法意、自今以後、宜奪國司等公廨、總塡燒

放火而盗

日、藏人辨爲御使參殿下、則歸參、其後下宣旨云、前下總守宗盛放火、欲燒舍弟散位盛基宅、宜仰明法博士等勘申可當罪名者、則下藏人辨了、

〔百練抄 八 高倉〕承安三年十月九日、法眼覺與配流播磨國、依燒多武峯也、

〔律疏 賊盗〕凡故燒人舍屋及積聚之物而盗者、計所燒減價併贓、以強盗論、賊人詐許、千端萬緒、濫竊穿寄、觸塗巃嵸、或有燒人舍屋、及積聚之物、因卽盗取其財、計所燒之物減價、併於所盗之物、計贓以強盗論、十五端絞、若有持仗燒人舍宅、因卽盗取其財、或燒傷物主者、依雜律、故燒人舍屋、徒三年、不限強之與竊、然則持仗燒舍止徒三年、因卽盗取財物、便是元非盗意、雖復持仗而行、事同先強後盗、計贓以強盗科罪、火若傷人者、同強盗傷人法、

○按ズルニ、減價ハ左ニ引ケル、政事要略ナル厩庫律ノ文ニテ明ナリ、

〔政事要略 七十〕播磨豊忠問 寛弘二年二月九日、明法博士令宗朝臣允正答、

假令隨近人々之牛、相當草干之時、不令繫立、放飼山野、然間二月十六日、依例燒播野、爰件人々牛、幷豊忠牛都合四頭慮外燒死、仍彼牛主等責可辨之由、償不之理、謹請明判、謹問、

答厩庫律云、故殺官私馬牛者、徒一年、其誤殺復不坐、但償其減價、疏云、減價、謂畜產直布十端、殺訖唯直布兩端、卽減八端價、殺減八端償八端之類、○下略

〔法曹至要抄 上 罪科〕一放火事

雜律云、故燒官府廨舍及私家舍宅若財物者、徒三年、贓滿五端、近流、十五端絞、殺傷人者、以故殺傷論、

刑部格云、寶龜四年八月廿九日官符云、如有捕獲行火盗賊、勘當得實者、宜示衆格殺懲後惡、案之、放火之輩、依爲死罪、須送刑部省令決本罪也、然而使廳之流例、事輕之輩禁政所、事重之者下獄舍、皆依爲散禁歟、抑於使廳雖有被行例、猶至于死罪囚者、別當每度可經奏聞也、而近代都無此事、

〔類聚三代格 十二〕太政官符

一如有捕獲行火盗賊、勘當得實者、宜示衆格殺、以懲後惡、○中略

放火 失火併入

故ラニ人ノ舍屋及ビ積聚ノ物ヲ燒キテ、卽チ其財物ヲ盜ム者ハ、燒ク所ノ物ノ減價ヲ計ヘ、贓ニ倂セテ、强盜ヲ以テ論ジ、盜マズトモ故ラニ燒キテ、其贓十五端ニ滿ツトキハ絞ニ處シ、人ヲ殺傷スルトキハ、故殺傷ヲ以テ論ズ、減價トハ其直百圓ノ物ヲ燒キタランニ、其燒ケタル物、猶ホ八十圓ノ價アルトキハ、本價ヨリハ二十圓ヲ減ズレバ、其減ズル所ノ二十圓ヲ指シテ減價ト云フナリ、光仁天皇ノ寶龜四年ニ、行火ノ盜賊ヲバ衆ニ示シテ格殺スルノ法ヲ立テタリ、而シテ官物ヲ燒亡スルニ至リテハ、淳仁天皇ノ天平寶字ヨリ以後、國郡司ノ見任ヲ解却シ、或ハ公廨ヲ以テ補塡セシムル等ノ制ヲ設ケタリ、當時人ヲシテ罪ニ陷ラシメ、之ニ代ラントシテ放火シ、或ハ虛納ノ責ヲ避ケントシテ放火シ、之ヲ神火ニ託スル等ノ弊アリ、失火ニモ亦罪アリ、又火ヲ以テ損敗スルコトアルトキハ、故ラニ犯ス者ハ徵償シ、誤失スル者ハ償ハザルナリ、

〔三代實錄 三十六陽成〕元慶三年十二月十五日庚子、太政官奏曰、○中略但馬國氣多郡人、彼國前醫師從八位上日置部是雄、無位日置部衣守、放火燒不動穀二千三十八斛五斗並倉四、○刊本四作三、據類聚國史改依格應格殺、○中略詔曰、死罪宜降一等、處之遠流、

〔續日本後紀 七仁明〕承和五年二月丁酉、畿內諸國、群盜橫行、放火殺人、下知國司、令以糺勘、

〔日本紀略 圓融〕天延三年十一月十四日壬午、丑剋朔平門右衞門陣屋放火、吉上時光禁獄、

〔中右記〕永久二年六月廿一日、巳時許參院、○白河召御前宗盛下女放火事、殿下○藤原忠實令申給旨奏聞、仰云、召明法博士信貞、內々可尋罪名事、則召信貞尋問、大略流罪者、奏件旨了、此次八幡放火者、問信貞之處、如承者、可被免者歟、奏件旨之處、仰云、猶尋遣八幡、召同類、猶一旦可尋、其後可免歟、 七月二

かうの殿〇義朝の君達おはする物を、まことやらん、ひでひらもくらまと申山寺に、左馬のかうの殿の君達おはしますなれば、だざいの大二清盛の日本六十六か國をゑたがへんと常はの給ふなるに、源氏の御君達を一人下し參らせ、いはゐの郡に京をたて、二人の子共を兩國のりやうゑゆさせて、ひでひら生たらん程は、大炊介に成て、源氏を君とかしづき奉り、うへみぬわしのごとくにてあらばやとの給ひ候物をと云奉り、か〻はかし參らせ、御供してひでひらのげんざんに入、引出物取てとく付ばやと思ひ、〇下略

此ハ何事ニテ取スルニカ有ラムト思フ程ニ、男此ノ物ヲ取ルマヽニ逃ル樣ニシテ去ヌ、其ノ後ニ聞ケバ、早ウ此男ノ謀タル樣ハ、此ハ主ノ女ヲ美濃ノ國ニ將行テ賣ツル也ケリ、然テ目ノ前ニ直ヲ取テ行也ケリ、女此ク聞テ奇異ト思テ、此ハ何カニ我ヲバ然々云テコソ山寺ヘトテ將來タレ、何カニ此ハト泣々ク云ヘドモ、耳ニモ不聞入ズシテ、男ハ直ヲ取テ馬ニ還乘テ馳テ去ヌ、然レバ女泣居タル程ニ、其ノ家ノ主、女ヲ置得タリト思テ、女ニ事ノ有樣ヲ問ケレバ、女然々也ト本ヨリノ有樣ヲ語リ涙ヲ流シテ泣ケレドモ、家ノ主モ耳ニモ不聞入テ有ケルニ、女只獨ニテ可云合キ人モ無ク、可逃キ樣モ無カリケレバ、泣悲ムデ云ケル樣、我レヲ買取リ給テ更ニ其ノ益不有ジ、極ク我レヲ殺シ給フトモ、我ガ世ニ可有クハコソト云テ泣臥ニケリ、其後物ナド持來テ食セケレドモ露起上ルコトモナカリケリ、云ハムヤ努々物食フ事ハ无カリケレバ、家主モ思ヒ煩テ口有ケルニ、亦從者共然リトモ暫コソ歎キ臥タラメ、遂ニハ起上テ物モ食テム、只御覽ゼヨナド口口ニ云ケレドモ、日來ヲ經テ更ニ不起上ザリケレバ、希有也ケル奴ニ被口テナド思ヒ云ケル程ニ、此ノ女遂ニ來タリシ日ヨリ七日ト云フニ思ヒ死ニ死ケリ、然レバ家主云フ甲斐无クテ止ニケリ、此レヲ思フニ、尙極ク事吉ク云フトモ、下衆ノ云ハム事ニハ不付マジキ也、此ノ事ハ其ノ家主ノ京ニ上テ語ケルヲ聞傳ヘテ、糸奇異ク哀レ也ケル事カナト思テ、此ク語リ傳ヘタルトヤ、

〔義經記 二〕吉次が奥州物語の事

かくて年もくれぬれば御年十六にぞ成給ふ、〇源義經多門の御前に參りて、しよさしておはしける所に、其比三條に大ふく長者有、其名を吉次のぶたかとぞ申ける、毎年奥州に下る金あき人なりけるが、くらまを信じ奉りける間、それも多門に參りてねんじゆして居たりけるが、此をさない人を見奉りて、あらうつくしの御ちごや、いかなる人の君達やらん、しかるべき人にてましまさば、大衆もあまた付參らすべきに、度々見申に唯一人おはしますこそあやしけれ、此山に左馬の

雜載

賤罪一等、爲妻妾子孫、又減一等、卽是從賤爲妻妾、減罪二等、通初買減三等、假有知略良爲婢合流、買爲婢者減一等、買爲家人減二等、娶爲妻妾減三等、擧斯一節、卽買餘色、減罪可知、

〔日本書紀持統三十〕五年三月癸巳、詔曰、若有百姓、弟爲兄見賣者從良、若子爲父母見賣者從賤、若准貸倍沒賤者從良、其子雖配奴婢、所生亦皆從良、

〔續日本紀文武三〕大寶三年四月戊午、安藝國、被略爲奴婢者、二百餘人、免從本籍、

〔續日本紀聖武十一〕天平六年七月辛未、詔曰、〇中略可大赦天下、〇中略掠良人爲奴婢、〇中略不在赦例、

〔今昔物語二十九〕近江國主女將行美濃國賣男語第廿四

今昔、近江國□□郡ニ住ム者有ケリ、未ダ年モ不老ヌ程ニ失ニケレバ、其ノ妻モ未ダ年卅ノ程ニテゾ有ケル、子一人モ不產ザリケリ、京ノ人ニテゾ有ケル、其ノ夫ノ失タルヲ強ニ戀悲ミケレドモ甲斐ナクテ、京ニ上ナムト思ヒケレドモ、京ニモ可打憑キ人モ不思エザリケレバ、思ヒ線テ有ケル程ニ、年來付仕ヒケル男ノ、萬ニ付テ後安ク翔ケレバ、夫失テ後ハ此レヲ打憑テ、何事モ云合セテ過ケルニ、此ノ男ノ云ク、此テ徒然ニテ御ムヨリハ、此ヨリ近キ山寺ノ候フニ御マシテ、暫ク御湯ナドモ浴サセ給ヒ、御行ナドモ心靜カニ爲サセ給ヘカシト勸メケレバ、女實ニ然モ有ル事也ト思テ、然樣ニ近キ所ナラバ行ナムト云ケレバ、男近キ所ニ候フ、何デカ愚ナラムコトハ申候ハムト答フレバ、女京ニモ上ナムト思ヘドモ、京ニモ祖共モナク、類親モ无レバ、然樣ナラム所ニ行テ、尼ニモ成ナムト思フトゾ云ケレバ、男然テ御マサム間ノ事ハ、己コソハ線奉ラメト云ヘバ、女只出立ニ出立ツ、女ヲバ馬ニ乘セテ、男ハ後ニ立テ行ケルニ、近キ所トハ云ヒツレドモ、遙ニ遠ク將行ケレバ、女此ハ何カニ此クハ遠キゾト云ケレバ、只御マセ、ヨモ愚ナル事ハ不仕ラジト云ヲ、三日將行ニケリ、然テ人ノ家ノ有ル門ニ女ヲバ馬ヨリ下シテ、男ハ家ノ內ニ入ヌ、女此ハ何カニ爲ルコトヤラムト心モ不得ヌドモ、待立テル程ニ、男返リ出テ女ヲ內ヘ將入ヌ、板敷ノ有ルニ疊敷タル所ニ居エタレバ、更ニ心モ不得テ女見居タレバ、此ノ男ニ家ヨリ絹ヤ布ナドヲ取ラス、

者、各減一等、其賣餘親者、各從凡人和略法、其賣妻妾爲婢者、妻妾雖是二等、不可同之卑幼、故諸條之內、每別稱夫、本犯非應義絕、或准二等之幼、若其賣妻妾爲婢、原情卽合離異、夫自嫁者、依律兩離之、賣之充賤、何宜更合此條、賣二等卑幼、妻妾固不在其中、只可同彼餘親、從凡人和略之法、其於毆殺、還同凡人之罪、故知賣妻妾爲婢、不入二等幼(幼上恐脫卑字)之科、名例云、家等卑幼、及兄尊長、此文賣二等卑幼、及兄弟孫、外孫子孫、(孫外孫子孫恐子孫外孫誤)被賣之人、不合加罪、爲其卑幼合受處分、故又例云、本條別有制、與例不同、依本條、其賣餘親、各從凡人和略法、既同凡人爲法、不合止坐家長、

○按ズルニ、本文名例云以下、誤脫頗ル多シ、因リテ唐律疏議ヲ引キテ、參考ニ備フルコト左ノ如シ、

〔唐律疏議二十賊盜〕問、名例律云、家人共犯、止坐尊長、未知此文和同相賣、亦同家人共犯以否、答曰、依例、本條別有制、與例不同、依本條、此文賣期親卑幼、及兄弟子孫外孫之婦、賣子孫及己妾子孫之妾、各有正條、被賣之人、不合加罪、爲其卑幼合受處分故也、其賣餘親、各從凡人和略法、既同凡人爲法、不合止坐家長、

〔政事要略八十四〕弘仁刑部式云、父母緣貧窮、賣兒爲賤、其事在己丑年以前者任依契、若賣在庚寅年以後、皆改爲良、不罪、不須論罪、其大寶二年制律以後、依以科斷、

知情受分

〔律疏賊盜〕凡知略知誘、及強盜竊盜、而受分者、各計所受贓、准竊盜論、減一等、知略和誘人、及略和誘奴婢、或強盜竊盜、若知情而受分者、爲其初不同謀、故計所受之贓、准竊盜論減一等、假有知人強盜、受布五端者、減竊盜一等、合杖一百之類、知盜贓而故買者、坐贓論、減一等、謂知強竊盜贓、故買十端、合杖九十、知而爲藏者、又減一等、知盜贓而故藏、又減一等、合杖八十、其餘犯贓、故買及藏者、律無罪名、從不應爲、流以上從重、徒以下從輕、

知情故買

〔律疏賊盜〕凡知略和誘和同相賣、及略和誘奴婢而買之者、各減賣者罪一等、謂知略和誘和同相賣等情、而故買之者、各依其色、准前條減賣人罪一等、假有人知略賣其人爲奴婢而買之者、從流上減一等、合徒三年之類、知祖父母父母賣子孫、買者各加賣者罪一等、謂略和誘他人而賣得罪已重、故買者減賣者罪一等、若知祖父母賣子孫、得罪稍輕、故買者加賣者罪一等、縱有父祖賣子孫爲奴婢、合徒一年、知而買之者、加罪一等、合徒一年半之類、展轉知情而買、各與初買者同、假有甲知他人祖父賣子孫而買、復賣與乙、乙又賣與景、展轉情知賣子孫之情而買者、甲乙景、俱合徒一年半、雖買時不知、買後知而不言、亦以知情論、初買之時、不知略和誘和同相賣之情、買得之後訪知、卽須首告、不首告者、各同初買之罪、若知略和誘充賤、而娶爲妻妾者、律云、知略和誘和同相賣、而買之者、各減賣者罪一等、其略爲家人、減爲

賊盜律云、略人略賣人、爲奴婢者遠流、爲家人者、徒三年、爲妻妾子孫者、徒二年半、未得各減四等、不和爲略、和誘者、各減一等、又云、略奴婢者、以強盜論、和誘者、以竊盜論、各罪止中流、

案之、勾引人之罪、若爲奴婢之類者、比強竊盜、若爲凡人者、隨刑可處徒流之科、如此之類、使廳之例、或令候獄舍幷政所屋而已、

略奴婢

〔律疏　賊盜〕凡略奴婢者、以強盜論、和誘者、以竊盜論、謂計贓、各依強竊爲罪、其贓並合倍備、各罪止中流、卽奴婢別齎財物者、自從強竊法、不得累而科、謂奴婢身所著衣服、外乘有財物、自從強竊法、因略者、一尺徒三年、二端加一等、和誘者、一尺杖六十、一端加一等、各從一重科之、並不得將奴婢之身、累併財物同斷、故云、自從強竊法、不得累而科之、其奴婢身資別財、略誘不知有物、止得略誘本罪、贓不合科、如其知者、雖奴婢將行、各同強竊法、其略誘良人或家人、衣服外有財者、亦同強竊盜法、不取入己、良人家人、合有資財、不在坐限、若得逃亡奴婢、不送官、而賣者以和誘論、凡捉獲逃亡奴婢、依令五日內、合送官司、其有不送而私賣者、以和誘論、藏隱者、減一等坐之、謂減盜罪一等坐之、卽私從奴婢、買子孫、及乞取者、准盜論、謂或買或乞、各平所乞買奴婢之價、計贓准盜論、並不在除免倍贓加役流之例、乞賣者、與同罪、謂奴婢將子孫乞人、及賣與人、並與買乞者同罪、雖以爲良亦同、謂乞買者、雖將爲良人、亦與充賤罪同、

〔壬生家文書　二〕太政官符　山陰道諸國司

　雜事拾貳箇條〇中略

一應搦禁勾引諸人奴婢賣買要人輩事

右同宣、〇左大臣藤原經宗奉勅、如聞、勾引諸人之奴婢、賣買要人之輩、充滿京畿云々、結構之旨、罪科不輕、宜令諸國搦禁件輩者、

以前條事如件、諸國承知、依宣行之、符到奉行、

　　修理左宮城判官正五位下行左大史兼播磨介小槻宿禰　華押

正四位下行左中辨兼紀伊權守藤原朝臣　華押

　治承二年七月十八日

賣親屬爲奴婢

〔律疏　賊盜〕凡賣二等卑幼、及兄弟孫外孫、爲奴婢者、徒二年半、二等卑幼、謂弟妹、若兄弟之子者、子孫者、徒一年、卽和賣

略人
略賣人

略人

人ヲ略ストハ勾引（カドハカシ）ノコトニテ、和セザル者ヲ方略ヲ設ケテ誘キ取ルヲ略ト云ヒ、略シテ後ニ之ヲ賣ルヲ略賣ト云フ、又和誘スルアリ、相誘クト雖モ和同ニ出タルヲ云フ、和同シテ相賣ルアリ、賣ル者ト賣ラル丶者ト元謀兩和スルヲ云フ、略シ和誘スルニハ自ラ占メ、若シクハ人ニ賣リテ、妻妾、子孫、弟姪、家人、奴婢トスルアリ、他人ノ奴婢家人ヲ略シ和誘スルアリ、逃亡ノ奴婢ヲ得テ賣ルアリ、藏匿スルアリ、私ニ奴婢ニ就キテ人ノ子孫ヲ買ヒ、及ビ乞取スルアリ、己ガ親屬ヲ賣リテ奴婢トスルアリ、略スルニ因リテ人ヲ殺傷スルアリ、略シ和誘スルヲ知リテ分ヲ受ケ、若シクハ買フ者アリ、是皆盗ノ類ナリ、而シテ十歳以下ノ人ハ、和スト雖モ亦略法ニ同ジ、

〔律疏 賊盗〕凡略人略賣人、（不和爲略、年十歳以下、雖和亦同略法、）爲奴婢者遠流、（注云、年十歳以下、雖和亦同略法者、謂十歳以下、未有所知、易爲誑誘、雖共安和、亦同略法、）爲家人者、徒三年、爲妻妾子孫者、徒二年半、（略人爲家人者、或有状驗可憑、或勸詐知實不以爲奴者、爲妻妾子孫者、爲弟姪之類亦同、）未得各減四等、因而殺傷人者、同強盗法、（謂因略人拒鬪、或殺若傷、同強盗法、既同強盗之法、因略殺傷傍人、亦同、）和誘者、各減一等、若和同相賣、爲奴婢者、徒三年、（和同相賣、謂元謀兩和、相賣爲奴婢者、賣人及被賣人、罪無首從、皆得此坐、其數人共賣他人、自依首從之法、）賣未售者、減一等、（謂和同相賣、未售事發者、）下條準此、（謂下條得己奴婢、而賣未售、及賣二等卑幼、及兄弟孫外孫、爲奴婢、未售者、亦減一等、故云準此、）即略和誘及和同相賣他人家人者、各減良人一等、（謂略他人家人、爲奴婢者、徒三年、略家人、還爲家人者、令徒二年半、略爲妻妾子孫者、徒二年、和誘家人、爲奴婢、徒二年半、還爲家人、徒二年、爲妻妾子孫、徒一年半、若共他人家人和同相賣爲奴婢、徒二年半、爲家人者、徒二年、故云、各減良人一等、其略和誘五等以上親家人、律雖無文、令有任主驅使、不可同於凡人、亦須依盗法而減、五等親家人、減凡人家人一等、四等親減二等、三等親減三等、二等親減四等、若家人被人所誘、將爲妻妾子孫、而和同逢告者、名例律、共犯罪隨從者、減一等、背主受誘、即當此條、準其罪坐、減誘者罪一等、自餘受誘、律無正文者、並依徒坐科罪、若逃亡罪重者、依例當條雖有罪名、所爲重者、自從重、）

〔法曹至要抄 上 罪科〕一勾引人事

罪人寄止

內、必置保長、察以行來、詳以去就、○中略

貞觀九年三月廿七日○又見三代實錄

〔法曹至要抄上罪科〕一 失囚故縱事

捕亡律云、知情藏匿罪人、若過致資給、令得隱避者、各減罪人罪一等、○捕亡律以下見僧尼令集解又注云、藏匿無日限、過致資給亦同、若卑幼藏隱、匿狀已成、尊長知而聽之、獨坐卑幼、家人奴婢首隱、主後知者、與同罪、卽尊長匿罪人、尊長死、卑幼仍匿者、減五等、尊長死後雖經匿、但已遣而事發、及匿得相容隱者之侶、亦不坐、罪、四等以下親、亦同減例、若赦前藏匿、而罪人不合赦免、赦後匿如故、不知人有罪容寄、後知而匿者、皆坐如律、其展轉相使而匿罪人、知情者皆坐、不知者勿論、又云、罪人有數罪者、止坐所知、

之人、配徒之輩、宜犯徒一年者加半年、犯二年三年者各加一年、若犯三流者各役六年、獄令云、流徒罪居作者、着鈦若盤枷、不得着巾、判事式云、平贓布者、長五丈二尺、廣二尺四寸、爲一反者、推彼贓布、數不滿十五反、准犯依律、已及流刑、今任刑配徒、早應役六年、〇中略

以前今月口日、可着鈦左右獄四、勘申如件、

右衞門府生飛鳥部好兼〇以下署名略

長德二年十二月十七日

盜犯人容止

〔律疏賊盜〕凡部內有一人爲盜、及容止盜者、里長笞卅、謂國郡鄕里所管之內、百姓有一人爲盜、及外盜入境、所部容止、所管里長笞四十、坊令坊長亦同、三人加一等、郡內一人笞卅、四人加一等、謂郡內一人行盜、郡領合笞卅、有五人行盜、卽笞卅之類、部界內有盜發及殺人者、一處以一人論、殺人者仍同強盜之法、謂一處盜發、同部內一人行盜、一處殺人、仍從一人強盜之法、下文強盜者、加一等、卽是部內有一人強盜者、里長等笞五十、雖非部內人、但當境強盜發、亦准此、容止殺人賊者、亦依強盜之法、國隨所管郡多少、通計爲罪、各罪止徒二年半、強盜者、各加一等、以官長爲首、佐職爲從、但宜風導俗、肅淸所部、長官之事、故以長官爲首、卽國守郡領闕者、以次官當之、卽盜及盜發殺人後、卅日捕獲、他人自捕等、主司各勿論、謂部內有人行盜、及當境盜發、若部內人殺他人、及境內人被他殺、事發後卅日、自捕獲、并他人捕獲、主司並得免罪、限外能捕獲、追減三等、謂卅日限外、能捕獲者、雖結正訖、仍得減之、若已經奏決者、依捕亡律、不在追減之例、若軍役所有犯、隊正以上兩毅以下、准部內征人冒名之法、同國郡爲罪、軍役有犯、謂行軍及領軍人、傜役之所、有犯盜及殺人、事發若容止盜者、隊正以上兩毅以下得罪、並准部內征人冒名之法、同國郡爲罪、謂隊正團內、一人爲盜、及容止盜者、若有盜發之所、各笞卅、強盜及容止強盜、若殺人、及強盜事發、若被殺之處、每事各加一等、校尉旅帥減隊正一等、兩毅准所管校尉多少通計爲罪、假如部內一人爲盜、及容止盜者、里長笞卅、三人加一等、計隊正同里長、亦一人笞卅、三人加一等、旅帥校尉一人笞卅、兩毅假管三校尉、三人笞卅、管四校尉者四人笞卅、同國郡爲罪、官長爲首、佐職爲從、

〔類聚國史八十七刑法〕延曆十七年二月壬子朔、美濃國人村國連惡人、配流淡路國、以停宿羣盜侵犯百姓也、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應勤施方略早斷盜賊事

右被大納言正三位兼行左近衞大將藤原朝臣氏宗宣偁、〇中略容止盜賊、科罪非輕、然則事須隣伍之

計贓

贓物壹種
准贓布佰參拾端
右一人知情受盜贓者也、臣伏之狀、已以露顯也、賊盜律云、知竊盜而受分者、計所受贓准竊盜論、減一等、名例律云、稱減者就輕次、又條云、稱准盜論之類、罪止遠流者、仍從遠流之上減一等、合徒三年、尙任格律、合役四年、○中略
以前今月廿七日可着鈦左右獄囚、勘申如件、
永久三年十二月廿日　右衛門府生内藏經則署名○以下略

〔律疏賊盜〕凡盜不計贓而立罪名、及言減罪而輕於凡盜者、計贓重以凡盜論加一等、從盜大祀神御物以下、不計贓科、唯立罪名、亦有減處、並謂得罪應重、故別立罪名、若減罪輕於凡盜者、各須計贓以凡盜論加一等、假有盜他馬而殺、平馬贓直布卅端、若計凡盜、合二年半徒、以盜殺馬、故加凡盜一等、處徒三年、及言減罪輕於凡盜者、上條盜屍柩者、徒一年半、盜衣服者、減一等、假有盜屍上衣服、直布五端、依凡盜法、合徒一年、文稱減一等、只徒一年、故依凡盜加一等、合徒一年半之類、是名以凡盜論加一等、

〔西宮記臨時十〕成勘文事附囚名帳　役畢勘文
勘申可着鈦左右獄囚事右志伴忠信成之、寳左佐惟宗允亮草之、○中略
强盜玖人
大春兼平、年、、
贓物漆種
准贓布陸端肆丈
岩松、年、、
贓物肆種
准贓布拾肆反○中略
右陸人强盜之犯、承伏已畢、撿賊盜律云、强盜一尺、徒三年、二反加一等、十五反絞、刑部格云、犯盜

〔中右記〕元永二年三月廿四日庚午、下人云、此曉強盜入有經宅、殺害下人等、盜取綿衣五十餘領了、強盜卅人許云々、有經朝臣在源大納言雅俊家之者也、近日大略、每夜京中強盜亂入、誠以不便也、

恐喝取財

〔律疏 賊盜〕凡恐喝取人財物者、口恐喝亦同、准盜論、加一等、謂知人有犯、欲相告訴、恐喝以取財物者、雖口恐喝、亦與文牒同、雖不足畏忌、財主懼而自與亦同、謂亦同恐喝之罪、恐展轉傳言、而受財者、皆爲從坐、假知甲遣乙畏、傳言於丁、恐喝取物五端、甲合徒一年半、乙畏各徒一年、是名受財者皆爲從坐、若爲人所侵損、恐喝以求備償、事有因緣之類者非、縱有甲爲乙踐損田苗、遂恐喝於乙、得倍苗之外、更取財者、爲有損苗之由、不當恐喝之坐、苗外餘物、即當非監臨主司因事受財、坐贓科斷、此是事有因緣之類者、非恐喝、其有恐喝取財五端、首不行、亦不受分、傳言者二人、一人受財、一人不受者、律稱准盜、須依盜法、按下條、共盜者併贓論、造意及從行、而不受分、即受分而不行、各依本首從法、若造意不行、又不受分、即以行人專進止者爲首、造意爲從、至死減一等、從者不行、又不受分、笞卅、其首不行、又不受分、即以傳言取物者爲首、五端合徒一年半、造意者爲從、合徒一年、又一人不受分、本合爲從笞五十、又有監臨恐喝所部取財、不可同凡人之法、名例律當條、雖有罪名、所爲重者自從重、理從強乞之律、合准枉法而科、若知有罪不虛、恐喝取財放者、合從枉法而斷、眞若財未入者、杖六十、即五等以上親、自相恐喝者、犯尊長以凡人論、強盜亦准此、謂下條強盜五等以上尊長、並依凡人強盜之罪、不在准親減例、犯卑幼各依本法、恐喝取財、無限多少、財未入者杖六十、即五等以上、自相恐喝者、犯尊長以凡人論、准盜加一等、犯卑幼各依本法、謂恐喝五等卑幼取財者、減凡人一等、五端徒一年、四等以上、遞減一等、

毆擊取財

〔律疏 賊盜〕凡本以他故、毆擊人、因而奪其財物者、計贓以強盜論、至死者加役流、謂本無規財之心、乃爲別事毆打、因見財物、遂即奪之、事類先強後盜、故計贓以強盜論、以先無盜心之故、贓滿十五端、應死者、加役流、若奪財物不得者、止從故鬪毆法、文稱計贓以強盜論、奪物贓不滿一尺、同強盜不得財、徒二年、既元無盜心、雖持仗亦不加其罪、監臨亦同、雖因而竊取者、以竊盜論、加一等、謂先因他故毆擊、而轉竊取其財者、若有殺傷、各從故鬪法、謂本因毆擊殺傷、元非盜財拒害、各從故鬪法、謂因鬪致死者絞、故殺者斬、稱各者、從強奪及竊取、各以故鬪論、

分贓

〔律疏 賊盜〕凡知略和誘及強盜竊盜、而受分者、各計所受贓、准竊盜論、減一等、知略和誘人、及略和誘奴婢、或強盜竊盜、若知情而受分者、爲其初不同謀、故計所受之贓、准竊盜論、減一等、假有知人強盜、受布五端者、減竊盜一等、合杖一百之類、知盜贓而故買者、坐贓論減一等、謂知強竊盜贓、故買十端、合杖九十、知而爲藏者、又減一等、知盜贓而故藏、又減一等、合杖八十、其餘犯贓故買、及藏者、律無罪名、從不應爲、流以上從重、徒以下從輕、

〔朝野群載 十一 廷尉〕勘申可着鈦左右獄囚事（中略）

藤井久成 年卅六 左京人

存上、但賊盜律云、共盜者併贓論、共强盜者、罪無首從者、今推贓布數、不滿十五端、淸澄等犯、得分雖異、併贓論罪、是及流刑、上件二人、應役六年、○中略

以前今月□日、可着鈦左右獄囚勘申如件、

長德二年十二月十七日　　右衞門府生飛鳥部好兼○以下署名略

〔西宮記臨時裏書十〕於市行事

勘申强盜坂上春丸可着鈦否哉事

右春丸、去年十二月爲主人强盜長堪從者、被追捕之後、今日勘問之、進申云、雖有共行之犯、不受得分之贓、又今日過狀、年十七歲者、可着鈦否哉由、宜勘申者、謹檢賊盜律云、共盜者併贓論、造意及從行而不受分、卽受分而不行、各依本省從法、疏云、假有甲造意不行受分、乙爲從行而不受分、仍以甲爲首、乙爲從、行而不受分、仍以甲爲首、乙爲從之類、名例律云、共犯罪者、以造意爲首、隨從者減一等、又云、犯罪時幼少、事發時長大、依幼少論、疏云、十六時偸盜、十七事發、以贖論、此名幼少時犯罪、長大事發、依幼少論、又云、七十以上、十六以下、犯流罪以下收贖、八十以上、十歲以下、盜亦收贖、疏云、盜旣侵損於人、故不許令免、令其收贖、又云、徒二年、贖銅卌斤、格云、犯二年三年、各加一年者、春丸主人長堪之贓、雖損數種之物、依格相加、當三年徒、仍春丸徒減半年、猶二年半、然而承伏已在今日、犯過先發去年、須依幼少犯、免十七歲之着鈦、以贖法律徵卌斤之贖銅、仍勘申、

長保三年五月廿一日　　右衞門大志縣犬養爲政。

少尉伴

左衞門少志惟宗

〔續日本後紀六仁明〕承和四年十二月甲午、夜分女盜二人昇入淸涼殿、天皇愕然、命藏人等告宿衞人、遂捕之、纔獲一人、其一人脫亡、

盜得財、又不受分、乙丙丁等同行、乙爲處分方略、即是行人專進止者、乙合爲首、甲不行爲從、其強盜應至死者、減死一等、遠流、雖有從名、流罪以下、仍不得減、從者不行、又不受分、笞四十、強盜杖八十、謂共謀竊盜及強盜、從者不行、又不受分者、若本不同謀、相遇共盜、以臨時專進止者爲首、餘爲從坐、共強盜者、罪無首從、謂強盜雖本不謀、但是同行、並無首從、主遣家人奴婢盜者、雖不取物、仍爲首、主遣當家家人奴婢行盜、雖不取所盜之物、主仍爲行盜首、家人奴婢爲從、若行盜之後、知情受財、強盜竊盜、並爲竊盜從、謂家人奴婢、私有行盜、主後知情受財、准所受多少、不限強之與竊、並爲竊盜從、假有家人等、先強盜竊盜得財、主後知情、受布五端、合杖一百之類、若有人行盜、其主先不同謀、乃遣家人奴婢隨他盜人、而盜者、即元謀爲首、家人奴婢爲從、主爲家人奴婢從、盜者首出元謀、若元謀不行、即以臨時專進止爲首、今奴婢之主、既不元謀、又非行色、但以處分奴婢、隨盜求財、奴之此行、由主處分、然主雖驅使家人、不可同於盜者元謀、既自有首、其主即爲從論、計入奴之贓、准爲從坐、假有奴婢隨他總盜五十端、奴婢分得十端、奴婢爲五十端從、徒三年、主爲十端從、合徒一年、

〔律疏賊盜〕凡共謀強盜、臨時不行、而行者竊盜、共謀者受分、造意者爲竊盜首、餘並爲竊盜從、若不受分、造意者爲竊盜從、餘並笞五十、假有甲乙丙丁、同謀強盜、甲爲首、臨時不行、而行者竊盜、甲雖不行、共謀受分、甲既造意、爲竊盜首、餘行者、並爲竊盜從、甲若不受分、復不行、爲竊盜從、從者不行、又不受分、笞五十、前條竊盜從不行、又不受分、笞卌、此條笞五十者、爲元謀強盜故、若共謀竊盜、臨時不行、而行者強盜、其不行者、造意受分、知情不知情、並爲竊盜首、造意者不受分、及從者受分、俱爲竊盜從、同謀行竊盜、臨時有不行之人、而行人自爲強盜、其不行者、是元謀造意、受強盜贓分、不限知情不知情、並爲竊盜首、其造意者不受分、及從者受分、俱爲竊盜從、

〔西宮記臨時十〕成勘文事附囚名帳　役擧勘文

勘申可着鈦左右獄囚事右志伴忠信成之、實左佐惟宗允亮草之、○中略

強盜拾人

星河清澄年

物部宮時年

贓物貳種

准贓布拾參反玖尺

右貳人同謀強盜、共成其犯、爰清澄、早以承伏、專無所避、宮時雖不承伏、已有見贓、科斷之法、章條

〔令義解 九 闘訟〕凡官與私交關、以物爲價者、准中估價、即懸評贓物者亦如之、(中略)案律、監守盗得絹一匹以上、已費訖、即不除名、爲懸評取中法、

〔令集解 二十 考課〕問、无位人、犯監主盗三端、或犯凡盗徒以上、而獄成會赦全免、令以景迹論至下下考、未知解官否、答、私案、合解官免官以上人、無贓者計贖銅、除考解官如常法、

〔續日本紀 九 元正〕養老六年七月丙子、詔曰、○中略自養老六年七月七日昧爽已前、流罪以下、繋囚見徒、咸從原免、○中略監臨主守自盗、盗所監臨、○中略常赦所不免者、不在此例、

〔續日本紀 十 聖武〕神龜五年八月甲申、勅、皇太子寢病、經日不愈、○中略可大赦天下、以救所患、其犯八虐、及官人枉法受財、監臨主守自盗、盗所監臨、○中略常赦所不免者、並不在赦限、

〔續日本紀 八 元正〕養老四年六月己酉、漆部司令史從八位上丈部路忌寸石勝、直丁秦犬麻呂、坐盗司漆、並斷流罪、

盗官物

〔續日本紀 九 元正〕養老六年四月庚寅、詔曰、周防國前守從五位上山田史御方、監臨犯盗、理合除免、先經恩降、赦罪已訖、然依法備贓、家無尺布、朕念、御方負笈遠方、遊學蕃國、歸朝之後、傳授生徒、而文館學士、頗解屬文、誠以不矜若人、墮斯道歟、宜特加恩寵、勿使徴贓焉、

〔日本後紀 十三 桓武〕延暦廿四年十月庚申、佐渡國人道公全成、配伊豆國、以盗官鵜也、

〔三代實錄 四十三 陽成〕元慶七年二月廿八日乙丑、夜内藏寮舍人津守小吉、開御服倉、盗取絹四十匹、下獄、

〔三代實錄 四十六 光孝〕元慶八年六月廿三日壬子、夜偸兒入民部稟院倉、盗取米一斛五斗、爲行夜者所捕得、偸兒引刀自刺不死、遣撿非違使送入於獄、

共盗

〔律疏 賊盗〕凡共盗者併贓論、造意及從行而不受分、即受分而不行、各依本首從法、(假有十人同盗、得十端、人別分得一端、亦各得十端之贓、若造意之人、或行而不受分、或受分而不行、從者亦有行而不受分、或受分而不行、雖行受有殊、各依本首從爲法、止用一人爲首、餘爲從坐、假有甲造意不行受分、乙爲從行而不受分、仍以甲爲首、乙爲從之類、)若造意者不行、又不受分、即以行人專進止者爲首、造意者爲從、至死減一等、(假有甲造意者、行盗而不行、所

監守盜

傷之法、但殺人坐重、雖誤同鬪殺論、若實故殺、自依故殺傷法、若有所規求、而故殺二等以下卑幼者、絞、餘條准此、即此條因盜、是爲有所規求、故殺二等以下卑幼者、絞、誤殺者、自依本鬪殺論、餘條、謂諸條奸及略和誘、但是爭競、有所規求、而故殺二等以下卑幼、本條不至死者、並絞、故云餘條准此、

〔律疏賊盜〕凡同居卑幼、將人盜己家財物者、以私輒用財物論、加二等、謂共居子孫弟姪之類、將外人共盜己家財物者、按戸婚律、同居卑幼、私輒用財者、五疋笞十、五疋加一等、罪止杖一百、他人減常盜罪一等、謂卑幼將人盜物雖多、罪止徒一年半、他人減常盜罪一等、其於首從、自依常例、若有殺傷者、各依本法、謂依故殺傷尊長卑幼本法、他人依強盜殺傷法、他人殺傷、縱卑幼不知情、仍從本殺傷法坐之、稱坐之者、不在除免加役流之例、若他人誤殺傷尊長、卑幼不知情、亦依誤法、其被殺傷人、非尊長者、卑幼不知殺情、唯得盜罪、無殺傷之坐、其有知情并自殺傷者、各依本殺傷之法、若卑幼共他人強盜者、律無加罪之文、按職制律、貸所監臨財物、強者加二等、餘條強者準此、諸親相盜、罪有等差、將人盜己家財者、加私輒用物二等、更無強盜之文、止顯殺傷之坐、若殺傷罪重、從殺傷法科、如殺傷坐輕、即準強者加二等、此是一部通例、故不條別坐人、

〔律疏名例〕律稱以枉法論、監守內以盜論者、會赦免所居官、會降同免官法、

○按ズルニ、我邦ノ律ハ、全篇具ニ存セルモノハ幾モナシ、而シテ賊盜ノ如キハ、終始缺クルコトナキニ、唯監臨主守自盜ノ一條ヲ失セリ、然レドモ初メ有リテ後ニ佚セシコトハ、此等ノ文ニ就キテ知ルベシ、

〔唐律疏議十九賊盜〕諸監臨主守、自盜及盜所監臨財物者、若親王財物、而監守自盜亦同、加凡盜二等、三十匹絞、本條已有加者、亦累加之、

疏議曰、假如左藏庫物、則太府卿丞爲監臨、左藏令丞爲監事、見守庫者爲主守、而自盜庫物者、爲監臨主守自盜、又如州縣官人盜部內人財物、是爲盜所監臨、注云、若親王財物、依令、皇兄弟皇子爲親王、監守自盜王家財物、亦同官物之罪、加凡盜二等、一尺杖八十、一匹加一等、一匹一尺杖九十、五匹徒二年、五匹加一等、是名加凡盜二等、三十匹絞、注云、本條已有加者、亦累加之、謂監臨主守、自盜所監主、不計贓之物、計贓重者、以凡盜論加一等、即是本條已有加、於此又加二等、假有武庫令、自盜禁兵器、計贓直絹二十匹、凡人盜者、二十匹、合徒二年半、以盜不計贓而立罪名、計贓重者、加凡盜一等、徒三年、監主又加二等、流二千五百里、如此之類、是本條已有加者、亦累加之、

徵所費之贓、各還官主矣、

〔類聚國史八十七刑法〕延暦二十一年九月丙辰、流讃岐國鵜足郡人吉師都麻呂、分島人伊都甲麻呂等于伊豆國、丹波國人秦乙成、出雲國人巨勢部猪人、石見國人弓部鎰主、美作國人曾禰繼人等于安房國、山城國人若湯坐五月麻呂、右京人內藏氏人、三國島成、阿曇繼成等于隱岐國、近江國人秦繼成、常陸國人大伴繼守、能登國人羽咋潤公等于土左國、並以犯強盜也、

〔法曹至要抄上罪科〕一斫破人宅事

長德元年九月十三日宣旨云、應准強盜追捕推斷權門勢家、濫惡雜人、斫壞人家、掠損財物輩事、右去承平三年十二月廿八日、下左右京職五畿內七道諸國符偁、如聞年來諸衞舍人、假名宿衞、枉暴是好、招集黨與、斫破人家、騷動之間、或壞財貨、奉勅、自今以後、若致違犯、當所主司、任加追捕、論以強盜、計其損物、准贓行之者、略○中左○左恐右誤大臣宣、奉勅、名鬪亂、實以似強盜、如有違犯之輩、縱雖無見贓、破損明白、財主稱損失之物、依贓狀露驗之法、須推斷之者、

按之、令斫破人宅之罪、雖未見正條之文、綸旨明存、科坐何疑矣、

屢盜

〔中右記〕寬治八年〇嘉保元年十二月晦日、散位從四位下大江公仲流隱岐國、是行向散位資俊宅、強盜放火殺害者、仍召問件事、從撿非違使廳有召、及三ヶ度、遂不參、仍勘罪名、處流罪也、

〔律疏賊盜〕凡盜經斷後、仍更行盜、前後三犯徒者、近流、三犯流者、絞、行盜之人、寔爲巨蠹、犯明憲、罔知悛心、前後三入刑科、便是怙終、其事峻之以法、用懲其罪、故有強盜、竊盜經斷更爲、三犯徒者近流、三犯流者絞、亦謂斷後又爲者、其未斷經降者、不入三犯之限、三盜、止數赦後爲坐、謂據赦後三犯者、不計赦前犯狀爲數者、有三犯死罪、會降皆至流徒、或一兩度止犯流徒、或一兩度從死會降、總成三犯者、律有赦後之文、不言降前之犯、死罪會降、止免極刑、流徒之科、本法仍在、然其所犯本坐重於正犯徒流、准律而論、總當三犯之例、其於親屬相盜者、不用此律、謂自依親屬本條、不用此三犯之律、按職制律、親屬、謂五等以上親、及三等以上婚姻之家、假有從父兄弟之婦家犯盜、徒流以上、並不入三犯之例、

親屬相盜

〔律疏賊盜〕凡盜五等親財物者、減凡人一等、四等以上、遞減一等、五等以上相盜、皆據別居、若有相盜、不限強竊、殺傷者、各依本殺傷論、謂因盜誤殺傷人、若殺傷尊卑長幼、各依本殺傷法、此謂因盜而誤殺者、謂本心只欲規財、因盜而誤殺人者、同因盜過失殺人、依鬪殺之罪、不言傷者、爲[illegible]罪稍輕、聽從誤

既有年限、至於役使、豈期終身、靜而言之、事涉深刻、但兩京之內、犯盜者衆、若不折衷、何將懲肅、自今以後、宜犯徒一年者、加半年、犯二年三年者、各加一年、杖罪以下、只徒一年、若犯二流(二流一本作三流)者、各役六年、其犯死罪別勅免死、十五年爲限、若役畢之後、不悔前過、亦有犯盜、或爲人凶惡、爲衆人所明知、或量其意況、雖恤之色、並是終身配役、不可放免、但女人者減男之半、(中略)

弘仁十三年二月七日

〔法曹至要抄上罪科〕一強竊盜事(中略)

弘仁十三年二月七日格云、犯盜之人、配徒之輩、犯徒一年者、加半年、犯二年三年者、各加一年、杖罪以下、只徒一年者、若犯三流者、各役六年、

按之、盜犯之屬、觸類多端、而或犯罪有故不承伏、或留身待對問之間、使廳之例、暫令候便所、若承伏雖有實、爲輕罪者、散禁、可令候獄舍政所、若事重者、雖散禁可令候獄舍、是已爲使廳之流例、凡盜犯事、朝家重所誡也、因茲雖嫌疑之者、忽難免之類又下便所、廻計略尋訪其狀者也、

〔延喜式二十九刑部〕凡斷徒以上、盜人者、必勘前年盜人歷名、然後依法科斷、

〔西宮記臨時十〕成勘文事(附囚名帳　役畢勘文)

撿非違使式云、盜人不論輕重、停移刑部省、別當直着鈦、配役所令驅策、

〔律疏賊盜〕凡山野之物、已加功力刈伐積聚、而輒取者、各以盜論、(謂草木藥石之類、有人已加功力、或刈伐或積聚、而輒取者、各准積聚之處時價、計贓依盜法科罪)

〔法曹至要抄上罪科〕一食瓜菓伐樹木事

雜律云、於官私田園、輒食瓜菓之類、坐贓論、棄毀亦如之、即持去者准盜論、主司給與、與同罪、强持去者、以盜論、主司即言者不坐、又條云、毀伐樹木稼穡者、准盜論、

按之、稱瓜菓之類、即雜蔬菜皆是也、若於官私田園之内、而輒私食者、坐贓論、持去者、計贓准盜論、並

化生神王之類、常不應爲從重、有減入已者、即依凡盜法、若毀損功庸多者、計庸坐贓論、各令修復、盜而供養者、杖八十、盜毀不相須、

〔律疏賊盜〕凡發冢者、徒三年、發徹即坐、已開棺槨者、遠流、謂有棺有槨者、必須棺槨兩開、不待取物觸屍、發而未徹者、徒二年、謂雖發冢、而未至棺槨者、其冢先穿、及未殯而盜屍柩者、徒一年半、其冢先穿、謂先自穿陷、舊有當塡穴者、及未殯、謂屍猶在外、而未殯埋、而盜屍柩者、謂盜者元無惡心、故欲詐代人屍、或欲別處改葬之類、此文既稱未殯、明上文發冢、殯訖而發亦是、依律、發冢者、徒三年、既不顯尊卑貴賤者、若發尊長發卑幼之墳、不可重於殺罪、若發尊長冢、據法止同凡人、律云、發冢者、徒三年、在於凡人、便減殺罪二等、若發卑幼之冢、須減本殺二等科之、已開棺槨者遠流、即減已殺一等、發而未徹、徒二年、計凡人之罪、減死四等、卑幼之色、亦於本殺上減四等、而科、若盜屍柩者、依減五等之例、其於尊長幷同凡人、盜衣服者、減一等、器物者、以盜論、

〔律疏賊盜〕凡盜山陵內木者、杖一百、草者減三等、謂帝皇山陵、草木不合芟刈、而有盜者、若盜他人墓塋內樹者、杖七十、若其非盜、唯止斫伐者、准雜律、毀伐樹木稼穡、各准盜論、

〔律疏賊盜〕凡盜官私馬牛而殺者、徒二年半、馬牛軍國所用、故與餘畜不同、

〔律疏賊盜〕凡因盜而過失殺傷人者、以鬪殺傷論、至死者加役流、謂因行竊盜、而過失殺傷人者、以其本有盜意、不從過失收贖、故以鬪殺傷論、得財不得財等、謂得財與不得財、並從鬪殺傷科、財主尋逐、遇他死者非、謂財主尋逐盜物之賊、或墜馬、或落坑致死之類、是遇他故而死、盜者唯得盜罪、而無殺傷之坐、其共盜臨時有殺傷者、以強盜論、謂共行竊盜、不謀強盜、臨時乃有殺傷人者、同行而不知殺傷情者、止依竊盜法、謂同行元謀竊盜、不知殺傷之情、止依竊盜法、爲首從、殺傷者、自依強法、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應定罪人配役年限事

右撿非違使解偁、案賊盜律云、強盜不得財、徒二年、一端〇一端、一本及律作一尺、徒三年、二端加一等、十五端及傷人者絞、殺人者斬、其持仗者、雖不得財遠流、十端絞、傷人者斬、又條云、竊盜不得財、笞五十、一尺杖六十、一端加一等、五端徒一年、五端加一等、五十端加役流者、然則強竊二盜、其罪各別、從贓多少、復有輕重、而去弘仁九年宣旨偁、犯盜之人、不論輕重、皆配役所者、使等偏執此旨、未定年限、罪無輕重、命終役所、夫絕者雖更續、死者不再生、望請明定節文、依限駈使、謹請處分者、右大臣〇藤原冬嗣宣、奉勅、夫配徒之輩、

一年半、若盜釜甑刀匕之屬、並從常盜之法、謂並不用供神、故從常盜之法、言之屬、謂盤盂雜器之類、
〔律疏 賊盜〕凡盜神璽者、絞、謂踐祚之日壽璽、關契內印鑰鈴者、遠流、謂食利之而非行用者、乘輿服御物者中流、
謂供奉乘輿之物、服通衾茵之屬、眞副等皆須監當之官部分擬進、乃爲御物、稱之屬者、旣傳之類、眞副、等、謂見供服用之衣、副、謂副
之副貳服、其擬供服御、及供而廢闕、若食將御者、徒二年、將御、謂已呈監當之官、擬供服御、謂營造未成、及供而廢闕、謂之供用事畢、若食
將御者、謂御食已呈監當之官、擬進而盜及食者、擬供食御、及非服而御之物者、徒一年半、擬供食御、謂未呈監當之官、及非服而御之物者、謂帷帳凡杖屬、若盜
者、各計贓、以常盜論、加一等、
〔律疏 賊盜〕凡盜外印及傳符者、徒二年、餘印者、杖一百、畜產印、杖八十、亦謂貪利之、而非行用者、餘印謂
諸司諸國之印、皆謂貪以爲財、不擬行用、若將行用、卽從僞造僞行用規避之罪科之、
〔律疏 賊盜〕凡盜詔書者、徒二年、官文書杖一百、謂在司等常施行文書、有印無印等、重害文書加一等、亦謂貪利之、無所施
用者、重害、謂徒罪以上獄案、及婚姻良賤、勳賞黜陟、授官除免之類、稱之類者、謂倉粮財物、行軍大（大唐律作文）簿帳、及戶籍計帳之類、若欲
動事盜者、自從增減之律、若盜隨身符者、加官文書一等、卽盜應除文案者、依凡盜法、謂計贓科罪、
〔律疏 賊盜〕凡盜節刀者、徒三年、謂皇華出使、黜陟幽明、將軍奉詔、宣威殊俗、皆執節刀、取信天下、宮殿門庫藏、及倉廩筑紫城等鑰、徒一
年、國郡倉庫、陸奧越後出羽等柵、及三關門鑰亦同、宮城京城、及官廚鑰、杖一百、公廨及國廚等鑰、杖六
十、諸門鑰、笞五十、謂內外百司、及諸關坊市門等官、有門禁、皆是、亦謂貪利之、非施行者、
〔律疏 賊盜〕凡盜禁兵器者、徒一年半、弩具裝者、徒二年、若盜罪輕、同私造法、盜餘兵器及幡幟儀仗者、加
凡盜一等、餘兵器、謂雖是官兵器、私家合有者、若盜守衞宮殿兵器者、又各加一等、謂見用守衞宮殿者、卽在軍及宿衞相盜、還充官
用者、各減二等、卽在軍、謂行軍之所、若宿衞相盜、還充官用者、各減二等、若入私者、各同上文盜法、
〔令義解 軍防五〕凡私家、不得有鼓鉦弩牟矟具裝大角少角及軍幡、謂鼓者皮鼓也、鉦者金鼓也、所以靜喧也、牟者二丈矛也、矟者丈二尺矛
也、具裝者馬甲也、幡者旌旗總名也、○中略唯樂鼓、不在禁限、
〔律疏 賊盜〕凡盜毀佛像者、徒三年、卽僧尼盜毀佛像者、徒流、爲其盜毀所事先聖形像、故加俗人之法、菩薩減一等、其非菩薩之像、盜毀

分ヲ受クルト、故ラニ買フト、及ビ盜ヲ容止シ停宿シ、若シクハ人ノ犯罪アルヲ知リテ、告訴セント欲スト云ヒテ文牒ヲ示シ、或ハ言語ヲ以テ恐喝シテ財ヲ取ルガ如キモ、此ニ附載セリ、而シテ捕盜ノ事ハ、多ク追捕篇ニ收ム、

名稱

〔律疏 賊盜〕凡盜、公取竊取、皆爲盜、器物之屬、須移徙、闌圈繫閉之屬、須絕離常處、放逸飛走之屬、須專制、乃成盜、若畜產伴類隨之、不併計、卽將入己、及盜其母、而子隨者、皆併計之、公取、謂行盜之人、公然而取、竊取、謂方便私竊其財、皆名爲盜、注云、器物之屬、須移徙、謂器物、錢帛之類、須移徙離於本處、珠玉寶貨之類、據入手隱藏、縱未將行亦是、其木石重器、非人力所勝、應須駄載者、雖移處未駄載間、猶未成盜、但物之有巨細、難以備論、略舉綱目、各準臨時取斷、闌圈繫閉之屬、須絕離常處、謂馬牛駝騾之類、須出闌圈、及絕離繫閉之處、放逸飛走之屬、謂鷹犬之類、須專制在己、不得自由、乃成爲盜、若畜產伴類隨之、不併計、假有盜馬一匹、別有馬隨、不合併計爲罪、卽因逐伴而來、遂將入己、及盜其母、而子隨之者、皆併計爲罪、

强盜
竊盜

〔律疏 賊盜〕凡强盜、謂以威若力、而取其財、先强後盜、先盜後强等、若與人藥酒及食、使狂亂取財、亦是、卽得闌遺之物、毆擊財主而不還、及竊盜發覺、弃財逃走、財主追捕、因相拒捍、如此之類、事有因緣者、非强盜、以威若力、假有以威脅人、不加凶力、或有直用凶力、不作威逼、而劫掠取財者、先强後盜、謂先加迫脅、然後取財、先盜後强、謂先竊其財、事覺之後、始加威力、如此之例、俱爲强盜、若飲人藥酒、或食中加藥、令其迷謬、而取其財者、亦從强盜之法、卽得闌遺之物、財主來認、因卽毆擊、不肯還物、及竊取人財、其物主知覺、遂弃財逃走、財主逐之、因相拒捍、如此事類、是事有因緣、並非强盜、自從闘毆、及拒捕之法、據捕亡律、被盜雖傍人、亦得捕繫、其有盜者將財逃走、傍人追捕、因卽格傷、或絕時不絕時者、依律、盜者雖是傍人、皆得捕繫以送官司、盜者既將財逃走、合捕其人、乃拒傷捕者、卽是先盜後强、絕時以後捕者、既無財主尋逐、便是不知盜由、因相拒格、唯有拒捕之罪、不成强盜、不得財、徒二年、一尺徒三年、二端加一等、十五端及傷人者絞、殺人者斬、殺傷奴婢亦同、雖非財主、但因盜殺傷皆是、諸條、奴婢、多悉不同良人、於此殺傷奴婢、亦同良人之坐、雖非財主、但因盜殺傷、無問良賤、皆如財主之法、其持仗者、雖不得財遠流、十端絞、傷人者斬、

〔律疏 賊盜〕凡竊盜、不得財、笞五十、一尺杖六十、一端加一等、五端徒一年、五端加一等、五十端加役流、其有於一家頻盜、及一時而盜數家者、並累而倍論、倍、謂二尺爲一尺、若有一處贓多、累倍不加重者、止從一重而斷、其倍贓、依例總徵、

〔律疏 賊盜〕凡盜大祀神御之物者、中流、謂供神御者、大社神寶亦同、供神御者、謂大幣、其擬供神御、謂營造未成者、若饗薦之具、已陳呈者、徒二年、饗薦、謂祭帶酒饌之屬、陳呈、謂已入祀所、經祀官省視者、未饌呈者徒

古事類苑

法律部八

上編

盜犯

盜ニハ强盜竊盜ノ別アリ、强盜トハ、劫掠シテ財ヲ取ルコトニテ、威ヲ以テ人ヲ脅シテ兇力ヲ用キザルアリ、威ヲ以テ凌ガズシテ直ニ兇力ヲ用キルアリ、先ニ迫脅ヲ加ヘテ、然シテ後ニ財ヲ取ルアリ、先ニ其財ヲ竊盜シ、事覺レテ後ニ始メテ威力ヲ加フルアリ、此ノ如キ類ヲ倶ニ强盜トス、或ハ人ニ藥酒ヲ飮マシメ、或ハ食中ニ藥ヲ加ヘテ迷謬セシメ、因テ其財ヲ取ル者モ、强盜ノ法ニ從テ處斷ス、竊盜トハ形ヲ潛メ面ヲ隱シテ、人ノ財ヲ取ルヲイフ、又監臨主守自ラ盜ムアリ、監臨スル所ノ財ヲ盜ムアリ、別居親屬ノ財ヲ盜ムアリ、同居子弟等他人ヲ將キテ、己ガ家ノ財物ヲ盜ムアリ、數人共ニ盜ムアリ、一家ノ物ヲ頻リニ盜ムアリ、一時ニ數家ノ物ヲ盜ムアリ、科斷ヲ經テ後ニ更ニ盜ヲ行フアリ、盜ニ因リテ人ヲ殺傷スルアリ、他ノ故ヲ以テ人ヲ毆チテ、因リテ其財物ヲ盜ムアリ、凡テ公取竊取ノ別ハアレドモ、皆盜トスルナリ、而シテ器物錢帛ノ類ハ、移シテ本處ヲ離チ、珠玉寶貨ノ類ハ、手ニ入レテ隱藏スルトキハ、縱ヒ携ヘテ行カズトモ盜トス、木石重器ノ類ハ、本處ヨリ移ストモ、未ダ馱載セザル間ハ盜ト成サズ、馬牛ノ類ハ闌圈ヨリ出シ、繫閉ノ處ヲ絕離シ、鷹犬ノ類ハ、己ガ手ニテ自由ニスルコトヲ得テ後ニ盜ト爲ス、盜ハ凡テ贓ヲ計ヘテ罪ヲ科スルヲ、又贓ヲ計ヘズシテ罪ヲ科スルアリ、卽チ大祀神御ノ物ヲ盜ミ、神璽關契ヲ盜ムガ如キ是ナリ、又盜物ナルヲ知リテ

闌入

古事類苑

法律部八

上編

盜犯

略人

かしこにもいみじければ、そちとのいそぎたち給へど、大貳〇藤原有國のこのごろすぐしてのぼらせ給へ、みちの程いとおそろしうはべり、御おくりに參らん下人などもいとふびんにはべりと申ければ、げにとおぼしめしてこゝろもとなく覺しながら、たちとまらせ給ひて、よの人少やみさかりてのぼらせ給ふ、この程に二位〇高階成忠このかさにてうせにけり、いみじうあはれなる事どもなり、かくてのぼらせ給も、たゞわか宮の御えるしと哀にうれしうおぼしつゝのぼらせ給、かちよりなれば、いまはおはしつかせ給ぬらんとのみいつしかとまちきこえさせ給、十一月にのぼりつかせ給ふ、かの致仕の大納言殿〇源重光におはしつかせ給へる、うへ〇伊周室、重光女、をはじめたてまつりとのゝうちの人々よろこびのなみだゆゝし、

望往生之妙果、何必焦肝膽、强待歸參之恩詔、然而被罪之身、猶恐王程之不綏、無愆之心、深憑朝議之有許、嗟呼昔侍鳳闕、已爲羽翼之臣、今在馬州、長作蒭蕘之士、天性雖愚、忝戀龍顏逆鱗之誡、地望雖失、泣仰烏頭變毛之恩而已、望請天恩殊垂矜恤、早賜官符、被聽歸京、將訪晨昏於六旬之老母、令治疾病於三代之名醫矣、隆家誠惶誠恐謹言、

長德二年十月七日從三位出雲權守藤原朝臣隆家誠惶誠恐謹言

〔日本紀略十一條〕長德三年四月十七日庚戌、解陣、其日太宰權帥伊周出雲權守隆家、被召返之、

〔榮花物語五浦々の別〕いまみや〇敦康親王、卽定子所生、の御ことのいたはしければ、いとやむごとなくおぼさるゝまゝに、いかでいまはこの御事のゐるしには、たび人〇藤原伊周、隆家、をとのみおぼしめして、つねに女院とうへの御前〇一條とかたらひきこえさせ給て、との〇藤原道長にもかやうにまねびきこえさせ給へば、げに御この御ゐるしはべらんこそはよからめ、いまはめしにつかはさせ給へかし、などそうし給へば、うへ〇一條いみじううれしうおぼしめしながら、さはさるべきやうにともかくもとのどやかにおほせらる、四月〇長德三年にぞいまはめしかへすよしの宣旨くだりける、〇中略此めしかへしの宣旨くだりぬれば、みやのおまへ〇一條后藤原定子、伊周妹、よにうれしきことにおぼさる、夜をひるになしておほやけの御使をもゐらず、まづ宮の御つかひどもまゐる、これにつけてもわか宮の御さくとよ人めでのゝしる、京にはかものまつりなにくれの事どもすぎて、つごもりになりぬ、つくしには御つかひも宣旨も、いまだまゐらぬに、たじまにはいとちかければ、御むかへにさるべき人々かずもゐらず參りこみたり、それもいでや面目あることにもあらねど、いといとうれしくおぼさる、さてのぼらせ給、五月三四日の程にぞ京につき給へる、兼資の朝臣の家に、中納言のぼり給へれど、大殿の源中將〇道長義子成信おはすとて、このとのゝおはしたるを、てゝはさらによからぬことに思て、いみじうゐのびてぞおはしける、〇中略かのつくしには、あかゞさ

治承三年十一月十五日入道(○平清盛)奉恨朝家由聞エシカ共、靜憲法印院宣ノ御使ニテ、樣々會釋申ケレバ、事ノ外ニクツロギ給タリ、上下大ニ悅テ、今ハサシモヤハト、人々思被申レケルニ、四十二人ノ官職ヲ止テ、被追籠ル、○中略當時關白太政大臣基房公松殿ト申ヲバ、太宰權帥ニ奉移リ、筑紫ヘ奉流ル、住馴シ都ヲ別レ、悲キ、妻子ヲ振捨、遠旅ニ出サセ給ケレバ、係ル浮世ニナガラヘテ、何ニカハセント覺召シ、ツヤ〳〵物モ進ズ、御命モ危ク聞エサセ給ケルガ、思召シ切セ給ヒ、大原ノ本覺坊ノ上人ヲ召レテ、淀ニ古川ト云所ニテ、御出家授戒アリ、御年三十五、世中御昌リニテ、禮儀ヨクシロシメシ、曇ナキ鏡ニテ御坐ツル御事ヲト、上下奉惜ル、入道ハ出家ノ人ヲバ、本ノ約束ノ國ヘハ遣ヌ事ニアル也トテ、筑紫ヘハサモナクテ、備前國湯迫ト云所ヘゾ奉流リケル、

〔續日本紀 三十七 桓武〕延暦二年五月丁亥、勅太宰帥正二位藤原朝臣魚名老病相仍、留滯中路、宜令還京託其鄕親、

〔續日本紀 三十七 桓武〕延暦二年七月戊戌、勅石見國介正四位下藤原朝臣鷹取、土左國介從五位下藤原朝臣末茂等、令得入京、

〔日本紀略 淳和〕天長元年八月乙酉、太上天皇(○嵯峨)有勅、弘仁元年權任流人等、皆盡聽入京、

〔本朝文粹 七奏狀下〕請被殊蒙哀憐聽歸京且加身病療治且訪老母晨昏狀

藤原隆家(高二品(高階成忠)作)

右隆家坐事以降、離家之後、日月多移、霧露頻侵、山重江複、南嶺之藥難採、歎深愁切、東岱之魂應迷、仍爲免遠流無期之科、雖仰近代有例之恩、玄渙未下、抱愁而止、隆家生于累葉丞相之家、仕於一朝聖主之代、年已弱冠、未及二九之齡、位忽高貴、初備十六之臣、爲朝爲世、雖懸毀謗於萬人之脣吻、爲家爲門、多施榮耀於一身之面目、爰渥沐恩澤、只欲仕於君、忽忘惠露、何不忠於公、而無誤坐配流、是猶少而先老之過也、不犯處重科、豈非愚而超賢之怠哉、天譴俄臻、人望早背、病還更發、命已欲終、須只除鬢髮偏

量移

〔日本紀略 桓武〕延暦十四年十二月癸未、佐渡權守吉備朝臣泉、移備中國、

〔日知錄 三十二〕量移

唐朝人得罪貶竄遠方、遇赦改近地、謂之量移、舊唐書玄宗紀、開元二十年十一月庚午、祀后土于脽上、大赦天下、左降官量移近處、二十七年二月己巳、加尊號大赦天下、左降官量移近處、量移字始見於此、○中略今人乃稱遷職爲量移誤矣、

〔續日本後紀 仁明 二〕天長十年六月甲子、詔曰、○中略去弘仁元年坐事配流者、雖自陷朝憲而久憐淪翳、安倍朝臣清繼、百濟王愛筌、故藤原朝臣仲成男等、幷量徙入近國、　己巳、罪人安倍朝臣清繼、元配伯耆國、今移美作國、百濟王愛筌、元安房國、今移參河國、　辛未、罪人藤原永主、同山主藤主等、天長二年從日向國遷配豐前國、今移備前國、永野淨津、元配越前國、伊勢安麻呂、元配能登國、今幷移若狹國、

〔續日本後紀 仁明 十六〕承和十三年八月辛巳、散位正三位藤原朝臣吉野薨、○中略九年○承和七月緣坐伴健岑事、左貶太宰員外帥、十二年正月遷配山城國、薨時年六十一、

〔榮花物語 浦々の別 五〕せき戸の院にて、帥殿○太宰權帥藤原伊周は御心ちあしう成ければ、御ともものけびゐしども、かう〳〵そちはみだり心ちあしとて、ためらひさふらふ、母北の方もやがてつとこらへて、またこゝになんとそうせさすれば、とく〳〵その心ちつくろひやめて、すがやかにくだすべきよし、ならびに母きたのかたすみやかにあけたてまつれとせんじあるに、中納言○藤原隆家宮○一條后藤原定子の御ありさまもおぼしやり、かのはゝきたのかたをもおぼしやらせ給に、いみじうて女院○東三條詮子も內○一條も、はるかなる御ありさまを、いとゞ心ぐるしうおぼして、おほ殿○藤原道長にもこのことよろしかるべくと、院○花山にせちに申させ給て、そちどのははりまに、中納言はたじまにとゞまり給べき宣旨くだりぬ、

〔源平盛衰記 十二〕大臣以下流罪事

之給倍之、然而御心有所思行天奈毛殊寛免給止之天坊司并品官乃佐官以上及侍人藏人諸近仕者等、又司乃長以上乎波皆流罪爾當給不、就中爾自先有官留人乎波、皆配所乃員外官爾任給不、但品官乃判官以下波不在任限、又官無支人等乎波、絶蔭除位天、流罪爾當給倍之、然而殊慜給止志天奈毛、其身乎乃ミ流太爲布、自餘乃屬仕者乎波、咸寛免給不、自今以後波、改心天公爾仕律禮、本主爾往仕己度波不得之、若猶屬仕者、法乃隨爾重久罪之給波牟止、宣御命乎衆聞食與止宣、以大進從五位下藤原朝臣高直、爲駿河權介、大屬正六位上山口宿禰稻床爲安房權目、左京大進正六位上紀朝臣貞嗣爲上總權掾、少進正六位上橘朝臣末茂爲飛驒權守、內舍人正七位上紀朝臣春常爲下野權掾、主殿助正六位上橘朝臣清蔭爲加賀權掾、主馬首正六位下坂上大宿禰新繼爲能登權掾、民部大丞正六位上藤原朝臣岑人爲越中權掾、亮從五位下藤原朝臣貞守爲越後權守、少進正六位上藤原朝臣貞庭爲佐渡權掾、治部少丞正八位上藤原朝臣安成爲丹後權掾、少屬正六位下朝野宿禰清雄爲權目、兵部少丞正七位上藤原朝臣正岑爲因幡權掾、大進從五位下藤原朝臣近主爲伯耆權介、少納言從五位下藤原朝臣秋常爲石見權守、學士從四位下善道朝臣眞貞爲備後權守、刑部少輔從五位下藤原朝臣正世爲安藝權介、學士從五位上春澄宿禰善繩爲周防權守、民部少丞正六位上紀朝臣永直爲伊豫權掾、少屬正六位上滋原宿禰道成爲肥前權少目、肥後介從五位下橘朝臣眞直爲筑後權介、少判事正七位上丹墀眞人時永爲豐前權掾、主藏正正七位上坂上大宿禰當岑爲豐後權掾、勘解由使判官正六位上藤原朝臣粟作爲日向權掾、主殿首正六位下淡海眞人豐守爲大隅權掾、主膳正正六位上丹墀眞人綱足爲薩摩權掾、舍人正正六位上廣根王爲壹岐權守、主工首正六位上上毛野朝臣貞繼爲對馬權守、殿上雜色及帶刀品官六位已下相連被配流者、總六十餘人、同附防援發遣于諸道焉、　八月壬戌朔、改上總權掾正六位上紀朝臣貞嗣爲尾張權掾、改對馬權守正六位上上毛野朝臣貞繼爲土佐權掾、

〔百練抄五堀河〕寛治六年九月廿八日、左少辨爲房、左遷阿波權守、依山門訴也、七年六月召返之、

上ノ官筑前守ハ從五位下ノ官ナリ、

又按ズルニ、貶シテ國司ト爲シタルハ、前ノ太宰帥ノ條ニ參見セル者多シ、參照スベシ、

〔續日本紀光仁三十三〕寶龜六年五月己酉、從四位上陰陽頭兼安藝守大津連大浦卒、大浦者、世習陰陽、仲滿甚信之、問以事之吉凶、大浦知其指意、涉於逆謀、恐禍及己、密告其事、居未幾、仲滿果反、其年授從四位上、賜姓宿禰、拜兵部大輔兼美作守、神護元年以黨和氣王、除宿禰姓、左遷日向守、尋解見任、卽留彼國、寶龜初、原罪入京、任陰陽頭、俄兼安藝守、卒於官、

〔續日本紀桓武三十八〕延曆四年十月甲子、左降從四位下吉備朝臣泉佐渡守、

〔日本後紀嵯峨二十四〕弘仁五年閏七月壬午、散位正四位吉備朝臣泉卒、○中略 延曆初出爲伊豫守、被僚下告、遣詔使勘問、辭涉不敬、有司執法、請寘恒科、詔曰、其父故右大臣○眞備 往學留歸、播風弘道、遂登端揆、或翼皇猷、宜宥泉辜、令思後善、但解見任、以懲前惡、後復以譴、貶佐渡權守、歸居本縣、鬱々不得志、

〔日本後紀嵯峨二十〕弘仁元年九月庚戌、詔曰、○中略 太上天皇○平城 伊勢爾行幸世志米 諸人等、法之隨爾罪賜久布 倍 有止 所念有爾依氏、奈毛 免賜比 宥賜布、 壬子、從五位上礒野王爲伊豆權守、從五位上大中臣朝臣智治麻呂爲武藏介、正五位上菅野朝臣庭主爲安房權守、從四位下紀朝臣田上爲佐渡權守、正五位下藤原朝臣弟貞爲丹後守、正四位下藤原朝臣眞夏爲備中權守、從五位下當麻眞人繼麻呂爲淡路權守、從五位上大中臣朝臣常麻呂爲伊豫守、從五位下田口王爲土佐權守、從五位下紀朝臣良門爲肥前權介、從五位上大伴宿禰和武多麻呂爲日向權守、從五位下御室朝臣是嗣爲大隅權守、從五位下眞菅王爲壹岐權守、

〔續日本後紀仁明十二〕承和九年七月戊午、集廢坊諸人等於右衞門陣庭、詔曰、今詔久 不慮外爾、太上天皇○嵯峨 崩賜比奴、此隙爾 乘天、春宮乃 帶刀舍人伴健岑伊、與橘逸勢合力天、國家乎 傾亡止 謀利、撥求事理爾、於皇太子天 無所避之、因茲皇太子乎 其位廢退給波不 止己 畢奴、相隨人等其罪不輕、理須法乃 隨爾 罪

貶爲國司

家、翌日發向配所、權帥依出家被改官符云々、權帥隆家等依病難赴各配所之由、領送使申之、頭辨行成朝臣勅ヲ奉ジ權帥病之間、安置播磨國便所、出雲權守隆家安置但馬國便所、各領國司取其請文可歸參者、○中略同年十月八日權帥密々京上、隱居中宮之由、自去夜有其聞云々、仍差右衞門權佐孝道被申事由於中宮之處、已被奏無實之趣、孝道朝臣以下使官人等候彼宮、差季雅爲信等遣播磨、被實撿權帥有無、又帥上洛、告言既有其人、彼宮大進告曰云々、帥先日依出家被改官符、而尚不剃頭云々、播州使等未歸洛以前、權帥候中宮之由已露顯、八旬母氏乍沈病痾、懇切期今一度之對面、死ヤラヌウヘ、中宮懷妊今月當產期之間、密々上洛云々、於今度儻被追遣太宰府ト云々、

〔山槐記〕治承三年十一月十八日壬申、子終剋前關白(藤原基房)從一位、年卅五、未被聽牛車之人也、被遷太宰權帥、下向給、○中略

天皇我詔旨止勅大命乎親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、從一位藤原朝臣基房坐事天太宰權帥爾退給不、天下之人此旨乎聞天見懲止倍志勅不大命乎衆聞食止宣、

治承三年十一月十八日

〔百鍊抄八高倉〕治承三年十一月十八日、前關白○藤原基房左遷太宰權帥、遣大夫尉康綱令追之、卽以出門、隨身厚景侍四五人在共、雜人滿途中見之、各叫喚、前關白於路頭出家云々、前相模守業房配流伊豆國、但逐電不逢追使、前大納言資賢卿幷雅賢資時信賢可追却京中之由、被仰下也、廿八日、前關白文書被召置內裏、花山院前大相國○藤原忠雅進目錄、文庫被宿納大內、歸京之後返賜之、

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶二年正月己亥、左降從四位上吉備朝臣眞備、爲筑前守、

○按ズルニ、續日本紀天平十九年十一月丙子ノ條ニ、以春宮大夫兼學士從四位下吉備朝臣眞備爲右京大夫ノ文アリ、眞備ハ、天平勝寶二年マデ右京大夫タリシナラン、右京大夫ハ正五位

どをばさしたれど、この御こゝろにひかれてなみだとゞめがたし、

〔古事談二臣節〕儀同三司○藤原伊周配流者、長德二年四月廿四日事也、宣命趣、罪科三箇條、奉射法皇、奉呪咀女院、秘行大元法等之科云々、左衛門權佐允亮、府生茜忠宗等爲追下向其所、中宮御在處、所謂二條北宮、入自東門、經寢殿北、就西對、帥所任敕仰含敕語而申依重病忽難赴配所之由、差忠宗令申其旨、無許容、載車可追下之由重有敕命云云、固關等事右大將○藤原顯光行之、此間仰左右馬寮令引御馬、堪武藝之五位依宣旨令候鳥曹司云々、

配流

太宰權帥正三位藤原伊周、元内大臣出雲權守從三位同隆家、元中納言伊豆權守高階信順元右少辨淡路權守同弟道順元右兵衛佐木工權頭○中略

權帥候中宮之間、不從使催之由、允亮雖再三奏聞、被仰猶慥可追下之由、二條大路見物車如堵、中宮○定子與帥相雙不離、仍不能追下由奏之、京中上下擧首亂入后宮中、見物濫吹殊甚、宮中之人々悲泣連聲、聞者無不拭淚、隆家同候此宮、兩人候中宮不可出云々、仍下宣旨、擬破夜大殿戶之間、不堪其責、隆家所出來也、依稱病由、令乘網代車、遣配所、但隨身可騎馬云々、於權帥者已逃隱、令宮司搜御在所及所々、已無其身云々、被召問信順等之處、申云、左京進藤原賴行權帥近習者也、以件賴行可令申在所者、卽召問賴行之處、申云、帥一昨日出自中宮、道順朝臣相共向愛太子山、至賴行者、自山脚罷歸了、其乘馬放弃彼山邊云々、仰云、允亮召具賴行、尋跡可追求、若所申有相違者、可加拷訊者、仍允亮朝臣右衛門尉備範左衛門府生忠宗等馳向彼山、尋得鞍馬云々、中宮乘權大夫快義之車出給、其後使官人等參上御所、搜撿夜大殿及疑所々、放組入板敷等、皆實撿云々、奉爲后宮無限之恥也、中宮已落飾出家給云々、信順等四人籠戶屋、以看督長令守護之、此間已經十箇日、五月四日員外帥出家歸本家、尋求之使者尙在西山、左衛門志爲信守領本所之者也欲令申事由之間、權帥又乘車馳向離宮、爲信着韲沓、於淸和院邊追留、此間公家差右衛門權佐孝道、左衛門尉季雅、右衛門府生伊遠等、令馳遣帥所、歸本

にうちかこみたり、たちこみたるけしき、みちおほちの四五丁ばかりのほどはゆきゝもせず、いさけおそろしきとの、うちのけしきありさまどもいはんかたなくさわがしけれど、寢殿のうちにおはしましある人々おほかれど、人おはするけはひもせず、哀にかなしきに、かゝるにこのあやしのものども、殿の内にうちめぐりつゝ、こゝかしこをみさわぐけはひ、えもいはずゆゝしげなるにも、ものゝはざまより見いだして、あるかぎりの人々、むねふたがり、こゝちいといみじ、との〇伊周いまはのがれがたきことにこそはあめれ、いかでこのみやのうちをいでゝ、木幡にまゐりて、ちかうもとほうもつかはさんかたに、まかるわざせむとおぼしの給はするに、このものどもたちこみたれば、おぼろげのとりけだ物ならずはいで給はん事かたし、夜中なりともなき御かげにも、いま一度參りてこそは、いまはのわかれにも御覽せられめといひつゞけの給はするまゝに、えもいはずおほきに水精の玉ばかりの御涙つゞきこぼるゝ、みたてまつる人、いかゞはやすからん、はゝ北方宮のおまへ〇中宮定子御をぢの人々、れいの涙にもあらぬなみだ出きて、このおそろしげなる物どもの、宮の内にいりみだれたれば、撿非違使どもいみじうせいすれど、それにもさはるべきけしきならず、かゝる程に、かくみだりがはしき物のなかどもを、かきわけさすがにうるはしくさうぞきたる物、南おもてにたゞまゐりにまゐる、こはなにしにかとおもふ程に、宣命といふものよむなりけり、きけば太上天皇〇花山をころしたてまつらんとしたるつみひとつ、みかどの御はゝ后をのろはせたてまつりたるつみひとつ、おほやけよりほかの人、いまだおこなはざる太元法をわたくしにかくしおこなはせたるつみにより、内大臣をつくしの帥になしてながしつかはす、又中納言をば、出雲權守になして、ながしつかはすといふ事をよみののしるに、宮の内の上下聲をとよみなきたるほどのゐりさま、此文よむ人もあはてにたり、撿非違使どもゝ涙をのごひ、あはれにかなしうゆゝしう思ふ、そのわたりちかき人々みなきゝてか

かはおそろしとおぼさゞらん、いとわりなういみじとおぼしめして、院にかへらせ給て、ものもおぼえさせ給はでぞおはしましける、これをおほやけにも殿〇藤原道長にも、いとよう申させ給つべけれど、ことざまのもとよりよからぬことのおこりなれば、はづかしうおぼされて、この事ちらさじ、後代のはぢなりと忍のばせ給けれど、とのにもおほやけにもきこしめして、おほかた此比の人のくちに入たる事は、これになんありける、太上天皇はよにめでたきものにおはしませど、この院の御心おきてのおもりかならずおはしませばこそあれ、さはありながら、いと〳〵かたじけなくおそろしき事なれば、此事かくおとなくてはよもやまじと、よ人いひおもひたり、また太元法といふ事は、たゞおほやけのみぞむかしよりおこなはせ給ける、たゞ人はいみじき事あれどおこなひ給はぬ事なりけり、それをこの内大臣殿忍のびて、この年ごろおこなはせ給ふといふこと、此比きこえて、これよからぬ事の内にいりたり、又女院の御なやみ、をり〳〵いかなることにかとおぼしめし、御もの丶けなどいふことゞもあれば、この内大臣どのを、なほ御心おきて心をさなくてはいかゞはあべからんと、かたぶきもてなやみきこゆる人々おほかるべし、

【榮花物語五浦々の別】かくてまつり〇長徳二年四月はてぬれば、世中にいひさゝめきつる事どものあるべきさまに人々いひさだめて、おそろしうむづかしう、内大臣殿も中納言殿もおぼしなげく、〇中略北方〇藤原道隆妻貴子、卽伊周隆家之母也、の御せうとの、明順道順の辨などいふ人々あな心う、さはかうにこそよはあめれ、いかゞせさせ給はんずるなど申しさわげど、つゆかひあるべきことにもあらぬに、との丶内に曹司して年頃さふらひつる人々、とありともかゝりとも、君のなくならせ給はんまゝにこそはとおもはで、よろづをこぼちはこび、ごほめき、のゝしりもていで、はこびさわぐを見るに、いみじうこゝろぼそし、されどさなとせいし給べきにもあらず、よろづの人のみ思ふらんことを、はづかしういみじうおぼさるゝ程に、世のなかのある撿非違使のかぎり、この殿の四方

小右記云、出雲權守於中宮捕得遣配所、見者如雲、權帥出雲權守共候中宮不可出、仍宣下擬破夜
大殿戶、仍不堪其責、隆家出來、權帥逃隱愛太子山、有司只求得鞍馬歸、後日出家歸本家、母氏同車、
六日記云、權帥官符依公家被改云々、
五月一日、權帥出雲權守籠中宮御所、不赴配所、仍遣撿非違使、追捕宮中、捕得隆家朝臣、權帥逃去、後
日於愛太子山捕之、遣配所、今日中宮出家爲尼、中宮定子依帥事出家、六月廿二日入內、人以不甘心、
十月十日、前帥偷入京之由有其聞、仍仰有司令伺之處、在中宮也、仍重令追下、遣有司於中宮令搜
出之、奏出家之由、改官符、猶不剃頭、令作僞甚者歟、

〔榮花物語四見はてぬ夢〕かゝる程に、一條殿をばいまは女院〇東三條院詮子こそはしらせ給へ、かの殿〇藤原爲光の女君たちはたかつかさなる所にぞすみ給ふに、內大臣どの〇藤原伊周しのびつゝおはしかよひけり、寢殿のうへとは、三君をぞきこえける、おほんかたちも心も、やむ事なうおはすとてちちおとゞいみじうかしづきたてまつり給ひき、女子はかたちをこそといふ事にてぞ、かしづききこえたまひける、そのしん殿の御かたに、內大臣殿はかよひたまひけるになんありける、かゝる程に、花山院この四君の御もとに、おほんふみなどたてまつり給、けしきだゝせ給けれどけしからぬ事とて聞いれ給はざりければ、たび〳〵御みづからおはしましつゝ、いまめかしうもてなさせ給けることを、內大臣殿は、よも四君にはあらじ、此三君のことならんとおしはかりおぼいて、わが御はらからの中納言〇藤原隆家に、此事こそやすからずおぼゆれ、いかゞすべきと聞えたまへば、いでたゞおのれにあづけ給へれと、やすき事とてさるべき人二三人ぐし給ひて、この院のたかづかさどのより、月いとあかき〇長德二年正月十六日に、御むまにてかへらせ給けるを、おどしきこえんと覺しおきてけるものか、ゆみやといふものして、とかくし給ければ、御ぞのそでよりやはとほりにけり、さこそいみじうをゝしうおはします院なれど、ことかぎりおはしませば、いかで

多に聞えさせたまふ、

ながれゆくわれはみくづとなりぬともきみしがらみとなりてとゞめよ、なき事によりかくつみせられ給ふを、かしこくおぼしなげきて、やがて山ざきにて出家せしめ給ひてけり、そのほどきはめてかなしき事おほかり、

○按ズルニ、菅公出家ノ事、大鏡ノ外所見ナシ、恐ラクハ源高明ノ事ト相混ズルナラン、

〔日本紀略五冷泉〕安和二年三月廿五日壬寅、以左大臣兼左近衛大將源高明、爲太宰員外帥、

〔百錬抄四冷泉〕安和二年三月廿六日、左大臣源高明坐事左遷太宰權帥、依左馬助滿仲等密告也、

〔公卿補任冷泉〕安和二年己巳

左大臣正二位源高明　左大將、三月廿六日貶太宰權帥、即日入道請留、不許、准俗赴任所、

〔日本紀略十一一條〕長德二年四月廿四日甲午、宣命、以内大臣藤原伊周朝臣、爲太宰權帥、以權中納言同隆家朝臣、爲出雲權守、去正月依奉射花山院法皇、又奉呪咀東三條院之聞也、又緣坐左遷之者有其數、　五月一日庚子、出雲權守隆家卿進發赴任所、勅使相送、於皇嘉門下抑車、奏請聽出家留京、勅不許、遂赴謫處、又太宰權帥逃脱不赴、仍令尋求之、今日皇后定子〇伊周妹落飾爲尼、　四日癸卯、權帥自春日社歸京、即赴謫所、勅使相送、　廿日己未、大納言顯光仰外記云、去月廿四日、依左遷事、警固諸陣、宜令開者、又有大祓事、依左遷也、　廿一日庚申、發遣山陵使、被告左遷事、　九月十日丁未、右衞門佐孝道奏云、昨日未剋中宮〇定子邊權帥入京之由云々、仍仰府生忠宗、令守護之處、已有其實、仰云、定領送使之間、先以隨兵可遣山崎者、次右大臣〇藤原顯光參入、有左遷除目事、大江以言任飛驒權守、高階信順任伊豆權守、同道順任淡路權守、　十三日庚戌、右大臣以下參入、被行權帥追遣官符事、

〔百錬抄四一條〕長德二年四月廿四日、諸陣警固、内大臣伊周任太宰權帥、權中納言隆家貶出雲權守、是依去正月奉射華山院、并呪咀服物自板敷下取出云々東三條院、私行太元法事也、去二月、先是令勘申兩人罪名、

給レ不、是則爲レ安ニ宗廟社稷一、以ニ大穀奉修茲乗間食一、〇食下恐脱ニ宣字一昌泰四年辛酉正月廿五日、三河掾大春日晴陸、右大史遠江權掾勝諸明、駿河權介菅原景行、式部丞飛驒權掾菅原景茂、右衞門尉能登權掾源嚴、但馬權守源敏相、□□□□伯耆權目山口高利、右馬出雲權守源善、□□、□□美作守和氣貞世、少納言長門權掾良岑貞成、阿波權守源兼則、前攝津守土佐介菅原高見、大學頭昌泰四年正月廿七日左降除目、

〔大鏡二 左大臣時平〕左大臣時平のおとゞは、もとつねのおとゞの御太郎也、御母四品彈正尹人康親王の皇子のむすめ、醍醐のみかどの御時、この太郎左大臣の位にて、としいとわかくておはしき、すがはらのおとゞ、〇道眞右大臣の位にておはします、そのをりみかどおほんとしいとわかくおはします、左右大臣に世のまつりごとおこなふべき宣旨くださしめ給へりしに、そのをり左大臣御歳廿八九ばかり、右大臣御歳五十七八にやおはしけん、ともによのまつりごとをせしめ給ひしあひだ、右大臣さえもよにすぐれめでたくおはしまし、御心おきてもことのほかにかしこくおはしまし、左大臣は御歳もわかく、さえもことのほかにおとりたまへるにより、右大臣御おぼえことの外におはしましたるに、左大臣やすからずおぼしたる程に、さるべきにやおはしけん、右大臣の御ためによからぬ事いできて、昌泰四年正月廿九日、太宰權帥になしたてまつりてながされ給ふ、このおとゞの子どもあまたおはせしに、をんなきんだちはむこどりし、をとこ君だちはみな、ほど〴〵につけて位どもおはせしを、それもみなかた〴〵にながされ給ひてかなしきに、をさなくおはしけるおとこ君をんな君たち志たひなきておはしければ、ちいさきはあへなんとおほやけもゆるさしめ給ひしかば、ともにゐてくだり給ひしぞかし、みかどの御おきてきはめてあやにくにおはしませば、この御子どもをおなじかたにだにつかはさゞりけり、かたかたにいとかなしくおぼして御まへの梅の花を御らんじて、

こちふかばにほひおこせよむめのはなあるじなしとて春なわすれそ、又ていしのみかど字〇

寶龜中至參議從三位、歷彈正尹刑部卿、天應元年坐事左遷、至是薨於任所、時年六十七、

〔續日本紀三十七桓武〕延曆元年六月乙丑、左大臣正二位兼太宰帥藤原朝臣魚名、坐事免大臣、其男正四位下鷹取、左遷石見介、從五位下末茂土左介、從五位下眞鷲從父、並促之任、　己卯、太宰帥藤原朝臣魚名到攝津國、病發不堪進途、勅、宜待病愈、然後發遣、

〇按ズルニ、公卿補任ニ左大臣藤原魚名兼太宰帥免大臣之時任之歟トアリ、或ハ然ラン、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年七月乙卯、遣左衞門權佐從五位下藤原朝臣岳雄、右馬助從五位下佐伯宿禰宮成等、率近衞、喚絆大納言正三位藤原朝臣愛發、中納言正三位藤原朝臣吉野、參議正四位下文室朝臣秋津、幽於院中、各異其處、是日詔曰、〇中略大納言藤原朝臣愛發乎波廢職天京外仁、中納言藤原朝臣吉野乎波太宰員外帥仁、春宮坊大夫文室朝臣秋津乎波出雲國員外乃守爾任賜比宥賜不止宣天皇我御命乎衆聞食與止宣、

〔日本紀略一醍醐〕延喜元年正月廿五日戊申、諸陣警固、帝御南殿、以右大臣從二位菅原朝臣〇道眞任太宰權帥、以大納言源朝臣光任右大臣、又權帥子息等、各以左降、　廿六日遣固關使、同日除目、　二月一日甲寅、上皇〇宇多還本宮、今日權帥向任、　四日丁巳、奉幣諸社、被申菅原朝臣左遷之事、　五日戊午、依同事奉幣山陵、

〔政事要略二十二〕天皇加詔旨良万止宣大命乎、親王諸王諸臣百官□□天下公民聞食止宣、朕即位之初、左大臣藤原朝臣〇時平等、奉前太上皇〇宇多之詔天、相共輔導シ天、朝政乎取持奉止、于今五箇年爾成奴、而右大臣菅原朝臣〇道眞塞内與利俄爾大臣上收給利、而不知止足之分、有專權之心、以佞諂之情、欺惑前上皇之御意、然乎恐愼上皇之御情天万口奉行无敢怨御情天、欲行廢立、離間父子之志、淑皮兄弟之愛、詞者辭比順者天之心者逆、是皆天下所知奈利、不宜居大臣之位、須法律乃任爾罪奈倍給倍不〇倍下恐脱之字然而殊爲有所念奈牟停大臣之官、太宰權帥爾罷給不、又右大臣爾者大納言源朝臣乎任

貶爲大宰帥

にゐていきたりけるともすけといふをとゞめて、御心にまたがへといひおきて、我はのぼりにけり、はりまにもあるべきさまにまつらひすへたてまつりおきて、御ともの撿非違使どもかへり參りぬ、

〔日本書紀孝德二十五〕大化五年三月戊辰、蘇我臣日向、日向字身刺譖倉山田大臣於皇太子、〇天智曰、僕之異母兄麻呂、伺皇太子遊於海濱而將害之、將反其不久、皇太子信之、天皇使大伴狛連三國麻呂公、穗積嚙臣於蘇我倉山田麻呂大臣所、而問反之虛實、　己巳、大臣〇中略開佛殿之戶、作發誓曰、願我生生世世不怨君王、誓訖自經而死、妻子殉死者八、〇中略是月遣使者收山田大臣資財、資財之中、於好書上題皇太子書、於重寶上題皇太子物、使者還申所收之狀、皇太子始知大臣心猶貞淨、追生悔恥、哀歎難休、卽拜日向臣於筑紫太宰帥、世人相謂之曰、是隱流乎、

〔續日本紀孝謙二十〕天平寶字元年七月戊午、勅曰、右大臣豐成者、事君不忠、爲臣不義、〇中略宜停右大臣任、左降太宰員外帥、

〔續日本紀稱德二十六〕天平神護元年十一月甲申、右大臣從一位藤原朝臣豐成薨、〇中略其弟大納言仲滿執政專權、勢傾大臣、〇中略左降大臣爲太宰員外帥、大臣到難波別業、稱病不去、居八歲、仲滿謀反伏誅、卽日復本官、薨時年六十二、

〔續日本紀桓武三十六〕天應元年六月癸卯、降太宰帥從三位藤原朝臣濱成、爲員外帥、傔仗之員限以三人、仍勅大貳正四位上佐伯宿禰今毛人等曰、三考黜陟、前王通典、懲惡勸善、往聖嘉訓、帥參議從三位兼侍從藤原朝臣濱成所歷之職、善政無聞、今受委方牧、寄在宣風、若不懲肅、何得後効、仍貶其任、補員外帥、宜莫預釐務、但公廨者賜帥三分之一、府中雜務、一事已上、今毛人等行之、

〔續日本紀桓武四十〕延曆九年二月乙酉、太宰員外帥從三位藤原朝臣濱成薨、濱成贈太政大臣正一位不比等之孫、兵部卿從三位麻呂之子也、略涉群書、頗習術數、以宰輔之胤、歷職內外、所在無績、吏民患之、

せ給へる、よのうちに此北野にそこらの松をおほさしめ給ひて、わたりすみ給ふをこそは、たゞいまの北野宮と申て、あら人神におはしますめれ、

〔菅家後集〕自詠

離家三四月、落涙百千行、萬事皆如夢、時時仰彼蒼、

不出門

一從謫落在柴荊、萬死兢々跼蹐情、都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲、中懷好逐孤雲去、外物相逢滿月迎、此地雖身無撿繫、何爲寸歩出門行、

〔榮花物語〕五浦々の別そち殿（○太宰權帥藤原伊周）ははりまにおはすとて、こゝはあかしとなん申といふをきこしめしてかくなん、

ものおもふこゝろのやみしくらければあかしのうらもかひなかりけり、いでやものゝおぼゆるにやと、わが御心にもにくゝおぼさるべし、中納言殿（○藤原隆家）ことかたへおはすらんを、などかおなじかたにだにあらましかば、何事もよからましとあやにくなる世を心うくおぼされて、しら浪はたてどころもにかさならずあかしもすまもおのがうら／＼、といふふるうたをかへさせ給へるなるべし、

かた／＼にわかるゝ身にもにたるかな明石もすまもおのがうら／＼、とぞおぼされける、中納言殿はたびのやどりの露けくおぼされければ、

さもこそはみやこのほかにたびねせめうたてつゆけきくさまくらかな、かくてたじまにおはしつきぬれば、國のかみ公家の御さだめより外にさしすゝみて、つかうまつる事おほかゝ、中納言は心のあいぎやうつき給へれば、たれもいみじうぞつかうまつりける、おはしつきぬれば、のぶやす都へかへりまゐるに、いとゞ心ぼそげなる御ありさまの心ぐるしさに、わがこをとも

にて、かくやうのうたや詩などをさへ、いとなだらかにゆゑ〳〵しういひつゞけたまふと、見きく人めもあやにあさましくあはれにもまもりゐたり、物のゆゑしりたる人なども、むげにちかくゐよりてほかめせず見きくけしきどもをみて、いよ〳〵はへて、物をくりおくやうにいひつづくるほどぞまことにけうなるや、しげきなみだをのごひつゝ、けうじゐたり、つくしにおはしますす所のみかども、かためておはしますす、大貳のゐどころははるかなれども、樓のうへの瓦などの心にもあらず御らんじやられけるに、又いとちかく觀音寺といふ寺のありければ、かねの聲をきこしめしてつくらせ給へる詩ぞかし、

都府樓纔看瓦色　觀音寺只聽鐘聲

これは文集白居易、遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看といふ詩にもまさゞまにつくらしめ給へりとこそ、むかしのはかせども申ければ、またかのつくしにて九月九日菊花を御らんじけるついでに、また京におはしましゝ時、九月のこよひ内裏にて菊のえんありしに、このおとゞつくらしめ給へりける詩を、みかど醍醐○中略かしこくかんじたまひて、御衣たまはり給へりしを、つくしまでくだらしめ給へりければ、御らんずるにいとゞそのをりおぼしめしいでゝ、つくらせ給ひける、

去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨斷腸　恩賜御衣今在此　捧持毎日拜餘香

この詩いとかしこく人々かんじ申されき、この事どもたゞちり〴〵なるにもあらず、かのつくしにてつくりあつめさせたまへりけるを、かきあつめ一卷とせしめ給ひて後集となづけられたり、又をり〳〵の歌かきおかせ給へりけるを、おのづからよにちりきこえしなり、○中略また雨のふる日うちながめ給て、

あめのしたかわける程のなければやきてしぬれぎぬひるよしもなき、やがてかしこにてう

到遷謫所

こゝまではたひらかにまうでつきて侍、かひなき身なりとも、いま一たびまゐりて御らんせられてややみはべりなむとおもひ給ふるになん、いみじうかなしうはべる御ありさま、ゆかしきなりとあはれにかきつけ給て、

うきことをおほえの山としりながらいとゞふかくもいるわが身かな、となん思給へるなどかき給へり、宮にはあはれにかなしうよろづを覺しまどはせ給て、物もおぼえさせ給はず、〇中略そち殿はその日のうちに山さき關戸の院といふ所にぞとゞまり給へる、この御ともにはさるべき撿非違使ども、四人ぞつかうまつりたりける、そのての物どもの御車につきてまゐるぞあはれにゆゝしき、中納言の御ともには左衛門尉延安といふ人は、ながたにの僧都のはらからの撿非違使ぞつかうまつりたりける、あさましきこともつきもせず、せき戸の院にて、帥殿は御心ちあしうなりにければ、御とものけびゐしども、かう／＼そちはみだり心ちあしとて、ためらひさぶらふ、

〔大鏡二左大臣時平〕右大臣〇菅原道眞の御ためによからぬ事いできて、昌泰四年正月廿九日、太宰權帥になしたてまつりてながされ給ふ、〇中略つくしにおはしましつきて、あはれに心ぼそくおぼさるゝゆふべ、をちかたに所々けぶりたつを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつけぶりなげきよりこそもえまさりけれ、又雲のうきてたゞよふを御らんじても、

山わかれとびゆく雲のかへりくるかげ見るときぞなほたのまるゝ、さりともとよをおぼしめされけるなるべし、月のあかき夜、

うみならずたゞよふ水の底までもきよき心は月ぞてらさむ、これいとかしこくあそばしたりかし、げに月日こそはてらし給はめとこそはあめれ、まことにおどろ／＼しきことはさる物

在路

騎相具、次有車一兩、近習人歟、侍五六人、或着淨衣、或着水干小袴、騎馬、御樋臺、樓上置屏風二帖、御中持一合、令入宿院、御車副古河宅給云々、令出松殿給之間、見物雜人亂入殿中、在北對緣、女房一昨日大路退出云々、毎事如夢、　廿一日乙亥、晩頭左衞門權佐光長來曰、前大納言邦綱頻申勸前關白出家之由所傳承也者、後聞今日於古河宿出家給云々、　廿二日丙子、去夜前關白出古川宅、自院下向、令乘昇居屋形船給、覆幔、前皇后宮少進仲盛着淨衣、監物家重着直垂小袴、牛童千手丸招出納乘御船、入中持一合樋臺與等、看督長者二人同乘之、雜船一艘、武者船一艘在後云々、今日巳刻令過寺口給、於此所奉逢之人翌日所來談也、卽是向福原給云々、　廿七日辛巳、後聞今日興福寺衆徒蜂起、其故氏長者配流無例、雖被停所帶、可被歸京之由可訴申云々、而別當玄緣、權別當藏俊稱、其咎可在身發方、大衆欲止之處、遂被追散云々、

〔大鏡二左大臣時平〕右大臣〈○菅原道眞〉の御ためによからぬ事いできて、昌泰四年正月廿九日、太宰權帥になしたてまつりてながされ給ふ、〈○中略〉ひごろへて都とほくなるまゝに、あはれに心ぼそくおぼされて、

君がすむ宿の梢をゆくゆくもかくるゝまでにかへり見しかな〈○此歌又見拾遺和歌集〉又はりまの國におはしつきて、あかしのむまやといふ所に御やどりせしめ給ひて、むまやの長のいみじう思へるけしきを御らんじて、つくらしめ給へる詩いとかなし、

驛長無驚時變改　一榮一落是春秋

〔榮花物語五浦々の別〕中納言殿〈○藤原隆家、貶於出雲國、〉は京いでたまひて、たむばざかひにて御馬にのらせ給ぬ、御車はかへしつかはすとて、とし比つかはせ給けるうしかひわらはに、此うしはわがかたみにみよとてたべば、わらはふしまろびてなくさま、まことにいみじ、御車は都にき、御身は志らぬ山路にいらせ給ほどぞいみじき、おほえ山といふ所にて、中納言宮〈○一條后藤原定子〉に御文かゝせ給、

うせさすれば、むげによにいりぬれば、こよひはよくまもりて、あすうの時にとある宣旨あり、されば夜ひとよいもねでたちあかしたり、宮の御まへ帥殿は、ゝ北のかた、ひとつに手をとりかはしてまどはせ給、はかなく夜もあけぬれば、けふこそはかぎりとたれも〳〵おぼすに、たちのかんともおぼさず、御聲もをしませ給はず、いかに〳〵、時なり侍りぬと、せめのゝしるに、宮の御まへは、ゝきたのかた、つととらへてさらにゆるしたてまつらせ給はず、かゝるよしをそうせさすれば、几帳ごしに宮の御まへをひきはなちたてまつれと宣旨𛀁きれど、けびゐしども、人なれば、おはしますにはえもいはぬもの共、のぼりたちてぬりごめをわりのゝしるだにいみじきを、又いかでかみやの御まへの御てをひきはなつ事はあらんと、いとおそろしう思ひまはじて、身のいたづらにまかりなりて後はいとびんなかるべし、とく〳〵とせめ申せば、すぢなくていでさせ給ふに、松ぎみ(○藤原道雅)いみじう𛀁たひきこえさせ給へば、かしこくかまへてゐてかく𛀁たてまつりて、御車にかうじ橘こき(○こき恐かき誤)ひとつばかりをふくろに入て、むしろばりのくるまに乘給、宮の御方をいとかたじけなくおぼせど、宮の御まへは、ゝ北のかたも、つゞきたち給へれば、ちかく御車よせてのらせ給に、は、ゝ北の方、やがて御こしをいだきてつゞきてのらせ給へば、母北方そでをつととらへて、やがてのらむと侍りとそうせさすれば、いと便なき事なり、ひきはなちてとあれど、はなれ給べきかたみえず、たゞ山ざきまでいかむいかんと、たゞのりにのり給へば、いかゞはせんすぢなくて御車ひきいだしつ、長德二年四月廿四日なりけり、帥殿はつくしのかたなりければ、ひつじさるのかたにおはします、中納言殿はいづものかたなれば、たんばのかたのみちよりとて、いぬゐざまにおはする、

〔山槐記〕治承三年十一月十八日壬申、子終刻前關白(藤原基房)従一位、年卅五、未レ被レ聽二牛車一之人也、被レ遷二太宰權帥一下向給、傳聞大夫尉源康綱參入、乘二八葉車一出給、御共步行者有二廿人許一、次看督長二人、次康綱負二胡籙一、郎等五六

にて、うすにびの御なほしさしぬきなどき給ひて、あさましくてゐたまへれば、人々かしこまりてちかうもえまゐりよらぬに、このてのあやしのものどもいりみだれて、しえたるけしきどもぞあさましういみじき、さてあけたれども、夢におはせぬよしをえうせさす、出家したるにか、さるにてもたゞ今は都の内をはなるべきにあらず、よく〳〵あされあされと宣旨しきりなり、けびゐしども、かつはなく〳〵いみじうおもひながら、宣旨のまゝにするに、おはせねばいとあさましきことにて、すぢなしとてそのあたりさらず、よるひるまもるべきよしの宣旨しきりにあり、かくして今日もくれぬ、いとあさましき事なり、いかゞさるやうあらん、撿非違使どもことあやまちたらば、みなとが有べきよしきくにも、その夜、よ一夜いもねじとおもひさわぐほどに、鳥の時ばかりに、あやしのあじろ車の、こゝらの人ともおちぬさまなるが、二三人ばかりともにて、このみやをさしてたゞきにくるに、あやしくなりて、この撿非違使どものてのあかぎぬなどきたる物ども、たゞよりによりて、なにの車ぞ、たゞいまかゝるところにくるはとてながえにさとつけば、あらずや殿のこばたに參らせ給へりしが、いまかへらせ給なりといふをきゝて、このものどもみなさりぬ、御くるまみかどのもとにてかきおろして、内大臣殿おりさせ給ぬ、けびゐしどもみな土におりてなみゐたり、みたてまつれば、御年はたゞいま廿二三ばかりにて、御かたちのとゝのほり、ふとりきよげにて、色あひまことにめでたし、かの光る源氏もかくやありけんと、見たてまつる、うすにびの御ぞのなよゝかなるみつばかり、おなじ色の御ひとへの御なほしさしぬき同じさまなる、御身のさえもかたちも、此よのかむたちめにはあまり給へると聞ゆるぞかし、あたら物をあはれにかなしきわざかなとみたてまつるに、涙もとゞめがたうてみななきぬ、のりながらもいらせ給はで、宮のおはしませば、われひとりはなほかしこまり給へるも、いとかなし、さておはしましぬれば、帥周〇伊木幡にまゐらせたりけるが、たゞ今なんかへりて候とぞ

せつけたてまつらず、たゞあるがなかのおとゝにて、わらはなるきみ〇俊賢の殿の御ふところはなれ給はぬぞ、なきのゝしりてまどひ給へば、事のよし奏してさばれそれはとゆるさせ給を、おなじ御くるまにてだにあらず、むまにてぞおはする、十一二ばかりにぞおはしける、たゞ今よのなかにかなしくいみじきためしなる人のなくなり給、れいのことなり、これはいとゆゝしう心うし、醍醐のみかどいみじうさかしう、かしこくおはしまして、ひじりの御門とさへ申し、御門の御一のみこ源氏になり給へるぞかし、かゝる御ありさまはよにあさましくかなしう心うきことに世に申のゝしる、

〔榮花物語五浦々の別〕うるはしくさうぞきたる物、南おもてにたゞまいりにまいる、こはなにしにかとおもふ程に、宣命といふものよむなりけり、〇中略内大臣〇藤原伊周をつくしの帥になして、ながしつかはす、又中納言〇藤原隆家をば出雲權守になして、ながしつかはすといふ事を、よみのゝしるに、〇中略さていまはいでさせ給へ、日暮ぬ〳〵とせめのゝしり申せど、すべてとかくもいらへする人なし、うちにもかくいらへする人なきよしを奏せさすれば、などてさるべきことにもあらず、たゞよく〳〵せめよとのみしきりに宣旨くだるに、かくてこの日もくれぬれば、〇中略宮にはきのふくれにしことだにあり、今日とく〳〵と宣旨しきりなり、さても中納言はあるけしきし侍り、帥はすべてさふらはぬよしをそうせさすれば、あさましきことなり、宮をさるべくかくしたてまつりて、ぬりごめをあけて、くみれのかみなども見よとある宣旨しきりにそふ、御ぬりごめあけ侍らん、みやさりおはしませと撿非違使申せば、いまはすちなしとて、さるべく木丁などたてゝ、おさはかなるさまにておはしまさせて、けびゐしどものみにもあらず、えもいはぬ人ぐして、このぬりごめをわりのゝしるをともあさましうゆゝしく心うし、さは世中はかくあるわざにこそありけれど、めもくれ心もまどひてなみだだにいでこず、中納言も我にもあらぬさま

て、天の下ゆすりて、西のみやへ人はしりまどふ、いといみじきことかなと聞ほどに、人にも見え給はでにげ出給ひにけり、愛宕になんきよみづになんとゆすりて、つひに尋ね出てながし奉るときくに、あへなしとおもふまでいみじうかなしく、心もとなき御事に、かくおもひしりたる人は、袖をぬらさぬといふたぐひなし、あまたの御子ども、(○源經房、俊賢、)あやしき國々のぞうになりつゝ、行衞もしらずちり〴〵わかれ給ふめるぞ御ぐしおろしなど、すべていへばおろかにいみじ、大臣も法師になり給ひにけれど、しひて帥になし奉りて、おひくだし奉る、其比はひたゞ此ことにて過ぎぬ、

〔榮花物語一月宴〕かゝる程に、世中にいとけしからぬことをぞいひ出たるや、それは源氏の左のおとゞ(○高明)の式部卿の宮(○爲平)の御事を覺して、みかどをかたぶけ奉らんとおぼしかまふといふことといできて、よにいときゝにくゝのゝしる、いでやよにさるけしからぬ事あらじなど人申思ふ程に、佛神の御ゆるしにや、げに御心のうちにもあるまじき御心やありけん、三月廿六日(○安和二年)にこの左大臣殿(○高明)に、けびゐし打かこみて宣命よみのゝしりて、みかどをかたぶけたてまつらむとかまふるつみによりて、太宰權帥になして、ながしつかはすといふことをよみのゝしる、いまは御くらゐもなきぢやうなればとて、あじろ車にのせたてまつりて、たゞいきにゐてたてまつれば、式部卿の宮(○爲平)の御心ち、おほかたならんにてだにいみじとおぼさるべきに、まいてわが御事によりて、いできたることゝおぼすに、せんかたなくおぼされて、われも〳〵といでたちさわがせ給、北の方の御むすめをとこ君達(○經房、俊賢、)いへばおろかなるとのゝうちのありさまなり、思ひやるべし、むかしすがはらのおとゞ(○道眞)のながされ給へるをこそ、よの物がたりにきこしめしゝか、これはあさましういみじきめをみてあきれまどひて、みななきさわぎ給もかなし、をとこ君たちのかぶりなどし給へるも、おくれじおくれじとまどひ給へるも、あへてよ

〔運歩色葉集佐〕左遷放流事

〔伊勢集上〕かゝるに時の大臣ながされ給、むこにて兵衛敏相のすけより但馬介になされてながされけるを、たゞにてはさしもおぼえでやみにしを、かくとほくながれゆきたるが、あはれなる事といひたりければ、

かけていへば泪の川の瀬をはやみ心づからやまたはながれん

左遷方法

〔新儀式五臨時〕貶退事〇中略

又或有坐事左遷之者、謂式部丞遷兵部、主計寮官人遷他官并外國掾目等之類也、又追位解官左遷等者、懲肅之後、經二三年有復本位本官者、延喜□年源悦追位、同年復本官、天慶二年源俊追位、天慶□年復本位、延長□年橘□遷兵部丞、同年復本官、延喜□年主計官人皆遷外、同年復本官、天慶□年同寮頭業恒遷主税頭、不復本官卒去、助大夫最行已下遷外國掾目、應和二年最行遷主殿助、允已下拜諸司者、或遂有復本官者、事見任例也、

〔職原抄下〕諸國〇中略

納言以上貶謫之時、任諸國權守也、仍常儀參議兼國、任納言之日卽止之、

〔職原抄下〕太宰府　權帥

納言以上前官若任之、中古以來例、於正帥者、擬親王官、承府務人任權也、或又任正、依時宜歟、爲大臣之人、左遷之時任權帥、然而不知府務也、

發遣

〔政事要略二十二〕太政官符太宰府

左衛門少尉正六位上善友朝臣益友左右兵衛各一人

右件人爲領送權帥從二位菅原朝臣〇道眞發遣如件、府宜承知之、但任中雜俸料幷監從、及不預雜務、依前員外帥正三位藤原朝臣吉野例行之、又山城攝津等國充給食馬、路次國又宜准此、

昌泰四年正月廿七日

〔蜻蛉日記中ノ上〕廿五日六日〇安和二年三月の程に、西の宮の左のおとゞ〇源高明流され給ふ、見奉らんと

古事類苑

法律部七

上編

左遷

左遷ノ義ハ、正字通ニ、謫官曰左遷、唐謂去朝廷爲州縣曰左遷ト云ヘルガ如ク、內官ヨリ外官ニ貶謫セラルヽヲ云フ、因テ或ハ其人ヲ流人ト云ヒ、其所ヲ配所ト云ヘリ、孝德天皇ノ大化五年ニ、蘇我日向ヲ太宰帥ニ任ジタリシヲ、時人稱シテ隱流ニ遇ヘリト爲ルモ、左遷ノ類ナリ、次ニ太宰權帥ニ貶セラレタルハ、右大臣藤原豐成ニテ、卽チ孝謙天皇ノ天平寶字元年ノ事ナリ、然レドモ覓ニ任ニ赴カズ、光仁天皇ノ天應元年太宰帥藤原濱成ヲ降シテ員外帥ト爲シ、公廨ヲ減ジ、釐務ニ預ルコトヲ禁ゼリ、其後仁明天皇ノ承和九年ニ中納言藤原吉野ヲ貶シテ員外帥トシ、醍醐天皇ノ延喜元年ニ右大臣菅原道眞ヲ以テ權帥ト爲シヽガ如キ並ニ同ジ、皆府務ヲ知ルコトヲ得ザルナリ、又國司ニ貶セラレタルハ、孝謙天皇ノ天平勝寶二年吉備眞備ガ筑前守タルノ類ニテ、光仁天皇ノ寶龜六年兵部大輔兼美作守大津大浦ヲ日向守トシ、尋テ見任ヲ解キテ、其國ニ留メ、嵯峨天皇ノ弘仁元年ニ、藤原仲成ノ亂ニ因リテ、諸國ノ權官ニ貶セラレタル者多ク、淳和天皇ノ天長元年ニ至リ、入京ヲ聽サルヽ時ニ、其人々ヲ指シテ權任ノ流人ト云ヘリ、亦流刑ノ類ナルヲ知ルベシ、

又量移ト云フコトアリ、量徙トモ云フ、其罪ヲ降シテ遠國ヨリ近國ヘ移スヲ云フ、

〔伊呂波字類抄 左疊字〕左遷 セン 罪

古事類苑

法律部七

上編

左遷

サセ給テ、御意狀ヲ遊テ彼等ニタブ、恐ヲ成テ給ハラザル時ハ、我能思召意狀也、只給リ候ヘ、一ノカミノ意狀ヲ、以下臣下取傳フル事、家ノ面目ニアラズヤト彼仰ケレバ、畏テ給ケルトカヤ、誠ニ是非明察ニ、善惡無二ニ御坐ス故也、ヨモ是ヲ以テ成シ奉リ、禪定殿下モ大切ノ人ニ思召ケリ、

天暦十年十二月廿日　右衛門府生蜂田平時

〔朝野群載 十一 廷尉〕請申大田國武丸申久過狀進事

誤天任愚心天強盜犯奉仕禮留怠狀

右件犯、任愚心天奉仕禮利、因之公家勘給布仁、無所避申、仍過狀進如件、以解、

寛仁三年七月　日　大田國武丸申世利

外國人怠狀

〔本朝文粹 十二 怠狀〕東丹國入朝使裴璆等解申進過狀事

謬奉臣下使入朝上國怠狀

裴璆等背眞向僞、爭善從惡、不救先主於檮俎之間、猥諂新主於兵戈之際、況乎奉陪臣之小使、忝上國之恒規、望振鷺而面慙、詠相鼠而股戰、不忠不義、向招罪過、勘責之旨、曾無避陳、仍進過狀、裴璆等、誠惶誠恐謹言、

返怠狀

〔日本紀略 五 冷泉〕安和二年三月二日己卯、式部大輔大江重光朝臣、權大輔文時、少輔雅文等怠狀、是去年十二月廿九日、郡司召不參之故也、　四日辛巳、被免怠狀、

〔春記〕長暦三年閏十二月廿七日癸丑、諸衛官人怠狀、竊盜入女房曹司事令申關白、〇藤原頼通早奏聞者、即奏聞、仰云、歳已暮、戒將來可免給之由、可仰關白、又申關白、命云、早可返給者、即返奉左衛門督已畢、

〔類聚符宣抄 四〕大納言正三位源朝臣高明宣、奉勅、山城介藤原朝臣季方、依闕去年荷前使召勘之日進過狀、先了、然則返給彼過狀、當年位祿官符、不得捺印者、

天暦十年七月七日　大外記安倍衆與奉

雜載

〔保元物語 一〕新院御謀叛思召立事

宇治左大臣頼長ト申ハ、知足院禪閤殿下忠實公ノ三男ニテ御坐マス、〇中略禁中陣頭ニテ公事ヲ行セ給フ時、外記官史等諫サセ給フニ、アヤマタズ次第ヲ辨申セバ、我僻事ト思召時ハ、忽ニ折レ

犯人款狀

右今月廿六日宣旨偁、正二位權大納言兼民部卿皇后宮大夫源朝臣經信宣、奉勅、撿非違使左衞門權少尉平兼倫、右衞門少志中原範政、勘問囚人之間、猥致爭論、宜令進過狀者、謹所請如件、抑件日兼倫、以赦前之犯人、可禁獄之由所仰下之也、而範政成赦前犯之者、尙有赦後之疑者、先散禁採實之後、可禁獄之由披陳之間、兼倫所陳每事違法、因玆解示法家之理、還放非常之詞、返答狀屢及天聽、今勘發之處、罪責難遁、仍進過狀、謹解、

應德二年二月廿七日　　正六位上行右衞門少志中原朝臣範政

宣旨云、悉陳也、理不似過狀之趣、宜令書改進上之、

〔本朝世紀〕康和五年十二月八日癸丑、是日右京大夫定實朝臣獻過狀、奉幣廻文、依書奉字事也、

〔日本紀略醍醐一〕延喜六年九月廿日、鈴鹿山群盜十六人、令進過狀誅殺之、

〔西宮記臨時十〕成勘文事 附囚名帳事　役畢勘文事

勘申可着鈦左右獄囚事

合十九人

強盜十二人

竊盜七人

左十人（○此下恐有脫文）

高田助茂

贓物

紅花染衾一條　鏡二口　合子八枚

右三人犯竊盜者也、勘問其由、承伏進過狀已畢、

以前今月廿二日、可着鈦左右獄囚、勘申如件、

瀧口內舍人藤原長輔、攝政隨身同良孝等射取之、即有勅祿、禁偷兒於獄、外記云、今夜諸陣直官人不祗候籠、宜令進怠狀者、

〔左經記〕長元元年十一月廿九日己未、明法博士依知道賴職朝臣等相論、故政職朝臣遺財事、勘落繼嗣令文嫡子條、上達部定申失錯之由、以何罪科誡其罪哉、抑去七月依改元有恩詔、可會赦歟否哉如何、右府以下重定申云、○中略 明法博士略繼嗣令文之旨、尤可謂失錯、可令進過狀、但會赦否之由不詳文法之、上達部暗難定申、先唯被責過狀、博士等定有所申歟、其時可被尋定歟、○中略 令明法博士可進過狀者、余奉之仰大夫史貞行宿禰云々、

〔朝野群載十一 廷尉〕過狀

正六位上行左衞門權少尉平朝臣兼倫解申進過狀事

勘問獄囚間與右衞門少志中原範政致爭論怠狀

右去正月廿六日　宣旨　大外記主稅助助敎清原眞人定俊

仰云、權大納言兼民部卿皇后宮大夫源朝臣經信宣、奉勅、檢非違使左衞門少尉平兼倫、右衞門少志中原範政、勘問囚人間、猥致爭論、宜令進怠狀者、今月十一日、依有盜犯嫌疑打訊獄囚二人之時、一人已以承伏所犯、一人只承赦前之犯、不伏赦後之犯、然則範政申云、件犯人可禁何所矣、兼倫答云、禁獄者也、可遣本禁歟者、範政申云、赦前犯人偏可原免也者、兼倫答云、非勘問赦前之犯、可勘問赦後之犯也、仍僅經一問、未究拷訊之前、何可原免哉、然則貽其疑者也、如此執論之道、範政不顧上下之序、猥放罵詈之言、而可共進過狀之由、今被下宣旨矣、仍進過狀如件、謹解、

應德二年二月四日　正六位上行左衞門權少尉平朝臣兼倫

正六位上行右衞門少志中原朝臣範政解申進過狀事

誤任愚心與左衞門權少尉平兼倫致爭論怠狀

長保二年三月　日　東市佑口

〔日本紀略十一條〕長保三年五月十三日甲申、外記慶滋爲政、可進怠狀之由被仰下、去年五月十八日詔書、草昧二字之誤也、

〔日本紀略十一條〕寛弘二年九月六日辛亥、藏人式部少丞藤原朝臣隆光奉勅、召撿非違使右衞門少志林重親於藏人所客座勘問、　七日壬子、重親進怠狀、卽解却其職、後優免復本位、

〔江家次第五月七〕定賑給使事

寛弘九年五月十一日行成記被定賑給使、左兵衞尉以道進怠狀者也、然而自藏人所方被責云云、仍差充使被奏例如此云云、

〔本朝世紀〕長和二年四月廿九日庚寅、藏人辨景理來、傳勅云、賀茂祭近衞府使忠經、馬寮使保昌、東宮使道雅、背宣旨過差、撿非違使不糺行事可令問者、信經未進申文、早可令進者、　五月四日甲午、參內候陣之間、藏人右中辨景理傳仰云、○中略祭使之申文未全○全一本作進如何、若無所避、可令進過狀者、令奏再三催仰未申左右之由、外記爲長不候仗頭、仍不能重問、　七日丁酉、晚頭景理朝臣來、○中略傳勅云、使下人等所申不可然、可令宜過狀、不注子細修理所避申已口同可令進過狀者、使官人申文給景理朝臣、仰令進過狀之由了、　廿五日乙卯、右中辨景理來、傳左府消息云、祭使々怠狀可令催進也者、有穢之上、有憚之間所不相逢、召遣外記爲長、口參來、仰過狀遲々由、申云、東宮使怠狀一日進、而其狀非例、今二使怠狀、今日可進者、相加欲進之間、所遲進者、但東宮使怠狀、先可進之由仰之、卽進其狀、非申文非過狀太奇佐、仍返給了、今日內令改直可奉之由仰下了、申尅許爲長進使々怠狀之體、太異體、就中保昌怠狀如申文、然而以無所避、申文可爲怠狀之由歟、依相府催不令改直、可遲引之故也、東宮使怠狀令改直了、卽件三枚怠狀送景理朝所了、有請取之報狀、

〔日本紀略後十三一條〕寛仁元年正月廿三日癸亥、去夜竊盜入御所、而宿直瀧口二人經南殿庭東走射之、

望事未決、大納言來入之、見法家勘申伊勢國司罪狀、便仰可令進四等官署之狀、又遏罷下、宜勤行齋宮雜事事、仰宣衆望朝臣、

〔日本紀略冷泉五〕安和元年八月十八日己巳、昨日省試、不召齋光朝臣之由被問、文時朝臣、依無避由召過狀、

〔日本紀略冷泉五〕安和二年四月二日己酉、藤原千晴配流隱岐國、僧蓮茂配流佐渡國、　廿日丁卯、源連、橘繁延、僧蓮茂等進怠狀了、

〔日本紀略冷泉五〕安和二年閏五月廿八日甲戌、左大臣(藤原師尹)仰外記云、今年式部省一分召有誤、可令奉其怠狀、又大輔大江重光朝臣去任也、任中有過、遷他官罪法家令勘申、

〔小右記〕天元五年六月二日壬戌、左府(源雅信)被付奏諸儒怠狀、

〔日本紀略一條十〕長德二年十一月廿六日壬辰、左大臣(藤原道長)以下參、有官奏、其次被定文章生試誤事、式部大輔輔正卿所進經典釋文、與文章博士匡衡所進釋文、已有違背、輔正卿所進之文摺改反音、仍可獻怠狀之由有勅定、　十二月廿七日癸亥、左大臣被送匡衡怠狀、(文章生試判、以大輔藤原朝臣不取、請申取之怠狀、)

〔本朝世紀〕長保元年三月廿六日己卯、早旦左大臣里第、召大外記滋野朝臣善言被仰云、下野前司平朝臣維衡、散位同致賴等、於伊勢國成合戰、仍召上其身、下撿非違使廳訊問、維衡朝臣進過狀了、致賴朝臣逋避不進過狀者、使廳日記、幷維衡朝臣過狀文相副、下給外記、外記給之局參、召明法博士令宗允政、擬勘申各罪名、

〔朝野群載太政官六〕東市佑大江(某)解申進過狀事

　誤不觸外記服藥怠狀

右今月今日、大外記兼助教清原眞人(某)仰云、權大納言源朝臣(某)宣、奉勅、宜令進過狀者、被勘仰之旨無所避申、仍進過狀如件、

事、望請悔愧先過、自今以後恪勤不怠緩、晝奉仕行事、夜宿直侍、一事以上、無漏闕精進奉仕、謹以申聞、申聞無（〇三字別筆）

寶龜二年閏三月九日

石川宮衣
大宅童子
勝廣前
金月足
村擧祖繼
壬生廣主
安宿廣成
大友路万呂
他田島万呂
小長谷嶋主
三島子公
沙彌慈緒（〇四字別筆）

〔日本紀略　一醍醐〕延喜九年七月十一日、下總守景行進過書、

〔貞信公記〕承平二年六月八日己未、公忠朝臣來、令見讚岐介淑茂臨時交易諸舂米違期進納過狀、仰云、仰官與傍國司過狀取集、可令法家勘申所當罪者、

〔貞信公記〕承平八年（〇天慶元年）十一月十一日甲寅、民部卿來、便仰衆望朝臣進過狀、所當罪可令勘事、又忠舒過限不向任國、會赦不事、　十五日、民部卿持來衆望忠舒等法家勘文、卽仰忠舒赴任可許事、衆

應聽諸國官長任中一度入京事

右撰格所起請偁、○中略今諸國長官、爲申雜務、請假入京、就官申政、官云非可奏玉階前之事、何輙入京、責過狀、從追却、求之政途、理不穩便、伏望任中一聽入京、令申擁政、若留連京下、久不歸者、隨狀勘責、○中略

貞觀十年六月廿八日

〔類聚三代格八〕太政官符

應科責出擧收納之日有犯吏等事

右得因幡國解偁、○中略望請若此吏等、責其過狀、且停釐務、具狀言上、不更任使、謹請官裁者、右大臣宣、依請、諸國准此、

貞觀十二年八月廿八日

〔類聚三代格七〕太政官符

應停止任用之吏恣決郡司及書生國掌等事

右得豐後守從五位下藤原朝臣智泉解狀偁、○中略望請任用之官、不聽見決、若有雜任致怠必可見決者、官長者糺過狀、而後行之、○中略

元慶三年九月四日

〔禁秘御抄下〕召怠狀事

侍臣以下有怠時、怠狀召之也、免之時返給之、

〔續修東大寺正倉院文書十九〕中室淨人過狀解文

中室淨人解　申進過狀事　附中納言殿使舍人始連小室万呂○小室傍有村主二字、係別人筆、

右淨人之過甚深、不能浮輕、凡官者先致禮敬於公、後及孝悌於親、而今淨人在過違禮義、以既乖公

款伏
伏辨

徵過狀

服罪輸誠ノ書ナリ、罪ハ輕重トナク、皆怠狀ヲ進メシメテ後ニ科斷スルコトニテ、或ハ一タビ收メテ更ニ返シ、事モアリ、

〔令義解獄十〕凡國斷罪應申覆者、（謂中猶重也、下條云、盜發及徒以上、附朝集使申太政官、是皆遣使申覆也、）太政官量差使人、取强明解法律者、分道巡覆見囚、（謂徒以上囚、情盡未斷者也、下文云、徒罪國斷得伏辨、故杖罪以下、不入此條也、）事盡未斷者、催斷即覆、覆訖錄申、若國司枉斷、使人推覆无罪、國司款伏、灼然（謂款誠也、服罪輸誠之書、是爲款伏、即伏辨亦同也、）合免者、任使判放、仍錄狀申、其使人與國執見有別者、各以狀申、若理狀已盡可斷決、而使人不斷、妄生節目盤退者、國司以狀錄申官、附使人考、其徒罪、國斷得伏辨、（謂結斷已訖、得囚服辨、）及贓狀露驗者即役、不須待使、以外待使、其使人仍總按覆、覆訖同國見者、仍附國配役、

〔類聚三代格十六〕太政官符、
應以閑廢地賜願人事
右得右京職解偁、○中略謹依符旨、課條喩戶、勤俾勞作、而人稀居少、不事耕營、徒過日月、稍成藪澤、適或他人加功營熟、其主奪妨貪此沃熟、因玆人倦競作、无心勤營、荒廢之由、事緣於此、今彈正巡撿之日、恒加勘當、須責過狀、○中略
天長四年九月廿六日

〔類聚三代格十二〕太政官符
應勘決坊令事
右得右京職解偁、○中略今依太政官去天長五年十二月十一日符、責過狀滿三度、則彈正移刑部令決、○中略
天長九年十一月廿九日

〔類聚三代格七〕太政官符

應大帳貢調税帳等使上日數少奪公廨兼不預考事

右得民部省解偁、撿案內、延暦九年十二月十日、左大辨紀朝臣古佐美宣、諸國税帳大帳貢調等使上日、頃年之間、民部漏落不爲充行、自今以後、宜依舊給之者、而今奉使之輩、多非其人、或稱病避事、或肆情徇私、曾不參省、徒煩雜掌、來務闕怠、從此而生、望請勘公文間、無故不上、計其上日、不滿三分之二、卽奪公廨、兼不預考、仍每年上日、移送式部省、審加貶降、又所奪公廨、令與税帳申、然則吏自公勤、勘帳無怠、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

大同五年三月廿八日

〔類聚三代格七〕太政官符

應先勘當任公文次勘前司時帳幷科責不勘四度公文府司及管內國島司事〇中略

一税帳大帳朝集帳條

右同前〇參議從四位下守右大辨兼行侍從播磨守源朝臣希奏狀偁、〇中略件等帳勘濟之事、一准用度帳調帳等之例、若有不勘者、抑留府國長官解由、但不勘朝集公文者、奪公廨四分之一、

以前條事如右、宜依件行之、

寛平九年六月十九日

不給節祿

〔延喜式十二中務〕凡親王以下次侍從以上闕追儺陣者、不預元日節祿、

〔延喜式十八式部〕凡諸節會、五位已上預參之後、不預謝座謝酒之禮、及離本列任意左右者、莫給當日祿、但參議已上、幷當日有職掌者、及羸老扶杖之輩、不在此限、

奪粮

〔延喜式四十六左右衞門〕凡行幸之日、召集散所衞士令供奉、若致闕怠、每一日怠、奪五斗粮、

附 怠狀

古ニ款伏ト云ヒ、伏辨ト云フハ、卽チ後ニ怠狀トモ過狀トモ云ヘル者ニテ、令義解ニ謂ユル

奪公廨

經推彈、則首從難辨、如此之類、品目猥多、非張新制、何爲懲革、望請自今以後、諸司三度以上不參臺喚、幷不辨申勘事者、並移二省以奪季祿、

以前事條如件、右大臣宣、奉勅依奏、

貞觀十八年七月廿三日

〔延喜式十一太政官〕凡興福寺國忌幷維摩會者、藤原氏行事大夫、點定氏中無障之輩、即付外記、外記申大臣令參、事畢之後、錄見參歷名奏聞、若有不參者、下式兵二省、五位已上不預節會、六位以下官人奪季祿、王氏參藥師寺最勝會亦同、

〔延喜式十二中務〕凡荷前使內舍人有闕怠者、奪一年季祿、大舍人奪夏冬衣服、

〔延喜式十八式部〕凡元正之日、若有不朝者、五位以上莫預三節、七十以上者、不在此限、六位以下奪春夏祿、六位以下若有申故者、不在此例、但宮內、主殿、典藥、內膳、造酒、釆女、主水等省、寮、司、莫責不參、侍醫東宮學士亦同、

凡正月十七日、五月五日、兩度節不參五位已上、待兵部移無預新嘗會、六位已下官人奪季祿、

〔延喜式十八式部〕凡參國忌五位已上、待會事訖乃歸却、若不然者同不參例、其六位已下闕職掌者、奪季祿布二端、

〔類聚三代格八〕太政官符

應禁調庸麁惡幷便附在京司等事

右被右大臣宣偁、奉勅、諸國調庸專當歷名、附大帳使依例申送、而使人預知物麁惡、規求遁去、遂稱病故、便附在京司等、調物濫惡、從此而生、即法令雖有科條、所在罕能遵奉、今須如是之類、及在京司幷他使等、輒相代奉使者、同奪公廨、務令懲革、

延曆廿一年八月廿七日

〔類聚三代格七〕太政官符

奪季祿

〔續日本紀九聖武〕神龜元年十月乙卯、散位從五位下息長眞人臣足任出雲按察使時、驗貨狼藉、惡其景迹、奪位祿焉、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年三月二日癸未、制、七道貢賦違期、國司五位已上奪位祿、六位已下折取公廨五分之一、自今以後、永爲恒例、

〔類聚符宣抄四〕散位嶋田朝臣公望　下野守藤原朝臣繁正

權大納言兼春宮大夫右近衞大將藤原朝臣師尹宣、奉勅、件公望等、爲去年十二月荷前使儲使、闕怠其事、進過狀訖、宜免此怠、依式停當年位祿者、

應和二年三月八日　大外記海正澄奉

〔令義解四考課〕凡應給祿之官、若有負犯、（謂有犯罪也）應除免官當被推勘、科斷未畢、其祿停給、待斷訖校定然後給之、（謂若應當免者、依考課令奪當年祿、不應當免者、仍即給之、）其私罪下上、公罪下中、奪半年之祿、

〔令義解四考課〕凡官人有犯、私罪下中、公罪下下、並解見任、○註略、即依法合除免官當者、○註略、不在考校之限、並奪當年祿、（謂當年者、自春至冬、即奪事發年祿、不可追前年祿、假如正月事發者、不徵去年祿、即停將來祿、若秋祿既給後事發者、春秋之祿、重皆徵還之類也、）

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年十二月廿五日壬寅、制、○中略、內舍人闕荷前使者、奪一年季祿、大舍人奪夏冬衣服、

〔類聚三代格十二〕太政官符

一應諸司三度以上不參臺喚幷不辨申勘事者停給季祿事

右同前（○彈正臺）奏狀偁、謹案公式令云、親王及五位以上有犯、應須糺勘、而未審實者、並據狀勘問、不須推考、委知事由、事大者奏彈者、然則奏聞之理、必在推問之後、非經糺勘、何輒上奏、而今或一司、若公罪若私罪、或爲臺所記錄、或爲人所告言、因茲爲糺彈其由、即召官人、而空設巧詐、不曾參到、今將錄罪狀以上奏、則全乖令文、亦欲對其身定罪名、則終無其期、又一司四等以上之官、罪狀各異、至于未

岑朝臣安世宣、奉勅、依請者、彼時職司无怠、路橋有全、而依天長五年十二月十六日格、停貶奪科行贖銅法、其後職吏不勤、諸人更緩、遂使京條荒蕪、既失花美、橋梁破絶、靡由往還、是因輕科疎網之所致也、望請復舊移送、貶奪考祿、〇中略

以前事條如件、右大臣宣、奉勅依奏、

貞觀十八年七月廿三日

〔延喜式十一太政官〕凡諸節會日、乘輿未出之前、諸司毎事辨備、宸儀御殿之後、一々供奉、若有致怠者、奪祿降考、

〔延喜式十八式部〕凡諸節會日供奉諸司、若有致怠者、奪祿降考、

〔類聚三代格五〕太政官符

應進會赦帳之後放解由事

右被大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奧出羽按察使藤原朝臣良房宣偁、奉勅、如聞、會去年七月十四日八月廿七日兩度恩赦、諸國未得解由之輩、或口新司、〇或以下四字、據日本後紀作式訴諸司、偏緣洪恩、只放解由、至于造會赦帳、令加其名、寄事彼此、拒以不署、此則乖詔書所指、復似隱舊疵、須彼帳進官之後乃與解由、但後司所勘事有不平、准不與解由狀、加所執、亦前被放許之類、奸遁不署、錄狀言上、其未署之間、五位已上不論京官外任及散位、總奪位祿、六位以下同沒季祿公廨、無職之人不預敍用、

承和十年七月九日

〔延喜式六齋院〕凡院裏官舍木工寮修理之日、院司臨監、若不滿十年、令致破損者、司官五位已上奪位祿、六位已下奪季祿、

〔延喜式十八式部〕凡闕荷前使之侍從、及次侍從者、待中務移、無預正月七日節、非侍從者奪位祿、亦無預同節、

當路、於人非難、怠而不掃、過在當處、理須重責其人、職司爲政京國相兼所掌多事周辨難堪、而以道橋之一失、奪一年之考祿、賞罰之理、良近偏頗、宜依請贖銅、

一應皇親准主典奪祿事

右同前解偁、被太政官去弘仁十年十一月五日符偁、當路不掃淸、穿垣引水、壅水侵途等、諸司諸家幷內外主典已上、移式部兵部貶考奪祿、四位五位錄名奏聞、无品親王家、及所々院家、以其別當宜准諸家司亦移省貶奪、其雜色番上已下、不論蔭贖決笞五十者、今案符旨、皇親此雜色之內、須不論蔭贖決笞、謹案律條、皇親議論人也、論蔭同三位、誠雖被下符、驗理不便、望請准主典移省奪祿者、其前符疎而不勢皇親、今如所請當奏請之、但皇親蕃多事惟輕碎、宜依請、

以前大納言正三位兼行右近衞大將良峯朝臣安世宣、奉勅、宜依件行之、

天長五年十二月十六日

〔三代實錄十八 淸和〕貞觀十二年十二月廿七日甲辰、制、彈正臺復天長九年十一月二十九日格、每月巡撿京中、幷勘記諸司諸院諸家及內外主典已上犯狀、直移式部兵部二省、貶奪考祿、

〔類聚三代格十二〕太政官符

一應停京職官人贖銅復舊貶奪考祿事

右彈正臺奏狀偁、撿案內、太政官去天長四年九月廿日符偁、臺解偁、弘仁十年十一月五日格偁、左右京職解偁、太政官去弘仁六年二月九日下兩職符偁、右大臣宣、奉勅、如聞頃者京中諸家、或穿垣引水、或壅水侵途、宜仰所由咸俾修營、不責引流水於家內、准禁露汙穢於墻外者、今案符旨、有壅侵之禁、无掃淸之誡、因之有勢之家、都无掃淸、如此之類、諸家司幷內外主典已上、移式部貶考奪祿者、大納言正三位兼行左近衞大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、奉勅、依請者、而起請之後、曾無遵行、量其意況實是同罪、望請同亦移省貶考奪祿者、正三位行中納言兼右近衞大將春宮大夫良

閉門

〔古今著聞集三政道忠臣〕昔は人の裝束もなへ〳〵としてぞ有ける、されば齋院の大納言の消息に、先代の時、節會袍借獻など書れたんなるは、節會の袍とて、ほの〳〵とある物の人にかすなどが有けるとぞ、後朱雀院の御時、旬に參たりける上達部を御覽じて、次日資房卿の藏人頭也けるを召て、昨日公卿の裝束を御覽せしかば、以外に袖大に成にけり、かくては世のつゐへなるべし、いかゞせんずると右大臣實資のもとへ、いひあはすべしとみことのり有ければ、則申されければ、おとゞ申給けるは、みなの公卿に此よしを承りて畏り申さば、さすがに右大臣御けしきかうぶりたると聞えば、人もなをり侍なんとはからひ申されければ、そのさだめに披露有て、右府閉門して畏のよしをせられければ、人みな聞おそれて、裝束の寸法すべられけり、

〔百練抄七後白河〕保元三年四月廿日、賀茂祭、博陸○藤原忠通於町棧敷見物、宰相中將信賴欲通彼前之間、雜人鬪亂、打破中將車物見、廿一日、依昨日鬪亂、執柄家司少納言信範解官、和泉守邦綱除籍、分賜左馬寮、隨身七人賜廷尉、博陸閉門、

追職田位田

〔令義解田三〕凡應給職田位田人、○註略若官位之內、有解免者、從所解免追、謂解、解官也、免、免官也、假有正三位位田卅町、犯免官者、三載之後、降先位二等、敍正四位上、即依正四位給廿四町之類也、若解官者、追亦如之也、其除名者、依口分例、若有賜田者、亦追、謂此亦爲除名者立文也

奪祿

〔類聚三代格十二〕太政官符

一應停貶奪職吏考祿依法贖銅事

右得左京職解偁、太政官去天長四年九月廿一日符偁、彈正臺解偁、太政官去弘仁十年十一月四日符偁、職解偁、不掃清當路諸司諸家、并內外主典已上、貶考奪祿、四位五位錄名奏聞者、而起請之後、曾無遵行、准之法條、實是同罪、望請同亦移省、貶奪職吏考祿者、依請者、今撿案內、京中總五百八十餘町、橋梁三百七十餘處、雖勤修造、道橋多數、往還不絕、不能无損、年中巡撿十有二度、每度貶奪、徒有俸祿之名、曾无代耕之實、職吏之患、無甚於斯、望請停奪考祿、依法贖銅者、所請可優、何者掃清

又範國爲五位藏人有奉行事小野宮右府爲上卿被候陣下申文之時、殉君顯定於南殿東妻被出于陰根範國不堪逃以笑、右府不被知案內以咎及奏達範國依此事恐懼、

〔源氏物語十二須磨〕入道、○中略はゝ君にかたらふやう、きりつぼの更衣の御はらの源氏のひかる君こそ、おほやけの御かしこまりにて、すまのうらに物し給なれ、

〔本朝世紀〕康治元年七月十二日癸卯、內大臣○藤原賴長召外記仰曰、參議藤原公行卿、左馬頭隆季、右中將忠賴、右兵衞佐公重、左兵衞權佐平家盛、可恐懼不供奉去五日行幸故也、○中略

左馬頭藤原隆季朝臣
左近權中將藤原忠賴
右兵衞佐藤原公重
左兵衞權佐平家盛

內大臣宣、奉勅、件人等不參仕去五日行幸宜恐懼者、

康治元年七月十二日　大炊頭兼大外記助敎中原朝臣師安奉

廿五日丙辰、被免右兵衞督公行恐懼　八月三日癸亥、左馬頭隆季、右中將忠賴、右兵衞佐公重、左兵衞佐家盛、被免恐懼

〔本朝世紀〕久安三年正月二日丙寅、皇太后宮權亮藤爲通朝臣、右近權中將源師仲朝臣、被免恐懼件兩人、去冬於一院○鳥羽御所有鬪諍事仍恐懼云々、

〔百練抄七近衞〕仁平二年八月廿六日、撿非違使爲義恐懼、爲別當公能依致無例○例恐字誤也、

〔後拾遺和歌集三夏〕おほやけの御かしこまりにて、山寺に侍けるに、郭公をきゝてよめる、　律師長濟

一こゑもきゝがたかりし郭公ともになく身となりにける哉

譴責

〔百練抄七近衛〕仁平元年八月廿四日、付使廳使於伊通卿教長等、譴責信濃阿波雜掌、陵礫齋院下部之下手人、

蟄居

〔江談抄二雜事〕四條中納言嘲弼君顯定事

又四條中納言定賴○藤原爲藏人頭之時、嘲弼君顯定、詐吐虛誕、爲宇治殿賴通○藤原仰云、某申宇治殿聞食被勘發、定賴云、攝政關白ナドハ、人ノ嘲哢スル者ニモ非ズ、依此事半年許蟄居云々、顯定宇治殿方人也云々、定賴二條殿教通○藤原方人也、故有意緒歟、古今藏人頭无被處勘例○例恐衍事之例云々、

〔今昔物語二十四〕藤原資業作詩義忠難語第廿九

今昔、藤原資業ト云博士有ケリ、鷹司殿ノ御屛風ノ色紙形ニ可被書キ詩ヲ、其道ニ達セル博士共ニ仰セ給テ詩ヲ作ケルニ、彼ノ資業朝臣ノ詩數ニ入ニケリ、其比齊信ノ民部卿大納言ト云人有リ、身ノ才有テ文章ニ達ルニ依テ、仰ヲ承テ此詩共ヲ撰ビ被定ケルニ、資業ガ詩數入タリケルヲ、其時ニ藤原義忠ノリタヾト云博士有テ、此レヲ嫌ハシク思ケレニヤ、宇治殿ノ口ニテ御坐ケルニ、義忠申ケル樣、此ノ資業朝臣ノ作レル詩ハ、極テ異樣ノ詩共也、他聲ニシテ平聲ニ非ザル字共有リ、難專ラ多シ、然ドモ此資業ガ當職ノ受領ナルニ依テ、大納言其ノ饗應有テ被入タル也ト、其時ニ資業ハ口口守ニテ有ケル也、民部卿此事ヲ傳ヘ聞テ、攀緣ヲ發シテ、此ノ詩共ヲ皆麗句微妙ニシテ、撰ブ所ニ私无キ由ヲ被申ケレバ、宇治殿頗ル義忠ガ言ヲ不心得思食テ、義忠ヲ召テ、何ノ故有テ此ル僻事ヲ申テ、事ヲ壞ラムト爲ルゾト勘發シ被仰ケル、義忠恐レヲ成シテ蟄リ居ニケリ、明年ノ三月ニナム被免ケル、

籠居

〔山槐記〕治承三年四月廿三日辛亥、傳聞賀茂祭中宮使藏人大進基親破新制、令着口衣於雜色、仍恐懼、馬寮使爲保同破制、有院勘籠居、

恐懼

〔江談抄二雜事〕範國恐懼事

にけふのことゞもとはせ給はゞ、この女ばうのきぬのかずにより、御。か。ん。だ。う。はべらんずらんと、おもひ給こそいとくるしうさぶらへ、みや〳〵によきことと候へばうちゑませ給ていとよしとおぼしめしたり、かやうのれいならぬことと候へば、まづおひたてさせ給に、いときやうきやうにさぶらふなり、おほみや（○妍子姉一條后上東門院）中ぐう（○妍子妹後一條后威子）は女ばうのなり、むつにすぐさせ給はねばいとよし、このおまへなんいとうたておはしますとこそつねに候めれなど申おかせ給ひていでさせ給、女房たちゐすくみてたつこゝちいとわびし、おの〳〵さるべきには陣にゐてさはぎ、さらぬはつぼね〳〵にみないきてものもおぼえでよりふしぬ、かくてそのよもふけぬれば、又の日御堂より、關白どのとくまゐらせ給へとあれば、なにごとにかとていそぎまゐらせ給へば、せけんの御ものがたりなりけり、つかさめしけふあすになりぬれば、さやうのことゞもなるべし、かうていかにぞやきのふのみやの大饗いかゞありしととひきこえさせ給へば、はべりしやう、しか〴〵といち〳〵に申させ給へば、いとこゝろようちゑませ給て、さて〳〵とひきこえさせ給て、女ばうのなりなどとひかたらせ、ありしことゞもをきこえさせ給へば、いみじうはらだゝせ給て、あさましうめづらかなることゞもなりや、きぬはなゝつやつをだにやすからぬことゝおもへば、中ぐう大宮などにはみな申しゝらせて、いみじきをりふしにもたゞ六とさだめ申たるをあやまたせ給はぬに、この宮こそことやぶりにおはしませ、すべて〳〵さらに〳〵うけ給はらじとすぎにたることをのゝしらせ給も、さすがにをかしくおぼさる、さるにてもおとゞはかうやはいますかるべき、おほやけの御うしろみはいかなる人のするわざぞ、なでうさることをみて、たゞにある人かあるなど、いとおどろ〳〵しうむづがらせ給、いとわりなきか。ん。だ。う。なりとぞ申給ふ、かへす〴〵めづらかなりし日のありさまとぞ、東宮中宮大夫殿たち（○藤原頼宗、源齊信）などまゐらせ給ても申させ給、

〔春記〕長久元年五月十二日丙寅、右府送給太宰府案、可令覽關白殿〇藤原賴通者、入夜持參彼殿令覽、命云、殊無其難、內々經天覽、早可下給也、早速令成官符可下遣者、又參內密々奏了退下、仰云、行經朝臣經信勘事可免除之由、明日觸關白可免給者、予〇藤原資房仰藏人式部丞基明、參關白殿申此仰旨、可召遣件兩人之由也、予明日觸間聊所障不能早參之故也、入夜退出、于時降雨、件兩人、去月廿七日勘當、今日初被免除歟、

〔春記〕長久元年六月六日己丑、參內、良久之有召參御前、仰云、經季朝臣爲陪膳、昇御臺盤參進之間、聞朝干餉御膳候之由、即昇御臺盤退歸、藏人資成同昇之、未聞之事也、共以不覺者也、早示觸關白可處勘當也者、予即參關白殿〇藤原賴通依御物忌以人令傳申此旨、被申云、事之旨、太以違例也、早可被勘當也者、予又參內奏聞、了後召件二人〇人下恐脫御字勘當由了、

〔榮花物語〕二十四若枝萬壽二年正月になりぬ、〇中略枇杷殿〇三條后妍子にはことし大饗せさせ給はんとていそがせ給、〇中略廿三日と定めさせ給て、われも〳〵おとらじまけじといそぎのゝしりたり、〇中略さて關白殿〇藤原賴通妍子兄內にいらせ給て御まへ〇妍子に申させ給、けふの事すべていと事の外にけしからずせさせ給へり、この年比、世の中いとかういみじうなりにてはべる、また一とせの御堂會の御かた〳〵の女房のなりどもなどぞ、世にめづらかなることゞもにはべりしかど、それは夏なればこそかぎりありてすぢなかりけり、なでう人のきぬか、廿きたるやうさふらふ、さらにさらにいとけしからずおはします小野宮のおとゞ〇藤原實資中宮大夫〇源齊信などいとはづかしきかんたちめなり、すべてかゝることをなんきゝみざりつるこそ申されつる、それはさるものにて、みめのおどろ〳〵しうきらゝかなることは、また世にめづらかに候つるわざかなと、かへす〳〵おなじことをせさせ給ほどの御けはひ、けぢかうあひぎやうづきはづかしうおはします、けふの一のかみともおぼえさせ給はずなん、いま御だう〇妍子父藤原道長

諸衞之人不了之時、藏人召仰本省令勘誡之、諸司官人依過怠居客座事、二分以上之

〔源氏物語十二須磨〕御はらからのみこたち、むつましうきこえ給し、かんだちめなど、はじめつかたは、とぶらひきこえ給などありき、哀なる文をつくりかはし、それにつけても、世中にのみめでられ給へば、きさいのみやきこしめして、いみじくの給ひけり、おほやけのかうじなる人は、心にまかせて、この世のあぢはひをだに、えることかたうこそあなれ、

〔日本紀略六圓融〕天延元年九月九日、重陽宴、天皇出御南殿、早出公卿等處勘事、

〔日本紀略十四後一條〕長元四年三月十四日辛酉、式部卿敦平親王停釐務、源良國者、太宰大監大藏種材男也、先年射殺大隅守菅野重忠犯人也、忽改姓名謀計也、前太宰大貳惟憲卿坐此事處勘事、

〔類聚三代格一〕太政官符

應禁制春日神山之內狩獵伐木事

右被中納言從三位兼行左兵衞督陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣偁、○中略今聞、狩獵之輩、觸穢齊場、採樵之人、伐損樹木、○中略若不遵制旨、猶有違犯者、量狀勘當、不得容隱、

承和八年三月一日

〔延喜式十一太政官〕凡遣賑給使奏國解訖、即仰式部、二日之內進擬使文、同日官修符請印、訖五日內使者發去、若致闕怠者、尋情勘當、臨時緩急之使亦同、

〔延喜式十一太政官〕凡諸國稅帳朝集等使、向京在路、事故延緩過期者、非有當國驗、即依法科處、其所輸贖物收刑部省、但貢調使者、不得追附在京諸使、若有違越、勘當如法、

〔小右記〕長和二年正月廿五日丁巳、去夜右宰相中將兼隆、俄被叙正三位、奇怪之又奇怪也、月來被勘當之者也、勘當者三人、今年蒙殊賞、所謂宰相中將、左中弁經通、春宮權亮通雅、

〔法成寺攝政記〕寬弘三年十一月十五日甲寅、六位等依美服有勘當、

みて遣しける、　　藤原定長朝臣

あしたづの霞をわけてかへるなりまよひし雲路けふやはるらん

此道の御あはれび、むかしの聖代にもことならずとなん、時の人申侍けり、○又見二古今著聞集一

勘責

〔中右記〕元永二年六月六日、藤大納言大夫、○宗通除二院殿上籍一、是依レ辭二若宮七瀬御使一也、

〔貞信公記〕天慶元年十二月十八日、中使信明來云、去十日夜、殿上侍臣之中、五位以上一人不レ候、事可レ勘者、當番無二故障一不二參入一、准二扶好古等一、可レ勘二責之一狀奏聞、

〔殿暦〕長治二年正月一日庚午、酉刻參、及二秉燭一入レ自二右衛門陣一、於二弓場殿一着レ靴、此間頭弁來仰云、夜前追儺上卿不參、仍加レ催、而各申二故障一不參、件上達部可レ有二勘責一也、余○藤原忠實申云、大納言經實、分配國信、中納言同前、右衛門督雅俊蒙レ催不參、右大弁同レ之、仍各勘責了、

勘事

〔侍中群要〕七勘人事

所衆瀧口事

件輩不レ勤二公役一之時、令レ止二上日一、或先勞三日、可レ隨二事狀一、

小舍人仕人等事

小舍人等有レ可レ誡之事者、卽令レ恐二申恒例一也、至二于下陣一者、近代之事也、仕人者、令レ押二籠所之水棚下一、或竿其頭、○中略

客座事

所レ有二客座一、諸司之人、若依二懈怠公事一被二召勘一之時、令レ居二客座一、但三分以上、先奏二事由一之後居レ之、深誡者板上沃レ水居レ之、凡勅勘之輩、隨二其事跡一、件座不レ論二品秩一、无レ謂二官位一、又有下被二召問一之人上者、藏人着二所座一問レ之、召人居二客座一、

諸衛人事

〔平家物語　一〕殿上のやみうちの事

五節はてにしかば、院中の公卿殿上人、一同にうつたへ申されけるは、〇中略たゞもりのあそん、あるひは年ごろのらうどうとがうして、ほういのつはものを殿上の小庭にめしをき、あるひはこしの刀をよこたへさいて、せちゑのざにつらなる、兩條きだい、いまだきかざるらうせきなり、事すでにてう／＼せり、ざいくわもつともものがれがたし、はやく殿上の御ふだをけづつて、けつくはんちやうにんおこなはるべきかと、諸卿一どうにうつたへ申されければ、〇下略

〔兵範記〕仁安元年十一月廿五日乙丑、五節之間、不出仕之殿上人被尋問子細、其中六人除籍云々、

中務權少輔長重　右近少將伊保　中宮權大進光長
前兵衞佐通成　侍從俊定　少納言定宗

〔玉海〕嘉應二年七月廿二日庚子、今日於院中中務大輔經家、與周防守信章有口論事及非常、信章取經家之烏帽云々、兩人共除籍、

〔玉海〕文治元年十一月廿五日甲辰、傳聞御前試夜、少將雅行源大納言定房男與侍從定家有鬪諍事、雅行嘲哢定家之間、頗及濫吹、仍定家不堪忿怒、以脂燭打雅行了、或云打面云々依此事定家除籍了云々、

〔千載和歌集　十七雜〕今上〇後鳥羽の御時、五節の程、侍從定家あやまちあるさまに聞召す事有りて、殿上のぞかれて侍ける、其年も暮にける又の年の彌生の朔日比、院〇後白河におほんけしき給ふべきよし、左少辨定長がもとに申侍けるにそへて侍ける、

入道皇太后宮大夫俊成

あしたづの雲路まどひし年くれて霞をさへやへだてはつべき

此よしを奏し申侍ければ、いとかしこくあはれがらせおまし／＼て、今ははや還昇仰せくだすべきよし御氣色有りて、心晴るゝよしの返し仰せつかはせと仰出されければよ

はしたなければ、御ともにまゐるうちなり、

〔小右記〕長和四年九月十八日乙丑、昨日木工頭周頼、右衞門尉頼範、被還付簡、先日被削簡者等也、

〔扶桑略記 後一條 二十八〕長元六年十二月、藏人式部少丞藤原經衡、於殿上前、無指由緒、引落左近少將藤原資房、仍經衡被削籍了、

〔日本紀略 後一條 十四〕長元九年正月二日辛巳、今夜藏人頭左近衞中將俊家朝臣隨身、毆損藏人頭左中辨經輔朝臣隨身、先以弓打肩、次雜色以續松打之、　三日壬午、除藏人頭俊家朝臣殿上籍、

〔春記〕長暦四年十一月十七日戊辰、今夜右少弁資仲云、御南殿之間、殿上人等、於御殿西方遊興之程、左衞門佐定長、與藏人典藥助信房聊有少論、定長執信房冠踏破之遁去了、信房脫巾東西奔走、希有事也云々、左少弁經成云、今夜瀧口幷藏人所衆有鬪亂事、其事昨夜瀧口衆藤式奉、過藏人所前之間、爲彼衆等被嘲哢云々、依其事今朝於北陣式奉相遇所衆恒定、(一藤者也)即打落恒定之冠了、又依其報今夜瀧口衆等爲成着到向藏人所、此間恒定執瀧口衆資高之烏帽子云々、然間狼藉殊甚云々、以此旨申關白、(○藤原頼通)命云、能披問子細、明旦可令申者、殿上藏人所瀧口陣有事、太非常事等也、觸事無益代也、　十八日己巳、早旦仰云、信房昨夜有事由云々、不聞慥由、予(○藤原資房)申此旨、仰云、太非常事也、去夜大略含經成了、可仰關白之由也者、午時許經成爲關白使參入、申信房幷瀧口所衆等事、仰云、(予傳奏之)事之旨共以非常也、只可隨關白定申之由可仰者、予仰了、經成又參了、即歸參奏云、禁中之濫行不可用刀劍、只以口論所爲事、何況於執冠事哉、就中出御南殿之間、尤非常也、勘當猶輕、三人共可被除籍歟者、予奏之、仰云、早可令除籍者、藏人所衆菅原恒定、瀧口衆藤原式奉、可除籍之由仰經成了、定長以藏人資成令削除了、此罰頗重、但爲被誡將來也、爲善々々、

〔扶桑略記 後冷泉 二十九〕永承七年三月十八日、戊剋藏人玄蕃助藤原隆成、引率數多從類、於和德門前傷損藏人右衞門少尉藤原定俊、翌日除隆成籍、停任所職、被下召名宣旨、追捕下手人等、

停朝參

封門籍

除籍

無風情、不見天氣、閉門之外無他、

〔令義解 獄十〕凡犯罪應除免官當者、不得詣事及朝會、其被勅推、雖非官當除免、徒以上、不得入內、謂詣事朝會皆亦不可得、依律、有官犯罪、無官事發、流罪以下、聽以贖論、是爲非官當徒以上、其過失疑罪、元非正刑、不在制限也、其三位以上、非解官以上者、謂雖犯死罪、會赦、解任、是爲解官、其四位以下、雖杖罪、應解官者、不合入內、仍聽詣事、朝會、及入內供奉、

〔日本書紀 天武 二十九〕四年四月辛巳、勅、小錦上當麻公廣麻呂、小錦下久努臣麻呂、二人勿使朝參、

〔日本紀略 一條 十一〕寬弘六年二月廿日丙午、前員外帥伊周、非有指召、不可參內者、　六月十三日丙申、更聽前太宰權帥伊周朝參、○又見百練抄

〔延喜式 中務 十二〕凡酒番侍從、及次侍從、每年定十二人、一日爲番、番別四人、若致闕怠、封門籍卅箇日、見直二人已上、不以爲闕、其封籍之間、不預節會、但中宮東宮賀禮、不在制限、

〔名目抄 諸公事 音說〕除籍ジヨシヤク

〔禁秘御抄 下〕除籍

侍臣等有罪過之時及除籍、頭藏人承仰、仰藏人、藏人削簡、藏人非藏人同之、殿上受領在彼簡同削之、應和伊陟、依狂病絕入、有沙汰、仰曰、於于齊敏者、只病故不仕、伊陟病無便近召仕、若復本性之時可聽、枉削其籍、依不同之疑具注之、凡雖下部、彼病不能參內事也、

〔百練抄 一條 四〕寬弘三年五月十日、藏人式部丞定佐、打損藏人左少辨廣業面、定佐除籍、

〔法成寺攝政記〕寬弘三年六月十三日癸未、民部大輔爲任、從去年三月不參內、無殊病云々、仍被除籍、○又見日本紀略

〔源氏物語 須磨 十二〕月まちいでゝいでたまふ御ともにたゞ五六人ばかり、しも人もむつまじきかぎりして、御馬にてぞおはする、○中略かのみそぎの日、かりの御隨身にてつかうまつりし、右近のぞうの藏人うべきかうぶりも程すぎつるを、つひにみふだけづられて、つかさもとられて

定にすこしもたがへずおこなひてうけとられけり、

〔長秋記〕長承二年七月廿六日己卯、右衛門督〇藤原實能大炊御門家四門懸敎、廳下部付門引褰幔、責下手人云々、事元去比、彼家門侍等出立、見辻祭之間、過兩馬者、侍等加輕慢詞、其時四位少將公能來合、遞鬪諍間、兩方有被疵者、謂件兩方播磨守家成朝臣侍云々、依此事家成以件侍付使廳了、又召金吾侍於一人進了、又召殘輩、各逃去不知行方之間、蒙此責云々、抑金吾是當今〇崇德伯父、仙院同母弟也、所侵非重過、強不可大責歟、但家成事、道路以目不可及沙汰歟、

〔徒然草下〕勅勘の所に敎かくる作法、今はたえてしれる人なし、主上の御惱、大方世の中のさはがしき時は、五條の天神に敎をかけらる、鞍馬にゆぎの明神といふも敎かけられたりける神なり、看督長の負たる敎を、其家にかけられぬれば、人出いらず、此事絕て後、今の世には封をつくることになりにけり、

〔本朝世紀〕仁平元年八月廿六日癸巳、今日大納言伊通卿、幷參議敎長卿宅、撿非違使行向懸敎木於門上、責申陵辱齋宮參院召使之濫行下手人云々、去四月比、少監物藤原仲盛執行信濃國沙汰之間、陵礫齋院召使、去比又齋宮召使亂入敎長卿宅、縫殿大夫行康、蹂躙被召使云々、付伊通卿被責仲盛、付敎長卿責召行康云々、

〔百練抄八高倉〕治承三年四月廿三日、藏人中宮大進基親蒙勅勘、是祭使之時、破制之故也、

〔平家物語七〕忠のりの都おちの事

俊成の卿、〇中略其後世しづまつて、千載集をせんぜられけるに、たゞのりのありし有さま、いひおきしことの葉、今更思ひ出てあはれなりけり、件のまき物〇平忠度歌集の中に、さりぬべき歌いくらも有けれ共、其身勅かんの人なれば、名字をばあらはされず、故鄕の花と云題にてよまれたりける歌一しゆぞ、よみ人しらずと入られたる、

〔禁秘御抄下〕勅勘

〔中右記〕長治二年正月朔日、頭弁〇源重資來示云、夜前追儺之間、公卿不參、雖被相催、稱所勞由不參輩、新大納言、左衞門督、〇源雅俊源中納言、右大弁〇藤原宗忠不可作列早可退出者、驚此仰、稱以退出、不見節會儀、追儺本分配源中納言、〇國信新宰相中將、〇家政必可參勤之由應之、口夜雖有其催不參也、今勘發之旨不可避申、予〇藤原宗忠從新殿上之昔及公卿之今、廿二箇年、一度未及勅勘、今日已有此事、就中重厄之歲也、可恐可思、運之所然歟、從今夕閉門籠居、子族又不令出仕、

〔百練抄五鳥羽〕保安元年七月廿一日、少將實衡與兵部大輔資信、於殿上鬪諍、實衡以扇打資信、資信取御椅子棹追實衡、實衡除籍、資信勅勘、

〔愚管抄四〕知足院殿〇藤原忠實は、當時關白なるを、はたと勅勘ありて、十一月十三日〇保安元年に內覽とゞめて閉門せられにけり、さて攝籙の臣をかへんとおぼしめしけるに、大方その人なし、花山院左府家忠、京極殿〇藤原師實の子にて、大納言大將にて、さもやとおぼしめして、顯隆に仰あはせければ、稻荷祭のさじきのことはと申たりけりなどきこゆ、家忠の子の忠宗中納言は、顯季卿が子の宰相がむこなり、かやうのゆかりにて、その時顯季家保などあつまりて、さじきにてさかもりしてさしかよはされたりなど人そしりけることなり、これは一定はしらねども、かくぞ申める、すこしもさやうなる人のすべきことにては、この攝政關白はなきなり、さて內大臣にて法性寺殿〇藤原忠通のおはしけるほかには、いさゝかも又々さぞといふ人なかりければ、力およばで、親は親、子は子とこそは、げすもいふめれば、執政せよと仰られければ、法性寺殿は、此職をつぎ候ばかり候はゞ、忠通にゆるされ候て、一日父の勅勘を免せられ候て、門をひらかせ候て、代々の例、此職は父のゆづりを得候て、うけとり候夜、やがて拜賀などすることにて候を、たがへずし候はゞや、職に居候ばかりにては、父の勅勘え申免せず候はんも不孝の身になり候はゞ、佛神の御とがめもや候べからんと申されたりければ、此申さるゝ旨、かへす〴〵も忝かるべしと感思食さて、その

責罪過 怠狀附

罪過ヲ責ムルニ、勅勘、朝參ヲ停メ、門籍ヲ封ジ、閉門、籠居、怠狀等アリ、勅勘ヲ蒙リタル人ハ、門ヲ掩ヒテ屛居シ、撿非違使、釵ヲ其門上ニ懸ケ、幷ニ人ノ其家ニ來往スルコトヲ禁ズ、後ニハ釵ヲ懸ケズシテ但門ヲ封ズルコト、爲レリ、而シテ朝參ヲ停ムト云ヒ、内ニ入ルコトヲ得ズト云ヒ、門籍(名籍ヲ宮門ニ著シ、其門ニ出入スルコトヲ得、是ヲ門籍ト云フ、)ヲ封ズト云ヒ、勘責ト云ヒ、勘事(カウジ)ト云ヒ、勘當ト云ヒ、譴責ト云ヒ、蟄居ト云ヒ、籠居ト云ヒ、恐懼(カシコマリ)ト云フガ如キハ、勅勘ニ由ルモアレド、盡クハ然ラザルナリ、其中ニテ勘事、勘當、恐懼ハ、平人間ニモ常ニ有リシナリ、

又除籍アリ、籍トハ日給簡ナリ、卽チ淸涼殿ニ置キテ、殿上人卽チ昇殿ヲ聽サレタル人ノ名ヲ錄スル所ナリ、而ルニ罪アリテ昇殿ヲ停メラルヽトキハ其名ヲ削ル、是ヲ除籍トモ、殿上ノ籍ヲ削ルトモ云ヒ、或ハ單ニ籍ヲ削ルトモ云フ、又院(太上天皇)ノ殿上ノ籍ヲ除カルヽコトモアリ、

藏人、非藏人等ガ巡得ニ預リ、(任官ノ次序ニ因リテ五位ニ敍スルヲ云フ)或ハ餘官ト爲リテ、地下(昇殿スルコトヲ得ザルヲ云フ)ニ降ルトキハ、日給簡ノ名ヲ削ル、本朝文粹ニ、大江成基ガ非藏人ヨリ近江掾ニ爲リタルコトヲ歎ジテ、名字已削二于仙籍之上一トアリ、仙籍トハ日給簡ナリ、是ハ有罪ノ除籍トハ別ナリ、

又田祿ヲ奪フコトアリ、罪ノ輕重ニ隨ヒテ季祿ヲ奪フアリ、位祿ヲ奪フアリ、節祿ヲ給セザルアリ、公廨ヲ奪フアリ、職田位田ヲ沒スルアリ、卽チ近世ノ罰俸ノ如キ者ナリ、

勅勘

〔名目抄 諸公事言說〕勅勘(チヨツカム)

〔百練抄 四 後冷泉〕康平三年十二月十一日、宰相中將俊房被レ免二勅勘一、依二前齋院(禖子)强奸事一、此一兩年籠居、

〔續日本後紀 六仁明〕承和四年五月丁亥、贈正五位上伴宿禰益立本位從四位下、益立寶龜十一年爲征夷持節副使、發京之日、敍從四位下、厥後遭讒奪爵、其男越後大掾野繼、上書寃訴久矣、遂明得雪父恥、

〔續日本後紀 十仁明〕承和八年閏九月乙卯、授无位小野朝臣篁正五位下、下詔曰、篁雖期奉國、猶悔失晨、朕顧惟舊、且愛文才、故降優貫殊復本爵、

〔續日本後紀 十八仁明〕嘉祥元年十二月己丑、刑部少輔和氣朝臣齊之、依犯大不敬當絞刑、勅減一等流伊豆國、　乙卯、大判事外從五位下讃岐朝臣永直坐和氣齊之事、配流土佐國、

〔文德實錄 五〕仁壽三年五月壬寅、復罪人和氣朝臣齊之、讃岐朝臣永直等爵、

〔日本紀略 十一一條〕寛弘二年九月六日辛亥、藏人式部少丞藤原朝臣隆光、奉勅召撿非違使右衞門少志林重親於藏人所客座勘問、　七日壬子、重親進怠狀、卽解却其職、後優免復本位、

流、

〔續日本紀 十四 聖武〕天平十四年六月丁丑、上毛野朝臣宿奈麻呂復本位外從五位下、

〔續日本紀 十九 孝謙〕天平勝寶六年十一月甲申、藥師寺僧行信、與八幡神宮主神大神多麻呂等同意厭魅、下所司推勘、罪合遠流、於是遣中納言多治比眞人廣足、就藥師寺宣詔、以行信配下野藥師寺、　丁亥、從四位下大神朝臣杜女、外從五位下大神朝臣多麻呂、並除名從本姓、杜女配於日向國、多麻呂於多褹島、

〔續日本紀 二十七 稱德〕天平神護二年十月甲申、授無位大神朝臣田麻呂外從五位下、爲豐後員外掾、田麻呂者、本是八幡大神宮禰宜大神朝臣毛理賣、時授以五位、任神宮司、及毛理賣詐覺、俱遷日向、至是復本位、

〔續日本紀 三十七 桓武〕延曆元年閏正月丁酉、獲氷上川繼於大和國葛上郡、詔曰、〇中略川繼者宜免其死處之遠流、不破内親王幷川繼姉妹者移配淡路國、

〔日本紀略 桓武〕延曆四年九月乙卯、中納言兼式部卿近江按察使藤原種繼被賊襲射、兩箭貫身、　丙辰、右兵衞督五百枝王、大藏卿藤原雄依、同坐此事、五百枝王降死流伊豫國、雄依及春宮亮紀白麻呂、家持息右京亮永主流隱岐、東宮學士林寸〇林下恐脫忌字稻麿流伊豆、自餘隨罪所流、

〔日本後紀 十三 桓武〕大同元年三月庚辰、復五百枝王本位從四位上、氷上眞人川繼、藤原朝臣淸岡從五位下、　辛巳、勅、緣延曆四年事配流之輩、先已放還、今有所思、不論存亡、宜敍本位、復大伴宿禰家持從三位、藤原朝臣小依從四位下、大伴宿禰繼人、紀朝臣白麻呂正五位上、大伴宿禰眞麻呂、大伴宿禰永主從五位下、林宿禰稻麻呂外從五位下、

〔日本後紀 十七 平城〕大同四年三月丁未、前上總介石川朝臣道成、大掾千葉國造大私部直善人、並授本位、道成從五位下、善人外從五位下、在任之日、贓汙狼藉、並追位記、矜有其老舊之勞、故付復焉、

中務權少輔源朝臣延俊、如舊宜令還任、

藏人頭權右中辨平信範奉

藤中納言、卽仰大外記賴業眞人、眞人書注宣旨遣本家云々、

解官人非除目、臨時宣下還任、事之例多存由、賴業注申近例、

康治二年正月廿四日、右近衞權少將成雅朝臣、依刃傷散位藤原賴輔公被仰解官事、

同三月廿五日、內大臣〇藤原實能宣下、

從四位下源朝臣成雅

內大臣宣、奉勅件人宜令還任右近少將者、去仁平元年四月十七日、賀茂齋王御禊、藏人左衞門佐藤原忠親、雖蒙催不勤前驅、依別仰不催代官、十八日、入夜左大臣〇藤原賴長召權少外記中原師尙仰云、藏人左衞門佐藤原忠親不勤御禊前驅、仍可解却見任者、師尙書宣旨下知兵部省、

左衞門佐從五位上藤原忠親

左大臣宣、奉勅件人依爲巡役雖蒙催促不勤御禊前驅闕怠無止神事所爲之旨豈可然哉、宜令解却見任者、

仁平元年四月十八日　權少外記中原師尙奉

職事宣下此定云々

同年九月十四日　宣旨

左衞門佐藤原朝臣忠親

右大臣宣、奉勅件人今年四月十八日解却所帶職、宜如舊令還任者、

仁平元年九月十四日　大外記中原師尙奉

〔續日本紀 十聖武〕天平元年二月戊寅、外從五位下下毛野朝臣宿奈麻呂等七人、坐與長屋王交通並處

野朝臣氏永、散位從七位下大石福麻呂等位記、中務、式部、刑部等省丞錄從事、

〔日本紀略（十四後一條）〕長元四年正月十七日乙丑、今日以外記遣式部卿敦平親王家、去五日叙位、良國王叙四位、件人有殺害犯之上、已非王氏、令毀彼位記、被問根元、

降官位

〔日本書紀（二十五孝德）〕大化元年八月庚子、拜東國等國司、仍詔國司等曰、（○中略）違法當降爵位、

〔日本書紀（三十持統）〕七年四月辛巳、詔、內藏寮允大伴男人、坐贓降位二階、解見任官、典鑰置始多久與菟野大伴、亦坐贓降位一階、解見任官、監物巨勢邑治、雖物不入於己、知情令盜之、故降位二階、解見任官、然置始多久、有勤勞於壬申年役之、故赦之、但贓者依律徵納、

〔日本紀略（四村上）〕天德二年十月十日丁亥、今日以左衞門權佐兼明法博士惟宗朝臣公方、左貶大藏權大輔、依勘文失錯也、

〔百練抄（五堀河）〕嘉保元年三月六日、諸卿定申前帥伊房卿遣明範法師於契丹、交易貨物之罪科、　五月廿五日、伊房卿解却、降位一等、緣坐者多、隨法家勘狀所被行也、（以前度々有仗議、）

〔中右記〕寬治八年（○嘉保元年）五月廿五日、前帥權中納言伊房卿、已依契丹國事、減一階（正二位）被止中納言職、又依同事前對馬守（元從五位下）敦輔追位記云々、　廿八日戊辰、後聞今朝有政、是伊房卿幷藤原敦輔、（罪過之殘、贖銅各十斤云々、）贖銅官符請印等事者、

〔續日本紀（二十孝謙）〕天平寶字元年七月戊午、勅曰、右大臣豐成者、事君不忠、爲臣不義、（○中略）宜停右大臣任、左降太宰員外帥、

復官位

〔續日本紀（二十五淳仁）〕天平寶字八年九月戊申、以太宰員外帥正二位藤原朝臣豐成、復爲右大臣、賜帶刀四十人、

〔兵範記〕仁安二年六月十二日戊寅

仁安二年六月十二日　宣旨

〔延喜式十九式部〕毀罪人位記

內外有位、犯官當以上者、刑部處斷申官、奏聞訖刑部移二省、五位以上移中務省、幷申辨官、太政官預定其日、少納言辨外記史引二省入、二省錄各執位記及位案進就版位、依次就座、並如常儀、書毀字捺印、訖以次退出、事見儀式幷刑部式

〔延喜式二十九刑部〕凡諸國不進犯罪人位記、移式部省、拘留朝集使返抄、

凡應毀罪人位記者、省收位記申送辨官、官以位記返付省、更定日申官、其日丞錄、與中務式部兵部等省共就太政官、三省錄各持位案筥、刑部錄持位記筥、共入列立庭中、北面東上、大臣命召、稱唯就座、辨官申可毀位記之狀、訖即刑部錄以位記筥進付外記、外記申云、毀位記若干枚、大臣命毀之、稱唯毀、畢錄進取位記筥復座、訖即退出、事見儀式

〔新儀式五臨時〕貶退事

朝士若有罪者、隨其輕重、或追位、或解官、大臣奉勅宣下所司、令追位記毀之、其儀見儀式、追位者、奉使不下、幷諸國受領吏、無故不赴任類也、近則延喜□年從四位下源悅、不赴太宰大貳之任、從四位上源俊、天慶二年、奉推問使不下之類也、

〔續日本紀二十一淳仁〕天平寶字二年十二月丙午、毀從四位下矢代女王位記、以被幸先帝〇聖武而改志也、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年八月辛酉、毀外從五位下丹比宿禰乙女位記、初乙女誣告忍坂女王縣犬養姉女等、厭魅乘輿、至是姉女罪雪、故毀乙女位記、

〔續日本後紀十五仁明〕承和十二年十一月乙巳、毀越前守從四位下岑成王四位位記、緣有犯罪也、

〔續日本後紀十七仁明〕承和十四年五月辛卯、是日毀前左大辨從四位上正躬王、左中辨從四位下伴宿禰成益、右中辨從五位上藤原朝臣豐嗣、左少辨從五位下藤原朝臣岳雄等四人位記各一階、緣受推法隆寺僧善愷違法訴狀也、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年十二月廿八日壬申、是日公卿於外記候廳、毀罪人石見守從五位下上毛

毀位記

〔令義解十獄〕凡官人因犯移配、（謂、移郷避讎也、）及別勅解見任、若本罪不合除免及官當者、位記各不在追例、（謂、若合除免官當者、自依除免官當法也、）

〔日本紀略十一條〕長保元年十二月廿七日丙子、從五位上平維衡不追位記、移郷、從五位下同致頼藤原宗忠追位記、配流隱岐佐渡國、

〔令義解十獄〕凡犯罪應除免及官當者、奏報之日、（謂、猶云奏報之時也、依公式令、犯罪解免者、解免之司、報元任授、是即奏報之後、未毀之前、錄報於元任授、其已毀之後、所司自知、不可更報也、）除名者、位記悉毀、官當及免官、免所居官者、唯毀見當免及降至者位記、降所不至者、不在追限、（謂、見當免者、假有正七位上、犯徒一年半、例減一等、以一官當徒一年、即正七位上、是爲見當、若犯免所居官者、朞年之後、降先位一等敍、即正七位上、亦是爲見免也、降至者、假有正七位上、更復有歷任位記、此犯免官者、三載之後、降先位二等敍、即正七位上、是爲見免、正七位下、是爲降至者、從七位上、是爲降所不至者、故律云、降所不至者、二等之外歷任之位是、其免官一法、唯有降至、自餘官當等、更無降至者也、）應毀者、並送太政官毀、式部案注毀字、（謂、令元授司、乃注毀字、以太政官印、印毀字上、）

〔儀式十〕毀位記儀

刑部省、預收犯罪人位記、申送辨官、官以位記返付於省、省更定日申官、當日申尋常政、訖少納言辨大夫外記史、率式部（毀武官位記、率兵部、毀女位記、率中務、下亦倣此、）刑部等省丞錄各一人、共就版、（式部丞錄執位記案筥、刑部錄執犯人位記筥、若三省共毀、令納一筥、）外記史生持印盤、立史前、（少右避立、不正當史前、）式部史生持硯筥、立於丞後、大臣喚少納言已下、依次稱唯、（但史生等不稱唯、）各就座、（初納言辨就座、訖外記史生賚印盤、趨置机上、而開之、其間外記史趨而就座、訖外記史生退出、式部史生以硯筥趨進、置丞前、而退出、）于時辨大夫申云、其官姓名（我）位記可毀事申給（止）申、即刑部錄以位記筥授之外記、外記執而進大臣、就于印盤邊座、大臣覽訖、外記趨取位記筥、就印盤所、捧筥而立、（敬待書毀字畢、）式部丞申云、位記案（爾）毀字書（久）、大臣宣、書介、丞稱唯、書毀字、訖外記唱史生名、史生稱唯、趨進立盤所、式部錄持位案筥、趨授於外記史生、即史生申云、毀字（爾）印捺（須）、大臣宣、捺（世）、史生稱唯捺之、（捺印之間、式部史生更參入、各執硯筥退出、）捺印已了、史生申云、印捺（都）、大臣無答、式部錄進、而取位案筥、復本座、外記申云、位記若干枚毀（留）、大臣宣、毀（禮）、外記稱唯毀訖、刑部錄趨進、取毀位記筥、復本座、外記史生執印盤而退出、次六位已下自下退出、次五位已上退出、

起無殊事、仍停理務被免身、

追位記

〔百練抄(四後一條)〕長元四年三月十四日、式部卿敦平親王被止籍務、是去正月敍位、以良國王奉申四位、而良國非王氏、又先年殺害大隅國菅野重忠犯人也、改姓名謀計之故也、

〔百練抄(六崇德)〕保延四年五月廿五日、祭主公長卿依殺害人罪過沙汰之間停籍務、

〔日本書紀(二十九天武)〕四年四月丁亥、小錦下文努臣麻呂坐對捍詔使、官位盡追、

〔續日本紀(十聖武)〕神龜五年四月辛卯、勅曰、如聞諸國郡司等、部下有騎射相撲及膂力者、輙給王公卿相之宅、有詔搜索、無人可進、自今以後、不得更然、若有違者、國司追奪位記、仍解見任、○(下略)

〔續日本紀(三十六光仁)〕天應元年九月辛巳、初征東副使伴宿禰益立、臨發授從四位下、而益立至軍數愆征期、逗留不進、○(中略)於是詔責益立之不進、奪其從四位下、

〔續日本後紀(七仁明)〕承和五年十二月己亥、是日勅曰、小野篁內含綸旨、出使外境、而稱病故不遂國命、准據律條、可處絞刑、宜降死罪一等處之遠流、配流隱岐國、　辛亥、追小野篁所帶正五位下之告身、

〔北山抄(四拾遺雜抄)〕收罪人位記事

延喜十一年(悅)天慶(後)等例、給官符於京職、安和二年(敏延)例、召京職官人仰之、(追位記、撿非違使收之、)寬弘、朝彙時、給宣旨於撿非違使、時人難云、非例、上卿不尋舊例所被行歟、但撿儀式、刑部式等、刑部收之、令付撿非違使、糺彈之者便仰之、非無所據乎、近例仰京職、復本位之時、更以敍位、新作位記云々、不必進位記之實、

不追位記

〔日本紀略(一醍醐)〕延喜十三年正月廿八日、前太宰大貳源朝臣(悅)○依不赴太宰府、召位記、不毀留官底、

〔百練抄(五白河)〕永保三年五月二日、前下野守師季追位記、去年正月射殺官使被勘罪當流刑、

〔令義解(十獄)〕凡犯流以下、應除免官當、未奏身死者、位記不追、卽奏時不知身死、奏後云先死者、依奏定、(謂、除免官當、並依常法例也、)

停釐務

內大臣宣、奉勅、件人不參仕去五日行幸、宜可停任者、

康治元年七月十二日　大炊頭兼大外記助教中原朝臣師安奉

八月三日癸亥、隆敎還任、

〔令義解獄十〕凡犯罪應除免官當者、不得釐事及朝會、其被勅推、雖非官當除免徒以上、不得入內、謂釐事朝會、亦不可得、依律、有官犯罪、无官事發、流罪以下、聽以贖論、是爲非官當徒以上、其過失疑罪、元非正刑、不在制限也、其三位以上、非解官以上者、謂雖犯死罪、會赦解任、是爲解官、其四位以下、雖杖罪、應解官者、不合入內、仍聽釐事朝會、及入內供奉、

〔類聚三代格五〕太政官符

應申預釐務未得解由人解任事

右得式部省解偁、撿案內、被太政官去弘仁十三年八月廿八日符偁、得省解偁、去天應二年二月五日、左大臣宣、諸司官人兼帶國司、解國司任之後、百廿日內不進解由者、不得預釐務、又未得解由人、任諸司官有宣許釐務者、釐務之後、百廿日內不進解由、宜申送之者、自爾以來未得解由之輩、申官解文注云、應停釐務、○中略

天長三年十月七日

〔法成寺攝政記〕寬弘三年六月十六日丙戌、左衞門尉藤原文方○方恐行字誤來云、申依召○申依召恐當作依一字右衞門督召參法住寺、參間爲帶刀正輔被打申其愁、忽被追捕、爲免身難出彼寺間、騎馬者廿餘人追來射打間、撿非違使等侍申然、依堪難一兩射答矢參、唯隨仰者、先文行賜隨身所、良久撿非違使等不○不下恐有脫字其後云々、文行言使官等圍云々、文行在家、仰遣先可參由、右衞門志重親來申、文行於法住寺與正輔口論起事、依別當仰捕之處、射矢能出、而間別當來、仍賜文行賜官人等、別當示云、從前付繩可遣者、而命云、無便事、乘馬着衣冠可遣之、遣政所屋云々、　十八日戊子、奏事由文行遷渡左弓場、道官人等令勘文行罪名、　廿二日壬辰、奏文行罪名、其文云、詔使對捍、無人臣禮者云々、官位解却云々、而事

一軍團之設、擬備急事、令郡家焚燒、曾不禁救、自今以後有如此類、當團軍毅主帳、悉解見任、

以前奉勅如件、

寶龜四年八月廿九日

〔百練抄四一條〕寛弘元年十二月廿八日、太宰權帥平惟仲、勘罪名停任、依宇佐宮訴也、二年四月、入闕折服竟于四府、有免奏、

〔日本紀略十四後一條〕長元六年正月廿六日癸巳、今日撿非違使等、於廳勘問犯人之間、刑人一人逃入宮城之間、於陣捕取了、　二月十日丙午、今日停任左衛門官人等、依當直不參、盜入禁中之過也、

〔範國朝臣記〕長元九年十一月八日

請被停近江掾正六位上清原眞人信任事

右其年給以信任申任件國掾、而依有身病、不給官符、仍可被停任之狀所請如件、

長元九年十一月八日　内大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣〇敎通

〔百練抄四後冷泉〕寛德二年四月十九日、諸卿定申太宰權帥重尹罪科、卽停任、

〔百練抄五白河〕永保二年七月十五日、左中辨匡房、勘問明法博士定成有眞等、依遠江守基清罪名勘文紕繆也、　十一月廿二日、遠江守源基清停止、依薊神戶田勘罪名也、　廿四日、明法博士有眞停止、依基清罪名之過失、令勘罪名、

〇按ズルニ停止ハ停任ヲ謂ヘルモノヽ如シ、因リテ此ニ載ス、

〔百練抄五堀河〕寛治五年四月十八日、停任撿非違使別當俊實、是依去三日陵礫撿非違使中原範政也、後日付使廳、於俊實宅被召下手人、

〔本朝世紀〕康治元年七月十二日癸卯、内大臣〇藤原賴長召外記仰曰、〇中略左兵衛佐藤原隆敎可停任者、

左兵衛佐藤原朝臣隆敎

參議右大辨平親宗　　右中將播磨守源雅賢
右馬頭源資時　　肥前守同康綱
伊豆守同光遠　　兵庫頭藤章綱
越中守平親家　　出雲守藤朝經
壹岐守平知親　　能登守高階澄經
若狹守源政家　　備中守源資定
左衞門尉平知康大夫尉
此外衞府廿六人云々

〔源平盛衰記三十四〕法皇御歎并木曾縱逸附四十九人止官職事
廿八日○壽永二年十一月三條中納言朝方卿以下文官武官諸國ノ受領都合四十九人官職ヲ止ム、其内ニ公卿五人トゾ聞エシ、僧ニハ權少僧都範玄、法勝寺執行安能モ所帶ヲ被沒官キ、平家ハ四十二人ヲ解官シタリシニ、木曾○義仲ハ四十九人ノ官職ヲ止ム、平家ノ惡行ニハ超過セリトゾツブヤキケル

〔百練抄十後鳥羽〕元暦元年九月九日乙未、今日掃部頭安倍季弘朝臣、被下解官宣旨、不解陰陽權助之

〔古今和歌集雜十八〕左近將監とけて侍ける時に、女のとふらひにおこせたりける返りごとに、よみてつかはしける、　　小野春風
あまひこのおとづれしとぞ今は思ふ我か人かと身をたどる世に

〔北山抄六〕停任事
隨管領下二省、又仰外記

〔類聚三代格十二〕太政官符○中略

〔百錬抄八高倉〕治承三年十一月十五日、今日關白前太政大臣〇藤原基房幷權中納言師家解官、十七日、太政大臣師長已下、至于撿非違使信盛卅九人解官、多是院中祗候之輩也、此中太相國〇平清盛可追却關外之由被宣下、

〔源平盛衰記十二〕大臣以下流罪事
治承三年十一月十五日、入道〇平清盛奉恨朝家由聞エシカ共、靜憲法印、院宣ノ御使ニテ樣々會釋申ケレバ、事ノ外ニクツロギ給タリ、上下大ニ悅テ、今ハサシモヤハト人々思被申ケルニ、四十二人ノ官職ヲ止メテ被追籠、ソノ內參議皇太后宮權大夫兼右兵衞督藤原光能卿、大藏卿右京大夫兼伊豫守高階泰經朝臣、藏人右少辨兼中宮權大進藤原基親朝臣以上三官被止、按察使大納言資賢卿、中納言師家卿、〇左近衞中將右近衞權少將兼讃岐權守資時朝臣、太皇太后宮權少進兼備中守藤原光憲朝臣、已上被止二官ル、上卿ハ藤大納言實國、職事左少辨行隆、別當平大納言時忠トゾ聞エシ、

〔玉海〕壽永二年八月九日辛丑、傳聞去六日有解官二百餘人云々、時忠卿不入其中、是被申可有還御之由之故也云々、朝務之尫弱、以之可察可憐云々、

〔帝王編年記二十二安德〕壽永二年十一月廿一日、以大納言師家卿任內大臣、即爲攝政、十二歲當時內大臣實定公解官歟、但暫被借用云々、〇又見皇帝紀抄、而係元年誤、

〔百錬抄九安德〕壽永二年十一月廿八日、院〇後白河近習人中納言朝方卿以下數十人解官、兼雅卿被止出仕、所領收公、

〔玉海〕壽永二年十一月廿九日己未、晚頭大夫史隆職注送解官等、
解官
中納言藤朝方　參議右京大夫同基家
太宰大貳同實清　大藏卿高階泰經

納言召外記被下知云々

〔兵範記〕仁安三年十一月廿一日戊寅、殿上淵醉、午剋參內、東帶、有所存不着直衣也、參入左衞門陣之間、伯耆守奉院○後白河御敎書到來、可馳參由有仰、卽立歸乘車參院、于時蓮華王院、自昨日御參籠云々、仰云、去夕帳臺試、攝政○藤原基房被參之間、內大臣○源雅通左大將○藤原師長可相伴之由兼日被定仰、隋供奉行啓、而宮入御之後、不顧被扈從各退出、因茲無扈從之人、及曉更被參帳臺、俄召具新大納言左衞門督○藤原隆季等之由聞食及、遁有限之公事、爲無極之罪過、早觸攝政可被解官所帶等者、奉仰之後、先大臣解官之條、先例不覺悟、故直雖可奏達、逆鱗之間、乍存心中周章馳參殿下申御旨、御返事云、人々事被仰下之趣畏思給、但大臣解官事、被尋下官、下官引勘文籍申云、

安和二年三月、左大臣源高明、左貶爲太宰權帥、又以右大臣○藤原師尹爲左大臣、以大納言藤原在衡爲右大臣、有宣命除目等、

長德二年四月、內大臣伊周、左貶爲太宰權帥、有宣命除目等、大臣有事如此、無左右解官事無所見、廢后廢太子間、有其例云々、

寬平八年九月、皇太后宮高子廢之、無宣命、

殿仰云、大納言幷左右大將不可及沙汰、於大臣者、早伺松容可奏聞者、逐電歸參院奏子細、仰云、於內大臣一事者、暫可有後沙汰、至于兩人他事者早可仰下者、又參殿下申此旨、卽向左大臣○藤原經宗亭、宣下云、

右近衞大將源朝臣、大納言兼左近衞大將皇太后宮大夫藤原師長朝臣等、依五節帳臺試不參、各可解却見任者、

旣大事也、於仗座雖可宣下、上皇仰最重、早向一上家、速可仰下之由且依殿下仰也、卽左府召大外記賴業被仰下云々、○又見百鍊抄

久安五年十二月廿七日　大炊頭兼大外記主税權助助敎加賀介中原朝臣師業

〔百練抄七近衛〕久安五年十二月廿二日、軒廊御卜之間、陰陽頭憲榮、與少外記三善成重鬪諍、成重解官、

〔台記〕久壽元年十一月廿六日乙亥、今日右衛門尉爲義（五位）解官、依其子爲朝鎭西濫行事也、

〔保元物語一〕新院御所各門々堅事附軍評定事

爰ニ鎭西八郎爲朝ハ、（中略）三年ガ内ニ九國ヲ皆攻落シテ、自ラ總追捕使ニ押成テ、惡行多カリケルニヤ、（中略）同（久壽）二年四月三日父爲義ヲ解官セラレテ、前撿非違使ニ被成ケリ、

〔百練抄七二條〕應保二年五月八日、能登守重家朝臣、除籍解官、是去比自院可搦召雅頼邦綱等朝臣之由有訴言、依出於彼人口也、

〔玉海〕仁安二年正月廿八日丁卯、此日朝覲行幸也、（中略）其間於便宜所謁攝政、（藤原基房）被命云、延後解官依不供奉行幸也、又少將泰通恐懼、（爲可引御馬之次將、而依遲參也、）凡近日朝務、不論罪科之輕重、大略解任、未曾有事也云々、

〔兵範記〕仁安三年七月十八日丁丑、午後爲院（後白河）御使參攝政殿、（藤原基房）仰云、去十五日、大僧正房人、押入白川蓮華藏院泉御所、彼御堂執行辨宗法橋制止之間、僧正房人百餘人、兵衛尉知光爲其宗亂入御堂、凌礫領預承仕、切兵士本鳥、（二人）欲搦辨宗、辨宗希有遁其殃逃脫了、事發不能左右、早被召下手人、又可被解却知光見任者、殿下御報云、件事全不承及、以外濫行候、無左右被仰知光解官事、又可被召下手候者、歸參之次、參花山院之處、内府（藤原忠雅）他行、仍宣下新中納言（藤原兼雅）了、參院申此旨、入夜歸畢、

仰詞

右兵衛尉豐原知光依蓮華藏院濫行宜令解官

山發大衆云々、事之體、誠國之大盜也、今被召誡、爲世間大慶歟、保隆子僧實擧、同可追捕由、被仰下了、

〔台記〕康治二年正月十四日壬寅、酉剋藏人左少弁源師能來入令侍、示云、成雅解官事、先向左丞相〇源有仁之處、被向仁和寺了、因所參也者、忽着冠直衣相逢師能、仰云、去十二日、於院陣鳥羽少將成雅朝臣、兼尾張守山城前司賴輔鬪諍、成雅拔劒切破賴輔面了、所犯不輕之上、諸大夫以上品秩者刃傷人、古今未有、成雅早可被解官、余〇藤原頼長承諾之、師能語云、法皇〇鳥羽帝也爲政被加帝宣曰、解官停任同事也、然而以解官爲重、儲可仰下解官之由也、又宣曰、被解官之人、自然止昇殿、然而於此事者、未曾有、早々可削籍、仍先參內削籍了、口乍兩官可解歟、答曰、攝政〇藤原忠通仰云、先乍兩官可解之由宣下、後重法皇帝可口一定、即遣召大外記師安朝臣仰之、師安云、普通事不書宣旨、此事如何、余云、希有之事也、書宣旨可懲後代之亂臣賊士者、師安即書宣旨下二省、余云、如古記備忘者、雖管領下二省、是外記之外、亦下二省歟、師安云、是古禮也、近代只外記下二省也、二省者、文官者仰式、武官者仰兵、師能送使者云、重法皇帝仰云、乍兩官可解官也、

從四位下行右近衛權少將兼尾張守源朝臣成雅

內大臣〇藤原頼長宣、奉勅、件人去十二日、於太上法皇〇鳥羽御所邊、手自刃傷散位藤原朝臣賴輔、訪之往代、未曾有之犯也、宜令解却見任兩官者、

康治二年正月十四日　大炊頭兼大外記助教中原朝臣師安奉

〔本朝世紀〕久安五年十二月廿七日乙亥、今日少外記三善成重被下解官宣旨、依去廿二日鬪亂事也、〇中略裏書云、

正二位行權大納言兼侍從藤原朝臣成通宣、奉勅、件成重、去廿二日、於掖陣爲陰陽頭憲榮朝臣、依致非常事、宜令解却見任者、

少外記大江成重

源方理、從五位下高階光子等、可解却所帶官位、僧圓能當絞罪、宥本罪、可行之、高階光子幷從類可捕進之、

〔朝野群載十一廷尉〕解官　宣旨

　　　　　　　　　　　　撿非違使左衛門少尉藤原以親
　　　　　　　　　　　　同　　　　　　　　　　兼任
　　　　　　　　　　　　府生　　　　　　秦成隆
　　　　　　　　　　　　右衛門少尉藤原成國

右大臣〔○藤原敎通〕宣、奉勅、件等人々、宜令解官者、

　永承四年九月五日　　　　大外記兼周防介中原朝臣長國奉

件四人、去四月廿八日、闌入感神院、追捕嫌疑者、仍院內法師首愁申非例之由、爲令辨申其旨、雖推召、稱病不參、仍下勘罪名於法家、所糺行、

〔百練抄五堀河〕寬治二年二月一日、諸卿定申宇佐宮神人訴申、撿挍公則盜取黃金、幷大貳實政射危正八幡宮神輿事、　三月廿日、諸卿定申大貳實政卿射危正八幡宮之罪、依赦前犯、可會赦哉否、　五月廿日、遣推問使於太宰府、實政之犯、雖爲赦前、有議所遣也、　八月廿五日、諸卿定申實政卿罪名、諸道勘申大逆由、當不、　十一月廿九日、前大貳實政除名、配流伊豆國、幷緣坐者同流罪、依射危正八幡宮神輿也、僉議之間、攝政直廬有光耀、在陣之公卿一兩見鬼物之靈異、　十二月廿四日、左少辨敦宗解官、實政犯眞大逆之由諸卿定申之故也、又大判事明法博士有實、撿非違使義正除名、實政罪名、依執謬案也、

〔中右記〕嘉承元年九月十二日、去九日、大藏少輔保隆解官、仰撿非違使追捕了、給左衛門府弓場也、是件保隆、年來爲左大臣〔○源俊房〕家領遠江笠原庄司、依不進年貢、解却庄司了、而爲奪取彼庄、近日寄園幷

懈怠、不守法式、不參者多、事頗尤甚、侍從等稱病輩、參待賢門之時、遣官掌加實撿、爰其病雖非顯著、依人數已多、殊成優容、未必解任、但爲將來、或抑節祿、非侍從等雖不預節會、未及奪位祿、爰積習成常、彌致懈怠、至于當日、依人數不足、召求近邊諸司五位已上之間、剋限自移、物煩彌甚、國家大事、豈合如此、宜仰所司、重張嚴制、侍從等參待賢門之後、令使者加實撿之時、自先日有其聞之中、彼病顯然者、依實可免、假稱本病發動之由、事涉虛誕者、依式即從解却、又令中務移式部、不可預七日節、至于非侍從解其科法、總如式條、曾不寛宥者、召仰中務大輔大藏冥宗了、

天暦元年十二月十三日　　大外記三統宿禰公忠奉

從四位上景行王　　從五位下有融王

從四位上源朝臣國淵　　源朝臣寛信

從五位上小野朝臣道風　　藤原朝臣尹甫

已上六人、闕去十六日荷前使、仍有殿上仰、解却次侍從職、

正五位下上毛野朝臣常行依中宮御消息被免

從五位上藤原朝臣元並依身病顯然被免

從五位上源朝臣就依兄喪被免

天暦元年十二月廿日

〔百鍊抄四一條〕長徳元年八月廿一日、諸社臨時奉幣、大內記以言、不仰文載宣命、極以爲奇、仍令切除之、是定內大臣伊周〇藤原所爲歟、以言其抑付重須經拷、而有所思食、只不可爲內記之由有御氣色、

〔日本紀略十一條〕長保元年九月廿四日癸卯、今日依淡路國百姓愁申、守讃岐扶範解任、前司平朝臣文佐任其替、

〔日本紀略十一一條〕寛弘六年二月廿日丙午、內大臣公季〇藤原以下參仗座、召善言仰云、民部大輔從四位下

置始多久、有勤勞於壬申年役之故赦之、但贓者依律徵納、

〔續日本紀十四聖武〕天平十三年五月丙子、讚岐國介正六位上村國連子老、越後國掾正七位下錦部連男笠等、與官長失禮、不相和順、仍解却見任、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年八月庚辰、勅中納言多治比眞人廣足、年臨將老、力弱就列、不敎諸姪、悉爲賊徒、如此之人、何居宰輔、宜解中納言以散位歸第焉、

〔續日本紀三十八桓武〕延曆三年三月丙申、先是伊豫國守吉備朝臣泉、與同寮不協、頻被告訴、朝庭遣使勘問、辭涉不敬、不肯承伏、是日下勅曰、伊豫國守從四位下吉備朝臣泉、政迹無聞、犯狀有著、稽之國典、容寘恒科、而父故右大臣(○眞備)、往學盈歸、播風弘道、遂登端揆、式翼皇猷、然則伊父美志、猶不可忘、其子愆尤、何無矜恕、宜宥泉辜、令思後善、但解見任、以懲前惡、

〔續日本紀四十桓武〕延曆八年九月戊午、詔曰、(○中略)鎭守副將軍從五位下池田朝臣眞枚、(○中略)進退失度、軍期(乎毛)闕怠(利)、今法(乎)撿(賀)、(○中略)解官取冠(倍)久在、(○中略)取冠罪(波)免賜(氏)官(乎末)乃解賜(比)、(○下略)

○按ズルニ、冠ハ位階ヲ云フ、

〔日本紀略清和〕貞觀十六年二月十日庚子、少納言兼侍從橘朝臣茂生、先是闕荷前、解侍從職、是日有勅、免罪復本、

〔延喜式十二中務〕凡荷前使次侍從已上、若有闕怠者、移式部省、不預正月七日節、兼從解却、

〔日本紀略三村上〕天曆元年十二月廿日庚子、此日闕荷前使輩六人、解次侍從職、

〔類聚符宣抄四〕應依式科責闕荷前使侍從次侍從散位等事

右中務式云、荷前使次侍從已上、若有闕怠者、移式部省、不預正月七日節、兼從解却、又式部式云、闕荷前使之侍從、及次侍從者、待中務移、無預正月七日節、非侍從者奪位祿、亦無預同節者、今被右大臣宣偁、奉勅、闕使侍從次侍從從解却、幷不可預節會之由、式條已存、非侍從事、同在彼式、而近年之間、人情

者、解見任職事、謂依律、雖犯死罪、未奏聞、會赦者、依令解見任職事、如特奉鴻恩、總蒙原放、非常之斷、人主専之、官位勳位並令如初、不同赦降之例、卽雖犯死罪、別勅放免者、亦不須解見任職事、○下略

〔令義解獄十〕凡犯罪應除免官當者、不得釐事及朝會、其被勅推、雖非官當除免徒以上、不得入內、○註略 其三位以上、非解官以上者、謂雖犯死罪、會赦解任、是爲解官、其四位以下、雖杖罪應解官者、不合入內、 仍聽釐事朝會及入內供奉、

〔令義解田三〕凡應給職田位田人、○註略 若官位之內有解免者、從所解免追、謂解、解官也、免、免官也、假有正三位位田卌町、犯免官者、三載之後、降先位二等、叙正四位上、卽依正四位給廿四町之類也、若解官者、追亦如之也、 其除名者依口分例、若有賜田者亦追、謂此亦爲除名者立文也

〔延喜式十八式部〕凡緣隱截事解却國司醫師已上名帳、別卷收署、

〔新儀式五臨時〕貶退事

朝士若有罪者、隨其輕重、或追位、或解官、大臣奉勅宣下所司、令追位記毀之、其儀見儀式、追位者、如使不下、幷諸國受領吏、無故不赴任類也、近則延喜□年從四位下源悅、不赴太宰大貳之任、從四位上源俊、天慶二年奉推問使不下之類也、 又六位已下依有犯幷不上、解却本官、補任替人、又或有坐事左遷之者、謂式部丞遷兵部、主計寮官人遷他官幷外國掾目等之類也、又追位解官左遷等者、懲肅之後、經二三年有復本位本官者、延喜□年源悅追位、同年復本官、天慶二年源俊追位、天慶□年復本位、延長□□年橘□遷兵部丞、同年復本官、延喜□年主計官人皆遷外、同年復本官、天慶□□年同寮頭業恒遷主稅頭、不復本官卒去、助大夫景行已下遷外國掾目、應和二年景行遷主殿助、允已下拜諸司者、或遂有復本官者、上事見任例也、

〔禁秘御抄下〕解官

罪淺深被定、有解官停任之由、職事仰上卿、輕罪時、或被止兼官許、所謂伊通爲隆口論之時、皆止兼官、不止參議、

○按ズルニ、解官ト停任トヲ分チテ、犯罪ノ輕重ニ從ヒテ之ヲ科スルハ、後世ノ制ニ出タルナリ、

〔日本書紀三十持統〕七年四月辛巳、詔、內藏寮允大伴男人、坐贓降位二階、解見任官、典鎰置始多久與菟野大伴、亦坐贓降位一階、解見任官、監物巨勢邑治、雖物不入於己、知情令盜之、故降位二階、解見任官、然

十二等敍、其官當、及免官、免所居官、計降卑於此法者、聽從高敍、（謂假如勳十二等、犯罪免官、准法、三載以後、聽降先位二等敍、而所降既盡、故聽敍十二等、是爲從高敍也、）

〔令義解公式七〕凡任授官位者、（謂太政官任主典以上、及中務授五位以上、式部授六位以下之類也、）所任授之司、皆具錄官位姓名、任授時年月、貫屬年紀造簿、（其任官簿、除貫屬年紀、）官人連署印記、若有轉任身死、及事故以理去任者、即於簿下朱書注之、其有考解、及犯罪除免者、解免之司、（謂解司者、式部、免司者、刑部、假如准考應解者、式部錄狀申官、待符報乃造解簿、又犯罪應除免者、刑部斷定申官、奏報畢、即造免簿之類、但五位以上、式部不得定其考第、若應考解者、亦太政官爲解司也、）亦錄解免之狀、准前造簿、仍錄報元任授、（謂式部錄報太政官及中務、刑部錄報中務及式部也、）除注簿案、若除解人得敍用者、敍用之司、錄報解處所司、（謂用司者、太政官、敍司者、式部省、假如考解之人、更復任用、及除免之人、限滿應敍者、官錄報式部、式部錄報刑部之類也、）除簿、即未敍之間、在本貫身死者、申刑部注除、（謂若未用之間、在本貫身死者、亦申太政官及式部注除也、）其餘色、依職掌應造簿（謂式部造伴部及資人簿之類也、）者、並准此、

〔日本後紀二十四嵯峨〕弘仁六年正月癸未、刑部省言、名例律云、除名者、六載之後聽敍、免官者、三載之後降先位二等敍、免所居官及官當者、朞年之後降先位一等敍、公式令云、犯罪除名、未敍之間、在本貫身死者、申送刑部注除者、今據此令、除免之輩、未敍身死不可更敍、而本貫主司未嘗言上、收敍之官無知存亡、伏請告知職國、爲例令言者、許之、

〔令義解選敍四〕凡長上官以理解者、後任日、聽通計前勞、（謂其分番亦准此也、）其考解、及犯罪解者、不用此例、雖以理解、而無故停私、過一年者、亦除前勞、

〔令義解選敍四〕凡初位以上、（謂一品以下也、）長上官遷代、（略）○（註）皆以六考爲限、（略）○（中）其考未滿而以理解、（謂假如經三考得中上、其人以理去官者、不可依三考敍一階、必須進計後任、待滿六考而乃敍之類、其以理解官、總有七色、致仕、考滿、廢官、省員、充侍、遭喪、患解、是也、）及考在中下以下者、不在進限、

〔令義解獄十〕凡犯流以下、應除免官當、未奏身死者、位記不追、即奏時不知身死、奏後云先死者、依奏定、（謂除免官當、並依常法例也、）其常赦所不免者、依常例、（謂犯流以下、未奏身死、罪當常赦所不免者、不在赦限、故云依常例也、）若雜犯死罪、獄成會赦、全原

特除名、仍其所犯先經、故許同免官之例收敍、免官者、三載之後、降先位二等敍、稱載者、理與六載義同、亦止取三載之後入四年聽敍、降先位二等者、四位以下一階爲一等、三位以上及勳位正從各爲一等、假有正四位上免官、三載之後、得從四位上敍、勳一等免官、三載之後、從三等敍、是爲三載之後、降先位二等敍、免所居官、及官當者、非年之後、降先位一等敍、匝四時曰朞、稱年者、以三百六十日、從勅出解官日始計、若本犯不至免所居官及官當、而特免官者、敍法同免所居官、其免官者、若有二官、各聽依所降位敍、假有正六位上帶勳一等、犯免官者、官位降至從六位上敍、勳位降從三等敍、此是各聽依所降位敍、即免官、免所居官、及官當、斷訖、更犯、餘有歷任位記者、各依當免法、假有人犯免官及免所居官、或以官當徒、各用一官二官當免訖、更犯徒流、或免官、免所居官、官當、餘有歷任之位記在者、各依上法當免、未斷更犯、通以降至者當之、○降下唐律有所不二字、竝有二官者、先以高者當、此既重犯之人、若有勳位官位二官者、先以高者當、假有歷任六位、及六等勳者、先以勳位當、若罪不盡、亦以次高者當、不限勳位官位、仍累降之、所降雖多、各不得過四等、假有前犯免官、已降二等、又犯免官、亦降二等、故云仍累降之、即雖斷訖更犯、經三度以上、敍日止依此再降四等法、其免所居官及官當、斷訖更犯、後敍各降一等、乃至四度重犯、總降四等、後犯雖多、止以四等爲限、或頻犯免官訖、又再犯免所居官者、亦各敍計所犯、降四等敍之、故云所降雖多、各不得過四等、各謂二官各降、不在通計之限、官位爲一官、所降不得過四等、勳位爲一官、所降亦不得過四等、此二官犯者、各降四等爲法、不在通計之限、若官盡未敍、更犯流以下罪者、聽以贖論、謂後敍合得八位以上者、謂用官當免並盡、未到敍時、犯流以下罪者、聽以贖論、以其年限未充、必有敍法、故免決配聽依贖論、本犯不合贖者、亦不合贖、此條內有毆告三等尊長四等尊屬者、得以贖論、上條毆告三等尊長四等尊屬、不得以蔭論、今此自身官盡、聽以贖論、即非用蔭之色、聽同法、贖敍限各從後犯計年、犯免官及免所居官、未敍更犯免官及免所居官當者、各依後犯、計年聽敍、官盡更犯、聽依贖法、若犯當免官、更三載後聽敍、免所居官者、亦非年之後聽敍、敍、其犯徒流、不合贖、而眞配流者、即依令六載、徒役滿敍之、雖役滿、仍在免官限內者、依免官敍例、則不在課役之限、雖有歷任之位記、不得預朝參之例、不在課役之限者、謂有敍限、故免其課役、依令、初位免徭役、其初位未敍之間、免役從課、上文官盡未敍、更犯流以下罪者、聽以贖論、注云、後敍合得八位以上者、彼文則守後敍、明此亦不異、雖有歷任之官者、假有一位犯當免官、仍有歷任二位以下官、未敍之間、不得預朝參之例、其免所居官、及以官當徒、限內未敍者、亦准此、

〔令義解選敍四〕凡犯除名限滿應敍者、三位以上、錄狀奏聞聽勅、其正四位、於從七位下敍、從四位、於正八位上敍、正五位、於正八位下敍、從五位、於從八位上敍、六位七位、並於大初位上敍、八位初位、並於少初位下敍、若有出身位高此法者、仍從高、免官、免所居官亦准此、出身、謂藉蔭、及秀才明經之類、謂以父祖蔭、及秀才明經出身、若犯除名者、限滿之日、復聽敍本蔭本第、即才優擢授者、並不拘常例、

〔令義解軍防五〕凡勳位犯除名、限滿應敍者、一等於九等敍、二等於十等敍、三等於十一等敍、四等以下於

（事實盜者、合杖八十、仍合除名、若虛誣告人不可止得杖罪、故反坐比徒三年、免官者、誣告五位於監臨外盜布五端、合徒一年、仍合免官、若虛反坐、不可止科徒一年、故比徒二年、免所居官者、謂誣告入父母服內別籍義財、合杖一百、仍合免所居官、若虛反坐、不可止得杖罪、故比徒一年、及入出之類、謂不盜監臨內物、官人枉判作盜所監臨、或實盜監臨、官人判作不盜、即是官司出入除名、比徒三年、若出入免官免所居官、亦依比徒二年一年之法、其藏匿罪人、若過致資給、戒爲保證、及故縱等、有除免者、皆從比徒之例、故云之類、若所枉重、自從重、謂誣告及出入之罪、重於比徒之法者、自從反坐等重法科之、不復仍准比徒之法、）若誣僧尼應還俗者、比徒一年、（依令、僧尼飲酒、醉亂、及與人鬪打者、各還俗、假有人誣告僧尼與人鬪打者、若實並須還俗、既虛反坐、比徒一年、）其應苦使者、十日比笞十、（依令、僧尼綾羅錦綺不得服用、違者各十日苦使、假有人誣告服用錦羅、若實十日苦使、既虛反坐笞十、）官司出入者、罪亦如之、（謂應斷還俗及苦使、官司判放、或不應還俗及苦使、官司枉入、各依此反坐徒杖之法、故云亦如之、失者各從本法、）

〔令義解 十〕凡因父祖官蔭、出身得位、父祖犯除名罪者、子孫不在追限、若子孫復除名者、後敍之日、即從無蔭法、（謂文云後敍之日、即恐未至之間、猶爲有蔭、是准法、實蔭已絕、即須從無蔭法也、）其父祖因犯降敍者、亦從後蔭敍、（謂凡除名子孫、於法蒙父祖蔭、若父母復犯免官等罪降敍者、子孫即從降敍之蔭、故云亦從後蔭敍、其三位以上、除名限滿、勅授五位以上者、亦是爲降敍、若无位雜任、犯罪之後、猶依舊入色、准據律令、終無還本色文故也、）

凡官人因犯移配、（謂遷隸移鄉也、）及別勅解見任、若本罪不合除免及官當者、位記各不在追例、（謂若合除免官當者、自依除免官當法也、上條制出仕之年限、此條立不追位之法也、）

貶還本貫

〔類聚三代格 八〕太政官符

諸司無故不上者放還本貫事

右奉今月五日勅、無故不上還本貫者、先已處分、如聞省司失旨例申散位寮者、自今以後、不得更然、放還本貫、有位爲外散位、無位還從本色、

天平勝寶四年十一月十六日（○又見續日本紀）

復敍

〔律疏 名例〕凡除名者、官位勳位悉除、課役從本色、（謂出身以來、官位勳位悉除、無蔭同庶人、有蔭從蔭例、故云各從本色、又依令、除名未敍人、免役輸庸、不在雜徭及點防之限、）六載之後聽敍、（假有元年犯罪、至六年之後七年正月、始有敍法、其間雖有閏月、但止據載言之、不似稱年要以三百六十日爲限、依選敍令、三位以上、奏聞聽勅、正四位從七位下敍、從四位正八位上敍、正五位正八位下敍、從五位從八位上敍、六位七位大初位上敍、八位初位少初位下敍、若有出身位高於此法者、聽從高、出身謂籍蔭、及秀才明經之類、又軍防令、勳位犯除名、限滿應敍者、一等於九等敍、二等於十等敍、三等於十一等敍、四等以下於十二等敍、）若本犯不至免官、而特除名者、敍法同免官例、（本犯不至免官者、情在可責、而

官當等雜制

士有實、撿非違使義正除名、實政罪名依執謬案也、

〔令義解四 考課〕凡官人有犯、私罪下中、公罪下下、並解見任、（謂依上條、計公私殿降、至此考者、亦同、若通計公私罪殿、降至下中者、即為公罪殿、不可解官也、）即依法合除免官當者、（謂若無位官人、有蔭贖、徒以上者、亦須解官、不可輕於八位以上也、）不在考校之限、並奪當年祿、（謂當年者、自春至冬、即奪事發年祿、不可追前年祿、假如正月事發者、不徵去年祿、即停將來祿、若秋祿既給後事發者、春秋之祿、重皆徵還之類也、）本犯不至除解、而特除解者不徵、其考解者、朞年聽敍、（謂考解之人、不可追位、而言聽敍者、猶云聽仕也、）

凡官人犯罪、〇中略若本犯免官以上、（謂以上除名也、案律、雜犯加役流、子孫犯過失流、並合除名、若會恩赦者、即須免其罪、但至於考日、計殿降考也、）及贓賄入已、（謂官人受所監臨物、一尺以上之贓也、）恩前獄成者、（謂別放及降、並同恩例、其監主犯奸盜、而獄成會常赦者、免所居官、此常赦所不免、亦不在考校之限、即如此之類、會非常赦者、仍以景迹論、舉此一端、餘隨可知也、）仍以景迹論、（謂依上條、居官詔詐、及貪濁有狀、為下下、即贓賄入已、是貪濁有狀、即雖會恩赦、猶為下下、又依上條、官人有犯、私罪下中、公罪下下、奪當年祿、即依此文合奪祿、故云貶考奪祿並依常法也、）貶考奪祿、並依常法、即非除免者、不解官、（謂除者、除名也、免者、免官也、依上條、私罪下中、公罪下下、並解見任、其贓賄入己者、縱雖至下下、不可解官、但本犯除名免官者、仍須解官、故云非除免者、不解官也、）

〔律疏 名例〕凡以官當徒者、罪輕不盡其官、留官收贖、官少不盡其罪、餘罪收贖、（假有五位以上、犯私坐徒二年、例減一等、即是罪輕不盡其官、留官收贖、官少不盡其罪者、假有八位犯私坐一年半徒、以官當徒一年、餘罪半年收贖之類、）其犯除免者、罪雖輕、從例除免、（假有五位以上及帶勳位、於監臨內盜布三端、本坐合杖八十、仍須准例除名、或受財十五端一尺、而不枉法、本坐徒一年半、亦准例免官、或在父母喪、兄弟別籍異財、合杖一百、亦准例免所居官、）罪若重、仍依常贖法、（假有正七位上、復有歷任從七位下、犯除名流、不合例減者、以流比徒四年、以正七位上階、當徒一年、又以從七位下階、當徒一年、更無歷任位記及勳位、即徵銅四十斤、贖二年徒坐、仍准例除名、若罪當免官者、亦准此當贖法、仍依例免官、此名罪若重、仍依常贖法、）

〔令義解十 獄〕凡犯罪應除免官當者、不得薦事及朝會、其被劾推、雖非官當除免、徒以上、不得入內、（謂薦事朝會並亦不可得、依律、有官犯罪、无官事發、流罪以下、聽以贖論、是為非官當徒以上、其過失疑罪、元非正刑、不在制限也、）其三位以上、非解官以上者、（謂雖犯死罪、會赦解任、是為解官、其四位以下、雖杖罪應解官者、不合入內、）仍聽薦事朝會、及入內供奉、

〔律疏 名例〕凡除名者、比徒三年、免官者、比徒二年、免所居官者、比徒一年、初位不用此律、（除名、免官、免所居官、罪有差降、故量輕重、節級比徒、初位非職事者、品秩卑微、誣告反坐、與白丁無異、故不用比徒之律、）謂以輕罪誣人、及入出之類、故制此比、（假有人告五位以上監主內盜布三端、若

大納言位姓

右○中略斷流罪以上及除名、（謂此所司、不得專斷、事必須議奏者、假令獄令、犯罪應入議請者、於官議定、雖非六議、但本罪應奏、處斷有疑、及經斷不伏者、亦衆議定之類是、但刑部及諸國、斷流以上、及除免官當者、連寫案申太政官、雖是流以上、而非可議者、故入奏事也、問免官以下、處斷有疑者、依獄令合議定、且得入此條哉、答文云除名、不稱免官、輕重已異也、即須入奏事、○中略）爲論奏、畫聞訖留爲案、御畫後注奏官位姓、

〔令義解三賦役〕凡除名未敍人、免役輸庸、願役身者聽之、其應收庸者、亦不在雜徭及點防之限、（謂除名之人、輸庸之外、不得更亦點兵士及衞士也、）

〔日本書紀二十九天武〕四年四月丁亥、小錦下久努臣麻呂、坐對捍詔使、官位盡追、

〔續日本紀三文武〕慶雲三年二月庚寅、詔曰、○中略又制七條事、○中略准律令、於律雖有除名之人、六載之後、聽敍之文、令內未載除名之罪、限滿以後應敍之式、宜議作應敍之條、其三

〔續日本紀考證二〕荷田氏曰、按選敍令、凡犯除名、限滿應敍者、三位以上、錄狀奏聞聽勅、其正四位於從七位下敍云々、蓋養老所追增也、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年十月壬子、中務大輔從五位上兼少納言信濃守菅生王、坐姧小家內親王除名、內親王削屬籍、

〔續日本紀三十八桓武〕延曆四年八月庚寅、中納言從三位大伴宿禰家持死、○中略死後二十餘日、其屍未葬、大伴繼人竹良等殺種繼、事發覺下獄、案驗之、事連家持等、由是追除名、其息永主等、並處流焉、

〔百練抄四一條〕正曆二年二月二日、有國卿除名、大膳屬秦有時殺害之間、依爲造意、

〔百練抄四後朱雀〕長曆二年二月十九日、諸卿定申法家勘申前帥實成罪名、實成卿除名、○正二位中略法家勘文云、帥故殺死罪、○下略

〔百練抄五堀河〕寬治二年十一月廿九日、前大貳實政除名、配流伊豆國、幷緣坐者同流罪、依射危正八幡宮神輿也、十二月廿四日、左少辨敦宗解官、實政犯眞大逆之由諸卿定申之故也、又大判事明法博

而獄成者、其雜犯死罪、（緣犯死罪下、唐律有謂非上文十惡故殺人反逆緣坐監守內姦盜略人受財枉法中死罪者上二十八字、）及在禁身死者、謂犯法合死、在禁身亡、免死別配者、謂本犯死罪、蒙恩別配流徒之類、及背死逃亡者、謂身犯死罪、背禁逃亡、此等所犯、獄成並從除名之律、故注云、皆謂本犯合死而獄成者、其背死逃亡者、即斷死除名、依法奏畫、不待身至、其下文犯流徒獄成逃走、亦准此、會降者聽從當贖法、謂雜犯死罪以下、未奏畫逢降、有官者聽官當、有蔭者依贖法、不得蔭贖者、亦不在贖限、其會赦依令解見任職事、如特奉鴻恩、總蒙原放、非常之斷、人主專之、官位勳位並合如初、不同赦降之例、若加役流以下五流犯者、會赦及降者、會赦猶流、常赦所不免、雖會赦降、仍依前除名配流、其不孝流反逆緣坐流、雖會赦亦除名、子孫犯過失流、會赦免罪、會降有官者聽依當贖法、其加役流、犯非一色、入八虐者、雖會赦降、仍除名、律稱以枉法論、監守內以盜論者、會赦免所居官、會降同免官法、自餘雜犯、會赦從原、會降依當贖法、凡斷罪之法、應例減者、先減後斷、其五流先不合減者、雖會降、後亦不減科、

〔律疏名例〕凡應議請減、及八位勳十二等以上、若官位勳位得減者之父母妻子、犯流罪以下、聽贖、略○疏若應以官當者、自從官當法、略○疏其加役流、反逆緣坐流、略○疏子孫犯過失流、略○疏不孝流、略○疏及會赦猶流者、略○疏各不得減贖、除名配流如法、男夫犯此五流、假有一品以下、及取蔭者、並不得減贖、除名仍配流如法、三流俱役一年、稱加役流者、役三年、家無兼丁者、依下條加杖免役、故云如法、除名者免居作、犯五流之人、有官者除名配流、免居作、即本罪不應流配、而特配者、雖無官亦免居作、謂有人本犯徒以下、及有蔭之人、本法不合配流、而責情特配者、雖是無官之人、亦免居作、其於二等以上尊長、及外祖父母、夫、夫之父母、犯過失殺傷、應徒、若故毆人至廢疾、應流、男夫犯盜、謂徒以上、及妻妾犯奸者、亦不得減贖、略○疏有官者各從除免官當法、

〔令義解公式七〕論奏式

太政官謹奏、其事、略○註

太政大臣位臣姓名

左大臣位臣姓名

右大臣位臣姓名

大納言位臣姓名等言云々、略○註謹以申聞、謹奏、

年月日

聞御畫

雖於服內而生、皆不坐、縱除服以後始生、但計胎是服內而懷者、皆依律得罪、其娶妾者、亦准十三月內為限、

免官

兄弟別籍異財者、免所居官、謂居喪未論十三月、兄弟別籍異財、其別籍異財、不相須、並合免所居之一官、並不計閏、謂免所居之一官、若兼帶勳位者、免其官位、

〔律疏名例〕凡犯姦、謂姧他妻妾、及與和者、盜、略人、受財而不枉法、姧、盜、略人、並謂監臨外犯罪、受財而不枉法者、謂雖即因事受財、於法無曲、並謂斷徒以上若犯流徒、獄成逃走、犯流徒者、謂非疑罪及過失、此外犯流徒者、獄成逃走者、謂減訖仍有徒刑、若依令責保參對、及合徒不禁、亦同、律既不注限日、推勘逃實即坐、其免所居官之法、依律比徒一年、此條犯徒流逃走、即獲免官之坐、若其合杖逃者、即不入免官之法、為比徒之法、但以異本犯徒流故、祖父母父母犯死罪被囚禁、而作樂及婚娶者、免官、曾高以下祖父母父母犯死罪、見被囚禁、其子孫乃作樂者、自作遣人作並同、上條遣人與自作不殊、此條理亦無別、及婚娶者、止據男人娶妻、不言嫁娶者、明婦人不入此色、自犯姧盜以下、並合免官、謂二官並免、降所不至者聽留、二官謂官位為一官、勳位為一官、此二官並免、三載之後、降先位二等敍、降所不至者、謂二等以外歷任之位居、若會降有餘罪者、聽從官當減贖法、

〔類聚國史八十四政理〕延曆十四年閏七月丁未、武藏國司介從五位下勳六等都努朝臣筑紫麻呂云々等、並免官、以隱截官物也、

除名

〔律疏名例〕凡犯八虐故殺人、反逆緣坐、八虐、謂謀反以下、不義以上者、故殺人、謂不因鬬競而故殺者、謀殺人已殺訖、亦同、餘條稱以謀殺故殺人論、及云從故殺法等、殺訖者、皆准此、其家人奴婢等非、案賊律殺一家非死罪三人、注云、奴婢家人非、其故殺舊家人奴婢經放為良、本條雖(雖下唐律有罪字)不至死、亦同故殺之例、反逆緣坐者、謂緣謀反及大逆人得罪者、本應緣坐、老疾免者亦同、謂緣坐之中、有年八十及篤疾、雖免緣坐之罪、身有官位者、亦各除名、若其身先亡者、不合除名、仍聽為蔭、獄成者、雖會赦猶除名、獄成、謂贓狀露驗、及書斷訖未奏者、犯上八虐等罪、獄成之後、雖會大赦、猶合除名、獄若未成、即從赦免、注云、[illegible]狀露驗者、贓謂盜入八虐之贓(盜入八虐之贓、唐律作所犯之贓、)見獲本物、狀、謂殺人之類、得狀為驗、雖在國郡、並名獄成、及書斷訖未奏者、謂刑部覆斷訖、雖未經奏、亦為獄成、此是赦後除名、常赦不免之例、卽監臨主守、於所監守犯姧盜略人、若受財而枉法者、亦除名、姧謂犯良人妻妾、盜及枉法、謂盜三端、枉法一端者、略人者、不和為略、十歲以下雖和、亦同略法、律文但以稱略人、即不限將為良賤、若略家人、亦合除名、依鬬律、毆傷家人、減凡人一等、奴婢又減一等、合略良人及奴婢、並合除名、舉略奴婢是輕、計贓入除名之法、略家人是重、明知亦合除名、其共盜者、併贓論、雖贓不入己、亦是、共枉法者、無併贓之文、唯云官人受財、復以所受之財、分求餘官、元受者併贓論、餘各依己分法、其有共謀受者、不同元受之例、不合併贓、得罪各依己分、為首從科之、獄成會赦者、免所居官、此是赦後、仍免所居之官、亦為常赦所不免、會降者、同免官法、降既罪級減原(原恐衍文)罪、不合悉原、故降除名之科、聽從免官之法、假令降罪悉盡、亦依免官之例、即降後重斷、仍未奏畫、更逢赦降、猶合免所居之官、其雜犯死罪、即在禁身死、若免死別配、及背死逃亡者、並除名、皆謂本犯合死

下忍海山下氏則館、夜聞外有數十人聲、氏永意以爲賊欲被害、介氏則卽同謀也、由是以劒毆傷氏則妻下毛野屎子、及從女大田部西子、卽奪取屎子所著之大衣一領自被逃去、刑部省斷云、依律所犯當近流、身帶從五位下、請減一等徒三年、以從五位下當徒二年、餘徒一年、以六位以下當徒一年、仍卽解見任職事、又氏永毆傷氏則妻之後、逃走隱山中、掾從七位下大野朝臣安雄、率郡司百姓三十七人捉獲氏永、打縛其身、籠閉倉中、刑部省斷云、安雄應官當解任、當徒一年、○中略卽日奏聞、詔曰、宜依省斷、

〔政事要略三十〕勘申左大辨正四位下橘朝臣廣相犯罪事

右被上宣偁、萬機巨細關白太政大臣之狀、詔書下訖、而上表固執闕退之志、爰令作勅答之人廣相引阿衡之文、仍令道々人々勘申云、阿衡无典職者、而廣相猶申有典職不伏、仍今年六月七日重下詔書偁、詔本意萬政關白欲賴其輔導、前詔下也、而奉旨作勅答之人廣相引阿衡、彼已乖勅本意、宜勘申其罪者、謹撿詐僞律云、詐爲詔書、及增減者、遠流、注云、謂因詔勅成文、而增減其事、名例律云、五位以上犯流罪以下減一等、又條云、犯私罪、以官當徒者、五位以上以一官當徒二年、仍解見任職事、又條云、以官當徒者、罪輕不盡其官、留收贖、又條云、三流同爲一減者今引无典職阿衡、已乖勅本意、准撿律條、不異增減詔書、仍從遠流請減一等、徒三年、身帶正四位下、以正四位下一階當徒二年、餘一年合贖銅廿斤、仍解見任職事、仍勘申如件、

仁和四年十月十五日

左衞門少志櫻井貞世

右大史兼明法博士凡春宗

勘解由次官兼大判事播磨大掾惟宗直宗

件勘文未進之前、有恩詔被免、仍不進之、

〔律疏名例〕凡祖父母父母老疾無侍、委親之官、（老謂八十以上、疾謂篤疾、並依令合侍、今乃不侍、委親之官者、其有才用灼然、要籍驅使、令帶官侍者、不拘此律、其委親之官、依法有罪、既將之任、理異委親、及先已任官、親後老疾、不請解侍、並科違令之罪、）在父母喪生子、及娶妾、（在父母喪、生子者、皆謂二十七月內而懷胎者、若父母未亡以前懷胎、

隆寺僧善愷違法訴狀也、

〔續日本後紀十八仁明〕嘉祥元年十二月庚戌、勅、從四位上〇從四位上恐正五位上誤正躬王、正五位下伴宿禰成益、正六位上〇正六位上原作從五位下、依一本改藤原朝臣豐嗣等、先羅陳網下于秋官、憲法所當理存不忍、今星歷已用、恩波蕩滌、宜修舊典降先一等敍之、正躬王可從四位下、成益正五位上、〇正五位上原作從五位上、據文德實錄改豐嗣從五位下、

〇按ズルニ、官當ノ者ハ、斷罪後二等ヲ降シ、復敍ノ時ニ、先位ニ一等ヲ降シテ敍スルコト、此文ト上ニ擧タル岑成王トノ事ニ依リテ知ルベシ、免所居官ノ斷罪後ニ二等ヲ降シ、免官ノ三等ヲ降スコトモ准ジテ知ラル、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年十二月廿七日戊申、太政官論奏言、〇中略前日向守從五位下嗣岑王、謀殺詔使正五位下田口朝臣房富等、須詳加覆案者也、帝特降優詔曰、〇中略嗣岑王、依先斷官當免罪、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十二月廿三日癸酉、先是右京人散位從七位下大石忌寸福麻呂、私雕官印、捺僞官符、賣官地子穀百五十斛、欺取其直、左兵衞阿刀澤雄、錢十二貫文、左衞門門部園部禪師麻呂、錢六貫文、刑部省斷云、福麻呂雕官印捺僞官符、其罪當近流、欺取直錢、當遠流、相准輕重、雖有遠近、至減一等、俱是徒三年也、所犯在降前、又減一等、徒二年半、以從七位下當徒一年、又以正八位上當徒一年、餘半年徒、官當不盡其官、留官可收贖銅十斤、仍須一年之後、降先位一等敍正八位上、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年五月十二日庚寅、先是石見國邇摩郡大領外正八位上伊福部直安道、那賀郡大領外正六位下久米岑雄等、發百姓二百十七人、帶兵仗圍守從五位下上毛野朝臣氏永館、奪取印匙、驛鈴等、授傍吏、詔遣式部大丞正六位上坂上大宿禰茂樹推問事由、刑部省斷云、安道應官當解任、當徒二年、贖銅十斤、岑雄應贖銅九斤、自餘人節級處罪、延曆寺僧一道、右京人正六位上藤原朝臣豐基戶口俗名數直、與安道同謀、還俗當徒一年、又守氏永爲安道等所圍之時、逃隱於介外從五位

以一官當徒三年、五位以上、以一官當徒二年、八位以上、以一官當徒一年、若犯公罪者、(公罪謂緣公事致罪、而無私曲者、私曲相須、公事與奪、情無私曲、雖違法式、是爲公坐、若詔勅施行、不曉勅意、而違者爲失旨、雖違勅意、情不涉私、亦皆爲公坐、)各加一年當、(謂八位以上、一官當徒二年之類、)以官當流者、三流同、比徒四年、(八位以上犯流、不合眞配、既須當贖、所以比徒四年、假有八位犯私罪流、以四官當之、無四官者、准徒年當贖、故云三流同、比徒四年、)其有二官、(謂官位爲一官、勳位爲一官、官位每階各爲一官、勳位即正從各爲一官、)先以官位當、次以勳位當、(謂位記雖多、先取最高者當、次以勳位高者當、)行守者、各以本位當、仍各解見任、(假有從五位下行正六位、犯二年半私罪、例減一等、猶徒二年、以本階從五位當二年、仍解六位見任、其有六位守五位職事、亦犯私罪二年半徒者、例減一等、亦用本位當徒一年、餘徒收贖、解五位職事之類、)若有餘罪、及更犯者、聽以歷任之官當、(歷任謂降所不至者、若有餘罪者、謂二官當罪之外、仍有餘徒、或當罪雖盡、而更犯法、未經科斷者、聽以歷任降所不至位記、以次當之、)

〔續日本後紀 十四 仁明〕承和十一年十二月壬寅、(○壬寅恐壬辰誤)越前守從四位下岑成王、犯罪官當解任、岑成王、初赴任之後、乞暇入京、隱居不上、所司奏劾之、

〔續日本後紀 十五 仁明〕承和十二年十一月乙巳、毀越前守從四位下岑成王四位位記、緣有犯罪也、

〔續日本後紀 十六 仁明〕承和十三年七月己未、授正五位下岑成王正五位上、(○上原作下、依一本改)岑成王、去年緣犯罪毀從四位下位記、今據法條、降一等敍之、

〔三代實錄 五 清和〕貞觀三年二月廿九日癸酉、參議從四位上行太宰大貳清原眞人岑成卒、岑成者左京人、贈一品舍人親王之後也、(○中略)承和元年授從四位下、十一年爲越前守、赴任之後、取暇入京、隱居不出、所司奏聞、官當解任、免從四位下之階、十三年授正五位上、(○上原作下、今以意改、)

〔續日本後紀 十六 仁明〕承和十三年十一月壬子、太政官下符所司、令徵前參議左大辨正躬王、前參議右大辨和氣朝臣眞綱等贖銅、其符偁、太政官符刑部省應徵贖銅事、(○中略)左大臣宣、奉勅、依官議行之者、仍准所犯、以所帶一官、當徒二年、其餘如半年徒、贖銅如件、省宜承知、依件徵納、

〔續日本後紀 十七 仁明〕承和十四年五月辛卯、是日毀前左大辨從四位上正躬王、左中辨從四位下伴宿禰成益、右中辨從五位上藤原朝臣豐嗣、左少辨從五位下藤原朝臣岳雄等四人位記各一階、緣受推法

功過ヲ考ヘ、私罪下中、下下、公罪下下ニ當ル者ノ官ヲ解クヲ云フ、又理ヲ以テ解官スルニ、致仕、考滿、廢官、省員、充侍、遭喪、患解ノ七色アリ、致仕トハ七十以上ニテ其官ヲ辭スルヲ云フ、考滿トハ交替スベキ年限ノ既ニ滿テルヲ云フ、廢官トハ其官名ノ廢セラルヽヲ云フ、省員トハ其廳ノ官員ヲ減省スルヲ云フ、充侍トハ父母老病シテ侍養スベキヲ云フ、遭喪トハ父母ノ喪ニ遭フヲ云フ、患解トハ疾病シテ百二十日ヲ經ルヲ以テ解官スルヲ云フ、而シテ犯罪解ト考解トハ法律部內ニシテ、其餘ハ皆法律部外ナリ、

釐務ヲ停ムルアリ、釐務トハ今世ニ云ヘル役所ノ事務ヲ執ル事ニテ、令ニ依レバ、罪ヲ犯シテ除免官當セラルベキトキハ、釐務ニ預ルコトヲ得ザル法ナリシヲ、除免官當ノ法自ラ絕ユルニ至リテ、釐務ヲ停ムルコトモ一ノ刑名ノ如クニナレリ、

又位記ヲ毀ツアリ、卽チ內外ノ有位人、官當以上ヲ犯ストキハ、刑部處斷シテ太政官ニ申シ、奏聞シテ、罪人文官ナレバ式部ニ移シ、武官ナレバ兵部ニ移シ、五位以上及ビ婦人ナレバ中務ニ移シ、幷ニ罪人ノ位記ヲ收メテ辨官ニ送リ、太政官更ニ刑部ニ還付ス、是ニ於テ中務式部兵部ノ三省ノ錄、各位案ノ𥳑ヲ持シ、刑部錄位記ノ𥳑ヲ持シ、共ニ入リテ太政官ノ庭中ニ列立シ版位ニ就ク、辨官位記ヲ毀ルベキ狀ヲ大臣ニ申シ、刑部錄位記ノ𥳑ヲ以テ進ミテ外記ニ付シ、外記取リテ大臣ニ進ム、大臣覽シ訖リ、外記趨リテ位記ノ𥳑ヲ取リ捧ゲテ立ツ、式部丞位記ノ案ニ毀ノ字ヲ書キ、外記ノ史生毀ノ字ニ捺印シ、外記乃チ位記若干ヲ毀ラント申シ、大臣ノ命ヲ待チテ毀ルナリ、

又官ヲ降スコトアリ、必ズシモ有罪ニ由ラズ、而シテ位ヲ降スコトハ必ズ有罪ニ由レリ、

〔律疏 名例〕凡犯私罪以官當徒者、私罪謂私自犯、及對詔詐不以實、受請枉法之類、私罪謂不緣公事私自犯者、雖緣公事意涉阿曲、亦同私罪、對詔詐不以實者、對詔雖緣公事、方便不吐實情、心挾隱欺、故同私罪、受請枉法者、謂受人屬請、屈法申情、縱不得財、亦爲枉法、此例既多、故謂之類、一品以下、三位以上、

重犯スルトキハ總テ四等ヲ降ス、後犯ハ多クトモ只四等ヲ以テ限トス、或ハ頻リニ免官ヲ犯シ訖リテ、又再ビ免所居官ヲ犯ス者モ、亦各〻其所犯ヲ計ヘテ四等ヲ降シテ敍ス、若シ免官、免所居官、官當ニ官ヲ用キ盡シテ無位ノ人トナリテ、未ダ敍セラル、時ニ至ラズシテ、更ニ流以下ノ罪ヲ犯ストキハ、後敍ニ八位以上ヲ得ベキ者ハ、敍法アルヲ以テ決配ヲ免ズベケレバ、贖ヲ以テ論ズルコトヲ聽ス、其敍限ノ年ハ各〻後敍ノ時ヨリ計ヘテ、其犯免官ニ當レバ、更ニ三載ノ後ニ敍スルコトヲ聽シ、免所居官ハ更ニ朞年ノ後ニ敍スルコトヲ聽ス、又流ヲ犯シテ贖スベカラズシテ、眞ニ流ス者ハ六載ノ後ニ敍スルコトヲ聽シ、徒ヲ犯シテ贖スベカラズシテ、眞ニ役スルトキハ役滿チテ敍ス、サレドモ滿役ノ期仍ホ免官ノ限內ニ在ル者ハ免官ノ敍例ニ依ル、而シテ未ダ敍セラレザル間モ後敍ノ限アルヲ以テ其課役ヲ免ズ、而シテ歷任ノ位記アリトモ朝參ノ列ニ預ルコトヲ得ズ、例ヘバ一位ノ人免官ヲ犯シ、仍ホ歷任ノ二位以下ノ官アリトモ、未ダ敍セラレザル間ハ朝參スルコトヲ得ズ、免所居官、官當ノ人ノ未ダ敍セラレザル間モ皆同ジ、凡テ罪ヲ犯シテ除免官當スベキトキハ、事ヲ理メ朝會スルコトヲ得ザルナリ、又除名ヲ比徒三年トシ、免官ヲ比徒二年トシ、免所居官ヲ比徒一年トスル法アリ、是ハ人ノ輕罪ヲ誣告スル者、及ビ釋スベカラザル罪人ヲ判放シ、無罪ヲ有罪トシテ枉入スル官司ヲ反坐センガ爲メニ制セルナリ、

解官ハ、免官ト其名相似テ大ニ異ナリ、卽チ解官トハ、官職ヲ解クヲ云ヒ、免官トハ、位階ヲ褫グヲ云フナリ、而シテ解官ノ者ハ未ダ必ズシモ免官セズ、免官ノ者ハ必ズ解官スルナリ、又解官ト停任トハ其實ハ同一ナルヲ、後ニハ重罪ヲ解官トシ、輕罪ヲ停任トシテ之ヲ別テリ、又一官ノミ解キ、二官俱ニ解クコトモ、官位俱ニ解クコトモアリ、又雜犯死罪ノ（八虐外ノ死罪）人、赦ニ會フトキ解官スルハ律令ノ制ナリ、解官ニハ犯罪解アリ、考解アリ、考解トハ、式部省ニテ

トキハ高キニ從フヲ聽ス、除名ヲ以テ言ヘバ、正四位ノ人ハ從七位下ニ敍スベキニ、一位ノ嫡子ナルトキハ從五位下ニ敍シ、正五位ノ人ハ、正八位下ニ敍スベキニ、秀才上々等ノ出身ナルトキハ正八位上ニ敍ス、免官、免所居官モ此ニ准ズ、又勳十二等ノ人ノ免官スルトキハ、先位ニ二等ヲ降スベキニ、降スベキ位ナケレバ猶十二等ニ敍ス、又除名、免官、免所居官ハ、罪輕クトモ犯ストキハ除免ス、五位ハ官當ニテハ公罪ノ徒三年ニ當ルヲ、若シ監臨內ニ於テ布三端ヲ盜ムトキハ、本坐ハ杖八十ナレドモ除名シ、不枉法贓十五端一尺ヲ受クルトキハ、本坐ハ徒一年半ナレドモ免官シ、父母ノ喪ニ在リテ兄弟別籍異財スルトキハ、本坐ハ杖一百ニ當レドモ免所居官ス、又罪重キトキニハ更ニ當贖ノ法ニ依リテ、各〻其所犯ニ准ジ官ヲ以テ流徒ニ當テ、或ハ贖銅ヲ納メシメテ除免ス、例ヘバ正七位上ノ人、歷任ノ從七位下アリテ、除名ノ流ヲ犯シテ例減スベカラザルトキハ、流ヲ以テ徒四年ニ比シ、正七位上ノ階ヲ以テ徒一年ニ當テ、又從七位下ノ階ヲ以テ徒一年ニ當テ、其餘ニ歷任ノ位記及ビ勳位ナキトキハ、銅四十斤ヲ徵シテ二年ノ徒ヲ贖ハシメ、例ニ准ジテ除名ス、若シ其罪免官ニ當ルトキハ、亦此當贖法ニ准ジテ免官ス、免官、免所居官、官當ヲ犯シ斷ジ訖リ、各〻一官二官ヲ用キテ當免シテ後ニ、更ニ徒流ヲ犯シ、或バ更ニ免官、免所居官、官當シテ尙ホ歷任ノ位記アルトキハ、各〻上ノ法ニ依リテ當免シ、未ダ斷ゼラレズシテ更ニ犯セバ、通ジテ降所不至ノ者ヲ以テ當ツ、此時ニハ勳位官位ノ二官アルトキハ、官位勳位ヲ擇バズ、先ヅ其中ノ高キ者ヲ以テ當ツ、例ヘバ歷任ノ六位及ビ勳六等アルトキハ、先ヅ勳位ヲ以テ當ツ、若シ罪ニ當テヽ盡サヾレバ、亦次ノ高キ者ヲ以テ當ツ、又前ニ免官ヲ犯シテ已ニ位階二等ヲ降セルニ、又免官ヲ犯ストキハ亦二等ヲ降ス、縱ヒ斷ジ訖リテ更ニ犯スコト三度以上ヲ經トモ、敍スル日ハニ只此再降四等ノ法ニ依ル、免所居官、官當斷ジ訖リテ更ニ犯ストキハ、後敍ハ各〻一等ヲ降シ、四度

チテ、降所不至ノ位記ハ留ムルコトヲ聽ス、若シ本犯、免所居官及ビ官當ニ至ラザルヲ、特ニ其情ヲ責メテ免官スルトキハ、其敍法、免所居官ニ同ジ、

○除名○トハ、官人ノ籍ヲ除クヲ云フ、出身以來ノ官位、勳位、共ニ悉ク除キテ、有蔭ノ人ハ蔭ノ例ニ從ヒ、無蔭ノ人ハ庶人ニ同ジ、サレドモ調庸ヲ輸サシメ役ヲ免ジテ、兵士、衞士ニ點ゼズ、除名トナルベキ罪ハ、第一ハ八虐、第二ハ人ヲ故殺ス、第三ハ反逆ノ緣坐ニテ、右ノ三罪ハ獄成ルトキハ、赦ニ會フト雖ドモ除名ス、第四、第五、第六ハ、監臨主守ノ人、監守スル所ニ於テ良人ノ妻妾ヲ姦シ、若シクハ三端以上ヲ盜シ、若シクハ人ヲ略ス、第七ハ一端以上ヲ受ケテ法ヲ枉グ、贓ハ都テ布ニ准ジテ計フル法ナルニ因リ幾端ト云フ、右ノ四罪ハ獄成リテ赦ニ會フトキハ、免所居官トナリ降ニ會フトキハ免官ノ法ニ同ジ、第八ハ雜犯ノ死罪、卽チ八虐故殺人反逆ノ緣坐、監守內ノ姦盜略人、受財枉法中ノ死罪ニアラザルヲ云フ、第九ハ死罪ヲ犯シ囚禁セラレテ身死ス、第十ハ死罪ヲ免ゼラレテ別ニ流徒ニ配セラル、第十一ハ死罪ヲ犯シ獄ヲ脫シテ逃亡ス、右ハ本犯合ニ死スベクシテ、獄成レル者ニテ、降ニ會フトキハ當贖ノ法ニ從ヒ、官アル者ハ官當ヲ聽シ、蔭アル者ハ贖法ニ依リ、赦ニ會フトキハ見任ノ職事ヲ解カシム、此除名ハ六載ノ後、卽チ第七年ニ入リテ敍位ス、其敍法ハ、三位以上ハ狀ヲ錄シテ勅ヲ聽ハリ、正四位ハ從七位下ニ敍シ、從四位ハ正八位上ニ敍シ、正五位ハ正八位下ニ敍シ、從五位ハ從八位上ニ敍シ、六位、七位ハ大初位上ニ敍シ、八位、初位ハ少初位下ニ敍ス、勳位ノ人除名ヲ犯シタルトキハ、一等ハ九等ニ敍シ、二等ハ十等ニ敍シ、三等ハ十一等ニ敍シ、四等ハ十二等ニ敍ス、若シ本犯免官ニ至ラズシテ特ニ除名スルトキハ、敍法免官ノ例ニ同ジ、

凡テ罪ヲ犯シテ除免スル人ノアルトキハ刑部斷定シテ太政官ニ申シ、奏報アリテ後ニ太政官ニテ位記ヲ毀チ、復敍ノ日ニ式部ヨリ刑部ニ報ズ、而シテ出身ノ位、復敍ノ法ヨリ高キ

下ノ人ハ從五位下ノ位記ヲ毀タレ、歷任ノ位記アルトキハ正六位上ノ位記ヲ留メ、正六位下トナリ、朞年卽チ三百六十日ヲ經テ、先位ニ一等ヲ降シテ正六位上ト爲ル、宜シク本文官當ノ條ニ、續日本後紀ヲ引キテ、岑成王、正躬王ノ事狀ヲ載セタルヲ參考スベシ、若シ官位ノ外ニ勳位アリテ、官當ニ用キザルトキハ、勳位ハ留ムルコトヲ得ルナリ、又官ヲ用キテ盡シタル者ハ、其敍法免官ト同ジク、三載ノ後ニ先位ニ二等ヲ降シテ敍ス、

免所居官トハ、現在居ル所ノ一官ヲ免ズルヲ云フ、一官ハ官位卽チ通常ノ位階ニテ、職事官卽チ通常ノ官ハ隨ヒテ免ジ、若シ勳位アルトキハ、其勳位ハ留ムルナリ、免所居官トナルベキ罪ハ、祖父母父母老疾シテ侍スル者ナキニ、親ヲ委テヽ官ニ之クト、父母ノ喪ニ在リテ子ヲ生ミ、及ビ妾ヲ娶リ、及ビ兄弟別籍異財スルトノ四種ナリ、是モ朞年ノ後ニ先位ニ一等ヲ降シテ敍ス、

免官トハ、二官並ニ免ズルヲ云フ、二官トハ官位ト勳位トナリ、免官トナルベキ罪ハ、第一ハ他ノ妻妾ヲ姦ス、第二ハ盜ヲ犯ス、第三ハ人ヲ略ス、第四ハ財ヲ受ケテ法ヲ枉ゲズ、右ノ四罪ハ斷徒以上ニ限ル、第五ハ流徒ヲ犯シ、獄成リテ逃走スルナリ、獄成ルトハ、贓狀露驗ナルト、刑部省ニテ覆斷シテ未ダ奏セザルトヲ云フ、第六第七ハ、祖父母、父母、死罪ヲ犯シテ囚禁セラレタルニ、樂ヲ作シ及ビ婚娶スルナリ、免官ハ此七罪ヲ犯セル者ニ限ル、若シ降ニ會シテ餘罪アルトキハ、官當減贖ノ法ニ從フ、此免官ノ者ハ、三載ノ後、卽チ第四年ニ入リテ先位ニ二等ヲ降シテ敍ス、例ヘバ正四位上ノ人、歷任ノ位記ヲ有シテ免官スレバ從四位下トシ、三載ノ後ニ從四位上ニ敍ス、勳一等ノ人、歷任ノ位記ヲ有シテ免官スレバ勳四等トシ、三載ノ後ニ勳三等ニ敍ス、此正四位上、及ビ勳一等ヲ指シテ見免トシ、正四位下勳二等ヲ降至トシ、從四位上以下、及ビ勳三等以下ヲ降所不至トス、免官ノ時、見免ノ位記ト降至ノ位記トヲ毀

トヲ聽サヌ法ナレバ、先ヅ官位勳位ヲ以テ罪ニ當テヽ、其餘罪ヲバ銅ヲ出シテ贖フナリ、若シ二官(官位、勳位、)ヲ以テ罪ニ當テタル外ニ仍ホ餘剩ノ徒罪アルト、官當シテ罪ハ巳ニ盡キタリト雖モ、更ニ法ヲ犯シテ未ダ科斷ヲ經ザル者トハ、歷任ノ降所不至ノ位記ヲ以テ當ツルコトヲ聽ス、降所不至トハ、例ヘバ從五位上ノ人、官當スルトキハ朞年ノ後ニ、先位ニ一等ヲ降シテ從五位下ニ敍スル法ナレバ、從五位下以下ヲ指シテ降所不至ト云フナリ、又官當ハ罪輕クシテ其官ヲ盡サヾル時ト、官少クシテ其罪ヲ盡サヾル時トノ法アリ、罪輕クシテ其官ヲ盡サズトハ、五位以上ハ私罪徒二年ニ當ツベキニ、私罪徒二年ヲ犯ストキハ、請減一等スレド、餘徒一年半ナリ、卽チ罪輕クシテ五位以上ノ官位ヲ盡サズ、其時ハ官位ヲ留メテ、徒一年半ノ贖銅三十斤ヲ收ムルナリ、官少クシテ其罪ヲ盡サズトハ、八位ノ人ガ私罪ノ徒一年半ヲ犯ストキハ、八位ヲ以テ徒一年ニ當テ、餘罪半年ハ一官ニ當ツルニ足ラザレバ、徒一年ノ贖銅二十斤ノ半ナル十斤ヲ收ムルナリ、官當ハ元ヨリ徒罪ニ當ツル法ナレバ、流刑ノ爲メニハ別ニ比徒四年ノ法ヲ設ケタリ、徒ハ三年マデニテ四年ハナキヲ、官ヲ以テ流ニ當ツルトキハ、遠中近ノ三流共ニ比徒四年トス、七位以上及ビ勳十等以上ハ、議減請減例減ノ別バアレドモ、流罪以下ヲ犯ストキハ、一等ヲ減ズル法ニテ、(流刑ヲ減ズルトキハ、三流ヲ併セテ一等トスル法ナリ、)八虐ナドノ外ハ流刑ニ處セラルヽコトハナキヲ、八位及ビ勳十一等十二等ハ流刑ヲ減ズルコトヲ得ザレバ、三流ヲ徒四年ニ比シテ官當スルナリ、例ヘバ正八位上勳十一等ノ人、私罪ノ流ヲ犯ストキハ、正八位上ヲ以テ徒一年ニ當テ、勳十一等ヲ以テ徒一年ニ當テ、歷任ノ正八位下ト從八位上トヲ以テ徒二年ニ當テ、合セテ比徒四年卽チ流刑ニ當ツ、若シ正八位上ノミニテ歷任ノ位記ナキトキハ、正八位上ヲ以テ徒一年ニ當テ、餘ノ徒三年ハ銅六十斤ヲ納メテ贖フ、除名免官ノ中ニテ、其罪特ニ重キ者モ此法ニ從フコトアリ、此官當ノ法ハ、從五位

解免官職

有位ノ人ニ限リタル刑四アリ、官當、免所居官、免官、除名是ナリ、其中ニテ免所居官、免官、除名ハ犯シタル罪狀ニ因リテ當テラルヽ刑名ナリ、官當ノミハ公罪私罪ヲ犯シテ徒刑ニ當テラレタルヲ、官ヲ以テ償フヲ云フ、卽チ贖ノ如キ者ナリ、官トハ何レモ官位勳位ノコトニテ、官位ハ文位トモ云ヒテ、通常ノ位階ノコトナリ、

官當ノ法ハ、私罪ヲ犯ストキハ、四品以上、三位以上、勳二等以上ハ、各一官ヲ以テ徒三年ニ當テ、四位、五位及ビ勳三等以下六等以上ハ、二年ニ當テ、六位以下八位以上、及ビ勳七等以下十二等以上ハ、一年ニ當ツ、又公罪ヲ犯ストキハ、一年ヲ加ヘテ當ツルナリ、卽チ五位以上、及ビ勳六等以上ヲ以テ徒三年ニ當テ、六位以下八位以上、及ビ勳七等以下十二等以上ヲ以テ二年ニ當ツ、官位勳位ノ二官アルトキハ、先ヅ官位ヲ以テ當テ、次ニ勳位ヲ以テ當ツ、官位ハ每階一官トス、卽チ正從上下ヲ各一官トシテ計フ、勳位ハ正從ヲ各一官トス、例ヘバ勳一等ハ正三位相當ニテ一官ナリ、勳二等ハ從三位相當ニテ一官ナルガ如シ、又行守ハ各本位ヲ以テ當テヽ、其上ニ見任ノ職事官ヲ解クナリ、例ヘバ從五位下ノ人、正六位上相當ナル大內記ニ任ゼラレタル如キハ卽チ行ナリ、若シ徒二年半ノ私罪ヲ犯ストキハ、請減一等シテモ猶ホ徒二年ニ當レリ、其時ハ本階ノ從五位ヲ以テ二年ニ當テ、大內記ノ官ヲ解クナリ、又正六位上ノ人、從五位下相當ナル侍從ニ任ゼラレタル如キハ卽チ守ナリ、若シ徒二年ノ私罪ヲ犯ストキハ、例減一等シテ殘レル徒一年半ノ內、一年ハ本位ノ六位ヲ以テ當テ、半年ノ分ハ徒一年ノ贖銅二十斤ノ半ナル十斤ヲ納メテ贖ヒ、侍從ノ官ヲ解クナリ、凡テ官當ハ官位勳位ヲ以テ徒ニ當テヽ、因テ見任ノ職事ヲ解ク、又贖銅ノミヲ納メテ、官位勳位ヲ留メ置クコ

雜載

伊豆輔弘佐渡〇中略此外宣綱田宅資財奴婢等被沒官了、

〔中右記〕大治四年十一月廿九日癸酉、奈良張本僧侶七八人、被追遣諸國舊寺云々、十二月廿一日、左中辨語云、御寺張本十三人、依院宣可拂大和國之由、〇中略又惠曉當講所領、可沒官由、先日被下長者宣了云々、

〇按ズルニ、藤氏ノ長者宣ヲ以テ處分セシナリ、

〔日本書紀二十九天武〕五年八月壬子、詔曰、死刑沒官三流、並除一等、〇下略

〔令義解 雜十〕凡犯罪被戮、其父子應配沒、不得配禁內供奉、及東宮所駈使、（謂供奉者、內膳等之屬、其禁內駈使、及東宮供奉、亦不可配使、）

〔古事記 垂仁 中〕天皇詔、雖怨其兄、猶不得忍愛其后、故卽有得后之心、是以選聚軍士之中、力士輕捷、而宣者、取其御子之時、乃掠取其母王、或髮或手、當隨取獲而掬以控出、爾其后豫知其情、悉剃其髮、以髮覆其頭、亦腐玉緖三重纏手、且以酒腐御衣、如全衣服、如此設備而抱其御子、刺出城外、爾其力士等、取其御子、卽握其御祖、爾握其御髮者、御髮自落、握其御手者、玉緖且絕、握其御衣者、御衣便破、是以取獲其御子、不得其御祖、故其軍士等、還來奏言、御髮自落、御衣易破、亦所纏御手之玉緖、便絕故、不獲御祖、取得御子、爾天皇悔恨而惡作玉人等、皆奪其地、故諺曰不得地玉作也、

〔日本書紀 十五 清寧〕二十三年八月、大泊瀨天皇（○雄略）崩、（○中略）是月吉備上道臣等、聞朝作亂、思救其腹所生星川皇子、率船師四十艘、來浮於海、既而聞被燔殺、自海而歸、天皇卽遣使、嘖讓於上道臣等、而奪其所領山部、

〔日本書紀 二十五 孝德〕大化五年三月戊辰、蘇我臣日向、（日向字身刺）譖倉山田大臣於皇太子、（○中略）是月、遣使者收山田大臣資財、資財之中於好書上、題皇太子書、於重寶上、題皇太子物、使者還申所收之狀、皇太子始知大臣心猶貞淨、追生悔恥、哀歎難休、卽拜日向臣於筑紫太宰帥、世人相謂之曰、是隱流乎、

〔續日本紀 八 元正〕養老四年六月己酉、漆部司令史從八位上丈部路忌寸石勝、直丁秦犬麻呂、坐盜司漆、並斷流罪、於是石勝男祖父麻呂年十二、安頭麻呂年九、乙麻呂七、同言內父石勝、爲養己等、盜用司漆、緣其所犯、役遠方、祖父麻呂等、爲慰父情、冒死上陳、請配兄弟三人、沒爲官奴、贖父重罪、詔曰、人稟五常、仁義斯重、士有百行、孝敬爲先、今祖父麻呂等、役身爲奴、贖父犯罪、欲存骨肉、理在矜愍、宜依所請爲官奴、卽免父石勝罪、但犬麻呂依刑部斷發配處、　七月壬申、免祖父麻呂、安頭麻呂等從良焉、

〔本朝世紀〕康和五年八月十三日庚申、左大臣（○源俊房）內大臣（○源雅實）以下諸卿參入、被定申伊勢大神宮前禰宜荒木田宣綱、神祇權大副大中臣輔弘罪科事、（件事、宣綱放火離宮院、幷度々落書事、輔弘同意相知云々、○中略）次有配流事、宣綱

類也、物見在者、亦還之、謂未經分配、若已經分異者、不在還限也、其本罪不合緣坐、而別勅破家者、謂假有犯謀大逆者、准律較、即不合緣坐、而特科異大逆之類也、破家者、資財田宅、並皆沒入也、罪止及一房、謂爲其罪惡元非眞犯、故唯破沒罪主一家、而不及緣坐之人、其有共財異居者、唯沒別房之物、若同居共財者、亦得准諸子分法留還也、若受人寄借、及質物之屬、當時即有言請、券證分明者、皆不在錄限、其有競財、官司未決者、依法檢按、謂假有競財判決之日、應罪人得者、臨即沒入、若應入他人者、依法還之、

沒官物處分

〔令義解職員一〕贓贖司

正一人掌簿斂、謂簿、疏也、斂、收也、言疏收於逆人資財、而沒官也、配沒、謂領取沒官之物、更分配於諸司、假令兵器者、配兵庫、文書者、配圖書、財物者、配大藏、逆人父子者、配官奴司之類也、

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年九月癸亥、日向員外介從四位上大津連大浦解任、其隨身天文陰陽等書、沒爲官書、

〔日本紀略淳和〕天長九年五月庚申、沒官書一千六百九十三卷、賜三品秀良親王、

〔續日本後紀仁明三〕承和元年十月辛巳、以昔被沒官橘朝臣奈良麻呂家書四百八十餘卷、賜彈正尹三品秀良親王、以外戚之財也、

〔三代實錄清和十三〕貞觀八年九月廿五日丁卯、勅京畿七道、勘錄庶人伴善男等資財田宅、　十二月八日己卯、是日沒入庶人伴善男宅地資財、付內藏寮、佛像經論書籍付圖書寮、

沒官之人

〔令義解戸二〕凡官奴婢、年六十六以上、及癈疾、若被配沒令爲戸者、並爲官戸、謂下條云、家人奴婢姧主及主親、所生男女、各沒官、又依律謀反大逆者、父子並沒官、是也、至年七十六以上、並放爲良、〇下略

〔令義解戸二〕凡家人奴姧主及主五等以上親、所生男女各沒官、謂若被強姧者、所生男女、即從良人、其主及奴元不相知、姧後始知者、依律准犯時不知之法、自合從良、

〔令義解職員一〕贓贖司

正一人掌〇中略配沒、(中略)逆人父子者、配官奴司之類也、

受諸官屬士庶饋與、或和率斂、或監臨官司、和市有乘利、強市有乘利下、原脫強率斂之類、至和市有乘利註及疏文、今依金澤本補)或雇人而告他罪得實、但是不應取財而取與者、無罪皆是、若乞索之贓、並還主、強乞索、和乞索、得罪雖殊、贓合還主、稱並者、從取與不和以下、並徵還主、即簿斂之物、赦書到後、罪雖決訖、未入官司者、從赦原、謂謀反大逆人家資合沒官者、赦書到後、其罪人雖已決訖、未入官司者、雖從赦原、若簿斂之物、已入所在官司、守掌者、並不合放免、若罪未處決、物雖送官、未經分配者、猶爲未入、若反逆之罪、仍未處決、罪人雖已斷訖、其身尚存者、物雖送官、但未經分配者、並從赦原、即緣坐家口、雖已配沒、罪人得免者亦免、謂反逆人家口合緣坐沒官、罪人於後蒙恩得免、緣坐者雖已配沒、亦從赦免、其奴婢同於資財、不從緣坐免法、但是謀反大逆、罪極誅夷、罪人既不會赦、緣坐亦不合原、去取之宜、皆隨罪人爲法、其謀叛已上道、及將一家非死罪三人、支解人、緣坐雖及家口、其惡不同反逆、又律文特顯反逆緣坐、爲與八虐同科、不得請減及贖、自同五流、除名配流如法、自餘緣坐流、並得減贖、不除名、雖云合流得減贖者、明即與反逆緣坐不同、赦書若八虐不原、非反逆緣坐人、仍從恩免、以其身非八虐、又非反逆之家故、

〔律疏賊盜〕凡謀反、及大逆者皆斬、略○疏　父子若家人資財田宅、並沒官、其家人不同資財、故特言之、奴婢各同資財、故不別顯、年八十及篤疾者並免、祖孫兄弟皆配遠流、不限籍之同異、即雖謀反、詞理不能動衆、威力不足率人者、亦皆斬、謂結謀眞實、而不能爲害者、謂雖構亂常之詞、不足動衆人之意、雖騁凶威、若力不能驅率得人、若自雖有反謀、無能爲害者、亦皆斬、故注云、謂結謀眞實、而不能爲害者、述休徵、假託靈異、妄稱兵馬、虛說反由、傳惑衆人、無眞狀可驗者、自從妖法、父子並配遠流、資財不在沒限、假有反逆人應緣坐、其繼養子孫、依本法雖會赦合正之、即不在緣坐之限、若反逆事彰之後、始訴正之、須從本宗緣坐、刑法愼於開塞、一律不可附科、執憲履繩、務從折中、道法之單、已洎朝章、雖經大恩、法須正之、即凡人不得爲親、○下略

〔律疏賊盜〕凡緣坐非同居者、資財田宅不在沒限、雖同居、非緣坐、及緣坐人子、應免流者、各準分法留還、緣坐人子、謂兄弟之子、雖律亦不緣坐、各準分法留還、謂未經分異、犯罪之後、並準戶令、依分法、老疾得免者、各準一子分法、謂年八十及篤疾、各準戶內應分人多少、人別得準一子分法留還、假有一人年八十、有三男十孫、一孫反逆、或一男見在者、依令作三男分法、添老者一人、即爲四分、若三男俱死、唯有十孫者、依令諸子均分、老人共十孫、爲十一分、每留一分、與老者、是爲各準一子分法、

〔令義解獄〕凡犯罪資財入官者、若緣坐得免、謂依律、反逆之人、父子沒官、即年八十、及篤疾並免、是若有別勅、不及緣坐者亦同也、或依律不坐、謂兄弟之子、依律不坐也、各計分法還之、謂依律、准戶內應分人多少、人別得准一子分法留還、假有一人年八十、有三男十孫、一孫反逆、或一男見在者、依令作三男分法、添老者一人、即爲四分、若三男俱死、唯有十孫者、依令諸子均分、老人共十孫、爲十一分、每留一分、與老者、是也、即別勅降罪從輕、謂緣坐之人、降從輕法、假有勅云、謀反及大逆者斬、父子配遠流、祖孫兄弟配徒之

名稱
沒官法

沒官

謀反及ビ謀大逆ノ人ノ父子、若シクハ家人、資財、(奴婢ハ資財ノ中ニ攝ス)田宅、及ビ彼此俱罪ノ贓、及ビ犯禁ノ物、若シクハ人ノ盜ミタル所ノ物ヲ盜ミタル倍贓ハ沒官ス、彼此俱罪ノ贓トハ、枉法贓、不枉法贓、受所監臨贓、幷ニ坐贓ノコトニテ、取ル者モ、與フル者モ、俱ニ罪アルヲ云フ、犯禁ノ物トハ、鼓吹幡幟ノ類ニテ、朝廷ヨリ禁ゼラレタルヲ、私家ニテ貯ヘタルヲ云フ、倍贓トハ、取リタル物ニ倍シテ償フコトニテ、強盜、竊盜ハ、贓ヲ其主ニ倍償スベキ法ナルヲ、人ノ盜ミタル所ノ物ヲ盜ミタル倍贓ハ、還スベキ所ナキ故ニ、官ニ沒收スルナリ、又別勅ヲ以テ特ニ沒官スルコトモアリ、但シ反逆人ノ緣坐ニテモ同居ニアラザレバ沒收セズ、又年八十以上、及ビ篤疾ノ人ハ、反逆ノ緣坐タリトモ免レ、若シクハ反逆人ノ兄弟ノ子ハ、坐セザル法ナレバ、資財ハ、一タビ官ニ入ルトモ、分法ニ依リテ還スナリ、反逆人ノ緣坐ニシテ同居ニアラザル人、及ビ緣坐人ノ子ノ流刑ヲ免スベキ者ノ資財モ同ジ、又死刑ニ處セラレタル人ノ父子沒官スルトキハ、禁內ノ供奉等ニ配セズ、此沒官物ハ、贓贖司(後ニ刑部省ニ併ス)ニテ領取シテ、更ニ諸司ニ分配シ、兵器ハ兵庫ニ配シ、文書ハ圖書寮ニ配シ、財物ハ大藏省ニ配シ、逆人ノ父子ハ官奴司(後ニ主殿寮ニ併ス)ニ配スルナリ、猶ホ六贓篇ヲ參看スベシ、

〔伊呂波字類抄 毛疊字〕沒官

〔律疏 名例〕凡彼此俱罪之贓、(謂計贓爲罪者、受財枉法、不枉法、及受所監臨之財物、并坐贓、罪依法與財者亦各得罪、此名彼此俱罪之贓、計贓爲罪者)及犯禁之物則沒官、(謂鼓吹幡幟、及禁書璽印之類、私家不應有、是名犯禁之物、從彼此俱罪之贓以下、并沒官、者、若盜人所盜之物、倍贓亦沒官、假有乙盜甲物、丙轉盜之、彼此各有倍贓、依法並應還主、甲既取乙倍備、不合更得剰贓、乙即元是盜人、不可以贓助盜、故倍贓亦沒官、若有糺告之人應賞者、依令與賞、若私鑄錢事發、所獲作具、及錢銅、或違法殺馬牛等肉、如此之類、律令無文者、其肉及錢、私家合有、准如律令、不合沒官、作具及錢不得仍用、毀訖付主、罪依法科、)取與不和、(謂恐喝詐欺、強市乘利、強率斂之類、有剰和與者無罪、謂去官而

〔日本書紀雄略十四〕十年九月戊子、身狭村主青將呉所獻二鵝到於筑紫、是鵝爲水間君犬所嚙死、（別本云、是鵝爲筑紫嶺縣主泥麻呂犬所嚙死、）由是水間君、恐怖憂愁、不能自默、獻鴻十隻、與養鳥人、請以贖罪、天皇許焉、　十月辛酉、以水間君所獻養鳥人等、安置於輕村、磐余村二所、

〔日本書紀繼體十七〕二十二年十二月、筑紫君葛子、恐坐父誅、獻糟屋屯倉、求贖死罪、

〔日本書紀安閑十八〕元年七月辛巳朔、詔曰、皇后雖同體天子、而内外之名殊隔、亦可以充屯倉之地、式樹椒庭、後代遺迹、迺差勅使、簡擇良田、勅使奉勅、宜於大河内直味張（更名黑梭）曰、今汝宜奉進膏腴雌雉田、味張、忽然慳惜、欺誑勅使曰、此田者、天旱難漑、水潦易浸、費功極多、收穫甚少、勅使依言、服命無隱、　閏十二月壬午、大伴大連奉勅宣曰、（中略）今汝味張、率土幽微百姓、忽爾奉惜王地、輕背使乎宣旨、味張自今以後、勿預郡司、（中略）於是大河内直味張、恐畏永悔、伏地汗流、啓大連曰、愚蒙百姓、罪當萬死、伏願毎郡以钁丁、春時五百丁、秋時五百丁、奉獻天皇、子孫不絶、籍此祈生、永爲鑑戒、別以狹井田六町、賂大伴大連、蓋三島竹村屯倉者、以河内縣部曲、爲田部之元、於是乎起、

〔日本書紀安閑十八〕元年閏十二月、是月廬城部連枳莒喩女幡媛、偸取物部大連尾輿瓔珞、獻春日皇后、事至發覺、枳莒喩、以女幡媛、獻采女丁、（是春日部采女也、）幷獻安藝國過戸、廬城部屯倉、以贖女罪、物部大連尾輿、恐事由己、不得自安、乃獻十市部伊勢國來狹、狹登伊（來狹狹登伊二邑名也、）贄土師部、筑紫國膽狹山部也、

〔政事要略八十二〕太政官符刑部省

應徵贖銅訴人上野國吾妻郡擬□領外正六位上毛野坂本朝臣眞道事

副過狀壹紙

右眞道所進訴狀之内、不指陳實事、省宜承知依件徵贖、符到奉行、

從五位上守右中辨兼行中宮亮藤原朝臣家季　　從六位上行右少史宍人朝臣永機

貞觀四年四月十日

贖銅入私家

〔令義解十獄〕凡傷損於人、及誣告得罪、其人應合贖者、銅入被告及傷損之家、卽兩人相犯俱得罪、謂依律疑罪者、兩人各徵贖、故亦准此、其殺一家非死罪三人以上之緣坐、若應贖者、其銅亦入官也、及同居相犯者、謂同居共財者、不限親疎、銅入官、

〔三代實錄四十光孝〕仁和元年十一月十日庚寅、右近衞府近衞從七位下刈田首貴多雄、過失傷同府府生多春野、刑部省斷罪云、准律合徵贖銅、可入被傷家、

收贖例

〔播磨風土記飾磨郡〕安相里　右所以號安相里者、品太天皇〇應神從但馬巡行之時、緣道不撤御冠、故號陰山前、仍國造豐忍別命被蒙罪名、爾時但馬國造阿胡尼命申給、依此赦罪、卽奉鹽代田廿千代、有名鹽代田、

〔日本書紀十一仁德〕四十年三月、納雌鳥皇女欲爲妃、〇中略　爰皇后奏言、雌鳥皇女、寔當重罪、然其殺之日、不欲露皇女身、乃因勅雄鯽等、莫取皇女所賫之足玉手玉、雄鯽等追之至菟田、迫於素珥山、時隱草中、僅得免、急走而越山、〇中略　爰雄鯽等、知免以急追、及于伊勢蔣代野而殺之、時雄鯽等探皇女之玉、自裳中得之、乃以二王屍埋于廬杵河邊、而復命、皇后令問雄鯽等曰、見皇女之玉乎、對言不見也、是歲當新嘗之月、以宴會日、賜酒於內外命婦等、於是近江山君、稚守山妻與采女磐坂媛、二女之手有纏良珠、皇后見其珠、既似雌鳥皇女之珠、則疑之、命有司問其玉所得之由、對言、佐伯直阿俄能胡妻之玉也、仍推鞫阿俄能胡、對曰、誅皇女之日、探而取之、卽將殺阿俄能胡、於是阿俄能胡、乃獻己之私地、請免死、故納其地、赦死罪、是以號其地曰玉代、

〔日本書紀十二履中〕爰仲皇子、畏有事、將殺太子、〇中略　當是時、倭直吾子籠、素好仲皇子、預知其謀、密聚精兵數百於攪食栗林、爲仲皇子將拒太子、時太子不知兵塞、而出山行數里、兵衆多塞、不得進行、乃遣使者、問曰、誰人也、對曰、倭直吾子籠也、便還問使者曰、誰使焉、曰皇太子之使、時吾子籠、憚其軍衆多在、乃謂使者曰、傳聞皇太子、有非常之事、將助以備兵待之、然太子疑其心、欲殺、則吾子籠愕之、獻己妹日之媛、仍請赦死罪、乃免之、其倭直等、貢采女、蓋始于此時歟、

外記史生紀親任等參仕、各勤㆓所役㆒、是則中務大輔平清盛朝臣贖銅官符請印也、件清盛朝臣、依㆓去六月祇園鬪亂事㆒、被㆑勘㆓罪名㆒也、

贖錢

〔延喜式 刑部二十九〕凡贖罪無㆑銅、准㆑價徵㆑錢、

〔政事要略 八十二〕徵㆓贖銅㆒給㆓官符於刑部㆒徵㆑之、近代之例、官符裁㆓斷罪文㆒、若法家勘文等事、旨頗僭也、又贖銅代錢、刑部省贖銅所、去天慶三年用途勘文、兩別十文也、寬和沽價法銅一斤、直六十文者、隨㆑時沽可㆑徵㆑代、又長德二年看督長幷四人等、可㆑徵㆓贖銅㆒之輩、令㆑勘㆓申罪狀㆒、應㆑便徵納、隨㆓時之議㆒、亦隨㆓形勢㆒耳、

贖布 贖稻

〔大館高門所藏古文書〕今五刑贖法定　明法師飛鳥造水長、笞五、笞十、贖銅一斤、布充㆓二丈六尺㆒、稻充㆓十束㆒也、笞廿、贖銅二斤、布充㆓二段㆒、稻充㆓廿束㆒、笞卅、贖銅三斤、布充㆓三段㆒、稻充㆓卅束㆒、笞卌、贖銅四斤、布充㆓四段㆒、稻充㆓卌束㆒、笞五十、贖銅五斤、（○此下當㆑補㆓布充㆓五段㆒稻充㆓五十束㆒九字㆒、（中略））杖五、杖六十、贖銅六斤、布充㆓六段㆒、稻充㆓六十束㆒、杖七十、贖銅七斤、布充㆓七段㆒、稻充㆓七十束㆒、杖八十、贖銅八斤、布充㆓八段㆒、稻充㆓八十束㆒、杖九十、贖銅九斤、布充㆓九段㆒、稻充㆓九十束㆒、杖一百、贖銅十斤、布充㆓十段㆒、稻充㆓百束㆒、（○中略）徒五、徒半年、贖銅十斤、布充㆓十段㆒、稻充㆓百束㆒、徒一年、贖銅廿斤、布充㆓卌六段㆒、（○當㆑作㆓卌六段㆒）稻充㆓三百六十束㆒、徒一年半、贖銅卌斤、布充㆓五十四段㆒、稻充㆓五百卌束㆒、徒二（○二下恐脫㆓年字㆒）贖銅卌斤、布充㆓七十段㆒、（○當㆑作㆓七十二段㆒）稻充㆓七百廿束㆒、徒二年半、贖銅五十斤、布充㆓九十段㆒、稻充㆓九百束㆒、徒三年、贖銅六十斤、布充㆓百八段㆒、稻充㆓千八十束㆒、（○中略）五流、近流、罪限㆓一千里㆒、贖銅佰斤、布充㆓百八十段㆒、稻充㆓千八百束㆒、中流、罪限㆓二千里㆒、贖銅佰廿斤、布充㆓二百十六段㆒、稻充㆓二千百六十束㆒、遠流罪三千里限、贖銅百卌斤、布充㆓二百五十六段㆒、稻充㆓二千五百六十束㆒、（○中略）死二、絞、斬、贖銅二百斤、布充㆓二百五十六段㆒、稻充㆓二千五百六十束㆒、

○按ズルニ、此書前後闕逸シテ、其詳ナルコトハ知ルベカラズト雖モ、其載スル所ニ據リテ考フルニ、天平年間ノ物タルヲ知ルナリ、此書ニ據レバ、五刑ヲ贖フニ、稻布ヲ以テセシコトモアリシナリ、

贖銅

任、及解任卒死等類者、兩省實錄、報移刑部、刑部卽依兩省移、准例申官、但見在之人、猶有延怠者、重移兩省、

天長四年十一月十七日

〔續日本後紀（十六仁明）〕承和十三年十一月壬子、太政官下符所司、令徵前參議左大辨正躬王、前參議右大辨和氣朝臣眞綱等贖銅、其符偁、太政官符刑部省、應徵贖銅事、（○中略）仍准所犯、以所帶一官、當徒二年、其餘如半年徒贖銅如件、省宜承知依件徵納、

〔百練抄（五堀河）〕康和二年六月廿八日、甲斐守惟信、大膳亮仲範、可贖銅、左近府生秦武忠可禁獄之由、宣下、是去三月、伊勢大神宮神人於途中、過前大相國（○藤原師實）致無禮之間、武忠搦取神人、依神宮訴也、

〔中右記〕永久二年六月廿六日、行重賚清來、令問親賴從者近安申云、件強盜事、五月中旬下向攝津之次、親賴申云、本主肥前守所爲歟と申由所承也、　卅日、又差賚清遣爲義、召公政事度々、在伊豆國之由雖申上、遂不進、慥可申切之由仰遣之處、已上洛之由承候、存今七八日可相待者、仰云、然者可相待歟、親賴從者近安申詞、勘問記讀申之處、仰云、早與武忠三郎男可對決、內舍人重貞罪、令明兼勘申之處、解官外、贖銅十斤者、信貞勘文大略同此也、但於贖銅刑部省法也、使廳之習、贖銅之科、只令候散禁許也、然者重召出重貞、暫可令候也、仍云、只任法可行歟、

〔百練抄（七近衞）〕久安三年六月廿八日、天台大衆、日吉、祇園神人等、舁神輿下洛、訴申中務大輔清盛朝臣於祇園社鬪亂事、　七月廿四日、於院諸卿議法家勘申清盛朝臣罪名、罪當贖銅、

〔台記〕久安三年七月廿三日乙酉、頭資信朝臣、下明法勘申清盛朝臣罪狀文、（副本解及官使廳問注記等）仰云、於一院（○鳥羽）今日可被議定、可參者、令奏有故障不能參上之由、　廿四日丙戌、酉刻參院、攝政（○藤原忠通）以下議清盛朝臣及下手人罪名、所申繁多不能記之、子刻法皇（○白河）勅云、清盛朝臣可贖銅者、

〔本朝世紀〕久安三年八月五日丙申、權中納言藤原季成卿着官廳聽政、少納言成隆、少外記三善成重、

合杖一百、所乘二日者、於法无所增減、如此之類、是名不移前斷也、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應移式部省抑未輸贖銅諸國朝集使返抄移大藏省折留位祿季祿事

右得刑部省解偁、謹案獄令云、凡贖死刑限八十日、流六十日、徒五十日、杖卅日、笞卅日、若无故過限不輸者、會赦不免、雖有披訴據理不移前斷者、亦不在免限者、今犯罪之輩相續不絕、贓贖未納、逐年彌多、迫徵之吏、徒疲催勘、負贖之人、无心進納、既狎前斷、不畏後科、望請在京官人、抑留位祿季祿、雜色人等令檢非違使催徵、在外諸人、抑留朝集使返抄令濟其事、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大將陸奧出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、依請、宜令刑部省移式部大藏等省、其祿物者令大藏省准贖銅數、便即折留、充刑部省、具〇具恐其字誤應抑留返抄諸國及犯罪官人、幷贖銅數、依件移送、又下宣旨檢非違使畢、又宜同移之、

弘仁十一年十一月廿五日〇又見政事要略

〔類聚三代格十二〕太政官符

應移式兵兩省令折留贖銅未輸之人位祿季祿事

右得大藏省解偁、撿案內太政官去弘仁十一年十一月廿五日符偁、得刑部省解偁、謹案獄令云、凡贖死刑限八十日、流六十日、徒五十日、杖卅日、笞卅日、若无故過限不輸者會赦不免、雖有披訴據理不移前斷者、亦不在免限者、今犯罪之輩相續不絕、贓贖未納、逐年彌多、望請折留祿物令塡贓贖、謹請官裁者、宜令刑部省移大藏省、其祿物者准贖銅數、便即折留令充刑部省者、〇者下恐脫省字順符旨行來多妨、何者、被省所移犯罪之人、或遷任解官、或任中卒死、如是等類、不預賜祿、即是式兵兩省所掌、匪此省之所知、折留之色、臨事難辨、隨移强留、諠譁寔繁、謹請官裁者、正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良峯朝臣安世宣、宜停移大藏省、令移式兵兩省、仍須兩省仰犯人之本司、折留其祿、令送刑部、其遷降外

納贖期限

暇、今預徵贖物、誰用濟使事、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衞大將民部卿淸原眞人夏野宣、宜停隷撿非違使、同亦實錄申官、隨郎下知本貫令徵納、

天長九年七月九日

〔政事要略八十二〕太政官符撿非違使

應納刑部省徵送贖銅代物事

右得彼省去閏五月十日解偁、謹撿案內、徵納贖元是司之最也、大同三年以贓贖司依倂此省、偏掌此事、其後依弘仁十一年十月廿五日格、使撿非違使徵送勘納者、家隨家官符宣旨、充行色々雜用、依天長九年七月九日格、停隷撿非違使、被付省家、又貞觀式偁、凡贖銅錢者、收囚獄司、省相共出納者、然則省徵司納、充公用之色也、而今囚獄司官舍顚倒、无實年久、比者、亦復始自廳、造于門屋、頻年顚倒、四面露形、殆无宿直之居、漸爲狐兎之棲、因之年來所徵贖物、計便宿納、數盜失、公用之時、轉治官人已下要劇田直、常以補塡、如此之漸、作料虛耗、事之爲煩、莫過於斯、伏撿式條、獄囚應給衣粮薦席醫藥、及修理獄舍之類、用贓贖物、又延長四年五月廿七日宣旨偁、以贖銅代物、充給左右獄囚、冬時衣服、臨時食料、幷修理獄舍等粮、是罪人被下囚獄司之時事也、宣旨所稱左右獄囚衣服料等、今撿非違使之所職也、今件贖銅料、既无處於撿納、議獄決罪、非省之職掌、商量事情、專不穩便、名實相違、不可不申、望請官裁贖銅申進、永依舊、省將對(○對下恐脫勘字)濟納物實、放返抄、便令撿非違使行者、左大臣宣、依請者、使宜承知依宜行之、符到奉行、右少辨藤原朝臣、右少史山直、

天曆四年十月十三日

〔令義解獄十〕凡贖死刑、限八十日、(謂入公入私、並同此法、其一人更犯數罪者、亦各立限、假如二犯流罪者、總限百廿日之類也、)流六十日、徒五十日、杖卌日、笞卅日、若無故過限不輸者、會赦不免、(謂雖會非常恩、而非勅損放者、亦不在免限也、)雖有披訴、據理不移前斷者、亦不在免限、(謂假有官人、無故不上、已經卅日、准律合杖一百、官司斷訖、徵銅十斤、罪人申訴、無故不上、非是卅日、即據陳之間、過限、會赦、官司重復實覈、无故不上、誠是廿八日、仍欺辨訖、還更准律、不上廿八日、猶亦

〔尚書周書下〕呂刑

五刑之疑有赦、五罰之疑有赦、其審克之、簡孚有衆、惟貌有稽、無簡不聽、具嚴天威、墨辟疑赦、其罰百鍰、閲實其罪、劓辟疑赦、其罰惟倍、閲實其罪、剕辟疑赦、其罰倍差、閲實其罪、宮辟疑赦、其罰六百鍰、閲實其罪、大辟疑赦、其罰千鍰、閲實其罪、

〔法曹至要抄上罪科〕一過失疑罪事

鬪訟律云、過失殺傷人者、各依其狀、以贖論、斷獄律云、疑罪各依所犯、以贖論、註云、疑謂虛實之證等是非之理均、

〔令義解一職員〕贓贖司

正一人、掌〇中略 贓贖、謂非理取財曰贓、倍贓亦同也、出金當罪曰贖、入公入私並同也、其諸國贖物即入當司、以充修理獄舎等也、

〔類聚國史百七職官〕大同三年正月壬寅、詔曰云々、贓贖司併刑部省、

〔延喜式二十九刑部〕凡贖銅錢者、收囚獄司、省相共出納、

〔職原抄上〕刑部省

周禮秋官大司寇之職也、斷獄刑法及諸訴訟、當省所掌也、本朝先例如此、然而被置撿非違使之後、刑部職掌、有名無實、但行贖銅等罪之時、猶移于當省者也、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應納雜色人贖銅事

右太政官去弘仁十一年十月〇十月、本書所載爲十一月、廿五日、下刑部省符偁、大納言正三位兼行左近衞大將陸奧出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、雜色人贖物、可令撿非違使催徵之宣旨、下彼使畢、宜移之者、今得使解偁、使所行之事、非唯巡撿京中、拷決犯盜、臨時勘事、觸類繁多、又去弘仁十一年十二月十一日宣旨偁、撿非違使所掌之事、與彈正同、臨時宣旨亦糺彈之者、加以看督長左右各二人、差科非一、无有暫

名稱

〔新撰字鏡　貝〕贖　古侯反、去、贖也、阿加不、

〔類聚名義抄　三貝〕贖　俗、俗、アカフ、贖　神燭反、アカフ、ツクノフ、

〔運歩色葉集　寒〕罰錢　セン

〔令義解　一職員〕贓贖司

正一人　掌〇中略贖、(中略)出金當罪曰贖

贖罪法

〔律疏　名例〕笞罪五　笞十、贖銅一斤、笞廿、贖銅二斤、笞卅、贖銅三斤、笞卌、贖銅四斤、笞五十、贖銅五斤、

杖罪五　杖六十、贖銅六斤、杖七十、贖銅七斤、杖八十、贖銅八斤、杖九十、贖銅九斤、杖一百、贖銅十斤、

徒罪五　徒一年、贖銅廿斤、徒一年半、贖銅卅斤、徒二年、贖銅卌斤、徒二年半、贖銅五十斤、徒三年、贖銅六十斤、

流罪三　近流、贖銅一百斤、中流、贖銅一百廿斤、遠流、贖銅一百卌斤、

死罪二　絞斬二死、贖銅各二百斤、

〔唐律疏議　一名例〕笞刑五

一十　贖銅一斤　二十　贖銅二斤　三十　贖銅三斤　四十　贖銅四斤　五十　贖銅五斤○疏議略

杖刑五

六十　贖銅六斤　七十　贖銅七斤　八十　贖銅八斤　九十　贖銅九斤　一百　贖銅十斤○疏議略

徒刑五

一年　贖銅二十斤　一年半　贖銅三十斤　二年　贖銅四十斤　二年半　贖銅五十斤　三年　贖銅六十斤○疏議略

流刑三

二千里　贖銅八十斤　二千五百里　贖銅九十斤　三千里　贖銅一百斤○疏議略

死刑二

絞斬　贖銅一百二十斤

古事類苑

法律部六

上編

贖罪

贖罪トハ、銅ヲ收メテ罪ヲ贖ハシムルコトニテ、笞十ハ銅一斤ヲ以テ贖ヒ、笞二十ハ銅二斤ヲ以テ贖フ等ノ法アリテ、銅ナキトキハ其時ノ價ニ準ジテ錢ヲ徵ス、朱雀天皇ノ天慶三年ニハ、銅一兩ゴトニ錢十文ニシテ、一斤百六十文ナリ、花山天皇ノ寛和年間ニハ、一斤六十文ナリ、今天慶三年ノ估價ニ依リテ、銅ヲ計フレバ、笞五十、贖銅五斤ハ直八百文、杖一百、贖銅十斤ハ直一貫六百文、徒三年、贖銅六十斤ハ直九貫六百文、遠流、贖銅一百四十斤ハ直二十二貫四百文、絞斬、贖銅二百斤ハ直三十二貫文ナリ、凡テ納贖ニハ各〻日限アリテ、其限ヲ過ギテ銅ヲ輸サヾルトキハ、其間ニ非常ノ恩赦アリトモ、別勅ノ外ハ免サズ、其銅ハ官ニ入レテ、獄舍ヲ修理スル等ノ用ニ供ス、兩人相犯シテ俱ニ罪ヲ得タルト、同居シテ相犯セル者トノ贖セル銅ナドモ、官ニ入ルヽナリ、サレドモ人ヲ傷損シ、及ビ誣告シテ罪ヲ得テ贖スベキトキハ、其銅ハ告ゲラレシ人、損セラレシ人ノ家ニ入ル、贖ハ人ニ因リ、罪ニ因レルコトニテ、犯人ノ盡ク聽サルヽコトニハアラズ、卽チ議、請、減、贖ノ人、及ビ年七十九以下七十以上、十六以下十一以上、及ビ廢疾者ノ流罪以下ヲ犯セル、又ハ八十以上、十歲以下、及ビ篤疾者ノ盜ヲ犯シ、人ニ傷ケタル、或ハ過失ニテ殺傷シタル、或ハ罪ノ疑ハシクシテ決シ難キハ、並ニ收贖ヲ聽ス、猶ホ法律總載篇ノ老幼廢疾犯罪條六議篇ノ議法、請法、減法、贖法條等ヲ參看スベシ、

解免官職

責罪過 怠狀附

古事類苑

法律部六

上編

贖罪

沒官

貞觀八年正月廿三日

〔類聚三代格十二〕太政官符

應減定諸衞府舍人等及放縱之輩、求酒食責被物事（三箇條初條）

右撿非違使起請偁、謹案貞觀八年正月廿三日格、諸家諸人神宴之日、不依主招、求酒食責被物者、不論蔭贖、坐從髡鉗、欲絕彼放逸、殊設此嚴科、使等理須依格旨加科責、然而原其罪過、實乖盜科、髡鉗之事、理非穩便、憚之不罪、則還似無格、忍之將行、則事涉慘虐、疑殆不斷、積習更倍、望請衞府舍人等、准六位已下把笏者、從解却、自外一依去天平寶字二年二月廿日勅書、決杖八十者、

以前右大臣宣、奉勅依請、

貞觀十六年九月十四日

〔漢書一高帝〕九年十二月、郎中田叔孟舒等十人、自髡鉗爲王家奴、

〔漢書二十三刑法志〕孝文卽位、○中略丞相張蒼、御史大夫馮敬奏言、肉刑所以禁姦、所由來者久矣、○中略臣謹議請定律曰、諸當完者、完爲城旦舂、（臣瓚曰、文帝除肉刑、皆有以易之、故以完易髡、以笞代劓、以鈦左右止代刖、今卽曰完矣、不復云以完代完也、此當言髡者完也、）當黥者髡鉗爲城旦舂、當劓者笞三百、當斬左止者笞五百、當斬右止、及殺人先自告、及吏坐受賕枉法、守縣官財物而卽盜之、已論命復有笞罪者皆棄市、○中略罪人獄已決、完爲城旦舂、

黥

髡鉗

理被㆑下㆓知㆒、仍左尉紀久光、左志中原清重、清原季光、安倍資成、向㆓左獄㆒、右志中原明基右府生大江經廣右安倍久忠、紀兼康向㆓右獄㆒、

〔源平盛衰記四十六〕南都御幸大佛開眼附時忠流罪忠快免事
彼時忠ト申ハ、出羽前司知信ガ孫、兵部權大輔時信息男也、〇中略撿非違使別當ニモ三箇度マデ成ケリ、無㆓先例㆒事也、今暫モ平家ノ世ニアラバ、大臣ハ疑ヒナカラマシ、此人心猛、理ツヨニ御坐ケレバ、廳務ノ時モ、樣々ノ事張行テ、强盜二十八人ガ右ノ手ヲ切リ給ヒケリ、昔惡別當恒成ト云ケル人コソ、强盜ノ頸ヲバ切タリトモ傳タレ、

〔類聚名義抄四大〕天 泰堅反、ヒタヒキラル、死古

〔類聚名義抄七口〕固護 ヒメヒキザマル

〇按ズルニ、易ノ睽卦ノ其人天且劓ノ正義ニ、剠㆑額爲㆑天トアリ、剠ハ黥ト同字ニテ、鄭玄ノ周禮ノ註ニ、先刻㆓其面㆒、以㆓墨窒㆒之トアリ、

〔日本書紀十二履中〕元年四月丁酉、召㆓阿曇連濱子㆒詔之曰、汝與㆓仲皇子㆒共謀㆑逆、將㆑傾㆓國家㆒、罪當㆓于死㆒、然垂㆓大恩㆒、而免㆑死科㆑墨、卽日黥之、因㆑此時人曰㆓阿曇目㆒、

〔日本書紀十四雄略〕十一年十月、鳥官之禽、爲㆓菟田人狗㆒所㆑嚙死、天皇瞋、黥㆑面而爲㆓鳥養部㆒、於㆑是信濃國直丁與㆓武藏國直丁㆒侍宿、相語曰、嗟乎我國積鳥之高、同㆓於小墓㆒、旦暮而食、尙有㆓其餘㆒、今天皇由㆓一鳥之故㆒、而黥㆓人面㆒、太無㆓道理㆒、惡行之主也、天皇聞而使㆑聚㆓積之㆒、直丁等不㆑能㆓忽備㆒、仍詔爲㆓鳥養部㆒、

〇

〔類聚三代格十二〕太政官符
一禁㆓制諸家幷諸人祓除神宴之日、諸衞府舍人及放縱之輩、求㆓酒食㆒責㆓被物㆒事、〇中略
若有㆓犯者㆒、不㆑論㆓蔭贖㆒、坐從㆓髡鉗㆒、〇中略

肉刑　髠鉗　併入

古代ニ於ケル肉刑ニハ、膝筋ヲ斷チ、手足ヲ斷チ、若シクハ面ニ黥スル等ノ事アリ、而シテ髠鉗モ亦此ニ附載セリ、

名例

〔塵添壒嚢抄十一〕五刑事

五刑トテ、人ヲ罪スル刑ノ義歟、如何、(中略)○墨、劓、剕、宮、大辟也、大辟ノ外ヲバ肉刑ト云フ、

〔史記孝文本紀十〕十三年五月、齊太倉令淳于公、有罪當刑、(中略)○乃下詔曰、(中略)○今法有肉刑三、而姦不止、(中略○孟康曰、黥劓二、左右趾合一、凡三、)(中略)○其咎安在、(中略)○其除肉刑、

斷膝筋

〔古事記下顯宗〕初天皇逢難逃時、求奪其御粮猪甘老人、是得求喚上、而斬於飛鳥河之河原、皆斷其族之膝筋、以是至今其子孫上於倭之日、必自跛也、故能見志米岐其老所在、(志米岐三字以音)故其地謂志米須也、

斷足

〔類聚名義抄肉二〕刖(音月、キル、タツ、アシキル、)刖(正)

〔百練抄七六條〕仁安二年六月十七日、去十日殺繼父殺母之女切足、

斷手

〔玉海〕治承三年五月十九日丙子、今日廷尉等群集大理門邊、切強盜之輩右手云々、(十二人)

〔百練抄八高倉〕治承三年五月十九日、別當時忠卿、切強盜十二人右手懸獄門、希代事也、經成卿廳務之時、有此例云々、　四年正月廿七日、左右獄囚人十五人、於山科斬首、又廿一人切手、

〔山槐記〕治承三年五月十九日丙子、今日於大理(時忠)門前、(東洞院東□□□□□□□)被切強盜十二人、(右手多□□宗獄四等也、)(二人於近□□人等相副行向云々、後日季光來曰、検非違使大夫尉兼綱、左尉盛澄不參、競東看督長左右各十人、向獄出犯人、持來別當門、大理不到、)廳任被仰出、官人云、下部置木、(堅木也)其長五尺許、口徑五六寸、次持來犯人、下部乘居犯人上、(一人乘頸、一人乘肱歟、)又下部等結手頸充木、又下部一人打刀充右手頸、以槌打切之、一度切之者、強不痛不□之間、兩度切之、時有苦痛無術之氣、此內二人無犯就歸、其外懸人或黜過路之雜役車、令乘歸入獄、切了後、官人相共可罷向獄門之由大

〔唐律御調〕享保十年巳十二月、荻生總七江訂正寫點被仰付候節差出候書付、

右之部曲奴婢之罪、他へ預り不申候罪は、死罪にても主人之心次第、死罪を免候事有之候、是又日本之風俗に合申候、明朝にては此儀無御座候、且又自家之客女婢を姦候は、姦罪に不罷成事相見へ候、客女と申候者、部曲之娘にて御座候、是又我國之風俗に合申候、明律には此儀相見へ不申候、且亦五品以上之人は、惡逆以上之罪にて無之候得者、死罪の人を斬罪にも絞罪にも不申付、自分の宅にて自滅爲致候事有之候、是又此方にて切腹申付候儀、此遺風にて御座候、明朝には此儀無御座候、

不致裁報之間、奉振神輿、卽以歸山、違勅之上、彌添驚天聽之科、滅法之餘、更招忘神鑒之咎、就中恭敬當社、歸依當寺、超過餘社、卓礫餘寺、雖背佛勅、令蔑如王事、若仰聞子細、爭不停自由、遠流之罪不再歸、禁固之法滿徒年者、雖非死罪更無勝劣歟、仍以遠流比死罪、以禁固代斬刑、但遠流之條、裁報尙不足者、雖禁固隨申請可被行歟、抑定綱有逐電之間、罪科彌以重疊、仍仰京畿諸國、愍可令搦進其身之由、宜下已畢、其間暫休鬱訴、可待裁斷之由、皆悉引率門徒僧綱等、不廻時剋早企登山、可奉迎神輿之由、殊可令仰含給、兼又梟惡之輩、狼戾不止者、各加同心制止之詞、宜廻衆議和平之計者、院宣如此、仍上啓如件、

四月廿八日　　　　　　　　　　　　大藏卿　宗頼奉

謹上　天台座主御房

〔西宮記臨時十〕成勘文事附四名帳　役畢勸文

口傳云

一可入死罪之囚者、減贓布數、縱雖及百千反、不足十五反、猶處流刑、是廳（撿非違使廳）例也、舊役畢勘文致此用意、是恤十五年役之故也、況亦格文云、不悔前過亦有犯、終身配役、不可赦免者二盜者不注其由也、但律條所指盜神璽者絞、若贓數顯露聞達天聽等之類、縱雖入死罪、偏稱廳例、難進止歟、但見舊勘文等、無十五年役者、隨狀可斟酌也、又舊刑官斷罪、或注贓色目、或止注贓布若干、是設合宜、仍用件例云々、

〔藤原保則傳〕旱田畝盡荒、百姓飢饉殣相望、群盜公行、邑里空虛、英賀哲多兩郡在山谷間、去府稍遠、郡中百姓、或劫掠相殺、或逋租逃散、境內丘墟無有單丁、前守○備中朝野貞吉、以苛酷而治之、郡司有小罪者、皆著鉗鈇、人民犯纖毫者、捕案殺之、○○○○○○○囚徒滿獄、仆骸塞路、公到任之初、施以仁政、宥其小過、存其大體、放散徒隸、遍加賑貸、

ヲ云フニアラズシテ、一般ニ行ハザリシヲ云フナラン、弘仁ニ刑セラレシ藤原仲成ノ四位ノ階ニ居リテ、公卿ニアラヌニテモ知ルベシ、其間、平將門、藤原齊明、平忠常、安倍貞任、平師妙、源義親ノ梟首ヲ被ルガ如キアリト雖モ、死後ノ事ニ係レルヲ以テ、保元ノ議ニハ之ヲ算ヘズ、又陸奥守師綱ガ季春ヲ斬セシモ、朝議ヲ經タルニアラズ、國司ノ權宜ニ出ヅルヲ以テ、亦算ヘザルナルベシ、大日本史ノ說、恐クハ誤ナラン、其間罪ヲ犯シ死ニ就ク者ナキニハアラザレドモ、或ハ拷訊ニ由リ、或ハ傳說ノ誤ニ出ヅルニハアラザルカ、但シ傳說ノ誤カト疑フモノハ、其書ハ皆當時ノ物ニアラザレバナリ、

〔玉海〕建久二年四月廿六日癸卯、法印送書告云、山門衆徒只今下洛之由所聞及也者、乍驚遣人令見、已有其實、集會京極寺云々、倒衣參(中略)○座主云、禁獄之咎更不可叶、兼能々議定畢、是已其內已只猶雖無始終、可被仰可召給其身之由也者、余折申、仰下云、再三不經奏聞、無音參洛、剩亂入陣中、驚聖聽、刃傷官軍、不奉詔旨、條々之科、衆徒爭遁申哉、加之今所申之旨太無所據、死罪之條、我朝不行之法也、唯申重衡等之例、已以勿論、召賜其身之條、又無比類、我朝之法莫過遠流之刑、更不可論罪之輕重、何況其身已逃脫、付主人前右大將召取其身之上沙汰也、暫奉具神輿歸本山、可期定綱出來之時歟、裁斷之有無更不可依狼戾者、座主以三綱仰衆徒、

〔吾妻鏡十一〕建久二年五月八日乙卯

院宣云

被院宣偁、近江國住人源定綱、殺害日吉社宮主等之犯、罪科不輕、仍先勘罪名、雖可被行所當之罪科、勘錄可及遲怠之上、且爲增神明之威光、且依優衆徒之訴訟、於定綱者處遠流、至下手輩者、可禁獄所之由欲被宣下之間、尙任奏狀、不申給其身者、不可散鬱結之由、奉振神輿濫訴帝闕、縱不行斬刑、於給其身之條者同死罪、仍都以不可裁許、凡於件刑法者、嵯峨天皇以來、停止之後、多經年代、仍

ケルコソウタテケレ、(○又見十訓抄)

〔唐六典　刑部六〕凡決大辟罪、皆於市、

古者決大辟罪、皆於市、自今上(○玄宗)臨御以來無其刑、但存其文耳、

〔源平盛衰記　五〕小松殿教訓事

我朝ニハ嵯峨帝ノ御宇、左衛門尉仲成ヲ被誅シ後、死罪ヲ被止シヨリ以來廿五代ニ及シヲ、少納言入道信西ガ執權ノ時ニ相當テ、絕テ久キ例ヲ背キ、保元ノ亂ノ時、多クノ源氏平氏ノ頸ヲ切、宇治ノ左府(○藤原賴長)ノ墓ヲ堀、死骸ヲ實撿セシ其酬ニヤ、中二年コソ有シカ、平治ニ事出來テ、田原ノ奧ニ被埋タリシ信西ガ被堀起頸ヲ渡シ獄門ノ木ニ被懸キ、是ハサセル朝敵ニアラヌ共、併保元ノ罪ノ報ト覺テ、恐シクコソ侍シカ、

〔愚管抄　五〕此內亂(○保元亂)たちまちにおこりて、御方ことなく勝て、とがあるべき者ども、皆ほど〳〵に行はれにけり、死罪はとゞまりて久しく成たれど、かうほどの事なればにや、行れけるを、かたぶく人も有けるにや、

〔日本後紀　嵯峨二十〕弘仁元年九月丁未、禁右兵衛督從四位上藤原朝臣仲成於右兵衛府、　戊申、是夜令左近衛將監紀朝臣清成、右近衛將曹住吉朝臣豐繼等射殺仲成於禁所、

〔大日本史　列傳百四十八〕源爲義、平忠正等十八人亦請降、通憲覺以死論、右大臣藤原雅定、大納言藤原伊通等議曰、嵯峨帝以後、未嘗加死刑於朝臣、奈何今違論殺之、減死一等可也、通憲堅執不聽、因奏曰、臣聞非常事、人主專斷之、今放反徒於郡國、恐遺後患、不如悉斬、帝從之、(保元物語)

〔大日本史　刑法一〕自弘仁誅仲成、三百四十餘年、公卿無一人抵大辟者、至是行之於諒闇、世以爲淫刑、(保元物語)

○按ズルニ、保元物語等ノ諸書ニ、嵯峨天皇ノ朝ニ死刑ヲ廢ストアルハ、刑ヲ公卿ニ上セザル

文未犯罪前入道之人犯死罪者、先令還俗可科其罪、況謀反罪發覺之後斷其罪間、入道之人、至于還俗可无疑似、但科罪之事可有處分、

安和二年四月四日、依左大丞消息勘送、外帥被入道之間事也、明法博士惟宗朝臣公方、

婦人處刑

〔令義解獄〕凡婦人犯死罪、産子無家口者、（謂雖部曲家人奴婢、亦同家口例也、）付近親收養、無近親付四隣、有欲養爲子者、雖異姓皆聽之、（謂近親四隣之外、欲養爲子者、既非兄弟之子、依法不須資蔭、其本色不同者、皆不聽養、）

〔唐律疏議断獄三十〕諸婦人犯死罪懷孕、當決者聽産後一百日乃行刑、若未産而決者徒二年、産訖限未滿而決者徒一年、失者各減二等、其過限不決者、依奏報不決法、

疏議曰、婦人犯死罪懷孕、當應行決者聽産後一百日乃行刑、若未産而決者徒二年、産訖未滿百日而決者徒一年、失者各減二等、未産而決徒一年、産訖限未滿而決者杖九十、即過限不決者、依奏報不決法、謂依下條即過限不決者違一日杖一百、二日加一等、

停死刑

〔保元物語二〕爲義最後事

中院左大臣雅定入道、大宮大納言伊通卿、東宮大夫宗能卿、左大辨宰相顯時卿ナド被申ケルハ、昔嵯峨天皇御時、左兵衞督仲成ヲ被誅ショリ以來、久ク死罪ヲ被留、依テ一條院御宇長德ニ、内大臣伊周公、并權中納言高（○高作隆）家卿ノ花山院ヲ射奉シカバ、罪既斬刑ニ當ル由、法家ノ輩勘ヘ申シカ共、死罪一等ヲ減ジテ遠流ノ罪ニ宥ラル、今改テ死刑ヲ可被行ニ非ズ、就中故院（○鳥羽）御中陰也、旁被宥ハ可宜由各被申ケレ共、少納言入道信西、内々申ケルハ、此儀不可然、多クノ凶徒ヲ諸國へ被分遣ハ、定テ猶可爲兵亂基、其上非常ノ斷ハ人主專ニセヨト云有文、世中ニ常ニ不有事ハ人主ノ命ニ從フト見エタリ、若重テ僻事出來リナバ、後悔何ノ益アラント申ケレバ、皆切ラレニケリ、誠ニ國ニ死罪ヲ行ヘバ、海內ニ謀叛者不絕トコソ申ニ、多クノ人ヲ誅セラレケルコソ淺猿ケレ、正ク弘仁元年ニ仲成ヲ誅セラレテヨリ、帝王二十六代、年記三百四十七年、絕タル死刑ヲ申行ヒ

知康云々、今日前三位中將重衡、於南都殞頸云々、是爲伽藍（○東大寺）火災張本之間、衆徒族申請之云々、

〔吉記〕元暦二年（○文治元年）六月廿二日癸酉、入夜今日前內大臣宗盛首可被渡之由風聞、依爲希代事、爲敝車遣出於六條高倉云々、黃昏於六條河原廷尉等請取之、（無左右作納桶武士渡廷尉了、棹之由執論、逢付棹渡之、但無之、）魁首宗盛卿首、（大臣首被渡之、惠美大臣例歟、誠希代珍事也、大臣藤原卿奉內々叡旨、仰合三丞相云々、）看督鞾（冠退紅）圍繞、次前右衞門督淸宗首、次廷尉七人、府生久忠經弘志明基尉公朝、信盛章貞、大夫尉知康、（已上口袴、帶弓箭、）其路西行六條至東洞院北行、至于中御門西行、至于西洞院北行、至于獄門云々、

〔百練抄〕（十後鳥羽）文治元年六月廿一日壬申、今日國忌廢務也、前內大臣（○平宗盛）幷右衞門督淸宗、於近江國勢多邊斬首云々、三位中將重衡、於南都又斬首、（法華寺鳥居前合戰之時、於此所加下知也云々、）　廿三日甲戌、前內大臣、幷右衞門督淸宗等首、檢非違使請取之懸獄門樹、法皇於三條東洞院御見物、可梟彼首哉否事、被尋三丞相云々、

火刑

〔日本書紀〕（十四雄略）二年七月、百濟池津媛、違天皇將幸婬於石河楯、（舊本云、石河股合首祖楯、）天皇大怒、詔大伴室屋大連使來目部張夫婦四支於木、置假庪上、以火燒死、（百濟新撰云、己巳年、蓋鹵王立、天皇遣阿禮奴跪、來索女郞、百濟莊飾慕尼夫人女、曰適稽女郞、貢進於天皇、）

〔日本書紀〕（十九欽明）二十三年夏六月、是月、或有譖馬飼首歌依曰、歌依之妻、逢臣讃岐、鞍韉有異、旣而熟視、皇后御鞍也、卽收廷尉、鞫問極切、馬飼首歌依、乃揚言誓曰、虛也、非實、若是實者、必被天災、遂因苦問、伏地而死、死未經時、急災於殿、廷尉收縛其子守石與中瀨氷、（守石、名瀨氷皆名也、）將投火中、（投火爲刑、蓋古之制也、）呪曰、非吾手投、呪訖欲投火、守石之母、祈請曰、投兒火裏、天災果臻、請付祝人、使作神奴、乃依母請、許沒神奴、

僧尼處刑

〔政事要略〕（八十一）謀反罪發覺斷其罪之間犯人忽入道訖可科本罪否

右檢僧尼令曰、僧尼有犯、准格律合徒年以上者還俗、許以告牒當徒一年、義解云、徒以上者、死罪以下也、告牒者、僧尼得度公驗也、依律雖犯死罪者除名、卽知僧尼犯死罪者、亦先還俗、然後處死者、據檢此

其國可有用意、於南北西之三方者不可、然可被遣東海東山等之遠國也、沙汰之趣無難、而叶頼朝之雅意歟、遣御使徒經數日之條、太以見苦歟、又事似有私之故也、泰經太以甘心、　五月三日乙酉、午剋頭弁光雅朝臣、爲院（○後白河）御使來、余着直衣謁之、問二箇條事、（○中略）一前内大臣未被下除名宣旨、被勘罪名之時被除名了、載配流官符之時、左遷之條如何、大臣之配流、被補太宰權帥定例也、而今度可被遣關東、何東西參差、不能右遷、准納言以下例、左遷權守、又無其謂歟、左右之間可計奏者、申云、於權帥者、一切不可然、權守之條又無謂、可爲新儀者、只無左遷之儀如何、不可似彼高明伊周等之例故也者、　七日己丑、今晩左馬頭能保大夫尉義經等下向東國、前内大臣父子、幷郎從十餘人相具云々、是非配流之儀云々、

〔玉海〕元暦二年（○文治元年）六月廿二日癸酉、大藏卿泰經傳院（○後白河）宣云、前内府（○平宗盛）幷其息清宗、三位中將重衡等、義經相具所參洛也、而乍生不入洛、無晉於近江邊可梟首、其首可渡使廳哉、將可棄置哉、可隨院宣之由、頼朝卿令申旨義經所申也、可計申者、（但重衡遣南都了云々）余申云、此事左右、只可在勅定者、　廿三日甲戌、泰經卿又示送云、此事難計申由令申、太以無本意、自今以後、如此事不可被仰合歟云々、此事勿論也、不足言也、光長朝臣、只今於院定長語天氣之趣、即如此云々、不能左右、古來備勅問之人、若有不思得事之時、伏請聖斷、已爲流例、然而未聞蒙勘責之例、凡於事爲法皇不許之身、雖一日經廻誡可恐之、就中爭於此事者、初爲生虜、參洛之時、所存計申了、事宜之由有天氣、又人々饗應、而其事不遂行、其後沙汰之趣、一切不聞及、今又有此問、誰人申是非哉、可謂嗚呼云々、　傳聞、重衡首、於泉木津邊切之、令懸奈良坂云々、於前内府父子首、及晩渡使廳了、院有御見物云々、是左大臣申行云々、

〔吾妻鏡四〕元暦二年（○文治元年）六月廿三日甲戌、前内大臣、幷右衞門督清宗等首、源廷尉（○義經）家人等指向六條河原、撿非違使大夫尉知康、六位尉章貞、信盛、公朝、志明基、府生經廣、兼康等、莅其所請取之、懸獄門前樹矣、此事頭右大辨光雅朝臣參陣仰別當、（家通）別當仰頭辨、頭辨傳大夫史隆職、隆職傳廷尉

同〇元暦二年六月廿二日、九郎判官義經、大藏卿泰經卿許ヘ申送ケルハ、前内大臣父子、近江邊ニシテ可切、其頭洛中ヘ持參シテ可渡檢非違使歟、將亦勢多邊ニシテ可棄歟、兩箇趣兼言上、事由可隨勅定之由、賴朝卿所令申之也、又重衡卿ハ可遣東大寺之由、同令申之間、相具シテ可入洛ト申タリケレバ、泰經彼狀ヲ有奏聞、内大臣許ニ被遣テ可計申由被仰ケレバ、後德大寺實定被申レケルハ、彼兩人被行斬罪上ハ、被渡首事可有議定歟、凡渡頸事ハ於京師人爲令見實也、而ルニ先日乍生已ニ被渡洛中、今度義經相具シテ上洛、行斬罪之相依何不審、重又可被渡大路哉ト有ケレ共、翌日二十三日ニ、檢非違使知康、範貞、信盛、公朝、明基、經弘等、六條河原ニシテ彼兩人首ヲ請取、大路ヲ渡シテ懸獄門左樗木ケリ、京中白川邊土、近國輩競集テ見之、法皇〇後白河ハ三條東洞院ニ御車ヲ立テ有御覽、謹考故實、三位已上ノ首懸獄門事無先例、稱德天皇御宇ニ、大師藤原惠美朝臣押勝謀叛時、軍士石村村主、近江國ニシテ斬押勝首、傳于京師之由雖載國史、渡其頸梟獄門之由無所見、近ク平治ニ右衛門督信賴サシモ罪深クシテ被刎首タリシカ共、獄門ニハ不被懸、如此例依時儀被始行事ナレドモ、兩度被渡大路之條、刑法甚シトゾ人傾ギ申ケル、

〔吾妻鏡〕三壽永三年〇元暦元年六月廿七日甲申、堀藤次親家郎從、被梟首、是依御臺所御憤也、四月之比爲御使討志水冠者之故也、其事已後、姬公御哀傷之餘已沈病床給、追日憔悴、諸人莫不驚騷、依志水誅戮事有此御病、偏起於彼男之不儀、縱雖奉仰、内々不啓子細於姬公御方哉之由御臺所強憤申給之間、武衛不能遁逃、還以被處斬罪云々、

〔玉海〕元暦元年〇文治元年四月廿一日甲戌、以泰經卿密々被尋問事等、〇中略一前内府〇平宗盛事如何、義經申云、相具可入京歟、可留置河陽之邊歟、死生之間事可被仰合賴朝歟、私申遣了、飛脚未到、進退惟谷者、此上如何可計申、申云此事更不可思食煩也、被仰追討之由、可梟首之由雖無疑、爲生虜參上、其上可賜死之由雖被仰、我朝不行死罪之故也、保元有此例、時人不甘心、仍今度無左右可被處遠流也、而

以案之、平家昨日マデハ、朝家之重臣トシテ雖列卿相、今日ハ國家之逆臣トシテ已蒙勅勘、就中輕命捨身合戰ヲ仕ル事、且ハ奉重朝威、且ハ爲雪父之耻也、舍兄鎌倉賴朝、深ク此旨ヲ存ス、而ルヲ且ハ取得ル處ノ平家之首、任申請大路ヲ渡サレズバ、向後何ノ勇有テカ朝敵ヲ可誅戮ト殊ニ憤リ申ケレバ、力及バセ給ハデ、終ニ大路ヲ渡シ獄門ニ懸ラレケリ、昔ハ列北闕之群臣、足雲上之臺ヲ蹈シカ共、今ハ成西海之凶賊首ヲ獄門之枝ニ懸ラレタリ、京中ノ貴賤多ク是ヲ見ル、老タルモ若キモ、涙ヲ流シ袖ヲ不絞ト云事ナシ、

〔源平盛衰記 四十五〕虜人々流罪附伊勢勅使改元有否事

同(○元暦二年六月)廿日ハ、近江國篠原宿ニ著ヌ、廿二日ニ、勢多ニテ大臣殿(○宗盛)モ右衛門督(○宗盛子清宗)モ各別ノ處ニ奉置ケレバ、今日ヲ限ト思給テ、右衛門督ハ、何レノ所ニゾ、一所ニテコソ如何ニモ成果ント思ツル、生ナガラ別ヌルコソ悲ケレトテ、涙ヲ流シ給ゾ哀ナル、内大臣、判官(○源義經)ニ被仰ケルハ、出家ハ免シナケレバ力及バズ、僧ヲ請シテ受戒最後ノ知識ニ用バヤト宣ヘバ、其邊相尋テ、金性房湛豪ト云僧奉請、知識僧參テ最後ノ事勸メ申ケルニ、(○中略)内大臣可然知識成ト思召、西ニ向合掌餘言ヲ止テ念佛三百返計ゾ唱ヘ給、橘内右馬允公長、劍引側メテ後ヘ廻ケレバ、大臣殿念佛ヲ止テ、右衛門督モ既ニカト宣ヒケル詞ノ未終ケルニ、首ハ前ニ落ニケルコソ悲ケレ、彼公長ハ平家重代ノ家人也、新中納言(○知盛)ノ許ニ朝夕伺候ノ者也ケリ、身ヲ顧ミ世ヲ渡ラント思フコソ悲ケレトテ涙ヲゾ流シケル、其後上人右衛門督ノ許ニ行向ヒテ奉授戒、樣々敎訓シ念佛スヽメケレバ、大臣殿ノ最後如何御坐ツルト問給、上人何事モ思召切リ目出コソ御渡候ツレト申セバ、サテハ嬉敷候トテ、念佛高ク唱ツヽ、今ハ疾々ト被仰ケレバ、今度ハ堀彌太郎切テケリ、サシモ罪深ク難離シ給ケレバ、身ヲバ公長ガ沙汰ニテ、一穴ニゾ埋ミケル、

內大臣京上被斬附重衡向南都被切幷大地震事

後皆持向八條河原大夫判官仲頼已下請取之、各付于長鎗刀、又付赤簡(平某之由各注付之)向獄門懸樹、觀者成市云々、

〔百練抄 十後鳥羽〕元暦元年二月十三日壬申、平氏等首被渡之云々、權中納言家通卿、參入、仰下賊首可懸獄門樹之由、

〔源平盛衰記 三十八〕平家首掛獄門事附維盛北方被見頸事

同年(○元暦元二月)七日夜半ニ、西海ノ追討使源九郎義經、飛脚ヲ奉テ申ケルハ、逆徒自去五日、攝津國一谷ニ、上ニハ城郭ヲ構ヘ軍陣ヲ張リ、下ニハ砂濱ヲ堀テ逆木ヲ立、大將軍前内大臣(○平宗盛)已下ハ、兵船ニ乘テ海上ニ浮ブ、其勢十萬餘騎也、南濱ノ撃手ハ範頼、北ノ山ノ搦手ハ義經、今日辰刻ニ兩方ヨリ撃襲賊徒之軍、忽ニ敗レ、平三位通盛卿、前但馬守經正、前薩摩守忠度、前若狹守經俊、前備前守國盛、備中守師盛、前武藏守知章、散位業盛、敦盛、郎從前越中守盛俊等討捕畢ヌ、此外斬首者三百八十人、前左三位中將重衡卿ハ、甲冑ヲ脱棄テ、上ノ山ヘ遁入トイヘ共、延ヤラズシテ即虜レ畢ヌ、前内大臣前平中納言教盛以下ハ、船ニ乘逃去畢ヌトゾ申ケル、十三日ニ大夫判官仲頼、六條河原ニテ九郎義經ノ手ヨリ平氏ノ首共請取テ、東洞院ノ大路ヲ北ヘ渡シテ、左ノ獄門ノ樗木ニ懸ラル、通盛、忠度、知章、經俊、師盛、經正、業盛已上大將軍、盛俊、家貞侍、此人々ノ頸也、抑此頸ドモ、大路ヲ渡シ獄門ニ可被懸之由、範頼義經兄弟兩人奏シ申ケレバ、法皇(○後白河)思召煩ハセ給テ、藏人右衛門權佐定長ヲ御使ニテ、太政大臣、左右大臣、内大臣、堀川大納言ニ有御尋、五人ノ公卿一同ニ被申ケルハ、此輩ハ先帝(○安徳)ノ御時、戚里ノ臣トシテ久ク朝家ニ奉仕、就中卿相ノ首、大路ヲ渡シ獄門ニ掛ラルヽ事、未ダ其例ナシ、範頼義經ガ申狀、強チニ不可有御許容ト被申ケレバ、渡サルマジキニテ有ケルヲ、九郎義經重テ奏シ申ケルハ、父義朝ハ、保元ノ逆亂ニ、御方ニ參テ凶徒ヲ退ケ、雖抽合戰之忠、平治ニ惡右衛門督信頼卿ノ語ヒニヨリ、不意蒙勅勘間、其頸大路ヲ渡サレテ曝骸於獄門、彼ヲ

奉弃院〇後白河周章對戰之間、所相從之軍、僅卅卌騎、依不及敵對、不射一矢落了、欲懸長坂方、更歸爲
加勢多手赴東之間、於阿波津野邊被伐取了云々、東軍一番手九郎〇源義經軍兵、カヂ波羅平三云々、
其後多以群參院御所邊云々、法皇及祗候之輩免虎口、實三寶之冥助也、
〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年正月廿六日丙辰、今朝撿非違使等、於七條河原請取伊豫守義仲、幷忠直、
兼平、行親等首、懸獄門前樹、亦四人兼光、同相具之被渡訖、上卿藤中納言、職事頭辨雅光朝臣云々、
〔百練抄十後鳥羽〕元暦元年正月廿六日丙辰、梟伊豫守義仲首、去廿日斬之字九郎義經相具之、廷尉於六條
河原請取之、懸東獄門樹、見者如堵、此外字根井今井樋口等、雖爲降人渡路頭、
〔玉海〕壽永三年〇元暦元年二月十日己巳、藏人右衛門權佐定長來、仰院〇後白河宣云、平氏首等、不可被渡旨
思食、而九郎義經、加羽範賴等申云、被渡義仲首、不被渡平氏之條、太無其謂、何故被惜平氏之由、殊鬱
申云々、此條如何可計申者、申云、論其罪科、與義仲不齊、又爲帝外戚等、其身或昇卿相、或爲近臣、雖被
遂誅伐被渡首之條、可謂不義、近則信賴卿頸所不被渡也、加之神璽寶劒、猶在殘之賊手、無爲歸來之
條、第一之大事也、若被渡此首者、彼賊等彌令勵怨心歟、仍旁不可被渡其首、將軍等只一旦申所存歟、
被仰子細之上、何强執申哉、賴朝定不承申此旨歟、此上左右可在勅定者、定長云、被問左大臣〇藤原經宗
内大臣〇藤原實定忠親卿等、各申不可被渡之由、一同云々、　十三日壬申、此日被渡平氏首、其數十云々公卿
頸不可被渡之由雖有其議、武士猶鬱申云々、如何、通盛卿首、同被渡了可彈指之世也、
〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年二月十一日庚午、平氏等之首、可被渡大路之由、源氏兩將經奏聞、仍博陸、
〇藤原基通三公、〇左大臣藤原經宗、右大臣藤原兼實、内大臣藤原實定、堀川亞相、忠親等、被預勅問、彼一族、仕朝廷已年尙、可有優恕
沙汰歟、將又範賴義經、爲果私宿意所申請非無道理歟、兩樣之間難決叡慮、宜計申之由云々、而意見
雖區分、兩將强申請之間、遂可被渡之由治定云々、勅使右衛門權佐定長數度往反云々、　十三日壬
申、平氏首聚于源九郎主六條室町亭、所謂通盛卿、忠度、經正、敎經、敦盛、知章、經俊、業盛、盛俊等首也、然

烏帽子懸ニツラヌキテ結付タリ、土ノ穴ヲ堀テ云事ダニ漏ト云、マシテ左程ノ座席ニテ、加樣ニヤ有ベキト、後ヲソロシ、石ニ口スヽギ流ニ枕スト云事有ト思者ハ、偷ニ座ヲ起ツ人モアリケルトカヤ、

〔源平盛衰記二十六〕義基法師首渡事

同〇養和元年二月九日、武藏權守源氏義基法師ガ首、同子息石川判官代義兼生捕、撿非違使實俊判官七條川原ニテ武士ノ手ヨリ請取テ、東洞院ノ大路ヲ渡シテ、頭ヲバ獄門ノ左ノ樗木ニ懸ケ、虜ヲバ被禁獄、馬車街衢ニ充滿テ、見人幾千萬ト云事ヲ知ズ、此義基法師ト云ハ、故陸奥守義家ガ孫、五郎兵衛尉義光子、河内國石川郡ノ住人也、兵衛佐頼朝ニ同意ノ聞エ有テ、骸ヲ獄門ニ被掛ケリ、今高倉院崩御、諒闇ノ年ニ首ヲ被渡事、如何ガ有ベキト沙汰有ケレ共、諒闇ノ年、賊衆ノ首ヲ被渡事、去嘉承二年七月十九日、堀川天皇隱レサセ給ヒシニ、同三年正月廿九日ニ、對馬守源義親義家一男頸ヲ被渡例トゾ聞エシ、〇又見二百練抄一

〔百練抄九安德〕壽永二年十一月廿日、院中輩首百十一、懸二五條河原一、義仲監臨、軍呼三度、

〔源平盛衰記三十五〕木曾頸被渡事

二十六日〇元暦元年正月ニ、伊豫守義仲ガ首、大路ヲ被渡ル、法皇〇後白河ハ御車ヲ六條東洞院ニ立テ被御覽、九郎義經、六條河原ニテ撿非違使ノ手ニ渡ス、撿非違使是ヲ請取テ、東洞院ヲ北ヘ渡シテ、左ノ獄門ノ樗木ニハ懸ラル、其首四ツ、伊豫守義仲、郎等ニ信濃國住人高梨六郎忠直、根井四郎行親、今井四郎兼平也、是三人ハ四天王ニ數ヘラレテ一二ノ者ナリケレバ、義仲ト同ク懸ラレタリ、何者ガ所爲ニカ、獄門ノ木ノ下ニ札ヲ書テ立タリケルハ、

信濃ナル木曾ノ御料ニ汁懸テ只一口ニ九郎義經

〔玉海〕壽永三年〇元暦元年正月廿日庚戌、卯剋人云、東軍已付二勢多一、未レ渡二西地一、〇中略敵軍已襲來、仍義仲

抑昔武藏權守平將門已下ノ朝敵ノ頭共ハ、兩獄門ニ納メラル、文覺爭カ義朝ノ首ヲバ可盜取、是ハ兵衞佐〇源賴朝ニ謀叛ヲ勸ンガ爲ニ、奈古屋ガ沖ニ曝タル頭ノ有ケルヲ以テ、假初ニ僞申タリケル也、實ニハ父義朝ノ首、獄門ニ有ヨシ聞給ヒケレバ、世靜テ後、文覺上人ヲ使トシテ、奏聞シテ申賜ハリ給ケリ、彼首ハ東ノ獄門ノ前ノ樗木ニ係タリケルヲ、紺五郎ト云紺掻ノ有ケルガ、下野守在生ノ時ハ、折々ニ參リテ深ク憑申ケレバ、不便ノ者ニ被思レケルガ、其情ヲ忘レズ、博士判官兼成ニ付テ、年來哀レ不便ト思召ス人也、久ク獄門ニ被梟テ、曝恥給事目モアテラレズ悲シク侍、今ハ被納置候ヘカシ、孝養仕ラント申タリケレバ、兼成大理ニ申、御免有テ紺五郎申給テ、左ノ獄門ノ乾ノ角ニ墓ヲ築テ埋タリケルヲ、今度堀起シテ見ケレバ、額ニハ義朝ト云銅ノ銘ヲ打タリ、正清ガ首モ同ク在ケリ、

〔吾妻鏡〕四 元暦二年八月卅日庚辰、二品御素意、偏以孝爲本之處、未盡水菽之酬、而平治有事、嚴閤〇賴朝父義朝夭亡給之後、以每日轉讀法華經被備沒後追福、而今極榮貴給之故、今被企一伽藍作事、可安先考御廟於其地之由存念御之間、潛被伺奏此由、法皇〇後白河亦叡感勳功之餘、去十二日仰判官、於東獄門邊被尋出故左典廐首、相副正清〇鎌田二郎兵衞尉首、江判官公朝爲勅使被下之、今日公朝下著、仍二品爲令奉迎之、參向自稻瀨河邊給、御遺骨者文學上人門弟僧等奉懸頸、二品自奉請取之、還向、于時改以前御裝束、練色水干著素服給云々、

〔源平盛衰記〕四 鹿谷酒宴靜憲止御幸事
酒宴ノ人々モ少々座ヲ立ケルニ、瓶子ヲ直垂ノ袖ニ懸テ頸ヲゾ打折テケル、大納言見之、戲呼事ノ始ニ、平氏倒レ侍リヌト被申タリ、面々咲壺會也、康賴突立テ、大方近代アマリニ平氏多シテ持醉タルニ、既ニ倒亡ヌ、倒タル平氏頸ヲバ取ニ不如トテ、是ヲ差上テ、一時舞タリ、サテ取タル首ヲバ可懸也トテ、大路ヲ渡スト云テ、廣緣ヲ三度廻シ、獄門ノ樗木ニ係ト名テ、大床ノ柱ニ

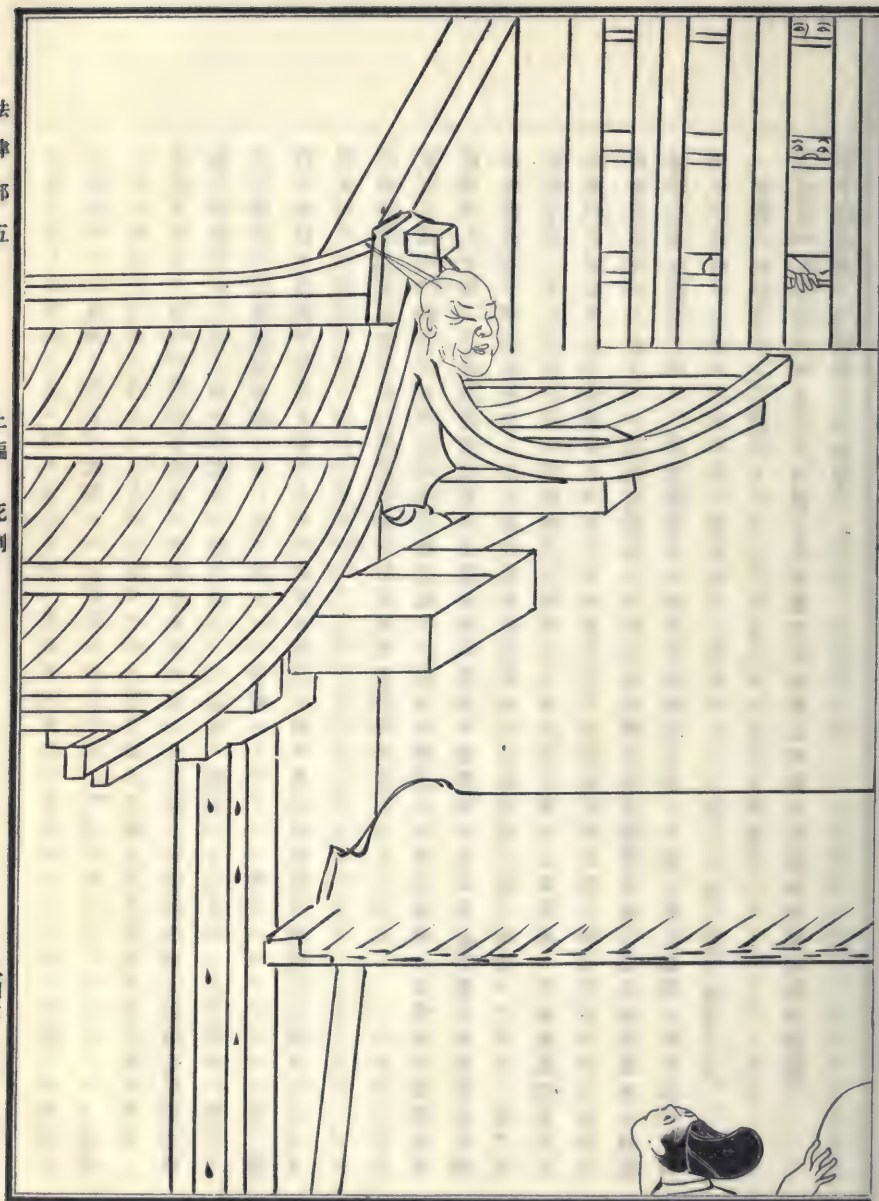
去程ニ、舍人成澤同ク都ヘ歸リケルガ、〇中略出雲前司光泰五十餘騎ニテ、信西ガ行衞ヲ尋來ルニ、木幡山ニテ行逢、馬モ舍人モ見知タレバ打伏セテ問ケルニ、〇中略アレコソソヨト敎ユレバ、郎堀ヲコシテ見レバ、未ダ目ハタラキ、息モ通ヒケルヲ、頸ヲ捕テゾ歸リケル、出雲前司光泰、信頼卿ニ此由ヲ申セバ、同〇平治元年十二月十四日ニ別當惟方ト同車シテ、光泰ノ宿所神樂岡ヘ行向テ、此頸ヲ實撿ス、必定ナレバ、軈テ明ル日大路ヲ渡シ、獄門ニ可被懸ト被定ケレバ、京中ノ上下河原ニ市ヲナシテ見物ス、信頼義朝モ車ヲ立テ是ヲ見ル、〇中略朝敵ニアラザレバ、勅定ニモアラズシテ、頸ヲ獄門ニ被懸モ前世ノ宿業ト云ヒナガラ、去ヌル保元ニ絶テ久シキ死罪ヲ申行ヒシ報カトゾ人々申ケル、

〔平治物語三〕長田義朝討六波羅馳參事附大路渡被掛獄門事

去程ニ、同〇平治二年正月六日、一院〇後白河仁和寺殿ヨリ出サセ御坐タレ共、三條殿ハ去年燒ヌ、御所ニ可成所モナケレバ、八條堀河皇后宮大夫顯長卿ノ宿所ヲ御所ニナシテ入セ給、翌日尾張國住人長田四郎忠宗、子息先生景宗上洛シ、前左馬頭義朝、幷鎌田兵衞政家ガ頸ヲ持參シテ、不次ノ賞ヲ可蒙由望申ケリ、是ハ昔ノ平大夫知頼ガ末葉、賀茂次郎行房ガ孫、平三郎宗房ガ子孫也、義朝重代ノ家人トシ、鎌田兵衞ガ舅也、然レバ平大夫判官兼行、二條京極ノ千手堂ニ行向テ、二ノ頸ヲ請取テ、即被實撿、今日ハ重日トテ不被渡、同九日平大夫兼行、總判官信房、靑侍義守、忠目、範守、書府生朝忠、淸府生季道、此等ヲ始メテ、撿非違使八人行向テ、西洞院ヲ上リニ渡シ、左ノ獄門ノ樗ノ木ニゾ掛タリケル、何ナル者カシタリケン、左馬頭、元ハ下野守タリシカバ、一首ノ歌ヲ書付タリ、

下野ハ紀伊守ニコソ成ニケレヨシトモ見ヘヌアゲヅカサ哉

〔百練抄七二條〕永暦元年正月九日、前左馬頭義朝、幷郎從正淸等首、廷尉請取、懸東獄門前樹、

〔源平盛衰記十九〕義朝首出獄事

〔梟首圖 平治物語繪卷所載〕

由下知義綱朝臣了、而彼朝臣不趣任國之前、先爲相尋、遣郎等字藤別當之處、已切頭了、自餘黨類請降參來、武勇之威、自滿四海之所致歟、　後聞故賴義朝臣、去康平五年、自陸奥國所斬進貞任頭請取之時、先召撿非違使於陣頭、可請取之由職事仰下、仍撿非違使等東帶云々、今日之儀不然、去夕頭弁以書宣旨下左府、○源俊房左府下弁被仰下撿非違使也、仍不束帶歟、其書宣旨詞至犯人頭者、令撿非違使等請取、至降人二人、某、隨義綱朝臣申請、可原免者、右少弁有信被談也、

〔中右記〕天仁元年正月廿九日庚辰、今日但馬守正盛、隨身源義親首入洛、仍密々爲見物作女車、午時許行向先正盛宿久我邊、經鳥羽殿□□御覽之、於鳥羽作路邊竊見、首指鉾令持下人五人、各付赤比禮書名、賊首源義親首又從四人首其左右取打物、步兵着甲冑者、四五十人許相從、次但馬守正盛、次男降人一人騎馬相具、次郎等百人許、劒戟曜日、弓馬連道、其路從九條東行、於七條末河原撿非違使等受取、經七條大路西行、昇自西大宮路懸首於西獄門樹、撿非違使大夫尉二人、平兼季、束帶重服、是康平年中、浮囚貞任首受取之日、大夫尉源賴俊、重服受取之例歟、源光國、布衣冠、尉盛重、親實、季清、重時、榮賢、志資清、行重、府生忠重、有賢、下部爲先、先看督長十餘人前行、首五令持着鈦、次撿非違使、次郎從等、但降人正盛申請歟、見物上下車馬夾道、凡京中男女盈滿道路、人々如狂、

凡諒闇之中、雖犯人首入洛事、頗可有議定歟、就中祈年祭春日祭以前觸穢遍天下歟、旁可有用心也、

但於正盛事者、世間氣色、不可論左右、

〔古事談二臣節〕義親ガ首ヲ被渡ケル時、人々多以見物、仍知足院殿○藤原忠實可見物之由、大殿○藤原師實ニ令申玉ケレバ、仰云、被渡貞任首之時、可見物之由令申宇治殿○藤原賴通之處、被仰云、死人之首、不能見物云々、仍不御覽云々、是又不可令見物給云々、

〔百練抄七二條〕平治元年十二月十七日、少納言入道信西首、廷尉於川原請取、渡大路懸西獄門前樹、件信西、於志加良木山自害、前出雲守光保所尋出也、

〔平治物語一〕信西首實撿事附大路渡被懸獄門事

を以て、斬首を掛ん爲に、此樹を、獄門の前に植へたる歟、論語に栗樹を植て、民をして戰栗ならしめんと云し例もあり、又明朝の田汝成が熙朝樂事と云書に、白柹(ツリガキナリ)を串に貫き、大なる橘に刺て、正月の祝物として供す、白柹大橘を百事大吉と取なし、賀物といへる由見へたり、其物の名を取て、他事に擬へ用ること、他國にも其例なきにしもあらず、

〔箋注倭名類聚抄十〕棟　玉篇云、棟(音練、本草云、阿不知、本草和名木部下云、棟實、仁諝音義作楝、音練、和名阿布知乃美、)其子如指頭、白而黏、可以浣衣者也、(說文、楝、木也、郭注中山經云、楝木名、子如指頭、白而黏、可以浣衣也、顧氏蓋依之、今玉篇木部作木名、子可以浣衣、係後人删節、)

〔扶桑略記二十九後三條〕治暦五年(○延久元年)閏十月四日、左衞門尉家宗梟多山強盜致親首、并引率降人等入洛、

〔中右記〕寛治八年(○嘉保元年)三月八日己卯、早旦依無女房倍膳參內、源中將(國信)藏人兵部大輔(道輔)治部少輔(懷季)參會共議云、今日陸奥守源義綱朝臣、隨身降人幷頭入洛、必可見物者、供御膳後、四人同乘、向二條末河原邊見物、上下車馬、已如盛市、依命立右大將(○源雅實)御車邊、申時許入洛、先頭二、(散位平師妙、同男師季、)高長載末、付赤小幡注其姓名、左右捧長劒、歩兵卅人許相挾、次義綱朝臣着麴塵襖々袴、款冬衣、乘黑馬額白、郎等二百人許、玄甲與雲連、白刃向日耀、此中降人二人、(貞宗、貞房、)騎馬相具、行向四條末、撿非違使等請取了、又降人等、隨申請免給了由下知云々、請取之後、令持頭於着釱者、自四條烏丸五條大宮等大路、梟頭於西獄門前樹上、撿非違使大夫尉藤經仲、(衣冠)平貞弘、(以下布衣)同爲俊、同貞度、志宗綱信良、府生淸原忠重、文部保成等也、先看督長等二行前行、次頭、次撿非違使、以下蔦爲先、人々走車馬進道路、又以見物、或折車軸、或飛烏帽、已多及耻辱者、是雖不勝感興、還表至愚歟、(○中略)夜半許、民部卿被參仗座、有臨時敍位、從四位上源朝臣義綱、從四位下藤原朝臣爲房、抑義綱朝臣者、今日搦進犯人等、賞尤理也、爲房朝臣、己未功課者、加級之條、甚無其謂歟、弁時春日行幸行事賞云々、去年出羽守信明、欲上洛間、件犯人等、已燒其館悉盜財實、守信明爲免其命、逃散山中、不知在處、謀反之甚、何事過之哉、仍可追討

弁、頭弁召大夫史實長下之、實長召大夫尉源賴俊於右衛門陣口、宣可請取件首等之由、賴俊引率撿非違使等奉宣退出了、余又退出、抑件俘四首、本所隨騎兵二人（一人傔仗、一人軍曹）、步兵二十餘人許也、各被介冑、殊耀武威、先於粟田山大谷北丘上、踟躕徘徊、三首各插鋒植之、余偷行見之、漸及晡剋、指洛持入、撿非違使於四條京極間請取、其儀拔本鋒、以撿非違使鋒插之、即以着駄持之、先貞任次重任經清也、但鋒緋銘其姓名、又各傍看督長二人、放免十餘人相從、三絕（絕恐級字誤）○相別渡行、觀者或車或馬、亦緇亦素、始自粟田之下、迄于華洛之中、駱驛雜錯、人不得顧、奔車之聲、晴空聞雷、飛塵之色、春天拂霧、希代之觀、何比之有乎、於戲皇威之在、今更不耻於古者歟、但從四條西行、朱雀大路至于西獄、樗樹梟之云々、

〔箋注倭名類聚抄 十木〕樗 陸詞切韻云、樗（勅居反、本草云沼天、下總本、本草云作和名二字、廣本作和名本草云五字、按本草和名云、樗木葉作樗木、和名部波岐、不訓沼天、與此所引不同、唯訓樗鷄以爲奴天乃岐乃牟之、）惡木也（福井本樗作樗、按說文云、樗、木也、以其皮裹松脂、讀若華、或从蒦、徐音乎化切、又云、樗、木也、徐音丑居切、玉篇云、樗、胡覇胡郭二切、木名、樗同上、樗、惡木也、散於切、廣韻亦略同、是樗樗二字不同、即樗即樗字之正、非惡木、福井本假是、然毛詩云、采荼薪樗、又云、蔽芾其樗、毛傳並云、樗、惡木也、釋文並云、敕書反、五經文字亦作樗、莊子云、吾有大樹、人謂之樗、釋文云、敕魚反、史記云、樗里子、索隱云、樗、木名也、音攄、急就章云、桐梓樅松榆樗、樗、顏師古注云、樗似椿、而木虛惡、爾雅云、栲、山樗、釋文云、丑於反、廣雅云、樗鳩、樗雞也、本草亦作樗木、樗、皆以樗爲惡木、段玉裁曰、說文樗樗二篆互譌、毛詩音義、爾雅音義、五經文字可證也、假令許書與今互異、則陸氏張氏當辨明之、如穆種之例矣、若是敍以今本說文玉篇廣韻爲誤、不知陸詞從雩作樗、樗從雩也、龍龕手鑑云、樗、正樗今混爲一字、非是、）辨色立成云、白膠木、（和名上同、按白膠木即楓樹、本草云、楓香脂、一名白膠香是也、而楓香脂在上品、樗木在下品、其不同可知也、又崇峻紀云、白膠木、此云農利埿、與辨色立成略同、蓋與以樗木爲奴天其說不同也、源君以其所謂同、混爲一條者誤、又按香要抄載、侍醫惟宗俊通注進勘云、白膠香者、絕而及數十年、見知其體者尙不候、況於其香乎、但樗木和名奴天之木、以件木汁用復代、以其體相似也、是亦可以見白膠與樗不同也、）

〔安齋隨筆 前編 三〕獄門ノ樗木 古き書共に、首を斬て獄門の樗の木に掛くると云ことあり、樗の字を用るは誤也、和名抄に楝、阿布智とあり、此訓古し、樗は昔此方になき木なれば、獄門に植べきこと有べからず、獄門に植しアフチは、楝の字也、何故獄門に楝を植しぞと云理は、何の書にも所見なければ詳に知れず、無證の推量の說は無益なれども、愚私に推量するに、國言に、血に穢るゝを血にあへるとも、アヘ血とも云に付けて、血にアヘル意にて、楝の名のアフチと云

口市司可懸外樹之事仰、

〔扶桑略記二十五朱雀〕天慶三年正月廿四日、一云、東大寺羂索院後有等身執金剛神之像、頭光右方天衣切落、古老云、天慶之比、有平將門、謀危國家、兵革無絕、公家爲免其難、祈請此寺、神像已隱廿餘日、寺家稱怪、屢經奏聞、疑合戰之不利、彌以恐怖、不經幾日、像已立本壇之跡、見其天冠之傍、右方已缺落、又其身濕如流汗、現爲賊被射損之相也、依此祥異遂梟將門之首、

〔日本紀略八花山〕寬和元年五月十三日丁巳、被定犯人左兵衞尉藤原齊明、幷舍弟散位保輔罪科事、廿日甲子、犯人左兵衞尉藤原齊明首令懸獄門、件人有犯過、山陽南海西府等可追討進之由給官符、倫遁身於關東之間、於近江國高島郡、前播磨掾惟文主所梟之首也、可有勸賞之由被宣下畢、

〔日本紀略十三後一條〕萬壽元年三月十日丁酉、京中强盜被追捕之間、犯人逃入散位顯長母尼宅、質尼、撿非違使搦捕之、梟首懸獄門、

〔日本紀略十四後一條〕長元四年六月十六日壬辰、賴信朝臣梟平忠常首入京、件忠常受病死去、但有議定給彼忠常從類、依爲降人也、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕康平六年癸卯、二月十六日、鎭守府將軍前陸奧守源賴義、梟俘囚安倍貞任、散位藤井經淸等三人首傳京師、撿非違使等向東河受取、繫其首於西獄門、見物之輩貴賤如雲、先是獻頭使者、到近江國甲香郡、開筥出首令洗梳其髻、件擔夫者、貞任從者降人也、稱無櫛由、使者傔仗季俊仰曰、汝等有私用櫛、以其可梳之、擔夫則出私櫛梳之、垂淚嗚咽曰、吾主存生之時、仰之如高天、豈圖以吾垢櫛忝梳其髮乎、悲哀不忍、衆人皆以落淚矣、

〔水左記〕康平六年二月十六日戊子、早朝參殿下、○藤原賴通前鎭守府將軍源賴義朝臣所進、俘囚貞任重任經淸等首、幷降人夾名解文、右大弁令進覽之、殿下召頭弁○藤原泰憲給之被仰可奏之由、頭弁結解文退出、余又參大內、頭弁持參經奏聞、以件解文下治部卿、于時卿候奥座、但夾名者留御所治部卿下頭

梟首

應加禁斷事

右被内大臣宣偁、奉勅水旱不時、神火屢發、寔緣國郡司等不修職務、是以寶字七年九月一日、頒下却狀用良之格、今聞奸枉之輩、謀奪郡任、寄言神火、多損官物、自今以後、若有此類、不論首從、一皆打殺、雖逢恩降、勿預赦例、苗裔之現、永絕譜第、其空納還燒、加刑亦同、

寶龜十年十月十六日

〔類聚國史八十七刑法〕延暦十二年八月丁卯、是夜内舍人山邊眞人春日、春宮坊帶刀舍人紀朝臣國、共謀殺帶刀舍人佐伯宿禰成人、明日事覺、春日等即逃隱、帝（桓武）大怒、募求天下、後伊豫國捕之以聞、遣左衞士佐從五位上巨勢朝臣島人格殺、或曰春日等承皇太子密旨、

〔日本書紀二十一崇峻〕二年七月（○用明）物部守屋大連資人捕鳥部萬（萬名也）將一百人守難波宅、而聞大連滅、騎馬夜逃、向茅渟縣有眞香邑、仍過婦宅、而遂匿山、朝廷議曰、萬懷逆心、故隱此山中、早須滅族、可不怠歟、萬衣裳弊垢、形色憔悴、持弓帶劒、獨自出來、有司遣數百衞士圍萬、萬即驚匿篁叢、以繩繫竹引動令他惑己所入、衞士等被詐、指搖竹馳言、萬在此、萬即發箭、無一不中、衞士等恐不敢近、萬便弛弓挾腋、向山走去、衞士等即夾河追射、皆不能中、於是有一衞士、疾馳先萬而伏河側、擬射中膝、萬即拔箭、張弓發箭、伏地而號曰、萬爲天皇楯、將効其勇、而不推問、翻致逼迫、於此窮矣、可共語者來、願聞殺虜之際、衞士等競馳射萬、萬便拂捍飛矢、殺三十餘人、仍以持劒、三截其弓、還屈其劒、投河水裏、別以刀子、刺頸死焉、河内國司、以萬死狀、牒上朝廷、朝廷下符偁、斬之八段、散梟八國、河内國司、即依符旨、臨斬梟時、雷鳴大雨、爰有萬養白犬、俯仰廻吠於其屍側、遂嚙擧頭、收置古冢、横臥枕側、飢死於前、

〔釋日本紀十九秘訓〕散梟（チラセクシサセ）

〔後漢書七桓帝〕延熹二年八月壬午、詔曰、梁冀奸暴、濁亂王室、（○中略）漏刻之間、桀逆梟夷、（梟懸首於木也）

〔貞信公記〕天慶三年四月廿五日、右大辨來告將門首□來狀、　五月十日、左中辨相辨等有將門首□

格殺

同死スル道ナレドモ、合戰ノ場ニ出テ、主君ト共ニ討死シ腹ヲ切ハ常ノ習ナレドモ、懸ル例ハ未ダナシトテ、譽ヌ人コソナカリケレ、

〔源平盛衰記四十五〕女院御徒然附大臣〇平宗盛賴朝問答事

同〇元暦二年五月二十七日、九郎判官義經、平氏ノ虜共相具シテ關東ニ下著シタリケレバ、源二位〇源賴朝對面有ケレドモ、最言ズクナニテ打解タル無氣色、義經モ思ヒノ外ニ事違ヒテ、合戰ノ事不及申出ケリ、前內大臣ハ、庭隔タル屋ニ座ヲ儲タリケレバ、被著タリケルニ、源二位簾中ニ座シテ、比企藤四郎能貞使トシテ被申ケルハ、於平家人々不奉存私意趣其故ハ、專依禪閤〇平淸盛之恩言、被宥賴朝之死罪、爭忘違恩、忽ニ有反心哉、然而可奉追討之由今被下宣旨之間、難背叡慮之故、只隨勅定之計也、是源平兩氏ノ互ニ昔ヨリ今存ル事也、不圖ニ奉見參コソ本意ニ侍レト宣ケレバ、能貞、大臣殿ノ前ニ進リタリケルニ、居直リ、深敬節セラレケリ、右衞門督ハ不居直、國々ノ武士多並居タリ、〇中略大臣ノ刎首事、不容易トテ、狙上ニ大ナル魚ヲ置キ、利刀ヲ相具シテ內大臣父子ノ前ニ被置タリ、自害シ給ヘトノ謀也、大臣ハ思ヒ寄給ハズモヤ有ケン、ソモ不知、右衞門督〇宗盛子淸宗ハサモト思ハレケレ共、壇浦ニテ水底ニ沈ミハテヌハ、父ノ向後ノ奢ナキ故也、今更非可先立トオボシケレバ自害ナシ、待ドモ〳〵自害シ給ザリケレバ、內大臣ヲバ讃岐權守ト改名シテ、九郎判官ニ被返預ケリ、

〔類聚三代格十二〕太政官符

一如有捕獲行火盜賊勘當得實者、宜示衆格殺、以懲後惡、〇中略

以前奉勅如件、

寶龜四年八月廿九日

〔類聚三代格十二〕太政官符

爲他刑殺、不如自死、卽其子孫令服毒藥而絞死畢、後親王服藥而自害、

〔續古事談〕五 諸道 保輔ト云者ハ、元方ノ民部卿ノ孫、致忠朝臣ノ子也、故國章ノ三位ノ家ニ、强盜入ニケリ、○中略 其後保輔法師、ヒソカニ從者左大將ノ隨身忠延トイフモノヽ、モトヘキタリケルヲ、ハカリゴトヲマハシテカラメテケリ、保輔ニグルニアタハズ、カタナヲヌキテ、腹ヲサシキリテ、腸ヲヒキイデタリケリ、撿非違使コノヨシ申テ、禁獄セラレニケリ、此賞ニ忠延左馬醫師ニナサレケリ、保輔次ノ日獄中ニテ死ニケリ、

〔保元物語〕三 爲朝鬼島渡事幷最後事

爲朝、○中略 今ハ思事ナシトテ、内ニ入、家ノ柱ニ後ヲアテヽ、腹掻切テゾ居タリケル、○中略 爰ニ加藤次景廉自害シタリト見オフセテヤ有リケン、長刀ヲ以テ後ヨリチラヒ寄テ、御曹司ノ首ヲゾ打落シケル、其日ノ高名ノ一ノ筆ニゾ付タリケル、

〔安齋隨筆〕前編十 一切腹 日本紀以下國史に、自殺したる人見へたれ共、皆自ら縊死し、或は家に火を放て燒死せし事は見たれども、腹を切て死せし事は見へず、上古には切腹なし、保元物語に、爲朝二十八にて家の中柱に後をあてゝ、腹かき切たれども猶死なれず、後のほねをふつと切てぞ死したりけると見へたり、此比より武士勇氣を示さんが爲に、腹を切る事始りしなるべし、君命して臣に切腹せしむる事は、又遙の後に始る歟、

〔保元物語〕三 義朝幼少弟悉被誅事○中略

此君達ニ、各一人ヅヽ乳母共付タリケリ、内記平太ハ天王殿ノ乳母、吉田次郎ハ龜若、佐野源八ハ鶴若、原後藤次ハ乙若殿ノ乳母ナリ、○中略 内記平太ハ、直垂ノ紐ヲ解テ、天王殿ノ身ヲ我膚ニ當テ、○中略 死出ノ山三途ノ河ヲバ、誰カハ介錯可申、恐敷思召サンニ付テモ、先我ヲコソ尋給ハメ、生テ思フモ苦シキニ、主ノ御供仕ラント云モ不果、腰ノ刀ヲ拔儘ニ腹掻切テ失ニケル、○中略

自盡

〔源平盛衰記〕三十五木曾頸被渡事

伊豫守ノ頸、劒ニ貫テ、赤絹ヲ切テ賊首源義仲ト銘ヲ書テ髻ニ付、義仲左右ノ眉ノ上ニ疵ヲ被リタレバ、粉米ヲゾ塗タリケル、次ニ降人中原兼光、葛紺ノ水干、葛袴ノ練色衣ニ引立烏帽子ヲ著ス、兼光死ヲ遁テ降人ト成、大路被渡面ヲ曝ス、其心勇士ニハアラザリケリ、皆人恥シメアヘリケリ、度々ノ合戰ニ功有シカバ、其名ヲ得タル兵ナリシニ、今人ノ嘲ヲ招ケルモ、可然運ノ極ト覺タリ

兼光被誅并沛公入咸陽宮事

樋口次郎兼光ハ、兒玉黨ガ依歎申、義經被奏聞ケレバ、死罪ヲ宥シ、大路ヲ渡シ、被禁獄タリケルヲ、院(○後白河)御所法住寺殿ノ軍ノ時、然ルベキ上臈女房達ナドヲ捕ヘテ、衣裝ヲ剝取、裸ニ成テ五六日奉取籠恥ヲ奉見タリケル故ニ、彼女房達、口惜事ニ思召テ、カタヘノ女房達ヲ相語、兼光男ヲ生置セ給ハヾ、尼ニナラン、御所ヲ出ン、淀河桂河ニ身ヲ投ジナド、樣々ニ訴申サセ給ケレバ、法皇モ力及セ給ハズ、公卿有僉議、女房ノ訴訟モ難默止、兼光ハ木曾殿ガ四天王ノ隨一、死罪ヲ被宥事、有虎養恐ト、殊ニ有沙汰テ、明二十七日ニ獄舍ヨリ取出シテ、五條西朱雀ニ引出テ被斬ケリ、

〔續日本紀〕(聖武十)天平元年二月辛未、左京人從七位下漆部造君足、无位中臣宮處連東人等、告密稱、左大臣正二位長屋王、私學左道、欲傾國家、　癸酉、令王自盡、其室二品吉備內親王、及男從四位下膳夫王、无位桑田王、葛木王、鉤取王等、同亦自縊、

〔日本靈異記〕(中)恃己高德刑賤形沙彌以現得惡死緣第一

諸樂宮御宇大八島國勝寶應眞聖武太上天皇、發大誓願、以天平元年己巳春二月八日、於左京元興寺、修大法會供養三寶、勅太政大臣正二位長屋親王、而任於供衆僧之司、(○中略)逕之二日、有嫉妬人、讒天皇奏、長屋謀傾社稷、將奪國位、爰天心瞋怒遣軍兵陣之、親王自念无罪而被囚執、此決定死

レバ、先立申候、六道ノ衢ニテ必可ㇾ奉ㇾ參會ㇾ候トテ、直垂ノ紐ヲ解、頸ヲ延テゾ被ㇾ斬ケル、其後四人ナガラ被ㇾ斬ケリ、皆能ゾ見ヘタリケル、次日陣頭ヘ持セテ參ル、左衞門尉信忠是レヲ實撿ス、獄門ニハ不ㇾ被ㇾ掛、穀倉院ノ南ナル池ノハタヘゾ被ㇾ捨ケル、是ハ故院ノ爲御中陰故トゾ皆人申ケル、

〔平治物語 三〕惡源太被ㇾ誅事

惡源太〇源義平六波羅ニテ宣ケルハ、我敵ニウカヾヒ寄ムトテ、或時ハ馬ヲ扣ヘテ門ニイミ、或時ハ履ヲ捧ゲテ緣ニ至テ相近付カントセシガ、運盡ヌレバ本意ヲ達セズシテ、生ナガラ囚ルヽ事、無ㇾ力次第也、義平程ノ大事ノ敵ヲ、暫モ置事不ㇾ可、然、速ニ被ㇾ誅ヨトテ、其後ハ物モ宣ハズ、軈テ難波三郎ニ仰テ、六條河原ニ於テ被ㇾ誅ケルニ、敷皮ノ上ニナヲリテ、些モ臆セズ被ㇾ申ケルハ、敵ナガラモ義平程ノ者ヲ、白晝ニ河原ニテ被ㇾ斬事コソ遺恨ナレ、保元ニ多ノ源平ノ兵共被ㇾ誅シカ共、晝ハ西山東山ノ片邊ニテ斬、適河原ニテキラルヽヲモ、夜ニ入テコソ被ㇾ斬ケルナレ、弓矢取身ノ習ハ、今日ハ人ノ上、明日ハ身ノ上ニテ有物ヲ、平家ノヤツバラハ、上下共ニ、都テ無ㇾ情物モ知ラヌ者共也、去年熊野詣ノ時、路次ニ馳向テ討ムト云ヒシヲ、スカシ寄テ一度ニ滅サント、信賴ト云不覺人ガ云シニ付テ、今日懸ル耻ヲ見ルコソ口惜ケレ、湯淺藤代ノ邊ニテ取籠テ討カ、安部野ノ方ニ待受テ、一人モ不ㇾ殘討取ベカリシ物ヲト宣ヘバ、難波三郎是ハ何ノ後言ヲイハセ申候ゾト申セバ、惡源太アザ咲ヒ、イシウ云タリ、實我爲ニハ諍ハヌ後言ゾ、ヤレ己ハ義平ガ首討程ノ者カ、バレノ所作ゾ能クキレ、惡ク切ナラバ、シヤ頰ニクヒ付カンズルゾト宣ヘバ、オコノ事ヲ被ㇾ仰物哉、何條我手ニ懸奉ラン首ノ、爭ツラニハクヒ付給ハント申セバ、誠ニ只今クヒ付カンズルニハ非ズ、終ニハ必イカヅチト成テ蹴殺サンズルゾトテ、殊更首高ラカニ差擧給ヘバ、經房大刀ヲ拔後ヘ廻レバ、能切トテニラマレタル眼ザシ、實凡人トハ不ㇾ見ケリ、

〔百練抄 八高倉〕治承四年正月廿七日、左右獄囚人十五人於ㇾ山科ㇾ斬首、又廿一人切ㇾ手、

ラズトモ討セヨカシ、縦綸言重クシテ助ル事コソ不叶トモ、ナド有ノ儘ニハ知セヌゾ、又誠ニ助ケント思ハヾ、我身ニ替テモナドカ可申宥、義朝ガ入道ヲ憑テ來タランヲバ、爲義ガ命ニ替テモ助ケテン、○中略只ウラメシキハ、此事ヲ始ヨリナド知セヌゾトテ、念佛百返計トナヘツヽ、更ニ命ヲ惜ム氣色モナク、程經バ定テ爲義ガ頸斬ル見ントテ、雜人ナドモ立込ベシ、疾疾切レト宣ヘバ、鎌田次郎大刀ヲ拔テ後ヘ廻リケルガ、相傳ノ主ノ頸キラン事心憂クテ、涙ニ暗テ大刀ノ當所モ覺エネバ、持タル大刀ヲ人ニ與フ、其時、願諸同法者、臨終正念佛、見彌陀來迎、往生安樂國ト唱テ、終ニ被斬レ給ヒニケリ、頸實撿ノ後、義朝ニ給テ、可孝養由被仰下ケレバ、正清是ヲ請取テ圓覺寺ニ納メ墓ヲ建壇ヲツキ、卒都婆ナドヲ被造立レテ、ヤウ〳〵ノ孝養ヲゾ被致レケル、此爲義ハ妾多カリケレバ、腹々ニ男女ノ子共四十二人ゾ有ケル、或ハ熊野別當ノヨメニナシ、或ハ住吉ノ神主ニ養ハセナドシテ、此彼ニゾ置ケル、昨日官使能景ニ仰テ、多田藏人大夫賴憲ガ正親町富小路ノ家ヲ被追捕レケルニ、賴憲ガ郎等四五人未ダ家ニ有シカバ、命モ不惜、散々ニ戰ケル間、能景ガ兵多ク討レ、疵ヲ被リテ引退、其間ニ屋ニ火懸、烟ノ中ニテ皆自害シテケリ、今日十九日○保元元年七月源平七十餘人、頸ヲキラレケルコソ淺猿ケレ、

〔保元物語　二〕義朝弟共被誅事

去程ニ、左馬頭○源義朝ニ重テ宣旨下リケルハ、汝ガ弟共、皆尋出シ進スベシ、殊ニ爲朝トヤランハ、實讎ニ矢ヲ放サンナド申ケル奇怪ノ者也、搦捕テ誅スベシト也、義朝畏テ、方々ヘ兵ヲ差使テ被尋ケレバ、此彼ヨリ尋出シテケリ、爲朝ハ敵寄スルト見ケレバ、何地トモナク失ニケリ、四郎左衞門賴賢、掃部助賴仲、六郎爲宗、七郎爲成、九郎爲仲、已上五人ノ人々、都ヘハ不可入ト被仰下ケレバ、直ニ舟岡山ヘ率テ行ケル、五人ナガラ馬ヨリ下テ並居タリ、最後ノ水ヲ與ルニ、各疊紙ニテ是ヲ受ケル中ニ、掃部助賴仲、此水ヲ取テ唇ヲ押拭テ申ケルハ、○中略又不覺ノ涙ノ先立ンモ無本意思侍

〔保元物語 二〕爲義最後ノ事

去程ニ、爲義法師ガ頸ヲ可刎由、左馬頭（○爲義子義朝）ニ被宣下ケレバ、可宥置旨ヤウ〳〵ニ兩度迄被奏聞ケレ共、主上（○後白河）逆鱗有テ、清盛既ニ伯父ヲ誅ス、何ゾ緩怠セシメン、甥ナヲシ子ノ如シト云ヘリ、伯父豈父ニ異ナランヤ、速ニ可誅戮、若猶令違背メバ、清盛以下ノ武士ニ可被仰付由、勅定重カリシカバ、無力涙ヲ押ヘテ、鎌田次郎ニ宣ケルハ、綸言如此、依之判官殿（○爲義）ヲ討奉ラバ、五逆罪ノ其一ヲ犯スベシ、罪ニ恐テ宣旨ヲ背カバ、忽ニ違勅ノ者ト成ヌベシ、可如何ト有シカバ、正清畏テ、申ニ恐候ヘ共愚ナル事ヲ御諚候物哉、私ノ合戰ニ討奉ラセ給ハンコソ其罪モ候ハンズレ、（○中略）是ハ朝敵ト成給ヘバ、終ニハ遁ル間敷御身也、縦御承ハリニテ候ハズトモ、可時日過御命ナラヌニ取テハ、御方ニ侍ラハセ給ヒナガラ、人手ニ懸テ御覽候ハンヨリ、同ハ御手ニ懸進ラサセ給テ、後ノ御孝養ヲコソ能々セサセ給ハンズレ、何カ苦ク候ベキト申セバ、サラバ汝計ヘトテ、泣泣内ヘ入給フ、卽鎌田、入道ノ方ニ參リ、當時都ニハ平氏ノ蜘蛛（○恐蛛蜘）（誤字）トヤランノ樣ニテ御坐マセバ、東國ヘ被下セ給候也、判官殿ハ先立奉ラントテ、御迎ニ進セラレテ候トテ車差寄タレバ、サラバ今一度八幡ヘ參テ、御暇乞申スベカリシ物ヲトテ、南ノ方ヲ伏拜テ纔テ車ニ乘給フ、七條朱雀ニ白木ノ輿ヲ舁居タリ、是ハ輿ヨリ乘移ラ給ハン處ヲ討奉ラン支度也、其時秦野次郎延景、鎌田ニ向テ申ケルハ御邊ノ計ヒ誤レリ、人ノ身ニハ一期ノ終リヲ以テ一大事トセリ、ソレヲ暗々ト殺シ奉ラン事無情侍リ、只有ノ儘ニ知セ奉テ、最後ノ御念佛ヲモ進メ申シ、又ハ可被仰置御事モナドカナカルベキト云ヘバ、正清尤可然シ、物ヲ思ハセ進ラセジト存テ、加樣ニ計ヒタレ共、誠ニ我アヤマリナリト申ケレバ、延景參リテ、誠ニハ關東御下向ニテハ候ハズ、守殿宣旨ヲ奉リテ、正清大刀取ニテ失ヒ進スベキニテ候、再三歎御申シ候シカ共、勅定重ク候間、無力被申付候、心閑ニ御念佛候ベシト申タリシカバ、口惜キ事哉、爲義程ノ者ヲタバカ

雄、額田部湯坐連、名闕秦吾寺等凡十四人、被絞者九人、被流者十五人、

〔日本書紀天武二十八〕元年八月甲申、命高市皇子、宣近江群臣犯狀、則重罪八人坐極刑、仍斬右大臣中臣連金於淺井田根、

〔日本紀略桓武〕延曆四年九月丙辰、車駕至自平城云々、種繼已薨、乃詔有司搜捕其賊、　庚申、縛桴麻呂等、遣就柩前告其狀、然後斷決、

〔續古事談二臣節〕コノ人源○經成納言ヲノゾミケル時、八幡ニマウデヽ祈ケリ、獄ヲオサムルアヒダ、死罪ニ行物オボユルトコロ三十人、コレ君ノタメナリ、ソノ事道理ヲ背バ、コノタビノ所望カナフベカラズ、モシコトハリニソムカズバカナフベシト申ケルニ、中納言ニ成ニケリ、サレバ、神明道理ヲステ給ハヌナルベシ、八幡ノ別當戒信カタリケルナリ、

〔古事談四勇士〕宗形宮內卿入道師綱、陸奧守ニテ下向之時、中略○基衡、件郡地頭大莊司季春ニ合心テ禦グ處、國司猶帶宣旨推入之間、已放矢及合戰了、守方被疵者甚多シ、基衡カクハシツレドモ、背宣旨射國司与、依恐存恨季春云、依無先例、難追返國司、背宣旨之條、非无違勅之恐、イカヾスベキト云云、季春云、今仰𩀱皆存知ノコト也、主君命依難奉背、於一矢者射候了、然者君者不知食之體ニテ召已頸可被遣國司之許也、其上ハ定無爲候歟ト云、基衡乍拭淚諾了、基衡申於守云、基衡一切不知事候、郡地頭凡依无先例致自由之狼藉候、於今者不可及仔細、季春已召取畢、早賜御使、於其前可刎頸ト云、依之國司遣撿非違使所司代云々、季春已將出タリ、四十餘許男、肥滿美麗ナルガ、積遠雁水干小袴ニ紅衣ヲ著タリ、打物取タルモノ廿人許圍繞シテ、切手ハ、ケセンノ彌太郎ト云モノ也、出立テ擬切頸之間、大莊司云、切損給ナ、刀ハイヅレゾト問ケレバ、切手云、昆次郎大夫ガ大津越ゾト云ケレバ、サテハ心安ト云テ被切ケリ、部類五人同斬ト、大津越トハ、人ヲ引居テ切ニ左右ノ臂ノ上ヲ乍中骨不掛切ヲ云也、

絞　　斬

鬪訟律云、故殺人者斬、疏云、非因鬪爭、無事而殺、是名故殺、

按之、罪重、近代之例、依無刑部省斷、於使廳禁獄、依爲死罪不定徒年限、

〔日本書紀舒明二十三〕天皇〇推古崩、九月推古三十三年葬禮畢之、嗣位未定、〇中略大臣〇蘇我馬子將殺境部臣、而興兵遣之、境部臣聞軍至、率仲子阿椰出于門、坐胡床而待、時軍至、乃令來目物部伊區比以絞之、父子共死、乃埋同處、

〔日本書紀孝德二十五〕大化五年三月戊辰、蘇我臣日向、日向字身刺、譖倉山田大臣於皇太子、〇中略蘇我大臣既與三男一女、俱自經死、　甲戌、坐蘇我山田大臣而被戮者、〇中略凡十四人、被絞者九人、被流者十五人、

〔日本書紀齊明二十六〕四年十一月戊子、皇太子〇天智親問有間皇子曰、何故謀反、答曰、天與赤兄〇蘇我知、吾全不解、　庚寅、遣丹比小澤連國襲、絞有間皇子於藤白坂、是日斬鹽屋連鯯魚、舍人新田部連米麻呂於藤白坂、鹽屋連鯯魚臨誅言、願令右手作國寶器、流守君大石於上毛野國、坂合部連藥於尾張國、

〔續日本紀稱德二十六〕天平神護元年八月庚申朔、從三位和氣王坐謀反誅、〇中略和氣者、一品舍人親王之孫、正三位御原王之子也、勝寶七歲、賜姓岡眞人、任因幡掾、寶字二年、追尊舍人親王曰崇道盡敬皇帝、至是復屬籍、授從四位下、八年至參議從三位兵部卿、于時皇統無嗣、未有其人、而紀朝臣益女以巫鬼著、得幸和氣、心挾窺覦、厚賂幣物、〇中略於是人等心疑、頗泄其事、和氣知之、其夜逃竄、索獲於率河社中、流伊豆國、到于山背國相樂郡絞之、埋于狛野、又絞益女於綴喜郡松井村、

〔日本書紀雄略十四〕九年二月甲子朔、遣凡河內直香賜與采女、祠胸方神、香賜與采女既至壇所、香賜此云舸拕夫、及將行事、奸其采女、天皇聞之曰、祠神祈福、可不愼歟、乃遣難波日鷹吉士將誅之、時香賜即逃亡不在、天皇復遣弓削連豐穗、普求國內縣、遂於三島郡藍原、執而斬焉、

〔古事記顯宗下〕初天皇逢難逃時、求奪其御粮猪甘老人、是得求喚上、而斬於飛鳥河之河原、

〔日本書紀孝德二十五〕大化五年三月甲戌、坐蘇我山田大臣而被戮者、田口臣筑紫、耳梨道德、高田醜此云之渠

（頭、相去三許丈、〇牛字恐平誤）囚人當中間而跪、（自兩司南去三四許丈）物部分陣防援、（列四左右北向中上、）立定錄進於兩司中間、北面宜告犯狀罪名示衆、衆人稱唯畢還於本列、即丞召兩司仰云、依例行之、兩司稱唯、以還本列、轉告物部、物部稱唯案劒戮之、（絞者用綱）其殘骸者、令授近親斂之、若無親者、令兩司埋城外閑地、兼樹牓示、（注國郡姓名）

〔延喜式二十九刑部〕凡應戮罪人者、注預事物部歷名進省、即官人共率供事、

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

內外五位不合同等事（中略〇）

外五位

右考限選敍、一依令條、（中略〇）其有斷罪行刑之日、不得乘馬辭訣、及自盡私家、自餘依令、（中略〇）以前（中略〇）奉勅宜依前件永爲恒式、

神龜五年三月廿八日

〔西宮記臨時十〕成勘文事（附囚名帳　役畢勘文）

口傳云　一可入死罪之囚者減贓布數、縱雖及百千反、不足十五反、猶處流刑、是應例也、舊役畢勘文致此用意、是恤十五年役之故也、況亦格文云、不悔前過、亦有犯終身配役、不可赦免者、二盜者不注其由也、但律條所指、盜神璽者絞、若贓數顯露、聞達天聽等之類、縱雖入死罪、偏稱應例、難進止歟、但見舊勘文等、無十五年役者、隨狀可斟酌也、又舊刑官斷罪或注贓色目、或止注贓布若干、是設合宜、仍用件例云々、

一有賊盜人持杖、并傷殺人等、只就贓數勘之、不知餘罪、殺人之罪、雖重於盜罪、偏依盜罪、不知殺罪、是使等所行來也、雖乖法意、自爲流例也、但持杖強盜不得財者、猶依本條可處遠流歟、雖無贓不可默以免之色也、

〔法曹至要抄上罪科〕一故殺事

〔令義解獄〕凡決大辟罪、五位以上、在京者刑部少輔以上監決、謂雖是自盡之人、亦在其家監決也、在外者次官以上監決、餘並少輔及次官以下監決、從立春至秋分、不得奏決死刑、謂奏決者、獄云奏而決也、若犯惡逆以上、及家人奴婢殺主者、不拘此令、其大祀及齋日、朔望晦、上下弦、廿四氣、假日、並不得奏決死刑、在京決死囚、皆令彈正衞士府監決、若囚有寃枉灼然者、停決奏聞、謂彈正奏聞、

〔唐律疏議斷獄三十〕諸立春以後、秋分以前、決死刑者徒一年、其所犯雖不待時、若於斷屠月及禁殺日而決者、各杖六十、待時而違者、加二等、

疏議曰、依獄官令、從立春至秋分、不得奏決死刑、違者徒一年、若犯惡逆以上、及奴婢部曲殺主者、不拘此令、其大祭祀及致齋、朔望上下弦、二十四氣、雨未晴、夜未明、斷屠月日及假日、並不得奏決死刑、其所犯雖不待時、若於斷屠月、謂正月五月九月、及禁殺日、謂每月十直日、月一日八日十四日十五日十八日二十三日二十四日二十八日二十九日三十日、雖不待時、於此月日亦不得決死刑、違而決者、各杖六十、待時而違者、謂秋分以前、立春以後、正月五月九月、及十直日、不得行刑、故違時日者、加二等、合杖八十、其正月五月九月有閏者、令文但云正月五月九月斷屠、卽有閏者、各同正月、亦不得奏決死刑、

〔日本後紀二十四嵯峨〕弘仁六年十一月丁亥、勅、延暦格云、斷決囚徒、令有正文、順時肅殺、不可虧違、或過秋分節、延入立春、是既乖法式、都無准的、宜死罪者年終斷訖者、今於行死刑、秋冬無妨、而頃年有司、必至年終、乃奏刑書、施行之後、計其行程、合入春月、以到遠國、宜自今以後、十月初斷奏訖、但始自十一月一日至于十二月十日、常行祭事、不得令京官此限內決死刑、

〔延喜式四十一彈正〕凡決死囚、皆令臺左右衞門府監決、若囚有寃枉灼然者、停決奏聞、

〔延喜式二十九刑部〕凡決死囚者、省預移送彈正衞門、其日會集市司南門、共監行決、其彈正左衞門官人、列門外東、各西面北上、相去一許丈、刑部右衞門官人、列門外西、各東面北上、相去同上、市獄兩司、列於南庭、自衞府南去四許丈、各北面中上、東西牛

報之日、不得馳驛行下、謂是嫌其遠殺、故下令馳下、

〔唐律疏議三十斷獄〕諸獄結竟、徒以上、各呼囚及其家屬、具告罪名、仍取囚服辯、若不服者、聽其自理、更爲審詳、違者笞五十、死罪杖二百、

疏議曰、獄結竟、謂徒以上刑名、長官同斷案、已判訖、徒流及死罪、各呼囚及其家屬、具告所斷之罪名、仍取囚服辯、其家人親屬、唯正告示罪名、不須問其服不、囚若不服、聽其自理、依不服之狀、更爲審詳、若不告家屬罪名、或不取囚服辯、及不爲審詳、流徒罪、並笞五十、死罪杖一百、

〔唐六典六刑部〕若犯惡逆已上、及部曲奴婢殺主者、唯一覆奏、決大辟罪、皆防援至刑所、囚一人防援二十人、每一人加五人、五品已上、非惡逆者聽乘車、並官給酒食、聽親故辭訣、宣告犯狀、仍日未後乃行刑、囚在外奏報之日、不得馳驛行下、

〔令義解十獄〕凡決大辟罪、皆於市、五位以上及皇親、犯非惡逆以上、聽自盡於家、謂令罪人在家自死也、七位以上及婦人、犯非斬者絞於隱處、謂不於市歷人衆之中、而別死於隱辟之處、

〔唐律疏議三十斷獄〕諸斷罪應絞而斬、應斬而絞、徒一年、自盡亦如之、失者減二等、即絞訖別加害者、杖一百、

疏議曰、犯罪應絞而斬、應斬而絞、徒一年、以其刑名改易、故科其罪、自盡亦如之、依獄官令、五品以上犯非惡逆以上、聽自盡於家、若應自盡而絞、斬應絞斬而令自盡、亦合徒一年、故云、亦如之、失者減二等、謂原情非故者、合杖九十、即絞訖別加害者、謂絞已致斃、別加拉幹折腰之類者、杖一百、

〔政事要略二十五〕斷獄律云、立春以後、秋分以前、決死刑者、徒一年、依獄令、從立春至秋分不得奏決死刑、違者徒一年、其所犯雖不待時、若於禁殺日而決者、杖六十、准令、犯惡逆以上、及家人奴婢殺主者、不待時、其大祀及齋日、朔望、上下弦、二十四氣、假日、並不得奏決死刑、雖不待時、於此日亦不得決死刑、違而決者杖六十、待時違者加二等、謂秋分以後、立春以前、於禁殺日而故決者、加二等、合杖八十、集解云、禁殺日、疏云、每月一日、八日、十四日、十五日、十八日、廿三日、廿四日、廿八日、廿九日、卅日、是、○又見貞永式目抄、

〔唐六典刑部六〕凡決大辟罪、在京者、行決之司五覆奏、在外者刑部三覆奏、在京者、決前一日二覆奏、決日三覆奏、在外者初日一覆奏、後日再覆奏、縱臨時有勅不許覆奏、亦準此覆奏、若犯惡逆已上、及部曲奴婢殺主者、唯一覆奏、

〔唐律疏議三十斷獄三〕諸死罪囚、不待覆奏報下而決者、流二千里、卽奏報應決者、聽三日乃行刑、若限未滿而行刑者、徒一年、卽過限違一日、杖一百、二日加一等、

疏議曰、死罪囚、謂奏畫已訖、應行刑者、皆三覆奏訖、然始下決、若不待覆奏報下而輒行決者、流二千里、卽奏報應決者、謂奏訖報下、應行決者、聽三日乃行刑、稱日者以百刻、須以符到三日乃行刑、若限未滿三日而行刑者、徒一年、卽過限違一日、杖一百、二日加一等、在外旣無漏刻、但取日周晬時爲限、

〔周禮註疏三十六秋官司寇〕司刺掌三刺三宥三赦之灋、以贊司寇聽獄訟、〇中略壹宥曰不識、再宥曰過失、三宥曰遺忘、註、鄭司農云、不識、謂愚民無所識則宥之、過失、若今律過失殺人不坐死、玄謂、識審也、不審、若今仇讎當報甲、見乙誠以爲甲而殺之者、過失、若擧刃欲斫伐而軼中人者、遺忘、若間帷薄忘有在焉、而以兵矢投射之、

〔禮記註疏十三王制〕大司寇、以獄之成告於王、王命三公參聽之、註、王使三公復與司寇及正共平之、重刑也、周禮王欲免之、乃命公會其期、三公以獄之成告於王、王三又然後制刑、

〔令義解十獄〕凡死罪雖已奏報、猶訴冤枉、事有可疑、可推覆者、以狀奏聞、遣使馳驛撿校、

〔令義解十獄〕凡斷罪行刑之日、謂徒以上結獄竟、具告罪名、是爲斷罪之日也、依律、結獄竟、徒以上、具告罪名、違者笞卅、故杖罪以下、不入此條也、死罪行決、是爲刑行(刑行恐行刑誤)之日、並宣告犯狀、決大辟罪囚、皆防援着枷至刑所、謂是據庶人、其議請減人、及初位以上若婦人等、下條別有文也、囚一人、防援廿人、每一囚加五人、五位以上、及皇親、聽乘馬、聽親故辭訣、謂親、親屬也、故、故舊也、訣、別也、仍日未後行刑、卽囚身在外者奏

岐天皇ノ朝ニ、捕鳥部萬ノ屍ヲ斬リテ八段トシ、八國ニ梟セシコトアリ、是梟首ノ類ナランヽ、又光仁天皇ノ朝ニ格殺ノ制ヲ立テタリ、又火刑アリ、火ニ投ジテ殺スナリ、雄略天皇ノ朝ヨリ見エタリ、

名稱

〔類聚名義抄 八刀〕刑 コロハツミ

〔禮記註疏 十三王制〕刑者侀也、侀者成也、一成而不可變、故君子盡心焉、註、侀更也、侀音刑、

〔律疏 名例〕死罪二 絞、斬、

〔釋名 八釋喪制〕斫頭曰斬、斬腰曰腰斬、斬暫也、暫加兵即斷也、車裂曰轘、轘散也、肢體分散也、

〔漢書 二十三刑法志〕聖人因天秩而制五禮、因天討而作五刑、大刑用甲兵、師古曰、以大兵誅亂、其次用斧鉞、韋昭曰、斬刑也、中刑用刀鋸、韋昭曰、刀割刑、鋸刖刑也、其次用鑽鑿、韋昭曰、鑽髕刑也、鑿黥刑也、師古曰、鑽鑽去其髕骨也、鑽音子端反、髕音頻忍反、薄刑用鞭朴、

〔唐書 五十六刑法〕自隋以前、死刑有五、曰罄、絞、斬、梟、裂、

死刑初見

〔古事記 下仁德〕爾速總別王、女鳥王、共逃退、〇中略御軍追到而殺也、其將軍山部大楯連、取其女鳥王所纏御手之玉釧而與己妻、此時之後、將爲豐樂之時、氏氏之女等、皆朝參、爾大楯連之妻、以其王之玉釧、纏于己手而參赴、於是大后石之日賣命、自取大御酒柏、賜諸氏氏之女等、爾大后見知其玉釧、不賜御酒柏、乃引退、召出其夫大楯連以詔之、其王等因无禮而退賜、是者無異事耳、夫之奴乎所纏己君之御手玉釧、於膚熅剝持來、卽與己妻、乃給死刑也、

〔政事要略 八十二〕日本紀云、素盞烏尊自天而降、到於出雲簸之川上、卽斬八歧大蛇、此象斬刑、

行決法

〔令義解 十獄〕凡決大辟罪、謂辟者罪也、死刑爲大辟也、在京者、行決之司、三覆奏、決前一日一覆奏、決日再覆奏、謂依律、奏報應決者、聽三日乃行刑、是三覆奏訖、更經三日、乃聽行刑、今案此條、再奏之日、卽得行決、二法不同、遲速頓異、凡用刑之道、非是好殺、捨速從遲、是爲優長、卽下條、奏報之日、不得馳驛行下、是亦緩死之義、在外者、符下日、三覆奏、初日一覆奏、後日再覆奏、若犯惡逆以上、唯一覆奏、家人奴婢殺主、不須覆奏、其京國決囚日、雅樂寮停音樂、

古事類苑

法律部五

上編

死刑

死刑ハ五刑中ノ極刑ニテ、又大辟トモ云ヒテ、絞、斬ノ二種アリ、斬ハ首ヲ斬ルナリ、絞ハ頸ヲ縊ルナリ、而シテ斬ヲ特ニ重シトス、凡テ大辟ヲ決スルニハ、在京ハ行決ノ司、決前一日ニ一タビ覆奏シ、決日ニ再ビ覆奏シ、在外ハ符下ル時、初日ニ一タビ覆奏シ、後日ニ再ビ覆奏ス、但シ立春ヨリ秋分マデノ間、及ビ大祀齋日等ニハ死刑ヲ決スルコトヲ得ズ、死囚ヲ決スル日ハ、囚人ヲ市司ノ南庭ニ跪カシメ、彈正、刑部、左右衛門ノ官人監決シ、物部防援シ刑部錄犯狀罪名ヲ宣告シテ衆ニ示シ、物部刑ヲ行フ、但シ絞ハ綱ヲ用キ、斬ハ劍ヲ拔ジテ之ヲ戮シ、其殘骸ハ近親ニ授ケテ斂メシメ、若シ親戚ナキ者ハ、市司、囚獄司ヲシテ城外ノ閑地ニ埋ミテ牓示ヲ樹テシム、又五位以上、及ビ皇親ハ行刑ノ日ニ馬ニ乘リ、親故ノ辭訣スルコトヲ聽シ、其犯罪惡逆以上ニアラザルトキハ、家ニ自盡スルコトヲ聽ス、七位以上、及ビ婦人ノ絞刑ノ如キハ、隱處ニ於テ之ヲ行フナリ、嵯峨天皇ノ朝ニ藤原仲成ヲ誅シテヨリ後、三百四十餘年ノ間、大辟ニ抵ルハナカリシヲ、後白河天皇ノ保元元年ニ、藤原信西ガ奏聞ニ由リテ、源平兩氏ノ人ヲ斬シテヨリ死刑又起レリ、死刑ニハ、又梟首アリ、律條ニハ無キ所ニシテ、首ヲ斬リテ之ヲ矛ニ貫キ、京中ノ大路ヲ行キ、衆人ニ示シテ後ニ獄門ノ前ナル楝ノ樹ニ懸クルヲ云フ、或ハ死屍ノ首ヲ梟スルコトモアリ、梟首ハ邦語ニクシザシト云ヒ、後世ニ獄門ト云ヘリ、崇

古事類苑

法律部五

上編

死刑

肉刑

〔類聚國史八十七刑法〕延暦十二年八月戊辰、遞送筑前國那賀郡人三宅連眞繼於本郷、莫聽入京、以其在京中屢有濫行也、

〔日本後紀五桓武〕延暦十五年七月辛亥、生江臣家道女遞送於本國、家道女越前國足羽郡人、常於市鄽妄說罪福、眩惑百姓、世號曰越優婆夷、

〔類聚國史八十七刑法〕大同四年七月甲子、因幡國人大伴吉成浮宕京下、相替御贖官奴大風麻呂爲犯神事、決杖遞送本國、其大風麻呂配對馬島、

勅還本鄕

かゝづらひてだに、おほやけのかしこまりなる人の、うつしざまにて世中にありふるは、とがをもきわざに、人の國にもし侍なるを、とを〳〵はなちつかはすべきさだめなども侍るなるは、さまことなるつみにあたるべきにこそ侍なれ、にごりなき心にまかせて、つれなくすぐし侍らんもいとはゞかりおほく、これよりおほきなるはぢにのぞまぬさまに、世をのがれなんとおもふ給へたちぬるなど、こまやかに、きこえ給、〔〇中略〕あけはてなばはしたなかるべきにより、いそぎいで給ひぬ、〔〇中略〕御舟にのり給ぬ日ながき比なれば、をひかせさへそひて、まださるの時ばかりに、かの浦につき給ぬ、

〔權記〕長保六年〔〇寛弘元年〕九月廿日辛丑、左大臣〔〇藤原道長〕於陣被定申諸卿分配亦被定申放免可着本貫之事、畿外者各尋附貫外國之輩可追、至于京戸者、可如何哉、諸卿定申云、不可追者京戸者新改居附貫外國、但此事可遺〔〇遺恐遣字誤〕法、放免之後各還本貫為平民、勤役而逢恩原免者、改京戸貫外土、可入移鄕之例歟、但放免猶成事仰使聽能可被誡歟云々、

〔百練抄四十四條〕文暦元年七月二日己亥、花山院侍從入道、〔故中納言家經息、俗名敎雅、〕稱念佛上人、舊傾城之類、被行過法、仍令却離件法師處遠流、餘黨等可追却於洛外之由、被下宣旨、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁制京戸子弟居住外國事

右齊衡二年六月廿五日格偁、延暦十六年四月廿九日、下太宰府符偁、從二位行大納言神王宣、奉勅、括責浮宕先已下知、今聞秩滿解任之人、王臣子孫之徒、結黨群居、同惡相濟、佞媚官人、威凌百姓、妨農奪業、為蠹良深、宜嚴撿括、勒還本鄕、情願留住、便早編附、若有犯者、不論蔭贖、科違勅罪移配遠處、士人容而不申、官司知而不糺者、亦與同罪者、〔〇中略〕

寛平三年九月十一日

日翌日龍歸之間、按察使相具所少將、各着淨衣折烏帽子騎馬、達四宮川原之由所申也、太相國同方不可然之由有議、可被追他方云々、

〔源平盛衰記十二〕大臣以下流罪事

按察使大納言資賢、子息左少將通家、孫右少將雅賢三人、京中ヲ可追出由、博士判官中原章貞ニ被下知ケレバ、追立檢非違使來テ、遲々ト責追ケルコソイト悲ケレ、〇中略三人夜中ニ出給ケル上ニ、落ル涙ニカキクレテ、行先モ見エ給ハズ、心ウヤ配所ヲ何所トダニ定ヌ事ヨト悲クテ、九重ノ内ヲ紛レ出テ、八重立雲ノ外ヘ、足ニ任テ遥々彼大江山生野ノ道ヲ越過テ、丹波國村雲ト云所ニゾ暫サスラヒ給ケル、後ニハ召返サレテ信濃國奥郡ヘ流サレ給ケリ、

〔古今和歌集十八雜〕田むらの〇文德御時に、事にあたりて、つの國のすまといふところにこもり侍けるに、宮のうちに侍ける人につかはしける、　在原行平朝臣

わくらはにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ

〇按ズルニ、在原行平ノ須磨ニ移リ居リシハ、勅ヲ蒙リテ退キシカ、自ラ避ケシカ、未ダ詳ナラザレドモ、姑ク此ニ載ス、

〔源氏物語十二須磨〕世中いとわづらはしく、はしたなきことのみまされば、せめてしらずがほにありへても、是よりまさることもやとおぼしなりぬ、かのすまは昔こそ人のすみかなどもありけれ、いまはいと里ばなれ心すごくて、あまの家だに稀になどきゝ給へど、人しげくひたゝけたらんすまゐは、いとほいなかるべし、さりとて都をとをざからんも、ふる里おぼつかなかるべきを、人わろくぞ覺しみだるゝ、〇中略二三日かねておほいとのに、よにかくれてわたりたまへり、〇中略とあることもかゝることも、さきの世のむくひにこそ侍なれば、いひもてゆけば、たゞみづから〇源氏のをこたりになん侍る、さしてかく官爵をとられず、あさはかなることに

違使大夫ノ尉藤原忠親、幷ニ右衞門志縣犬養爲政等ヲ彼ノ國ニ下シ遣シ、事ノ發ヲ勘ヘ被レ問ケルニ、致忠進デ咎ニ落ニケレバ、罪名ヲ被レ勘テ、明法勘ヘ申スニ隨テ、致忠ヲ遠ク佐渡國ニ被レ流ニケリ、然レバ古モ今モ如レ此ク咎有ラバ、公家必ズ罪ヲ行ヒ給ハ常ノ事也トナム語リ傳ヘタルト也、

〔續日本紀 稱德二十九〕神護景雲三年五月壬辰、詔曰、不破內親王者、〇中略論二其所一レ犯、罪合二八虐一、〇中略仍賜二厨眞人厨女姓名一、莫レ令レ在二京中一、

〔續日本紀 桓武三十七〕延曆元年閏正月壬寅、左大辨從三位大伴宿禰家持、右衞士督正四位上阪上大忌寸苅田麻呂、散位正四位下伊勢朝臣老人、從五位下大原眞人美氣、從五位下藤原朝臣繼彥等五人、職事者解二其見任一、散位者移二京外一、並坐二川繼事一也、自餘黨與合三十五人、或川繼姻戚、或平生知友、並亦出二京外一、

〔日本紀略 桓武〕延曆十四年十二月乙酉、配二淡路國一不破內親王移二和泉國一、

〔山槐記〕治承二年正月七日壬寅、今曉巽方彗星出、天文參二陣村一藏人勘解由次官基親奏レ之、〇中略

彗星年々〇中略

天仁三年五月見二東方一〇中略　同月〇閏七月源滿實、幷男遠光移レ鄕、

〔山槐記〕治承三年十一月十八日壬申、子終刻前關白(藤原基房)從一位年卅五、未レ被レ聽二牛車一之人也、被レ遷二太宰權帥一下向給、〇中略

正二位行權大納言兼出羽陸奥按察使源資賢年六十五、去月九日任二大納言一、

從四位上行右近衞權少將源雅賢資賢卿孫

從四位下行右近衞權少將源資時資賢二男已上昨日解官

被レ追レ堺、撿非違使左志淸原季光追レ之、向二合坂關方一云々、翌日撿非違使章貞來云、追二太相國一看督長今

坐及移郷者、並宜放還、

〔日本書紀十一仁徳〕三十八年正月戊寅、立八田皇女為皇后、　七月、天皇與皇后居高臺而避暑、時毎夜自菟餓野有聞鹿鳴、其聲寥亮而悲之、共起可憐之情、及月盡以鹿鳴不聆、爰天皇語皇后曰、當是夕而鹿不鳴、其何由焉、明日猪名縣佐伯部獻苞苴、天皇令膳夫以問曰、其苞苴何物也、對言牡鹿也、問之何處鹿也、曰菟餓野、時天皇以為是苞苴者、必其鳴鹿也、因謂皇后曰、朕比有懷抱、聞鹿聲而慰之、今推佐伯部獲鹿之日夜及山野、即當鳴鹿、其人雖不知朕之愛、以適逢獮獲、猶不得已而有恨、故佐伯部不欲近於皇居、乃令有司移郷于安藝渟田、此今渟田佐伯部之祖也、

〔日本紀略十一一條〕長保元年三月廿六日己卯、召明法博士令宗允正、令勘申前下野守平維衡散位同致頼合戰之罪名、　十二月廿七日丙子、從五位上平維衡、不追位記移郷、從五位下同致頼藤原宗忠追位記、配流隱岐佐渡國、

〔今昔物語二十三〕平維衡同致頼合戰蒙咎語第十三

今昔、前ノ一條院天皇ノ御代ニ、前下野守平ノ維衡ト云兵有リ、此ハ陸奥守貞盛ト云ケル兵ノ孫也、亦其時ニ、平致頼ト云兵有ケル、共ニ道ヲ挑ム間、互ニ惡キ樣ニ聞カスル者共有テ敵ト成ヌ、其領各一國ニ有テ、致頼進テ維衡ヲ討罰ムトシテ合戰スル間、其多ノ子孫伴類幷ニ郎等眷屬等、互ニ射殺ス者其員有リ、然ドモ勝負無シテ、維衡ヲバ左衛門ノ府ノ弓場ニ被下レ、致頼ヲバ右衛門ノ府ノ弓場ニ被下テ、共ニ被勘問ニ皆進テ咎ニ落ニケリ、罪名ヲ被勘ルニ、明法ニ勘ヘ申テ云ク、歷ヒ討タント為タル致頼ガ罪ミ尤重シ、速ニ遠キ處ニ可被流ル、請ケ戰タル維衡ガ罪輕シ、移郷一年可壬シテ此（〇可壬以下五字、一本作ニハカリシテ、ユルサルベキカトイフ、）ニ依テ公家宣旨ヲ被下テ、致頼ヲ遠ク隱岐國ニ被流ヌ、維衡ヲバ淡路國ニ被移郷ヌ、其後亦藤原致忠ト云者有テ、美濃國ノ途中ニシテ、前相模守橘輔政ト云人ノ子幷ニ郎等ドモヲ射殺テケリ、此ニ依テ父、輔政、公ニ訴申スニ、宣旨ヲ被下テ、撿非

丁例、加杖、還依本色、其婦人犯流者、亦留住、婦人之法、例不獨流、故犯流、不配留住、決杖居作、造畜蠱毒應流者、配流如法、造畜蠱毒、所在不容、擯之遠處、絕其根本、故雖婦人、亦須投竄、縱令嫁向中華、事發還從配遣、並依流配之法、三流俱役一年、縱使遇恩、亦不合免、婦人教令造畜者、只得教令坐、不同身自造畜、自依常犯科罪、案賊律、造畜蠱毒者、雖會赦不免、同居不知情亦流、但是諸條犯流、加杖、配隸之色、若有蠱毒、並須配遣、故於雜戶等留住下立制云、造畜蠱毒者、配流如法、斯乃雜戶以下總攝、不獨爲婦人生文、近流、決杖六十、一等加廿、俱役三年、婦人近流、決杖六十、中流、決杖八十、遠流、決杖一百、三流俱役三年、若加役流、杖亦一百、即役四年、既決杖文在上、明須先決後役、若夫犯流配者、聽隨之、至配所免居作、婦人元不合配、以夫流故、所以聽隨、於其本法無流、所以得免居作、從流無杖、不在決例、其有夫在路身死、婦人不合從流、既得却還、不復更合居役、即是總更無罪、有官亦不官當、若犯八虐五流者、各依除名之法、若夫犯流事發、婦知隨、而故犯流以下、聽從官當減贖法、无官者、至配所加杖居作、

〔律疏名例〕凡犯徒應役、而家無兼丁者、○註略妻年廿一以上、同兼丁之限、婦女家、無男夫兼丁者亦同、○註略徒一年加杖一百廿、不居作、一等加廿、流至配所應役者、亦如之、(中略)流至配所應役者、謂流人應合居役、家無兼丁、應加杖者亦准此、

〔律疏名例〕凡犯死罪、非八虐、而祖父母父母老疾應侍、家無二等親成丁者上請、○註略犯流者、權留養親、謂非會赦猶流者、○註略不在赦例、仍准同季流人、未上道、限內會赦者、從赦原、○註略課調依舊、○註略若家有進丁、及親終三月者、即從流、計程會赦者依常例、○註略即至配所應侍、合居作者、亦聽親終三月然後居作、

〔令義解獄〕凡犯徒應配居役者、畿內送京師、在外供當處官役、其犯流應住居作者亦准此、婦人配縫作及舂、

○

移鄕

〔律疏賊盜〕凡殺人應死、會赦免者移鄕、殺人應死、而會赦免罪、而死家有父子祖孫伯叔兄弟者、移鄕、爲戶其有特勅免死者、亦依會赦例移鄕、若群黨共殺、止移下手者及頭首之人、群黨共殺、謂謀殺造意合斬、同謀共鬪以下手重者爲重罪合殺、故云止移下手及頭首之人、其以威力使人殺者、亦合移鄕、若死家無父子祖孫伯叔兄弟、或先他國雜戶及陵戶官戶家人奴婢、若婦人有犯、或殺他主家人奴婢、並不在移限、家人奴婢自相殺者亦同、違者徒一年、謂此以上應移不移、不應移而移者、

〔續日本紀四元明〕慶雲四年七月壬子、天皇卽位於大極殿、詔曰、○中略大赦天下、○中略前後流人非反逆緣

留住

隱岐國、而彼國俘、健岑會赦放免入京、勅宣、殊從寬宥、遷配出雲國、差充防援、遞送前所、

〔扶桑略紀二十九後冷泉〕康平七年九月十六日、前下野守源頼資、配流佐渡國、依燒亡上總介橘惟行館、并殺害人民之愁、　十二月五日、頼資改配流土左國、其使奏聞雪深路嶮難達之由、仍改流也、

〔本朝世紀〕康治二年七月廿五日庚辰、權中納言藤公敎卿參左仗、被仰源頼盛并從三人配流國之事、去比擅興軍兵、猥企合戰之故也、右少辨藤光頼奉行其事、頼盛配佐渡、藤季宗配周防國、藤國長配伊豆國、藤爲員配隱岐國了、　廿九日甲申、又左衞門督藤原公敎卿參仗座、流人源頼盛改佐渡國、配常陸國、從藤國永配佐渡國、參議藤公隆卿、少納言源師國、向結政、行請印事、

〔朝野群載十一廷尉〕從五位下行佐渡守藤原朝臣親實誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩、因准先例、被移遣流人源明國於他國狀

右親實謹撿案内、依莫大成功之勞、拜最少凋弊之國、即召在京之雜掌、粗訪彼國之形勢、種々所陳一一難治、就中先年配流人源明國、貶謫以後、吏務多煩、駈仕課役之民、偏爲奴婢僕從、耕作公領之田、無辨調庸租稅、逐年滋蔓、隨日倍增、近來國司、爲憚彼武威、不奉奏旨趣、靡署箝口、縣邑以目、若猶在國者、何以施政者、今就申狀、伏尋先蹤、下野國流人藤原基宗、有妨國務之由、守惟宗忠重進解狀之時、永保三年七月、早賜官符、移遣陸奥國、是則下州部狹、奥州堺廣之故也、倩以佐渡、比量下野、一島所攝、可及一郡、彼已不堪、是又何爲、雜掌所申、兼被推察、凡流人至配所、更犯罪者徒役相加、其科彌重、憲條明文、法律所指也、昔迁三苗於三危、天下最泰平、今遣明國於他國、境内定靜謐、望請天恩因准先例、被移流人於他國者、試廻龔黄之治術、將贍虚白之編戶矣、親實誠惶誠恐謹言、

大治三年八月廿八日　　從五位下佐渡守藤原朝臣親實

〔律疏名例〕凡雜戶、陵戶、犯流者、近流決杖一百、一等加三十、留住俱役三年、犯加役流者、役四年、此等不同常人外配、合近流者、決杖一百、中流、決杖一百三十、遠流、決杖一百六十、俱留住役三年、犯加役流者、役四年、例云、累徒應役者、不得過四年、故三年徒上、止加一年、以充四年之例、犯徒者、准無兼

ケレバ、冬モ深ク成テ年モ既ニ暮、治承モ三年ニ成ニケリ、

〔金葉和歌集雑十〕あはの守知綱におくれ侍けるころ、ながされたりける人のゆるされてかへりたりけるを聞てよめる、　藤原知信母

ながれてもあふせありけり涙河きえにしあわをなにゝたとへん

放還本鄕

〔續日本紀稱德三十〕寶龜元年八月辛亥、流道鏡弟弓削淨人、淨人男廣方、廣田、廣津於土佐國、

〔續日本紀桓武三十六〕天應元年六月乙巳、勅、河內國若江郡人弓削淨人、廣方、廣田、廣津等、去寶龜元年配土左國、宜宥其罪放還本鄕、但不得入京、

不赦

〔續日本紀聖武十三〕天平十二年六月庚午、勅曰、○中略宜大赦天下、○中略其流人穗積朝臣老、多治比眞人祖人、名負東人、久米連若女等五人、召令入京、大原采女勝○勝一本作勝部鳥女還本鄕、小野王、日奉弟日女、石上乙麻呂、牟々禮大野、中臣宅守、飽海古良比不在赦限、

〔三代實錄陽成四十〕元慶五年七月十三日己未、伴中庸男元孫禪師麻呂遷配石見國、先是因幡介從五位下是主王言、中庸等自隱岐國致此申牒云、貞觀八年配流隱岐國、會去年十二月四日恩赦、彼國司移歸向本貫者、獄令云、流人至配所六載之後聽仕、注曰、其因反逆免死配流、不在此例、中庸身犯大逆、降死配流、自非勅喚、何得言歸、隱岐國司不熟法意、輒令放免、勅特降恩渙、便遷石見、下符因幡國、倂凡流人到於配所、貫附籍帳、刑科究盡、更無會赦、隱岐國司誤從放免、當國抑留、錄狀言上、論之朝憲、可謂明愼令條、譴責隱岐國司曰、不曉法禁、輒放流人、牧宰之任、委付惟重、既無奉法之能、寧叶分憂之寄、特覃春仁、莫處秋典焉、

〔百鍊抄高倉八〕嘉應元年六月廿三日、依上皇○後白河御逆修初七日、被行非常赦幷被召返流人十五人、但與福寺前別當惠信、長谷寺前別當宗覺等、不被召返、依本寺訴也、

遷配

〔三代實錄淸和十〕貞觀七年五月十三日癸巳、右京職言、右京人伴健岑、承和九年七月廿八日謀反、配流

清盛ニ被申ケルハ、成經ガ事ヲ宰相ノ痛ク歎キ申サルヽ、コソ不便ニ侍レ、御産ノ御祈ニ非常ノ大赦行ハレテ、丹波少將其中ニ入ラルベクヤ候ラン、宰相ノ申サルヽ如ク無雙ノ御祈タルベシ、人ノ思ヒ歎キヲ休メ物ノ所望ヲ叶ヘサセ給ナバ、皇子御誕生有テ家門ノ榮花モイヨ〳〵開ケメト相存ズ、〇中略樣々ニ宥被申タレバ、入道今度ハ事ノ外ニ和ヒテ、去バ俊寛康頼ハ如何ト宣ケリ、其モ同罪トテ同配所ナレバ、倶ニ御免アラメト申レケリ、〇中略七月上旬ニ丹波少將召返セトテ六波羅ヨリ使アリ、入道ノ侍ニ丹左衞門尉基安ト云者也、宰相ノ許ヨリモ私ノ使ヲ相添ラレタリ、

康頼熊野詣附祝言事

六波羅ノ使近付寄テ、是ハ丹左衞門尉基安ト申者ニ侍ル、六波羅殿ヨリ赦免ノ御教書候、丹波少將殿ニ進上セントテ云フ、人々餘リノ嬉サニ只夢ノ心地ゾセラレケル、成經是ニ侍リトテ出合レタリ、基安立文二通取出テ進スル、一通ハ平宰相ノ私ノ消息也、少將バカリ見之、一通ハ太政入道ノ免狀也、判官入道披之讀ニ云、

依中宮御産御祈禱被行非常大赦之內、薩摩方硫黃島流人丹波少將成經、幷平判官康頼法師可歸洛之由御氣色所候也、仍執達如件、

七月三日

トハ有ケレ共、俊寛僧都ト云フ四ノ文字コソ無リケレ、執行ハ御教書取上テヒロゲツ卷ツ披ツ千度百度シケレドモ、カヽヌバナジカハ有ベキナレバ、頓テ伏倒レ絕入ケルコソ無慙ナレ、〇中略執行ヲバ打捨テ、少將モ判官入道モ急ギケルコソ悲ケレ、〇中略少將ハ九月中旬ニ島ヲ出テ、〇中略同廿日餘リニゾ九國ノ地ヘハ著給フ、肥前國鹿瀨庄ハ私ニハ味木庄トモ云ケリ、件ノ所ハ舅平宰相ノ知行也、爰ニ暫ク逗留シテ日來ノツカレヲモイタハリ給ヘリ、湯沐髮スヽギナドセラレ

已上同二年五月十七日配流、同寺惡僧、

宗賢薩摩　玄信壹岐　覺賢對馬

已上仁安三年五月三日配流、高野僧、

長息下野　良惠周防　圓喜阿波

同年六月廿六日配流興福寺惡僧、

〔源平盛衰記七〕成親卿流罪事

大納言ノ中納言ニテ御坐シ時、尾張國守ニテ去嘉應元年冬ノ比、目代ニテ衞門尉政友ヲ當國へ被ㇾ下ケルガ、美濃國杭瀨河ニテ宿ヲ取、山門領平野庄ノ神人蕑ヲ賣テ出來レリ、政友是ヲ買ントテ直ノ高下ヲ論ジテ、樣々ニナブル程ニ、蕑ニ墨ヲゾ付タリケル、斯ケレバ神人等憤起テ、山門ニ擧登テ致二訴訟一間、衆徒及二奏聞一、聖斷遲々ニ依テ、同年十二月廿四日ニ、大衆等日吉ノ神輿ヲ頂戴シテ下洛ス、武士ニ仰テ被ㇾ防シカ共、神輿ヲ建禮門ノ前ニ奉二振居一、國司成親卿ヲ流罪ナリ、目代政友ヲ可ㇾ被二禁獄一之由訴申ケレバ、成親卿ハ備中國へ流罪、政友ヲバ禁獄之由被二仰下一、卽西ノ朱雀マデ被ㇾ出タリシガ共、同廿八日ニ被二召返一、同晦日本位ニ復シ、中納言ニ成返テ、嘉應二年正月五日、右衞門督ヲ兼シテ、撿非違使ノ別當ニ成給フ、

〔源平盛衰記九〕宰相申二預丹波少將一事

中宮〇建禮門院五月〇治承二年ニテ御帶賜御坐シテ、六月廿八日、吉日トテ御著帶アリ、御懷妊ノ事、定マラセ給ケレバ、御產平安王子御誕生ノ御祈內外ニ付テ頻也、平宰相〇敎盛折節ヲ得テ小松殿〇平重盛ニ被二參申一シケルハ、中宮御產ノ御祈ニ、定メテ樣々ノ攘災行ハレズラン、成經ガ事、今度申宥ラレナンヤ、何事ニモ勝レタル御祈タルベシ、サラバ御產モ平カニ皇子モ御誕生疑アラジト泣口說給フ、大臣ハ誰モ子ハ悲シキ物ナレバ誠ニサゾ覺スラン、心ノ及ン程ハ申見ベシトテ、入道殿〇平

去程ニ彼人々ノ隱謀次第ニ顯レテ、君モ罪ナキ由被聞食レケレバ、信西ガ子共皆以被召返、御政ニ付被仰合方ナキ儘ニ、彼禪門ヲゾ忍バセ給ケル、師仲卿モ終ニ通ル、所ナクシテ、播磨中將成憲ノ配所室ノ八島ヘゾ被遣レケル、伏見源中納言〇師仲三河ノ八橋ヲ渡ルトテ、

夢ニダニ角テ三河ノ八橋ヲ渡ルベシトハ思ハザリシヲ、ト讀レタリシヲ上皇〇後白河聞召シテ、哀ニ被思召レケレバ、召返セトゾ仰ナリケル、誠ニ詠歌ノ德ナルベシ、其後新大納言經宗モ阿波國ヨリ被召返テ右大臣ニナル、人アハノ大臣トゾ申タル、又大宮左大臣伊通公、世ニ仕バ興アル事ヲ聞物哉、昔コソ黍ノ大臣有ケンナレ、今粟ノ大臣出來タリ、何カ又稗ノ大臣出來ヌラント笑ハレケリ、大饗行ハルベカリケルニ、尊者ニ此左大臣請シ奉リケレバ、使者ノ聞ヲモ不憚、粟ノ大臣上リテ旅籠振舞セラル、ナ、伊通ハ得參ラジトゾ被申ケル、別當入道〇平惟方ハ御憤深クシテ被召返ル聞敷由聞エケレバ、心細クヤ思ハレケン、故鄉ヘ一首ノ歌ヲゾ被送ケル、

此瀨ニモ沈ト聞バ涙河流レシヨリモヌル、袖哉、ト讀タリシヲ、聞人哀ヲ催シ、君モ感ジ被思食レケレバ、終ニ蒙勅免テ被上洛レケルト也、〇又見續世繼、古今著聞集、十訓抄、

〔兵範記〕嘉應元年六月廿三日戊申、詔、〇中略其大赦天下、〇中略

嘉應元年六月廿三日　御畫三字〇廿三日中略

流人中被召返僧侶十五人

僧辨禪越後　辨鏡阿波

已上永万元年八月十二日配流、與力僧正惠信、

最慶薩摩　玄榮壹岐　玄延大隅

已上同年九月六日配流延曆寺惡僧、

實勝隱岐　敎中周防　良運豐前　圓慶筑前

〔類聚國史八十七刑法〕延暦二十一年六月丁未、勅令下伊豫國配流人五百枝王聽上レ居二府下一、

〔日本後紀十二桓武〕延暦廿四年三月己丑、免下從四位下吉備朝臣泉、並五百枝王、藤原朝臣淨岡、藤原朝臣雄依、山上船主等罪上入レ京、

〔日本後紀十二桓武〕延暦廿四年三月壬辰、免二伊豆國流人氷上眞人河繼罪一、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年二月辛酉、召二流人小野篁一、　六月辛酉、流人小野篁入京、被二黄衣一以拜謝、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年二月癸亥、勅喚二流人伴有仁、刀伎雄貞一、

〔文德實錄十〕天安二年五月乙亥、宮内卿從三位高枝王薨、高枝王、四品中務卿伊豫親王第二子也、爲レ人寛弘、頗習二文書一、大同初親王遭レ害、三子遠配、辛苦流離、不レ知二生計一、弘仁改暦、聖皇踐祚、哀二親王無一レ辜、諸子窮毒、殊降二恩赦一、免レ罪入レ京、返二給前年被レ沒資財田宅一、高枝與二兄弟一相議、均二分男女一、時人悲二歎之一、

〔三代實錄二十九清和〕貞觀十八年六月八日癸丑、庶人伴中庸、犯二大逆罪一被レ配二流隱岐國一、中庸子禪師麻呂、元孫、叔孫、其禪師麻呂年十二歳、身在二京師一、詔遣二父配所一、元孫叔孫二人、隨レ父在二配所一、召二還京師一、

〔中右記〕大治四年六月廿五日壬申、戌刻許、別當右衛門督實行卿參二仗座一、可レ召二返流人一由被二仰下一、〇中略聊依レ有レ所レ念、被レ召二返流人等一、

源明國天永二年十一月十九日、流二左土國一、依レ切二三人首一也、經二十九年一、

仁寛永久元年十月廿二日、配二流伊豆國一、依二無反一也、經二十七年一、

大學助源高行永久四年三月十三日、配二流安藝國一、依レ欲レ射二殺宰相中將信通卿一也、經二十四年一、

〔百練抄七二條〕永暦元年二月廿日、院〇後白河仰二清盛朝臣一、搦二召權大納言經宗、別當惟方卿於禁裏中一、三月十一日、前大納言經宗入道惟方卿等配流、

應保二年三月七日九日等流人經宗卿已下、被レ召二返之一、

〔平治物語三〕經宗惟方被レ處二遠流一事同被レ召返事

配流、不レ在二赦例一、

〔續日本紀二文武〕大寶二年四月乙巳、飛驒國獻二神馬一、○中略獲レ瑞僧隆觀免レ罪入レ京、流僧幸甚之子也

○按ズルニ、僧隆觀ハ流人ノ子ニシテ、既ニ貫ヲ流地ニ移シヽガ、赦ニ遭ヒテ京ニ入リシナリ、流人ノ子モ亦赦ニ遭フニアラザレバ、入京スルヲ得ザリシナラン、

〔續日本紀四元明〕慶雲四年秋七月壬子、天皇卽二位於大極殿一、詔曰、○中略大赦天下、○中略前後流人、非二反逆緣坐及移鄕一者、並宜二放還一、

〔續日本紀十四聖武〕天平十三年九月乙卯、勅以二京都新遷一、大二赦天下一、○中略其流人未レ達二前所一、已達二前所一、及年滿已編附爲二百姓一、亦咸釋放還、其在二流所一生子孫、父母已亡無レ可二隨還一者、亦不レ限二年之遠近一、情願還皆錄レ名聞奏、但不レ願レ還者恣聽レ之、

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年四月壬寅、徵二鹽燒王一、○天平十四年配二流於伊豆島一令レ入レ京、十八年閏九月乙酉、无位鹽燒王、授二本位正四位下一、

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年九月乙丑、徵二和氣淸麻呂、廣虫於備後大隅一、詣二京師一、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜元年十一月乙酉、勅先後逆黨一切皆從二原宥一、其情願留二住配處一者、宜二恣聽一レ之、如窮乏之徒、無二資歸一レ鄕者、路次諸國、量給二食馬一、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年十一月丙午、無位安倍朝臣彌夫人、寶字八年告二元凶伏一レ誅、以慰二衆情一、因授二從四位下一、景雲三年坐二縣犬養姉女一配流、至レ是原レ罪、降授二從五位下一、

〔續日本紀三十七桓武〕延曆二年三月丙申、右大臣從二位兼行近衞大將皇太子傅藤原朝臣田麻呂薨、○中略天平十二年、坐二兄廣嗣事一、流二於隱伎一、十四年宥レ罪徵還、○中略延曆元年進爲二右大臣一、授二從二位一、尋加二正二位一、薨時年六十二、

〔日本紀略桓武〕延曆十四年十二月壬午、免二流人一令二入京一、

放流人

以後聽仕、〔謂仕者、仕官、即所貫及京師、皆聽通仕、其蠱毒流人者、須絶其根類、故不聽仕也、〕其犯反逆縁坐流、及因反逆免死配流、不在此例、〔謂其謀大逆從者、亦准此也、〕即本犯不應流、而特配流者、〔謂元非除名之色、故三載聽仕、若是應除名者、亦依六載之法、又案律、本犯至免官、而特除名者、年限敍法、亦同除名之例、凡配流之人官位勳位、皆悉追收、故特配流者、名爲特除名也、〕三載以後聽仕、有蔭者、各依本犯收敍法、〔謂蔭者、父祖之蔭、及除名收敍之蔭也、〕其解見任、及非除名移郷者、年限准考解例、〔謂依考課令、考解者、類年聽敍是也、文云、非除名移郷者、准考解例、即知移郷之色、悉解見任也、〕

〔唐六典六刑部〕凡〇中略流移之人、〇中略至六載然後聽仕、

其犯反逆縁坐流、及免死役流、不在此例、

即本犯不應流、而特配流者、三載以後聽仕、

有資者各依本犯收敍法、其解見任、及非除名移郷者、年限敍法皆準考解之例、

〔拾遺和歌集八雜〕ながされ侍ける道にてよみ侍ける　贈太政大臣菅〇中略

うき木といふ心を

なかれ木もみとせありてはあひみてん世のうき事ぞかへらざりける

〔律疏名例〕凡流配人在道會赦、計行程過限者、不得以赦原、〔行程者、依令、馬(馬下恐脱日字)七十里、步人五十里、但馬及步人同行、遲速不等者、並從遲者爲限、謂從上道日、總計行程、有違者、假有配近流、准步程合四十日、若未滿四十日、會赦、不問已行遠近、並從赦原、從上道日、總計行程、有違者、即不在赦限、〕有故者不用此律、〔謂病患死亡、及請假之類、准令臨時聽給暇者、及前有阻難、不可得行、聽除假故、不入程限、故云不用此律、〕若程內至配所者、亦從赦原、〔假有人配近流、合四十日程、四十日限前已至配所、而遇恩赦者亦免、〕逃亡者雖在程內、亦不在免限、即逃者身死、所隨家口、仍准上法聽還、〔行程之內逃亡、雖遇赦不合赦免、即逃者身死、所隨家口、雖已附籍、六年內願還者、准上條聽還、〕

〔禁秘御抄下〕召還流人、

宣下後觸彼家差使召返也、

〔日本書紀二十五孝德〕大化二年三月辛巳、大赦天下、〇中略宜遣使者、諸國流人、及獄中囚、一皆放捨、

〔日本書紀二十九天武〕五年八月壬子、詔曰、死刑沒官三流、並除一等、徒罪以下已發覺未發覺、悉赦之、唯既

ヘ、急御登山アラマシカバ、衆徒コレ程ノ骨ヲバヨモ折侍ラジ、其ニ貫首ハ三千衆徒ニ代テ、流罪ノ宣旨ヲ蒙ラセ給フ上ハ、衆徒貫首ニ代リ奉テ、命ヲ失ハン事、全クウレヘニ非ズ、唯トク〳〵御輿ニ召レヨヤトテ、御手ヲムズト取奉引立、御輿ニ被舁乘、座主ハ戰々乘給ケリ、祐慶ヤガテ先輿ヲ仕ル、東塔南谷妙光坊ノ大和尙阿闍梨仙性ト云者、後陣ヲ舁、國分ノ毘沙門堂ヨリ鳥ノ飛ガ如、風ノ吹樣ニ、粟津原、打出ノ濱、大津、三井寺、志賀ノ里、先陣後陣劣ラズコソ見エケレ共、仙性ガ後陣ニハ、時々大衆代リケリ、祐慶ガ先陣ハ初ヨリ物具脫事モナク、高紐ニ甲ヲ懸、輿ノ轅ニ長刀ノ柄折ヨ摧ヨト把具シ、坂本早尾舁越シテサシモ嶮キ東坂、一度モ代ラズ、講堂ノ庭ニ舁付タリ、

殺流人

〔百錬抄（八高倉）〕治承元年六月九日、流人加賀守師高、右衞門尉師親、左兵衞尉師平等被誅、件師高在尾張國、入道相國（○平淸盛）仰彼國家人等令追討之、相互合戰、死者多、

〔源平盛衰記（八）〕大納言入道覺去事

大納言入道（○藤原成親、治承元年六月被流於備前國、）ヲバ、急ギ可失ト、六波羅ヨリ難波ガ許ヘ被下知タリケレバ、直ニ足手ヲキリ奉、剣首コト、流石カハユクヤ思ケン、不知シテ奉失トテ、深キ磯ノ底ニ竄ヲ植テ、突落シテゾ殺シケル、只一度ニ剣首タラバ、尋常ノ習ニテ有ベキニ、心ウクモ計タリケリト、無情コソ云ケレ、其ヨリ取擧テ、備前備中ノ境ナル有木ノ別所ト云所ニ送捨、形ノ如穴ヲ堀石ヲ疊テ奉納、

流人自殺

〔兵範記〕保元二年七月十六日己卯、今夕被成流人官符、源賴行被流安藝國可發軍兵之罪云々、上卿右衞門督經宗令成官符於仗座、被內覽奏聞了、次參議師仲卿、少納言通能等向結政、於官方座行請印云々、參議着兩大弁座中央座、少納言着右中弁座如例、史生於庭上捺印云々、十七日庚戌、源賴行、自西七條邊領送使檢非違使信澄追立之間、殺害番長了、又自害了、

流人還仕

〔令義解（十獄）〕凡流移人（移人、謂本犯除名者、依律、故殺人獄成者、雖會赦猶除名、是爲本犯除名者、其鬪殺除名訖、會赦移鄕者、亦准此法也、）至配所六載

周防國言、秋實申云、貞觀八年九月十三日、被配流壹岐島、逢元慶四年十二月四日恩赦、放免歸來、秋實偸脫配所、輙到此土、仍投(○投恐從字誤)其身、謹請處分者、至是差宛防援、還著本所、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年九月廿一日壬寅、太政官下符五畿内七道諸國、令認索流人楊雄、先是楊雄犯罪、配流安房國、國宰言、脫配所而逃亡、楊雄者仲野親王之孫、胤世之男也、

〔本朝世紀〕康和元年五月十八日庚申、權中納言公實卿參入、被行配流事、源除子、(流人仲宗妻土佐國)同追子、(除子同妹國)散位惟宗經允、(陰陽大夫常陸國)藤原時永、(仲宗郎等同國)除子等相從、仲宗久在配所、今稱上洛由有其聞、所被行也、(家曰、不尊法家之勘文、又無公卿之僉議、)

〔玉海〕安元三年五月廿二日辛酉、去夜前僧正明雲被配流伊豆國了、 廿三日壬戌、申剋人傳云、前座主下向之間、大衆於勢多邊奪取、登山了、

〔源平盛衰記五〕澄憲賜血脈事

去程ニ滿山ノ大衆殘留モナク、東坂本ニ下ツヽ、十禪師御前ニテ各涙ヲ流シ僉議シケルハ、當山五十五代イマダ天台座主流罪ノ例ヲ聞ズ、此時始テ顯密ノ主ヲ失ヒ、修學ノ窓ヲ閉事、唯當時ノ失面目ノミニ非、末代マデモ口惜カルベシ、(○中略)サラバ迎奉レヤトテ、袈裟ヲバ甲冑ニ脫替テ、或ハ渺々タル志賀唐崎ノ浦路ニ歩引唱衆徒モアリ、或ハ漫々タル山田矢橋ノ湖上ニ舟ニ竿サス大衆モアリ、角テ國分寺ノ毘沙門堂ヘ參ケレバ、稠ゲナリツル追立ノ官人モ見エズ、兩送使モ失ヒケリ、座主(○明雲)ハ此有樣ヲ御覽ジテ、大ニ恐給被仰ケルハ、(○中略)昔コソ三千人ノ貫首タリシガ、今ハ係身ニ成テ、再我山ニ還登事ダニ難有、イカヾ無止事修學者、智慧深大德達ニ、被舁捧上ベキ、屩ナンド云物ヲハキテ、同ジ樣ニ歩連テコソト宣ヘバ、西塔法師ニ戒淨坊相模阿闍梨祐慶ハ三塔無雙ノ惡僧也、(○中略)衆徒ノ中ヲ指越指越座主ノ御前ニ參テ、大長刀杖ニ突テ、座主ヲハタト奉睨申ケルハ、加樣ニ御心弱渡ラセ給ヘバコソ、係憂目ヲモ御覽ジ、山門ニ樣ナキ疵ヲモ付サセ給

トゾ書タリケル、〇中略同十七日ニ、所司等ヲ以福原ノ禪門大相國ヘゾ送遣ケル、廿日前座主ノ罪科ノ事可レ有二僉議一トテ、太政大臣以下ノ公卿十三人參内アリ、陣ノ座ニ著テ其定有ケレ共、冥ニハ七社權現ノ照覽モ難レ測、顯ニハ三千衆徒ノ鬱憤モ恐シクヤオボシケン、諸卿各口ヲ閉テ申旨モナカリケリ、其中ニ八條中納言長方卿、其時ハ左大辨宰相ニテ御坐ケルガ被レ申ケルハ、法家ノ勘文ニ任テ、死罪一等ヲ減ジテ雖レ可レ被二遠流一、前座主僧正ハ、顯密兼學淨行持律ノ上、公家ニハ一乘圓宗御師範也、法皇ニハ圓頓受戒ノ和尚タリ、御經ノ師御戒ノ師ニヤ、被レ行二重科一事、冥ノ照覽難レ測、還俗遠流ヲ可レ被レ有カト、無レ所レ憚ル被レ申ケレバ、當座ノ公卿、各長方卿ノ被二申定一之義ニ同スト被レ申ケレ共、法皇ノ御憤深カリケレバ、終ニ流罪ニ定リケリ、太政入道モ此事角ト承ケレバ、申止進セントテ、被レ參タレ共、御風ノ氣トテ御前ヘモ召レズ、御憤リノ深キヨト心得テ出給ニケリ、廿一日ニ、前座主明雲僧正ヲバ、大納言大夫藤井松枝ト名ヲ改テ、伊豆國ヘ流罪ト定ル、

〔吾妻鏡四〕元暦二年〇文治元年七月廿六日丁未、前律師忠快爲二流人一、一昨日到二著伊豆國小河郷一之由、宗茂申レ之、是平家縁坐也、

〔後撰和歌集十九離別〕善祐法師の、伊豆のくにになかされ侍けるに、　いせ

別てはいつあいみんとおもふらんかきりあるよのいのちともなし

〔後拾遺和歌集十七雜三〕静範法師、やはたの宮の事にかゝりて、伊豆國になかされて、又のとし五月にうちの大貳三位のもとにつかはしける、　藤原兼房朝臣

五月やみこゝひのもりの子規人しれすのみなきわたるかな

流人死亡

〔令義解十獄〕凡囚死无二親戚一者、謂無レ有二服之親一者皆於二閑地一權埋、立二牓於上一記二其姓名一、仍下二本屬一、即流移人在レ路、及流徒在レ役死者准レ此、

流人逃亡

〔三代實錄四十四陽成〕元慶七年十二月廿六日戊午、勅令下周防國司、還中流人伴秋實於本配所壹岐島上、先是

中納言藤原朝臣宗家〇 定申云、大略同長方朝臣議、但大治年中、春日行幸之時、興福寺權別當濟勧賞、
了、五月之比、彼寺衆徒訴申之、而有仗議、依爲隆卿定申、神今食以後可有沙汰之由被仰下、賞爵雖異、
今度射神輿事、解謝本社之後可有勅定歟、
左兵衛督藤原朝臣成範〇 定申云、同長方朝臣議、尋推據例、可被計行之條、同左近衛中將藤原朝臣定
申、
權中納言藤原朝臣實綱〇 左近衛中將藤原朝臣實守〇 等定申云、如勘狀者、所當罪科無所遁、任法可被
行歟、但圓宗之敎法、是超餘乘、台嶽之護持久被一天、擇其耆德被補座主、無被行流罪之例、豈無犯法
輩之故歟、猶爲菩薩戒和尙之者、還俗之條、可有思慮、尋推據例、可被計行、非常之斷、人主專之、輕重之
間、宜奉勅定、
皇太后宮權大夫藤原朝臣朝方〇 定申云、法家勘所當罪狀了、科斷之條可在勅定、
右近衛中將藤原朝臣實宗〇 定申云、所當罪科、大都見法家勘狀、此上若可被宥行者、只可有聖斷、凡罪
勅罪而有輕重者、依勅斷而已、是所存弛張之間、只有勅定、

安元三年五月廿日　長方朝臣 弁官執筆

廿二日辛酉、參大理、去夕前座主明雲被流伊豆國了、進使志重成自白川房相副、向一切經別所、重成
猶相副譴責云々、

〔源平盛衰記 五〕山門奏狀事

同安元三年五月十五日ニ、前座主明雲僧正減死罪一等、可被遠流之由、法家勘申之旨、風聞有ケレバ、衆
徒捧奏狀云、

延暦寺三千大衆法師等誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩早被停止前座主明雲配流幷私領沒官子細事〇中略

應令還俗前僧正法印大和尚位惠信、權大僧都法眼和尚位宗覺、傳燈大法師玄明維勝等事

右從二位行中納言兼左衛門督藤原朝臣隆季宣、奉勅、件惠信等坐事配流國々、宜仰彼省先令還俗者、省宜承知依宣行之、符到奉行、

左少弁爲親、大夫史隆職宿禰加判、

惠信伊豆、宗覺土左、玄明隱岐、維勝佐渡、

〔山槐記〕承安五年○安元元年八月廿四日壬申、晩頭藏人左衛門權佐光雅、奉仰示送曰、今聞有可被仰下事、可令參陣、懸紙曰流人事也者、○中略、延暦寺惡徒大法師辨圓、仰治部省令還俗、仰本寺令召返度縁、宜處中流者、○中略、又曰、中流國、伊豫信濃兩國注申、而伊豫爲院御沙汰、信濃可宜歟之由、且職事所申合也、如何、予曰、職事内々被示其旨者、早可遣信濃也、持來官符、入宣一枚、配流事、一枚、領送使事、予披見之返給、外記伺氣色、仰可持向結政之由、外記稱唯退、是又無内覽奏聞文也、

〔清獬眼抄凶事〕山座主明雲配流事

後清錄記云、安元三年五月廿日己未、今日前座主明雲可被配流否事有陣定、公卿大相國師長、右府兼實、大納言隆季、中納言宗家、成範、忠親、實綱、參議朝方、實宗、實守、長方、等可被流之由令定申了、

法家勘申前僧正明雲罪名之事

太政大臣、○師長、右衛門督藤原朝臣、○忠親、右大辨長方朝臣定申云、法家勘所當罪狀畢、減一等配流不可及異儀歟、但其罪涉謀反之由勘申之、雖理可然事、起自訴訟爲蒙裁報、催衆徒令參陣頭、其間狼藉事、若出不圖偏難處謀反歟、雖然衆徒騒動被結構之由、既以有露顯者、豈遁霜刑、須任法被行之處、明雲以一乘妙法奉授公家、以菩薩淨戒奉授法皇、而忽令還俗處流刑之條、可及豫議哉、宜在勅定、

右大臣○兼實、中宮大夫藤原朝臣○隆季、定申云、大略同長方朝臣定申、爲菩薩戒和尚之者、處死罪之條、爲圓宗如何、冥之照覽難量者歟、

〔百練抄高倉八〕承安三年四月廿九日、高尾上人文覺賜撿非違使、依狂氣也、 五月十六日、被流伊豆國、

〔玉海〕承安三年四月廿九日辛卯、高尾聖人文覺參院中、眼前所望千石庄依無許容吐種々惡言、殆放言朝家云々、仍北面輩承仰搦捕之凌礫給撿非違使云々、是又天魔之所爲也、

〔源平盛衰記十八〕文覺流罪事

公卿僉議アリテ、此僧〇文覺ヲ京中ニ置テハ惡カリナントテ、伊豆ノ國ヘ流罪ノ由ニテ、當時ノ國務ナリケレバ、源三位入道ノ子息仲綱ニ被仰附ヌ、

〔百練抄土御門十一〕正治元年三月十九日、文覺上人配流佐渡國、

〔百練抄鳥羽五〕永久元年十一月二十二日、諸卿定申阿闍梨仁寛罪名、配流伊豆國、黨類同處流罪、是去四日院御所有落書、仁寛相語勝覺僧都大童子千手丸、欲危國家事、依露顯遣撿非違使盛重所搦取也、

〔百練抄崇德六〕大治元年十一月七日、阿闍梨承玄幷僧妙心還俗配流、依有奉呪咀女院〇待賢門院之聞也、去四日被追捕之、

〔百練抄高倉八〕承安三年十月九日、法眼覺興配流播磨國、依燒多武峯也、

〔兵範記〕仁安二年五月十三日庚戌、今夕有陣定、去三月十日夜、興福寺前別當前法務僧正惠信、大僧都宗覺、僧正房僧亮君玄明、肥前君維勝以下、數多惡賊打入興福寺中、燒失喜多院松室圓城房幷寺外人家、殺害學衆堂衆寺僧等趣、宣下法家令勘申罪名事也、左大臣經宗源大納言雅通、按察使公通、皇后宮大夫實定、左衞門督隆季、權中納言忠親、左大弁雅賴、參議親範、家通僉議、左大弁執筆云々、 十五日壬子、晩頭左衞門督隆季卿、依召參着仗座、藏人右衞門權佐經房宣下流人事、次上卿仰左少弁爲親令作官符、次仰撿非違使等云々、

太政官符治部省

厭道流

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜六年五月己酉、從四位上陰陽頭兼安藝守大津連大浦卒、○中略神護元年以黨和氣王、除宿禰姓、左遷日向守、尋解見任、卽留彼國、寶龜初原罪入京、任陰陽頭、

〔百練抄七二條〕應保二年六月廿三日、資賢卿、通家朝臣、時忠、範忠之配流、不勘罪名、人傾之、是奉呪咀主上於賀茂社之由、露顯之故也、

〔百練抄七二條〕永萬元年九月十四日、流人時忠召返、

〔百練抄八高倉〕嘉應元年十二月廿八日、權中納言右衞門督時忠別當藏人頭權右中辨信範等、解官配流、時忠出雲、信範備後、是成親卿依衆徒訴配流之間、彼兩人有奏事不實之由、有御咎、緣坐蒙解官、　二年二月六日、流人時忠信範可召返、又權中納言成親卿、可解却見任之由宣下、各依山門申請也、　十二月八日、時忠信範等復本位、

〔百練抄十後鳥羽〕文治元年五月廿日壬寅、權大納言兼房卿參入、宣下流人等、前大納言時忠卿能登、前内藏頭信基備後、

〔吾妻鏡九〕文治五年三月五日丁未、前平大納言時忠薨、去月廿四日未剋、於能登國配所薨之由、今日達關東、

〔百練抄八高倉〕嘉應元年十二月廿三日、延曆寺衆徒、奉具日吉神輿參大内、是權中納言成親卿知行尾張國目代右衞門尉政友、與神民不慮鬪亂事出來、爲訴申也、於院召公卿議定、政友可候獄所之由雖被仰、衆徒猶不承引叫喚、　廿四日、權中納言成親卿解官、配流備中國、政友賜獄所、衆徒成悅、奉迎神輿歸山、　廿八日、藤原成親卿可召還之由宣下、卅日還任本官、

〔百練抄八高倉〕治承元年六月一日、入道大相國平清盛召取權大納言成親、右近少將成經、左衞門尉師光法師、法名西光禁固西八條亭、各上皇後白河恩寵之輩也、成親卿已下有密謀之由、源行綱告言入道相國云云、○中略於成親卿者遣備前國、　二日、成親卿送備前國、七月九日薨彼國、

十七日丙寅、常胤相伴一弱冠、進御前、〇源頼朝云、以之可被用今日御贈物云云、是陸奥六郎義隆男、號毛利冠者頼隆也、著紺村濃直垂、加小具足、跪常胤之傍、見其氣色給、尤可謂源氏之胤子、仍感之、忽請常胤之座上給、父義隆者去平治元年十二月於天台山龍華越、奉爲故左典厩弃命、于時頼隆產生之後、僅五十餘日也、而被處件緣坐、永曆元年二月、仰常胤配下總國云云、

〔源平盛衰記〕二十八 顯眞一萬部法華經事

五月〇壽永元年十九日藏人左少辨光長、宣旨ヲ奉テ叡山ノ惡徒永雲薩摩國ニ配流、顯眞ハ土佐國ヘゾ被遣ケル、是ハ高倉宮〇以仁王ノ御子、幷ニ伊豆守仲綱ガ子息ヲ、木曾義仲ガ許ヘ下シ奉リケル罪科トゾ聞エケル、〇下略

〔吾妻鏡〕四 元曆二年〇文治元年六月二日癸丑、去月廿日被下配流官符、上卿源中納言通親、參陣、頭辨光雅朝臣仰之云云、其交名目錄、今日到著鎌倉、流人、

前大納言時忠能登　前内藏頭信基備後
前左中將時實周防　前兵部權少輔尹明出雲
法印大僧都良弘阿波　權少僧都全眞安藝
權律師忠快伊豆　法眼能圓備中
法眼行明常陸

便流任國

〔續日本紀〕二十 孝謙 天平寶字元年七月庚戌、詔〇中略信濃國守佐伯大成、土左國守大伴古慈斐二人並便流任國、

〔續日本紀〕三十四 光仁 寶龜八年八月丁酉、大和守從三位大伴宿禰古慈斐薨、〇中略勝寶年中累遷從四位上衞門督、俄遷出雲守、自見疎外、意常鬱々、紫微内相藤原仲滿、誣以誹謗、左降土左守、促令之任、未幾、勝寶八歲之亂、便流土左、天皇宥罪入京、以其舊老授從三位、薨時年八十三、

正五位下行左衛門佐平業房昨日解官配流伊豆國、追使右志中原重成、而業房失在所、翌日行向仁和寺之由風聞、仍重成向彼所云々、

〔百錬抄八高倉〕治承四年五月十五日、法皇○後白河第三宮號三條宮、新院(高倉)御舍弟、御名以仁、改源以光、配流土佐國、依有謀反之聞也、檢非違使源兼綱右尉源光長等、參向御在所追之、○中略宮密々逃出、令向園城寺給、○下略

〔源平盛衰記十三〕熊野新宮軍事

六波羅ニハ公卿殿上人ヒシト並居給タリケルニ、入道○平清盛宣ケルハ、大方發スマジキハ弓取ノ青道心ニテ有ケリ、永暦元年ニ斬ベカリシ頼朝ヲ宥オキ、今係ル大事ヲ被仰下コソ安カラネ、所詮東國ノ勢ノ馳上ラヌ前ニ、宮○以仁王ヲ取奉テ、土佐ノ畑ヘ流シ奉ルベシトゾ被定ケル、上卿ニハ三條大納言實房、職事ニハ藏人左少辨行隆、別當平大納言時忠卿仰ヲ蒙テ、檢非違使源大夫判官兼綱、出羽判官光長、博士判官兼成等ヲ召テ、以仁王ヲ土佐ノ畑ヘ移奉ベキ由仰含○下略

〔平家物語四〕のぶつらかつせんの事

前右大將宗盛の卿、大床に立て、信つらを大庭に引すへさせ、○中略よく〳〵きうもんして、事の子細をたづねとひ、其後河原に引出て、かうべをはねよとぞ宣ひける、信つらもとより勝たる大がうの者なりければ、ゐなをりあざわらつて申けるは、○中略侍ぼんの者、一度申さじと思ひきりてん事を、きうもんに及で、申べきやうなしとて、其後は物も申さず、いくらもなみゐたりける、平家の侍共、あつはれがうの者や、これらをこそ一人當千の兵とも云べけれと、口々に申ければ、其中に或人の申けるは、○中略あつたら男の、きられんずる事のむざんさよと、をしみあへりければ、入道相國いかゞ思はれけん、さらばなきつそとて、はうきのひのへぞながされける、

〔吾妻鏡一〕治承四年八月四日甲申、散位平兼隆前廷尉號山木判官者伊豆國流人也、依父和泉守信兼之訴配于當國山木郷、漸歷年序之後、假平相國禪閤之權、輝威於郡郷、是本自依爲平家一流氏族也、　九月

新大納言〇藤原成親ト俊寛僧都トハ宗人ノ事、丹波少將〇成經成親卿ノ嫡子ナレバ、罪科實ニ難レ遁シ、首ヲ切ラレ給ハヌ事ハ小松大臣〇平重盛ノ御助ケ也、康頼ガ無類ニナル事ハ何ノ罪ナルラント無慙也、北面ノ輩アマタコソハ被二召誡一レケルニ、他人ハ指モヤハ有ジ、此事ハ同意ノ輩鹿谷ノ評定ノ時、瓶子ノ倒レテ頸ヲ打折タリケルヲ、平氏既ニ倒レタリ、頸ヲ取ニハ過ズトテ樣々振舞タリケレバ、滿座ノ人此秀句ヲ感ジケルニ、西光法師折タル瓶子ヲ取合セテ、猶平氏ノ首取タリ取タリト云ケルヲ、入道〇平清盛聞給テ、カク深キ罪ニハ被レ行ケリ、契淺カラヌ輩コソ其座ニハ有ケメ、何トシテ漏ケルヤラン、後ニコソ行綱ガ讒言トモ聞エシガ、天ヲモ可レ度シ地ヲモ可レ度シ、只不レ可レ度ハ人心ト云ヘリ、ヨク〳〵其ヲ知ズシテ、左右ナク人ニハ人ノ打トクマジキ者ト覺エタリ、丹波少將成經ヲバ福原ヘ召下シ、妹尾太郎〇兼康ニ預置キ、備中國ヘ遣シタリケルヲ、俊寛僧都平判官康頼ニ相具シテ、薩摩方鬼界ガ島ヘゾ被レ放ケル、康頼ハ都ヲ出テ配所ヘ赴ケルガ、小馬ノ林ヲ通ルトテ、

津國ヤコマノ林ヲキテミレバ古ハイマダカハラザリケリ、ト思連ケテ、ヤガテ爰ニテ僧ヲ請シ、出家入道シテ法名性照トゾ云ケル、髮ヲオロシ袈裟ヲ戴クトテ、

終ニカク背ハテケル世中ヲトク捨ザリシ事ゾクヤシキ、剃タル髮ヲ紙ニ裹ミ、此歌ニ取添テ故郷ニ遣シタリケレバ、其妻一目見ツヽ、何トダニモ云ズシテ絶入ケルコソ無慙ナレ、

〔玉海〕治承三年五月三日庚申、權中納言忠親卿着二仗座一被レ行二流人事一、〇中略筑前國住吉社神官三人佐伯昌助伊豆同昌守安房同昌家隠岐前左衛門尉忠清、殺二害舍弟満實一佐渡仰二左少弁兼光一令レ作二官符一、參議實宗卿、少納言仲家向二結政一請印、

〔山槐記〕治承三年十一月十八日壬申、子終剋、前關白藤原基房従一位年卅五、未レ被レ聽二牛車一之人也、被レ遷二太宰權帥一下向給、〇中略

實基養君ニシテ都ニ隱シ置ケリ、今一人ノ男子ハ駿河國ニ香貫ト云者搦出テ平家ヘ奉レバ、希義ト云名ヲ付テ、土佐國氣良ト云所ヘ被流テ御坐ケレバ、氣良冠者トゾ申ケル、兵衞佐ハ伊豆國、兄弟東西ヘ別レ行ク宿業ノ程コソ悲シケレ、

〔百練抄 七近衞〕康治元年正月十九日、散位源盛行、幷妻津守島子、配流土佐國、奉待賢門院(○鳥羽中宮藤原璋子)仰、依奉呪咀國母皇后宮(○鳥羽皇后藤原得子)勘罪名、所處流罪也、件夫婦祗候彼院者也、

〔愚昧記〕仁安元年九月廿六日、自藏人弁(○平時忠)示送云、今日可參陣、有可被仰下事、禮紙云、先日所被勘罪名之義貲等可被配流也者、可參仕之由示了、則引撿日記等抄出次第、又自師尙許借送之次第等了見、秉燭着束帶參內、直着陣外座、(須先着奧座也、然而近代如此也、)藏人弁長方下罪狀仰云、依勘申令配流、予結之即返下、仰可令候官符之由、此間令官人召大外記師尙於軾問可內覽幷奏聞哉否事、件事依有說々也、師尙云、所法指外印文不可內覽幷奏之由所見文書、上古不奏不內覽也、但又可令從御一家例歟、予云、故入道殿大治年中行此事無內覽奏聞、又經信卿度々無之、然者不可奏幷內覽由存知也、答云、尤可然、打任(天ハ)不可心事也、此後少外記某覽官府、乍宮內見之、有三枚、(一枚爲配隱岐、)經即返給了、次召弁早仰可追下之由、次退出、于時亥始、件男等於河內國突凌官使、刃傷火長云々、仍件國司所訴申也、被解狀等先日爲藏人弁奉行下予、又返下了、其後又有其期奏事也、

〔兵範記〕仁安三年八月九日戊戌、今日有配流事、大納言大夫定國、去比欲殺害慈母、罪科露顯、被召籠使廳、法家之所勘處死罪、配流隱岐國、晚頭左衞門督實國候仗座、藏人少輔兼光仰流人事、次上卿仰弁令作官符、次參議成賴卿、少納言定宗、外記等向結政請印、次召付領送使、次仰撿非違使令追京中云々、

〔百練抄 八高倉〕治承元年三月廿八日、院武者所藤原師經、(加賀國目代、國司緣者也、)配流備後國、依天台訴也、

〔源平盛衰記 七〕信俊下向事

父ノ後世弔ラハント被レ申候シガ痛敷候、可レ然樣ニ御計ヒ候ヘカシト申セバ、ソモ賴朝ニ尼ヲ慈悲者トハ誰ガ知セケル、イザーヨ故刑部卿〇平忠盛ノ時ハ多クノ者ヲ申免シヽガ、當時ハ如何侍ラン、扨モ右馬助ニイタク似タラン無慚サヨ、家盛ダニアラバ鶴ニ成テ雲ヲ凌ギ、魚ニ成テ水ニモ入、誠ニ來世ニテモ可レ逢クハ、只今死シテモ行ムト思ゾトヨ、扨イツ可レ被レ斬ニ定マリタルゾト宣ヘバ、十三日トコソ聞エ候ヘト申セバ、叶ハヌマデモ申テコソ見メトテ、小松殿〇平重盛其時ノ勳功ニ伊豫守ニ成給シガ、正月ヨリ左馬頭ニテンジ給ヘルヲヨビ奉テ、賴朝ガ尼ニ付テ命ヲ申助ケヨ、父ノ後世ヲトハントテ申ケルガ、餘ニ不便ニ侍ル、能樣ニ申テ給ヘ、殊ニ家盛ガ幼立ニ少モ不レ違ト聞ケバ、ナツカシウコソ侍レ、右馬助ハソレノ御爲ニモ伯父ゾカシ、賴朝ヲ助ケテ家盛ガ形見ニ尼ニ見セ給ヘト宣ケレバ、重盛參リテ父ニ此由被レ申ケリ、淸盛聞テ池殿ノ御事ハ故殿ノ渡ラセ給フト思奉レバ、如何成アマ逆ノ仰ナリトモ違フベシ、〇ベシ恐マジ誤トコソ存ズレ共、此事ハ由々敷重事也、伏見中納言〇源師仲越後中將〇藤原成親ナド、加樣ナル者ヲバ何十人助置タリトモ大事有マジ、大體弓矢取者ノ子孫ハソレニハ異ルベキ上、義朝ナドガ子共ハ幼ケレドモ可レ有二子細一物ヲ、殊ニ賴朝ハ官加階モ兄ニ超ルハ由々敷所ガアルニヤ、父モ見トガメ侍レバコソ重代ノ中ニモ取分キ、秘藏ノ物具ナド與ヘケメ、傍難二助置一キ物ヲトテ以ノ外ノ氣色也、左馬頭歸參リテ難レ叶キ題目成由被レ申ケレバ、池殿淚ヲ流シテ、〇中略哀尼ガ命ヲ生サントテ思召サバ、兵衛佐ヲ助テ給ヘカシト歎給ヘバ、重盛モ被二迷惑一ケルガ、淚ヲ押ヘテ、左候ハヾ今一度御定ノ趣ヲ申テコソ見候ハメ、同尾張殿ヲモ添被レ申候ヘ、諸共ニ仰ノ由委ク語リ候ハントテ、賴盛ト共ニ重テ此由ヲ被レ申ケレバ、〇中略流罪ニゾ定マリケル、

賴朝遠流事附盛安夢合事

兵衛佐殿ハ尾張國熱田ノ大宮司季範ガ娘腹也、男子二人女子一人ゾ御坐ケル、女子ハ後藤兵衛

憂ニ沈ケリ、〇中略播磨中將成憲ハ、老タル母ト少キ子トヲ振捨テ遠遠ノ境ニ赴ケル、責テノ都ノ餘波惜サニ、所々ニヤスラヒテ行モヤリ給ハザリケルガ、粟田口ノ邊ニ馬ヲ留メテ、

道邊ノ草ノ青葉ニ駒留テ猶古郷ヲ返見ル哉、角テ〇中略下野國府ニ著テ我住ベカナル室ノ八島トテ見遣給ヘバ、烟心細ク上リテ、折カラ感涙トヾメガタク思ハレシカバ、泣々角ゾ聞エケル、

我爲ニ有ケル物ヲ下野ヤ室ノ八島ニ絶ヌ思ハ、愛ヲバ夢ニダニ見ントハ思ハザリシカトモ、今ハ住家ト跡ヲシメ、習ハヌ草ノ庵讐ヘン方モ更ニナシ、〇又見二續世繼一

〔平治物語三〕頼朝生捕事附常盤被落事

斯處ニ同二月九日〇永曆元年義朝ノ三男前右兵衛佐頼朝、尾張守〇平頼盛ノ手ヨリ生捕テ六波羅ニ著給、同次男中宮大夫進朝長ノ頸ヲモ奉ラル、〇中略依テ頼朝ヲバ先宗清ニゾ預置ケル、

頼朝被レ宥二遠流一事附吳越戰事

去程ニ兵衛佐ハ未宗清ガ許ニ御坐ケレバ、尾張守ヨリ丹波藤三國弘ト云小侍一人被レ付ケリ、既ニ今日明日被レ誅給ベシト聞エシカバ、宗清御命助カラントハ思召候ハズヤト申セバ、佐殿去ヌル保元ニ多ノ伯父親類ヲ失ヒ、今度ノ合戰ニ故父討レ、兄弟皆失ヌレバ、備法師ニモ成テ、父祖ノ後世ヲ弔ラハヾヤト思ヘバ、命ハ惜キゾト宣ヘバ、宗清モ哀ニ覺エテ、尾張守ノ母池ノ禪尼ト申ハ、清盛ノ爲ニハ繼母ニテ御坐セ共、重ク執シ給ヘバ、彼方ナドニ付テ申サセ給ハヾ、若御命助リ御坐マス事モ候ベキ物ヲ、彼尼ハ若キヨリ慈悲深キ人ニテ御渡候、其上一日參テ候時、己ガ許ニ頼朝ガアナル、如何成者ゾト問ハセ給シカバ、御年ノ程ヨリ殊外長シヤカニ候、其妻右馬助殿〇平家盛ニイタク似進ラサセ給テ候ト申シカバ、世ニ床シ氣ニ思召タル御氣色ニテコソ候シカト語申ケレバ、ソレモ誰人カ申テ可レ給ト宣ヘバ、左モ思召候ハヾ、叶ハヌ迄モ某申テ見候ハントテ、池殿ヘ參リ何者カ申テ候ヤラン、上ノ大慈悲者ニテ御坐ストテ、哀頼朝ガ命ヲ申助サセ給ヘカシ、

御覽ゼラレヌ者ノ體也、且ハ末代ニ有ガタキ勇士也、暫命ヲ助テ可レ被二遠流一ト議定アリシカバ流罪ニ定リヌ、但息災ニテハ後惡カリナントテ、肘ヲヌキテ伊豆ノ大島ヘ被レ流ケリ、角テ五十餘日シテ肩ツクロヒテ、後ハ少シ弱ク成タレ共、矢束ヲ引事今二ツブセ引マシタレバ、物ノ切ル事昔ニ不レ劣、爲朝宣ケルハ、我清和天皇後胤トシテ八幡太郎孫也、爭先祖ヲバ可レ失、是コソ公家ヨリ給タル領ナレトテ大島ヲ管領スルノミナラズ、都テ五島ヲ打順ヘタリ、是ハ伊豆國住人狩野介茂光ガ領ナレ共、聊モ年貢ヲモ出サズ、○中略都テ島中ニ我郎等ノ外弓矢ヲ不レ置ケリ、昔ノ兵共尋下テ付順ヒシカバ、威勢漸盛ニシテ過行程ニ十年ニゾ成ニケル、

〔平治物語〕〔一〕信西子息被レ定二遠流一事

去程ニ夜モ漸明ケレバ、公卿僉議可レ有トテ、大殿○藤原忠通關白○藤原基實太政大臣宗輔、左大臣伊通已下各參内シ給ヘリ、是ハ少納言入道○信西ノ子息僧俗十二人ノ罪名定申サレン爲也、左大臣伊通公宥被レ申ケルニ依テ、死罪一等ヲ減ジテ遠流ニ被レ處、俗ハ位記ヲ被レ留、僧ハ度緣ヲ取テ還俗セサセラル、先新宰相俊憲出雲國、播磨中將成憲下野國、右中辨貞憲隱岐國、美濃少將長憲阿波國、信濃守惟憲ハ安房國、法眼淨憲ハ丹波國、法橋寛敏ハ上總國、大法師勝憲ハ安藝國、澄憲ハ信濃國、憲耀ハ陸奧國、覺憲ハ伊豫國、明遍ハ越後國トゾ被レ定ケル、

〔平治物語〕〔二〕常盤註進幷信西子息各被レ處二遠流一事

去程ニ少納言入道ノ子共僧俗十二人被二流罪一ケリ、君ノ御爲敢テ不義ヲ不レ存リシ忠臣ノ子共ナレバ、縱信賴義朝ニ被レ流テ配所ニ有ドモ、赦免有テ召コソ可レ被レ返ニ、結句被レ處二流罪一科ノ條何事ゾ難二心得一シト云ヘバ、此人々元ノ如ク被二召仕一ハ、信賴同心ノ事共天聽ニヤ達センズラント恐怖シテ、新大納言經宗、別當惟方ノ勸メナルヲ、天下ノ擾亂ニ紛テ君モ思召誤テケリト心アル人ハ申ケルガ、虛名ハ立セヌ物ナレバ無二幾程一テ被二召返一レ、經宗惟方ノ謀計ハ顯レケルニヤ、終ニ左遷ノ

太政官符　治部省
應令還俗大法師範長事
右正三位行權中納言左兵衛督藤原朝臣忠雅宣、奉勅、範長坐事配流安藝國、宜仰彼省先令還俗省
宜承知、依宣行之、符到奉行、
保元元年八月三日
修理左宮城使正五位下行左大史兼算博士
左辨官正五位下藤原朝臣○中略
此外國々へ流サルヽ人、十四人トゾ聞ヘシ、

〔保元物語〕三　爲朝生捕被處遠流事

去程ニ爲朝ヲ搦テ參タラン者ニハ不次ノ賞アルベシト宣下クダリケルニ、八郎近江國輪田ト云所ニ隱居テ、郎等一人法師ニナシテ乞食サセテ日ヲ送ケリ、筑紫へ可下支度シケルガ、平家ノ侍筑後守家貞大勢ニテ登リケレバ、其程晝ハ深山ニ入テ身ヲ隱シ、夜ハ里ニ出テ食事ヲ營ミケルガ、有漏ノ身ナレバ病出シテ、灸治ナド多クシテ温疾大切ノ間、古キ湯屋ヲ借リテ常ニヲリユヲゾシケル、爰ニ佐渡兵衛重貞ト云者、宜旨ヲ蒙テ國中ヲ尋求ケル處ニ、或者申ケルハ、此程此湯屋ニ居者コソ怪キ人ナレ、大男ノオソロシゲナルガ流石ニ尋常氣也、歳ハ二十許ナルガ、額ニ疵アリ、由々敷ク人ニ忍ブト覺タリト語レバ、九月二日湯屋ニ下ダル時、三十餘騎ニテ押寄テケリ、爲朝眞裸カニテ合木ヲ以テ數多ノ者ヲバ打伏タレ共、大勢ニ取籠ラレテ無云甲斐被搦ニケリ、季實判官請取テ二條ヲ西へ渡ス、白キ水干袴ニ赤キ帷子ヲ著セ髻ニ白櫛ヲゾ指タリケル、北陣ニテ叡覽アリ、公卿殿上人ハ不及申、見物ノ者市ヲナシケリ、面ノ疵ハ合戰ノ日正清ニ被射タリトゾ聞エケル、既ニ被誅ベカリシガ、以前ノ事ハ合戰ノ時節ナレバ力ナシ、事既ニ違期セリ、未ダ

實明早可解官、（除二人上人也、先八幡所司也、）快擧勢源等改徒罪可處遠流者、內大臣移着端座召權左中弁時範朝臣（本奉行弁也）被仰下、件流人事又召大外記師遠、件子族二人可解官由被仰下、流人符六枚外記師安覽上卿、入筥、（季仲常陸、賴嚴隱岐、快譽勢源左渡、又下知周防國官一枚被改之由也、又太宰府一枚並知仰下事□□在可被之由所事、季仲□由下知刑部省、下知刑部省之事、近代流罪之時不被行、今度被副）此官符知何、但可尋事也、抑勢源法師只今被相尋之處、於獄中死去之由□上仍被留了、自餘僧等在八幡別當光清之許未進云々、上卿見官符遣左大弁、基綱佐政請印、少納言時俊相具也、件由可祈申八幡宮、仍奉幣日時使內大臣被定申、來廿一日、使源中納言國信卿、次官左少弁顯隆、左大弁書定文被奏聞、（少弁次官先例也）先召大內記被仰宣命趣、竈宮事罪過行了由可被告申者、

〔保元物語〕三 左府君達附謀叛人各遠流事

同（保元元年七月）二十五日人々遠流ノ由宣下セラル、左京大夫入道（敎長）ハ常陸國、近江中將成雅ハ越後國、盛憲入道ハ佐渡國、正弘入道ハ陸奥國トゾ聞エケル、（中略）

太政官符　左京職

應追位記事

正二位藤原朝臣兼長　出雲國

從二位藤原朝臣師長　土佐國

正三位藤原朝臣敎長　常陸國

右正二位行權中納言兼左兵衛督藤原朝臣忠雅宣、奉勅、件等人坐事配流件國々、宜仰被職令追位記者、職宜承知、仍宜行之、符到奉行、

保元元年八月三日

修理左宮城使正五位下行左大史兼算博士

左辨官下正五位下藤原朝臣

權左中弁時範朝臣(本沙汰弁也)參着軾、被仰下流人事、此中可禁獄之輩、或又被免人、又可召問人々事同被仰下、可追位記之由可給官符於太宰府者、是件人先日雖停任、猶在宰府之故也、(○中略)外記師安官符十一枚入宮覽上卿、内府見了返給外記、予在仗座、上卿命云、向結政可請印、予起座出敷政門、少納言時俊、外記師安、史生一人相具之、予暫立假裝間、少納言先入取出印敷、頃而與少納言相共着座請印了返官、其後上卿仰弁、從類之中、在京之輩、可追起境之由、可下知撿非違使之狀被仰云々、如此之沙汰間已及鷄鳴、

〔百練抄五堀河〕長治二年十二月廿九日、前太宰權帥季仲除名、配流周防國、緣坐之輩同流罪、

嘉承元年二月十七日前帥季仲改周防配流常陸、謀大逆者可處遠流、而依爲中流也、

〔中右記〕嘉承元年二月十七日、入夜有仗座定、内大臣、(○源雅實)右大將、(○藤原家忠)治部卿、(○源俊實)下官、(○藤原宗忠)源左大弁(○基綱)參集之後、藏人弁爲隆仰下云、流人藤原季仲被配流周防國了、而件國非式遠流國、可被改哉否事、同子族可緣坐哉否事、僧賴嚴快譽等去年可禁之由被仰下了、而猶可被配流否事、(條々以詞被仰)下又官問注大山寺權別當覺清幷中原則近等申詞事可定申者、(被下文書、已上四箇條事定、皆季仲同人々也、)群議各雖異、大略又同季仲事、猶任式條國可被改者、子族緣坐條、人々被申旨、去寬治二藤原實政度謀大逆被配流之時、子敦宗朝臣解官、謀大逆雖無緣坐、選叙令云、父祖被戮者、子孫皆不得任侍衞官、件文其時被解官歟、季仲又同罪也、有依彼例歟、(治部卿申詞也)依此定假令勘申件罪名、博士資清勘申、件選叙令文同奏聞、賴嚴快譽勢源等改徒罪可被配流哉否事、治部卿定申云、以告牒當徒年由前日法家勘申、是俗令減贖之義也、於賴嚴等者已犯八逆、是非雜犯、早被配流何難之有哉、群議人同前、大山寺權別當覺清等事、諸卿一同定申云、本件人々延曆寺張□雖注申、於官底勘問之處已無承伏狀、仍指申可進之由、雖下知被寺、于今不召進、重下知寄□證人愼決眞僞、追可被量行歟、予依上卿命當座書定文、(依御物忌用宿紙、)付藏人弁被奏聞、(被申院之間、予其□□□續之、左大辨又書之、)被仰下云、季仲可改配式遠流國、子刑部少輔懷季、少納言

親配流、法家勘文云、帥故殺死罪、源致親依搜取寺中雜物以強盜罪論之、

〔百練抄後朱雀四〕長暦三年四月三十日、伊勢大神宮有託宣事、祭主佐國停任、勘罪名、去年遷宮間濫行事、　六月廿六日、前祭主佐國配流伊豆國、依神事違例也、

〔百練抄後冷泉四〕康平三年六月十一日、諸卿定申伊勢守義孝燒亡大神宮御廚(○中略)事、　八月二日、陣定、(神宮託宣事伊勢守義孝事)任罪狀義孝遠流、

〔大神宮諸雜事記二〕康平三年八月三日、伊勢守義孝被配流於隱岐國已了、事發、以去元年七月(天)件守爲檢田入部一志郡之處、郡司伊元宿禰之住宅燒拂已了、而件宿禰乍爲郡司豐受大神宮之御領字阿射賀御廚司兼任也、仍供祭物徵納之間、同以燒失了、依卽件訴(天)被配流也、

〔中右記〕寛治二年十一月卅日、有陣定、依神民憂也、前大貳實政朝臣流伊豆國、目代肥後前司時綱流阿房國、大貳聽官等此外八人配流土佐國、但無宣命云々、此前數度依此事、雖有陣定、不一決也、引及今日也、

〔中右記〕康和四年十二月廿七日、有陣定、藤大納言奉行、公卿濟々、是前對馬守源義親緣坐者、前肥後守基實可會赦哉否條被問法家、勘文等事群議不可會赦者、以詞付頭中將(○藤原顯實)被奏、重仰云、件基實、明法博士二人勘申之旨、或不隨詔命、或違勅者、兩方之間付何勘文可被行哉、又可定申者、群議云、不隨詔命之罪頗難遁者、聞食了、　廿八日今夕被行事、前對馬守源義親流罪隱岐國、從類二人流罪周防阿波者、又同類前肥後守高階基實除名贖銅、上卿帥中納言(仲)、

〔二所大神宮例文〕依狂病耳聾目盲幷神役不仕科被停止所職例

二禰宜延綱(依大神宮心御柱犯失、幷神館放火之重科、康和四年七月、被停任、擧、同五年八月、十三日伊豆國配流、同年九月五日於伊賀國卒去、)

〔中右記〕長治二年十二月廿九日、入夜內大臣(○源雅實)參仗座、及深更藏人弁爲隆仰云、太宰前帥季仲卿可除名配流、罪過幷從類等任法家勘文可行、仰詞注一紙下申敕、內府起奧座移着端座、令敷軾召弁、

二人兼可令作官符等者、弁奉仰云、大夫史貞行宿禰云、令作官符渡外記、外記入筥令覽相府、相府見了召外記給了、余（○源經頼）起座經敷政門、率少納言外記等向結政所、余先着座、（北壁下敷小筵二枚、其上敷半疊一枚、南面、）次少納言義通着座、（右中辨座程、敷小筵一枚、半疊一枚、南面、）次外記時資、着右大史座程、次外記史生、持印櫃等來、置請印筵上退去、又持入官符之筥來、置外記前長床子上、（以筵一枚敷辨與史之座間地、爲請印座、）取出印置盤上、以辛櫃置弁座板敷南端、請印官符了、取印等退去、次外記、次少納言立、次余立、參內着陣座、頃之右府被退出、次參殿（○藤原頼通）御宿所、御共退出、右府先是可令召進相通位記之由、令弁仰京職云々、弁仰史令召、仰職官人云云、又今朝相府被示云、寮頭可停任之由、不可被仰、其故者不取位、被取官之時、有停任宣旨、於相通者、已爲配流者、官位共可被取也、仍仰可進位記之由、於寮頭者除目可被任其故也、

〔行親記〕長曆元年五月廿日、被定明法博士等勘申前但馬守則理朝臣等罪名事、右大臣（○藤原實資）以下諸卿、於左仗被定申、書定文奏聞、（左大辨書之）件事去長元八年但馬在任之間、依有官物負累、□□宿禰衆長令申其弁間、（籠停府云々、）衆長依爲八幡別宮司、以別當神人等爲愁件事、率數百人、來國府近邊、卽依有聞衆長幷可入亂館、內々造（○造恐擬字誤）相防之間、有中矢死亡之者、因之八幡宮以別當申旨、有愁申、國司又進國解、仍彼年十二月、遣右少史高橋文俊、令推問彼是所申、卽歸參、日記等其後宮寺積有所申、仍於京□□□推問、召遣在國司等之間、先帝（○後一條）有晏駕之事、相次去年有限大小事指合、自以延引、今年三月、召在國司等、於官被勘問、任件日記等、可勘罪名由、前日諸卿有定申、仍令下勘罪名、隨而法家進勘文、又有可定申之宣旨、仍所定申也、勘申者十一人之中、被處流罪者七人、可贖銅者、幷追可被定仰者等四人云々、抑可配流之□□諸卿又可定申者、被定申、則理（土左）相奉（伊豆五位）成任（佐渡五位）□□（佐渡六位）小野近則（常陸六位）不知姓重氏（安房六位）尾張忠親（隱岐）奏聞之後令造官符、幷可召仰撿非違使之由、被召仰弁定親、撿非違使等奉宣後、各向流人處、先搦其身、持件官符等下向云々、

〔百練抄四後朱雀〕長曆二年二月十九日、諸卿定申法家勘申前帥實成罪名、實成卿除名、（正位）二郎從源致

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶六年十一月甲申、藥師寺僧行信與八幡神宮主神大神多麻呂等、同意厭魅、下所司推勘、罪合遠流、 丁亥、從四位下大神朝臣杜女、外從五位下大神朝臣多麻呂、並除名從本姓、杜女配於日向國、多麻呂於多褹島、〇下略

〔續日本紀三十稱德〕神護景雲三年九月己丑、〇中略 道鏡大怒、解清麻呂本官、出爲因幡員外介、未之任所、尋有詔除名、配於大隅、其姉法均、還俗配於備後、

〔日本紀略桓武〕延暦四年九月乙卯、中納言兼式部卿近江按察使藤原種繼被賊襲射、兩箭貫身、 丙辰、右兵衞督五百枝王、大藏卿藤原雄依、同坐此事、五百枝王降死、流伊豫國、雄依及春宮亮紀白麿、家持息右京亮永主、流隱岐、東宮學士林寸〇寸恐忍誤 稻麿流伊豆、自餘隨罪所流、

〔日本後紀五桓武〕延暦十五年十二月戊寅、流出雲臣家繼於土佐國、家繼與叔父乙上不協、謀相傷、事覺及罪、乙上任佐渡權目、不預釐務、唯給公廨而已、

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年八月丙戌、豐前國宇佐郡人、酒井勝小常依有惡行、配隱岐國、

〔類聚國史八十七刑法〕延暦二十年六月丁巳、流出雲國島根郡人、外正六位上大神掃石朝臣繼人、出雲郡人若和部朝臣眞常、楯縫郡人品治部首眞金等於長門國、以介從五位下石川朝臣清主、共惡行也、

〔續日本後紀七仁明〕承和五年十二月己亥、勅曰、小野篁、內含綸旨、出使外境、而稱病故、不遂國命、准據律條、可處絞刑、宜降死罪一等、處之遠流、仍配流隱岐國、 辛亥、追小野篁所帶正五位下之告身、

〔續日本後紀八仁明〕承和六年三月丁酉、遣唐三个舶所分配、知乘船事從七位上伴宿禰有仁、暦請益從六位下刀岐直雄貞、暦留學生少初位下佐伯直安道、天文留學生少初位下志斐連永世等、不遂王命、相共亡匿、稽之古典、罪當斬刑、勅特降死罪一等、配流佐渡國、

〔左經記〕長元四年八月八日癸未、午剋右府〇藤原實資 被入頭弁〇藤原經任 仰云、齋宮寮頭藤原相通、可流佐渡、其妻藤原小忌古曾、可流隱岐者、相府奉勅仰弁云、仰左衞門府、可令差進長送使、府各一人、門部各

〔日本書紀天武二十八〕元年八月甲申、命高市皇子、宣近江群臣犯狀、則重罪八人坐極刑、○中略是日左大臣蘇我臣赤兄、大納言巨勢臣比等、及子孫、幷中臣連金之子、蘇我臣果安之子、悉配流、以餘悉赦之、

〔日本書紀天武二十九〕四年四月辛卯、三位麻續王有罪、流于因幡、一子流伊豆島、一子流血鹿島、

〔萬葉集一雜歌〕麻續王、流於伊勢國伊良虞島之時、人哀傷作歌、

打麻乎、麻續王、白水郎有哉、射等籠荷四間乃、珠藻苅麻須、

麻續王聞之感傷和歌

空蟬之、命乎惜美、浪爾所濕、伊良虞能島之、玉藻苅食、

右案日本紀曰、天皇四年乙亥夏四月戊戌朔乙卯、三品麻續王有罪流于因幡、一子流伊豆島、一子流血鹿島也、是云配于伊勢國伊良虞島者、若疑後人緣歌辭而誤記乎、

〔日本書紀天武二十九〕五年九月丁丑、筑紫太宰三位屋垣王有罪流于土左、　六年夏四月壬寅、村田史名倉坐指斥乘輿、以流于伊豆島、

〔日本書紀持統三十〕朱鳥元年九月丙午、天渟中原瀛眞人天皇○天武崩、皇后臨朝稱制、　十月丙申、詔曰、皇子大津謀反、詿誤吏民帳内不得已、今皇子大津已滅、從者當坐皇子大津者、皆赦之、但礪杵道作、流伊豆、

〔日本書紀持統三十〕三年七月辛未、流僞兵衛河内國澁川郡人柏原廣山于土左國、以追廣參授促僞兵衛廣山兵衛生部連虎、

〔續日本紀文武一〕三年五月丁丑、役君小角流于伊豆島、

〔續日本紀聖武十四〕天平十四年十月癸未、禁正四位下○上文作正四位上鹽燒王、並女孺四人、下平城獄、　戊子、鹽燒王配流於伊豆國三島、子部宿禰小宅女於上總國、下村主白女於常陸國、川邊朝臣東女於佐渡國、名草直高根女於隱岐國、春日朝臣家繼女於土左國、

ズ、息止マリ眼閉ニケリ、○中略童只一人營ツヽ、燃藻ノ煙タグヘテケリ、荼毘事終テケレバ、骨ヲ拾テ頸ニ掛、涙ニ咽テ遙々ト都ヘ歸上ニケリ、奈良ノ姫君ニ奉見ケレバ、悶焦テ泣悲事不斜、サコソ有ケメト想像レテ無慙也、

〔日本書紀十三允恭〕二十三年三月庚子、立木梨輕皇子爲太子、容姿佳麗、見者自感、同母妹輕大娘皇女亦艶妙也、太子恒念合大娘皇女、畏有罪而默之、然感情既盛殆將至死、爰以爲徒非○非一本作空死者、雖有罪何得忍乎、遂竊通、乃悒懷少息、　二十四年夏六月、御膳羹汁凝以作氷、天皇異之卜其所由、卜者曰、有内亂、蓋親親相姦乎、時有人曰、木梨輕太子姦同母妹輕大娘皇女、因以推問焉、辭既實也、太子是爲儲君、不得罪、則流輕大娘皇女於伊豫、

〔古事記下允恭〕輕太子者、流於伊余湯也、○詳帝王部皇太子篇

〔日本書紀二十二推古〕九年九月戊子、新羅之間諜者迦摩多到對馬、則捕以貢之、流于上野、

〔日本書紀二十二推古〕十六年四月、小野臣妹子、至自大唐國、○中略六月丙辰、爰妹子臣奏之曰、臣參還之時、唐帝以書授臣、然經過百濟國之日、百濟人探以掠取、是以不得上、於是群臣議之曰、夫使人雖死之不失旨、是使矣、何怠之失大國之書哉、則坐流刑、時天皇勅之曰、妹子雖有失書之罪、輙不可罪、其大國客等聞之、亦不良、乃赦之不坐也、

〔日本書紀二十五孝德〕大化五年三月戊辰、蘇我臣日向、日向字身刺譖倉山田大臣於皇太子曰、○中略己巳是日以大伴狛連與蘇我日向臣、爲將領衆使追大臣、將軍大伴連等及到黑山、土師連身、采女臣使主麻呂、從山田寺馳來告曰、蘇我大臣、既與三男一女俱自經死、　甲戌坐蘇我山田大臣而被戮者、○中略凡十四人、被絞者九人、被流者十五人、

〔日本書紀二十六齊明〕四年十一月庚寅、遣丹比小澤連國襲、絞有間皇子於藤白坂、是日○中略流守君大石於上毛野國、坂合部連藥於尾張國、

相ノ許ヨリ一年ニ二度舟ヲ渡シヽ也、春ハ秋冬ノ料ヲ渡シ、秋ハ春夏ノ料ニトテ渡シヽヲ、少將心樣ヨキ人ニテ、同島ニ流サレ同所ニ有ナガラ、我一人生テマノアタリ各ヲ無人ト見ン事モ口惜カルベシ、三人アレバコソ互ニ便トモナリ、又ナグサメトテ、一人ガ食物ヲ三人ニ省キ一人ノ衣裳ノ新キヲバ我身ニ著、古ヲバ二人ニ著セツヽ兎角育シ程ハ、〻〻ノ體ニテ有シカ共、去年此人人還リ上リテ、其後ハ事問者モナク惜ヲ懸ル人モナケレバ、道ガ甲斐ナキ命ノ惜ケレバ、此人々ノ都ニテ申クツロゲンナンド云シヲ憑テ、力ノ有シ程ハ島ノ者ノスルヲ見習テ、此山ノ峯ニ登テ硫黄ヲ取テ商人ノ舟ノ著タルニトラセテ、如形ノ代ヲ得テ日ヲ送リ命ヲ續シカ共、力弱リ身衰テ後ハ、山ニ登ル事モ不足叶、硫黄ヲ取事モ力盡ヌ、サテモアラレテ澤邊ノ根芹ヲツミ、野邊ノ蕨ヲ折テサビシサヲ慰シモ、叶ハヌ様ニ成果テ、今ハスル方モナケレバ、浪タヽヌ日ハ磯ニ出テ、岩ノ苔ヲムシリテ潮ニ洗テ食物トシ、汀ニ寄タル海松和布ヲ取、和ナル所ヲカミテ明シ暮ス、何ヲ期スル事モナケレ共、責テノ命ノヲシサニ網引者ニ向テハ手ヲ合テ魚ヲ乞ヒ、釣スル海人ニ歎テハ膝ヲ折テ肉ヲ貪ル、得タル時ハ慰ム、クレザル日ハ空ク臥ヌ、角シツヽ一日二日トスル程ニ、早四箇年ニモ成ニケリ、サテ生タル甲斐有テ己ヲ見ツル嬉サヨ、若此事夢ナラバ覺テ後ハイカヾセント、歔噎モシ敢ズ泣語給ケリ、有王ツラ〳〵ト聞之、涙ノ乾ク間ゾナカリケル、僧都又宣ケルハ、俊寛ハ懸ル罪深キ者ナレバ、業ニセメラレテ今幾ホドカ存ゼンズラン、己サヘ此島ニテ歎事モ不便也、疾々歸上レト云レケレバ、有王モ尋參リ侍ル程ニテハ、十年五年ト申トモ其期ヲ見終リ進セ侍ルベシ、努々御痛有ベカラズ、但御有様久カルベシ共不覺、最後ヲ見終リ奉ラン程ハ、是ニシテ兎モ角モ勞リ進スベシトテ、僧都ニ被敎峯ニ登テハ硫黄ヲ掘テ商人ニ賣リ、浦ニ出テハ魚ヲ乞テ執行ヲ養フ、係リケレドモ日來ノ疲モ等閑ナラズ、月日ノ重ルニ随テイトヾ憑ナク見エケルガ、當年ノ正月十日比ヨリ打臥給ヒヌ、○中略日數ヲフル程ニ次第ニ弱テ云事モ聞エ

ヨト思テ、猶深ク山邊ニ尋入タレドモ、我主ニ似タル人モナシ、立歸リ遙々、浦路ニ迷出タレバ、磯ノ方ヨリ蹣來ル者アリ、只一所ニ蹣立樣也、其形ヲ見ルニ、童カトスレバ年老テ其貌ニ非ズ、法師カト思ヘバ又髮ハ空樣ニ生アガリテ白髮多シ、銀ノ針ヲ立タルガ如シ、萬ノ塵ヤ藻クヅノ付タレ共不打拂、頸細クシテ腹大ニ脹レ、色黒シテ足手細シ、人ニシテ人ニ似ズ、左右ノ手ニハ小キ生魚ヲ二三ヅヽ把リ、腰ノマハリニハ荒和布ヲ取纏付テサゲヒキテ、凡力モナゲ也、〇中略僧都ハ貌コソ衰タリケレドモ目ト心トハ昔ニ替ラズ、童ヲバ憐我召仕シ有王トゾ被思ケル、

〔源平盛衰記十一〕有王俊寛問答事

有王涙ヲ流シ、老タル母ヲモ捨テ、兄弟ニモ角トモ不申ハル〴〵ト參侍シ事ハ、命ヲ君ニ奉リ、身ヲ海底ニ沈メント思定テ候キ、一度都ニテ捨テ侍ル命ヲ、二度此島ニテ可惜カト申ケレバ、僧都打ウナヅキテ、嬉ゲニテイザサラバ我夜ノ臥所ヘトテ具シテ行ク、住給フ所ヲ見レバ、巖二ツカ迫ニ竹ノ木ノ枝ヲ取渡シ、寄來藻クヅヲ取係タリ、雨露ノタマルベキ樣モナシ、僧都一人入リ給ヌレバ、腰ヨリ下ハ外ニアリテ、内ニハ又所モナシ、有王ハアラハニゾ居タリケル、穴心憂ノ御住居ヤ、今ハ申テ甲斐ナキ事ナレドモ、京極ノ御宿所、白川ノ御坊中、鹿谷御山莊マデ塵モツケジトコソ瑩立サセ給シニ、何ト習ハセル人ノ身ナレバ、懸ル住居ニモ御坐ケル事ヨ、京童部ガ築地ノ腹ナドニ造タル犬ノ家ニハ猶劣レル物ゾヤトテ口說泣ク、京ヨリ菓子少々用意シテ持タリケルヲ取出テ奉勸ル、僧都被思ケルハ、此等ヲ食タリ共ナガラフベキ命ニアラズ、中々由ナケレ共都ヨリ我爲ニトテ遙々持下タル志ヲ、失テ打捨ン事モ無念也ト覺シテ、食ヤウニシテ、宣ケルハ、此等ハ指モ味モヨカリシ上、世ニ珍ケレドモ餘ニ疲衰タル故ニヤ、喉乾口損シテ氣味モ皆忘ニケリトテ指置給ケルゾ糸惜キ、有王申ケルハ、是程ノ御有樣ニテハ日比ハ何トシテ今迄モナガラヘサセ給ケルゾト問ケレバ、僧都ハ其事也、三人被流タリシニ、丹波少將ノ相節トテ、舅門脇宰

ソ聞ケ、御免アラバ幾人モ具シタフコソアレ、サレ共其義ナケレバ不ㇾ及ㇾ力、誠ヤ薩摩國硫黄島トカヤヘ可ㇾ被ㇾ流トキケバ、命ナガラフベシトモ覺ズ、路ノ程ニテハカナクモヤナランズラン、我身ノ事ハ今ハサテ置、都ニ殘シ留女房少者共ノ心苦キニ、彼人々ニ付テ、朝夕ノ事ヲモ見繼ベシ、我ニ隨ハンニ露劣ルマジ、トク歸上レナド泣々宣通ハス處ニ、宣旨御使又六波羅ノ使何事申置ゾト怪ミ尋ケル恐シサニ、龜王名殘ハ惜ケレドモ、泣々都ヘ歸上ケリ、其弟ニ有王ト云ケルハ、僧都ニ別テ後仕ハントト云人在ケレ共宮仕モセズ、大原閑原嵯峨法輪貴キ所々ニ迷行テ、峯ノ花ヲツミ谷ノ水ヲ結テ、山々寺々ニ手向奉リ、我主ニ今一度合セ給ヘト、夜晝心ヲイタシテ祈ケルコソ不便ナレ、角テ三年ヲ經テ少將ト判官入道ト都ヘ還上ヌト披露有ケレバ、有王我主ノ事何ニ成給ヌルヤ、ラントト、覺束ナク思テ、此人々ノ迎ニ行タリケル、人ニ合テ尋聞バ上リシマデハ御坐キ二人ニ捨ラレテ歎悲ミ給シ事、二人舟ニ乘給シニ舷ニ取付テ遙ニ出給タリシ事、陸ニ歸上テ濱ノ沙ニ倒フシ給事、委ク語答ケレバ、有王涙ヲ流シテ、サテハ未ダ此世ニ御坐ルニコソ、誰育ミ誰憐ミ奉ラント悲クテ、有王ハ只一人都ヲアクガレ出、未ㇾ知薩摩方硫黄島ヘ遙々トコソ思立テ、先奈良ニ行僧都ノ姫ノ御坐ケルニ、角ト申テ御文ヲ賜リケリ、〇中略唐船ノ纜ハ四月五日ニ解習ニテ、有王ハ夏衣タツヲ遲シト待兼テ、卯月ノ末ニ便船ヲ得、〇中略鬼界島ニモ渡ニケリ、〇中略去程ニ島ノ住人ト覺シクテ、木ノ皮ヲハ子カツラトシテ、額ニ卷キ、赤裸ニテムツキヲカキ、身ニハ毛太ク長ク生テ、長ハ六七尺計ナル者ゾ過タリケル、有王嬉クテ云ケルハ、此島ニ法勝寺ノ執行僧都ノ御房御坐シ候ナルハ何所ニテ候ヤラントト間ケレバ、打見タル計ニテ物モ云ハザリケリ、法勝寺共執行共爭カ可ㇾ知ナレバ、不ㇾ答ルモ理也、自言事モ有ケレ共、ツヤ〳〵不ㇾ聞知リケレバイトド力ナク覺エケリ、責テハ死給タリトモ其骸骨ハ御坐ラン、彼ヲナリトモ尋得テ形見ドモスルナラバ、イカ計限ナクノ志ノカヒモ有ベキニ、御行ヘヲダニモ知ズシテ、空ク都ヘ歸上ラン事ソ悲サ

衰タル法師アリ、ヨク〳〵見レバ大納言入道殿ニテゾオハシケル、下ニハ垢付タル布ノ服、上ニハ袖ヤツレタル墨染ノ衣也、傍ニハ竹ノ杖ヲ立テ、前ニハ縄緒ノ足駄ヲ置リ、是ヤコノ賤ガ伏戸ノ赤土ノ小屋、民ノ住居ノ草ノ戸ザシナルラント、心憂コソ思ケレ、〇中略今成給ヘル有様ノ悲サニ、目モクレ心モ消テ、前ニ臥倒テ喚叫外ハ何事モ申サレズ、大納言入道モ信俊ヲ見給テハ、墨染ノ袖ヲ顔ニ當給テ、唯サメ〴〵トゾ泣給フ、入道良在テ宣ケルハ、多ノ者共ノ中ニ、イカニトシテ是迄尋下ケルゾヤ、餘ニ都ノ戀サニ、夢ナンドニ見ルヤラン、更ニ現トハ覺エズトテ、コボルヽ涙セキ敢ズ、悲ノ色ゾ深カリケル、信俊泣々申ケルハ、去シ六月一日ヨリ、北御方君達相具シ進セテ、北山ノ雲林院ノ僧坊、菩提講行ヒ候所ニ忍ツヽ、幽ナル御住居、若君姫君ノ戀カナシミ奉ル御事、今度罷下ベキ由懇ニ仰ヲ蒙候シ事共細ニ申テ、懷ヨリ文ヲ取出シテ進タリ、〇中略信俊二三日候テ泣々申ケルハ、〇中略今度ハ御返事ヲ賜テ、急罷上テ見參ニ入進テ、又コソ罷下候テ奉公ヲモ申、終ノ御事ヲモト申セバ、〇中略剃髮ノ有ケルヲ引裹テ、是ヲ形見ト御覽ゼヨ、ナガラヘテ世ニ聞ハテラレ奉ベシトモヲボエズ、今生ニコソ相見事ノ空トモ、後ノ世ニハ必ナト心細ゲニ書連テタビテケリ、

〔源平盛衰記 十〕有王渡硫黃島事

法勝寺執行俊寛ハ、此人々ニ捨ラレツヽ、島ノ栖守ト成ハテヽ、事問人モナカリケルニ、僧都當初世ニ有シ時、幼少ヨリ召仕ケル童ノ三人栗田口邊ニ有ケルガ、兄ハ法師ニ成テ法勝寺ノ一ノ預リ也、二郎ハ龜王、三郎ハ有王トテ二人ハ大童子也、彼龜王ハ僧都ノ被流テ淀ニ御坐ス處ヘ尋行テ、最後ノ御供是コソ限ナレバ、何所マデモ參侍ルベシト泣々申ケルヲ、僧都ハ誠ニ主從ノ好ミ昔モ今モ不淺ト云ナガラ多ノ者共有ツレ共、世中ニ恐テ問來者モナシ、其恨ニアラズアマタノ中ニ尋來テ、角申コソ返々モ志ノ程ウレシケレ、但我ニ限ラズ少將モ判官モ人一人モ不隨トコ

訪流人

〔文德實錄 一〕嘉祥三年五月壬辰、追贈流人橘朝臣逸勢正五位下、詔下遠江國、歸葬本鄕、逸勢者右中辨從四位下入居之子也、○中略承和九年、連染伴健岑謀反事、掠拷不服、減死配流伊豆國、初逸勢之赴配所也、有一女、悲泣步從、官兵監送者、叱之令去、女晝止夜行、遂得相從、逸勢行到遠江國板築驛、終于逆旅、女攀號盡哀、便葬驛下、廬于喪前、守屍不去、乃落髮爲尼、自名妙沖、爲父誓念、曉夜苦至、行旅過者爲之流涕、及詔歸葬、女尼負屍還京、時人異之、稱爲孝女、

〔源平盛衰記 七〕信俊下向事

大納言○藤原成親ノ北方、北山ノ栖ヒ只推量ベシ、住馴ヌ山里ハ、サラヌダニモ物ウカルベキニ、柴引結庵ノ內、マダシモ馴ヌ草枕、過行月日モ暮シカネ、明シ煩形勢也、○中略大納言ノ年頃身近ク召仕給ケル、源左衞門尉信俊ト云侍アリ、○中略北方御簾近ク召ヨセテ宣ケルハ、ヤヽ信俊承レ、大納言殿ハ、備前國兒島トカヤ云所ヘ流サレ給ヒヌトハ聞シカ共、此渡ヨリ尋參人一人モナシ、未生テ御坐スルヤラン、又堪ヌ思ニ忍煩テ、昔語ニモヤ成給ヌラン、其行末ヲモ不奉知、未生テモ御坐サバ、流石此渡ノ事イカバカリカ、聞マホシク覺スラン、又少キ人ドモノ住馴ヌ山里ノ栖ヒ、中々申モ愚也、只推量給ベシ、○中略汝イカナル有樣ヲモシテ尋參ナンヤ、御文ヲモ進、返事ヲモ待見ナラバ、限ナキ心ノ中ヲモ慰事モヤト思ハ、イカヾスベキト宣ケレバ、信俊淚ヲ流シテ、○中略御文ヲ給急尋參ント申バ、北方無限悅デ、細ニ文遊シテ賜ニケリ、信俊給之、泣々小島ヘ下ケリ、既ニ彼ニ行著テ、預ノ武士ニ申ケルハ、是ハ大納言殿ノ年比ノ侍ニ、源左衞門尉信俊ト云者ニ侍リ、○中略然ベクハ蒙御免テ、今一度最後ノ見參ニイリ進バヤト申ケルヲ、始ハ緊ク怪嗔テ叶マジト云ケレ共、泣々掻口說云ケレバ、武士共淚ヲ流シ、最哀ニ思ツヽ、何カハ苦カルベキトテ、終ニハ是ヲ免ケリ、信俊不斜悅テ、大納言ノ御坐スル所ヘ參テ奉見ニ、淺猿ク悲カリケル事ガラ也、奇氣ナル小屋ニ垣ニハ土ヲ壁ニ塗廻、戸ニハ藁ノコモヲ懸垂タリ、內ニ差入テ見廻セバ、藁ノ束ト云物ヲ敷テ、痩

給粮

〔延喜式民部二十二〕凡流移人隨到給田、比至秋收、量給公粮、

〔延喜式主税二十六〕凡諸國流人不論良賤男女大小給粮人日米一升、鹽一勺、至來年春量給種子、一秋之後、粮種共停、

防援

〔令義解獄十〕凡徒流囚在役者、囚一人、兩人防援、謂其四二人者、四人防援、若囚在圄圄者、既禁其身、不可同在役法、仍須臨事量配令堪掌固也、在京者取物部及衞士充、謂三府衞士也一分物部、三分衞士、在外者取當處兵士、分番防守、謂此亦爲兵士立文

免著鈦

〔西宮記臨時十〕與奪事付臨時着鈦例幷放免役畢四人事

宗金記云、永承二年十二月廿四日、今日渡唐犯人之首清原守武、配流佐渡國、領送使左衞門府生秦成信、府掌日下部信近等也、但有可着鈦云々、仍乘馬幷持弓胡籙參本府、是則於左獄門前可行之故也、而依大殿令奏給、被免着鈦、又從類五人任勘文、可徒三年宣旨同下了、然而依殿下仰、不令着鈦、只禁獄計也、

免課役

〔延喜式主計二十五〕凡勘大帳者、○中略依符所免爲符損、(中略)流人(中略)爲見不輸、

〔日本後紀桓武五〕延曆十五年十二月丙戌、勅免流人氷上川繼課役、

○按ズルニ、氷上川繼ハ延曆元年ニ配流セラレシニテ、名例律ニ犯流應配者、三流倶役一年トアル文ニ據レバ、既ニ配役年限ヲ經過シ、更ニ課役アリシヲ、爰ニ至リ免シタルナラン、

流人親屬隨行

〔律疏名例〕凡犯流應配者、三流倶役一年、○中略妻妾從之、○略註家人不在從例、父祖子孫欲隨者聽、曾高以下及玄孫以上、欲隨流人去者皆聽、

〔續日本紀淳仁二十三〕天平寶字五年三月己酉、葦原王坐以刃殺人賜姓龍田眞人、流多褹島、男女六人、復令相隨、

〔續日本紀桓武三十七〕延曆元年閏正月丁酉、獲氷上川繼於大和國葛上郡、○中略詔減死一等、配伊豆國三島、其妻藤原法壹、亦相隨焉、

居作

モナク、岸打浪ニ思ヲモ消ザリケリ、判官入道ハ泣悲ミテモ由ナシ、只佛ノ御名ヲモ唱ヘ、神ニモ祈申テコソ、二度都ヘ歸上ラン事ヲモ願ヒ、後世菩提ヲモ助ケメトテ、已ガ能也ケレバ歌ヲウタヒ舞ヲマフテ、島ノ明神ニ手向ケリ、端島ノ者共時々來テ見ケルガ、興ニ入テ舞ナドシケルゾ歎キノ中ニモヲカシカリケル、

〔千載和歌集八羇旅〕心のほかなることありて、しらぬ國に侍ける時よめる、　平康頼

かくばかり憂身の程も忘られて猶こひしきは都なりけり

さつまがたおきの小嶋に、我はありとおやにはつげよやへのしほ風

〔令義解獄十〕凡流人至配所居作者、並給官粮、（加役流准此、）若留住居作、及徒役者、並食私粮、卽家貧不能全備者、（謂徒囚家貧、餉粮艱難、或來或絕、不能全給、故令二等以上親、助其五十日餉、自外所不給者、自食公粮、故下文云隨盡公給也、）二等以上親代備、（謂以上者、女子適人、及母改嫁是也、代備者、五十日內、更相備給也、）五十日粮、隨盡公給、若去家懸遠絕餉、及家人未知者、官給衣粮、家人至日、依數徵納、（謂若絕業單貧者、不在徵限也、）其見囚絕餉者、（謂在禁未斷、及斷訖未配之類、亦准此、）

〔唐律疏議斷獄二十九〕疏議曰、準獄官令、囚去家縣遠絕餉者、官給衣糧、家人至日、依數徵納、

〔令義解獄十〕凡流徒罪居作者、皆着鈦若盤枷、（謂流徒通着鈦若盤枷、非云流着鈦、徒着盤枷也、）有病聽脫、不得着巾、（謂不得着頭巾也、）每旬給假一日、不得出取役之院、患假者陪日、（謂文云患假、卽襲假旬假之類、不可陪日也、）役滿遞送本屬、（謂此唯據徒人、流人者非、）

〔唐六典刑部六〕凡〇中略絕應徒則皆配居作、〇中略

諸流徒罪居作者、皆着鉗、若無鉗者、着盤枷、病及有保者聽脫、不得着巾帶、每旬給假一日、臘寒食各給二日、不得出所役之院、患假者倍日役之、

〔延喜式獄二十九〕凡罪人者、隨罪輕重、着鈦若盤枷、（故燒公私倉舍盜、私鑄錢、強舒之類、居作者卽着鈦、雜犯徒罪之類着盤枷、）其鈦或四人、或三人爲連、至暮着杻、明旦脫而役之、

宿近クシテ人繫シ惡カリナントテ、後ニハ難波ト云所ヘ奉移居リケリ、

〔源平盛衰記七〕信俊下向事

丹波少將成經ヲバ、福原ヘ召下シ、妹尾太郎ニ預置キ備中國ヘ遣シタリケルヲ、俊寬僧都平判官康賴ニ相具シテ、薩摩方鬼界ガ島ヘゾ被放レケル、

俊寬成經等移鬼界島事

薩摩方トハ總名也、鬼界ハ十二ノ島ナレヤ、五島七島ト名付タリ、端五島ハ日本ニ從ヘリ、康賴法師ヲバ五島ノ內、チトノ島ニ捨、俊寬ヲバ白石ノ島ニ棄ケリ、彼島ニハ白鷺多クシテ石白シ、故ニ白石ノ島ト云フ、丹波少將ヲバ奧七島ガ內、三ノ迫ノ北硫黃島ニゾ捨タリケル、尋常ノ流罪ダニ悲シカルベキニ、道スガラ習ハヌ旅ニサスラヒテソヾロニ哀ヲ催シケリ、〇中略此島々ヘハオボロゲナラデハ人ノ通フ事モナシ、島ニモ人稀也、自有者モ此土ノ人ニハ不似、身ニハ毛長ク生ヒ、色黑フシテ如牛、云フ事ノ言モ聞知ズ、男ハ烏帽子モキズ、女ハ髮モケヅラズ、木ノ皮ヲ剝テサチカヅラニシタリ、ヒトヘニ鬼ノ如シ、眼ニ遮ル物ハ燃上ル火ノ色、耳ニ滿ル物ハ鳴下ル雷ノ音、肝心モ消計リナレバ、一日片時堪テ有ベキ心地セズ、賤ガ山田モ打ザレバ米穀ノ類モ更ニナク、園ノ桑葉モ取ザレバ絹布服モ稀也、昔ハ鬼ノ住ケレバ鬼界ノ島トモ名付タリ、今モ硫黃ノ多ケレバ硫黃ノ島トゾ申ケル、〇中略此人々始メニハ三ノ島ニ被捨レ所々ニ歎キケリ、〇中略責テハ三人一所ニダニアラバ、悲シキ事モ憂キ事モ互ニ語テ心ヲモヤリナン、島ヲカヘ海ヲ隔テ、所々ニ歎キケルコソ無慙ナレ、少將ニハ門脇宰相〇平敎盛ヨリ訪ヒ給ケレ共二人ヲバ助ル者モナシ、僧都モ入道モ身モ悲ク人モ戀シカリケレバ、後ニハ網舟釣舟ニ手ヲスリ腰ヲカヾメツヽ、俊寬モ康賴モ硫黃ガ島ヘゾ寄合ヒケル、少將ト判官入道トハ痛ク思沈ミタル事ハナシ、浦々島々見巡テ都ノ方ヲモ詠メケリ、僧都ハ强チ歎キ瘦レテ、岩ノ迫ニ苔ノ下ニ倒レ臥テ、浦吹風ニ身ヲ冷セル事

流人到配處

前途事之宣旨歟、至官符重給流人官符可無便歟、駿河伊豆接境之國云々、亦不可經他國歟、　廿四日辛丑、曉頭、頭辨來傳示關白御消息、流人逗留事、可給宣旨、駿河國于今不言上事、可追捕犯人事、可達配所事、卽宜下畢、

〔百錬抄 五 堀河〕康和四年十月廿八日、配流前對馬守義親於隱岐國、依太宰府訴也、

〔百錬抄 五 鳥羽〕天仁元年正月廿九日、但馬守正盛隨身源義親幷郎從四人首參洛、廷尉於川原請取、義親去年配流隱岐國、而留出雲國、劫略人民、奪取官物、仍遣追討使也、

〔令義解 十 獄〕凡流移人、至配所付領訖、仍勘本所發遣日月、及到日、准計行程、若領送使人、在路稽留、(謂无故稽留也、)不依程限、領處官司、隨事推斷、(謂凡依律、使人於使處有犯者、所部屬官等、不得卽推、但部送囚徒、不依程限者、別於此令、聽所部推斷、自餘皆須依律、不可准此、)仍以狀申太政官、

〔律疏 職制〕凡在外長官及使人於使處有犯者、所部屬官等不得卽推、皆須申上聽裁、○下略

〔唐律疏議 三十 斷獄〕諸徒流應送配所、而稽留不送者、一日笞三十、三日加一等、過杖一百、十日加一等、罪止徒二年、(不得過罪人之罪、)

〔源平盛衰記 七〕成親卿流罪事

大納言(成親○藤原)ハ大物ガ浦ヨリ舟ニ乘リ、鹽路遙ニ漕出シ、浪ニゾ浮ミ給ケル、○中略室ノ泊ニ著給フ、藻懸ノ瀨戶蓬ガ崎ヤヨリノ濱ヲ漕渡、備前國阿江ノ浦ヨリ內海ヲ通テ、兒島ト云所ニ著給フ、ハカ都ヲ出給ニシ後、日數フレバ遠ク成行古里ノミ戀シクテ、道スガラ只涙ノミニゾ咽ビ給フ、ハカバカシク湯水ヲダニモ聞入給ハザリケレバ、ナガラフベシトモ覺サザリケレ共、サスガ露ノ命ノ消ヤラデ、此マデ下リ著給ニケリ、民ノ家ノ怪ゲナルニ奉居置ル、彼所ハ後ハ山前ハ礒、岸ウツ浪ハ漲々トシテ、音幽ニ、松吹風ハ蕭々トシテ物サビシ、去ヌダニ旅ノウキネハ悲キニ、汗ニ諍フ涙ノ色、耳オドロカス波ノ音、イトヾ哀ゾ增リケル、シバシハ兒島ニマシ〳〵ケルヲ、コヽハ猶津

衣服臥具醫藥四種功德ト、只一時也トモ、觀音ノ名號ヲ念ジテ禮拜セン、功德ト、正等ニシテ異事無シト說レタリ、サレバ大悲無窮ノ菩薩也、廣大圓滿ノ利生也、其ニ己等ガ貪欲ニ住シテ物モモタヌ法師ニ物ヲ乞ヘバ、物持タル觀音ニ物乞ヒ奉テ己等ニ給ハントテ消息ヤルヲ、嗚呼也ト云フハ、サラバサテ有カシ、嗚呼ノ者共トテ又念誦ウチシテ晲ヘタリ、力及バヌ法師哉トテ、鳥羽ノ南門ヨリ船ヲ出ス事ニ觸テ情ナタコソ當リケレ、

〔令義解獄十〕凡流移人在路、皆遞給程粮、謂流移之人、所經由處、毎國給粮令過當界也、毎請粮停留不得過二日、其傳馬給不臨時處分、

〔令義解獄十〕凡流移囚、在路有婦人產者、謂配流婦人產子者也、并家口、給假廿日、謂流移之人妻妾及從人、在路產子者、亦給假廿日、其同配之囚、亦皆從產者侍、侍家女及婢、給假七日、假滿同行也、若身及家口謂皆據行人、不限良賤也、遇患、或津濟水長、不得行者、並經隨近國司、毎日撿行、堪進卽遣、若患者伴多、不可停待者、謂猶云患者之徒伴衆多、不留待、此唯據流移人、家口者、非假有流移囚三人、一人疾患、而二人不患者、二人前行、若二人疾患、而一人不患者、一人停待之類也、所送使人、分明付屬隨近國郡、依法將養、謂法者、下條、獄囚有疾病者、給醫藥救療是也、待損卽遣、謂不遣專使、唯送軍毅領送也、若祖父母父母喪者、給假十日、謂從流移人、在路喪亡者、卽夫喪亦同、依下條、夫喪與父母同故也、家口有死者、三日、家人奴婢者、一日、

〔令義解獄十〕凡流移人未達前所、而祖父母父母在鄉喪者、當處給假三日發哀、其徒流在役而父母喪者、謂在鄉喪者、其從在配所喪者、亦同此法、給假五十日、擧哀、謂依律、流移人、至配所、祖父母父母老疾應侍、令居作者、聽親終三月、然後居作、是卽侍老疾者、自依彼律、而不侍之人、亦依此令、立法各異、未可同執也、祖父母喪承重者亦同、二等親七日、並不給程、謂不聽出禁所、其雖父母喪、亦不得從喪、卽餘條稱不給程者、皆准此例、

〔小右記〕長元四年二月廿三日庚子、頭辨經任○藤原傳關白賴通○藤原消息云、流人光清之使、爲甲斐國調庸使、於駿河國射殺之事、于今未言上之間、甲斐國司賴信申上子細案內、件流人使奪取甲斐調物中荷物、制止之間、相論之程、使府生永正、射殺副荷之者、後聞、以比木日矢射部領、此間已無正稅、彼子男射殺使永正者、何樣可行哉、報云、駿河國司忠重未經言上、其譴難避、待彼言上、居諸彌移、可給且不言上事、且可達流人光清

人也、文様尋常ナルベシト云ケレバ、穴煩シノ御房ヤトハ思ヘドモ、若興アル事ヤ有ト思テ其邊ニ走廻リテ能書ノ人ヲ尋子出シテ來レリ、文覺ハ手書ヲ近ク呼寄テ、良物語シテ其後放免共ニ、ヤヤ殿原聞給ヘ、木ニ付ク蟲ハ木ヲ噛リ、萱ニ付ク蟲ハ萱ヲ啄ムト云事アリ、能者ヲ請ジテ能ヲ顯スニハ、必酒ヲ進ラセ引出物ヲスルハ習ヒ也、然モ土產所望ノ文也、乞食ダニモ門出トテ祝フ事ゾカシ、虚口ニテハ福樂無シ、先手書ヲ能々飯ナシ奉ベシ、去ズハ書給フベカラズト云、其時下部共定メモナキ事ユヱニヲコガマシトハ思ヘドモ、支ヘテハ云人ヲ請ジテ、サスガ片腹痛サニイナトハ云ズ、直垂質ニオキテ、酒肴買ヨセテヨク〳〵進ラセ、腰刀一ツ引出物ニタブ、手書ノ僧酒飲、引出物懷中シテ後、墨磨筆染テ御文ハ何樣ニト申、文覺ガ申サン樣ニ少モ違ヘズ書給ヘトテ、爲高雄神護寺修造勸進、於法住寺御所奏聞之處、聊蒙勅勘、下向伊豆國候、抑浮雲之身、雖非可惜朝露之命、猶以難捨候哉、爲旅粮所奉預之鵞眼百貫、麞牙百石、付使者可申請候、恐恐謹言、

月　日　　文覺

ト書セテ立文タリ、表書ヲバ誰ト可書候ゾト問ヘバ、文覺打笑テ、清水寺觀音御房ト書給ヘトゾ云ケル、ヨニ可笑フ事ナレドモ、放免共ハ腹ヲ立、スヘテ不咲、文覺一人ノミゾ手ヲ扣テ笑ケル、下部共不安思テ、和僧ノサノミ廳ノ御使ヲ可欺キ事ヤハアル、奴原トテダニモ不思議ニ思フニ、紙ゾ手書ゾ酒ヨ引出物ヨトテ、係ル嗚呼ノ事申條後悔シ給ナ、思知ベシト口々ニ訇ケレ共、文覺ハ猶奇異ニヲカシキ事ニ思テ座ニモタマラズ笑飽テ申ケルハ、殿原ヤ中直リシテ物申テ聞セン、サレバ觀音ニ利生ヲ申人ハ嗚呼ノ事ニテアル歟、月詣日參夜モ晝モ踵ヲ繼テ參ル、上下男女道俗貴賤ハ皆嗚呼ノ事カハ、文覺ヲバ惡口スルト宣ヘドモ、己等コソ增テ惡口ノ者ヨ、法師ハ法皇ヲ惡口トテ伊豆國ヘ被流レ、己等ハ觀音ヲ惡口スレバ地獄ノ釜ヘ流サルベキ也、抑觀音ノ利生ヲバイカ程ノ事トカ思フ、法華經八卷ニ、若有人受持六十二億恒河砂、菩薩名字、復盡形供養、飲食

付テコソ自酒ヲモ一度飲事ニテ候ヘ、去バコソ又折々ニ芳心ヲモ申事ナレ、上人御房程ナヲヌ人ダニモ人ニハ訪ヒヲモ乞事ニ候、申サンヤ御房ハ貴キ人ニテ御坐ス上、京白川ニ知人多クゾオハスラン、觸廻ラシテ國ノ土產、道ノ粮物ニモ所望シ給ヘカシ、只官食バカリニテハ慰ミモ有マジ、且ハ身ノ計ヒヲモ存シ、又人ノ心ヲモ兼給ヘカシト樣々敎訓シケリ、文覺思ケルハ、法師ハ上下男女勸進ノ僧也、左樣ノ佛物スカシトラントテ云ニコソト思ケレバ、返事ニハ緣者知音モ身ガ身ニテアル時コソ自芳心モアレ、入道出家ノ後ハ諂心ナケレバ得意取事モナシ、親類骨肉ニモ近ヅク事ナケレバ、問ヒ被問ズシテ十餘年ニモ成ヌ、然ルベキ者アルラン共覺エズ、縱アリトモ有甲斐アラジ、大方ハ我人ニ物ヲ與フルニコソ得意知ル人ハ多ケレ、法師ハ人ヲ勸進シテ人ニ物ヲ乞ヘバウトム者ハアレドモ親シム者ハナシ、

文覺淸水狀天神金事

去程ニ東山ニコソ、後生マデモト契リテ、常ニ行昵ブ事ハナケレ共、朝夕ニ難忘ク思ヒ被思タル人ハアレ、縱無間ノ底マデモ身ニ代ラヌ人也、ヨニ憑ム甲斐在テ實ノ詮ニハ叶ヌベキ人ゾ、サラバ實ニ道ノ土產ニモ大切也、殿原ニモ志ヲモ申、吉酒ヲモメサセン、硯紙マウケ給ヘト云フ、下部悅テ硯借リヨセ紙買ヒ儲タリ、文覺紙ヲ取向ケテ見レバ如法雜紙也、見ルマヽニ奇怪ナル奴原ガ紙ノ樣カナ、人ノ品ヲバ、消息ニテ知ル事也、吉キ紙ヲ尋テ進セヨ、コレ人ノタメニ非ズ、只今物儲ケテ取センズルゾトテ投返ス、放免ドモ惡キ僧ノ詞バカナ、奴原トハ何事ゾ、イザ咎メント云ケルヲ、其中ニ制シテ暫一天ノ君ヲダニモ惡口申ス物狂也、天狗ノ樣ナル者ナレバ何トモイヘ、人々敷者ニイハレテコソ耻ニモ及ベ、其上唯今物乞テエサセント云人ニ躍合テ要事ナシトテ、上品ノ紙ノ神妙ナルヲ尋出シテ進スル、文覺申ケルハ、法師ハヨニ腹惡シキ者ニテ惡口申テ候ケリ、中直リシ奉ル、抑我ハ天性筆ヲトラヌ者也、能書ン人ヲ請ジ給ヘ、件ノ人ハ目モ心モ辱シキ

リテ聊モメサレズ、追立ノ官人來テ車サシヨセテトク〳〵ト申セドモ、スヽマヌ旅ノ道ナレバ、座ヲ立テ急ギ乘給ハザリケルヲ、御手ヲ取、アラヽカニ引立奉リ、ウシロザマニ投ノセテ、車ノ簾ヲ逆ニ懸テ、門前ニ遣リ出ス、大路ニテ先火丁ヨリテ車ヨリ引落シ奉テ、誡ノ楉トテ三杖アテタレバ、次ニ看督長殺害ノ刀トテ二刀突クマネヲシテ、其後山城判官秀助命ヲ含メサセテ、又車ニ押乘セ奉リテ、前後ニハ障子ヲゾ立タリケル、〇中略此大納言ハ車ノ物見ヲ打塞ギ前後ニ障子ヲ立タレバ、月日ノ光モ見給ハズ、西モ東モ不知ケリ、加樣ノ歎キノ深サニハ、曉ヲ待ベシトモ覺エザリケレバ、難波次郎經遠ヲ以テ、成親縱イカナル浦島ニハナタルトモ、責テハ月日ノ光ヲダニモ免レテ侍ラバ、イサヽカナグサム方モ候ナン、サシモ罪深キ者ト思召ストモ、カバカリノ御誡マデヤ候ベキナント、內府〇平重盛へ被申タリケレバ、大臣聞給テ、コハ不便ノ事也トテ、月日ノ光ハユルシ給フ、〇中略備前國阿江ノ浦ヨリ內海ヲ通テ、兒島ト云所ニ着給フ、

〔源平盛衰記十八〕文覺高雄勸進附仙洞管絃事

文覺先獄ヲ出侮先非、後慮リアリテ暫ハ引籠テモ在ベキニ、尙モシヒズ勸進スル事如元、法皇〇後白河ノ御助成ノナキ事ヲ安カラズ思テ、京中白川大路門人ノ集リタル所ニテハ淺增クイマ〳〵シキ事ヲノミゾ云ケル、〇中略

文覺流罪事

公卿僉議アリテ、此僧ヲ京中ニ置テハ惡カリナントテ、伊豆國へ流罪ノ由ニテ、當時ノ國務也ケレバ、源三位入道〇賴政ノ子息仲綱ニ被仰付レヌ、仲綱コレヲ召渡シテ、薩摩兵衛省ニ仰セテ下シ遣スベキ支度アリ、院ヨリ廳ノ下部二人付ラレタリ、折節伊豆國ノ住人近藤四郎國澄ト云者、年貢運送ノ爲ニ南海道ヨリ舟ニ乘テ上リタリケルガ、下リケル戾舟ニ乘テ慥ニ國ニ付ヨト言傳ラル、廳ノ下部放免二人モ下向スベキニテ有ケルガ、文覺ニ語ケルハ、廳ノ下部ノ習ヒ驕ル事ニ

又車同前、但後簾上テ前簾下ス、後ニ向テ乗ル、犯人不脱巾引切紲紲等了、車左右轅又輪邊ニ人守思、〇思一本作恩、人守等左右圍繞之、遣車下部所作也、牛飼有之、然而牛飼不違之、追出京外了、西國者至于七條朱雀之邊、東國北陸道者粟田口之邊也、此近邊領送使自先在之、官符持向、取官符讀聞流人之後、賜官符於領送使、其次領送使請取流人了、次廷尉歸了、抑近代配流之樣人敢以不知、然而爲知故事注載之、

〔保元物語三〕左府君達附謀叛人各遠流事

八月〇保元元年二日、左大臣殿〇藤原頼長ノ息、右大將兼長ヲ始トシテ四人〇兼長、師長、隆長、範長、南都ヲ出テ、山城國稻八間ト云所ヘウツテ、是ヨリ各配所ヘ赴カル、死罪ヲ被宥テ、遠流ニ成ヌルハ悦ビナレ共、猶行末モ覺束ナカリケリ、撿非違使惟繁資能、二人追立ノ使ニテ、兄弟四人各重服ノ裝束ニテ、御馬ヲバ下部取テケレバ、押取ニシタル鞍ナレドモ、ウタテゲナルニゾ乗給ケル、見ル人目モアテラレザリケリ、〇中略各故郷ヲバ今日ヲ限リト立別レ、東西南北ヘサセンニ赴給フ、心中コソ哀ナレ、

〔源平盛衰記五〕山門奏狀事

座主〇明雲ノ流罪ノ事、人々諫申ケレ共、西光法師ガ無實ノ讒奏ニ依テ、カク被行ケリ、今夜都ヲ出奉ラントテ宣旨稠シカリケレバ、追立ノ撿非違使、白河高畠ノ御坊ニ參テ責申ケリ、座主ハ白河ノ御所ヲ出給テ、粟田口ノ邊一切經ノ別所ヘ出サセ給ケリ、〇中略同〇安元三年五月二十三日ニ、座主一切經ノ別所ヲ出テ配所ヘ赴給フ、慈覺大師ノ自造給ヘル如意輪ノ御像バカリヲ、泣々御頸ニ被懸ケ、朝夕ニ見馴給ヘル御弟子一人モ不奉付、門徒ノ大衆モ不參、御覽ジモ知ヌ武士ニ伴テ、出給ケル御有樣、ヨソノ袂モ絞ケリ、被召タル馬ハ淺猿キ野馬ニ、ケシカル鞍具足也、〇中略角テ暫ク粟津ノ國分寺ノ毘沙門堂ニ立入給ヘリ、

〔源平盛衰記七〕成親卿流罪事

六月〇治承元年二日新大納言成親卿ヲバ公卿ノ座ニ出シ奉リテ、物進ラセタレ共、胸セキ喉フサガ

召章貞參陣座、賜流人交名退出了、

支配廷尉

源資實（前信濃、修理大夫從三位）　追使志能景

源通家（前伊豆、右近少將）　追使志章貞

正時忠（前出雲、右少將左衞門權佐）　追使府生季□

藤範忠（前周防、内匠頭式部熱田大宮司）　追使志基廣

各存知退出、新志基廣依不當座以書狀觸示了、書狀常事也、參會遲延事也、予立烏帽子着毛沓相具隨兵（隨兵四人）向流人亭、以看督長（帶弓箭）觸子細等時忠、時忠乘車出門、予着胡簶放緌先車、看督長二人取松明、下部等圍繞流鉾云々、次火長取松明、次予雜人等隨兵如常、至于七條朱雀、領送使持官符向來、依對面流人令見官符、爲領送使歸畢、今夜時忠渡吉乘院之邊云々、於乘車者下部等取之了、是恒例也、抑流人乘車甚以不可然事也、然而依事不便不能停止也、

今按、祖父口傳鈔云、向流人亭事、廷尉立烏帽子着毛履帶胡簶（中黑）騎馬、火長看督長如常、隨兵隨有相具、先以看督長相觸云、依其犯（天）配流其國、官人其人爲追使、早可令出給、爰流人忩罷出候云云、流人出門時令放免乘直馬逆乘之、（馬尻方仁向天乘也、逆鞍置之、不脫巾、）放免等圍繞馬左右云々、

行列次第

先看督長二人（取松明、卷緌帶弓箭）

次流人（不脫巾、看督長引切緌、引切冑、括丁鉾持付立下部圍繞之、）

次廷尉（緌卷胡簶毛沓）

次火丁（如常取松明、流人向廷尉之間秉燭、）

次隨兵

衞門府生日下部重遠、至維衞朝臣、不肱禁云々、各令撿非違使追越山城國境云々、

〔百練抄 四後冷泉〕康平六年十月十七日、興福寺僧淨範被流伊豆國、依壞山陵也、同黨之輩十六人同配流、以參議左大辨經家、被告興福寺、　十二月十八日、前下野守賴資、依殘虐上野介惟行、令勘罪名、令遠流之處、一季二度不可行流刑之由、法家申、仍延引有仗議、

〔清獬眼抄 凶事〕一流人事

或記云、康平七年十月十六日、前下野守源賴資配流佐渡國已畢、口應斷而有議延引、　十二月六日、流人源賴資改佐渡國、配土佐國、依使等申深雪路沍、前途難達之故也云々、是追使左尉坂上定成、申剋向宿所、駐馬立門入、看督長相尋有無、只今罷出之由返答、頃之引寄馬、賴資乍騎馬乘出家門、定成暫被駐馬之由下知、駐馬立行列、

先看督長二人（取松明、卷緌、赤衣負靫木、）

次流人（騎馬、著持衣褐奴袴、看督長引切緒、防授圍繞、鉾持相副之、）

次廷尉（騎馬白狼卷緌卷纓、淺香帶劔、帶狩胡簶、一斤染、）

次火丁二人（取松明、）

至于七條朱雀人宅（仁留ル、）領送使持向官符、定成取之讀聞流人、（流淚云々、）歸賜官符了、請取流人取進請文於大理、

配流公卿殿上人事

同記（○後清錄記）云、應保三年六月廿三日戊子、參別當殿鳥羽上莊、殺害人盛房行房幷高昌、殺害人等問注記、以新錄事基廣進覽、盛房同類否可被召之處、尙以可痛問同類之由所被仰下也、未剋退出之間、今朝中志章貞、依召參內事、依不審參內裏流人事也、被秘藏云々、是聞密々子細之處、當今依奉呪咀被行流罪、比叡巫女可被拷問云々、所謂奇異亂天子世歟、中志章貞、清志能景、予徘徊陣屋邊之間、依

〔延喜式二十九刑部〕凡流移罪人者、省申官遞請左右兵衛爲部領、即授省符、路次差加防援、令逹前所、其返抄者從官下省、

〔禁秘御抄下〕配流

先被定罪後、於陣宣下、可然人有詔書、詔書大内記或儒辨草之、上卿奏之、只凡人口宣、上卿宣下也、罪沙汰、近流遠流次第有之、撿非違使向彼家、或具武士被遣之、

〔續日本紀十四聖武〕天平十三年三月己丑、禁外從五位下小野朝臣東人下平城獄、庚寅、東西兩市、決杖各五十、配流伊豆三島、

〔古今和歌集九羈旅〕おきのくにになかされける時に、船にのりていでたつとて、京なる人のもとにつかはしける、　小野たかむらの朝臣

わたの原やそ島かけてこぎ出ぬと人にはつげよ蜑のつり舟

〔今昔物語二十四〕小野篁被流隱岐國時讀和歌語第四十五

今昔小野篁ト云人有ケリ、事有テ隱岐國ニ被流ケル時、船ニ乘テ出立ツトテ京ニ知タル人ノ許ニ此ク讀テ遣ケル、

ワダノハラヤソシマカケテコギ出ヌトヒトニハツゲヨアマノツリブチ、ト明石ト云所ニ行テ、其夜宿テ九月許リノ事也ケレバ明髴ニ不被寢デ詠メ居タルニ、船ノ行クガ島隱レ爲ルヲ見テ、哀レト思テ此ナム讀ケル、

ホノボノトアカシノウラノアサギリニ島ガクレ行舟ヲシゾオモフ、ト云テゾ泣ケル、此レハ篁ガ返テ語ルヲ聞テ語リ傳ヘタルトヤ、

〔小右記〕長德五年〇長保元年十二月廿八日丁丑、昨被行配流事、右大臣〇藤原顯光承行云々、致忠朝臣配佐渡、使右兵衛府〇府下恐脫生字、致賴朝臣配隱岐、使右衛門府生、致忠致賴二人肱禁、維衡朝臣配淡路、使左

領送使

右左大辨橘朝臣澄清傳宣、右大臣〇藤原顯光宣、彼省去七月五日解偁、配流之日、撿非違使率罪人等、向省之例、其來尙矣、近則延喜十八年六月廿日、左府生園恒世、右府生竹田貞主、率罪人林勝共等、就膳版進之、而去年十月廿五日、差看督長送罪人等、因茲停止彼日之務、其後于今未有還向、望請被召仰撿非違使、依例令進者、今依彼省貞觀七年之例、行不得違越者、延喜廿年十月二日、右大史秦貞興奉、

〔伊呂波字類抄人倫利〕領送使リヤウサウシ送流人使也

〔源平盛衰記十八〕文覺流罪事

公卿僉議アリテ、此僧〇文覺ヲ京中ニ置テハ惡カリナントテ、伊豆國ヘ流罪ノ由ニテ、當時ノ國務ナリケレバ、源三位入道ノ子息仲綱ニ被仰付ヌ、仲綱是ヲ召渡シテ、薩摩兵衛省ニ仰テ下シ遣スベキ支度アリ、院ヨリ廳ノ下部二人付ヲレタリ、折節伊豆國住人近藤四郎國澄ト云者、年貢運送ノ爲ニ、南海道ヨリ舟ニ乘テ上タリケルガ、下ケル戾舟ニ乘テ、慥ニ國ニ付ヨト言傳ラル、

文學清水狀天神金事

文覺云ケルハ、〇中略法師此舟ニ乘ズバ、誰カ一人モ助ルベキトテ、氣色シテ千手陀羅尼ヲ誦シケレバ、其後ハ梶取已下ノ輩手水ヲ捧ゲ履ヲ取、主從ノ禮ヨリモ猶深シテ、事外ニゾ敬屈シケル、領送使國澄モ、今コソ始テ貴キ人トモ思知ケレ、

流人發遣

〔令義解十獄〕凡移流人、太政官量配、謂量罪輕重、配其遠近、故云量配也、符至季別一遣、謂太政官錄下符刑部及國司也、若符在季末至者、聽與後季人同遣、謂季末者、四季之末月、假有符三月至者、與夏季人同遣之類也、三具錄應隨家口、及發遣日月、便下配所、謂刑部及國司依太政官符、錄下於移流之國、其刑部流人者、太政官差專使領送也、遞差防援、專使部領、送達配所、付領訖、速報元送處、幷申太政官知、若妻子在遠、又非路便、預爲追喚、使得同發、謂雖即在遠、而是路便者、待到同行、不可更追也、其妻子未至間、囚身合役者、且於隨近公役、仍錄已役日月、下配所聽折、

〔唐律疏議三斷獄〕疏議曰、〇中略其流人準令季別一遣、若符在季末三十日內至者、聽與後季人同遣、

〔拾芥抄下本赦令〕五流

加役流、(名例律疏云、稱加役流、有役三年、今案、自餘遠中近三流者役一年、而加役流者、配遠所役三年也、假令盜傷人者、加役流也、此類有十六、)

反逆緣坐流、(同律疏云、緣反逆得流罪者也、今案、犯謀反大逆之人、其父子沒官、祖孫兄弟得流罪、今案、沒官、近代配流、)

子孫犯過失流、(同疏云、耳目所不及、思慮所不到之類、而殺祖父母父母者流、)

不孝流、(同疏云、告言祖父母父母被從者流也、)

會赦猶流、(同疏云、案賊盜律云、造畜蠱毒、雖會赦亦遠流、斷獄律云、殺四等尊屬、從母兄弟姉、反逆者、身雖會赦猶流也、今案、稱赦者常赦也、名例律云、五流者各不得減贖、除名配流如法者、)

配役年限

〔律疏名例〕凡犯流應配者、三流俱役一年、本條稱加役流者、配遠處役三年、(犯流若非官當收贖老疾之色、即是應配之人、三流遠近雖別、俱役一年爲例、加役流者、本法既重、與常流理別、配遠處居役三年、)役滿及會赦免役者、即於配處從戶口例、(役滿一年、及三年、或未滿會赦、即於配處從戶口例、課役同百姓、應選者須滿六年、故令云、流人至配處、六載以後聽仕、反逆緣坐流、及因反逆免死配流、不在此例、即本犯不應流、而特配流者、三載以後聽仕、)妻妾從之、(妻妾見已成者、並合從夫、又依令、犯流斷定、不得弃放妻妾、若妻犯七出者、夫若不放、於夫無罪、若犯流、聽放、即假偽者多、依令不放、於理爲允、犯義絕者、官遣離之、違法不離、合得杖罪、義絕者離之、七出者不放也、)家人不在從例、父祖子孫欲隨者聽、(曾高以下、及玄孫以上、欲隨流人去者皆聽、)移鄉人、家口亦准此、(移鄉人、妻妾隨之、父祖子孫欲隨者聽、不得棄放妻妾、皆准流人、故云亦准此、)若流移人身喪、家口雖經附籍、六年內願還者放還、(籍、謂六年一造、申送太政官、流移人、若到配所六年、必經造籍、故云雖經附籍、六年內願還者聽、既稱願還、即不願還者聽住、)即造畜蠱毒家口、不在聽還之例、(依本條、造畜蠱毒、并同居、雖會赦猶流、況此已至配所、故不在聽還之例、)下條准此、(謂下條云、流人逃者、身死、所隨家口、仍准上法聽還、上有下條准此之語、下有准上法之文、家口合還、及不合還、一准上條之義、)

〔令義解十獄〕凡流人、科斷已定、及移鄉人、皆不得棄放妻妾至配所、(謂凡流移之人、不可棄妻妾以至配所、必須相隨同行、其犯義絕者、不在此限也、)如有妄作逗留、私還及逃亡者、(謂此據流移人已至配所、更妄私還及逃亡者、其妻妾私還及逃亡者、亦准此法、)隨即申太政官、

〔唐六典六刑部〕凡(○中略)流移之人、皆不得棄放妻妾及私遁還鄉、若妻子在遠、預爲追喚、待死(○死恐至誤)同發、

流人妻妾

〔延喜式二十九刑部〕凡諸國申送流移人、及家口、未發遣間、固禁獄中、其粮以贓贖物給之、(人別日米一升、鹽一勺、)

〔政事要略八十一〕應令左右檢非違使府生將領罪人移送刑部省事

以前被右大臣（長屋王）宣偁、奉勅、自今以後永爲恒例者、

神龜元年六月三日

〔延喜式二十九刑部〕凡流移人者、省定配所申官、具錄犯狀下符所在幷配所、（貴人請内印、賤隸請外印、）其路程者、從京爲計、

伊豆（去京七百七十里）安房（一千一百九十里）常陸（一千五百七十五里）佐渡（一千三百廿五里）隱岐（九百十里）土佐等國（一千二百廿五里）爲遠流、

信濃（五百六十里）伊豫等國（五百六十里）爲中流、

越前（三百一十五里）安藝等國（四百九十里）爲近流、

○按ズルニ、令ニ度地五尺爲歩、（延喜雜式ニハ、以六尺爲歩トアリ、是時ノ六尺ハ令ノ五尺ナリ、）三百歩爲里トアリ、又度地用大トモアリテ、一里ハ大尺ノ百五十丈ニテ今ノ二百五十間ナリ、

〔塵添壒嚢抄三〕居刑事（附五刑有法事、五刑之新法事）（中略）

五刑（アリ○中略）四ニ流、配流也、日本ニハ、伊豆、安房、常陸、隱岐、土佐ヲ爲遠流ト云々、信濃、伊豫ヲ中流ト云云、越前、安藝ヲバ近流トス、此外上總、陸奥、越後、出雲、周防、阿波等也、

〔拾芥抄下本赦令〕式外近代遣國々

上總　下總　陸奥　越後　出雲　周防　阿波

〔律疏名例〕凡應議請減、及八位勳十二等以上、若官位勳位、得減者之父母妻子、犯流罪以下聽贖、○註略若應以官當者、自從官當法、○註略其加役流、反逆縁坐流、（謂縁反逆得流罪者）子孫犯過失流、（謂耳目所不及、思慮所不到之類、而殺祖父母父母者、）不孝流（謂告言祖父母父母者、絞、從者流、）及會赦猶流者、（按賊盜律云、造畜蠱毒、雖會赦、并同居家口、及敎令人亦遠流、斷獄律云、殺四等尊屬、從父兄姊、異父兄姊、及反逆者、身雖會赦、猶近流、此等並是會赦猶流、其造畜蠱毒婦人、有官無官、並依下文、配流如法、有官者仍除名、至配所免居作也、）各不得減贖、除名配流如法、○詳議請減贖條

〔唐律疏議二名例〕疏議曰、加役流者、舊是死刑、武德年中改爲斷趾、國家惟刑是恤、恩弘博愛、以刑者不可復屬、死者務欲生之、情軫向隅、恩覃祝網、以貞觀六年奉制、改爲加役流、

按之、○中略流罪者、始從近流、竟遠流、以近流、中流、遠流、各爲一等、

〔令義解十獄〕凡流人應配者、依罪輕重、各配三流、謂近中遠處、謂其定遠近者、從京計之、

〔續日本紀九聖武〕神龜元年三月庚申、定諸流配處遠近之程、伊豆、安房、常陸、佐渡、隱岐、土佐、六國爲遠、諏方、伊豫爲中、越前、安藝爲近、

〔續日本紀考證四〕狩谷氏曰、拾芥抄遣流人國々、伊豆安房云々、件國々載延喜刑部式神龜元年六月三日定、今推支干、是月庚申朔、不得有二庚申、六月戊子朔、三日庚寅、然則此條錯簡、當依拾芥抄移置於六月下、庚申改作庚寅、案類聚國史、扶桑略記並與此同、則其誤來亦久矣、

〔拾芥抄下本敎令〕遣流人國國

伊豆　安房　常陸　佐渡　隱岐　土佐已上遠流　信濃　伊豫已上中流　越前　安藝已上近流　件國國載延喜刑部式神龜元年六月三日定云々

〔清解眼抄內事〕配流公卿殿上人事○中略

流移國々

常陸國去京千五百七十一里　安房國一千一百九十里

佐渡國一千三百廿五里　土左國千二百廿五里

伊豆國七百七十里　隱岐國九百十里

右六ケ國遠流

伊豫國五百六十里　周防國五百六十里

右二ケ國中流

越前國三百十五里　安藝國四百九十里

右二ケ國近流

赦シテ、既ニ配處ニ至レルハ赦サヾルアリ、天下ニ大赦シテ其人ニ限リテ赦サヾルアリ、赦サレテ後復叙スルアリ、此外ニハ又罪人ヲ柵戸ニ配セシコトアリ、是ハ兵事部ノ城郭篇ニ收メタリ、

移郷ハ流刑ノ類ニテ、本郷ヲ去リテ他ニ移ラシムルヲ云フ、人ヲ殺シテ死スベキガ、赦ニ遭ヘル者ナドヲ此刑ニ處ス、律令ニ流移ト云ヘルハ、配流ト此移郷トヲ合セテ稱スルナリ、マタ京師ノ外ニ放逐スルコトアリ、是モ移郷ノ類ナリ、此餘ニ罪人ヲ本郷ニ遞送セシコトアリ、

名稱

〔伊呂波字類抄 留疊字〕流人　流罪

〔古今和歌集 雜十八〕おきの國にながされて侍ける時によめる　たかむらの朝臣

思ひきや鄙のわかれにおとろへてあまのなはたぎいさりせんとは

〔政事要略 八十二〕罪名幷贖銅八虐六議事

流罪 ○中略

日本紀云、天地初判、陽神陰神共合生蛭兒、已雖三歳脚猶不立、故載於天磐橡樟船、而順風放棄比象流刑、

〔日本書紀纂疏 上四〕以蛭兒載磐船放棄、以進雄尊逐降於根國、是流之始也、

〔運歩色葉集 葉〕配所 流人所也

三流

〔日本書紀 天武二十九〕五年八月壬子、詔曰、死刑沒官、三流並除一等、徒罪以下已發覺未發覺、悉赦之、唯既配流、不在赦例、

〔律疏〕流罪三 近流 贖銅一百斤　中流 贖銅一百廿斤　遠流 贖銅一百卌斤

〔法曹至要抄 上罪科〕一五罪事 ○中略

流罪ニハ又加役流反逆緣坐流、子孫犯過失流、不孝流、及ビ會赦猶流ノ五流アリ、加役流トハ、三流ハ倶ニ配處ニテ一年間役セラルヽヲ、是ハ遠流ニ處セラレテ、三年役セラルヽナリ、反逆緣坐流トハ、謀反、及ビ謀大逆ノ者ノ祖孫、兄弟、皆遠流ニ配セラルヽガ如キ是ナリ、子孫犯過失流トハ、過失ニテ祖父母、父母ヲ殺スガ如キ是ナリ、不孝流トハ祖父母、父母ノ事ヲ訴フル者アレバ首ハ絞トシ、從ハ流トスル是ナリ、會赦猶流トハ、蠱毒ヲ造畜スル者ハ赦ニ會ト雖モ、同居家口及ビ敎令セシ人マデ亦遠流シ、四等ノ尊屬從父兄姊、異父兄姊ヲ殺シ、及ビ反逆セシ者ハ赦ニ會フト雖モ猶ホ近流ス、是等ヲ會赦猶流ト云フ、此五流ハ皆重罪ノ人ノ處刑ナリ、又官人流ヲ犯ストキハ、除名シテ配處ニ赴カシメ六載ノ後ニ再ビ仕フルコトヲ聽シ、若シ本罪流ニ至ラズシテ特ニ配流スルトキハ、三載以後ニ仕フルコトヲ聽ス、又僧ノ流刑ヲ犯ストキハ、還俗セシメテ後ニ配所ニ遣スナリ、流ニハ又留住ノ法アリ、雜戸陵戸ナド流ヲ犯ストキハ、近流ハ決杖一百、中流ハ決杖一百三十、遠流ハ決杖一百六十、イヅレモ配所ニ發セズ、當地ニ留メテ三年居作セシメ、婦人流ヲ犯ストキハ亦決杖シテ配處ニ發セズ、衣ヲ縫ヒ穀ヲ舂カシム、此留住ノ者ハ凡テ官糧ヲ給セズシテ私糧ヲ食セシムルナリ、日本書紀ニ允恭天皇ノ朝ニ、皇太子木梨輕皇子亂倫ノ行アルヲ以テ、同母妹輕大娘皇女ヲ伊勢ニ流ストアリ、古事記ニハ、允恭天皇崩ジテ後、輕太子弟ノ安康天皇ニ流サルトアリテ、其傳ハ互ニ異ナレドモ、コレ流刑ノ始ナリ、天武天皇ノ五年ニハ、既ニ三流ノ名アリ、其後ニハ一タビ流サレテ後又還配セシコトアリ、流人ノ課役ヲ免ゼシコトアリ、一季再流スベカラザルノ議アリ、任國ニ便流セシコトアリ、決杖シテ配流セシコトアリ、又流人ヲ赦スコトハ孝德天皇ノ大化二年ヨリ見エテ、反逆緣坐ノ外ハ悉ク放還セシコトアリ、一人ヲ特赦セシコトアリ、赦シテ後京ニ入ルコトヲ許サズシテ、本郷ニ放還セシコトアリ、未ダ發遣セザルヲバ

古事類苑

法律部四

上編

流刑 移郷　放逐京外　勒還本郷〔併入〕

流ハ杖ヨリ重キ刑ニテ、罪人ヲ邊地ニ放逐シテ終身還サヾルナリ、邦語ニナガストモ、ハナツトモ云ヒ、字音ニテ流罪トモ呼ベリ、流ハ罪ノ輕重ニ因リテ遠、中、近ノ三等アリ、是ヲ三流ト稱ス、遠、中、近ハ皆京ヨリ路程ヲ計ヘタルナリ、凡テ流人及ビ家口ハ、未ダ發遣セザル間ハ獄中ニ禁ジ、其糧食ハ贓贖物ヲ以テ充テ、發遣ノ期ハ一年四度ニシテ、發遣セントスル時ハ、太政官ヨリ先ヅ符ヲ下シテ刑部及ビ國司ニ告ゲ、妻妾ハ必ズ之ニ從ハシメ、父祖子孫ハ隨ハントスレバ、ソノ意ニ任セ、家人ハ從フコトヲ聽サズ、刑部及ビ國司ハ、太政官符ニ依リテ隨フベキ家口ト發遣ノ日月トヲ具ニ錄シテ配所ニ下シ、遞次ニ防援ヲ差シ、左右兵衞ヲ部領トシ、途中ハ程糧ヲ給シテ配處ニ達セシメ、既ニ配所ニ到ル時ハ卽チ良賤男女大小ヲ論ゼズ、人ゴトニ日ニ米一升、鹽一勺ヲ給シ、又田ヲ給シ、來年ノ春ニ至リ、種子ヲ給シ、秋ニ至レバ糧食種子共ニ停ム、流人ハ凡テ鈦若シクハ盤枷ヲ著シ、一人ゴトニ兩人防援シテ配所ニ役セラルヽコト一年ニシテ、其間ハ課役ヲ免ジ官粮ヲ給ス、滿役ニ及ビ、若シクハ赦ニ會ヒテ役ヲ免ゼラルヽトキハ、配處ノ籍ニ編入シ、課役ハ百姓ト同ジクシ、配所ニテ未ダ六年ニ至ラズシテ死去スルトキハ、家口ハ既ニ其處ニ附籍ストモ、還ラント願フトキハ放チ還ス、

古事類苑

法律部四

上編

流刑 移郷放逐京外勒還本郷〔併入〕

著釱政圖（年中行事繪卷所載）

也、而依₂大殿(○藤原頼通)₁令奏給、被₃免₂着鈦₁、又從類五人、任₂勘文₁可₂徒三年₁宣旨同下了、然而依₂殿下(○藤原教通)₁

仰、不₃令₂着鈦₁、只禁獄計也、

示送曰、着鈦政、雖有兩儀例、如今者甚雨、實難叶歟、爲之如何、予答曰、及晩着有其憚、今日被遂行、尤可宜者、予不見物、

〔百練抄 入高倉〕治承三年五月十六日、着鈦政、良家子息、多依強盜犯着鈦、希代事也、

〔業黃記〕寶治二年閏十二月十二日乙卯、着馱政也、右佐着行其儀如例云々、尉四人、章宗、章種、章時、章澄、志三人、章成、章尚、相職、相盛、府生二人章種、章高、等參仕、

〔新抄〕弘安十年五月廿六日丙辰、着馱政也、左衞門權佐經親參入之、

〔鹽尻 三十二〕或曰、朝廷の御儀式の中、使廳の判官なんど列座し、罪人を刑する體あり、白布を縮てまゐる、下行三石を拜して歸る、如何なる事ぞ、答、是着鈦政也、委しくは延喜式の廿九四獄司式に見えたり、五月の政なり、正月七日、正月七日とは聞たがへたるにこそ、此罪人になる者は、鞍馬の民家さだまりて、彼者の首に置き、太もとを以て打まねをなす、昔は實の犯罪の者に、鉗鈦亦は盤枷を著て、東河原にて行ひし事也、今は其まねびのみにや、

臨時着鈦例

〔西宮記 臨時 十〕與奪事 附臨時着鈦例幷放免役事四人事

雜例云、放免狛吉門丸申云、故安房守秦貞正宿禰、轉右衞門尉、未蒙撿非違使宣旨之間、坂上安見入御垣下曹司、成強盜之犯、邑上帝別仰貞正、令求捕、件盜人於攝津國、適以捕得也、于時有別勅、臨時於右獄前、令着鈦、貞正立官人之列、共行其事、依此功、蒙使宣旨云々、

〔西宮記 臨時 十〕與奪事 附臨時着鈦例幷放免役事四人事

臨時着鈦例

宗金記云、永承二年十二月廿四日、今日渡唐犯人之首清原守武、配流佐渡國、領送使左衞門府生秦成信、府掌日下部信近等也、但有可着鈦云々、仍乘馬幷持弓胡籙、參本府、是則於左獄門前可行之故

廿八日己酉、今日着鈦政也、着鈦四三人也、雖召雜犯、只令破却成文衣裳、不賜褂、依節日也、左權佐光頼行之、

〔山槐記〕仁安二年五月廿七日、今日有着鈦政、左右權佐左佐藏人右中辨長方、右佐藏人經房、着行云々、

〔吉記〕安元二年五月廿八日壬申、今日着鈦政也、○中略安房守兵部少輔、宮內權少輔、兵衛大夫本光等裝束司也來集、先羞小饌、佐着裝束之間、看督長兩三度來告、大理車已立了云々、諸官又皆着了云々、次佐駕車、如例不開物見、懸革押入中、上簾許出之、遣縄黑斑牛、牛童青丹上下布衣、白襖、門部、火長如常、雜色六人、白襖上下、白引倍支、刻纏垂袴、予逐電向市、依無其所觸申大理、立彼車傍、頃之右佐光長參着、自堀川南行遣出之、可隨出立所使歟、隨又平三品自七條被出立之時、自南被着之由、見仁平記、然而自北必可着之由、人々有訓、加之南有堀地、仍自北所着也、下車作法不見、及斜日、雖欲入、猶差扇、是依爲家之故實、正作法也、左手持笏、手チ向外持之、抑劍柄、予當職之時如此、是當時大理并故右中辨說也、有先逹口傳云々、當時頭辨左手ニ如例可把笏之由、諷諫右佐云々、去幄下三許尺、納扇正笏徐步、頗例練不整足、如例雖步、頗引右足、爲口傳之由、故右中丞有諷諫、大理人如此、頭辨不可練之由執之、構棄室入道說云々、參着之後、左佐光雅着之、用舊車云々、牛童着沓、辨侍康貞、御藏小舍人國守等相隨、自餘如常、依日入不差扇、又不練步、座事可爲、次兩佐已下、移着構所、此間及秉燭、看督長取松明、在兩佐前、協會路各着定之後、大夫尉康綱令置版、次覽過狀、次着鈦、次役畢、左右各一人次褓犯、一臈列官人無次事了、左佐不歸、着樓所早出了、次予北轅歸畢、

〔山槐記〕治承二年五月廿六日己未、有過狀政、秉燭之後、明基改申文、廿九日壬戌、午上雨降大風、晡時以後休止、今日着鈦政也、左權佐光長、尉源季貞、志中原淸宣、右大夫尉源康綱、六位尉中原基廣、源基行、藏人、去廿六日、不着過狀政、今日施行官符也、志中原明基、府生安陪久忠等所着行也、右權佐親口依重服母不着、雖有例、猶成憚云々、基行依爲初參、可被免輕犯者之由、付明基令申、因合點囚注文一人也返給、抑左廳初參之時、有免物、常例也、但又或無之、着鈦政日、初參官人申請免物事非常例云々、但應保爲信初參有例云々、秉燭以前事了云々、夜陰明基持來改申文并勘文、不返給之、今日依齋日不行袴云々、今朝左佐

或記云、長久四年十二月　日、着鈦政云々、若江信道雖召出市庭、依有身病、不令着鈦云々、

〔中右記〕天仁元年五月廿九日、今日着鈦政云々、左衛門權佐顯隆、新大夫尉盛重着行、有雜犯、藏人尉尹通與奪之由、或人所談也、

〔中右記〕永久二年五月廿六日、今日着鈦政、右佐重隆以下之人着行、着鈦四十九者、〈○中略〉重時着鈦勘問、忠盛雜犯與奪、藏人判官說雅云々、

〔中右記〕大治五年五月廿三日、今日着鈦政、右佐顯能以下着行云々、着鈦囚卅餘人云々、

〔中右記〕天承二年〈○長承元年〉五月十四日、頭中將〈○藤原公敎〉送消息云、撿非違使宗重有所勞、不出仕、而雖無府生可被行着鈦政歟、將又可被補剩闕歟、兩條之間、可令量申給者、御氣色執啓如件、予進返事云、無府生行着鈦政例、不慥覺候、於剩闕者先例多存、被加府生可宜歟、近代府生只重宗一人也、　十九日入夜、俄有小除目、筑前守藤通親〈公章辭代讓〉左兵衛權少尉平維繁、宣旨右衛門府生大江國良蒙使宣旨、剩闕着鈦政、依無府生也、上卿源大納言師頼、左少辨公行書之、依無宰相、　廿七日丙戌、今日有着鈦政、囚人幾四人云々、

〔長秋記〕長承元年五月十四日癸酉、撿非違使府生宗重依所勞不可參市政、近日府生一人也、其間事、被問經別當之人云々

〔本朝世紀〕久安五年五月廿六日丁未、今日於左衛門府廳有進過狀政、申剋左衛門權佐光頼入自廳後戸着座、尉以下平伏不動座、〈兼居饗前〉一獻、〈大夫尉光保勝行、寄佐左邊飮之、權佐光保取次杓、〉佐取盃擬右尉中原季盛巡行、次居汁、〈府生季兼取勸申汁居由〉次二獻、〈光保同勸如初〉次撤饌了、次置飯、〈大夫尉光保召看督長重兼、令置之、〉次覽囚帳、〈公文案主資長帶弓箭、入置御前、〉次左尉源宗弘、右尉中原季盛、藤守光等勘問囚三人如常、〈案主記之〉案主渡道志兼成、可持參別當許料也、次覽看督長等見不參文、佐以下一覽、佐以下次第加署判了、返給案主、次尉光保召看督長、令取飯、次佐光頼退出、先是府生清原季兼起座、立廳西庇間、佐退出、季兼揖佐、佐答揖、案主等送佐、看督拂雜人如常、

著鈦例

〔西宮記臨時十〕與奪事（附臨時着鈦例幷放免役畢囚人事）

右衞門府生笠光

雜例云、康保四年五月、村上帝崩、小日記不注着鈦政日、彼年五月依御喪不行歟、或人云、十二月一度行之云々、若有大赦乎、可尋、

〔小右記〕天元五年五月廿七日戊午、傳聞着鈦政云々、

〔西宮記臨時十〕與奪事（附臨時着鈦例幷放免役畢囚人事）

雜例云、永觀二年五月廿一日、着鈦政不奉仕供給云々、

又云、正曆五年十三日（○十三日上恐脫三月二字）着鈦政、此日政、死人數多、依在市內儲供給於人家、雖安床子、依可有程、以府生西忠宗令申事由於別當、而依無一定、已停止也、以同廿八日擬行之間、件日大赦、仍無着鈦政、

宗阿記云、長德二年十二月十九日、晴、着鈦政以在市、東邊之人家爲供給所、（法官云、猶立雖於市可着、）

或記云、長保六年（○寬弘元年）十二月十六日、着鈦政云々、着鈦囚四十八人、（一人逃亡四）今月十一日、神今食、十二日大神祭、仍過神事、十三日行政、（左廳今年不着、右廳知別當宣者、不可着右廳歟、）十四日、成着鈦勘文、十五日巡諸宮、（今日仁王會、八省設百講座、百法師巡諸宮、修異常、有御筆泥經云々、）十七日荷前、仍十六日行此政、（東市）十八日當別當御衰日、有節日行例、依避彼御衰日、今日所行也、

〔西宮記臨時十〕於市行事

雜例云、長保元年十二月十六日、着鈦政於東市行、（先例上十五日於東市行之、下十五日於西市行之、而年來東西總無人、仍只於東市行之、）又云、

同四年五月廿一日、於東市行着鈦政、依無西市、年來不向之、

今案使行事、雖於市可行、中古以來、除着鈦政之外、殊不行他事歟、

〔西宮記臨時十〕與奪事（附臨時着鈦例幷放免役畢囚人事）

准贓布拾壹段參丈

秦興安（年卅五 山城國人）

贓物壹種

准贓布拾參端壹丈三尺

右貳人天喜元年十二月四日、處徒四年（○四年恐二年誤）已了、而其役滿畢、宜從原免、

藤井俊丸（年卅 出雲國人）

贓物壹種

准贓布捌段貳丈伍寸

右壹人天喜二年五月廿五日、配徒一年半、而所役既滿、得放免矣、

高橋金犬丸（年廿五 加賀國人）

贓物壹種

准贓布貳端參丈

右壹人天喜二年十二月廿二日、處一年徒者也、格律所限、役以滿畢、宜從放免、

右壹人

藤井翁丸（年廿五 右京人）

贓物壹種

准贓布玖端貳丈參尺

右壹人天喜二年五月廿五日、配徒一年半者也、罪科所指、可從放遣、

以前者鈦四人、勘申如件、

天喜三年十二月廿五日　　右兵衛權少尉源文頼

今案件免物、近代向獄門儀不見、只着鈦政次行之、囚人着鈦了後、勘問尉揖佐、喚看督長一音、稱唯立仰云々、取鈦之後、自懷中取出烏帽着之、一拜分散而已、

〔西宮記臨時十〕成勘文事附囚名帳 役畢勘文

勘申着鈦囚人役畢事

合竊盜壹人左

內藏久任年 左京人

贓物壹種

准贓布肆端參丈陸尺

右壹人竊盜之犯、承伏已畢、仍去年十二月廿八日、處徒一年、即以着鈦、而其役已滿、可從原免、

以前着鈦囚人役畢、勘申如件、

長久三年十二月十四日官人署同勘文

今案、道官人兼日成勘文、先覽別當、有役畢勘文之時、同覽了、書見囚帳件帳着鈦勘文書略之重卷、以紙一枚封之、令齋政申看督長、令見佐以下、披見之後、如本封之、尉以下加署、件勘文帳等、皆有尉以下署所也、諸官見了、署不着政官人不披見、又不加署、但佐道志雖不着披見之、後成勘文、官人返取着鈦并役畢勘文等奉別當、囚帳隨身、於市下公文案主而已、

〔朝野群載十一廷尉〕勘申着鈦囚役畢事

合伍人

左肆人

日置成任年卅 紀伊國人

贓物壹種

大志某姓
權少尉某姓
某姓
某姓
右衛門府生某姓
少志某姓
大志某姓
權少尉某姓
某姓
某姓

宗阿記云、如式可有件帳、而年來不造置、仍此度始造之、役畢勘文以之可成、官人署所如着鈦勘文、左右尉以下、注其署所、卽着鈦之日、當府見參官人署、下公文所令收、

使役法

〔西宮記臨時十〕成勘文事附囚名帳　役畢勘文

撿非違使式云、盜人不論輕重、停移刑部省、別當直着鈦、配役所令驅策、

又云、私鑄之輩、停送鑄錢司者、着鈦與盜人同、令沒入資財田宅、

放免役畢獄囚儀

〔西宮記臨時十〕與奪事附臨時着鈦例幷放免役畢囚人事

放免役畢獄囚儀

勘問式云、尉乍乘馬(或佐行之)向獄門前、喚直看督長名、(誡可令帶兵仗歟、下放此、)仰云、某姓某丸召(世、有數人者、可仰某丸某丸等、)稱唯、召出令候、仰云某丸承(禮、有數人者、可仰某丸等、)依徒役畢、任法免給(布、)各罷還本貫(氏、)重不奉仕犯(須、)爲公御財(シ天)

備進御調(禮止、)宣(布、長引、他放此、)次召看督長、仰云取鈦(禮、此云加奈支止禮、)稱唯、令脫、(脫去之後、因可拜歟、)

內藏吉淸年十九近江國人　一盜
贓物伍種
准布拾肆反漆尺已上貳人同類
金剌今高年廿紀伊國人　一盜
贓物三種
准布七反
右參人贓布不滿十三端、准犯依律、已及流刑、任格配徒、役六年、
右
大友忠吉年〻〻　二盜
五種准布拾肆反漆尺
右壹人左囚吉淸安助等之同類、罪同彼、
秦吉行年〻〻　二盜
紀安富年〻〻　二盜
贓物參種
准布漆端
右貳人左囚今高之同類、役亦同、
右今月十一日、着鈦獄囚如件、
長保三年閏十二月十一日

左衛門府生某姓
某　姓
少志某姓

少　尉藤原、、

平　宗實

源　家重

宮　道頼式

防鴨河判官少尉源朝臣、、

獄四帳

〔西宮記臨時十〕成勘文事附四名帳　役畢勘文

宗阿記云、長徳二年十二月十九日、着鈦政云々、着鈦勘文、此度新下、別當宣旨、斷罪令勘申、志忠信奉仕、余草之、自今而後、如此可勘之、

〔西宮記臨時十〕成勘文事附四名帳　役畢勘文

宗阿記云、長保三年閏十二月十一日、着鈦政、見參官人云々、自餘官人、皆向追捕所、未還向、即以伴尉令成着鈦勘文、無道官人之間、依有朝政、余欲成勘文之處、伴尉以一昨夕、適自大和來也、仍以伴尉令成件勘文、

〔中右記〕永久二年六月四日、明兼來、予問云、着鈦勘文、往古不詳、從何時定徒年載勘文哉、明兼申云、一條院御時、長德二年十二月着鈦政之時、別當公任卿仰左佐允亮、詳着鈦勘文、定入徒年也、其後勘文之體相定、及近代者、此事相尋之處、已以相叶也、昔之勘文、不定徒年云々、

〔西宮記臨時十〕成勘文事附四名帳　役畢勘文

左右獄四帳

　合陸人左三人右三人已强盜

左

　大中臣安助年卅丹波國人　一盜

藤井久成年卅六左京人
贓物壹種
准贓布佰參拾端
右一人知情受盜贓者也、旨伏之狀、已以露顯也、賊盜律云、知竊盜而受分者、計所受贓准竊盜論、減一等、名例律云、稱減者就輕次、又條云、稱准盜論之類、罪止遠流者、仍從遠流之上減一等、合徒三年、尙任格律、合役四年、

內藏安行年四十六備中國人
贓物二種
准贓布伍拾貳段
右一人運漕官物之間、詐稱漂倒之由者也、訊問之庭過狀已了、撿廐庫律云、應輸課稅及入官之物、而廻避詐隱而不輸、或巧僞濫惡者、計所闕准盜論者、而准贓布雖及遠流、准據格律宜役六年、

以前今月廿七日、可着鈦左右獄囚、勘申如件、
永久三年十二月廿日

右衞門府生內藏經則
造東大寺主典少志惟宗、、
安倍資清、、
藤原、、
防鴨河主典左衞門府生伴有貞
明法博士兼少志中原、、
少志大江行重

准盗布拾肆端貳丈

右一人强盗之犯、吕伏已了、科斷之法、具注上條、准犯依格、可役六年、

物部重貞 年五十一 左京人

高橋延重 年五十 左京人

日下部國成 年六十一 左京人

贓物壹種

准盗布漆端

右三人共犯强盗、過狀早了、宜任格律、同役六年、

竊盗伍人

春日助丸 年廿四 伯耆國人

贓物參種

准贓布伍拾壹端

右一人竊盗之犯、承伏已了、科斷之法、且注上條、任律准格、宜役六年、

藤井重友 年卅六 丹波國人

贓物壹種

准贓布玖端肆丈

藤井國延 年卅三 左京人

贓物參種

准贓布伍端

右二人各犯竊盗、款狀先了、而格律所指、合役一年、

義、亦毎此彼、但除擧輕明重、擧重明輕之外、倘准量科、是賊盗律云、盗毀佛像者、徒三年、又條云、盗不計贓而立罪名、及言減罪、而輕於凡盗者、計贓重以凡盗論、加一等、名例律又云、二罪以上俱發狀、以重者論、注云、謂非應累者、唯條其狀、不累輕以加重者、件王力丸、已盗人物、准贓五端、合徒一年、又盗經典、准布一端、合徒一年半、然而未見累人物於經典、而可併滿科斷之法、仍比附盗佛像之法、雖須不計贓徒三年、倘任格制之旨、宜處四年之役、

日前金里 年十九 尾張國人

贓物壹種

准贓布陸端壹丈

佐伯武里 年廿七 左京人

贓物參種

准贓布伍端貳尺

右二人竊盗之犯、承伏各畢、而准據格可役、□□

不知姓太郎丸 年廿七 左京人

贓物壹種

准贓布壹端參丈

右壹人竊盗之犯、款狀先了、任格新制可役一年、

右玖人

強盗肆人

丹治安清 年廿三 山城國人

贓物參種

贓物壹種
准贓布壹端
平群次郎丸年廿三右京人
贓物壹種
准贓布肆端
右二人各犯强盜過狀共了、但同類之徒、彼此未被追究者、撿獄令云、犯罪事發者、有贓狀露驗者、雖徒伴未盡、見獲者先依狀斷之者、而推所犯贓布、已以當流刑、准據格條、令役六年、
不知姓禪師丸年廿二近江國人
贓物壹種
准贓布壹丈伍尺、
右一人强盜之犯、款狀已了、方准格律、可役四年、
竊盜伍人
春日國松年廿五左京人
贓物參種
准贓布貳拾參端
右一人竊盜之犯、已伏早了、撿賊盜律云、竊盜一尺、杖六十、一端加一等、五端徒一年、五端加一等、五十端加役流者、但推贓布數、不及十端、方今任格律、宜役三年半、
不知姓王力丸年廿一大和國人
贓物貳種
右一人盜取經典并人物者也、勘問之庭、已伏已了、撿名例律云、類斷罪而无正條、說者比附之

直二百五十文　用紙五十帖〇直五十文中略

長德二年十二月十七日

件勘文道志爲知贓數所注云々、不相副着鈦勘文耳、計本贓直法隨其高下、准定罪之輕重、但殺人放火之類、爲惡其意況處重科而已、古賢之用心也、

〔朝野群載十一廷尉〕勘申可着鈦左右獄囚事

合拾玖人

強盜玖人

竊盜拾人

左拾人

強盜伍人

秦時里年廿五右京人

不知姓牛丸年三十左京人

贓物壹種

准贓布參端

右二人共犯強盜、承伏同畢、撿賊盜律云、共盜者併贓論、註云、共強盜者、罪无首從、又條云、強盜一尺徒三年、一端加一等、十五端絞、刑部格云、犯盜之人、配徒之輩、宜犯徒一年者、加半年、犯二年三年者、各加一年、若犯三流者各役六年、獄令云、流徒罪居作者着鈦若盤枷、不得着巾、判事式云、平贓布者、長五丈二尺、廣九尺四寸、爲一端者、今推彼贓布之口雖及流刑、准犯依格、應役六年、

富成則年六十紀伊國人

長德二年十二月十七日

右衛門府生飛鳥部好兼

美努伊遠

少志朝原善理

大志伴忠信

權少尉安茂兼

平倫範

大尉藤原慶家

防鴨河主典左衛府生西忠宗

少志錦爲信

權大尉藤原忠親

大尉藤原季雅

〔西宮記臨時十〕成勘文事附四名帳　役畢勘文

可着鈦左右獄囚贓物事

合貳拾參人

强盜十九人

竊盜四人

左十一人

大春日兼平年五十山城國人　强盜

贓物七種　直錢七百卅文　准贓物布六反四丈流　弓一張直卅文　胡籙一腰直五十文

拔出綿一領直卅文　麥五斗直二百五十文　麻布二反直百五十文　手作布三丈五尺

贓物貳種
准贓布拾肆反玖尺
廣井忠助 年
贓物貳種
准贓布陸反漆尺
右參人强盗之犯、雖不承伏、見贓之數、亦及三流、徒役之限各以六年、
多治比吉助
贓物壹種
准贓布肆丈貳尺參寸
右壹人强盗之犯、承伏已畢、贓布之數、不滿一反、准據格律、應役四年、
竊盗貳人
秦吉信 年
贓物貳種
准贓布玖反伍尺
右壹人竊盗之犯、承伏已畢、所取之贓、當徒一年、即依格旨、役一年半、
石城吉童丸 年
贓物貳種
准贓布玖反伍尺 九十反五尺歟
右壹人竊盗之犯、承伏已畢、計其贓布、過五十反、同前律當加役流、更任格旨徒役六年、
以前今月　日可着鈦左右獄囚、勘申如件、

准贓布拾參反玖尺

右貳人同謀强盜、共成其犯、爰淸澄早以承伏、專無所避、宮時雖不承伏、已有見贓、科斷之法、章條存上、但賊盜律云、共盜者併贓論、共强盜者、罪無首從者、今推贓布數、不滿十五端、淸澄等犯、得分雖異、併贓論罪、是及流刑、上件二人應役六年、

伊勢利永 年

贓物參種

准贓布拾肆反貳丈伍尺

林枝重 年

贓物貳種

准贓布陸反參丈貳尺

紀淸忠

准贓布拾貳反貳丈陸尺

秦乙犬丸

贓物貳種

准贓布陸反壹尺

右肆人强盜之犯、承伏已畢、計贓布之數、不及十五反、依律論罪、共是及流、隨格役六年、

美努福安 年

贓物貳種

准贓布拾肆反壹丈捌尺

三島重遠 年

津守秋方年
贓物壹種
准贓布肆丈貳尺參寸
右壹人强盜之犯、承伏已畢、撿賊盜律云、强盜一尺徒三年、二反加一等者、今准贓布不滿一反、
據律條當徒三年、依格加一年、應役四年、

竊盜二人
能登觀童丸年
贓物壹種
准贓布捌拾反壹丈伍尺
大神福童丸年
贓物肆種
准贓布佰貳拾伍反伍尺
右貳人竊盜之犯、承伏已畢、撿賊盜律云、竊盜一尺杖六十、一反加一等、五反徒一年、五反加一
等、十五反加役流、名例律云、本條稱加役流者、配遠所役三年者、准計贓布過五十反、依律言之、
雖當加役流、依格論之、應處役六年、

右拾貳人
强盜拾人
星河清澄年
物部宮時年
贓物貳種

准贓布拾肆反參丈

田邊延正（年卅、左京人）

贓物漆種

准贓布拾肆反參丈

伯耆諸吉（年廿七、大和國人）

贓物伍種

准贓布拾肆反壹丈貳尺

右陸人強盜之犯、承伏已畢、撿賊盜律云、強盜一尺、徒三年、二反加一等、十五反絞、刑部格云、犯盜之人、配徒之輩、宜犯徒一年者加半年、犯二年三年者各加一年、若犯三流者、各役六年、獄令云、流徒罪居作者、着鈦若盤枷、不得着巾、判事式云、平贓布者、長五丈二尺、廣二尺四寸、爲一反者、推彼贓布、數不滿十五反、准犯依律、已及流刑、今任刑配徒、早應役六年、

菅野並重（年、、、、）

贓物參種

准贓布拾肆端貳丈壹尺

紀重春（年、、、、）

贓物壹種

准贓布拾肆反參丈

右貳人強盜之犯、雖不承伏、直贓之物已以顯露也、撿斷獄律云、應訊囚者、必先以情審察詞理、反覆參驗、若贓狀露驗、理不可疑、雖不承引、卽據狀斷之者、計贓斷罪具見上條、仍以所得之物、亦論所當之科、依格加罪、徒役六年、

寛和二年五月廿七日　　右衞門府生錦〇中略

件勘文、長德元年以往、只注承伏之由並本贓數等、不指役畢期之例也、爲見其體載之、

〔西宮記臨時十〕成勘文事附囚名帳　役畢勘文

勘申可着鈦左右獄囚事右志伴忠信成之、實左佐惟宗允亮草之、

合貳拾參人

強盜拾玖人

竊盜肆人

左

強盜玖人

大春日兼平年五十讃岐國人

贓物漆種

准贓布陸端肆丈

岩松年卅八讃岐國人

贓物肆種

准贓布拾肆反

清原延平年廿五山城國人

贓物貳種

准贓布拾壹反

藤井國成年卅七大和國人

贓物參種

右五人承伏進二過狀一了〔○五人當レ作二六人一〕

清原延高

贓物

袿四領〔一領青鈍、一領　一領纐花染　一領山吹色〕

竊盜人

清原宗本〔年六十〕　左京人

贓物

黑毛牡馬一疋

大中臣氏信〔年廿〕　大和國人

贓物

鹿毛牡馬一疋

右二人承伏進二過狀一了

物部光明

贓物

大幡一流

大中臣市行

贓物

入袋袙一領　手作布襖二領

右二人贓狀露驗者也

以前今月廿八日、可レ着レ鈦左右獄囚勘申如レ件、

白綿褂一領　紅花染綿褂一領
單袴一腰　櫛筥一合　胡籙一腰
赤毛父馬一匹　黒毛父牛一頭

息長直貞

贓物

鹿毛父馬一匹

綾部綠丸〇此次行當有二贓物二字一

大幡三流長各五丈

大中臣光忠年卅八　越前國人

贓物

櫻色綾褂一襲　青鈍綿褂一領
葡萄染下襲一領

凡河内時衆年十八　右京人

贓物

手作布九反　白合褂一領
拔出綿一領　手作布帷一領

秦犬童丸年廿　右京人

贓物

絹衫一領　絹袈裟一條
誦數一連　合袴一腰

大刀一柄

六人部法師丸

贓物

手作布六丈　同布衣二領

辛鋤鍤一枚　槻弓一枝

穂積貞連

贓物

白衾一領　黒毛母馬一匹　錢一貫文

岡田是本

贓物

手作布一端　黒紅花阿古女一領

單袴一腰　錢一貫文

右五人犯強盜者也、勘問其由、承伏進過狀已畢、

坂本吉連

贓物

銅鑷一枚　鐙一懸

右一人犯強盜者也、仍捕其身、糺所取之贓物、令請被盜主秦望明畢、而吉連左右避遁、不承伏盜犯之由、然而贓狀靈驗者也、

錦是長

贓物

表袴二腰　調布三端
中臣茂春
贓物
四五寸木二枝
土師有時
贓物
鹿毛父馬一匹
依智秦松連
贓物
調布二丈　錢六百文
手作布袴一領　信濃布一丈
右四人犯竊盜者也、勘問其由、承伏進過狀已畢、
右九人
曰佐吉助
贓物
單袴一腰　橡色合指貫一腰
菱紬直垂一領
文室有直
贓物
手作布狩衣一領　同布袴一腰

贓物

白綿褂一領　承和色阿古女一領

單袴二腰　懸子筥一合

染穀一匹

新飲助連

贓物

錢一貫文

額田常富

贓物

白單褂一領　基帳帷一條

藤原重子丸

贓物

白阿古女二領　細布袈裟一條

鈍色阿古女一領　黑紅花染單袴二腰

右六人犯強盜者也、勘問其由、承伏進過狀已畢、但于常富去天曆八年十二月廿二日着釱者也、而今年六月十三日逃亡、同年八月九日捕禁、逃亡之由、既以承伏、

坂上犬法師丸

贓物

鐵十二延　衾拔出綿一條

信濃布二丈五尺　綿二屯　白褂二領

右承伏進過狀了

竊盜一人

高田恒枝 年卅二 伊勢國人

贓物

錢十貫文

右承伏進過狀了

右十人

强盜六人

阿刀行忠 年廿 左京人

贓物

白合褂一領　青鈍褂一領

白合袙一領　手作布襖一領

多治近滋 年卅九 筑前國人

贓物

五丈大寶幡三具 各四角付小幡四流

白綿褂一領　白手作布狩衣一領

高額豐茂

贓物

黑紅花單褂一領　白單小衣一領

文室經忠

勘申可着鈦左右獄囚事

合十五人

強盜十人

竊盜五人

左五人

強盜四人

大原眞犬丸（年卅）　左京人

贓物

絹衫一領　絹袈裟一條　誦數一連

合袴一腰

河邊延正（年卅）　伊勢國人

贓物

袿四領（一領青鈍　一領花染）（一領茜染　一領山吹色）

清原宗高（年卅二）　筑前國人

贓物

櫻色綾袿一襲　青鈍綿袿一領

葡萄染下襲一領

清原德忠（年卅）　日向國人

贓物

手作布狩衣一領　同布袙袴一腰

勘文

左看督長紀高景申ク、可給鈦キ犯人左八ヤ、右七ナ、合十ヒカ、五人イトリ令候ト申、左尉致明朝臣仰云、鈦給ヘ　高景稱唯、右看督長諸帥春明云、共呼事、共稱唯退出、着鈦、（初出時看督長人守官人随身等列立、着鈦者引率、可无着鈦者火長随身等不離、看督長北進列留在庭中、左以西爲上、右以東爲上、）着鈦了看督長等如初進北就假左右邊、此間令囚近拷杖、（拷留之後、爲見其形令近進也、）左看督長紀高景等申久、犯人乃鈦給了ヌト申、尉仰云ヨシ、高景稱唯、春明云、共呼事、共稱唯退出、次取版、次起座出自初入間、各見合着座、（時人云、列立北幔南庭中、拷後、各着座云々、無拷失也、又出時於南幔南砌可有拷云々、至于此拷唯可見合歟、於拷無由、但可問故實、）居飯并汁物等、次免物、次召名、（不讀唯下矣、是故實也、）事了各各分散、

〔西宮記 臨時十〕成勘文事（附囚名帳　役畢勘文）

勘申可着鈦左右獄囚事

合十九人

強盜十二人

竊盜七人

左十人

高田助茂

贓物

紅花染衾一條　鏡二口

合子八枚

右三人犯竊盜者也、勘問其由、承伏進過狀已畢、

以前今月廿二日、可着鈦左右獄囚勘申如件、

天暦十年十二月廿日　右衛門府生蜂田平時（○下略）

〔西宮記 臨時十〕成勘文事（附囚名帳　役畢勘文）

平緒、藏人尉着青色、自餘官人用常束帶、先着市屋、（佐藏人尉、聞他官人等參集之由、後着之、其儀於市東堀河西程、扣車、大夫尉或集車云々、遲參官人、不及申故、）看督長等相率迎來、頭之下車西步、（見物車塞路、以看督長先可令却歟、）容止進退可用心、徐々步至幄下、北折自東路、（掘芝作路、）着市屋、看督長二人以弓褰幔、（引屋南東外幔也、）左官人經屋東、着北座、右官人直着南座、各至長押下、揖昇膝行、着座如常、但不取沓、案主在左府生下方、看督長在西方幄、次供給先酒一巡、尉勸盃如應儀、（夏政左儲之、冬政右儲之、用机、）次居汁物、（不汁物申、）各下箸食之、次酒一巡了、拔箸、次左右看督長進廳文、（今日可着鈦囚夾名也、佐料公文案主入覽筥持來、尉已下看督長直進之、）佐披見之、後入覽筥、次揖退座着沓、又揖如常、着樓前幄、（左官人如入儀、右官人傍長押、從壇上西步出、自西道先尉以下退立在西方、佐小揖下壇、看督長褰幔如初、左右合眼相並至幄下、相對入自座末柱內、經胡床前、次第着之、座定小揖、佐胡床掩席有文、）整衣裳正笏、案主幄東立胡床居之、頭之置版、見與奪儀還着本座、羞酒肴、尉不勸盃、佐執盃巡訖、囚看督長見不參幔如常、案主取廳文令看督長給隨身、佐退出、案主送之如常、府生不下立之、

〔西宮記臨時十〕與奪事（附臨時着鈦例并放免役畢囚人事）

或記云、寬和二年五月十七日、着鈦政、○（中略）着鈦十六人（左八人、右八人、）之中、不計贓盜人取傾宇佐宮神馬之者也、又決杖原免之者一人、强盜者知主盜贓而藏者也、爲拷件人立拷器、其儀去版南一許丈、立之、第一尉召看督長仰云、召某姓某丸、（世、）召犯人就版、尉召看督長仰云犯人寄器、（與、）看督長申杖數、尉稱宥給之詞如廳拷儀、看督長隨身長二行陣列如常、

〔天延二年記〕天延二年五月廿三日、依政着西市、（雖不可然、依雨濕乘車、又依例着青色、佐着平緒、）其儀先着歸屋、（依雨儀歸先例官人先着也、左南面、右北面、皆東上、佐西面、○歸屋恐肆屋誤、）依雨脚不降有僉議、令打例平張二字、（一字在南政所、一字在小後廳云々、座佐西南、（左北、右南、）左尉以下着北、右尉以下着南、皆東上相對、）移着幄座、酒饌如常、（尉家所儲也、立用一度料云々、飯遲來、仍一兩盃後着政座、）看督長進連立文、（毎人名進左右各一枚也、但依例相分、犯人左八人、右八人、可同數也云々、）次起座連立、夾名取副笏、列北幄南庭、（左立東、右立西、各相對、以南爲上、）相分夾屏築垣、左右見合到南幄南砌、見合揖着胡床、以中央爲佐座、（左東、右西、）座定看督長紀高景版（疊持柱北、）次高景取犯人過狀、（盛柳筥、）覽左佐以下、次覽右尉以下、（今日右佐不着、）覽了看督長等左右列立各出東西、更折進北就版位東西、（左在東、右在西、皆北面、次々立後、）

廷尉佐參行、大理相觸之時、申沙汰之外無他、

〔夕拜備急至要抄上〕十二月一着鈦政（同二五月一）

〔公事根源五月〕着鈦政

是は撿非違使以下、東京にて制法をおこなふ事也、元明天皇の御宇和銅よりはじまる、月令の本文には孟夏の月に有べしとみえたれど、四月は齋月にて、神事ことしげゝれば、五月におよぶとなり、

〔公事根源十二月〕着鈦政

五月におなじ

〔禮記月令二十六〕是月（孟夏）也、聚畜百藥、靡草死、麥秋至、斷薄刑、決小罪、出輕繫、

〔西宮記臨時十〕與奪事（附臨時着鈦例并放免役事四人事）

勘問式云、與奪儀、（左尉與奪、若左尉不在、右尉亦得行之）左右佐以下、着帷幄下、如常、（至于天暦之比、着市樓下、行此政、是則相對樓前、決罰罪人之儀歟、又件政當上十五日之時、於東市行之、當下十五日之時、於西市行之、是亦喚集市人、示衆決之情歟、今樓已顚倒、人衆不集、仍偏向東市樓所、立幄行之、）尉喚看督長名、稱唯、當幄東居、尉仰云、置版木、（其詞如尋常政、）稱唯、取版去、幄南二許丈、置之退去、以囚過狀入覽筥、覽佐以下、（先覽左右佐、次左右尉志府生、往反覽之、）訖、看督長退出、引左右囚人、從東西將來、（囚若干、取鈦押繼、如御、人別有防援、）看督長陣於囚北、隨身長陣於囚南、去幄前五許丈、左右看督長、陳列東西、列上立幄前、左第一看督長就版、申云、左右看督長、某姓某丸等申久、可給鈦之犯人、左若干、右若干、并若干候（止布）申、尉揖佐、命云依例給鈦、（詞云依例、加奈支當都、）看督長稱唯訖、右第一看督長唱云、共呼左右看督長、共稱唯退歸、令着鈦訖、列上如初、申云、左右看督長某姓某丸等申久、犯人等（爾）鈦給了（奴止）申、尉揖佐、命云、令候本禁、（與引、長）看督長稱唯、（右看督長唱呼、共稱唯如例、）將囚退去訖、佐以下相揖、次第起還、着本座、勸一盃、（其肴五月索餠、十二月海鼠、必用之、此外更一種魚物、若一種菓子相加也、）訖、各退出、

今按五月十二月、擇無障之日（可遣日神事六齋日欠日別當衰日歟）行之、當日諸官向市裝束、佐如廳政、大夫尉必着

名稱

日時

仁年間ニ、盜ノ爲メニ特ニ徒六年、十五年等ノ法ヲ設ケシハ、著鈦政ノ始ナルベシ、因テ著鈦政ノ勘文ニハ、毎ニ弘仁ノ官符（是モ徒刑篇ニ引ケリ）ヲ引用セリ、然ルニ公事根源ニ、元明天皇ノ朝ニ始マルト云ヘルハ、恐ラクハ誤ナラン、此政ハ盜犯及ビ私鑄錢ノ徒ヲ著鈦シテ、驅役スル爲メニテ、五月十二月ニ日ヲ擇ビテ行フ、村上天皇ノ天暦ノ比ハ、市司ノ樓下ニ就キテ、上ノ十五日ハ東市ニテ行ヒ、下ノ十五日ハ西市ニテ行ヒシガ、後ニ樓覆リテ、再ビ建テザリシ故ニ、偏ニ東市ノ樓ノ遺址ニテ、幄ヲ立テヽ行ヒシトナリ、當日ハ衞門佐以下、帷幄ノ下ニ就キ、看督長囚人ノ過狀ヲ以テ、衞門佐ニ呈シテ後、看督長左右獄ノ囚人ヲ將テ至ル、因ニハ人別ニ防援アリ、既ニシテ衞門佐、看督長ニ命ジテ、鈦ヲ加ヘテ獄ニ送ラシム、其日罪ニ因リテ、決杖シテ原免スルコトモ、服罪セザル者ヲ拷訊スルコトモアリ、是ヨリ先ニ衞門府ヨリ、著鈦スベキ獄囚ヲ撿シテ勘文ヲ上ル、其勘文ニハ、一條天皇ノ長德元年以往ハ、唯服罪ノ狀ト、贓數トヲ載セテ、役期ヲバ擧ザリシニ、後ニハ律ヲ考ヘテ、役期ヲ載セタリ、著鈦畢リテ後ハ、更ニ書ヲ作リテ之ヲ報ズ、又役畢ノ勘文アリ、役期ノ畢リタルコトヲ勘ヘ報ズルナリ、役ノ畢リタル者ハ、著鈦政ノ日、衞門尉看督長ヲシテ、囚人ノ鈦ヲ脱セシメ、懷中ヨリ烏帽ヲ取リ出シテ、之ニ與ヘテ放チ遣ル、又著鈦ノ後ニハ、更ニ決杖セシ例ナルヲ、圓融天皇ノ天祿四年ニ之ヲ停メタリ、ナホ徒刑囚禁二篇ヲ參考スベシ、

〔名目抄　恒例諸公事〕著馱政（チヤクダノマツリゴト）

〔年中行事秘抄　五月〕着鈦政事（避二別當衰日一、佐以下於二東市一行レ之、東獄、）

〔年中行事秘抄　十二月〕着鈦政事

佐以下着行、立春以後有レ例、

〔夕拜備急至要抄　上五月〕一着鈦政（擇二吉日一）

疏議曰、盜及傷人徒以上、並合配徒、不入加杖之例、諸條稱以盜論、及以故殺傷論、以鬪殺傷論者、各同眞盜及眞殺傷人之法、親老疾合侍者、謂有祖父母父母年八十以上及篤疾合侍、家無兼丁者、雖犯盜及傷人、仍依前加杖之法、

〔律疏名例〕凡雜戶陵戶、○中略犯徒者、准無兼丁例加杖、還依本色、

〔延喜式刑部二十九〕凡犯罪之人、或尫或弱、決杖之時、且寒且熱、重加頓杖、恐致死亡、須量其貌滿役之間准折決畢、

〔西宮記臨時十一〕停止着鈦後決杖事

撿非違使式云、盜人雖承伏已了、決笞杖七十、天祿四年五月廿六日宣旨云、撿非違使別當中納言從三位兼行左衞門督春宮大夫源朝臣延光、今月三日奏狀偁、強盜竊盜承狀着鈦者、更決杖七十、拷掠之間已滿二百、着鈦之後何決七十者、內大臣○藤原兼通宣、奉勅件事自古行來之例、非隨申請輙可令改、然而如聞者、着鈦後決杖事、非律令之所載、是使等所申行也、頗似苛酷、疑惜冤愁、思彼囚人之所歎、欲施仁化而相赦、宜停楚捶於一時、以貽漢德於万代者、使宜承知依宣行之、　左大史伴宿禰保在奉

附　著鈦政

鈦ハ鉗ナリ、邦語ニカナギト云ヒテ、囚人ヲ連繫スル具ナリ、史記平準書、及ビ其註ニ據リテ考フルニ、鐵ニテ造リ、左趾ニ著クル具ナルヲ、倭名類聚抄ニハ脛沓也トアリテ、鐵ヲ以テ頸ニ著クル具ト爲シ、類聚名義抄ニハ鈦ヲクビカシトモ訓セリ、以上ノ書ハ、囚獄篇ニ引ケリ、サレバ我邦ノ鈦ハ、頸ニ著ケタルナラン、日本後紀ニ載セタル延曆十八年六月ノ詔ニ、鉗鏁囚徒、暴體苦作トアルハ、徒刑篇ニ引ケリ、著鈦ノ罪人ヲ指セルニテ、鈦ヲ著ケ鏁ヲ用キタルガ如シ、而ルニ年中行事ノ著鈦政ノ圖ニハ、索ヲ用キテ衆囚ノ兩臂ト胸背トヲ連繫セリ、後世ニハ此ノ如クナリタルニヤ、著鈦長役ノ事ハ、聖武天皇ノ天平十七年徒刑篇ニ引ケリニ見エタレドモ、嵯峨天皇ノ弘

問曰、家內雖有二丁、俱犯徒坐、或一人先從征防、或沒官、或逃走、及被禁、並同無兼丁以否、

答曰、家無兼丁、免徒加杖者、矜其糧餉乏絕、又恐家內困窮、一家二丁俱在徒役、理同無丁之法、便須決放一人、征防之徒、遠從戍役、及犯徒罪以上、獄成在禁、同無兼丁之例、據理亦是弘通、居官之人、雖非丁色、身既見居榮祿、不可同無兼丁、若兼丁逃走在未發之前、既不預知、得同無兼丁之限、如家人犯徒、事發後兼丁、然始逃亡、若其許同無丁、便是長其姦詐、即同有丁之限、依法役身、

又問、二人俱徒、許決放一人、若三人俱犯徒坐、家內更無丁、若爲決放、

答曰、律稱家無兼丁、本謂全無丁者、三人決放一人、即是家有丁在、足堪糧餉、不可更放一人、若一家四人徒役、決放二人、其徒有年月及尊卑不等者、先從見應役日少者決放、役日若停、即決放尊長、其夫妻並徒、更無兼丁者、決放其婦、

徒一年加杖一百二十、不居作、一等加二十、（流至配所應役者亦如之）

疏議曰、徒一年加杖一百二十、一等加二十、即是半年徒加杖二十、不居作、既已加杖、故免居作、流至配所應役者、謂流人應合居役、家無兼丁、應加杖者亦準此、

若徒年限內無兼丁者、總計應役日及應加杖數準折決放

疏議曰、徒限未滿、兼丁死亡、或入老疾、或犯罪征防、見無兼丁者、若犯徒一年、三百六十日合杖一百二十、即三十日當杖十、若犯一年半徒、五百四十日合杖一百四十、即是三十八日當杖十、若犯二年徒、七百二十日合杖一百六十、即是四十五日當杖十、若犯二年半徒、九百日合杖一百八十、即五十日當杖十、若犯三年徒、一千八十日合杖二百、即五十四日當杖十、若犯三年半徒、一千二百六十日亦合杖二百、即六十三日當杖十、若犯四年徒、一千四百四十日亦合杖二百、即七十二日當杖十、其役日未盡、不滿杖十者、律云加者數滿乃坐、既不滿十、據理放之、

盜及傷人者不用此律（親老疾合侍者、仍從加杖之法、）

〔播磨風土記 飾磨郡〕貽和里中略○所以稱飾磨御宅者、大雀天皇仁德御世、遣人喚意伎出雲伯耆因幡但馬五國造等、是時五國造、即以召使爲水手、而向京之、以此爲罪、即退於播磨國令作田也、

〔日本書紀 十二履中〕元年四月丁酉、召阿曇連濱子、詔之曰、汝與仲皇子共謀逆、將傾國家、罪當于死、然垂大恩、而免死科墨、即日黥之、因此時人曰阿曇目、亦免從濱子野島海人等之罪、役於倭蔣代屯倉、

加杖法

〔律疏 名例〕凡犯徒應役而家無兼丁者、謂非蔭贖之人、法合役身、而戸內全無兼丁、若家內雖有二丁、俱犯徒坐、或一人先從征防、或逃走、及被禁、竝不同兼丁、家無兼丁、免徒加杖者、矜其根緣乏絕、又恐家內困窮、一家二丁俱在徒役、理同無丁之法、便須決放一人、征防之徒、違從公役、及犯徒罪以上、獄成在禁、同無丁例、其任官及事發逃走、同有丁例、居官之人、雖非丁色、身既居榮祿、不可同無兼丁、若兼丁逃走、在未發之前、既不知、得同無兼丁限、如家人犯徒、發後兼丁然始逃亡、若其詐同無丁、便是長其奸僞、即同丁限、依法役身、又三人俱犯徒坐、家內更無兼丁者、律稱家無兼丁、本謂全無丁者、三人決放一人、即是家有丁在、足堪根餉、不可更放一人、若一家四人徒役、決放二人、其徒有年月及尊卑不等者、先從見應役日少者決放、役日若齊、即決放尊長、其夫妻並徒、更無兼丁者、決放其婦、妻年廿一以上、同兼丁之限、婦女家無男夫兼丁者亦同、妻同兼丁、婦女雖復非丁、據禮與夫齊體、故年廿一以上、同兼丁之限、其婦人犯徒、戸內無男夫年廿一以上者、亦同無兼丁例、言以上者、謂六十以下、其殘疾既免丁役、亦非兼丁之限、徒一年、加杖一百廿、不居作、一等加廿、流至配所、應役者亦如之、徒一年、加杖一百廿、一等加廿、即是半年徒、加杖廿、不居作、既已加杖、故免居作、流至配所應役者、謂流人應合居役、家無兼丁、應加杖者、亦准此、若徒年限內無兼丁者、總計應役日及應加杖數、准折決放、役限未滿、兼丁死亡、或入老疾、或犯罪、征防見無兼丁者、當若犯徒一年、三百六十日、合杖一百二十、即是三十日當杖十、若犯一年半徒、五百四十日、合杖一百四十、即是三十八日當杖十、二年徒、七百二十日、合杖一百六十、即是四十五日當杖十、二年半徒、九百日、合杖一百八十、即是五十日當杖十、三年徒、一千八十日、合杖二百、即五十四日當杖十、三年半徒、一千二百六十日、亦合杖二百、即六十三日當杖十、四年徒、一千四百四十日、亦合杖二百、即七十二日當杖十、其役日未盡、不滿杖十者、律云加者數滿乃坐、既不滿十、據理放之、盗及傷人者、不用此律、盗者不限強竊、傷人不據親疎、本條稱准盗及減故殺傷一等二等者、依加杖例、親老疾合侍者、仍從加杖法、略謂父母、父母老疾、家無丁者、雖是盗及傷人、亦依加杖之法、

〔唐律疏議 三名例〕諸犯徒應役而家無兼丁者、妻年二十一以上同兼丁之限、婦女家無男夫兼丁亦同、

疏議曰、應役者謂非應收贖之人、法合役身、而家無兼丁者、謂戸內全無兼丁、妻同兼丁、婦女雖復非丁、據禮與夫齊體、故年二十一以上同兼丁之限、其婦人犯徒、戸內無男夫年二十一以上、亦同無兼丁例、言以上者、謂五十九以下、其殘疾既免丁役、亦非兼丁之限、

全備者、(謂徒囚家貧、餉糧艱難、或來或絶、不能全給、故令二等以上親、助其五十日餉、自外所不給者、自食公糧、故下文云隨盡公給也、)二等以上親代備、(謂以上者、女子適人、及婦收嫁是也、代備者、五十日內、更相備給也、)五十日糧、隨盡公給、若去家懸遠絶餉、及家人未知者、官給衣糧、家人至日、依數徵納、(謂若絶業單貧者、不在徵限也、)其見囚絶餉者、(謂在禁未斷、及斷訖未配之類、)亦准此、

免課役

〔令義解三賦役〕徒人在役並免課役、

〔延喜式二十五主計〕凡勘大帳者、〇中略依符所免爲符損、(中略)徒人(中略)爲見不輸、

在役死亡

〔令義解十獄〕凡囚死無親戚者、(謂並無有服之親者)皆於閑地權埋、立牓於上、記其姓名、仍下本屬、即流移人在路、及流徒在役死者准此、

〔延喜式二十九囚獄〕凡罪人死亡者、具注姓名年居幷入徒年月日、申省、

役滿

〔延喜式二十九刑部〕凡徒人年限者、從入役日始計、其徒役滿者、省具錄事狀、遞送本鄉、

〔延喜式二十九囚獄〕凡徒人役滿、具錄役日幷作物色目、申送於省、

〔延喜式二十九刑部〕凡〇中略徒人役滿者、依法合免、其爲人凶惡、衆庶共知者不須放免、禁固獄中、理應放者申官免之、

赦徒刑

〔日本書紀二十九天武〕五年八月壬子、詔曰、死刑沒官、三流並除一等、徒罪以下、已發覺未發覺、悉赦之、唯既配流不在赦例、

〔續日本紀一文武〕三年三月甲子、河內國獻白鳩、詔〇中略赦畿內徒罪以下、

〔日本後紀八桓武〕延曆十八年六月丙申、詔曰、朕祗纂丕業、撫臨黎元、剋己勤躬、不遑寧處、思欲耕鑿四海、期之刑措、弘濟百姓、致之壽域、而近巡京中、過掘川處、鉗鏁囚徒、暴體苦作、興言於茲、愀然于懷、雖生民之愚、自招罪惡、而爲彼父母、寧不哀愍、其在役見徒、及天下見禁囚等、罪無輕重、並宜赦除、令得自新、但私鑄錢、謀殺、故殺、及被問民苦使推訪諸國郡官吏百姓等、不在赦限、其謀殺、故殺配役者、停役配流、普告遐邇、令知朕意、

之訪、兼亦致憲法乖謬之咎、縱有行來、何無改張、自今以後、全守朝章、着鈦之前、慥注犯贓徒年之數、原免之處、偏載限滿役畢之狀、然則着一孔之理、將叶三典之義者、（左衛門權佐惟宗朝臣允亮奉）

〔令義解十獄〕凡犯徒應配居役者、畿內送京師、在外供當處官役、其犯流應住居作者亦准此、婦人配縫作及舂、

〔令集解四職員〕刑部省例、依慶雲元年十二月廿六日太政官判、役徒人者、囚獄司率令作路橋、及役雜事、囚獄司例、依神龜元年六月四日太政官判、每雨落日旦、引將囚人等、使掃除宮闕邊穢陋、并東西厠等也、

〔延喜式二十九囚獄〕凡徒役人者、令作路橋及役雜事、又司每六日將囚人等使掃除宮城四面、其雨後旦亦掃清宮內穢汚幷厠溝等、

〔九暦〕天德三年十月廿三日、召囚人令掃池井事、（仰古佐宿所召仕也云々）

〔日本後紀二十四嵯峨〕弘仁五年八月甲子、免囚人日下部土方補木工長上、土方者、攝津國武庫郡人、以私鑄錢着鏁役於堀河、頗善工巧、仍棄瑕取才、

〔令義解十獄〕凡流徒罪居作者、皆着鈦若盤枷、（謂流徒通着鈦若盤枷、非云流着鈦徒着盤枷也、）有病聽脫、不得着巾、（謂不得着頭巾也、）每旬給假一日、不得出所役之院、患假者陪日、（謂文云患假、即賽假假之類、不可陪日也、）役滿遞送本屬、（謂此唯據徒人、流人者非、）

〔延喜式二十九囚獄〕凡罪人者、隨罪輕重着鈦若盤枷、（故燒公私倉舍、盜私鑄錢强奸之類、居作者卽着鈦、雜犯徒罪之類、着盤枷、）其鈦或四人或三人爲連、至暮着杻、明旦脫而役之、

〔令義解十獄〕凡徒流囚在役者、囚一人、兩人防援、（謂其囚二人者、四人防援、若囚在囹圄者、既禁其身、不可同在役法、仍須隨事量配、令堪掌固也、）在京者取物部及衛士充、（謂三府衛士也、）一分物部、三分衛士、在外者、取當處兵士、分番防守、（謂此亦爲兵士立文、）

〔令義解十獄〕凡在京繫囚、及徒役之處、恒令彈正月別巡行、有安置役使不如法者、隨事糺彈、

〔令義解十獄〕凡流人至配所居作者、並給官粮、（加役流准此、）若留住居作、及徒役者、並食私粮、即家貧不能

績、死者不再生、望請明定節文、依限驅使、謹請處分者、右大臣〇藤原冬嗣宣、奉勅夫配徒之輩既有年限、至於役使豈期終身、靜而言之事涉深刻、但兩京之內犯盜者衆、若不折衷何將懲肅、自今以後宜犯徒一年者加半年、犯二年三年者各加一年、杖罪以下只徒一年、若犯三流者役六年、其犯死罪別勅免死十五年爲限、若役畢之後不悔前過、亦有犯盜或爲人凶惡爲衆人所明知、或量其意況難恤之色、並是終身配役不可放免、但女人者減男之半、若犯杖罪以下依法決之、如應官當收贖者各依本法、自餘犯並從常律、其私鑄錢不論首從令鑄錢使終身役之、

弘仁十三年二月七日

〔西宮記臨時十〕成勘文事 附四名帳　役畢勘文

今案强竊盜私鑄錢等着鈦事、撿非違使等守式文可行也、至于餘罪科者、須進勘奏被下刑官斷之、仍非別宣旨之外、只爲捉搦不知〇知恐加字誤着鈦云々、强盜不得財徒二年、一尺徒三年、二端一尺近流、四端一尺中流、自六端一尺至十四端五丈一尺九寸遠流、十五端絞、依格加年、不得財徒三年、一尺徒四年、自二端一尺至十四端五丈一尺九寸役六年、十五端役十五年、竊盜不得財笞五十、一尺杖六十、一端一尺杖七十、二端一尺杖八十、三端一尺杖九十、四端一尺杖一百、五端徒一年、十端徒一年半、十五端徒二年、廿端徒二年半、廿五端徒三年、卅端近流、卅五端中流、卌端遠流、五十端加役流、依格加年、不得財幷四端一尺以下徒一年、五端徒一年半、十端徒二年、本罪徒一年半、入一年分加半年也、十五端徒三年、廿端徒三年半、本罪徒二年半、入二年分加一年也、廿五端徒四年、自卅端至五十端役六年、格律所指年限如此、

〔西宮記臨時十〕成勘文事 附四名帳　役畢勘文

長德二年十一月十六日別當宣偁、依盜竊之犯入徒役之輩、貞觀以往、移刑部省任法斷定、乃是先定罪名、次及決配者也、爰貞觀以後、別當直着鈦配役所、須條犯狀同存恒規、而頃年至于着鈦之日只注服弁之由、纔顯本贓、無指役限、臨于役限畢之期、欲從原免之時、追准彼贓、更明其限、非只招先後倒錯

ナシト雖モ、親ノ老疾シテ侍スベキ人ノ外ハ、此律ヲ用キズ、聖武天皇ノ天平年間ニ、私鑄錢ノ者ハ首從ヲ問ハズ、著鈦シテ終身鑄錢司ニ役シ、嵯峨天皇ノ弘仁九年ノ宣旨ニ、犯盜ノ人ハ輕重ヲ論ゼズ、皆役所ニ配スベシトアルニ由リテ、所司終ニ年限ヲ定メズ、皆命ヲ役所ニ畢フルニ至ル、因テ十三年ニ至リ、犯盜ノ人杖罪以下ニ當ルトキハ徒一年トシ、徒一年ニ當ルトキハ半年ヲ加ヘ、二年三年ハ各一年ヲ加ヘ、三流ニ當ルトキハ六年トシ、死罪ヲ犯シテ別勅ヲ以テ宥ストキハ十五年ヲ限トス、又人ト爲リ凶惡ナル等ハ、終身コレヲ役スルコトトセリ、盜人ハ著鈦後決杖スル例ナツシヲ、天祿四年ニ之ヲ停メタリ、ナホ著鈦政篇ヲ參考スベシ、

〔律疏〕徒罪五徒一年贖銅廿斤 徒一年半贖銅卅斤 徒二年贖銅卌斤 徒二年半贖銅五十斤 徒三年贖銅六十斤

〔法曹至要抄上罪科〕一五罪事〇中略

按之、〇中略徒罪者始從一年、竟於三年、以半年爲一等、謂半年、百八十日也、

〔唐律疏議名例一〕徒刑五

一年贖銅二十斤　一年半贖銅三十斤　二年贖銅四十斤　二年半贖銅五十斤　三年贖銅六十斤

疏議曰、徒者奴也、蓋奴辱之、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應定罪人配役年限事

右撿非違使解偁、案賊盜律云、强盜不得財徒二年、一尺徒三年、一端加一等、十五端及傷人者絞、殺人者斬、其持仗者雖不得財遠流、十端絞、傷人者斬、又條云、竊盜不得財笞五十、一尺杖六十、一端加一等、五端徒一年、五端加一等、五十端加役流者、然則强竊二盜其罪各別、從贓多少復有輕重、而去弘仁九年宣旨偁、犯盜之人、不論輕重皆配役所者、使等偏執此旨、未定年限、罪無輕重命終役所、夫絕者難更

徒刑

著鈦政印

徒トハ、罪人ヲ役シテ、罪ヲ償ハシムル刑ニテ、仁徳天皇ノ朝ニ、意伎等ノ五國ノ國造ニ命ジテ、田ヲ營ラシメ、履中天皇ノ朝ニ、阿曇濱子ニ從ヘル海人等ヲ、倭蔣代屯倉ニ役セシ類ハ、徒刑ニ似タル者ナレドモ、未ダ徒ノ名ハアラザリシナリ、天智天皇ノ朝ニ、律令ヲ撰ビシヨリ、始メテ徒ヲ設ケシナラン、徒ハ杖ヨリ重キ刑ニテ、一年ニ始マリ、半年ヅヽ加ヘテ、三年マデノ五等アリ、三百六十日ヲ以テ一年トスルナリ、徒刑ノ人ハ、畿内ハ京師ニ送リ、課役ヲ免シ私粮ヲ食セシメ、鈦ヲ著ケ三四人ヲ相連ネ、若シクハ盤枷ヲ著ケテ、一人ゴトニ兩人防援シ、路橋ヲ作リ、宮城ノ四面ヲ掃除スル等ノ雜事ニ役シ、婦人ハ之ヲ衣ヲ縫ヒ穀ヲ舂クノ役ニ從ハシメ、滿役ノ日ニ至レバ、役ノ日數ト作物ノ色目トヲ錄シテ、囚獄司ヨリ刑部省ニ送リ、刑部省ヨリ事狀ヲ錄シテ、其身ヲ本郷ニ遞送ス、若シ親戚ナキ者、役中ニ死スルトキハ、權リニ閑地ニ埋メ、其姓名ヲ記シテ本屬ニ下ス、而シテ徒ヲ犯シテ家ニ兼丁ナキ者ハ、男女ヲ擇バズ徒ヲ免シテ加杖スルナリ、兼丁トハ丁夫二人ノコトニテ、兼丁ナキトハ其身一人ナルヲイフ、是ハ糧餉ノ乏絕ヲ矜ミ、家內ノ困窮ヲ恐レテ役セザルナリ、但シ家ニ年二十一以上ノ妻アルトキハ、男夫ノ兼丁ト同樣ニテ役ヲバ免サズ、雜戶陵戶徒ヲ犯ストキハ、兼丁ナキ例ニ準ジ加杖ス、凡テ徒ヲ免シテ加杖スルトキハ、徒一年ハ加杖一百二十ニシテ、一等ゴトニ二十ヲ加フ、若シ徒ノ年限內ニ家ニ兼丁ナキニ至レバ、役スベキ日數ト、加フベキ杖數トヲ總計シテ、準折シテ決放スルナリ、例ヘバ徒一年ハ杖一百二十ナレバ、三十日ハ杖十ニ當ル、而ルニ是ノ人既ニ三十日役セラレテ、家ニ兼丁ナキニ至レバ、剩ル所ノ杖百十ヲ加ヘテ決放ス、凡テ此ノ如キ類ヲ準折シテ決放ストハイフナリ、但シ盜及ビ人ニ傷クル者ハ、兼丁

〔三才圖會器用十二〕刑具說略○中笞以荊條爲之、略○中杖以大荊條爲之

〔延喜式囚獄二十九〕凡司內所須笞杖、每年十一月役物部丁、令採備、笞杖各一千枝

〔倭名類聚抄刑罰具十三〕棒、蔣魴切韻云、棒蚌音杖名也、字亦作棓、俗音方

〔下學集器財下〕棒ボウ打人杖也

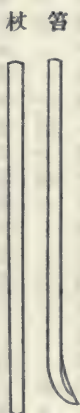
〔日本書紀敏達十四〕十四年三月丁巳朔、物部弓削守屋大連與中臣勝海大夫奏曰、略○中疫疾流行、國民可絕、豈非專由蘇我臣○馬子之興行佛法歟、詔曰、灼然、宜斷佛法、丙戌、略○中有司便奪尼等三衣、禁錮、楚シモト撻タウチキ海石榴ツバキ市亭、

豆木、之毛度叓也、叓訓之毛度、見木具、岡部氏曰、之毛度、茂本也、以叓爲笞故名、叓訓須波衣、亦楚也、須、直生枝之急呼也、

〔類聚名義抄竹八〕笞音智　シモト　刃之反　ウツ

〔萬葉集雜歌五〕貧窮問答一首幷短歌

伊等乃伎提、短物乎、端伎流等、云之如、楚取、五十戸良長誤○恐我許惠波、寢屋戸麻低、來立呼比奴、

〔和漢三才圖會刑罰二十二〕笞杖　笞音知、和名之毛度、　杖和名豆倍

笞　杖

〔倭名類聚抄刑罰具十三〕杖　唐令云、諸杖音仗、和名都惠皆削去節目、長三尺五寸許、○許恐衍

〔令義解獄十〕凡杖皆削去節目、謂笞杖亦准此也長三尺五寸、訊囚及常行杖、大頭徑四分、謂雖訊笞罪囚、猶用四分杖也、小頭三分、笞杖謂用之笞刑之杖也大頭三分、小頭二分、枷長四尺以下、三尺以上、桔長一尺八寸以下、一尺二寸以上、

〔唐律疏議斷獄二十九〕疏議曰、○中略依令○獄官令杖皆削去節目、長三尺五寸、訊囚杖、大頭徑三分二釐、小頭二分二釐、常行杖、大頭二分七釐、小頭一分七釐、笞杖、大頭二分、小頭一分五釐、

〔唐律疏議名例一〕笞刑五○中略

疏議曰、○中略漢時笞則用竹、今時則用楚、

〔明律名例一獄具圖〕笞　大頭徑二分七釐、小頭徑一分七釐、長三尺五寸、以小荊條爲之、須削去節目、用官降較板、如法較勘、毋令筋膠諸物裝釘、應決者用小頭臀受、

杖　大頭徑三分二釐、小頭徑二分二釐、長三尺五寸、以大荊條爲之、亦須削去節目、用官降較板、如法較勘、毋令筋膠諸物裝釘、應決者用小頭臀受、

笞杖刑具

〔小右記〕寛弘二年六月廿八日甲辰、昨日左衞門府六月祓間、番長二人、爲權佐允亮朝臣致無禮、仍彈決非違、　廿九日乙巳、允亮朝臣來談云、一昨於本府依例行六月祓、以番長案主等可令從尉以下手長役、而佐行酒幷手長以府掌令役、以吉上爲志以下行酒、先例不然、仍以非例旨再三仰下、而番長高橋正連、眞髮部忠滿不承從、有如放言事、〇中略卽召出正連忠滿等、依着美服、細布歟破衣決罸、付囑決笞等也了、

〔今昔物語〕二十四大隅國郡司讀和歌語第五十五

今昔大隅國ノ守ロロト云者有ケリ、其ノ國ニ下テ政始メ行ケル間、郡ノ司四度ケ无キ事共有ケレバ、速ニ召シニ遣テ、誡メムト云テ使ヲ遣ツ、前前此樣ニ四度ケ无キ事有ル時ニハ、罪ノ輕重ニ隨テ誡ムル事常ノ例也、其レニ一度ニモ非ズ、度度四度ケ无キ事有ケレバ、此レハ重ク誡メムトテ召也ケリ、卽チ將參タル由使云ケレバ、前前誡ムル樣ニゾウツ臥セテ、尻頭ニ上リ可居キ人可打キ樣ナド儲テ待ツニ、人二人シテ引張テ將來タリ、見レバ年老タル翁ノ、頭ニハ黑キ髮モ交ズ皆白髮也、此レヲ見ルニ打セム事ノ糸惜ク思ユレバ、忽ニ憐ノ心出來テ、何ナル事ニ付テ此レヲ免シテムト思フニ、可事付キ方モ无シ、誤共ヲ片端ヨリ問ニ、只老ヲ高家ニシテ答ヘ居タリ、守此レヲ見ルニ、打セムガ糸惜ケレバ、此レ何ニシテ免サムト思テ、思ヒ廻ニ无ケレバ、守思緣テ云ク、汝ハ極キ盜人カナ、但シ汝チ和歌ハ讀テムヤト問ニ、翁墓墓シクハ非ズトモ仕テムト答フレバ、守イデ然ラバ讀メト云ニ、翁程モ无クワナヽキ音ヲ捧テ、此ナム云、

トシヲヘテカシラニ雪ハツモレドモシモトミルコソミハヒエニケレ、ト守此レヲ聞テ、極ク感ジ哀テ免シ、遣テケル、然レバ云フ甲斐无キ下﨟ノ田舍人ノ中ニモ、此ク歌讀ム者モ有ル也ケリ、努努不可蔑トナム語リ傳ヘタルトヤ、〇又見字治拾遺物語、歌載拾遺和歌集、

〔倭名類聚抄十三刑罰具〕笞　唐令云、笞音知、和名之毛度、大頭二分、小頭一分半、

〔箋注倭名類聚抄五刑罰具〕之毛止見拾遺集、孝德紀、笞訓保曾幾須波衣、新撰字鏡、杖訓志毛止又字

笞杖方法

又依上條、五位以上、受致敬禮、然則次官悉是致敬者、長官必五位以上、須知、但長官者、雖罪人不應致敬、仍得決之、次官者、罪人不應致敬者、不得復決、是即長官次官之殊別也、无、聽次官應致敬者決、其諸司判官以上、及判事、彈正巡察、内舍人、謂其監物者、舉經明須、亦不可決也、大學諸博士、文學等、謂上條大學博士以下、得文學、即在其間、諸司諸博士等、亦不在決笞之限、不在決笞之限、

〔令義解儀制六〕凡帳内資人、雖有蔭位、不稱本主者、杖罪以下、本主任決、四位以下、唯得決笞、

〔延喜式民部二十二〕凡違期貢調庸、郡司應決罪者、徒罪止杖一百、杖罪以下各減一等科決、但期月後十日敎喩不坐、

〔令義解獄十〕凡杖皆削去節目、中略、其決杖笞者臀受、拷訊者背臀分受、須數等、謂假犯杖九十、應拷三度者、每拷臀背分決十五之類、

〔唐律疏議斷獄二十九〕疏議曰、依獄官令、決笞者腿臀分受、決杖者背腿臀分受、須數等、拷訊者亦同、笞以下願背腿分受者聽、

〔類聚國史刑法八十七〕天長八年十二月庚辰、殺人從當麻旅子女、於西市決杖六十、

〔類聚三代格十六〕太政官符

應令在宮外諸司諸家掃淸當路事

右太政官弘仁六年二月九日下職符偁、右大臣藤原園人宣奉勅、如聞頃者京中諸家、或穿垣引水、或壅水浸途、宜仰所司咸俾修營、不責引流水於家内、唯禁露汙穢於墻外、仍須每竇置樋通水、如有符後卅日不從制、諸家司幷内外主典已上、貶考奪祿、四位五位事業及雜色番上已下、不論蔭贖當處馬上而決笞五十者、今有壅浸之禁、无淸掃之制、仍須自今以後如此之類、諸家司幷内外主典已上、移式部兵部、一同前符、貶考奪祿、四位五位錄名奏聞、无品親王家及所所院家、以其別當官准諸家司亦移省貶奪、其雜色番上以下不論蔭贖決笞、一同前符、又六位以下官人、馬上勘當之者依請、

弘仁十年十一月五日

〔日本書紀 二十五 孝徳〕大化二年三月辛巳、詔東國朝集使等曰、集侍群卿大夫、及國造伴造、并諸百姓等咸可聽之、以去年八月朕親誨曰、莫因官勢取公私物、可喫部内之食、可騎部内之馬、若違所誨、次官以上降其爵位、主典以下決其笞(ホソキズバエ)杖(フトキズバエ)、入己物者倍而徵之、

〔令義解 獄 十〕凡犯罪、皆於事發處官司推斷、〇註略 在京諸司人、京〇京職、衛 及諸國人、在京諸司事發者、犯徒以上、送刑部省、謂先申辨官、官下刑部、凡在京諸司、除京職外、皆不得斷徒已上罪、故唯准告狀、罪當徒以上者、直送刑部、不得斷勾、假有甲乙二人共犯一年徒、乙是爲從、應減一等決杖一百、是猶甲乙共送、既不推斷、首從未分故也、杖罪以下當司決、謂若合收贖者、申官送贖司也、其衛府糺捉罪人、非貫屬京者、謂文云、非貫屬京者、即知、貫屬者、皆送京職、但犯夜之罪、衛府當日決放也、皆送刑部省、

〔令義解 獄 十〕凡犯罪、笞罪郡決之、謂決贖並同、其贖物留郡、錄數申國也、杖罪以上、郡斷定送國、謂斷文、并身俱送、其兵士笞罪、團毅決之、若杖罪者、送所在郡也、覆審訖、徒杖罪、及流應決杖、謂依律、犯徒應役、而家無兼丁者加杖、又累犯徒流加杖、又雜戶陵戶犯流、決杖之類是也、若應贖者、謂有蔭、及老少之類也、即決配、謂決杖、及配徒也、徵贖、其刑部斷徒以上、亦准此、謂依律、死罪應決杖及贖者、即准流徒之法、刑部亦得決贖、故云亦准此、其死及流決、及流徒配者、自依下文、不得可准此也、刑部省、及諸國、斷流以上、若除免官當者、皆連寫案、謂凡鞫獄官司、皆連鞫狀、及伏辨、以成一案、更連寫之、與斷文共送官、是爲連寫案、申太政官也、申太政官、按覆理盡申奏、即按覆事有不盡、在外者、遣使就覆、謂依國所斷、情理不盡、別遣專使、就所在按覆、與下條覆囚使、其義不同、在京者、更就省覆、

〔延喜式 四十二 市司〕凡決罰罪人者、官人與使相對棲前罰之、

〔延喜式 二十九 刑部〕凡辨官所下罪人、到省付囚獄司、司即易其徽纆、其有行決者、隨罪輕重、於市若囚獄司決之、行決之日、丞錄各一人、引囚獄官人并物部丁、赴向市司、便令本司喚集市人、列立司南門、示衆決之、於囚獄司決者、於廳前決之、

〔令義解 六 儀制〕凡内外官人、謂主典以上、其番上、既擧重者、決亦无疑也、有恃其位蔭故違憲法、謂位蔭者、身帶官位、及父祖之蔭也、故違憲法者、故不下馬、及失禮觸忤之類、即於本司犯是也、若在外犯者、自依贖法也、者、六位以下、及勳七等以下、宜聽量情決笞、謂杖罪以下、量其情狀、多少決笞、若徒以上者、依律科斷、若長官謂本司五位以上長官、下文云、聽次官應致敬者決、既云量情決笞、即知或全決其罪、或量減其科、若其減決者、亦不須依從減例減之法、唯止量減其一二等、若依減法者、即爲不用位蔭故也、

笞杖法

テ國ニ逐ル、又兵士ノ笞罪ハ両數之ヲ決シ、杖罪ハ所在ノ郡ニ逐ルナリ、敏達天皇ノ十四年ニ楚撻ノ事アレドモ、正シク笞杖ノ名ノ始メテ國史ニ見エタルハ、孝徳天皇ノ大化二年ナリ、文武天皇ノ二年、始メテ笞法ヲ制セシコトアレドモ、是ハ特ニ逃亡奴婢ノ爲メニ設ケタルニテ、此ニ至リテ笞法ノ始メテ起リシニハアラズ、又嵯峨天皇ノ弘仁年間ニ至リテ、新ニ馬上決笞ノ法ヲ設ケタリ、

〔律疏〕笞罪五 笞十贖銅一斤 笞廿贖銅二斤 笞卅贖銅三斤 笞卌贖銅四斤 笞五十贖銅五斤

〔法曹至要抄 上罪科〕一五罪事 ○中略

案之、笞罪者、始從十竟於五十、以十爲一等、

〔唐律疏議 一名例〕笞刑五

一十 贖銅一斤　二十 贖銅二斤　三十 贖銅三斤　四十 贖銅四斤　五十 贖銅五斤 ○中略

杖刑五

六十 贖銅六斤　七十 贖銅七斤　八十 贖銅八斤　九十 贖銅九斤　一百 贖銅十斤

〔續日本紀 一文武〕二年七月乙丑、以公私奴婢亡匿民間、或有容止不肯顯告、於是始制笞法、令償其功、事在別式、

〔律疏〕杖罪五 杖六十贖銅六斤 杖七十贖銅七斤 杖八十贖銅八斤 杖九十贖銅九斤 杖一百贖銅十斤

〔法曹至要抄 上罪科〕一五罪事 ○中略

案之、○中略 杖罪者、始從六十竟於一百、以十爲一等、

〔日本書紀 二十九天武〕十一年十一月乙巳、詔曰、○中略 凡糺彈犯法者、○中略 當杖色乃杖一百以下節級決之、

〔唐書 五十六刑法〕太宗嘗覽明堂針灸圖、見人之五臟皆近背、針灸失所則其害致死、歎曰、夫箠者五刑之輕、死者人之所重、安得犯至輕之刑而或致死、遂詔罪人無得鞭背、

古事類苑

法律部三

上編

笞杖刑

笞、杖、徒、流、死、是ヲ五刑ト云フ、笞ハ十ヨリ五十ニ至ルノ五等アリ、杖ハ六十ヨリ百ニ至ルノ五等アリテ、何レモ一等ゴトニ十ヲ加フ、笞ト云ヒ杖ト云フハ、粗細ノ異ハアレドモ、共ニ木ノ細枝ノ小頭ヲ用キテ臀ヲ打ツナリ、因テ邦語ニ笞ヲホソキズバエ、杖ヲフトキズバエトモ云ヘリサレドモ多クハ笞ヲシモトト云ヒ、杖ヲツヱト云ヘリ、ズバエモシモトモ木ノ細枝ヲ云ヒ、ツヱハ節杖ノ杖ノ訓ヲ假リタルナリ、唐律疏議ニ、漢時笞則用竹、今時則用楚トアリヲ、杖ハ何ノ木ヲ用キルト云フ事ハ擧ゲザレドモ、是モ楚ヲ用キタルナラン、ソレハ明ニテ、笞ニ小荆杖ヲ用キ、杖ニ大荆杖ヲ用キタルニテ知ラレタリ、楚ハ牡荆ノ一名ナリ、本草啓蒙ニハ、今世ニニンジンボクト云フ者ニテ、モト和產ハナカリシヲ、享和年中漢種渡リテ後ニ、世上ニ多クナリシ由見エタリ、然レバ我國ニテ古昔笞杖ニ何ノ木ヲ用キシニカ詳ナラズ、サテ在京諸司ノ人、笞杖ノ罪ヲ犯ストキハ、當司ニテ決シ、衞府罪人ヲ捉ヘタルトキ、京ニ貫屬セル者ハ京職ニ送リ、京ニ貫屬セザル者ハ、刑部省ニ送リ、市ニテ決ス、又其位蔭ヲ恃ミテ、故ラニ憲法ニ違フ者アレバ、六位以下、及ビ勳七等以下ノ內外ノ官人ハ、長官次官決笞シ、帳內資人ハ蔭位アリトモ、本主ニ稱ハザルトキハ杖罪以下ハ本主決ス、四位五位ノ主ハ資人ヲ決笞スルコトヲ得ルナリ、又諸國ニテハ、笞罪ハ郡ニテ決シ、杖罪以上ハ郡ニテ斷定シ

古事類苑

法律部三

上編

笞杖刑

徒刑 附著鈦政

附著鈦政

時可見之、

〔山槐記〕治承三年二月廿六日甲寅、春宮大進光長云、東宮殿上簡三界不書之、二界書之由見撰集秘記、又四月、自今月所致其沙汰也、

〔玉海〕文治五年十二月十日乙未、先日所申請之法曹事類草十四合、返上院、(後白河)遣定長許也、

斷獄律、詔勅斷罪、臨時處分、不爲永格者、不得引爲後比、疏云、事有時宜、故人主權斷、詔勅量情處分、不爲永格者、不得引爲後比、

〔法曹至要抄（上 罪科）〕一 違令違式事
雜律云、違令者笞五十、別式者減一等、

〔令抄（僧尼）〕國郡官司　鬪訟律云、凡監臨之司、知所部有犯法不擧劾者、減罪人罪三等、注云、謂里長以上、知所部之有違犯法令格式之事、不擧劾者、（○下略）

〔明文抄（二 帝道）〕凡斷罪、皆須具引律令格式正文、違者笞卅、（律）

〔令義解（十 獄）〕凡犯罪未發、及已發、未斷決、逢格改者、（謂依律、官當收贖、未斷死、及笞杖未決是也、文云、未斷決、若已斷決者、自合依格前也、）若格重聽依犯時、若格輕聽從輕法、

〔延喜式（十八 式部）〕凡改易常例、及立爲永式之事、非官符不得奉行、

〔延喜式（四十一 彈正）〕凡新有立制宜旨者、告示撿非違使、

〔中右記〕康和四年九月十一日、參鳥羽、召御前、申御返事、仰云、左右可在御定、但淡路事定不足歟、次被語仰云、中宮大夫屬正則許、政事要略云文候之由風聞、早可召取歟、我朝一本書也、又故季綱所撰之使廳日記十一卷令見給、且又可申此旨者、　十四日、參鳥羽、從內令申給事、故越後守季綱朝臣所撰之撿非違使廳日記十一卷可見給者、仍從院件書持參內、

〔中右記〕長治二年二月三日、敍位次第、（家説）依召覽殿下、（○藤原忠實）除目次第、前日進覽了、依（○依恐誤字）爲家中第一秘書、嚴命依難背進上之、但定類遼東豕歟、雖然志之所之也、神妙秘事、大略在此次第之由所被感仰也、此後全不可閫外、努力々々、

〔台記〕久安四年四月十六日癸卯、亥剋許至和泉木津、着衣冠乘車、（○註略）直詣春日、着禪定院、（尋範僧都房）今日於舟中見類聚三代格、（第一）書要文目於別紙、（下狀白書也、）今日始見也、如延喜式、漢家學隙、及在旅所之

雜載

六位以下騎用螺鈿鞍之輩、只破却其橋、至于馬者非沒官之例歟、則破却其車、可返牛於本人、

〔百練抄高倉八〕治承三年八月廿日、今日被下新制三十二箇條、

〔類聚國史職官七百〕延暦十一年閏十一月壬午朔、新彈例八十三條賜彈正臺、文多不載、

〔日本後紀桓武八〕延暦十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂薨、〇中略清麻呂練於庶務、尤明古事、撰民部省例廿卷、于今傳焉、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁十二年正月壬寅、定十條斷例、

〔類聚符宣抄六〕撰式所

請天長格抄一部卅卷

右勘造事類之間、爲尋勘年代幷體例、所請如件、

延喜十九年八月十七日　左少史阿刀忠行

大外記葛井清明

右大臣宣、宜借行者、

同年九月一日　少外記御船有世奉

〔本朝文粹奏狀六〕請殊蒙天裁依勤績及儒勞叙從三位狀　菅三品

右文時〇中略別蒙詔命撰進叙位略例一帙目錄合十一卷、求文籍於公私、盡心情於案牘、誠雖非篤目之文、猶可爲指掌之備、之儒者之忠何勤過此、〇下略

〔律疏職制〕凡稱律令式不便於事者、皆須申太政官、議定奏聞、若不申議、輙奏改行者徒二年、謂律令及式條內、有事不便於時者、皆須辨明不便之狀、具申太政官議定、以應改張之議、奏聞、不申太政官、直述所見、但奏改者徒二年、即詣闕上表者不坐、謂詣闕上奏、論律令及式不便於時者、不坐、若先違令式、而後奏改、亦徒二年、所違罪重者自從重斷、

〔法曹至要抄下雜穢〕一觸穢事可依時議事

任官者、同知職掌、或病或使有闕於事、然得知之日、和如曾識、其以非與聞、勿妨公務、十四曰、群臣百寮、無有嫉妬、我既嫉人、人亦嫉我、嫉妬之患、不知其極、所以智勝於己則不悅、才優於己則嫉妬、是以五百歲之後、乃今遇賢、千載以難待一聖、其不得賢聖、何以治國、十五曰、背私向公、是臣之道矣、凡夫人有私必有恨、有憾必非同、非同則以私妨公、憾起則違制害法、故初章云、上下和諧、其亦是情歟、十六曰、使民以時、古之良典、故冬月有間、以可使民、從春至秋、農桑之節、不可使民、其不農何食、不桑何服、十七曰、大事不可獨斷、必與衆宜論、小事是輕、不可必衆、唯逮論大事、若疑有失、故與衆相辨、辭則得理、〇本文有誤脫、據一本及拾芥抄、太子傳曆等補正、

〔扶桑略記四推古〕十二年四月、太子肇制憲法十七條、手書奏、天皇大悅、群臣各寫一本、讀傳天下、天下大悅、

〔日本紀略平城〕大同二年八月甲戌、下十五條憲法、

〔日本書紀二十九天武〕十一年八月壬戌朔、令親王以下及諸臣、各俾申法式應用之事、　丙寅、造法令、

〔日本紀略九一條〕永延元年三月四日丙寅、仰有司立新制十三箇條、　五月五日丙寅、立新制五箇條、

〔日本紀略十一條〕長保元年十二月十三日壬戌、今日新制十一箇條官符、

〔權記〕長保二年五月八日甲申、右衞門督藤原朝臣〇公任來訪、申云、昨以孝標〇菅原傳勅命云、新制官符下知之後、制法更緩、衆人成嘲云々、是使廳之不催行之所致也、能仰官人等、可令立行者、件事尤可然、能可被誡仰之事也、　十四日庚寅、申昨日所下給撿非違使廳申請新制官符中、候裁定可糺行雜事三箇條文、因傳勅旨云、件等事、若下公卿可令定申歟、將只可定仰歟、此等案內、須期參入之日、面相定可左右也、然而所申請之旨不被懈怠、早欲定仰如何、即被奏云、三箇條事之中、一僧侶車宿事、先加制止、無承引輩、注名言上之日可定下、一美服事、紅紫兩色只禁美麗矣、直衣下襲及紫褐退紅等、尋常所用之色、或載式條、或着用作例之類、不可制止三幅事、所指荒凉、以二尺爲其法、一六位已下乘車事、

十卷、內第十三闕、此一卷秘在九條殿下、不能容易啓稟之云々、聞尾陽亞相源君、(按ニ義直卿ナリ)書寫
殿下之本、履就余以請之、遂達之、源君聽而出之、於是五十卷全備、コレヲミレバ、此書慶安ニ至
テ初テ足本トナリシナリ、亦以尾陽亞相ノヨク書ヲ好ムデ、懿訓ニ則セラレシヲ見ルベシ、

〔日本書紀推古二十二〕十二年正月戊戌朔、始賜冠位於諸臣、各有差、　四月戊辰、皇太子(廐戶)親肇作憲法
十七條、一曰、以和爲貴、無忤爲宗、人皆有黨、亦少達者、是以或不順君父、乍違于隣里、然上和下睦、諧於
論事、則事理自通、何事不成、二曰、篤敬三寶、三寶者(佛法僧也)則四生之終歸、萬國之極宗、何世何人、非貴是
法、人鮮尤惡、能敎從之、其不歸三寶、何以直枉、三曰、承詔必謹、君則天之、臣則地之、天覆地載、四時順行、
萬氣得通、地欲覆天、則致壞耳、是以君言臣承、上行下靡、故承詔必愼、不謹自敗、四曰、群卿百僚、以禮爲
本、其治民之本、要在乎禮、上不禮下不齊、下無禮必有罪、是以君臣有禮、位次不亂、百姓有禮、國家自治、
五曰、絕饗棄欲、明辨訴訟、其百姓之訟、一日千事、一日尙爾、況乎累歲、須治訟者、得利爲常、見賄聽讞、便
有財之訟、如石投水、乏者之訴、似水投石、是以貧民則不知所由、臣道亦於焉闕、六曰、懲惡勸善、古之良
典、是以無匿人善、見惡必匡、其諂詐者、則爲覆國家之利器、爲絕人民之鋒劒、亦佞媚者、對上則好說下
過、逢下則誹謗上失、其如此人、皆无忠於君、無仁於民、是大亂之本也、七曰、人各有任、掌宜不濫、其賢哲
任官、頌音則起、姧者有官、禍亂則繁、世少生知、克念作聖、事無大小、得人必治、時無急緩、遇賢自寬、因此
國家永久、社稷勿危、故古聖王、爲官以求人、爲人不求官、八曰、群卿百僚、早朝晏退、公事靡盬、終日難盡、
是以遲朝不逮于急、早退必事不盡、九曰、信是義本、毎事有信、其善惡成敗、要在于信、君臣共信、何事不
成、君臣無信、萬事悉敗、十曰、絕忿棄瞋、不怒人違、人皆有心、心各有執、彼是則我非、我是則彼非、我必非
聖、彼必非愚、共是凡夫耳、是非之理、詎能可定、相共賢愚、如環无端、是以彼人雖瞋、還恐我失、我獨雖得、
從衆同擧、十一曰、明察功過、賞罰必當、日者賞不在功、罰不在罪、執事群卿、宜明賞罰、十二曰、國司國造、
勿斂百姓、國靡二君、民無兩主、率土兆民、以王爲主、所任官司、皆是王臣、何敢與公、賦斂百姓、十三曰、諸

〔右文故事一〕御本日記附注上

類聚三代格　同〇院所藏　六冊

駿記上ニ見ユ、書目ニ三十二卷、現存スルモノ、一三五七八十二ノ六冊ナリ、温古堂收貯ノモノハ、又第二卷一冊アリ、總テ七冊ナリ、

〔國師日記〕慶長十九年五月六日、板伊州五月二日之狀二通來、〇中略追而狀ニ、院御所延喜式御出之由也、南光坊下府之刻、其樣子、口上ニ而承候へとの書中なり、　十月三日、延喜式全五十卷、內十三廿四貳冊不足、筥ニ入、如本御城へ上ル、

〔右文故事四〕御本日記續錄上

延喜式　四十九冊

現存第十三廿四ノ二冊闕、按ニ、本光日記慶長十九年十月三日ノ條ニ、延喜式全五十卷內十三二十四二冊不足、〇中略ト見ユ、今鑒定スルニ、慶長十九年ノ御寫本トハ、自ラ別筆ノヤウニ見ユ、〇注略闕卷ノ數モ本光日記ト符合スレバ、此御本ハ、十九年以前ニ書寫セシメラレシナラム、駿府記ニ據ニ、此年四月五日、此書及ビ群書治要、貞觀政要、續日本紀ヲ御前ヨリ出サレ、公家武家法度タルベキ處ヲ書拔ベキ由、五山衆ニ命ゼラル、同十三日其書拔ヲ奉ルトアルヲ以テ考レバ、四月降サレシ御本ヲ、十月ニ至テ返上シタルト見エタリ、〇中略又按ニ、日記十月廿四日ノ條ニ、新寫セラルベキ書目ヲ載セテ延喜格同式トアリテ其分注ニ、十三廿四之兩卷、御前之御本不足トアリ、是此時コノ闕卷ヲ訪求セラレシナルベシ、然レドモ現存御本舊ノ如ク缺卷アレバ、當時缺卷ノ處求メ得ルコト能ハザリシニヤ、又御本日記ニ、何故コノ延喜式ヲ遺シタルヤ、是ハ元和二年ノ前ニ江戸文庫ヘ來リシヤ、

再按ニ、慶安元年戊子新雕延喜式道春ノ跋ニ、頃年中原零庵職忠、使兒孫校讐延喜式一部五

右大臣宣旨件等雜書宣借給者、　少外記小野美實

同年十月三日　權少外記中臣利世奉

〔愚管抄七〕律令は淡海公つくらる、弘仁格式は閑院左大臣冬嗣、貞觀格式は大納言氏宗、延喜格式は時平作りさして有けるをば、貞信公作りはてられけり、この外にも官曹事類とかやいふ文(ふみ)もあんなれども、持たる人もなきとかや、蓮華王院の寶藏にはおかれたると聞ゆれど、取出して見むといふ事だにもなし、

〔國師日記〕慶長十九年十月廿四日

日本記錄可被爲寫旨被仰出候、從一ヶ寺能書十人宛南禪寺へ可被越候、○中略

十月廿四日　金地院○崇傳

板倉伊賀守○勝重、所司代、

天龍寺　相國寺　建仁寺　東福寺　萬壽寺○中略

覺

日本後紀、續日本後紀、文德實錄、國史、類聚國史、律、令、弘仁格、同式、貞觀格、同式、延喜格、同式、十三廿四之闕卷、御前之御本不足候、　三代實錄、延喜儀式延喜雜式、類聚三代格、　以上

右之外諸家記錄共、何も不殘被爲寫度由候間、可被成御尋候、

〔駿府政事錄〕慶長十九年十一月九日、南光坊傳長老召奧御座敷御雜談、今度諸家記錄就御寫、日本後紀、弘仁貞觀格式、類聚國史、類聚三代格等、仙洞有之乎否、以南光坊被仰遣、記錄書立、則傳長老道春筆之、南光坊院參、被奏處、御所持之本可有御書寫之旨云々、　十日、今日從仙洞類聚三代格○六卷中略南光坊爲院使持參、及夜道春於御前讀之云々、

卷第廿九刑部省　判事　囚獄司
卷第卅大藏省　織部司
卷第卅一宮內省
卷第卅二大膳職上
卷第卅三大膳職下
卷第卅四木工寮
卷第卅五大炊寮
卷第卅六主殿寮
卷第卅七典藥寮
卷第卅八掃部寮
卷第卅九正親司　內膳司
卷第卌造酒司　主水司　采女司
卷第卌一彈正臺
卷第卌二左右京職　東西市司
卷第卌三春宮
卷第卌四勘解由使
卷第卌五左右近衛府
卷第卌六左右衛門府
卷第卌七左右兵衛府
卷第卌八左右馬寮
卷第卌九兵庫寮
卷第五十雜式

延長五年十二月廿六日

〔日本紀略五冷泉〕康保四年七月九日、始頒延喜式、

安和元年正月十七日辛丑、今日諸卿著結政座、請印延喜式五十卷、

〔類聚符宣抄六〕撰式所

請代々大嘗會記文雜書幷諸節會及諸祭等日記事在外記

右爲宛撰儀式之勘會所請如件、

延喜十四年九月廿一日　右史生中臣國織

式部少錄葛井清明

右大史御船

官曹、摭文記於臺閣、究本尋源、編新隷舊、至如祭祀宴饗之禮、朝會蕃客之儀、大小流例、内外常典、事存儀式、不更載斯、我后留情庶官、屬想衆務、論王道之興衰、驗時俗之厚薄、屈太陽之洪暉、照高閈於盆墉、枉溟渤之巨浪、酌下言於牛涔、有利於人可擧行者、有害於物可革去者、悉以制置、垂範來裔、凡起弘仁舊式至延喜新定、前後綴叙、筆削甫就、總編五十卷、號曰延喜式、庶使百川之流皆歸於海、萬目之紀俱理於綱、臣等勤非簡要、道謝淸通、雖猥銜慈綸、陶淳風於甲令、然恐僭濫制、致肅霜於秋官、謹序、

延喜式目錄

大納言正三位兼行民部卿臣藤原朝臣清貫
從四位上行神祇伯臣大中臣朝臣安則
從五位上行勘解由次官兼大外記紀伊權介臣伴宿禰久永
外從五位下行左大史臣阿刀宿禰忠行等上表

〔延喜式序〕蓋聞蒼精黃神之聖、觀人文以化天下、伊川嬀水之靈、則乾象而垂法度、故百官以理、自有高枕之君、萬民以治、乃見擊壤之叟、弘仁聖主、德照龜圖、化隆鳥運、君唱臣和、風雲之契斯得、上安下樂、魚水之符克諧、爰降綸言、作諸司式卅卷、所謂國之權衡、民之轡策者也、貞觀天朝亦降睿旨、商推古今、撰式廿卷、新舊兩存、本枝相得、然猶後式攸錄、事多漏略、今上陛下體元履正、御斗提衡、以爲貞觀十二年以來、炎涼已久、文案差積、加以前後之式、章條既同、卷軸斯異、諸司觸事、撿閱多岐、因茲延喜五年秋八月、詔左大臣從二位兼行左近衞大將藤原朝臣時平、遣從三位守大納言兼行右近衞大將春宮大夫陸奧出羽按察使藤原朝臣定國、中納言從三位兼行民部卿藤原朝臣有穗、參議大藏卿正四位下兼行播磨權守平朝臣惟範、參議左大辨從四位上兼行讚岐權守紀朝臣長谷雄、從四位下行式部大輔兼春宮亮備前守藤原朝臣菅根、從四位下行文章博士兼備中權守三善朝臣清行、民部大輔正五位下兼行勘解由次官但馬守大藏朝臣善行、權左少辨正五位下兼行勘解由次官藤原朝臣道明、從五位上行神祇大副臣大中臣朝臣安則、從五位下行大內記兼周防介三統宿禰理平、外從五位下行明法博士惟宗朝臣善經等、准據開元永徽式例、併省兩式、削成一部、撰定未畢之間、公卿大夫頻年薨卒、仍同十二年春二月、勅從三位守大納言兼右近衞大將行春宮大夫臣藤原朝臣忠平、從四位下守右大辨兼勘解由長官橘朝臣澄清等、共隨先業、促其裁成、至延長三年秋八月、重遣大納言正三位兼行民部卿臣藤原朝臣清貫、與前奉詔者大中臣朝臣安則、及從五位上行勘解由次官兼大外記臣伴宿禰久永、外從五位下行左大史臣阿刀宿禰忠行等、同催撰緝、責其成功、爰蒙明制、參詳斟討、捜符案於

式事、間戸部來者、仍止、十一月六日、定式、十三日、定式、十四日、定式、十五日、定式、新作式、今日定了、但有可相定事一兩、

三年三月廿五日、定式、廿六日、定式、八月卅日、新式付久永宿禰、送民部卿〇藤原清貫許、九月十日、定式、十一日、定式、十八日、式事定行、十月八日、定式、十一日、定式事、十二日、定式事、十一月廿三日、定式、閏十二月一日、戸部有定式事、

〔日本紀略醍醐一〕延長五年十一月廿六日癸酉、左大臣藤原朝臣〇忠平等、表進延喜格十二卷、延喜式五十卷、

〔延喜式一〕上延喜格式表

臣忠平等言、竊以天覆地載、聖帝則之育民、陰慘陽舒、明王象之馭俗、雖則朴斲彫至、馳鶩之迹、古今不同、然而立法垂規、勸誡之道、夷隆一致、嵯峨太上天皇化周天壤、澤覃淵泉、制格式之明文、貽簡冊於昆季、六典詳其綱紀、百寮無所依違、斯固納軌之楷模、經國之准的者也、貞觀先帝繼受寶命、誕膺洪基、敦百王之澆醨、導萬民於富壽、憲章所以疊矩、凡例由其重規、暨乎年代稍遷、質文遞起、莫不變通之道南北分岐、號令之流、淺深別派、皇帝陛下道四三皇、德六五帝、灑甘雨以遍普天之澤、扇淳風而拂率土之塵、重賞輕刑、雲鷹之翮忘鷙、省徭薄賦、野鹿之群不驚、然猶恐惠化未周、頑民陷法、遂降沖旨、彌繕隄防、增損往策之科條、裨補前修之殘缺、臣等謹奉綸命、忽履薄氷、於是搜古典於周室、擇舊儀於漢家、取捨弘仁貞觀之弛張、因修永徽開元之沿革、勒成二部、名曰延喜格式、但格十二卷、筆削早成、往年奏御、式五十卷、撰集幾畢、今日上聞、臣等識非老彭、勤在祖述、聊甄其臊理、事達彼膏肓、伏願洪慈曲降照鑒、特垂允容、謹詣闕拜表以聞、臣忠平等誠惶誠恐頓首頓首謹言、

延長五年十二〇二恐一誤月廿六日

左大臣正二位兼行左近衞大將皇太子傅臣藤原朝臣忠平

今膺千年之期運、承百王之澆醨、時風加而茂草靡、震雷動而蟄虫驚、將欲禁溢浪以隄防、馭奔駕以轡策、流淳化於比屋之封、反薄弊於大庭之俗、而制格以來、歷年漸久、或數代之中、弛張屢變、或一事之上、抑揚遐殊、或同本而異末、或分源而會流、斯乃雖協其時宜、匪故相反、而綜其事迹、無所適從、爰詔左大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平、故從三位守大納言兼右近衛大將行春宮大夫陸奧出羽按察使臣藤原朝臣定國、中納言從三位兼行民部卿春宮權大夫臣藤原朝臣有穗、參議正四位下行左兵衛督臣平朝臣惟範、參議左大辨從四位上兼行讚岐守臣紀朝臣長谷雄、從四位上行式部大輔兼侍從春宮亮備前守臣藤原朝臣菅根、左京大夫從四位下臣藤原朝臣興範、從四位下行文章博士兼備中權守臣三善朝臣清行、從四位下行民部大輔臣大藏朝臣善行、正五位下守右中辨兼行勘解由次官臣藤原朝臣道明、從五位下行大內記兼周防權介臣三統宿禰理平、外從五位下守大判事兼行明法博士備後權介臣惟宗朝臣善經、正六位下守右大史臣善道朝臣有行、正六位上行兵部少錄臣弘世連諸統等、憲章前條、綜緝此典、起自貞觀十一年、至于延喜七年、其間詔勅官符捜抄撰集、除其滋章、刪其煩雜、若祖述先格、事有增損者、據而無遺、若改張恒規、理無補益者、廢而不採、以官分隷、以類相從、皆依舊目、無加新意、亦其條貫糅錯、難為區分者、准之雜令、便號雜格、勒為十卷、曰延喜格、又有臨時格二卷、合為十有二卷、依歲紀而取象、法星次而分篇、率由前模、不敢殊製、臣等專存溫故之意、頗立改弊之文、新舊分條、縱有吹萬之響、先後同法、庶成畫一之顯、但冲旨既邈、愚管難覃、招嗤同周鼠之珍、懷慙類遼豕之獻、謹序、

〔日本紀略醍醐〕延喜八年十二月廿七日、被下可施行延喜格之宣旨、　九年十月廿三日、今日捺印延喜格、

〔貞信公記〕延長二年九月十二日、定式、　十六日、定式事、　廿五日、定式、　十月六日、定式、　十二日定、

位下行大學大屬臣山田宿禰弘宗等、尙推古今、折衷文武、詳其流變、補彼舊章、設有取捨之宜、未知其辨、卽請雌黃於上台之口、中更忝天聽、式終筆削、然史舊式卷軸前修久、爲代典於後以夌夷斟益、且恐似不率由、故准據其誤謬遺漏及變古宜今者、別錄爲二十卷、名曰貞觀式、方冀新舊兩存、本枝相待、不掩美於前覺、將垂裕於後昆、行之可久、用而無窮、猶兩儀之貞觀、歷千古而景式、至若朝會宴饗蕃客祭禮諸儀注等、文繁事碎、不載於斯、然厥辭意紛錯、式妨履行、詳加討論、用從修正、欲其與式參酌、雙流於世、臣等才非博物、業謝通機、徒感江𧙥之從風、却慙玉繩之垂象、謹序、〇本文有誤脫、據一本及類聚國史補正、

〔類聚國史百四十七文〕貞觀十三年十月廿二日甲子、勅頒貞觀式、施之內外、盡使遵行、〇又見享祿本類聚三代格、

〔三代實錄三十二陽成〕元慶元年十一月三日庚子、參議從三位行左衞門督大江朝臣音人薨、〇中略有勅與參議刑部卿菅原朝臣是善、撰定貞觀格式、其上表幷式序、皆是音人之辭也、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年五月廿八日丙午、前周防守從五位上紀朝臣安雄卒、〇中略貞觀九年授從五位下、轉助教、此時有勅擇有識公卿大夫、撰格式、安雄預之、

〔日本紀略一醍醐〕延喜元年八月十九日戊戌、左大臣〇藤原時平等、上延喜格十卷、五年十一月某日、施行延喜格、

〔類聚三代格一〕延喜格序

易曰、天垂象、聖人則之、又曰、大人者與天地合其德、乃知陰陽寒溫、天道所以成歲、政令寬猛、人君所以導民、隨時立敎、或革或沿、觀風制法、世輕世重、然則金科玉條、不可用之於厖厚之俗、草纓艾韠、不能施之於傜野之人、若不達變通之道、則何辨理亂之方者乎、我朝家道出混沌、境同華胥、無爲之功未假號令、不言之化豈用章條、於是朴往彫來、步盡驟至、前帝後王雖俱存一面之網、重規疊矩不能廢三章之科、故敎而不誅、制甲令於先、誅而不怒、張丙律於後、近者弘仁格十卷、貞觀格十二卷、亦是聖主降其綸言、賢臣施其筆削、搜舊章於臺閣、擇新制於詔命、察此民情、適彼俗化、垂納軌之弘典、立經國之大規、方

勅後符、概皆據古之前模、非爲今之新意、唯一部之內、事有兩存、頗涉重構、不以爲例、勘解由使所奏、新定內外官交替式所載數事、亦復准之前例、不煩取捨、臣等雖非明于溫故、博於前聞、猶欲令之必行、禁之必止、賞一人而海內欣、罰一人而天下懼、謹因詔撰貞觀格十卷奏聞、若理輕作格、事[不]足爲儀、專棄之如遺、兼取之似碎、更撰爲兩卷、同以奏上、准開元留司格、號貞觀臨時格、幷一帙十二卷、象十有二月以成歲、但前格存而如舊、後典續而增新、覺古知今、斯焉在矣、猶恐庸心所集、有違戾於宸襟、管見攸裁、無協應於叡旨、典章不能自擧、待敎令而擧之、敎令不能自行、待誠信而行之、斯文不墜、百代可知、謹序、

○又見三代實錄、本朝文粹、

〔三代實錄清和二十〕貞觀十三年八月廿五日己亥、是日撰貞觀式畢、正三位守右大臣兼行皇太子傅藤原朝臣氏宗、參議民部卿正四位下兼行春宮大夫近江守南淵朝臣年名、參議正四位下行左大辨兼勘解由長官大江朝臣音人、從四位上行式部大輔菅原朝臣是善、勘解由次官從五位下兼行下野介紀朝臣安雄等、詣闕奉進、其都序曰、昔唐虞膺籙、稽古建官、夔拊龍言、弼予弘化、自後司存倍百、職事滋事、流例委波、政津難涉、雖復俊德承風、偎才莅事、不緣溫故、難得允蹤、夫然舊儀彰於漢代、要錄著于梁時、事之不以可已、蓋其在此乎、粤若弘仁聖帝、風超踐翼、化軼滋源、憲章日新、文物咸秩、爰降沖旨以修撰、作諸司式四十卷、雖機杼已遠、衣被無窮、然自茲而觀、有不盡矣、況復帝裁彌久、風猷積億、譬夫調琴瑟、有時當改張焉、伏惟今上陛下、函元孕象、迪哲重光、臨衢室而凝神、御法宮而軫慮、思夫所以銜策無闕、璣衡克齊、除梗澁於政途、隆輪奐於堂構、近故右大臣贈正一位藤原朝臣良相、知聖旨欲有與作、與太政大臣從一位藤原朝臣良房定議、奏可撰格式之狀、詔令右大臣正三位兼行皇太子傅臣藤原朝臣氏宗、參議民部卿正四位下兼行春宮大夫近江守臣南淵朝臣年名、參議正四位下行左大辨兼勘解由長官臣大江朝臣音人、從四位上行式部大輔臣菅原朝臣是善、與勘解由次官從五位下兼行下野介臣紀朝臣安雄、右大史正六位上臣大春日朝臣安永、正六位上行彈正少忠臣布瑠宿禰道永、正六

〔三代實錄 十六 清和〕貞觀十一年四月十三日庚子、撰貞觀格畢、大納言正三位兼行皇太子傅藤原朝臣氏宗、參議民部卿正四位下兼行春宮大夫伊豫守南淵朝臣年名、參議正四位下行左大辨大江朝臣音人、從四位上守刑部卿菅原朝臣是善、散位從五位下上毛野朝臣永世、勘解由次官從五位下紀朝臣安雄等、詣闕奉進、 九月七日辛酉、新撰貞觀格十二卷、頒行內外、○又見亨祿本類聚三代格

〔類聚三代格 一〕貞觀格序

律○斷獄云、斷罪須引律令格式正文、令○獄云、犯罪未斷決、逢格改者、然則格者律令之條流、政敎之規範、君與百姓共之者也、君不可失之於上、臣不可違之於下、出言而千里斯應、含和而萬類曲成、時險則峻法以取平、時泰則寬網以將化、我國家遐邇承德、天下無虞、風敎大同、車書共道、而未能焚符破璽施無事於群情、設象除刑、馳不犯於比屋、故嚮者弘仁十一年四月廿一日、施行格十卷、此乃公卿百官奉詔、簡舊史之凡要、抄新制之大綱、推民意而分規、量時宜而立範、不刪之典、遵行眇焉、仍舊之圖、蹤跡斯在、聖上不出戶而知天下、不因敎而辨物情、以爲虞夏共有其國、刑德斯殊、秦漢不易其民、弛張非一、俗化之本理有固然、蓋取義於隨時、匪欲期於相反、如今時歷五代、年及六旬、文質暗遷、沿革自至、詔草叠於臺閣、文案溢於縑囊、非所以法止滋章、令除煩擾、即詔故右大臣贈正一位藤原朝臣良相等、令因循舊格、綜緝新符、未及成功、歲月遷往、大納言正三位兼行皇太子傅臣藤原朝臣氏宗等、前與右大臣共承冲旨、詳悟深規、仍與參議民部卿正四位下兼行春宮大夫伊豫守臣南淵朝臣年名、參議正四位下行左大辨臣大江朝臣音人、從四位上守刑部卿臣菅原朝臣是善、散位從五位下臣上毛野朝臣永世、勘解由次官從五位下臣紀朝臣安雄、大外記正六位上臣南淵朝臣興世、正六位上行左少史臣大春日朝臣安永、正六位上行彈正少忠臣布瑠宿禰道永、正六位下行大學大屬臣山田宿禰弘宗等、上起弘仁十載之明年、下至貞觀十年之晚節、擇成規於州郡、搜故實於官曹、事與先格異者、舉而取之、理與舊制同者、推而棄之、凡格者蓋以立意爲宗、不以能文爲本、故省其繁麗之文、增其精微之典、隨官分類、先

等元興、左大臣贈正一位兼行左近衛大將藤原朝臣冬嗣、正三位中納言藤原朝臣葛野麻呂、參議從三位行近江守秋篠朝臣安人、參議從四位下橘朝臣常主等四臣、共稟吏詔、忝預編修、爾來四臣相尋薨卒、其存者唯臣等兩人而已、以夫鉛槧已下、研覈惟究、謹詣闕奉進、伏望宜布中外、壹使遵行、制可、十一月丁亥、頒行神祇、八省、彈正、左右京、春宮、勘解由、六衛、左右兵庫格式、

〔續日本後紀仁明九〕承和七年四月丁卯、頒行諸司百官、改正遺漏紕繆格式、

〔享祿本類聚三代格十七〕太政官符

頒行改正遺漏紕繆格式事

右撿案内、太政官去天長七年閏十二月七日下諸司符偁、太政官去十一月十七日符偁、被左近衛大將從三位兼守大納言清原眞人夏野宣偁、奉勅、律令之興、蓋始大寶、懲肅既具、勸誡亦顯、然律令之興、上舉大綱、至於體履相須、事猶闕如、論之政術、固有未周、因玆修格式、以備闕違、宜施之内外、壹使遵行者、若有與格式相紕繆及遺漏者、亦宜具錄申者、被中納言從三位兼行中務卿直世王宣偁、奉勅、修撰之後、改張諸事、宜來年二月以前悉令申宛、〇宛當作訖紕繆遺漏等亦准此、如有疎略及過期者、依法科處、不曾寛宥者、今被右大臣宣偁、奉勅、採拾新修、以補闕漏、討覈故實、以正紕繆、肇削功成、撰錄周備、宜早遵施行、

承和七年四月廿三日

〔類聚符宣抄六〕被中納言宣偁、勘解由使只有律令都無格式、至辨諸務多致疑滯、宜格式草案授於彼使所者、

承和七年七月廿三日　大外記清内御園奉

〔類聚符宣抄六〕右大臣宣、外記公文、隨撰格式所請、宛行之者、

貞觀五年五月廿七日　少外記善淵愛成奉

呂、參議從三位行近江守臣秋篠朝臣安人、參議從四位上行春宮大夫兼左兵衞督式部大輔臣藤原朝臣三守、從五位下守左近衞少將臣橘朝臣常主、從五位下守大判事兼行播磨大掾臣物部中原宿禰敏久等、上遵叡旨、下考時宜、採官府之故事、摭諸曹之遺例、商略今古、審察用捨、以類相從、分隷諸司、其隨時制宜、已經奉勅者、即載本文、別編爲格、或雖非奉勅、事旨稍大者、奏加奉勅、因而取焉、若屢有改張、向背各異者、略前存後、以省重出、自此之外、司存常事、或可裨法令、或堪爲永例者、隨狀增損、總入於式、若事類班雜、不得指附者、各爲雜篇、次之於末、其諸司所行、彼此參差、或因循雖久、不便於事、若斯之流、雜以取則、具錄其狀、伏聽天裁、至如米鹽魚肉兩數紛紜、及鋪設雜器功程多少等類、事既輕碎、臣等商量、務從折中、不煩上聞、其朝會之禮、蕃客之儀、頃年之間、隨宜改易、至於有事例、具存記文、今之所撰且以略諸、又交替式者、延曆年中勘解由使撰定奏聞、遵行已久、仍舊而存、不加取捨、但年代浸遠、京都屢遷、諸司文案多或墮失、雖加採索、猶有未備、上起大寶元年、下迄弘仁十年、都爲式卌卷、格十卷、辭簡而事詳、文約而旨暢、庶使覽之者易曉、施之者易行、布之象魏、與天地而無窮、銘之景鐘、將金石而不朽、臣等學非稽古、才闇當今、猥稟明詔、敢事銓緝、雖罄庸淺、恐多錯紕、凡厥篇目列之如別、〇又見本朝文粹

〇按ズルニ、弘仁格ハ、貞觀格ノ序ニ據ルニ、弘仁十一年四月二十一日ニ施行セシナリ、

〔類聚國史百四十七文〕天長七年十月丁未、大納言正三位兼行彈正尹臣藤原朝臣三守等言、臣聞劉安有云、法者天下之準繩、而人主之度量、信哉斯言也、然則通三建極之后、得一居貞之君、莫不敦德禮以宣規、設法令而裁化、世輕世重、或沿或革、銜勒人倫、隄防品彙者也、臣竊按、昔我文武天皇大寶元年、甫制律令、施行天下、沮勸既顯、彝倫式序、但律令之興、止擧本綱、至於體履相須、式條猶缺、論之政術、因有未周、所以先朝延曆年中、降綸言於卿相、揮折簡於英髦、厥後時年漸遷、舊例屢改、討論取捨、勳歷年所、至於弘仁、乃以絶筆、於是分置群官、更令摘績、欲成之不日、而歲月其除、伏惟皇帝陛下、德參丕偉、道契無爲、應千載而撰寰區、撫萬物而納壽域、所謂天地交泰、禎符咸臻、功成作樂之時、治定制禮之日也、臣

天長十年二月十九日

正三位守右大臣兼行左近衞大將臣清原眞人夏野

權中納言兼右近衞大將從三位行春宮大夫臣藤原朝臣吉野

從四位下行右近衞少將兼備前權守臣紀朝臣長江

從五位下行大内記臣春澄宿禰善繩

〔範國朝臣記〕長元九年六月廿五日、依召參殿、令返上内裏式本、御料令書寫也、

〔倭名類聚抄 一 地〕杣 功程式云、〇中略 功程式者、修理筭師山田福吉等、弘仁十四年所撰上也、

〔類聚三代格 一〕格式 〇弘仁 序

蓋聞、律以懲肅爲宗、令以勸誡爲本、格則量時立制、式則補闕拾遺、四者相須、足以垂範、譬猶寒暑遞以成歲、昏旦迭而育物、有沿有革、或輕或重、寔治國之權衡、信馭民之轡策者也、古者世質時素、法令未彰、無爲而治、不肅而化、曁乎推古天皇十二年、上宮太子親作憲法十七箇條、國家制法自茲始焉、降至天智天皇元年、制令廿二卷、世人所謂近江朝庭之令也、爰逮文武天皇大寶元年、贈太政大臣正一位藤原朝臣不比等、奉勅撰律六卷令十一卷、養老二年復同大臣不比等、奉勅更撰律令、各爲十卷、今行於世律令是也、故去天平勝寶九歲五月廿日勅書偁、頃年選人依格結階、人々高位不便任官、自今以後宜依新令、去養老年中朕外祖故太政大臣、奉勅刊修律令、宜仰所司早令施行、先帝德合乾載、明齊照臨、四海有截、八紘無事、然而凝情政體、騁想治術、以爲律令是爲從政之本、格式乃爲守職之要、方今雖律令頻經刊修、而格式未加編緝、稽之政道、尙有所闕、乃詔贈從一位行左大臣藤原朝臣内麻呂、故參議從三位行常陸守菅野朝臣眞道等、始令撰定、草創未成、遭時遏密、寢而不爲、天朝以聖承聖、實明繼明、敷景化於寰中、暢仁風於海外、然而顧先緒之未遂、切堂構於宸襟、爰降綸言、尋令修撰、申詔大納言正三位兼行左近衞大將陸奧出羽按察使臣藤原朝臣冬嗣、故正三位行中納言、臣藤原朝臣葛野麻

大納言正三位兼行民部卿藤原朝臣清貫

〔內裏式〕蓋儀注之興、其所由來久矣、所以指曉於與人、納于軌物者也、皇上雖以博酌節文、未具覽之者多岐、行之者滋惑、乃詔正三位守右大臣兼行左近衛大將臣藤原朝臣冬嗣、中納言從三位兼行左衛門督陸奧出羽按察使臣良岑朝臣安世、權中納言從三位兼行春宮大夫左兵衛督臣藤原朝臣三守、從四位下行中務大輔臣朝野宿禰鹿取、皇后宮大夫從四位下兼行近江守臣小野朝臣岑守、文章博士從五位下兼行大內記臣桑原公腹赤、從五位下行大內記臣滋野宿禰貞主等、令修定焉、於是抄撫新式、採綴舊章、類要修緝□斯朝憲取捨之宜斷於天旨、起于元正訖于季冬、所常履行及臨時軍國諸大小事、以類區分、勒成三卷、庶其升降之序、隆殺之儀、披文即曉、臨事靡滯、各修厥職、守而弗忘、乘矣奐○

一本作閱 閱書、義近於此、○中略

弘。仁。十二年正月卅日

正三位守右大臣兼行左近衛大將臣藤原朝臣冬嗣
中納言從三位兼行左衛門督陸奧出羽按察使臣良岑朝臣安世
權中納言從三位兼行春宮大夫左兵衛督臣藤原朝臣三守
從四位下行中務大輔臣朝野宿禰鹿取
皇后宮大夫從四位下兼行近江守臣小野朝臣岑守
文章博士從五位下兼行大內記臣桑原公腹赤
從五位下行大內記臣滋野宿禰貞主

內。裏。式。雖指曉之蹤、往日既定、而折旋之儀頃年頗革、或有節會供張出入門閫、徒記舊時、未著新變者、聖上鑒其踳雜、斯盡會通、斟酌隨宜取捨先斷、廼詔臣等四人、令綴緝焉、謹稟裏旨、詳加增損、刊繆補虧、繕寫甫就、

大同抄一部十六卷

在外記曹司

右謹撿案內、使司依太政官去延喜十一年五月四日符旨、修撰交替式、而件式所載官符、其文多疑、案據成煩、如今彼本官符等、皆在件書中、望請被下宣旨、暫借行正其批標、將遂撰定、但事畢之後、卽將返納、

延喜十四年九月十日　主典秦貞興

判官藤原茂幹

右大臣宣、件等之書宜隨彼使借申借行者、

同年十月十六日　少外記大藏眞明奉

〔內外官交替式〕勘解由使謹奏

內外官交替式事

右交替式者、延曆□□□□中所撰、其文咸出律令、□□□□□□□□所以壹吏耳目、斷官諍訟也、至于貞觀九年、續亦抄內後事、往々加案解釋疑義、改號新定內外官交替式、今之所行則斯文焉、爾降時更四代、歲踰五旬、或弛乍張、隨事多變、加以伏見先後所撰抄略數書、混成一部、名雖稱式、實是似格、況一事重出、兩案並存、又其撰修頗有遺漏、披閱之處、暗移主陰、行用之間、互起管見、仍叙由緒、先奉處分、而後搜集遺文、□勘新制、准之諸司式、每條立凡例、約成一軸、名曰內外官交替式、使等學滯一隅、才昧三尺、叨備司存、敢事筆削、還恐丹寸之攸不及、猶使黃中而有未通、爲以上聞、伏俟聖斷、謹奏、

延喜廿一年正月廿五日　參議左大辨從四位上兼行長官播磨權守橘朝臣澄清

從五位上行次官兼丹波介藤原朝臣久貞

次官從五位下藤原朝臣諸蔭

撿按

中納言從三位兼行民部卿攝津守藤原朝臣雄友
中納言兼近衛大將從三位行造宮大夫藤原朝臣内麻呂

右大臣神王〇宣、奉勅依奏、

〔三代實錄十五清和〕貞觀十年閏十二月廿日己酉、新定内外交替式二卷、撰修甫就、勅頒天下、並令遵行、〇又見享祿本類聚三代格

〔類聚三代格一〕貞觀格序

勘解由使所奏、新定内外官交替式、所載數事、亦復准之前例、不煩取捨、〇又見三代實錄

〔類聚符宣抄六〕勘解由使

請被下宣旨借行天長格抄一部卅卷事在外記曹司

右謹撿案内、使司依太政官去年五月四日符旨、修撰交替式、而件式所載官符、其文多疑、案據成煩、如今彼本官符等、皆在件書中、望請被下宣旨、暫借行正其紕繆、將遂撰定、但事畢之後、即將返納、

延喜十二年六月九日　主典英保時幹
判官壹志作範

大納言藤原朝臣忠平宣、宜依被使借申借行件格抄者、

同年八月廿三日　少外記伴久永奉

同十四年九月十日、且返奉廿五卷、史生物部吉門、十六日依數返奉了、勘解由主典秦貞興、

〔類聚符宣抄六〕勘解由使

請被下宣旨借行雜書事

官曹事類一部卅卷

〔藤原家傳下武智麻呂〕二年〇大寶正月、遷中判事、公、莅官聽事、公平無私、察言觀色、不失其實、決疑平獄、必加審愼、雖有大小判事、其官方无准式、文案錯亂、問辨不允、於是撰事前後奏定條式、大寶元年已前爲法外、已後爲法内、自茲已後諸訴訟者、内決已事、不敢公庭、

〔續日本紀七元正〕養老元年五月辛酉、以大計帳、四季帳、六年見丁帳、青苗簿、輸租帳等式、頒下於七道諸國、

〔交替式〕勘解由使謹奏

撰定諸國司交替式事〇中略

以前從政之方、法令爲本、守職之道、格式爲先、是以行違故實、向途而迷、事乖舊章、面墻而礙也、方今或人私抄古來勅書官符省例問答等、名曰交替式者、見有數卷、未審誰撰、而見聞互異、趣捨不同、事或既停、率爾難悟、以此爲政、所失寔多、國史之迷、莫不由矣、伏惟聖朝、仁逾解網、恩跨泣辜、明黜陟於群僚、顯褒貶於庶類、殊置勘解由使、令諸冤屈之徒、開憤懣於此庭、辨是非於正理也、然使臣等聽訟之隙、遙謝往烈、決爭之智寔闇當年、奉綸旨以屏營、荷重任而戰越、雖盡忠誠於愚管、還懼與奪之有違焉、故今撰集法令格式、應預交替之事者、以類相隨、令易披閲、但其中承前之格、與法牴牾、指歸未明、幷官省處分、未經奏畫、相承爲例、如此之類、實難推依、是以至有所論、殊附今案、以決古今之疑滯矣、勒成一軸、名曰撰定交替式、伏望仰畿内七道朝集使、各寫一本、藏之府庫、庶令諸國遵奉以不失、使司勘據而無疑、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞謹奏、

延曆廿二年二月廿五日

使正四位下行左大辨兼左衞士督皇太子學士但馬守菅野朝臣眞道

次官大學頭從五位上兼行式部少輔和氣朝臣廣世

次官從五位下守大判事兼行造宮大進越前大掾讃岐公千繼

被思召被仰付、無本存候、和點を被仰付候、是もいまだ出來不仕候由に候、○中略

十月廿四日　室新助

青地藏人樣

〔令義解僧尼二〕凡僧尼有犯、准格律合徒年以上者還俗、許以告牒當徒一年、謂、格者臨時詔勅也、

〔續日本紀元明六〕和銅六年四月戊申、頒下新格并權衡度量於天下諸國、

〔續日本紀孝謙二十〕天平寶字元年五月丁卯、勅曰、頃年選人依格結階、人人位高不便任官、

〔日本書紀天武二十九〕十年四月辛丑、立禁式九十二條、因以詔之曰、親王以下至于庶民、諸所服用、金銀珠玉紫錦繡綾、及氈褥冠帶、并種種雜色之類、服用各有差、辭具有詔書、

〔續日本紀文武一〕二年七月乙丑、以公私奴婢亡匿民間、或有容止不肯顯告、於是始制笞法、令償其功、事在別式、

〔令義解神祇二〕仲春祈年祭、○中略前件諸祭、供神調度、及禮儀齋日、皆依別式、

〔令義解田三〕凡外官新至任者、比及秋收、依式給粮、謂、秋前至任、年實未收、故比及秋收、量給公粮、

〔令義解儀制六〕凡皇后皇太子以下、率土之內、○中略註於天皇太上天皇上表、同稱臣妾名、謂、凡臣下對揚稱名、面在君所、稱揚自名者、唯稱某甲、不言臣某、其太皇太后、皇太后、於天皇太上天皇、及太皇太后、皇太后、皇太子、相稱之辭、不見令條、待式處分之、

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字三年六月丙辰、正三位中納言兼文部卿神祇伯勳十二等石川朝臣年足奏曰、臣聞治官之本、要據律令、爲政之宗、則須格式、式字據金澤本補、方今科條之禁、雖著篇簡、別式之文、未有制作、伏乞作別式、與律令並行、

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字六年九月乙巳、御史大夫正三位兼文部卿神祇伯勳十二等石河朝臣年足薨、時年七十五、○中略寶字二年授正三位、轉御史大夫、時勅公卿各言意見、仍上便宜作別式二十卷、各以其政繫於本司、雖未施行、頗有據用焉、

閣了、前三河守清原、コレ清原敎隆眞人ナリ、卷第六ノ末ニ、文應元年八月十六日、於鶴岡八幡宮放生會棚所、奉授越州專城尊閣了、凡以見物爲次、以讀書爲先給、好學之志、有所不暇、蓋以此謂而已、直講淸原判、コレ敎隆ノ子俊隆眞人ナリ、東鑑ニ、文應元年八月十五日、鶴岡放生會、將軍家無御參宮、武州爲御使被神拜、十六日、將軍家雖無御出、馬場等之儀、棧敷如例ト見エタルハ、コノトキノコトナリ、

御文庫古文書ノ中、松平伊豆守信綱朝臣ヨリ御書物奉行ヘノ書帖ニ、律二卷、令七卷、集解十卷、是は從仙洞御かり被成、御寫被成度由ニ付請取、御前江上申候トアリ、按ニ、三雲系圖ニ、寬永十三年、仙洞より律令の書を將軍家に求め給ふ、是によりて松平伊豆守信綱、鈞命をうけたまはり、同十月鎌倉圓覺寺の西堂、其外僧共廿餘人に仰せて、江戶海禪寺に於て、廿一日之間に是を寫し、民部卿法印道春、刑部卿法印永喜是を校す、此時星合伊左衞門具敎、關兵三郞正成、西尾嘉右衞門正信、三雲內記成賢等あづかれり云々トアルハ、此本ニテ寫サレシナルベシ、

〔國師日記〕慶長十九年十一月十七日、從南光坊海天狀來、善行使ニ而、院ノ令集解卅二卷持せ、此方ニ類本有之故、則返遣候也、返書遣ス、案在左、

尊書忝存候、令集解卅二卷、從院御所樣被仰出、持せ被下候、是は此方に類本御座候間、則返遣す、從最前集解は入不申由に候、是は集解に御座候間、返遣申候、尙善行江申渡候、恐惶謹言、

十一月十七日　金地院崇傳

南光坊大僧正

〔鳩巢手簡義〕享保六年

人見又兵衞、林又右衞門、人見七郞右衞門三人江者、令義解、令集解、令義解ハ板ニ有之候、集解者板ニ無之候、定而板行可被仰付

當番衆御披露

〔右文故事 一〕御本日記附注上

律御本　二卷　一箱

令内集解十卷　十七卷

按ニ、書目ニ、律十卷、令義解十卷、集解三十卷ト見ユ、此御本闕アリ、律ハ名例賊盜ノ二律僅ニ存セリ、(世ナホ職制衞禁二律ヲツタフ)令義解ハ、第一官位令(職員令缺)第二戸令(神祇令僧尼令缺)第三田令、賦役令、學令、第四選敍令、繼嗣令、考課令、祿令、第五宮衞令、軍防令、第六儀制令、衣服令、營繕令、第七公式令、第八缺、(廐牧令、倉庫令、醫疾令缺、行本モ、倉庫醫疾二令缺アリ、)第九關市令(假寧令、喪葬令、捕亡令、共ニ缺、)第十獄令、雜令、以上合テ七卷トナス、集解ハ、現存第一官位、第二ヨリ六マデ職員、第七神祇、僧尼、第八僧尼、第九ノ十戸令ノ十卷アリ、餘ハミナ缺タリ、○中略

律令トモ、舊志ニ金澤本トアリ、然レドモ今謹テ鑒定スルニ、金澤本ヲ摹寫シテ、料紙褾裝トモ、原書ノゴトクニ製造セシモノナリ、其證ハ、奥書ミナ同筆ニシテ、越後守三河守等ガ親筆ニアラズ、是一ツ、花押ヲ手書セズシテ、皆判トノミ書セリ、是二ツ、金澤文庫ノ黒印ヲ捺セズ、是三ツ、凡金澤卷本ハ、紺紙ノ褾襯木軸ナリ、コレハ萌黄金緞ノ褾紙ニシテ、紫檀軸ナリ、是四ツ、此四證ヲ得テ、ソノ眞本ナラザルヲ明スニ足レリ、是關白秀次ヨリ傳來ノ者カ、將タ他本ナルカ、今知ベカラズ、コヽニ御本ト云ハ、前ノ新寫ノ本ニハアラズシテ、前々ヨリノ御藏本ナリト云ヘルコトナルベシ、前ニハ冊ヲ以テ記シ、此ニハ卷トアルモノハ、卷本ナレバナリ、律令共ニ、毎卷奥書アリ、又裏書アリ、律ノ卷第一ノ末ニ、此書先年受敎隆眞人之說了、而件書、回祿成孽化灰燼、仍重以俊隆之本書寫校合了、于時文永十年九月二十八日、越州刺吏平判、コレ北條越後守實時朝臣ナリ、令卷第一ノ末ニ、正嘉二年五月十日、相傳秘說、奉授越州使君尊

七月廿八日　　金地院

板伊州樣

尊報

猶々律令之儀、御機嫌能候間、早々御上尤存候、可然樣ニ可被仰渡候、

八月十三日、伊賀殿八月十日之狀來、從庄三ゟ被屆、

當月十日之御狀、同十三日令拜見候、菊亭殿ゟ律令可被成御上之由尤存候、最前其樣子申上、御機嫌能候間、早々御上候樣ニ可被仰渡候、併如御書中、拙老近日被指上、於上方、記錄共書寫申付候樣にと被仰出候、內々廿日比可罷上旨御諚ニ候、相延可申候不存候、於上方何も記錄三通寫候樣にと被成御諚候間、右之律令も、先其方に可被成御待候哉、御分別次第可被仰渡候、〇中略恐惶謹言、

八月十四日　　金地院

板伊州樣

尊報

十九日、板伊賀殿八月十四日之狀來、菊亭殿ゟ律令卷物十九卷下候間、則今日十九日披露申候、返書遣す、案左に有、〇中略

一書令啓上候、律令拾九卷、箱ニ入封之儘披露仕候、――板伊州へ之御書、於御前讀上申候、一段御機嫌能候間、御心安可被思召候、具之儀板伊州迄申入候間、可被申上候、此由御披露所仰候、恐惶謹言、

八月十九日

菊亭右府樣

舞文弄法、永言於此、固切宸冲、爰勅在朝、廼令討覈、稽之於典籍、參之以古今、迄于滯疑祇稟聖斷、咸加辨析、已盡會通、裁爲十卷、名令義解、屈飛龍之眇構、顧汾陽之窅然、未有施行、藏之秘府、朕以寡昧、臨馭寰字、思透明謨、導揚景業、宜頒天下、普使遵用、畫一之訓、垂於萬葉、○本文有誤脫、據令義解、類聚國史等補正、

〔續日本後紀十五仁明〕承和十二年二月丁酉、散位從四位下善道朝臣眞貞卒、○中略天長八年遷阿波守、是時有識公卿一兩人、依詔旨與諸儒等、修撰令義解、眞貞亦參其事、不赴任所、

〔國師日記〕慶長十九年六月　一久右衛門罷下ニ付而、六月十六日之尊書、同廿二日令拜見候、○中略

一菊亭殿○右大臣今出川晴季、律令有之由候、此御本者、金澤之文庫之御本、先年、秀次御取上せ候而、立御耳候、今度記錄共御穿鑿之儀ニ候條、被成御上候樣ニ可然候哉、貴樣右府と無御等閑候者、御内證卒度可被仰候哉、但御分別次第ニ候、○中略

六月廿四日　　　金地院○崇傳

板伊州樣○所司代板倉勝重

貴報

〔駿府政事錄〕慶長十九年七月廿八日、今日自菊亭殿○今出川晴季於板倉伊賀守○勝重書狀到來、是者律令金澤文庫本、往昔自關白秀次被進於今出川殿、今又被進于駿府、　八月十九日、律令到來、是者金澤文庫本、關白秀次執之、今出川殿被進之、今日被進之、○令卅篇、内十一篇不足、律二卷有之、

〔國師日記〕慶長十九年七月廿七日、板伊賀殿七月廿一日之狀來、菊亭殿ゟ板倉殿への書中も見せ來、菊亭殿律令上申度との事也、○中略

當月廿一日之御狀、同廿七日令拜見候、○中略　菊亭殿ゟ律令可被成御上、御内證之由、右府ゟ貴樣迄御書中、則備上覽候、御機嫌能候間、早々可被指下候、披露可申候、金澤之本ニ候條、尤可有御上儀と被思召御氣色ニ而候、是者貴樣へ之内證申事ニ候、○中略

得業生大初位下臣漢部松長等、輙應明詔、辨論執議、陳家古壁之文、探而無遺、于氏高門之法、訪而必盡、其善者從之、不以人棄言、其迂者略諸、不以名取實、一加一減、悉依法曹之舊言、乃筆乃削、非是臣等之新情、猶有五劒難名、兩璧易似、必稟皇明、長質疑滯、有巣在昔、大壯成其棟宇、網罟猶秘、重離照其佃漁、今乃成之聖日、取諸不遠、臣等遠愧皐虞、近慙荀賈、牽拙歷稔、僶俛甫畢、分爲一十卷、名曰令義解、凡其篇目條類、具列于左也、深淺水道、共宗於靈海、小大公行、同歸於天府、謹序、〇此下有目錄、載在上

天長十年二月十五日　明法得業生大初位下臣漢部松長

從八位上守判事少屬臣川枯首勝成

從六位下行左少史兼明法博士勘解由判官臣讃岐公永直

太宰少貳從五位下臣小野朝臣篁

正五位下行阿波守臣善道宿禰眞貞

正五位上行大判事臣興原宿禰敏久

從四位下行刑部大輔兼伊豫守臣藤原朝臣衛

從四位下行勘解由長官臣藤原朝臣雄敏

正四位下行左京大夫兼文章博士臣菅原朝臣清公

參議從四位下守右大辨兼行下野守臣藤原朝臣常嗣

參議從三位行刑部卿兼信濃守臣南淵朝臣弘貞

正三位守右大臣兼行左近衛大將臣清原眞人夏野

〔續日本後紀三仁明〕承和元年十二月辛巳、施行天長年中所新撰令義解、下詔曰、納諸枕物、王道所先、制以度量、皇猷斯在、故知弼成五教、銜勒萬方、垂拱而理、其法令乎、後太上天皇、〇淳和修機玄扈、比德丹陵、事勤遠圖、慮存長策、以爲法令文義、隱約難詳、前儒註釋、方圓遞執、豈使三家異說、輕重參差、二門殊端、

士等、撰先儒之舊記、省彼迂說、取此正義、勒成卷帙、以備解釋、庶俾學者易解與奪莫異者、省依解狀、謹請官裁者、正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良峯朝臣安世宣、奉勅依請者、省宜承知依宣行之、

天長三年十月五日

〔類聚國史百四十七文〕天長十年二月壬申、右大臣清原眞人夏野、中納言直世王、源朝臣常、藤原朝臣愛發、權中納言藤原朝臣吉野、參議南淵朝臣弘貞、文室朝臣秋津、藤原朝臣常嗣、侍殿上校讀新撰令釋疑義起請、

〔令義解序〕臣夏野等聞、春生秋殺、刑名與天地俱興、陰慘陽舒、法令共風霜並用、犯之必傷、蟻灶有爛蛾之危、觸之不漏、蛛絲設黏虫之禍、昔寢繩以往、不嚴之敎易從、畫服而來、有恥之心難格、隆周三典、漸增其流、大漢九章、愈分其派、雖復盈車溢閣、牢市之姦不勝、鑄鼎銘鐘、滿山之弊已甚、降及澆季、煩濫益彰、上任喜怒、下用愛憎、朝成夕毀、章條費刀筆之辭、富輕貧重、憲法歸賄貨之家、巖科所枉、劒戟謝其銛利、輕比所假、君父慙其溫育、故令出不行、不如無法、敎之不明、是爲樂刑、伏惟皇帝陛下、道高五讓、勤劇三握、類金玉而垂法、布甲乙而施令、芟春竹於齊刑、銷秋茶於秦律、孔章望斗之郊、無復寃牢之氣、黃神脫梏之地、唯看香楓之林、猶慮法令製作、文約旨廣、先儒訓註、案據非一、或專守家素、或固拘偏見、不肯由一孔之中、爭欲出二門之表、遂至同聽之獄、生死相半、連案之斷、出入異科、念此辨正、深切神襟、爰使臣等集數家之雜說、擧一法之定準、臣謹與參議從三位行刑部卿兼信濃守臣南淵朝臣弘貞、參議從四位下守右大辨兼行下野守臣藤原朝臣常嗣、正四位下行左京大夫兼文章博士臣菅原朝臣淸公、從四位下行勘解由長官臣藤原朝臣雄敏、從四位下行刑部大輔兼伊豫守臣藤原朝臣衞、正五位上行大判事臣興原宿禰敏久、正五位下行阿波守臣善道宿禰眞貞、太宰少貳從五位下臣小野朝臣篁、從六位下行左少史兼明法博士勘解由判官臣讚岐公永直、從八位上守判事少屬臣川枯首勝成、明法

官分職、是有閑繁、錫祿命位、非無輕重、今覽從三位守大納言兼彈正尹神王等所奏、刪定令格四十五條、事憑穩便、義存折衷、宥下有司並令遵用、

〔類聚國史百四十七文〕延曆十九年二月戊寅、右中辨從四位下橘朝臣入居卒云々、屢上書言便宜、事多補益、徵爲右中辨、所言政務甚被省納、奏撰刪定令、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年五月癸未、是日公卿奏曰、臣聞垂範訓人、事歸濟世、改制易俗、理會適時、寔知道尙沿革、政必裁成、苟或未弘、豈肯膠柱、今此刪定令條、是去神護景雲三年議請刪定、而事有不允、寢而莫行、數十年後、乃始頒下、自爾以降、訴訟逾繁、事不便人、理難取則、今故謹詳可不、輒請刊改、冀合機宜、用遵可久、庶望景化風行而革弊、群生日用而沐義、俗弭奸邪、家全緒業者許之、文多不載、

〔令集解六職員〕穴云、禁內禮式、謂後宮院中禮式是、問有違失儀式之罪科罰何、答、女司決罰、故刪定令稱糺正推罰也、

〔令義解一〕太政官符式部省

　應撰定令律問答私記事

右得彼省〇式部解偁、大學寮解偁、明法博士外從五位下額田國造今足解偁、謹撿舊記、律令之興年代浸遠、沿革隨時、損益因世、藤原朝廷御宇、正一位藤原太政大臣、奉勅制令十一卷律六卷、博士正四位下下毛野朝臣古麻呂、贈正五位上調忌寸老人、正五位下守部連大隅、正五位下道公首名、從五位上伊吉連博德、從五位下伊豫部連馬甘等、至于大寶元年修撰旣訖、施行天下、平城朝廷養老年中、同太政大臣、復奉勅刊修令律、各爲十卷、博士正四位下大和宿禰長岡、從五位下陽胡史眞身、外從五位下矢集宿禰虫麻呂、外從五位下鹽屋連古麻呂、外從五位下山田連白金等也、自爾以來、諸博士等相承敎授、文略義隱、情理難通、卽無不由先儒舊說、而彼舊說或爲問答、或爲私記、互作異同、未詳誰作、後學者等屬意彼此、每有論決難塞、夫古之刑書、鐘鼎鑄之、金石銘之、所以塞異端絕異理也、望請命當時博

縫女部謂撿前令、縫女部在使部上、而新令在直丁下者、凡新令之體、雜女皆在男下、所以在直丁下、其考者、依舊更无改張、

〔令集解七下僧尼〕巫術(中略)釋云、巫者行事也、前令。令制湯藥、今令。不在制限、

〔令集解三十營繕〕凡近大水有堤防之處(中略)穴云、大水謂江河是也、與古令別也、

○按ズルニ、令義解、令集解等ニ、前令古令トアルハ、大寶令ノコトニシテ、今令新令トアルハ養老令ノコトナリ、

〔律疏〕目錄

名例第一　衞禁第二　職制第三　戸婚第四

厩庫第五　擅興第六　賊盜第七　鬪訟第八

詐僞第九　雜律第十　捕亡第十一　斷獄第十二

〔令義解序〕分爲一十卷、名曰令義解、凡其篇目條類、具列于左也、○中略

第一官位令　職員令　後宮職員令　東宮職員令　家令職員令

第二神祇令　僧尼令　戸令

第三田令　賦役令　學令

第四選敍令　繼嗣令　考課令　祿令

第五宮衞令　軍防令

第六儀制令　衣服令　營繕令

第七公式令

第八倉庫令　廐牧令　醫疾令

第九假寧令　喪葬令　關市令　捕亡令

第十獄令　雜令

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年五月丁卯、勅曰、頃年選人、依格結階、人々位高、不便任官、自今以後、宜依新令、去養老年中、朕外祖故太政大臣、○藤原不比等奉勅刪修律令、宜告所司早使施行、

〔續日本紀四十桓武〕延暦十年三月丙寅、故右大臣從二位吉備朝臣眞備、大和國造正四位下大和宿禰長岡等、刪定律令二十四條、辨輕重之舛錯、矯首尾之差違、至是下詔始行用之、

〔類聚國史百四十七文〕延暦十六年六月癸亥、詔曰、觀時施敎、有國之彝範、量事立規、爲政之要務、然則設

余部連馬養、勤大壹薩弘恪、勤廣參土師宿禰甥、勤大肆阪合部宿禰唐、務大壹白猪史骨、追大壹黃文連備、田邊史百枝、道君首名、狹井宿禰尺麻呂、追大壹鍛造大角、進大壹額田部連林、進大貳田邊史首名、山口伊美伎大麻呂、直廣肆調伊美伎老人等、撰定律令、賜祿各有差、〇本文有誤脫、據類聚國史補正、

〔續日本紀二文武〕大寶元年三月甲午、始依新令改制官名位號、　四月庚戌、遣右大辨從四位下下毛野朝臣古麻呂等三人、始講新令、親王諸臣百官人等就而習之、　六月壬寅朔、令正七位下道君首名說僧尼令于大安寺、　己酉、勅、凡其庶務一依新令、〇中略　是日遣使七道、宣告依新令爲政及給大租之狀、并頒付新印樣、　八月癸卯、遣三品刑部親王、正三位藤原朝臣不比等、從四位下下毛野朝臣古麻呂、從五位下伊吉連博德、伊余部連馬養等、撰定律令、於是始成、大略以淨御原朝庭〇天武爲准正、仍賜祿有差、　丁未、撰令所處分、職事官人賜祿之日、五位已下、皆參大藏受其祿、若不然者、彈正糺察焉、　戊申、遣明法博士於六道〇除西海道講新令、

〔續日本紀二文武〕大寶二年二月戊戌朔、始頒新律於天下、　七月乙亥、詔、令內外文武官讀習新令、〇令、類聚國史、日本紀略、並作律、　乙未、始講律、　十月戊申、頒下律令于天下諸國、

〔續日本紀五元明〕和銅四年七月甲戌朔、詔曰、張設律令、年月已久矣、然纔行一二、不能悉行、良由諸司怠慢不存恪勤、〇下略

〔續日本紀五元明〕和銅五年五月乙酉、詔諸司主典以上并諸國朝集使等曰、制法以來、年月淹久、未熟律令、多有過失、自今以後、若有違令者、卽准其犯依律科斷、其彈正者、月別三度巡察諸司、糺正非違、若有廢闕者、仍具事狀、移送式部、考日勘問、

〔類聚三代格一格式〕〇弘仁序

養老二年、復同大臣不比等奉勅更撰律令、各爲十卷、今行於世律令是也、〇又見扶桑略記

〔令義解一職員〕縫部司〇中略

制律、○下略

○按ズルニ、弘仁格式ノ序ニ天智天皇元年トアルハ、卽位ノ元年ニシテ、鎌足傳ニ七年トアルハ、稱制ノ年ヨリ數ヘタルナリ、

〔日本書紀 二十七 天智〕十年正月甲辰、東宮太皇弟奉宣(或本云、大友皇子宣也、)施行冠位法度之事、大赦天下、(法度冠位之名、具載於新律令也、)

〔續日本紀 八 元正〕養老三年十月辛丑、詔曰、開闢已來法令尙矣、君臣定位、運有所屬、洎于中古、雖從由行、未彰綱目、降至近江(○天智)之世、改張悉備、迄於藤原(○文武)之朝、頗有增損、由行無(○刊本作連、撰一本改、)改、以爲恒法、

〔續日本紀 二十 孝謙〕天平寶字元年閏八月壬戌、紫微內相藤原朝臣仲麻呂等言、○中略緬尋古記、淡海大津宮御宇皇帝、(○天智)天縱聖君、聰明睿主、考正制度、創立章程、

〔日本書紀 二十九 天武〕十年二月甲子、天皇皇后共居于大極殿、以喚親王諸王及諸臣、詔之曰、朕今更欲定律令、改法式、故俱修是事、然頓就是務、公事有闕、分人應行、

〔日本書紀 三十 持統〕三年六月庚戌、班賜諸司令一部二十二卷、

〔類聚三代格 一〕格式(○弘仁)序

逮文武天皇大寶元年、贈太政大臣正一位藤原朝臣不比等、奉勅撰律六卷、令十一卷、(○又見帝王編年記)

〔三代實錄 二十 淸和〕貞觀十三年十月五日丁未、外從五位下守大判事兼行明法博士櫻井田部連貞相議曰、○中略古律同條(○名例律六議條)云、議親、注云、謂皇親及太皇太后、皇太后、皇后本服七日以上親、皇后本服一月以上親者、案此等文、除古律三后本服字、新律止計等親示舊法、

〔續日本紀 一 文武〕四年三月甲子、詔諸王臣、讀習令文、又撰成律條、 六月甲午、勅淨大參刑部親王、直廣壹藤原朝臣不比等、直大貳粟田朝臣眞人、直廣參下毛野朝臣古麻呂、直廣肆伊岐連博得、直廣肆伊

律令

第廿（交替部 驛傳部）　第廿一（雜補部）　第廿二（廐牧部 衞士仕丁部 兵器部 兵士防人部）
第廿三（雜備部 蕃客部 使事部 夷祿部）　第廿四（禁制部）　第廿五（彈例部 官舍部 刑法部）
第廿六（夷俘部 賜地部上）　第廿七（賜地部下 贈物部 賜官部）　第廿八（雜部上）
第廿九（雜部中）　第卅（雜部下）

天長格抄撰日本後紀之次所抄出之例也、起桓武天皇延暦十一年正月丙辰、迄于後太上天皇十年二月乙亥編次行事成口其臨時小事、朝堂大儀、入朝出使之類、有司所存者、文詞繁多不必錄、至於事經行用、必須爲例、一依本案、不勞改張、但以類相次、令便披尋、勒成卅卷、名曰天長格抄、庶令後世無煩遵行、目錄如右、

○按ズルニ、本朝法家文書目錄ハ、著作ノ年代ヲ詳ニセズト雖モ、亡逸セル官曹事類、天長格抄等ヲ始メ、政書ノ目錄ヲ具載セルヲ以テ、姑クコヽニ掲載シテ參考ニ供フ、

〔唐書（刑法五十六）〕唐之刑書有四、曰、律、令、格、式、令者、尊卑貴賤之等數、國家之制度也、格者、百官有司之所常行之事也、式者、其所常守之法也、凡邦國之政、必從事於此三者、其有所違、及人之爲惡而入于罪戾者、一斷以律、

〔類聚三代格（一）〕格式（○弘仁）序
古者世質時素、法令未彰、無爲而治、不肅而化、曁乎推古天皇十二年、上宮太子（○廐戶）親作憲法十七箇條、國家制法自玆始焉、降至天智天皇元年、制令廿二卷、世人所謂近江朝庭之令也、

〔藤原家傳（上鎌足）〕七年秋九月、（○中略）先此帝（○天智）令大臣撰述禮儀、刊定律令、通天人之性、作朝廷之訓、大臣與時賢人、損益舊章、略爲條例、一崇敬愛之道、同止奸邪　路、理愼折獄、德洽好生、至於周之三典、漢之九篇、无以加焉、

〔令集解（一官位）〕問、律令誰先誰後、答、令有律語、（○註略）律有令語、（○中略）上宮太子幷近江朝廷、唯制令而不

上古問答一卷
八十一例一卷
六十二例一卷
十七條憲法一卷推古天皇十二年上宮太子作レ之
彈例一卷
問答五條

類聚三代格目錄

第一神事上　序事　神社事　神封井租地子事　祭井幣帛事　神叙位井託宣事
第二神事下　齋王事　神主禰宜事　科祓事　神郡雜務事　神社公文事　在諸國四度使事　勘學數事
第三佛事上　造佛名事　經論井法會請僧事　修法灌頂事
第四度者事
第五佛事下　國分寺事　定額寺事　僧綱員位階井僧位階事　諸國講師事　僧尼禁忌事　家人事
第六國忌事　供佛事　廢置諸司事　加二減諸司官員一事

天長格抄卅卷起二桓武天皇延暦十一年正月丙辰一、盡二後太上天皇天長十年二月乙亥一、

第一神事部上　第二神事部下　第三佛寺部上　第四佛寺部中
第五佛寺部下　第六釋奠部　僧綱部　國忌部　錮免部　第七供御部上　第八供御部下　國郡部
第九倉廩賞賜部　授位部　第十租稅部　出擧部　第十一封戸部　賜田部　第十二置官部
第十三官位部　上日部　考選部　位祿部　第十四季祿部　馬料部　公廨部　要劇部
第十五同料部　服色部　朝儀部　銓擬部　把笏部　國造部　第十六調庸部　第十七穎食部　義倉部
第十八交易年料部　春米部　第十九出納部　服衣部　孝義産婦部　紙筆部　牒式部

外官事類目錄十一卷起自大寶元年盡于延曆廿二年、

從五位下行大學助兼越前權介中科宿禰巨都雄

第一職掌國郡神祇　第二寺僧尼大帳術役健兒　第三衛士仕丁事力交替調庸日功養物封戸　第四田圖田租地子損田義倉賑給　第五正稅雜稻　第六池溝交易春米例進物公廨朝使　第七四度使　第八飛驛工正倉官舍驛傳　第九下馬相撲器仗解由采女考課　第十郡司起請官牧貢蘇　第十一雜事

事抄九卷自延曆廿三年盡弘仁二年

第一朝儀外議禁斷　第二雜捕　第三考選上日　第四出身選叙叙位　第五位祿馬料同類　第六廳置任官官位　第七郡事　第八雜事　第九解由國忌公文式

次事抄五卷自弘仁三年盡天長元年

第一雜義彈事國忌　第二廳置郡事　第三雜捕　第四叙位歷限考選位祿季祿馬料　第五

新抄五卷自天長二年盡承和十五年六月十二日

第一雜儀擬使彈事軍事把笏歷限　第二雜捕　第三廳置郡事　第四季祿位祿馬料考事節祿解由　第五雜事

續新抄五卷自嘉祥元年盡貞觀三年

第一　第二　第三　第四　第五

第八　國郡部五十條、倉庫部廿八條、租稅部六十條、

第九　善政部十一條、貢擧部十六條、授位部廿九條、

第十　封田部六十五條

第十一　置官部五十二條

第十二　官位部十一條、考選部卅四條、上日部六條、位祿部五條、季祿部卅四條、

第十三　公廨、事力部六十五條、馬料部十二條、

第十四　祿法部十一條

第十五　要劇部八條、月料部十八條、朝儀部十七條、銓擬部廿七條、把笏服色國造部廿五條、出雲國十四條、諸國部十一條、氏上部三條、獻物部九條、

第十六　調庸部百廿條

第十七　糧食部百廿二條

第十八　義倉部七條、蠲免部廿六條、沽價部十七條、

第十九　交易部卅九條、年料部卅四條、舂米部十一條、出納部十三條、

第廿　事義部十二條、祥瑞部卅八條、

第廿一　產婦部五條、衣服部五條、紙筆部廿九條、服式部五條、賻勞部九條、

第廿二　交替部十九條、雜捕部六十一條、

第廿三　驛傳部五十八條、厩牧部卅六條、

第廿四　兵器部十五條、兵士防人部五十條、衛士仕丁部卅四條、器部廿七條、雜徭部廿三條、雜戶部九條、

第廿五　使事部十條

第廿六　蕃客部十一條、夷祿部廿四條、

第廿七　禁制部八十六條

第廿八　罪例部四條、刑法部十六條、審祿部

第廿九　贈官部卅六條、贈物部十八條、諫詞部三條、

第卅　雜部八十二條

事類者、續日本紀之雜例也、起文武天皇元年歲在丁酉、至聖朝延曆十年辛未、將一百世曆八朝、行事既多、綜緝稍廣、若夫事合書策、理關垂訓、則備加討論、裁之於紀、進諸秘府、以爲彝典、元會之禮、大嘗之儀、隣國入朝、朝廷出使、如此之類、別記備存、爲事頗多、不復於此、至如米鹽碎口簡牘常語、或文古朴而難解、或理蒙籠而不明、然而既經行用、事須司存、故全取本案、別成卷帙、以類相附、分易披尋、合卅卷、名曰官曹事類、藏之曹司、以備引閱、開卷而了、故事無訪、張純觸類而辨、朝章無待胡廣、疑議無滯、指掌有歸、其目如右、

延曆廿二年二月三日　　勘解由主典賀茂縣立長

左大辨兼左衞門督皇太子學士勘解由長官但馬守菅野朝臣眞道

左中辨兼左近衞少將阿波守秋篠朝臣安人

中巻 奏成選短冊式　賀茂祭日警固式　奏銓擬郡領式　五月五日馬射式　五月六日馬射式　七月七日相撲式　七月八日相撲式　九月九日菊花宴式　十一月一日進御暦式　十一月奏御宅田稲數式　十一月新嘗會式　十二月進御藥式　十二月大儺式

下巻 叙内親王以下式　任女官式　詔書式　任官式

內裏儀式一巻 兵部覆奏式　大萬歯傳　飛驛式　册命皇后式　册命皇太子式　齋內親王參入伊勢式　出雲國造奏神壽詞式　叙位式　衞府兵仗奏式　衞士交替式　告朔式　百官上賀表式　五位以上上表式　賜遣唐使節刀式　入唐使進節刀式　賜將軍節刀式　賜鑰并進式　行幸時鑰鈴并進式　少納言奉常奏式　六月奏御卜式　十二月同式　六月神今食祭式　十二月同式　六月御贖式　十二月同　九月十一日奉幣伊勢大神宮式　十二月別貢諸陵幣式　晦日進御麻式　正月朝拜天地四方屬星及山陵式

交替式二巻

上巻

下巻

新定內外官交替式一巻 貞觀年中勘解由使新定奏聞

內外官交替式 延喜廿一年正月廿五日勘解由使奏聞

新定讀式一巻 并序 式部大輔菅清公撰

左右撿非違使式一巻 貞觀十七年四月廿七日中納言南淵年名等撰進

古式廿巻

北堂有司式一巻

一雜

官曹事類目錄一部卅巻 延暦廿二年二月十三日左大辨菅野眞道等奏

第一 神事部六十八條　第二 齋王部上九十九條　第三 齋王部下九十九條　第四 佛事部百十六條

第五 齋會部八十三條　第六 驛傳部八條、國忌部廿三條、僧綱部廿四條、高僧部九條、　第七 供御部八十五條

司慶任紀伊國造儀 飛驛儀 固關使儀 驛傳儀 賜遣唐使節刀儀 遣唐使進節刀 儀 賜將軍節刀儀 將軍進節刀儀 奏年終斷罪儀 贈位記儀 舉哀儀 弔喪儀 刀

贈品位儀

延喜儀式一部十卷

第一　祈年祭儀 春日祭儀 大原野祭儀 園并韓神祭儀 釋奠講論儀 平野祭儀 松尾 祭儀 賀茂祭警固儀 同祭儀 奏御卜儀 月次祭儀 神今食儀 大殿祭儀

第二　踐祚大嘗祭儀上

第三　同祭儀中

第四　同祭儀下

第五　部位儀 讓國儀 立皇后儀 立皇太子儀 立皇太子加元服儀 任僧綱儀 叙內親王 以下儀 任參議已上儀 內裏任官儀 任女官儀 奏銓擬郡領儀 太政官廳叙任郡

領儀 太政官補任出雲國 遣儀 出雲國造奏壽詞儀

第六　元正朝賀儀 元日御豐樂院儀 禮服制儀 正月二日朝拜皇后儀 同日拜賀皇太子 儀 上卯日進御杖儀 正月七日儀 正月八日講最勝王經儀 同日賜女王祿儀 正

月十五日於宮內省進御薪儀 正月十六日踏歌儀 正月十七日觀射儀 同廿三日賜馬料儀

第七　二月十日申春夏季祿目錄儀 同日於太政官廳三省申考選目錄儀 同月十一日列見 成選主典已上儀 廿三日賜春夏季祿儀 廿五日授成選位記儀 廿八日牽駒儀 五

月五日觀騎射儀 五月六日儀

第八　七月廿五日相撲儀 八月十一日太政官考定儀 九月九日菊花宴儀 十一日奉伊勢 大神宮幣儀 十一月一日進御曆儀 中丑日奏御宅田稻數儀 鎮魂祭儀 新嘗祭儀

大歌并五節舞儀 二季晦日御贖儀 大祓儀 進御藥儀 奉 山陵幣儀 奏年終斷罪儀 十二月大儺儀 賜位記儀

第九　朝堂儀 告朔儀 五位已上上表儀 飛驛儀 固關使儀 驛傳儀 奏詔書儀 捺印 五位已上位記儀 少納言尋常奏儀 兵庫寮奏儀 賜進鈴儀 行幸時賜進鈴儀 百

官上賀表儀 衛府兵仗 奏儀 衛士交替儀

第十　賜將軍節刀儀 將軍進節刀儀 賜遣唐使節刀儀 遣唐使進節刀儀 渤海國使 進王啓并信物儀 賜渤海客饗儀 賜渤海客宴儀 舉哀儀 弔喪儀 贈品位儀

內裏式三卷

上卷　元正受群臣朝賀式并會 七日會式 八日賜女王祿式 上卯日獻卯杖式 十六日踏歌式 十七日觀射式

三月一日於兵庫寮試生等儀　四月七日奏成選短冊儀　四月十五日授成選位記儀

第七　四月廿八日牽駒儀　五月五日觀騎射儀　五月六日儀　七月廿五日相撲儀

第八　八月十一日太政官定考儀　九月九日菊花宴儀　十一月進御曆儀　十一月中丑日奏御宅田稻數儀　進御藥儀　奉山陵幣儀　奏年終斷罪儀　毀位記儀　擧哀儀　弔喪儀　贈品位儀　大儺

第九　朝堂儀　告朔儀　五位已上上表儀　飛驛儀　固關使儀　驛傳儀　奏詔書儀　捺印五位已上位記儀　少納言尋常奏儀　兵庫覆奏儀　賜進鑰儀　行幸時賜進鈴儀　百官上賀表儀　衞府兵仗奏儀　衞士交替儀

第十　賜將軍節刀儀　將軍進節刀儀　賜遣唐使節刀儀　遣唐使進節刀儀　渤海國使進王啓幷信物儀　賜渤海客饗儀　賜渤海客宴儀

貞觀儀式一部十卷

第一　祈年祭儀　春日祭儀　大原野祭儀　園幷韓神祭儀　平野祭儀　松尾祭儀　賀茂祭警固儀　同祭儀　奏御卜儀　神今食儀　大殿祭儀

第二　踐祚大嘗祭儀上

第三　同祭儀中

第四　同祭儀下

第五　正月八日講最勝王經儀　鎭魂祭儀　新嘗會儀　五節舞儀　二季晦日御贖儀　大祓儀　九月十一日奉伊勢大神宮幣儀　奏御卜儀　讓國儀　天皇即位儀　立皇后儀　立皇太子儀

第六　元正受朝賀儀　元日御豐樂院儀　禮服儀　上卯日獻御杖儀　正月二日朝拜皇后儀　二日拜賀皇太子儀

第七　正月七日儀　十六日踏歌儀　十七日觀射儀　二月上丁釋奠講論儀

第八　四月廿八日牽駒儀　五月五日節儀　同六日儀　相撲節儀　九月九日菊花節儀　正月八日叙內親王以下儀　同日賜女王祿儀　任官儀　任僧綱儀　任女官儀

第九　正月十五日於宮內省進御薪儀　同月廿二日賜馬料儀　二月十日於太政官廳申三省考選目錄儀　同月十一日列見成選主典已上儀　二月十日申春夏季祿目錄儀　二月廿二日賜季祿儀　朝堂儀　三月一日於鼓吹司試生等儀　四月一日奏成選短冊儀　四月十五日授成選位記儀　奏銓擬郡領儀　太政官讀補任郡領幷授位記儀

第十　八月十一日太政官廳官定考儀　十一月一日進御曆儀　同廿三日賜位祿儀　同月中巳奏御宅田稻數儀　奉頒山陵幣儀　進御藥儀　追儺儀　任出雲國造儀　太政官奏

第卅五　正親造酒　内膳園池
第卅六　采女主油　主水内掃
第卅七　彈正東西市　左右京
第卅八　六衞府
第卅九　左右近衞左右兵衞　左右衞門
第卅　左右雜事　馬寮　左右兵庫

貞觀式一部廿卷　貞觀十三年八月廿五日奏進

第一　神祇一
第二　神祇二
第三　神祇三神名上
第四　神祇四神名中
第五　神祇五神名下
第六　太政官
第七　中務中宮　内記大舍人　監物圖書　主鈴縫殿
第八　内藏内匠　陰陽典藥
第九　式部大學
第十　治部玄蕃　雅樂諸陵
第十一　民部
第十二　主計
第十三　主税
第十四　兵部刑部　造兵大藏　鼓吹織部　隼人
第十五　宮内大炊　大膳主殿　木工
第十六　典藥掃部
第十七　正親園池　内膳采女　造酒主水
第十八　彈正春宮　左右京勘解由　東西市
第十九　左右近衞左右馬　左右衞門左右兵庫　左右兵衞
第廿　雜

延喜式一部五十卷　延長五年十二月廿六日左大臣藤原忠平等奏進○中略

弘仁儀式一部十卷

第一　踐祚大嘗祭儀上
第二　踐祚大嘗祭儀中
第三　踐祚大嘗祭儀下
第四　卽位儀　讓國儀　立皇后儀　立皇太子儀　皇太子加元服儀　任僧綱儀　叙内親王已下儀　任參議已上儀　内裏任官儀　任女官儀　奏銓擬郡領儀　太政官廳叙任郡領儀　太政官廳任出雲國造儀　出雲國造奏壽詞儀
第五　正月七日儀　正月八日講最勝王經儀　正月八日賜女王祿儀　正月十五日於宮内省進薪儀　十六日踏歌儀　十七日觀射儀
第六　正月廿二日賜馬料儀　二月十日申春夏季祿目祿儀　二月十日於太政官廳申三省考還日錄儀　二月十一日列見成選主典已上儀　二月廿二日賜春夏季祿儀　賜位祿儀

第九兵部宮内　刑部彈正　大藏京職
第十雜
第十一臨時上
第十二臨時下

延喜格一部十卷并序十一卷　上起自貞觀十一年至于延喜七年凡卌九年延喜七年十一月十五日左大臣藤原時平等奏進

第一神祇中務
第二式部上
第三式部下
第四治部上
第五治部下
第六民部上
第七民部下
第八兵部
第九刑部彈正　大藏京職　宮内
第十雜臨時上　臨時下

已上三代格類聚已了

古格廿三卷

一式

弘仁式一部卌卷　弘仁十一年四月廿二日與格奏進

第一神祇一四時祭
第二神祇二臨時祭
第三神祇三大神宮
第四神祇四齋宮
第五神祇五踐祚大嘗祭
第六神祇六祝詞
第七神祇七神名一
第八神祇八神名二
第九神祇九神名三
第十神祇十神名四
第十一太政官
第十二中務主鈴　內記主鑰　監物
第十三中宮圖書　大舍人
第十四縫殿
第十五內藏
第十六陰陽
第十七內匠內藥
第十八式部上
第十九式部下
第廿大學散位
第廿一治部玄蕃　雅樂諸陵
第廿二民部
第廿三主計上
第廿四主計下
第廿五主稅上
第廿六主稅下
第廿七兵部
第廿八造兵隼人　鼓吹
第廿九刑部囚獄　判事
第卅大藏織部　掃部
第卅一宮內
第卅二大膳
第卅三木工主殿　大炊
第卅四典藥

養老二年與律撰作、天平勝寳九年五月廿一日勅令施行、延暦十一年六月又令施行、天長十年二月十五日右大臣清原夏野等奉勅撰義解、同年十二月又上表義解、承和元年十二月八日又令施行〇中略

令釋一部七卷 卅篇

第一 官位 職員 後宮職員 東宮職員 家令職員 神祇 僧尼

第二 戸 田 賦役 學

第三 選叙 繼嗣 考課 禄

第四 宮衛 軍防 儀制 衣服 營繕

第五 公式

第六 倉庫 厩牧 醫疾 假寧 喪葬 關市 捕亡

第七 獄 雜

令義解一部十卷 卅篇井序

天長十年二月十五日右大臣清原夏野等奏進〇中略

令廿二卷 天智天皇元年作近江令是也

令十一卷 大寶元年不比等大臣與律撰作

一 格

弘仁格一部十卷 十五篇井序

起自大寶元年迄于弘仁十年、凡一百十九年、弘仁十一年四月十一日大納言藤原冬嗣等奏進、

第一 神祇 中務　第二 式部上　第三 式部下　第四 治部

第五 民部上　第六 民部中　第七 民部下　第八 兵部

第九 刑部 大藏 宮内 彈正 京職　第十 雜

貞觀格一部十二卷 十八篇井序

上起弘仁十一年迄貞觀十年、凡卌九年、貞觀十一年四月十三日大納言藤原氏宗等奏進、

第一 神祇 中務　第二 式部上　第三 式部中　第四 式部下

第五 治部上　第六 治部下　第七 民部上　第八 民部下

第一名例　第二名例　第三名例　第四名例
第五名例　第六名例　第七衛禁　第八衛禁
第九職制　第十職制　第十一職制　第十二戶婚
第十三戶婚　第十四戶婚　第十五廐庫　第十六擅興
第十七賊盜　第十八賊盜　第十九賊盜　第廿賊盜
第廿一賊盜　第廿二鬪訟　第廿三鬪訟　第廿四鬪訟
第廿五詐僞　第廿六雜　第廿七雜　第廿八捕亡
第廿九斷獄　第卅斷獄

律疏一部卅卷

第一名例　第二名例　第三名例　第四名例
第五名例　第六名例　第七衛禁　第八衛禁
第九職制　第十職制　第十一職制　第十二戶婚
第十三戶婚　第十四戶婚　第十五廐庫　第十六擅興
第十七賊盜　第十八賊盜　第十九賊盜　第廿賊盜
第廿一鬪訟　第廿二鬪訟　第廿三鬪訟　第廿四鬪訟
第廿五詐僞　第廿六雜　第廿七雜　第廿八捕亡
第廿九斷獄　第卅斷獄

律六卷大寶元年不比等大臣與令竝作

一令

令一部十卷卅篇

裁判至要抄　一卷明法博士坂上明基撰　　令總記

朝筆要抄　一卷　　廷尉裝束抄　三卷

上古問答　一卷　　八十一例　同

六十一例　同　　十七箇條憲法　同上宮太子御撰

彈例　同　　問答五條

吏途抄　八卷　　斷罪抄

法家明句抄　　延久諸司實檢綸旨　三卷○中略

以仁和寺宮本書之、普廣院殿○足利義教被尋之時注文云々、此抄入道大納言實冬卿、密々所借賜之本也、

永正二年八月四日寫之　　師名在判

〔本朝法家文書目錄〕

一律

律一部十卷十三篇

元正天皇養老二年、贈太政大臣正一位藤原朝臣不比等奉勅作律令幷廿卷、天平勝寶九年五月廿日勅令施行、○中略

律附釋一部十卷

第一名例上　第二名例下　第三衞禁　第四職制

第五戶婚　第六廐庫擅興　第七賊盗　第八鬪訟

第九詐僞雜　第十捕亡斷獄

律集解一部卅卷

貞觀格　十二卷　大納言藤原氏宗奏進
類聚三代格　卅卷
天長格抄　卅卷　起延暦十一年盡後太上天皇十年
格後抄
弘仁式　卅卷　弘仁十一年奏進、大納言冬嗣撰、
延喜式　五十卷　延長五年左大臣忠平等奏進
貞觀儀式　十卷
內裏式　三卷　左大臣冬嗣等奉勅撰
儀式　十卷
交替式　二卷　延暦年中、勘解由使撰奏聞、
內外官交替式　延喜廿一年正月廿五日、勘解由使奏進、
左右撿非違使式　同　貞觀十七年四月廿七日、中納言南淵年名等撰進、
古式　廿卷
北堂有司式　一卷
廷尉式　同
法曹類林　二百卅卷　法曹勘文類集、加通憲今案、藤原通憲撰、
禁法略抄　一卷　右同
撿非違使至要抄　四卷
類聚撿非違使官府宣旨　廿卷
類聚律令刑官問答私記　一卷　惟宗允亮撰

延喜格　十二卷　左大臣藤原時平等奏進
古格　廿三卷
格後事類
貞觀式　廿卷　貞觀十三年奏進、右大臣氏宗公撰、
弘仁儀式　十二卷
延喜儀式　同
內裏儀式　一卷
新儀式　六卷
新定內外官交替式　貞觀年中、勘解由使新定奏聞、
新定酒式　一卷　并序、式部大輔菅清公撰、
親王儀式　二卷　延光編撰
藏人式　同　橘廣相撰
刪定律令問答　同　上中下、蓮華王院、
法曹至要抄　三卷　明法博士坂上明兼撰
撿非違使私記　五卷
類聚撿非違使私記　三卷
類聚判集　百卷
法意簡要抄　同

一諸雜事

類聚國史二百卷 始従日本紀至于仁和之雜事、無有遺漏、

これ等はみな臣下の必ず學ぶべき物どもなり、

〔本朝書籍目錄〕政要

和漢皇代記 各一卷　弘帝範 參議大江音人撰

日本事始 二卷 記天象地儀草木禽獸類日本始　事始略抄 一卷

別式 廿卷 神祇伯石川年足撰　民部省例 同 民部卿和氣清麿撰

政事要略 百三十卷 記公務交替國文紀彈雜事至要臨時雜事等、惟宗允亮撰、

柱下類林 三百六十卷 朝家有重事時、仰諸道博士被召勘文、或云仗儀類集成數卷、中原師安撰、

雜例抄 廿卷 或十三卷、大外記師重抄、　官曹事類目錄 卅二卷 延暦廿二年二月十三日

外記事類目錄 六十一卷 起自大寶元年盡于延暦二十二年　事抄 九卷 自延暦二十三年盡弘仁二十年

次事抄 五卷 自弘仁三年盡天長元年　新抄 同 自天長二年盡承和十五年六月十二日

續新抄 同 自嘉祥元年盡貞觀三年　擬潜夫論 一卷

十三箇條意見 同　律 養老二年 十卷

律附釋 同　同集解 三十卷 直本撰

律疏 同　律 大寶元年 六卷 不比等大臣與令並作、

令 養老二年 十卷 與律並作　令釋 七卷

令義解 十卷 右大臣夏野奏進　令 天智天皇元年 廿二卷 近江令是也

令集解 卅卷 直本撰　令 大寶元年 十一卷 不比等大臣與律並作、

三十卷抄 卅卷 兼明抄　弘仁格 十一卷 大納言藤原冬嗣等奏進

テ弘仁、貞觀延喜ノ三代ノ格ハ、皆官ニ隨ヒ類ヲ分チテ、神祇、中務、式部、治部等ト敍デタルヲ、後ニ類聚三代格ノ撰アリテ、更ニ此三代ノ格ヲ合セ、事ヲ以テ類聚シ、神事佛事等ト敍デ、三十卷トス、是格式編輯ノ大略ナリ、此餘ニ彈例、新彈例、八十一例、民部省例、刑部省例、天長格抄、官曹事類、外官事類、敍位略例、大同抄、撿非違使式、勘解由使勘判抄、政事要略、法曹類林、柱下類林等ノ諸書アリ、皆律令ヲ扶翼スル書ナリ、然レドモ今ハ多ク傳ハラズ、深ク惜ムベキコトナリ、又當時法制ヲ發シテ、其款目ヲ擧ゲザル者アリ、亦此篇ニ附載ス、而シテ警固式、行軍式ノ如キハ、兵事部ニ載セタリ、

〔紙江入楚桐壺〕いよ／＼みち／＼のざえをならはせ給

秘云、西宮記云、凡奉公之輩可設備文書、

一禮儀事　十一部

江都集禮百廿六卷　沿革禮十卷已上唐書　內裏式三卷　式曆

儀式十卷　年中行事　外記廳例　辨官記

敍位例　除目例

外記內記等ノ文書目錄

一政理事　十部

群書治要五十卷　貞觀政要十卷、已上唐書、但君臣之間事盡此書也、　諸司式延喜式五十卷

三代格各三十卷、今按或百十一卷、　天長格抄　官奏報申文例等　宣旨目錄

交替式三卷、但新式一卷、　勘解由使勘判例　新定酒式

一罪法事　三部

律十二卷　令十卷相涉政理方也　類聚撿非違使宣旨　勘糺事

抄シテ、交替式ト題シタル書アリシカド、政ヲ爲スニ不便ナルヲ以テ、更ニ撰ビタルナリ、是ハ詔勅官符律令ナドヲ雜へ載セテ、格式ノ體ヲ彙タル者ノ如シ、清和天皇ノ貞觀十年ニ至リ、更ニ内官ノ事ヲ併セ、内外交替式二卷ヲ修セリ、是モ勘解由使ノ奏スル所ナリ、醍醐天皇ノ延喜二十一年ニ、勘解由使又内外官交替式ヲ撰セリ、是ハ詔勅律令ヲ一項ノ文ニ改メ成シテ、全ク式ノ體ヲ成セリ、又嵯峨天皇ノ弘仁十二年ニ、右大臣藤原冬嗣等ニ詔シテ、内裏式三卷ヲ修定セシメ、恒例臨時ノ儀式ヲ載セタリ、又弘仁儀式十二卷、貞觀儀式十卷、延喜儀式十卷アリ、亦儀式ノ書ナリ、又弘仁十四年、修理算師山田福吉等ノ撰上セル功程式アリ、是ハ延喜ノ内匠木工ノ二式ノ如クナル者ナルベシ、以上ハ皆格式ノ餘流ニシテ、律令ト並ベ稱スベキ格式ニハアラズ、因テ桓武天皇ノ朝ニ、律令ハ是マデ頻リニ刊修セシカド、格式ハ未ダ編輯ノ擧ノアラザリシヲ以テ、左大臣藤原内麻呂等ニ詔シテ撰定セシム、不幸ニシテ天皇ノ崩御ニ遭テ、中ゴロ寢ミタリシガ、嵯峨天皇ノ弘仁十一年ニ、式四十卷、格十卷ヲ撰ビテ施行セリ、格ハ、大寶元年ヨリ弘仁十年マデノ詔勅官符ノ、後世ノ法ト爲ルベキ者ヲ集メ、式ハ、大寶元年以來ノ諸司ノ文案ヲ採リテ綴リ成セリ、何レモ大納言藤原冬嗣等ノ勅ヲ奉ジテ撰スル所ナリ、是ヲ格式ヲ撰スルノ始トス、清和天皇ノ貞觀十一年ニ、大納言藤原氏宗等ニ勅シテ、弘仁十一年ヨリ貞觀十年マデノ格ヲ集メテ、貞觀格十二卷ヲ撰バシメ、十三年ニ又氏宗等ニ勅シテ、弘仁式ノ足ラザル所ヲ補テ、貞觀ノ式二十卷ヲ撰バシメ、弘仁式ト並ベ行ハシム、醍醐天皇ノ延喜元年、左大臣藤原時平延喜格十卷ヲ上リ、七年ニ至リ、更ニ撰シテ十二卷ト爲シ、貞觀十一年ヨリ延喜七年マデノ格ヲ收ム、延長五年ニ、左大臣藤原忠平等、弘仁貞觀ノ二式ヲ合セ、延喜式五十卷ヲ撰ス、政事要略ナドニ、弘仁貞觀ノ二式ヲ載セタルヲ觀ルニ、延喜式ト異同アレバ延喜式ハ、二式ヲ併セテ更ニ改正刪補ヲ加ヘタルナルベシ、サ

シメタリ、嵯峨天皇ノ弘仁三年ニモ、令條ヲ刊改セシコトアリ、淳和天皇ノ天長三年ニ、額田今足ノ請ニ依リテ令律問答私記ヲ撰定セシメ、同十年ニ右大臣清原夏野等ニ勅シテ令義解ヲ撰バシム、此餘、令ノ注釋ニハ古クヨリ古記、釋、集解ナドノ著アリ、釋ト古記トハ集解ノ中ニ引ケリ、集解ハ惟宗直本ノ撰ナルヨシ本朝書籍目錄ニ見エタリ、律ニモ直本ノ著セル集解ト云ヘル書アリシヨシニテ、政事要略ニ引ケリ、右ハ律令修撰ノ大略ナリ、

格ハ、斷獄律ニ、斷罪須引律令格式正文トアレドモ、此時ニハ未ダ格モ式モナカリシナリ、又同律ニ、詔勅斷罪臨時處分、不為永格云々トアルト、獄令ニ、犯罪未發及已發未斷逢格改云々トアルトハ、其時ノ詔勅等ヲ云ヘルニテ、弘仁格ノ如キヲ云ヘルニハアラズ、元明天皇ノ和銅六年ニ、新格ヲ諸國ニ頒チシコトアリ、是モ從前ノ詔勅官符ナドヲ集メタルニハアラズシテ、新ニ定メラレタル者ナルベシ、孝謙天皇ノ天平寶字元年ノ勅ニ、選人依格結階ノ語アリ、是モ亦上ニ同ジカルベシ、桓武天皇ノ延暦十六年ニ、神王等ノ刪定セシ令格四十五條トアルハ、令條ヲ指シテ令格ト云ヘルナラン、式ハ、天武天皇ノ十年ニ、禁式九十二條ヲ立ツトアルハ、延喜ノ彈正式ノ如キモノニテ、禁制ノ一邊ニ就キテ設ケタル法ナルベシ、雜律ニ、違令者笞五十、別式者減一等トアリ、職制律ニ、稱律令式不便於事云々トアルモ、此類ナルベシ、神祇令ニ依別式トアリ、田令ニ依式給粮トアルモ、專ラ其一事ニ就キテノ程式ナルベシ、元明天皇ノ養老元年ニ、大計帳、四季帳、六年見丁帳、青苗簿、輸租帳等ノ式ヲ以テ、七道諸國ニ頒下ストアルモ、帳簿ノ書式ニテ、計帳ノ式ハ、延喜ノ主計式ニモアリ、租帳青苗簿ノ式ハ、主稅式ニモアリ、淳仁天皇ノ天平寶字三年ニ、中納言石川年足奏シテ別式ヲ作リ、律令ト並ベ行ハント請ヒ、各其政ヲ本司ニ繫ケテ二十卷ト成シタリ、桓武天皇ノ延暦二十二年ニ勘解由使ヨリ諸國司交替式一卷ヲ撰進セリ、是ヨリ前ニ、或人私ニ古來ノ勅書官符省例問答等ヲ

古事類苑

法律部二

上編

政書

我國中古ヨリ隋唐ノ制ニ循ヒ、法度ヲ定メ、律令格式ノ四箇ノ書ヲ造レリ、律ハ罪人ヲ罰スル法ナリ、令ハ天下ノ制度ナリ、格ハ臨時ノ制ヲ集メテ、有司ノ參考ニ備フルナリ、式ハ有司ノ心得書ナリ、何レモ治國ノ要書ナリ、推古天皇ノ十二年ニ、厩戸皇太子親ラ憲法十七條ヲ作レリ、是ハ我國制法ノ始ナレドモ、細ニ其書ヲ觀ルニ、多ク教訓ノ言ヲ雜ヘテ、竟ニ律令ノ比ニハアラザルナリ、天智天皇ノ朝ニ至リテ、始メテ令ノ撰アリ、此令ヲ後ニ近江令ト稱シテ、二十二卷アリ、天武天皇ノ十年ニ、律令ヲ定メ法式ヲ改メンタメニ、人ヲ分チテ行ハシムトアルハ、天智天皇ノ令ヲ刊修セシニテ、持統天皇ノ三年ニ、諸司ニ令一部二十二卷ヲ班チ賜ヒシハ、此刊修ノ令ヲ班チシナリ、其後文武天皇ノ四年ニ、淨大參刑部親王、直廣壹藤原不比等等ニ勅シテ律令ヲ撰定セシメ、大寶元年ニ至リテ成レリ、律六卷令十一卷アリ、是ヲ大寶律大寶令ト稱ス、元正天皇ノ養老二年ニ至リ、更ニ不比等等ノ諸人ニ勅シ刊修セシム、律十卷十二篇、令十卷三十篇トス、是ヲ養老刊修ノ律令ト云ヒ、或ハ大寶令ヲ古令前令ト云フニ對シ、是ヲ新令今令ト稱ス、世ニ今行ハルヽ者是ナリ、此後ニモ右大臣吉備眞備、大和國造大和長岡等、律令ノ中ニテ二十四條ヲ删定セシヲ、桓武天皇ノ延暦十年ニ至リテ行ヒ用キ、大納言神王等ノ奏スル所ノ删定令格四十五條ヲ、同十六年ニ至リテ、有司ニ下シテ遵用セ

古事類苑

法律部二

上編

政書

若乞索之贓、並還主、(強乞索、和乞索、得罪雖殊、贓合還主、稱坐者、從取與不和以下、並徵還主、)

〔法曹至要抄 中 雜事〕一和與物不悔還事

案之、舊病馬牛之類、雖有變易之期、不限親疎、和與之財、全無悔還之法、只以一與之狀、可爲萬與之驗矣、

乞索贓

〔令義解 九 捕亡〕凡糺捉盜賊者、(謂糺告及捕捉、其糺告親屬、律有科條、即有糺告者、既是犯罪之人、不在賞限、凡告言得罪者、皆不可賞也、)所徵倍贓、(謂依獄令、應徵正贓、無財以備者、官役折庸、若所徵倍贓、無財以備者、理合放免、不可役身也、)皆賞糺捉之人、家貧無財可徵、及依法不合徵倍贓者、(謂會赦之類、依律免徵也、)並計所得正贓、(謂假如盜布十端、糺告之日、五端見在者、唯據見在爲分之類、即全無正贓者、不可復與賞也、)準爲五分、以二分賞糺捉人、即官人非因撿挍而別糺捉、(謂官司於其所部、非因撿挍、而別自糺捉者、若擒捕竊盜、仍得盜贓者、其事相因、不合與賞、其非所部官司者、一同凡人之例、不依官司之法、)并共盜、及知情主人首告者、亦依賞例、

〔律疏 職制〕凡因官挾勢、及豪強之人、乞索者、坐贓論減一等、將以送者爲從、(謂或有因官人之威、挾恃形勢、及鄉閭首望、豪右之人、乞索財物者、皆累倍所乞之財、坐贓論減一等、若強乞索者、加二等、)親故相與者勿論、(親、謂內外五等以上親、若三等以上婚姻之家、故、謂素是通家、或欽風若舊、車馬不吝、縞紵相貽之類者、)

〔法曹至要抄 上 罪科〕一乞索事

案之、假令鄉閭有勢之人、除親故之外、乞取財物、計贓坐贓論減一等、若強乞取者、可加二等、但與財之人、減五等可科斷、物即可還主、

〔日本紀略 八 花山〕寬和二年四月廿八日丙寅、遣左少史曰佐政文以下、令撿封撿非違使左衞門尉藤原爲長等運上物、是爲勘糺備前國鹿田莊濫吹事下遣之處、所徵取雜物之由及天聽也、

評贓

〔政事要略 八十一〕雜律、市司評物價條云、其爲罪人評贓不實、致罪有出入者、以出入人罪論、

〔延喜式 二十九 刑部〕凡平贓布者、長五丈二尺、廣二尺四寸爲端、

〔唐律疏議 四 名例〕諸平贓者、皆據犯處當時物價及上絹估、(○疏議略)平功庸者、計一人一日爲絹三尺、牛馬駝騾驢車亦同、(○疏議略)其船及碾磑邸店之類、亦依犯時賃直、(○疏議略)庸賃雖多、各不得過其本價、

私借官物

〔政事要略 五十九〕廐庫律云、監臨主守、以官物私自貸、若貸人及貸之者、無文記以盜論、有文記準盜論減二等、立判案者勿論、所貸之人、不能備償者、徵判署之官、

〔延喜式 五十雜〕凡監臨主守、以官物私自貸、若貸人、所貸之人、不能備償及身死者、並徵判署之人、卽判署亦死後免、

〔唐律疏議 十五廐庫〕諸監臨主守之官、以官物私自借、若借人及借之者、笞五十、過十日、坐贓論減二等、

〔律疏 職制〕凡主司私借乘輿服御物、若借人及借之者、徒二年、謂乘輿服御物、主司持護修整、常須如法、若有私借、或將借人、及借之者、各徒二年、非服而御之物、杖一百、在司服用者、各減一等、謂雖非自借及借人、在司服用者、服御物徒二年上減、非服而御、杖一百上減、故云各減一等、非服而御、謂帷帳几杖之屬、之屬者、謂筆硯書史及器玩等、是非服之物、色類既多、

〔類聚三代格 十二〕勅於圖書寮所藏佛像、及内外典籍書法、屏風障子、幷雜圖繪等類、一物已上、自今以後、不得輙借親王以下及庶人、若不奏聞私借者、本司科違勅罪、

神龜五年九月六日

〔政事要略 七十〕廐庫律云、監臨主守、以官奴婢及畜產私自借、若借人及借之者笞卅、謂監臨主守之官、以所監臨官奴婢及畜產私自借、謂身自借用、若轉借他人、及借之者、或一人一畜、但借卽笞卅、計庸重者、以受所監臨財物論、或借數少而日多、或借數多而日少、計庸重於借罪者、以受所監臨財物論、其車船碾磑邸店之類、有私自借、若借人及借之者、亦計庸賃、各與奴婢畜產同、律雖無文、所犯相類、輙準律監臨之官、借所監臨及牛馬車船邸店碾磑、各計庸賃、以受所監臨財物論、計借車船碾磑之類、理與借畜產不殊、故附此條、準例爲坐、借驛馬加二等、計庸重者從上法、

〔律疏 名例〕凡彼此俱罪之贓、謂計贓爲罪者、受財枉法、不枉法、及受所監臨之財物、并坐贓罪、依注與財者、亦各得罪、此名彼此俱罪之贓、計贓爲罪者、及犯禁之物則沒官、謂鼓吹幡幟、及禁書璽印之類、私家不應有者、是名犯禁之物、從彼此俱罪之贓以下、並沒官、若盜人所盜之物、倍贓亦沒官、假有乙盜甲物、卽丙、下同、轉盜之、彼此各有倍贓、依法並應還主、甲既取乙倍備、不合更得餘贓、乙卽元是盜人、不可以贓助盜、故倍贓亦沒官、若有糺告之人應賞者、依令與賞、若私鑄錢事發、所獲作具、及錢銅、或違法殺牛馬等肉、如此之類、律令無文者、其肉及錢、私家合有、準如律令不合沒官、作具及錢、不得仍用、毀訖付主、罪依法科、取與不和、謂恐喝詐欺、強市有乘利、強率斂之類、雖和與者無罪、謂去官而受舊官屬士庶饋與、或和率斂、或監臨官司和市有乘利、(強市有乘利下、脫強率斂之類至和市有乘利註及疏文、今依金澤本而補)、或雇人而告他罪得實、但是不應取財而取與者、無罪皆是、

彼此俱罪贓
倍贓
取與不和贓

然後更付使局令奏、其餘徵物奪祿等、皆如舊例、省宜承知依宜行之者、使宜承知者、謹案符旨、犯用是自犯官物之名、借貸自借官物、亦借於人之謂也、勅之所指、在此等色、今擬移送所犯之由、上件三事、欲載移文、頗有疑殆、進退之間、若為處分者、左大臣宣、依件行之者、使宜承知依宜行之者、使須依符旨勸行事、而立制以來、未有移斷、懈緩之漸、犯法者衆、今撿年來不與前司解由狀等所注載、國儲過用、自借判署、不動動用穀穎稻等、費用之數、目色〇目色恐色目誤巨多、然而遷代之吏、未塡欠負、偏進解由、皆被叙用、名實相違、不可不申、夫事有弛張、政貴簡要、若不令知此炯誡、造次超行若結怨、恐昨日預爵級、今日陷罪科、望請件二箇條雜事、重被下知諸國、自今而後、有違犯者、具注其狀移斷刑官、雖不救既往之弊、永以為將來之勸者、從三位大納言兼行民部卿中宮大夫平朝臣伊望同宣、奉勅依請者、

以前條事如右、諸國承知、依宜行之、符到奉行、

右少辨正五位下兼行文章博士伊與介大江朝臣　　外從五位下行左大史尾張宿禰

天慶二年二月十五日

【律疏賊盜】凡以私財物奴婢畜產之類、碾磑邸店莊宅車船、色類至多、故云之類、餘條不別顯奴婢者、與畜產財物同、謂反逆條中稱貲財並沒官、不顯奴婢畜產、又廄庫律、驗畜產不以實者、一笞卅、即無驗奴婢之文、若驗不實者、亦同驗畜產之法、故云餘條不別顯奴婢者、與畜產財物同、貿易官物者、計其等准盜論、謂將私馬貿易官馬、其馬各直布五端、其價雖等、仍准盜論、合徒一年、官物賤、亦如之、謂私馬直布十端、博官馬直五端、亦徒一年、計所利以盜論、謂以私物直布一端、貿易官物直布四端、即一端是等合准盜論、杖六十、三端是利以盜論、合杖八十、有倍贓、既累併者、皆將以盜累於准盜論、加罪之類、除免、倍贓、各盡本法、其貿易奴婢、計贓重於和誘者、同和誘法、假有以私奴婢直布卅端、貿易官奴婢直布七十端、即是計利五十端、合加役流、以本條和誘奴婢、罪止中流、即於此條貿易、不可更重、故云同和誘法、

【三代實錄三清和】貞觀元年十二月廿七日戊申、太政官論奏言、〇中略前左馬權少允正六位上淸岑朝臣田繼、少允從六位上紀朝臣令名、少屬正六位上安倍朝臣有之、從六位上麻績部淸道、史生從六位上田邊史宅主、騎士金廣主、恩智貞吉等、以私馬換官馬、省亦無所考訊、皆以赦免、〇中略須詳加覆案者也、帝特降優詔曰、〇中略左馬寮官人等所犯、年遷時變、人物改易、〇中略宜申優典、並從原宥、〇下略

者、錄下刑官人者〇人者二字恐令字誤斷其罪者、左大臣宣、奉勅依請、其且徵物役身、亦依太政官弘仁十三年八月廿五日符行之、不與解由狀、或皆名交替欠不顯欠失細由、事涉諂詐、科附乖實、宜欠損犯用色目、具錄載申、不得隱漏、

天長二年五月廿七日

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁斷諸國綱領奸犯所領官物事

右左大臣宣、奉勅監臨犯物、罪科非輕、事明法條、人亦忌憚、如聞比年諸國綱領、各爲奸犯、或贖勞出身、空歸國郡、或買宅定居、便留京都、其所充用、皆是官物、國用之乏、職此之由、宜下知諸國、嚴加撿察、若有斯類、捉身言上、處之重科、斷彼奸徒、

寬平三年九月十一日〇又見政事要略

〔政事要略五十九〕太政官符五畿內七道諸國司

雜事三箇條

一應下知諸國、後移刑官、令斷罪前司犯用官物三箇條事

國儲過用　置未納受用公廨　無實不動用穀穎糒等

右同前解勘解由使偁、謹撿案內、件三箇條事、太政官去延喜七年七月七日下使符偁、去延喜四年三月廿三日言上解偁、太政官去昌泰三年八月十六日符偁、太政官寬平六年十一月卅日下刑部省符偁、未得解由內外官人、犯用借貸、可依法斷罪、天長二年五月廿七日式條已立、而垂制之後、寬縱不行、官物減耗、大概由斯、今諸國不與解由狀所載負累、彼此不同、或欠失千計、物既入己、或無實萬數、皆在民身、尋其犯過、輕重相殊、而俱拘解由、不許叙用、論之公途、實乖折中、左大臣宣、奉勅宜仰所司、依式行之、令彼負累之倫自知廉恥之節者、事須內外諸司所申不與解由狀、勘解由使勘判訖、彼省待使局送以斷其犯、

科、

延暦十七年十月十九日（○又見類聚國史、政事要略、）

〔新定内外官交替式下〕應徵免前司犯用欠損官物事

右獄令云、應徵官物者、准直五十端以上一百日、卅端以上五十日、廿端以上卅日、不滿廿端以下廿日、若無財以備者、官役折庸、其物雖多、限止五年者、被右大臣宣偁、奉勅諸國司等遷代之時、受領之日、雖奏欠物之狀、未聞塡納之詞、濟政之道、何無終始、宜特加科責、不得更然、但徵物之法、其程差役、增加日數、令堪辨備者、凡國司等不存法令、令致此怠、口靜言其由、寔須徵嘖、何者在任之吏、只拘解由、無意徵物、去職之人、自推難塡、不愁拘留、官倉罄空、職此之由、今須交替之日、勘定前司犯用欠負損失之物、隨即徵物役身、勿更延引、但有所執者、待報符到、始立徵限、然令文云、五十端以上百日、既稱以上、無有其限、欠物雖多、其期百日、物則雖塡、罪則易科、仍加寛恕、隨物增日、五十端以上二百日、一百端以上三百日、二百端以上四百日、三百端以上五百日、四百端以上六百日、五百端以上七百日、不滿（○不滿下、延暦交替式有五十端三字、）以下、自依常例、物塡役了、乃聽放還、如有習常以致闕怠、科違勅罪、不聽減贖、遷代之官拘解由、其徵收物數、役身功程、每年附稅帳使言上、

弘仁十三年八月廿五日（○又見類聚三代格、）

〔政事要略五十九〕交替式云、太政官符、未得解由内外官人、犯用借貸、依法科罪事、

右勘解由使起請偁、太政官延暦四年七月廿四日謄勅符偁、夫正稅者、國家之資、水旱之備也、而比年國司、苟貪利潤、費用者衆、官物減耗、倉庫不實、職此之由、自今以後、嚴加禁止、其國司如有一人犯用、餘官同坐、並解見任、永不敍用、贓物令共塡納、遞相撿察、勿爲違犯、又交替式云、欠負官倉、留連不付、及知情許容、限内無領者、依法科罪、卽徵其贓者、今撿格式犯用之輩、事疑之日、卽須論罪、而頃年之間、偏拘解由、不論其罪、事涉疎漏、違犯不絕、大概由斯、望請内外諸司所申、不與解由狀内、若其借貸犯用之徒

犯用官物

〔日本後紀嵯峨二十四〕弘仁六年二月辛亥、越中國介正六位上大伴宿禰黒成、掾正六位上多治比眞人清雄、少目從七位下和邇部臣眞嗣等免、以盜官物也、其守從五位上藤原朝臣鷹養、大目正六位上上村主乎加豆良、以身卒死勿論其罪、

〔類聚三代格十二〕太政官符

禁斷犯用官物事

右被右大臣宣偁、奉勅夫正税者、國家之貲、水旱之備也、而比年國司、苟貪利潤、費用者衆、官物減耗、倉廩不實、職此之由、宜自今以後、嚴加禁止、其國司如有一人犯用、餘官同坐、並解見任、永不敍用、贓物令共塡納、不在免死逢赦之限、遞相撿察、勿爲違犯、其郡司和許、亦同國司、

延暦四年七月廿四日〇又見日本紀略

〔類聚三代格十二〕太政官符

一禁犯用官物名公文乘事

右田租地子、出納有限、正税雜用、色數非一、如聞奸吏之輩、不憚憲章、心挾貪濁、競事截留、至有剩徵田租過取地子、割取物直、折減糧貨、贓汚多端、積習無悛、不設科條、何以懲肅、其來年正月以後、若有犯者、計贓科罪、一同隱截出擧之坐、解却見任、永不敍用、

一禁官交易物失時致損事

右時物有貴賤、充價異高下、夏絁秋穀、色類既多、如聞諸國交易、先立沽價、貴時强與賤價、賤時詐注貴直、遂事割截、枉規利潤、蠹民害政、莫甚於斯、宜改前過、不得重犯、仍候物賤之時、充和市之價、依實申官、不得奸截、如有不悛、罪同上條、

以前被右大臣宣偁、奉勅凡厥具僚、並應簡擇、既居祿位、理合清勤、或有情殉贓私、多違憲法、頻經誡勵、未聞悛懲、泣辜之仁、雖則切於解網、刑故之典、誠不獲已、而爲宜懸勸誨喩、各令自勗、如猶違犯、必處重

坐贓

乞物、借貸役使、賣買有乘利之屬上者、各減官人身自犯二等、官人知情與同罪、不知情者、各減家口罪五等、（謂官人知情者、與家口同罪、其不知情者、各減家口罪五等、謂准身自犯、得減七等、）其在官非監臨、（謂里長坊長坊令者、有掌之屬、此爲在官非監臨、）及家口有犯者、各減監臨及監臨家口一等、

〔法曹至要抄上罪科〕一枉法、不枉法、受所監臨坐贓事、

雜律云、坐贓致罪者、一尺笞十、一端加一等、十二端徒一年、十二端加一等、罪止徒三年、與者減五等、注云、謂非監臨主司、因事受財者、

案之、坐贓致罪、假如被人侵損、備償之外、因而受財之類、兩和取與、於法並違、故與者減罪五等、

監守盜

〔唐律疏議十九賊盜〕諸監臨主守自盜、及盜所監臨財物者、（若親王財物、而監守自盜亦同、）加凡盜二等、三十疋絞、（本條已有加者、亦累加之、）

〔日本書紀三十持統〕七年四月辛巳、詔內藏寮允大伴男人、坐贓降位二階、解見任官、典鑰置始多久與菟野大伴、亦坐贓降位一階、解見任官、監物巨勢邑治、雖物不入於己、知情令盜之故降位二階、解見任官、然置始多久、有勤勞於壬申年役之故赦之、但贓者依律徵納、

〔續日本紀九元正〕養老六年四月庚寅、詔曰、周防國前守從五位上山田史御方、監臨犯盜、理合除免、先經恩降、赦罪已訖、然依法備贓、家無尺布、朕念御方負笈遠方、遊學蕃國、歸朝之後、傳授生徒、而文館學頗解屬文、誠以不矜若人、蓋墮斯道歟、宜特加恩寵、勿使徵贓焉、

〔類聚國史八十七刑法〕延曆十二年三月己酉、正親大令史正六位上多治比眞人彌高、散位從六位上櫻島部石守、並除名、以彌高監主取官物、石守投匿名書也、

〔類聚國史八十四政理〕延曆十四年閏七月丁未、武藏國司介從五位下勳六等都努朝臣筑紫麻呂云々等、並免官、以隱截官物也、

〔類聚國史八十四政理〕延曆二十一年正月戊寅、免常陸國前司守從四位下勳三等三諸朝臣大原等、隱截稻廿一萬六千九十束、

不同、若年十七以上、六十九以下犯罪、徒役其身、庸依丁例、其十六以下、七十以上、及癈疾既不任徒役、庸力合減正丁、宜准當時當鄉庸作之價、若准價不充布二尺六寸、即依減價計贓科罪、其價不減者、還依丁例、即役使非供己者、謂在公家應使者、計庸坐贓論、罪止杖一百、其應供己驅使而收庸直者、罪亦如之、謂止合供身驅使、據法不合收庸、而收庸直、亦坐贓論、罪止杖一百、故云亦如之、供己求輸庸直者不坐、謂有公案者不坐、若有吉凶、借使所監臨者、不得過卌人、每人不得過五日、每人者、指所借使之人、雖使數滿卌人、若於一身借使過五日、即罪監臨之官、吉謂祭祀、凶謂喪葬、或舉哀及疾病之類、聽許借使監臨部內所使總數不得過卌人、每人不得過五日、其於親屬、雖過限及受饋乞貸、皆勿論、謂親屬別於數限外驅使、及受饋餉財物飲食、或有乞貸、皆勿論、親屬謂五等以上、及三等以上婚姻之家、謂並通受饋餉借貸役使、依法無罪、餘條親屬准此、謂一部律內稱親屬、悉據五等以上、及三等以上婚姻之家、故云准此、

〔律疏職制〕凡監臨之官、強取猪鹿之類者、依強取監臨財物法、謂監臨之官、於所部內強取禽獸酒食蔬菓之類者、計贓准枉法論、及乞取者坐贓論、謂計其所直坐贓論、受供饋者勿論、謂非強乞取、而自供饋者、

〔律疏職制〕凡率斂所監臨財物饋遺人者、雖不入己、以受所監臨財物論、謂率人斂物、或以身率人、以取財物饋遺人者、雖不入己、併借以受所監臨財物論、若自入者、同乞取法、既是率斂之物、與者不合有罪、其物還主、

〔律疏職制〕凡貸所監臨財物者坐贓論、謂監臨之官、於所部貸財物、若百日不還、以受所監臨財物論、謂爲其淹日不償、以受所監臨財物論、強者各加二等、謂以威若力而強貸者、百日內坐贓論、加二等、滿百日外、從受所監臨財物上加二等、餘條強者准此、謂如下條私役使、及借牛馬之類、強者各加二等、但一部律內、本條無強取罪名、並加二等、故於此立例、所貸之物、元非擬將入己、雖經恩免罪、物尚徵還、縱不經恩、償訖事發、亦不合罪、爲貸時本許酬償、不同悔過還主故也、若所受之贓、悔過仍減三等、恩前費用、准法不徵、貸者赦後仍徵、償訖故聽免罪、若賣買有乘利者、計利以乞取監臨財物論、謂官人於所部、賣物及買物、計時估有乘利者、強市者笞五十、謂以威若力強買物者、雖後償價、猶笞五十、有乘利者、計利准枉法論、謂假有官人遣人、或市司、而爲市易、所遣之人及市司、爲官人賣買、有乘利、官人不知乘利之情、不合得罪、依律、犯時不知、依凡論、故也、所爲市者、雖不入己、既有乘利、或強賣買、不得無罪、合從不應得爲准官人應坐之罪、百杖以下、所市之人、從輕笞卌、徒罪以上、從重杖八十、仍不得重於官人知情應得之罪、若市易已訖、官人知情、准家人所犯知情之法、即斷契有數、違負不還、過五十日、以受所監臨財物論、謂官人於所部市易、斷契有數、仍有欠物、違負不還、五十日以下、依雜律、科負債違契不償之罪、若滿五十日、以受所監臨財物論、即借衣服器翫之屬、經卌日不還者、坐贓論、罪止徒一年、謂衣服器物、只類至多、不可具舉、故云之屬、借經卌日不還者坐贓論、罪止徒一年、所借之物各還主、

〔律疏職制〕凡監臨官家口、於所部有受乞借貸、役使賣買、有乘利之屬、各減官人罪二等、謂監臨官家口、於部內有受財、

府史家口、及於府史家內取財、或折衝府官人、唯管衞士、若姦衞士家口、及於衞士家內取財、皆同監臨之法、內外不管家口之司、姦及取財、皆準此、

問曰、假有主帥、於所部衞士家盜物、得同於監臨內取財以否、

答曰、主帥於所部衞士、統攝一身、旣非取受之財盜、乃律文不攝、止同常盜、不是監臨、

稱主守者、躬親保典爲主守、雖職非統典、臨時監主亦是、

疏議曰、主司、謂行案典吏、專主掌其事、及守當倉庫獄囚雜物之類、其職非統典者、謂非管攝之司、臨時被遣監主者亦是、

〔日本書紀孝德二十五〕大化元年八月庚子、詔國司等曰、〇中略介以上奉法必須褒賞、違法當降爵位、判官以下取他貨賂、二倍徵之、遂以輕重科罪、

〔續日本紀聖武九〕神龜元年十月乙卯、散位從五位下息長眞人臣足、任出雲按察使、時黷貨狼藉、惡其景迹、奪位祿焉、

〔日本後紀平城十七〕大同四年三月丁未、前上總介石川朝臣道成、大掾千葉國造大私部直善人、並授本位、道成從五位下、善人外從五位下、在任之日、贓汙狼藉、並追位記、矜有其老舊之勞、故忖復焉、

受舊官屬饋與

〔律疏職制〕凡去官、而受舊官屬士庶饋與、若乞取借貸之屬、各減在官時三等、舊官屬、謂前任所僚佐、士庶、謂所管部人、受其饋送財物、若假借賣買、有乘利、役使之類、各減在官時三等、謂家口未離本任所者、若其乞索者、從因官挾勢乞索之法、謂若家口去訖、受饋餉者、律無罪名、

於使所受送遺

〔律疏職制〕凡官人因使、於使所受送遺、及乞取者、與監臨同、謂官人因使、於所使之處、受送遺財物、或自乞取者、計贓準罪、與監臨官同、經過處取者減一等、謂非所詣之處、因使經歷之所々、〔所々唐律疏議作所一字〕而取財者、所糺彈之官不減、謂糺彈之官、人所畏懼、雖經過之處、而受送遺、乞取及強乞取者、各與監臨之罪同、

私用所監臨財物

〔律疏職制〕凡監臨之官、私役使所監臨、及借奴婢牛馬車船碾磑邸店之類、各計庸賃、以受所監臨財物論、謂監臨之官、私役使所部之人、及從所部借奴婢牛馬之類、稱奴婢者、家人亦同、各計庸賃、人畜車計庸、船以下準賃、以受所監臨財物論、強者加二等、其借使人功、計庸一日布二尺六寸、人有強弱、力役

受所監臨贓

者各杖一百、謂曲法之事已行、主司及請求之者、各杖一百、本罪仍在、所枉罪重者、主司以出入人罪論、謂所司得囑請、枉曲斷事、重於一百杖者、主司得出入人罪論、假如先是一年徒罪、囑請免徒、主司得出入徒罪、還得一年徒坐、他人及親屬、爲請求、減主司罪三等、謂若他人及親屬、爲囑請、免徒一年、減主司罪三等、唯合杖八十、此則減罪輕於已施行杖一百、如此之類、皆依杖一百科之、若他人親屬等囑請徒二年半罪、主司曲爲斷免者、他人等減三等、仍合徒一年、如此之類、減罪重於杖一百者、皆從減科、自請求者、加本罪一等、謂身自請求、而得枉法者、各加所請求罪一等科之、卽監臨勢要者、雖官卑亦同、謂除監臨以外、但是官人、不限官位高下、唯據主司、畏懼不敢乖違者、爲人囑請者杖一百、謂爲人囑請、曲法者、無問行與不行、許與不許、但囑卽合杖一百、主司許者、笞五十、所枉重者、罪與主司同、謂所枉重於杖一百、與主司出入坐、同、至死減一等、謂主司據法合死者、監臨勢要減死一等、

〔律疏職制〕凡監臨之官、受所監臨財物者、一尺笞廿、一端加一等、十端徒一年、十端加一等、七十端近流、謂監臨之官、不因公事、而受監臨內財物者、與者減五等、罪止杖一百、乞取者加一等、謂非財主自與、而官人從乞者、加受所監臨罪一等、強乞取者、准枉法論、謂以威若力、強乞取者、其因得餉送、而更強乞取、既是一事、分爲二罪、以重法併滿輕法、若是頻犯、及二人以上之物、仍合罪併倍論、

〔唐律疏議名例六〕諸稱監臨者、統攝案驗爲監臨、謂州縣鎭戍折衝府等判官以上、各於所部之內、總爲監臨、自餘唯據臨統本司、及有所案驗者、卽臨統其身、而不管家口者、姦及取財、亦同監臨之例、

疏議曰、統攝者、謂內外諸司長官、統攝所部者、案驗、謂諸司判官、判斷其事者是也、

注、謂州縣鎭戍折衝府等判官以上、各於所部之內、總爲監臨、

疏議曰、此謂州縣鎭戍折衝府等判官以上、雖有曹務職掌不同、但於部內、總爲監臨之例、鎭戍折衝府、唯統攝身、不管家口、議於部內寄住、及權居止典販等、有文簿名歷在州縣者、卽爲監臨、其百姓雖不附籍帳、亦同監臨之例、

注、自餘唯據臨統本司、及有所案驗者、卽臨統其身、而不管家口者、姦及取財、亦同監臨之例、

疏議曰、自餘爲除州縣鎭戍折衝府以外百司總是、若省臺寺監及諸衞等、各於臨統本司之內、名挂本司者、並爲監臨、若是來參事者、是爲案驗、尙書省雖管州府、文案若無關涉、不得常爲監臨、內外諸司皆準此、卽臨統其身、而不管家口者、姦及取財、亦同監臨之例、假若諸衞管府史身、官司姦

〔令集解 賦二十三〕名例律、會赦及降者、盜詐枉法、猶徵正贓、餘贓非見在、及收贖之物、限內未送者、並從赦降原、

強盜贓

〔律疏 賊盜〕凡強盜、謂以威若力而取其財、先強後盜、先盜後強等、若與人藥酒及食、使狂亂取財亦是、即得闌遺之物、毆擊財主而不還、及竊盜發覺、弃財逃走、財主追捕、因相拒捍、如此之類、事有因緣者、非強盜、略○註不得財徒二年、一尺徒三年、二端加一等、十五端及傷人者絞、殺人者斬、殺傷奴婢亦同、雖非財主、但因盜殺傷皆是、略○註其持仗者、雖不得財遠流、十端絞、傷人者斬、

竊盜贓

〔律疏 賊盜〕凡竊盜、不得財笞五十、一尺杖六十、一端加一等、五端徒一年、五端加一等、五十端加役流、

枉法贓　不枉法贓

〔律疏 職制〕凡監臨之官、受財而枉法者、一尺杖八十、二端加一等、卅端絞、謂受有事人財、而為曲法處斷者、不枉法者、一尺杖七十、三端加一等、卅端加役流、謂雖受有事人財、判斷不為曲法者、

事後受財

〔律疏 職制〕凡有事先不許財、事過之後而受財者、事若枉、准枉法論、事不枉者、以受所監臨財物論、謂官司推勘之時、有事者先不許物、事了之後而受財者、事若曲法、准前條枉法科罪、既稱准枉法、不在除免加役流之例、若當時處斷不違正理、事過之後而與之財者、即以受所監臨財物論、

以財行求

〔律疏 職制〕凡有事以財行求、得枉法者、坐贓論、不枉法者減二等、謂雖以財行求、官人不為曲判、減坐贓二等、即同事共與者、首則併贓論、從者依己分法、謂數人同犯一事、歛財共與、元謀歛者併贓為首、其從而出財者、依己分為從、

〔律疏 職制〕凡受人財而為請求者、坐贓論加二等、謂非監臨之官、監臨勢要准枉法論、與財者、坐贓論減三等、謂若受他人之財、許為囑請、未囑事發者、止從坐贓之罪、若無心囑請、詭妄受財、自依詐欺科斷、其受所監臨之財、為他司囑請、律無別文、只從坐贓加二等、罪止中流、即重於受所監臨、若未囑事發、止同受所監臨財物法、若官人以所受之財、分求餘官、元受者併贓論、餘各依己分法、謂官人初受有事家財物、後減所受物、轉求餘官、初受者併贓論、餘各依己分法、假有判官受得枉法贓十端、更有兩官連判、各分二端與之、判官得十端之罪、餘各得二端之坐、二人仍並為二端之從、其有共謀受財分贓入己者、亦各依己分為首從之法、其中雖有違意及以預謀不受財者、事若曲法、止依曲法首從論、不合據贓為罪、如其曲法罪輕、從知部內有犯不舉劾減罪人罪法科之、

〔律疏 職制〕凡有所請求者笞五十、謂從主司求曲法之事、謂凡是公事、各依正理、輒有請求、規為曲法者、即為人請者、與自請同、謂為人請求者、雖非己事、與自請同、主司許者、與同罪、謂然其所請之事者、主司不許、及請求者、皆不坐、謂主司不許曲法、及請求之人、皆不合坐、已施行

主ニ還ス、倍贓トハ盗賊ニ限ルコトニテ、布一尺ヲ盗ムトキハ、二尺ヲ償ハシメテ主ニ還スガ如キヲ云フ、而ルニ人ノ盗ミタルヲ盗ミタル倍贓ハ、盗人ニ償フベキ理ナケレバ、沒官スルナリ、又計贓、不計贓ノ別アリ、計贓トハ、贓物ヲ計ヘテ、其多少ニ因リテ罪ヲ科スルヲ云フ、不計贓トハ、大祀神御物ヲ盗ミ、禁兵器ヲ盗ムガ如キ、贓物ヲ計ヘズシテ罪ヲ科スルヲ云フ、又贓ヲ併セテ論ズト云フコトアリ、例ヘバ十人ニシテ布十端ヲ盗メバ、一人ゴトニ十端ヲ盗ム罪ヲ得ルナリ、又正贓見在スル者ハ、官主ニ還シ、已ニ費用スル者死刑ニ遭ヒ、及ビ配流セラルヽトキハ徵スルコトナシ、此贓ノ中ニ、倍贓ノ事ハ、旣ニ孝德天皇ノ朝ニ見エ、坐贓ノ名ハ、持統天皇ノ朝ニ見エタリ、

〔類聚名義抄三見〕贓音臧カタマシ カクス

〔令義解一職員〕贓贖司

正一人掌贓贖、○註略 配沒、○註略 贓贖。謂非理取財曰贓、倍贓亦同也、出金當罪曰贖、入公入私並同也、其諸國贖物、即入當司、以充修理獄舍等也、闌遺雜物 ○註略 事、

〔令集解二十二考課〕朱云、問贓賄入己、未知若六贓歟、答然也、

〔唐律疏議四名例〕諸以贓入罪、正贓見在者還官主、轉易得他物、及生產蕃息、皆爲見在、

疏議曰、在律正贓唯有六色、强盗、竊盗、枉法、不枉法、受所監臨、及坐贓、自外諸條、皆約此六贓爲罪、但以此贓而入罪者、正贓見在、未費用者、官物還官、私物還主、轉易得他物者、謂本贓是驢、廻易得馬之類、及生產蕃息者、謂婢產子、馬生駒之類、○中略

已費用者、死及配流勿徵、別犯流及身死者亦同、○疏議略 餘皆徵之、盗者倍備、○疏議略 若計庸賃爲贓者亦勿徵、○疏議略 會赦及降者、盗詐枉法、猶徵正贓、○疏議略 餘贓非見在、及收贖之物、限內未送者、並從赦降原、

〔政事要略八十二〕名例律云、以贓入罪、正贓見在者還官主、已費用、人身死、及配流勿徵、

シテ財ヲ得タルヲ云フ、枉法贓、不枉法贓トハ、監臨ノ官、部下ノ人ノ財ヲ受ケテ、是ガ爲メニ法ヲ曲ゲテ處斷スルト、財ヲ受クレドモ法ヲ曲ゲズシテ處斷スルトヲ云フ、受所監臨贓トハ、監臨ノ官、公事ニ因ラズシテ監臨内ノ財物ヲ受クルヲ云フ、坐贓トハ、監臨主司ニアラズシテ、事ニ因リテ財ヲ受クルヲ云フ、例ヘバ人ノ侵損ヲ受ケテ、備償ノ外ニ餘分ノ財ヲ受クルガ如キ是ナリ、監臨主司トハ、唐雜律疏議ニ、謂統攝案驗、及行案主典之類トアリテ、統攝トハ内外諸司ノ長官ヲ云ヒ、案驗トハ判官ヲ云ヒ、主司トハ主守ノコトニテ主典ナドヲ云フ、此六贓ノ外ニ、初メハ財ヲ受ケズシテ、事過ギテ後ニ受クル者事アル時ニ財ヲ以テ行求スル者、人ノ財ヲ受ケテ其人ノ爲メニ請求スル者、官人受クル所ノ財ヲ以テ、餘官ニ分チテ其事ヲ遂ゲンコトヲ求ムル者、監臨ノ官人、私ニ部内ノ人ヲ役使シ、及ビ奴婢牛馬ノ類ヲ借リ、猪鹿酒食瓜果ノ類ヲ強取スル者、部内ノ財物ヲ率斂シテ、人ニ饋遺スル者(率斂シテ人ニ饋遺ストハ、自ラ率先シテ財ヲ出シ、人ヲシテ從テ財ヲ出サシメ、或ハ人ヲシテ率先シテ財ヲ出サシメ、因テ其餘ノ人ヲシテ從テ財ヲ出サシメテ之ヲ己ニ斂メ、上司等ニ遺ルヲ云フ、)監臨スル所ノ財物ヲ借リ、若シクハ賣買シテ剩利アル者、監臨官ノ家口、部内ニ於テ財ヲ受ケ物ヲ乞ヒ、借貸役使シ、賣買シテ剩利アル者、官ヲ去リテ後ニ舊官屬士庶ノ饋與ヲ受ケ、乞取借貸スル者、官人其使セル所ニ於テ送遺ヲ受ケ、乞取借貸スル者、官人其統攝等ノ勢ヲ挾ミ、若シクハ郷閭豪強ノ人乞索スル者、私物ヲ以テ官物ト貿易スル者、官物ヲ以テ私ニ自ラ借リ、及ビ人ニ借シ、人ヨリ借ル者ノ如キハ、皆六贓ノ類ナリ、而シテ監臨主守自盜ハ、凡盜ニ二等ヲ加ヘテ處斷ス、又彼此俱罪ノ贓、及ビ人ノ盜ミタル物ヲ盜メル倍贓ハ沒官シ、取與不和ノ贓、乞索ノ贓ハ主ニ還ス、彼此俱罪ノ贓トハ、與フル者モ受クル者モ共ニ罪ヲ得ベキ贓ニテ、枉法贓、不枉法贓、受所監臨贓、坐贓ノ如キ是ナリ、取與不和ノ贓トハ、恐喝シ、或ハ詐欺シテ財ヲ取リ、若シクハ強市シテ剩利アルガ如キヲ云フ、乞索トハ與フル者罪ナケレバ、其贓ハ本

之由、而尙可開之由依有上官仰令開已畢、而今違式早不開之由被勘當、無所避申者、謹撿弘仁式云、左衞門府、注云、右衞門府亦准此、大儀、其日寅二剋云々、大伴氏五位一人、注云、右佐伯氏率門部三人、入自掖門、居會昌門內左廂、貞觀式云、左衞門府、注、右衞門府亦准此、尉一人、率門部三人、尉居門下、今案開門畢還本陣下、雜律云、違令者笞五十、別式減一等、名例律云、同司犯公坐者、長官爲一等、次官爲一等、判官爲一等、主典爲一等、其闕无所承之官、亦依此四等爲法、疏云、公坐謂无私曲、又條云、六議、六曰議貴、注云、三位以上、又條云、六議者、犯流罪以下、減一等、又云、五位以上犯流罪以下減一等、又條云、七位以上犯流罪以下、各從減一等之例、又條云、應議請減者、犯流罪以下聽贖、又云、笞卌、贖銅三斤者、撿此等文、於會昌門、左右衞門率門部等可開之由、式條已存、而件府官人執申以府門部不開之由、然而依上官仰、遂以開門、早不開之由、進承伏狀畢、是尤犯違式罪者也、但事无□須依坐法爲等、連督爲首、笞卌、身帶三位、議減一等、笞卅、合贖銅三斤、佐二人爲第二從、減一等笞卅、各帶五位、請減一等、笞廿、各合贖銅二斤、尉五人爲第三從、減一等笞廿、各贖銅二斤、或是五位、或帶六位、至五位者、請減一等、於六位者、例減一等、各笞十、合贖銅一斤、志五人爲第四從、減一等笞十、帶六位例減一等、可无其罪、仍勘申者、從二位行大納言兼右近衞大將陸奥出羽按察使藤原朝臣師輔宣、奉勅宜依件徵納者、宜承知依宜行之、符到奉行、

從五位上守右少辨兼左衞門權佐源朝臣並

正六位上行右少史御立維宗

天慶九年八月七日

附 六贓 雜贓 併入

贓トハ、理ニアラズシテ人ノ財ヲ取ルヲ云ヒテ、正贓ハ强盜、竊盜、枉法、不枉法、受所監臨、及ビ坐贓ノ六色ナリ、其餘是ニ類セル者ハ、皆此六色ニ約シテ罰ス、强盜贓、竊盜贓トハ、强盜竊盜

依此四等爲法、又條云、五位已上犯流罪以下減一等、又條云、七位已上犯流罪以下、各從減一等之例、又條云、應議請減、及八位已上犯流罪已下聽贖、據檢此等文、府司須四月以前貢進、而違官符旨、延及七月、計其日數既過、罪止徒一年、仍以少貳源朝臣精、御室朝臣安常爲第二從、杖一百、並帶從五位上、例請減一等、各杖九十、合贖銅九斤、大監平高平、少監多治有友爲第三從、杖九十、高平帶正六位上、例減一等、杖八十、合贖銅八斤、有友帶正八位上、合贖銅九斤、少典淸科金棟、帶從七位上、例減一等、杖七十、合贖銅七斤、豐井安基帶正八位下、合贖銅八斤、(〇本文有誤脫、今據一本及類聚國史補之)

〔政事要略八十二〕太政官符刑部省

應徵納右衞門府贖銅拾貳斤事

參議從三位兼行督讚岐守源朝臣高明　贖銅參斤

權佐從五位上橘朝臣好古　贖銅貳斤

佐從五位上小野朝臣道風　贖銅貳斤

大尉從五位下藤原朝臣守人　贖銅壹斤

權少尉正六位上源朝臣忠光　贖銅壹斤

少尉正六位上藤原朝臣倫寧　贖銅壹斤

少尉正六位上藤原朝臣忠周　贖銅壹斤

權少尉正六位上藤原朝臣助信　贖銅壹斤

右得大判事兼行民部少輔明法博士惟宗朝臣公方等勘申狀偁、右少史御立維宗仰云、少辨源朝臣俊傳宣、大納言藤原朝臣師輔宣、奉勅去四月廿八日御卽位、(〇上村)右衞門早不開會昌門、依之進過狀畢、宜仰明法博士等令勘申其罪狀者、檢彼府去五月十一日所進過狀偁、去月廿八日、早不開會昌門狀、右會昌門、須任式差遣府門部令開、而依延長七年正月一日朝拜日記誤、一度執申以府門部不開

官故出入罪、放而還獲、減一等、次官不知情以失論、失出減判官之罪五等、又斷獄律、斷罪應決配之、而聽收贖、應收贖而決配之、各減故失一等、謂故減一等、失減失一等、是名故失減、）公坐相承減者、（謂同司犯公坐、假由判官斷罪失出法減五等、放而還獲者、又減一等、總減六等、次官減七等、官長減八等、主典減九等、）又以議、請、減之類得累減之、（若有議、請、減類、各又更減一等、是名得累減、）

蔭親

〔律疏名例〕凡贈位及外位、與正位同、職事初位、與八位同、（外六位以下、不在蔭親之例、外位稍異正位、故不許其蔭親屬、）用蔭者存亡同、（准蔭應議、請、減、贖者、親雖亡亦同存日、故云存亡同、）若籍尊長蔭而犯所蔭尊長、（尊長、謂祖父母、父母、伯叔姑、兄姊、是、）及籍所親蔭犯所親祖父母父母者、並不得爲蔭、（所親、謂傍親非祖父母父母及子孫、但傍蔭己身者、尊長卑幼皆是、假如籍伯叔蔭、而犯伯叔之祖父母父母、籍姪蔭而犯姪之父母之類、並不得以蔭論、文稱犯夫及義絕者、得以子蔭、婦犯夫既得子蔭、明夫犯婦亦取子蔭、可知其子孫例別生文、不入所親之限、即取子孫蔭者、違犯父祖教令、及供養有闕、亦得以蔭贖論、若取父蔭而犯祖者、不得爲蔭、若犯父者、得以祖蔭、）即毆告三等尊長四等尊屬者、亦不得以蔭論、（三等尊者、依令曾祖父母、伯叔婦、夫之祖父母、夫之伯叔姑、繼父同居長者、從父兄姊、異父兄姊、四等尊屬者、高祖父母、從祖祖父姑、從祖伯叔父姑、外祖父母、舅姨、）其婦人犯夫及義絕者、得以子蔭、（雖出亦同、婦人犯夫、及與夫家義絕、幷夫在被出、並得以子蔭者、爲母子無絕道故、）

議請減者處分

〔令義解獄十〕凡犯罪應入議請者、皆申太政官、應議者、大納言以上、及刑部卿、大輔、少輔、判事、於官議定、雖非六議、但本罪應奏、（謂上條刑部及諸國、斷流以上、及除免官當者、皆連寫案申太政官、案覆理盡申奏、是也、）處斷有疑、及經斷不伏者、亦衆議量定、雖非此官司、令別勅參議者、亦在集限、若意見有異者、人別因申其議、官斷（○斷恐料字誤）簡、以狀奏聞、

〔令義解獄十〕凡應議請減者、犯流以上若除免官當者、並肱禁、（謂雖不得議請減之罪上、亦猶依此禁法也、）公坐流、私罪徒、（謂此皆據本犯、不用減後法也、）並謂非官當者、（謂假五位犯徒一年、准律罪輕不盡其位之類也、）責保參對、（謂不禁其身、放令赴對也、）其初位以上、及无位應贖、（謂依律、七位以上父母之類、其七十以上、十六以下、可贖者亦同也、）犯徒以上、及除免官當者、桔禁、公罪徒、並散禁不脫巾、（謂應議請減以下、散禁以上、並皆通攝、）

〔令集解公式三十二〕斷獄律云、應議請減者、並不合拷訊、皆據衆證定罪、

徵贖例

〔三代實錄光孝四十八〕仁和元年十月十九日庚午、太宰府少貳已下官人徵贖銅、先是彼府年貢雅違期、詔下刑官斷罪、刑部省斷云、職制律云、事有期會而違者一日笞三十、五日加一等、罪止徒一年、名例律云、同司犯公坐者、長官爲一等、次官爲一等、判官爲一等、主典爲一等、各以所由爲首、其闕无所承之官、亦

贖法

各從減一等之例、此名減章、七位以上、謂六位七位、勳六等以上、謂五等六等、官位勳位得請者、謂五位及勳四等以上、蔭及祖父母、父母、妻、子、孫、犯流罪以下、各得減一等、若上章請人得減者、此章亦減、請人不得減者、此章亦不得減、故云從減一等之例、

〔律疏 名例〕凡應議請減、及八位勳十二等以上、若官位勳位、得減者之父母妻子、犯流罪以下、聽贖、此名贖章、應議請減者、謂議請減三章內人、亦有無官而入議請減者、故不云官、若應以官當者、自從官當法、議請以下人、身有官者、自從官當除免、不合留官取蔭收贖、其加役流、反逆緣坐流、謂緣反逆得流罪者、子孫犯過失流、謂耳目所不及、思慮所不到之類、而殺祖父母、父母者、不孝流、謂告言詛詈祖父母父母者、絞、從者流、及會赦猶流者、案賊盜律云、造畜蠱毒、雖會赦、並同居家口、及敎令人亦遠流、斷獄律云、殺四等尊屬從父兄姉、異父兄姉、及反逆者、身雖會赦、猶流近流、此等並是會赦猶流、其造畜蠱毒、婦人有官無官、並依下文配流如法、有官者仍除名、至配所免居作也、各不得減贖、除名配流如法、男夫犯此五流、假有一品以下及取蔭者、並不得減贖、除名仍配流如法、三流俱役一年、稱加役流者、役三年、案無兼丁者、依下條、加杖免役、故云如法、除名者免居作、犯五流之人、有官者、除名配流、免居作、即本罪不應流配、而特配者、雖無官亦免居作、謂有人本犯徒以下、及有蔭之人、本法不合配流、而責情特配者、雖是無官之人、亦免居作、其於二等以上尊長、及外祖父母夫、夫之父母、犯過失殺傷應徒、若故毆人至癈疾應流、男夫犯盜、謂徒以上及妻妾犯姧者、亦不得減贖、過失殺祖父母父母、已入五流、若傷即合徒罪、故云二等以上、其於二等親尊長及外祖父母、夫、夫之父母、犯過失殺及傷、應合徒者、故毆人至癈疾應流、謂恃蔭合贖、故毆人至癈疾、准犯應流者、男夫犯盜徒以上、謂計盜罪至徒以上、強盜不得財亦同、及妻妾犯姧者、並亦不得減贖、言亦者、亦如五流不得減贖之義、有官者、各從除免官當法、謂男夫於監守及八虐內盜者、並合除名、男夫凡盜斷徒以上、及妻妾犯姧者、並合免官、其於二等以上尊長等、犯過失殺傷應徒、及故毆凡人至癈疾應流、並合官當、其五流除名配流、會降至徒以下、有蔭應贖之色、更無配役之文、卽有聽贖者、有不聽贖者、止如加役流、反逆緣坐流、不孝流、此三流會降、並聽收贖、其子孫犯過失流、雖會降亦不得贖、何者、文云、於二等以上尊長、犯過失應徒、不得減贖、此雖會降、猶是過失應徒、故不合贖、其有官者、自准除免官當之例、本法既不合例減、降後亦不合減科、其會赦猶流者、會降灼然不免、

婦人處刑

〔律疏 名例〕凡婦人有官位犯罪者、各依其位、從議、請、減、贖、當免之律、

〔律疏 名例〕凡五位以上妾、犯非八虐者、流罪以下聽以贖論、五位以上者、是爲通貴、妾之犯罪、不可決配、若犯非八虐、流罪以下、聽用贖論、其贖條不合贖者、亦不在贖限、若妾自有子孫、及取餘親蔭者、假犯八虐、聽依贖例、

彙有議請減

〔律疏 名例〕凡一人彙有議、請、減、各應得減者、唯得以一高者減之、不得累減、假有身是皇帝故舊、合議減、又父有三位、合請減、又身有七位、合例減、此雖三處俱合減罪、唯得以一議減、故高者減之、不得累減、若從坐減、謂共犯罪、造意者爲首、從者減一等、自首減、謂有犯法、知人欲告而自首、聽減二等、故失減、謂判

議法

四曰議能、謂有大才藝、謂能整軍旅、莅政事、鹽梅帝道、師範人倫者、

五曰議功、謂有大勳功、謂能斬將搴旗、摧鋒萬里、或率衆歸化、寧濟一時、匡救艱難、若遠使絕域、經涉險難者、

六曰議貴、謂三位以上、

〔唐律御調〕享保十年巳十二月荻生惣七ェ訂正寫點被仰付候節差出候書付

八議之內、議勤、議賓之二條を除而、六議に仕候、是は日本は、百王一姓之國に而、國賓と申事無之故、議賓之一條を除き候、其相伴に議勤をも除候と相見へ申候、

〔律疏名例〕凡六議者犯死罪、皆條所坐及應議之狀、先奏請議、議定奏裁、此名議章、六議人犯死罪者、皆條錄所犯應死之坐、及錄親故賢能應議之狀、先奏請議、依令於官集議、議定奏裁、議者原情議罪、稱定刑之律、而不正決之、原情議罪者、謂原其本情、議其犯罪、稱定刑之律、而不正決之者、謂奏狀之內唯云、准犯依律合死、不敢正言絞斬、故云不正決之、流罪以下減一等、其犯八虐者、不用此律、流罪以下、犯狀既輕、所司減訖、自依常斷、其犯八虐者、死罪不得上議、流罪以下不得減罪、故云不用此律、

請法

〔律疏名例〕凡應議者祖父母、父母、伯叔父姑、兄弟、姉妹、妻、子、姪、孫、此名請章、六議之人、蔭及姪孫以上入請、若五位及勳四等以上、犯死罪者上請、四位以下及勳四等以上之人犯死罪者、並爲上請、此請、謂條其所犯、及應請之狀、正其刑名、奏請、條其所犯者、謂條錄請人所犯應死之坐、及應請之狀者、謂應議者祖父母等、若五位及勳四等以上應請之狀、正其刑名者、謂錄請人所犯、准律合絞合斬、奏請聽勅、流罪以下減一等、其犯八虐、殺人、監守內奸他妻妾、盜略人、受財枉法者、不用此律、流罪以下減一等者、減訖各依本法、若犯八虐及殺人者、謂故殺鬪殺謀殺等、殺訖不問首從、其監守內奸他妻妾、盜略人、受財枉法者、此等請人、死罪不合上請、流罪以下不合減罪、故云不用此律、其盜不得財、及奸略未得、並從減法、

〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字五年三月己酉、葦原王坐以刃殺人、賜姓龍田眞人、流多褹島、男女六人復令相隨、葦原王者、三品忍壁親王之孫、從四位下山前王之男、天性凶惡、喜遊酒肆、時與御使連麻呂博飲、忽發怒刺殺、屠其股完、便置胷上而膾之、及他罪狀明白、有司奏請其罪、帝以宗室之故、不忍致法、仍除王名配流、

減法

〔律疏名例〕凡七位勳六等以上、及官位勳位得請者之祖父母、父母、妻、子、孫、此孫不及曾玄、犯流罪以下、

ベキニ、又其父三位ニシテ請減スベク、又其身分七位ニシテ例減スベキトキハ議減スルナリ、サレドモ從坐減、自首減、故失減、公坐相承減ノ如キハ、議、請、減ノ類ヲ以テ累減シテ、各又更ニ一等ヲ減ズ、從坐減トハ、共ニ罪ヲ犯シタルトキ、造意者ヲ首トシ、從者ハ一等ヲ減ズルヲ云フ、自首減トハ、法ヲ犯シテ、人ノ訴ヘントスルヲ知リ自首スルトキハ、二等ヲ減ズルヲ云フ、故失減トハ、官蔭ナキ人ナド、笞杖ヲ犯ストキハ決スベク、徒流ヲ犯ストキハ配スベキニ、斷罪ノ人、收贖ヲ聽シ、又官蔭アル人ナドハ贖スベキニ、斷罪ノ人、決配スルトキハ、故ナレバ、故ニ一等ヲ減ジ、失ナレバ、失ニ一等ヲ減ズルガ如キヲ云フ、公坐相承減トハ、公坐ハ公罪ノコトニテ、同司公罪ヲ犯ストキニ、若シ判官ノ斷罪、失出（失出ハ、有罪ヲ無罪トスルヲ云フ）ニ由レバ、五等ヲ減ジ、放チテ後ニ又獲レバ、又一等ヲ減ジ、合セテ六等ヲ減ジ、次官七等ヲ減ジ、官長八等ヲ減ジ、主典九等ヲ減ズルヲ云フ、是等ハ累減スルヲ得ルナリ、

凡テ議、請、減、贖ノ法ハ、贈位外位ハ正位ト同ジク、職事ノ初位ハ八位ト同ジク、父ノ蔭ヲ用キルナドハ、其父ハ已ニ亡セリトモ存生ト同ジ、又婦人ノ官位アル者ハ、男子ト同ジク議、請、減贖當免ノ法ニ從ヒ、五位已上ノ妾、流罪ヲ犯ストキハ、贖ヲ以テ論ズ、又此議、請、減ノ人ノ爲メニハ、拷訊セズシテ、衆證ニ據リテ罪ヲ定メ、流以上、若シクハ除免官當ヲ犯ストキハ、肱禁スル等ノ諸法アリ、此外ニ老幼癈篤疾請贖ノ法アリ、

〔律疏〕六議

一曰議親、（謂皇親、及皇帝五等以上親、及太皇太后、皇太后四等以上親、（太皇太后者、皇帝祖母也、皇太后者、皇帝母也、）皇后三等以上親、）

二曰議故、（謂故舊、（謂宿得侍見、特蒙接遇歷久者、））

三曰議賢、（謂有大德行、（謂賢人君子、言行可爲法則者、））

少輔、判事、太政官ニ集リ、其犯罪ヲ議定シ、其奏狀ニハ、犯ニ准ジ律ニ依ルニ死罪ニ當レリトノミ記シテ、絞トモ斬トモ正決セズシテ、更ニ上聞スルナリ、カク議定スベキヲ以テ又應議者ト云フ、

請トハ、六議者ノ祖父母、父母、伯叔父姑兄弟姉妹、妻、子、姪、孫、若シクハ四位五位、及ビ勳一等以下四等以上ノ人ヲ云ヒテ、是等ノ人、死罪ヲ犯ストキハ、乃チ六議者ノ父母ナリ、或ハ四位ナリ等ト條錄シテ、其所犯ハ律ニ准ズルニ、絞ニ當リ、斬ニ當レバ、其刑ニ行ハント奏請スルナリ、カク奏請スベキヲ以テ應請者ト云フ、

減トハ、六位、七位、勳五六等ノ人、及ビ官位(四位、五位、)勳位(一等以下、四等以上、)ノ應請者ノ祖父母、父母、妻、子、孫ヲ云ヒテ、是等ノ人、流以下ノ罪ヲ犯ストキハ、例シテ一等ヲ減ジ、三流ハ倶ニ杖一百トシ、杖一百ハ九十トシ、杖九十ハ八十トスルナリ、但シ應議者モ、應請者モ、流以下ハ一等ヲ減ズ、因リテ應議者ノ減罪ヲ議減ト云ヒ、應請者ノ減罪ヲ請減ト云ヒ、是ヲ例減ト云フ、カク減ズベキ例ナルヲ以テ、又應減者ト云フ、

贖トハ、應議請減者及ビ八位、勳七等以下、十二等以上ノ人、若シクハ官位(六位、七位、)勳位(五等、六等、)ノ應減者ノ父母妻子ヲ云ヒテ、是等ノ人、流罪以下ヲ犯ストキハ贖ヲ聽シ、罪ノ輕重ニ因リテ銅ヲ納メシム、但シ官アル人ハ官當ノ法ニ從ヒ、先ヅ官ヲ以テ罪ニ當テシメ、罪輕クシテ、官ヲ以テ當ツルニ足ラザレバ贖ヲ收ム、

此議、請、減、贖ノ人モ、犯罪ノ狀ニ因リテ、此法ノ如クナルヲ得ザルコトアリ、ソハ應議者ノ八虐ヲ犯シ、應請者ノ八虐、及ビ人ヲ殺シ、監守內ニテ他ノ妻妾ヲ姧ス等ノ罪ヲ犯シ、議、請、減、贖ノ人ノ、五流等ヲ犯ストキハ常律ノ如クスルナリ、又身ニ議、請減ヲ兼テ、何レモ減罪ヲ得ベキ人ハ、一ノ高キ者ヲ以テ減ジテ、累減スルコトヲ得ズ、卽チ其身天皇ノ故舊ニシテ議減ス

〔政事要略八十四〕名例律云、同居、若三等以上親、及外祖父母子○于唐律作外孫、若孫之婦、夫之兄弟、及兄弟妻、有罪相爲隱、同居、謂同財共居、不限籍之同異、雖非五等以上親、並是、以上諸親、及隱(及報俱隱唐律作相爲隱反報隱)此等外祖不及曾高、外孫不及曾玄、俱家人奴婢爲主隱、皆勿論、家人奴婢、主不爲隱、爲主隱、非謀叛以上、並不坐、卽漏露其事、及擿語消息、亦不坐、假有鑄錢及盜之類、事須掩攝追收、遂漏露其事、及報罪人所掩攝之事、令得隱避逃亡、爲通相隱、故亦不坐、其四等以下親相隱、減凡人三等、四等五等親、假有死罪隱藏、減凡人唯減一等、四等五等親、父減凡人二等、獨徒二年、漏露其事、及擿語消息、亦依減例、但以律文貴省、故不煩言、若犯謀叛以上者、不用此律、謂謀反謀大逆謀叛、此等三事、並不得相隱、故不用相隱之律、各從本條科斷、

〔論語子路七〕葉公語孔子曰、吾黨有直躬者、其父攘羊、而子證之、孔子曰、吾黨之直者異於是、父爲子隱、子爲父隱、直在其中矣、

〔唐律疏議名例六〕諸同居、若大功以上親、及外祖父母外孫、若孫之婦、夫之兄弟、及兄弟妻、有罪相爲隱、

疏議曰、同居、謂同財共居、不限籍之同異、雖無服者、並是、若大功以上親、各依本服、外祖父母外孫、若孫之婦、夫之兄弟、及兄弟妻、服雖輕論情重、故有罪者、並相爲隱、反報隱、此等外祖不及曾高、外孫不及曾玄也、

部曲奴婢爲主隱、皆勿論、

疏議曰、部曲奴婢、主不爲隱、聽爲主隱、非謀反以上並不坐、

附 六議 請減贖 併入

六議トハ議親、議故、議賢、議能、議功、議貴ノ六ナリ、議親トハ、天皇三后ノ親族ヲ云フ、議故トハ、久シク天皇ニ侍シテ、特ニ接遇ヲ蒙レル者ヲ云フ、議賢トハ、大德行アル者ヲ云フ、議能トハ、大才藝アリテ能ク軍旅ヲ整ヘ、政事ニ莅ミナドスル者ヲ云フ、議功トハ、國家ノ爲メニ大勳功アル者ヲ云フ、議貴トハ、三位以上ヲ云フ、此六議者ハ、死罪ヲ犯ストキハ、刑部省ヨリ太政官ニ申シ、太政官ヨリ先ヅ死ニ當レル罪狀ト、親故等ニ係レルヲ以テ、必ズ其罪狀ヲ議スベキノ狀トヲ錄シ、奏聞シテ議センコトヲ請ヒ、勅許ヲ得テ後ニ、大納言以上及ビ刑部卿、大輔、

テ、若共監主爲犯、雖造意、仍以監主爲首ノ十五字アリ、

重犯

〔律疏名例〕凡犯罪已發、及已配、而更爲罪者、各重其事、已發、謂已被告言、其依令應三審者、初告亦是發訖、及已配、謂犯徒已配、而更爲笞罪以上者、各重其後犯之事而累科之、即重犯流者、依留住法決杖、於配所役三年、犯流未斷、或既斷配訖、未至前所、而更犯流者、依雜戶留住法、決杖、近流一百、中流一百三十、遠流一百六十、仍各於配所役三年、通前犯流應役一年、總四年、若前犯常流、後犯加役流者、亦止總役四年、若已至配所更犯者、亦准此、已至配流之處、而更犯流者、亦準上解、留住法、決杖、配役、其前犯處近流、後犯處遠流、即於前配所科決、不復更配遠流、即累流徒應役者、不得過四年、若更犯流徒罪者、准加杖例、有犯徒役未滿、更犯流、流役未滿、更犯徒、或徒役內復犯徒、應役身者、並不得過四年、假有元犯加役流、前後累徒、雖多、役以四年爲限、若役未訖、更犯流徒罪者、准加杖例、犯罪雖多、累決杖笞者、亦不過二百、若有人重犯流罪、依留住法、決杖、於配所役三年、此三年之役、家無兼丁者、不合准無兼丁例決杖、流人雖無兼丁、而無加杖之例、三年之役、本替流罪、雖無兼丁、不合加杖、唯有元犯之流至配所應役者、家無兼丁、得准徒加杖、其杖罪以下、亦各依數決之、累決笞杖者、不得過二百、其應加杖者亦如之、累流徒應役四年限內、復犯杖笞者、亦依所犯杖笞數決、或初犯杖一百、中又犯杖九十、後又犯笞五十、前後雖有二百四十、決之不得過二百、其犯徒應加杖者、亦如之、假如雜戶陵戶官私奴婢等、並合加杖、縱令重犯流徒、累決杖笞、亦不得過二百、

二罪俱發

〔政事要略八十一〕名例律云、二罪以上俱發、以重者論、若一罪先發、已經論決、餘罪後發、其輕若等、勿論、重者論之、通計前罪、以充後數、

〔唐律疏議名例六〕諸二罪以上俱發、以重者論、謂非應累者、唯具條其狀、不累輕以加重、若重罪應贖、輕罪應居作官當者、以居作官當爲重、

疏議曰、假有甲任九品一官、犯盜絹五疋、合徒一年、又私有矟一張、合徒一年半、又過失折人二支、合贖流三千里、是爲二罪以上俱發、從私有禁兵器斷徒一年半、用官當訖、更徵銅十斤、既犯盜徒罪、仍合免官、是爲以重者論、

注、謂非應累者、唯具條其狀、不累輕以加重、

疏議曰、以上三事、並非應累斷者、雖從兵器處罪、仍具條三種犯狀、不得將盜一年徒罪、累於私有禁兵器一年半徒上、故云不累輕以加重、所以具條其狀者、一彰罪多、二防會赦、雖犯死罪、經赦得原、蠱毒流刑、逢恩不免故也、

昌泰三年二月九日　文章博士三善朝臣清行

謹謹上　左相府　殿下政所

〔本朝世紀〕康和五年十二月廿日乙丑、正四位下行木工頭兼丹波守高階朝臣爲章卒、○中略寬治七年八月廿八日、親父近江守爲家朝臣、坐凌轢春日神民事、除名配流、爲章依爲長男、可有緣坐、然而依臨時之恩、不坐、四男阿波守爲遠一人停見任、非常斷、人主專之義也、

〔百練抄五堀河〕長治二年十二月廿九日、前太宰權帥季仲除名配流周防國、緣坐之輩同流罪、

嘉承元年二月十七日、前帥季仲、改周防配流常陸、謀大逆者可處遠流、而依爲中流也、又息男刑部少輔懷季、少納言實明解官、大逆者子不可居侍衛官之由、人々定申之故也、主上御藥之間、依有其禁重有沙汰也、

〔政事要略六十七〕名例律云、共犯罪而本罪別者、雖相因爲首從、其罪各依本律首從論、

〔唐律疏議五名例〕諸共犯罪而本罪別者、雖相因爲首從、其罪各依本律首從論、○疏議略若本條言皆者、罪無首從、不言皆者從首從法、○疏議略即强盜及姦、略人爲奴婢、犯闌入、若逃亡、及私度越度關棧垣籬者、亦無首從、

〔政事要略六十九〕勘撿非違使於京内城外過可致○致下疑脫敬字人之時可下馬哉否事、

被仰云、○中略名例律云、共犯罪者、以造意爲首、從者減一等、

〔唐律疏議五名例〕諸共犯罪者、以造意爲首、隨從者減一等、若家人共犯、止坐尊長、於法不坐者、歸罪於其次尊長、尊長謂男夫、

疏議曰、共犯罪者、謂二人以上共犯、以先造意者爲首、餘並爲從、家人共犯者、謂祖父伯叔子孫弟姪共犯、唯同居尊長獨坐、卑幼無罪、

○按ズルニ、戸令集解ニ、家人共犯、只坐尊長ノ八字アリ、政事要略卷五十九ニ、戸婚律ノ疏ヲ引

〔律疏名例〕卽緣坐家口雖已配沒、罪人得免者亦免、謂反逆人家口合緣坐沒官、罪人於後蒙恩得免、緣坐者雖已配沒、亦從赦免、其奴婢同於資財、不從緣坐免法、但是謀反大逆罪、極誅夷、罪人既不會赦、緣坐亦不合原、去取之宜、皆隨罪人、爲法、其謀叛已上道、及殺一家非死罪三人、支解人、緣坐雖及家口、其惡不同反逆、又律文特顯反逆緣坐、爲與八虐同科、不得請減及贖、自同五流、除名配流如法、自餘緣坐流並得減贖、不除名、雖云合流、得減贖者、明即與反逆緣坐不同、敕書若八虐不原、非反逆緣坐人、仍從恩免、以其身非八虐、又非反逆之家故、

〔令抄考課〕緣坐家口　父母妻子幷子之妻謂之家口、

〔續日本後紀八仁明〕嘉祥元年十二月己丑、刑部少輔和氣朝臣齊之、依犯大不敬、當絞刑、勅減一等、流伊豆國、　乙卯、大判事外從五位下讃岐朝臣永直、坐和氣齊之事、配流土佐國、

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年九月廿二日甲子、是日大納言伴宿禰善男、右衞門佐伴宿禰中庸、同謀者紀豐城、伴秋實、伴清繩等五人、坐燒應天門、當斬、詔降死一等、並處之遠流、○中略相坐配流者八人、從五位上行肥後守紀朝臣夏井配土佐國、○中略有異母弟豐城、夏井以其放誕、數加督責、豐城苦之、遂託身大納言伴宿禰善男、應天門火、善男坐以男中庸行火燒之、父善男應知之焉、豐城爲善男之從、夏井爲豐城之兄、轉相緣坐被處遠流、夏井隨使出境、肥後民遮路悲哭、如喪考妣、夏井私歎曰、凡法律所謂首從之坐、必有差降、予是從之兄、亦緣坐也、今與善男同配遠流、何其無別哉、

〔本朝文粹七書〕奉左丞相時平藤原書　善相公

近日京中大小皆云、外帥道眞菅原門弟子、在諸司者可被左轉、其文章生學生皆被放逐云々、由是人々悲哭、踟躕而立、伏以此事變轉、未必殿下之本意也、但外帥累代儒家、其門人弟子半於諸司、若皆遷謫、恐失善人、加之惡逆之主、猶處輕科、至于門人、唯請登受業而已、豈有知其謀乎、方今紛亂之間、擾攘之會、宜立其陰德塞怨門、若咎過多、則怨門且多、若寛宥大、則陰德亦大、伏望非衞府供奉、關戍兵要之職、家司近親同謀凶黨之人、則皆無轉動、示以仁厚、又式部丞平篤行、此後進之英髦也、殿下屢稱其才、頗有歲月焉、故雖編外帥之門徒、常感殿下之知己、而今乍聞此語、晝夜悲泣、若失此人、恐墜此文、重望賜其氣色、私寛慰、聊傳恩裕之旨、以繫才士之心、謹啓、

一子分法留還、假有一人年八十、有三男十孫、一孫反逆、或一男見在者、依令作三男分法、添老者一人、即爲四分、若三男俱死、唯有十孫者、依令諸子均分、老人共十孫爲十一分、毎留一分與老者、是爲各准一分法、其出養入道者、並不追坐、出養者、從所養坐、僧尼及婦人、若官戸陵戸家人公私奴婢、犯反逆者、止坐其身、

〔孟子梁惠王下二〕齊宣王問曰、〇中略王政可得聞與、對曰、昔者文王之治岐也、耕者九一、仕者世祿、關市譏而不征、澤梁無禁、罪人不孥、

〔漢書刑法志二十三〕秦用商鞅連相坐之法、造參夷之誅、師古曰、參夷、夷三族、

〔漢書高帝紀一下〕九年十二月、行如雒陽、貫高等謀逆發覺、逮捕高等、并捕趙王敖下獄、詔敢有隨王罪三族、張晏曰、父母兄弟妻子也、如淳曰、父族母族妻族也、

〔律疏賊盜〕凡謀反及大逆者皆斬、〇略疏父子若家人資財田宅並沒官、〇略疏年八十及篤疾者並免、祖孫兄弟皆配遠流、不限籍之同異、即雖謀反、詞理不能動衆、威力不足率人者亦皆斬、〇中略父子並配遠流、資財不在沒限、〇略疏其謀大逆者絞、

〔律疏賊盜〕凡謀叛者絞、〇略疏已上道者皆斬、〇中略子中流、若率部衆十人以上、父子配遠流、

〔唐律疏議斷獄三十〕諸緣坐應沒官而放之、及非應沒官而沒之者、各以流罪故失論、

疏議曰、賊盜律、謀反及大逆人子、年十五以下、及母女妻妾子妻妾亦同、若祖孫兄弟姉妹並沒官、男夫年八十及篤疾、婦人年六十及癈疾並免、出養入道、及娉妻未成者、並不追坐、若應沒而放、應放而沒、各依流罪、以故失論、謂反逆緣坐流三千里、沒官罪重、須用三千里流法、若故、同故出入三千里流、若失、同失出入三千里流、稱放者應沒遣流、與全放無別、應流遣沒、得罪亦同、

〔律疏名例〕凡犯八虐故殺人反逆緣坐、八虐、謂謀反以下不義以上者、故殺人、謂不因鬪競而故殺者、謀殺人已殺訖亦同、餘條稱以謀殺故殺論、及云從故殺法等、殺訖者、皆准此、其家人奴婢等非、案賊盜律殺一家非死罪三人注云、奴婢家人非、其故殺舊家人奴婢、經放爲良、本條雖不至死亦同故殺之例、反逆緣坐者、謂緣謀反及大逆人得罪者、本應緣坐、老疾免者亦同、謂緣坐之中有年八十及篤疾、雖免緣坐之罪、身有官位者、亦各除名、若其身先亡者、不合除名、仍聽爲蔭、獄成者雖會赦猶除名、〇下略

緣坐

一百、成吉等在殺人處不助救、准律條各處杖一百、刑部省覆斷云、國斷有失、何者案律、鬪而用刃、卽有害心、仍處斬刑、但不同於故殺、而引故殺及用兵刃殺等之文、此國司之謬斷也、又淨子詞云、成吉等與春貞美都良麻呂相鬪之場、雖以言詞相諫、而遂不救、淨子聞春貞之叫、纔知被刺、然則成吉等、醉中不覺、美都良麻呂害春貞之心、非聞告而不助見刺而不救者也、仍改斷無罪、斷獄律云、官司斷罪、失於入者減三等、名例律云、五位及七位以上、犯流罪以下各減一等、判斷之失、旣由判官、仍正七位下行掾高階眞人全秀、正六位上行左近衛將監兼權掾藤原朝臣房雄爲首、全秀身帶七位、例減一等、合杖六十、贖銅六斤、房雄遙授不預其事、合免其罪、從五位下行介藤原朝臣有年爲第二從、減四等、合杖六十、身帶五位、請減一等、合笞五十、贖銅五斤、參議正四位下行右衛門督兼守藤原朝臣良繩、從四位上行皇太后宮大夫兼權守藤原朝臣良世爲第三從、亦是遙授合免其罪、正六位上行大目秦忌寸安統、正七位上行少目阿岐奈臣安繼爲第四從、減六等、合笞四十、身帶七位以上、例減一等、合笞三十、贖銅三斤、

〔類聚三代格 八〕太政官符

應出納官物國司史生已上隨犯科罪事

右得近江介從五位上藤原朝臣春景解狀偁、出擧收納幷下雜稻等事、官長不得獨自巡撿、仍分遣史生已上令行其事、而或心挾貪濁、常事費用、或身受賂遺、多致虛納、格云、一人有犯、餘官同坐、郡司和許亦同國司者、今依此文、事發之時、共陷重罪、苛酷之甚、更亦何言、謹案律條、不知情者、不入其罪者、望請所欠之物、相共塡納、所坐之罪、獨科其身、然則奸源自絕、官物無損、謹請官裁者、從三位守大納言兼左近衛大將行陸奧出羽按察使藤原朝臣基經宣、奉勅、依請、自餘諸國亦宜准此、

貞觀十四年七月廿九日　○又見三代實錄、政事要略、

〔律疏 賊盜〕凡緣坐非同居者、資財田宅不在沒限、雖同居非緣坐、及緣坐人子、應免流者、各准分法留還、緣坐人子、謂兄弟之子、擬律亦不緣坐、各准分法、老疾得免者、各准一子分法、謂年八十及篤疾、各准戶留還、謂未經分異、犯罪之後、並准戶令依分法、內應分人多少、人別得准

〔政事要略 六十二〕禮儀非違分別事

名例律曰、同司犯公坐者、長官爲一等、次官爲一等、判官爲一等、主典爲一等、注曰、同司者、謂連判之官及主典、疏云、假如刑部省斷事有違、卽卿是長官、輔是次官、丞是判官、錄是主典、是爲四等、

〔令集解 四職員〕名例律云、次官以上、異判有失者、止坐異判以上官者、

〔唐律疏議 五名例〕諸同職犯公坐者、長官爲一等、通判官爲一等、判官爲一等、主典爲一等、各以所由爲首、若通判官以上異判有失者、止坐異判以上之官、〇疏議略、其闕無所承之官、亦依此四等官爲法、卽無四等官者、止準見官爲罪、〇疏議略、若同職有私、連坐之官不知情者、以失論、〇疏議略、卽餘官及上官案省不覺者、各遞減一等、下官不覺者、又遞減一等、亦各以所由爲首、謂減首從〇疏議略、檢勾之官同下從之罪、〇疏議略、應奏之事、有失勘讀、及省審之官不駮正者、減下從一等、〇疏議略、若辭狀隱伏、無以驗知者勿論、

〔類聚三代格 十二〕太政官符

禁斷犯用官物事

右被右大臣宣偁、奉勅、夫正稅者國家之資、水旱之備也、而比年國司苟貪利潤、費用者衆、官物減耗、倉廩不實、職此之由、自今以後、嚴加禁止、其國司如有一人犯用、餘官同坐、並解見任、永不叙用、贓物令共塡納、不在免死逢赦之限、遞相檢察、勿爲違犯、其郡司和許、亦同國司、

延曆四年七月廿四日 〇又見續日本紀

〔三代實錄 十三淸和〕貞觀八年十月廿五日丙申、太政官論奏曰、刑部省斷罪文云、讚岐國浪人江沼美都良麻呂、殺香河郡百姓縣春貞、春貞妻秦淨子申訴云、美都良麻呂於春貞宅、相共飮酒、言論相鬪、春貞叫曰、吾爲美都良麻呂被刺之、驚而見之、血出自左脇、卽死、同郡人秦成吉等、與春貞美都良麻呂等同飮之人也、而相鬪之場、雖以言詞相諫、而遂不相救助、國司斷云、鬪訟律云、鬪毆殺人者絞、以刃及故殺人者斬、雖因鬪而用兵刃殺者、與故殺同、准犯據律、合斬刑者、又捕亡律云、隣里被殺人、告而不助救者杖

連坐

不官當、若犯八虐五流者、各依除名之法、若夫犯流、事發、踰知關而故犯流以下、聽從官當減贖法、无官者至配所加杖居作、

〔令義解十一〕凡公坐相連、謂依律、同司犯公坐者、即爲四等連坐、各以所由爲首、假令外記檢出有失者、外記爲首、少納言爲第二從、大納言爲第三從、右大臣以上爲第四從之類、即左右辨二局、不相連及、若左辨有公坐者、即外記右辨、亦不相連坐、但大納言以上、是通攝之官、故於此三局、皆爲次官長官、其中務管監物、刑部管判事、如此之類、亦不相連、若事發監物判事者、其人爲首、省司預事爲從、右大臣以上、及八省卿、諸司長、並爲長官、大納言、及少輔以上、諸司貳、皆爲次官、少納言、左右辨、及諸司糺判、皆爲判官、諸司勘署、皆爲主典、

〔政事要略八十四〕自首覺擧事

名例律曰、公事失錯、自覺擧者原其罪、○略註應連坐者一人自覺擧、餘人亦原之、謂長官以下主典以上、在案同判署者、一人覺擧、餘並得原、其斷罪失錯、已行決者、不用此律、□役了、徒罪役訖、此等並爲已行決者、官司雖官司決訖、流□雖自覺擧、不在免例、各依失入法科之、故云不用此律、假有人枉被斷徒二年、已役一年、官司然始自覺擧者、一年未役者、自從擧免、已役一年者、從失入減二等、科杖八十之類、

〔唐律疏議五名例〕諸公事失錯、自覺擧者原其罪、○議略疏應連坐者一人自覺擧、餘人亦原之、

疏議曰、應連坐者、長官以下主典以上及撿勾官、在案同判署者、一人覺擧、餘並得原、○中略

其斷罪失錯、已行決者、不用此律、

疏議曰、斷罪失錯、已行決者、謂死及笞杖已行決訖、流罪至配所役了、徒罪役訖、此等並爲已行、官司雖自覺擧、不在免例、各依失入法科之、故云不用此律、假有人枉被斷徒二年、已役一年、官司然始自覺擧者、一年未役者、自從擧免、已役一年者、從失入減三等、科杖八十之類、

○按ズルニ、前文引ク所ノ政事要略ノ文ハ、誤脫殊ニ甚シクシテ、文義通ジ難キモノアリ、故ニ今唐律疏議ヲ引ケリ、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十月十九日庚午、太宰府少貳已下官人徵贖銅、先是彼府年貢雜○類聚國史作鵝違期、詔下刑官斷罪、刑部省斷云、○中略名例律云、同司犯公坐者、長官爲一等、次官爲一等、判官爲一等、主典爲一等、各以所由爲首、其闕无所承之官、亦依此四等爲法、

〔令義解 獄十〕凡婦人在禁、皆與男夫別所、

〔令義解 獄十〕凡禁囚、死罪枷杻、婦女及流罪以下去杻、○中略 懷孕、侏儒之類、雖犯死罪亦散禁、

〔令義解 獄十〕凡婦人在禁、臨產月者、謂家女及婢、亦准上條給假七日也、責保聽出、謂聽出禁所也、死罪產後滿廿日、流罪以下、謂文云並即追禁、即知杖罪以上也、問、流移之人、當上道時、妻妾臨產月、如何、答、案上條、流移囚在路、有婦人產者、并家口給假廿日、即有在路給假之法、而無傳囚待產之文、雖是臨月、猶須配下也、產後滿卅日、並即追禁、不給程、

〔律疏 名例〕凡婦人有官位犯罪者、各依其位、從議請減贖當免之律、凡五位以上妾、犯非八虐者、流罪以下聽以贖論、

〔法曹至要抄 上罪科〕一不拷訊事

斷獄律云、婦人懷孕犯罪、應拷及決杖笞、若未產而拷決者杖八十、傷重者依前人○前人下唐律有不合二字 捶拷法、失者各減二等、○失者各減二等、唐律在拷決者減一等下、產後未滿百日而拷決者減二○二唐律作一等、

〔唐律疏議 斷獄三十〕諸婦人犯死罪、懷孕當決者、聽產後一百日乃行刑、若未產而決者徒二年、產訖限未滿而決者徒一年、失者各減二等、其過限不決者、依奏報不決法、

〔令義解 獄十〕凡婦人犯死罪產子、無家口者、謂雖即家人奴婢、亦同家口例也、付近親收養、無近親付四隣、有欲養爲子者、雖異姓皆聽之、謂近親四隣之外、欲養爲子者、既非兄弟之子、依法不須責隨、其本色不同者、皆不聽養、

〔律疏 名例〕凡雜戶陵戶犯流者、近流決杖一百、一等加三十、留住俱役三年、○中略 犯徒者准無兼丁例加杖、還依本色、其婦人犯流者、亦留住、婦人之法、例不獨流、故犯流不配、留住決杖居作、犯造畜蠱毒應流者、配流如法、造畜蠱毒、所在不容、擯之遠處、絕其根本、故雖婦人、亦須投竄、縱令嫁向中華、事發還從配遣、並依流配之法、三流俱役一年、縱使會遇恩、亦不合免、婦人教令造畜者、只得教令坐、不同身自造畜、自依常犯科罪、案賊律、造畜蠱毒者、雖赦不免、同居不知情亦流、但是諸條犯流加杖配徒之色、若有蠱毒、並須配遣、故於雜戶等留住下立制云、造畜蠱毒者、配流如法、斯乃雜戶以下總攝、不獨爲婦人生文、近流決杖六十、一等加廿、俱役三年、婦人近流決杖六十、中流決杖八十、遠流決杖一百、三流俱役三年、若加役流、杖亦一百、即役四年、既決杖文在上、明須先決後役、若夫犯流配者、聽隨之至配所、免居作、婦人元不合配、以夫流故、所以聽隨、給其本法無流、所以得免居作、從流無杖、不在決例、其有夫在路身死、婦人不合從流、既得却還、不復更合居役、即是總更無罪、有官亦

六犯盜、今年十七科罪、仍依幼少時、徵贖放免、志博愛成着鈦勘文、

〔西宮記臨時裏書十〕於市行事

勘申強盜三宅得正可着鈦哉事

右得正強盜犯、承伏過狀已畢、而得正臂已切也、可着鈦哉者、名例律云、癈疾犯流罪以下收贖、盜亦收贖、疏云、癈疾爲矜疾收贖、盜既侵損於人、故不許全免、令其收贖、不言強竊、戸令云、一支廢爲癈疾者、至于癈疾、縱強盜唯徵贖銅、不可着鈦、仍勘申、

寬弘四年五月十八日　　右衞門少志尾張如春

防鴨河判官右衞門尉豐原爲時

左衞門少尉縣犬養爲政

〔西宮記臨時裏書十〕於市行事

勘申秦安武可着鈦哉否事

右別當宣偁、安武依竊盜之犯、今月廿二日承伏進過狀、而其生年十七者、可着鈦哉、宜勘申其由者、名例律云、七十以上、十六以下、犯流罪以下收贖、疏云、盜既侵損於人、故不許全〇全恐衍令其收贖、弘仁格云、自今以後、宜以十八爲中男者、律條贖法、以十六爲限、格文年限、以十八爲法、今論安武之年齒、須依格文之新制、仍徵銅、宜相贖偷盜之罪、停鈦不可配徒年之役、仍勘申、

寬弘五年十二月廿三日　　左衞門少志伴維信

大志尾張如春

右衞門權少尉豐原爲時

左衞門少尉甘南備保資

大尉縣犬養爲政

〔律疏名例〕凡犯罪時、雖未老疾、而事發時老疾者、依老疾論、假有六十九以下犯罪、年七十事發、或無疾時犯罪、癈疾後事發、並依上解收贖之法、七十九以下、犯反逆殺人應死、八十事發、或癈疾時犯罪、篤疾時事發、得入上請之條、八十九犯死罪、九十事發、並入勿論之色、故云依老疾論、若事發已後未斷決、然始老疾者、聽以贖論、律以老疾不堪受刑、故節級優異、七十衰老、不能徒役、此雖發在六十九時、至年七十始斷、其老是一、不可仍遣役身、此是徒役內老疾、依老疾論、假有七十九犯加役流、事發至八十始斷、止得依老免罪、不可仍配徒流、又依獄令、犯罪逢格改、若格輕、聽從輕、依律及令、務從輕法、至於老者、豈得配流、八十之人、事發與斷相連者、例從輕曲、斷依發時之法、唯疾人與老者理別、多有事發之後、始作疾狀、臨時科斷、須究本情、若未發時已患、至斷時成疾者、得同疾法、若事發時無病、斷日加疾、推有故作者、准格仍依犯時實患者、聽依疾例、若在徒限內、老疾亦如之、假有六十九以下配徒役、或二年三年、役限未滿、年入七十、又有配役時無病、役限內成癈疾、並聽准上法收贖、故云在徒限內老疾亦如之、又計徒一年三百六十日、應贖者徵銅廿斤、即是一斤銅折役一十八日、計餘役不滿十八日、徵銅不滿一斤、數既不滿、並宜從放、犯罪時幼少、事發時長大、依幼少論、假有七歲犯死罪、八歲事發、死罪不論、十歲殺人、十一事發、仍得上請、十六時偸盜、十七事發、仍以贖論、此名幼少時犯罪、長大事發、依幼少論之、

〔令義解卌獄〕凡禁囚、死罪枷杻、婦女及流罪以下去杻、其杖罪散禁、謂不關木索、唯禁其出入也、案下條、別立不脫巾之文、故此條散禁以上、並皆脫巾、年八十、十歲、及癈疾、懷孕、侏儒之類、雖犯死罪亦散禁、

〔唐律疏議六名例〕若老小及癈疾、不合加杖、無財者放免、

疏議曰、謂以上應徵贖之人、若年七十以上、十五以下、及癈疾、依律不合加杖、勘撿復無財者、並放免不徵、其部曲奴婢、應徵贓贖者、皆徵部曲及奴婢、不合徵主、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十二月廿三日癸酉、詔遣彈正少弼從五位下安倍朝臣肱主等於太宰府、推問事由、刑部省處近成斬刑、貞道官當除名、宗永朝臣○大宅年七十、贖銅百斤、連枝宗吉二人並近流、中略詔曰、死罪宜減一等處之遠流、自餘依省斷焉、

○按ズルニ、律ニ年七十以上ニシテ流罪以下ヲ犯スモノハ收贖ヲ聽スノ法アルニヨリテ、宗永ハ近流ニ處スベキヲ贖銅百斤ニ處セシナリ、

〔西宮記臨時十〕與奪事附臨時着駄例幷放免役畢囚人事

或記云、長保三年五月廿二日着鈦政、見參官人云々、着鈦囚六人、左阪上春丸、強盜從者、行不受、今〈今一本作分〉十七、去年十

〔彰考館採集古文書〕謹言上　抑去歲以書狀令啓達候處、則預御芳翰、并金子如尊札拜領、頂也戴也、再三薰拔拜讀、卷而懷之畢、仍去年申達候寅龍惡僧之儀、當時公文之謀書、罪過彌天、前代未聞之條、八州之諸衆寮、并信甲之諸會下、任僧徒之法度、被仰付可有追放、自然許容之衆寮惡僧落居處有之者、可被處同罪候、關東諸衆寮江申、右之段急度相觸令申候、此等之趣於丈室侍者傳達惟幸、

季夏二日　　永平寺祖球印

龍雲寺　衣鉢閣下

老幼癈疾犯罪

〔律疏 名例〕凡年七十以上、十六以下、及癈疾、犯流罪以下收贖、七十以上、七十九以下、十六以下、十一以上、及癈疾、爲矜老少及疾、故流罪以下收贖、上條贖章稱流罪以下聽贖、此條及官當條、即言收贖、此是隨文設語、更無別例、犯加役流、反逆緣坐流、會赦猶流者、不用此律、至配所免居作、此等三流、特重常犯、故總不許收贖、至配所免居作者、矜其老少不堪役身、故免居作、其婦人流法、與男子不同、雖是老少、加役流、會赦猶流、亦合收贖、唯造畜蠱毒、并同居家口仍配、八十以上、十歲以下、及篤疾、犯反逆殺人應死者上請、此等年雖老少、情狀雖眾、故反逆及殺人、準律應合死者、官司不斷、依上請之式、奏聽勅裁、盜及傷人亦收贖、傷人及盜、既侵損於人、故不許全免、令其收贖、文云、盜及傷人收贖、盜既不言強竊、傷人不顯親疏、爲其老少特被哀矜、假令強盜傷親合死、據文並許收贖、又既稱傷人收贖、即似不傷者無罪、若有毆殺、他人家人奴婢者、不合論罪、奴婢賤隸、唯於被盜之家稱人、自外諸條不同良人、又例云、殺一家三人爲不道、注云、家人奴婢者、非即驗不同常人之限、其應出罪者、舉重以明輕、雖犯死刑、尙不論罪、殺傷家人奴婢、明亦不論、其毆父母、雖小及疾可矜、敢毆者乃爲惡逆、或愚癡而犯、或情惡故爲、於律雖得勿論、准禮仍成不孝、老小重疾、上請聽裁、有官者、各從官當除免法、若有官者、須從官當除免之法、不得留官徵贖、毆傷伯叔父、合除名、盜五疋以上、合免官、毆凡人折支、合官當之類、文云、八十以上、十歲以下、盜及傷人、亦收贖、注云、有官者、各從除免當贖法、若本罪至死、自依贖例、條有收贖之文、注設除免之法、止爲矜其老疾、非謂故輕其罪、但雜犯死罪、例不當贖、雖是有官、並合除名、既死無比徒之文、官有當徒之例、明其除免當法、止據流罪以下、若欲以官折死、便是律外生文、自須依法除名、死依贖例、餘皆勿論、除反逆殺人應死盜及傷人之外、悉皆不坐、故云餘皆勿論、九十以上、七歲以下、雖有死罪不加刑、緣坐應配沒者、不用此律、謂父祖反逆、罪狀已成、子七歲以下、仍合配沒、故云不用此律、即有人教令、坐其教令者、耆少之人、皆少智力、但是被教作罪、皆以所犯之罪、坐所教令、假令教七歲小兒毆打父母、或教九十老者斫殺子孫、所教令者、各自毆打及殺凡人之罪、不得以犯親之罪加於凡人、同若有贓應備、受贓者備之、有盜詐等贓、應合備償、或老少自入、或旁人受之、皆徵受用之人、故云受贓者備、

名、依律犯除名者、罪雖輕從例除名、若重仍依當贖法、准此言之、僧尼詐稱得聖道等者、罪雖輕猶還俗、不可更論本罪、罪若重者、仍依以告牒當之法也、

〔令義解僧尼〕凡僧尼有犯、准格律合徒年以上者還俗、許以告牒當徒一年、謂格者、臨時詔勅也、律云、事行時宜、故人主權斷詔勅、量情處分、是其格律者、元為俗人設法、不為僧尼立制、是以稱准也、徒年以上者、死罪以下也、告牒者、僧尼得度公驗也、依律、雖犯死罪者除名、即知僧尼犯死罪者、亦先還俗、然後處死、其流罪者比徒四年、以告牒當徒一年、其餘三年、依下文、役身至配也、若犯加役流者、亦還俗、而配流、不得以告牒當、即至配所、不免居作也、若有餘罪者、依律科斷、謂假有犯徒二年者、以告牒當一年徒、其餘一年者、依律役身、其犯徒以上、還俗之後、猶有餘罪、籍父祖蔭、應得減贖者、一依俗人之法也、問、今依此條、徒以上還俗、杖以下苦使、未知過失之疑罪、若為科斷、答、歷檢律令、過失疑罪、不同正犯、仍聽收贖、但僧尼者私無財物、理雖可贖、量事議罪、誠合放免、如犯百杖以下、每杖十令苦使十日、若罪不至還俗、及雖應還俗、未判訖、並散禁、謂犯苦使、已斷訖、未付三綱者、散禁、若未經斷者、付寺參對、其應還俗、例斷已訖者、一同俗人之禁法也、

〔西宮記臨時十〕成勘文事 附囚名帳　役畢勘文

一僧犯罪、觸類有加減、須依還俗之法、注姓名勘僧時犯科也、或以告牒可當徒止一年、然而年々勘文、具不載其由、只以俗法勘之、如此濫僧偏准凡人歟、

〔小野宮年中行事〕雜穢事

五等親姉妹之子無服、仍勘申、中略○

名例律云、凡僧尼若於其師、與伯叔父同、疏云、依闘律、詈伯叔父者杖九十、若詈師主、亦杖九十、餘條犯師主者、悉同伯叔父、於其弟子、與兄弟之子同、疏云、上文所解、師主於其弟子、有犯同俗人兄弟之子法、依闘律、殴殺兄弟之子徒二年、賊律云、有所規求故殺二等以下卑幼者絞、兄弟之子是二等卑幼、若師主因嗔競殴殺弟子徒二年、如有規求而故殺者、當絞坐、寺家人奴婢於三綱、與主之二等親同、疏云、其當寺家人奴婢、於三綱有犯、與俗人二等親家人奴婢同、依闘律、奴婢有罪、其主不請官司而殺者杖八十、無罪而殺者杖一百、家人者各加一等、注云、二等親殺者、與主殺同、又條、家人奴婢殴主之二等親者殺、詈徒二年、若三綱殴殺寺家人、合徒一年、奴婢有罪、不請官司而殺、杖八十、其家人奴婢殴三綱者絞、詈者徒三年、餘僧尼與主之五等親等、疏云、闘律、家人奴婢殴主之五等親徒一年、傷重各加凡人一等、又條、殴五等親、家人奴婢折傷以上、各減殺傷凡人家人奴婢二等云々、是即寺家人殴當寺僧尼等合徒一年、傷重各加凡人一等、若殴僧尼等折一傷、即徒二年、奴婢殴又加一等、徒二年半、是各於餘僧尼與主之五等親同、注云、犯姧盗者同凡人、此注疏云、僧尼犯姧盗、於法最重、故雖犯當寺家人奴婢姧盗、即同凡人、謂三綱以下犯姧盗、得罪无別云々、若弟子盗師主物、及師主盗弟子物、又同凡盗之法、其有同財弟子私取用者、即同同居卑幼私輒用財者、五端笞十、五端加一等、罪止杖一百、若不滿五端不坐、

不應爲

化外人犯罪

僧尼犯罪

案之、謂過失者、耳目所不及、假令投塼瓦彈射、耳不聞人聲、目不見人出、而致殺傷、其思慮所不致者、謂本是幽僻之所、其處不可有人、投瓦及石、誤有傷殺、或共擧重物、而力所不制、或共昇險、而足蹉跌、或因擊禽獸、而誤殺傷人者、如此類皆爲過失之罪、不同正犯、徵贖銅、可入被殺被傷之家也、謂疑罪者、不用拷法之類、證人參差、非贓狀露驗、難取信者、隨其狀可徵贖銅、但僧尼元無蓄財物、卽過失疑罪、俱可放免、

〔金玉掌中抄〕一不應爲罪事

雜律云、不應得爲而爲之者笞卌、事理重者杖八十、

件罪律令無條、理不可爲者、○（又見政事要略）

〔法曹至要抄（上罪科）〕一化外事

名例律云、化外人、同類自相犯者、各依本俗法、異類相犯者、以法律論、說者云、假如百濟同類相犯也、又云、依其俗法斷之者、依本土法制、而死刑以下並斷行耳、但使還日、具狀通告耳、又云、笞杖爲決、徒爲役、流留住亦爲決杖、釋云、卽如與化內人相犯并犯此土制法者、皆依法律斷耳、說者又云、徒役未畢欲發者、加杖發遣也、

案之、假令百濟客、同類相犯之類也、問彼土制法於此斷決、但笞杖者可決、徒者可役、流者留住亦可決杖、卽使還日可條報本國、官職之蔭、可除免官當者、且爲追毀位記也、又高麗與百濟相犯之類、是異類相犯之類也、以法律可論也、施行法亦以同前、

〔令義解僧尼二〕凡僧尼上觀玄象、假說災祥、語及國家、妖惑百姓、（謂天文爲玄象也、非眞曰假也、天反時爲災也、吉凶先見爲祥也、過誤爲妖言也、語及國家、不敢斥尊號、故託曰國家也、言假說之語關涉人主也、妖惑百姓者、以假說之言惑一人以上、其自觀玄象至惑百姓、總是一事、相須得罪也、若上觀玄象所說有實、及非觀玄象說他災祥、并雖言玄象而不惑人者、竝入下條也、）并習讀兵書、（謂雖不成業亦是、若畜之、而不習讀、及畜餘禁書者、亦入下條也、）殺人奸盜（謂若殺、及奸家人奴婢、并奸盜未得者、竝依下條也、）及詐稱得聖道、（謂四果聖人之道也、）並依法律付官司科罪、（謂不論罪之輕重、皆先還俗、何者案道僧格、犯詐稱得聖道等罪上獄成者、雖會赦猶還俗、故必先還俗、其僧尼還俗、猶俗人除）

過失疑罪

詐僞律云、詐稱祖父母父母死以求假、及有所避者徒一年半、

〔唐律疏議二十五詐僞〕諸父母死應解官、詐言餘喪不解者徒二年半、若詐稱祖父母父母及夫死以求假、及有所避者徒三年、伯叔父母姑兄姉徒一年、餘親減一等、若先死詐稱始死及患者各減三等、

〔唐律疏議二十六雜律〕諸姦父祖妾謂曾經有父祖子者伯叔母姑姉妹子孫之婦兄弟之女者絞、即姦父祖所幸婢、減二等、

○按ズルニ、金玉掌中抄ニ、父祖ノ妾ヲ姦スルヲ徒二年半トセリ、

〔律疏賊盜〕凡謀殺詔使若本主本國守、及吏卒謀殺本部五位以上官長者徒三年、官戸奴婢與吏卒同、餘條准此、謂官戸奴婢等、毆詈本司五位以上官長、當條無罪名、並與吏卒同、已傷者遠流、殺者皆斬、

〔唐律疏議二十三鬪訟〕即毆傷見受業師、加凡人二等、死者各斬、謂伏膺儒業、而非私學者、

○按ズルニ、我國ニテハ、私學ノ師モ大學國學ト同ジトセリ、事ハ上文名例律八虐ノ條ニ見ユ、

〔吾妻鏡九〕文治五年九月六日癸亥、河田次郎持主人泰衡之頸參陣岡、令景時奉之、以義盛重忠被加實撿、上召囚人赤田次郎、被見之處、泰衡頸之條申無異儀之由、仍被預此頸於義盛、亦以景時被仰含河田云、汝之所爲一旦雖似有功、獲泰衡之條、自元在掌中上者、非可假他武略、忽忘譜第恩、梟主人首、科已招八虐之間、依難抽賞、爲令懲後輩、所賜身暇也者、則預朝光被行斬罪云云、

〔金玉掌中抄〕一疑罪事

斷獄律云、疑罪各依所犯以贖論、注云、疑、謂虛實之證等、是非之理均、或事涉疑似、旁无證見、或旁有聞證、事非疑似之類、○又見政事要略

〔法曹至要抄上罪科〕一過失疑罪事

鬪訟律云、過失殺傷人者、各依其狀以贖論、斷獄律云、疑罪各依所犯以贖論、○中略又條云、應議請減、若年七十以上、十六以下、及癈疾者、並不合拷訊、皆據衆證定罪、刑部式云、僧尼不可拷訊、據衆證可定刑、

失殺者各勿論、

○按ズルニ、此條上ニ引ケル金玉掌中抄ニ在リテ、祖父母父母ヲ詈ル者ヲ徒三年トス、

〔裁判至要抄〕一處分子孫財子孫死後輙不返領事

戸婚律云、祖父母父母在、而子孫別籍異財者徒二年、若祖父母父母令別籍者徒一年、子孫不坐、說者云、已異後不可悔還、

〔唐律疏議戸婚十二〕諸祖父母父母在、而子孫別籍異財者徒三年、(別籍異財不相須、下條準此、○疏議略)若祖父母父母令別籍、及以子孫妄繼人後者徒二年、子孫不坐、

〔唐律疏議戸婚十三〕諸居父母及夫喪而嫁娶者徒三年、妾減三等、各離之、知而共爲婚姻者各減五等、不知者不坐、(○疏議略)若居期喪而嫁娶者杖一百、卑幼減二等、妾不坐、

○按ズルニ、金玉掌中抄ニハ父母ノ喪ニ居リテ嫁娶シ、夫ノ喪ニ居リテ改嫁スルヲ、共ニ徒二年トス、上ニ見エタリ、

〔律疏職制〕凡聞父母若夫之喪、匿不擧哀者徒二年、喪制未終、釋服從吉、若忘哀作樂、(自作遣人等)徒一年半、雜戲杖八十、卽遇樂而聽、及參預吉席者各杖六十、(謂父母之恩、昊天莫報、荼毒之極、豈若聞喪、婦人以夫爲天、哀類父母、聞喪卽須哭泣、豈得擇日待時、若匿而不卽擧哀者徒二年、其嫡孫承祖者、與父母同、喪制未終、謂父母及夫喪十三月內、釋服從吉、若忘哀作樂、注云、自作遣人等、徒一年半、雜戲杖八十、樂、謂金石絲竹笙歌鼓舞之類、雜戲、謂雙六圍碁之屬、卽遇樂而聽、謂因逢奏樂而遂聽者、參預吉席、謂遇逢禮宴之席、參預其中者、)聞祖父母外祖父母喪、匿不擧哀者徒一年、喪制未終、釋服從吉杖一百、二等以下尊長各遞減二等、卑幼各減一等、(謂聞二等尊長喪、匿不擧哀者杖九十、喪制未終、釋服從吉杖八十、三等尊長、匿不擧哀杖七十、喪制未終、釋服從吉杖六十、四等尊長、匿不擧哀笞五十、喪制未終、釋服從吉笞卌、其於卑幼匿不擧哀、及釋服從吉、各減當色尊長一等、其妻既非尊長、又殊卑幼、在禮及詩比爲兄弟、卽是妻同於卑幼、若聞喪不卽擧哀、於後擇日擧訖、事發者、不可無罪、二等以上從不應得爲重、三等從不應得爲輕、若未擧事發者、各從不擧之坐、又居二等親喪作樂、及遣人作者、律雖無文、不合無罪、從不應得爲從輕、笞卌、)

〔法曹至要抄上罪科〕一八虐事(○中略)

七日、不孝、(○中略)

明法博士等重勘申兼盛罪名事○中略

備中權守藤原朝臣闕○定　定申云、條々疑難之中、去年僉議之時、八虐大社殿內不同損傷科間事等、粗定申訖、今辨申之趣還添疑殆、先於宗廟寶殿之中傷人、稽之典籍、未知蹤跡、訪之法律、不設正條、原其情可議罪歟、於毆傷之科者、起於忿爭、雖非謀法、至不敬之責者已有制度、雖謂告擧此一事、猶涉八虐、何況流血者、汚寶殿之階、遂及造替、御膳者、落神座之前、不憚弃毀、濫惡之甚、豈爲雜犯哉、而毆科之外、削而弃之、今如辨申者、於國有憾心、毀壞之時、其罪入八虐、兼盛於朝廷無其心、而光資有敵心、縱雖致毀壞之正犯、猶可入八虐哉否、能可有議云々、此條已超兼盛所犯、先論此法之條、有恐無益、觸宗廟之事、致其犯之者、先例多雖相存、向朝廷誰有憾心哉、時之碩學、道之名儒、具勘其罪狀、未及此豫議、雖無正文、就比附因准之儀、雖無本條、依擧輕明重之法、縱所爲重定決斷之理者也、但寬治明法博士有眞者、博覽之儒也、而爲實政有私、其子細諸家記錄分明歟、彼時引山田白金說幷唐律、釋所立之義是也、群卿之僉議及再三、諸道之勘文究淵源、有眞遂處罪科了、前事不忘後事之師也、今立彼義太無其由歟、況又彼有眞執論者以神輿或比大幣、或比御在所、今章久章行所立者、雖毀壞寶殿、猶可有八虐猶豫歟、論其所案、猶以懸隔、憲章所指、具見彼沙汰、仍略文法、聊引先例之許也、世屬澆季、人少信心、神社之司、動致怠慢、而今擧正犯、猶宥其科、聞見之者、豈有所懼哉、非啻忘當時懲肅之法、已似開向後奸濫之源、宗廟安、則國安、國安則民不亂、率由九章之先規、宜愼四海之靜謐者歟、○下略

〔政事要略八十四〕鬪訟律云、告祖父母父母者絞、

〔唐律疏議二十三鬪訟〕諸告祖父母父母者絞、謂非緣坐之罪、及謀叛以上、而故告者、下條準此、○疏議略　卽嫡繼慈母殺其父、及所養者殺其本生、並聽告、

〔唐律疏議二十二鬪訟〕諸詈祖父母父母者絞、毆者斬、過失殺者流三千里、傷者徒三年、若子孫違犯敎令、而祖父母父母毆殺者徒一年半、以刃殺者徒二年、故殺者各加一等、卽嫡繼慈養殺者又加一等、過

思損議貴、〇藤原道長此等罪戾之中、以涉乘輿爲重、卽從二罪之例、入八虐之條、不論男女不辨首從、須各除名皆處絞刑、至于圓能、尤是加功之者也、依无差別之法、又同上件之輩、更令還俗、全以可坐就、日記撿案內、爲文不知之由、圓能辨申已了、而被下宣旨之旨猶加犯人之列也、綵綸可有其由、結斷何任其意、仍法條所指、勘申如件、

寬弘六年二月八日　從五位上守大判事兼明法博士美麻那朝臣直節

從五位上行勘解由次官兼明法博士令宗朝臣允正

〔平戶記〕寬元三年四月十四日戊寅、今夕兼盛罪名事、法家陳狀可有仗議也、〇中略先是殿下〇藤原實經御參云々、小時執柄令出清涼殿弘庇給、頭中將依召參上、頻被催人々之遲參、頭中將來告召由、仍參弘庇、然間吉田中納言參加、聊有被尋仰之旨等、然間召之由女房告申殿下、仍令參御前〇後嵯峨給了、其後歸着小板敷、納言已下人々少々參加、不經程左府令參給、仍起此座廻南殿方、左府令著仗座給之後、諸卿多參着、召大外記師光有被仰事、先是勤獻微音之間不聞及、師光退下之後召官人召文書、卽持參、次第見下之如常、見參公卿可見定文、仍不注之、見了之間、仰左大辨召硯、卽持參之、先是横座座狹之間、依一上之仰予起座、更着沓移着端座末、次依上宣左大辨讀申法家陳狀、太微音也、讀了如元卷之置座前、次依上宣次第定申之、各申詞可見定文、仍略之、取條書、予、新相公、明法博士等、辨申兼盛罪名事ト申之、左大辨加申博士名字、納言已上只申兼盛罪名之由、拾遺相公〇藤原資季可入八虐哉否ト申ヲ、八虎ト申之、人々或成奇、或含咲、不可說々々々、後日人々云、豫參仗議之人、未知八虐、末代之至歟、虐字似虎字、仍存其由歟、比興々々、定了一上被仰云、夜深了、後日可言上者、此事今者常儀也、然而端作者可被書歟、今御所爲如何、世以奇之云々、又一遍定申畢之後書之、疑難等可有評議事也、而無其儀、無音御早出如何、人々有傾氣、議定之間、恭禮門中敷假板敷、主上有御聽聞、被開障子座西戶開闢以來、未有如此事、世以悲之云々、事了人々分散、予歸家、小時雞鳴也、人々申狀多之間、如此經程了、

除名

正五位下大中臣輔弘正神祇權大副

太政官下左京職符偁、件人坐事配流佐渡國、早仰彼職、令追進件位記者、

從四位下荒木田宣綱

從五位上同清隆

從五位下同宣並

太政官符伊勢大神宮偁、件人等、坐事配流伊豆常陸土佐國、早仰彼宮、令取進件位記者、

〔政事要略七十〕勘申散位源朝臣爲文、民部大輔同方理、伊豫守佐伯朝臣公行妻及方理朝臣妻僧圓能等罪名事○中略

謹撿賊盜律云、有所憎惡而造厭魅、及造符書呪咀、欲以殺人者、各以謀殺論減二等、若涉乘輿者皆絞、疏云、謂雖直求愛媚、便得罪重於盜服御之物、准例亦入。八虐。罪無首從、栗書云、抄云、三后不減至尊、名例律云、稱乘輿者、太皇太后、皇太后、皇后並同、又云、八虐一曰謀反、注云、謂謀危國家、唐儒張云、謀殺三后、並不得輕於宮闕、若未行其三后此求愛媚、涉乘輿五曰不道、注云、謂厭魅、又賊盜律云、謀殺人者徒三年、已傷者近流、從而○而下、律有加功者三字、加役流、造意者雖不行仍爲首、注云、人殺者亦同、唐儒宋云、謀殺皇親及議貴等、無異凡人、令依凡斷、又名例律云、六議一曰議親、注云、皇親及皇帝五等以上親、及太皇太后、皇太后四等以上親、皇后三等以上親、六曰議貴、注云、謂三位以上、又條云、犯八虐獄成者、雖會赦猶除名、注云、獄成謂賊狀露驗者、又云、除名者、官位勳位悉除、課役從本色、疏云、謂出身以來官位勳位悉除、又云、二罪以上俱發、以重者論、又云、五位以上犯死罪者上請、流罪以下減一等、其犯八虐者不用此律、僧尼令義解云、依律雖犯死罪者除名、卽知僧尼犯死罪者、亦先還俗、然後處死者、今件爲文朝臣、方理朝臣、幷公行朝臣妻等趣厭呪謀、在殺害、或擬奉危皇后○一條中宮藤原彰子、或似可害皇親○敦成親王、兼含惡心、

應供奉之物、未進御者、各隨輕重減一等、監當官司、又各減一等、故云坐准此、

〔律疏職制〕凡造御膳、誤犯食禁者、典膳徒三年、謂造御膳者、皆依食經、經有禁忌、不得輙造、若乾脯不得入黍米中、莧菜不得和鼈肉之類、有所犯者、典膳徒三年、若穢惡之物在食飮中、杖一百、簡擇不精減二等、謂簡米擇菜、有不精好者、不品嘗者杖六十、謂嘗酸鹹苦辛之味不品、及應嘗不嘗、俱得此坐、

〔律疏職制〕凡御幸舟船、誤不牢固者、工匠徒三年、謂皇帝所幸舟船、造作莊嚴、不甚牢固、可以敗壞者、工匠各以所由爲首、謂造作之人、皆以當時所由人爲首、若不整飾、及闕少者徒一年、謂其舟船、若不整頓修飾、及在船檝棹之屬、有所闕少、得徒一年、此亦以所由爲首、

〔律疏職制〕凡指斥乘輿、情理切害者斬、謂言議乘輿、原情及理、俱有切害者、言議政事乖失、而涉乘輿者上請、謂論國家法式、言議是非、而因涉乘輿者、與指斥乘輿、情理稍異、故律不定刑名、臨時上請、非切害者徒二年、謂語雖指斥乘輿、而情理非切害者、對捍詔使、而無人臣之禮者絞、謂奉詔勅使人、有所宣告、對使拒捍、不依人臣之禮、既不承詔命、又出拒捍之言者、因私事鬪競者非、謂不涉詔勅、別因他事、私自鬪競、或雖因公事論競、不干預詔勅者、並從毆詈本法、

〔續日本紀九元正〕養老六年正月壬戌、正四位上多治比眞人三宅麻呂、坐誣告謀反、正五位上穗積朝臣老、指斥乘輿、並處斬刑、而依皇太子奏、降死一等、配流三宅麻呂於伊豆島、老於佐渡島、

〔日本書紀二十九天武〕四年四月丁亥、小錦下久努臣麻呂、坐對捍詔使、官位盡追、

〔萬葉集四相聞〕安貴王歌一首并短歌○歌略

右安貴王娶因幡八上采女、係念極甚、愛情尤盛、於時勅斷不敬之罪、退却本鄕焉、于是王意悼怛、聊作此歌也、

〔續日本後紀十八仁明〕嘉祥元年十二月己丑、刑部少輔和氣朝臣齊之、依犯大不敬、當絞刑、勅減一等、流伊豆國、　乙卯、大判事外從五位下讚岐朝臣永直、坐和氣齊之事、配流土佐國、

〔本朝世紀〕康和五年八月十三日庚申、左大臣內大臣以下諸卿參入、被定申伊勢大神宮禰宜荒木田宣綱、神祇權大副大中臣輔弘罪科等、件宣綱、放火離宮院、并度々落書事、輔弘同意相知云々、僉議之旨、被處眞大逆、件罪科、範政申擬大逆之由、貴濟申眞大逆由、所被行緣坐之罪也、皆涉斬刑、次被下輔弘解官宣旨、次有配流事、○中略

〔律疏賊盜〕凡盜大祀神御之物者中流、謂供神御者、大社神寶亦同、謂供大神御者、其擬供神御、謂營造未成者、若饗薦之具已饌呈者、徒二年、饗薦、謂祭帶酒餅之屬、饌呈、謂已入祀所、經祀官省視者、未饌呈者、徒一年半、若盜釜甑刀匕之屬、並從常盜之法、謂並不用供神、故從常盜之法、言之屬、謂盤盂雜器之類、

〔律疏賊盜〕凡盜神璽者絞、謂踐祚之日壽璽、關契內印鑰鈴者遠流、謂貪利之、而非行用者、乘輿服御物者中流、謂供奉乘輿之物、服通衾茵之屬、眞副等皆須監當之官部分擬進、乃爲御物、稱之屬者、能傳之類、眞副等、(等下脫眞字)謂見供服用之衣、副、謂副貳之服、其擬供服御、及供而廢闋、若食將御者、徒二年、將御、謂已呈監當之官、擬供服御、謂營造未成、及供而廢闋、謂之(之當作已)供用事畢、若食將御者、謂御食已呈監當之官、擬進而盜及食者、擬供食御、及非服而御之物者、徒一年半、擬供食御、謂未呈監當之官、及非服而御之物者、謂帷帳几杖屬、若贓重者、各計贓、以常盜論加一等、

〔法曹至要抄上罪科〕一八虐事略○中

六曰、大不敬、略○中

詐僞律云、僞造神璽者斬、造內印者絞、

〔唐律疏議二十五詐僞〕諸僞造皇帝八寶者斬、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子寶者絞、皇太子祀寶、流三千里、僞造不錄所用、但造即坐、

〔三代實錄二十清和〕貞觀十三年十月廿三日乙丑、太政官論奏曰、越前國守從四位下弘宗王、爲百姓所訴、增出擧之數、欲私其息利、左京人大初位下佐伯宿禰彌惠、僞造內印、刑部省斷曰、弘宗身卒、不更論罪、彌惠罪應絞刑、詔、絞刑宜減一等處之遠流、

〔律疏職制〕凡合和御藥、誤不如本方、及封題誤者、醫徒三年、謂合和御藥、須先處方、依方合和、不得差誤、若有錯誤、不如本方、謂分兩多少不如方法之類、合成仍題封其上、注藥遲駛冷熱之類、并寫本方俱進、若誤不如本方、及封題有誤等、但一事有誤、醫即合徒三年、料理簡擇不精者、杖六十、料理、謂應熬削洗漬之類、簡擇、謂去惡留善、皆須精細之類、有不精者、杖六十、未進御者、各減一等、謂應徒者、從徒上減、應杖者、從杖上減、是名各減一等、監當官司、各減醫一等、謂依令、合和御藥、中務少輔以上十人、共內藥正等監視、除醫以外、皆是監當官司、並於已進未進上、各減醫罪一等、餘條未進御、及監當官司並准此、謂下條造御膳、御幸舟船、乘輿服御物、但

加一等、（加者加入於死）過失殺傷者、各減二等、（議○疏略）即媵及妾詈夫者、杖八十、若妾犯妻者、與夫同、媵犯妻者、減妾一等、妾犯媵者、加凡人一等、殺者各斬、（餘條媵無文者、與妾同）

〔法曹至要抄上罪科〕一八虐事（中略）

五曰、不道、

鬪訟律云、（中略）又條云、妻妾毆夫之父母者、徒三年、

〔唐律疏議二十二鬪訟〕諸妻妾詈夫之祖父母父母者、徒三年、（須舅姑告乃坐）毆者絞、傷者皆斬、過失殺者、徒三年、傷者徒二年半、（疏議略）即毆子孫之婦、令廢疾者、杖一百、篤疾者加一等、死者徒三年、故殺者流二千里、妾各減二等、過失殺者、各勿論、

〔政事要略八十四〕鬪訟律曰、告二等尊長、外祖父母、夫、夫之祖父母、雖得實徒一年、

〔法曹至要抄上罪科〕一八虐事（中略）

五曰、不道、（中略）

鬪訟律云、（中略）又條云、告二等尊長、外祖父母、夫、雖得實徒一年、名例律贈位條疏云、尊長謂伯叔父姑兄姊是也、儀制令五等親條釋云、夫之父母爲二等尊者、（律文又見政事要略）

〔唐律疏議二十四鬪訟〕諸告期親尊長、（伯叔父姑兄姊）外祖父母、夫、夫之祖父母、雖得實徒二年、其告事重者、減所告罪一等、（所告雖不合論、告之者猶坐）即誣告重者、加所誣罪三等、告大功尊長、各減一等、小功緦麻減二等、誣告重者、各加所誣罪一等、（疏議略）即非相容隱、被告者論如律、若告謀反逆叛者各不坐、其相侵犯自理訴者聽、（下條準此）

〔政事要略八十二〕六曰、大不敬、（中略）

附釋云、禮者敬之本、敬者禮輿、故禮運云、禮者君之柄、所以別嫌明微考制度別仁義責其所犯既大皆无兩敬之心、故曰大不敬、

故從放免、依律老小篤疾無家口同流者放免、其家總無良口、唯有家人奴婢者、不合從流、家人奴婢既是卑賤、諸條多不同良人、即非同流家口之例、即以蠱毒毒同居者、被毒之人父母妻妾子孫、不知造蠱情者不坐、依律被毒之人父母、不知情者放免、假有親兄弟大功遣蠱、以毒小功、既同父母、不知情者、父母合原、蠱毒家口會赦猶流、恐其涉於知情、所以例不聽住、若以蠱毒毒同居、被毒之人父母妻妾子孫不知情者不坐、雖復兄弟相害、終是被毒人父母、既無不免之制、不知情者不坐、又依律犯罪未發、自首合原、造畜蠱毒之家、良賤一人先首、雖既首訖、不得免罪、犯罪首免、本許自新、蠱毒已成、自新難雪、雖會大赦、仍並從流、

〔律疏賊盜〕凡有所憎惡、而造厭魅、及造符書呪詛、欲以殺人者、各以謀殺論減二等、謂有所憎嫌前人、而造厭魅、厭事多方、罕能詳悉、或刻作人身、繫手縛足、如此人（人字恐衍）厭勝、事非一緒、魅者或假託鬼神、或妄行左道之類、或呪或詛、欲以殺人者、於二等尊長、及外祖父母、夫、夫之祖父母、各不減、以故致死者、各依本殺法、謂以厭魅符書呪詛之故、但因一事致死者、不依減例、各從本殺法、欲以疾苦人者、又減二等、稱又減者、謂三等以下親及凡人、非外祖父母、謀殺得減二等者、謂從謀殺上總減四等、子孫於祖父母、父母、家人奴婢於主者、各不減、即是二等尊長外祖父母、夫、夫之祖父母、唯減二等、其祖父母、父母以下、雖復欲疾苦、亦同謀殺之法、不同減例、其於伯叔父姑、兄姊、外祖父母、夫、夫之父母呪詛、已令疾苦、理同毆法、但入不道、即於祖父母、父母、及主、直求愛媚而厭呪者、徒二年、謂子孫於祖父母、父母、及家人奴婢於主、造厭呪符書、直求愛媚者、若涉乘輿者皆絞、謂雖直求愛媚、便得罪重於盜服御之物、准例亦入八虐、罪無首從、

〔令抄僧尼〕闘訟律云、凡毆兄姉者徒一年半、傷者徒二年、折傷者近流、刃傷及折支、若瞎一目者絞、死者皆斬、詈者杖八十、伯叔父加一等、即過失殺傷者、各減本殺傷罪二等、

〔唐律疏議二十二闘訟〕諸毆兄姉者徒二年半、傷者徒三年、折傷者流三千里、刃傷及折支、若瞎其一目者絞、死者皆斬、詈者杖一百、伯叔父母、姑外祖父母、各加一等、即過失殺傷者、各減本殺傷罪二等、〇疏議略若毆殺弟妹及兄弟之子孫、曾玄孫者、各依本服論、外孫者、徒三年、以刃及故殺者、流二千里、過失殺者各勿論、

〔法曹至要抄上罪科〕一八虐事〇中略

五曰、不道、

闘訟律云、〇中略又條云、妻毆夫、杖一百、妾犯加一等、

〔唐律疏議二十二闘訟〕諸妻毆夫、徒一年、若毆傷重者、加凡闘傷三等、須夫告乃坐、死者斬、〇疏議略媵及妾犯者、各

而祖父母父母毆殺者徒一年半、以刃殺者徒二年、故殺者各加一等、卽嫡繼慈養殺者又加一等、過失殺者各勿論、

○按ズルニ、此條上ニ引ケル金玉掌中抄ニ見エテ、祖父母父母ヲ毆ツ者ヲ皆斬トシ、詈ル者ヲ徒三年トセリ、

〔政事要略 八十二〕四曰、惡逆、○中略 疏云、父母之恩、昊天罔極、嗣續妣祖、承奉不輕、梟鏡其心、受敬同盡矣、至親自相屠戮、窮惡盡逆絕人理、故曰惡逆、穴云、梟食母鳥也、鏡食母獸也、

〔類聚國史 八十七刑法〕大同二年二月壬申、左京人調田造庭繼、毆父、稽之法律、罪當斬刑、而時屬諒闇、不忍行誅、特宥處遠流、配伊豆國、

〔續日本紀 二十四淳仁〕天平寶字七年九月庚申、河內國丹比郡人尋來津公開麻呂、坐殺母、配出羽國小勝柵戶、

〔律疏 賊盜〕凡殺一家非死罪三人、同籍及二等親外祖父母爲一家、卽殺雖先後、事應同斷、或應合同斷、而發有先後、皆是、奴婢家人非、及支解人者、謂殺人而支解者、皆斬、子徒三年、謂殺人之法、事有多端、但據人身死、不論所殺之狀、但殺一家非死罪頁口三人、卽爲不道、若三人內、一人先犯死罪、而殺之者、卽非不道、只依殺一人罪法、同籍及二等親爲一家、謂同籍不限親疏、二等親雖別籍亦是、卽殺一家三人、縱有先後、發時應合同斷、或所殺之事、應合同斷、事發乃有先後者、皆爲一時殺法、總入不道、殺一家三人之內、兼殺奴婢家人者非、及支解人者、謂殺人而支解者、或殺時卽支解、或先支解而殺之、皆同支解、並入不道、若殺訖、絕時後更支解者非、或故焚燒而殺、或殺時卽焚燒者、文雖不載、罪與支解義同、皆合處斬、罪無首從、子徒三年、假有家人奴婢、殺主家人奴婢一家三人、或支解者、依例有犯、各准良人、合入八虐、

〔律疏 賊盜〕凡造畜蠱毒、謂造合成蠱、堪害人者、及敎令者絞、造、謂自造、畜、謂傳畜、可以病害於人、故云、謂造合成蠱、堪害人者、及敎令人、並合絞罪、若同謀而造、律不言皆、卽有首從、造畜者同居家口、雖不知情者遠流、謂所造及畜者、同居家口、不限籍之同異、雖不知情、皆從流、若里長坊令坊長亦同、知而不糾者徒三年、律文唯顯里長等罪、不言國郡知情之法者、里長之等、親管百姓、旣同里閭、多相諳委、國郡去人稍遠、管戶又多、是故律文遂無節制、若知而不糾、依鬪訟律、監臨之官、知所部有犯法、不擧擧劾者、減罪人罪三等、造畜者雖會赦、幷同居家口及敎令人亦遠流、造畜蠱毒之人、雖會大赦、幷同居家口及敎令人等、亦遠流、八十以上、十歲以下、及篤疾、無家口同流者放免、據此老幼及疾、身自犯罪、猶會免流、今以同居共活、有同家口亦配、無同居家口共去、其老小及疾不堪自存、

〔律疏賊盜〕凡謀反、及大逆者皆斬、人君者、與天地合德、與日月齊明、上祗寶命、下臨率土、而有狡豎凶徒、謀危國家、始興狂計、其事未行、將而必誅、即同眞反、名例稱謀者、二人以上、若事已彰顯、雖一人行二人之法、大逆者、謂謀毀山陵及宮闕、反則止據始謀、大逆謂其眞犯、言皆者、罪無首從、父子若家人資財田宅、並沒官、其家人不同資財、故特言之、奴婢各同資財、故不別顯、年八十及篤疾者並免、祖孫兄弟皆配遠流、不限籍之同異、即雖謀反、詞理不能動衆、威力不足率人者、亦皆斬、謂結謀眞實、而不能爲害者、謂雖構亂常之詞、不足動衆人之意、雖騁凶威、若力不能驅率得人、雖有反謀、無能爲害者、亦皆斬、故注云、謂結謀眞實、而不能爲害者、若自述休徵、假託靈異、妄稱兵馬、虛說反由、傳惑衆人、無眞狀可驗者、自從妖法、父子並配遠流、資財不在沒限、假有反逆人應緣坐、其繼養子孫、依本法、雖會赦合正之、即不在緣坐之限、若反逆事彰之後、始訴正之、須從本宗緣坐、刑法愼於開塞、一律不可兩科、執憲履繩、務從折中、違法之輩、已沾朝章、雖經大恩、法須正之、即凡人不得爲親、其謀大逆者絞、上文大逆、即據逆事已行、此爲謀而未行、唯得絞罪、律不稱皆、自依首從之法、謀毀大社者、徒一年、毀者遠流、

〔律疏賊盜〕凡謀叛者絞、謂欲背本朝、將投蕃國、始謀未行事發者、首處絞、從者遠流、已上道者皆斬、謂協同謀計乃坐、被驅率者非、餘條被驅率准此、協者和也、謂本情和同、共作謀計、此等各依謀叛之法、被驅率者非、謂元本不共同情、臨時而被驅率者不坐、餘條被驅率准此、謂謀反謀大逆、或亡命山澤、不從追喚、旣肆凶悖、堪擅殺人、并劫囚之類、被驅率之人、不合得罪、子中流、若子年十六以下合贖、若率部衆十人以上、父子配遠流、所率雖不滿十人、以故爲害者、以十人以上論、害謂有所攻擊虜掠者、或攻擊城隍、或虜掠百姓、雖使十人以上論、其攻擊城隍、因即拒守、自依反法、即亡命山澤、不從追喚者、以謀叛論、謂背誕之人、亡命山澤、不從追喚者、其抗拒將吏者、以已上道論、謂有將吏追討、仍相抗拒者、以已上道論、並身處斬、子中流、抗拒有害者、父子遠流、並准上文、率衆十人以上、不須有害、若不滿十人、要須有害得罪、乃與十人以上同、

〔律疏賊盜〕凡謀殺祖父母父母外祖父母夫夫之祖父母父母者皆斬、嫡母繼母伯叔父姑兄姊者遠流、已傷者絞、五等以上尊長者徒三年、已傷者中流、已殺者皆斬、即尊長謀殺卑幼者、各依故殺罪減四等、已傷者減二等、已殺者依故殺法、上文尊長謀殺卑幼、當條無罪名、各依故殺罪減四等、已傷者減二等、假如有所規求、謀殺二等卑幼、合徒二年、已傷者合徒三年、已殺者依故殺法合絞之類、言故殺法者、謂罪依故殺法、其首各依本謀論、造意雖不行仍爲首、從者不行減行者一等、假有伯叔數人謀殺猶子、訖、即首合近流、從而加功合徒三年、從者不加功徒二年半、從者不行減行者一等徒二年之類、略舉殺二等卑幼、餘者不復備文、其應減者、各依本罪上減、

〔唐律疏議二十二鬪訟〕諸詈祖父母父母者絞、毆者斬、過失殺者流三千里、傷者徒三年、若子孫違犯敎令、

偽造神璽 詐偽律云、偽造神璽者斬、

合和御藥誤不如本方 職制律云、合和御藥、誤不如本方者徒三年、

合和御藥封題誤 職制律云、合和御藥、封題誤者徒三年、

御幸舟船不牢固 同律云、御幸舟船、不牢固者工匠徒三年、

對捍詔使 同律云、對捍詔使、而無人臣之禮者絞、

偽造內印 同律云、偽造內印者絞、

造御膳誤犯食禁 同律云、造御膳、誤犯食禁者徒三年、

指斥乘輿情理切害 同律云、指斥乘輿、情理切害者斬、

七曰不孝 十一色

告祖父母父母 鬪訟律云、告祖父母父母者絞、

詈祖父母父母 鬪訟律云、詈祖父母父母者徒三年、

祖父母父母在異財 同律云、祖父母父母在、而子孫異財者徒三年、

居父母喪作樂 職制律云、聞父母喪、忘哀作樂、徒一年半、

匿祖父母父母喪 同律云、聞父母喪、匿不舉哀者、徒二年、聞祖父母喪、匿不舉哀者、徒一年、

詐稱祖父母父母死 詐偽律云、若詐稱祖父母父母死、以求假及有所避者、徒一年半、

姧父祖妾 雜律云、姧父祖妾者、徒三年、妾減一等、

雜律云、姧父祖妻者、徒三年、注云、妾減一等、疏云、其奴及家人、姧主妾及主親妾、亦減一等、又條云、其家人及奴、姧主者絞、裏書等是因筆次也、算博士在判

詛祖父母父母 賊盜律云、即於祖父母父母、直求愛媚、而厭呪者徒三年、

祖父母父母在別籍 戶婚律云、祖父母父母在、而子孫別籍者徒二年、

居父母喪嫁娶 同律云、居父母喪、而嫁娶、徒二年、各離之、

居父母喪釋服從吉 同律云、居父母喪、釋服從吉者、徒一年半、

八曰不義 八色

殺本主 賊盜律云、謀殺本主者、徒三年也、已傷者遠流、殺者皆斬、

殺受業師 鬪訟律云、毆見受業師者、加凡人二等、死者斬、

匿夫喪 職制律云、聞夫之喪、匿不舉哀者、徒三年、

夫喪釋服 同律云、夫喪釋服從吉者、徒一年半、

居夫喪改嫁 戶婚律云、居夫喪改嫁者、徒二年、妾減二等、各離之、今按、妾改嫁者、不入八虐、已上犯八虐之時、本罪雖輕、先以除名、被行常赦之日、雖罪當笞杖、猶以拘之、

殺本國守 同律云、謀殺本國守者、徒三年也、已傷者遠流、殺者皆斬、

殺本部官長 賊盜律云、吏卒謀殺本部五位已上官長者、徒三年、已傷者遠流、殺者皆斬、

夫喪作樂 同律云、夫喪作樂者、徒一年半、

名例律八虐注云、告伯叔父姑兄姉、外祖父母、夫夫之父母、

鬪訟律云、告二等尊長外祖父母夫者、雖得實徒一年、

謀殺伯叔父　謀殺兄姉　謀殺外祖父母　謀殺夫　謀殺夫之父母

名例律八虐注云、謀殺伯叔父姑、兄姉、外祖父母、夫、夫之父母、賊盜律云、謀殺外祖父母夫夫之父母者、皆斬、殺嫡母繼母、已上二等尊、殺伯叔父之姉、殺夫之伯叔父、殺夫之祖父母、殺夫之姑、殺繼父同居、

已上三等尊

殺從父兄姉　殺異父婦

已上三等長

殺從祖祖父、祖之兄弟　殺從祖祖姑、祖之姉妹　殺從祖叔父、祖之從父兄弟　殺從祖姑、

已上四等尊

殺夫之兄姉　殺再從兄弟從祖伯叔父之子

已上四等長

殺妻　名例律八虐不道條注云、殺四等以上尊長及妻、賊盜律云、謀殺五等以上尊長者徒三年、已殺者皆斬、鬪訟律云、毆傷妻者、減凡人二等、死者以凡人論、今案毆傷妻者、不可入八虐、殺畢後可爲八虐、

六曰大不敬十三色

毀大社賊盜律云、謀毀大社者徒一年、毀者遠流、　今按、謀毀者雖犯也、已毀者可入八虐、

盜大祀神御物賊盜律云、盜大祀神御物者中流、　盜乘輿服御物同律云、盜乘輿服御物者中流、

盜神璽同律云、盜神璽者絞、　盜內印同律云、盜內印者遠流、

父子（賊盜律云、謀反者、父子沒官、年八十、及篤疾者、並免、）　祖孫（同律云、謀反者、祖孫配遠流、）

兄弟（同律云、謀反者、兄弟配遠流、）　家人（同律云、謀反者、家人沒官、）

資財（同律云、謀反者、資財沒官、）　田宅（同律云、謀反者、田宅沒官、）

緣坐人知反情（闘訟律云、知謀反大逆不告、關近官司絞、）　被驅率者（賊盜律注云、被驅率者非、）

二曰謀大逆、謂謀毀山陵及宮闕（賊盜律云、謀大逆者絞、）

件等罪者、謀反、大逆、罪法是同、緣坐之文、已見上文、

三曰謀叛、謂謀背國從僞（賊盜律云、謀叛者絞、又云、謀叛已上道者皆斬、子中流、）

四曰惡逆

毆祖父母父母（闘訟律云、毆祖父母父母者、皆斬、）　謀殺祖父母父母（賊盜律云、謀殺祖父母父母者、皆斬、）

殺伯叔父　殺姑（父之姊妹）　殺兄姊　殺外祖父母　殺夫　殺夫之父母

件罪、外祖父母以上謀殺者、不可處八虐、殺訖之時、可入八虐惡逆者、常赦不免、決不待時、不道者、會赦合原、唯止除名而已、

五曰不道

殺一家非死罪三人（賊盜律云、殺一家非死罪三人、皆斬、子徒三年、注云、同籍及二等親外祖父母爲一家、奴婢家人非、）

支解人（賊盜律云、支解人者、皆斬、）　造畜蠱毒（同律云、造畜蠱毒、及教令者絞、）

厭魅　厭魅謀殺　厭魅、欲令疾苦、

厭呪求愛媚　殺伯叔父　殺姑　毆兄姊　毆外祖父母　毆夫　毆夫之父母

名例律八虐注云、毆伯叔父姑、兄姊、祖父母、夫、夫之父母、

闘訟律云、毆兄姊者、徒一年半、

告言伯叔父　告言兄姊　告言姑　告言外祖父母　告言夫　告言夫之父母

使無心怨天、唯欲諫構人罪、自依反坐之法、不入八虐之條、及對捍詔使、而無人臣之禮、謂奉詔出使、宣布四方、有人對捍、不恭詔命、而無人臣之禮者、詔使者奉詔定名、及令所司差遣者是、

七曰不孝謂告言詛詈祖父母父母、本條直云告祖父母父母、此注兼云告言、文雖不同、其義一也、詛猶呪也、詈猶罵也、依本條、詛欲令死及疾苦者、皆以謀殺論、自當惡逆、唯詛求愛媚、始入此條、依賊律、子孫於祖父母父母、求愛媚而厭呪者、徒二年、厭呪雖復同文、理乃詛輕厭重、但厭魅凡人、則入不道、若呪詛者、不入八虐、例云、其應入罪者、則舉輕以明重、然呪詛是輕、尚入不孝、厭魅是重、亦入此條、及祖父母父母在、別籍異財、謂祖父母父母在、子孫就養無方、出告反面、無自專之道、而有異財別籍、情無至孝之心、名義以之俱淪、情節於茲並棄、稽之典禮、罪惡難容、二事既不相須、違者並當八虐、居父母喪、身自嫁娶、若作樂、釋服從吉、其居父母喪、身自嫁娶、皆謂首從得罪者、若其獨坐主婚、男女即不坐、所以稱身自嫁娶者、以其主婚不同八虐故也、其男夫居喪娶妾、合免所居一官、女子居喪為妾、得減妻罪二等、並不入不孝、若作樂者、自作遣人等、樂謂擊鍾鼓、奏絲竹匏磬壎篪、歌舞散樂之類、釋服從吉、謂喪制未終、而在十三月之內、釋去縗衣、而著吉服者、聞祖父母父母喪、匿不舉哀、詐稱祖父母父母死、依禮、聞親喪、以哭答使者、盡哀而問故、父母之喪、創巨尤切、聞即崩殞、擗踊號天、今乃匿不舉哀、或揀擇時日者、並是、其詐稱祖父母父母死、謂祖父母父母見在、而詐稱死者、若先死而詐稱始死者非、姦父祖妾、

八曰不義謂殺本主本國守、見受業師、本主者、依令、親王及五位以上、得帳內資人、於所事之主、名為本主、見受業師、謂見受經業大學國學者、私學亦同、若已成業者雖先去學、並同受業師之例、見吏卒殺本部五位以上官長、吏謂史生使部、卒謂防人衛士之類、其有殺本部五位以上官長、並入此條、及聞夫喪、匿不舉哀、若作樂、釋服從吉、及改嫁、夫者、妻之天也、恩義既隆、聞喪即須號慟、而有匿哀不舉、居喪作樂、釋服從吉、改嫁忘憂、皆是背禮違義、故俱為入八虐、其改嫁為妾者非、

〔續日本紀四元明〕慶雲四年七月壬子、天皇即位於大極殿、詔曰、(中略)大赦天下、(中略)大辟罪以下、(中略)咸赦除之、其八虐之內、已殺訖、及強盜竊盜、常赦不免者、並不在赦例、

〔唐律疏議一名例〕十惡

疏議曰、(中略)周齊雖具十條之名、而無十惡之目、開皇創制、始備此科、酌於舊章、數存於十、大業有造、後更刊除、十條之內、唯存其八、自武德以來、仍遵開皇、無所損益、

〔金玉掌中抄〕一八虐罪事

一曰謀反、謂謀危國家、賊盜律云、謀反、大逆者、皆斬、

緣坐

八虐

○天智二山陵也、

〔續日本紀考證一文武〕十惡唐律十惡、皇朝因用之、大寶制律令、改爲八虐、

〔續日本紀一文武〕四年八月丁卯、赦天下、但十惡盜人、不在赦限、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年閏十月辛卯、詔、○中略犯死罪已下、皆赦除、十惡及盜、不在赦限、

〔續日本紀考證八稱德〕十惡案、大寶定律令、十惡改爲八虐、此云十惡、未詳、

〔律疏名例〕八虐

一曰謀反謂謀危國家、謂臣下將圖逆節、而有無君之心、不敢指斥尊號、故託云國家、

二曰謀大逆謂謀毀山陵及宮闕、謂有人獲罪於天、不知紀極、潛思釋憾、將圖不逞、遂起惡心、謀毀山陵及宮闕、

三曰謀叛謂謀背國從僞、謂有人謀背本朝、將投蕃國、或欲翻城從僞、或欲以地外奔、

四曰惡逆謂毆及謀殺祖父母父母、殺伯叔父姑、兄姉、外祖父母、夫、夫之父母、毆謂毆擊、謀謂計謀、自伯叔以下、即據殺訖、若謀而未殺、自當不道、惡逆者、常赦不免、決不待時、不道者、會赦合原、唯止除名而已、以此爲別、故立制不同也、

五曰不道謂殺一家非死罪三人、○人下、唐律有及字、支解人、謂一家之中三人被殺、俱無死罪者、若三人之內、有一人合死、及於數家各殺二人、唯合死刑、不入八虐、或殺一家三人、本條罪不至死、亦不入八虐、支解人、謂殺人支解、亦據本罪合死者、造畜蠱毒、厭魅、謂造合成蠱、雖非造合、乃傳畜之、堪以害人者、皆是、即未成者、不入八虐、厭魅者、其事多端、不可具述、皆謂邪俗陰行不軌、欲令前人疾苦及死者也、若毆告及謀殺伯叔父姑、兄姉、外祖父母、夫、夫之父母、謀殺伯叔等、殺訖即入惡逆、令直言謀殺、不言故鬪、若故鬪殺訖、亦入不道、舉謀殺未傷是輕、明故鬪已殺是重、輕重相明、理同八虐、殺四等以上尊長依令、從祖伯叔父姑舅姨、再從兄姉等是、及妻、

六曰大不敬謂毀大社、及盜大祀神御之物、乘輿服御物、神御物者、謂大嘗者、大社神寶亦同、乘輿服御物者、謂主上服御之物、人主以天下爲家、乘輿巡幸、不敢指斥尊號、故託乘輿以言之、本條注云、服通衾茵之屬、眞副等皆須監當之官部分擬進、乃爲御物、盜及僞造神璽內印、神璽者、謂依令、踐祚之日、中臣奏天神之壽詞、忌部上神璽之鏡劍、合和御藥、誤不如本方、謂合和御藥、雖憑正方、中間錯謬、違本法者、及封題誤、謂依方合訖、封題有誤、若以丸爲散、應冷言熱之類、若造御膳、誤犯食禁、營造御膳、須憑食經、而所司誤不依經、即是不敬、御幸舟船誤不牢固、帝王所之、莫不慶幸、舟船既擬供御、故曰御幸舟船、工匠造船、備盡心力、誤不牢固、即入此條、但御幸舟船以上三事、皆爲因誤得罪、設未進御、亦同八虐、如其故爲者、即從謀反科罪、其監當官司、准法減科、不入不敬、指斥乘輿、情理切害、此謂情有觖望、發言謗毀、指斥乘輿、情理切害者、若

州二嶋中國等、皆雖從于平家之方、親光猶運志於源家之間不行向、仍三箇度被遣追討使、所謂高二郎大夫經直、(種直子)家子)兩度、拒押(押恐捍字誤)○使宗房(種益郎等)一箇度也、

〔日本書紀(持統三十)〕六年七月乙未、大赦天下、但十惡盜賊、不在赦例、

〔隋書(刑法二十五)〕齊神武文襄並由魏相尙用舊法、及文宣天保元年、始命群官、刊定魏朝麟趾格、○中略三年(大寧)○尙書令趙郡王叡等奏上齊律十二篇、○中略又列重罪十條、一曰反逆、二曰大逆、三曰叛、四曰降、五曰惡逆、六曰不道、七曰不敬、八曰不孝、九曰不義、十曰內亂、其犯此十者、不在八議論贖之限、

〔唐律御䟽〕享保十年巳十二月、荻生惣七ェ訂正寫點被仰付候節、差出候書付、

十惡之內、和律には、不睦內亂之二條を除き有之候、是は朝廷に憚り候所多く御座候によりて、內亂之律を除き、其相伴に不睦をも除くと相見へ申候、但隋大業年中、十惡之內、二條を除き、八惡に致し候先例を用申候事に御座候、

〔唐六典(刑部六)〕乃立十惡以懲叛逆、禁淫亂、沮不孝、威不道、其

一曰謀反(略○註)　二曰謀大逆(略○註)
三曰謀叛(略○註)　四曰惡逆(略○註)
五曰不道(略○註)　六曰大不敬(略○)
七曰不孝(略○註)　八曰不睦(略○註)
九曰不義(略○註)　十曰內亂(略○註)

此十者常赦之所不原

初北齊立重罪十條、爲十惡、一反逆、二大逆、三叛、四降、五惡逆、六不道、七不敬、八不孝、九不義、十內亂、犯此者不在八議論贖之限、隋氏頗有益損、皇朝因之、

〔續日本紀(文武一)〕三年十月甲午、詔赦天下有罪者、但十惡、强竊二盜、不在赦限、爲欲營造越智(○皇極)山科

之威勢、不遵郡司之差科、强加追喚、爭致鬪亂、公事擁滯、無不由斯、須科拒捍罪依法決罰、而桀黠之徒、不伏其罪、望請依法決罰、以濟公事、謹請官裁者、右大臣宣、徒罪以下、國司所決、宜早下知任令科決、四畿內宜准此、

貞觀二年九月廿日

〔扶桑略記二十九後三條〕延久三年十二月廿六日、僧隆觀配流伊豆國、依家地論以對捍撿非違使等、下罪名於法家所被行也、別仰云、放遣別嶋可令守護也、

〔朝野群載十一廷尉〕左大辨

遣拒捍使

被別當宣偁、今日奉勅宣旨偁、爲勘糺攝津國正稅戒拒捍之輩、可遣官人一人者、宜遣左衞門府生大原忠宗者、

承平五年十二月四日　　　　左衞門少志尾塞有安奉

〔中右記〕大治四年四月十三日辛酉、今朝齋院有奉幣、○中略陰陽寮行事弁以下、相率拒捍使撿非違使等行向一條、

〔中右記〕大治五年四月五日丙子、今日齋院出車定也、○中略一條拘治橋修理、任例可沙汰由仰左中弁、七日、史久辰來申云、一條大路拘治、依無拒捍使撿非違使、于今不仰下候、如何、仰云、可申別當也、則歸來云、申別當之處、以撿非違使季盛所補山城拒捍使也、早拘治之事、可仰季盛者、則季盛參逢由、面下知了、

〔吾妻鏡四〕元暦二年○文治元年六月十四日乙丑、參河守範賴、幷河內五郞義長等、受二品○源賴朝命渡使者於高麗國之間、對馬守親光歸著彼嶋云々、是去々年、自當嶋欲上洛之折節、平家零落于鎭西之間、路次依不通不能解纜、猶以在國之處、爲中納言知盛卿、幷少貳種直等奉行、可令參屋嶋之由及其催、九

拒公使

稱文學、即在其間、諸司諸博士等亦不在決笞之限、不在決笞之限、

〔延喜式刑部二十九〕凡格式立制不定其罪、律有本條、依律罪之、不縁違式科、

〔政事要略六十七〕勘申无位孫王衣服色并著禁色罪狀事

右撿弘仁式云、无位孫王准五位、其服色者用纁、元慶七年五月一日奉勅宣旨云、聽二世眞實王著青白橡、雜律云、違令者笞五十、別式減一等、名例律云、六議者、犯流罪以下減一等、又條云、應議者犯流罪以下聽贖、又云、笞卅、贖銅三斤者、據此等文、无位孫王可著纁色、自非有奉勅宣旨不可著用青白橡等衣、若當色之外着禁色者可謂犯違式罪笞卌者也、孫王是入六議之內議、減一等、猶笞三十、須徵贖銅三斤、仍勘申、

天慶五年二月十日大判事兼勘解由次官明法博士大和介惟宗朝臣公方依陽成院仰勘申

〔律疏職制〕對捍詔使、而無人臣之禮者絞、謂奉詔勅使人有所宣告、對使拒捍、不依人臣之禮、既不承詔命、又出拒捍之言者、因私事闘競者非、謂不涉詔勅、別因他事私自闘競、或雖因公事論競、不干預詔勅者、並從闘訟本法、

〔法曹至要抄上罪科〕一拒國郡以上使事

闘訟律云、拒國郡以上使者杖六十、疏云、稱以上者、在京諸司並是、

案之、雖非宣下之事、或依公事有所追捕、而對捍使皆得此罪、若非見決、使廳例散禁可令候便所、又對捍詔使之科、八虐之絞刑也、依注載八虐、別不抽注矣

〔唐律疏議二十二闘訟〕諸拒州縣以上使者杖六十、毆者加二等、傷重者加闘傷一等、謂有所徵攝、憚時拒捍不從者、即被

禁掌、而拒捍及毆者各加一等、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應依法見決王臣家人事

右得攝津國解偁、此國近京、雜務繁多、瘦弊未休、黎民減少、僅所有土人浪人、皆稱王臣家人、無畏國吏

〔北山抄十〕勘會公文所司罪狀

公方在弼相論、違勅違式事、雖有勅彈、公方不進過狀、遂左遷畢、依重被立行率分事歟、今案事意、以違詔勅處違勅科、以違奉勅官符處違式、理可然乎、在弼申云、奉勅官符、同是稱勅、又違官符稱違勅、有其例、公方云、謄詔勅符移之類、處違勅罪也云々、公家被問旨者、諸司申請、可爲永格事等、違其符爲違式、起自叡慮重被立行事、違其趣爲違勅也云々、雖非謄勅符、違其符之者、處違勅之例可尋歟、

〔法曹至要抄上罪科〕一違令違式事

雜律云、違令者笞五十、別式者減一等、

案之、令有禁制、律無罪名之者、謂之違令、又格式立制、謂之違式、共得笞罪矣、

〔令義解二戸〕凡嫁女弃妻不由所由、皆不成婚、不成弃、所由後知、滿三月不理、皆不得更論、謂所由者、上條云、嫁女皆先由祖父母父母等是也、後知者既嫁弃之後而知其不由也、三月者九十日也、不得更論者、不由所由嫁弃已訖、而所由後知、滿三月不理者不可更追論、縱三月內理者、科違令罪、不可更合離也、

〔令集解十戸〕穴云、私案、不成婚、謂結婚已定未成之間是、仍所由悔者不娶耳、弃亦云、若已成弃者、无離合之文、只科違令罪也、此亦依法例、經祖父母等、而不經兄姉等者不坐也、嫁條記見、又不得更論、謂問答云、如云、不得悔者不論爲罪、新令問答爲罪生文也、所由、謂上條所計也、假經父不經母爲不由所科違令也、問、不成婚、謂凡婚娶及弃之法、不由不得婚弃以不、答、婚及弃訖者、但科違令、更不離及還也、三月不理、皆不得更論、謂不科違令是也、

〔令義解六儀制〕凡內外官人、謂主典以上、其番上既繫重者、決亦无疑也、有恃其位蔭故違憲法、謂位蔭者、身帶官位、及父祖之蔭也、故違憲法者、故不下馬、及失禮悖忤之類、卽於本司犯、是也、若在外犯者、自依違法也、者、六位以下及勳七等以下宜聽量情決笞、謂杖罪以下量其情狀多少決笞、若徒以上者、依律科斷、既云量情決笞、卽知或全決其罪、或量減其科、若其減決者亦不須依從減例減之法、唯止量減其一二等、若依減法者卽爲涉用位蔭故也、若長官謂本司五位以上長官、下文云、聽次官應致敬者決、无聽、次官應又依上條、五位以上受致敬禮、然則次官應是致敬者、長官必五位以上須知、但長官者罪人不應致敬、仍得決之、次官者罪人不應致敬者不得復決、是卽長官次官之殊別也、致敬者決、其諸司判官以上及判事彈正巡察內舍人謂其監物者、職經明重、亦不可決也、大學諸博士文學等謂上學大學博士下

用鞍轡及胡籙等之具、爲弊尤甚、事須禁絕、若有違犯、科違勅罪、主司阿容、亦與同罪、

延暦廿三年十二月廿一日

〔類聚三代格三〕太政官符

應納國庫國分二寺僧尼度緣戒牒事

右得佐渡國解偁、被治部省去承和十年六月十四日符偁、被太政官今月四日符偁、撿案內、太政官去弘仁四年二月三日下同省符偁、右大臣宣、奉勅僧尼有身死幷還俗、其度緣戒牒、早令進省、省即弁終申官毀之、庶令奸人屛跡法流自澄者、而今諸國請補僧尼死闕之日、不進度緣、是猶所司疎略所致也、今被大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣偁、補國分二寺僧尼之闕、先進度緣、然後補之、若乖此旨、科違勅罪者、〇中略謹請官裁者、同宣依請、諸國亦宜准此、

承和十一年十一月十五日

〔江談抄二雜事〕公方違式違勅論事

問云、公方、違式違勅論、其義如何、答云、天暦〇村上御時、諸國受領不濟率分之輩、勘公文之時、勘會諸司文書加署判之者、可勘其罪狀之由被問公方、公方勘云、當違式云々、被仰云、事出自勅語、然則可違勅、公方不可然之由執申、爰以文範令問之間、問云、破勅語之起請、皆可稱違式之者、何故格條中注云、若違此格者、論以違勅之罪、公方答云、以此文案之、格條事、偏皆可謂違勅之者何更令始有違勅之詞矣、格條事、不可必稱違勅之故、新立違勅之文、文範又難云、格條立違勅文、文異陳狀、然者今令條稱曰、論以違勅之罪、此條如何、公方無所陳之旨、遂依此過及左遷、公方卒後、子允亮思其父之耻、硏精此事七八年許、遂相具文書、向文範亭欲討論之處、文範命云、令問給之聖皇モ不御坐、公方モ其身不存、僕モ又老タリ、是討論以無益也云々、允亮懷文書還畢、問此論如私曲相須歟、被答云、私曲相須者、及諸道之沙汰矣、違勅者、只公方一身也、

其過品限、皆沒入官、

〔續日本紀十聖武〕神龜五年四月辛卯、勅曰、如聞、諸國郡司等部下、有騎射相撲、及膂力者、輒給王公卿相之宅、有詔搜索、無人可進、自今以後、不得更然、若有違者、國司追奪位記、仍解見任、郡司先加決罰、准勅解却、其誂求者、以違勅罪罪之、

〔類聚三代格一〕太政官符

督課諸祝掃修神社事

右撿案內、太政官去年四月十二日下諸國符偁、掃修神社、潔齋祭事、國司一人、專當撿挍、其掃修之狀、每年申上、若有違犯、必科違勅之罪者、今改建例、更重督責、若諸社祝等、不勤掃修神社損穢、宜收其位記、差替還本、卽錄由狀便申上、自今以後立爲恒例、

寶龜八年三月十日

〔類聚三代格十二〕太政官符

應彈正臺所彈移諸司官人准犯貶降事

右撿案內、太政官去延曆十九年十二月十九日下式部省符偁、得省解偁、臺移偁、給春秋祿日、不參五位、及雜任六位已下、既違勅例、事須准罪附考勘科者、今依移狀將科違勅、所犯事輕、贖銅還重、加以六位已下、應至解官者、宜待後處分者、右大臣宣、奉勅若科違勅、實復過重、宜施疎網以存懲肅、其犯違法令、宜處以恒科、若事違彈例、卽科違式罪、

延曆廿一年十月廿二日〇類聚國史刑法部、大同二年三月辛卯條與此同、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁斷犢皮韈事

右被右大臣宣偁、奉勅牛之爲用、在國切要、負重致遠、其功實多、今聞無賴之流、爭事麗侈、殺剝斑犢、競

之人、各杖一百之類、

其　其者、變於先意、謂如論八議罪犯、先奏請議、其犯十惡不用此律之類、

及　及者、事情連後、謂如彼此俱罪之贓、及應禁之物、則沒官之類、

即　即者、意盡而復明、謂如犯罪事發在逃者、衆證明白、即同獄成之類、

若　若者、文雖殊而會上意、謂如犯罪未老疾、事發時老疾、以老疾論、若在徒年限內老疾者、亦如之之類、

〔法曹至要抄上罪科〕一違勅事

職制律云、被詔書有所施行、而違者徒二年、失錯者杖八十、

案之、奉詔勅之人、故違其旨之時、處此科可禁獄、但失錯之時得杖罪、因玆有位蔭之人、至于減贖之科矣、

〔政事要略八十一〕問、然者依不進過狀、可當何罪哉、或云、違勅之足叶其法乎、

答、違勅之科、是徒二年也、職制律所謂被詔書有所施行而違者條是也、但至于不從勅命、不進過狀、頗涉不恭詔命、无人臣禮、罪當絞刑、亦八虐被問之犯、若可輕罪量以可進過狀、更不可招重科、如此之事須隨形勢、

〔續日本紀六元明〕和銅六年三月壬午、詔曰、〇中略賣買田、以錢爲價、若以他物爲價、田幷其物共爲沒官、或有糺告者、則給告人賣及買人、並科違勅罪、

〔續日本紀八元正〕養老五年三月乙卯、詔曰、制節謹度、禁防奢淫、爲政所先、百王不易之道也、王卿士及豪富之民、多畜健馬、競求亡限、非唯損失家財、遂致相爭鬪亂、其爲條例、令限禁焉、有司條奏、依官品之次、定畜馬之限、親王及大臣不得過二十匹、諸王諸臣三位已上十二匹、四位六匹、五位四匹、六位已下至于庶人三匹、一定以後、隨闕充補、若不能騎用者、錄狀申所司、即校馬帳、然後除補、如有犯者、以違勅論、

定私鑄錢首從幷家口罪名事

首處遠流、從處徒三年、家口處徒二年半、

以前得明法曹司解偁、〇中略謹請官裁者、宜定罪法申上者、謹案賊盜律云、謀反者皆斬、父子沒官、祖孫兄弟遠流、名例律云、共犯罪者、以造意爲首、隨從減一等、又云、二死三流、各同爲一減者、今比校輕重、仍從者減首一等處徒三年、家口減從一等處徒二年半、

寶龜十一年十一月二日

〔令集解十一戸〕案例律云、其本應重、而犯時不知者依凡論、本應輕者聽從本、注云、或有父不識子、主不識奴也、卽准凡人法合從良也、

〇按ズルニ、唐律疏議ニ、主不識奴ノ下ニ、毆打之後然始知悉、須依打子及奴本法、不可以凡鬪而論、是名本應輕者聽從本ノ三十二字アリ、

〔唐律疏議六名例〕諸本條別有制、與例不同者、依本條、〇疏議略卽當條雖有罪名、所爲重者、自從重、〇疏議略其本應重而犯時不知者、依凡論、本應輕者聽從本、

〔唐律疏議五名例〕若本條言皆者、罪無首從、不言皆者、從首從法、

〔明律條例上〕例分八字之義

以　以者、與眞犯同、謂如監守貿易官物、無異眞盜、故以枉法論、以盜論、並除名刺字、罪至斬絞、並全科、

准　准者、與眞犯有間矣、謂如准枉法、准盜論、但准其罪、不在除名刺字之例、罪止杖一百、流三千里、

皆　皆者、不分首從、一等科罪、謂如監臨主守職役同情、盜所監守官物、幷贓滿貫、皆斬之類、

各　各者、彼此同科此罪、謂如諸色人匠撥赴內府工作若不親自應役、雇人冒名、私自代替、及替

其罪止有半年徒、若應加杖者杖一百、應減者以杖九十爲次、

〔法曹至要抄 上 罪科〕一加罪事

名例律云、稱加者、就重次者、

案之、假令有犯笞十之罪、加一等者笞廿、又加一等者笞卅、又加一等者笞卌、又加一等者笞五十、又加一等者杖六十、又加一等者杖七十、又加一等者杖八十、又加一等者杖九十、又加一等者杖一百、又加一等者徒一年、又加一等者徒一年半、又加一等者徒二年、又加一等者徒二年半、又加一等者徒三年、又加一等者近流、又加一等者中流、又加一等者遠流、又加一等者絞罪、又加一等者斬罪也、然則笞杖者、各以十爲一等、徒罪者以半年爲一等、三流二死、又以如此、加罪之法、自輕至重、只依次第所加也、

〔法曹至要抄 上 罪科〕一減罪事

名例律云、稱減者、就輕次、唯二死三流、各同爲一減者、〇律文又見政事要略

案之、假令有犯笞五十之罪、減一等者笞卌、又減一等者笞卅、又減一等者笞廿、又減一等者笞十也、又有犯杖一百之罪、減一等者杖九十、又減一等者杖八十、又減一等者杖七十、又減一等者杖六十也、又有犯徒三年之罪、減一等者徒二年半、又減一等者徒二年、又減一等者徒一年半、又減一等者徒一年、又減一等者杖一百也、又有犯遠流之罪、減一等者、須至中流也、而至于二死三流者、各同爲一減之故、更超至徒三年也、又有犯斬罪之者、減一等者、須至絞罪也、〇也下一本有然而二字 於二死三流者、依同爲一減、更至于遠流者也、然則二死三流之罪、至加時者、次第加之、於減時者、不依次第、多超所減也矣、

〔令集解 八 僧尼〕名例律云、罪止有半年徒、若應加杖者杖一百、應減者以杖九十爲次者、

〔類聚三代格 八〕太政官符

衆之稱、衆稱謀者、此律除不證者之外、皆須三人二人可謂衆證、是三等以上親、并可相容隱之人、不得爲證之故也、

〔金玉掌中抄〕一擧重明輕罪事

名例律云、應出罪者、則擧重以明輕、疏云、夜無故入人家、主人格殺者勿論、

〔金玉掌中抄〕一擧輕明重罪事

名例律云、其應入罪者、則擧輕以明重、疏云、謀殺祖父母父母及外祖父母夫、皆斬、無已傷已殺之文、如有殺傷者、擧始謀是輕、尚得死罪、殺及謀已傷是重、明從皆斬之坐、

〔唐律疏議六名例〕諸斷罪而無正條、其應出罪者、則擧重以明輕、○疏議略其應入罪者、則擧輕以明重、

〔西宮記臨時十〕成勘文事

名例律云、稱加者就重次、稱減者就輕次、唯二死三流、各同爲一減、加者數滿乃坐、（假令依賊盜律、竊盜五端、徒一年、五端加一等、爲次一寸、止徒一年、）

〔西宮記臨時十〕於市行事裏書

勘申逃亡囚藤井忠茂、捕得後、如本着釱、兼可加亡罪哉否事、

名例律云、稱加者就重次、不得加至於死、疏云、雖無罪止之文、唯合加至遠流、不得加至於死、

〔唐律疏議六名例〕諸稱加者、就重次、稱減者、就輕次、○疏議略唯二死三流、各同爲一減、○疏議略加者數滿乃坐、

又不得加至於死、本條加入死者、依本條、（加入絞者、不加至斬、）

疏議曰、加者數滿乃坐、假令犯盜少一寸、不滿十匹、依賊盜律、竊盜五匹徒一年、五匹加一等、爲少一寸、止徒一年、又不得加至於死者、依捕亡律、宿衞人在直而亡者、一日杖一百、二日加一等、雖無罪止之文、唯合加至流三千里、不得加至於死、本條加入死者、依本條鬪訟律、毆人折二支、流三千里、又條云、部曲毆傷良人者、加凡人一等、加者加入於死、此是本條、

ヲ犯ストキハ此限ニ在ラズ、

〔政事要略五十九〕名例律云、稱坐、及罪之、坐之、與同罪者、止坐其罪、稱準枉法論、準盜論之類、罪止遠流、但準其罪、並不在除免、倍贓、加役流之例者、

○按ズルニ、唐律疏議ニ止坐其罪ノ下ニ注シテ云ク、死者止絞而已ト、又倍贓ノ下ニ、監主加罪ノ四字アリ、加役流之例ノ下ニ、稱以枉法論、及以盜論之類、皆與眞犯同ト云フ十六字アリ、

〔政事要略八十二〕勘申於稱與同罪可減贖哉否事

右被官宣偁、於違勅罪稱與同罪、若可有減贖哉、宜勘申者、檢名例律云、稱與同罪者、只坐其罪、並不在除免倍贓加役流之例者、據檢此文、至稱與同罪只可準其罪若有位蔭者无妨減贖、仍勘申、

延長六年十二月四日　　明法博士惟宗公方

〔令集解九戸〕穴云、中略依律、稱孫者、曾玄同、稱二等親者、曾玄非其中、

〔文保記〕無服殤生三ヶ月以後至七歳謂之

就嘉禎二年八月乃問狀、左衞門大志中原名例答云、律云、稱年者、以三百六十日、稱人年者、以籍爲定、

集解云、至正月爲一年、

〔唐律疏議六名例〕諸稱日者以百刻、計功庸者從朝至暮、役庸多者、雖不滿日、皆併時率之、○疏議略稱年者以三百六十日、

○疏議略稱人年者以籍爲定、○疏議略稱衆者三人以上、稱謀者二人以上、謀狀彰明、雖一人同二人之法、

〔法曹至要抄上罪科〕一衆證事

名例律云、稱衆者、三人以上、稱謀者、二人以上、謀狀顯彰、雖一人同二人之法、疏云、稱衆者、斷獄律云、七位以上犯罪不拷、據衆證定刑、必須三人以上、始成衆證、但稱衆者準此文、稱謀者、賊盜律云、謀殺人、徒二年、皆須二人以上、餘條稱謀、各準此例、假有人持刀杖入他家、勘有宛嫌、來欲相殺、雖止一人、亦同謀法者、

失罪是ナリ、又其罪ノ疑ハシクシテ決シ難キモノアリ、此疑罪ト過失罪トハ、死罪ニ當ルト雖モ、其狀ニ依リ、贖ヲ以テ論ズルコトアリ、

化外人ノ如キハ、常律ヲ以テ罰シ難キモノアリ、故ニ同類相犯ストキハ、其國法ニ依リテ處斷シ、異類相犯ストキハ、我國法ニ依ルナリ、

僧尼ノ犯罪ハ、頗ル之ヲ寛優ニセシモノニテ、杖ヲ施スコトナクシテ、代フルニ苦使ヲ以テシ、寫經灑掃等ノ事ニ從ハシメ、其罪、徒ニ至レバ、度牒ヲ以テ之ニ當ツルコト、官人ノ官當法ノ如クニシテ、更ニ還俗セシムルナリ、

老者、幼者、若シクハ廢疾ノモノハ、特ニ贖罪ヲ聽シ、極老至幼ハ死罪ヲ犯スト雖モ刑ニ加ヘズ、婦人ハ獄中ニ在リテハ、男夫ト別居シ、懷胎スルモノハ、散禁シテ拷決セズ、死罪ヲ犯スモノハ、產後二十日ヲ經テ處刑シ、流罪ヲ犯ストキハ、決杖シテ發遣セズ、

又數人連帶シテ罪ヲ得ルアリ、卽チ同司官人ノ中ニテ、公罪ヲ犯ス時ハ、四等連坐ノ法ニ依ルモノニテ、所由ヲ以テ首トナシ、餘ヲ從トナス例ヘバ主典所由ナレバ、主典ヲ首ト爲シ、判官ヲ第二從ト爲シ、次官ヲ第三從ト爲シ、長官ヲ第四從ト爲シ、其等差ニ從ヒテ刑ヲ科スルナリ、又緣坐アリ、親族故舊ノ犯罪アル時ハ、之ガ爲ニ連累セラレテ罪セラルヽヲ謂フナリ、又二人以上共犯スルトキハ、首謀者ヲ首犯トシ、其餘ヲ從犯トシテ、其罪ニ等差アリ、又再犯以上ノモノハ、其數ニ從ヒテ其刑ヲ加フ、又二罪俱發スル時ハ、其重キモノヲ以テ論ズルナリ、

當時ノ法律ハ、特ニ親屬ノ關係ヲ重ンゼシニヨリ、常人ニ在リテハ、知リテ告發セザルトキハ、罪トナルベキ事件ニテモ、同居及三等以上ノ親屬ニ在リテハ、相爲ニ之ヲ容隱スルコトヲ得ルナリ、又家人奴婢モ主ノ惡事ヲ掩ヒテ訴ヘザルモ亦罪ナシトス、但シ謀叛以上ノ罪

古事類苑

法律部一

上編

法律總載 六議 六贓附

法律ノ事タル、古今ヲ通ジテ一編トスルハ、編輯上頗ル不便ナレバ、今分チテ三編トス、即チ凡ソ神代ヨリ安德天皇ノ壽永二年マデヲ上編トシ、後鳥羽天皇ノ元暦元年ヨリ後陽成天皇ノ慶長四年マデヲ中編トシ、後陽成天皇ノ慶長五年ヨリ孝明天皇ノ慶應三年マデヲ下編トス、即チ是其上編ナリ、但シ事實ノ貫聯スルモノニ至リテハ、此限ニ拘ハラザルモノアリ、

大寶ノ律ニハ、別ニ其用字法アリテ、其意義ヲ定メ、兩解ノ惑ナカラシム、例ヘバ反坐ト云ヒ、罪之ト云ヒ、坐之ト云ヒ、與同罪ト云フハ、其罪ニ坐スルノミニシテ、眞犯ト同ジカラザルコトヲ示シ、皆ト云ヘバ、罪ニ主從ナク、皆ト云ハザレバ、主從ノ法ニ從フナドノ類是ナリ、律ニ明文ナキモ、令ニ違ヒ、格式ニ違フモノハ之ヲ罰ス、違令違式ノ罪是ナリ、而シテ違勅ヲ以テ最モ重シトス、又律令格式ニ明文ナキモ、事ニ於テ犯スベカラザルモノハ、其輕重ニ從ヒテ、笞若シクハ杖ヲ科ス、是ヲ不應爲罪ト爲ス、

罪ノ中ニ於テ最モ重キモノハ八虐ト爲ス、因テ之ヲ律ノ卷首ニ掲ゲタリ、初メ十惡ト爲シシガ、大寶令ニ至リ、約シテ八虐ト爲ス、此八虐ハ必ズシモ極刑ニハアラザレドモ、其情ノ殊ニ惡ムベキヲ以テ、常赦ニモ恩宥ニ霑フコトヲ得ザルナリ、又情狀ノ愍ムベキモノアリ、過

法律部八

上編

盜犯

略人

放火 失火[併入]

闌遺物 宿藏物[併入]

闌入

法律部九

上編

殺傷

鬬毆

法律部十

上編

詐僞 私鑄錢[附]

古事類苑

法律部第一冊目錄

古事類苑

法律部一

上編

法律總載

六議　六贓附

神宮司廳藏版

古事類苑

法律部一

古事類苑刊行會